

# 新保遺跡 II

弥生・古墳時代集落編

—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵  
文化財発掘調査報告書第18集—

《本文編》

1988

群馬県教育委員会  
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



# 新保遺跡Ⅱ

弥生・古墳時代集落編

—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵  
文化財発掘調査報告書第18集—

《本文編》

1988

群馬県教育委員会  
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



## 序

関越自動車道は関東平野西部を南から北へと縦断して建設されました。この建設は群馬県に新しい時代をもたらしました。その波及効果は政治、経済、文化等の面において測り知れないほどであります。群馬県はこの大動脈をつうじて首都圏に連なるようになりました。

この建設に先行して群馬県教育委員会は高崎市新保町で緊急発掘調査を昭和52～55年にわたり実施しました。その結果、本遺跡地は弥生時代～平安、中世にいたる複合遺跡であることが判明しました。整理事業は埋蔵文化財調査事業団で実施しました。その弥生・古墳時代大溝編についての報告書はすでに61年に、奈良平安中世編については63年2月に報告しています。本編は弥生・古墳時代集落編であります。

新保遺跡地域は榛名山東南麓端に井野川支流である染谷川が合流する地点であります。染谷川沿いに弥生時代からの水田が営まれ、その自然堤防上を利用して営まれた村落の姿が調査により明らかになりました。関東地方における稲作の開始期である弥生・古墳時代の大規模な集落は県内に類例が少なくその意味で本書は初期の稲作文化、溝、水田を含む村落景観の復元、古代農耕社会解明のための貴重な資料となりましょう。

発掘調査及び整理事業の実施にあたりまして、日本道路公団東京第二建設局、群馬県教育委員会文化財保護課、地元関係者並びに関係各位には種々ご尽力をいただき感謝いたします。

厳寒から酷暑へと厳しい自然条件の中で発掘調査を続けられた調査担当を始めとする関係各位、及び整理を担当された皆様の労をねぎらうとともに本報告書が、広く県民の皆様、研究者、教育者に利用され、群馬の古代社会の解明に益するところありますれば幸いです。

昭和63年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水一郎



# 例 言

1. 本書は関越自動車道（新潟線）建設工事に伴い事前調査された新保遺跡の発掘調査報告書第2分冊である。本遺跡は縄文、弥生、古墳、奈良・平安、中・近世、各時期にわたる複合遺跡であり、本書はこのうち弥生時代から古墳時代前期にかかる住居跡、周溝墓など集落に伴う遺構群及び、その出土遺物の発掘調査結果を掲載している。
2. 本遺跡は群馬県高崎市新保町、新保田中町に所在する。旧地名は、群馬郡新高尾村大字下新保字松之木、同村大字下新保字山神。
3. 事業主体 日本道路公団第二建設局
4. 調査主体 群馬県教育委員会
5. 整理主体 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
6. 発掘調査期間 昭和52年8月22日～昭和55年3月25日
7. 発掘調査担当者 (あいうえお順、所属は昭和63年3月現在、以下同様)

石塚 久則 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	巾 隆之 群馬県教育委員会
大江 正行 同 上	平野 進一 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
小野 和之 同 上	洞口 正史 群馬県立歴史博物館
佐藤 明人 同 上	真下 高幸 群馬県教育委員会
8. 発掘調査嘱託員、調査員

荒川 弘 埼玉県妻沼町教育委員会	黒沢はるみ (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
飯田 陽一 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	反町 公己 高崎市日高町
大塚 昌彦 波川市教育委員会	三浦 京子 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
茂木 由行 吉井町教育委員会	
9. 発掘調査事務に関わった、群馬県教育委員会事務局文化財保護課職員 (昭和52～54年度)

磯貝 福七 森田 秀策 松本 浩一 飯塚キヨ子 女屋 等
白石保三郎 阿久津宗二 大井田利興
10. 本書の執筆者 (以下あいうえお順)

飯島 静男 高崎市中尾町698-40 (石材鑑定)	鈴木 三男 金沢大学教養部
石塚 久則 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 (D地区周溝墓の調査)	能城 修一 大阪市立大学 (樹種鑑定)
大江 正行 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 (須恵器観察、考察)	友廣 哲也 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 (土器観察)
小林 裕二 県立松井田高等学校 (土器観察)	巾 隆之 群馬県教育委員会 (石器観察)
佐藤 明人 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 (編集、住居、周溝墓、溝、土壌の調査、弥生土器、住居構造、集落構成考察、その他)	平野 進一 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 (発掘調査の経過、遺跡周辺における低湿地帯の広がり)

藤原 宏志 宮崎大学農学部  
(プラントオパール分析)

森本岩太郎 聖マリアンナ医科大学

吉田 俊爾 聖マリアンナ医科大学

真下 高幸 群馬県教育委員会  
(周溝墓の調査)

(人骨鑑定)

宮崎 重男 県立前橋第2高等学校  
(周溝墓出土獣骨鑑定)

11. 本書の作成及び資料整理担当嘱託員及び補助員 (あいうえお順)

鈴木 幹子 (嘱託員)	天田 光江	今井あや子	岩淵フミ子	大友美代子
金子ひろ子	神谷 順子	川原嘉久治	小林恵美子	篠原 富子
関 正江	田村 栄子	田村 千種	細井 敏子	山崎由紀枝
吉田 文子	竜崎めぐみ	六反田達子		

12. 本書作成事務に関わった(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団役員及び職員

白石保三郎	梅沢 重昭	井上 唯雄	松本 浩一	大沢 秋良	上原 啓巳
田口 紀雄	平野 進一	定方 隆史	国定 均	笠原 秀樹	須田 朋子
吉田 有光	柳岡 良宏				

13. 本書作成にあたり下記の諸氏の指導を得た。(敬称略)

赤山 容造	新井 房夫	大塚 初重	大塚 真弘	乙益 重隆	熊野 正也
近藤 義雄	花岡 紘一	小宮 恒雄	山田 昌久	能登 健	

14. 本遺跡の発掘調査においては、日本道路公団、地元の関係者、及び大勢の発掘調査作業員の協力があつた。

15. 出土遺物、図面、写真、その他調査記録は一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管されている。






## 凡 例

1. 本書で使用する遺構番号は原則的には発掘調査時に付された番号を踏襲するが、一部整理し、次のように番号の変更を行っている。周溝墓はC、B地区のものは調査時のままの番号で呼称し、D地区北側道調査区については頭にDを付す。D地区本線部調査区において調査時1号～3号周溝墓は順次D11号～D13号周溝墓に改める。
2. 図版に掲載している遺物の番号は遺物の種類にかかわらず出土遺構ごとに通し番号を付す。住居(挿図)ごと付された番号を付記する。
3. 遺構図において示す北方向は国家座標に基づくものである。
4. 遺構内、及び所属不明遺構覆土、遺物包含層より出土した完形、半完形土器(1/6周以上)についてはおよそ全点掲載している。
5. 土器破片については出土遺構が確認できたもののうち口縁部破片、特徴的な文様が見られる破片について主に掲載している。この他に掲載できなかった土器破片としては、所属不明遺構覆土出土土器破片は口縁部破片、底部破片のみでパン箱に約20箱分ある。なお遺跡を幅20mで南北に横断する大溝出土土器は1986年刊行「新保I」に掲載した他、これに口縁部を遺存する壺、甕破片のほぼ総数(約1万点)を含め8章の出土弥生土器分析のための基礎資料としている。

石器については、本書、及び「新保遺跡I」に掲載したもの以外に、刃部に2次調整や使用痕が観察できない不定形刃器状の剥片が500余点出土している。
6. 遺物観察表において番号は遺構ごとの通し番号、法量の項目中 口=口縁の直径、頸=頸部の直径、胴=胴部の最大径、底=底部の直径、脚=脚部の直径を表す。単位はcm。胎土中の砂粒の粒子の大きさについてはおよそ0.25mm～2.0mmの間を、細砂粒・砂粒・粗砂粒の3段階に表現した。

色調については農林省農林水産技術会議事務局監修新版標準土色帖に基づいている。遺存状態の項中に記された分数表示は全周を1とした場合の遺存の程度を表している。土器拓本の観察表では施文部位を次のようにアルファベットで表現している。口縁端部=(a)、口縁部=(b)、口辺部=(c)、頸部=(d)、肩部=(e)、胴上部=(f)

遺構図版中スクリントーンによる表現は  =後世の遺構による攪乱、  =焼土帯、  =灰、炭化粒の広がり。
7. 土器図版の描写では、ヘラミガキは、施す面に対して一様に行う場合と、暗文的に施す場合があるが、本書では後者の場合のみ幅、本数を正確に表現し、前者の場合、それは困難であるため、範囲、方向、ミガキの幅を表すに止どめ、なるべく実感は似せるよう務めた。
8. 写真図版中の遺物の縮尺は原則として実測図版と同じである。
9. 文中、遺構の時期について原則的に出土土器に従って弥生時代を5時期、古墳時代を3時期に区分している。弥生時代は中期後半を第1期、第2期、後期を第1期、第2期、第3期に区分する。古墳時代は前期、中期、後期に区分する。弥生時代の区分の根拠、及び内容については8章土器分析の項に記した。

# 目 次

## 序 文 例 言 凡 例

1. 発掘調査の経過	1	133号住居跡	70
2. 新保遺跡の位置と周辺の遺跡	7	138号住居跡	72
3. 調査の方法	9	150号住居跡	74
4. 標準層序	10	156号住居跡	77
5. 発掘調査の概要	12	158号住居跡	79
6. 検出した遺構、遺物	15	159号住居跡	80
(1) 弥生時代中期後半の住居跡	15	182号住居跡	81
83号住居跡	15	189号住居跡	83
114号住居跡	17	160号住居跡	84
137号住居跡	20	161号住居跡	87
162号住居跡	23	169号住居跡	90
173号住居跡	25	166号住居跡	91
175号住居跡	28	252号住居跡	93
288号住居跡	29	171号住居跡	95
303号住居跡	32	179号住居跡	97
(2) 弥生時代後期の住居跡	32	187号住居跡	97
72号住居跡	32	200号住居跡	98
74号住居跡	33	201号住居跡	99
84号住居跡	34	202号住居跡	100
97号住居跡	36	203号住居跡	101
101号住居跡	38	212号住居跡	102
104号住居跡	40	213号住居跡	104
107号住居跡	42	214号住居跡	106
108号住居跡	43	215号住居跡	106
109号住居跡	46	226号住居跡	109
112号住居跡	47	216号住居跡	110
117号住居跡	49	218号住居跡	111
118号住居跡	51	219号住居跡	113
119号住居跡	56	220号住居跡	116
123号住居跡	57	222号住居跡	118
124号住居跡	60	227号住居跡	118
126号住居跡	67	228号住居跡	119

229号住居跡	120	290号住居跡	178
230号住居跡	121	302号住居跡	179
231号住居跡	123	291号住居跡	179
232号住居跡	123	294号住居跡	182
234号住居跡	124	297号住居跡	183
235号住居跡	125	299号住居跡	185
250号住居跡	130	(3) 古墳時代前期の住居跡	186
236号住居跡	130	16号住居跡	186
240号住居跡	132	26号住居跡	187
241号住居跡	133	70号住居跡	188
242号住居跡	134	86号住居跡	191
243号住居跡	136	95号住居跡	192
244号住居跡	137	98号住居跡	193
245号住居跡	138	100号住居跡	194
246号住居跡	140	102号住居跡	197
247号住居跡	142	113号住居跡	198
248号住居跡	144	115号住居跡	200
249号住居跡	144	130号住居跡	202
270号住居跡	148	116号住居跡	203
253号、255号住居跡	148	121号住居跡	205
257号住居跡	150	120号住居跡	205
260号住居跡	152	125号住居跡	207
258号住居跡	152	135号住居跡	211
259号住居跡	154	140号住居跡	213
262号住居跡	155	141号住居跡	215
263号住居跡	157	151号住居跡	223
264号住居跡	159	155号住居跡	225
267号住居跡	161	167号住居跡	231
271号住居跡	161	170号住居跡	232
276号住居跡	162	184号住居跡	233
277号住居跡	164	177号住居跡	234
281号住居跡	165	185号住居跡	235
283号住居跡	168	186号住居跡	236
284号住居跡	169	191号住居跡	237
286号住居跡	169	205号住居跡	238
287号住居跡	170	280号住居跡	240
293号住居跡	175	282号住居跡	241
289号住居跡	175	285号住居跡	243

292号住居跡	244	(7) 溝	321
295号住居跡	246	1) A、B地区溝、畦状遺構	321
296号住居跡	247	A溝群	322
298号住居跡	249	17号、18号、20号、21号、31号、32号、33号、90号、91号、92号、135号、136号、94号溝	
300号住居跡	251	A地区畦状遺構	327
301号住居跡	251	B溝群	329
(4) 古墳時代中期の住居跡	252	101号、102号、103号、104号、105号、106号、107号、108号、109号、122号、123号、124号溝	
103号住居跡	252	C溝群	333
(5) 古墳時代後期、その他の住居跡	256	77号、78号、79号、80号、81号、97号、98号、99号、100号、126号、128号溝	
29号住居跡	256	2) C地区溝	338
105号住居跡	259	3) D地区溝	343
(6) 周溝墓	261	(8) 土 壙	350
1号周溝墓	261	165号、166号、208号、216号、217号、218号、219号、220号、221号、222号、231号、232号土壙	
2号周溝墓	268	(9) 井 戸	355
3号周溝墓	270	2号、11号、40号井戸	
4号周溝墓	271	(10) そ の 他	359
5号周溝墓	273	2号遺物群、1号埋設土器	
6号周溝墓	275	(11) 古墳時代後期水田跡	362
7号周溝墓	277	1 概 要	362
8号周溝墓	283	2 C地区	364
9号周溝墓	284	3 B地区北部	374
15号周溝墓	289	4 A地区、B地区南部	376
C地区周溝墓群出土獣骨	290	5 A地区県道カルパート南調査区	381
10号周溝墓	291	(12) 遺構覆土、包含層出土遺物	387
11号周溝墓	291	(13) 遺構観察表、計測表	422
12号周溝墓	295	1) 住居跡観察表	422
13号周溝墓	297	2) 周溝墓観察表	432
D1号周溝墓	298	3) 溝計測表	434
D2号周溝墓	302	4) 土壙計測表	434
D3号周溝墓	304	5) 井戸計測表	434
D4号周溝墓	304	7 鑑定、分析	435
D5号周溝墓	306		
D6号周溝墓	311		
D7号周溝墓	313		
D8号周溝墓	316		
D11号周溝墓	316		
D12号周溝墓	317		
D13号周溝墓	319		

(1) 新保遺跡出土自然木の樹種と それによる古植生の復元 ……………	435	(2) 住居構造について ……………	490
(2) 新保遺跡における プラント・オパール分析 ……………	454	(3) 集落構成について ……………	500
(3) 新保遺跡試料花粉分析 ……………	456	(4) 39号溝出土の 須恵器坏について ……………	512
(4) 新保遺跡出土人骨について ……………	463	(5) 遺跡周辺における 低湿地帯の広がり ……………	515
8 考 察 ……………	467	9 成果と問題点のまとめ ……………	520
(1) 出土弥生土器について ……………	467		

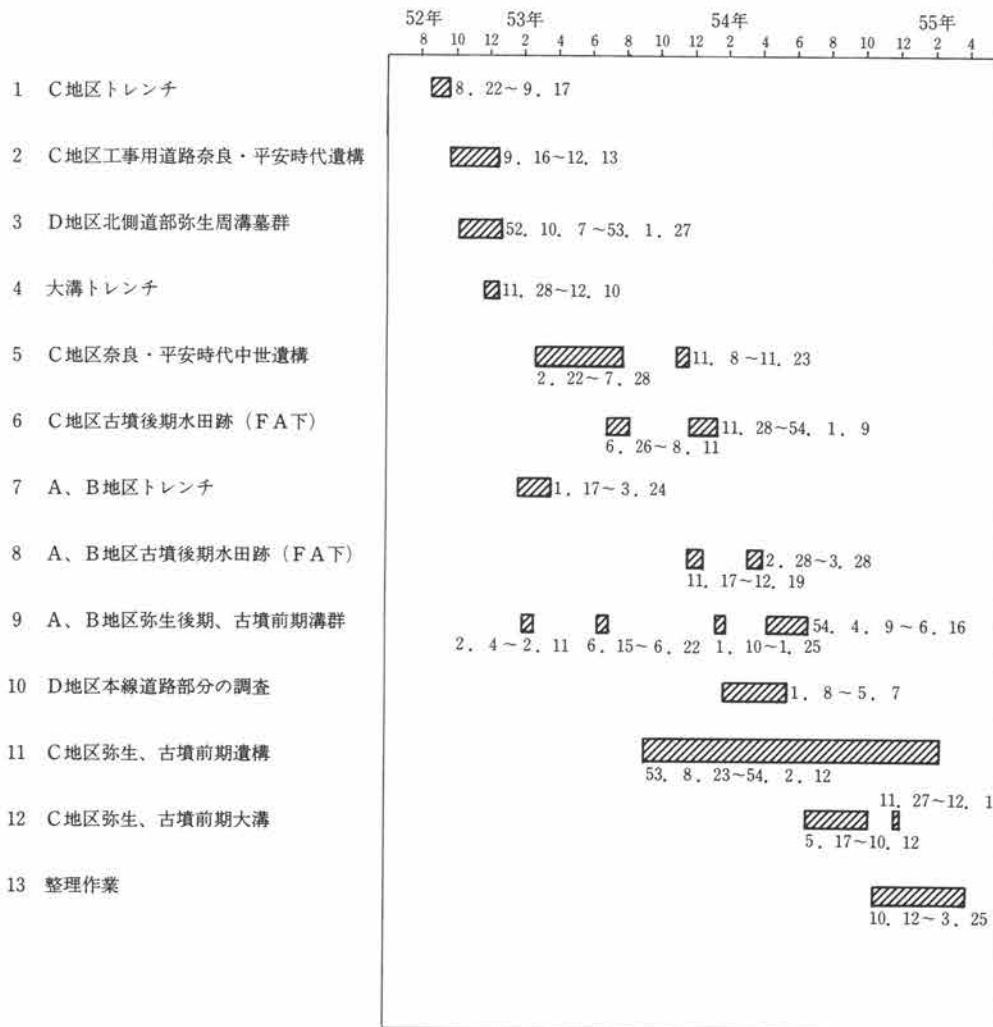
#### 付図

付図1	新保遺跡弥生、古墳時代遺構全体図(1) A、B地区
付図2	新保遺跡弥生、古墳時代遺構全体図(2) C地区
付図3	新保遺跡弥生、古墳時代遺構全体図(3) D地区
付図4	新保遺跡古墳時代(F A下)水田跡全体図(1) A、B地区
付図5	新保遺跡古墳時代(F A下)水田跡全体図(2) C地区
付図6	新保遺跡大溝出土弥生土器、口縁形態、文様系列一覧グラフ
付図7	新保遺跡大溝出土弥生土器類型出現頻度・系列一覧グラフ
付図8	新保遺跡遺構共伴土器一覧図



# 1 発掘調査の経過

新保遺跡の発掘調査は昭和52年8月22日に開始された。新保遺跡の調査開始時期は前橋インターチェンジ以南、関越自動車道発掘調査予定遺跡、日高遺跡、中尾遺跡に遅れること1年余り、55年度自動車道開通予定をひかえ、建設工事日程は逼迫し始めていた。このため新保遺跡の発掘調査は終始道路建設工事日程と小刻みに絡み合わせつつ進められた。なかでも調査進行上節となったのは北側側道工事、染谷川橋脚の工事、県道井野停車線カルパートボックス工事、B、C地区西側よう壁工事、及びその搬入道路工事等など、その節々で工事側とのきめ細かな日程調整を重ねながら調査は進められた。遺跡自体の内容は調査が遺跡内全域へのトレンチ調査、グリッド平面調査へと進むにつれ、文化層は厚く3面以上の重なりを見せ、それぞれの面で著しい遺構の確認がなされていくに及び工事側と調査側との日程調整は益々困難さを増していった。期間、日程上の問題を乗り切るために調査側では日高遺跡の調査の終了を待って53年7月より、この調査班を本遺跡の調査班に合流させ、更に鳥羽遺跡の調査を一時中断させ染谷川の右岸D地区の調査、一部大溝の調



第1図 発掘調査の経過

## 1 発掘調査の経過

査に投入するなどの措置を講じた。工事側からも期間的配慮、あるいは人的、他様々な面で、便宜を図るなどの協力があり、調査は多大な成果をもって昭和55年3月終了を見るところとなった。調査の進行経過は第1図に示すとおりであるが以下これに従ってその概要を記す。

### 1 C地区トレンチ調査

52年8月22日よりC地区において、グリッド平面調査に先立ち、地区全域にわたってトレンチ調査を実施した。トレンチの規格は縦4m、幅1.5m。トレンチの長軸方向をグリッドの主軸方向（北西－東南）とし、10m方眼（5グリッド方眼）に1箇所、総計52箇所にトレンチを設定し、トレンチ発掘調査を行った。第I層、第II層を除去し、第III層榛名山二ツ岳火砕流（FPF-1）氾濫層上面にて、奈良・平安期の竪穴住居跡などの遺構群を確認する。本トレンチ調査においてはこれら遺構の検出は進めず、その広がりや層位との関係を把握するに止どめた。52年9月17日終了。

### 2 C地区工事用道路、奈良・平安時代遺構発掘調査

本遺跡の以北において工事が着手されるに及び、工事用資材等の搬入用道路を緊急に設置する必要性が生じた。B地区北半部に未買収地区があったため、第2図のように三角状に約650㎡の調査区を設け、調査対象を奈良・平安期以後の文化層（第III層上部）以上に限定し、調査を進めた。以下の文化層の調査については後日の工事用道路付け替え後に行うこととした。約3ヶ月間の調査により奈良期の遺構を主とし、竪穴住居跡（1号～8号住居跡）、土壇（1号～13号）、掘っ立て柱建物遺構（1号～7号）などを検出した。

### 3 D地区北側道部の弥生周溝墓群の調査

この調査に係る区域は約590㎡北側道部分であり、側道はC地区工事用道路と結び、以北への資材搬入用道路になるものである。本地区の調査はおよそC地区奈良・平安期の遺構群の調査と並行して進められた。調査では周溝を共有し、密集する8基の周溝墓（D1号～D8号）が検出された。周溝墓群の南隣接部においては谷地状の旧河道の調査を行った。この河道の生成は縄文中期以前であり、2m前後の厚さを見る覆土中には多量の土器の出土があった。最下層は縄文中期の土器、漸次上層へ弥生土器、古式土師器、最上層は奈良時代の土器が出土している。

### 4 大溝トレンチ調査

前項1、C地区工事用道路区域における奈良・平安期遺構群の調査終了後下層に予想される弥生、古墳前期の文化層の状態を把握するために東西方向に長さ12m、幅1～1.2mのトレンチを設定した。黒褐色土（第IVa層）上面が南北方向に溝状の落ち込みが見られたためトレンチはこのような配置となった（第2図）。調査の結果トレンチ内の土層堆積は砂層を主とする縞状堆積で、層中より弥生、古墳前期の土器と共に木材、木製品が多量に出土した。この調査により、以後の旧河道の本格的調査では膨大な量の木製遺物の出土が予想された。

### 5 C地区奈良・平安時代中世遺構の調査

第III層（二ツ岳火砕流氾濫層）上面精査により遺構確認を行う。C地区河川改修部（路線外約1000㎡）南端部より順次北方向に調査を進める。53年3月3日 C地区北西半部（C10ライン以北）の表土除去終了する。10号住居の検出に着手。遺構確認面は第III層黄褐色微細土である。これに対し奈良・平安期の遺構覆土は灰褐色土であり、両層の峻別は容易である。個別遺構検出調査前の、第III層上面精査段階で遺構の輪郭は明確で、遺構検出の際も遺構壁面は容易に検出することができた。河川改修部北部（55～70-C35～48付近）では表土は浅く、第III層、第IV層が欠落しており、奈良・平安期と弥生、古墳前期の遺構確認面が第V層、ローム質土層面で、相互に切り合った状態で検出される。53年7月28日 9号、10号掘っ立て遺構の調査を



終了し、C地区北西半部（C10ライン以北）の奈良・平安期の遺構調査を終了する。この調査では奈良・平安期を主とする住居跡（10号～94号住居跡）、土壌群の他、溝、掘っ立て柱建物遺構（8号～10号）など多くの遺構が検出された。53年11月8日よりC地区C10ライン以南の第Ⅲ層二ツ岳火砕流（FPF-1）氾濫層上面の遺構確認を行う。柱穴群、中世墓壇などの遺構を検出する。53年11月23日 同調査終了。54年4月10日よりB地区において平安期の住居跡3軒（B207号～B209号住居跡）を調査する。

#### 6 C地区古墳後期水田跡

奈良・平安時代遺構群の調査が終了した後、下層調査を開始する。染谷川橋梁工事の関係によりC地区北西半部の調査を優先させる。53年6月26日 C地区北西半部のFA層を除去し、水田跡の検出を開始する。小区画水田が出現する。FA層と、黒褐色第Ⅳa層との峻別は容易であった。第Ⅳa層上面に小区画の畦状遺構、これに伴う水口、無数の足跡、その他の痕跡を検出する。53年7月3日 水田跡の平板実測開始。8月11日 同実測終了。

C地区南東半部の調査については（C10ライン以南）第Ⅲ層二ツ岳火砕流（FPF-1）氾濫層上面の柱穴群、中世墓壇の調査終了後53年11月28日よりC27ライン以南の第Ⅲ層を除去し、古墳前期水田の検出を開始する。第Ⅳa層の上面の起伏を精細に検出する。調査区を横断する。大規模な水路、更にこの西に太畦を検出する。53年12月18日大規模水路跡の南東部の水田面の検出。54年1月9日 C地区FA下水田の跡航空写真撮影。

第Ⅲ層最下層は黄褐色風成火山灰層（FA）である。FA層下水田跡は河川改修部の西半部、D地区を除き調査区域のほぼ全面にわたって検出された。なお、この調査の開始期において日高遺跡の調査終了に伴い同遺跡調査班が新保遺跡調査班に合流し、調査体制の増強が図られた。

#### 7 A、B地区トレンチ調査

A、B地区は、調査時は水田であった。6月中旬～9月上旬の間は水田が冠水しており、湧水位も高い。また厳冬期も凍結により調査は困難である。調査はできるだけこの時期を避ける。A、B地区においても、C地区と同様長さ4m、幅1.5mのトレンチを10m方眼（5グリッド方眼）に1箇所設定した。トレンチの発掘では遺構部分については下層へ調査を進めることは原則的に行なわないこととしたが、このトレンチ調査時点においては第Ⅳa層上面、FA直下の古墳後期の水田を確認することはできなかった。第Ⅲ層二ツ岳火砕流（FPF-1）水成層最上層は暗灰色に水田耕土化していることが確認され、また、浅間C軽石混土層を前後して多数の溝が検出された。3月8日 51-A40トレンチなどにおいて浅間C軽石混土層下より溝や畦跡らしい帯状の高まりを検出する。畦跡などの確認を得るために51-A35トレンチ、51-A40トレンチにては拡張を行い、畦跡の検出を試みる。このトレンチ調査により、浅間C軽石主体混土層に前後する溝を多数確認するが畦状遺構などは明確には検出できなかった。しかしこれらの溝の存在などからA、B地区においては弥生、古墳前期の水田跡が存在する可能性があるとの認識を得た。

#### 8 A、B地区古墳後期水田跡の調査

C地区FA下古墳後期水田の調査に引き続いてA、B地区の平面調査に着手した。53年10月27日 A、B地区の表土の除去開始。第Ⅲ層上面についてはトレンチ調査により水田耕土を確認しているが浅間B軽石層などの確認がないために畦や水田面などの把握は不可能であった。二ツ岳火山灰層（FA）下の古墳後期水田跡については、C地区の検出状況から本地区にもその存在が予想されていたので、FA層を除去したところほぼ調査区域全域に水田跡の痕跡を確認することができた。53年11月17日よりB地区FA下水田の検出。小区画の畦、調査区を南北に直線状に走る太畦、無数の足跡、溝などを検出する。53年12月19日 水田跡の

## 1 発掘調査の経過

平板実測を終了する。54年2月28日よりA、B地区（先年調査区域の南）のFA下水田の検出開始。同水田跡3月15日より実測。3月28日 同水田跡実測完了。小区画の畦はA地区の北部の一面において明確であったがそれ以外では潰れた状態であり、断続的に確認できるのみであった。54年4月9日～4月18日 県道井野停車場線カルパート南地区（第2図）FA下水田跡の調査を行う。小区画の畦の検出なし。

### 9 A、B地区弥生後期、古墳前期溝群、水田跡の調査

53年2月4日～2月11日 県道井野停車場線と自動車道交差点カルパートボックス工事に伴い工事区域（第2図）の調査を実施する。15号溝（奈良・平安期）、17号～31号溝（弥生、古墳前期）など検出する。53年6月15日～6月22日 県道カルパートの西に拡張区を設け調査を実施する。浅間C軽石主体混土層下より畦状遺構が明確な形で出土する。その他101号～106号溝（古墳前期）を検出する。54年1月10日 A地区FA下水田跡の調査終了部分については直ちに同水田耕土を除去し、浅間C軽石主体混土層下の調査を進める。浅間C軽石主体混土層を除去し、軽石層に前後する溝群（101号～107号溝など）の検出を行う。これに引き続きB地区においてはFPF-1上面の溝、井戸を主とする中世遺構の調査を行う。B地区の弥生、古墳前期溝群の調査は中世遺構の調査、FA下水田の調査を終了後5月22日から6月16日にかけて実施する。77号溝、97号～100号溝（弥生後期）などを調査する。54年4月9日より県道井野停車場線カルパート南地区の調査。県道カルパート南地区浅間C軽石混土層下の溝群を検出する。溝の覆土と第IVb層の峻別が難しいため8m間隔方眼状のサブレンチによる確認を行う。54年4月25日より、B、C地区西側よう壁部の工事区域、77号溝周辺の浅間C軽石混土層下の第IV層面、溝群の調査。5月12日よりB地区FA下水田跡の調査終了後浅間C軽石混土層下の調査開始。97号～100号溝、6号～8号周溝墓の調査。54年5月22日よりA地区浅間C軽石主体混土層下溝群の調査。101号溝～109号溝の検出。8m方眼に幅50cmのサブレンチを設定して溝の確認を行う。

### 10 D地区本線道路部分の調査

プレハブの建設より始める。53年12月18日 D地区表土除去開始、表土除去は浅間B軽石層の面までとする。54年1月8日 鳥羽遺跡調査班が鳥羽遺跡の調査を一時中断し、D地区の本線道路部の調査に入る。54年1月11日 旧地形復元のためのトレンチ調査、1月16日より1号溝の発掘、1月22日より奈良・平安期の住居跡の発掘。54年3月3日より6号溝（弥生後期）の調査。54年4月10日よりD11号、D12号周溝墓の調査。4月19日よりD13号周溝墓の検出、54年4月25日 周溝墓の調査終了。

### 11 C地区弥生、古墳前期遺構の調査

53年5月9日 C地区東部B49ライン付近路線を横断して農業用水路を緊急に設置することとなりトレンチ状に調査する。後日これが7号周溝墓を横断していたことを確認する。C地区FA層下の調査は染谷川の橋梁工事が開始されたため工事と平行して進められた。FPF-1氾濫層の上に検出される奈良・平安期の遺構群の調査終了後、C地区北西半部（橋脚工事区域、C27ライン以北）を優先に調査を進める。

53年8月23日 北西半部のFA下水田跡の調査終了後、直ちに水田の下層、弥生古墳前期の住居群の調査を進める。まず既に調査されたトレンチに重ねて幅60cmのL字状のトレンチを設定し、下層の状態の把握を試みる。なおこの間、河川改修部北部については第III層、第IV層が見られず奈良・平安期と弥生、古墳前期の検出面が同一面であるためC地区本線部奈良・平安期の調査終了に引き続いて97号～102号住居跡、1号周溝墓などの調査を進める。9月19日 C33ライン以北をグリッド単位で検出面を掘り下げる。弥生、古墳前期住居群の遺構検出面は第IVb層上層であり、住居の確認作業は住居同士の著しい重複のため個別遺構発掘前段階で、住居の平面形状や重複関係を把握することは往々にして困難であった。このため、グリッド単位

に確認面を掘り下げながら遺構確認を進める。113号～120号住居跡などを確認し、検出に入る。53年10月 121号～129号住居を検出する。11月 137号～143号住居跡の調査。南東半部の調査は北西半部の調査に引き続いて着手する。北西半部と同様F A下水田の調査後引き続き弥生、古墳前期住居群の調査に着手する。54年1月22日より南東半部（C27ライン以南）第IV a層の除去、弥生、古墳前期遺構の検出着手。54年2月 140号～170号住居の調査。54年3月 160号～203号住居跡の調査。54年5月 大溝北側縁辺、大溝南側住居群200号～227号住居跡の調査。54年6月5日より11号周溝墓主体部壺棺の調査。54年6月26日 9号～16号周溝墓の調査終了。7月11日 B、C地区周溝墓群の最終精査終了後、周溝墓群の下層の弥生期の住居跡の検出にかかる。54年7月13日 C地区東部周溝墓群の下層の住居群、242号～247号住居跡の検出に着手。大溝北側縁辺の住居群、166号、187号、235号～237号、250号～255号住居跡の調査を並行して進める。54年8月1日周溝墓下の住居群調査完了。54年8月 243号～278号住居の調査。54年9月21日 本線部について大溝調査を残し遺構調査終了。54年11月2日 C地区河川改修部の遺構調査に再度着手。280号～289号住居跡の調査。54年11月27日 C地区北側側溝部の工事に伴い緊急に調査を行う。大溝の一部を検出する。弥生土器、古式土師器に伴い、梯子、鋤、鍬など出土する。55年2月12日 303号住居の調査終了を最後に新保遺跡において予定された調査をすべて完了する。

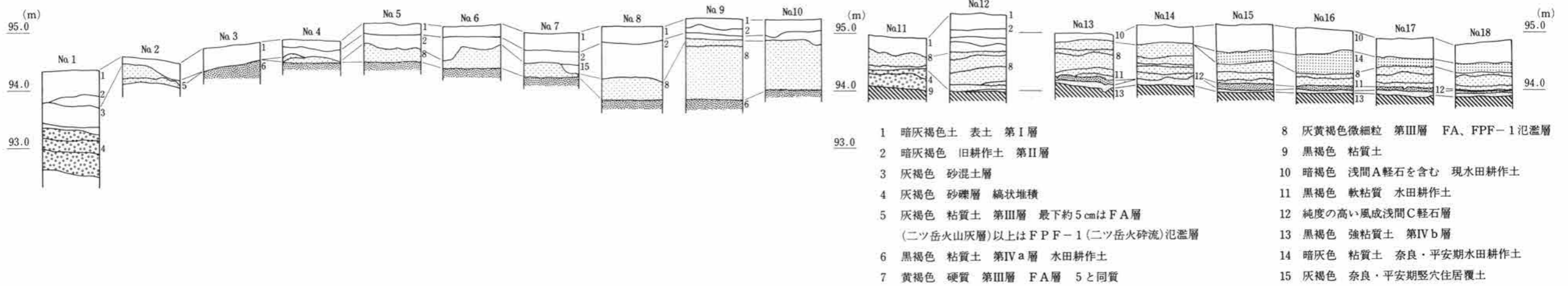
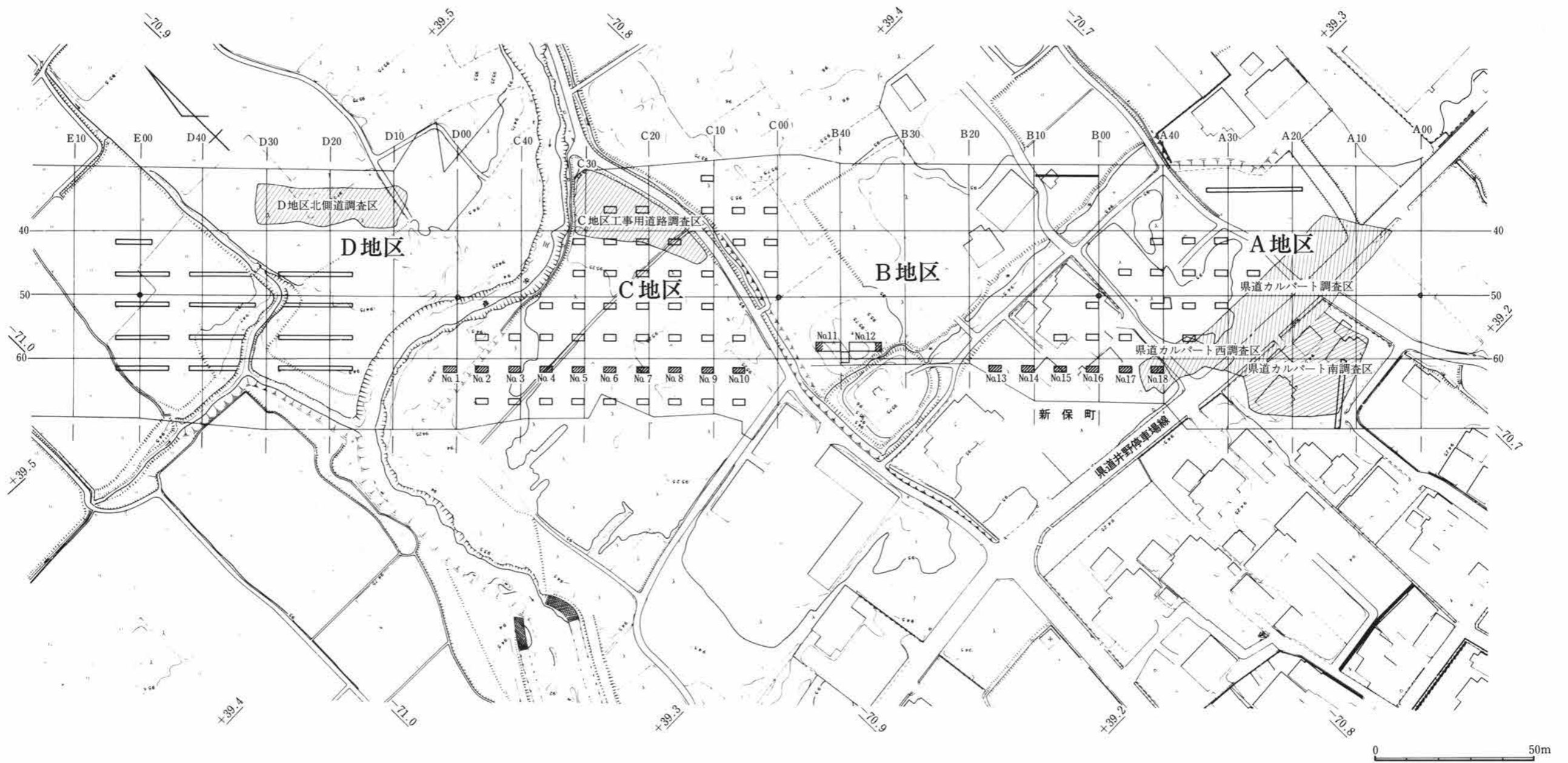
## 12 弥生、古墳前期大溝の調査

昭和52年11月28日～12月10日 トレンチ調査の後、大溝の本格的調査は54年5月17日に開始し南端側より順次発掘を進める。木製品、加工材など多量に出土する。6月28日より検出に並行して木製遺物の実測を開始する。7月16日より大溝調査の規模を増強し、大溝内小流路の把握に務めながら広域に発掘を進める。梯子、鋤、鍬、建築材など多量に出土する。54年9月20日より大溝内木製品などすべての遺物取り上げを終了し、河床面の精査をおこない、大溝コンター実測を進める。10月12日 航空写真撮影。実測終了。埋め戻し。

## 13 その他

53年4月12日 宮崎大学藤原宏志氏プラントオパール分析土壌資料採取(A地区)。53年6月26日 日高遺跡の終了に伴い同遺跡調査班新保遺跡調査班に合流。10月20日 1回目の航空写真撮影。53年10月25日 宮崎大学藤原宏志氏プラントオパール分析土壌資料採取(C地区)。新保遺跡より北西約500mに所在し、関越自動車道にかかる蛭沢遺跡は建設工事中に発見されるが、周囲の隣接部に土盛り工事が進み、早急な調査の実施が迫られ、53年11月7日 新保遺跡発掘調査班の一部を振り向け発掘調査を開始する。53年12月6日 プレハブ事務所をB地区から染谷川の西側に移築する。54年1月17日 蛭沢遺跡調査終了。54年3月23日 航空写真撮影。54年4月28日 航空写真撮影。54年5月17日より鳥羽遺跡調査班大溝調査のため新保遺跡調査班に合流する。54年5月18日 航空写真撮影。54年6月5日 航空写真撮影。54年6月12日 聖マリアンナ医科大学森本岩太郎氏周溝墓主体部出土人骨の鑑定のため来訪。遺跡周辺部の簡易ボーリング調査。54年7月13日 航空写真撮影。森本岩太郎氏258号住居跡出土人骨の鑑定のため再度来訪。54年9月8日 佐藤敏也氏出土米の鑑定のため来訪。54年9月13日 パリノサーベイ株式会社大溝内ほかC地区花粉分析資料の採取。9月17日 木製品を分室に搬出。54年9月26日 粉川昭平氏大溝出土種子の鑑定のため来訪。54年10月6日 大溝出土獣骨鑑定のため金子昌浩氏来訪。54年12月3日 金子昌浩氏 獣骨鑑定のため再度来訪。この間獣骨の分類、記録カードを作成する。54年12月14日 木製遺物を分室へ移動する。55年2月7日 河川改修部遺構航空写真撮影。55年2月8日 “文化財の集い”(現地説明会)を実施。55年2月12日 発掘調査終了。以後現地にて整理作業。3月25日撤収。





第2図 新保遺跡トレンチ配置・土層柱状図



## 2 新保遺跡の位置と周辺の遺跡

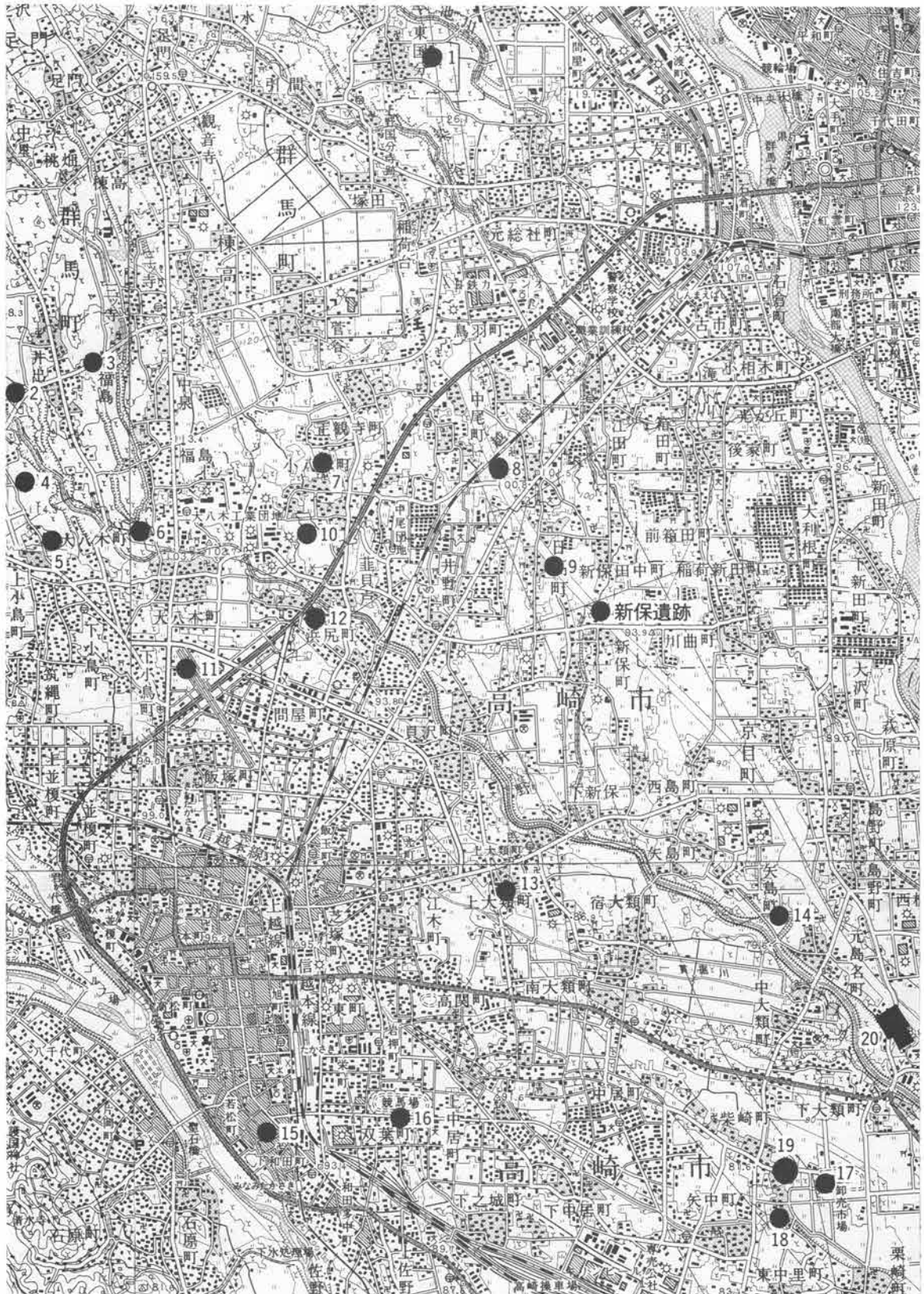
新保遺跡は高崎市街地の北東4.2km地点に位置し、東の方向8kmに大河、利根川が南北に流下し、遺跡の中央部には榛名山中腹を水源とする中級河川、染谷川が南北に貫流する。染谷川は遺跡地の2km南で井野川に合流する。遺跡地の現状は染谷川に沿って帯状に伸びる自然堤防状微高地帯を中心に畑地、南北の後背地は水田で、特に南方向は広大な水田地帯が展開する。遺跡地周辺の地勢は、付近は榛名山東南山麓の末端にあたり、勾配は、北西、榛名山方向に1000分の4高くなる。遺跡地の2km北西鳥羽、正観寺辺りが地形の変換点で、この辺りから山麓上位に向かう地帯では、河川は河岸段丘を形成し、一帯に畑地帯となっている。

榛名東南麓における歴史、文化は古代から、現在に至るまで上記概観した固有の地域的条件への様々な働きかけのうちに展開してきた。本地域の文化史的概観については既刊の「新保遺跡Ⅰ」を参照、本項では周辺地域の同時代遺跡の紹介にとどめる。

第1表 周辺の遺跡一覧表

遺跡番号は第3図に対応

遺跡名	調査された遺構(弥生、古墳前期)	立地	関係文献
1 国分寺中間地域遺跡	弥生後期 住居跡7軒、土壙1基、方形周溝墓2基	牛池川、染谷川に南北を挟まれた台地上平坦地に立地	「年報」1～3、1982～1984 群馬県埋蔵文化財調査事業団
2 同道遺跡	4世紀に降下した浅間C軽石直下に水田跡を広く検出。	井野川左岸沖積地上に立地する。(見かけの台地地形上)	「同道遺跡」1983 群馬県埋蔵文化財調査事業団
3 井出村東遺跡	弥生後期 住居跡20軒	井野川左岸、自然堤防上に立地する。	「井出村東遺跡」1983 群馬町井出村東遺跡調査会
4 御布呂遺跡	浅間C軽石に覆われた弥生時代後半から、古墳時代初頭と考えられる水田跡。	井野川右岸段丘上沖積地に立地する。	「御布呂遺跡」1980 高崎市教育委員会
5 芦田貝戸遺跡	浅間C軽石に覆われた水田跡。	井野川右岸段丘上沖積地に立地する。	「矢島遺跡・御布呂遺跡」1979 「御布呂遺跡」1980 高崎市教育委員会
6 熊野堂遺跡	弥生後期 住居跡20軒、溝2条、井戸3基、土壙8基、古墳前期 畑跡2面、浅間C軽石に覆われた水田跡	井野川左岸段丘に立地する。井野川に面する沖積地にC軽石下水田跡	「熊野堂遺跡(1)」1984 群馬県教育委員会、群馬県埋蔵文化財調査事業団
7 正観寺遺跡	弥生時代 住居跡30軒	榛名山麓傾斜地末端部に立地。南に低平地をひかえる。	「正観寺遺跡群」Ⅰ～Ⅲ 1979～1981 高崎市教育委員会
8 日高遺跡	弥生時代 住居跡14軒前後、方形周溝墓3基、溝6条、水田跡を広く良好に検出。	細長い自然堤防微高地上に住居群、西側、旧河川沖積地には水田跡が立地する。	「日高遺跡—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書 第5集」1978 群馬県教育委員会 「日高遺跡(1)」1979 高崎市教育委員会
9 蛭沢遺跡	古墳前期 住居跡1軒、井戸1基	新保遺跡の西北500mに隣接し、微高地に立地する。周囲は低平湿潤地。	「関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財調査概報 IV」前出
10 小八木遺跡	弥生後期 水田跡、溝	井野川左岸自然堤防状微高地とその後背地にかけて立地。	「小八木遺跡調査報告書」(1) 1979 高崎市教育委員会
11 下小鳥遺跡	弥生後期 住居跡1軒	井野川右岸自然堤防成因と思われる微高地と沖積低湿地にわたって立地。	「上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ」1973 群馬県教育委員会



1 : 50,000 国土地理院

第3図 新保遺跡と周辺の遺跡 (弥生、古墳時代前期)



遺跡名	調査された遺構（弥生、古墳前期）	立地	関係文献
12 浜尻遺跡	弥生中期 住居跡3軒以上、溝状遺構2条、土壇5基	井野川右岸舌状微高地に立地、東南に低湿地をひかえている。	「浜尻遺跡」1981 高崎市教育委員会
13 上大類北宅地遺跡	弥生後期 住居跡1軒、方形周溝墓1基、古墳前期 方形周溝墓1基	井野川右岸の自然堤防状微高地に立地し、西は後背湿地となる。	「上大類北宅地遺跡」1983 高崎市教育委員会
14 鈴ノ宮遺跡	弥生時代 住居跡26軒、方形周溝墓7基、壺棺1基 古墳前期 住居跡31軒、前方後方形周溝墓1基、方形周溝墓3基	井野川左岸段丘上、自然堤防洪積微高地に立地する。背後に広く低湿地をひかえる。	「鈴ノ宮遺跡」1978 高崎市教育委員会
15 竜見町遺跡	遺構不明、弥生中期後半、竜見町式土器が数個まとまって出土。	烏川左岸段丘上、洪積地上に立地。周囲に低湿地をひかえる。	杉原莊介、乙益重隆「高崎市附近の弥生式遺跡」考古学10-9 1939
16 競馬場遺跡	丘の斜面上に数多くの破片とともに完形土器が3個掘り出された。	洪積平坦地に立地。低湿平坦地を周囲にひかえている。	同上
17 下大類遺跡	古墳前期 住居跡	井野川右岸後背地、微高地に立地。	「大類村史」1979
18 矢中村東遺跡	古墳前期 方形周溝墓4基	井野川右岸河岸段丘上位面、ローム面上に立地。	「矢中村東遺跡」1984 高崎市教育委員会
19 蟹沢古墳	比較的小規模な円墳。内部構造は粘土郭と推定される。鏡4面、鉄斧他出土。	墳丘は北側に井野川支流の粕川が形成する沖積平野を望む洪積台地上に占地。	「群馬県史」資料編3 原始古代3古墳 1981
20 将軍塚古墳	全長90メートル前方後方墳、主体部は粘土郭。獸形鏡1面、石釧（いしくしろ）、刀、鉈（やりがんな）等出土。	墳丘は井野川左岸、河岸縁辺に占地。南北に広域な低湿平坦地をひかえる。	同上

### 3 調査の方法

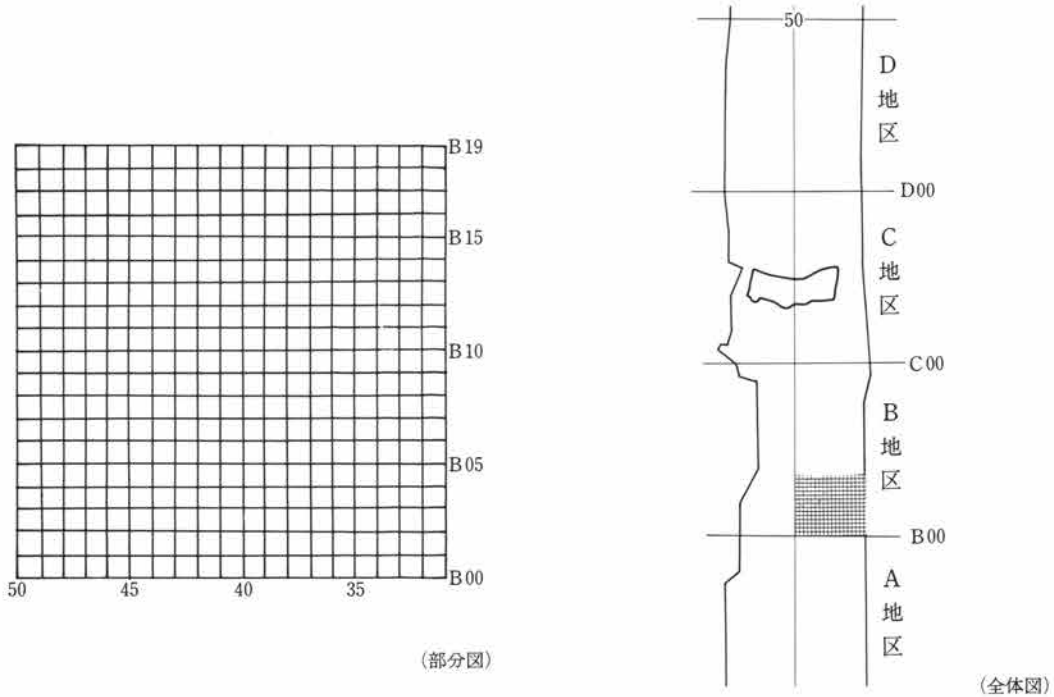
**グリッド設定法** 関越自動車道の建設予定区域は幅員約80mである。この区域は遺跡をN-44°-Wの方向に貫く。路線内には中央に建設工事用測量杭が設置されている。この杭の内、STA134+00とSTA135+00を結んでグリッドのx軸の中軸線とした。両杭間の距離100m。次にこれに直行してy軸を設け、グリッドはSTA杭を基点としてx、y軸を2mごとに区切り、遺跡全体に2m方眼の網を行きわたらせた。

グリッド呼称法は、y軸については、x軸中軸線との交点を50として北東から西南に2mごとに数字が増す。x軸方向はSTA134+00杭をA00、100m北西方向のSTA135+00をB00、さらに100mの間隔をもってC00、及びD00の点を設定し、それぞれの間をA～D地区とした。各地区間に設定された50グリッドは頭にアルファベットを付して00～49の数字で呼ぶこととした。たとえばあるグリッドを呼ぶには50-A29、60-B07という具合である。

**トレンチ設定法** 遺跡の広がり、遺構の性格、密度、土層堆積と遺構の状態などを把握するため平面発掘調査に先立って、調査予定区域内全域を対象にトレンチ発掘調査を実施した。トレンチの配置方法はA、B、C地区では10m（5グリッド）方眼に1箇所設け、トレンチの規格は4m×1.5mでグリッド縦軸（x軸）方向に長辺をとった。D地区では10m間隔に幅1.2m、長さ20mのトレンチを13本設定した。

トレンチ発掘においては遺構は検出せず、確認するに止どめ、各トレンチごとに確認遺構の平面、土層断面の記録をとった。

#### 4 標準層序



第4図 グリッド設定図

## 4 標準層序

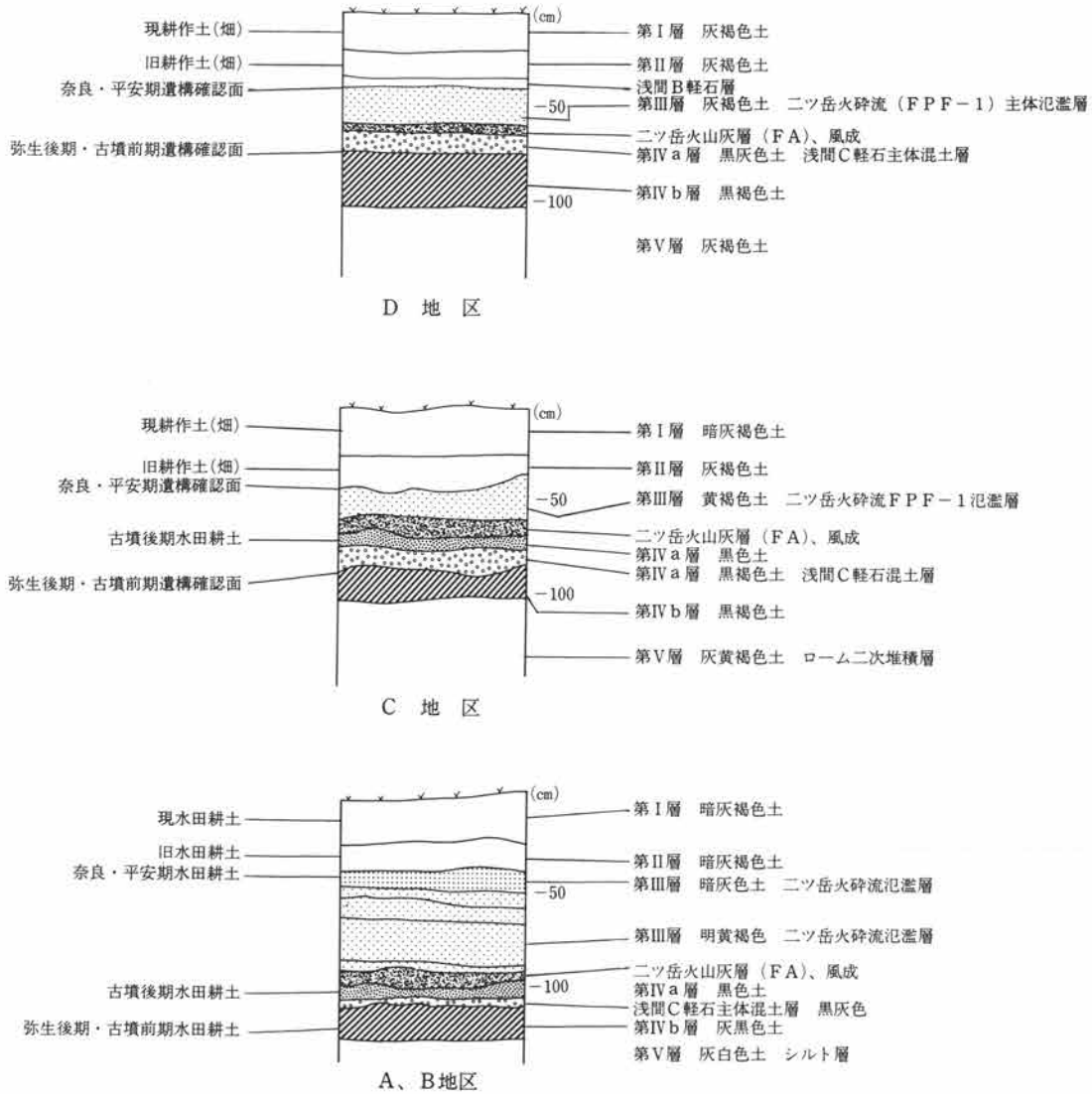
本遺跡の標準的な自然堆積層は染谷川の左岸(C地区)、右岸の両微高地、東南部低湿地区の3地区で若干様相を異にする。遺跡の周辺地域は榛名山東南麓末端部に位置しており、地形は自然堤防状の微高地、あるいは旧くは河道であった埋積谷が無数に存在している。染谷川は遺跡中央部を南北に貫流し、C地区を中心に染谷川の縁辺は帯状に自然堤防状微高地が形成され、その後背地である東南部のA地区はより低湿となっている。遺跡の占地はこれに従い、弥生、古墳時代ではC地区微高地帯に住居群、東南部低湿地帯のA地区には多数の水田に関わる溝群などが見られる。あるいは染谷川の右岸D地区には周溝墓を中心とした遺構が見られる。以後集落の占地はこの地形条件に従いながら、古墳後期には遺跡地全面水田となり、二ツ岳に伴う災害後奈良・平安時代にいたって再びC地区は居住域、A地区は水田を主とした生産域となる。本遺跡は弥生～中・近世にわたる複合遺跡であるが、終始上記の土地条件に従って占地の変遷があった。

以下では本遺跡の標準土層について上記A、B地区、C地区、D地区の3地区に従って説明を加えたい。

**第Ⅰ層** 暗灰褐色土で1793年浅間大噴火による浅間A軽石を含む。厚さは25cm前後で現耕作土である。C、D地区では畑耕作土であり、A地区では水田耕作土である。

**第Ⅱ層** 暗灰褐色土で12世紀降下した浅間B軽石層を含んでいる。厚さ12cm前後であり、D地区の一部で最下層において浅間B軽石層の薄い堆積が認められるが、A、B地区、C地区では浅間B軽石は層としては認めることができない。

**第Ⅲ層** 黄褐色土で古墳時代後期榛名山二ツ岳火山噴火に伴う火砕流(FPF-1)氾濫層である。この層は各地区により厚さや粒子の状態に差異が見られる。その状況より現染谷川方向に氾濫の中心があると認



第5図 新保遺跡標準土層図

められる。C地区においては堆積状況は地点により著しく異なり、北部においては厚さ40cm前後で、随所に3～5cmの軽石粒のレンズ状の堆積が見られる。C地区北西部から河川改修部にかけてはこの氾濫層は殆ど見られない。また、C地区はFA下においては水田跡に伴う大規模な水路跡や全体に窪地状の大溝部など複雑な起伏が見られるが、第III層上面はこれらの区域にあってほぼ平坦である。第III層上面は奈良・平安期、中・近世の遺構確認面である。

A地区においては第III層の堆積は厚い。A地区はC地区に比べてIV a層上面で40～50cm低く、厚さの違いはこの比高差によるものと思われる。土質は黄褐色の微細な灰状で等質であり、縞状の堆積状態で見られる。直下層のFA層と視覚的に峻別しにくい。A地区においては第III層最上部15cm前後は耕作土化した状態が認められる。暗灰色でやや粘質である。この層の直上層は浅間B軽石を含む第II層であるが、純層の状態では見ることができないため畦などを検出することはできなかった。

D地区においては第III層の堆積は薄く灰褐色を呈し、やや粘質味が強い。厚さは20cm以下である。第III層

上面はC地区と同様に奈良・平安期の遺構確認面である。

**二ツ岳火山灰層（FA層）** 第三層の最下層である。黄褐色を呈し、灰質で、均質であり、風成堆積である。FA層の直下は古墳水田面であり、水田面はこの層を除去することにより精細に検出することができる。D地区においてはFA層下に水田跡を見ることはできなかった。

**第IV a層** 黒色粘質土である。4世紀以降降下した浅間C軽石を多量に含んでいる。第IV a層の堆積状態は地区により差異が大きい。C地区では厚さ10～15cm。弥生、古墳前期の土器を主とする遺物包含層である。最上層3～4cmは古墳後期水田（FA下水田）の耕作土であり、黒色味が強く、やや軽石の混在が少ない。上面は小区画の畦を形成している。

A地区では湿潤であり、黒色の軟らかい粘質土で、厚さ7cm前後。浅間C軽石層の直上層であるが、軽石の混入は目立たない。上面は小区画の畦を形成する区域あるいはこれが潰れて明確でない区域などあるが、全体に足跡が深く踏み込まれた状態で無数に見られる。

**浅間C軽石層** 浅間C軽石の有り方は地区によって様子を異にしている。C地区においては第IV a層中に混在した状態で見られるが、A地区では厚さ7cm前後、純層に近い状態で見られる。この軽石層の直下には水田に伴う溝や畦が検出されている。

**第IV b層** 黒色粘質土で浅間C軽石層は含まれない。C地区では上半部は弥生時代遺物包含層、下半部は同期の遺構の基盤となっている。厚さは15～20cm。A地区では灰黒色の粘質土であり、上部は水田耕作土の可能性が高い。厚さは20cm弱。D地区ではC地区と同様である。

**第IV c層** C地区において、大溝の北西側（右岸）縁辺部付近の大溝覆土で、弥生、古墳期住居跡がのる黒褐色土（第IV b層に対応）の下位層。暗褐色土でやや砂質、土器、獣骨などを見る。

**第V層** C地区では2次堆積ローム層である。最上部の50cm前後は暗灰褐色でやや砂質であり、遺物はまったく含まれない。この下位層は厚さ40cm前後、暗灰色砂質土層で、さらに下位層は黒色で砂礫層である。厚さは20～30cm。この下は淡褐色ローム質土層である。第V層上面から砂礫層まで約1.2mである。A地区においては第V層上部はシルト層であるが、この地区では上部ローム層の標準的層序が確認できる。シルト層下、上位から黄色板鼻軽石層（YP）、水成BP層、砂層（泥流氾濫層）、前橋泥流といった堆積が第V層上面から約2mに達する厚さの堆積層にて観察できる。

## 5 発掘調査の概要

本遺跡においては縄文時代から中世にかかる遺構、遺物が発掘調査された。縄文時代では染谷川の西40mに沿った旧河道が検出され、旧河道の覆土の最下部より縄文時代中期加曾利E式土器の破片が比較的多量にまとまって出土している。しかし縄文時代の遺構は検出されない。遺構については弥生時代からその存在が明確になり、これ以後、中世、近世まで住居群、墓跡群、水田跡、掘立柱建物跡群などが多様な変遷を見せながら、染谷川に沿う左岸微高地帯を中心に重層的に展開する。

**弥生時代中期後半** 染谷川左岸微高地帯（C地区）に住居跡8軒、C地区を北東－西南に貫く大溝の北西寄り、最深部において木製品、土器等、この時期の遺物が出土している。

弥生時代中期後半以後、遺構の配置は古墳時代前期まで大きな変化を見せない。

**弥生時代後期** 住居跡の数は増大し集落の規模は拡大する。住居跡はC地区を中心に107軒以上後期初頭か

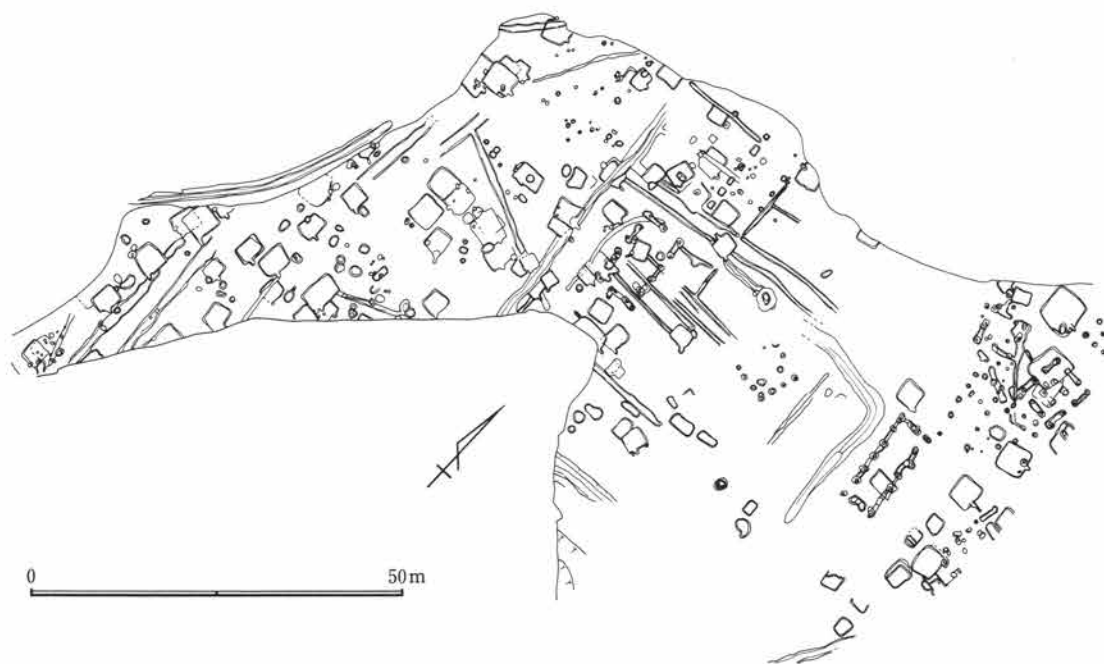
ら終末まで断絶なく著しく重り合って見られる。この時期の墓跡は染谷川の右岸D地区と左岸C地区に群在する。C地区南部には特に大規模な1号周溝墓が存在する。周溝墓の形状は四隅土橋。規模は12m×11m、封土の有無は後世の削平を受け不明。主体部も不明確である。溝内から完形、半完形、破片の状態で土器が多量に出土している。住居群の南東部、微高地と、低湿地の境界付近B地区ではやや小規模な、方形あるいは不整形の盛土を持つ周溝墓群が14基存在する。方形周溝墓の規模は一辺が約8～9mで、2隅～3隅に土橋があり、水路と思われる溝等を利用したもので形状は整わないものである。これ等の周溝墓の封土、主体部については不明確であった。不整形の盛土を持つ周溝墓の方は方形周溝墓群より北寄りに群集する。規模は径7m前後、高さ30cm前後の盛土が確認できたが周溝は明確に認められない。主体部は複数の壺棺、小規模な長方形土壙が台上部に設けられている。壺棺は胴径58cm程の大型土器の口辺部を欠き壺胴下半部をこれに合わせた2個体構成よりなるものである。一部の壺の中より人骨が検出された。なおこの周溝墓群の下層から弥生時代後期の住居が7基重複した状態で検出されている。

弥生時代後期の墓跡群は上記の外にも染谷川右岸のD地区に9基からなる周溝墓群が見られる。これらは円形を基とした周溝をめぐらすが、溝は共有し合い、円形、半円形、ウロコ状を呈し、規模は径7m前後、主体部は壺棺が1基の周溝墓に2～3個検出されている。5号周溝墓では3個の壺棺が検出され、そのうちの1個は高さ67cm、胴径54cm。口辺部を欠かれた大型壺で、胴部の小穴および口の部分に他の大型壺の胴下部をもってこれを封じ、蓋としている。このD地区の周溝墓群はC地区の不整形な盛土を持つ周溝墓群より、伴う土器に古い要素が認められ、時期的にC地区の墓跡群に先行すると考えられる。

住居群、墓跡群の立地する自然堤防状微高地の東南A、B地区の、地形は広く低湿地帯となっている。この区域には、この時期の灌漑に供したと思われる大小の溝が10数条、北→南方向に走っている。それぞれの溝はいくつかの箇所集中しており、同様の機能を持つ溝が改修あるいは、新たに作り改められながら比較的長期に継承されたことが見てとれる。これ等の溝の中でも比較的規模の大きな17号溝は、溝両側立ち上り部におよそ18mにわたって、32本の木杭が認められた。又17号溝にはより小規模な溝が分岐する箇所があり、ここには、17号溝の中央部に矢板が2本打ち込まれた状態で検出されており、用水路の堰の跡であったと思われる。この他、この地区では、畦跡と思われる低い帯状の高まりも認められており、この時期、この区域において、水稲耕作を行っていたことが想定できる。

**古墳時代前期** 住居跡、周溝墓等が弥生時代とほぼ同様の占地形態をとって見られるが、この時期の遺構は前代に比べ著しく少ない。住居跡は39軒以上、前代の住居群分布区域に散在している。又、周溝墓もC地区、東南部の弥生時代の墓跡群中に2基認められる。さらに東南の低湿地でも、前代の溝群と同様の配置で10数条の溝が、浅間C軽石に直接埋もれた状態で検出されている。これらの溝もやはり前代から灌漑用水路として同様の機能を受け継いだものと思われる。

**古墳時代後期** 弥生時代から古墳時代前期まで受け継がれてきた集落占地形態は一変する。染谷川左岸の調査区は全面に水田跡が広がる。水田跡は一带に榛名山二ツ岳火山灰層（FA）に直接覆われ、さらに河川氾濫による二ツ岳火山灰を主体とする水成層がその上に厚く堆積する。このため水田跡は後世の攪乱を受けることが少なく、良好な遺存状態で検出された。この水田跡はいわゆる小区画水田と称されるもので水田の一区画は、2m×2.5mの大きさに畦で区画されたものである。この規模、形状において画一的な水田跡は前代に多数の溝が見られたA、B地区からさらに居住区域、墓域であった微高地上にも、一带に広がり及んでいる。



第6図 奈良・平安時代遺構配置図（C地区）

**奈良・平安時代** 古墳時代水田が厚く火山灰、及び氾濫層に覆われると、その後、遺跡地内には人為の跡は見られず、7世紀後半以後の奈良時代にかかる時期に至って掘立柱建物群やこれに隣接して住居跡群が現われる。これらの遺構は染谷川兩岸の微高地に占地するが、その中心は左岸微高地にあり、掘立柱建物群は10軒から構成され、南側に開くコの字状に配置される。建物は2間×5間、あるいは3間×3間で、柱穴底に扁平川原石を据え、周囲に瓦の破片を多く見ることから、一部の建物には部分的であれ、瓦をのせていたと考えられる。こうしたあり方は、この時期の遺構群にある特別な性格を窺わせるところとなっている。

平安時代では染谷川の左岸C地区微高地を中心に竪穴住居跡を始めとする多数の遺構群が出現する。奈良・平安時代の竪穴住居跡は染谷川左岸（C地区）80軒以上、右岸（D地区）18軒以上、掘立柱建物は上記のものも合わせ19軒、その他溝、土壙を多数検出した。

**中・近世** C地区で中世火葬墓、用水路と判断される大、小の溝、環濠、井戸等多数見られる。又、中・近世以後も現代まで溝やその他何らかの生活の跡をたどることができる。

なお本遺跡D地区の北方100m付近において、昭和56年度圃場整理事業に伴う発掘調査が高崎市教育委員会により実施されている。調査の行われた場所は「i調査区」と称され、染谷川右岸、関越自動車の北隣接地を中心に、約16haを対象地とし、トレンチ、及び「全開調査」が行われた。弥生時代遺構は新保遺跡D地区周溝墓群に連なると思われる、大小10基の周溝墓群が染谷川河岸に沿う自然堤防状微高地上にて調査されている。周溝墓の形状は不整形を呈しており、主体部には、長方形土壙、壺棺が見られ、新保遺跡に見る周溝墓とおおよそ同様な有り方を示している。調査の所見では「ごく一部の調査により確認できた周溝墓であり……同様の墓域が相当広く存在」することを予想している。その他、新保遺跡と同様のFA下、古墳時代後期水田跡、平安時代住居群、又、浅間B軽石下より平安時代水田跡が広域に確認されている<sup>(註1)</sup>。

(注1) 「日高遺跡(IV)」 1982 高崎市教育委員会



第7図 新保遺跡全体図 (弥生、古墳時代前期)





## 6 検出した遺構、遺物

### (1) 弥生時代中期後半の住居跡

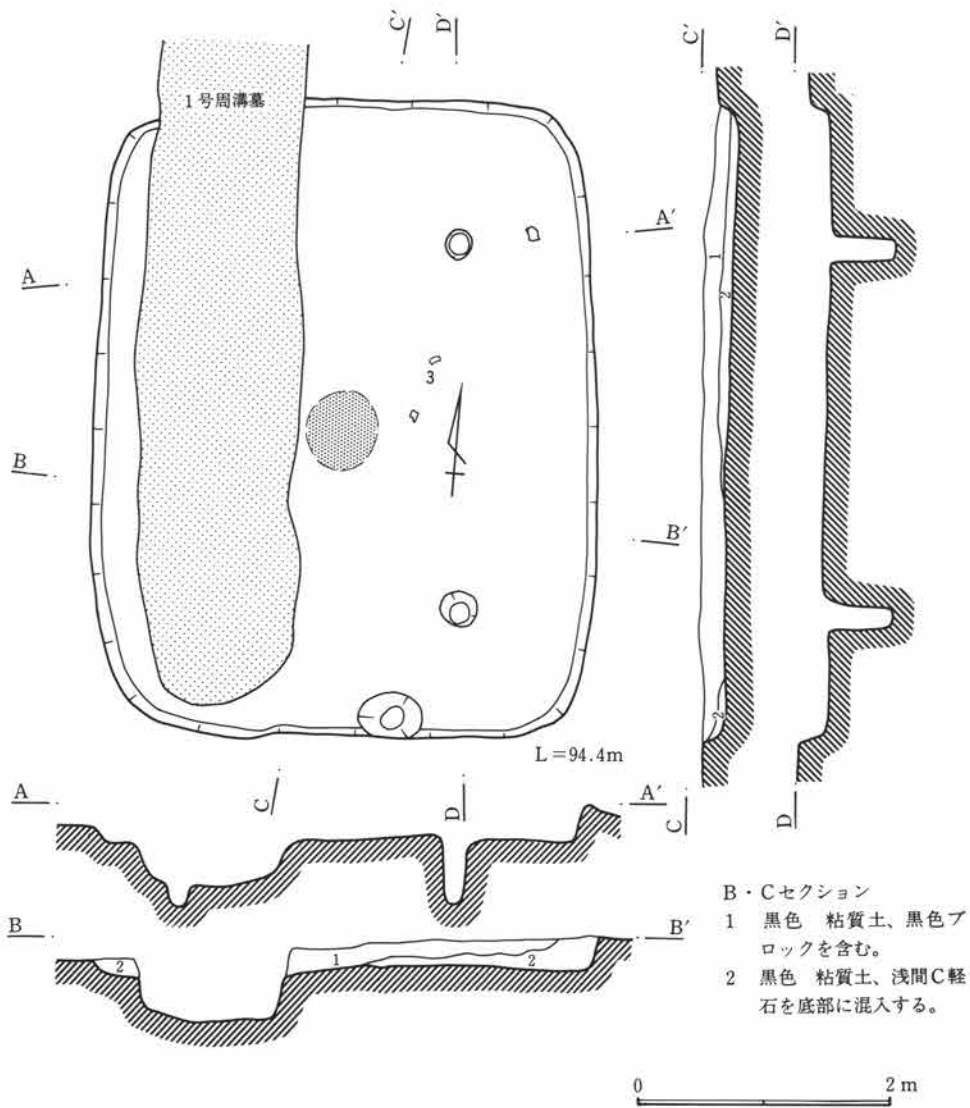
83号住居跡 (第8図、図版6)

**位置** C地区住居群の西北端部に位置する(61-C42)。1号周溝墓の西側溝と重複する。

**形状、規模、方位** 隅丸長方形を呈する。長辺は僅かに胴張り気味。規模は長軸5.1m、短軸4.0mを測る。方位はN-5°-W。

**周壁、壁溝** 周壁は全体に良好に検出された。確認できる周壁の高さは20~30cm、壁土は黄褐色ローム質土(第V層)。壁溝は確認できない。

**床面** 床面は黄褐色ローム質土で、平坦でやや堅い面を認める。床面は東側が西側より僅かに低く、(5cm



第8図 83号住居

6 検出した遺構、遺物

前後) 全体的に東側に傾斜している。

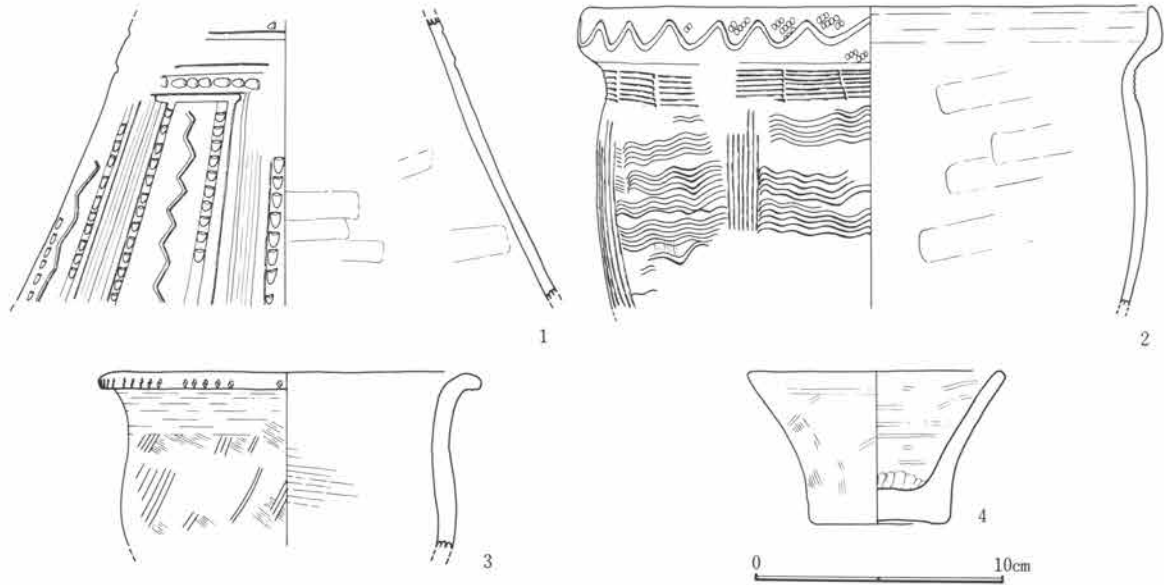
**柱穴** 支柱穴を東側2箇所で見出す。西側は本住居より新しい1号周溝墓との重複部であるため確認することができなかった。東側の2箇所の支柱穴の配置から、本住居の支柱は4本構造と判断できる。支柱は2箇所とも整った円形で、規模は南側が径28cm、深さ50cm、北側が径20cm、深さ50cmを測る。

**炉跡** 住居中央部に径60cm程の地床炉を設けている。炉床は赤褐色に強く焼けている。炉床面から8cm前後の深さまで焼土化し、変色している。

**遺物出土状態** 床面直上より弥生土器大形破片などが10数点出土している。

**時期** 弥生中期後半第1期

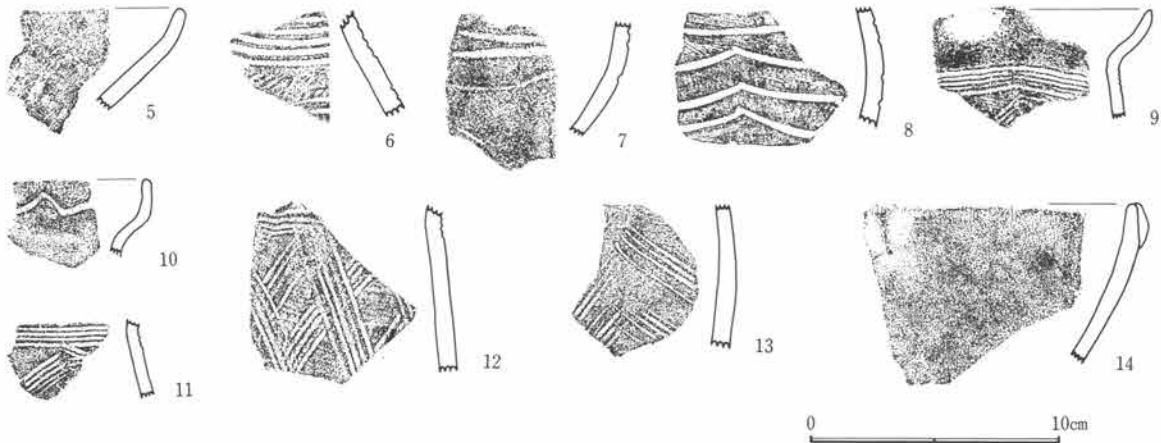
**他の遺構との関係** 1号周溝墓より古い。



第9図 83号住居出土遺物 (1)

第2表 83号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺			外面 頸部は横沈線文とその間に刺突を1条巡らす。胴上部は懸垂横帯文、区画内には襍描直線、沈線山形文を垂下する。 内面 ヘラナデ。	細砂粒、黒色粒混入 堅緻 明褐色	胴上位
2	甕	口 21.5	受け口状口縁。	外面 口辺部は沈線山形文、地文縄文、胴部は襍描直線を垂下させた後、波状文を施す。 内面 口辺部はヨコナデ、胴部はヘラナデ。	中砂粒混入 堅緻 にぶい黄橙色	口縁～胴上位1/4周
3	甕	口 15.3	口縁部は外側に屈折する。	外面 口縁部縄文、口縁部はヨコナデ、頸部は斜行襍描直線文。 内面 口縁部はヨコナデ、口～頸部はヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい黄橙色	口縁～胴部1/2周
4	鉢	口 10.4 底 5.4 高 6.1	口縁部は緩やかに外反する。	外面 体部ハケメ後、ヘラミガキ。 内面 底面はヘラケズリ痕、体部はヘラミガキ。	中砂粒、黒、白色粒混入 堅緻 灰白色	底～体部1/2



第10図 83号住居出土遺物 (2)

第3表 83号住居出土土器観察表 (拓本)

6 壺 細砂粒混入、にぶい黄橙色	9 甕 内面(b)へラミガキ(d)ハケ目、中砂粒混入、にぶい褐色	12 甕 砂粒混入、にぶい黄橙色
7 壺 砂粒混入、にぶい黄橙色	10 甕 明褐色	13 甕 砂粒多量に混入、暗褐色
8 壺 外面沈線、ハケメ後へラミガキ、内面ハケメ。	11 甕 内面へラミガキ、砂粒混入、暗褐色	14 鉢 砂粒多量に混入、にぶい黄橙色

## 114号住居跡 (第11図、図版6、7)

**位置** C地区住居群の北西部に位置する(60-C35)。南部で115号住居と大きく重なり、北に116号住居、108号住居と隣接する。

**形状、規模、方位** やや台形状に歪んだ隅丸長方形を呈する。住居の輪郭は東南コーナー一部で130号住居との重複部で不明確な箇所が小部分あるが全体的には明瞭に把握できる。規模は拡張後の長軸は5.1m、短軸は最大幅で4.5mを測る。拡張前の規模は長軸4.3m、短軸は最大幅で3.8mを測る。方位はN-13°-E。

**周壁、壁溝** 西側拡張部周壁を良好に検出している。検出できた周壁の高さは25cm前後、壁土は暗褐色粘質土(第IVb層)で遺存状態の良好な箇所での立ち上がり角度は73度を計測する。壁溝は拡張前のプランでは全周している。溝幅は10~15cm、深さは5cm前後である。

**床面** 床面は黄褐色ローム質土(第V層)面で全体に堅く平坦に踏み固められている。拡張後と拡張前(内側)の床面レベル差は無い。

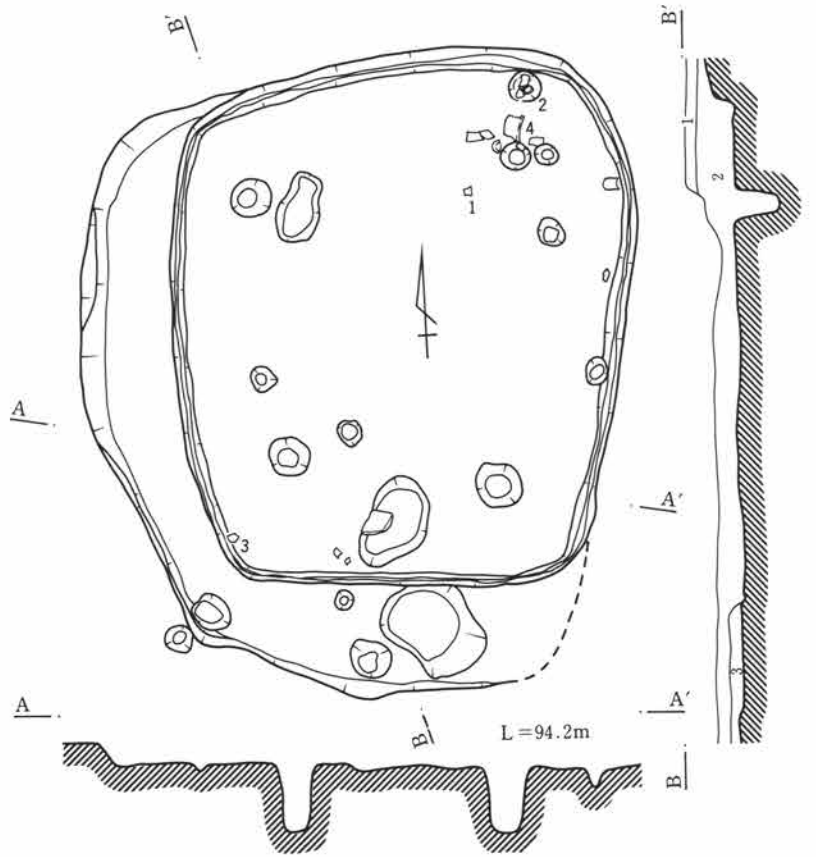
**柱穴** 主柱穴は4箇所良好に検出されている。主柱は4本構造である。主柱穴の配置はやや台形状に歪んでいるが、これは住居の輪郭形状に対応している。拡張は西に70cm、南に90cmの幅で行われているが主柱の位置は変更していない。4本の主柱穴はほぼ同様の形状、規模を示しており、径は20~30cm、深さ50cm前後である。

**炉跡** 不明確。検出することができなかった。

**遺物出土状態** 拡張区も含め、住居全体にわたって床面直上より土器破片が多数出土している。

**時期** 弥生中期後半第1期

**他の遺構との関係** 南半部で115号住居(古墳前期)と重複している。床面レベルは115号住居より本住居の方が10cm前後低い。東コーナーの小部分で130号住居と重複している。



Bセクション

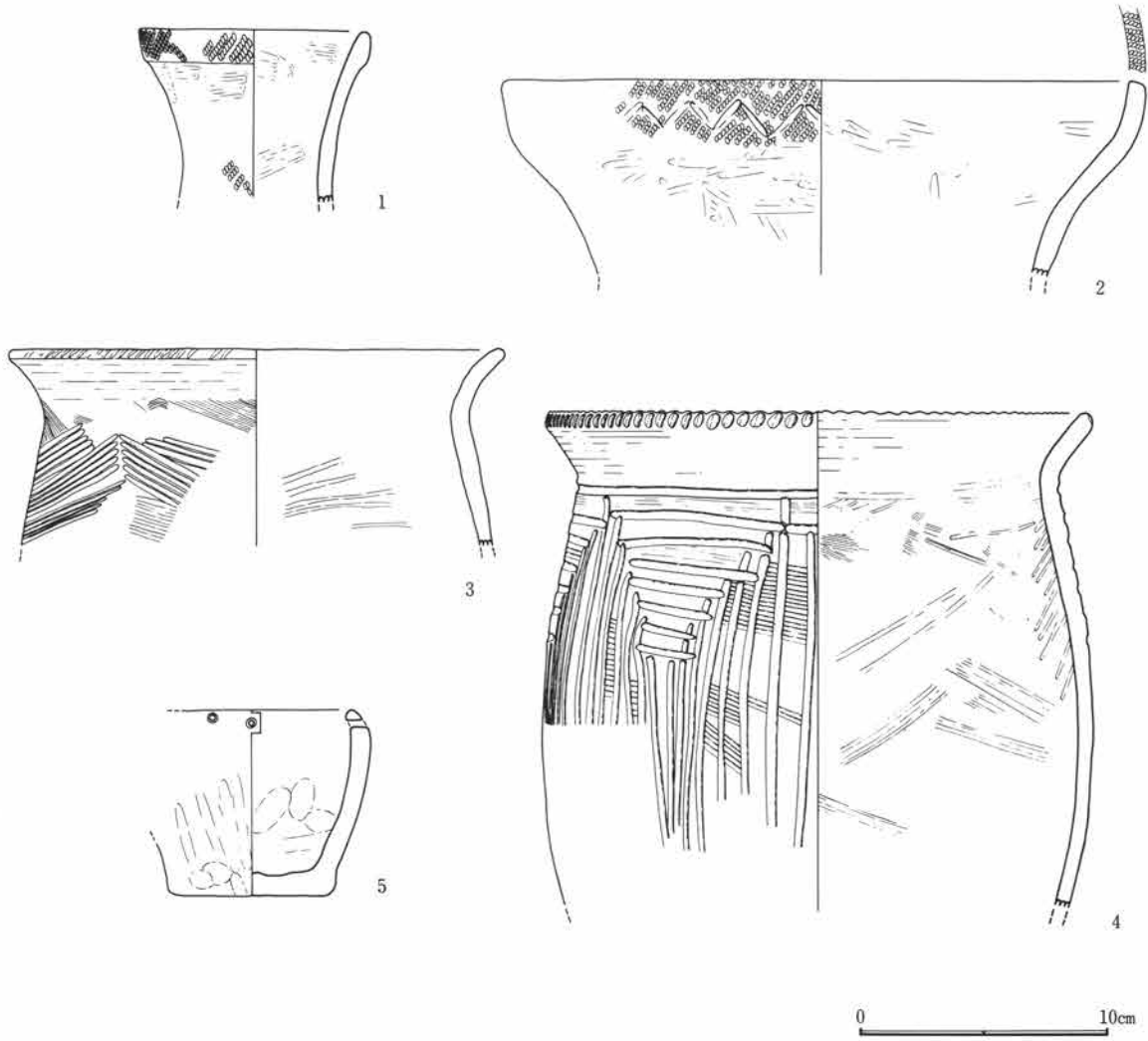
- 1 暗褐色 粘質土、細かい軽石、焼土を少量含む。
- 2 暗褐色 弱粘質土。
- 3 暗褐色 粘質土。

0 2 m

第11図 114号住居

第4表 114号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 9.4	口縁部は肥厚し、緩やかに外反する。	外面 口縁部は縄文、口縁部は一部縄文後ヘラナデ、ヘラミガキ。 内面 ヘラナデ。	粗砂粒混入 堅緻 にふい赤褐色	口縁～頸部1/2周
2	壺	口 24.8	口辺部で内折して立ち上がる。端部は角張る。	外面 口縁端部は縄文、口縁部に縄文地の山形文後、口辺下位より下にヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ、指オサエあり。	砂粒多量混入 堅緻 浅黄橙色	口縁～頸部1/2周
3	甕	口 20.4	口辺部は外反する。	外面 口縁端部は縄文、口辺部はヨコナデ、頸～胴部はハケメ後、櫛描直線文。 内面 口～胴部はヘラミガキ、口辺部はヨコナデ、頸部に指オサエ痕あり。	細砂粒混入 堅緻 浅黄橙色	口縁～胴上位1/2周
4	甕	口 22.1	口縁部は直状に短く外傾する。	外面 口縁端部は刻み目、口縁部はヨコナデ、頸部は沈線が巡る。胴部は沈線コの字重ね文。 内面 口辺部はヨコナデ、頸～胴部はハケメ後ヘラミガキ。	細砂粒混入 やや堅緻 にふい橙色	口縁～胴部1/2周
5	片口?	口 8.3 底 6.8 高 7.2	口縁部に2孔を穿つ。	外面 体部はヘラミガキ。 内面 体部はナデ、指オサエ。	中細砂混入 堅緻 灰褐色	体部1/2欠損



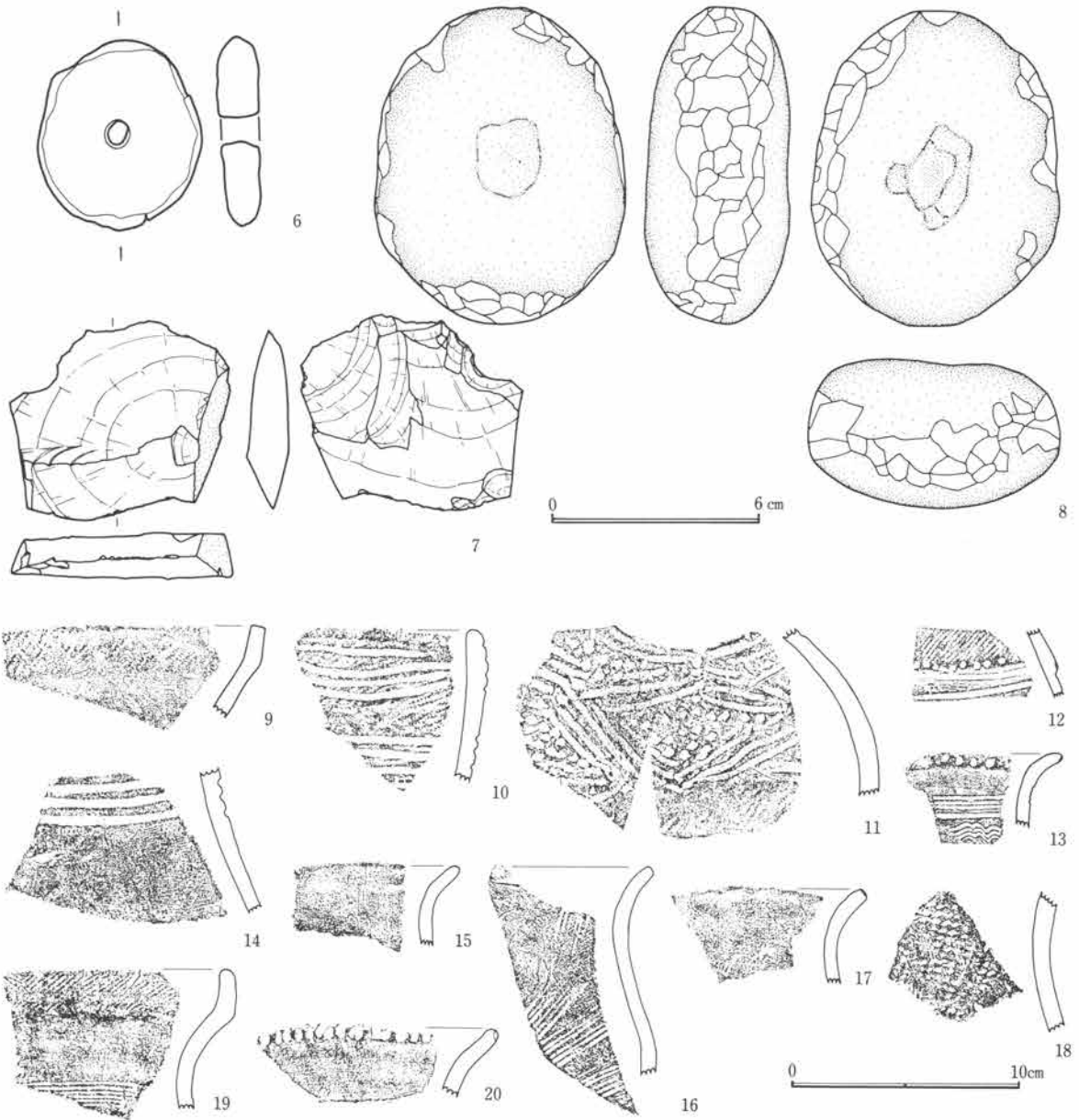
第12図 114号住居出土遺物 (1)

第5表 114号住居出土土製品観察表

遺物番号	名称	計測値(cm)	成形	整形	胎土・焼成	色調	備考
6	土製紡錘車	外径 5.5 孔径 0.6	側縁部は丸い。やや長円形を呈する。	器面は凹凸が目立ち荒れている。	細砂粒混入 やや軟弱	にぶい橙色	完形

第6表 114号住居出土石器観察表

遺物番号	名称	計測値(mm)	石質	重量(g)	特徴
7	石核	64.0×54.0×12.0	黒色頁岩	56.6	半割礫の剥離面を打面として小さな石刃を剥ぎとった石核の残核。
8	凹石 敲石	73.0×91.0×42.0	輝石安山岩	395.0	軟らかな石材の周囲を全周にわたり敲打している。両面中央部付近に弱い凹をつけている。



第13図 114号住居出土遺物 (2)

第7表 114号住居出土土器観察表 (拓本)

9 壺 外面(b)縄文、内面ヘラミガキ、砂粒少量混入、浅黄橙色	10 壺 内面ヘラミガキ、砂粒少量混入、に ぶい橙色	14 壺 砂粒混入、浅黄橙色
	12 壺 縄文、砂粒混入、丹彩	18 甕 縄文
		19 甕 (d) 簾状文

137号住居跡 (第14図、図版8)

**位置** C地区住居群の北部に位置する(55-C34)。北に113号住居、東に160号住居と重複する。

**形状、規模、方位** やや胴の張った隅丸長方形を呈する。南東コーナー部は160号住居に切られて形状不明。規模は長軸4.7m、短軸3.9m。方位はN-46°-E。

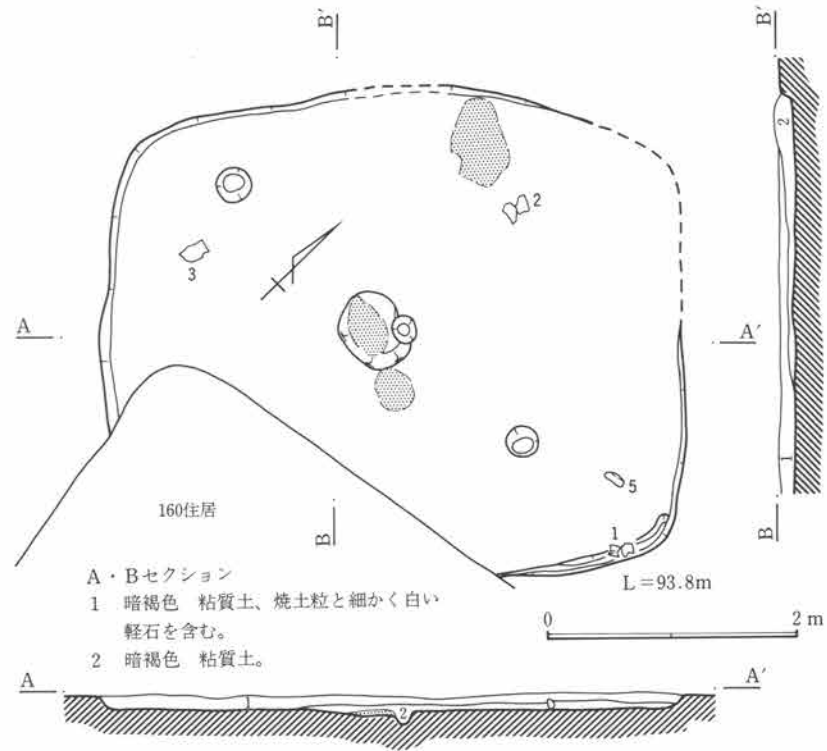
**周壁、壁溝** 周壁の遺存状態は比較的良くない。160号住居との重複部で高さ10cmを検出している。壁土は

暗褐色粘質土(第IV b層)。  
壁溝は東コーナー部で部分的に検出している。

**床面** 暗褐色粘質土。堅く踏み固められた面が認められなかった。

**柱穴** 主柱穴を2箇所検出している。主柱穴は共に径約25cm前後である。

**炉跡** 住居中央部に地床炉を設けている。炉跡は長径1.1m程の浅い窪みを造って、その底面は火床面となっている。この他、周壁際に焼土帯がある。この焼土帯も現位置で生じたものであるが、炉跡として認めるには場所的に問題がある。



第14図 137号住居

**遺物出土状態** 床面直上より弥生土器破片が多数出土している。大形破片は少ない。又土器のほかに磨製偏平片刃石斧が床面密着状態で出土している。

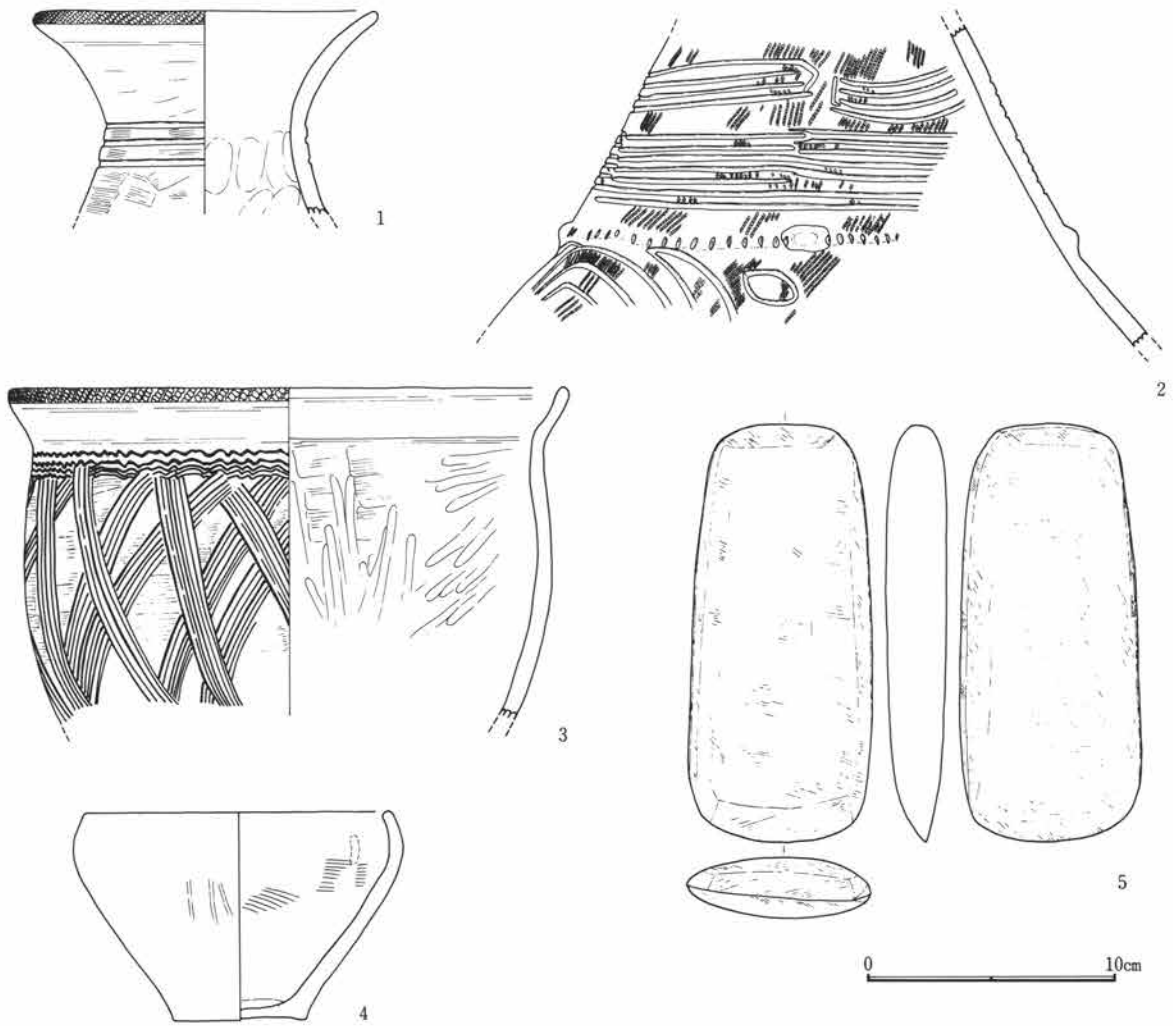
**時期** 弥生中期後半第1期

**他の遺構との関係** 南コーナー部で160号住居(弥生後期第1期)と重複する。床面は同レベル。北東部で113号住居(古墳前期)と重複する。床面レベル差は30cm、137号住居の方が低い。

第8表 137号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 13.3	口辺部は大きく外反する。	外面 口縁端部に縄文、口辺部はヨコナデ、頸部はハケメ3本の沈線、胴上部ハケメ。 内面 頸部は指ナデ。	中砂粒混入 堅緻 黄褐色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周
2	壺			外面 頸～胴上部縄文の上に棒状具による沈線文。頸下端部は微隆帯が巡り、帯上にはヘラによる刻み目、一周に推定4個の浮文を付す。	粗砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	頸～胴上位 $\frac{1}{2}$
3	甕	口 22.3	口縁部はやや内湾する。	外面 口縁端部はLR縄文、口辺部はヨコナデ、頸部は波状文、胴部は樺描斜格子文。 内面 口辺部はヨコナデ、頸部はハケメ後ヘラミガキ、胴上部はヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 赤黒色	口縁～胴上位 $\frac{1}{2}$ 周
4	鉢	口 12.4 底 5.4	口縁部は内湾する。	外面 体部はヘラミガキ。 内面 ハケメ。	中砂粒混入 やや堅緻 浅黄橙色	体部 $\frac{1}{2}$

6 検出した遺構、遺物



第15図 137号住居出土遺物 (1)

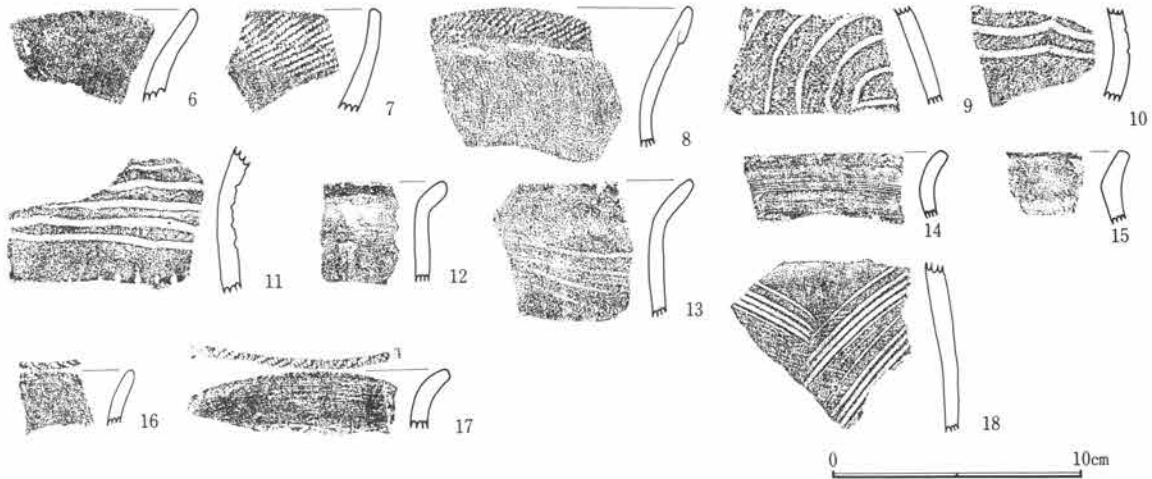
第9表 137号住居出土石器観察表

遺物番号	名称	計測値 (mm)	石質	重量(g)	特徴
5	磨製石斧	166.0×72.0×24.5	変はんれい岩	541.7	薄い仕上がりの完形品。刃は両刃であるが、片側からの角度が強い。

第10表 137号住居出土土器観察表 (拓本)

6 壺	内面ヨコナデ、砂粒混入、灰白色	10 壺	細砂粒混入、にぶい黄橙色	14 甕	(a)~(b)ヨコナデ、内面ナデ、砂粒混入、灰褐色
7 壺	内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい橙色	11 壺	(d)棒状沈線、ヘラ刻み、内面指オサエ	15 甕	砂粒混入 灰褐色
8 壺	内面ナデ、指オサエ、砂粒混入、灰褐色	12 甕	(b)ナデ、内面ヘラミガキ、砂粒混入、灰褐色	16 甕	(a)縄文、微砂粒混入、にぶい褐色
9 壺	(f)沈線同心円文、砂粒混入、灰褐色	13 甕	砂粒混入、灰褐色	17 甕	(a)縄文、砂粒混入、灰褐色
				18 甕	砂粒多量に混入、黒褐色





第16図 137号住居出土遺物 (2)

162号住居跡 (第17図、図版9)

位置 C地区住居群の中央部に位置する(64-C29)。187号、175号、167号住居と重複する。

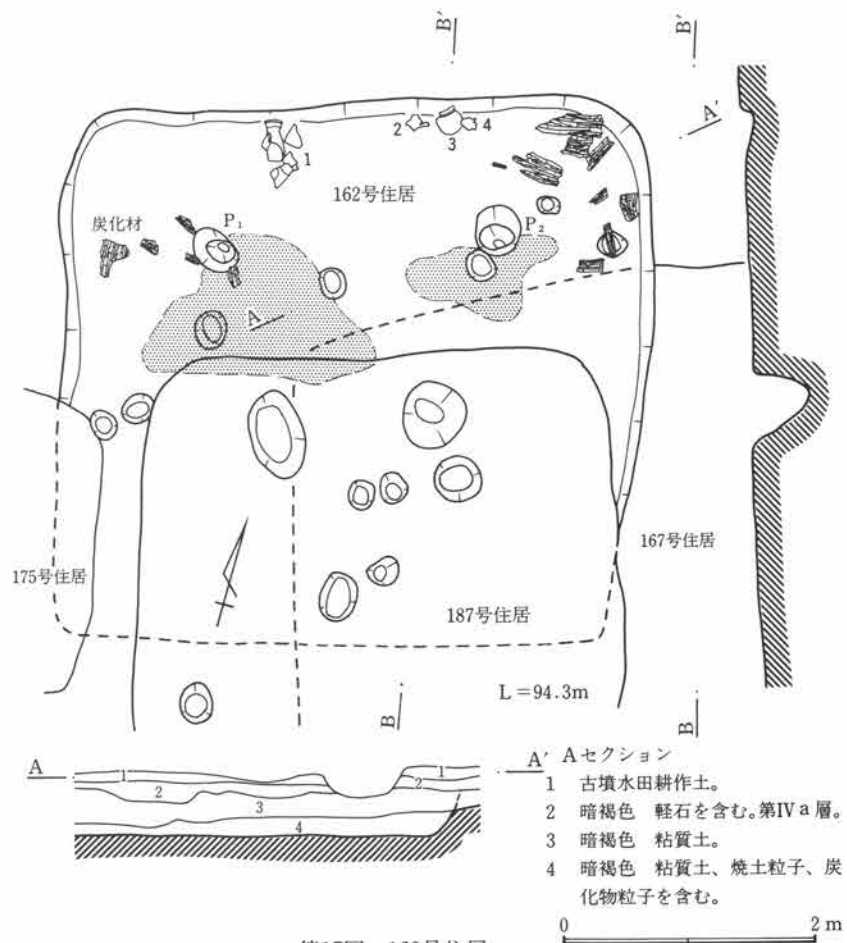
形状、規模、方位 隅丸長方形をなすと思われる。南辺部は187号住居との重複部では輪郭が把握できない。主柱穴の配置関係から形状を推定する。規模は、東西4.8m。方位はN-18°-W。

周壁、壁溝 周壁は、175号、187号住居との重複部以外では明確に検出する。検出できた壁高は20cm前後で、壁土は黄褐色ローム質土(第V層)。壁溝は確認できない。

床面 床面は黄褐色粘質土面を平坦に踏み固めている。床面上には焼土、炭化物の広がりが見られ、炭化材の散在が目立つ。火災に遭った可能性が高い。

柱穴 主柱穴は2箇所検出する。北側の2主柱穴は径約30cm、深さ60cm前後である。南部では本住居に伴うと考えられる主柱穴は検出できなかった。

炉跡 火災によると思われる焼土帯が住居内に大き



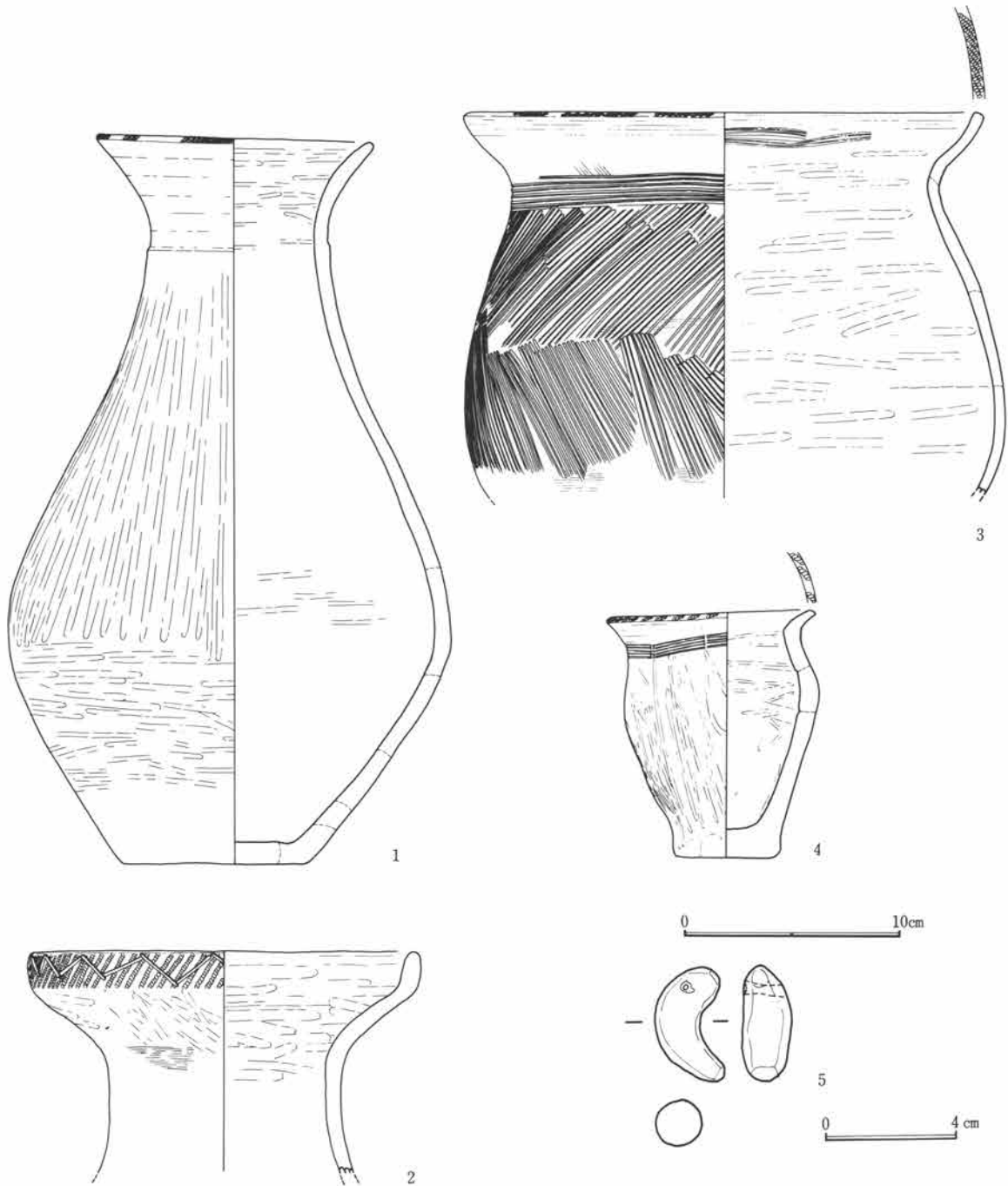
第17図 162号住居

く広がっているため炉跡の位置の特定は困難であった。

**遺物出土状態** 床面直上より多量の弥生土器大形破片が出土している。北周壁下ではほぼ完形の壺が横倒し状態で胴部が破碎した状態で認められた。又同じく周壁下に甕大形破片と重なるように小形甕の完形土器が出土している。

**時期** 弥生中期後半第1期

**他の遺構との関係** 東に167号住居（古墳前期）と、南に187号住居（弥生後期第3期）と、東南に175号住居（弥生中期後半）と重複する。175号住居との先後関係は不明。



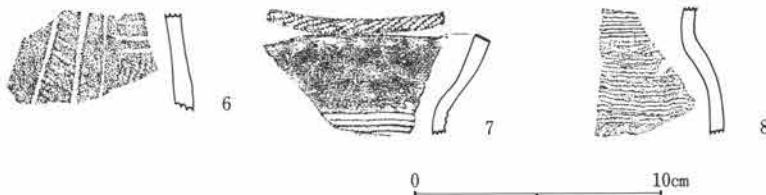
第18図 162号住居出土遺物 (1)

第11表 162号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 12.8 胴 20.2 底 8.4 高 22.8	器形は縦長で、頸部～口縁部にかけて外反する。	外面 口縁端部LR縄文、口辺部はヨコナデ、頸部に段を持つ、胴～底部はヘラミガキ。 内面 口辺部はヘラミガキ、頸～底部ヘラナデ。	細砂粒、黒色粒混入 堅緻 黄褐色	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 周、胴部一部欠損
2	壺	口 18.0	口辺部は強く外反する。口縁部は直状に立ち上る。	外面 口縁部は捺糸文に沈線鋸歯文、口辺部はヘラミガキ、頸部はヘラミガキ。 内面 口～頸部ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 淡褐色	口縁～頸部 $\frac{1}{3}$ 周
3	甕	口 24.2	口縁部はやや内湾する。	外面 口辺部はヨコナデ、ヘラミガキ、口縁端部縄文を施す。頸部は5本単位の櫛描直線文、胴部は斜行櫛描直線文。 内面 口縁部はヨコナデ、ヘラナデ、頸～胴部はヘラミガキ。	粗砂粒混入 堅緻 黒褐色	口縁～胴部 $\frac{3}{4}$ 周
4	小型甕	口 9.6 胴 9.0 底 4.9 高 11.4	口辺部は強く外反する。	外面 口縁端部縄文、口辺部はヨコナデ、頸部は←簾状文、胴～底部はヘラミガキ。 内面 口辺部はヨコナデ後、ヘラミガキ、胴～底部はヘラケズリ後ヘラミガキ。	細砂粒、黒、白色粒混入 堅緻 灰白色	口辺部 $\frac{1}{3}$ 欠損

第12表 162号住居出土土玉類観察表

遺物番号	名称	長さ (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	成形	整形	材質	遺存状態備考
5	勾玉	3.5	1.4	0.2	胴部断面は丸い、尾部は細まる。	全体的にヘラミガキ	土	完形



第19図 162号住居出土遺物 (2)

第13表 162号住居出土土器観察表 (拓本)

6 壺 砂粒混入、灰白色	7 甕 内面(b)ヨコナデ(d)ヘラミガキ、砂粒混入、灰黄褐色	8 甕 中砂粒混入、褐灰色
--------------	---------------------------------	---------------

## 173号住居跡 (第20図、図版10)

**位置** C地区住居群の中央部やや北寄りに位置する(54-C28)。151号、160号、164号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 隅丸長方形を呈する。他住居との重複部では住居の輪郭は不明確である。規模は長軸5.1m、短軸4.0mを測る。方位はN-0°。

**周壁、壁溝** 北東コーナー部及び西南コーナー部を検出する。検出した壁高は北辺で約10cm。壁土の上部は暗褐色粘質土(第IVb層)である。壁溝は認められない。

6 検出した遺構、遺物

**床面** 床面は黄褐色ローム質土（第V層）面を平坦に踏み固めている。南部支柱穴間に炭化物、黒色灰の広がりが見られる。

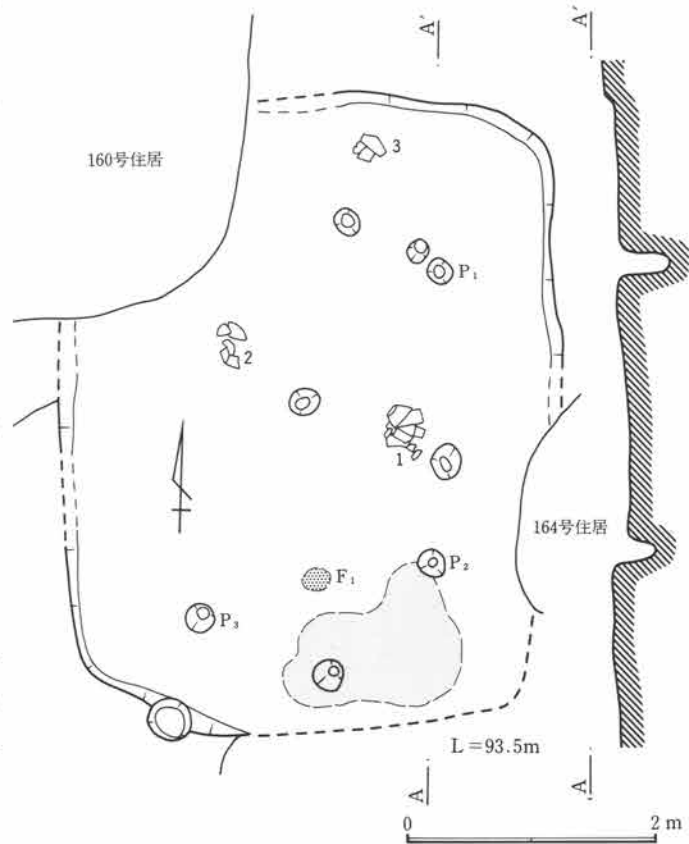
**柱穴** 支柱穴は明確ではない。住居内に円形のピットが多数検出される。このうち支柱穴としての可能性が高いのはP1、P2である。P3は位置がやや南へずれるが支柱穴の可能性はある。他のピットは位置関係において支柱穴とするには不適當と思われる。

**炉跡** 床面上、数箇所に焼土帯が見られる。炭化物の広がりもあって、本住居は火災に遭ったと思われる。南支柱穴間の焼土帯（F1）は地床炉の可能性はある。

**遺物出土状態** 床面直上より弥生土器の大形破片が数個体分出土している。その他磨製石鏃1点が覆土中より出土している。

**時期** 弥生中期後半第1期

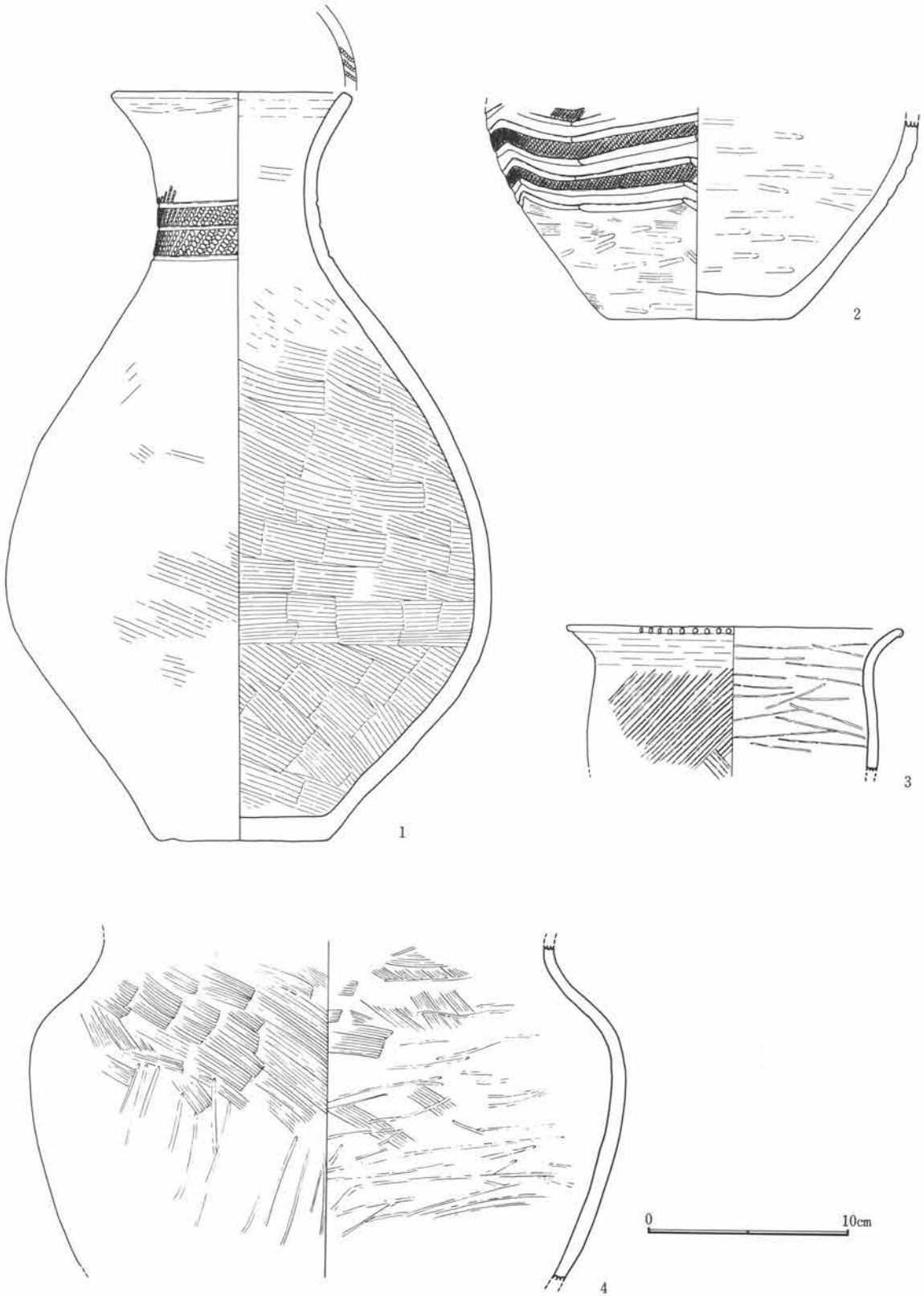
**他の遺構との関係** 北西コーナー一部で160号住居（弥生後期第1期）、東辺部で151号住居（古墳前期）と部分的に重複する。



第20図 173号住居

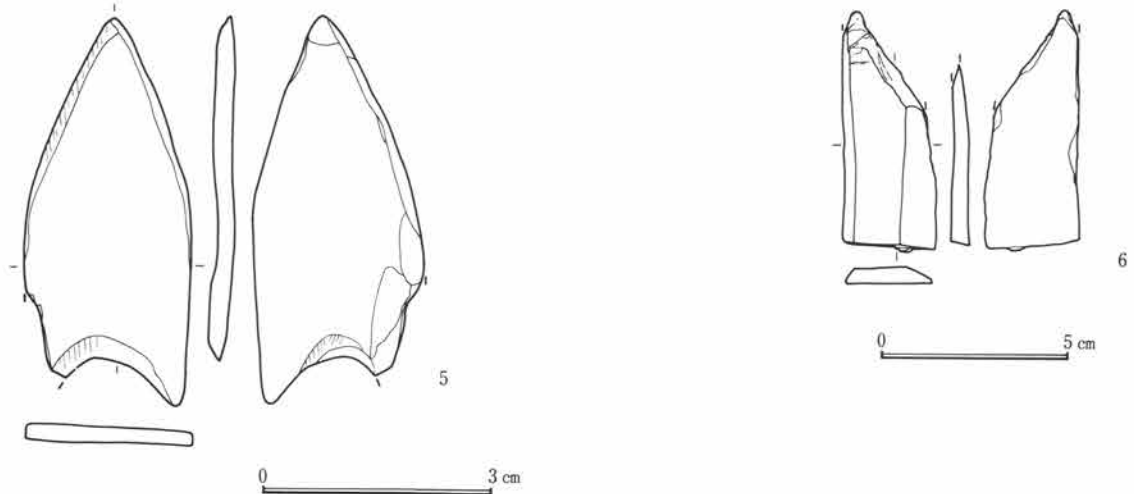
第14表 173号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 12.0 胴 24.3 底 8.5 高 36.8	口辺部は短く外反する。	外面 口縁端部にLR縄文、口辺部はヨコナデ、頸部は3本沈線、地文にLR縄文、胴部はハケメ後、ヘラミガキ。 内面 口辺部はヨコナデ、頸部はハケメ後、ヘラナデ。	細砂粒、白色粒混入 堅緻 淡褐色	口縁 $\frac{1}{2}$ 欠損
2	壺	底 9.2		外面 胴下部は沈線区画すり消し縄文、底部はヘラミガキ。 内面 胴～底面はヘラミガキ。	中砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	胴～底部
3	甕	口 16.8	口縁部は短く外反する。	外面 口縁部はヨコナデ、口縁端部は太めの丸棒状具による押圧痕文、胴部櫛描斜行直線文。 内面 全面に丁寧なヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 褐色	口縁～胴中位 $\frac{1}{4}$ 周
4	甕	胴 29.8		外面 頸部はハケメ、胴中位はヘラミガキ。 内面 ハケメ後ヘラミガキ。	粗砂粒混入 やや堅緻 にぶい橙色	頸～胴部 $\frac{1}{2}$



第21図 173号住居出土遺物 (1)

6 検出した遺構、遺物



第22図 173号住居出土遺物 (2)

第15表 173号住居出土石器観察表

遺物番号	名称	計測値 (mm)	石質	重量 (g)	特徴
5	磨製石鎌	51.5×22.0×2.5	珪質準片岩	4.6	無茎で扁平に磨きあげたもの。周縁に平行して稜がみられる。平面形は中央部で肩をもち基部で若干外反する。基部にわたくりがはいる。一脚が欠けている。
6	不明	61.8×25.0×5.0	珪質準片岩	11.2	磨製石鎌と同じ素材で一辺の頂部側縁部に剥離調整痕がみえる。石鎌の未製品とも考えられる。

175号住居跡 (第23図、図版10)

**位置** C地区中央部やや西寄りに位置する(65-C29)。162号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。西南部の輪郭は不明瞭である。規模は長軸3.6m、短軸2.5mを測る。方位はN-78°-E。

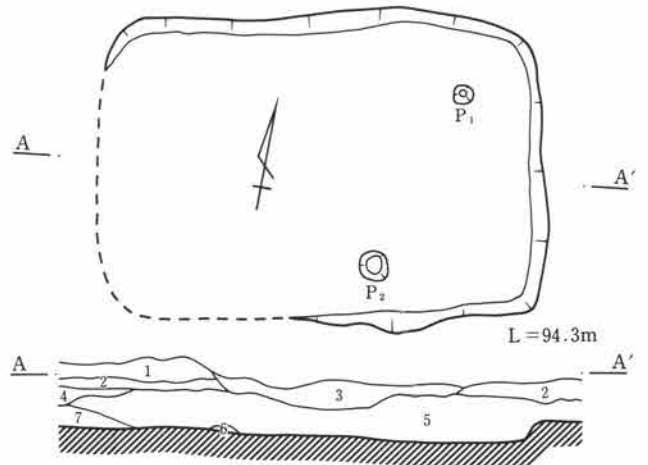
**周壁、壁溝** 周壁は南西部で一部欠損している箇所の他は良好に検出される。東辺で検出できた壁高は15~20cmである。壁溝は認められない。

**床面** 床面は平坦に踏み固めている。

**柱穴** 主柱穴は不明確。住居内にピットを検出するが位置的に主柱穴と認めるには不適當と思われる。ピットの深さはP1は18cm、P2は8cm。

**炉跡** 不明。検出できない。

**遺物出土状態** 床面直上より弥生土器破片



Aセクション

- |                           |                         |
|---------------------------|-------------------------|
| 1 黒色 浅間C軽石混入、水田耕土。        | 5 黒色 粘質土、軽石、炭化物を少量混入する。 |
| 2 黒褐色 浅間C軽石を含む。           | 6 暗褐色 シルト層。             |
| 3 FA(二ツ岳火山灰)混土層、奈良住居の掘り方。 | 7 暗褐色 軽石は含まず、土器、焼土を含む。  |
| 4 黒色 粘質土。                 |                         |

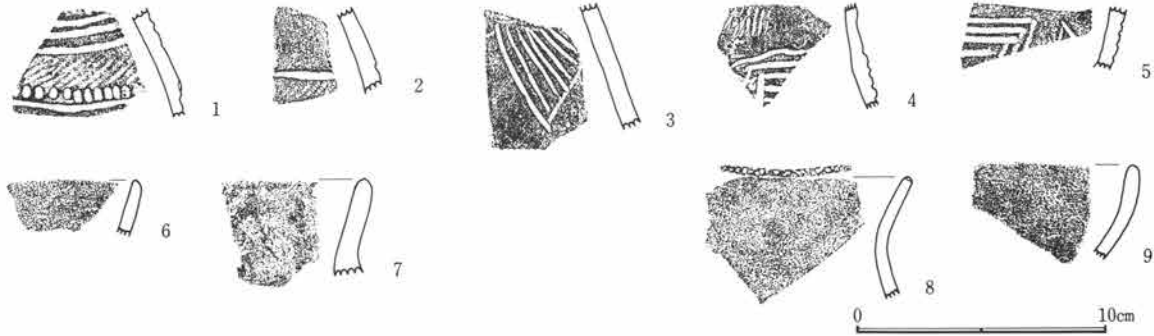
0 2m

第23図 175号住居

数点出土。

**時期** 弥生中期後半第1期

**他の遺構との関係** 東辺部で162号住居（弥生中期後半）と重複する。床面レベル差は25cm本住居の方が低い。先後関係は不明確。



第24図 175号住居出土遺物

第16表 175号住居出土土器観察表（拓本）

1 壺 砂粒混入、にぶい橙色	4 壺 外面沈線、ヘラ刺突、内面ナデ、砂粒混入、黒色	8 甕 (a)細かい刻み目、粗砂粒混入、にぶい赤褐色
2 壺 内面ナデ、砂粒混入、褐灰色	5 壺 砂粒混入、灰白色	9 高坏 内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい橙色、内外面丹彩
3 壺 鋸歯文、中砂粒混入、外面橙色、内面灰色	6 甕 砂粒混入、にぶい橙色	

288号住居跡（第25図、図版11）

**位置** C地区住居群の西端部に位置する（97-C30）。286号住居、301号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。規模は長軸5.3m、短軸4.7mを測る。方位はN-73°-W。

**周壁、壁溝** 周壁は286号住居により失われている部分の他は全体的に良好に検出する。検出できた壁高は東周壁部で約30cm。壁溝は全周する。幅は5～10cm。

**床面** 床面は、堅く平坦に踏み固められた面を検出する。

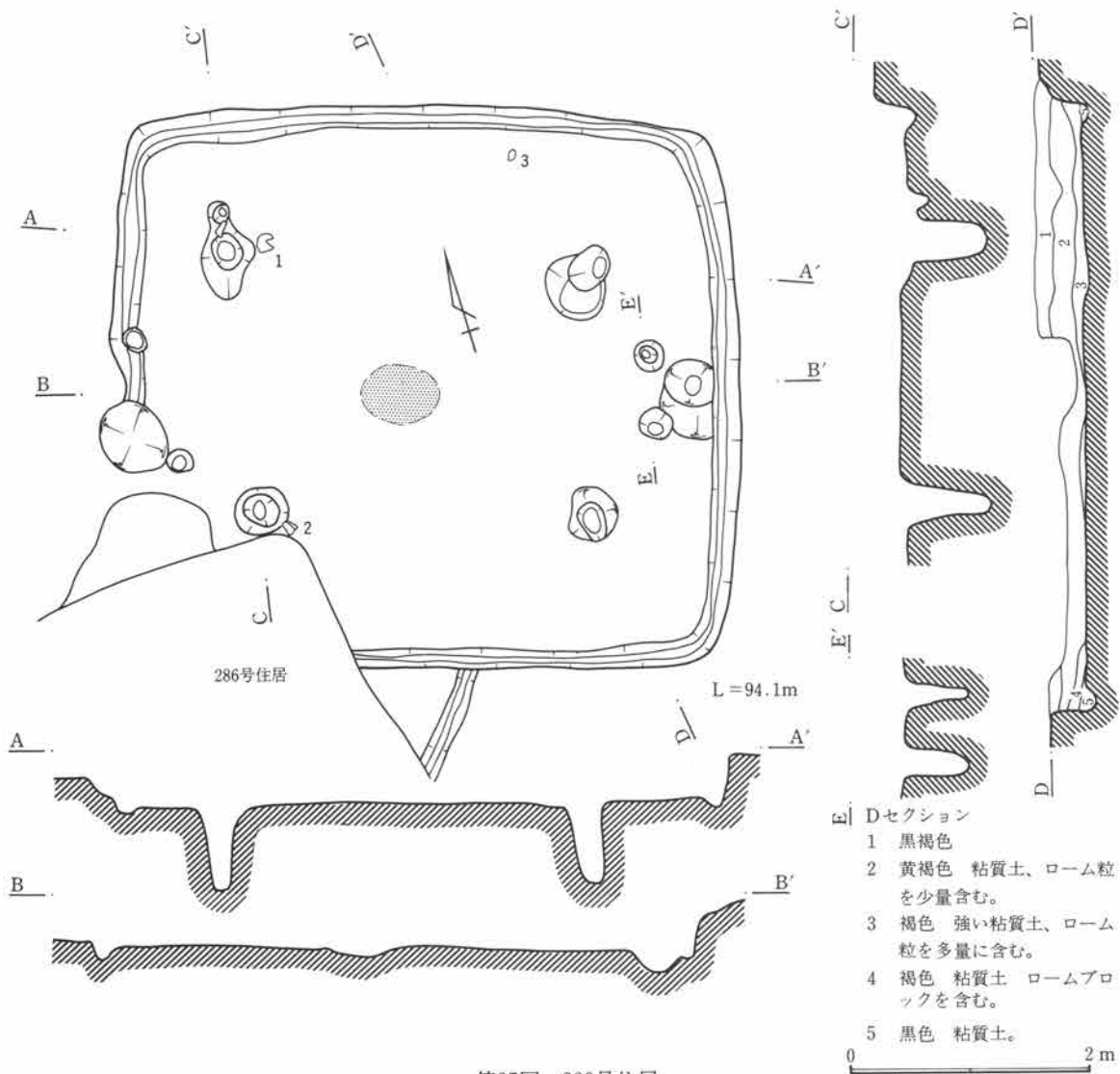
**柱穴** 支柱穴を4箇所検出する。4支柱穴の上端は径40～50cmで大きく広がっている。ピットの中位部にやや弱い段を造って細まる。径は20～30cm、深さは一様に70cm前後である。東南辺周壁際には一対のピットが見られる。ピットは径25cm前後、深さは約50cmである。

**炉跡** 住居中央部に地床炉を設けている。長径40cmの範囲が火床面であり、焼土化している。

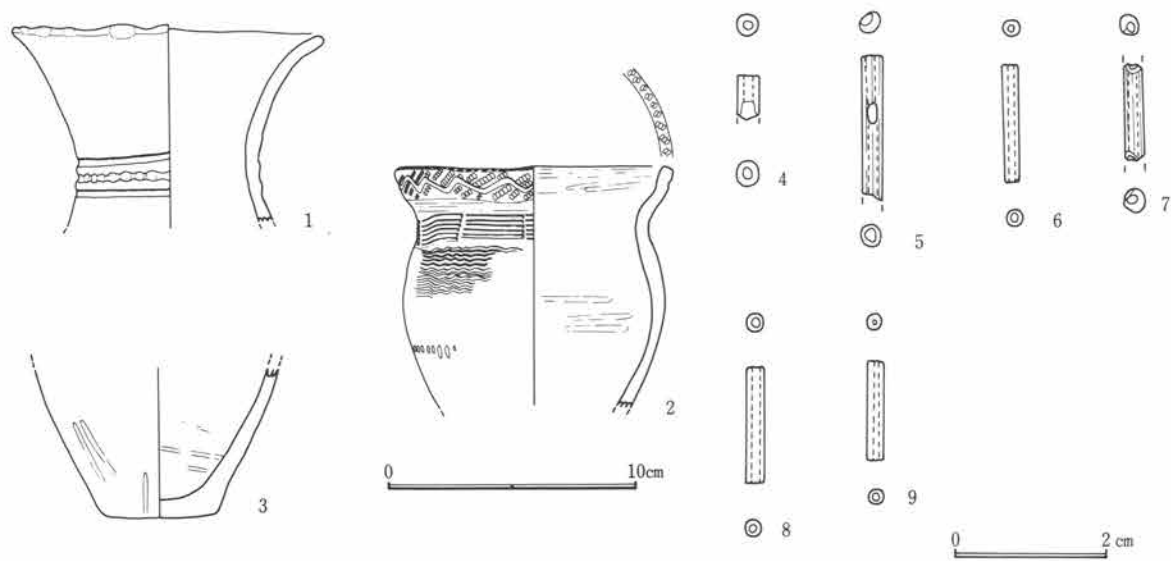
**遺物出土状態** 床面直上より弥生土器の大形破片の他、数片の小破片が出土している。土器の他には、石製の管玉が6個床面直上から出土している。

**時期** 弥生中期後半第1期

**他の遺構との関係** 286号住居（弥生後期第3期）と重複する。



第25図 288号住居



第26図 288号住居出土遺物 (1)

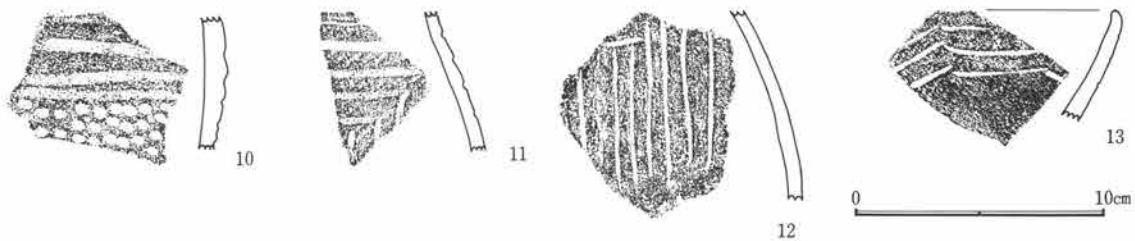


第17表 288号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 12.4	口辺部は大きく外反する。	外面 口縁部は押圧文、頸部は3本沈線、中段の沈線は押し引き状に施される。 内面 口縁部はヨコナデ、胴部はヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にふい赤褐色	口縁～頸部 $\frac{2}{3}$ 周、内面は荒れている。
2	甕	口 11.2 胴 10.6	受け口状口縁	外面 口縁端部LR縄文、口縁部波状沈線文、LR縄文、口辺部はヨコナデ、頸部は等間隔止めへら状文、胴下部にへら状工具による刺突。 内面 口縁部はヨコナデ後、ヘラミガキ、胴部はヘラミガキ。	細砂粒混入 やや堅緻 にふい赤褐色	口縁～胴下位 $\frac{1}{2}$ 周
3	壺	底 4.7		外面 ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒、黒色粒混入 堅緻 にふい黄褐色	底部

第18表 288号住居出土玉類観察表

遺物番号	名称	長さ (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	成形	整形	材質色	遺存状態備考
4	管玉	—	0.32	0.1	円柱状に整っている。	滑沢に研磨している。	石 暗緑色	完形
5	管玉	—	0.24	0.1	研磨面は縦方向に稜線を作り、多角柱状を呈する。	滑沢に研磨している。	石 オリーブ 灰色	$\frac{1}{2}$ 欠失
6	管玉	1.5	0.22	0.1	端面切断面は端正。円柱状に磨かれている。	滑沢に研磨している。	石 暗赤色	完形
7	管玉	—	0.24	0.1	研磨面は縦方向に稜線を作り、多角柱状を呈する。	滑沢に研磨している。	石 暗緑灰色	$\frac{1}{2}$ 欠失
8	管玉	1.5	0.26	0.1	研磨面は縦方向に稜線を作り、多角柱状を呈する。	滑沢に研磨している。	石 暗赤色	完形
9	管玉	1.3	0.22	0.1	研磨面は縦方向に稜線を作り多角柱状を呈する。	滑沢に研磨している。	石 オリーブ 灰色	完形



第27図 288号住居出土遺物 (2)

第19表 288号住居出土土器観察表 (拓本)

10 壺 中砂粒混入、にふい橙色、刺穴文。	12 甕 内面ヘラミガキ、中砂粒混入、明灰褐色	13 鉢 細砂粒混入、淡橙色、内外面丹彩。
11 壺 砂粒混入、にふい赤褐色、縄文地文。		

303号住居跡 (第28図)

**位置** C地区住居群の西部に位置する(81-C31)。296号、299号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 形状、規模は不明。他の住居との重複部では住居の輪郭は不明確。方位は、N-56°-E。

**周壁、壁溝** 西側周壁のみ検出する。検出した周壁の高さは約10cm。壁溝は検出できない。

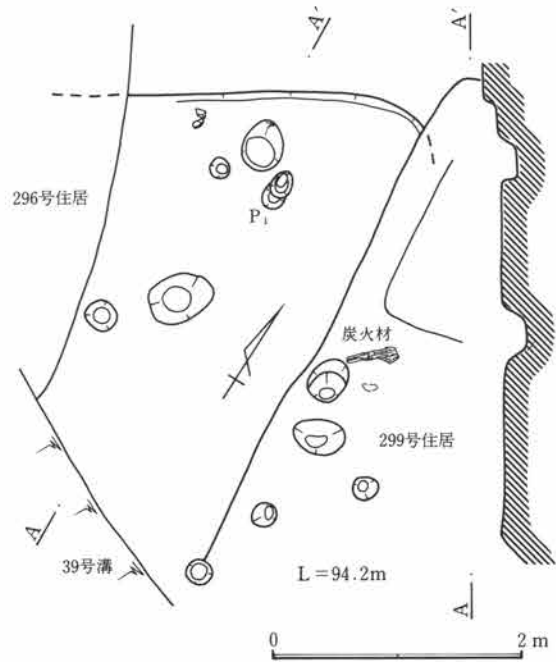
**柱穴** 主柱穴は不明。住居内にピットを多数検出するがいずれが柱穴であったか不明。P1が主柱穴の可能性はある。

**炉跡** 不明確。検出できない。

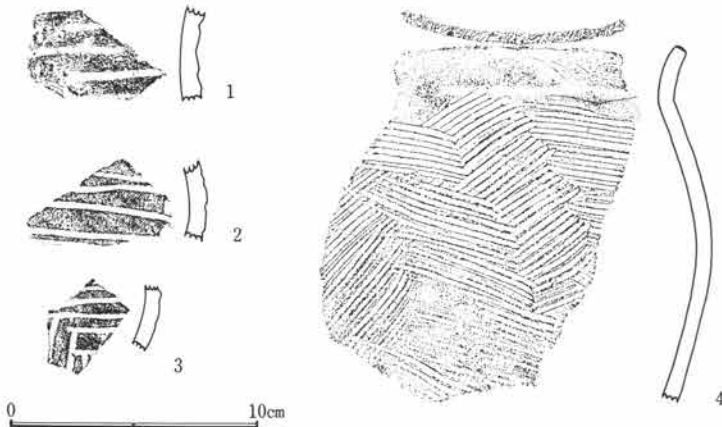
**遺物出土状態** 床面直上より、弥生土器破片が多数出土している。

**時期** 弥生中期後半第1期

**他の遺構との関係** 296号住居(古墳前期)、299号住居(弥生後期第3期か)と重複する。



第28図 303号住居



第29図 303号住居出土遺物

第20表 303号住居出土土器観察表 (拓本)

1	壺 (d)沈線、中砂粒混入、にぶい橙色
2	壺 (f)沈線、微砂粒混入、にぶい赤褐色
3	壺 (f)沈線重山形文、砂粒混入、明赤褐色
4	甕 口縁端部縄文、細粒混入、橙色

(2) 弥生時代後期の住居跡

72号住居跡 (第30図)

**位置** C地区住居群の西部に位置する(67-C42)。重複、隣接遺構は北に98号住居、南に70号住居がある。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。西辺南半部から南辺部にかけては70号住居跡との重複部であるため輪郭は把握できない。規模は、長軸方向の長さは正確に測定できないが主柱穴の配置を参考にするならば5.2m前後と推定される。短軸は4.1mを測る。方位はN-8°-W。

**周壁、壁溝** 周壁は西北コーナー部及び北東コーナー部から東辺にかけて検出された。確認できた壁の高

さは10cm。壁土は黄褐色ローム質土(第V層)である。壁溝は確認できない。

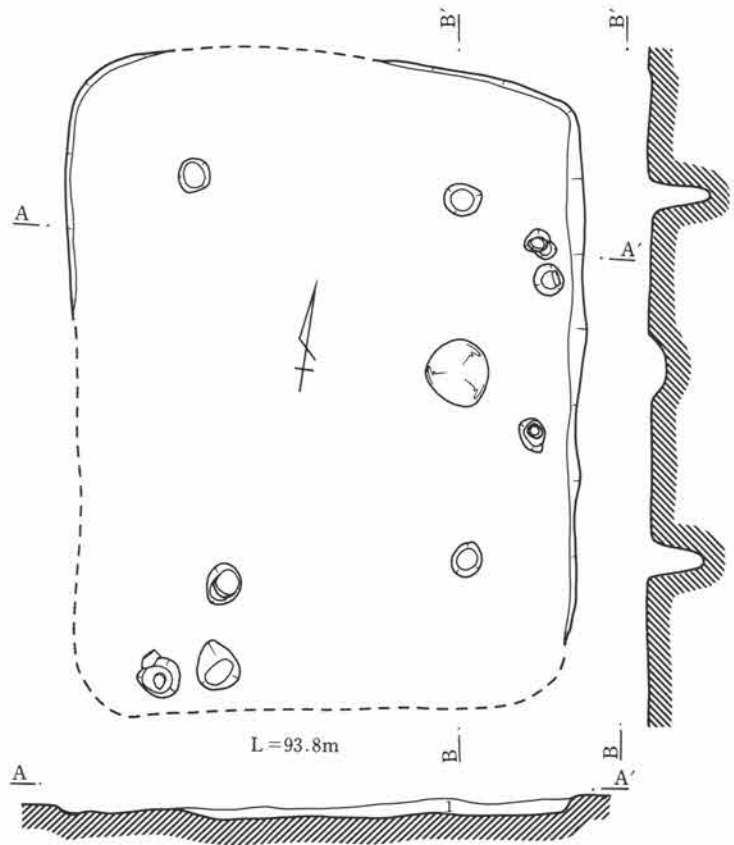
**柱穴** 支柱穴を4箇所で見出し。支柱は4本構造。4柱穴の規模は各々がほぼ同じで、径30cm前後、深さ50cm前後の円形ピットである。

**炉跡** 不明確。検出することができなかった。

**遺物出土状態** 床面直上より壺、甕、台付甕など弥生後期の土器破片が多数出土している。

**時期** 弥生後期第3期

**他の遺構との関係** 南側で70号住居(古墳前期)と大きく重複。北部で98号住居(古墳前期)と部分的に重複する。



Aセクション

1 茶褐色 弱粘質土、浅間C軽石混入、焼土、炭化物を若干含む。

0 2m

第30図 72号住居



第31図 72号住居出土遺物

第21表 72号住居出土土器観察表(拓本)

1 壺 砂粒多量に混入、橙色	3 甕 砂粒少量混入、にぶい褐色	4 台付甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、褐灰色
2 壺 細砂粒混入、浅黄橙色		

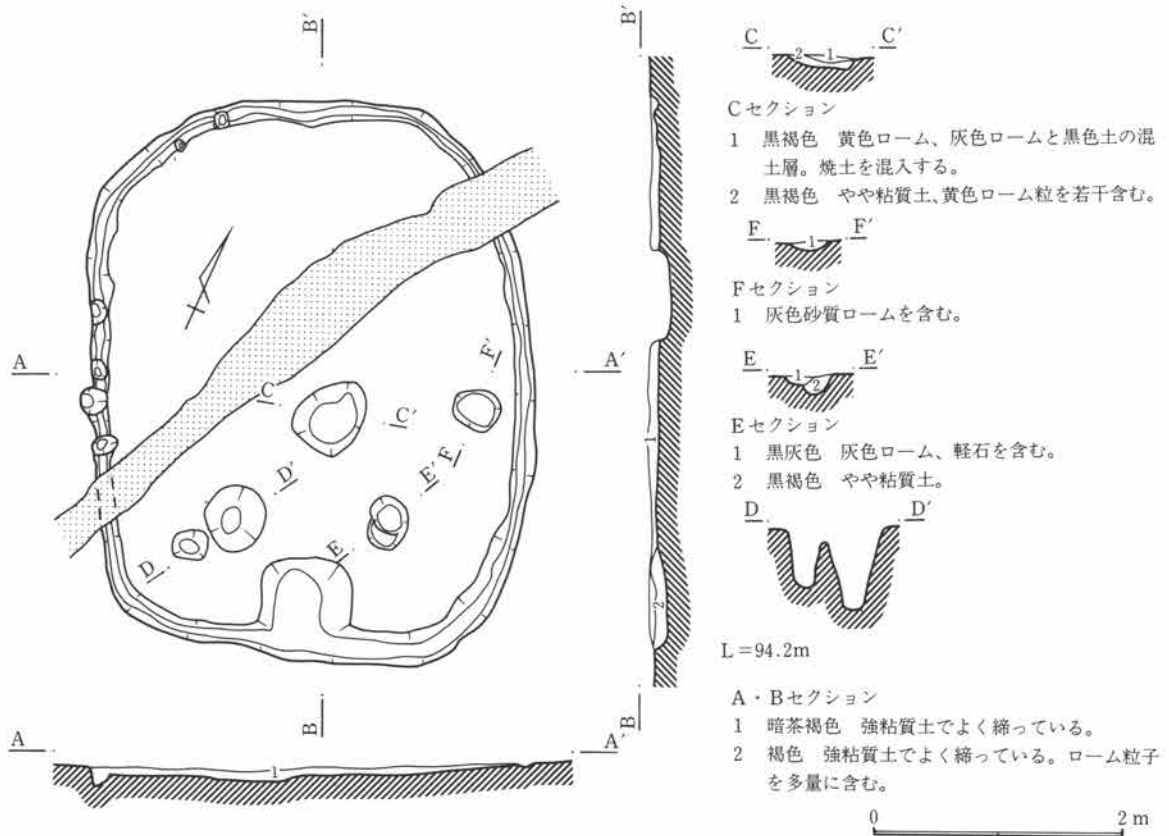
74号住居跡 (第32図、図版11)

**位置** C地区住居群の西北端に位置する(64-C46)。近隣遺構は東に1号周溝墓、南に98号住居がある。

**形状、規模、方位** 著しく隅の丸い長方形を呈する。規模は、長軸4.5m、短軸3.5mを測る。方位はN-24°-W。

**周壁、壁溝** 確認できた周壁の高さは西辺で15cm、東辺では周壁の検出は無い。壁溝は全周する。幅は20cm前後、深さ5~7cm。

**柱穴** 南側の2支柱穴を検出する。柱穴の規模は東南側が径30cm、深さ15cm、西南側が径50cm、深さ70cm



第32図 74号住居

を測る。

**床面** 黄褐色ローム質土（第V層）。

**炉跡** 不明確、確認することができない。

**遺物出土状態** 壁溝中、床面上より弥生土器破片10数点出土。

**時期** 弥生後期

**他の遺構との関係** 住居中央部に後世の溝が北東-東南に本住居を切っている。住居中央部に長径70cmの円形のピットが見られるが本住居に伴うかどうかは不明。

#### 84号住居跡（第33図、図版12）

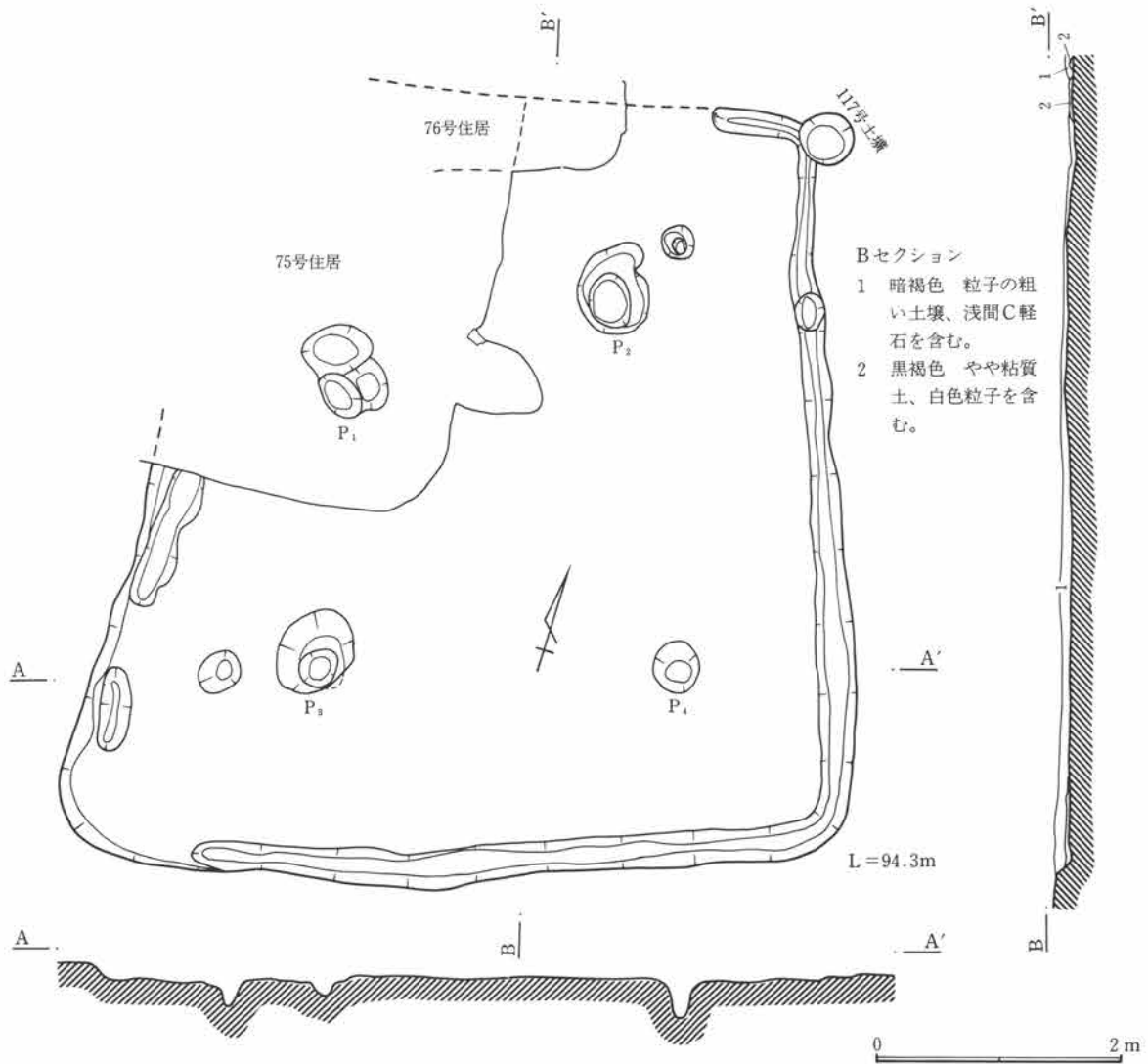
**位置** C地区住居群の西端部に位置する(70-C44)。東南に70号住居が重複し、西に95号住居が重複している。

**形状、規模、方位** やや台形に歪んだ方形を呈する。規模は長軸6.4m、短軸6.3mを測る。西北部は75号、76号住居（共に奈良・平安期）との重複により明確に把握できない。方位はN-22°-W。

**周壁、壁溝** 周壁は遺存状態が悪く、西辺部で5cm程の高さで認められるのみである。本住居跡の周囲は第III層（二ツ岳火山噴出物）、第IV層（黒褐色粘質土）の残存が悪い。周溝は西南コーナー一部で部分的に途切れるがほぼ全周するものと思われる。幅30cm前後。

**床面** 床面は黄褐色ローム質土（第V層）の面で、比較的凹凸が目立つ。

**柱穴** 支柱穴を4箇所良好に検出する（P1～P4）。西北部（P1）の支柱穴の位置はやや内側に入り



第33図 84号住居

込んでいるが、この支柱穴の配置は西北部の住居の輪郭線と対応している。支柱穴は全般に単純な形状を示さず、不整形である。西北部ではそれぞれ径30～45cmのピットが寄り集まった状態で見られる。4箇所の支柱穴の深さは10～35cmで全体に浅い。

**炉跡** 不明、検出できなかった。

**遺物出土状態** 床面直上より弥生土器破片が10数点出土している。古式土師器も数点見られる。

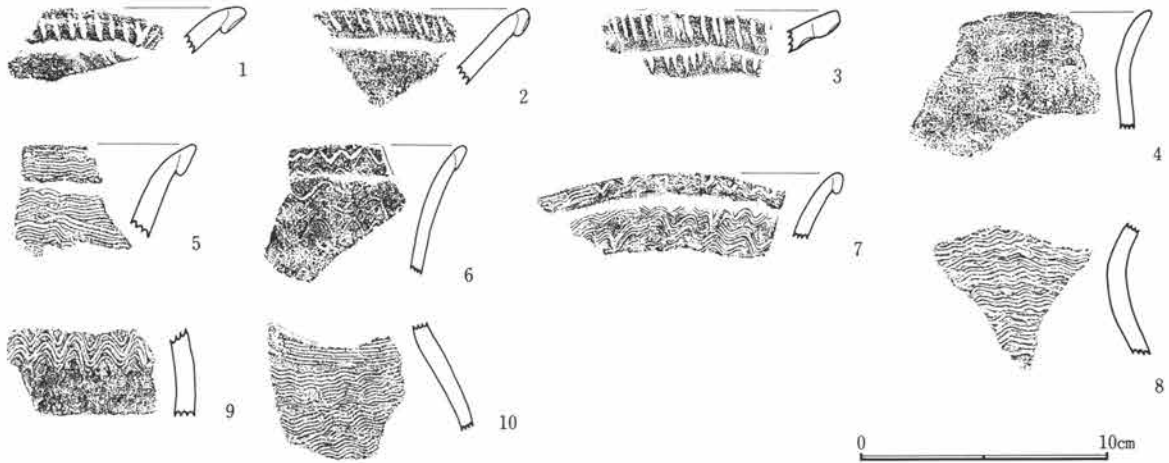
**時期** 弥生後期～古墳前期

**他の遺構との関係** 東南コーナー部で70号住居（古墳前期）と重複する。両住居の先後関係は不明確。

第22表 84号住居出土土器観察表（拓本）

1 壺 砂粒混入、にぶい黄褐色	5 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい黄褐色	8 甕 内面ヘラミガキ、砂粒多量に混入、灰褐色
2 壺 砂粒多量に混入、橙色	6 甕 砂粒少量混入、灰褐色	9 甕 内面ヘラミガキ、砂粒多量に混入、にぶい黄褐色
3 壺 砂粒混入、橙色	7 甕 内面ヘラミガキ、砂粒少量混入、にぶい褐色	10 甕 砂粒少量混入、灰黄褐色
4 甕 内面ハケメ、粗砂粒混入、にぶい褐色		

6 検出した遺構、遺物



第34図 84号住居出土遺物

97号住居跡 (第36図、図版13)

**位置** C地区住居群の西部に位置する(67-C39)。東部で99号住居と、西南部で101号住居と大きく重なっている。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。南コーナー付近は101号住居との重複部であり、輪郭は不明瞭。規模は、長軸6.4m、短軸4.5mを測る。方位はN-47°-W。

**周壁、壁溝** 確認できる周壁の高さは西北部で15cm前後、壁土は黄褐色ローム質土(第V層)。壁溝は確認できない。

**床面** 床面は黄褐色ローム質土を掘り込んだ面であり、やや堅く踏み固め、部分的にローム質土と黒色土の混土を張り床状に構築している。

**柱穴** 支柱穴を4箇所で見出ししている(P1~P4)。本住居の支柱は4本構造である。支柱穴の形状は整っており、比較的規模が大きい。西北(奥側)の2支柱穴(P1、P2)は共に上部がすり鉢状に広がっている。上端径は共に60cm程である。4支柱穴の深さはほぼ同様に、40~50cmである。

**炉跡** 奥側の2支柱穴間やや外側に、地床炉を設けている。炉跡は径50cm程の浅い窪みになっており、炉床面は赤褐色に焼けている。

**時期** 弥生後期第3期

**遺物出土状態** 床面直上部分では殆ど遺物は出土していない。

**他の遺構との関係** 101号住居(弥生後期第3期)とは床面の高さが同じ位置であり、両住居の先後関係の把握は困難をともなったが土層の堆積状況から判断するなら、97号住居が101号住居より古いと思われる。



第35図 97号住居出土遺物



第36図 97号、101号住居

第23表 97号住居出土土器観察表 (拓本)

1 壺 内面ヘラミガキ、砂粒混入、明褐色	3 壺 内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい 橙色	5 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい 橙色
2 壺 内面ヘラミガキ、微砂粒混入、にぶ い橙色	4 小型甕 砂粒少量混入、明赤褐色	6 台付甕 内面ヘラミガキ、細砂粒混入、 明赤褐色

101号住居跡 (第36図、図版12、13)

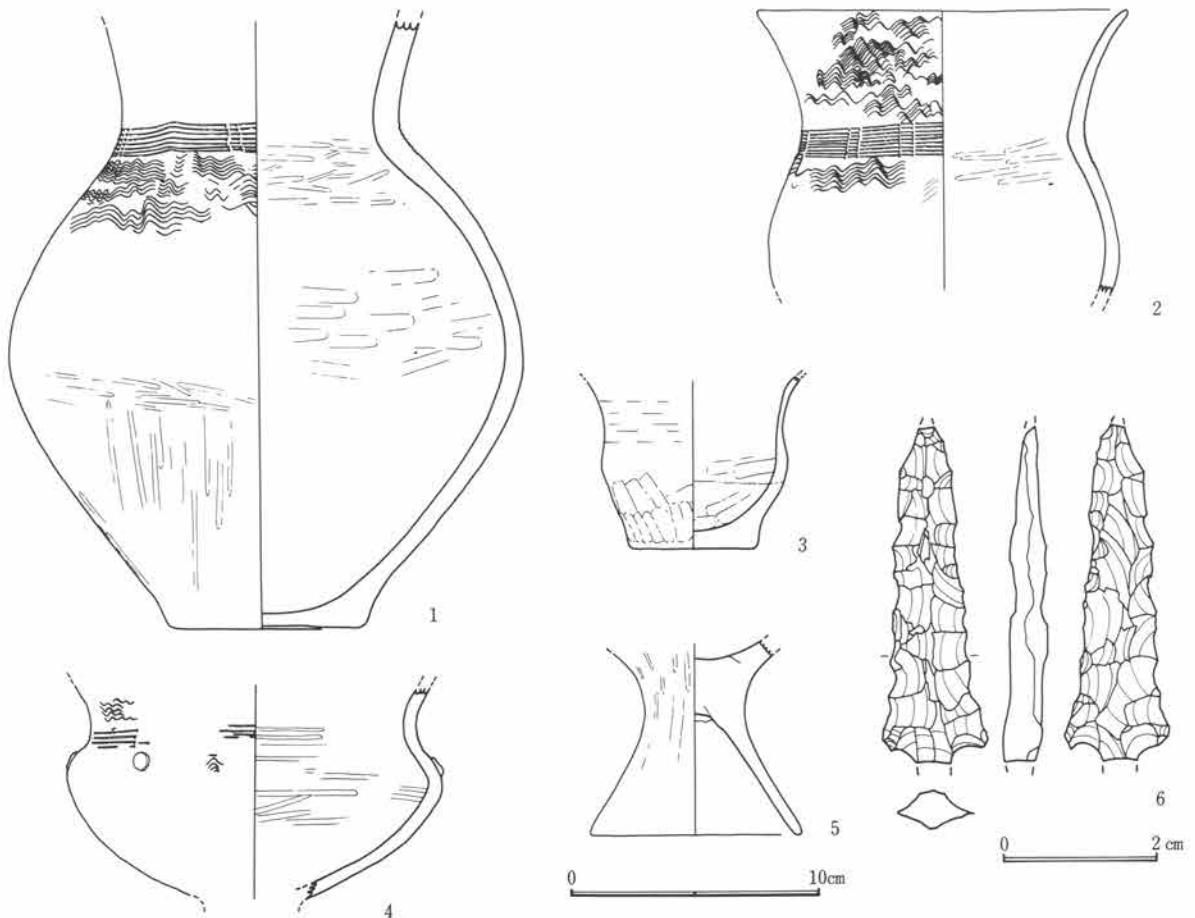
**位置** C地区住居群の中央部に位置する(68-C38)。北部の大半部は97号、99号住居と重複している。南は2号周溝墓と南コーナー部の一部分が重複している。

**形状、規模、方位** 形状は長方形。西北部の輪郭は97号住居との重複により不明確。規模は長軸(西南-北東)5.7m前後、短軸5.0mを測る。方位はN-51°-E。

**周壁、周溝** 周壁の高さは15cm。西北側の周壁の北半部及び北東側周壁は97号住居との重複部であるため検出できなかった。壁溝は認められない。

**床面** 第V層灰褐色ローム質土の面で、比較的凹凸が目立つ。

**柱穴** 主柱は4本構造。主柱穴を4箇所で見出す(P5~P8)。主柱穴以外の柱穴では出入口に3個の柱穴と思われるピットが周壁際に検出されるが、これらのピットは出入口に伴う施設に関わるピット



第37図 101号住居出土遺物 (1)



と思われる。

炉跡 不明確。炉跡は明確に検出することはできなかった。

遺物出土状態 床面上より弥生土器破片が多数出土している。

時期 弥生後期第3期

他の遺構との関係 97号住居との先後関係については97号、101号住居の両者の床面レベルが同じであり、また、両住居の重複部の土層堆積状況からも明確な現れも認められなかったため確認できなかった。出土遺物については両住居とも弥生後期第3期のものである。

第24表 101号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	底 8.0		外面 口辺部はヘラミガキ、頸部は7本単位3連止め←簾状文、胴上部←波状文、胴～底部はヘラミガキ。 内面 口辺～胴部はヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 淡褐色	口辺 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{1}{4}$ 欠損
2	甕	口 15.0	口辺部は緩やかに外反する。	外面 口辺部は波状文、頸部は2連止め←簾状文、胴上部は波状文。 内面 胴上部はヘラミガキ、器面が荒れている。	中砂粒混入 やや堅緻 にふい橙色	口縁～胴上位 $\frac{1}{4}$ 周
3	小型甕	胴底 7.4 5		外面 口辺部はヨコナデ、胴底部はヘラケズリ。 内面 胴部はヘラナデ、底部ヘラケズリ。	細砂粒混入 堅緻 にふい橙色	口縁部欠損
4	台付甕			外面 口辺部は波状文、頸部は2連止め←簾状文、胴上部に円形浮文を付す。推定8個。 内面 ヘラミガキ。	粗砂粒、黒色粒 混入 堅緻 黒褐色	頸～底部
5	台付甕	脚 8.5		外面 ヘラミガキ。 内面 底部は丁寧なヘラミガキ、脚部はナデ。	細砂粒多量に混入 やや軟弱 にふい橙色	脚台部

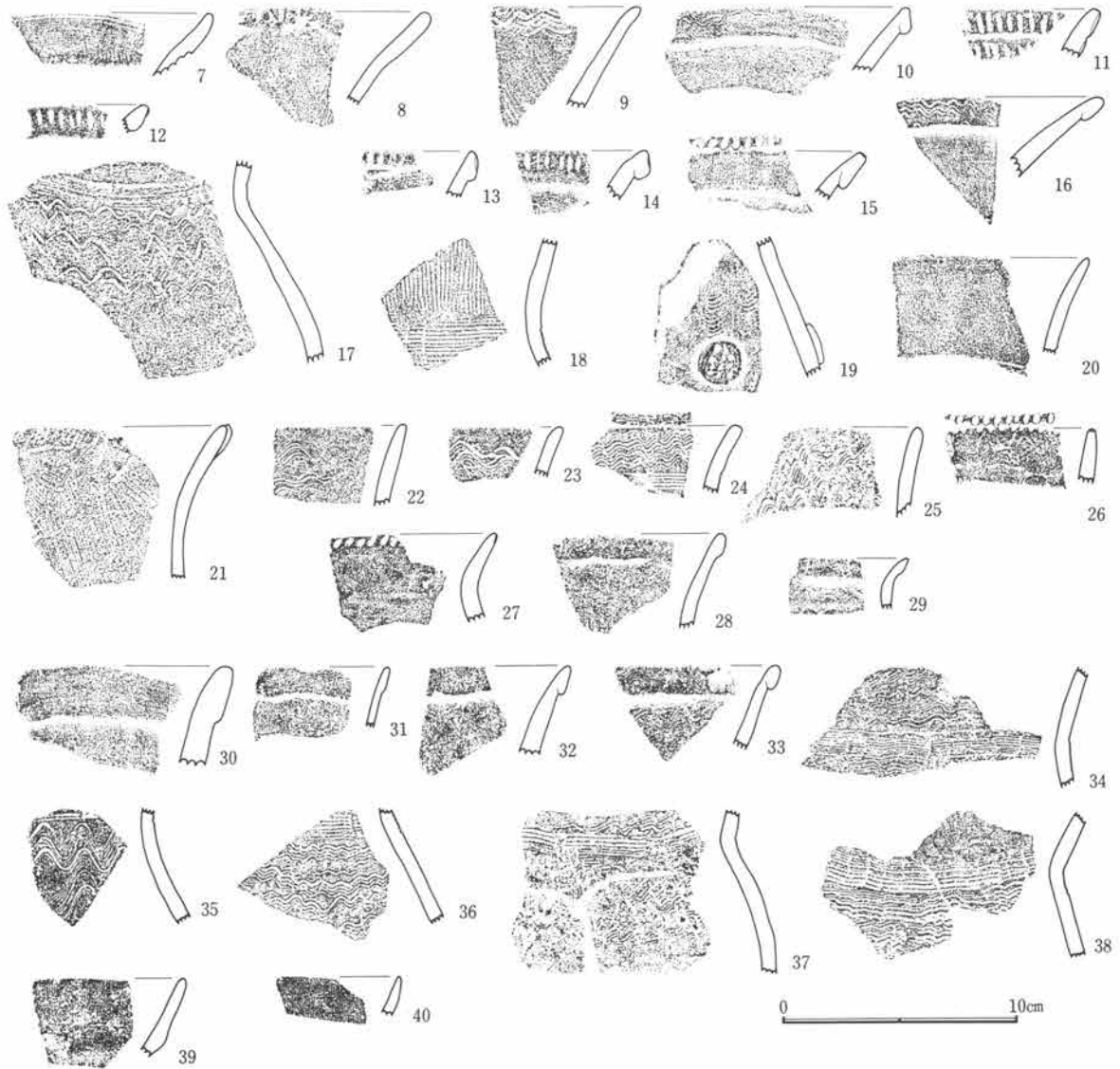
第25表 101号住居出土石器観察表

遺物番号	名称	計測値(mm)	石質	重量(g)	特徴
6	石槍	(43.9)×13.0×5.0	ひすい質? 石英	2.3	両面調整の石槍。全体に細身であるが、基部はやや広がる。有茎で、先端部と茎部を欠く。

第26表 101号住居出土土器観察表(拓本)

7 壺 内面(a～b)横ハケメ、砂粒混入、浅黄橙色	15 壺 (a)ヘラ刻み、(b)ヨコナデ、砂粒混入、浅黄橙色	20 甕 砂粒少量混入、にふい橙色
8 壺 粗砂小石混入、にふい橙色	16 壺 外面ヨコナデ、砂粒混入、浅黄橙色	21 甕 粗いハケメ、小石多量に混入、にふい褐色、外面荒れている
9 壺 外面(b)波状文、内面ヘラミガキ、砂粒混入、浅黄橙色	17 壺 内面ヘラミガキ、砂粒多量に混入、褐色	22 甕 内面横ハケメ、砂粒少量混入、にふい褐色
10 壺 砂粒多量に混入、にふい橙色	18 壺 外面(b)～(c)ハケメ、(d)2連止め簾状文、内面(c)～(a)ハケメ、砂粒混入、にふい橙色	23 甕 砂粒少量混入、褐灰色
11 壺 砂粒混入、にふい橙色	19 壺 外面(e)波状文、円形浮文、砂粒混入、にふい橙色	24 甕 (a)波状文、内面ヘラミガキ、砂粒少量混入、にふい褐色
12 壺 砂粒少量混入、にふい橙色		26 甕 (a)刻み目、砂粒混入、浅黄橙色
14 壺 内面(b～c)ヘラミガキ、砂粒少量混入、にふい橙色		27 甕 砂粒混入、浅黄橙色

28 甕 細砂粒混入、小礫を含む、にぶい橙色	32 甕 砂粒混入、橙色	36 甕 内面ヘラミガキ、微砂粒混入、にぶい橙色
29 甕 細砂粒混入、褐灰色	33 甕 (c)波状文、砂粒少量混入、明褐色	38 甕 内面ヘラミガキ、粗砂粒混入、褐色
30 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい橙色	34 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい褐色	39 甕 砂粒混入、丹彩
31 甕 砂粒混入、褐色	35 甕 砂粒混入、褐色	40 鉢 砂粒混入、丹彩



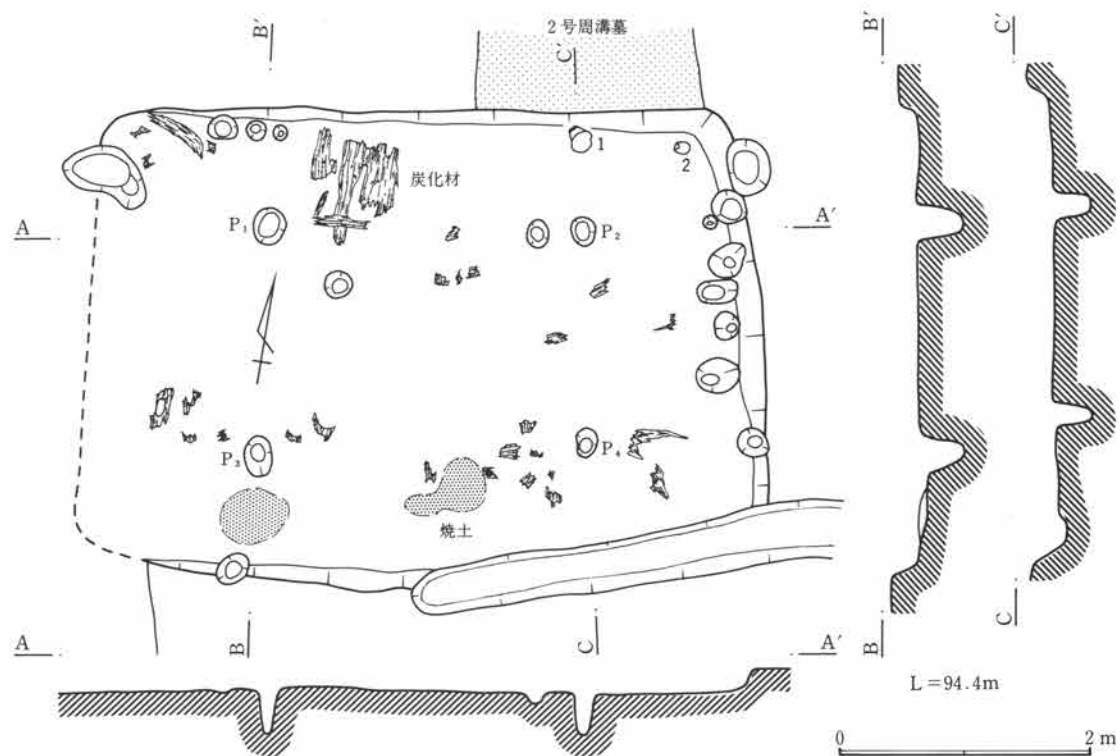
第38図 101号住居出土遺物 (2)

104号住居跡 (第39図、図版13、14)

位置 C地区住居群の西部に位置する(74-C36)。西に26号、107号住居と重複する。

形状、規模、方位 長方形を呈する。西辺及び東南コーナー部にそれぞれ107号住居との重複、弥生期の溝との重複で不明であるが、他の部分は遺存状態は良好である。規模は長軸5.6m前後になると思われる。短軸は3.8mを測る。方位はN-81°-E。

周壁、壁溝 東壁、北壁は遺存状態は良好で、検出できた壁高は20cm。壁溝は認められなかった。



第39図 104号住居

**床面** 床面は黄褐色ローム質土（第V層）で、若干の凹凸はあるが強く踏み固めた平坦面である。床面に密着して炭化材が多量に散乱した状態で認められた。炭化材は数箇所垂木の一部分であることを思わせる規則的な配列が見られ、焼け落ちた上屋材であろうと思われる。

**柱穴** 主柱穴を4箇所良好に検出する（P1～P4）。主柱は4本構造になるものと思われる。主柱穴の規模は比較的小さい。径は20～30cm、深さは40cm前後である。この外周壁沿いにもピットが見られるがこれらも住居施設に関わるものであると思われる。特に東周壁に沿って大小のピットが集中するが、中央部で対をなす2個のピットは外方向に傾きをもっており、出入口に伴う施設に関わるものと思われる。

**炉跡** 焼土帯は2箇所検出されている。このうち炉跡と考えられるものは南側2主柱穴間のやや外側に見られるもので、径40～50cmで良く焼けた火床面を持つ地床炉である。西南主柱穴の傍らに検出された焼土帯は住居が火災に遭った際に生じたものであると考えられる。

**遺物出土状態** 出土遺物は比較的少ない。床面上より甕、鉢の大きな破片が出土し、床上10cm辺りから片口土器の完形個体が出土している。

**時期** 弥生後期第3期

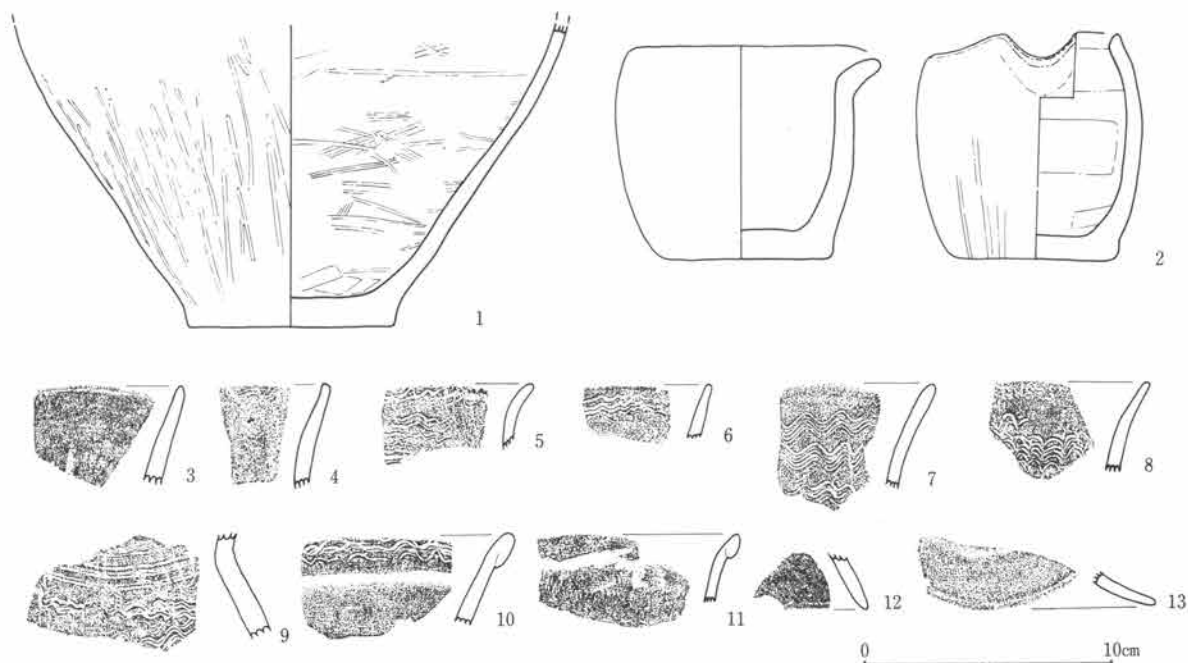
**他の遺構との関係** 西部で107号住居、北部で2号周溝墓（共に弥生後期）、26号住居（古墳前期）と重複する。2号周溝墓よりも新しい。

第27表 104号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	底 8.3		外面 胴部はヘラミガキ、底部はもみ圧痕。 内面 胴部はハケメ後ヘラミガキ、底部はヘラナデ。	細砂粒混入 堅緻 淡橙色	胴下位～底部

6 検出した遺構、遺物

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
2	片口	口 10.0 底 7.0 高 8.5		外面 底部はヘラミガキ。 内面 口縁部はヘラナデ、胴部はヘラナデ。	中砂粒、白色粒 混入 堅緻 橙色	完形



第40図 104号住居出土遺物

第28表 104号住居出土土器観察表（拓本）

3 甕 砂粒多量に混入、橙色	5 甕 内面ヘラミガキ、砂粒多量に混入、 にぶい褐色	11 甕 内面ヘラミガキ、砂粒多量に混入、 明褐色
4 甕 砂粒混入、明褐色	8 甕 砂粒混入、褐色、内面荒れている	

107号住居跡 (第41図)

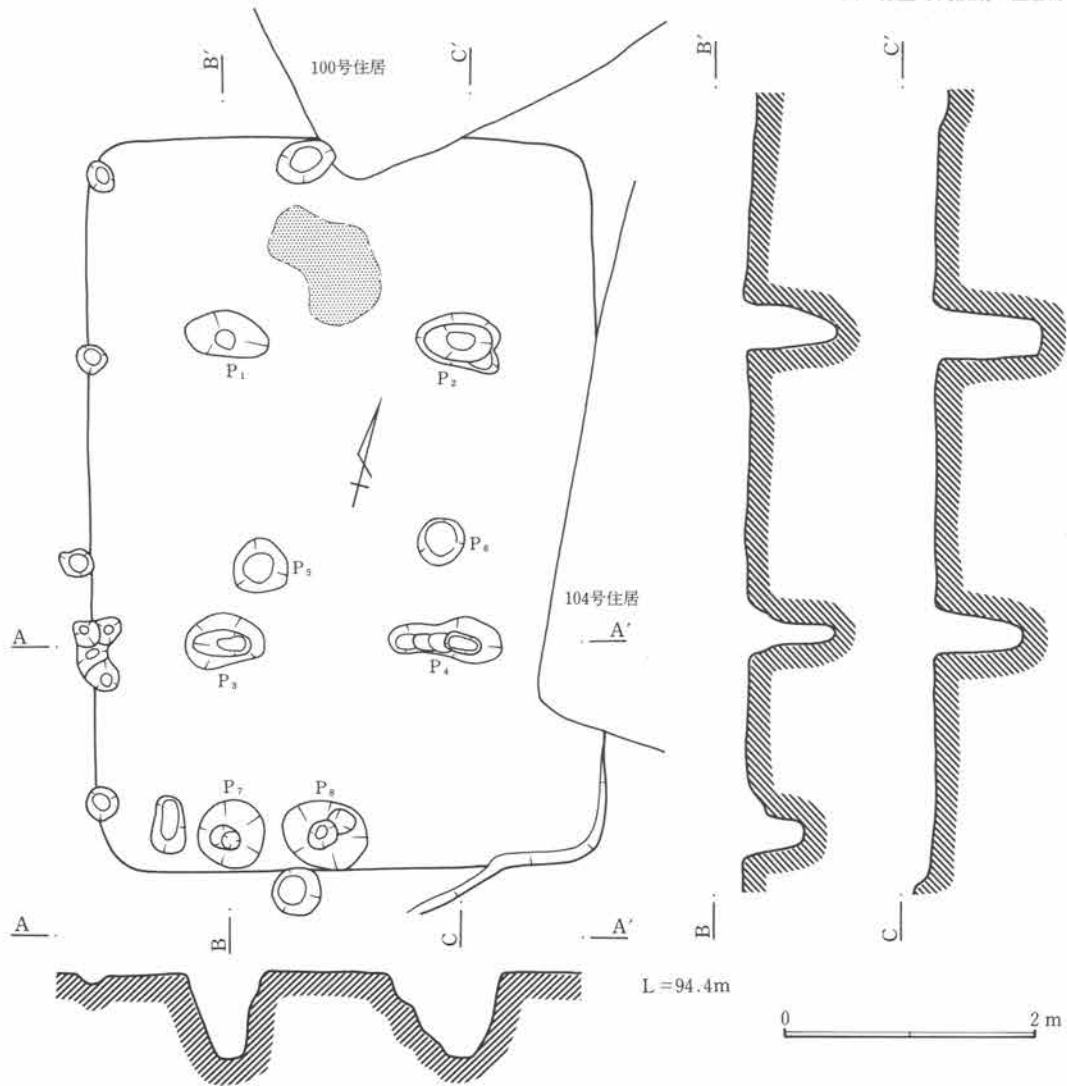
**位置** C地区住居群の西端部に位置する(75-C38)。東～東南に104号、26号住居と重複、106号住居と大きく重なる。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。東南コーナー部においてのみ周壁を検出する。輪郭線は明確ではない。住居の形状、規模については支柱穴の配置関係、西辺のピット列よりおよそ推定できる。長軸6.0m前後、短軸4.2m前後か。方位はN-17°-W。

**周壁、壁溝** 東南コーナー部周壁において15cmの高さで周壁を検出する。他の部分ではわずかな段を確認できる程度である。壁土は黄褐色ローム質土(第V層)。周溝は認められない。

**床面** 床面はほぼ平坦に踏み固めている。遺存状態は良好。

**柱穴、その他ピット** 4箇所と同様な形状規模を持つ支柱穴を検出する(P1~P4)。支柱穴は一様に横に長い長円形で長径60~70cm、深さ70~80cmである。南辺部やや西よりに1対のピットあり(P7、P8)。



第41図 107号住居

ピット間の距離は70cm、両ピットとも形は同様で上部はロート状に大きく広がる。又西辺に沿って円形小ピット列が見られる。各ピットは径15cm、深さ20cm前後である。このほか住居床面上に多数、大小のピットを検出するが大方が他の遺構に伴うものと思われる。このうち、南側2支柱穴の内側傍らに見られるピット（P5、P6）は本住居に付属する柱穴と推定される。

**炉跡** 北側（奥）2支柱穴間、やや外側に地床炉があり。長径80cm程の焼土化した火床面を検出する。

**遺物出土状態** 遺物は殆ど出土しない。

**時期** 弥生後期

**他の遺構との関係** 106号住居（弥生後期）より新しい。107号住居の炉跡は106号住居の床面上にある。104号住居（弥生後期第3期）、26号住居（古墳前期）よりも古い。

108号住居跡（第42図、図版14、15）

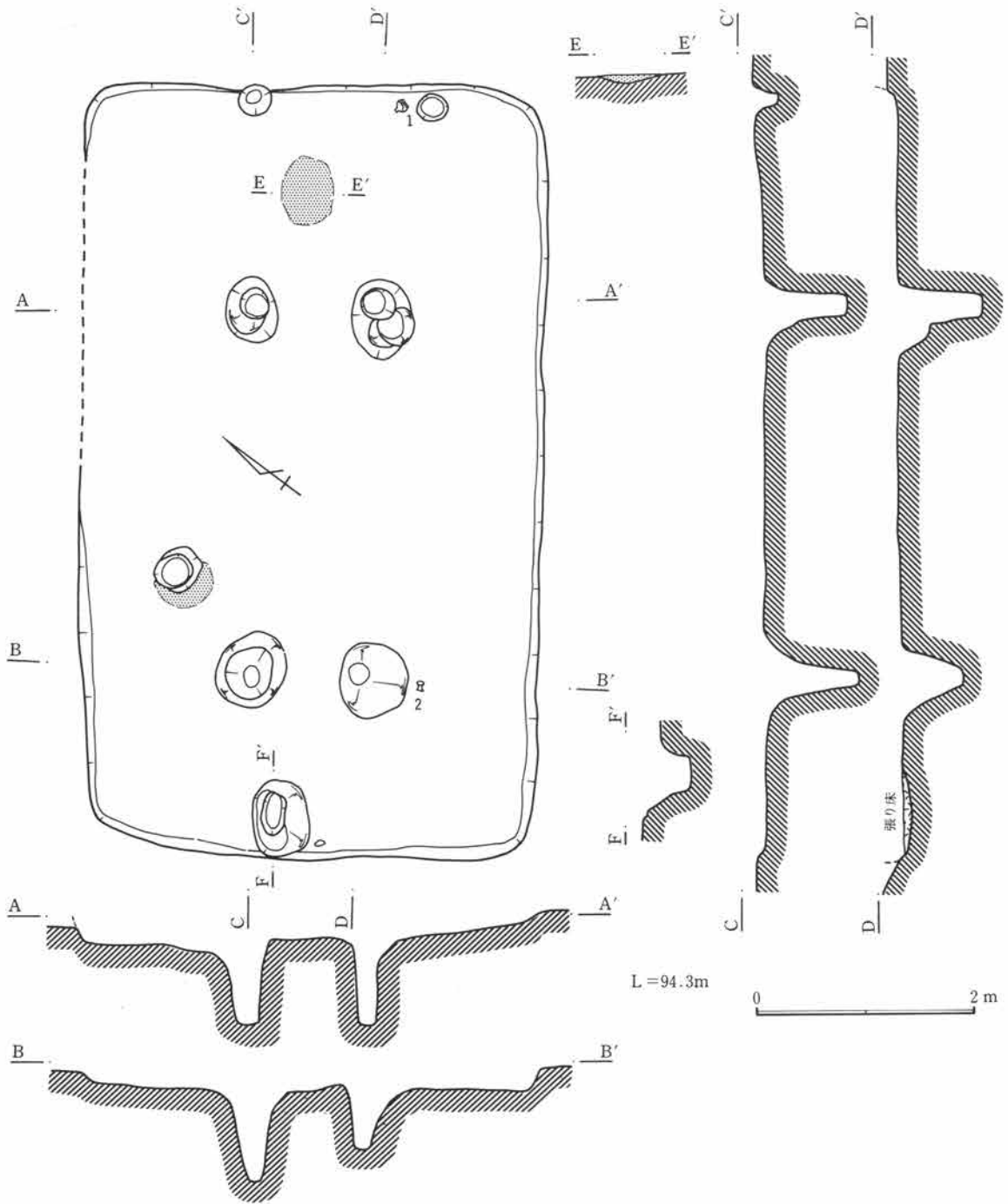
**位置** C地区住居群中央部やや北寄りに位置する（62-C38）。北に1号周溝墓、西に97号、101号住居、東に114号住居などが隣接する。

6 検出した遺構、遺物

**形状、規模、方位** 長軸方向に著しく長い長方形を呈する。コーナー部はやや丸みを持つ。他の遺構との重複がなく、遺存状態は良好である。規模は長軸7.0m、短軸4.2mを測る。方位はN-53°-E。

**周壁、壁溝** 周壁は北西部で部分的に検出できない箇所があるが、全体的には良好に検出する。確認できた壁の高さは15~20cm。壁溝は認められない。

**床面** 床面は7~10cmの厚さに黄褐色ローム質土と黒褐色土のブロック状混土で構築した張り床が西南部主柱穴外周部に認められた。西部は平坦で全体的に堅く踏み固められている。



第42図 108号住居

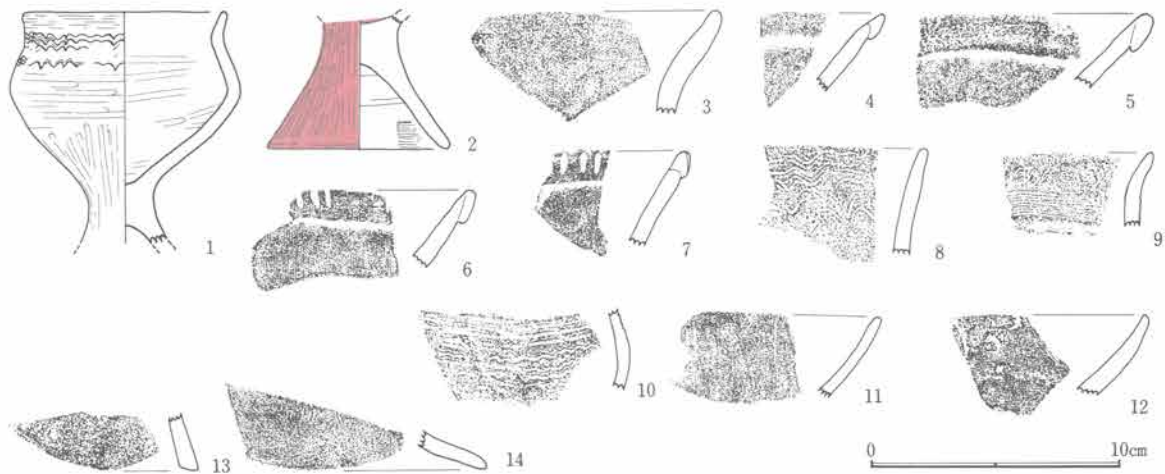
**柱穴** 支柱穴を4箇所良好に検出する。支柱は4本構造である。支柱穴の配置は住居の形状に対応して長軸方向に著しく長い。柱穴の形状は全体的に上部でややロート状に広がっている。径は上端部で60cm前後であるが、下部では25cm前後の整った円筒状をなす。支柱穴の深さは比較的一律で70cm前後である。南東部で1箇所長円形のピットが検出されている。この種のピットは普通対をなして見られるが、本住居では対応するピットの確認はできなかった。

**炉跡** 住居北東部（奥側）2支柱穴と周壁の間に径60cm程の地床炉を検出する。焼土は10cm程の厚さに生じており、床面よりやや高く膨らんで見られた。

**遺物出土状態** 北東奥周壁下床面上に脚台は欠損するが体部を完存する弥生台付甕が出土する。その他床面上より土器破片が多数出土する。

**時期** 弥生後期第3期。

**他の遺構との関係** 重複遺構は無い。



第43図 108号住居出土遺物

第29表 108号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	台付甕	口 8.3 胴 9.3	口辺部は直状に短く外反する。	外面 口辺部はヨコナデ、頸部に4本単位の波状文2段。胴上部はハケメ後、ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 明黄褐色	脚台部欠損
2	高坏	脚 7.4		外面 ヘラミガキ。 内面 ナデ。	細砂粒混入 堅緻 赤色	脚部 脚部内面除き丹彩

第30表 108号住居出土土器観察表（拓本）

3 壺 細砂粒混入、灰白色	7 壺 外面(b)ヘラ刻み、(c)ナデ、内面ヘラミガキ、砂粒多量に混入、橙色	10 台付甕 (d)2連止め簾状文、(e)波状文、砂粒混入、灰褐色
4 壺 砂粒少量混入、灰白色	8 甕 (b~c)波状文、砂粒混入、褐色	11 壺 内外面ヘラミガキ、橙色
5 壺 内面ヘラミガキ、砂粒多量に混入、橙色	9 台付甕 (b~c)波状文、(d)簾状文、砂粒混入、赤褐色	12 高坏 内外面ヘラミガキ、細砂粒混入、内外面丹彩
6 壺 砂粒多量に混入、明黄褐色		

109号住居跡 (第44図)

**位置** C地区住居群の正北端部に位置する(58-C40)。西部で1号周溝墓、東部で116号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 隅丸長方形を呈する。東南コーナー部は116号住居との重複により輪郭は把握できないが、やや台形に歪んだ方形に近い形状をなす。規模は長軸5.0m、短軸4.5mを測る。方位はN-14°-W。

**周壁、壁溝** 周壁の検出状態は悪い。検出できた壁の高さは3~5cm。壁溝は認められない。

**床面** 床面は黄褐色ローム質土(第V層)面で、やや凹凸を持つが堅く踏み固められている。床面上には炭化材や焼土、黑色灰が散在する。火災に遭った可能性が大きい。

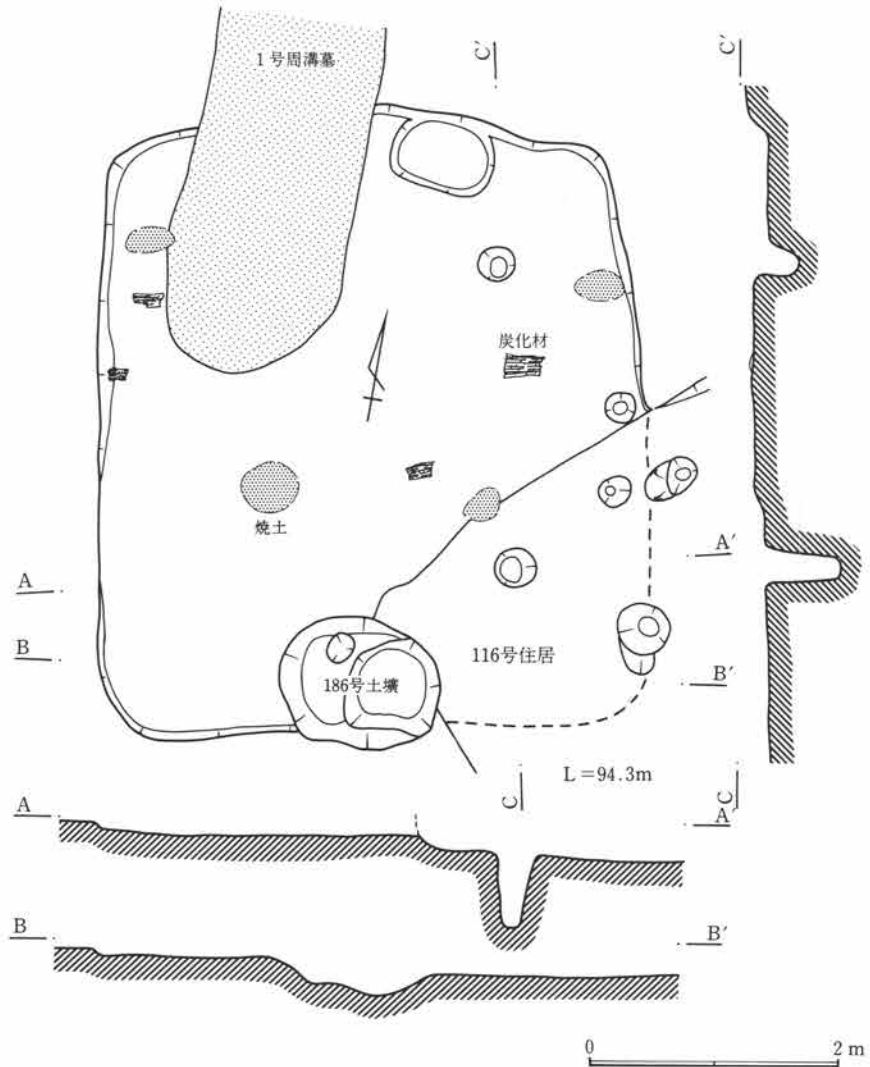
**柱穴** 支柱穴を2箇所検出している。支柱は4本構造と思われる。北西部は1号周溝墓との重複部であるため、検出できなかった。

**炉跡** 焼土帯を4箇所検出している。炉跡の可能性のあるのは中央部東南寄りのものであるがやはり位置的に問題があり、炉跡としての認定はできない。

**遺物出土状態** 床面上より土器破片が多数出土している。

**時期** 弥生後期第3期

**他の遺構との関係** 北西部で1号周溝墓と重複するが1号周溝墓覆土上に109号住居の焼土などの面が僅かではあるが認められる。1号周溝墓の方が古いと思われる。116号住居(弥生後期~古墳前期)と東部で重複する。



第44図 109号住居

第31表 109号住居出土土器観察表(拓本)

2 壺 (b)棒状具による刻み目、内面ヨコナデ、にぶい褐色	4 壺 内外面ヘラミガキ、(d)等間隔止め簾状文、浅黄橙色	5 甕 内面ヘラミガキ、にぶい黄橙色
-------------------------------	-------------------------------	--------------------





第45図 109号住居出土遺物

## 112号住居跡 (第46図、図版15、16)

**位置** C地区住居群の北部、染谷川の河岸縁辺に位置する(48-C34)。南に113号住居が隣接し、東部で126号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 隅丸長方形を呈する。全体に遺存状態は良好である。規模は長軸6.4m、短軸4.5mを測る。方位はN-3°-W。

**周壁、壁溝** 周壁の検出状態は良好である。周壁は15cm前後の高さで検出している。壁土は暗褐色粘質土(第IVb層)。壁溝は認められない。

**床面** 床面は黒色灰を多量に混入する薄い層が黒色粘質土と3層前後、縞状堆積を見せている。

**柱穴** 支柱穴は4箇所良好に検出している(P1~P4)。支柱穴は様に上部がロート状に広がった形状を見せているが、それぞれの大きさは一律ではない。径は40~60cm。深さは30~60cmである。東側支柱穴間に支柱穴と同様のピットを検出している(P5)。

**炉跡** 不明確。西南コーナー部、支柱穴と周壁との間に焼土帯を見るが、炉跡とするには場所的に問題がある。

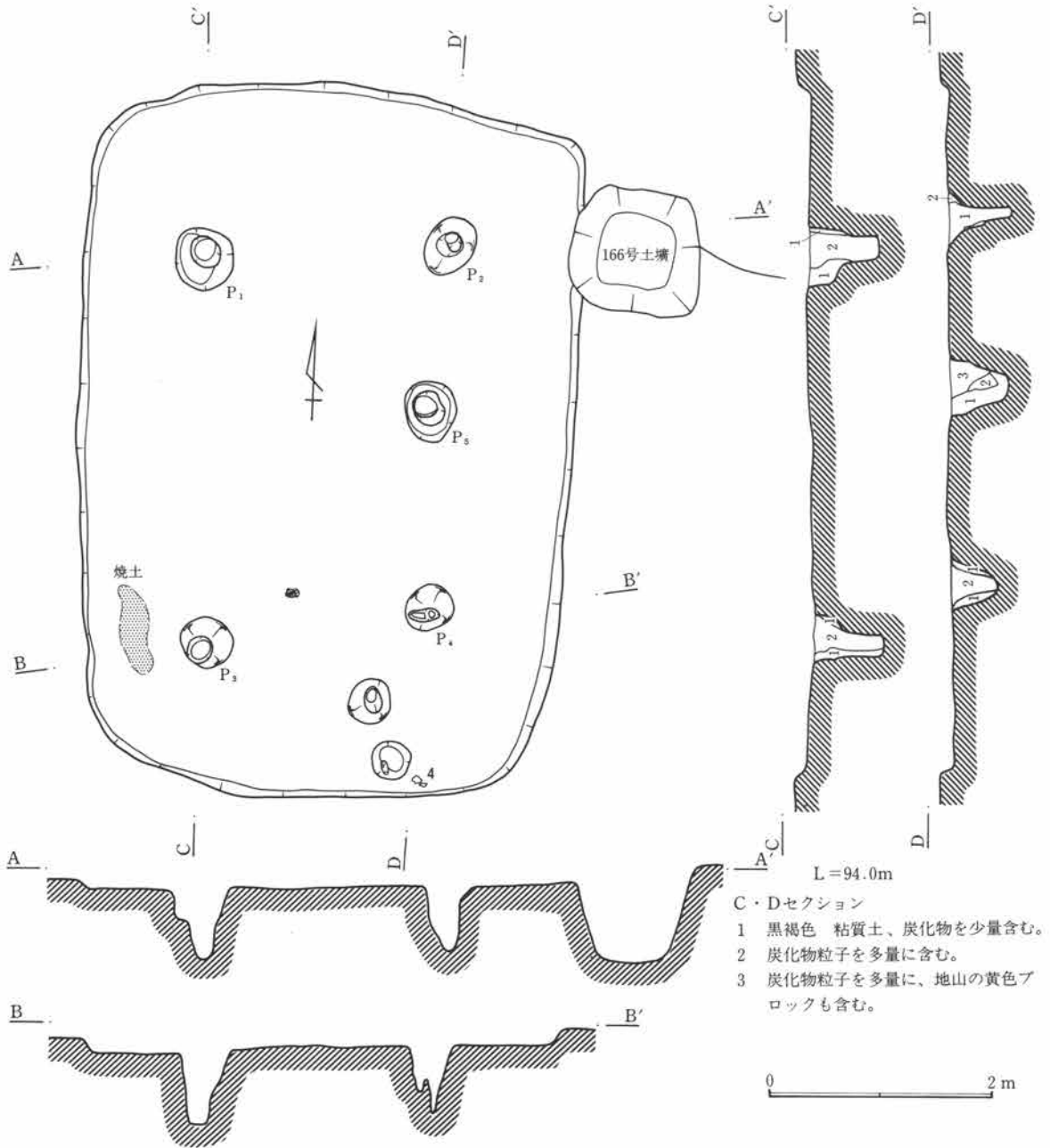
**遺物出土状態** 床面上より土器破片が多数出土している。出土傾向としては南半部に目立っている。完形土器は認められない。

**時期** 弥生後期第1期

**他の遺構との関係** 東部で126号住居(弥生後期第3期)と重複する。

第32表 112号住居出土土器観察表

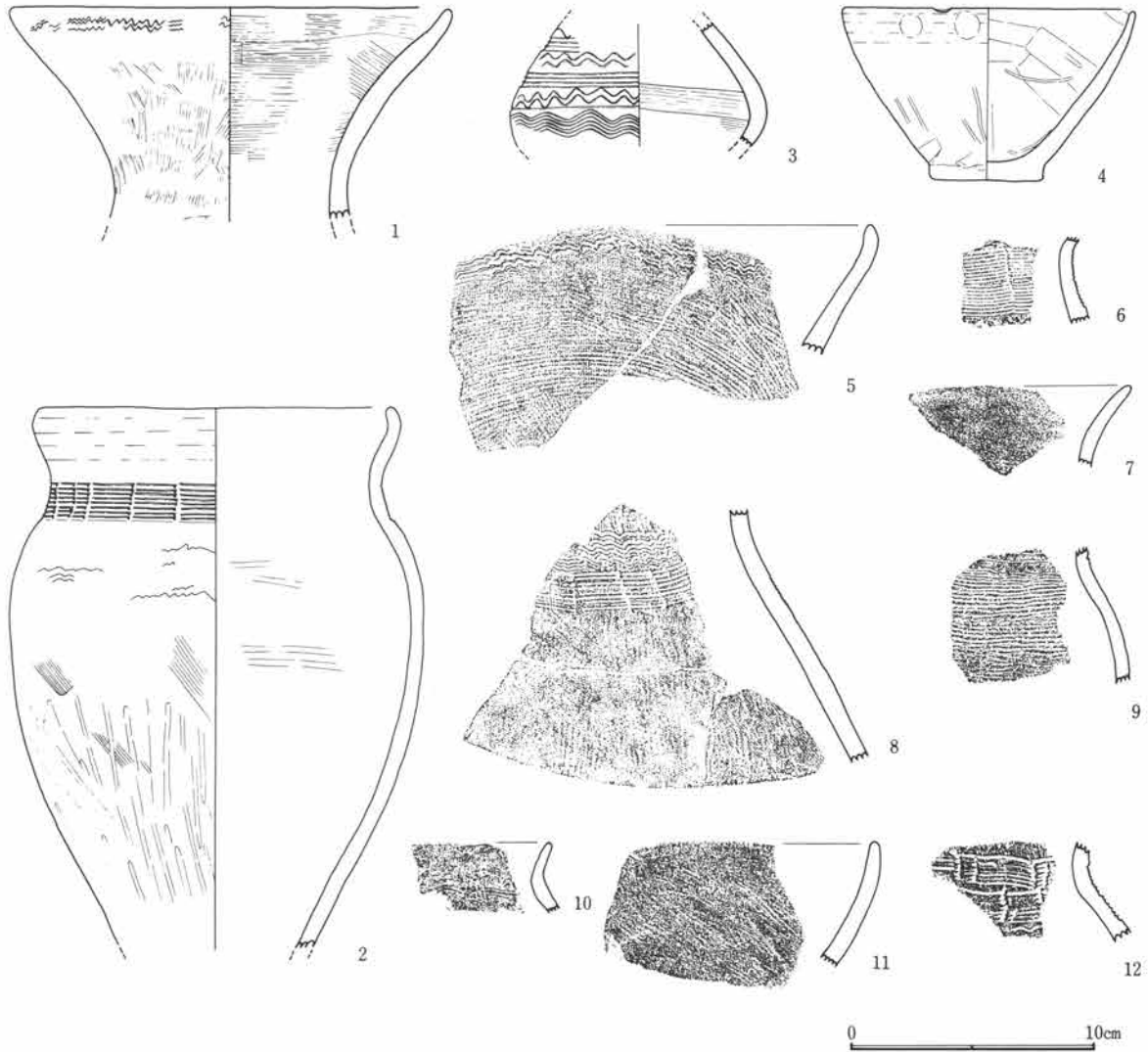
遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 18.2	口辺部は緩やかに外反する。口縁部はやや内湾する。	外面 口縁部はヨコナデ後波状文。口辺~頸部にかけてハケメ。 内面 ハケメ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	口縁~頸部1/2周
2	甕	口 14.8	口縁部は内湾する。	外面 口辺部はヨコナデ、頸部は9本単位の等間隔止め+簾状文。胴上部は波状文、胴部はハケメ後ヘラミガキ。 内面 胴部はヘラミガキ。	細砂粒混入 やや堅緻 にぶい橙色	口縁~胴下位1/2周
3	小型壺	胴 10.5	胴部は下膨れで、器壁は比較的厚い。	外面 胴上部は3本単位の櫛描直線と、2本単位の沈線波状文を交互に施す。胴中位に1条の沈線を巡らし、以下に6本単位の櫛描波状文を施す。 内面 器面荒れている。	砂粒混入 堅緻 橙色	胴部のみ
4	鉢	口 12.0 底 4.7 高 7.0	口縁部はやや内湾する。	外面 口縁部はヨコナデ、口縁~端部はヘラアテ痕、体部はヘラナデ後ヘラミガキ、底部はヘラ痕。 内面 全体にヘラナデ。	細砂粒、白色粒 混入 堅緻 にぶい褐色	口縁~底面1/2周



第46図 112号住居

第33表 112号住居出土土器観察表 (拓本)

5 壺 外面(c)ハケメ、内面ヘラミガキ、細砂粒混入、浅黄橙色	8 甕 等間隔止め簾状文、砂粒少量混入、にぶい黄褐色	10 台付甕 (d)3連止め簾状文、砂粒混入、灰褐色
6 壺 外面(d)等間隔止め簾状文2段、内面ヘラミガキ、砂粒混入、浅黄橙色	9 甕 外面ヘラ描沈線2条施す、ハケメ後擦糸文、内面ナデ、砂粒混入、にぶい黄褐色	11 甕 外面ハケメ、内面ヘラミガキ、砂粒多量に混入、灰褐色、径20cm
7 甕 (a)細かい刻み目、(d)簾状文、砂粒混入、にぶい赤褐色		12 甕 砂粒少量混入、にぶい黄褐色



第47図 112号住居出土遺物

117号住居跡 (第48図、図版16)

**位置** C地区住居群の北部に位置する(54-C39)。東半部は118号住居と重複する。北に120号住居、西に1号周溝墓が隣接する。

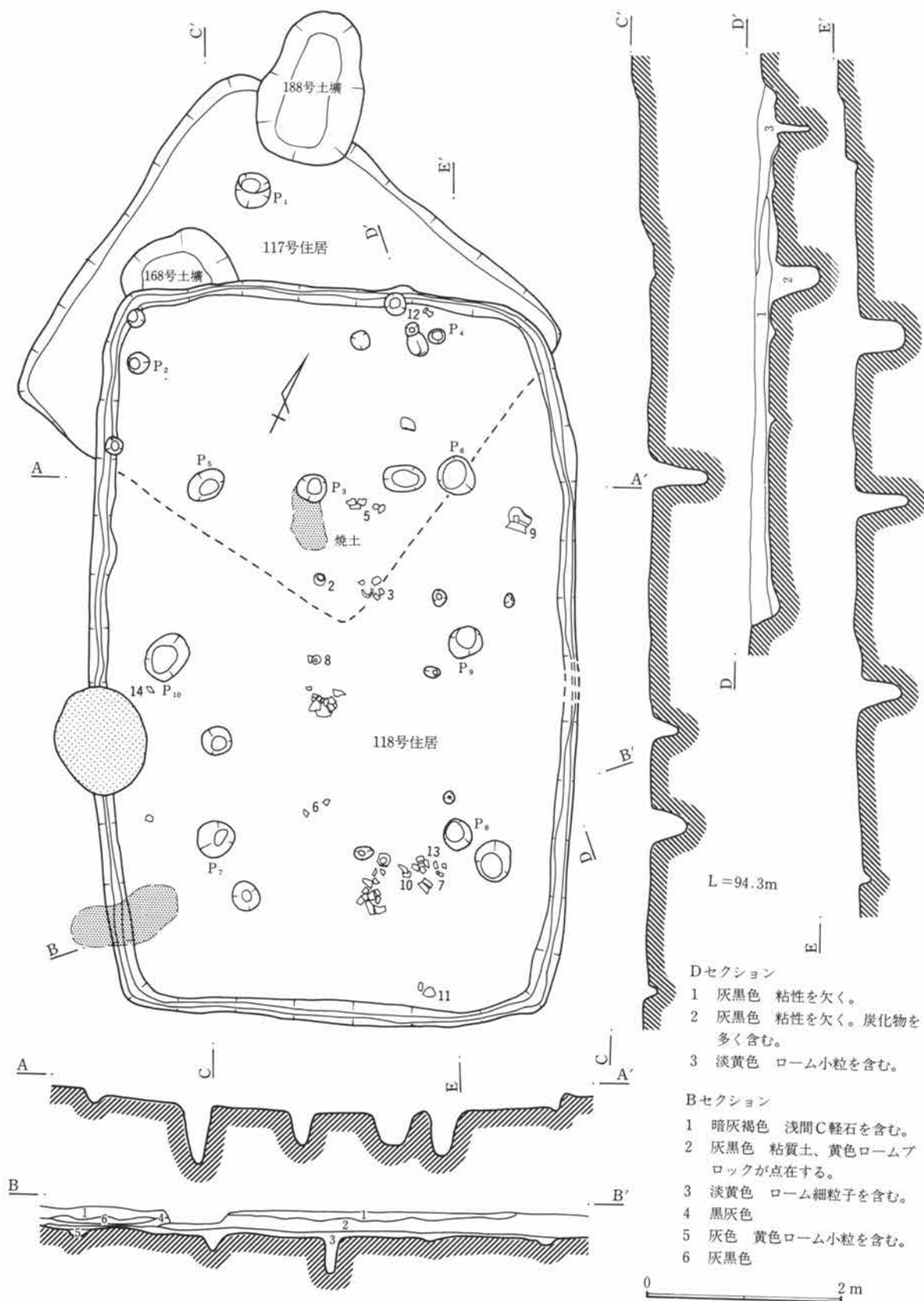
**形状、規模、方位** 方形を呈する。東半部は118号住居と重複しており、重複部では住居の輪郭は明確に把握することができなかった。規模は南北4.3m、東西4.5mを測る。方位はN-14°-E。

**周壁、壁溝** 北辺、西辺の周壁は遺存状態は良好で、検出できた壁高は約15cm。壁土は暗褐色粘質土(第IVb層)。壁溝は認められない。

**床面** 平坦な暗褐色粘質土(第IVb層)面を検出するが面は比較的軟弱である。

**柱穴** 支柱穴は4箇所検出する(P1~P4)。北西部の1箇所の外は118号住居との重複部にある。118号住居とは床面のレベルが15cm前後の差があるため柱穴の上部は不明確である。柱穴の径は北西部のもので40cmを測る。深さは全体に50cm前後である。

**炉跡** 不明確。

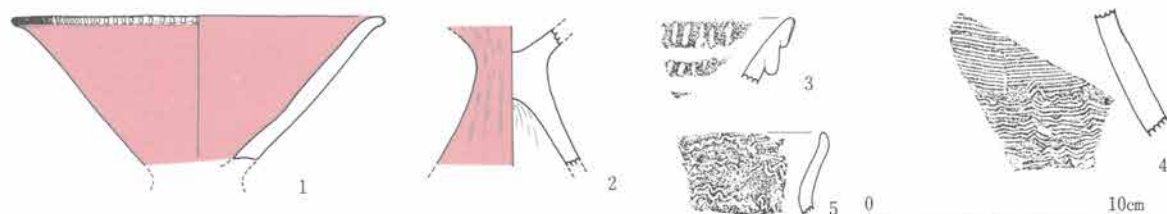


第48図 117号、118号住居

遺物出土状態 床面直上からの出土遺物は少ない。覆土中から弥生土器破片が数点出土している。

時期 弥生後期第3期

他の遺構との関係 118号住居(弥生後期第1期)と東南半部で大きく重なる。東南コーナー部、及び西部にそれぞれ188号、168号土壇が本住居の周壁、床面を深く掘り込んでいるが、両土壇とも本住居に付属するものではないだろう。



第49図 117号住居出土遺物

第34表 117号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	高環	口 15.0		外面 口縁端部は刻み目、口縁部はヨコナデ、体部はヘラナデ。 内面 口縁部はヨコナデ、体部はヘラナデ、ヘラミガキ。	粗砂粒混入 堅緻 赤色	脚部欠損 内外面共に丹彩
2	高環			外面 丁寧なヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 淡赤色	坏部及び脚端部欠損 外面丹彩

第35表 117号住居出土土器観察表(拓本)

4 壺 (d)10本単位の等間隔止め簾状文2段	5 甕 (b)、(c)波状文
-------------------------	----------------

### 118号住居跡 (第48図、図版17)

位置 C地区住居群の北部に位置する(54-C38)。北に117号住居、東に119号住居、南に116号住居と重複する。

形状、規模、方位 やや胴の膨らむ長方形を呈する。規模は長軸7.6m、短軸5.0m。方位はN-26°-W。

周壁、壁溝 住居の遺存状態は良好である。周壁、壁溝は全周検出している。確認できた周壁の高さは5~15cm。壁溝の幅は10~15cmである。壁土は上半部は暗褐色粘質土(第IVb層)。下半部は黄褐色ローム質土(第V層)。

床面 床面は黄褐色ローム質土(第V層)面を堅く平坦に踏み固めている。黒色灰、炭化物粒子が全体的に認められる。

柱穴 主柱穴は4箇所の円形ピット(P5~P8)の他に長軸主柱穴間に主柱穴とほぼ同規模のピットがある(P9、P10)。主柱は6本構造の可能性もある。長軸主柱穴間のピットはやや外に位置する。このことは住居の輪郭がやや胴張を示すのと対応するのだろうか。柱穴の径はほぼ一律に40cm程であるが、深さは35~60cmと一様ではない。

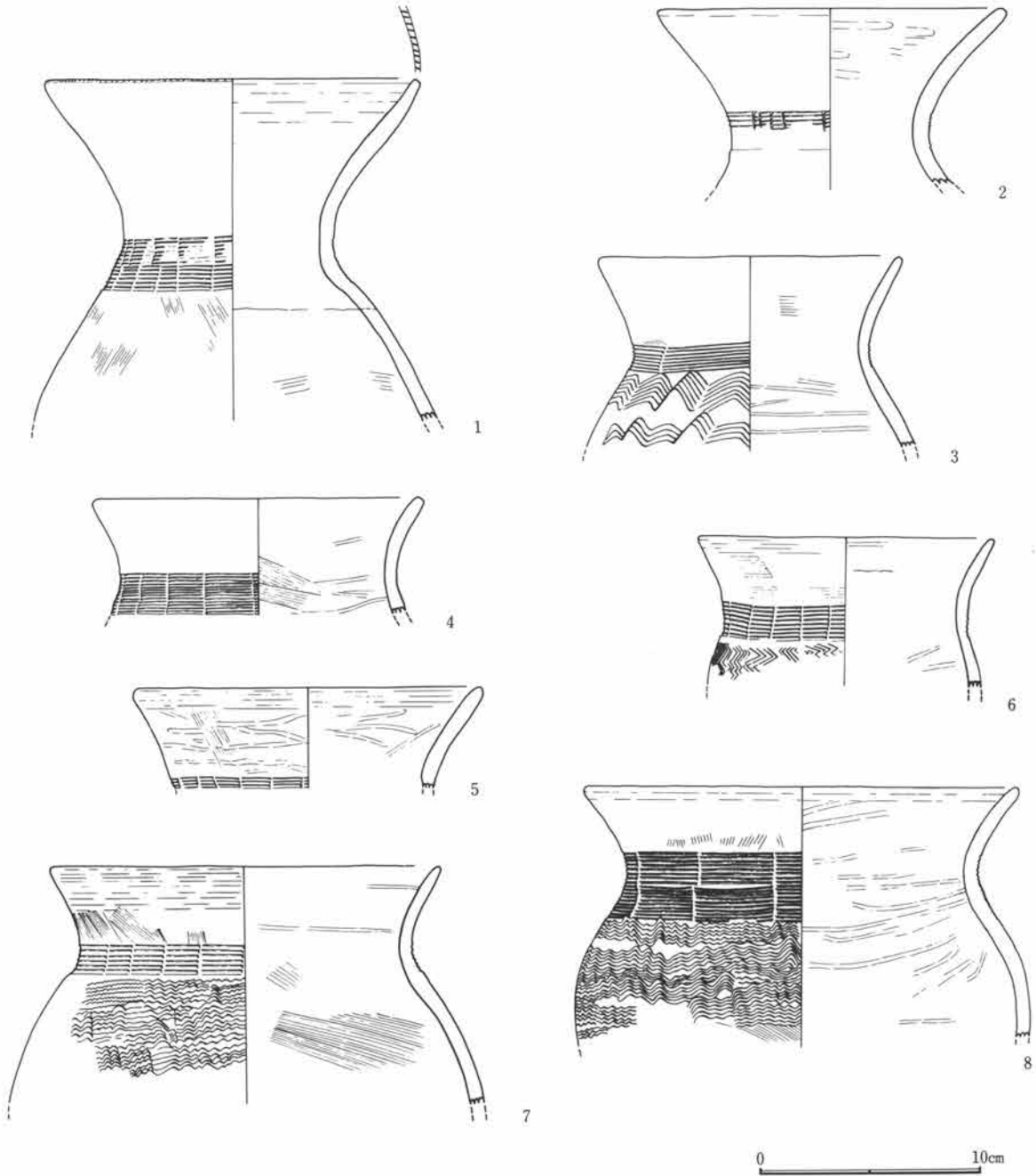
炉跡 北西側奥2主柱穴間に地床炉を設けている。炉跡の北端のピット(P3)は117号住居の主柱穴である。

6 検出した遺構、遺物

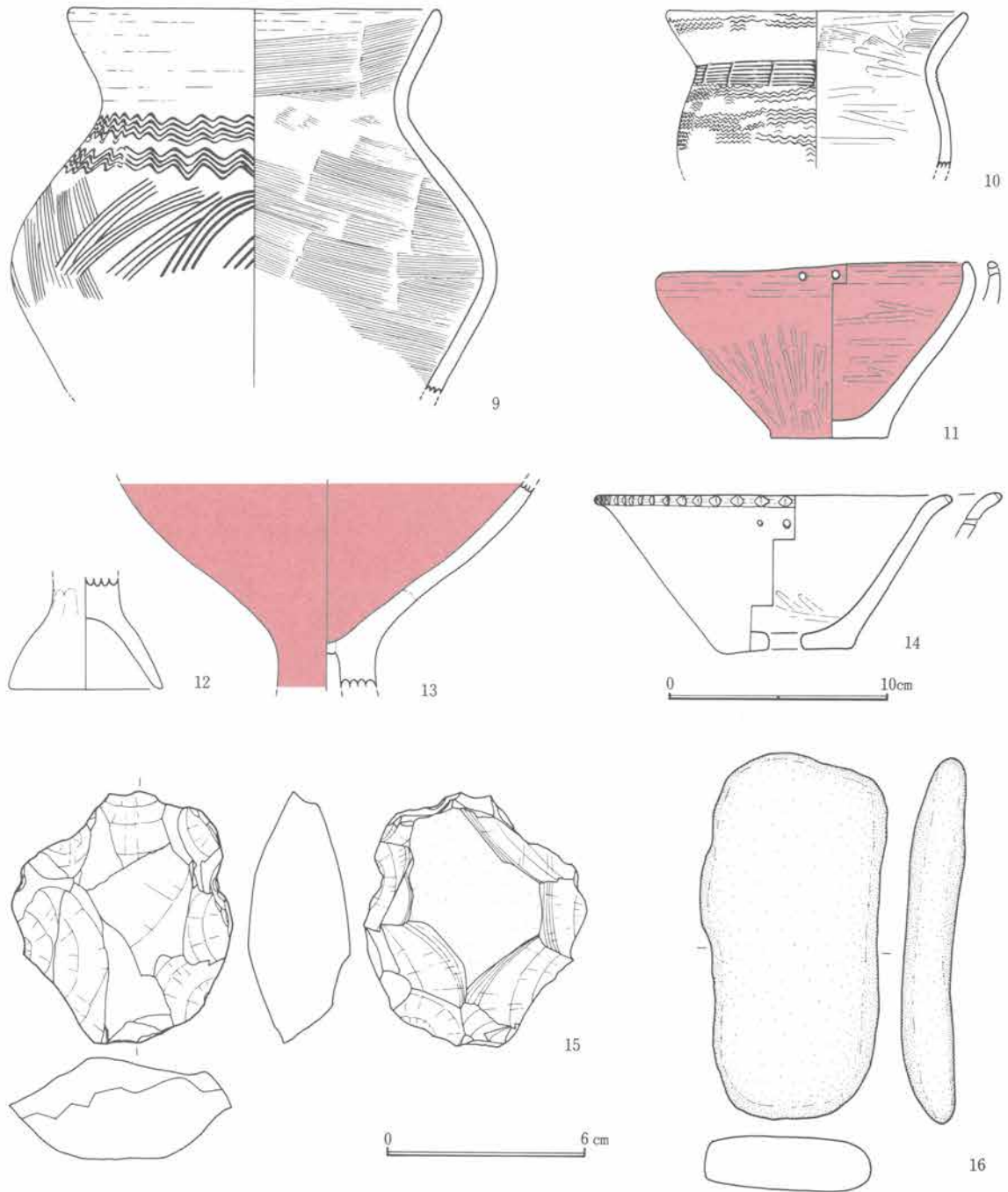
**遺物出土状態** 床面密着あるいは床面上10cmの間に弥生土器の大形破片が多量に出土している。出土土器は壺、甕、台付甕、鉢、高杯など器種は他種類にわたっている。

**時期** 弥生後期第1期。

**他の遺構との関係** 北部で117号住居（弥生後期第3期）と重複する。床面レベル差は15cm前後で、本住居の方が低い。東部で119号住居（弥生後期第3期）と重複する。両住居との床面レベル差は前者より15cm前後、後方より5cm前後本住居の方が低い。



第50図 118号住居出土遺物 (1)



第51図 118号住居出土遺物 (2)

第36表 118号住居出土石器観察表

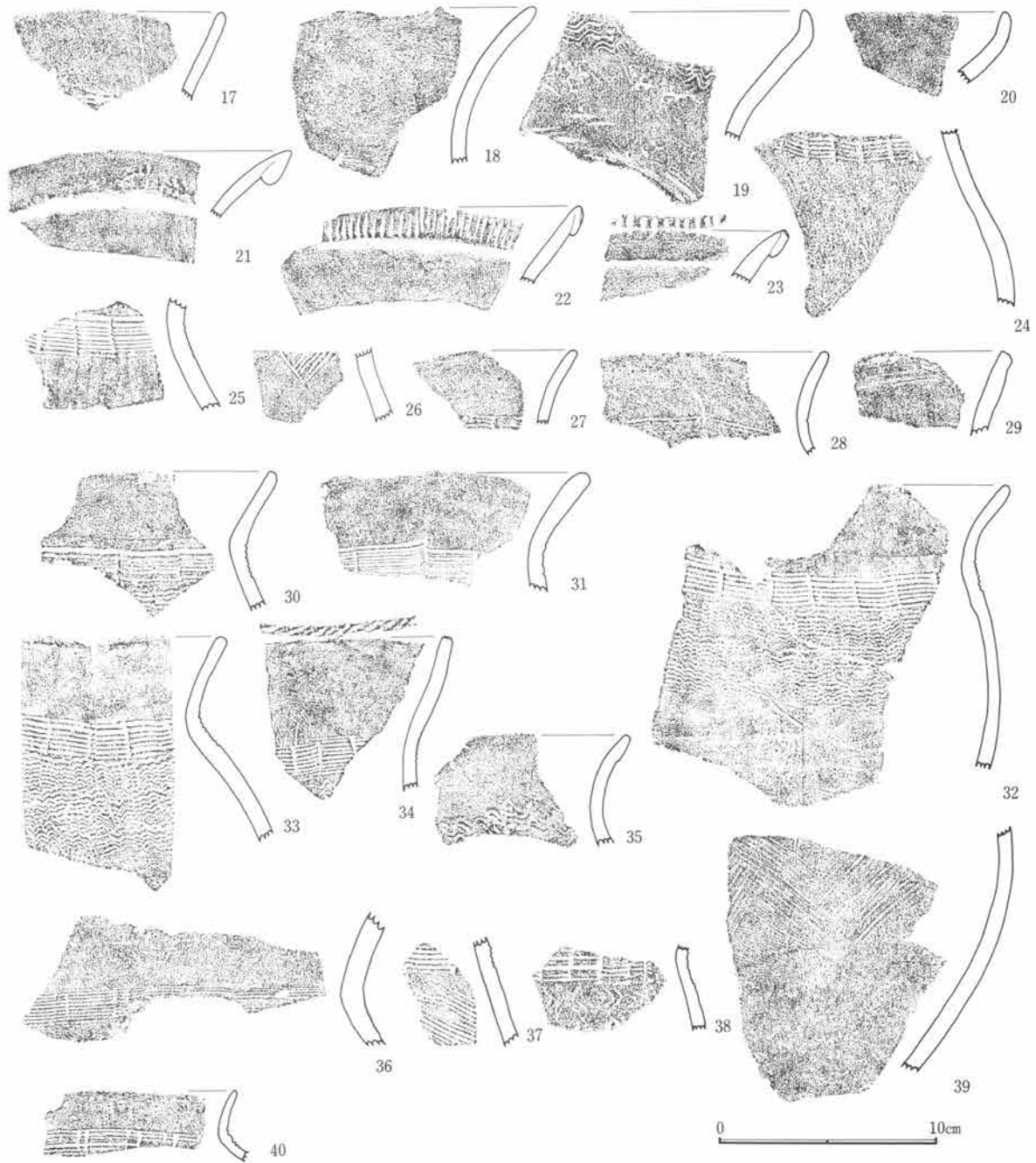
遺物番号	名称	計測値 (mm)	石質	重量 (g)	特徴
15	石核	75.0×66.0×31.3	黒色頁岩	158.6	円盤状の石核で礫の中央部に自然面を残す。周辺に向かって剥離を行っており、部分的に二次剥離もみられる。
16	砥石	111.2×54.0×17.0	砂岩	154.7	やや内反りする扁平な砥石。磨痕は明瞭に観察できない。

## 6 検出した遺構、遺物

第37表 118号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 17.0	口辺部は緩やかに内湾する。	外面 頸部は等間止め2段、上←、下→、胴上部はハケメ。 内面 口縁部はヨコナデ、胴上部はハケメ。	細砂粒混入 堅緻 浅黄橙色	口縁全周 頸及び胴下位欠損
2	壺	口 15.8	口辺部は緩やかに外反する。	外面 口辺部はヘラミガキ、頸部は→簾状文。 内面 ヘラミガキ。	中砂粒混入 やや堅緻 橙色	口縁～頸部 $\frac{2}{3}$ 周
3	壺	口 13.5	口辺部はやや直状気味に外反する。	外面 口辺部はハケメ、頸部は樞描直線文一部に止めあり、胴上部は波状文。 内面 ハケメ後ヘラミガキ。	粗砂粒混入 堅緻 黒褐色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周
4	甕	口 15.0	口辺部は外反する。	外面 頸部は等間隔止め→簾状文。口辺部はハケメ後ヘラミガキ。 内面 口辺部はハケメ後ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 灰褐色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周
5	甕	口 15.8	口辺部は外反する。	外面 口縁部はヨコナデ、口辺部はハケメ後ヘラミガキ、頸部は等間隔止め簾状文。 内面 口縁部はヨコナデ、口辺部はヘラミガキ。	粗砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	口縁～頸部一部のみに
6	甕	口 13.4	口辺部は緩やかに外反する。	外面 口辺部はヨコナデ、頸部は等間隔止め←簾状文、胴上部は波状文、一部縦方向。 内面 口縁～胴部はヘラミガキ。	中砂粒混入 堅緻 明褐色	口縁～胴上位 $\frac{1}{2}$ 周
7	甕	口 18.0	口辺部はほぼ直状に外反する。	外面 口辺部はヨコナデ、頸部は等間隔止め←簾状文、胴上部は波状文。 内面 口縁～胴上部はハケメ後ヘラミガキ。	中砂粒混入 堅緻 褐色	口縁～胴上位 $\frac{1}{2}$ 周
8	台付甕?	口 19.6	口辺部はほぼ直状に外反する。	外面 口縁部はヨコナデ、口辺部はハケメ、頸部は等間隔止め簾状文を2段、以下波状文。 内面 口縁部はヨコナデ、口縁～胴部はヘラミガキ。	粗砂粒混入 やや堅緻 にぶい橙色	口縁～胴部
9	台付甕?	口 16.8	口辺部は直状に外反する。胴下部は急激に細まる。	外面 口辺部はヨコナデ、頸、胴上部は2段の←波状文、胴部は、ハケメ後、樞描斜格子文。胴下部はヘラミガキ。 内面 ハケメ。	細砂粒混入 やや堅緻 にぶい赤褐色	口縁～胴上位 $\frac{2}{3}$ 周
10	甕	口 13.9	頸部は屈曲が比較的強く、口辺部は直状に外反する。	外面 口辺部は←波状文、頸部は7本単位の等間隔止め←簾状文、胴上部は←波状文。 内面 口辺部はハケメ、ヘラミガキ、口縁～胴部はハケメ後ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 橙色	口縁～胴上位 $\frac{2}{3}$ 周
11	鉢	口 14.1 底 5.3 高 8.0	口縁部は内湾する。口縁部に小孔を2個穿つ。	外面 口縁部はヨコナデ、胴部はヘラミガキ。 内面 口縁部はヨコナデ、胴部はヘラミガキ。	粗砂粒混入 やや堅緻 赤褐色	口縁～底面 $\frac{1}{2}$ 周 内外面共に丹彩
12	高 坏	脚 7.0		外面 脚上部は指オサエ。 内面 器面剥落著しい。	粗砂粒混入 堅緻 橙色	脚部
13	高 坏		坏部やや内湾する。	外面 ヘラミガキ。 内面 脚部ナデ。	細砂粒混入 やや堅緻 にぶい橙色	口辺部及び脚部欠損 内外面共に丹彩
14	瓶	口 16.3 底 6.0	口縁部は外反する。口縁部に小孔を2個穿つ。	外面 口縁部は刻み目、器面荒れている。 内面 体部はヘラミガキ。	粗砂粒混入 堅緻 明褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 欠損





第52図 118号住居出土遺物 (3)

第38表 118号住居出土土器観察表 (拓本)

17 壺 砂粒多量に混入、浅黄橙色	24 壺 中砂粒混入、にぶい褐色	32 甕 (b~c)ハケメ後ヨコナデ、(d)等間隔止め簾状文、砂粒混入、褐色
18 壺 砂粒混入、にぶい橙色、荒れている	25 壺 細砂粒混入、浅黄橙色	34 甕 (a)無節縄文、砂粒混入、灰褐色
19 壺 外面、(b)波状文、内面ハケメ、砂粒多量に混入、明褐灰色	26 壺 浅黄橙色	35 甕 (d)波状文、砂粒多量に混入、浅黄色
20 壺 丹彩	27 甕 砂粒少量混入、にぶい褐色	38 甕 砂粒混入、明褐色
21 壺 (b)ヨコナデ、(c)ナデ、砂粒混入、灰白色	28 甕 (d)櫛描直線文、砂粒混入、褐色	39 甕 内面ヘラミガキ、砂粒多量に混入、にぶい褐色
22 壺 (b)ヘラ刻み、(c)ナデ、砂粒多量に混入、浅黄橙色	29 甕 細砂粒混入、橙色	40 台付甕 (d)2連止めの簾状文、砂粒混入、にぶい橙色
23 壺 砂粒混入、にぶい黄橙色	30 甕 (d)2連止め簾状文、(e)細かい波状文、暗赤褐色	
	31 甕 外面ヘラナデ、内面ヘラミガキ、にぶい橙色	

119号住居跡 (第53図、図版18)

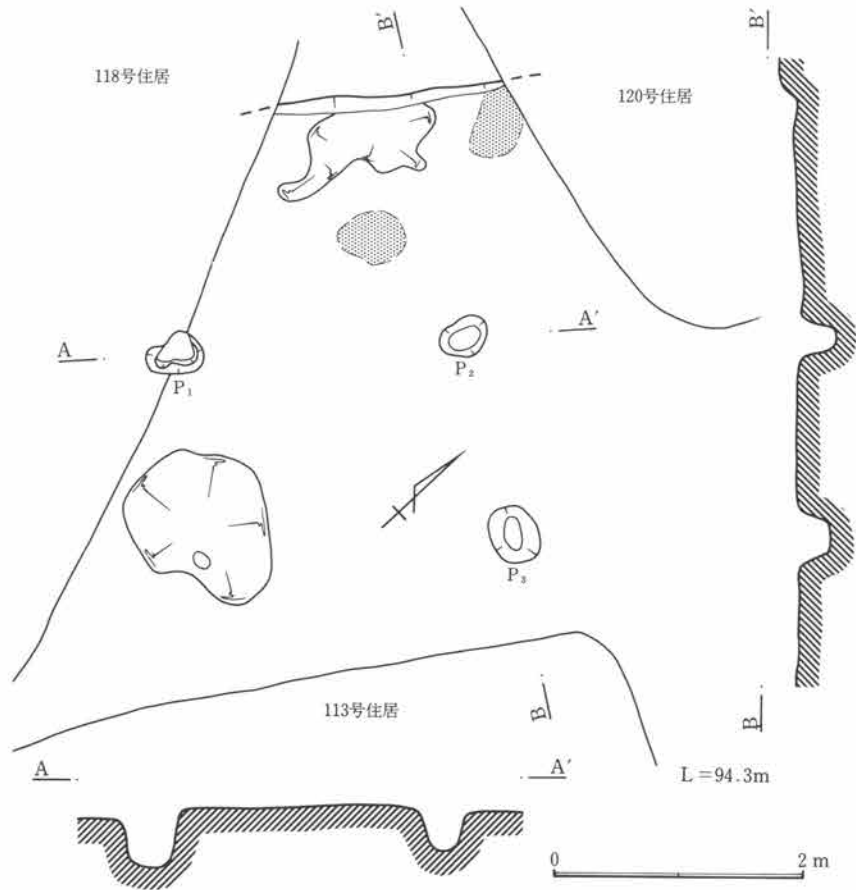
**位置** C地区住居群の北部に位置する(53-C38)。北に120号住居、東南に113号住居、西南に118号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 形状は不明。前出重複住居により把握することができなかった。規模不明。N-37°-E。

**周壁** 西北辺で周壁の一部分を検出する。検出できた壁高は約15cm。

**床面** 床面は暗褐色土(第IVb層)と、黄褐色ローム質土(第V層)との漸移層面に平坦面を造っている。

**柱穴** 2箇所主柱穴と思われるピットを検出する(P1、P2)。径30~40cmの不整形で深さも25~30cmで比較的浅い。主柱は4本構造と思われるが、南部分に不整形なより新しい時期の落ち込みがあるため検出できない。西南部のピット上には扁平な川原石が置かれている。地床炉の位置を奥側とすると東側のピット(P3)は主柱穴と考えにくい。



第53図 119号住居

**炉跡** 北西2主柱穴の外側、周壁との間に地床炉を設けている。

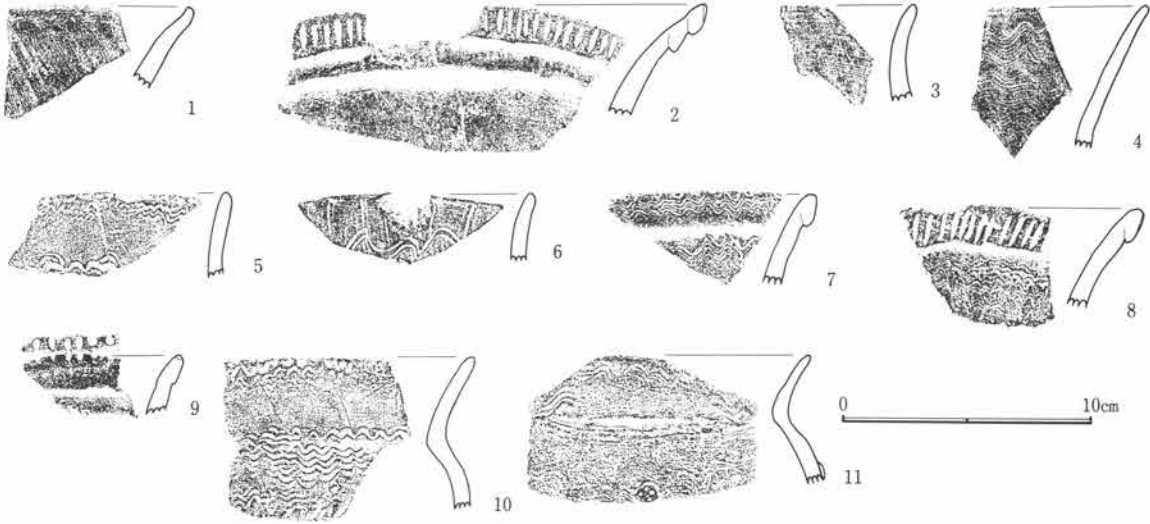
**時期** 弥生後期第3期

**遺物出土状態** 床面直上より弥生土器破片多数出土する。

**他の遺構との関係** 西南部で、118号住居(弥生後期第1期)と床面レベル差5cm前後で、北に120号住居(古墳前期)と床面同レベルで、東南に113号住居(古墳前期)と床面同レベルで重複する。

第39表 119号住居出土土器観察表(拓本)

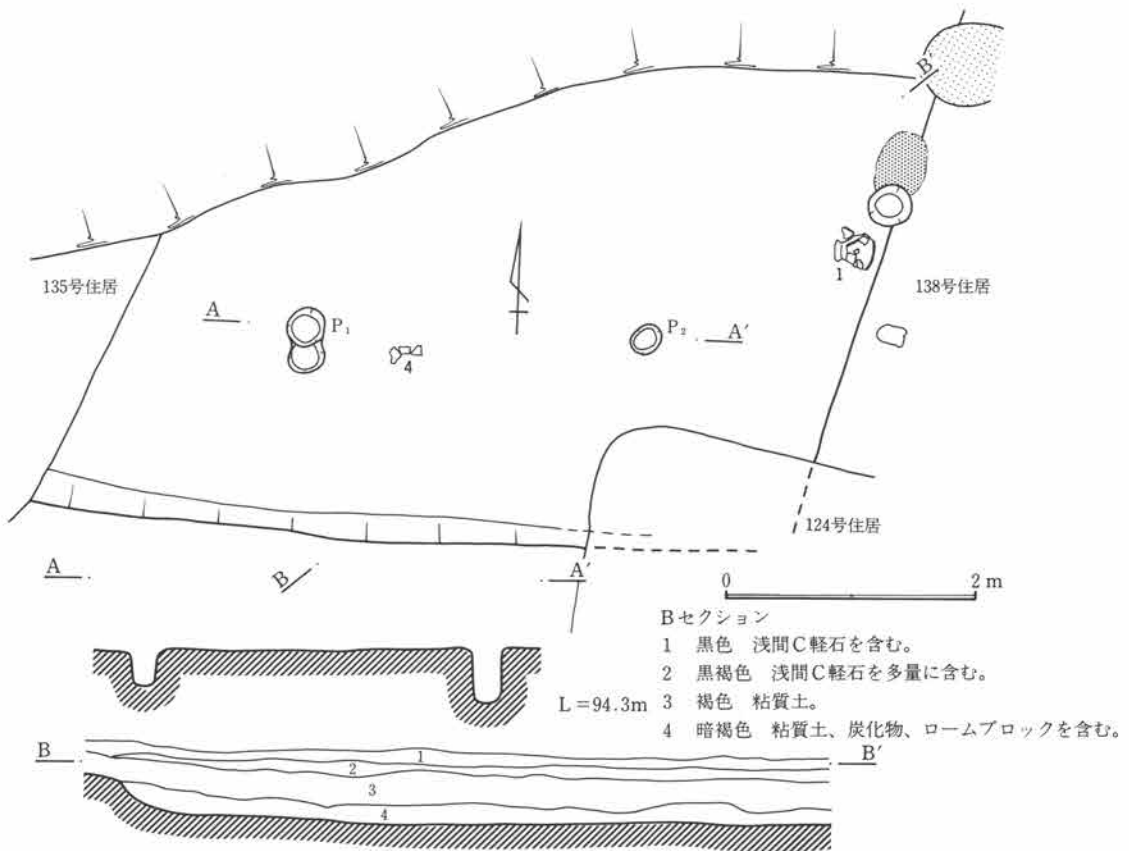
1 壺 内面ヨコナデ、細砂粒混入、灰白色	6 甕 内面ヘラナデ、細砂粒混入、灰褐色	9 甕 細砂粒混入、橙色
2 壺 細砂粒混入、褐灰色	7 甕 内面ハケメ後ヘラミガキ、細砂粒混入、灰褐色	10 台付甕 内面ヘラミガキ、細砂粒混入、にぶい橙色
3 甕 浅黄橙色	8 甕 内面ヘラミガキ、細砂粒混入、橙色	11 台付甕 粗砂粒混入、黒褐色
4 甕 細砂粒混入、橙色		
5 甕 細砂粒混入、にぶい橙色		



第54図 119号住居出土遺物

123号住居跡 (第55図、図版18、19)

位置 C地区住居群北端部に位置する(43-C33)。染谷川の河岸縁辺部にあつて、住居の北半部を失っている。西部で135号住居、東部で124号、138号住居と重複する。



第55図 123号住居

6 検出した遺構、遺物

**形状、規模、方位** 形状は不明。西、東、北の3方を後出住居、河川により切られ、南辺で部分的に周壁を検出するのみ。規模不明。方位は、N-2°-W。

**周壁、壁溝** 周壁は南辺部に検出するのみである。検出できた周壁の高さは約20cmである。壁土の上部は暗褐色粘質土（第IVb層）、下部は黄褐色ローム質土（第V層）。壁溝は認められない。

**床面** 床面は黄褐色ローム質土（第V層）面を堅く平坦に踏み固めている。

**柱穴** 支柱穴を2箇所を検出する。共に円形で径は20~25cm、深さ約50cm。柱穴として可能性のあるピットは他にも数箇所を検出しているが、支柱穴として位置的により適当なピットはP1、P2の2箇所のピット以外には見られない。P1では2個のピットが重複しているが北側のものが本住居の支柱穴として適当と思われる。

**炉跡** 不明確。検出できなかった。東辺部、138号住居との重複部に焼土帯があるが位置的に炉跡とは認められない。

**遺物出土状態** 床面直上より多量の弥生土器破片、及び半完形土器が出土している。特に住居北半部において土器が集中して出土しており、口縁~胴下半部まで比較的遺存状態の良い壺が床面密着で横倒し状態で出土している。

**時期** 弥生後期第1期

**他の遺構との関係** 西に135号住居（古墳前期）と床面同レベルで重複し、東に138号住居（弥生後期）と重複する。床面レベルは138号住居の方が僅かに高い。

第40表 123号住居出土土器観察表

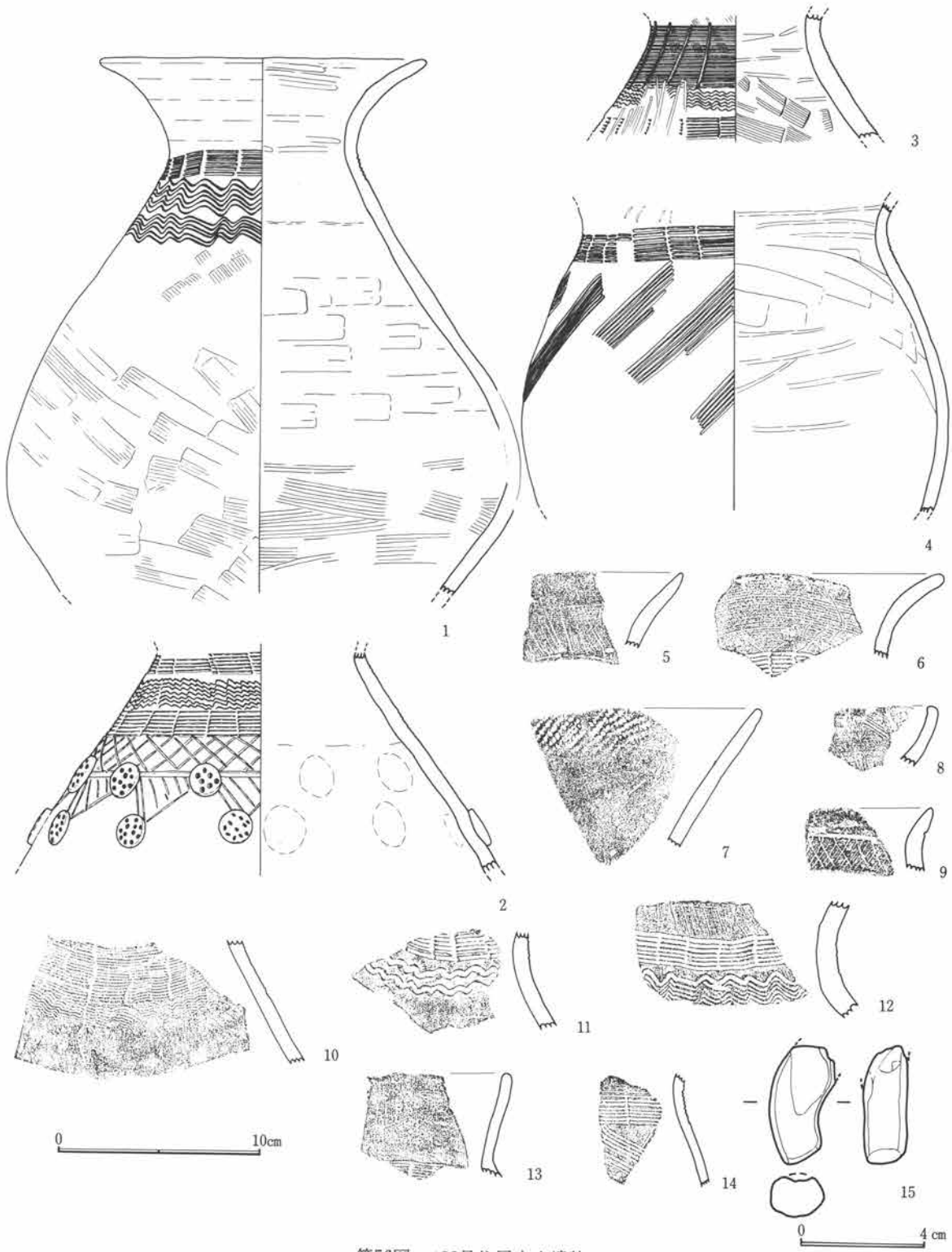
遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 16.0 胴 25.5	口辺部は大きく外反する。	外面 頸部は6本単位の等間隔止め←簾状文。胴部はハケメ後、全面ヘラミガキ。 内面 口辺部は横方向ヘラミガキ、胴上部はヘラナデ、下部はハケメ。	細砂粒混入 堅緻 橙色	胴下位~底部欠損
2	壺			外面 頸部は等間隔止め←簾状文、胴上部は波状文、7本単位の等間隔止め→簾状文、ヘラ描斜格子文、横沈線文、沈線文下ヘラ描鋸歯文、鋸歯文コーナーに刺突をもつ円形浮文、胴部はヘラミガキ。 内面 ヘラナデ、外面からの付文押圧による凸形の膨らみあり。	中砂粒混入 堅緻 浅黄橙色	頸~胴上位1/2
3	壺			外面 頸部はハケメ後、櫛描直線文の上に縦のヘラ描沈線、胴上部は波状文、等間隔止め←簾状文、文様の上にヘラミガキが入る。 内面 頸部はヘラミガキ、胴部はハケメ後ヘラミガキ。	細砂粒混入 やや堅緻 明黄褐色	頸~胴上位1/2
4	甕	胴 21		外面 頸部はハケメ後8本単位の等間隔止め←簾状文、胴部はナデ後櫛描斜行直線文。 内面 ヘラナデ後ヘラミガキ。	細砂粒混入 やや堅緻 灰白色	頸~胴部1/2

第41表 123号住居出土土器観察表（拓本）

5 壺 (d)等間隔止め簾状文、中砂粒混入	9 壺 (d)ヘラ描斜格子文、砂粒混入、灰褐色	11 壺 (d)等間隔止め簾状文、2本1単位の沈線波状文、細砂粒混入、黄橙色
6 壺 砂粒混入、橙色	10 壺 外面丹彩、砂粒混入、橙色	12 壺 中砂粒混入、橙色
7 甕 (a)縄文、細砂粒混入、灰白色		13、14 甕 砂粒混入、灰褐色
8 壺 中砂粒混入、浅黄褐色		

第42表 123号住居出土土玉類観察表

遺物番号	名称	長さ (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	成形	整形	材質	遺存状態 備考
15	勾玉	—	1.7	—	尾端部はやや平坦に作られる、胴断面形は円形。	全体的にヘラミガキ。	土	頭部欠損



第56図 123号住居出土遺物

6 検出した遺構、遺物

124号住居跡 (第57図、図版19、20)

**位置** C地区住居群の北端部に位置する(44-C30)。北に138号住居、西に125号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。住居の遺存状態は全体的に良好である。規模は長軸9m前後になると思われる。短軸6.1mを測る。方位はN-10°-E。

**周壁、壁溝** 周壁は138号住居との重複部で明確さを欠くがほぼ全周にわたって良好に検出する。検出できた壁高は15cm。壁土は暗褐色粘質土(第IVb層)。周壁に沿って焼土塊や黒色灰が散在している。壁溝は認められない。

**床面** 床面は黄褐色ローム質土(第V層)を堅く平坦に踏み固めている。全体的に黒色灰、炭化物が広がっている。炭化材も散見する。本住居は火災にあった可能性が高い。

**柱穴** 支柱穴を4箇所で見出す(P1~P4)。支柱は4本構造。支柱穴は複数のピットが集合するか不整形な形状をなしている。何度か柱の建て替えを行っていると思われる。それぞれの箇所に集合するピットは大きさ、深さが一様でない。

この他、周壁下に径25~30cm、深さ35cm前後の円形ピット列が見られる。ピット列は特に北辺に集中して検出している。上屋構造、あるいは周壁土留め防護のための施設に関わるものだろうか。

**炉跡** 不明確。検出することができなかった。東南部の2箇所に浅い窪みがあって、底面に焼土の痕跡が認められるが、炉跡と認めるには位置的に問題がある。

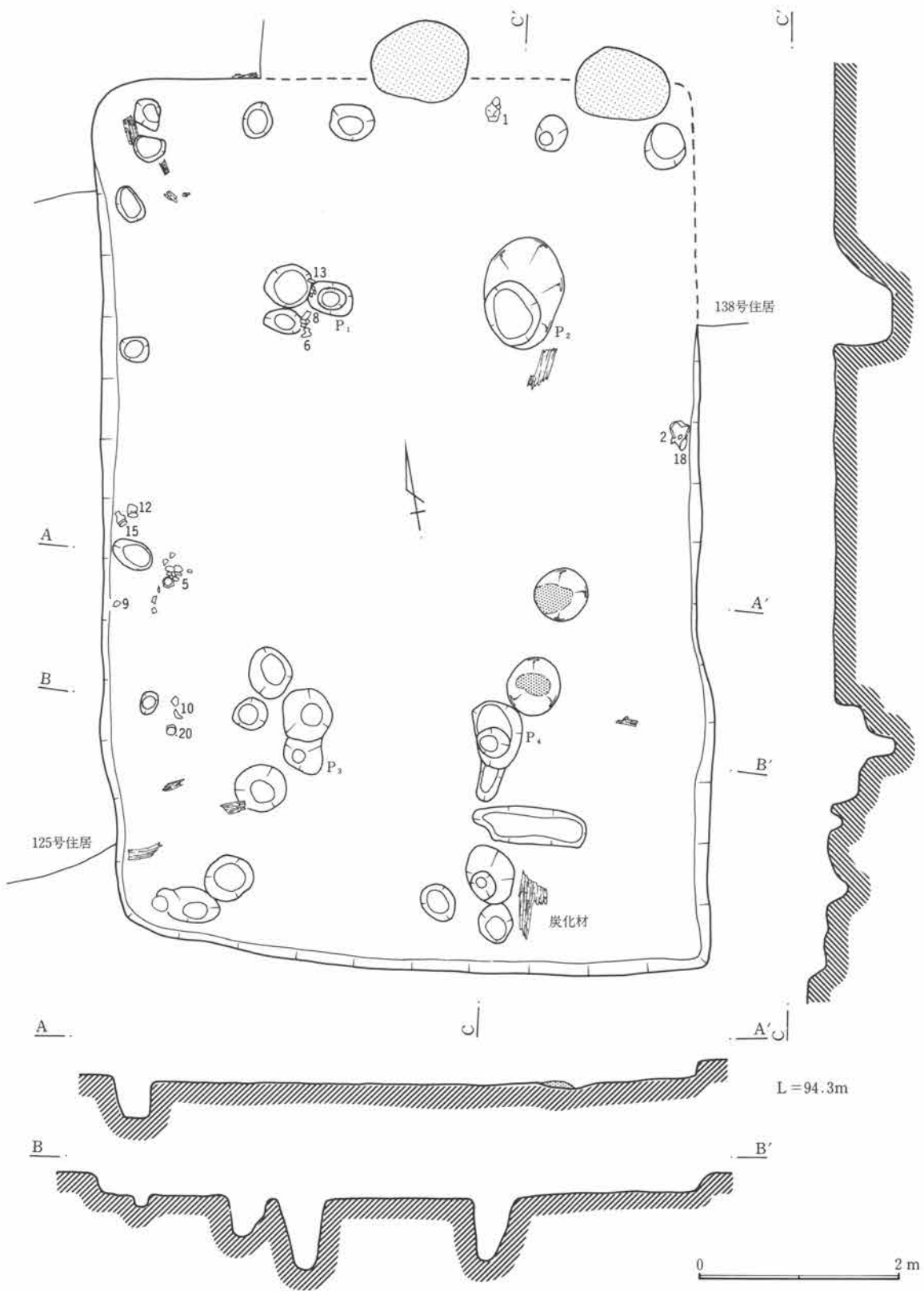
**遺物出土状態** 床面直上より欠損の少ないほぼ完形の弥生土器および破片が多量に出土している。土器は周壁下に床面と間隙なく横倒しの状態で出土するなど住居の廃絶と時間的な隔たりなく投棄などなされたものと思われる。

**時期** 弥生後期第3期

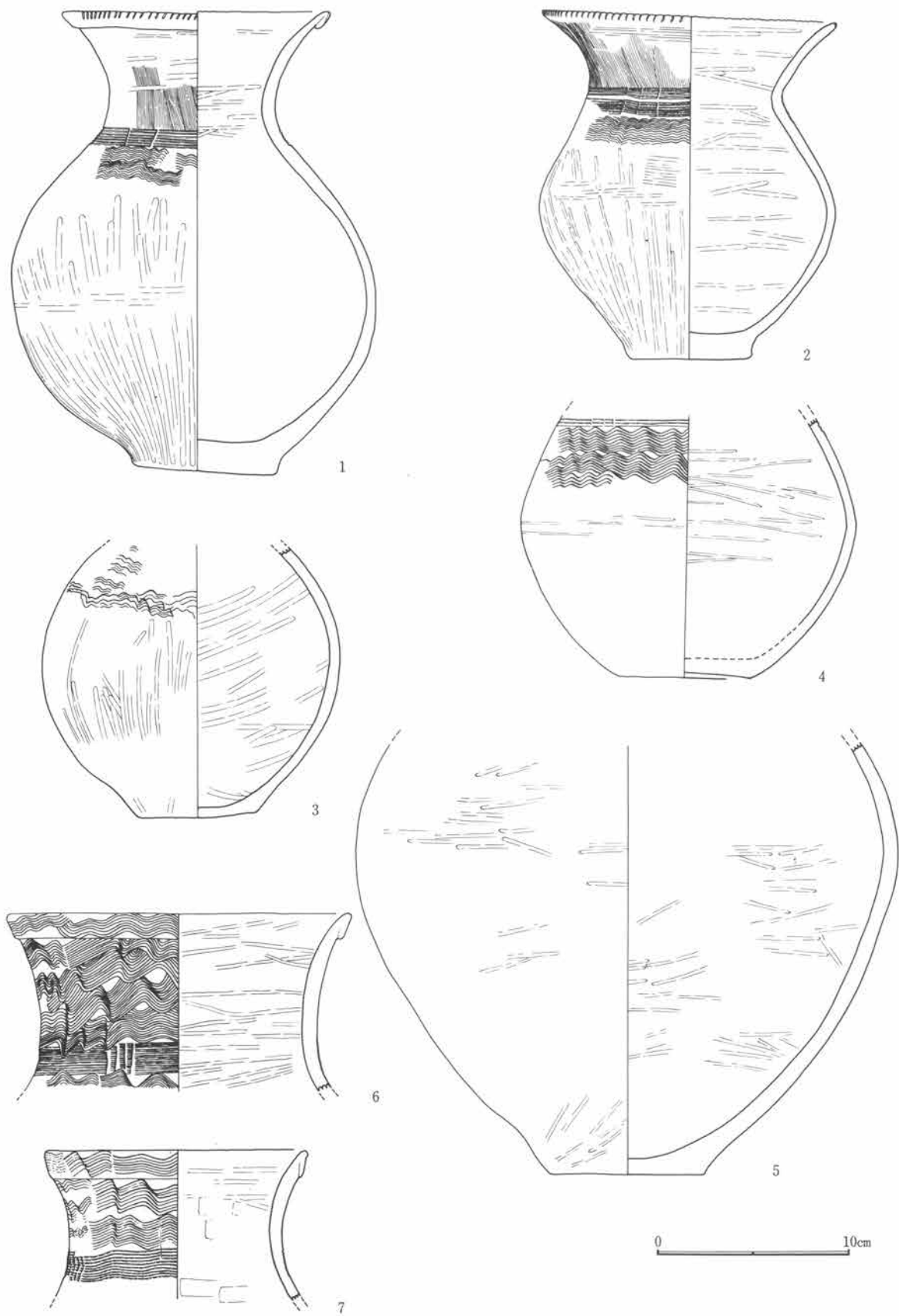
**他の遺構との関係** 西南部で125号住居(古墳前期)と重複する。125号住居の床面は本住居の床面よりも20cm前後高い。発掘調査時、両住居の重複部では125号住居の遺物と124号住居の遺物を分離できなかった。このため重複部の土器の分離は整理段階で行っている。図版20の124号住居の写真に見える覆土上層の土器は125号住居に属するものである。北部では138号住居(弥生後期)と重複する。床面レベルはほぼ同じである。先後関係は重複部に124号住居の炭化物が目立つ覆土や遺物の広がりがあることなどから、138号住居の方が古いと判断できる。

第43表 124号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 13.9 胴 18.9 底 7.5 高 23.8	折り返し口縁、口辺は緩やかに外反する。	外面 口縁端部は刻み目、口辺部はハケメ後ヨコナデ、頸部は7本単位の←簾状文、胴上部は8本単位の波状文、胴~底部はヘラナデ、ヘラミガキ。 内面 口辺部~頸部はヘラミガキ。	細砂粒、黒、白色粒混入 堅緻 にぶい黄褐色	口~胴部1/4周 底部
2	壺	口 15.3 胴 15.4 底 6.2	口辺部は緩やかに外反する。	外面 口縁端部は刻み目、口辺部はハケメ、頸部は3連止め←簾状文、胴上部は←波状文、胴~底部はハケメ後ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	中砂粒混入 堅緻 明褐灰色	口縁部1/4周、胴部1/4欠損

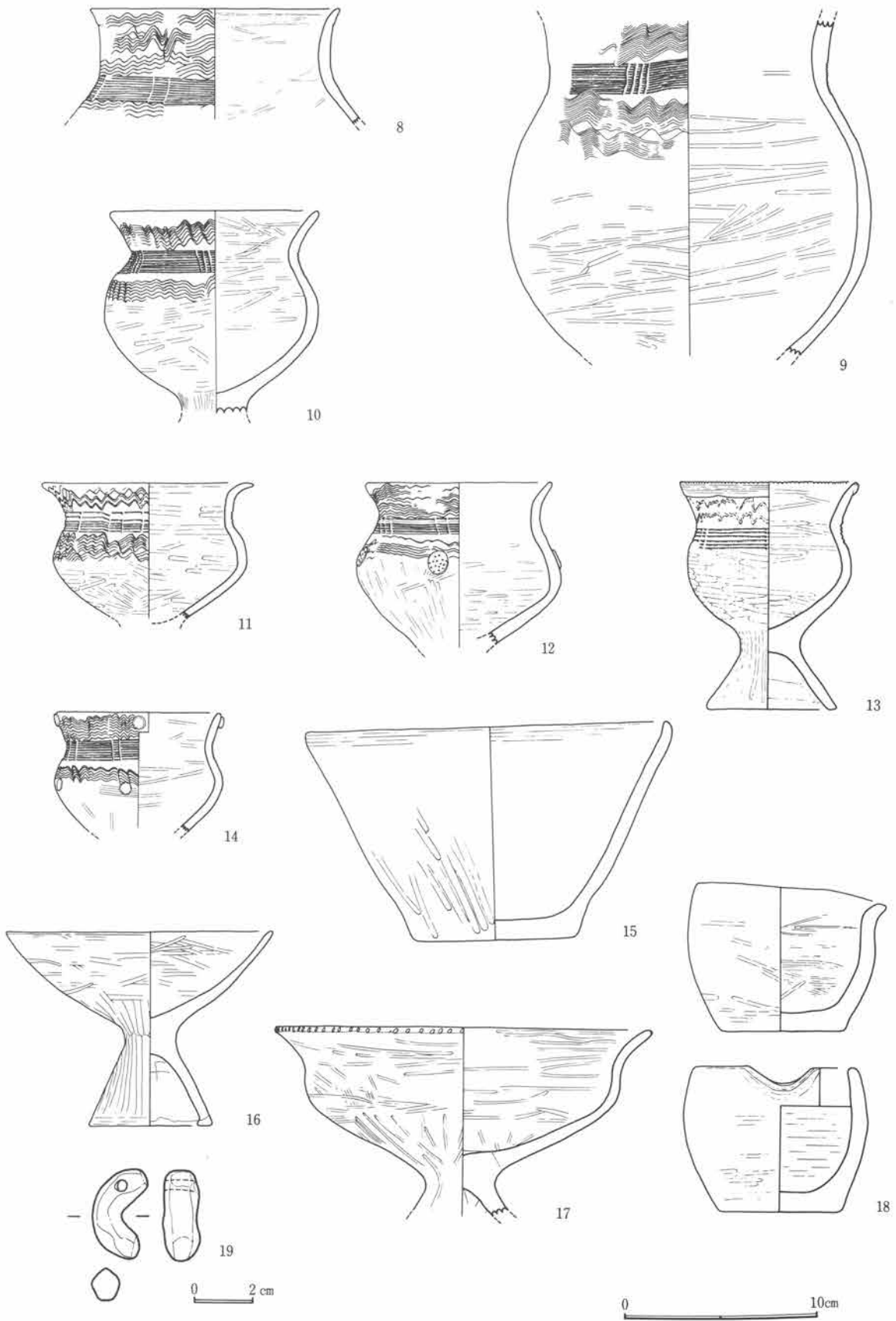


第57図 124号住居



第58図 124号住居出土遺物 (1)





第59図 124号住居出土遺物 (2)

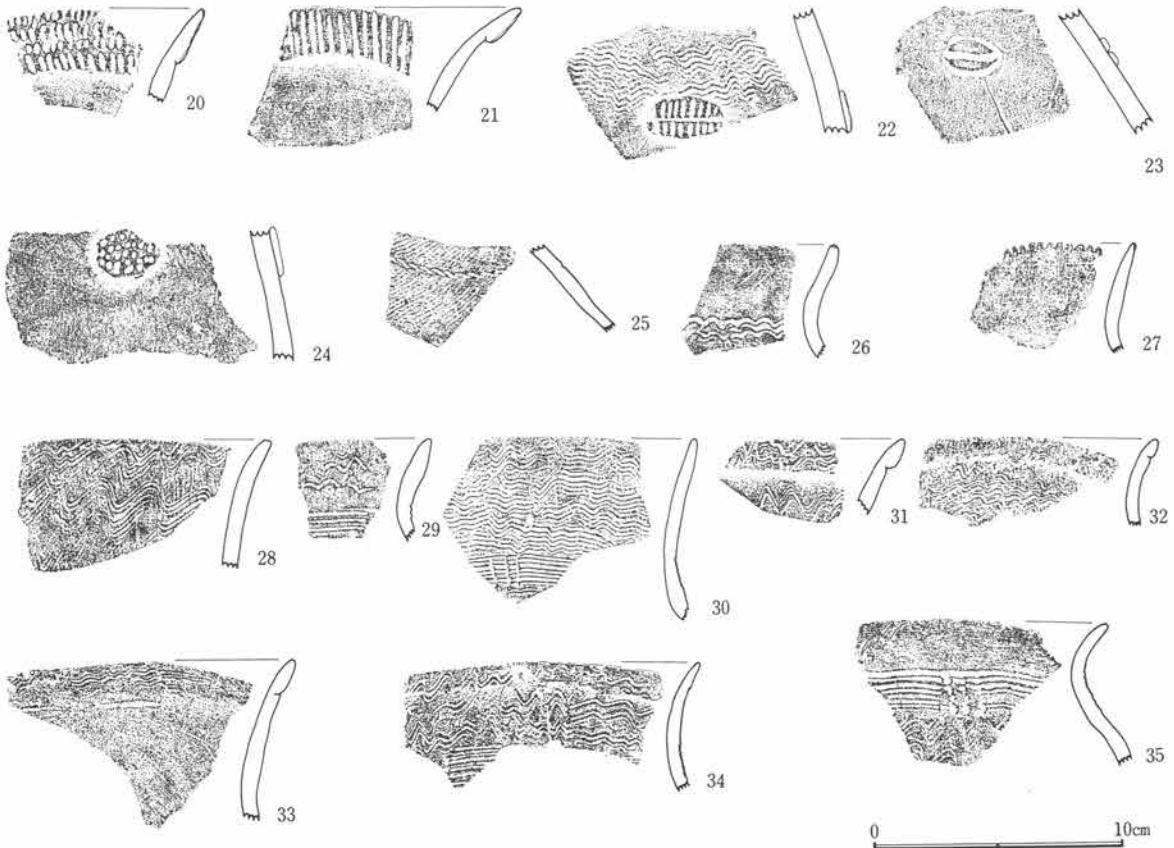
## 6 検出した遺構、遺物

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
3	壺			外面 胴上部は波状文、胴部はヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒、白色粒 混入 堅緻 明褐色	胴上位～底部
4	壺	胴 17.3	胴部は最大径が中位 にあって弱い稜を作 っている。	外面 肩部に3連止め簾状文を巡らす、胴上 位は下→上へ波状文3段を施す。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 やや堅緻 橙色	胴上位～底部 胴下位～底部の 片側に黒斑あり
5	壺	胴 28.0	最大径は胴上部に位 置する。	外面 全体に丁寧なヘラミガキ。 内面 胴部全体に丁寧なヘラミガキ、底部は ヘラナデ痕が粗くみられる。	微細粒混入 堅緻 明赤褐色	胴上位～底部 胴中位に径1.8 cm程の黒斑が1 箇所あり
6	甗	口 18.6	折り返し口縁。口～ 頸部は緩く外反す る。	外面 口辺部は波状文、頸部は4連止め←簾 状文、胴上部は波状文。 内面 口～頸部はヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にふい橙色	口縁～頸部1/4周
7	甗	口 13.6	折り返し口縁。口～ 頸部は外反する。	外面 口縁部は←波状文、頸部は10本単位の 4連止め←簾状文。 内面 口縁部はヨコナデ、口辺～頸部はヘラ ナデ。	中砂粒混入 堅緻 明黄褐色	口縁～頸部全周
8	台付甗	口 13.0	折り返し口縁。口縁 は緩やかに外反す る。	外面 口辺部は波状文、頸部は2連止め←簾 状文、胴上部は波状文。 内面 口～胴上部はヘラミガキ。	粗砂粒混入 堅緻 明赤褐色	口縁～胴上位1/4 周
9	甗	胴 18.8		外面 頸部は4連止め←簾状文、胴上部は波 状文、胴部はヘラミガキ。 内面 胴部はヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 明赤褐色	頸～胴部1/4
10	台付甗	口 11.0	口辺部は緩やかに外 反する。	外面 口縁部はヨコナデ、口辺部は波状文、 頸部は3連止め←簾状文、胴上部は波状文、 胴部はヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	中砂粒混入 堅緻 褐色	脚台部欠損
11	台付甗	口 11.0 胴 10.0	口縁部は強く外反す る。	外面 口辺部は波状文、頸部は等間隔止め← 簾状文、胴上部は波状文、胴部はヘラミガキ。 内面 口辺部はヨコナデ、胴部はヘラミガキ。	中砂粒、黒色粒 混入 堅緻 橙色	口縁～胴下位全 周
12	台付甗	口 9.6 胴 10.5	口辺部は緩やかに外 反する。	外面 口縁部はヨコナデ、口辺部は波状文、 頸部は8本単位の2～3連止め簾状文、胴上 部は8本単位の波状文、胴～底部はハケメ後 ヘラミガキ、6個以上の刺突を持つ円形浮文 を貼付している。 内面 胴～底部はヘラミガキ。	粗砂粒、黒、白 色粒混入 やや堅緻 褐色	脚台部欠損
13	台付甗	口 9.2 胴 8.4 高 11.7	折り返し口縁。口縁 は外反する。	外面 口縁端部に刻み目、口縁部はヨコナデ、 口辺部は←波状文、頸部は3連止め←簾状文、 胴部はヘラミガキ、脚台部は縦ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ、脚台部はヘラナデ。	細砂粒混入 堅緻 灰褐色	完形
14	台付甗	口 8.5 胴 8.7	口辺部はほぼ直状に 外反する。	外面 口辺部は波状文、口縁部は円形浮文4 個、頸部は2連止め←簾状文、胴上部は波状 文、胴部円形浮文6個、胴部はヘラミガキ。 内面 頸～胴部はヘラミガキ。	中砂粒、黒色粒 混入 堅緻 浅黄橙色	口縁～胴部1/4周
15	鉢	口 18.6 高 10.9	口縁部は短く内湾す る。	外面 口縁部はヨコナデ、胴部はヘラミガキ。 内面 口縁部はヨコナデ、胴部は部分的にヘ ラミガキ痕が見える。	細砂粒混入 堅緻 にふい赤褐色	口縁～底部1/4周

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
16	高坏	口 13.9 脚 6.4 高 10.0		外面 坏部はヘラナデ、脚部はヘラナデ、ヘラミガキ、脚端部はヨコナデ。 内面 坏部はヘラナデ、脚部はヘラナデ。	粗砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	口縁一部欠損
17	高坏	口 19.6	坏部は内湾し口縁部で外反する。	外面 口縁端部は刻み目、坏部はハケメ後ヘラミガキ。 内面 坏部はヘラミガキ、脚部はヘラ痕。	中砂粒混入 堅緻 明赤褐色	口縁～脚上部1/2周
18	片口	口 8.5 底 6.4 高 7.4		外面 胴～底部はヘラミガキ。 内面 ハケメ後、ヘラナデ。荒れている。	粗砂粒混入 やや堅緻 茶褐色	完形

第44表 124号住居出土玉類観察表

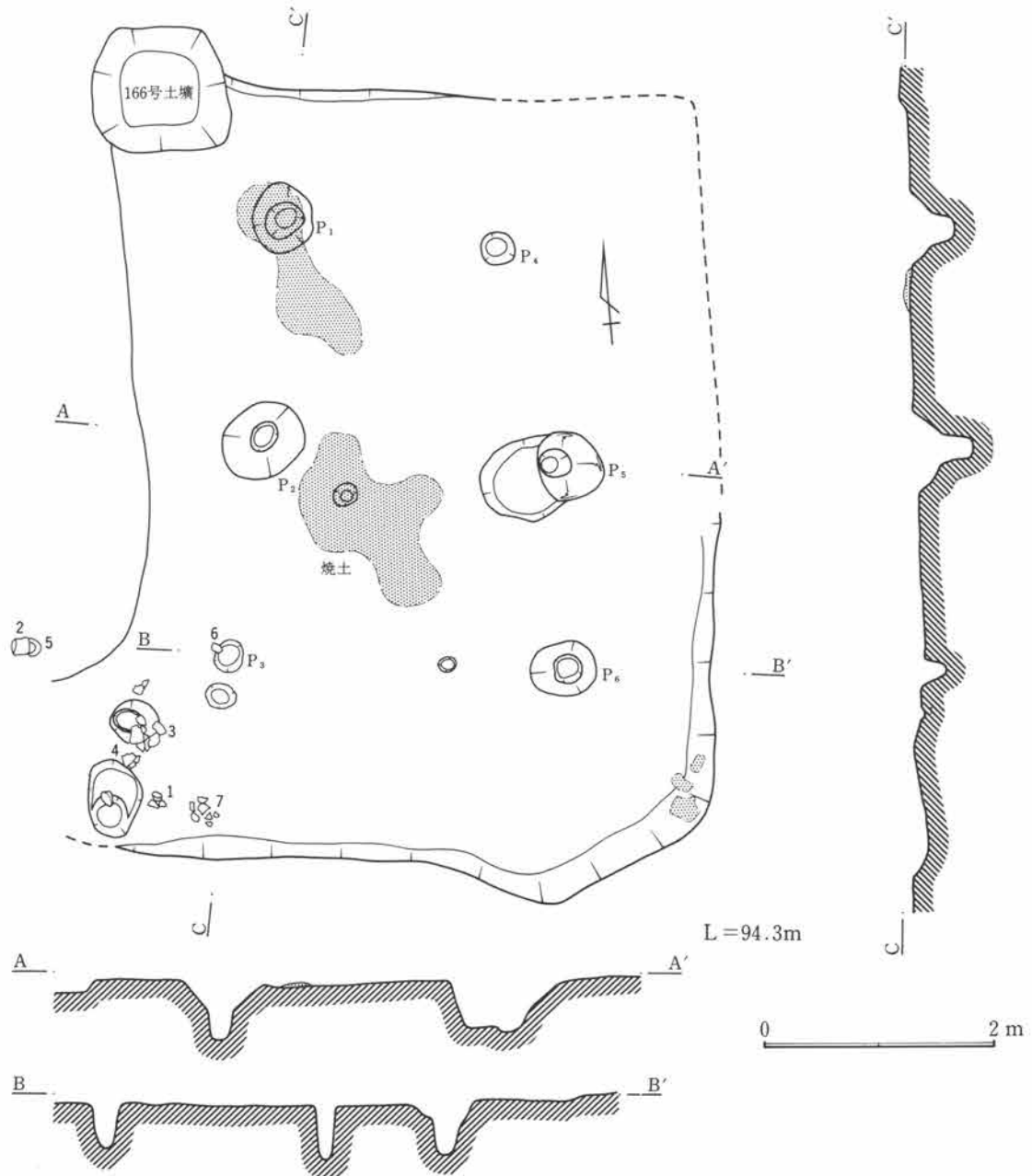
遺物番号	名称	長さ (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	成形	整形	材質	遺存状態備考
19	勾玉	3.1	1.0	0.4	頭、尾部両端、断面形は丸い、指オサエ痕目立つ。	全面ミガキ、凹凸目立つ。	土	完形



第60図 124号住居出土遺物 (3)

第45表 124号住居出土土器観察表 (拓本)

20 壺 砂粒混入、にぶい橙色	27 甕 (a)鋭いヘラ先による刻み目、内面ヘラミガキ、細砂粒混入	32 甕 中砂粒混入
21 壺 砂粒混入、灰褐色	28 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい橙色	33 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい橙色
22 壺 砂粒混入、灰褐色	29 甕 中砂粒混入、にぶい橙色	34 甕 細砂粒混入、橙色
23 壺 砂粒混入、にぶい橙色	30 甕 砂粒混入、にぶい橙色	35 台付甕 内面ヘラミガキ、砂粒多量に混入、にぶい赤褐色
24 壺 中砂粒混入、にぶい橙色	31 甕 灰褐色	
25 壺 砂粒混入、灰白色		
26 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入		



第61図 126号住居

## 126号住居跡 (第61図、図版20、21)

**位置** C地区住居群の北部に位置する(48-C32)。西に112号住居と重複し、東に125号住居と隣接する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。遺存状態は全体に悪い。西部で112号住居、東部で125号住居との重複により、重複部の形状は不明。南辺、及び北辺の一部で周壁が見られるが遺存状態は悪く、本来の形状より崩れていると思われる。規模は長軸6.7mを測る。短軸は5.5m前後になるだろう。短軸の長さは支柱穴の位置関係からの推定値である。方位はN-5°-E。

**周壁、壁溝** 周壁は南辺と北辺の一部に検出するが遺存状態は悪い。検出した周壁の高さは約15cmである。壁土は暗褐色粘質土(第IVb層)。壁溝は認められない。

**床面** 床面は黄褐色ローム質土(第V層)で、堅く踏み固められた面を検出する。南東部では面を把握できない。中央部から西にかけて焼土と黒色灰が散乱する。

**柱穴** 支柱穴は6箇所で見出す。6支柱穴の配置は梯形をなしており、各柱穴の形状や深さは比較的一律である。P1、P2、P5、P6はロート状を示し、中段は径20cm前後の円形ピットとなる。深さもそれぞれ50cm前後とほぼ同様である。本住居の支柱は6本構造の可能性は高い。しかし住居の遺存状態や支柱穴の配置関係から見て、確実とまでは言い切れない。

**炉跡** 中央部、及び北西部にかけて焼土帯を見る。炉跡は中央部焼土帯の範囲内にあったであろうが火床部の位置が明確に特定できない。

**遺物出土状態** 西南コーナー部床面直上より弥生土器の大形破片が多量に出土している。出土土器には胴下半部を欠く2個体の甕が、床面上から5cmの位置に重なり合って出土している。土器の他、出土遺物には完形の紡錘車や土製勾玉がある。

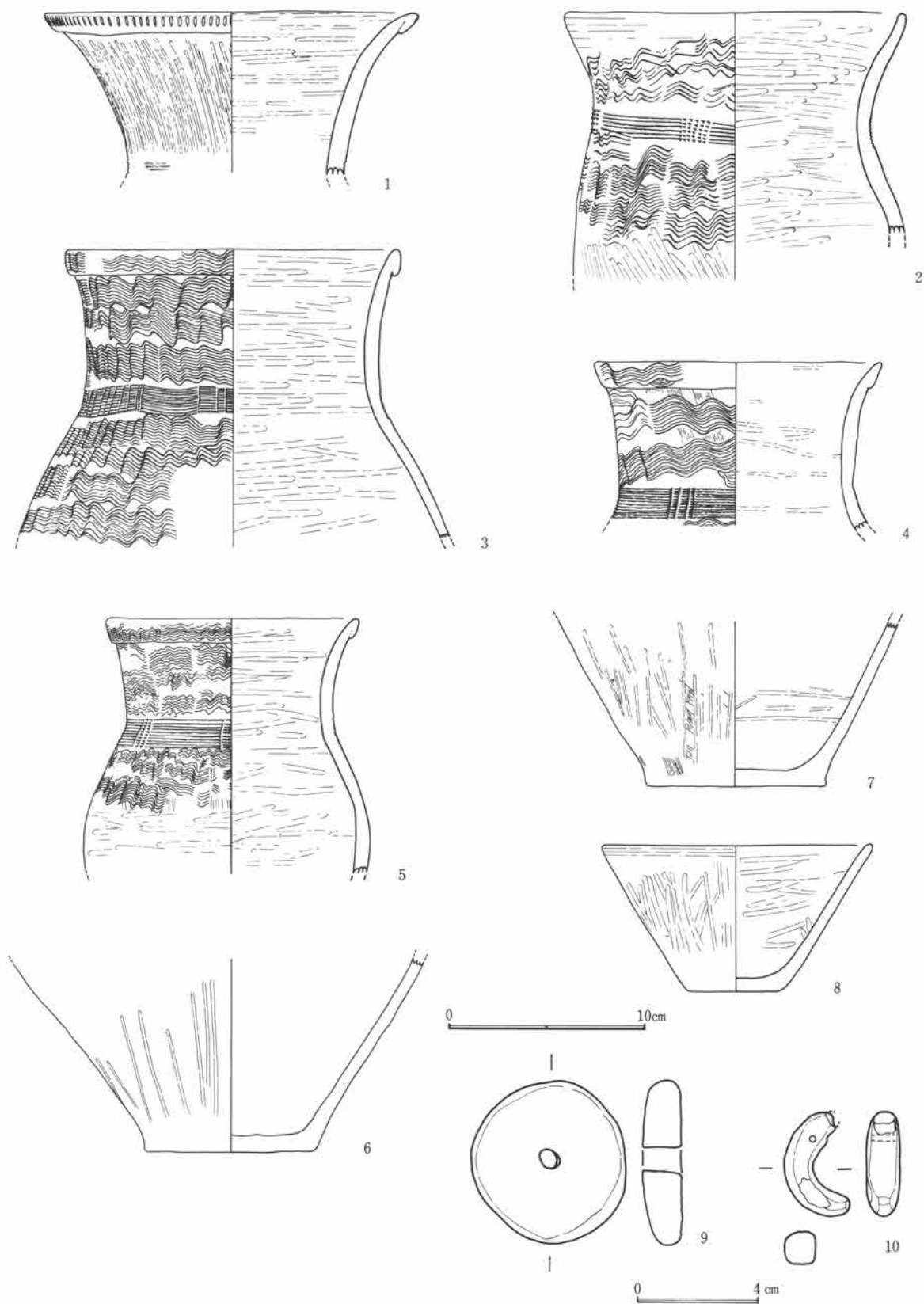
**時期** 弥生後期第3期

**他の遺構との関係** 西部で112号住居(弥生後期第1期)と重複する。126号住居の覆土上約10cmに134号住居(古墳前期)の床面を検出する。重複域は不明確。

第46表 126号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	口 19.0	折り返し口縁。口縁は、緩やかに外反する。	外面 折り返し口縁部はヘラ状工具による刻み目、口辺部はヘラミガキ、頸部は簾状文。 内面 口縁部はヨコナデ、口辺部以下はヘラミガキ。	細砂粒、黒色粒混入 堅緻 にぶい橙色	口縁 $\frac{1}{2}$ 周
2	甕	口 17.2	口辺部はやや内湾する。	外面 口縁部はヨコナデ、口辺部は←波状文、頸部は6本単位の5連止め←簾状文、胴上部は波状文、胴部はヘラミガキ。 内面 口縁部はヨコナデ、口辺～胴部はヘラミガキ。	粗砂粒混入 堅緻 褐色	口縁～胴上位ほぼ全周
3	甕	口 16.8	折り返し口縁。口辺は、僅かに外反する。	外面 口縁部は→波状文、口辺部は→波状文、頸部は3連止め→簾状文、胴上部は→波状文。 内面 口縁部はヨコナデ、口辺～胴部はヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	口縁～胴上位 $\frac{1}{2}$ 周
4	甕	口 14.6	折り返し口縁、口辺は長く外反する。	外面 ハケメ後頸部は13本単位の4連止め←簾状文、折り返し部に波状文、口辺部は12本単位の波状文上～下2段、頸部は波状文。 内面 ヘラミガキ。	2～3mmの小石混入 やや軟弱 にぶい赤橙色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周強

6 検出した遺構、遺物



第62図 126号住居出土遺物 (1)

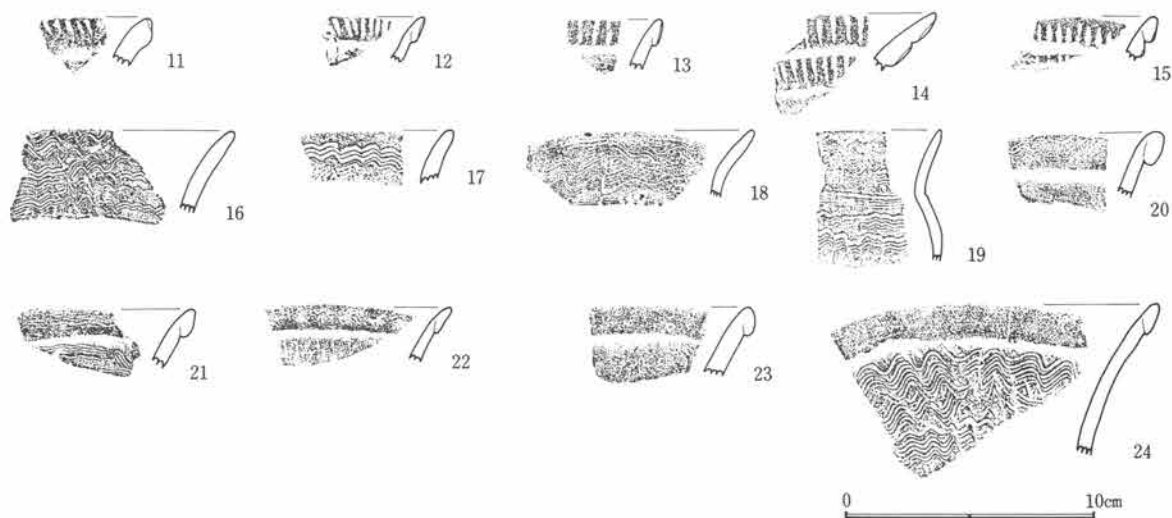
遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
5	甕	口 12.8	折り返し口縁、口辺は緩やかに外反する。	外面 口縁部はヨコナデ後←波状文、口辺部はハケメ後←波状文、頸部は9本単位3連止め←簾状文、胴上部は←波状文、以下はヘラミガキ。 内面 口縁部はヨコナデ、ロ〜胴部はヘラミガキ。	中砂粒混入 堅緻 赤褐色	口縁〜胴上位全周
6	壺	底 8.4		外面 胴下部〜底部はヘラミガキ。 内面 器面が荒れている。	細砂粒混入 堅緻 にぶい赤褐色	胴〜底部 $\frac{1}{2}$
7	甕	底 9.0		外面 胴部はハケメ後ヘラミガキ、底部はヘラミガキ。 内面 胴部はヘラミガキ、底部ナデ。	細砂粒混入 堅緻 灰褐色	胴下位〜底部 $\frac{1}{2}$
8	鉢	口 13.8 底 4.4 高 7.2		外面 体部はヘラミガキ。 内面 体部はヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	口縁 $\frac{1}{2}$ 欠損

第47表 126号住居出土土製品観察表

遺物番号	名称	計測値(cm)	成形	整形	胎土・焼成	色調	備考
9	土製紡錘車	外径 5.5 孔径 0.6	中央孔の方向、形状は整っている。	器面は丁寧なミガキ、平滑に磨かれている。	砂粒目立たず 堅緻	にぶい黄橙色	完形

第48表 126号住居出土玉類観察表

遺物番号	名称	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	成形	整形	材質	遺存状態備考
10	勾玉	3.5	1.1	1.2	0.2	頭、尾部両端が細まっている。孔が比較的小さい。	表面調整はやや粗い、凹凸が目立つ、全面ミガキ。	土	頭部一部欠損



第63図 126号住居出土遺物 (2)

第49表 126号住居出土土器観察表 (拓本)

11 壺 中砂粒混入、にぶい橙色、内面丹彩	17 甕 内面(b)ヨコナデ、砂粒混入、にぶい 橙色	20 甕 細砂粒混入、にぶい橙色
12 壺 砂粒混入、明褐色	18 甕 内面(b)ヨコナデ、砂粒混入、にぶい 褐色	21 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、灰褐色
13 壺 砂粒混入、にぶい橙色	19 甕 砂粒混入、灰褐色	22 甕 砂粒混入、黒褐色
14 壺 砂粒混入、にぶい褐色		23 甕 砂粒混入、灰褐色
15 壺 砂粒混入、にぶい橙色、内面丹彩		24 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、黒褐色
16 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、灰褐色		

133号住居跡 (第64図、図版21)

**位置**・C地区住居群中央部やや北西寄りに位置する(59-C30)。南西部で130号住居、北東で170号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 形状は不明確。全体に遺存状態は悪い。コーナー部の形状が南、東両コーナーで著しく異なるが、それぞれ本来の形が崩れていることも考えられる。規模は長軸不明、西南-北東方向に5.2mを測る。方位はN-39°-W。

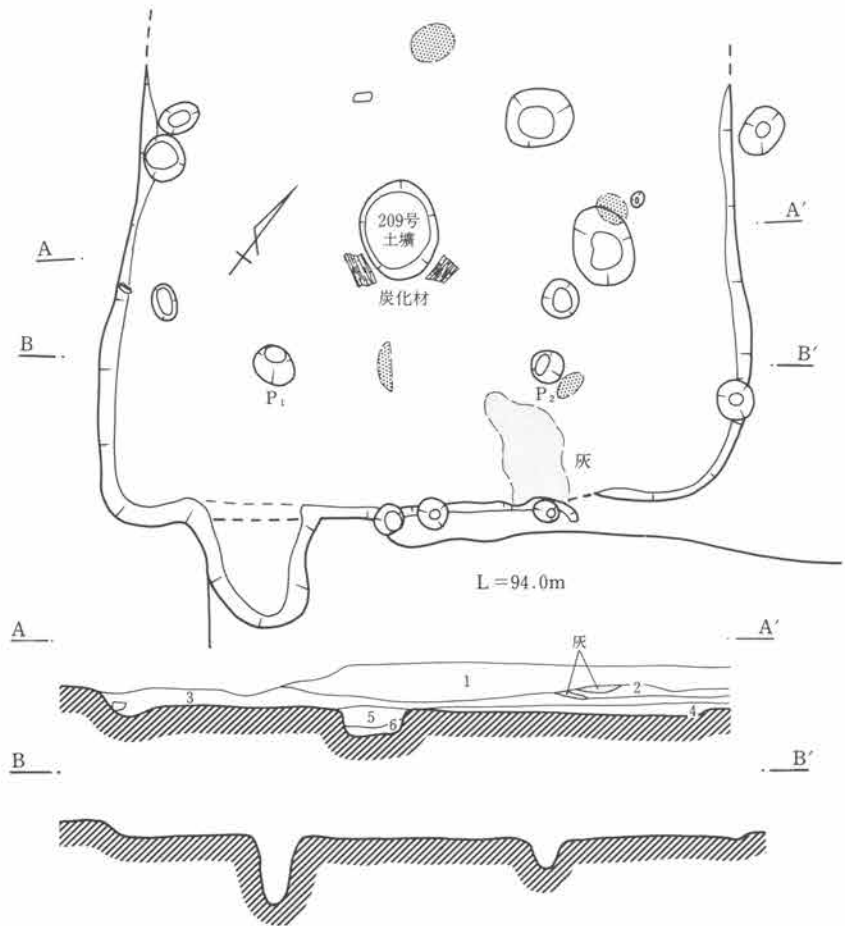
**周壁、壁溝** 周壁は南東半部で検出している。北西半部では検出できない。遺存状態は悪い。周壁の高さは15cm前後である。壁溝は認められない。

**柱穴** 主柱穴は東南側の2箇所で見出す(P1、P2)。主柱穴は径25~30cmで深さはP1が59cm、P2が22cm。

**床面** 床面は平坦に踏み固められている。床面上には焼土、黒色灰、炭化物、炭化材が散在する。火災に遭っていると思われる。

**炉跡** 中央部やや北西(奥)寄りに地床炉を設けている。火床面は径30cm程でよく焼けている。

**遺物出土状態** 床面直上より弥生土器破片が多数出土している。この他東南壁際に鹿の下顎骨が出土している。



Aセクション

- |                            |                                  |
|----------------------------|----------------------------------|
| 1 黒褐色 炭化物、焼土粒子を含む。         | 5 133号住居より新しい209号土壌埋土、炭化物を多量に含む。 |
| 2 黒褐色 ローム質土、黄灰色の硬いブロックを含む。 | 6 粘質土、ローム質土。                     |
| 3 黒褐色 炭化物、焼土粒子を含む。         |                                  |
| 4 黒褐色 ローム質土、黄灰色ブロックを含む。    |                                  |

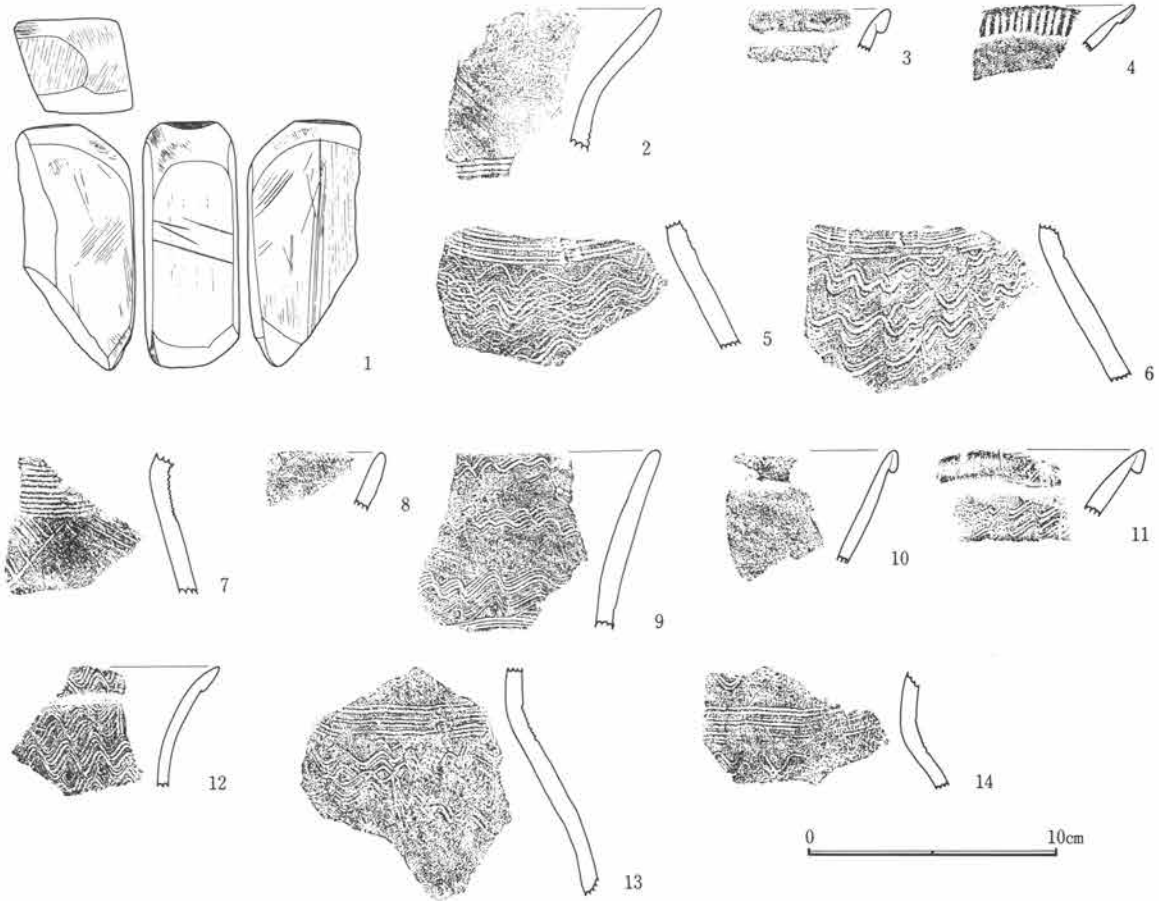
0 2 m

第64図 133号住居



時期 弥生後期第3期

他の遺構との関係 北半部は170号住居（古墳前期）と大きく重なる。床面レベル差は5cm前後。中央部にあるピットについては本住居と関わるものか不明。西部で130号住居（弥生後期～古墳前期）と重複。



第65図 130号住居出土遺物

第50表 133号住居出土石器観察表

遺物番号	名称	計測値(mm)	石質	重量(g)	特徴
1	砥石	98.0×42.0×38.2	流紋岩 (砥沢?)	167.5	中央部に巾4mmの溝をもつ。同様に側面も細い溝を3本もつ。磨痕は表、裏、側面等すべてに観察できる。

第51表 133号住居出土土器観察表（拓本）

2 壺 橙色	7 壺 (e)ヘラ描鋸歯文、内面ヘラミガキ、細砂粒混入、灰白色	10 甕 中砂粒混入、赤褐色
3 壺 砂粒混入、にぶい橙色	8 甕 中砂粒混入、灰褐色	11 甕 細砂粒混入、橙色
5 壺 砂粒混入、橙色	9 甕 内面ヘラミガキ、中砂粒混入、にぶい橙色	12 甕 砂粒混入、灰白色
6 壺 内面ヘラミガキ、砂粒混入、橙色		13 甕 砂粒多量に混入、黒褐色
		14 甕 砂粒混入、灰褐色

6 検出した遺構、遺物

138号住居跡 (第67図、図版21)

**位置** C地区住居群の北端部、染谷川河岸縁辺に位置する(41-C31)。西に123号住居、南に124号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。西北コーナー部を河川により失う。124号住居との重複部では住居の輪郭は不明確である。規模は長軸8.0m、短軸5.4mを測る。方位はN-15°-E。

**周壁、壁溝** 周壁は東半部で検出する。西半部では他の住居との重複、あるいは河川により把握できない。壁溝は認められない。

**床面** 黄褐色ローム質土(第V層)を堅く踏み固めた面を検出する。

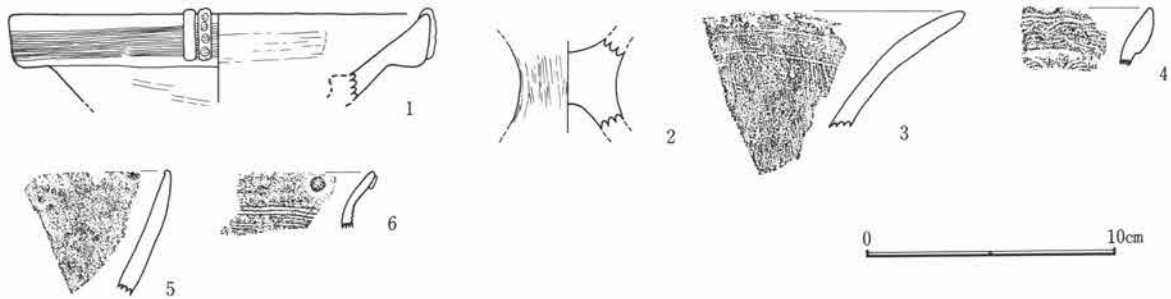
**柱穴** 主柱穴を4箇所で良好に検出する。主柱は4本構造である。4箇所の主柱穴は一樣に同様な形状で規模が大きい。上部はすり鉢状で2~3段に掘り込んでいる。規模はそれぞれ上端径90cm~1m、深さは60cm前後。

**炉跡** 北側(奥)2主柱穴と周壁の中間地点に地床炉を設けている。火床面は径40cm程で良く焼けている。この他東側の2主柱穴間にも比較的大きな焼土帯が見られる。これも炉跡になるかもしれない。

**遺物出土状態** 出土遺物は非常に少ない。覆土中より土器破片が数点出土している。

**時期** 弥生後期

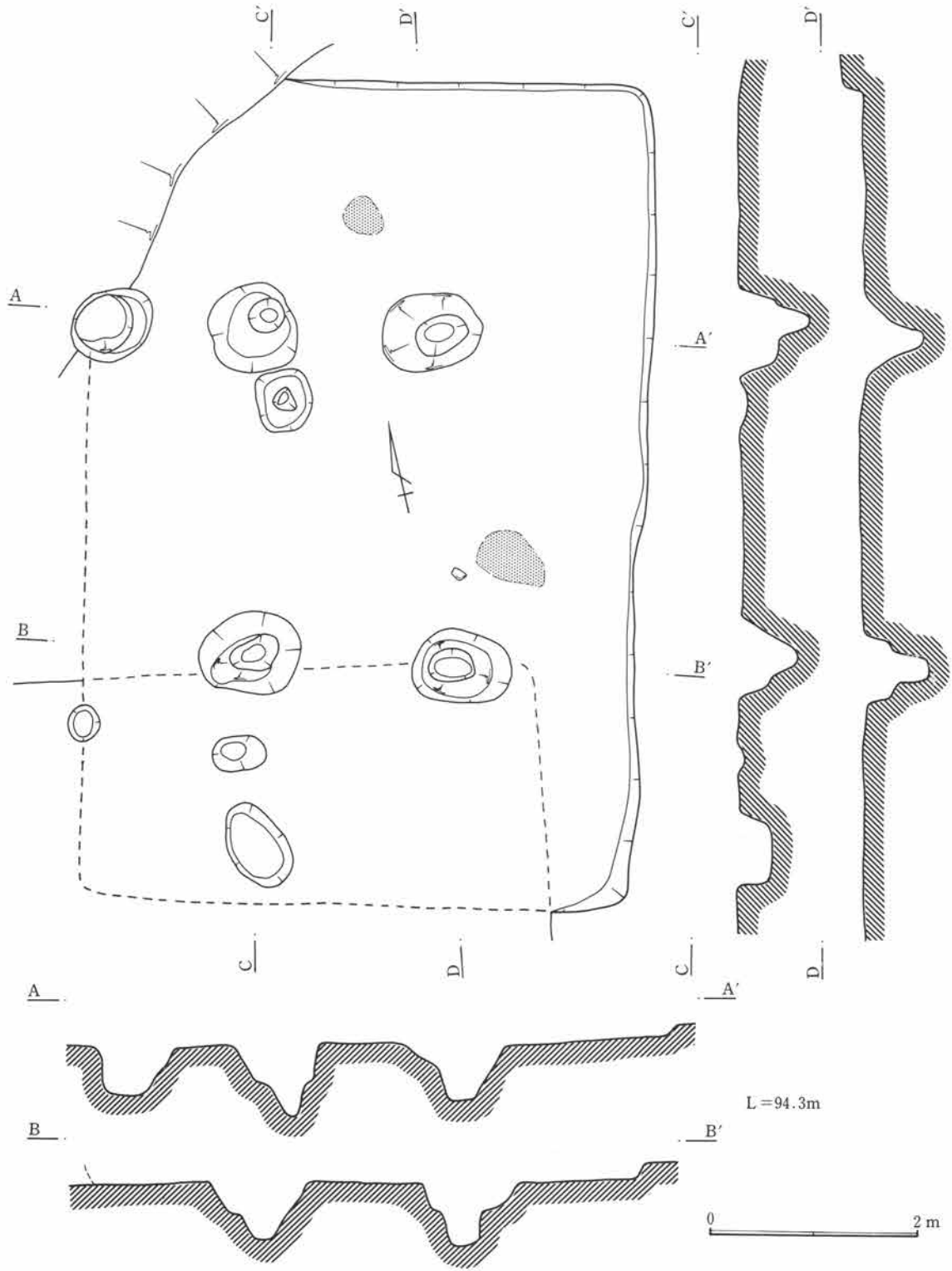
**他の遺構との関係** 南部で124号住居と床面同レベルで重複する。先後関係は124号住居の炭化物、炭化材が重複部に見られることから124号住居の方が新しいと認められる。西部で123号住居(弥生後期第1期)と重複する。床面レベルは123号住居の方が低いが重複域は明確ではない。



第66図 138号住居出土遺物

第52表 138号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 17.2		外面 口縁下部は櫛描直線文を2段巡らす。棒状浮文は2個貼付する。 内面 突帯は僅かに残存する。丁寧なヘラミガキ。	砂粒混入 やや軟弱 灰白色	口縁1/4周
2	高 杯			外面 丁寧なヘラミガキ。 内面 器面が荒れている。	砂粒混入 堅緻 にぶい褐色	脚部破片



第67図 138号住居

第53表 138号住居出土土器観察表 (拓本)

3 甕 中砂粒混入、にぶい黄褐色	5 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、黄橙色	6 小型台付甕 中砂粒混入、灰褐色
4 甕 中砂粒混入、にぶい黄褐色		

150号住居跡 (第68図、図版22、23)

**位置** C地区住居群北東部に位置する(41-C27)。住居の大部分が155号住居と重なっている。更に北に179号住居、南西に163号住居と重複する。周囲は特に住居群が密集して検出されている。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。やや菱形に歪んでいる。規模は長軸4.6m、短軸3.7mを測る。方位はN-29°-W。

**周壁、壁溝** 周壁はほぼ全周確認できる。ただし155号住居との重複部については、わずかな段が認められる程度であり、場所によってはレベルが同じで同一平面を見せている。検出できた壁高は西北コーナー部で10cmを測る。壁土は暗褐色粘質土(第IVb層)。壁溝は認められない。

**床面** 床面は暗褐色でやや灰色砂質土を平坦に踏み固めている。

**柱穴** 支柱穴を2箇所で見出す(P1、P2)。検出した2箇所の支柱穴は径30cmの円形をなす。やや不整形でピットの深さも一律ではない。北西部のピット(P1)は深さ20cmで特に浅い。2支柱穴の配置関係もやや不揃いで南部については支柱穴を検出することができない。しかし、本住居の支柱は4本構造であろう。その他東南コーナー部に径50cm程のピットが検出されている。ピットの中からは完形に近い土器などが出土している。

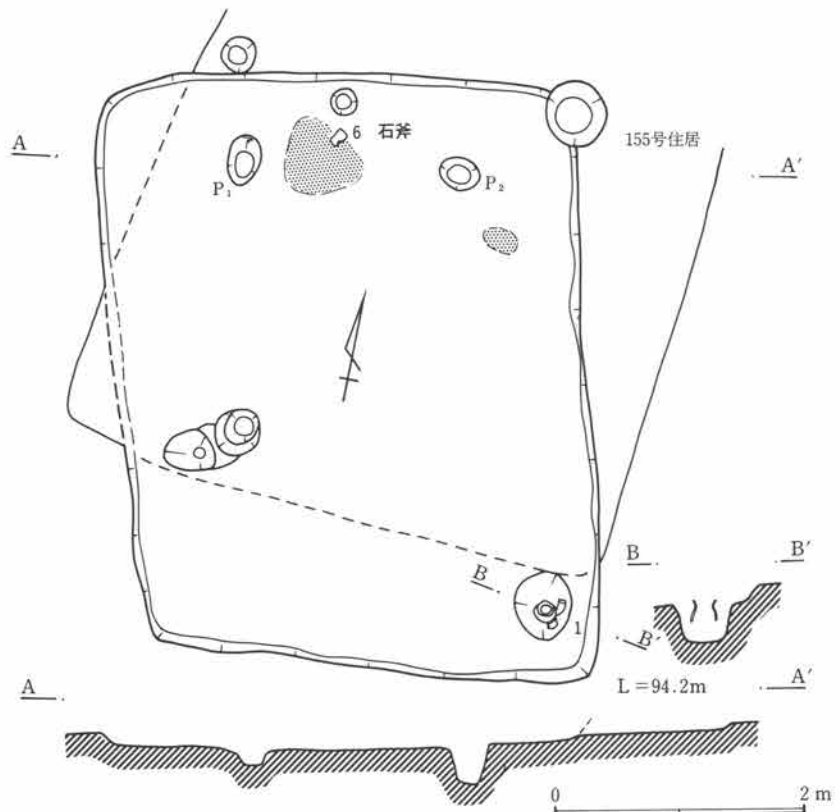
**炉跡** 北側(奥)支柱穴の間やや西よりに径1m程の地床炉が設けられている。

火床面は比較的大きく焼土が生成されている。

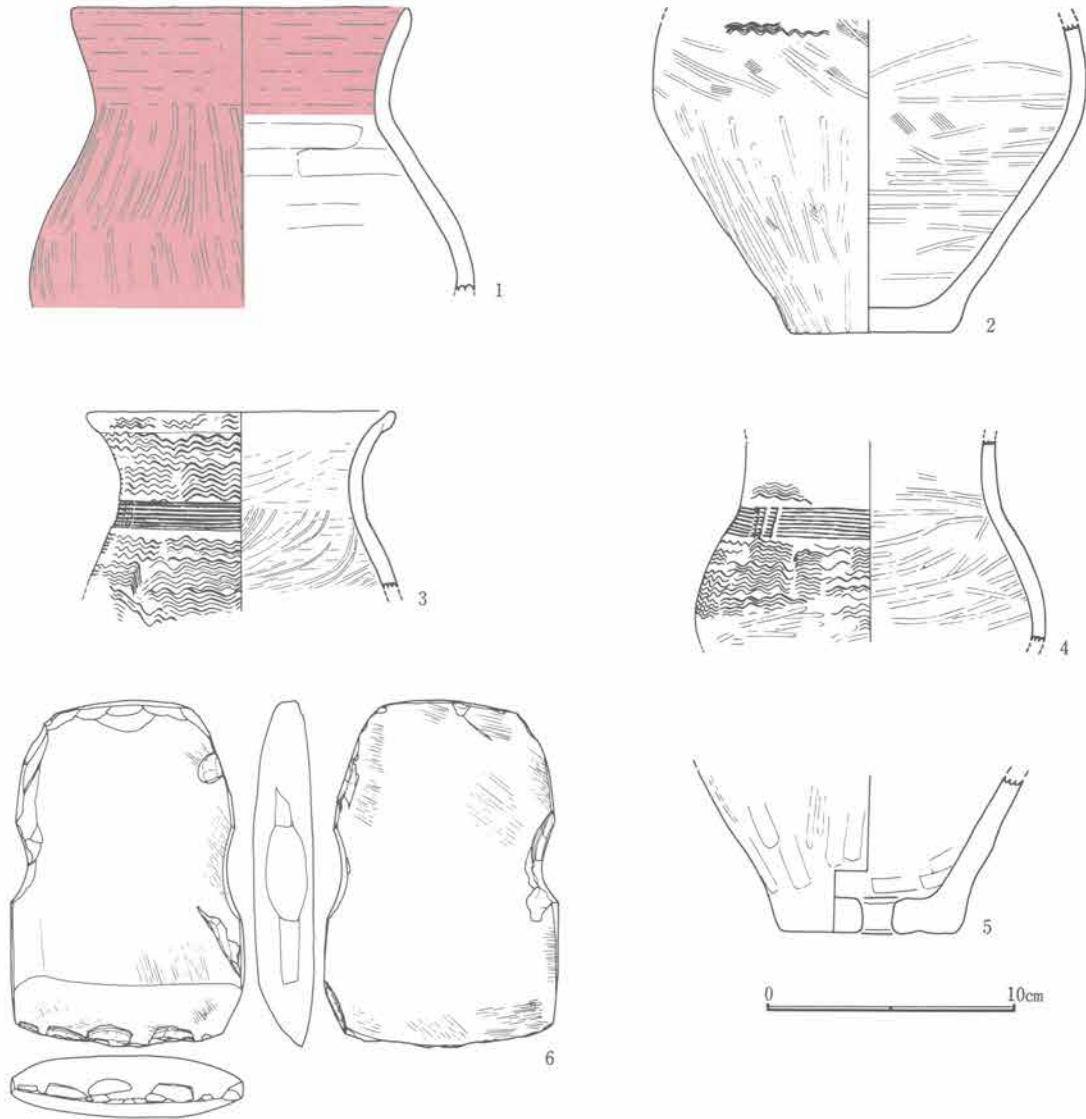
**遺物出土状態** 床面直上より弥生土器破片が多数出土している。前述の東南コーナー部の胴上半部以上が完存する弥生土器、壺や甕の大形破片が出土している。又炉跡内には火床面に密着して磨製偏平片刃石斧が検出された。

**時期** 弥生後期第3期

**他の遺構との関係** 住居の大部分は155号住居(古墳前期)と重なっている。床面レベルは本住居の方がやや低い。



第68図 150号住居



第69図 150号住居出土遺物 (1)

第54表 150号住居出土土器観察表

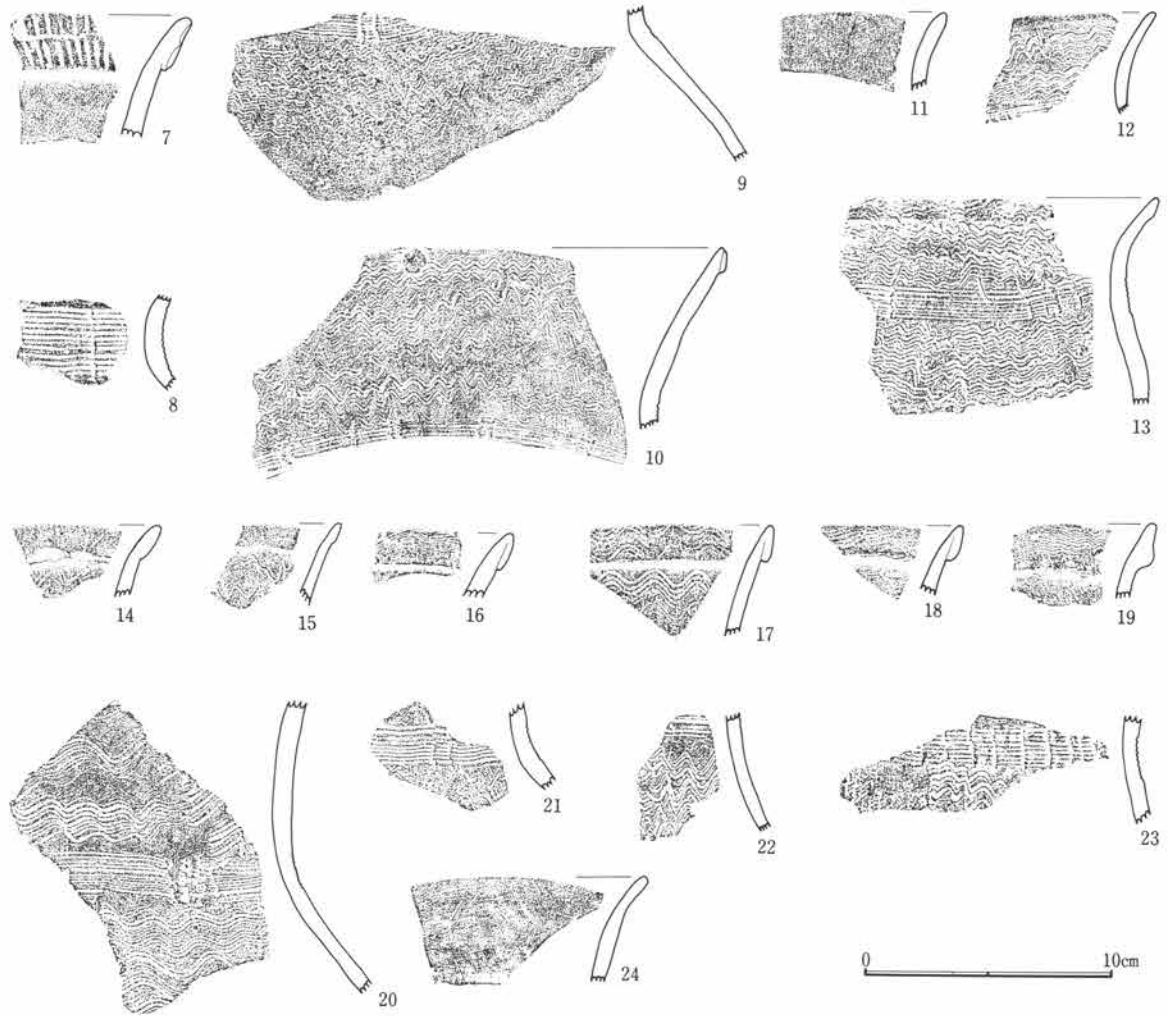
遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 13.4	口辺部は緩やかに外反する。	外面 口辺部はヨコナデ、頸～胴上部はヘラミガキ。 内面 口辺部はヨコナデ、頸～胴上部はヘラナデ。	細砂粒、黒色粒混入 堅緻 明褐色	口縁～胴上位 内外面共に丹彩
2	甕	底 6.7		外面 胴部は波状文ハケメ後、ヘラミガキ、底部はナデ。 内面 胴部はハケメ後、ヘラミガキ、底部はナデ。	細砂粒混入 堅緻 灰褐色	胴～底部 $\frac{1}{2}$
3	甕	口 12.2	折り返し口縁、口辺は緩やかに外反する。	外面 口辺部は波状文、頸部は3連止め←籬状文、胴上部は←波状文。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒、白色粒混入 堅緻 淡褐色	口縁～胴上位 $\frac{1}{4}$ 周

6 検出した遺構、遺物

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
4	甕	胴 14.0		外面 口辺部は波状文、頸部は8本単位の4連止め←簾状文、胴上部は波状文、胴部はヘラミガキ。 内面 全体にヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 明褐色	口辺～胴部 $\frac{1}{3}$
5	甌	底 7.0		外面 ヘラナデ。 内面 ヘラナデ。	粗砂粒、白色粒 混入 堅緻 橙色	胴下位～底部

第55表 150号住居出土石器観察表

遺物番号	名称	計測値 (mm)	石質	重量 (g)	特徴
6	磨製石斧	137.5×93.0×24.0	変輝緑岩	583.5	片刃の磨製石斧。側面中央に直柄のための抉りこみがあり使用のため磨減している。刃部は使用による刃こぼれがみられる。使用痕も刃部に対し斜行しているのが観察出来る。



第70図 150号住居出土遺物 (2)

第56表 150号住居出土土器観察表 (拓本)

7 壺 砂粒混入、にぶい橙色	16 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい褐色	21 甕 内面ハケメ、中砂粒混入、灰褐色
8 壺 砂粒混入、灰褐色	17、18 甕 砂粒混入、にぶい褐色	22 甕 砂粒混入、にぶい褐色
9 壺 内面ヘラミガキ、砂粒混入、褐色	19 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい褐色	23 甕 内面ヨコナデ、中砂粒混入、にぶい褐色
10 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、灰褐色	20 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、明褐色	24 高坏 砂粒混入、にぶい褐色
11、12、14 甕 砂粒混入、にぶい褐色		
15 甕 砂粒混入、灰褐色		

## 156号住居跡 (第71図、図版23)

**位置** C地区住居群北東部大溝河岸縁辺部に位置する(45-C25)。周辺は南に158号住居と重複し、北に150号住居と隣接する。

**形状、規模、方位** 長方形になると思われるが、形状は明確ではない。遺存状態は悪い。南半部は158号住居との重複により不明確である。規模は不明。方位は、N-45°-E。

**周壁、壁溝** 周壁は北コーナー部で部分的に検出する。検出できた壁高は約5cm。壁溝は認められない。

**床面** 床面は堅く踏み固められた面を検出する。東南部に黒色灰、焼土が広がっている。

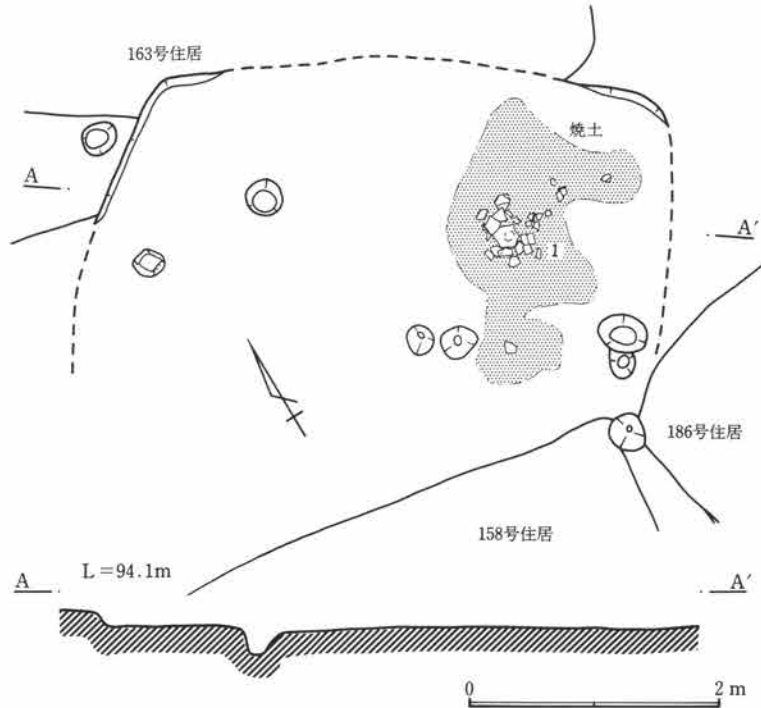
**柱穴** 支柱穴は不明確。住居内に数個のピットがあるが場所的に柱穴として認められない。

**炉跡** 不明確。北東部床面上に焼土帯が見られる。

**遺物出土状態** 焼土帯中、床面密着状態で弥生土器胴部大形破片が出土している。

**時期** 弥生後期第1期

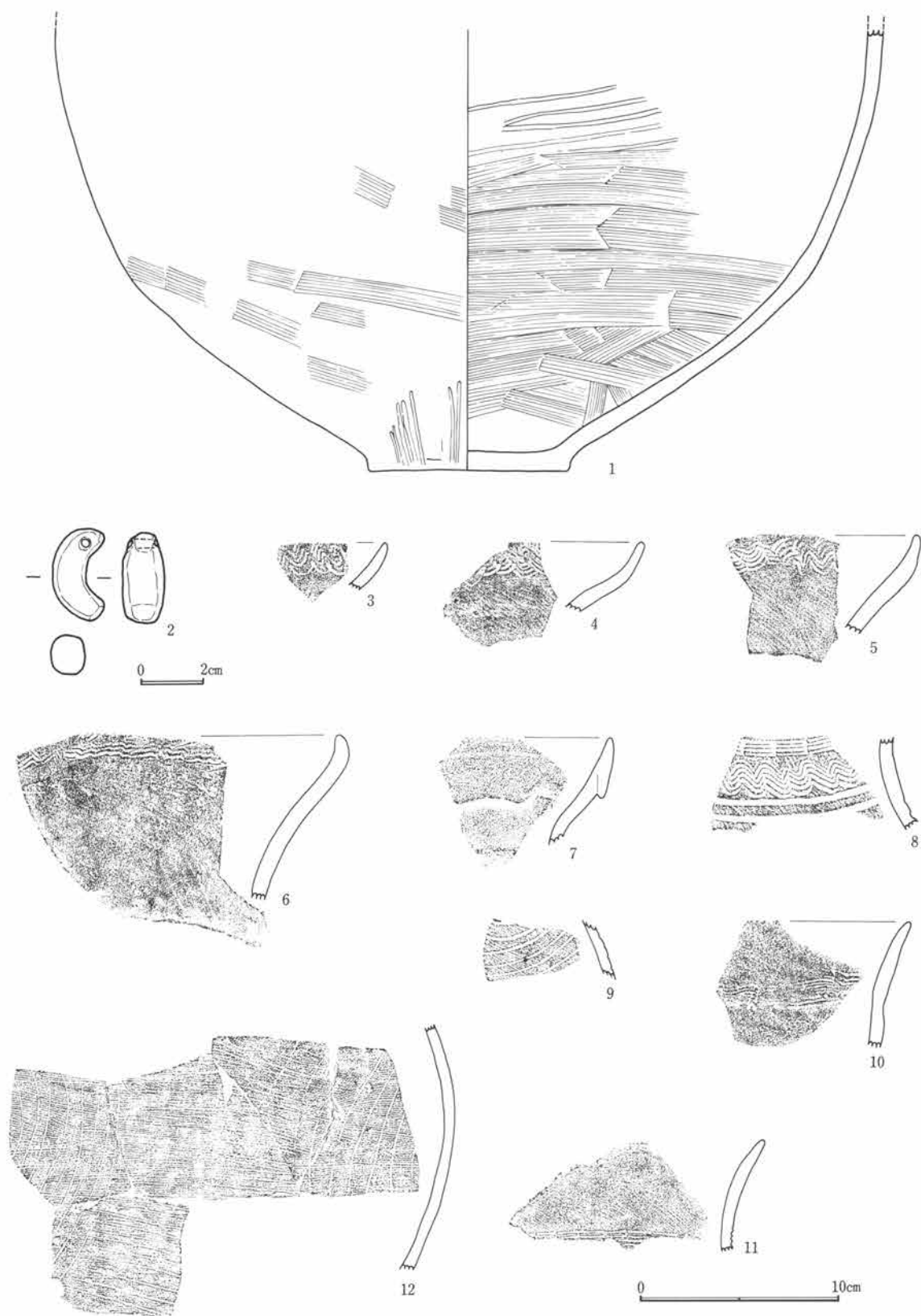
**他の遺構との関係** 北部で163号住居(弥生後期)と部分的に重複する。南部で158号住居(弥生後期第3期)と重複する。先後関係は不明。



第71図 156号住居

第57表 156号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	大型壺	胴 41.2	胴下位の接合部は弱い段を作る。	外面、ハケメ後、ヘラミガキ。 内面 胴上部はハケメ後、ヘラナデ、下部はハケメ。	細砂粒混入 堅緻 灰白色	胴～底部



第72図 156号住居出土遺物



第58表 156号住居出土玉類観察表

遺物番号	名称	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	成 形	整 形	材質	遺存状態 備 考
2	勾 玉	3.0	1.1	1.4	0.3	頭、尾部両端部は丸く、やや細まる。	全体にヘラミガキ。	土	完形

第59表 156号住居出土土器観察表 (拓本)

3 壺 砂粒混入、にぶい橙色	7 壺 砂粒混入、にぶい橙色	11 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい 橙色
4 壺 内面ハケメ、砂粒混入、灰白色	8 壺 内面ハケメ、細砂粒混入、灰白色	12 壺 外面ヘラ描同心円文、平行沈線、内 面ヘラミガキ、淡黄色
5 壺 内面ハケメ、砂粒混入、灰白色	9 壺 砂粒混入、灰白色	
6 壺 内面ヘラミガキ、砂粒混入、明褐色	10 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、灰褐色	

## 158号住居跡 (第74図、図版24)

**位置** C地区北西部大溝河岸縁辺部に位置する(47-C24)。156号、159号、182号、189号住居などとの著しい重複が見られる。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。182号住居との重複部の形状は不明であるが、182号住居との重複部以外は遺存状態は良好である。規模は長軸6.2m、短軸5.0mを測る。方位はN-10°-E。

**周壁、壁溝** 周壁は、東辺から北西コーナー部にかけて良好に検出する。検出できた壁高は15cm前後。壁土は暗灰褐色粘質土。周溝は認められない。

**床面** 床面は暗灰褐色粘質土を平坦に踏み固めている。

**柱穴** 支柱穴は不明確。住居内には支柱穴として可能なピットを数個検出しているが本住居の支柱穴として確実に伴うものの認定は難しい。P1～P4の4箇所のピットが本住居の支柱穴であろうか。

**炉跡** 北側周壁の中央部傍ら(奥側2支柱穴と周壁の間)に地床炉を設けている(F1)。火床面は長径60cm程の浅い窪みがみられ、周囲に炭化物の広がりがある。火床部の傍らに細長い川原石が据えられている。

**遺物出土状態** 床面直上より弥生土器破片が多数出土している。

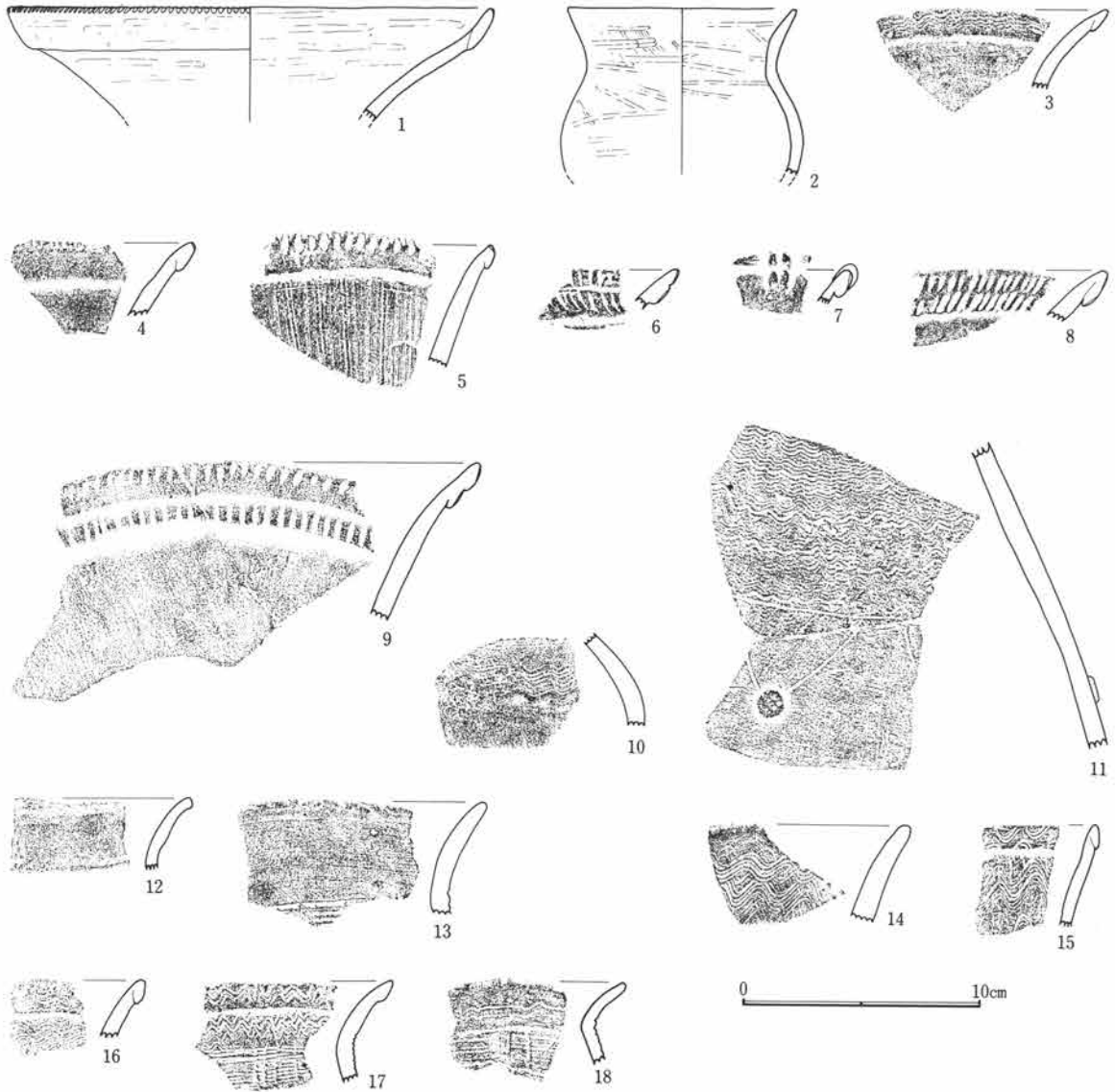
**時期** 弥生後期第3期

**他の遺構との関係** 北部で156号住居(弥生後期第1期)と重複する。床面レベル差は20cm。住居の南側大部分が弥生後期第3期の159号、182号、189号住居と重複する。床面レベルは182号住居が本住居よりやや低い。182号住居の床面上6～7cmに張り床を設けている。182号住居より新しい。

第60表 158号住居出土土器観察表

遺物番号	器 種	法 量	器形・成形	文 様 ・ 整 形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 20.3	受け口状をなす折り返し口縁。	外面 口縁端部に刻み目、口辺部はヘラミガキ。 内面 口辺部はヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	口縁 $\frac{1}{2}$ 周
2	甕	口 9.6 胴 10.2	口辺部はやや外反する。	外面 全面にハケメ後、ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい黄橙色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周

6 検出した遺構、遺物



第73図 158号住居出土遺物

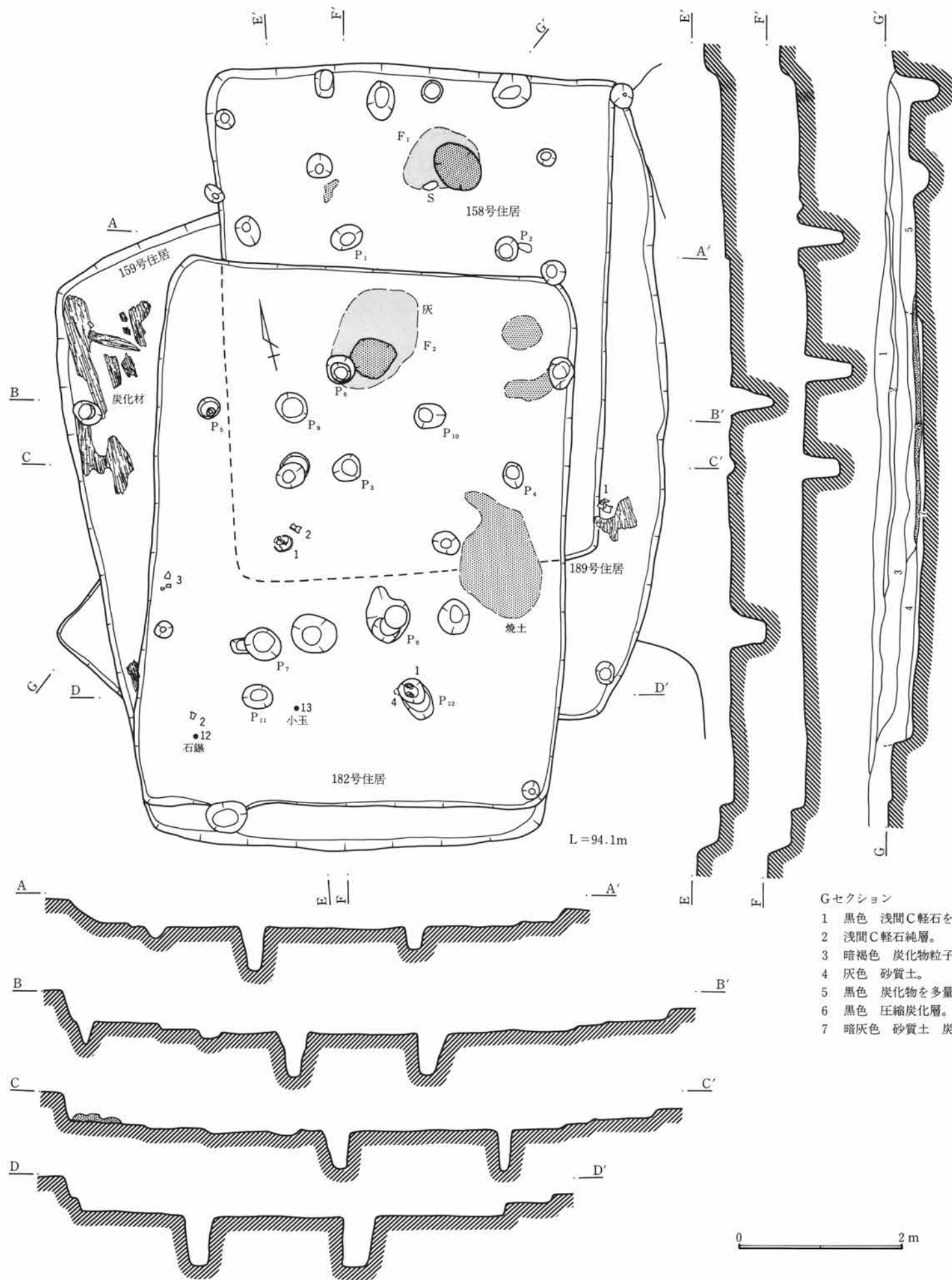
第61表 158号住居出土土器観察表 (拓本)

3 壺 粗砂粒混入、にぶい橙色	10 壺 内面へラミガキ、砂粒混入、にぶい 橙色	15 甕 内面へラナデ、砂粒混入、にぶい橙 色
4 壺 砂粒混入、にぶい橙色	11 壺 中砂粒混入、橙色	16 甕 内面へラミガキ、中砂粒混入、灰褐 色
5 壺 内面(b)ヨコナデ、(c)ハケメ、砂粒混 入、橙色	12 甕 砂粒混入、灰褐色	17 台付甕 内面へラミガキ、砂粒混入、灰 褐色
6 壺 砂粒混入、灰白色	13 甕 内面へラミガキ、砂粒混入、灰褐色	18 台付甕 内面(d)へラミガキ、砂粒混入、 にぶい赤褐色
7 壺 砂粒混入、橙色	14 甕 内面へラミガキ、砂粒混入、にぶい 橙色	
9 壺 内面(b)ヨコナデ、砂粒多量に混入、 にぶい橙色		

159号住居跡 (第74図、図版24)

位置 C地区住居群北東部に位置する(48-C25)。158号、182号住居と重複している。

形状、規模、方位 長方形を呈する。住居の大部分が他の住居との重複部であるため輪郭は把握できない。



Gセクション

- 1 黒色 浅間C軽石を含む。古墳水田耕作土。
- 2 浅間C軽石純層。
- 3 暗褐色 炭化物粒子、浅間C軽石、鉄分凝集を含む。
- 4 灰色 砂質土。
- 5 黒色 炭化物を多量に含む。
- 6 黒色 圧縮炭化層。
- 7 暗灰色 砂質土 炭化物粒子を含む。

第74図 158号、159号、182号、189号住居



規模は、支柱穴の配置関係から長軸7m、短軸5m前後になると思われる。方位はN-4°-W。

**周壁、壁溝** 周壁は西北コーナー部から西辺で検出する。検出できた壁高は約30cm。壁土は暗灰褐色粘質土（第IVb層）である。壁溝は認められない。

**床面** 暗灰褐色粘質土を堅く踏み固めた面を検出する。床面上には全体的に炭化物の広がりが見られ、随所に炭化材が散在する。火災に遭ったと思われる。

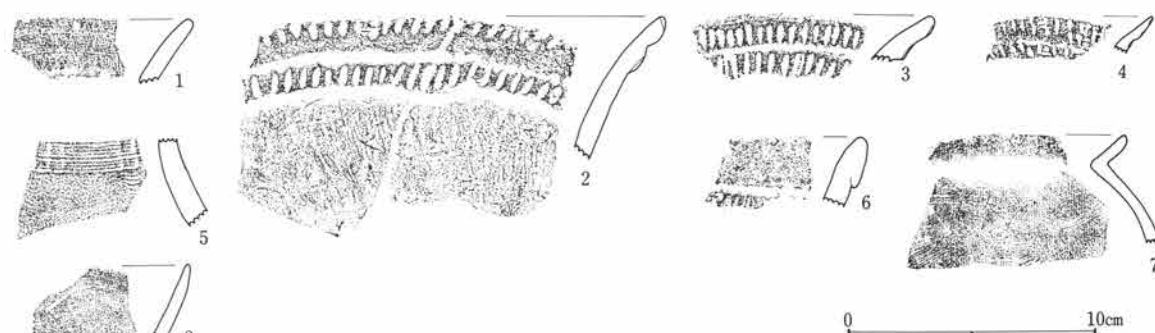
**柱穴** 支柱穴は182号住居との重複部に認められる。支柱穴の検出は182号住居床面精査段階であった。P5、P6、P7、P8が本住居の支柱穴と思われる。支柱穴の深さは159号住居の推定床面レベルからP5が約15cm、P6が70cmとなる。P7は58cm、P8は67cmである。

**炉跡** 不明。

**遺物出土状態** 床面直上より弥生土器数点出土。

**時期** 弥生後期第3期

**他の遺構との関係** 158号、182号、189号住居と重複する。本住居に伴う炭化物などの広がりが182号住居によって切られていることから本住居より182号住居の方が新しい。



第75図 159号住居出土遺物

第62表 159号住居出土土器観察表（拓本）

1 壺 内面ハケメ、細砂粒混入、浅黄橙色	4 壺 砂粒少量混入、にぶい橙色	7 甕 外面(b)ヨコナデ(d)(e)ハケメ、内面(b)ヨコナデ(d)(e)ハケメ
3 壺 内面ハケメ後ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい橙色	5 壺 中砂粒混入、灰白色	8 鉢 砂粒混入、明赤褐色、内外面丹彩

182号住居跡（第74図、図版24、25）

**位置** C地区北東部、大溝河岸縁辺部に位置する（49-C23）。158号、159号、189号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。本住居は南辺に幅40cm程の造り替え（拡張または縮小）の跡がテラス状の段として認められる。規模は長軸7.2m、短軸5.2mを測る。方位はN-11°-E。

**周壁、壁溝** 周壁は全周良好に検出する。ただし158号住居との重複部はわずかな段として158号住居の張り床面下に認められる。南辺の外側の周壁の壁高は25cm前後である。壁溝は検出出来ない。

**床面** 床面は平坦に踏み固めている。これは内側の周壁に伴うものである。外側の周壁に伴う床面は確認できない。本住居は縮小造り替えの可能性が高い。

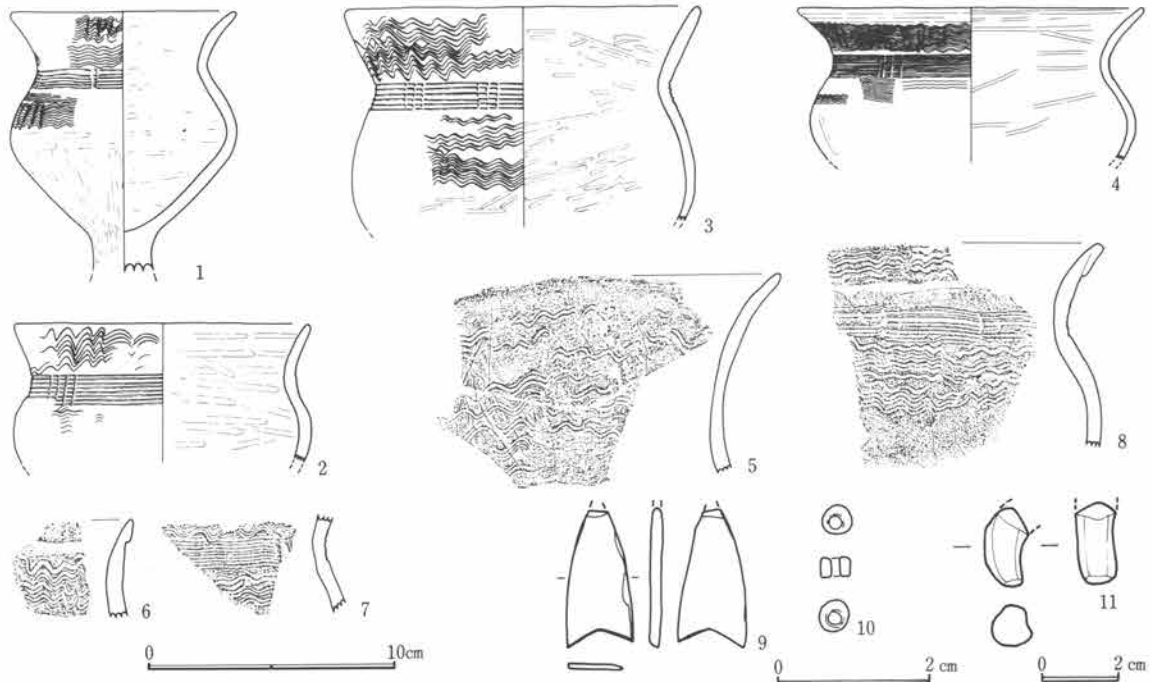
**柱穴** 支柱穴は4箇所を検出する（P9～P12）。拡張による支柱の建て替え跡は見られない。支柱穴は30cm前後の正円形をなすが、東南支柱穴のみピットが複合した様子を見せている。それぞれ深さは一様に50～60cmである。

**炉跡** 北側(奥側)2 支柱穴と周壁との間に地床炉を設けている(F 2)。炉跡は径60cm程の浅い窪みを設けている。窪みの底面から縁辺にかけて焼土、及び黒色灰の広がりが見られる。この他東側の支柱穴間にも焼土帯の広がりが見られる。これも炉跡である可能性が高い。

**遺物出土状態** 床面直上及び覆土中より弥生土器破片が多数出土する。

**時期** 弥生後期第3期

**他の遺構との関係** 158号住居(弥生後期第3期)の張り床面が本住居床面上10cm前後に見られる。159号住居(弥生後期第3期)の床面上の炭化材の広がりを本住居が切っている。189号住居の床面は重複部においては認められない。本住居は158号住居よりも古く、189号、159号住居よりも新しいと考えられる。



第76図 182号住居出土遺物

第63表 182号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	台付甕	口 9.2 胴 9.1	口辺部は緩やかに外反し、大きく広がる。	外面 口辺部は波状文、頸部は4連止め簾状文、胴上部は←波状文、胴中部は横方向のヘラミガキ、胴下部はヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	粗砂粒混入 堅緻 灰褐色	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
2	台付甕	口 12.0	口辺部は緩く外反する。	外面 口辺部は波状文、頸部は4連止め←簾状文、胴上部は僅かに波状文。 内面 口～胴上部は、ヘラミガキ。	中砂粒混入 堅緻 褐灰色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周
3	台付甕	口 14.4	口辺部は直状に外反する。	外面 口辺部は波状文、頸部は3連止め←簾状文、胴上部は波状文、胴部はヘラミガキ。 内面 口～胴部はヘラミガキ。	中砂粒混入 堅緻 にぶい褐色	口縁～胴上位 $\frac{1}{4}$ 周
4	台付甕	口 14.2 胴 13.1	口辺部は緩く外反し、大きく広がる。頸部は強くくびれる。	外面 口縁部はヨコナデ、口辺部は波状文。頸部は3連止め←簾状文。胴上部は波状文。 内面 口～胴部はヘラミガキ。	中砂粒混入 堅緻 褐色	口縁～胴上位 $\frac{1}{4}$ 周

第64表 182号住居出土土器観察表 (拓本)

5 甕 砂粒混入、小礫含む	7 甕 砂粒混入、にぶい褐色	8 台付甕 折り返し口縁、(d)2 連止め簾状文、砂粒混入
6 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、灰褐色		

第65表 182号住居出土石器観察表

遺物番号	名 称	計 測 値 (mm)	石 質	重 量 (g)	特 徴
9	磨製石鎌	(16.5)×9.1×1.50	珪質準片岩	0.4	縦方向に石の目が走る片岩製の小形の鎌、尖端は欠ける。基部はわたくりを作る。面にややゆがみが見られる。周縁部は角ばる。

第66表 182号住居出土玉類観察表

遺物番号	名 称	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	成 形	整 形	材質 色	遺存状態 備考
10	小 玉	—	0.32	0.29	0.1			ガラス 淡青色	完形
11	勾 玉	—	1.0	1.0	—	尾端部は丸い。	器面が荒れている。ヘラミガキ。	土	頭部欠損

## 189号住居跡 (第74図、図版24、25)

**位置** C地区住居群の北西部に位置する(47-C22)。158号、159号、182号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 形状不明確。胴の張った長方形か。規模は長軸7.8m、短軸は不明確。方位はN-11°-E。

**周壁、壁溝** 周壁は東辺部で明確に検出する。やや弧状に緩く曲線をえがいている。検出した壁高は約15cm。壁溝は認められない。

**床面** 床面は平坦に踏み固めている。床面全体に炭化材、炭化物が広がっている。火災に遭ったと思われる。

**柱穴** 支柱穴は不明確。

**炉跡** 不明。

**遺物出土状態** 床面直上より弥生甕、完形土器出土。

**時期** 弥生後期第3期

**他の遺構との関係** 158号住居、182号住居(共に弥生後期第3期)より古い。本住居の床面は重複部では確認できない。

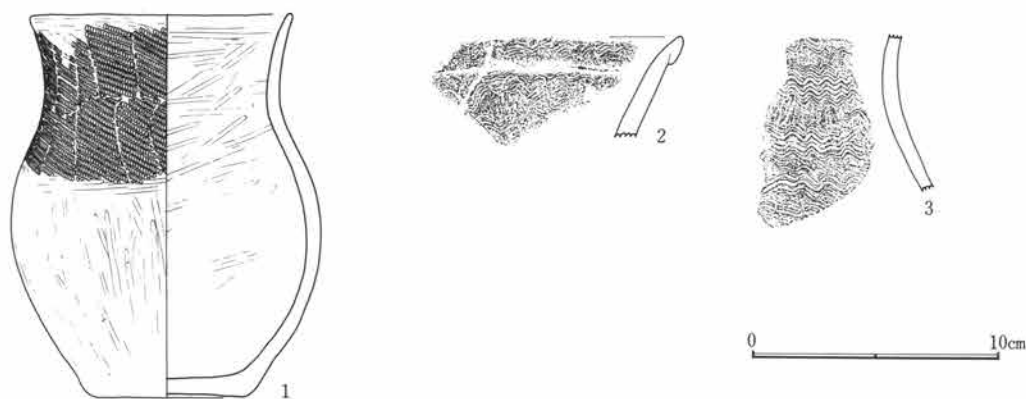
第67表 189号住居出土土器観察表

遺物番号	器 種	法 量	器形・成形	文 様 ・ 整 形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	口 10.6 底 6.5 高 15.0	口辺部は緩やかに外反する。	外面 口～頸部RL縄文、口縁部は横方向のヘラミガキ。胴～底部はヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	粗砂粒混入 堅緻 にぶい褐色	完形

第68表 189号住居出土土器観察表 (拓本)

2 甕 内面ヘラミガキ、中砂粒混入、にぶい橙色	3 甕 内面ヘラナデ、砂粒混入、灰褐色
-------------------------	---------------------

6 検出した遺構、遺物



第77図 189号住居出土遺物

160号住居跡 (第78図、図版25、26)

**位置** C地区住居群北部中央よりに位置する(56-C31)。141号、137号、170号、173号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 隅丸長方形を呈する。他住居との重複部では輪郭は不明瞭。規模は長軸9.5m、短軸6.0mを測る。方位はN-83°-E。

**周壁、壁溝** 周壁の遺存状態は悪い。特に他住居との重複部では不明確である。検出できた壁高は南東コーナー部で20cmを測る。壁土は黄褐色ローム質土(第V層)。壁溝は認められない。

**柱穴** 支柱穴を6箇所良好に検出する(P1~P6)。長軸中間の支柱穴も含めて、全体的に規模は比較的一律である。支柱穴の配置関係は整っている。本住居の支柱は6本構造である。又短軸中間部2箇所にピットを検出している(P7、P8)。上屋構造に関わる柱穴と考えられるが性格は不明である。

**炉跡** 西側支柱穴間やや内側に地床炉が設けられている。

**遺物出土状態** 床面直上、及び覆土中より、多数の弥生土器破片、シカの下顎骨が1点出土している。

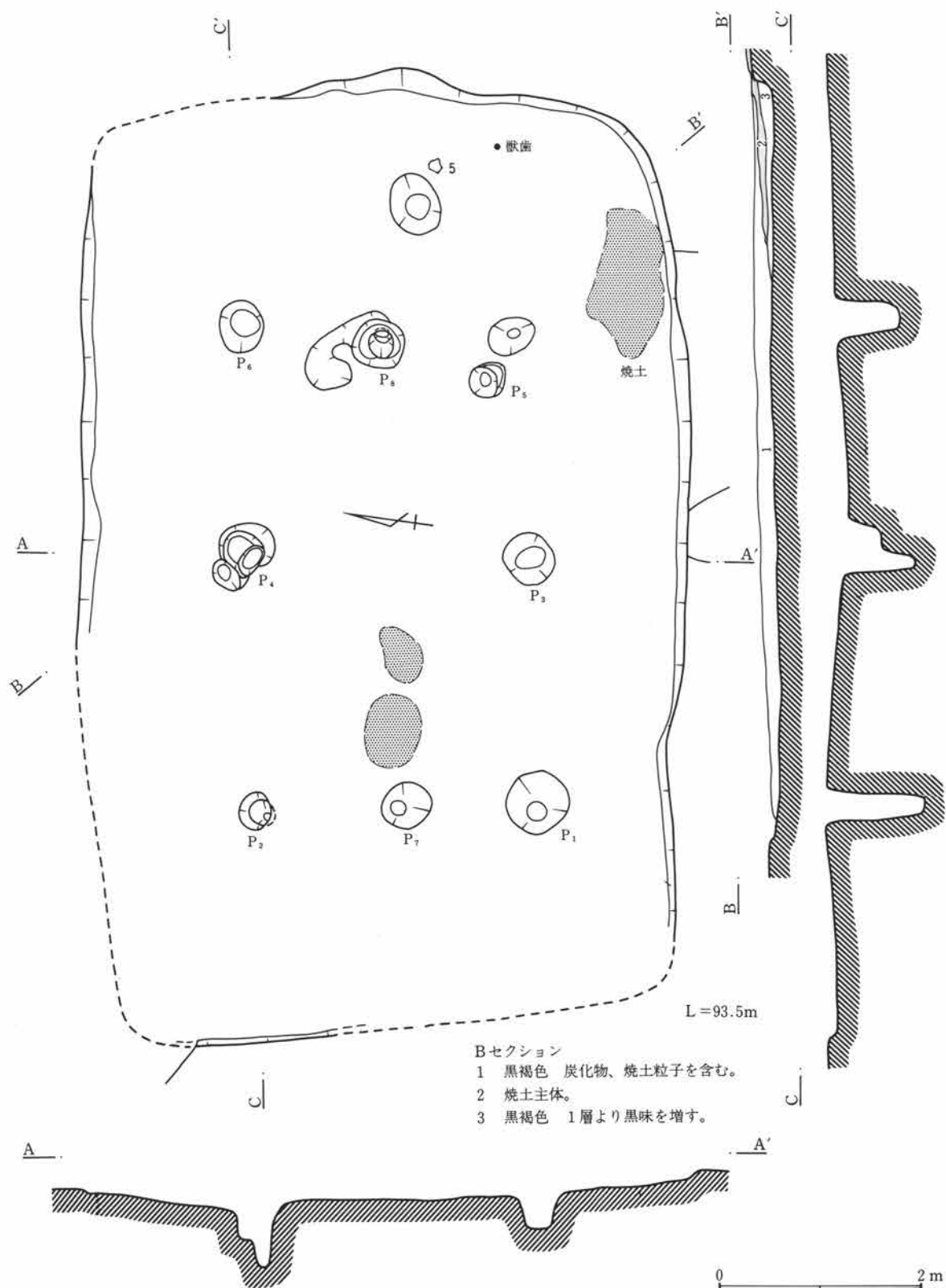
**時期** 弥生後期第1期

**他の遺構との関係** 137号、173号住居(共に弥生中期後半)と西側、及び東側コーナー部で重複する。本住居の覆土中に141号住居が造られている。

第69表 160号住居出土土器観察表

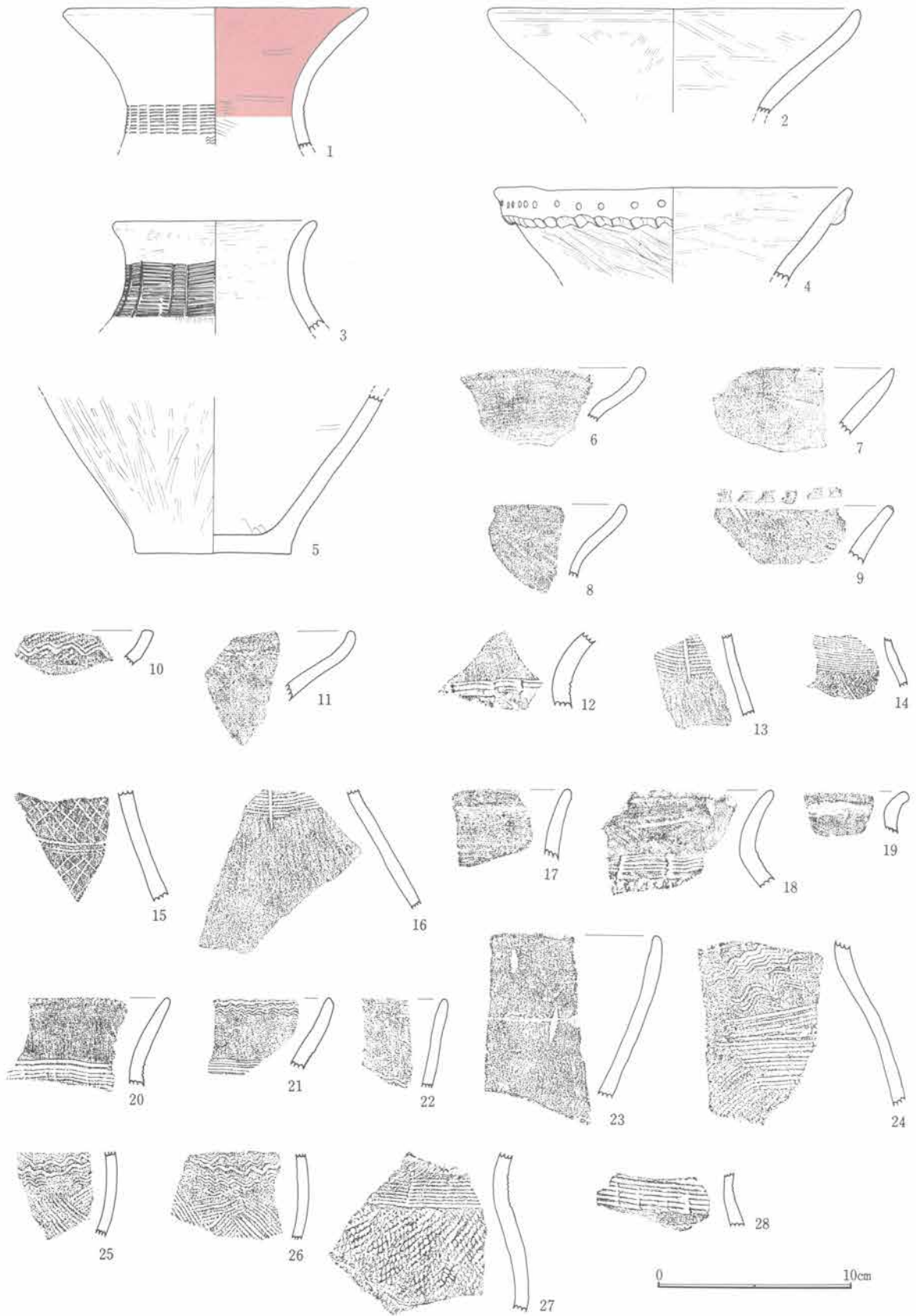
遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 15.8	口辺部は外反する。	外面 頸部は等間隔止め簾状文。簾状文下、僅かに波状文。 内面 口辺部はヘラミガキ。	中砂粒混入 堅緻 灰白色	口縁~頸部 $\frac{1}{4}$ 周 内面は丹彩
2	壺	口 19.4		外面 口縁部はヨコナデ、口辺部はハケメ。 内面 ハケメ後、ヘラミガキ。	中砂粒混入 堅緻 灰白色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 内外面器面がやや荒れている。
3	壺	口 10.6	口辺~頸部にかけて外反する。	外面 口辺部はヨコナデ、頸部は櫛描直線文の上に縦のヘラ描沈線が施される。 内面 ヨコナデ、ハケメ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	口縁~頸部全周





第78図 160号住居

6 検出した遺構、遺物



第79図 160号住居出土遺物

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
4	壺	口 18.6	折り返し口縁、口辺は直状に外反する。	外面 口縁部は円形刺突、折り返し部下部と指でつまみ凹凸面をつくる。口辺部はハケメ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にふい黄橙色	口縁部 $\frac{1}{4}$ 周
5	壺	底 8.0		外面 胴部はヘラミガキ、底部はナデ。 内面 胴部はヘラミガキ、底部はヘラナデ。	細砂粒混入 堅緻 浅黄橙色	胴下位～底部 $\frac{1}{6}$ 周

第70表 160号住居出土土器観察表（拓本）

6 壺 内面(b)ヨコナデ、砂粒混入、黒色	14 壺 (d)等間隔止め簾状文、2段以上(e)ヘラ描鋸歯文、砂粒混入、灰褐色	21 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、灰褐色
8 壺 内面(b)ヨコナデ、砂粒混入、橙色	15 壺 細砂粒混入、黄橙色	22 甕 中砂粒混入、にふい黄橙色
9 壺 内面(b)ヨコナデ、細砂粒混入、灰白色	16 壺 砂粒混入、にふい橙色	23 甕 外面ヘラミガキ、灰褐色
10 壺 内面(b)ヨコナデ、砂粒混入、灰白色	18 甕 砂粒混入、灰褐色	24 甕 砂粒混入、にふい橙色
12 壺 (d)等間隔止め簾状文	19 甕 砂粒混入、にふい橙色	26 甕 砂粒混入、褐灰色
13 壺 (d)櫛描直線後縦沈線、砂粒混入、橙色	20 甕 砂粒混入、にふい褐色	27 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、黒褐色
		28 甕 中砂粒混入、赤褐色

## 161号住居跡（第80図、図版26）

**位置** C地区住居群中央部に位置する（60-C27）。住居の大部分は169号住居と重複している。北西部で184号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。東北部は不明確である。西北部の周壁が緩い弧状をなして不連続な所なく長く伸びている。長軸方向に著しく長い形状になるようである。長軸10.4m、短軸4.8mを測る。方位はN-43°-E。

**周壁、壁溝** 西北辺、及び西南辺で周壁を検出するが、検出状態は良好ではない。検出できた壁高は約10cm。壁溝は認められない。

**床面** 床面は堅く踏み固められた面を検出するが比較的面は凹凸があり、169号住居床面と同一レベル面であるため、それぞれの床面の区別がつきにくい。

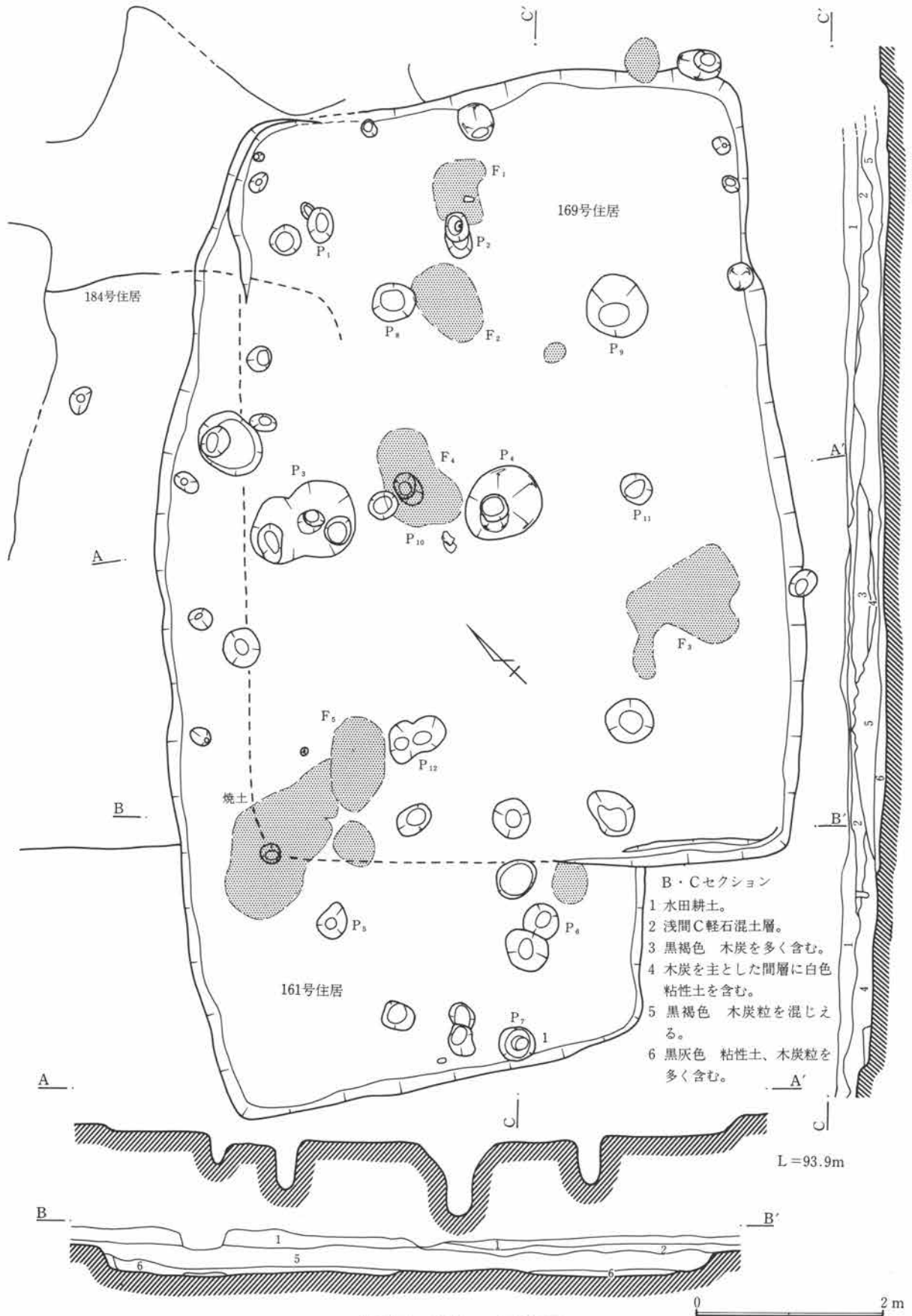
**柱穴** 住居内に多数の円形ピットが検出される。支柱穴は形状及び位置関係から第80図のP1～P6がこれに当たると思われる。ピット形状は南、北端の4支柱穴は径30cm程の円形ピットで、深さは20～50cm前後と一律ではない。主軸中間の2支柱穴（P3、P4）は上部がすり鉢状で2～3回の立て替えの跡が見られる。又北側コーナー部から北西辺部にかけて周壁下に小ピット列が検出されている。これは上屋構造または周壁防護に関わるピットであると思われる。

**炉跡** 焼土帯を住居内に4～5箇所検出するがいずれが本住居の炉跡となるのか明確ではない。

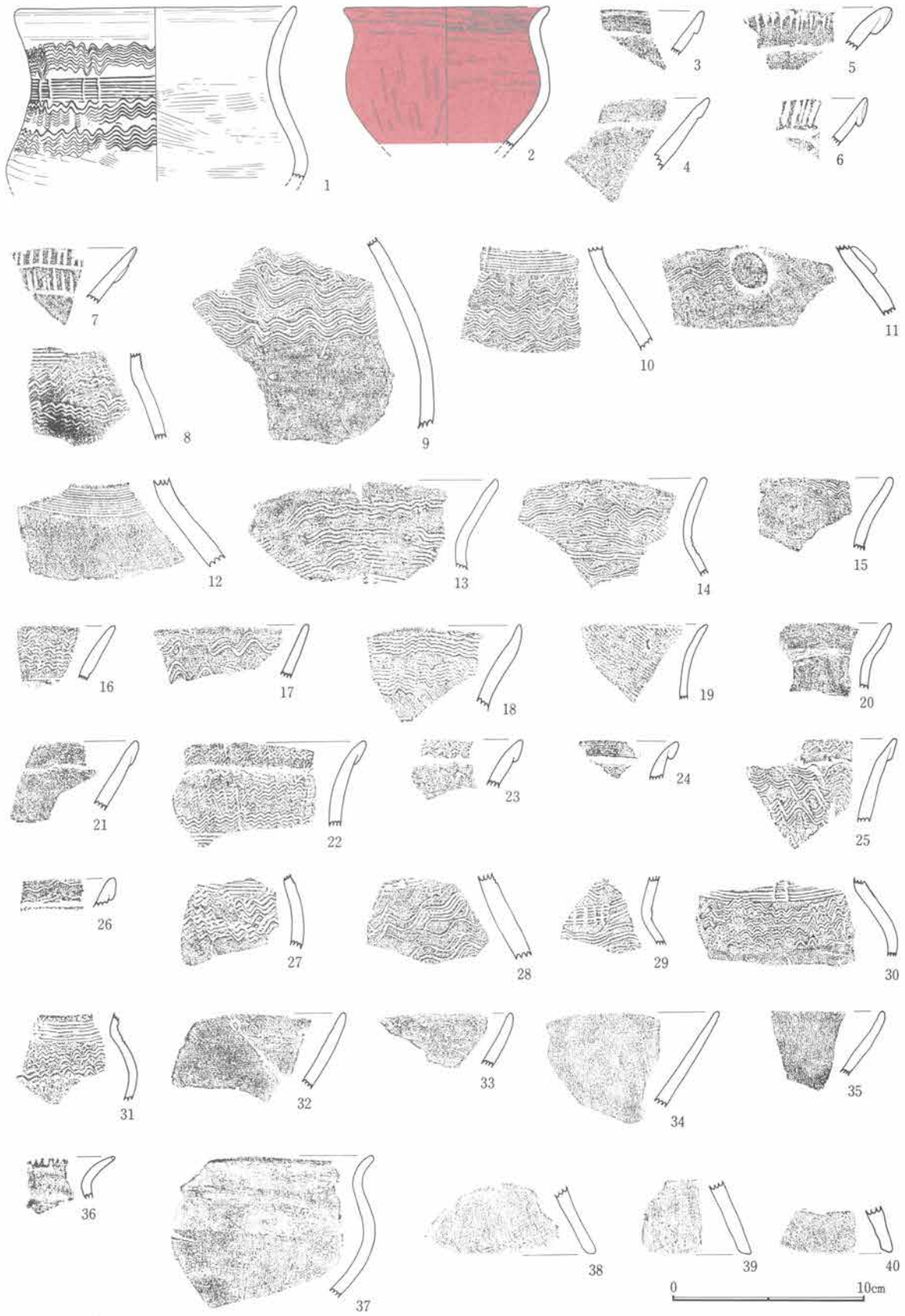
**遺物出土状態** 床面直上より、多数の弥生土器破片が出土している。169号住居との出土遺物の区別は困難であった。西南周壁下に径40cm程の円形ピットがある（P7）。ピット中より胴中位以上を完存する台付甕が出土する。

**時期** 弥生後期第3期

**他の遺構との関係** 169号住居と重複するが先後関係は不明。184号住居（古墳前期）北西部で重複する。重複域は不明。本住居覆土上部に長さ5.1m、幅2.1mの舟底状の落ち込みがある。この落ち込みの底部より巴形銅器破片が出土している。覆土中の土器は古式土師器が主体であった。（2号遺物群）



第80図 161号、169号住居



第81図 161号住居出土遺物

6 検出した遺構、遺物

第71表 161号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	台付甕	口 14.7 胴 15.9	口辺部は緩やかに外反する。	外面 口縁部はヨコナデ、口辺部は波状文、頸部は2連止め←簾状文、胴部はヘラミガキ。内面 口辺部はヨコナデ後、ヘラミガキ、胴部はハケメ後、ヘラミガキ。	砂粒混入 堅緻 にふい橙色	口縁～胴上部全周
2	高坏?	口 10.7	形状は小型台付甕に似る。	外面 丁寧なヘラミガキ。内面 口縁部は丁寧なヘラミガキ、脚部はヘラミガキ、丹彩痕が点在。	砂粒目立たず 堅緻 赤色	口縁～胴下位1/2周 内外面共に丹彩

第72表 161号住居出土土器観察表 (拓本)

3 壺 砂粒混入、にふい橙色	17 甕 砂粒混入、にふい橙色	32 鉢 内面棒状具ミガキ、中砂粒混入、明赤褐色
4 壺 砂粒混入、橙色	18 甕 砂粒混入、灰褐色	33 鉢 内面ヨコナデ、砂粒混入、にふい橙色
5 壺 砂粒混入、明灰褐色	19、20、21 甕 砂粒混入、にふい橙色	34 高坏 内面ヘラミガキ、砂粒混入、明赤褐色
6 壺 砂粒混入、にふい橙色	22 甕 中砂粒混入、にふい褐色	35 高坏 砂粒混入、赤褐色
7 壺 砂粒混入、橙色	23 甕 砂粒混入、褐灰色	36 高坏 内外面丹彩
8 壺 内面ヘラミガキ、砂粒混入、灰白色	24 甕 砂粒混入、橙色	37 高杯 内外面丹彩
9 壺 粗砂粒混入、にふい橙色	25 甕 粗砂粒混入、褐灰色	38 高坏 砂粒混入、にふい橙色
10、11 壺 砂粒混入、にふい橙色	26 甕 粗砂粒混入、にふい褐色	39 高坏 中砂粒混入
12 壺 中砂粒混入小礫含む、にふい橙色	27 甕 中砂粒混入、赤褐色	40 高坏 中砂粒混入
13 甕 中砂粒混入、にふい橙色	28 壺 砂粒混入、にふい橙色	
14 甕 砂粒混入、にふい橙色	30 台付甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、灰褐色	
15 甕 砂粒混入、明赤褐色	31 台付甕 砂粒混入、黒褐色	
16 甕 砂粒混入、灰褐色		

169号住居跡 (第80図、図版26)

**位置** C地区中央部に位置する(57-C27)。西に161号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 隅丸長方形を呈する。161号住居との重複部は輪郭は不明。規模は長軸8.5m、短軸5.5mを測る。方位はN-42°-E。

**周壁、壁溝** 周壁は161号住居との重複部では検出できない。重複部以外では全体的に良好に検出できる。検出できた壁高は北東壁で約25cm。壁溝は南周壁下で部分的に検出する。

**床面** 堅く踏み固められた面を検出する。161号住居床面と同一レベルであるため重複部ではいずれの床面か区別できない。

**柱穴** 支柱穴を6箇所を検出する(P8~P13)。本住居内には多数の大小のピットが検出されている。P8~P12のピットの形状、配置関係から、これらを支柱穴と認めて良いと思われる。中間部の柱穴(P10、P11)はやや小規模である。柱穴の深さはP10が30cm、P11が51cm。

**炉跡** 北東奥側2支柱穴と周壁の間に地床炉を設けている(F1)。他に焼土帯はP8の傍ら(F2)及びP11、P13の間(F3)に見られる。これも炉跡になる可能性が考えられる。

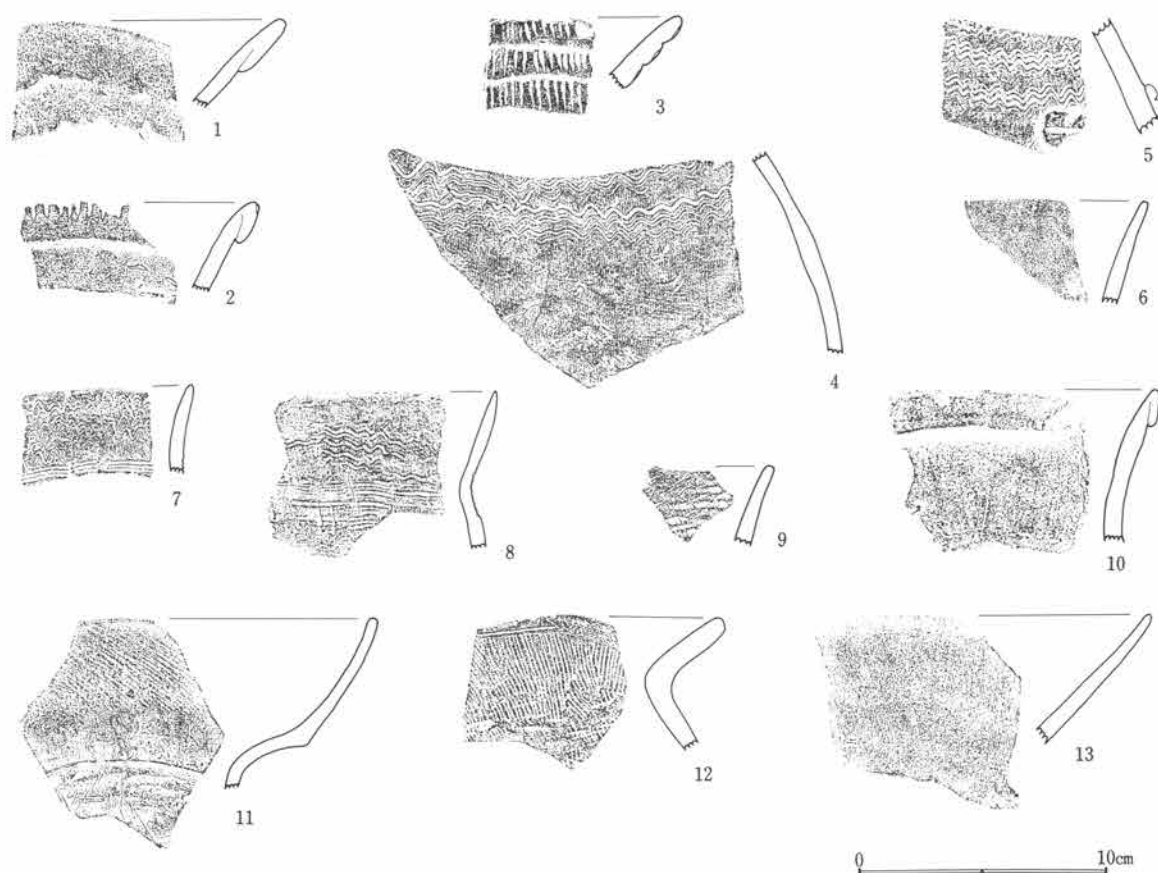
**遺物出土状態** 床面直上より弥生土器破片が多数出土している。

**時期** 弥生後期第3期

**他の遺構との関係** 161号住居と床面同レベルで重複する。両住居の先後関係は不明確。

第73表 169号住居出土土器観察表 (拓本)

1 壺 橙色	5 壺 砂粒混入、明褐色	11 壺 内面(b)(c)ハケメ、中砂粒混入、灰白色
2 壺 砂粒混入、にふい橙色	8 甕 中砂粒混入、褐灰色	12 甕 内面(c)ハケメ(d)指オサエ、砂粒混入、淡黄色
3 壺 砂粒混入、橙色	9 甕 無節縄文、砂粒混入、橙色	
4 壺 内面ヘラナデ、中砂粒混入、黄橙色		



第82図 169号住居出土遺物

## 166号住居跡 (第83図、図版27)

**位置** C地区住居群の中央部に位置する(61-C24)。252号住居と大きく重複する。

**形状、規模、方位** 隅丸長方形を呈する。規模は長軸7.7m、短軸4.8mを測る。方位はN-51°-W。

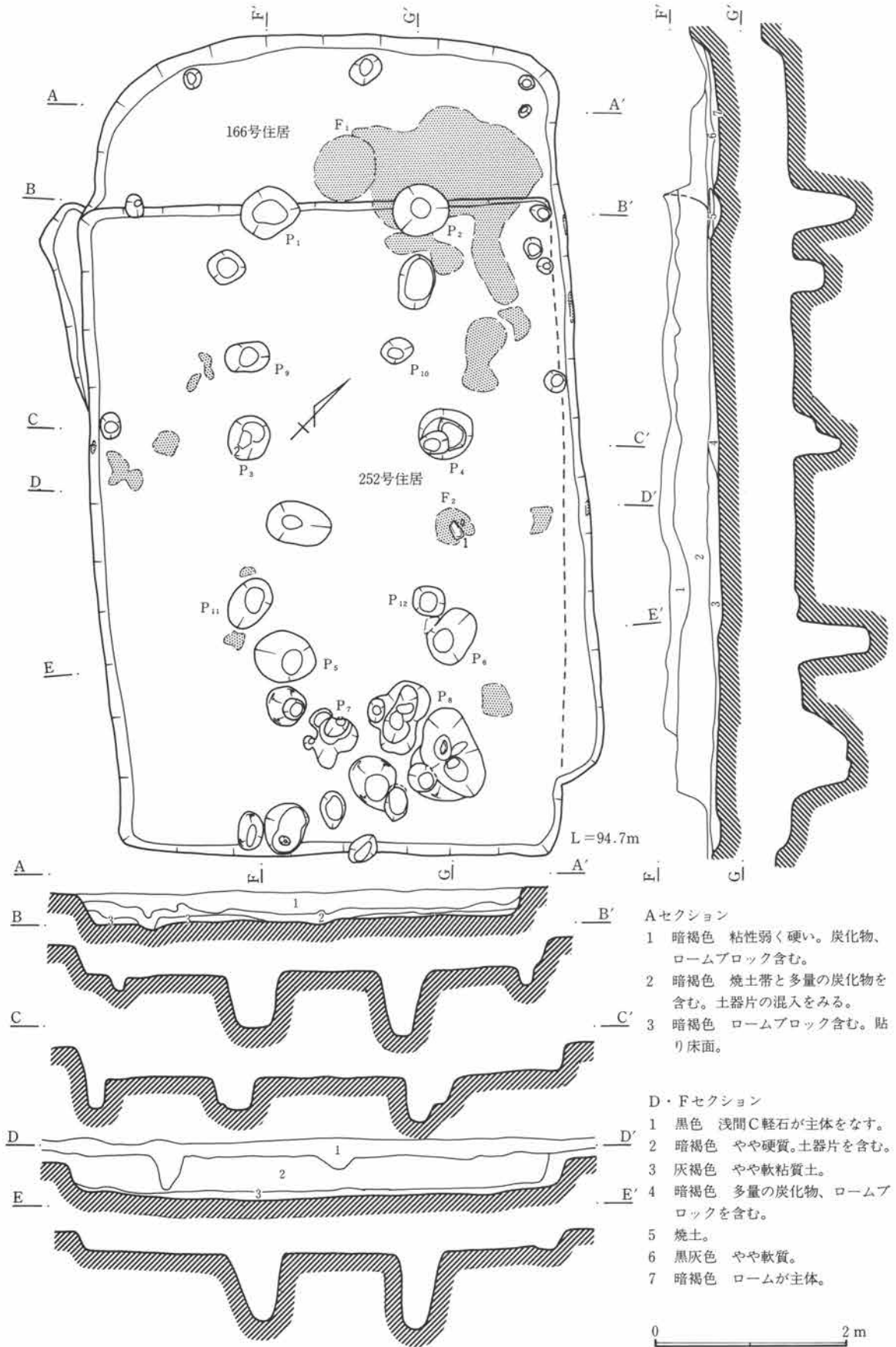
**周壁、壁溝** 周壁は北西辺及び北東辺部で良好に検出する。252号住居との重複部では周壁は失われている。確認できた壁高は約15cm。壁土は暗灰褐色粘質土(第IVb層)、北東周壁の北半部は一帯に焼土化している。壁溝は認められない。

**床面** 全体的に堅く踏み固められた面を検出する。床面上には炭化物の広がり、焼土帯が広範囲に生じている。部分的に252号住居内の床面上にも焼土の痕跡が及んでいる。又覆土中にも炭化物の混入が著しいことなどから、本住居は火災に遭ったことは明らかである。

**柱穴** 支柱穴を6箇所確認する(P1~P6)。P1、P2、P5、P6の四隅の4支柱穴は形状、規模は一律で径は約60cmと比較的大きい。深さもそれぞれ同じように約70cmを測る。中間部のピット(P3、P4)はやや小規模であり、2回の建て替え跡が見られる。出入部には1対のピットが検出される。このピットは外方向に85度傾斜している。出入部に伴う施設に関わるピットと思われる。梯子などのためのピットか。小ピット集合状態から2~3回の付け替えをしているようである。

**炉跡** 北西2支柱穴の間、やや外側に地床炉を検出している。火床面の状態から床面上に広がる焼土帯と区別できる。

**遺物出土状態** 出土遺物は少ない。覆土中より土器破片数点出土する。又磨製石鏃が覆土中より出土して



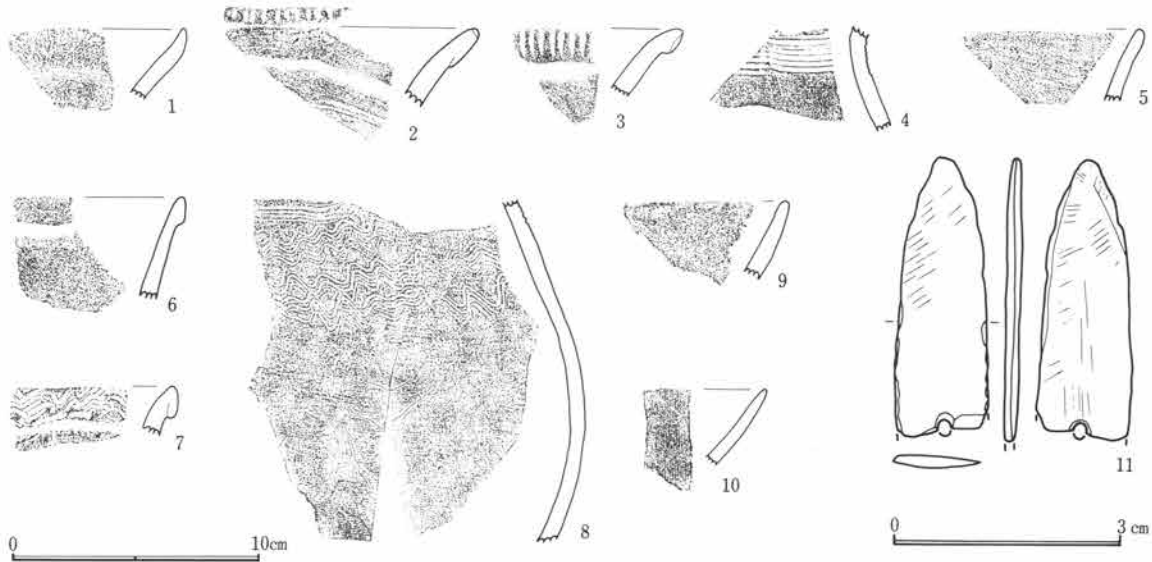
第83図 166号、252号住居



いる。

時期 弥生後期第3期

他の遺構との関係 252号住居（弥生後期第3期）と重複する。やや252号住居の床面の方が低い。



第84図 166号住居出土遺物

第74表 166号住居出土土器観察表（拓本）

1 壺 砂粒多量に混入、にぶい橙色	5 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、黒褐色	8 甕 外面ヘラミガキ、内面ヘラミガキ、明褐色
2 壺 内面(b)ヨコナデ、砂粒多量に混入、にぶい黄褐色	6 甕 細砂粒多量に混入、黒褐色	9 鉢 内面ヨコナデ、細砂粒混入
3 壺 砂粒多量に混入、にぶい橙色	7 甕 内面(b)ヨコナデ、砂粒少量混入、にぶい橙色	10 鉢 内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい褐色、内外面丹彩
4 壺 砂粒多量に混入、にぶい褐色		

第75表 166号住居出土石器観察表

遺物番号	名称	計測値 (mm)	石質	重量 (g)	特徴
11	磨製石鎌	36.5×12.0×2.0	緑色片岩	1.4	扁平で細身のつくりで基部を欠く。下部に両面から円孔がけられる。

252号住居跡（第83図、図版27）

位置 C地区住居群中央部に位置する（61-C23）。166号住居と重複する。

形状、規模、方位 長方形を呈する。規模は長軸6.7m、短軸5.0mを測る。方位はN-50°-W。

周壁、壁溝 166号住居との重複部で検出が困難であったが、他では良好に検出する。検出できた壁高は20～25cm。壁土は暗褐色粘質土（第IV b層）。壁溝は認められない。

床面 全体的に堅く踏み固められた面を検出する。焼失している166号住居と床面が同一レベルであるため、焼土帯や黒色灰が散在し、面は凹凸が目立った。

6 検出した遺構、遺物

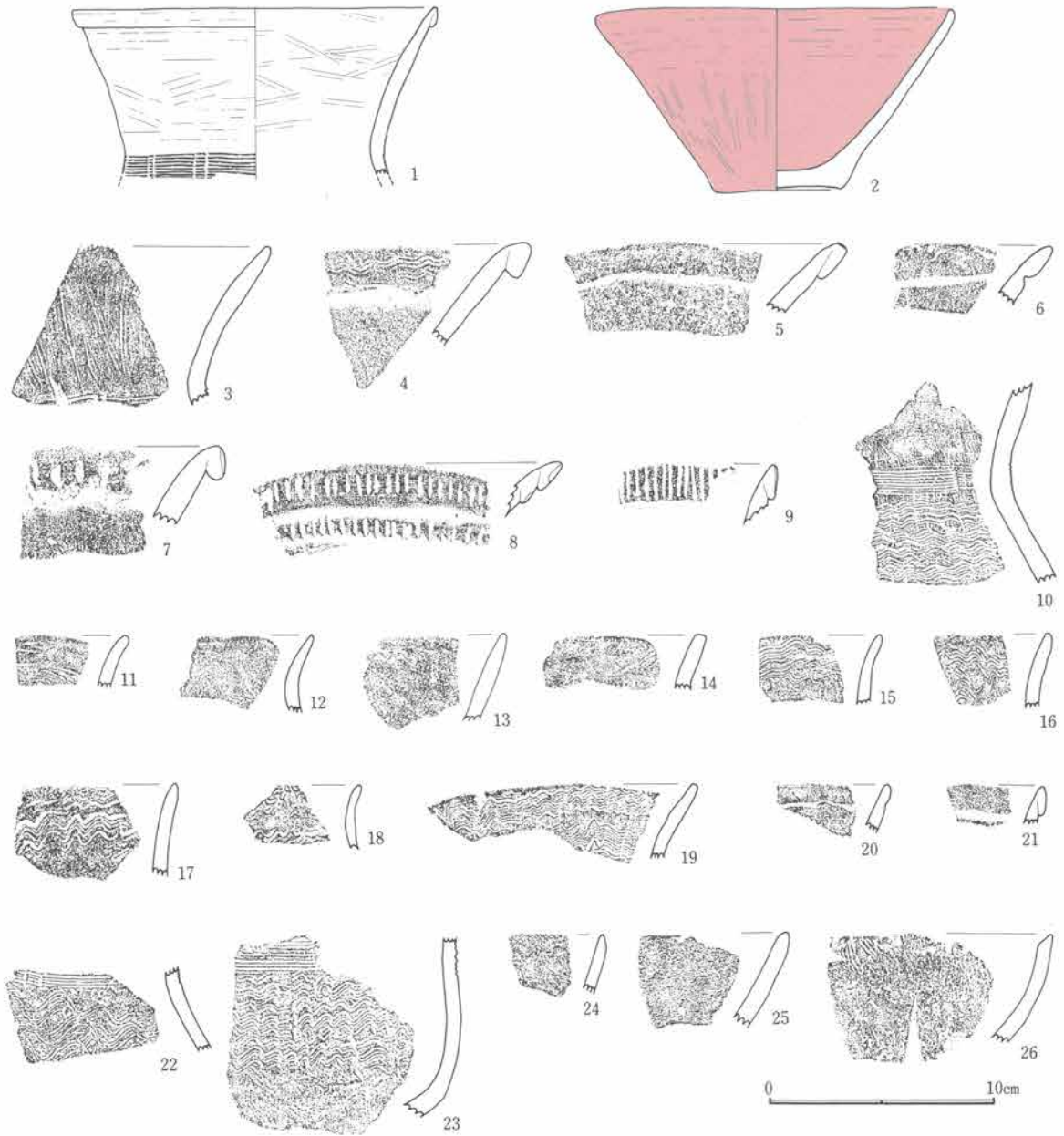
**柱穴** 支柱穴を4箇所検出する（P9～P12）。支柱穴は166号住居と比べると規模はやや小さい。径25～30cm、深さ50cm前後。南東際20cm内側に一对のピットを検出している。これは出入部に伴う施設に関わるピットと思われる。この周囲には他にも大小のピットが集中している。

**炉跡** 不明確。北東側（右側部）2支柱穴間に焼土帯を検出する。これが本住居の炉跡になる可能性が大きい。

**遺物出土状態** 床面直上より弥生土器破片が多数出土している。

**時期** 弥生後期第3期

**他の遺構との関係** 166号住居（弥生後期第3期）を切って本住居は造られている。本住居の方が新しい。



第85図 252号住居出土遺物

第76表 252号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	口 16.2	折り返し口縁、口辺は外反する。	外面 口辺部はヨコナデ、頸部は10本単位の2連止め←簾状文。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい黄橙色	口縁～頸部全周
2	鉢	口 15.9 底 5.7 高 8.0	底～口縁部、直状に立上る。	外面 口辺部はヨコナデ、胴部はヘラミガキ。 内面 口辺部はヨコナデ。	細砂粒混入 堅緻 赤色	完形 内外面共に丹彩

第77表 252号住居出土土器観察表 (拓本)

3 壺 砂粒混入、褐灰色	11 甕 砂粒混入	18 甕 砂粒混入、黒褐色
4 壺 粗砂粒混入、橙色	12 甕 内面ハケメ、砂粒混入、にぶい橙色	19 甕 内面ナデ、砂粒混入、にぶい橙色
5 壺 砂粒多量に混入、にぶい橙色	13 甕 中砂粒混入、灰褐色	20、21 甕 砂粒混入、にぶい褐色
6 壺 砂粒混入、淡橙色	14 甕 内面ヨコナデ、砂粒混入、にぶい橙色	22 甕 内面ナデ、砂粒混入、にぶい橙色
7 壺 内面ナデ、粗砂粒混入、にぶい橙色	15 甕 内面ヨコナデ、砂粒混入、にぶい橙色	23 台付甕 内面ハケメ後ヘラミガキ、砂粒混入、褐灰色
8 壺 ヘラ先による刻み目、砂粒混入、にぶい黄橙色	16 甕 砂粒混入、褐色	24 鉢 砂粒混入、にぶい褐色
9 壺 内面ナデ、砂粒混入、にぶい橙色	17 甕 内面ヘラミガキ、細砂粒混入、にぶい橙色	25 鉢 中砂粒混入、にぶい橙色
10 壺 中砂粒混入、淡橙色		26 鉢 (a)ハケメ、砂粒混入、にぶい黄橙色

## 171号住居跡 (第86図、図版27)

位置 C地区北東端部に位置する(39-C29)。179号住居と重複する。

形状、規模、方位 形状不明、規模不明。方位はN-21°-E。

周壁、壁溝 北辺から西辺にかけて周壁を検出する。西辺は直状に長く伸びるが本住居の限界は明確でない。検出できた壁高は西辺で20cmである。壁土は暗灰褐色土。壁溝は認められない。

床面 床面は平坦に踏み固められている。

柱穴 不明、主柱穴は検出することができなかった。

炉跡 不明、検出できなかった。

遺物出土状態 床面直上より弥生土器、上半部を良好に遺存する甕、破片数点出土する。

時期 弥生後期第2期

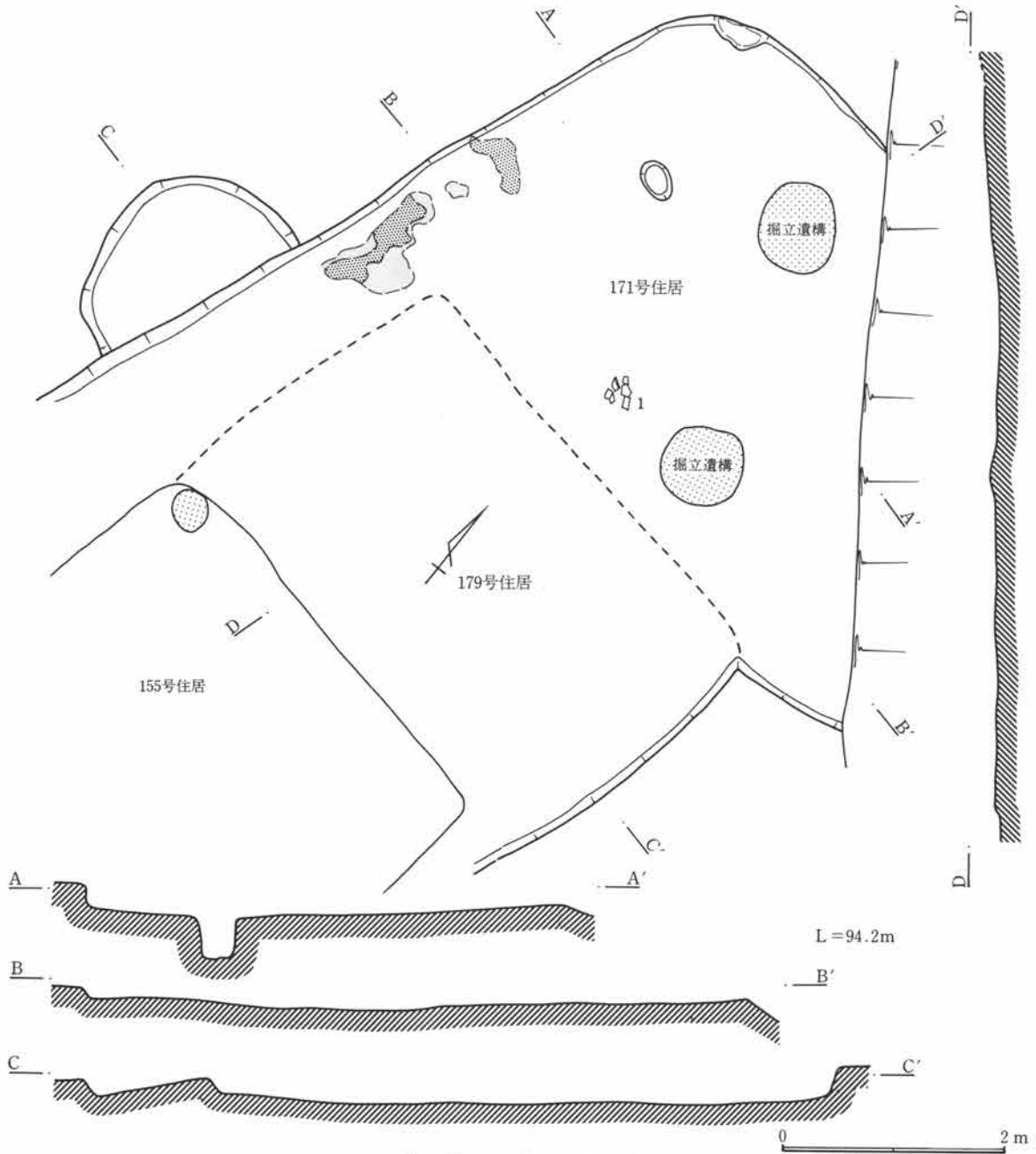
他の遺構との関係 南に179号住居(弥生後期～古墳前期)と床面同レベルで重複する。

第78表 171号住居出土土器観察表

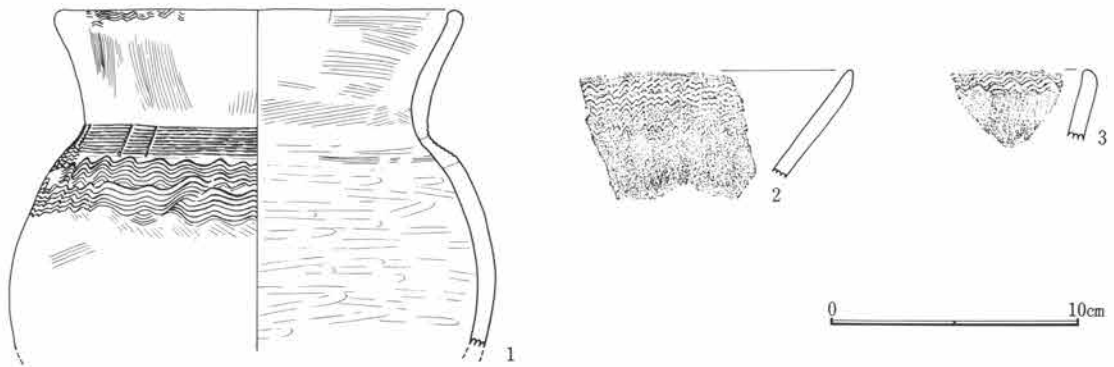
遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	口 16.4	口縁部は短かく内折する。	外面 口縁端部は波状文、口辺部はハケメ、頸部は2連止め←簾状文、胴上部←波状文、胴部はハケメ、ヘラミガキ。 内面 口辺部はハケメ、頸～胴部はヘラミガキ。	細砂粒、白色粒混入 堅緻 黒褐色	口縁部1/2周 頸～胴中位1/2

第79表 171号住居出土土器観察表 (拓本)

2 壺 内面ヨコナデ、細砂粒混入、浅黄橙色	3 甕 細砂粒混入、黒褐色
-----------------------	---------------



第86図 171号、179号住居



第87図 171号住居出土遺物

## 179号住居跡 (第86図、図版27)

**位置** C地区北東端部に位置する(40-C28)。155号、171号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 形状、規模不明。方位はN-13°-E。

**周壁、壁溝** 周壁は東辺で検出する。検出した壁高は10cm。壁溝は認められない。

**床面** 床面は暗灰褐色粘質土を平坦に踏み固めている。

**柱穴** 不明、検出できない。

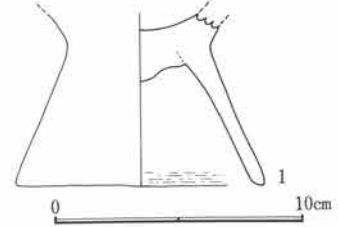
**炉跡** 不明、検出できない。

**遺物出土状態** 床面直上より弥生、古式土師器破片出土。

**時期** 弥生後期～古墳前期

**他の遺構との関係** 171号住居と床面同レベルで重複。171号住居(弥

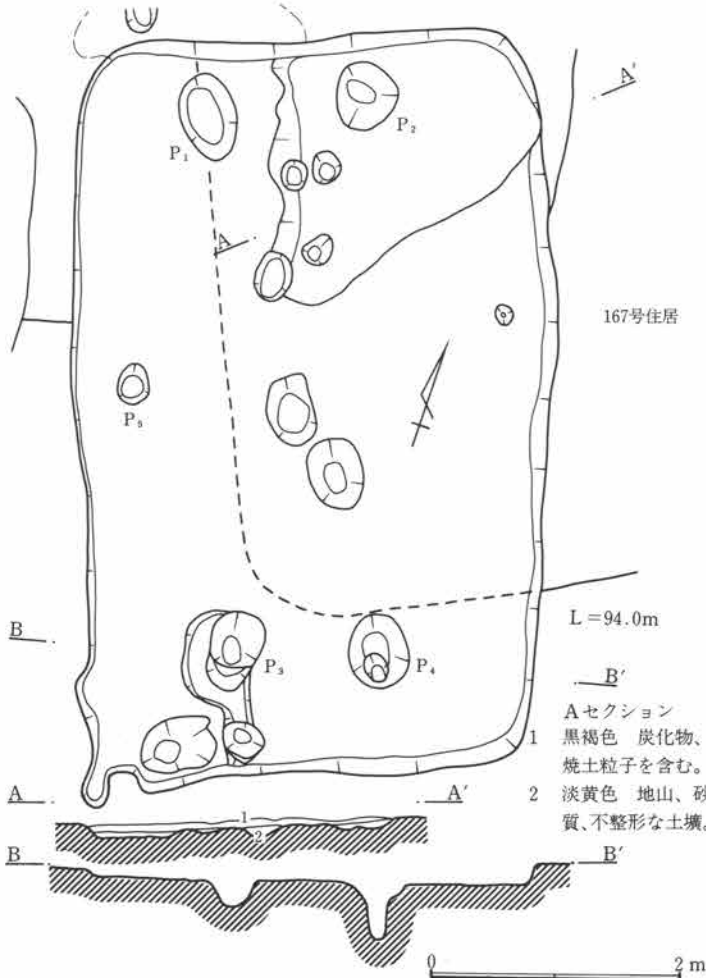
生後期第2期)より新しい。



第88図 179号住居出土遺物

第80表 179号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	台付甕脚	10.0	器壁は厚い、粘土積上げ痕目立つ。	外面 器面が荒れていて不明瞭、ハケメの痕跡あり。 内面 ヘラナデ、天井部は補充粘土が突出。	粗砂粒多量に混入 堅緻 にぶい橙色	脚台部



第89図 187号住居

## 187号住居跡 (第89図、図版28)

**位置** C地区中央部やや西よりに位置する(64-C27)。162号、167号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 隅丸長方形を呈する。規模は長軸6.0m、短軸3.9mを測る。方位はN-20°-W。

**周壁、壁溝** 周壁は遺存状態は良好、ほぼ全周検出する。検出できた壁高は20cm前後である。壁土は暗褐色粘質土である。壁溝は検出できない。

**床面** 堅く踏み固められた面を検出する。

**柱穴** 主柱穴は4箇所検出する。(P1～P4)。主柱穴は一様に円形で規模が大きく径50cm前後を見る。4箇所の主柱穴の配置関係は長軸方向に特に長く、長軸主柱穴間は4.5mに達するので構造上中間地点に支柱が必要と思われるが、これに明確に該当するピットは見られない。ただしP5がこれに

6 検出した遺構、遺物

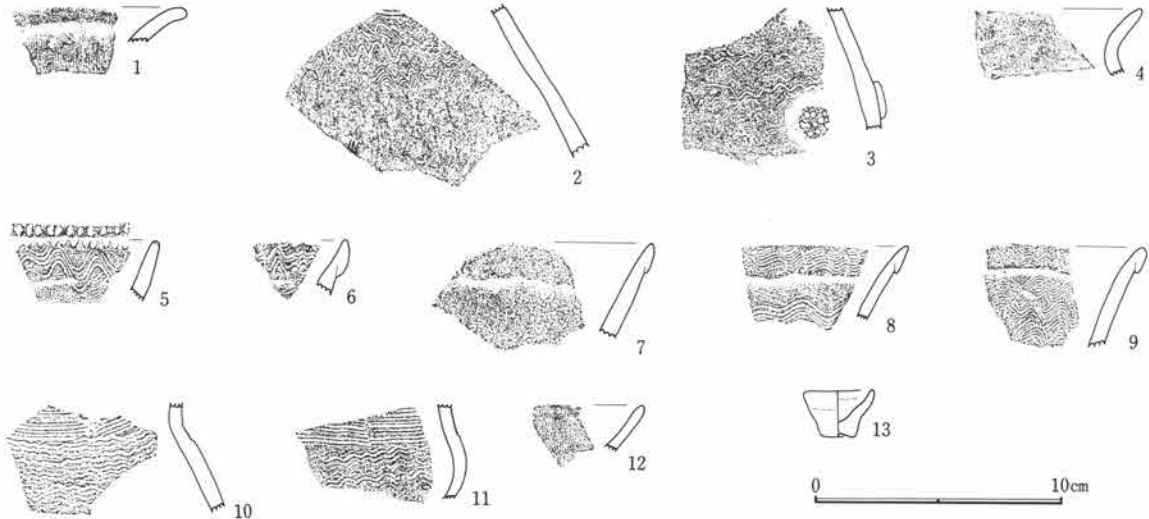
当たるかも知れない。

炉跡 不明確

遺物出土状態 床面直上より弥生土器破片が多数出土している。

時期 弥生後期第3期

他の遺構との関係 北東半部で167号住居（古墳前期）と重複する。北部で162号住居（弥生中期後半）と重複する。



第90図 187号住居出土遺物

第81表 187号住居出土土器観察表（拓本）

1 壺 ヘラミガキ、砂粒混入、浅黄橙色	5 甕 砂粒混入、にぶい橙色	8 甕 砂粒混入、にぶい橙色
2 壺 中砂粒混入、橙色	6 甕 内面(b)ヨコナデ、砂粒混入、にぶい 橙色	9 甕 砂粒混入、褐灰色
3 壺 砂粒混入、褐灰色	7 甕 粗砂粒混入、にぶい橙色	10 甕 砂粒混入、にぶい橙色
4 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、淡橙色		12 鉢 内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい 橙色、両面丹彩

第82表 187号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
13	ミニチュア鉢	口 2.8 底 1.4 高 1.9		外面 指オサエ、ナデ 内面 指オサエ、ナデ	細砂粒混入 堅緻 にぶい黄橙色	完形

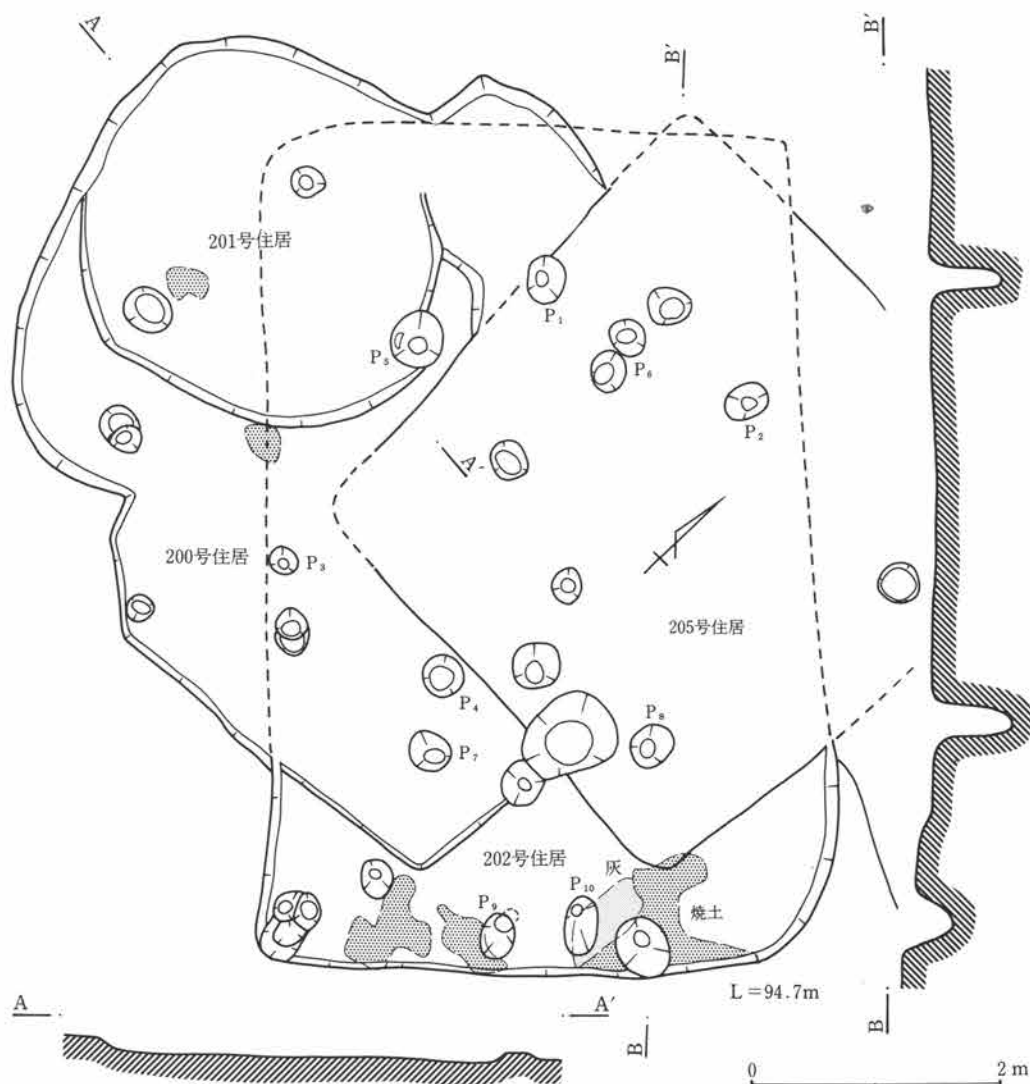
200号住居跡（第91図、図版28）

位置 C地区中央部に位置する（58-C23）。201号、202号、205号住居と重複する。

形状、規模、方位 長方形を呈する。遺存状態は悪い。南辺部のみ輪郭を把握する。規模は不明確。方位はN-0°。

周壁、壁溝 確認された壁高は南周壁部で8cm。壁溝は認められない。

柱穴 支柱穴を4箇所検出する（P1～P4）。4支柱穴は径20～30cm、深さは30cm前後である。



第91図 200号、201号、202号住居

炉跡 不明。検出できない。

遺物出土状態 覆土中より弥生土器僅かに出土する。

時期 弥生後期

他の遺構との関係 201号住居（弥生後期第1期）、202号住居（弥生後期）、205号住居（古墳前期）と重複する。202号住居との先後関係は不明。

201号住居跡（竪穴遺構） （第91図、図版28）

位置 C地区住居群中央部に位置する（59-C24）。200号、202号住居跡と重複する。

形状、規模、方位 長円形を呈する。南半部は周壁が二重に巡っており、重複、あるいは造り替えの可能性も考えられる。規模は長軸3.9m、短軸3.2m。

周壁、壁溝 周壁は比較的良好に全周検出される。壁溝は認められない。

床面 内側の円形状の竪穴部分の床面では強く踏み固められた面を検出する。

6 検出した遺構、遺物

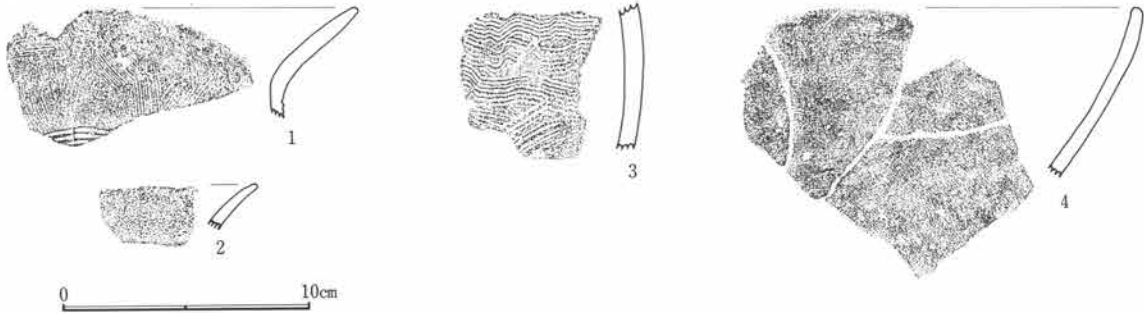
**柱穴** 不明確。竪穴内にピットを検出するがこれが柱穴になるか否か不明確。

**炉跡** 不明確。内側の竪穴内、又東南部内側周壁外床面直上に焼土帯を認める。これが炉跡になる可能性はあるが明確ではない。

**遺物出土状態** 内側竪穴内床面直上及びピット内より、弥生土器破片が出土する。

**時期** 弥生後期第1期

**他の遺構との関係** 200号住居（弥生後期）と重複する。先後関係は不明。



第92図 201号住居出土遺物

第83表 201号住居出土土器観察表（拓本）

1 壺 砂粒混入、灰白色	3 甕 砂粒混入、にぶい橙色	4 高坏 砂粒混入、にぶい橙色、内面丹彩
2 壺 砂粒混入、にぶい橙色		

202号住居跡（第91図、図版28）

**位置** C地区住居群の中央部に位置する（57-C22）。200号、201号、205号住居跡と重複する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。南辺を中心とした部分が検出できたが北部の大半部分は不明瞭である。住居形状は支柱穴の位置関係から推定できる。南東コーナー部は丸身を持っている。規模は長軸不明、短軸は4.5mを測る。方位はN-45°-W。

**周壁、壁溝** 東南辺で周壁は比較的良好に検出する。周壁は全体的に焼土化している。確認できた壁高は16cm。壁溝は認められない。

**床面** 他住居との重複部では失われているため不明瞭である。南部で部分的ではあるが比較的良好に把握する。周壁際の床面上に焼土帯が広くみられる。この状況から本住居は火災に遭ったと思われる。

**柱穴** 支柱穴を4箇所検出する（P5～P8）。4支柱穴は30cm前後の円形ピット、深さ60cm前後、全体的に一樣で位置関係は整った長方形配置である。南側周壁際に1対のピットを検出している（P9、P10）。ピットの深さはP9が63cm、P10が70cm、外方向に若干の傾きをもっている。ピット間の距離は約60cmを測る。

**炉跡** 不明確。検出できない。

**遺物出土状態** 出土遺物はほとんどなし。

**時期** 弥生後期

**他の遺構との関係** 200号住居（弥生後期）、201号住居（弥生後期第1期）、205号住居（古墳前期）と重複する。200号、201号住居との先後関係は不明。



203号住居跡 (第93図)

位置 C地区住居群の北東部に位置する(51-C26)。185号住居と重複する。

形状、規模、方位 長方形を呈する。南、北辺は不明。規模は、長軸不明、短軸は4.5mを測る。方位はN-4°-E。

周壁、壁溝 東、西辺において周壁を検出する。遺存状態は悪い。壁溝は東周壁下で検出する。

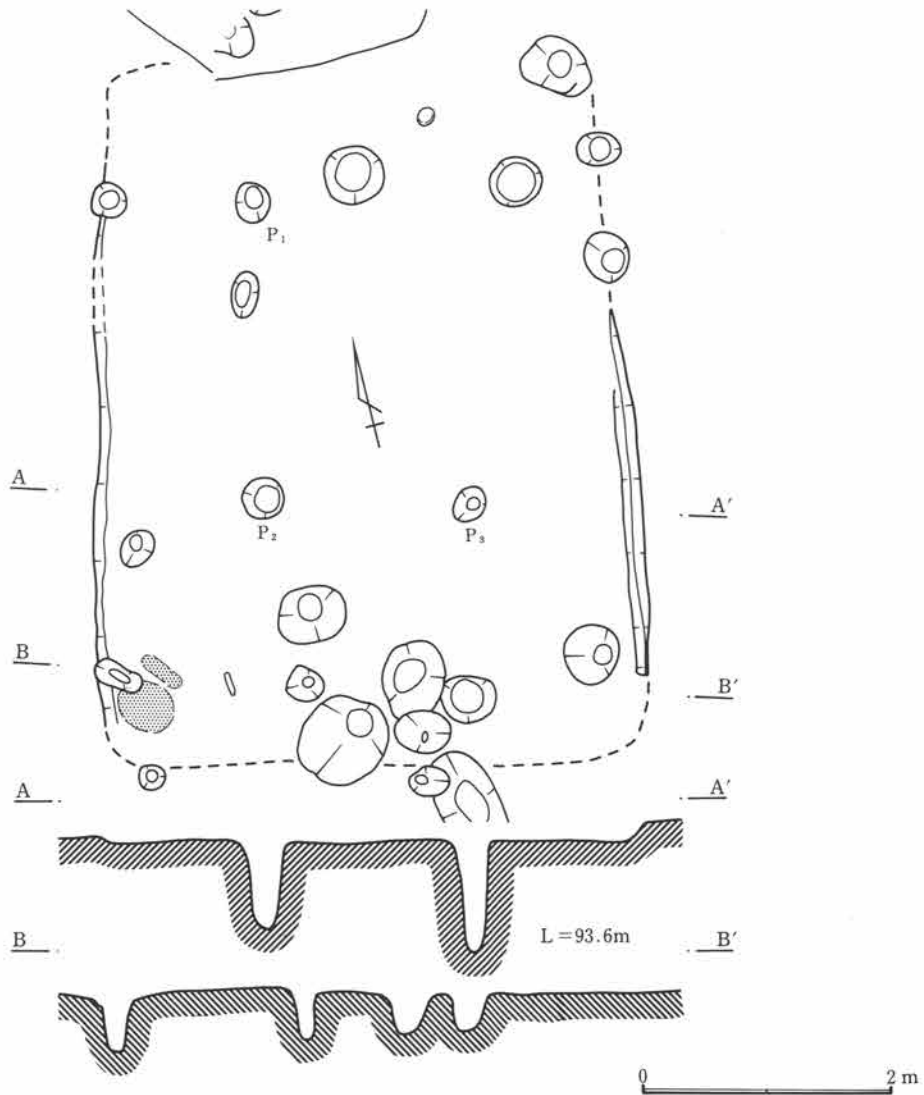
柱穴 主柱穴を3箇所検出する(P1~P3)。主柱は4本構造と思われる。検出した3主柱穴は径15~30cmの円形ピットで、深さはP1が42cm、P2が66cm、P3が90cmである。この他南辺部に大小のピットが集中するが出入部に伴うピットの可能性がある。

炉跡 不明確。検出できない。西南コーナー部に焼土帯を検出するが、位置的に炉跡とは思われない。

遺物出土状態 覆土下部より弥生土器破片多数出土する。

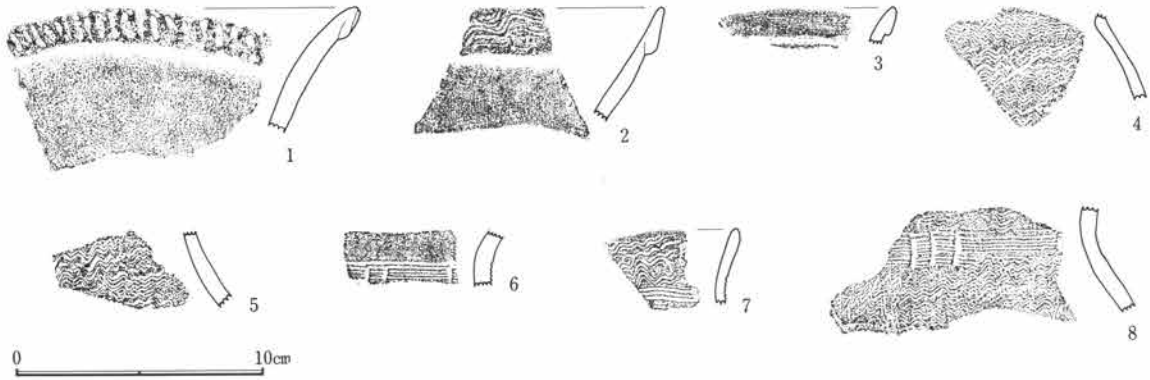
時期 弥生後期第3期

他の遺構との関係 185号住居(古墳前期)と重複する。



第93図 203号住居

6 検出した遺構、遺物



第94図 203号住居出土遺物

第84表 203号住居出土土器観察表（拓本）

1 壺 中砂粒混入、灰白色	4 壺 砂粒混入、にぶい橙色	7 甕 砂粒混入、灰褐色
2 壺 砂粒混入 灰白色	5 壺 砂粒混入、にぶい橙色	8 甕 砂粒混入、にぶい橙色
3 壺 砂粒混入、橙色	6 壺 砂粒混入、にぶい橙色	

212号住居跡 (第95図、図版29、30)

**位置** C地区住居群の東南部大溝の東側に位置する(60-C07)。213号、214号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 隅丸長方形を呈する。規模は長軸6.2m、短軸4.4mを測る。方位はN-47°-W。

**周壁、壁溝** 周壁全周良好に検出する。西南周壁は特に遺存状態が良好である。検出できた壁高は約50cmである。壁土は暗褐色土で213号住居覆土である。壁溝は全周する。

**床面** 床面は平坦に踏み固められている。

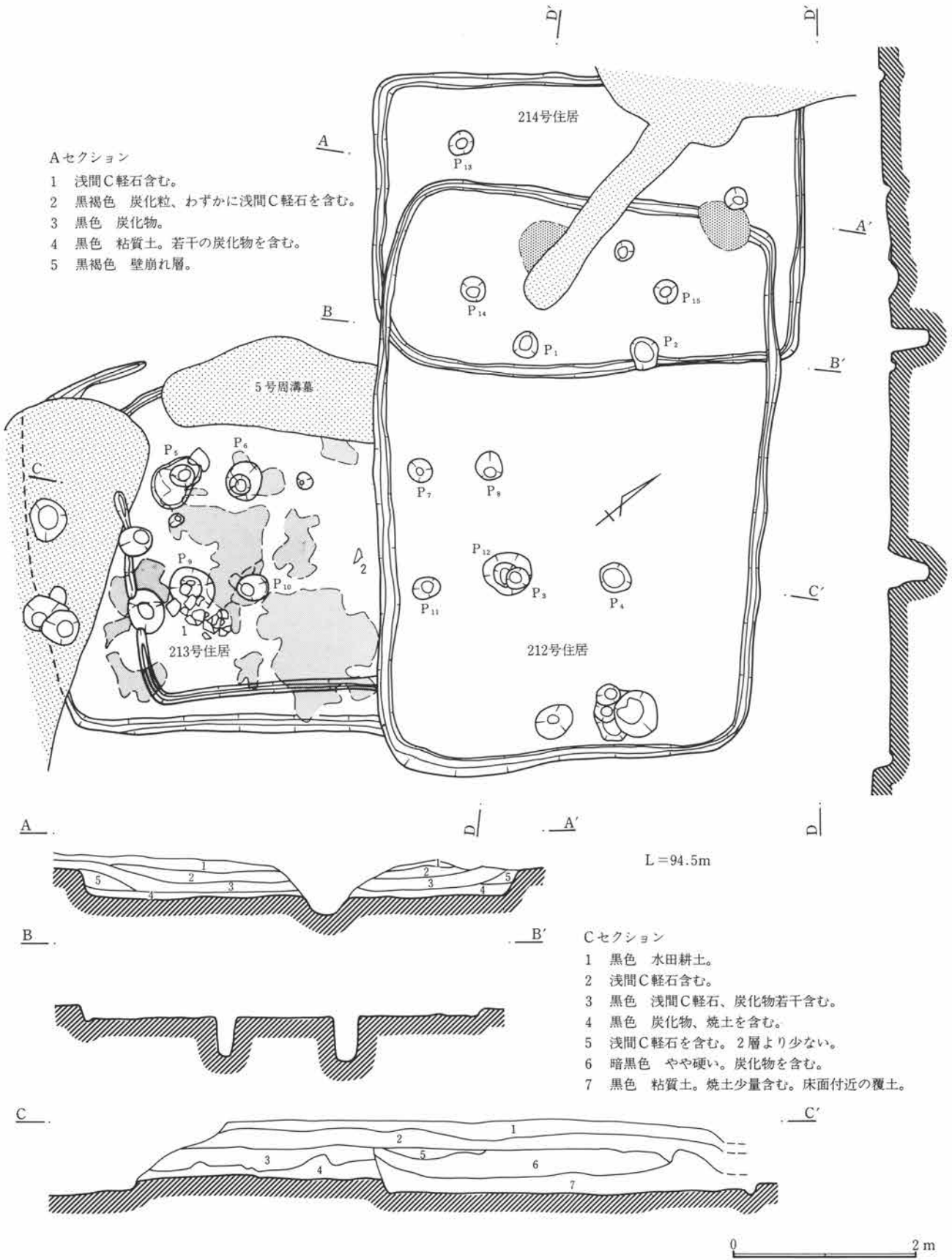
**柱穴** 支柱穴は4箇所検出している(P1~P4)。支柱は4本構造である。4支柱穴は、大きさ形状は一様で径25cm、深さ50cm前後である。

**炉跡** 西側(奥側)支柱穴P1と周壁の間に焼土帯を検出する。位置的には著しく周壁際であるがこれが炉跡と考えられる。東半部を後世の攪乱で失っている。

**遺物出土状態** 覆土中より弥生土器破片が多数出土している。

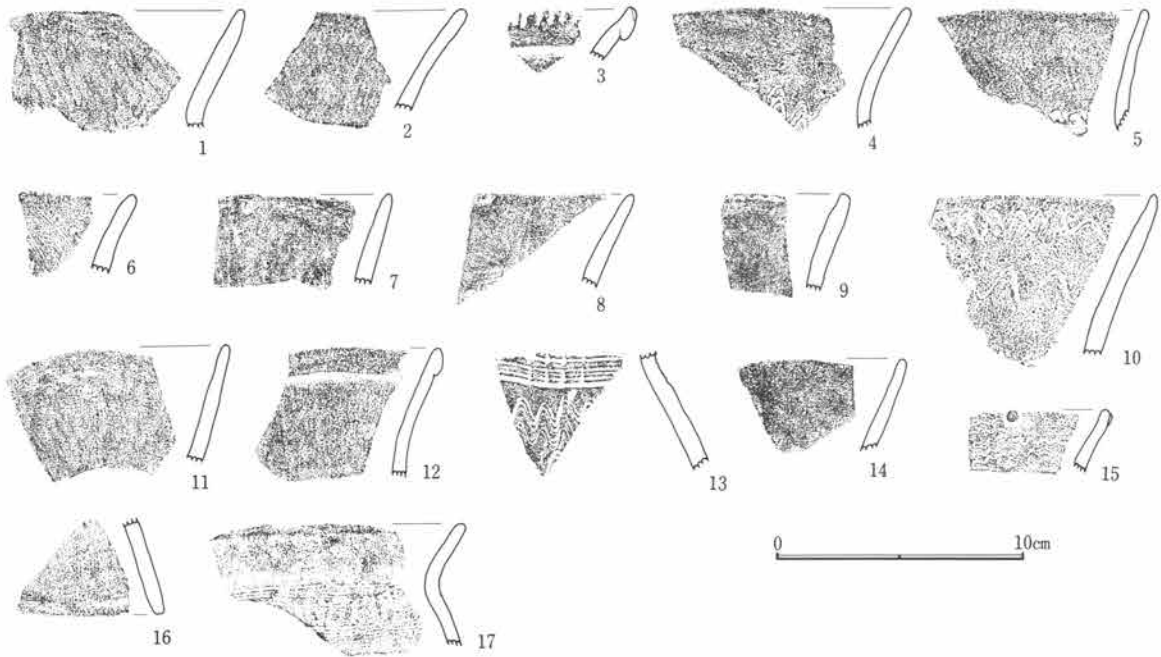
**時期** 弥生後期第3期

**他の遺構との関係** 214号住居(弥生後期第3期)と重複。214号住居の炉跡が本住居の壁溝上に設けられていることから、本住居より214号住居の方が新しいと考えられる。213号住居(弥生後期第1期)と重複する。213号住居の床面に広がる焼土帯を本住居が切っていることから、本住居の方が新しいと判断できる。5号周溝墓は本住居の覆土を切っている。



第95図 212号、213号、214号住居

6 検出した遺構、遺物



第96図 212号住居出土遺物

第85表 212号住居出土土器観察表 (拓本)

1 壺 内面ヘラナデ、砂粒混入、橙色	8 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、黒褐色	13 甕 砂粒混入、にぶい橙色
3 壺 砂粒混入、にぶい橙色、内面丹彩	9 甕 内面(b)ヨコナデ(c)ヘラミガキ、砂粒混入、灰褐色	14 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、灰褐色
4 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、灰褐色	10 甕 中砂粒混入、黒褐色	15 台付甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい橙色
5 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい褐色	11 甕 砂粒混入、にぶい橙色	16 台付甕 粗砂粒混入、明褐色
6 甕 砂粒混入、明赤褐色	12 甕 砂粒混入、にぶい橙色	17 台付甕 (d)2連止め簾状文(e)波状文
7 甕 砂粒混入、にぶい橙色		

213号住居跡 (第95図、図版29、30)

位置 C地区住居群の東南部、大溝の東に位置する(61-C07)。212号、214号住居と重複する。

形状、規模、方位 長方形を呈する。住居北東部212号住居との重複部は輪郭不明。壁溝が2重に巡っており、拡張の跡と判断できる。規模は長軸不明、短軸は外周で4.1mを測る。方位はN-34°-E。

周壁、壁溝 周壁は検出できない。壁溝は他の遺構との重複部では検出できないがほぼ全周するものと思われる。壁溝の幅約15cm。内側の壁溝は焼土帯の下に覆われており、拡張前の壁溝と思われる。

床面 堅く踏み固められた面を検出する。床面上には焼土帯、炭化物、炭化材が一带に著しく集中して見られることから本住居は火災に遭ったものと思われる。

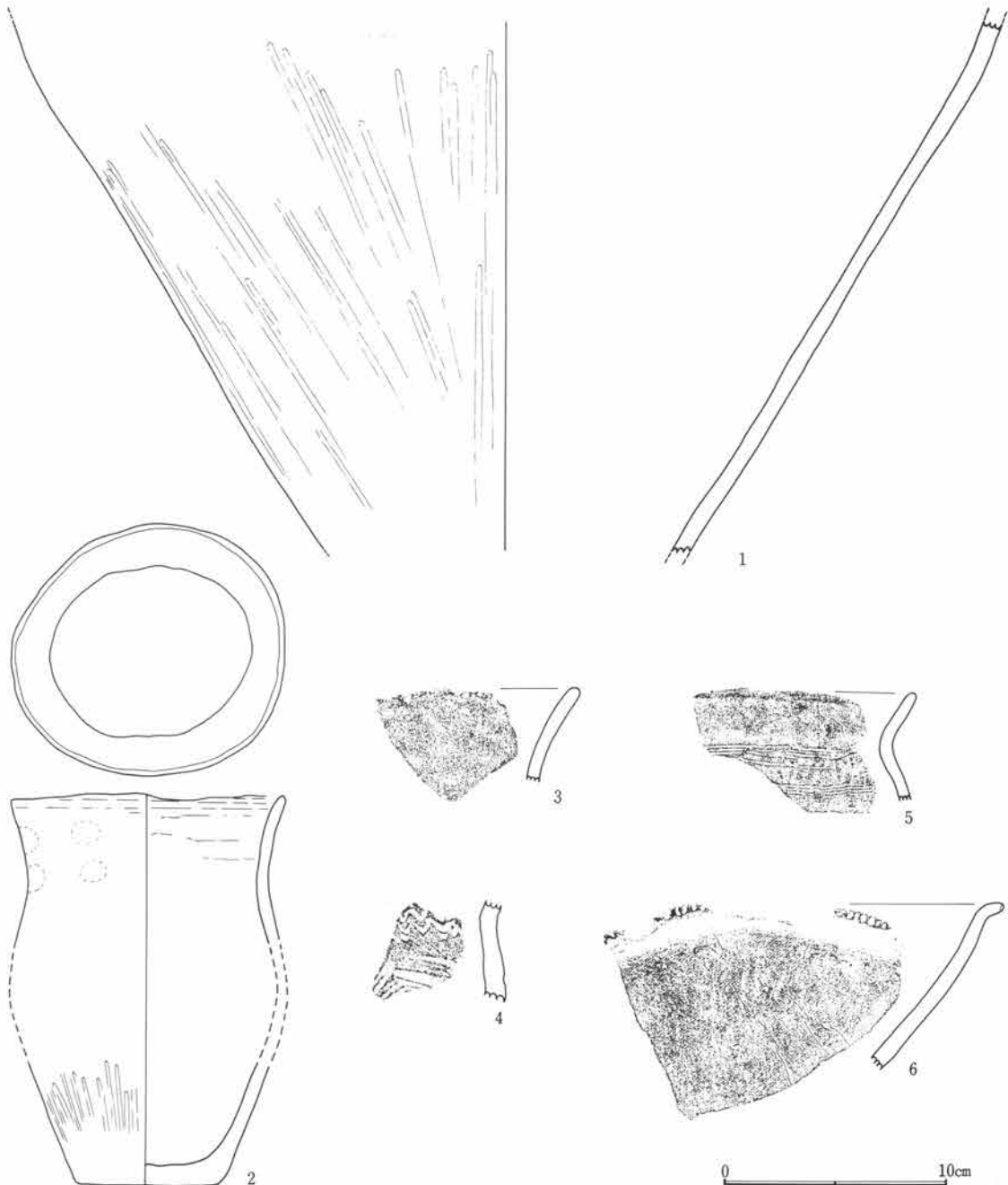
柱穴 支柱穴は住居内に8箇所検出する(P5~P12)。同時併存の支柱穴は4本構造と思われる。住居の北東部の輪郭が不明であるので、支柱の移動の状況は不明である。ただしP10→P9、P6→P5の移動は可能性が高い。支柱穴には単純な円形、又は2段に掘り込んだ円形ピットを見る。それぞれの深さは60cm前後で総じて規模は一様である。南辺の内及び外側の壁溝際にそれぞれ対をなすピットが認められる。これは出入部に設けられた施設に関わるピットであろう。

**炉跡** 床面全体に家屋焼失にともなう焼土帯が広がっていることから、炉跡の位置は特定できない。212号住居との重複部において失われた可能性が高い。

**遺物出土状態** 床面直上より大型壺下半部、完形の小型甕が潰れて破砕した状態で出土している。

**時期** 弥生後期第1期

**他の遺構との関係** 212号住居（弥生後期第3期）と重複する。



第97図 213号住居出土遺物

6 検出した遺構、遺物

第86表 213号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺			外面 胴部はヘラミガキ。 内面 器面荒れている。	細砂粒、黒色粒 混入 やや堅緻 明褐色	胴上部%
2	甕	口 12.2 底 6.2	口縁部緩く外反する。横断面形は楕円形、作りは粗雑。	外面 口縁部はヨコナデ、指オサエ、底部はヘラミガキ。 内面 口縁部はヨコナデ。	粗砂粒混入 やや堅緻 褐色	胴部欠損

第87表 213号住居出土土器観察表 (拓本)

3 甕 砂粒混入、にぶい橙色	5 甕 砂粒多量に混入、暗赤褐色	6 高坏 外面(b)ヨコナデ、以下ヘラミガキ、内面ヘラミガキ、砂粒混入、明赤褐色
4 甕 細砂粒混入、にぶい橙色		

214号住居跡 (第95図、図版29)

**位置** C地区住居群の東南部、大溝の東側に位置する(60-C08)。212号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。規模は長軸4.7m、短軸3.3mを測る。方位はN-38°-E。

**周壁、壁溝** 212号住居との重複部以外は周壁を良好に検出する。検出できた壁高は南辺で約25cmである。

壁土は暗褐色粘質土(第IVb層)である。壁溝は全周する。

**床面** 床面は平坦に踏み固めている。東に重複する212号住居と同レベルである。

**柱穴** 支柱穴は3箇所検出する(P13~P15)。支柱は4本構造である。それぞれ径20~30cmの円形ピットである。

**炉跡** 北側の支柱穴の外側、周壁との間に地床炉を検出する。

**遺物出土状態** 覆土中より弥生土器破片が出土している。

**時期** 弥生後期第3期

**他の遺構との関係** 212号住居(弥生後期第3期)と重複する。先後関係は214号住居の炉跡が212号住居の壁溝上に位置していることから本住居の方が新しいと思われる。



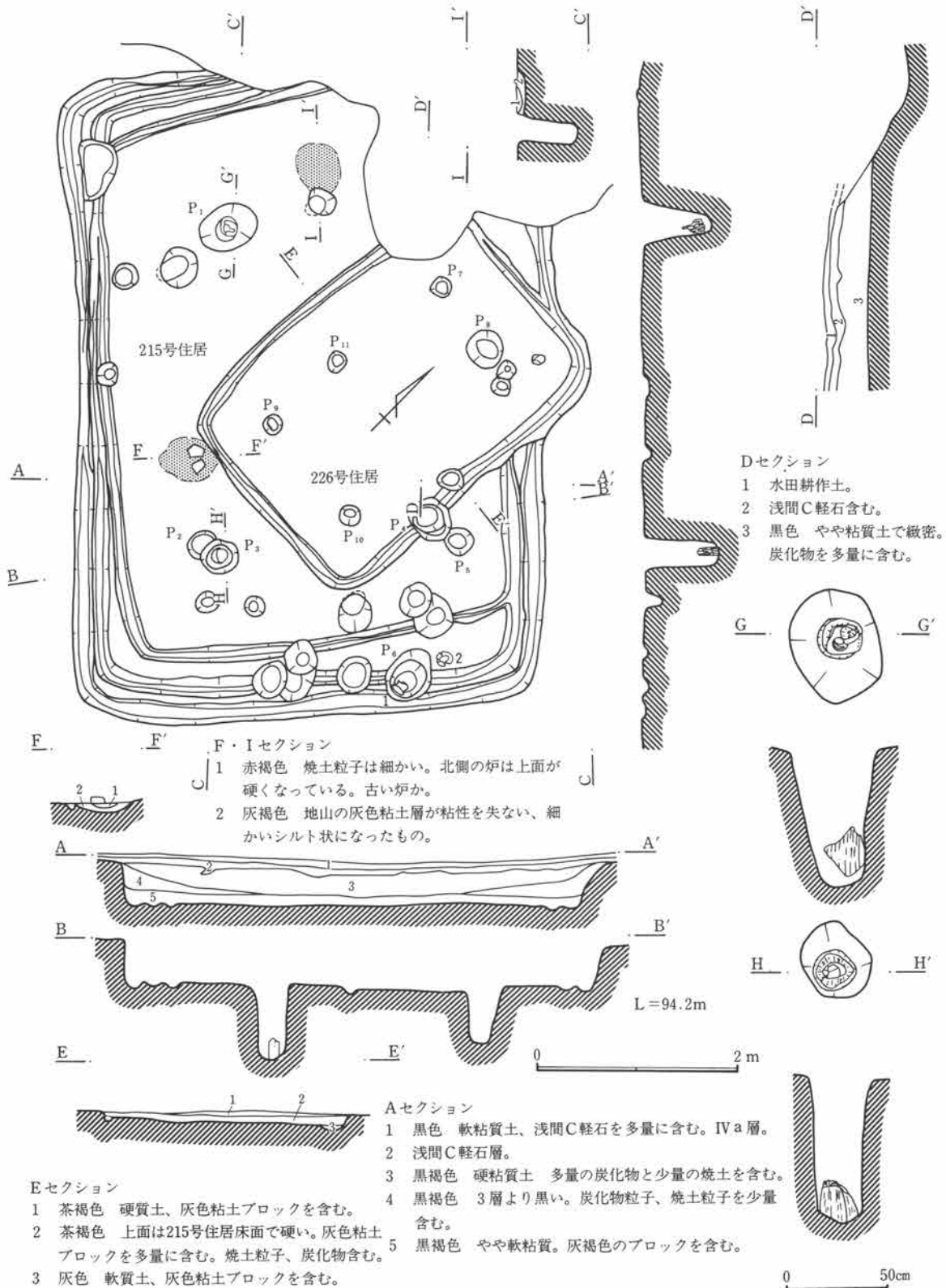
第98図 214号住居出土遺物

第88表 214号住居出土土器観察表 (拓本)

1 甕 細砂粒混入 にぶい赤褐色	3 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい橙色	4 台付甕 砂粒多量に混入、灰褐色
2 甕 内面ナデ、砂粒混入、褐色		

215号住居跡 (第99図、図版31、32)

**位置** C地区住居群の東南部に位置する(56-C07)。226号住居と重複する。



第99図 215号、226号住居

形状、規模、方位 長方形を呈する。2回の建て替え跡が認められる。最大規模は長軸6.4m、短軸4.7mを測る。方位はN-47°-W。

**周壁、壁溝** 周壁は良好に検出される。検出できた壁高は約40cmである。壁土は暗褐色粘質土(第IVb層)である。壁溝は全周検出する。

**床面** 床面は平坦に踏み固められている。

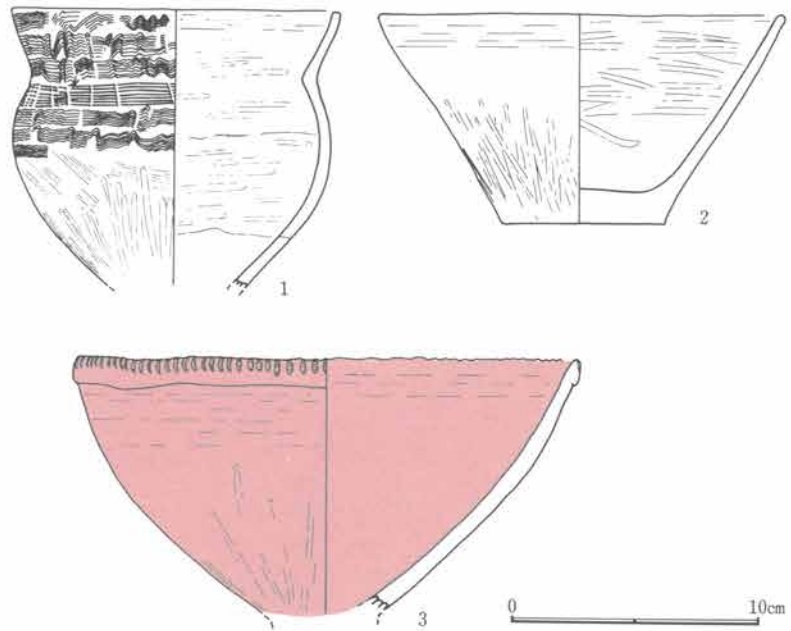
**柱穴** 支柱穴を3箇所検出する(P1~P5)。そのうち2箇所では2個のピットが隣接して見られ、住居の拡張に伴って支柱穴の建て替えが行われたものと思われる。各支柱穴は径30~40cmの円形ピットでそれぞれ深さが一様に70cm前後である。また2箇所ピット底部に径20cm程の柱材が残存していた(P1、P3)。東南辺部にピットが集中して見られるが、これらは出入部の施設に関わるピットと考えられる。

**炉跡** 西北側(奥側)支柱穴の外、周壁との間に地床炉を設けている。

**遺物出土状態** 覆土中より土器破片多数出土する。東南部に集中するピット(P6)中より脚台部のみ欠損する遺存状態の良好な台付甕が出土している。

**時期** 弥生後期第3期

**他の遺構との関係** 226号住居(弥生後期)と重複する。226号住居は本住居の張り床面の下に検出しており、先後関係は本住居の方が新しい。

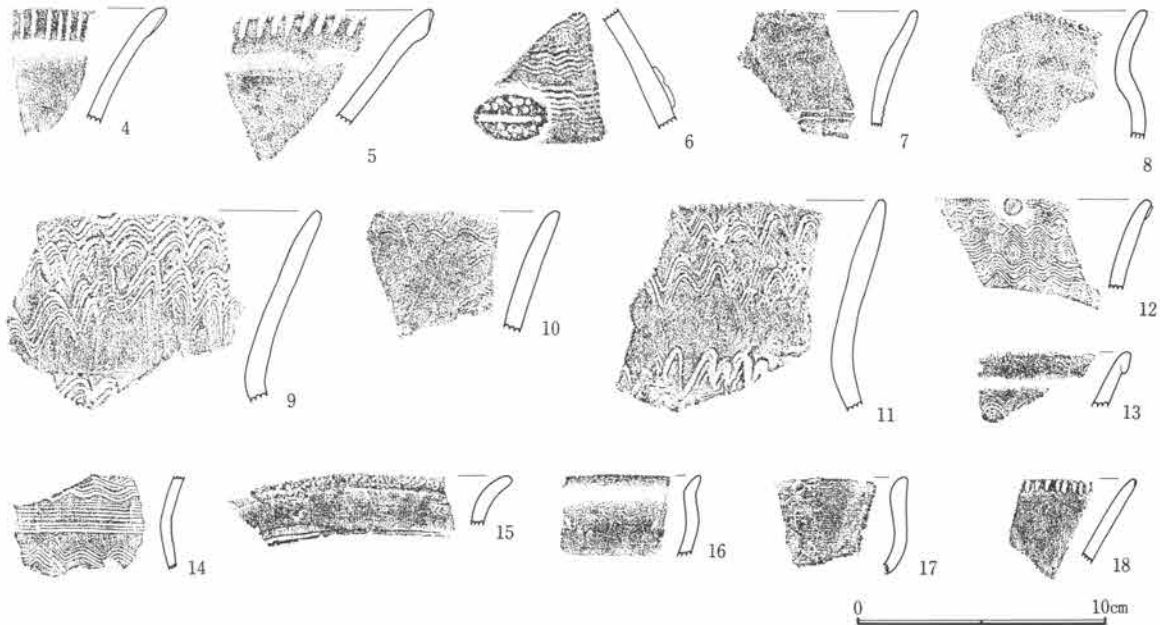


第100図 215号住居出土遺物

第89表 215号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	台付甕	口 13.0 胴 12.8	口辺部はやや内湾する。	外面 口辺部は波状文、頸部は等間隔止め簾状文、胴上部は波状文、胴~底部はハケメ後ヘラミガキ。 内面 口縁部はヨコナデ、口辺部はヘラミガキ、胴~底部はヘラミガキ。	中砂粒混入 やや堅緻 褐色	底部 $\frac{1}{4}$ 、脚台部欠損
2	鉢	口 16.4 底 6.6 高 8.5		外面 口辺部はヨコナデ、胴部はヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 灰黄色	口縁~胴部一部欠損
3	高 杯	口 20.1	杯部はゆるやかに内湾する。	外面 口縁部は刻み目、口辺部はケズリ後ナデ。胴部はヘラミガキ。 内面 口辺部はヨコナデ。	細砂粒混入 にぶい赤色	杯部 $\frac{1}{4}$ 、脚部欠損 内外面共に丹彩





第101図 215号住居出土遺物 (2)

第90表 215号住居出土土器観察表 (拓本)

4 壺 砂粒多量に混入、橙色	9 甕 内面ヘラミガキ、砂粒多量に混入、赤褐色	13 甕 中砂粒混入、黒褐色
5 壺 細砂粒多量に混入、褐灰色	10 甕 内面ヨコナデ、砂粒多量に混入、にふい褐色	14 甕 砂粒混入、にふい褐色
6 壺 内面ヘラナデ、細砂粒多量に混入、橙色	11 甕 細砂粒混入、灰褐色	15 甕 砂粒混入、灰褐色
7 甕 砂粒混入、にふい橙色	12 甕 内面(b)ヨコナデ以下ヘラミガキ、砂粒多量に混入	16 埴 淡黄色、径13cm
8 台付甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、灰褐色		17 埴 (b)ヨコナデ 砂粒混入、にふい橙色
		18 鉢? (a)刻み目

## 226号住居跡 (第99図、図版31)

位置 C地区住居群の東南部大溝の東に位置する(56-C07)。215号住居と重複する。

形状、規模、方位 隅丸長方形を呈する。小型である。規模は長軸3.5m、短軸2.6mを測る。方位はN-7°-E。

周壁、壁溝 周壁は全周検出する。215号住居との重複部で壁高は約10cmである。壁溝は全周する。

床面 床面は平坦に踏み固めている。

柱穴 支柱穴を4箇所検出する(P7~P10)。4支柱穴は整った長方形配置を示している。西側支柱穴間に柱穴を認める(P11)。4支柱穴は径約20cm、深さP7~P9は20cm前後、P10は30cmと一様に小規模である。

炉跡 不明。検出できない。

遺物出土状態 出土遺物はほとんど見られない。

時期 弥生後期

他の遺構との関係 215号住居(弥生後期第3期)の張り床下に検出している。本住居の方が古い。

216号住居跡 (第102図、図版32)

**位置** C地区住居群の南東端部、大溝の東側に位置する(60-C03)。5号周溝墓と重複する。

**形状、規模、方位** 隅丸長方形を呈する。規模は長軸6.0m、短軸4.5mを測る。方位はN-34°-E。

**周壁、壁溝** 周壁は全周良好に検出する。検出できた壁高は約25cmである。壁溝は認められない。

**床面** 床面は平坦に踏み固められている。

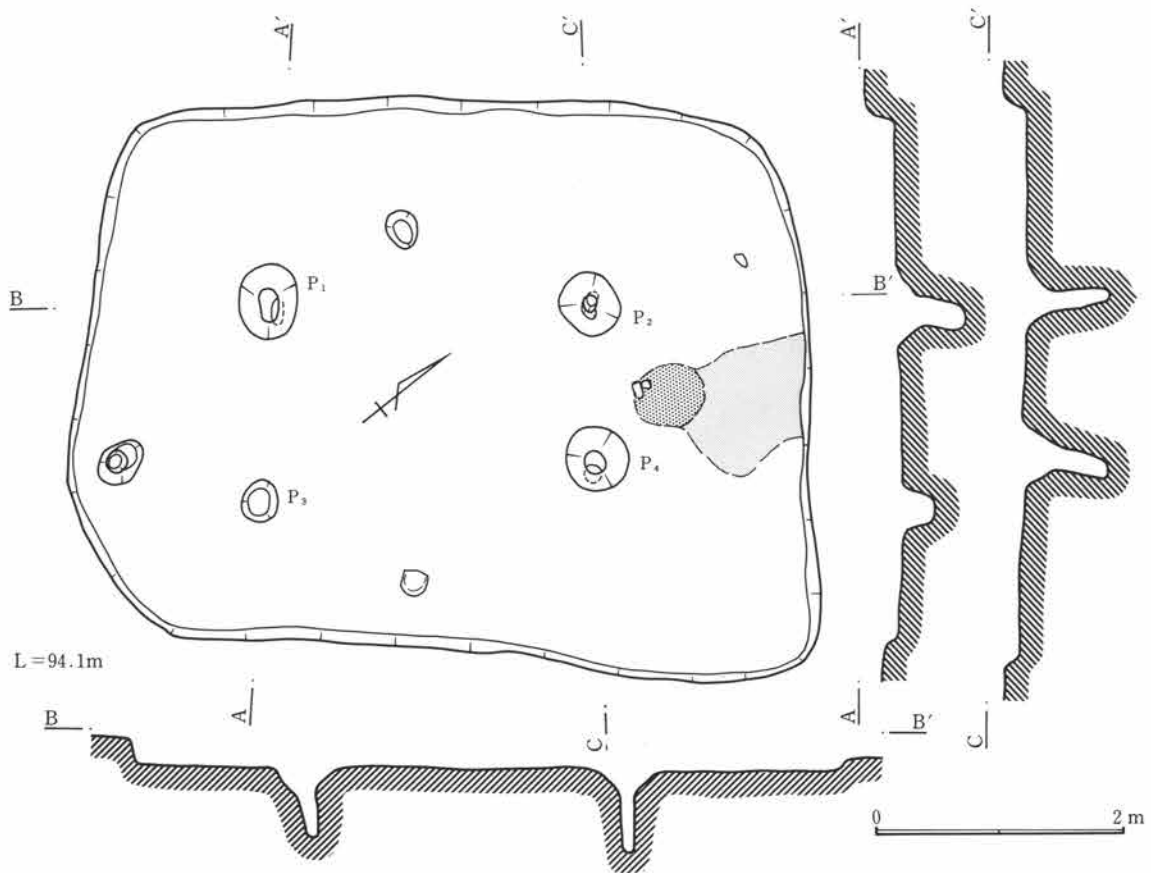
**柱穴** 支柱穴を4箇所で見出し良好に検出する。支柱は4本構造である。3箇所の支柱穴は形状が特に類似している。上端径は50cm前後であるが下半部の径は小さく10cm前後で、ロート状に2段に掘り込んでいる。

**炉跡** 北東(奥側)2支柱穴と周壁の間に地床炉を設けている。炉跡は径60cm程の火床面が認められる。

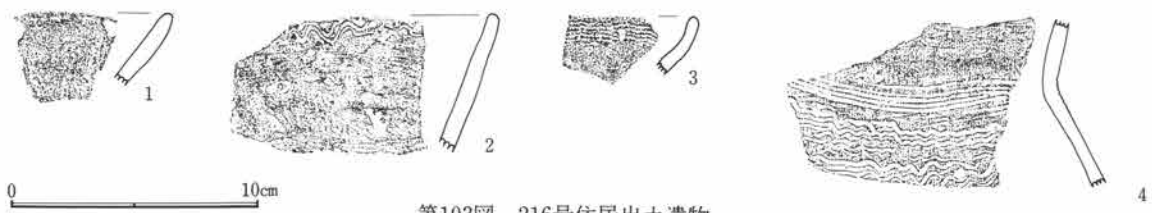
**遺物出土状態** 覆土中より土器破片が数点出土している。

**時期** 弥生後期第1期

**他の遺構との関係** 5号周溝墓(弥生後期~古墳前期)と重複する。



第102図 216号住居



第103図 216号住居出土遺物

第91表 216号住居出土土器観察表 (拓本)

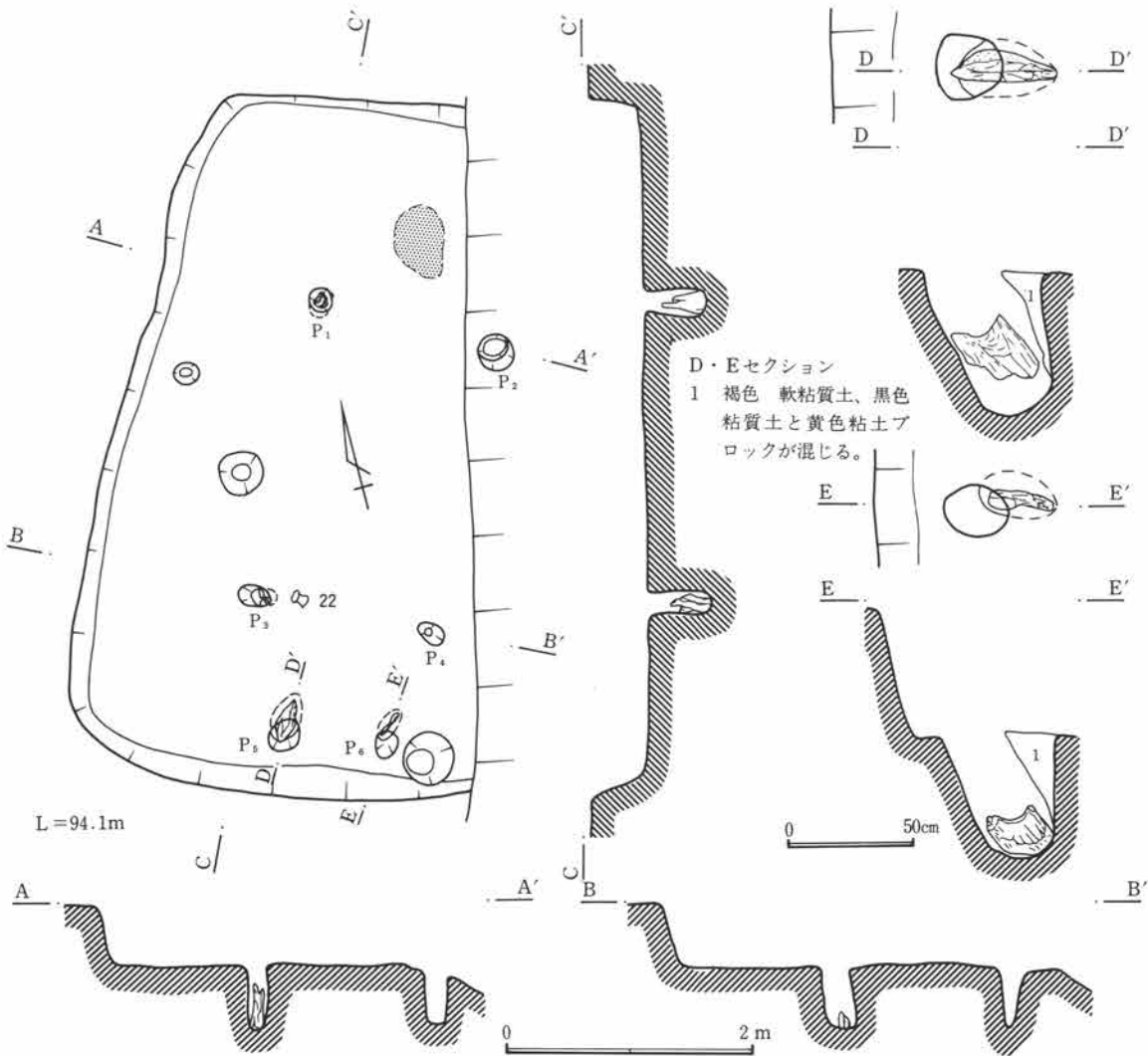
1 壺 細砂粒混入、橙色	2 壺 内面ヘラナデ、砂粒混入小礫含む、 にぶい黄橙色	4 甕 内面ヘラミガキ、細砂粒混入、にぶ い黄橙色
--------------	--------------------------------	------------------------------

218号住居跡 (第104図、図版33)

位置 C地区東南部に位置する (50-C03)。

形状、規模、方位 長方形を呈する。東半部を後世の溝に切られている。支柱穴の配置関係から住居形状、規模を推定することができる。規模は長軸5.6mを測る。短軸は支柱穴の位置関係から4.2m前後になると思われる。方位はN-22°-E。

周壁、壁溝 周壁は良好に検出する。検出できた壁高は約50cmに達している。傾斜角は81度を測る。壁土は暗褐色粘質土 (第IVb層)。壁溝は認められない。



6 検出した遺構、遺物

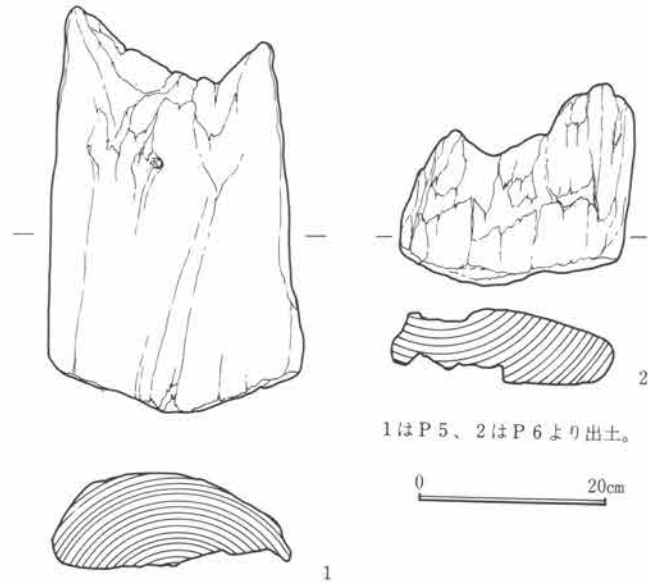
**床面** 暗褐色砂質土を堅く踏み固めた面を検出する。

**柱穴** 主柱穴を4箇所で良好に検出する。主柱は4本構造である。柱穴内には柱材が残存していた(P 1、P 3)。柱材の径は10cm程である。又南辺部周壁際には1対の円形のピットが見られる(P 5、P 6)。両ピットの中にも木材が遺存しており、P 5中の木材は幅28cm、厚さ10cm、長さ45cm程が遺存している。上部は腐食により失われる。下半部は遺存状態は良好で端部は切断痕が観察できる。P 6中の遺存材は長さ23cm、幅24cm遺存する。上部は腐朽し欠損するが、下端部は遺存状態は良好で元の面が見られ、下端部木口面には切断痕が観察できる。木口面にはタール状の付着物が厚く見られる。両遺存材はピットに従って外方向に68度の傾斜角度を持っていた。これは出入部の施設の構造物であり、梯子の一部ではないかと推定できる。ピット中心間85cmを測る。

**炉跡** 北側(奥側)2主柱穴と周壁との間に地床炉を設けている。

**遺物出土状態** 床面直上より弥生土器破片が多数出土している。出土土器中、大型壺の底部破片がとくに目立って出土しているのが注意される。

**時期** 弥生後期第1期



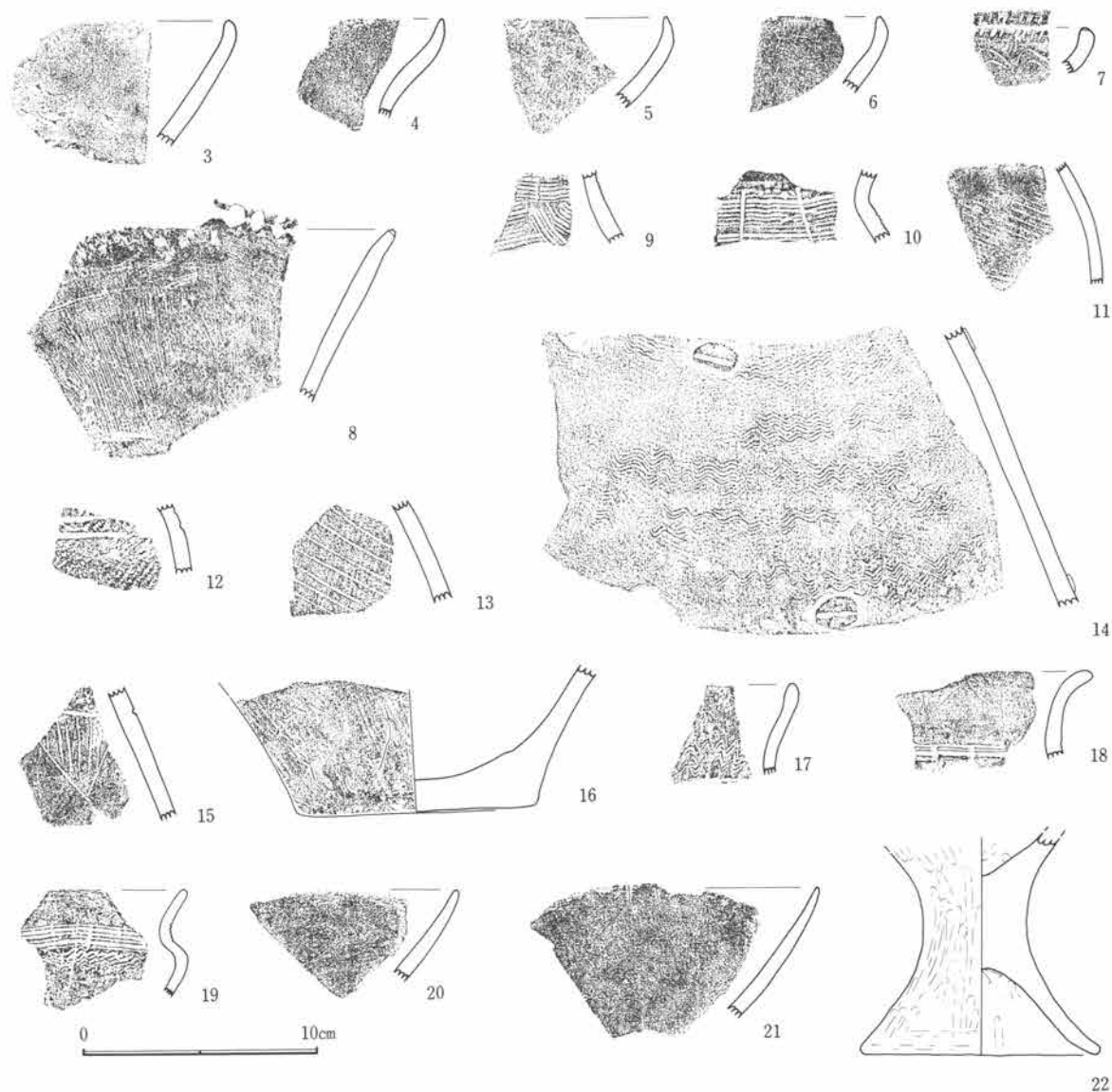
第105図 218号住居出土遺物 (1)

第92表 218号住居出土土器観察表 (拓本)

3 壺 中砂粒混入、赤褐色、内面丹彩	11 壺 内面ハケメ、砂粒混入、にぶい橙色	17 甕 砂粒混入、にぶい橙色
4 壺 砂粒混入、橙色	12 壺 (e)縄文地文平行沈線、砂粒混入、にぶい橙色	18 甕 外面(d)等間隔止め簾状文、内面(b)ヨコナデ、(c)ヘラナデ、砂粒少量混入
5 壺 中砂粒混入、にぶい橙色、内面丹彩	13 壺 (e)ヘラ描斜行沈線	19 甕 内面ヘラミガキ、砂粒多量に混入
6 壺 砂粒混入、淡橙色	14 壺 内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい橙色、外面部分的丹彩	20 高坏 外面ヘラミガキ、内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい橙色、内面丹彩
7 壺 (a)鋭いヘラによる刻み目、(b)波状文	15 壺 (f)ヘラ描鋸歯文、砂粒混入、橙色	21 鉢 中砂粒混入、灰褐色、内外面丹彩
8 壺 砂粒混入、橙色、内面丹彩	16 壺 砂粒混入、浅黄橙色	
9 壺 (e)櫛描山形文、砂粒混入		
10 壺 粗砂粒混入、にぶい橙色		

第93表 218号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
22	高坏	脚 10.2		外面 全面ヘラミガキ、脚底部は横ヘラナデ。 内面 ヘラナデ、ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 淡赤橙色	脚台部



第106図 218号住居出土遺物 (2)

## 219号住居跡 (第107図、図版34)

**位置** C地区住居群の東南部、大溝の東に位置する(53-C07)。220号、222号、227号住居と重複する。

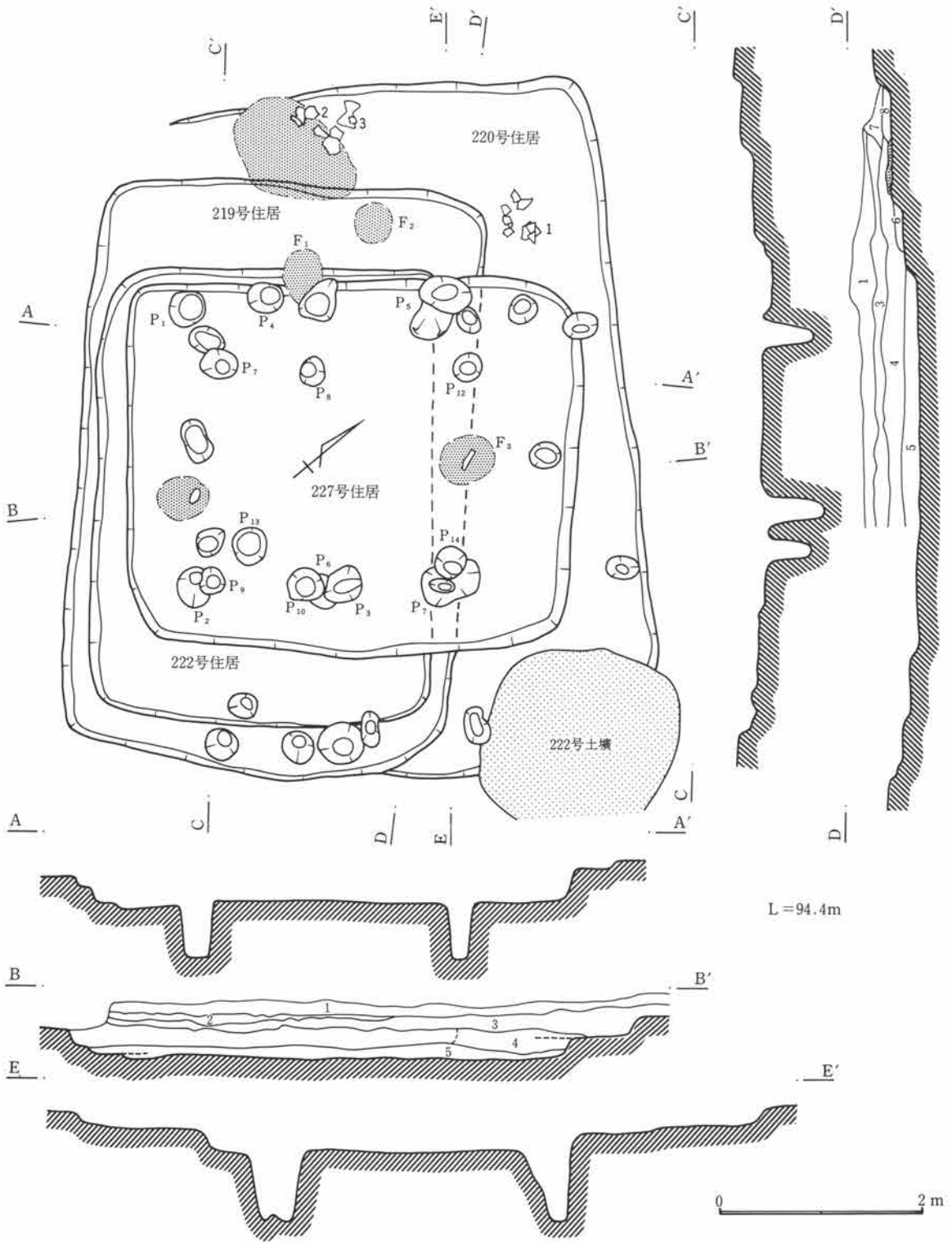
**形状、規模、方位** 長方形を呈する。規模は長軸5.8m、短軸3.8mを測る。方位はN-46°-W。

**周壁、壁溝** 227号住居との重複部は検出困難であったが、全体的に遺存状態は良好である。検出できた壁高は10cmである。壁土は暗褐色粘質土である。壁溝は認められない。

**床面** 床面は平坦に踏み固めている。他の遺構との重複部で張り床は認められない。

**柱穴** 支柱穴は明確ではない。住居内に多数のピットが存在しているため本住居の支柱穴を明確に特定できない。位置的にはP1~P3がこれに当たる可能性が高い。これらは一様に径約35cm、深さ53~66cm前後である。東出入部に一对のピットを検出する。

**炉跡** 北西側(奥側)支柱穴の外、周壁との間に地床炉を見る(F1)。径50cm程の範囲が強く焼けて焼土



B・Dセクション

- |                        |                                 |
|------------------------|---------------------------------|
| 1 黒褐色 砂質土、浅間C軽石を多量に含む。 | 5 褐色 4層より白っぽい。炭化物、灰、焼土粒、ロームを含む。 |
| 2 褐色 やや砂質、浅間C軽石を少量含む。  | 6 褐色 ロームブロックを含む。                |
| 3 褐色 浅間C軽石、少量の炭化物含む。   | 7 褐色 やや締っている。焼土粒子、炭化物を含む。       |
| 4 褐色 多量の炭化物、焼土粒子を含む。   | 8 褐色 やや粘質、焼土粒、炭化物を含む。           |

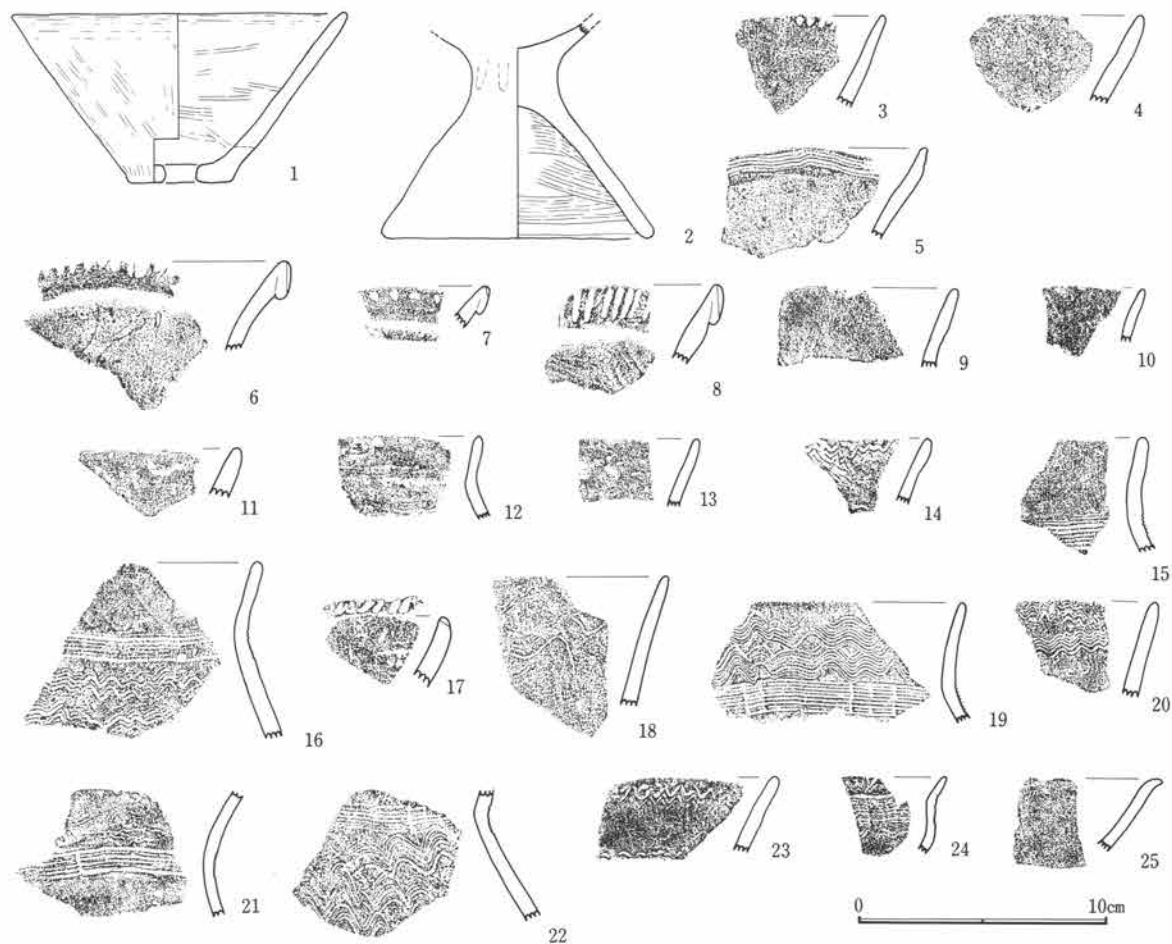
第107図 219、220、222、227号住居

化している。222号、227号住居の覆土上に位置している。

**遺物出土状態** 甎の半完形個体が床面上に、又弥生土器破片が多数覆土中より出土している。

**時期** 弥生後期第2期

**他の遺構との関係** 220号住居より古く、222号、227号住居（共に弥生後期第3期）より新しい。227号住居覆土上に本住居の炉跡が認められ、又220号住居の覆土、炉跡下に本住居が認められる。



第108図 219号住居出土遺物

第94表 219号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甎	口 13.6 底 4.2	底部に一孔を穿つ。	外面 口縁部はヨコナデ、体部はハケメ後、ヘラミガキ。 内面 口縁部はヨコナデ、体部はヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい黄橙色	体部～底部 $\frac{1}{2}$
2	台付甎	脚 11.0		外面 ヘラミガキ。 内面 脚部はハケメ後、ナデ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	脚台部 外面に煤付着

第95表 219号住居出土土器観察表(拓本)

3 壺 (a)刻み、砂粒混入、橙色	13 甕 内面(b)ヨコナデ、砂粒混入、淡橙色	19 甕 砂粒混入、にぶい赤褐色
4 壺 砂粒混入、にぶい橙色、丹彩	14 甕 砂粒混入、灰褐色	20 甕 砂粒多量に混入、にぶい褐色
6 壺 砂粒混入、橙色	15 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい 橙色	21 甕 砂粒混入、淡橙色
7 壺 砂粒混入、橙色	16 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい 赤褐色	22 甕 内面ヘラミガキ、中砂粒混入、黒褐 色
8 壺 砂粒混入、橙色	17 甕 砂粒混入、灰黄色	23 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入
10 甕 砂粒混入、にぶい橙色	18 甕 砂粒混入、にぶい橙色	24 台付甕 砂粒混入、明赤褐色
11 甕 砂粒混入、にぶい橙色		25 高坏 砂粒混入、にぶい橙色、内面丹彩
12 甕 粗砂粒混入、にぶい赤褐色		

## 220号住居跡 (第107図、図版34、35)

**位置** C地区住居群の東南部、大溝の東に位置する(52-C07)。219号、222号、227号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。西南辺部は輪郭が不明である。西南周壁は検出できないが床面の範囲確認に基づいて形状を推定する。規模は長軸6.8m、短軸不明。方位はN-58°-W。

**周壁、壁溝** 周壁は他の遺構との重複部では検出は困難であったが、他は全体的に良好に検出する。検出できた壁高は15cm前後である。壁土は暗褐色粘質土(第IVb層)。壁溝は認められない。

**床面** 西辺付近の床面上には炭化物、炭化材の厚い広がりが見られる。本住居は焼失したものと思われる。

**柱穴** 主柱穴と思われるピットが4住居の重複部に多数検出している。位置的に本住居の主柱穴はP4~P6になるかと思われる。3主柱穴は一樣に径約30cm円形ピットで、深さは70~80cmである。

**炉跡** 炉跡は219号住居内床面よりやや浮いた位置に焼土帯(F2)を検出するがこれが本住居の炉跡になるとと思われる。

**遺物出土状態** 床面上の炭化材の間に高坏の完形個体が横倒した状態で、台付甕が大形破片に破碎し折り重なった状態で出土している。床面直上より弥生土器破片が多数出土している。

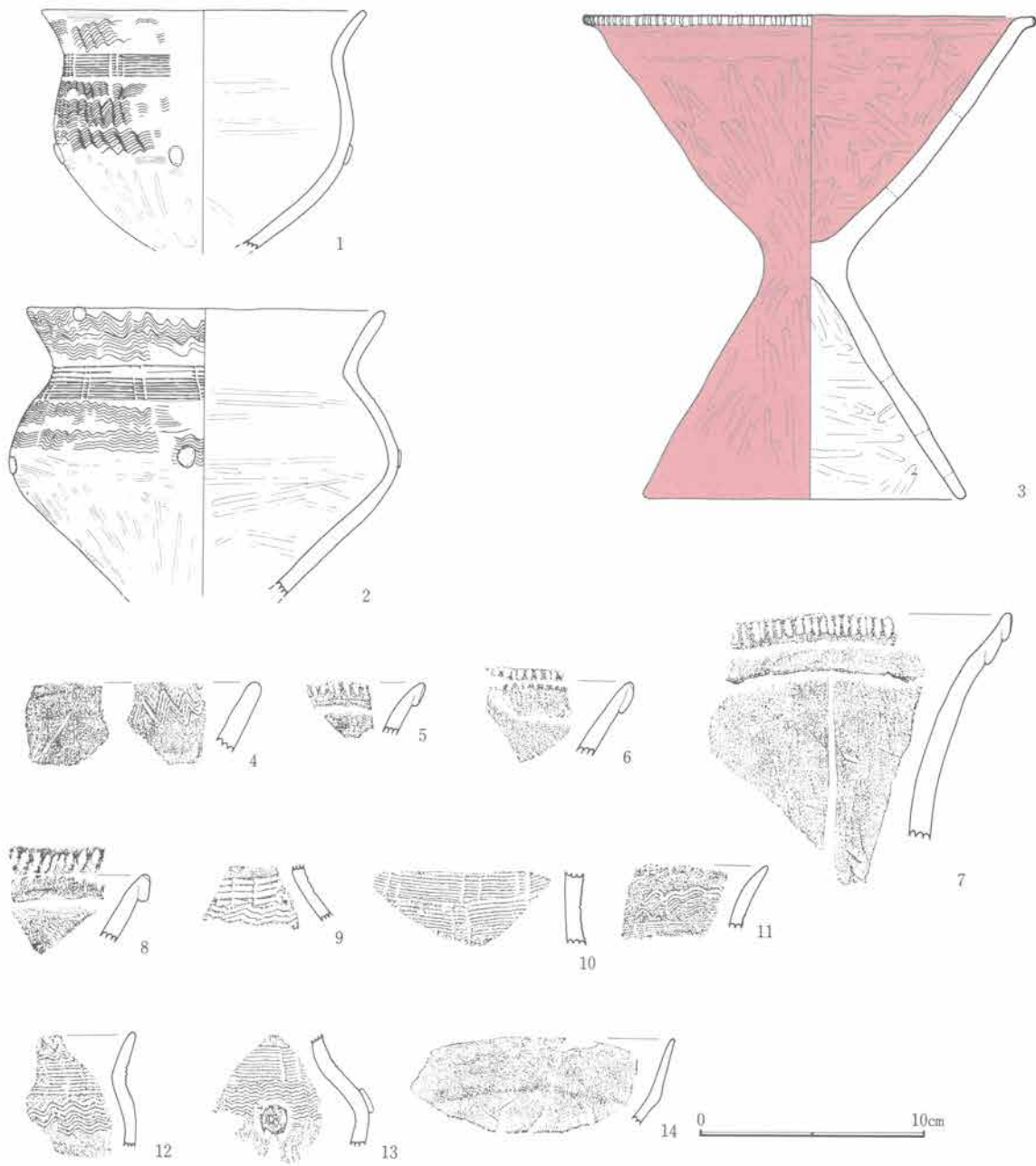
**時期** 弥生後期第3期

**他の遺構との関係** 219号住居覆土上に本住居に伴う炭化物の広がりが若干認められ、又炉跡が219号住居の覆土上に認められることから、本住居は219号住居より新しいと思われる。

第96表 220号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	台付甕	口 14.8 胴 13.5	口辺部は緩やかに外反する。	外面 口辺部はヨコナデ後波状文、頸部は8本単位の3連止め簾状文、胴部は9本単位上→下の←波状文、等間隔4個の円形浮文、胴下位はハケメの後上→下のヘラケズリ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒、黒色粒混入 やや堅緻 黒褐色	口縁部1/2周 脚台部欠損
2	台付甕	胴 17.5	口辺部は直状に外反する。	外面 口辺部はヨコナデの後←波状文、頸部は9本単位の2連止め←簾状文、胴上部は←波状文、胴下部はヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	口縁-底部1/2周 脚台部欠損
3	高坏	口 20.4 脚 14.8 高 21.4	口縁部は外に折れ平坦面を作る。	外面 口縁部平坦面はヨコナデ、端部に刻み目、口辺部はヨコナデ、坏部はヘラミガキ、脚部はヘラミガキ。 内面 口辺部はヨコナデ、坏部はヘラミガキ、脚部はヘラミガキ。	微砂粒混入 堅緻 赤色	完形 内外面共に丹彩





第109図 220号住居出土遺物

第97表 220号住居出土土器観察表 (拓本)

4 壺 (b)波状文	8 壺 砂粒混入、橙色	14 鉢 内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい 橙色、内外面丹彩
6 壺 細砂粒混入、橙色	10 壺 内面ナデ、砂粒混入、にぶい橙色	
7 壺 砂粒混入、にぶい褐色	11 甕 砂粒混入、にぶい橙色	

222号住居跡 (第107図、図版34)

**位置** C地区住居群の東南部に位置する(52-C06)。219号、220号、227号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。規模は長軸4.5m、短軸3.3mを測る。方位はN-48°-W。

**周壁、壁溝** 周壁は227号住居との重複部では検出できない。他は全体的に良好に検出する。検出できた壁高は10cm前後である。壁溝は認められない。

**床面** 床面は平坦に踏み固められている。

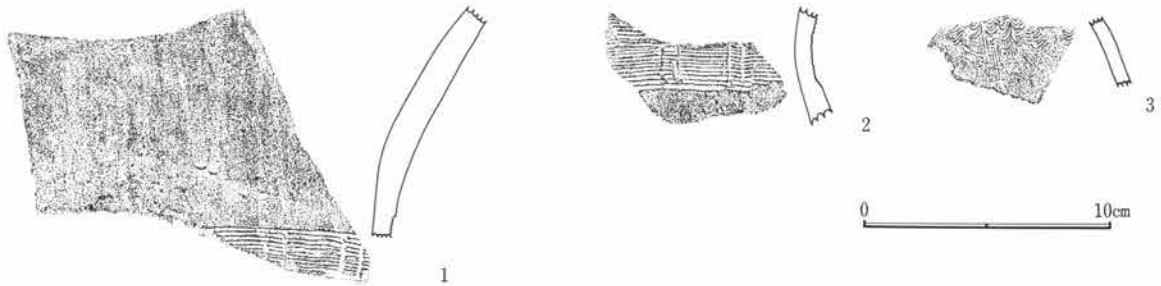
**柱穴** 他の住居との重複部に柱穴と見られるピットを多数検出している。このうちP7~P10が本住居の主柱穴と思われる。それぞれのピットは径25~30cm、深さ40~50cmであり、4ピットの位置関係は整った長方形配置を示している。

**炉跡** 不明。検出できない。227号住居により失われたと思われる。

**遺物出土状態** 非常に少ない。床面直上より弥生土器破片数点出土。

**時期** 弥生後期第2期か

**他の遺構との関係** 227号住居(弥生後期第3期)により本住居の炉跡、床面が失われていると思われる。222号→227号→219号→220号の順序で新しくなると思われる。



第110図 222号住居出土遺物

第98表 222号住居出土土器観察表(拓本)

1 甕 砂粒多量に混入、橙色	2 壺 砂粒混入、にぶい橙色	3 壺 砂粒混入、明褐色
----------------	----------------	--------------

227号住居跡 (第107図、図版34)

**位置** C地区住居群の東南部、大溝の東に位置する(52-C07)。219号、220号、222号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。規模は長軸4.4m、短軸3.8mを測る。方位はN-40°-E。

**周壁、壁溝** 周壁は良好に検出する。検出できた壁高約20cm。壁溝は検出できない。

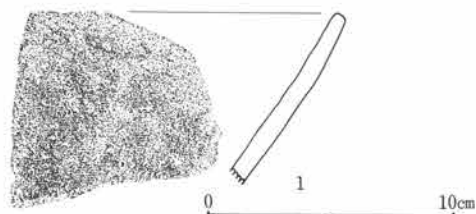
**柱穴** 住居内には他の住居との重複部で多数の柱穴を検出する。このうち本住居の主柱穴は位置関係からP7、及びP12~P14の4ピットと思われる。これらのピットの配置は整った長方形を示している。4ピットは径約30cm、深さ約60cm。ピットの形状、規模は比較的一律である。

**炉跡** 炉跡は西南側主柱穴間やや外側と北東主柱穴間の2箇所焼土帯を検出する。北東部の方は浅く窪んでおり、窪みの底面が火床面である。火床面上に長さ20cmの細長い川原石を据えている。

**遺物出土状態** 出土遺物は僅少である。床面直上より弥生土器破片が数点出土する。

**時期** 弥生後期第2期か

**他の遺構との関係** 219号住居(弥生後期第2期)、220号、222号住居(共に弥生後期第3期)と重複する。本住居の覆土上に219号住居の炉跡が位置し、222号住居の覆土を切って本住居が造られている。222号→227号→219号→220号の順に新しくなると思われる。



第111図 227号住居出土遺物

第99表 227号住居出土土器観察表  
(拓本)

1 壺 外面粗いヘラミガキ、内面ナデ、中砂粒混入、淡橙色

**228号住居跡** (第113図、図版36)

**位置** C地区東部、大溝東部に位置する(49-C07)。229号、230号、231号、232号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。住居東南部は他の住居との重複により輪郭不明。本住居に伴う支柱穴などにより、住居形状、規模を推定できる。規模は、長軸は推定値で5.7m、短軸は3.6mを測る。方位はN-40°-W。

**周壁、壁溝** 229号、230号住居との重複部では周壁は検出できないが、住居北西部では周壁を良好に検出する。検出できた壁高は西南辺で約20cm。壁溝は検出できない。

**床面** 床面は平坦に踏み固められている。

**柱穴** 支柱穴を4箇所検出する(P1~P4)。4支柱穴はそれぞれ比較的不整形で、径は25~40cm、深さはP1は55cm、P3は29cm、P2、P4は45cm前後と一律ではない。南東側周壁際に1対のピットがある。

**炉跡** 北西側(奥側)支柱穴の外、周壁との間に地床炉を設けている(F1)。炉跡は頸部50cm程の浅い窪みを造って、底面を火床面としている。火床面は焼土化している。火床面の縁辺に長さ25cm程の細長い川原石を据えている。北西に炭化物、黒色灰の広がりが見られる。

**遺物出土状態** 覆土中より弥生土器破片が多数出土している。

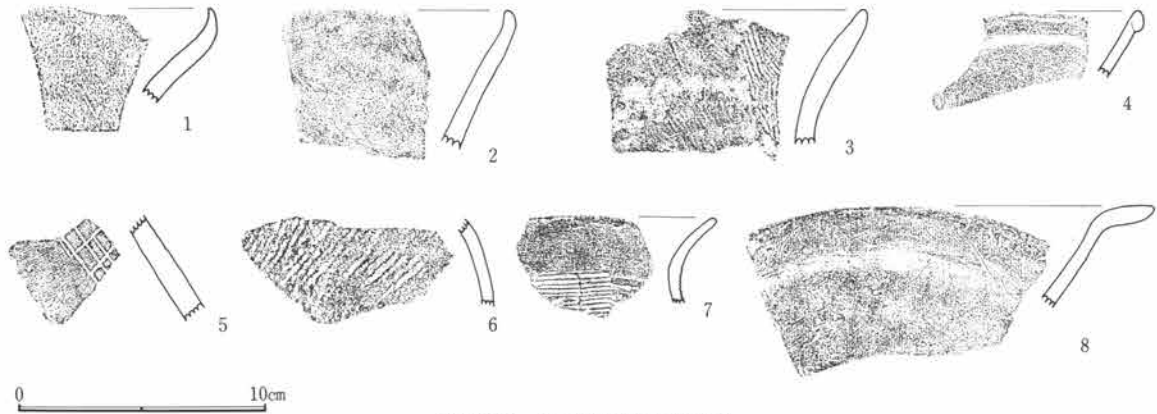
**時期** 弥生後期第1期

**他の遺構との関係** 229号住居(弥生後期第2期か)、230号住居(弥生後期第2期)、231号住居(弥生後期第1期か)、232号住居(弥生後期第3期)と重複する。

第100表 228号住居出土土器観察表(拓本)

1 壺 内面(y)ヨコナデ、細砂粒混入、浅黄橙色	4 壺 砂粒混入、にぶい橙色、丹彩	7 甕 内面ヨコナデ、砂粒混入、にぶい橙色
2 壺 砂粒混入、灰白色	5 壺 (e)ヘラ描沈線格子文、砂粒混入、灰白色	8 高坏 砂粒混入、淡橙色、内面丹彩
3 壺 中砂粒混入、灰白色	6 壺 (e)縄文、砂粒混入、にぶい赤褐色	

6 検出した遺構、遺物



第112図 228号住居出土遺物

229号住居跡 (第113図、図版35、36)

**位置** C地区住居群の東部(大溝の東)に位置する(47-C07)。228号、230号、231号、232号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。規模は長軸6.4m、短軸4.5mを測る。方位N-23°-E。

**周壁、壁溝** 周壁は229号住居との重複部では検出は困難であった。他は全体的に良好に検出する。検出した壁高は25cm。壁土は暗褐色粘質土(第IVb層)。壁溝は検出できない。

**床面** 平坦に踏み固められている。

**柱穴** 支柱穴を4箇所良好に検出する(P5~P8)。4支柱穴は径40cm、深さ70cm前後である。南側出入部に1対のピット有り。

**炉跡** 北側(奥側)支柱穴の外、周壁との間に地床炉を設けている(F2)。炉跡は頸部50cm前後の浅い窪みをつくり、底面を火床面としている。火床面は焼土化している。北に炭化物、黒色灰の広がりが見られる。

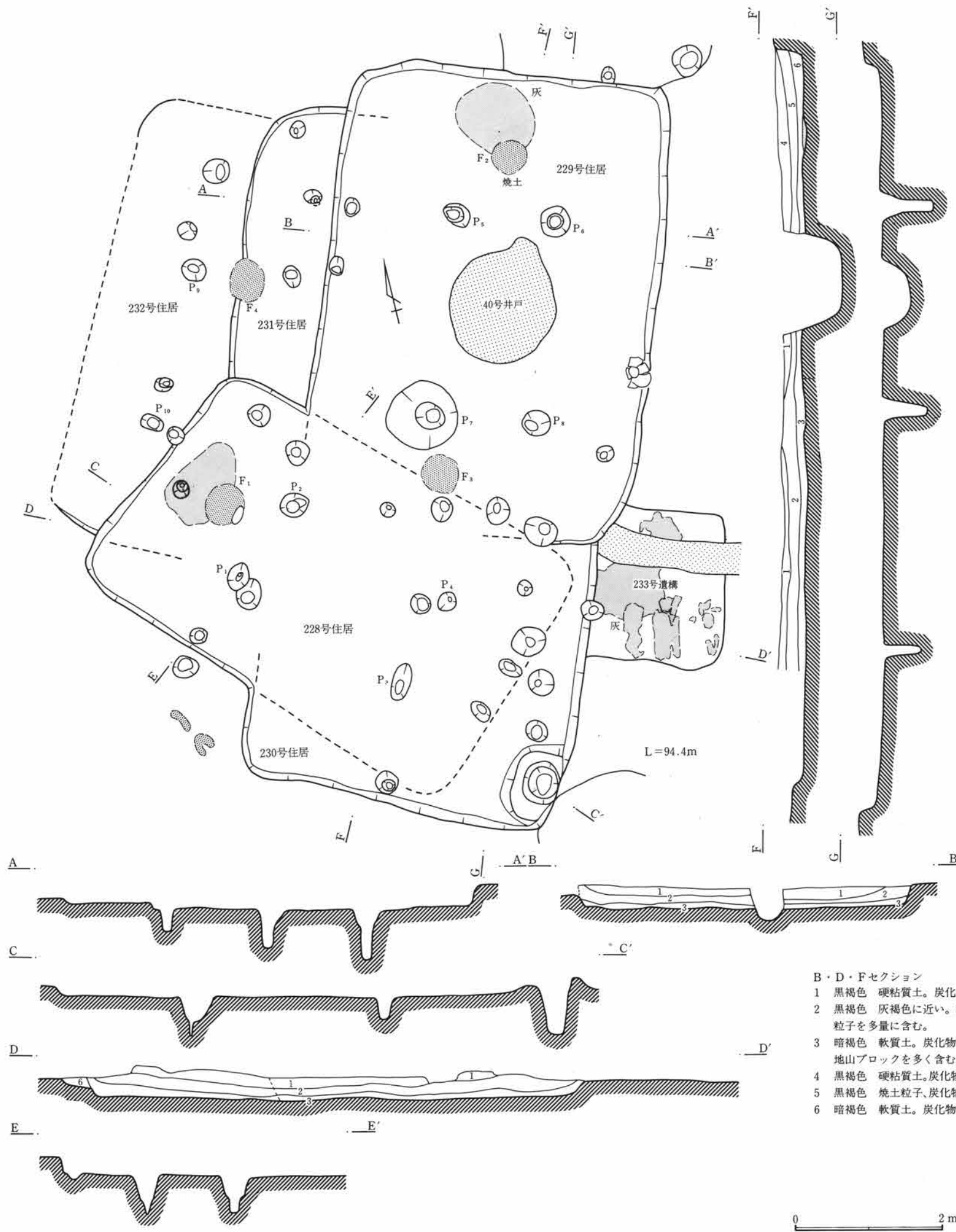
**遺物出土状態** 覆土中より弥生土器破片が多数出土している。東周壁際に頸部~胴上部が全周遺存した大型壺が倒立状態で出土している。覆土中より土製勾玉、打製石斧が出土する。

**時期** 弥生後期第2期か。

**他の遺構との関係** 228号、231号住居(共に弥生後期第1期)、230号住居(弥生後期第2期)、232号住居(弥生後期第3期)と重複する。先後関係は230号住居と床面同レベルで重複部に230号住居の炉跡が認められることから230号住居の方が新しいと思われる。231号住居との先後関係は不明。住居中央部に40号井戸を検出する。井戸は本住居よりも新しい。

第101表 229号住居出土土器観察表

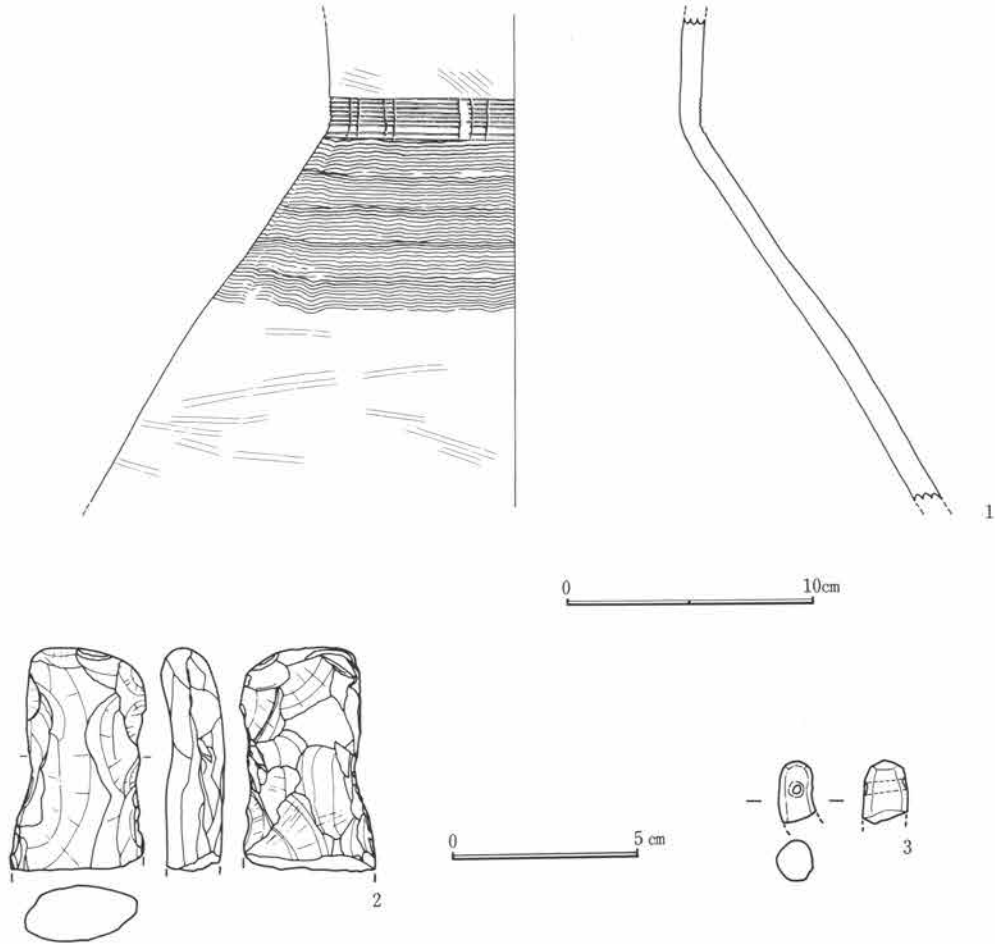
遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺		器体は縦に長い。	外面 頸部は2連止め+簾状文、胴上部は波状文5段、胴部はヘラミガキ。 内面 剥落著しい。	粗砂粒混入 やや堅緻 浅黄橙色	頸~胴上位%



- B・D・Fセクション
- 1 黒褐色 硬粘質土。炭化物粒子、焼土粒子を含む。
  - 2 黒褐色 灰褐色に近い。軟粘質土、炭化物粒子、焼土粒子を多量に含む。
  - 3 暗褐色 軟質土。炭化物粒子、焼土粒子を少量含む。地山ブロックを多く含む。
  - 4 黒褐色 硬粘質土。炭化物粒子、焼土粒子を少量含む。
  - 5 黒褐色 焼土粒子、炭化物粒子を含む。4層より多い。
  - 6 暗褐色 軟質土。炭化物粒子、焼土粒子を少量含む。

第113図 228号、229号、230号、231号、232号住居、233号遺構





第114図 229号住居出土遺物

第102表 229号住居出土石器観察表

遺物番号	名称	計測値 (mm)	石質	重量 (g)	特徴
2	打製石斧	(59.5)×30.0×15.0	黑色頁岩	46.5	両面加工された小型の石斧。側面形はゆるく湾曲する。刃部を欠く。

第103表 229号住居出土玉類観察表

遺物番号	名称	長さ (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	成形	整形	材質	遺存状態備考
3	勾玉	—	1.0	0.3	頭端部は丸い。	丁寧なナデ。	土	頭部遺存

## 230号住居跡 (第113図、図版36)

位置 C地区住居群の東部、大溝の東に位置する (49-C07)。228号、229号住居と重複する。

形状、規模、方位 長方形を呈すると思われるが明確ではない。229号住居との重複部は住居の輪郭は不明。規模は長軸不明、短軸は4.5m。方位はN-22°-E。

周壁、壁溝 周壁は北半部は検出できないが、南半部では良好に検出する。確認できた壁高は約15cmであ

6 検出した遺構、遺物

る。壁土は暗褐色粘質土（第IV b層）。周溝は認められない。

**柱穴** 主柱穴は不明確。

**床面** 床面は平坦に踏み固められている。

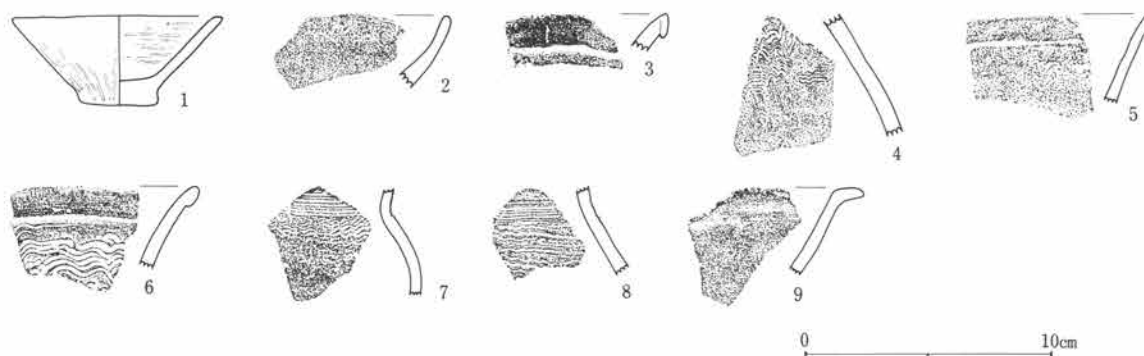
**炉跡** 炉跡は住居北部、229号住居との重複部に地床炉を検出する（F3）。炉跡は径50cm前後の焼土化した火床面を認める。

**遺物出土状態** 覆土中より弥生土器破片多数出土。

**時期** 弥生後期第2期

**他の遺構との関係** 228号住居（弥生後期第1期）、229号住居（弥生後期第2期か）と重複する。229号住居との先後関係は、床面同レベルで重複部に本住居の炉跡が認められるから、本住居の方が新しいと考えられる。

本住居の東辺部に平坦に踏み固められた233号遺構（性格不明）の床面を検出する。床面の広がりは一形状になると見られるが、周壁などの検出ができないために遺構の形状は明確ではない。規模は南北方向に約2mを測る。床面上には繊維質の炭化物の広がりが検出された。230号住居との関係については、床面、炭化物は重複部には認められない。本住居に付設された可能性も考えられる。



第115図 230号住居出土遺物

第104表 230号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	小鉢又は蓋		つまみ部は強くくびれ、指頭圧痕が巡る。上端面は平滑、器壁は緩い凹凸がある。	外面 ヘラミガキ。 内面 丁寧なヘラミガキ。	微砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	口縁一部に欠損

第105表 230号住居出土土器観察表（拓本）

2 壺 砂粒混入、灰白色	5 甕 中砂粒混入、にぶい橙色	8 甕 砂粒混入、褐灰色
3 壺 砂粒混入、にぶい橙色	6 甕 内面(b)ヨコナデ(c)ヘラミガキ、砂粒 少量混入、灰褐色	9 高坏 (b)ヨコナデ、砂粒混入、にぶい橙 色、丹彩
4 壺 内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい 橙色	7 甕 砂粒混入、にぶい褐色	



## 231号住居跡 (第113図、図版36)

**位置** C地区住居群の東部大溝の東側に位置する(47-C08)。228号、229号、230号、232号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 形状、規模不明。方位はN-23°-E。

**周壁、壁溝** 周壁は西北コーナー部から西辺にかけて検出する。232号住居との重複部で壁高は約10cmである。壁溝は認められない。

**床面** 床面は平坦に踏み固められている。

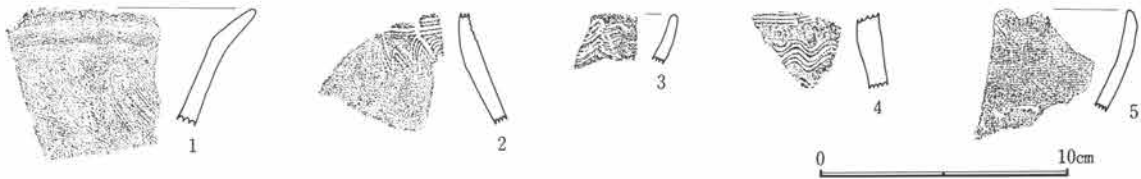
**柱穴** 主柱穴は不明確。

**炉跡** 不明。検出できない。

**遺物出土状態** 覆土中より弥生土器破片出土。

**時期** 弥生後期第1期か。

**他の遺構との関係** 228号住居(弥生後期第1期)、232号住居(弥生後期第3期)、229号住居(弥生後期第2期か)と重複する。229号住居との重複部では本住居の床面や炉跡が認められないことから229号住居の方が新しいと考えられる。232号住居の炉跡(F4)と思われる焼土帯が本住居の西辺部の覆土上に見られることから本住居の方が古い可能性が高い。



第116図 231号住居出土遺物

第106表 231号住居出土土器観察表(拓本)

1 壺 外面(b)ヨコナデ、(c)ハケメ、ナデ 内面(b)ヨコナデ、(c)ヘラナデ、砂粒混入、灰白色	2 壺 細砂粒混入、橙色 3 甕 内面ヨコナデ、砂粒混入、灰褐色	5 罎 外面(a)(b)ヨコナデ、(c)ヘラミガキ、 内面(b)ヨコナデ(c)ヘラミガキ、浅黄橙色
---	-------------------------------------	--

## 232号住居跡 (第113図、図版36)

**位置** C地区住居群の東部、大溝東部に位置する(48-C09)。228号、231号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 隅丸長方形になると思われる。住居の輪郭は西北、西南コーナー部で把握できるに止どまる。明確ではない。規模長軸は6.0m、短軸は不明。方位はN-26°-E。

**周壁、壁溝** 周壁は西北コーナー部で検出する。遺存状態は悪い。西辺部及び東半部は検出できない。壁溝は認められない。

**柱穴** 主柱穴は西側2箇所検出する。他の主柱穴は不明確。住居内数箇所円形ピットを検出するが、主柱穴として認めるには形状、位置に問題がある。

**炉跡** 北側(奥側)主柱穴の間に当たる位置に焼土帯を検出する(F4)。これが炉跡になると思われる。

**遺物出土状態** 出土遺物は僅少である。

時期 弥生後期第3期

他の遺構との関係 231号住居（弥生後期第1期）の北辺部覆土上に本住居の炉跡と思われる焼土帯が見られることから231号住居の方が古いと思われる。228号住居よりも新しい。

234号住居跡（第117図、図版36）

位置 C地区住居群の東端部に位置する（46-C01）。弥生周溝墓群の間に位置する。

形状、規模、方位 隅丸長方形を呈する。南半部及び西辺部は後世の溝に切られて失われている。規模は長軸不明、短軸は3.5m前後になるとと思われる。比較的小型である。方位はN-14°-E。

周壁、壁溝 周壁は北辺と東辺部で良好に検出する。検出した壁高は北周壁で約50cm。壁土は、上半部は暗褐色粘質土（第IVb層）、下半部は黄褐色ローム質土（第V層）である。壁溝は認められない。

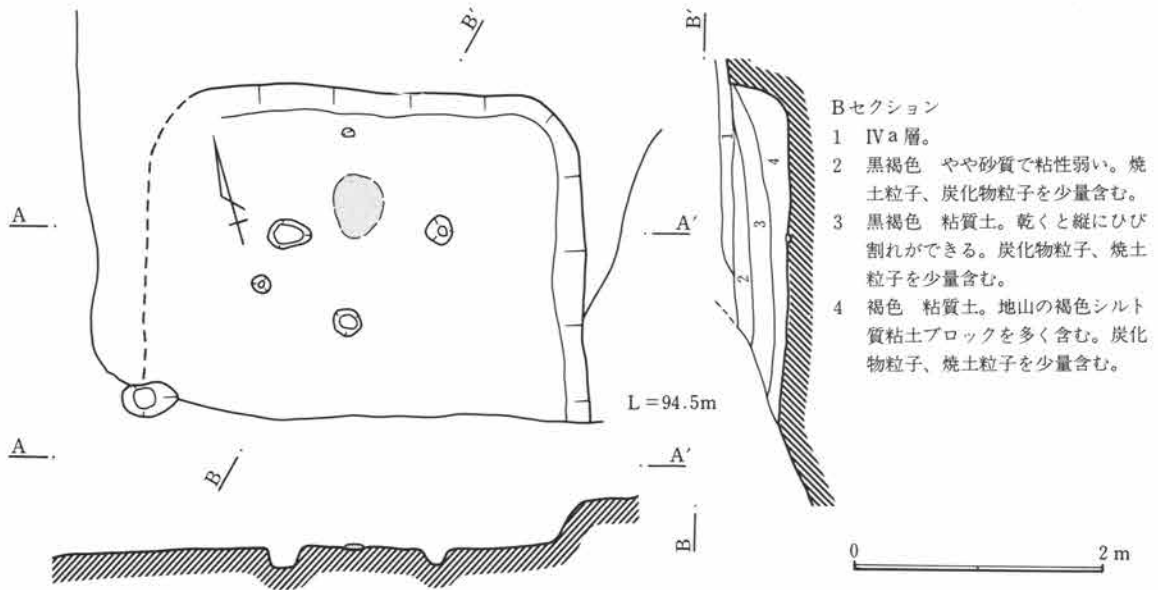
床面 床面は平坦に踏み固められている。

柱穴 支柱穴は北部2箇所検出する。共に深さ15cm前後で比較的浅く不整形である。

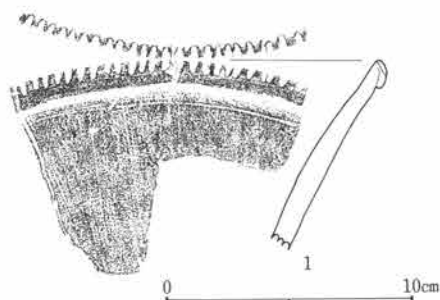
炉跡 北側（奥側）2支柱穴間、やや外寄りに地床炉を設けている。径50cm程の浅く窪んだ火床面を見る。火床面は良く焼けている。北方向に炭化物、黒色灰の広がりが認められる。

遺物出土状態 床面直上、覆土中に弥生土器破片が数点出土している。

時期 弥生後期第2期



第117図 234号住居



第118図 234号住居出土遺物

第107表 234号住居出土土器観察表  
(拓本)

1 壺 内面(b)ヨコナデ(c)ヘラナデ、砂粒混入、にぶい橙色
---------------------------------

## 235号住居跡 (第119図、図版37、38)

**位置** C地区住居群の中央部東寄り、大溝河岸縁辺上にある(57-C19)。250号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。規模は長軸6.0m、短軸4.0mを測る。方位はN-9°-E。

**周壁、壁溝** 周壁は全周良好に検出する。検出できた壁高は北辺で約30cmである。壁溝は認められない。

**床面** 床面は堅く踏み固められた面を検出するが、比較的凹凸が目立つ。床面上には炭化材、炭化物、焼土などが著しく検出されることから本住居は火災に遭ったと思われる。

**柱穴** 住居内には大小の円形ピットが多数見られるが支柱穴と思われるピットは4箇所に認められる(P1~P4)。支柱穴は径30cm前後で、深さ50~70cmである。南側2支柱穴から北方向に炭化材が2本横たわった状態で検出された。西側の炭化材が長さ2m、太さは最大で25cm、東側が長さ2.2m、太さ20cmに達している。これらの炭化材はP3、P4に対応する支柱であったと思われる、火災の際、焼けて住居の内側へ倒れ込んだものと思われる。

**炉跡** 北2支柱穴間、やや中央よりに地床炉あり(F1)。径40cm程の焼土帯が見られる。住居跡は火災に遭っているためこの他に焼土帯が数箇所に認められるが、これらは炉跡とは考えられない。

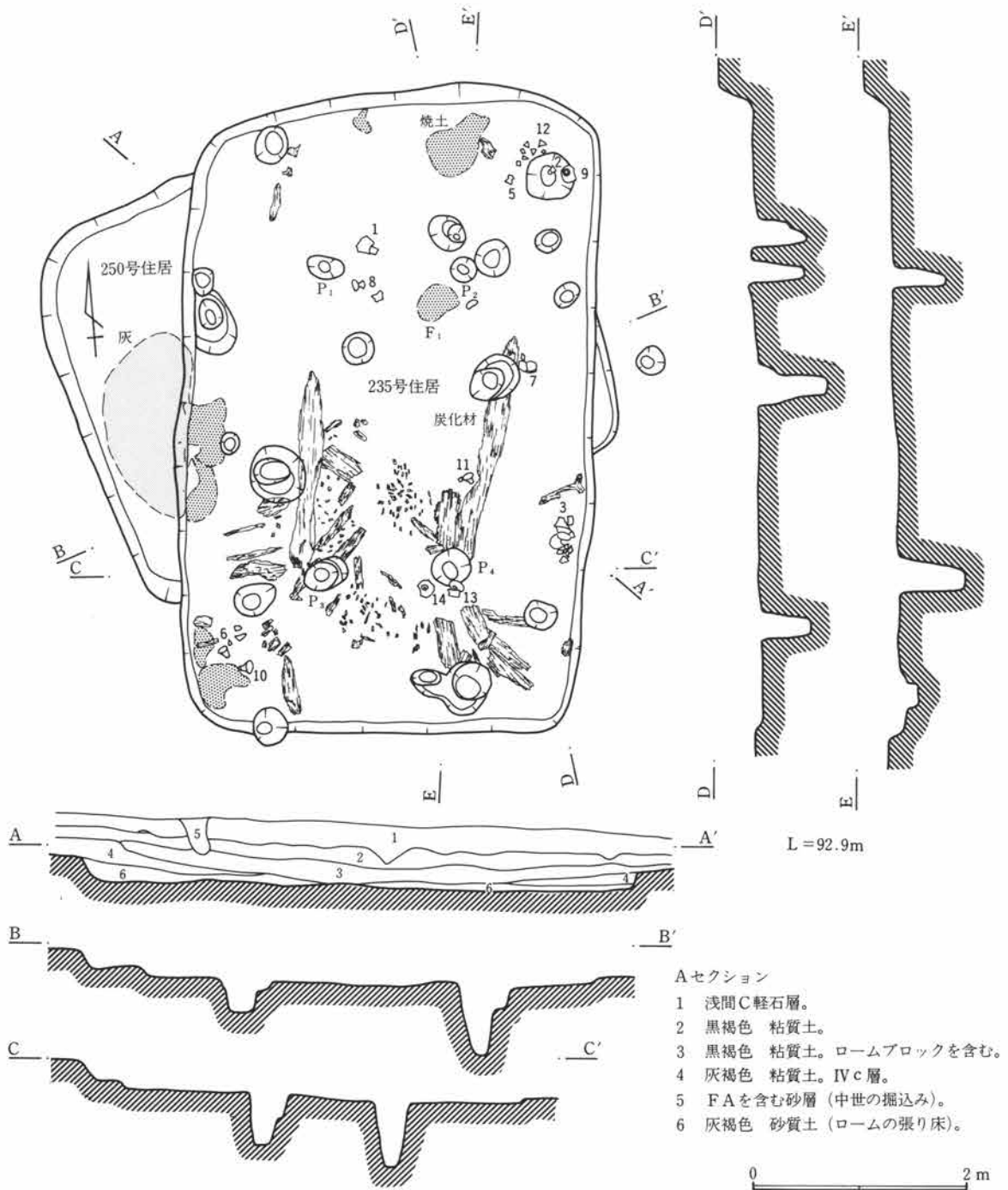
**遺物出土状態** 床面直上より、比較的遺存状態の良い弥生土器が多数出土している。器種は壺、甕、台付甕、高坏、甑など全般にわたっている。

**時期** 弥生後期第2期

**他の遺構との関係** 250号住居(弥生後期)と重複するが、250号住居の床面を本住居が切っている。250号住居よりも新しい。

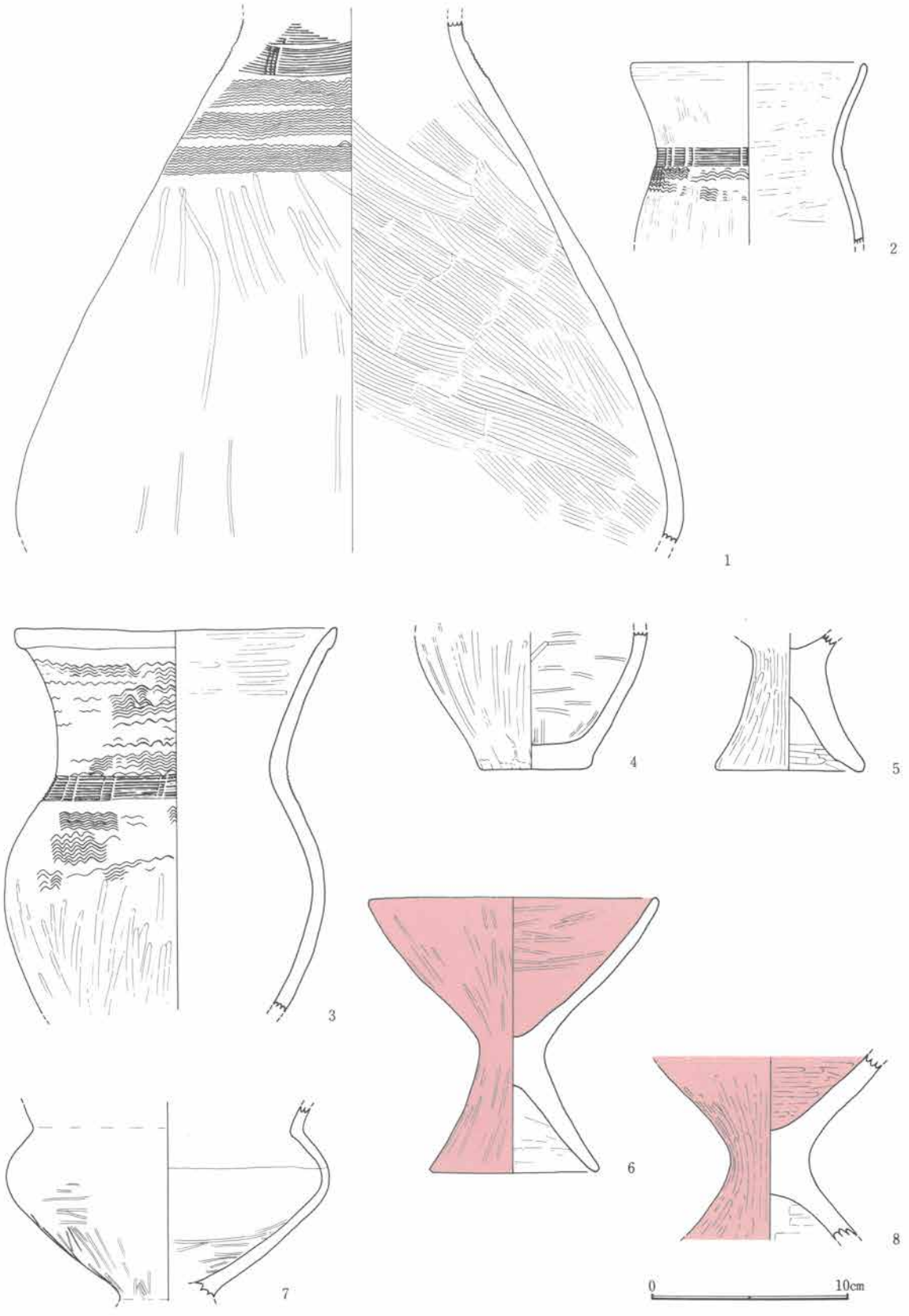
第108表 235号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺		器体は縦に長い。	外面 胴上部は簾状文2段、下段は3連止め←簾状文、波状文3段、胴部はヘラミガキ。 内面 胴部はハケメ。	細砂粒、黒色粒 混入 堅緻 にぶい赤褐色	胴上位~下位1/4
2	甕	口 12.0	口縁部は内湾する。	外面 口縁部はヨコナデ、頸部は2連止め←簾状文、胴上部は←波状文。 内面 口縁部はヨコナデ、頸~胴上部はヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 赤褐色	口縁~胴上位全周



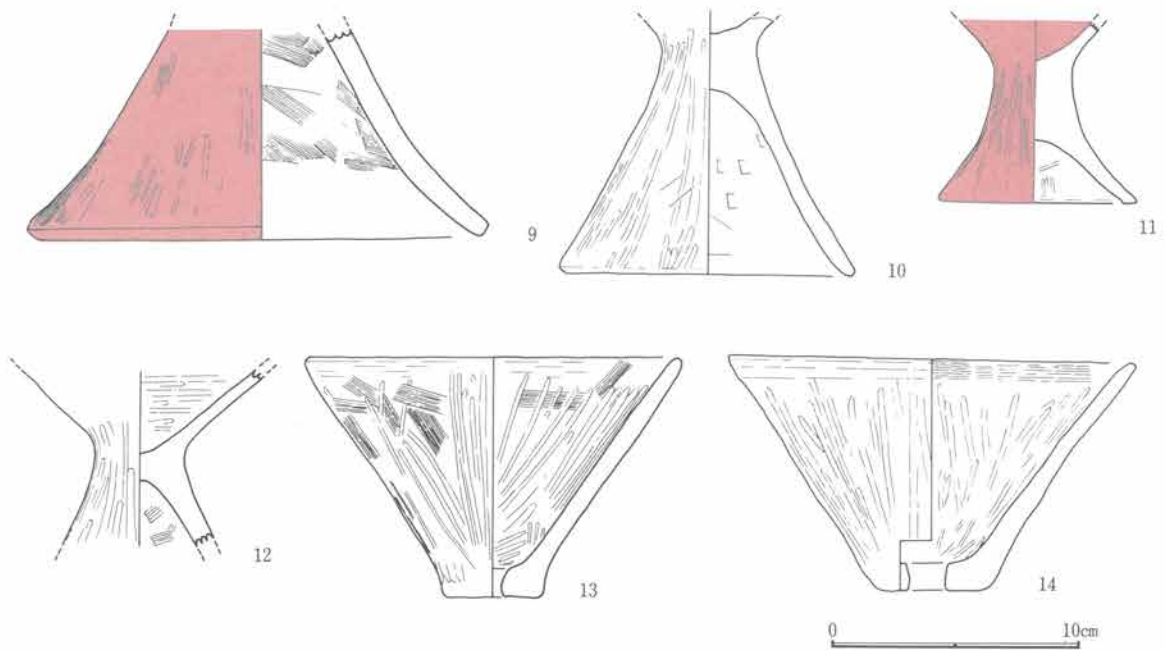
第119図 235号、250号住居

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
3	甕	口 16.6	折り返し口縁、口辺は直状に外反する。	外面 口辺部は←波状文、頸部は2連止め←簾状文、胴上部は←波状文、胴部はヘラミガキ。 内面 口辺部はヘラミガキ。	粗砂粒混入 やや堅緻 にぶい橙色	口縁部1/2周 底部欠損



第120図 235号住居出土遺物 (1)

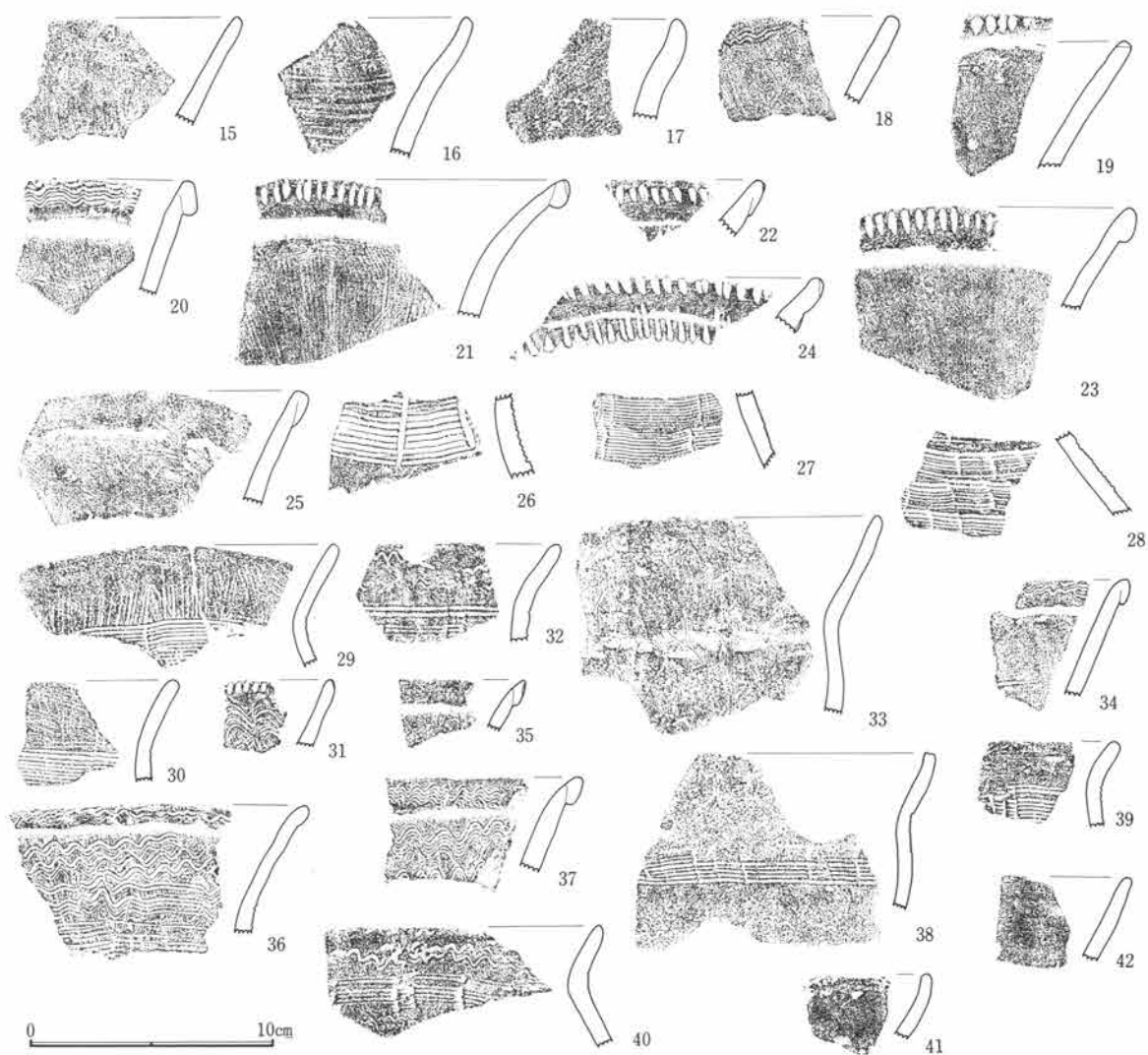
6 検出した遺構、遺物



第121図 235号住居出土遺物 (2)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
4	壺	底 6.0		外面 ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	粗砂粒混入 やや堅緻 褐色	底部のみ
5	台付甕	脚 7.6		外面 ヘラミガキ。 内面 脚台部はミガキ。	細砂粒混入 堅緻 橙色	脚台部のみ
6	高坏	口 14.8	坏部はやや膨らみを持つ	外面 坏~脚部はヘラミガキ。 内面 坏部はヘラミガキ、脚部はナデ。	細砂粒混入 堅緻 明赤褐色	口縁~脚部1/4周 外面丹彩 内面坏部のみ丹彩
7	高坏	胴 16.4		外面 胴~底部はヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	中砂粒、黒、白色粒混入 堅緻 にぶい橙色	口辺、脚部欠損
8	高坏			外面 ヘラミガキ。 内面 坏部はヘラミガキ、脚部はヘラナデ。	中砂粒混入 やや堅緻 赤色	脚部 外面丹彩 内面坏部のみ丹彩
9	高坏	脚 18.6		外面 ヘラミガキ。 内面 ハケメ、ナデ。	細砂粒混入 堅緻 灰白色	脚部 外面丹彩
10	高坏	脚 12.0		外面 ヘラミガキ。 内面 脚部はヘラナデ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい褐色	脚部
11	高坏	脚 8.0		外面 ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ、脚部はハケ、ナデ。	細砂粒混入 やや堅緻 明赤褐色	脚部 外面丹彩 内面坏部のみ丹彩

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
12	台付甕			外面 ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ、脚台部はハケメ。	細砂粒混入 やや堅緻 明赤褐色	胴下位～脚台上部
13	甌	口 15.4 底 4.0 高 9.5	底部から直状に外反して立ち上る。	外面 口縁部はヨコナデ、口辺部下ハケメ後、ヘラミガキ。 内面 ハケメ後、ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 橙色	口辺一部欠損
14	甌	口 16.8 底 4.6	緩やかに外反する。	外面 口縁部はヨコナデ、胴～底部はヘラミガキ。 内面 口縁部はヨコナデ、胴～底部はヘラミガキ。	細砂粒混入 やや堅緻 褐色	口辺 $\frac{1}{3}$ 欠損



第122図 235号住居出土遺物 (3)

6 検出した遺構、遺物

第109表 235号住居出土土器観察表 (拓本)

15、16、18 砂粒混入、橙色	27 壺 内面ヘラナデ、砂粒混入、にふい橙色	35 甕 砂粒混入、にふい橙色
19 壺 (a)ヘラ状具による刻み目、淡橙色、内面丹彩	28 壺 等間隔止め簾状文3段以上、砂粒混入、淡橙色	36 甕 内面ヘラナデ、砂粒混入、にふい橙色
20 壺 砂粒混入、灰褐色	29 甕 中砂粒混入、にふい橙色	37 甕 内面(b)ヨコナデ、(c)ヘラナデ、砂粒混入、黒褐色
21、22 壺 砂粒混入、橙色	30 甕 砂粒混入、灰褐色	38 甕 中砂粒混入、灰褐色
23 壺 中砂粒混入、にふい橙色	31 甕 砂粒混入、にふい橙色	39 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、褐灰色
24 壺 砂粒混入、橙色	32 甕 中砂粒混入、灰褐色	40 甕 砂粒混入、褐灰色
25 壺 外面(b)(c)ハケメ、砂粒混入、橙色	33 甕 粗砂粒混入、にふい橙色	41、42 高坏 砂粒混入、にふい橙色、内外面丹彩
26 壺 櫛描直線、縦ヘラ沈線、砂粒混入、橙色	34 甕 砂粒混入、灰褐色	

250号住居跡 (第119図)

**位置** C地区住居群の中央部、大溝河岸縁辺部に位置する (58-C19)。235号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 隅丸長方形を呈する。規模は長軸4.9m、短軸3.7mを測る。方位はN-75°-E。

**周壁、壁溝** 住居中央部を235号住居に切られている。検出できた壁高は西辺で15cmである。壁溝は認められない。

**床面** 暗灰褐色土面を平坦に踏み固めている。住居西部に炭化物の広がりが広範囲に認められる。

**柱穴** 主柱穴は4箇所検出する。P5~P8が本住居の主柱穴になると思われる。

**炉跡** 不明。炭化物の分布域東の付近に位置していると思われる。西側(奥側)2柱穴間やや外寄りになるだろうか。

**遺物出土状態** 床面直上、覆土中より弥生土器の小破片が数片出土している。

**時期** 弥生後期

**他の遺構との関係** 住居の中央部を235号住居(弥生後期第2期)に切られている。

236号住居跡 (第123図、図版39)

**位置** C地区住居群中央部、大溝河岸縁辺上に位置する (61-C20)。252号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 隅丸方形を呈する。やや台形状をなす。規模は東西4.7~3.4m、南北3.9mを測る。方位はN-18°-E。

**周壁、壁溝** 周壁は全周遺存し良好に検出する。壁高は約15cm。壁土は暗灰褐色粘質土であり、南半部は大溝覆土で暗褐色土やや砂質である。壁溝は認められない。

**床面** 中央部では堅く踏み固められた面を検出する。周囲、壁際は床面下に落ち込んでおり床面を構築する際の掘り方であると思われる。北半部の床面は黄褐色土やや砂質である。

**柱穴** 主柱穴は不明確である。検出できない。

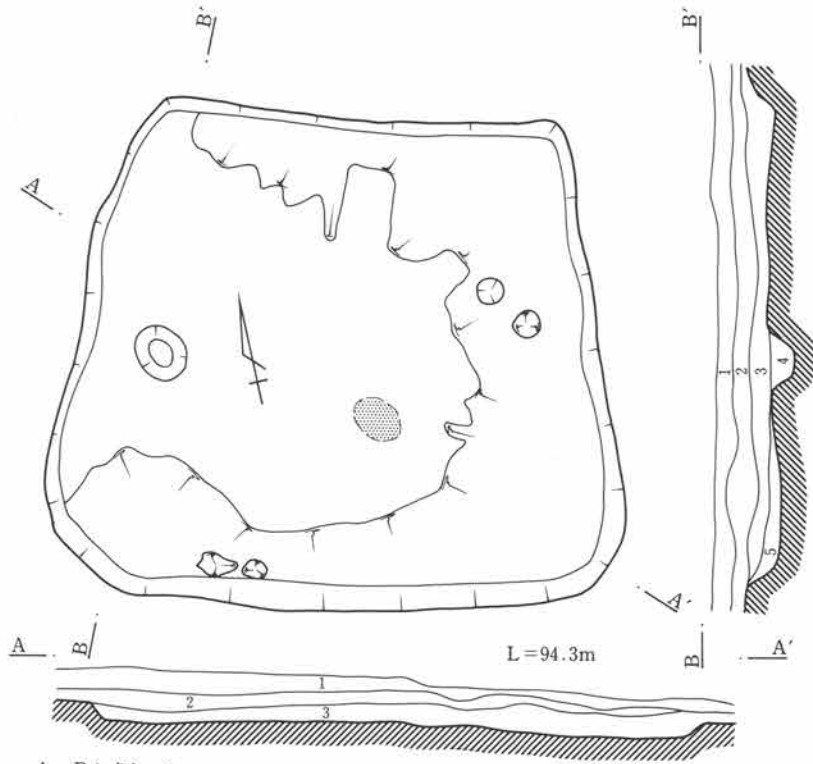
**炉跡** 住居中央部に地床炉を設けている。径30cm程の焼土帯が認められる。

**遺物出土状態** 床面直上、掘り方中より弥生土器破片多数出土する。

**時期** 弥生後期第2期

**他の遺構との関係** 252号住居(弥生後期第3期)と重複する。本住居の出土遺物は252号住居出土のものより古い。



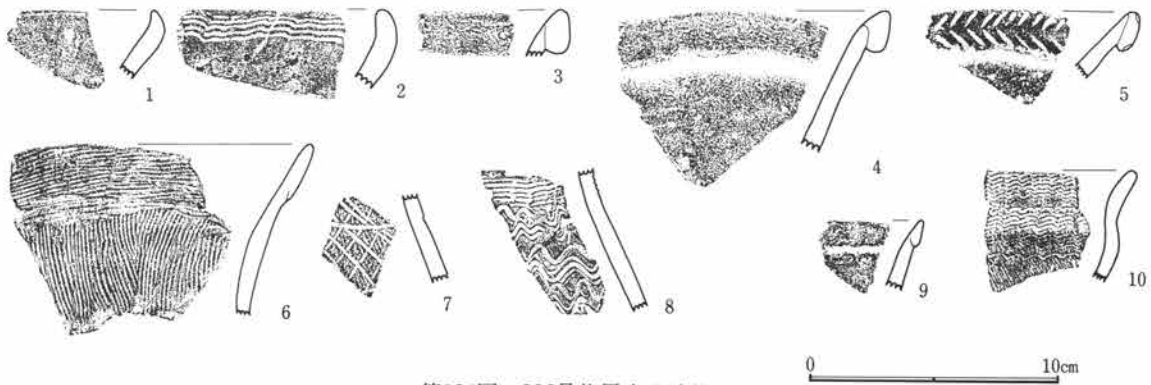


A・Bセクション

- 1 灰黒色 浅間C軽石が主体。
- 2 暗褐色 粘質土。夾雑物少ない。
- 3 暗褐色 粘質土。暗黄色ローム土、炭化物、土器小片を含む。
- 4 粘質土。黄色ロームを多量に含む。ピット覆土。
- 5 暗灰褐色 粘質土。シルト質。

0 2m

第123図 236号住居



第124図 236号住居出土遺物

第110表 236号住居出土土器観察表 (拓本)

1 壺 細砂粒混入、にぶい橙色	5 壺 細砂粒多量に混入、橙色	8 壺 砂粒混入、にぶい橙色
2 壺 砂粒混入、灰白色	6 壺 内外面ハケメ、砂粒混入、橙色	9 甕 砂粒混入、にぶい橙色
3 壺 砂粒混入、にぶい橙色	7 壺 ヘラ描斜格子文、砂粒混入、にぶい橙色	10 台付甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい赤褐色
4 壺 中砂粒混入、橙色		

240号住居跡 (第125図、図版39)

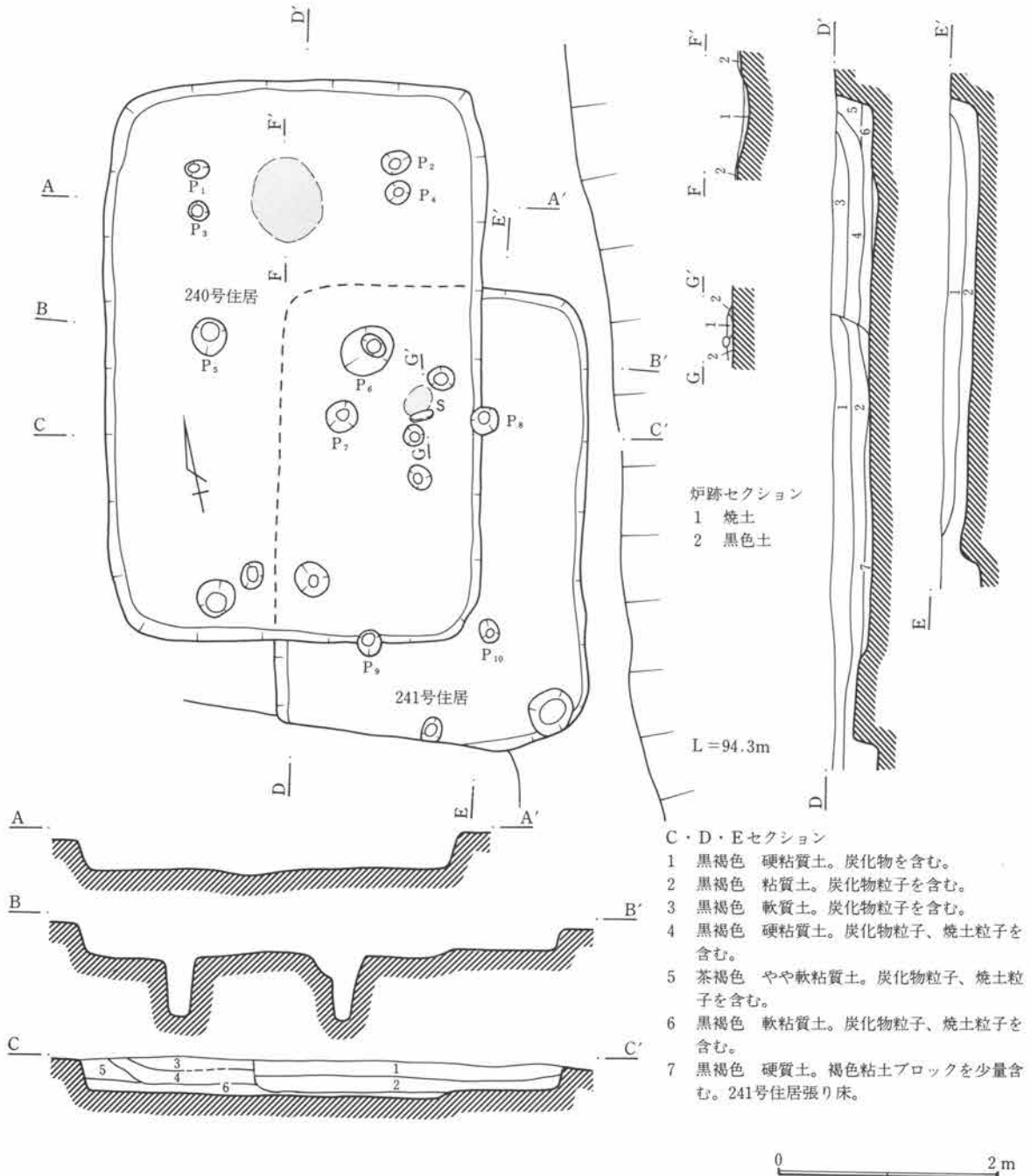
**位置** C地区東部、大溝の東に位置する(43-C09)。241号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 隅丸長方形を呈する。規模は長軸5.1m、短軸3.5mを測る。方位はN-12°-E。

**周壁、壁溝** 周壁は全周良好に検出する。壁高は北辺で約35cm。周壁の立ち上がり角度は74度である。241号住居との重複部では壁の上部が241号住居により失われている。壁溝は認められない。

**床面** 床面は、堅く平坦に踏み固められた面を検出する。

**柱穴** 北側の2箇所に主柱穴を検出する(P1~P4)。4ピットの深さは26cm。それぞれの箇所では2個の



第125図 240号、241号住居

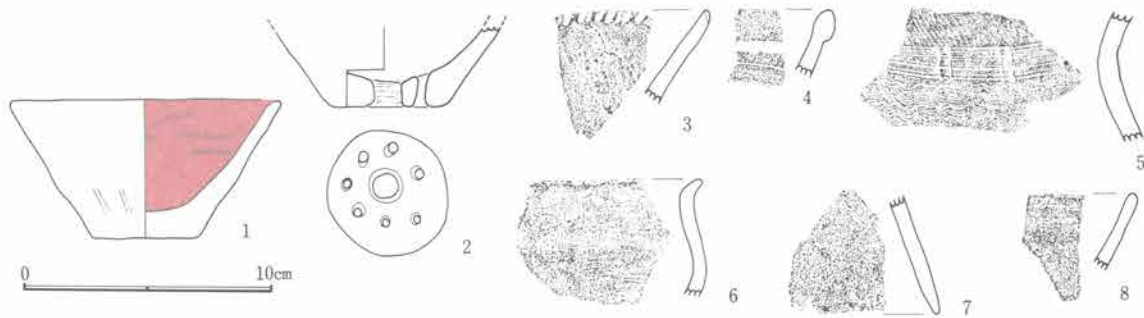
ピットが隣接するが支柱穴の建て替えによるものと思われる。この他住居の主軸方向の中間部に同形状の2個のピット（P5、P6）が見られる。これらのピットは支柱穴の可能性もある。南側周壁際に1対のピットが認められるが、これらは出入部の施設に関わるものだろうか。

**炉跡** 北側支柱穴の間に地床炉を設けている。径60cm程の範囲が焼土化している。

**遺物出土状態** 覆土中より多数の弥生土器破片が出土している。

**時期** 弥生後期第3期

**他の遺構との関係** 241号住居（弥生後期第3期）と重複する。241号住居は本住居の覆土上に張り床を構築している。241号住居の方が新しい。



第126図 240号住居出土遺物

第111表 240号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	鉢	口 10.8 底 4.4 高 5.5	器面に緩い凹凸が目立つ。	外面 ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	体部 $\frac{1}{2}$ 、底部 内面丹彩
2	甌	底 5.0	中心に径1.2cmの小孔、その周りに7個0.5cmの小孔を穿つ。	外面 底部はヘラミガキ。 内面 底部はヘラナデ。	細砂粒混入 堅緻 灰白色	底部

第112表 240号住居出土土器観察表（拓本）

3 壺 砂粒混入、にぶい橙色	5 甕 砂粒混入、にぶい橙色、内面丹彩	7 脚 砂粒混入、灰褐色
4 甕 細砂粒混入、にぶい黄橙色	6 台付甕 砂粒混入、赤褐色	8 高坏 砂粒混入、内外面丹彩

241号住居跡（第125図、図版39）

**位置** C地区住居群の東部大溝の東側に位置する（44-C07）。240号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 隅丸長方形を呈する。規模は長軸4.2m、短軸2.9mを測る。方位はN-12°-E。

**周壁、壁溝** 周壁は、一部241号住居との重複部は明確に検出できないが他は良好に検出する。検出できた壁高は北辺で約25cm。壁溝は認められない。

**床面** 床面は平坦に踏み固められている。240号住居との重複部は褐色粘質土ブロックを主体とする、張り

6 検出した遺構、遺物

床面を構築している。

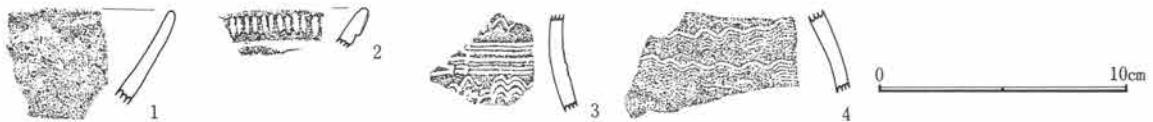
**柱穴** 主柱穴を4箇所検出する。4主柱穴（P7～P10）の径は20～25cm、深さは20cm前後である。

**炉跡** 北側（奥側）2主柱穴の間に地床炉を設けている。径25cm程の範囲に焼土化した火床面を認める。炉跡の南傍らに長さ約25cmの長細い川原石を据えている。

**遺物出土状態** 覆土中より弥生土器破片が数点出土する。

**時期** 弥生後期第3期

**他の遺構との関係** 240号住居（弥生後期第3期）と重複する。本住居は240号住居の覆土上に造られている。



第127図 241号住居出土遺物

第113表 241号住居出土土器観察表（拓本）

1 壺 砂粒混入、にぶい橙色、外面丹彩	3 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい 橙色	4 甕 砂粒混入、にぶい赤褐色
2 壺 砂粒混入、にぶい橙色		

242号住居跡（第128図、図版40）

**位置** C地区住居群の東端部（38-B48）に位置する。

**形状、規模、方位** 隅丸長方形。やや胴が張っている。規模は長軸5.4m、短軸4.4mを測る。方位はN-9°-W。

**周壁、壁溝** 東南コーナー部は後世の溝に切られていて不明であるが、周壁を全体的に検出する。検出できた壁高は北辺で約20cm。壁溝は全周する。幅は15～20cm、深さ約5cm。

**柱穴** 主柱穴を4箇所検出する。4主柱穴の径は20～30cmで、深さ35～40cm前後である。南辺部に1対のピットが見られる。深さは36cm、やや外方向に傾きをもっている。

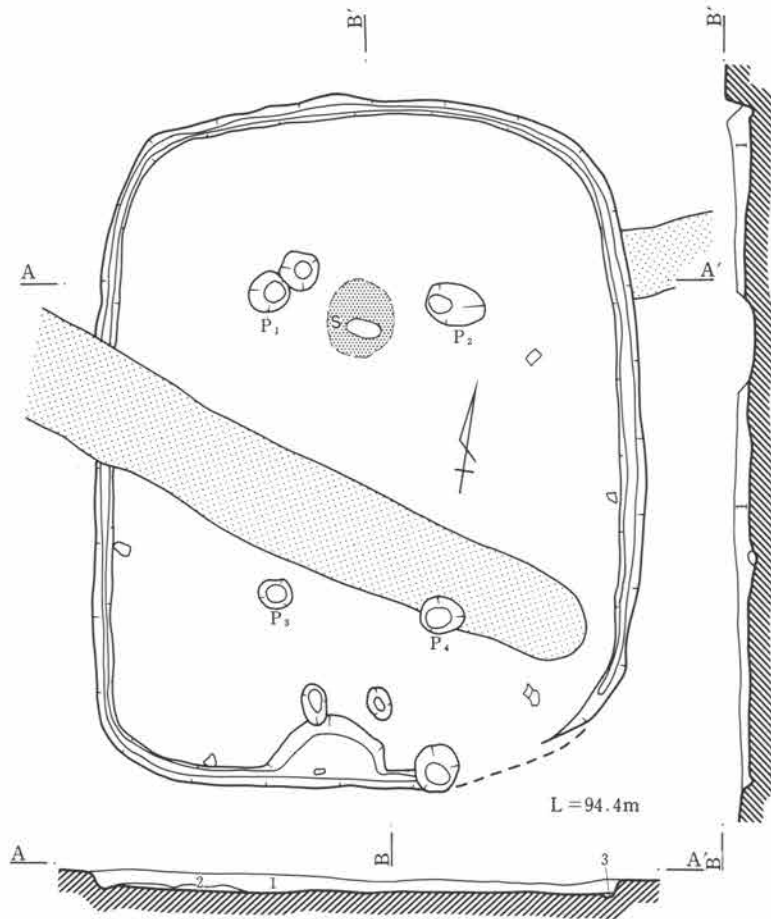
**炉跡** 北側（奥側）主柱穴間やや内側に地床炉を設けている。径60cmの範囲が火床面であり、焼土化している。炉跡の中央部に長さ25cm程の長細い川原石が据えられている。

**遺物出土状態** 床面直上、覆土中より弥生土器破片が多量に出土している。

**時期** 弥生後期第1期

第114表 242号住居出土土器観察表（拓本）

1 壺 内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい 橙色	4 壺 砂粒混入、にぶい橙色	8 甕 砂粒混入、褐灰色
2 壺 砂粒混入、橙色、内面丹彩	6 壺 鋸歯文、砂粒混入、にぶい橙色	9 甕 内面ナデ、砂粒混入、褐灰色
3 壺 外面(b)ナデ、(d)ヘラケズリ、内面丁 寧なヘラミガキ、内面丹彩	7 甕 内面ヘラミガキ、中砂粒混入、褐灰 色	11 甕 砂粒混入、にぶい橙色

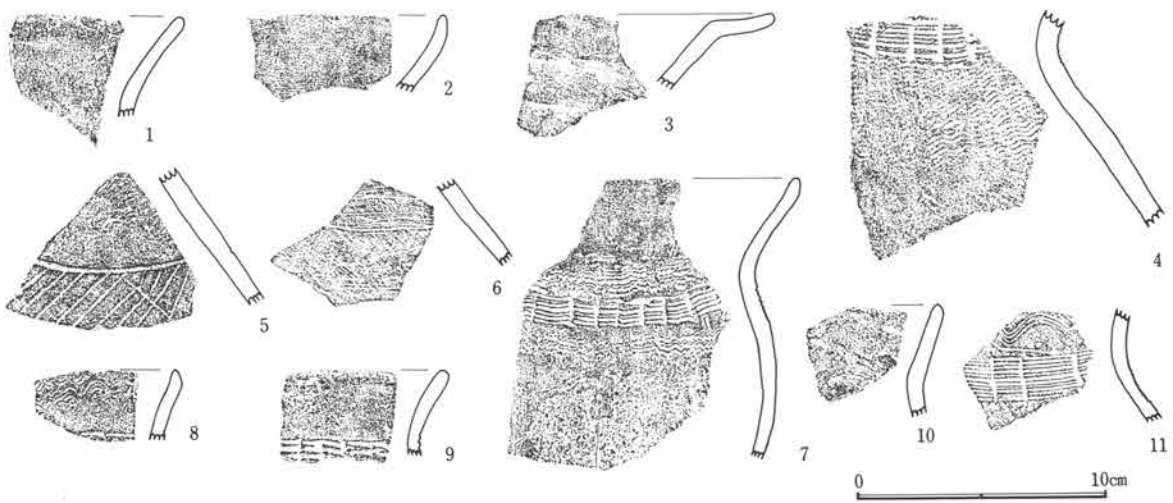


A・Bセクション

- 1 黒褐色 硬粘質土。炭化物粒子、焼土粒子を含む。
- 2 茶褐色 軟粘質土、焼土粒子を少量含む。



第128図 242号住居



第129図 242号住居出土遺物

243号住居跡 (第130図、図版41)

位置 C地区住居群東端部に位置する(37-C01)。

形状、規模、方位 長方形を呈する。北辺は後世の溝により失われている。規模は長軸不明、短軸3.4mを測る。方位はN-13°-E。

周壁、壁溝 周壁の遺存状態は悪い。検出できた壁高は5cm前後で浅く緩い凹凸が目立つ。壁溝は認められない。

床面 床面は平坦に踏み固められている。

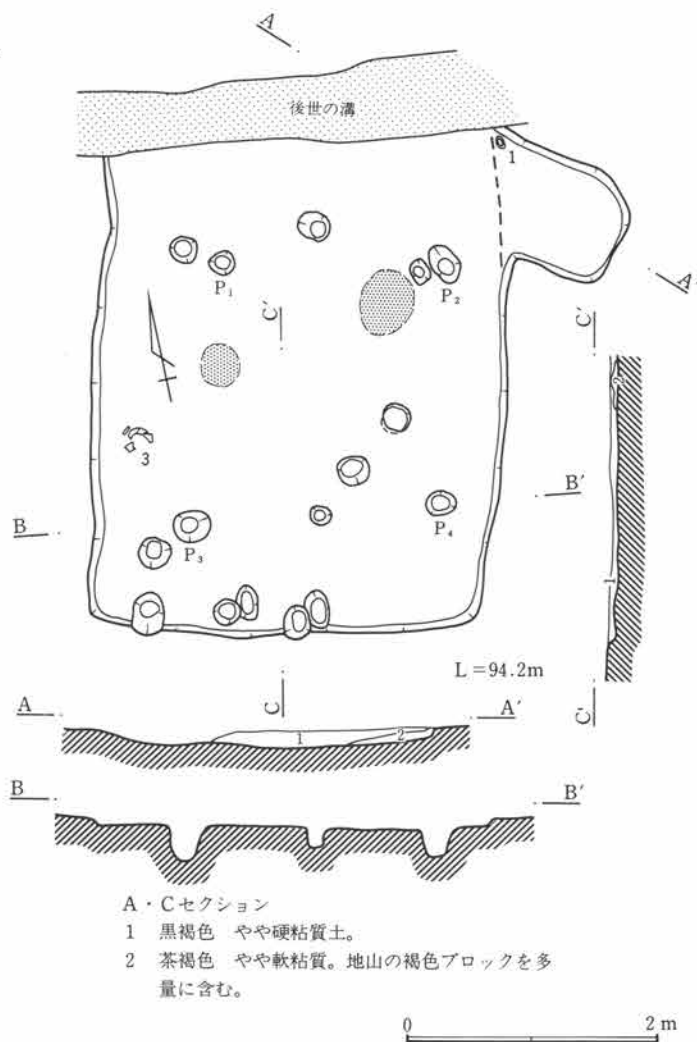
柱穴 支柱穴は明確ではない。P1~P4が支柱穴の可能性が高い。ピットの深さは比較的浅く20cm前後である。これらのピットは他の場合と比べると周壁に著しく寄っている。支柱穴の可能性の高い4箇所のピットの傍らにはそれぞれ同様のピットが見られる。柱穴の建て替えによる可能性もある。南辺部、周壁際に2対のピットが見られる。これは出入口の施設に関わるものであろうが、ピットの重複は建て替え跡とも考えられる。

炉跡 住居内に焼土帯が2箇所見られる(F1、F2)。それぞれ良好な火床面が認められる。共に炉跡と考えるのが妥当であろう。

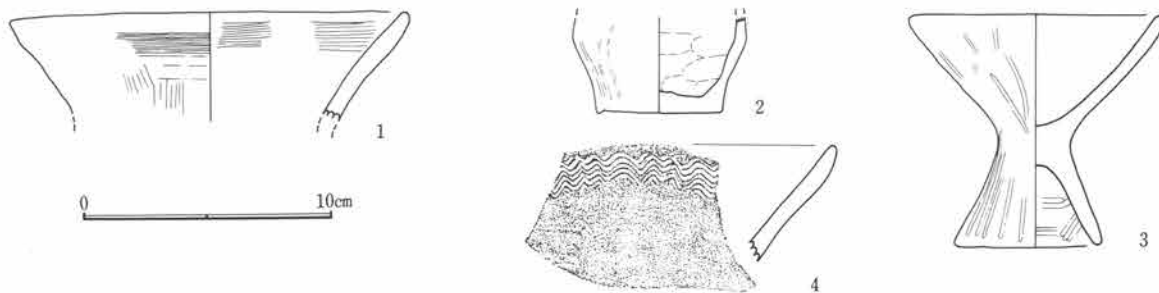
遺物出土状態 床面直上より弥生土器破片が出土している。

時期 弥生後期第1期

他の遺構との関係 東辺北寄りに隅丸長方形の小竪穴遺構が検出される。床面は平坦、本住居の床面との間に段差は認められない。この遺構は本住居に付設したものである可能性もある。



第130図 243号住居



第131図 243号住居出土遺物

第115表 243号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 16.0	口辺部はやや内湾する。	外面 口辺部はハケメ。 内面 口辺部はハケメ。	粗砂粒、黒色粒 混入 堅緻 灰白色	口辺部のみ
2	小型壺又は鉢	胴 7.0	器壁は比較的薄く、成形は粗雑、凹凸が目立つ。	外面 ヘラミガキ。 内面 指ナデ。	細砂粒混入 堅緻 にふい褐色	胴～底部
3	高 坏	口 10.2 脚 5.9 高 9.2	坏、口縁に向いやや内湾する。	外面 ヘラミガキ。 内面 坏部はヘラミガキ、脚上部はナデ、下部はヘラミガキ。	粗砂粒混入 やや堅緻 にふい黄褐色	坏部 $\frac{1}{2}$ 、脚一部欠損

第116表 243号住居出土土器観察表  
(拓本)

4 壺 内面ハケメ後ヘラナデ、砂粒混入、灰白色
-------------------------

## 244号住居跡 (第133図、図版41、42)

**位置** C地区住居群東端部に位置する(41-C01)。245号、246号、247号、248号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 形状、規模は不明。方位はN-27°-W。

**周壁、壁溝** 周壁は他の住居との重複部では検出できない。検出できた壁高は南周壁で約10cm。

**床面** 床面は堅く踏み固められた面を検出する。

**柱穴** 主柱穴は不明確。住居内に数箇所ピットを検出するが、主柱穴として確実に特定できない。

**炉跡** 不明確。焼土帯を検出する。強く焼けた火床面が見られる。炉跡と考えられる。

**遺物出土状態** 床面直上より弥生土器の破片が出土する。特に壺の大形破片が2点見られる。

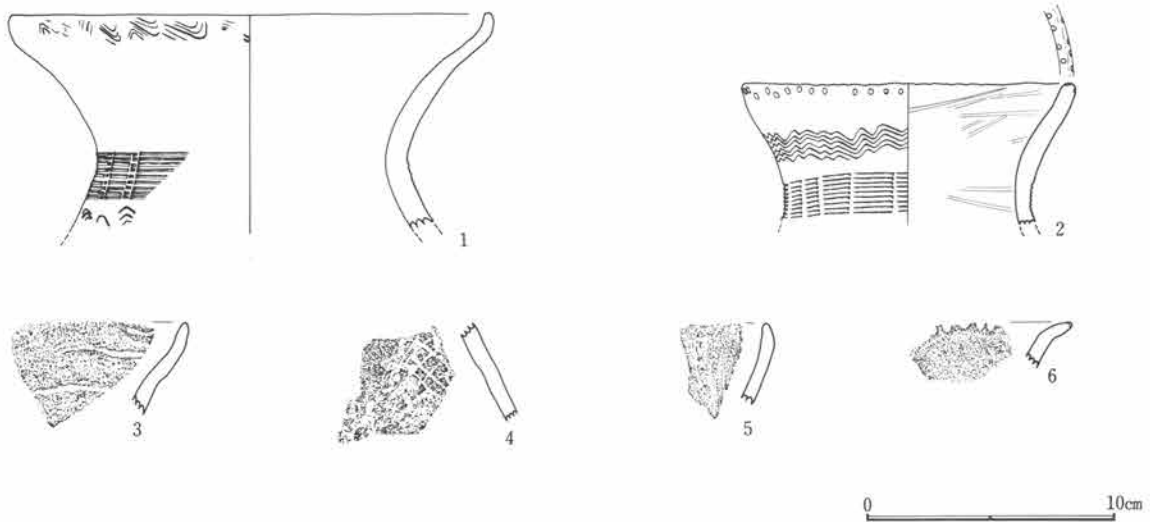
**時期** 弥生後期第1期

**他の遺構との関係** 245号住居(弥生後期第3期)、246号、247号、248号住居(共に弥生後期第2期)と重複する。

第117表 244号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 19.3	受け口状口縁。	外面 口縁部は波状文、頸部は2連止め→簾状文、胴上部は波状文。 内面 全面ヘラミガキ。	細砂粒、黒色粒 混入 堅緻 黄褐色	口縁～頸部 $\frac{1}{4}$ 周
2	壺	口 13.4	口縁部はやや内湾する。	外面 口縁部、口縁端部に円形の刺突文、口辺部はハケメ後波状文、頸部は等間隔止め→簾状文。 内面 口～頸部はヘラミガキ。	粗砂粒混入 堅緻 にふい赤褐色	口縁～頸部 $\frac{1}{4}$ 周

6 検出した遺構、遺物



第132図 244号住居出土遺物

第118表 244号住居出土土器観察表 (拓本)

3 壺 内面ヘラナデ、中砂粒混入、にょい 橙色	4 壺 中砂粒混入、灰白色 5 甕 砂粒混入、暗褐色	6 高坏 (a)刻み目、砂粒混入、にょい 橙色
----------------------------	-------------------------------	----------------------------

245号住居跡 (第133図、図版41、42)

**位置** C地区住居群の東端部に位置する(42-C01)。244号、246号、248号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。規模は長軸不明、短軸4.4mを測る。方位はN-3°-W。

**周壁、壁溝** 周壁は南半部において良好に検出する。246号、248号住居との重複部では検出は困難であった。検出できた壁高は約10cmである。壁溝は認められない。

**床面** 南半部で強く踏み固められた面を検出する。246号住居との重複部では黄褐色粘質土ブロックを主体とする張り床面を造っている。

**柱穴** 南側2箇所主柱穴を良好に検出するが(P3、P4)、これに対応する柱穴を北側では明確に認めることができない。南側2主柱穴は頸部50~60cm、深さ50cm前後であり、比較的大規模である。これに同規模に対応するようなピットを北側に検出できないが、主柱は4本構造と思われる。ただしP1、P2について本住居の北側主柱穴として考慮する必要はあるだろう。P1はピット形状、位置より、246号の主柱穴との同位置重複を想定する余地があるだろう。南辺周壁際、及び更に1m内側にそれぞれ1対のピットが見られる。内側のピットはやや外に傾きを持っている。

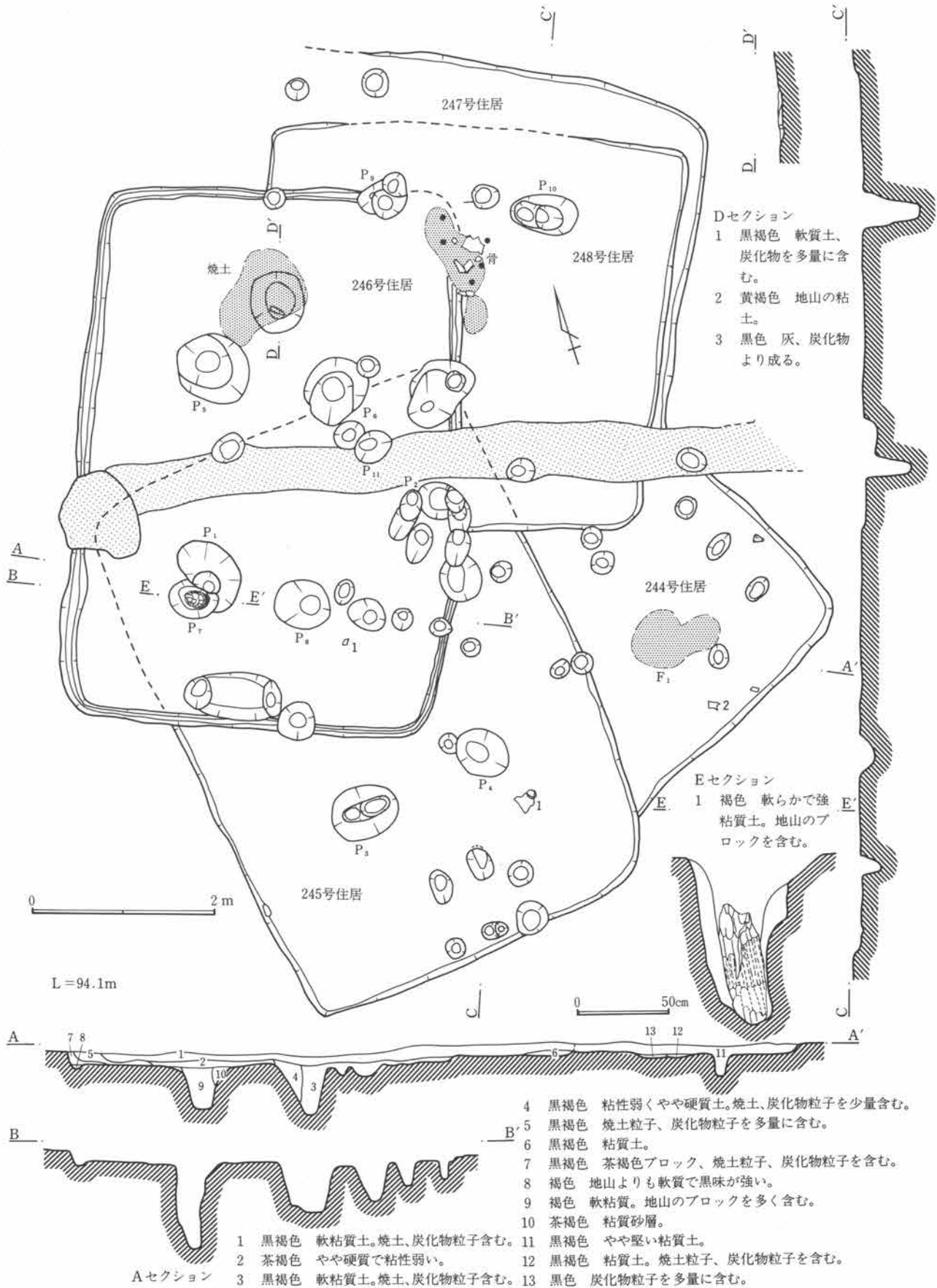
**炉跡** 不明確。検出できない。

**遺物出土状態** 床面直上より甕、大形破片が出土している。出土遺物は比較的少ない。

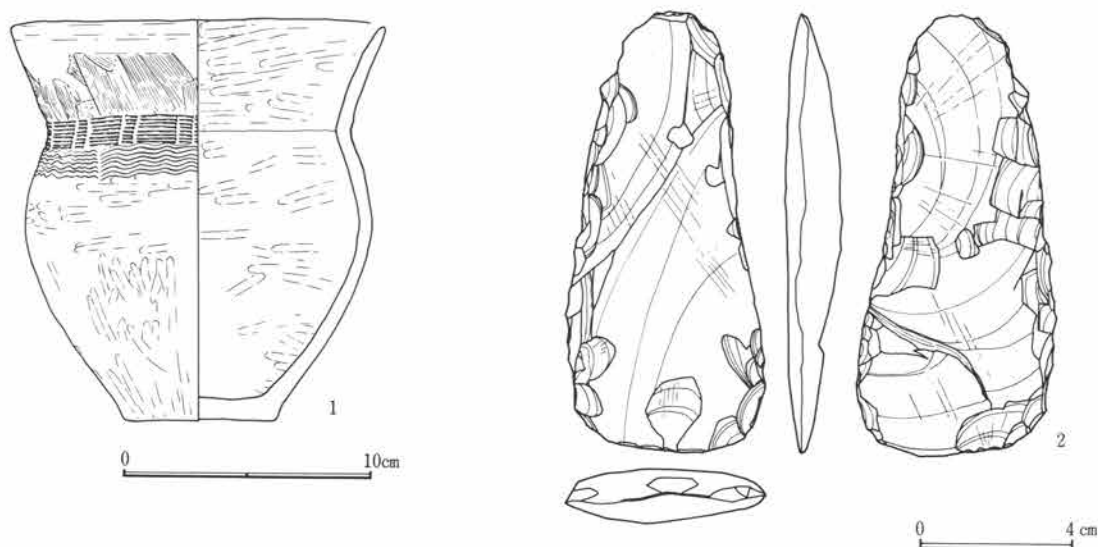
**時期** 弥生後期第3期

**他の遺構との関係** 244号住居(弥生後期第1期)、246号、248号住居(共に弥生後期第2期)と重複する。





第133図 244号、245号、246号、247号、248号住居



第134図 245号住居出土遺物

第119表 245号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	口 15.0 胴 14.0 高 16.0 底 6.0	口辺部は緩やかに外反する。	外面 口縁部はヨコナデ、口辺部はハケメ、頸部は等間隔止め←籐状文、胴上部は←波状文、胴～底部はヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 褐色	口辺～底部½

第120表 245号住居出土石器観察表

遺物番号	名称	計測値 (mm)	石質	重量(g)	特徴
2	打製石斧	116.0×51.8×14.0	黒色頁岩	92.3	両面加工された打製石斧。側縁部も丁寧に剥離されている。

## 246号住居跡 (第133図、図版41、42)

**位置** C地区住居群の東端部に位置する(41-C02)。244号、245号、248号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。規模は長軸5.9m、短軸4.2mを測る。方位はN-24°-E。

**周壁、壁溝** 周壁はほぼ全周検出するが、他の遺構との重複部では遺存状態は悪い。西周壁は他遺構との重複は無く検出状況は良好である。西周壁において検出できた壁高は15cm。壁溝は全周する。幅15~20cm、深さ約5cm。

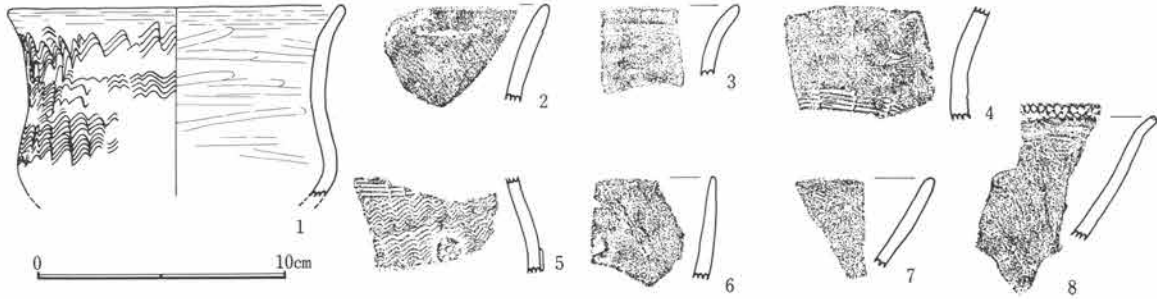
**柱穴** 主柱穴を4箇所検出する(P5~P8)。主柱穴は比較的大規模な2段に掘り込んだ円形ピットである。4主柱穴は径60~90cm、深さ50cm前後。P7では2ピットが連なった状態がみられ、ピット中より径23cm程の柱材を非常に良好な遺存状態で検出した。南周壁際に1対のピットが認められる。

**炉跡** 北側(奥側)2主柱穴と周壁の間に地床炉を設けている。炉跡は径70cmの浅い窪みを造り底面を火床面としている。炉跡内とその周囲には焼土、炭化物が著しく堆積していた。

**遺物出土状態** 床面直上、覆土中より弥生土器破片が多数出土している。

時期 弥生後期第2期

他の遺構との関係 244号住居（弥生後期第1期）と重複。245号住居（弥生後期第3期）、248号住居（弥生後期第2期）は本住居の床面上に造られており、本住居より新しい。住居中央部は東-西にかけて後世の溝による攪乱を受けている。



第135図 246号住居出土遺物 (1)

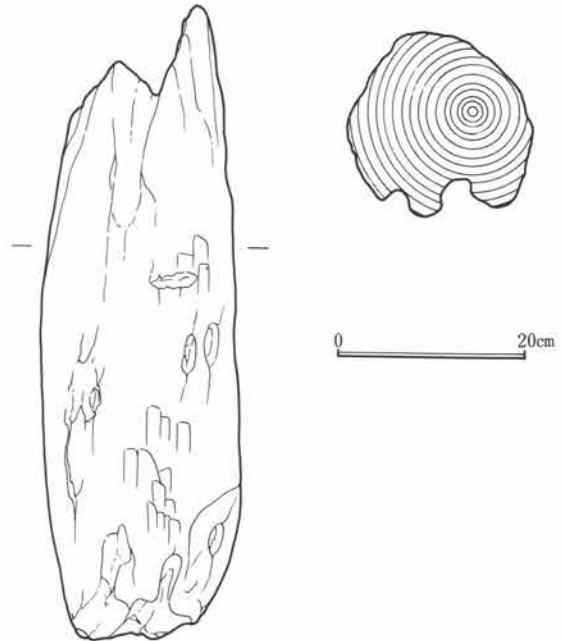
第121表 246号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	台付甕	口 13.4	頸部のくびれは弱い。口辺部は緩く外反する。	外面 口縁部はヨコナデ、口辺～頸部は←波状文、胴上部はヘラミガキ。 内面 ヨコナデ、ロ～胴部はヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 褐色	口縁～頸部%周

第122表 246号住居出土土器観察表 (拓本)

2 甕	内面ハケメ、砂粒混入、灰白色	5 台付甕?	内面ヘラミガキ、砂粒混入、黒褐色	8 高坏	内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい橙色、内外面丹彩
3 甕	砂粒多量に混入、にぶい橙色	6 鉢	砂粒多量に混入、にぶい橙色、内外面丹彩		
4 甕	細砂粒混入、灰白色				

柱材 P 7 中より柱材が良好な遺存状態で出土している。穴の深さは90cmで、柱材はピットの底面に密着した状態で西壁方向に80°の傾きをもって検出された。柱材は長さ66.8cm遺存している。芯持ち材で、径20cmの円柱状を呈する。上部は腐朽し痩せ細って欠損する。下半部は遺存状態は良好で元の面が残り一部に樹皮、加工痕を観察することができる。樹種はコナラ属クヌギ節。



第136図 246号住居出土遺物 (2) 柱材

247号住居跡 (第133図、図版41、42)

位置 C地区住居群の東端部に位置する(39-C02)。246号、248号住居と重複する。

形状、規模、方位 形状、規模は不明。方位はN-29°-E。

周壁、壁溝 北、東周壁を検出する。他は不明。壁溝は認められない。

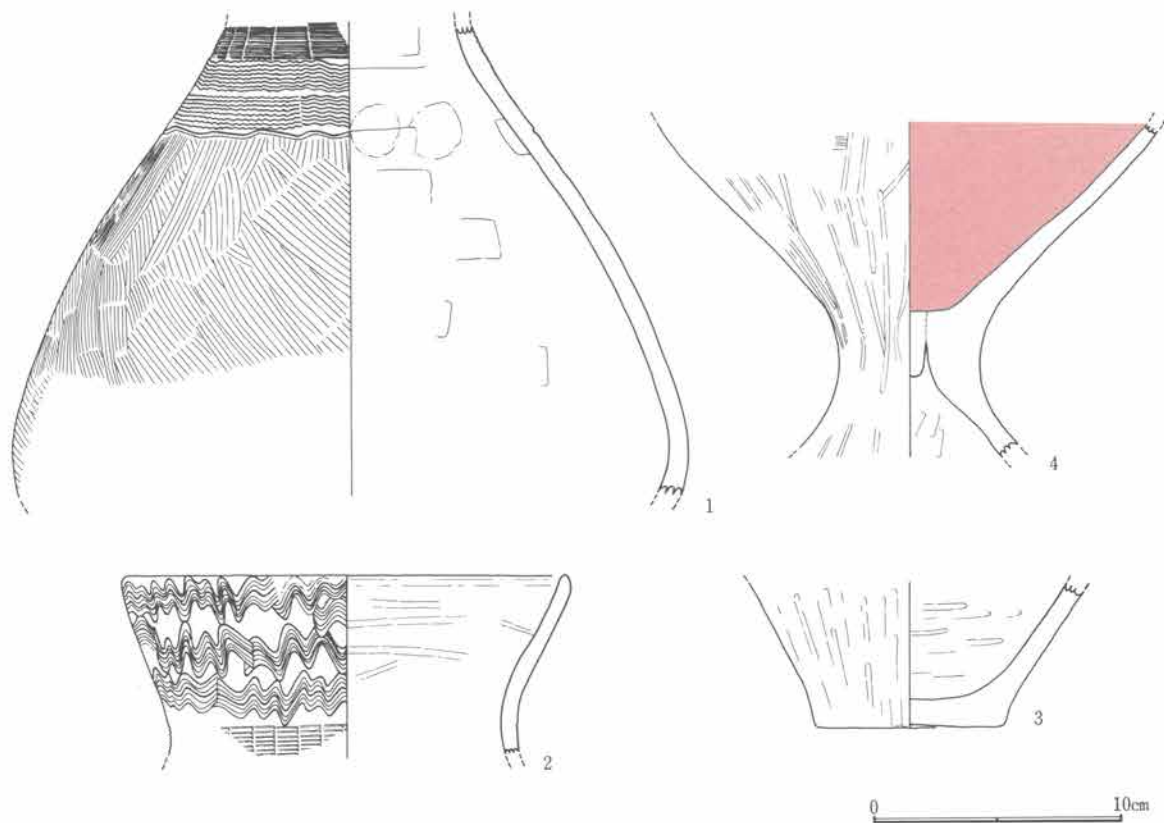
柱穴 不明確。248号住居の主柱穴と3箇所複数ピットが重なっているが、これが本住居の主柱穴とも考えられる(P9~P12)。

炉跡 不明確。北側(奥側)2主柱穴間、やや内寄りに土器破片と共に骨片が多数散布していた。付近に炉跡があった可能性が高い。

遺物出土状態 床面直上、覆土中より土器破片が多数出土している。大形土器破片が246号住居の壁溝上周辺に多数出土している。246号、247号住居に伴う遺物との区別がやや不明瞭である。

時期 弥生後期第2期

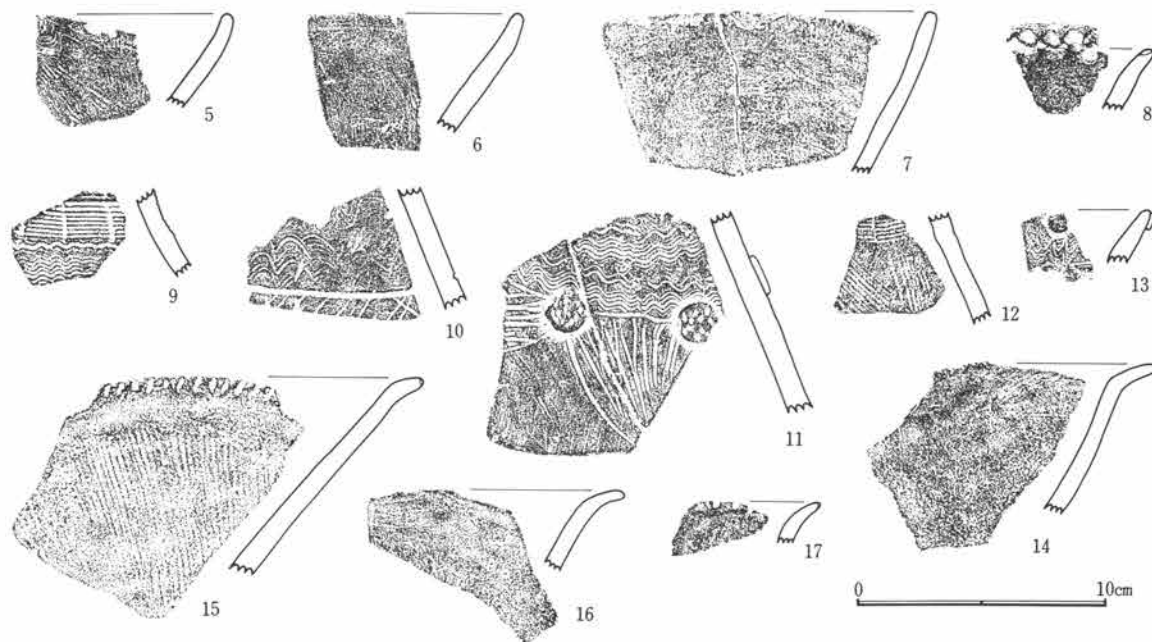
他の遺構との関係 246号、248号住居(共に弥生後期第2期)と重複する。先後関係は不明。248号住居の拡張住居の可能性が高い。



第137図 247号住居出土遺物(1)

第123表 247号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺		頸部は比較的細く、胴部は下膨れ。	外面 頸部は等間隔止め←籐状文、胴上部は波状文、波状文下、区画するように沈線、胴部はハケメ。 内面 胴上部は指オサエ、ヘラナデ。	細砂粒混入 堅緻 淡褐色	頸～胴上部 $\frac{1}{2}$
2	甕	口 18.0	口辺部は緩やかに内湾する。	外面 口辺部は7本単位の波状文。頸部は等間隔止め←籐状文。 内面 口縁部はヨコナデ。口辺部はヘラミガキ。	粗砂粒混入 やや堅緻 暗赤褐色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周
3	壺	底 7.8		外面 ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	粗砂粒、黒、白色粒混入 堅緻 褐色	底部のみ
4	高 坏			外面 ヘラミガキ。 内面 坏部はヘラミガキ、脚部はヘラアテ痕、ヘラナデ。	粗砂粒、黒色粒混入 堅緻 橙色	口辺、脚下部欠損 内面坏部のみ丹彩



第138図 247号住居出土遺物 (2)

第124表 247号住居出土土器観察表 (拓本)

5 壺 内面ヘラナデ、砂粒混入、橙色	10 壺 内面ハケメ、砂粒混入、浅黄橙色	15 高坏 外面(b)ヨコナデ以下ハケメ、内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい橙色
6 壺 内面(b)ヨコナデ、砂粒混入、淡橙色	11 壺 内面ヘラナデ、砂粒混入、淡橙色	16 高坏 内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい橙色、内面丹彩
7 鉢 外面(b)粗いヘラミガキ、(c)ナデ、内面ナデ、にぶい橙色	12 甕 砂粒混入、にぶい橙色	17 高坏 砂粒混入、淡橙色、内面丹彩
8 壺 (a)指頭押圧文、内面ナデ、砂粒混入、褐灰色	13 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、褐灰色	
9 壺 砂粒混入、淡橙色	14 高坏 ハケメ、中砂粒混入、にぶい橙色、内面丹彩	

248号住居跡 (第133図、図版41)

**位置** C地区住居群の東端部に位置する(39-C02)。244号、245号、246号、247号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 方形を呈する。規模は南北5.0m、東西4.8mを測る。方位はN-26°-E。

**周壁、壁溝** 周壁の遺存状態は悪い。特に246号住居との重複部では検出できない。壁溝は認められない。

**床面** 床面は、灰褐色粘質土を平坦に踏み固めている。

**柱穴** 主柱穴を4箇所検出する(P9~P11)。このうち3箇所は複数のピットが重複している。これは247号住居との重複によるものと思われる。主柱穴の位置関係は長方形配置を示しており、住居の形状がほぼ方形であるに対し若干様子を異にしている。ピットそれぞれの深さは50~60cmである。

**炉跡** 不明。

**遺物出土状態** 床面直上より多数の土器破片が出土している。

**時期** 弥生後期第2期

**他の遺構との関係** 246号、247号住居(共に弥生後期第2期)と重複する。247号住居との先後関係は不明である。247号住居の拡張前の住居の可能性はあるが張り床面などの確認はないため不明確である。本住居は246号住居の床面上に造っている。本住居のほうが新しい。245号住居よりも古い。



第139図 248号住居出土遺物

第125表 248号住居出土土器観察表(拓本)

1 壺 (a)波状文、内面ハケメ、砂粒混入、淡橙色	3 甕 砂粒混入、にぶい橙色	5 高坏 内外面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい橙色、外面丹彩
2 甕 砂粒混入、灰褐色	4 高坏 にぶい橙色、内面丹彩	6 脚 内面端部指オサエ痕、砂粒混入、にぶい橙色、外面丹彩

249号住居跡 (第140図、図版42、43)

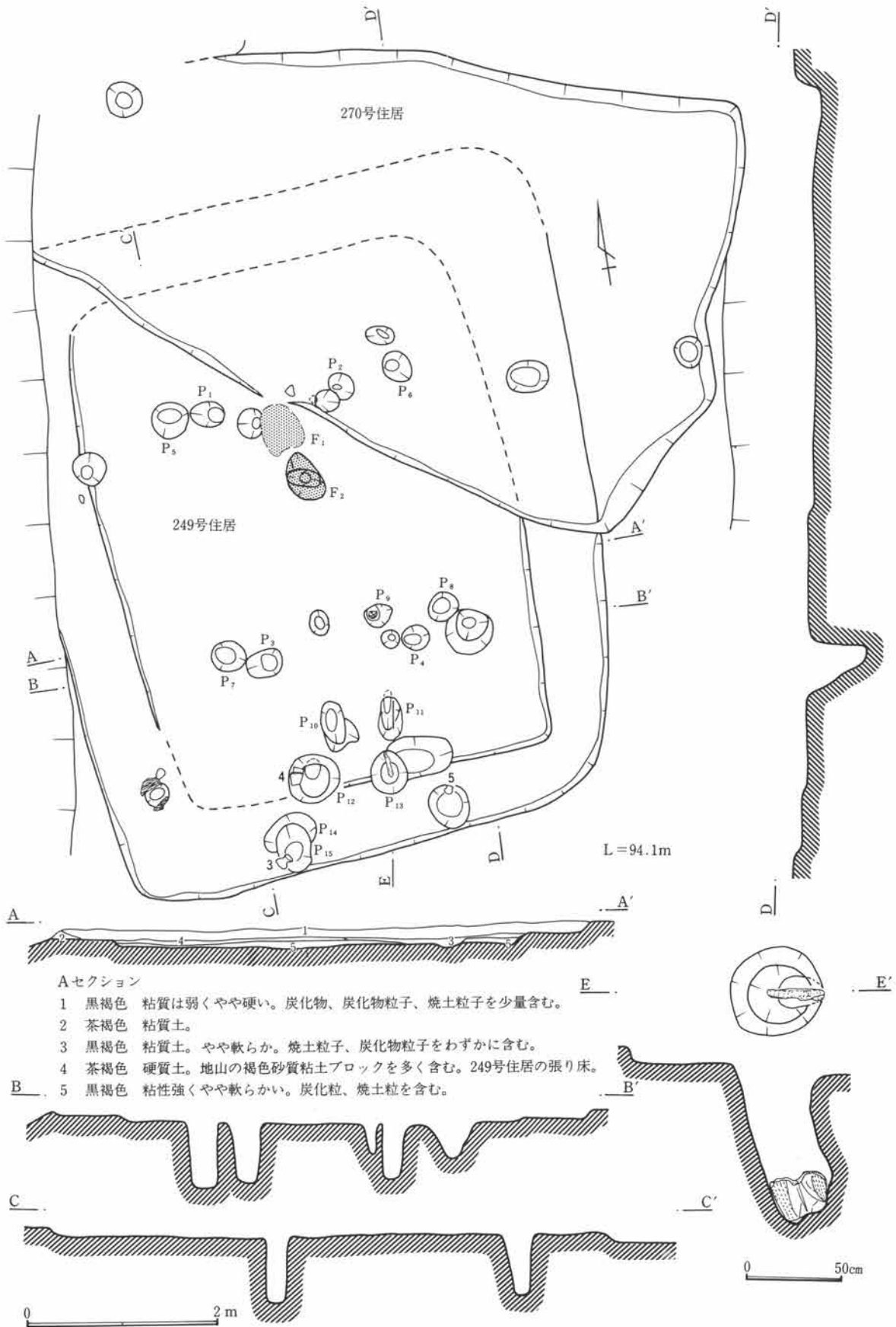
**位置** C地区住居群の東部に位置する(40-C07)。270号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 隅丸長方形を呈する。本住居では周壁を2重に検出しており、外側が拡張後、内側が拡張前の住居である。外側の住居形状は、北半部は不明確。規模は拡張後(外側)で長軸7m前後、短軸は5.8mを測る。拡張前(内側)で長軸は5.5m、短軸4.3mを測る。方位はN-0°。

**周壁、壁溝** 北半部270号住居との重複部では拡張前、拡張後の周壁とも検出できない。外側周壁は西辺は中世の溝に切られている。南半部では比較的良好に検出する。検出できた壁高は約10cm。内側周壁の壁高(拡張前と拡張後の床面差)は5cm以下である。壁溝は認められない。

**床面** 拡張前の床面は暗灰褐色粘質土の面を平坦に踏み固めている。拡張後は拡張前の住居との重複部は黄褐色土ブロックを主体とする混土層を張り床としている。

**柱穴** 主柱穴は拡張前、拡張後の主柱穴をそれぞれ4箇所検出している。主柱穴の配置は拡張後(P5~P8)は拡張前(P1~P4)の位置から横方向に両側に幅を広げ移動している。主柱穴は拡張前と後で



Aセクション

- 1 黒褐色 粘質は弱くやや硬い。炭化物、炭化物粒子、焼土粒子を少量含む。
- 2 茶褐色 粘質土。
- 3 黒褐色 粘質土。やや軟らか。焼土粒子、炭化物粒子をわずかに含む。
- 4 茶褐色 硬質土。地山の褐色砂質粘土ブロックを多く含む。249号住居の張り床。
- 5 黒褐色 粘性強くやや軟らかい。炭化粒、焼土粒を含む。

第140図 249、270号住居

6 検出した遺構、遺物

形状、規模ともほぼ変化はない。径30~40cm、深さは60~70cmである。P 9は深さ55cmの円形ピットで、下部より径12cm程の柱材が検出されている。南辺部に2対のピットを見る。P10、P11は拡張前、P12、P13は拡張後の住居にそれぞれ対応する。4ピットとも外方向にほぼ同様の傾きを持っている。P13ピットは長径50cm、深さ70cmであり、傾斜角度80度。ピット下部より幅30cm、厚さ4cm程の板材を検出している。これらのピット、板材は住居出入部に伴う施設に関わると考えられる。

**炉跡** 本住居内にはおいて3基の炉跡が検出している。拡張前及び拡張後の炉跡は共に北側（奥側）支柱穴の間やや内側に設けている（F1）。同位置に上下2面に炉跡を検出している。下位が拡張前、上位が拡張後である。上の炉跡は地床炉で火床面に密着して壺棺土器の大形破片を敷き並べた状態で認められた。敷き並べた土器の周囲には焼土帯が認められ、敷き並べている土器棺の縁辺に接して長さ18cmの長細い川原石を据えている。下位の炉跡は径30cm程の浅い窪みに上位の炉跡と同様に土器破片を敷き並べている。周囲に焼土帯が広がっている。両炉跡内に検出された土器破片は施設として敷き並べた意図が認められることから土器面を火床面としていたものと思われる。

又、炉跡（F1）の南にも炉跡を検出している。長径60cmの浅い窪みの中に大形土器破片を敷き火床面としている（F2）。火床面上には黒色灰層が厚く認められている。なおこの炉跡上は褐色粘質土の強い張り床面に覆われていた。この炉跡は拡張前のものであり、3基のうちでは最も古いと思われる。

**遺物出土状態** 床面直上より弥生土器大形破片が多数出土している。張り床面下からは土器小破片が僅かに数点認められたにすぎない。249号住居の南辺際の2箇所ピット中より完形、半完形土器が出土している。P14は径56cm、深さ73cmで、このピットの最上部の壁際からほとんど欠損のない完形甕形土器が出土している。

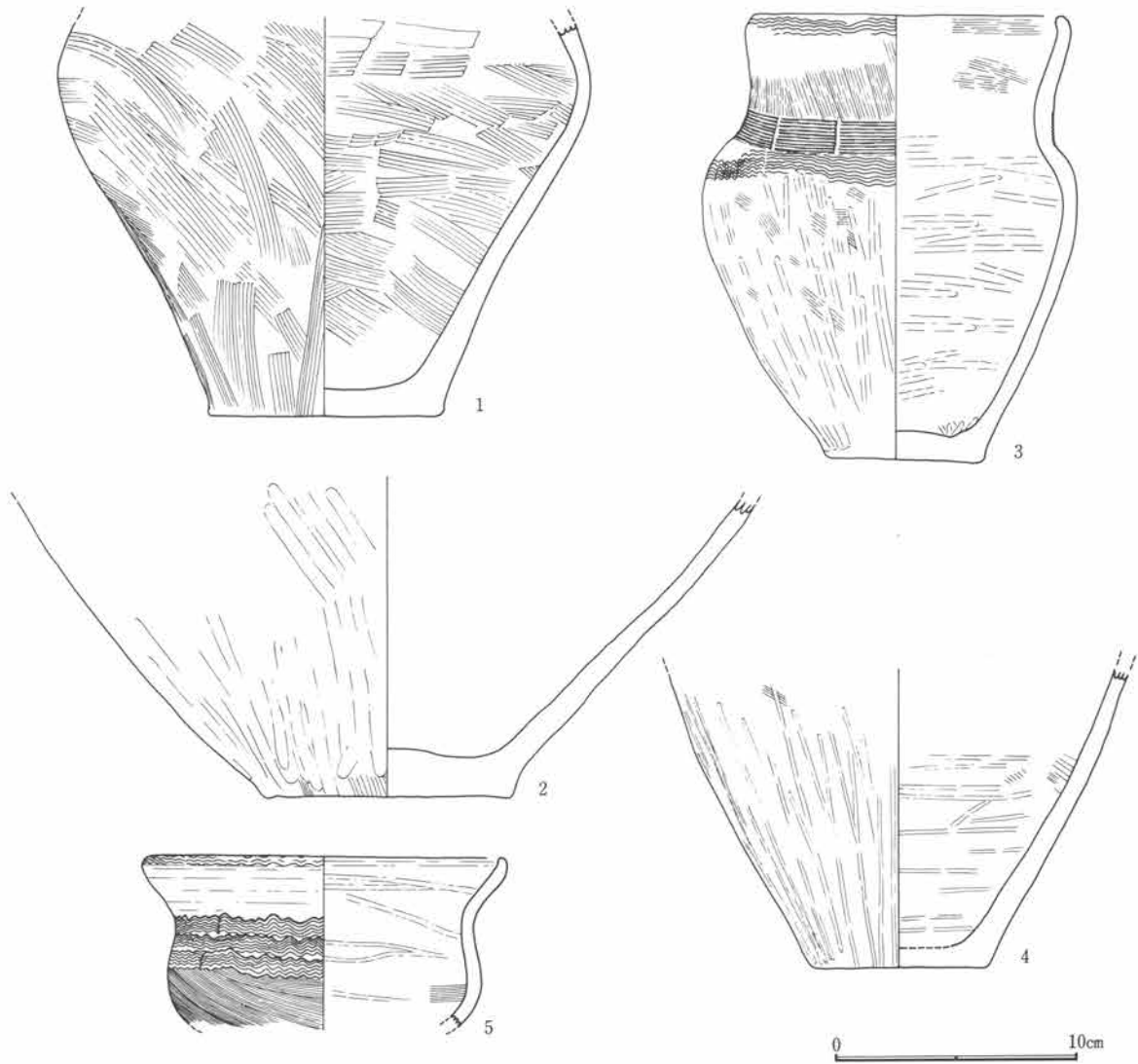
**時期** 弥生後期第2期

**他の遺構との関係** 270号住居（弥生後期）と重複する。本住居は270号住居に切られていることから、両住居の先後関係は270号住居の方が新しい。

第126表 249号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	胴 22.0 底 9.6		外面 胴部はハケメ、底部はナデ。 内面 胴中部はヘラナデ、胴部はハケメ。	中砂粒混入 堅緻 灰白色	胴中位~底部 $\frac{1}{2}$
2	壺	底 10.1	底部から緩やかに立ち上る。	外面 胴部はヘラミガキ、最下部はハケメ、ナデアゲ。 内面 器面剥落著しい。	細砂粒混入 やや堅緻 淡橙色	胴下位~底部
3	甕	口 12.7 底 6.6	頸部はくびれ強く、口縁部は短く内湾する。	外面 口縁部は←波状文、頸部は←等間隔止め簾状文、胴上部は←波状文、胴~底部はハケメ、ヘラミガキ。 内面 口縁部はヨコナデ、口辺部はハケメ、胴部はヘラミガキ、底面はヘラオサエあり。	中砂粒混入 堅緻 にぶい赤褐色	完形
4	甕	底 7.2		外面 胴部はハケメ後ヘラミガキ、底部はヘラミガキ。 内面 ハケメ後ヘラミガキ。	中砂粒混入 堅緻 にぶい褐色	胴~底部 $\frac{1}{2}$
5	台付甕	口 15.0	口辺部はほぼ直状に外反し口縁部は短く内湾する。	外面 口縁部は波状文、口辺部はヨコナデ、頸~胴上部は波状文、胴部はハケメ。 内面 口縁部はヨコナデ、口~頸部はヘラミガキ。胴部はハケメ後、ヘラミガキ。	粗砂粒混入 やや堅緻 にぶい赤褐色	口縁~胴部 $\frac{1}{4}$ 周



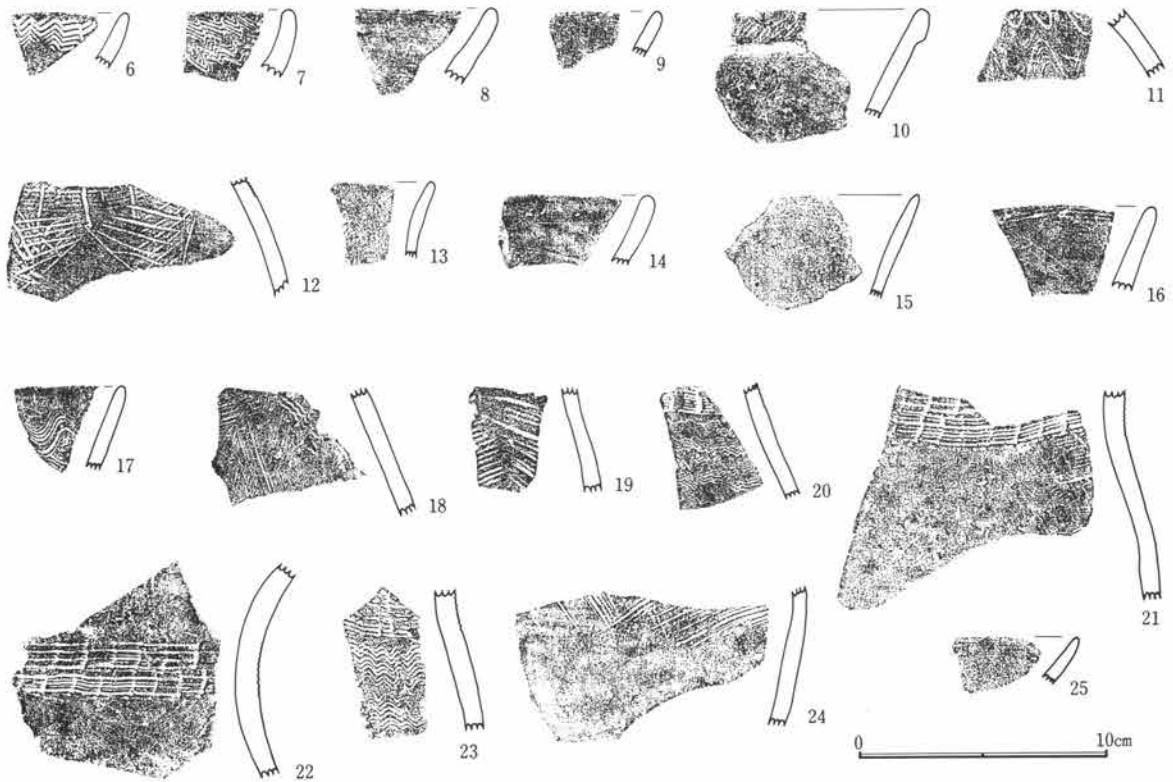


第141図 249号住居出土遺物 (1)

第127表 249号住居出土土器観察表 (拓本)

6 壺 内面ナデ、砂粒混入、にぶい橙色	13 甕 砂粒混入、にぶい橙色	20 甕 砂粒混入、褐灰色
7 壺 内面ナデ、中砂粒混入、明褐灰色	14 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、黒褐色	21 甕 砂粒混入、灰白色
8 壺 砂粒混入、淡橙色	15 甕 内面ヘラナデ、砂粒混入、にぶい橙色	22 甕 内面ヘラナデ後棒状具によるミガキ、砂粒混入、灰白色
9 壺 砂粒混入、にぶい橙色	16 甕 内面ナデ、砂粒混入、橙色	23 甕 砂粒混入、褐灰色
10 壺 砂粒混入、灰褐色、(b)縄文	17 甕 砂粒混入、灰褐色	24 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい橙色
11 壺 砂粒混入、にぶい橙色	18 甕 内面ヘラナデ、砂粒混入、褐灰色	25 高坏 砂粒混入、明褐灰色、内外面丹彩
12 壺 (d)横描直線、縦ヘラ沈線、砂粒混入、にぶい橙色	19 甕 砂粒混入、黒色	

6 検出した遺構、遺物



第142図 249号住居出土遺物 (2)

270号住居跡 (第140図)

**位置** C地区住居群の東端部に位置する (38-C07)。249号、271号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 形状、規模は不明。北辺の方位はN-75°-W。

**周壁、壁溝** 周壁は北辺部で比較的良好に検出するが、検出できた壁高は約30cm。壁溝は認められない。

**柱穴** 主柱穴は不明。

**炉跡** 不明

**遺物出土状態** 遺物は僅少

**時期** 弥生後期

**他の遺構との関係** 249号住居 (弥生後期第2期) を切っている。本住居の方が新しい。

253号、255号住居跡 (第143図、図版44)

**位置** C地区住居群の中央部に位置する (68-C26)。

**形状、規模、方位** 形状、規模不明。西南部の大部分が調査区域外である。方位は253号住居はN-4°-E、255号住居はN-9°-E。

**周壁、壁溝** 北側周壁は両住居の周壁は30cm前後位置を異にして認められるが東壁は一致している。北周壁の内側が253号で、外側が255号住居である。検出できた壁高は20cm前後。共に壁溝は認められない。

**床面** 下位に253号住居、上位に255号住居の張り床面を検出する。

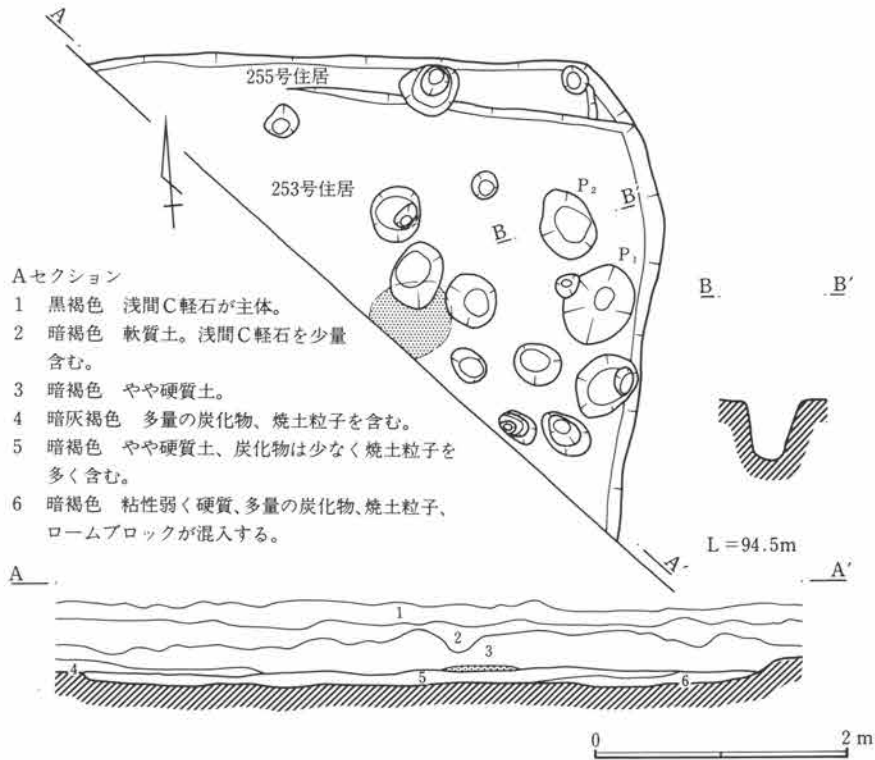
**柱穴** 住居内で多数のピットを検出する。いずれが支柱穴になるか不明確である。東周壁際のピット（P1、P2など）中より土器破片が多数出土している。

**炉跡** 253号住居の炉跡は不明。中央部張り床面上に地床炉を認めるがこれは255号住居の炉跡である。

**遺物出土状態** 床面直上、覆土中より多数の弥生土器破片が出土している。

**時期** 弥生後期第3期

**他の遺構との関係** 255号住居は253号住居の床面上に造られており、253号住居の方が古い。ただし255号住居は253号住居の拡張、建て替えの可能性が大きい。



第143図 253号、255号住居

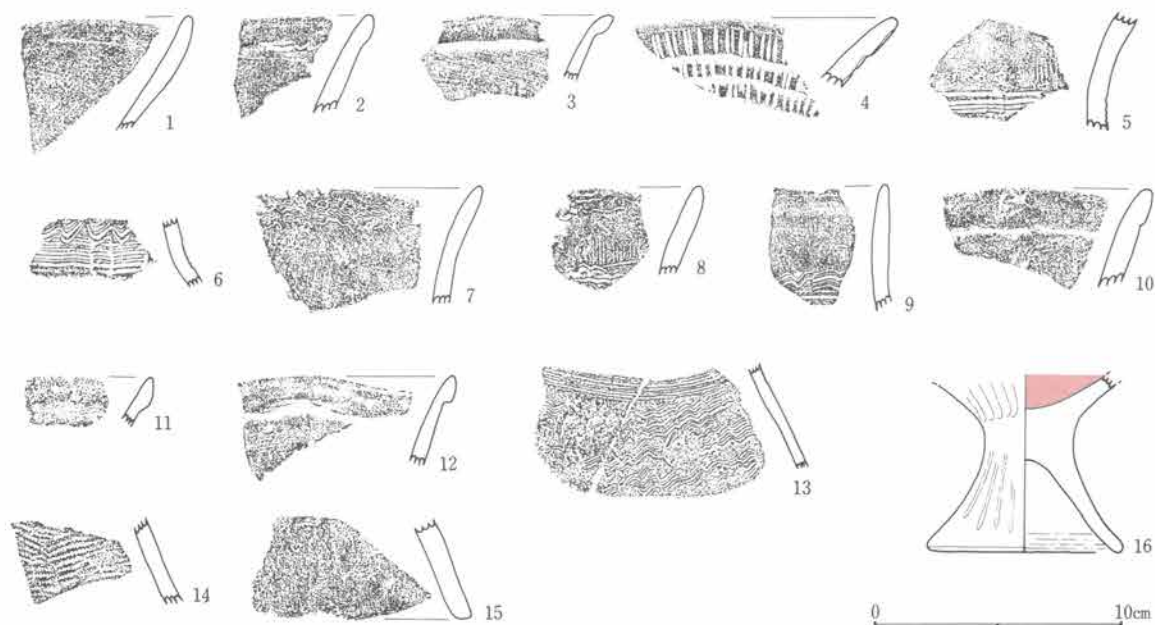
第128表 253号住居出土土器観察表（拓本）

1 壺 砂粒混入、黒褐色	6 壺 砂粒混入、黒褐色	11 甕 中砂粒混入、にぶい橙色
2 壺 砂粒混入、灰白色	7 甕 砂粒混入、灰褐色	12 甕 砂粒混入、にぶい橙色
3 壺 中砂粒混入、橙色	8 甕 砂粒混入、灰褐色	13 甕 砂粒混入、明灰褐色
4 壺 砂粒混入、橙色	9 甕 砂粒混入、橙色	14 甕 縄文、砂粒混入、黒褐色
5 壺 中砂粒混入、にぶい橙色	10 甕 砂粒混入、灰褐色	15 脚 中砂粒混入、にぶい橙色

第129表 253号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
16	高坏脚	7.9		外面 坏～脚部はヘラミガキ。 内面 裾部はヨコナデ。	中砂粒、黒、白色粒混入 堅緻褐色	坏下位～脚部 坏部内面丹彩

6 検出した遺構、遺物



第144図 253号住居出土遺物

257号住居跡 (第145図、図版45)

位置 C地区住居群の中央部西よりに位置する(68-C22)。260号、258号住居などが北東部に隣接する。

形状、規模、方位 形状は隅丸長方形になると思われる。西南部の大方の部分が調査区域外である。規模は北西-東南(長軸か)が6.0mを測る。方位はN-50°-W。

周壁、壁溝 検出できた壁高は約20cm。壁溝は認められない。

柱穴 支柱穴は不明。

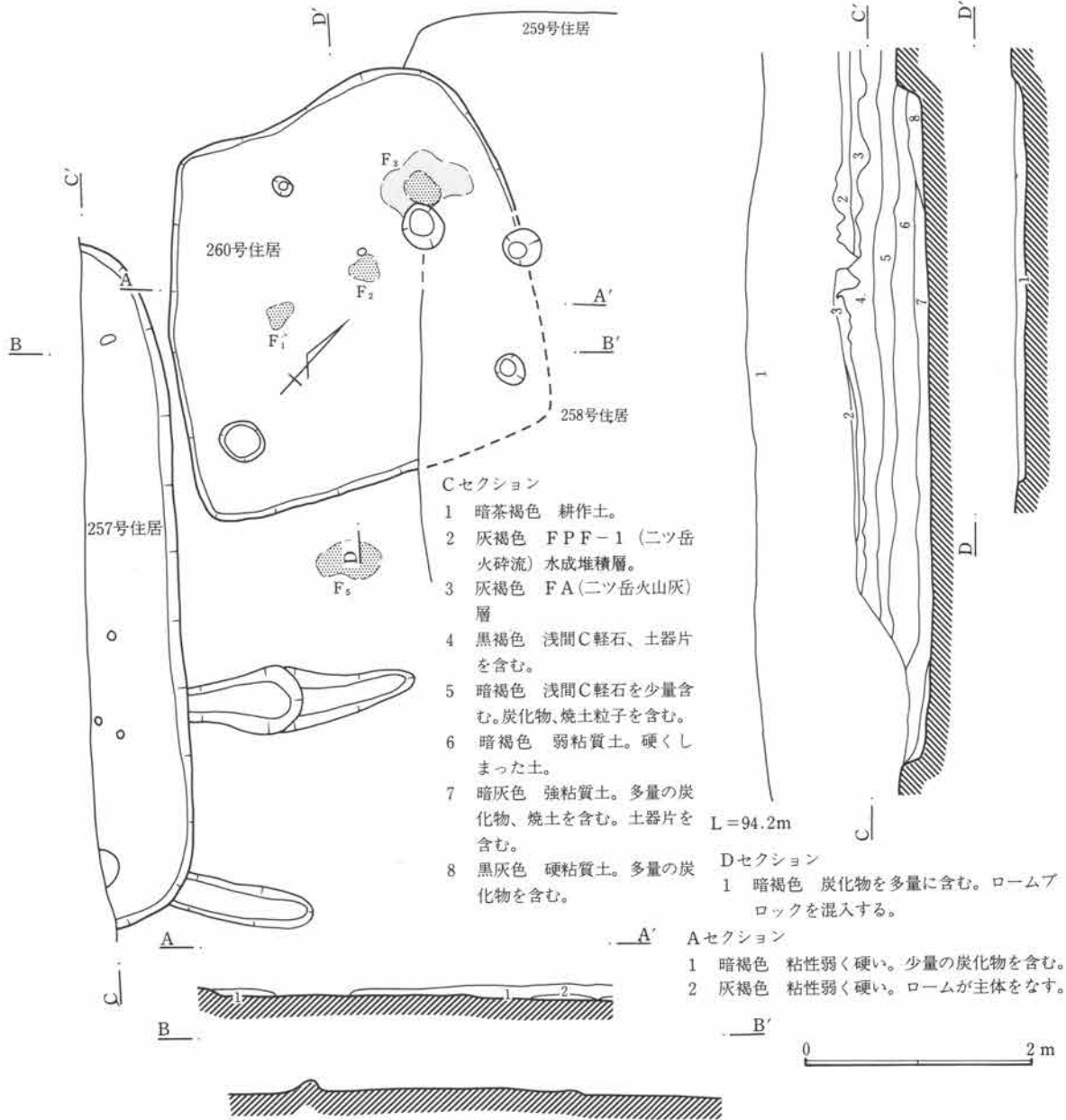
炉跡 不明。

遺物出土状態 覆土中より弥生土器破片が数点出土する。

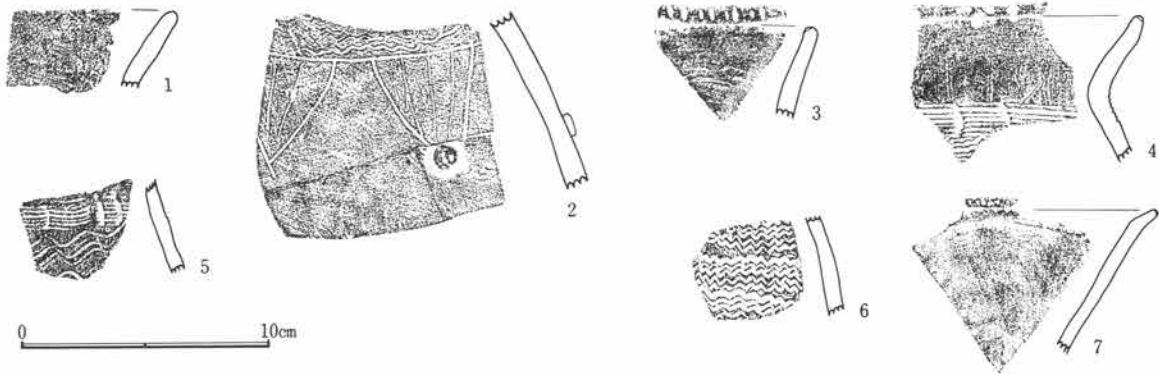
時期 弥生後期第1期

第130表 257号住居出土土器観察表(拓本)

1 壺 内面ヨコナテ、砂粒混入、黒褐色	4 甕 (a)棒状具による刻み目、砂粒混入、にふい橙色	6 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、灰褐色
2 壺 砂粒混入、橙色	5 甕 砂粒混入、黒褐色	7 高坏 砂粒混入、にふい橙色、内外面丹彩
3 甕 (a)細かい刻み目、内面ヨコナテ、明褐灰色		



第145図 257号、260号住居



第146図 257号住居出土遺物

6 検出した遺構、遺物

260号住居跡 (第145図、図版45)

**位置** C地区住居群の中央部に位置する(67-C23)。258号、259号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 不整形を呈する。規模は長軸3.3m、短軸2.8mを測る。方位はN-56°-W。

**周壁、壁溝** 周壁の検出状態は悪い。検出できた壁高は浅く、5cm前後であり、部分的に不明瞭である。

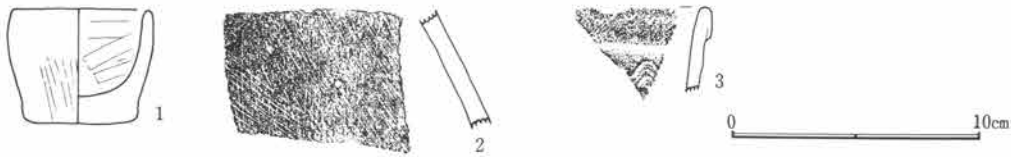
**柱穴** 主柱穴は不明。検出できない。

**炉跡** 住居内に焼土帯を3箇所検出する。それぞれ炉跡の可能性はある。特にF3は周囲に炭化物、灰の広がりがあがる。

**遺物出土状態** 出土遺物は少ない。床面直上より弥生土器破片が僅かに出土している。

**時期** 弥生後期第3期

**他の遺構との関係** 258号住居(弥生後期第3期)、259号住居(弥生後期第1期)と重複する。



第147図 260号住居出土遺物

第131表 260号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	小型手捏	口 6.0 底 4.8 高 4.6		外面 ヘラミガキ。 内面 ヘラナデ。	中砂粒、黒色粒 混入 堅緻 褐灰色	口縁～胴部欠損

第132表 260号住居出土土器観察表(拓本)

2 壺 内面ヘラナデ、砂粒混入、橙色	3 甕 細砂粒混入、にぶい褐色
--------------------	-----------------

258号住居跡 (第148図、図版46、47)

**位置** C地区住居群中央部、大溝河岸縁辺に位置する(65-C23)。259号、260号住居と重複する。

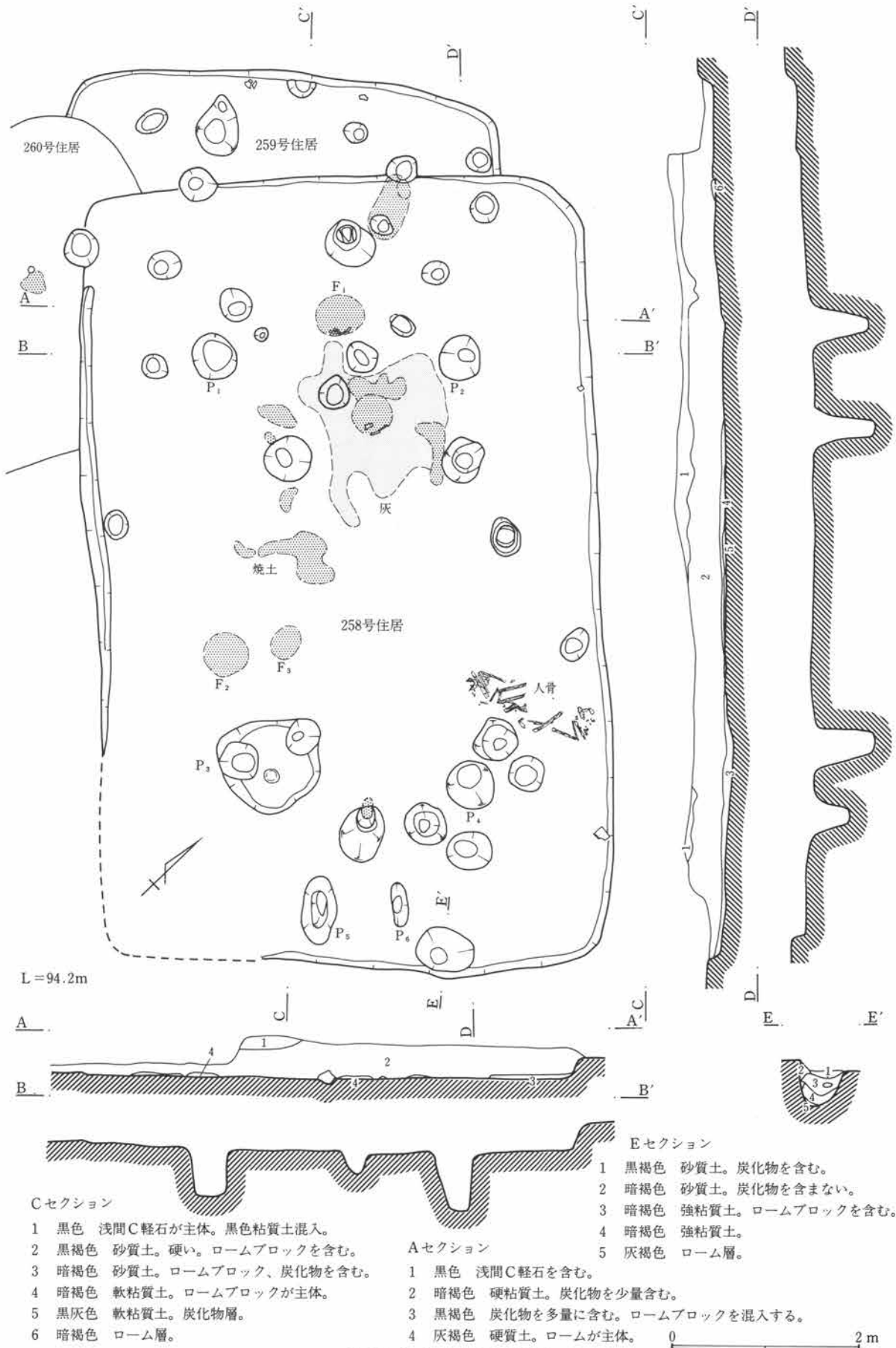
**形状、規模、方位** 隅丸長方形を呈する。規模は長軸8.6m、短軸5.5mを測る。方位はN-50°-W。

**周壁、壁溝** 周壁はほぼ全周検出する。検出できた壁高は東辺で約25cm。壁溝は東周壁下に一部認められる。

**床面** 黄褐色ローム質土(第V層)面を堅く踏み固めている。床面上には随所に焼土帯、炭化物、黒色灰が散在していた。

**柱穴** 主柱穴を4箇所検出する(P1~P4)。4主柱穴は径40cm前後、深さ50~60cmの円形ピットである。南辺部に1対のピットを検出する(P5、P6)。長径60~70cm、深さ40cm前後、外方向に傾きを持っている。

**炉跡** 北西側(奥側)2主柱穴の間、やや外寄りに地床炉を設けている(F1)。径50cmの範囲が火床面で



第148図 258号、259号住居

6 検出した遺構、遺物

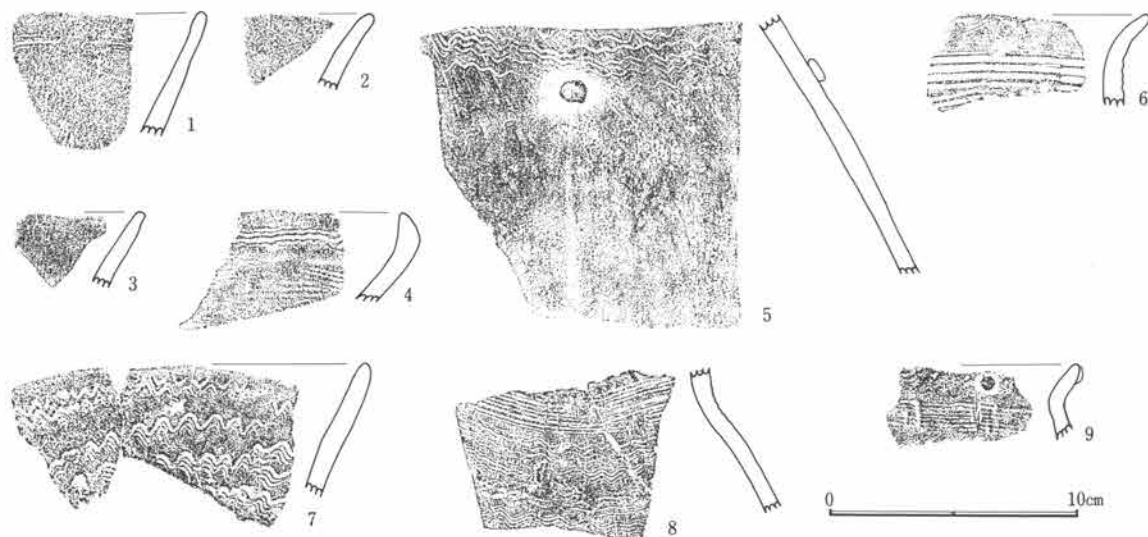
あり、焼土化している。火床部の縁部に大形土器破片を立て並べている。この他西南部（左側部）2 支柱穴間に2箇所地床炉が認められる（F2、F3）。この2箇所とも焼土化した良好な火床面が見られる。

**遺物出土状態** 床面直上より弥生土器破片が多数出土している。

**人骨検出状態** 住居東部支柱穴の傍らに人骨を2体検出した。人骨はほぼ床面直上に横たわった状態であった。床面に掘り込まれた跡はなく、周辺の覆土堆積状態には住居覆土を掘り込んだ土壌に類する遺構の痕跡を認めることはできなかった。又副葬品やこれに類する遺物は認められなかった。出土状態からの所見では住居の廃棄に前後して、時間幅なくこの状態が発生したと考えられる。特に解剖学的所見によれば二つの個体は埋葬とは結び付かない不自然な体位であるということから住居の上屋の崩壊以前の発生であると考えるのが妥当である。（7章4項、図版188参照）

**時期** 弥生後期第3期

**他の遺構との関係** 259号住居（弥生後期第1期）、260号住居（弥生後期第3期）と重複する。本住居は259号住居を切って造られている。



第149図 258号住居出土遺物

第133表 258号住居出土土器観察表（拓本）

1 壺 内面ナデ、砂粒多量に混入、にぶい 橙色	4 壺 内面ナデ、砂粒混入、明赤褐色	8 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい 橙色
2 壺 中砂粒混入、淡橙色	5 壺 外面淡橙色、内面灰色	9 甕 砂粒多量に混入、灰褐色
3 壺 砂粒混入、橙色	6 甕 砂粒混入、灰褐色	
	7 甕 内面ヘラミガキ、中砂粒混入、橙色	

259号住居跡 （第148図、図版46）

**位置** C地区住居群中央部に位置する（65-C24）。258号、260号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 形状不明。258号住居との重複部は住居の輪郭は把握できない。規模は長軸不明、短軸は4.7mを測る。方位はN-44°-W。

**周壁、壁溝** 周壁は北西辺を検出する。検出できた壁高は約10cm。壁溝は認められない。

**床面** 床面は黄褐色ローム質土（第V層）を平坦に踏み固めている。



**柱穴** 主柱穴は不明確。住居内、258号住居との重複部に多数のピットを検出するが本住居の主柱穴を特定できない。

**炉跡** 不明。

**遺物出土状態** 床面直上より弥生土器破片が僅か出土する。

**時期** 弥生後期第1期か。

**他の遺構との関係** 258号住居（弥生後期第3期）に東南部の大部分を切られている。258号住居の方が新しい。260号住居（弥生後期第3期）と西辺部で重複する。



第150図 259号住居出土遺物

第134表 259号住居出土土器観察表（拓本）

1 壺 砂粒混入、にぶい橙色	2 壺 内面ヘラミガキ、中砂粒混入、褐灰色	3 甕 外面櫛状文、内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい褐色
----------------	-----------------------	------------------------------

第135表 259号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
4	高坏	脚 10.6		外面 器面剥落著しい。 内面 器面剥落著しい。	細砂粒混入 やや堅緻 にぶい橙色	脚部 外面は丹彩

### 262号住居跡（第151図、図版47）

**位置** C地区住居群中央部、大溝河岸縁辺に位置する（52-C20）。263号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。263号住居との重複部は住居の輪郭は不明確。主柱穴の配置関係により形状、規模を推定することができる。規模は長軸4.7mを測り、短軸は3.8m前後になると思われる。方位はN-13°-E。

**周壁、壁溝** 周壁は西半部において良好に検出するが、東半部263号住居との重複部では検出は困難であった。検出できた壁高は西周壁で約15cm。壁溝は認められない。

**床面** 263号住居との重複部は黄褐色ローム質土ブロックを主体とする張り床面が認められる。

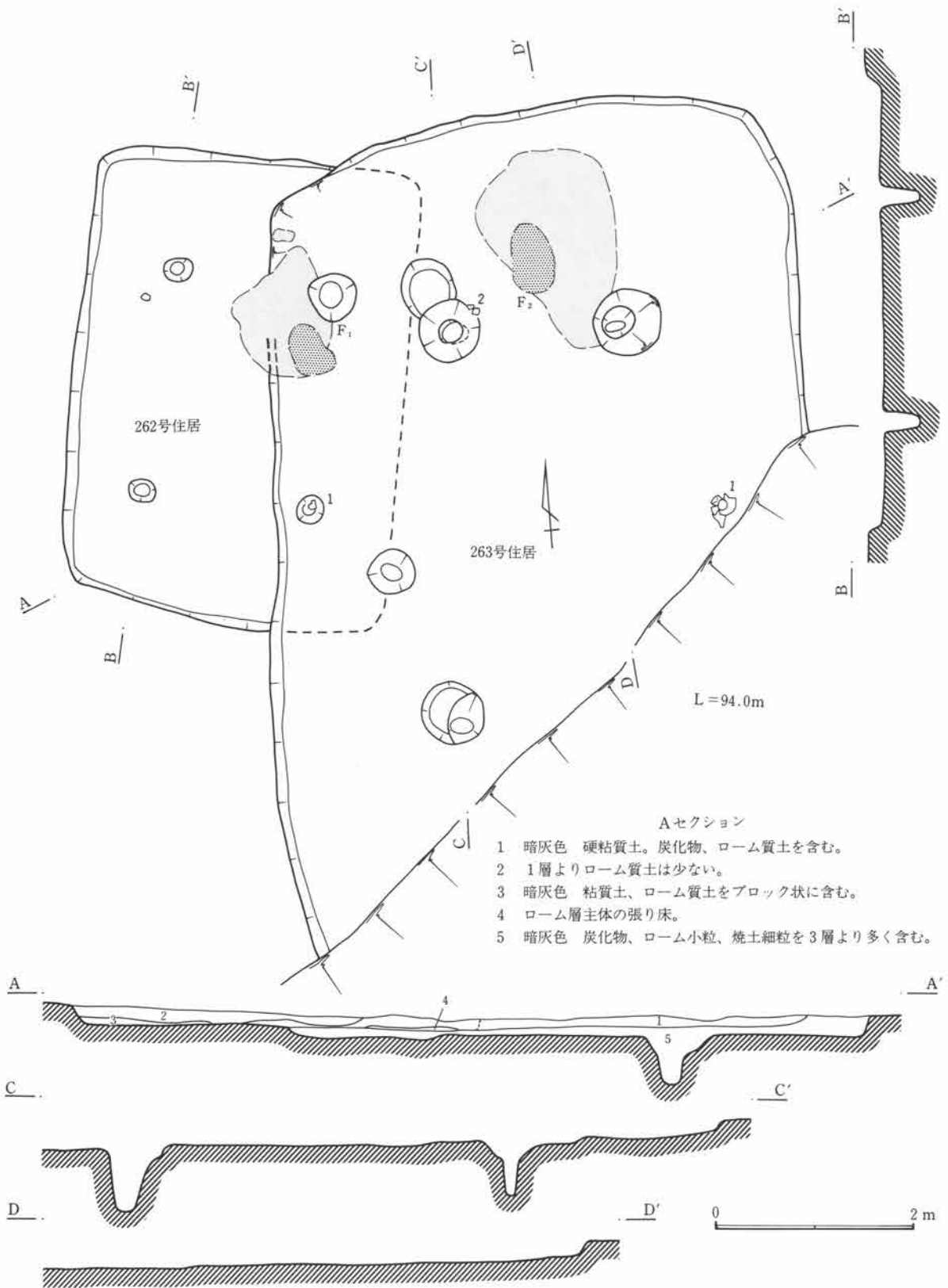
**柱穴** 主柱穴を4箇所検出する。4主柱穴は径25~30cm、深さ40~50cmであるが、北東部の主柱穴だけは特に大きい。

**炉跡** 北東部の主柱穴のやや中央寄り傍らに地床炉を設けている（F1）。地床炉は径50cm程の焼土化した火床面が認められる。炉跡の北方向、北側2主柱穴間に灰、炭化物の広がりが見られる。

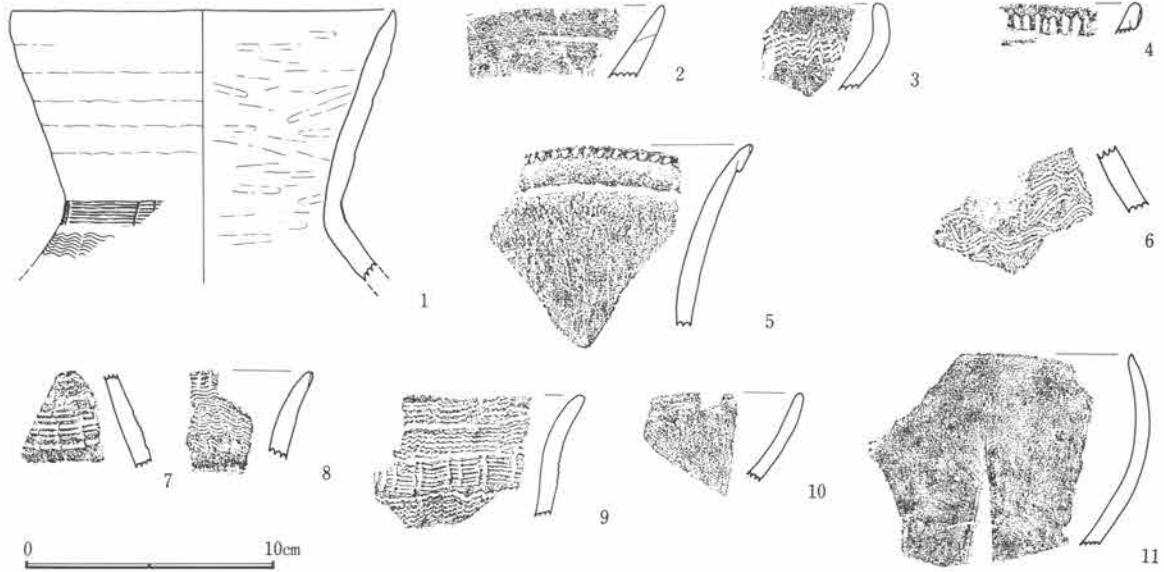
**遺物出土状態** 床面直上、覆土中より弥生土器破片が多数出土している。

**時期** 弥生後期第3期

**他の遺構との関係** 263号住居の覆土上に造られている。本住居の方が新しい。



第151図 262号、263号住居



第152図 262号住居出土遺物

第136表 262号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	口 15.4	口辺部は直状に外反する。口端部は尖る。輪積痕明瞭。	外面 口辺部はヘラナデ、指オサエ、頸部は4連止め←簾状文←波状文。 内面 口～頸部はヘラミガキ。	粗砂粒混入 やや堅緻 褐色	口縁部一部、頸部 $\frac{1}{2}$

第137表 262号住居出土土器観察表 (拓本)

2 壺	中砂粒混入、にぶい橙色	5 壺	内面ヘラミガキ、砂粒混入、淡橙色	9 甕	内面ヘラミガキ、砂粒混入、黒褐色
3 壺	内面ヘラミガキ、砂粒混入、黒褐色、外面丹彩	6 壺	内面ナデ、粗砂粒混入、にぶい橙色	10 鉢	内面ヘラミガキ、砂粒混入、灰褐色
4 壺	砂粒混入、にぶい橙色	7 壺	内面ヘラナデ、砂粒混入、灰白色	11 埴	内面ヘラミガキ、中砂粒混入、灰白色
		8 甕	砂粒混入、橙色		

## 263号住居跡 (第151図、図版47)

**位置** C地区住居群の中央部、大溝河岸縁辺上に位置する(51-C19)。262号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。南辺部は大溝覆土上にあるため検出は困難であった。規模は、長軸8.0m、短軸は5.4m前後と思われる。方位はN-3°-E。

**周壁、壁溝** 周壁は南辺部を除いてほぼ全周検出する。検出した壁高は約20cm。

**床面** 暗灰褐色粘質土面を平坦に踏み固めている。

**柱穴** 主柱穴は3箇所検出する。主柱は4本構造と思われる。東南部の主柱穴は大溝により失われている。3主柱穴の径は一様に約60cm、深さは50cm前後である。

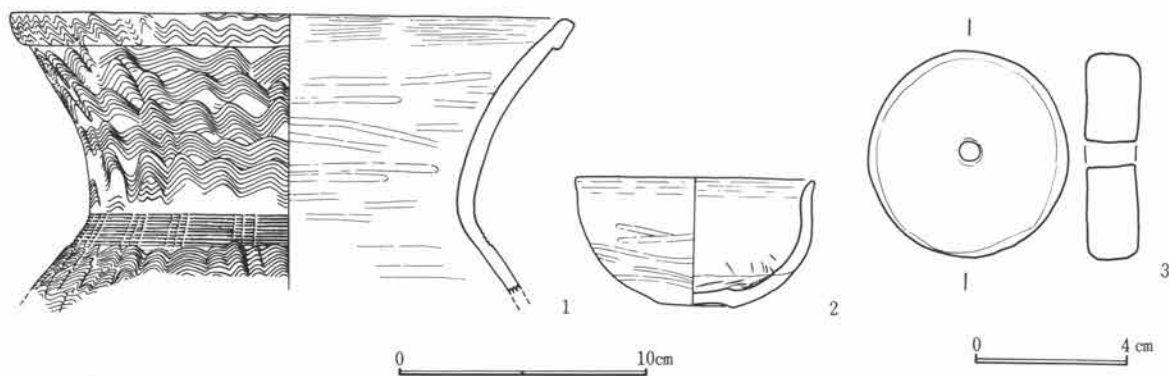
**炉跡** 北側(奥側)2主柱穴の間やや外寄りに地床炉を設けている(F2)。長径60cmの範囲が火床面であり焼土化している。周囲に炭化物、灰の広がりが広範囲に見られる。

6 検出した遺構、遺物

遺物出土状態 床面直上より弥生土器破片が多数出土している。

時期 弥生後期第3期

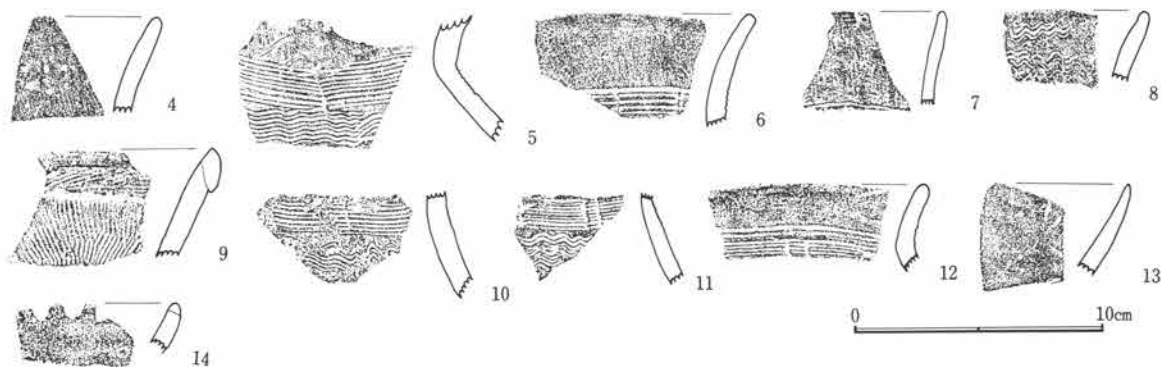
他の遺構との関係 262号住居（弥生後期第3期）は本住居の床面上5cm前後に張り床面を設けて造られている。本住居の方が古い。



第153図 263号住居出土遺物 (1)

第138表 263号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 22.8	折り返し口縁。口辺は緩やかに外反する。	外面 口縁端部、口縁部はヨコナデ、口縁部は←波状文、口辺部←波状文、頸部は10本単位の3連止め簾状文、胴上部←波状文。 内面 口縁部はヨコナデ、口辺～頸部はヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にふい橙色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周
2	埴	口 9.6 高 5.0	口縁部は内側に弱い稜を作り、短く外反する。底面は内外面とも歪んでいる。	外面 口縁部はヨコナデ、胴部はヘラミガキ。 内面 ヨコナデ、底部はナデ。	砂粒混入 堅緻 にふい橙色	口縁～胴部 $\frac{1}{4}$ 欠損



第154図 263号住居出土遺物 (2)

第139表 263号住居出土土製品観察表

遺物番号	名称	計測値(cm)	成 形	整 形	胎土・焼成	色 調	備 考
3	土製紡錘車	外径 5.5 孔径 0.5	形状はほぼ正円形に整えられる。円孔は直状。	器面は指オサエによる凹凸が目立つ、ナデ。	細砂粒混入 堅緻	灰褐色	完形

第140表 263号住居出土土器観察表 (拓本)

4 壺	砂粒混入、灰白色、内面丹彩	9 甕	内面ハケメ、細砂粒混入、にぶい橙色	12 台付甕	砂粒混入、黒褐色
5 壺	砂粒混入、にぶい赤褐色	10 甕	砂粒混入、淡橙色	13 鉢	内外面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい橙色、内外面丹彩
6 甕	内面ヘラミガキ、砂粒混入、黒褐色	11 甕	内面ヘラミガキ、砂粒混入、灰褐色	14 鉢	砂粒混入、にぶい橙色
7 甕	内面ハケメ、砂粒混入、灰褐色				
8 甕	砂粒多量に混入、にぶい橙色				

## 264号住居跡 (第156図)

**位置** C地区住居群の中央部に位置する(55-C22)。205号、267号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。遺存状態は悪い。北辺部は不明確。規模は長軸6.3m、短軸は4.5m前後になると思われる。方位はN-62°-W。

**周壁、壁溝** 周壁は205号、267号住居との重複部では検出できない。遺存状態は東南コーナー部を比較的良好に検出する。検出できた壁高は約15cmである。壁溝は認められない。

**柱穴** 支柱は4本あるいは6本構造である。住居の中には多数のピットが認められるが、P1~P4が配置関係から見て支柱穴と認められる。中間のP5、P6も支柱穴と考えられる。P1~P4は一樣に径約30cm、深さ50~60cmである。東辺部に一對のピットが見られる(P7、P8)。ピットは共に外方向に傾きを持っている。径25cm、深さ40cm前後である。

**炉跡** 西側(奥側)2支柱穴間やや外寄りに地床炉が設けられている(F1)。地床炉は、径30cm程の範囲が火床面であり、灰層の堆積が見られる。周囲には焼土帯、炭化物の広がりが見られる。

**遺物出土状態** 覆土中より弥生土器破片が出土している。

**時期** 弥生後期第3期

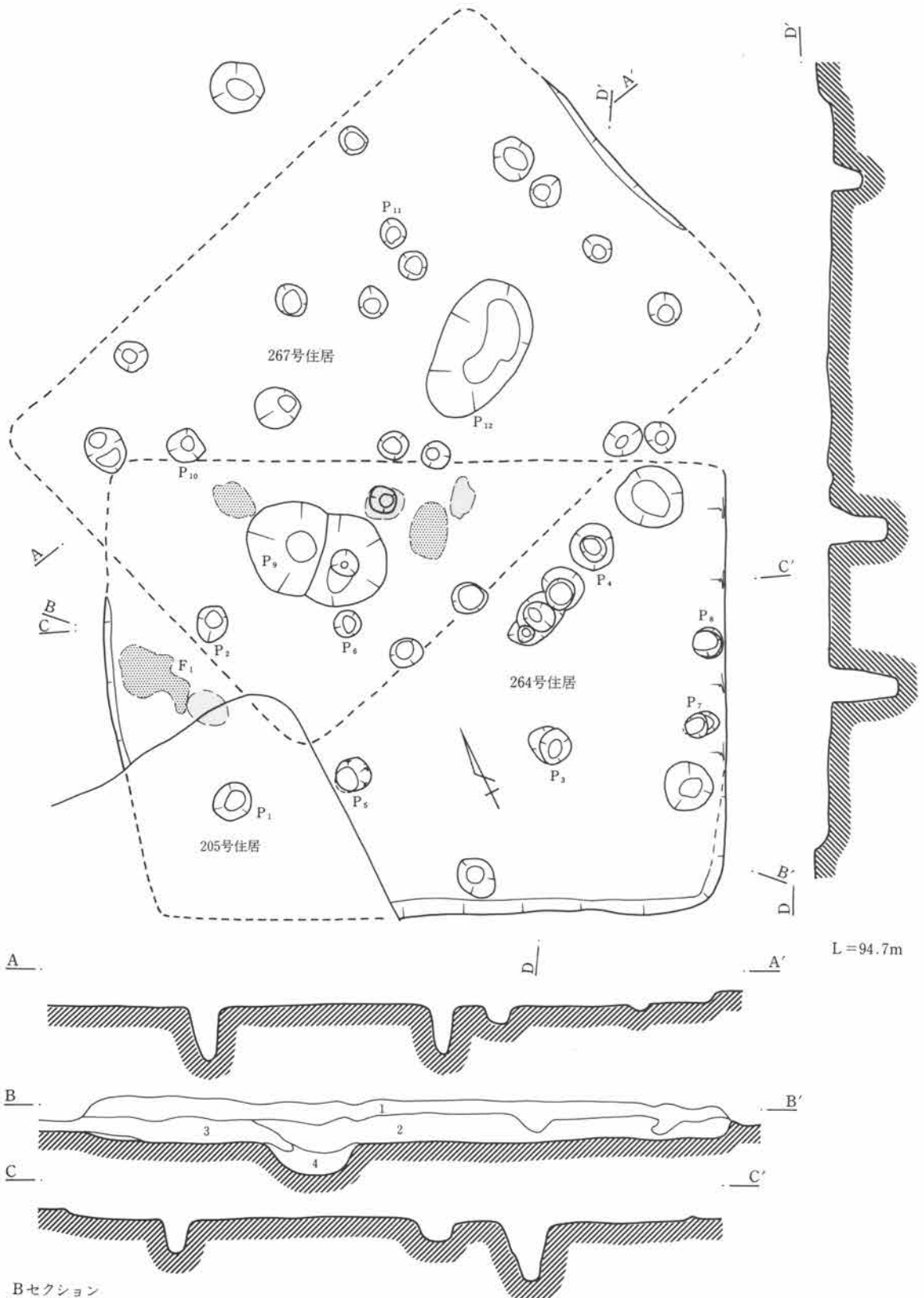
**他の遺構との関係** 南コーナー部で205号住居(古墳前期)、北半部で267号住居と重複する。267号住居との先後関係は不明。



第155図 264号住居出土遺物

第141表 264号住居出土土器観察表 (拓本)

1 壺	砂粒混入、橙色	3 甕	内面ヘラミガキ、砂粒多量に混入、にぶい橙色	4 甕	内面ナデ、砂粒多量に混入、にぶい橙色
2 甕	細砂粒混入、灰褐色			5 甕	内面ヘラナデ、砂粒混入、黒褐色



Bセクション

- 1 浅間C軽石が主体。
- 2 灰黒色 粘質土。炭化物を多量に含む。
- 3 淡褐色 硬粘質土。灰黒色土、炭化物、焼土を含む。
- 4 灰黒色 2層よりも黒味がある。

第156図 264号、267号住居

267号住居跡 (第156図)

位置 C地区住居群中央部に位置する(53-C23)。264号住居と重複する。

形状、規模、方位 形状、規模は不明。方位はN-7°-W。

周壁、壁溝 周壁の遺存状態は悪い。東辺部で一部検出するのみである。壁溝は認められない。

柱穴 支柱穴を2箇所検出する(P10、P11)。支柱は4本構造である。他の支柱穴は土壙状の掘り込みと重複している(P9、P12)。2支柱穴(P10、P11)は径約30cm、深さ55cmである。

炉跡 西側(奥側)2支柱穴の間に地床炉を設けている(F2)。径30cm程の範囲が火床面であり、焼土化している。

遺物出土状態 出土遺物は僅少である。

時期 不明。

他の遺構との関係 264号(弥生後期第3期)と重複するが、先後関係は不明。

271号住居跡 (第157図、図版48)

位置 C地区住居群東端部に位置する(38-C10)。270号住居と重複する。

形状、規模、方位 形状、規模は不明。住居の大半部を中世の溝によって失っている。方位はN-4°-E。

周壁、壁溝 周壁は残存する東部では比較的良好に検出する。検出できた壁高は約30cm。壁溝は認められない。

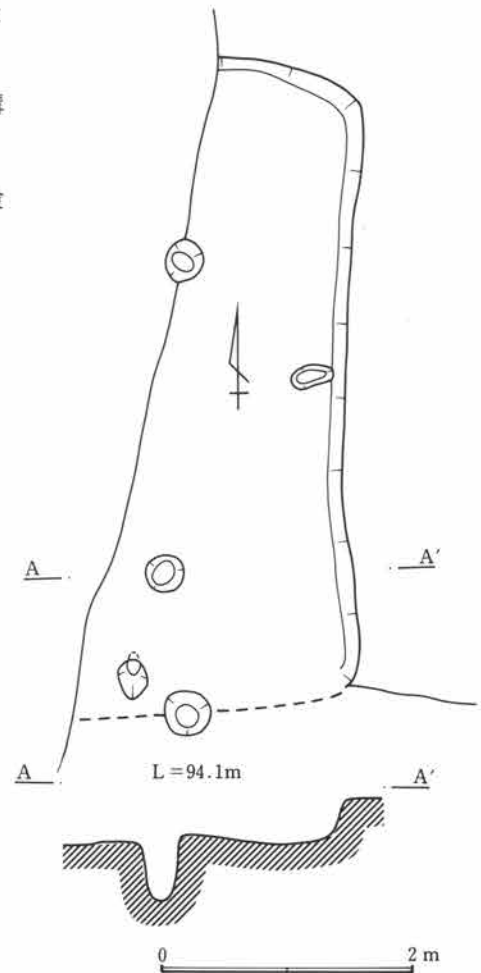
柱穴 支柱穴は2箇所検出する。支柱は4本構造と思われる。西側2支柱穴は中世の溝によって失われている。

炉跡 不明。

遺物出土状態 床面直上より弥生土器破片が数点出土している。

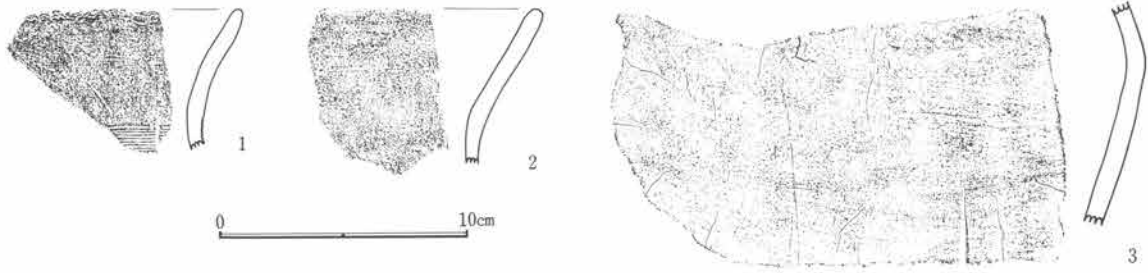
時期 弥生後期。

他の遺構との関係 南辺部で270号住居と僅かに重複する。



第157図 271号住居

6 検出した遺構、遺物



第158図 271号住居出土遺物

第142表 271号住居出土土器観察表 (拓本)

1 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、灰褐色	2 甕 中砂粒混入、黒褐色	3 大型壺 砂粒混入、淡橙色
----------------------	---------------	----------------

276号住居跡 (第159図、図版48、49)

**位置** C地区住居群の東部、大溝河岸縁辺上に位置する (40-C12)。277号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。規模は長軸6.4m、短軸4.7mを測る。方位はN-2°-E。

**周壁、壁溝** 大溝、277号住居との重複部では周壁は検出困難であったが他の部分では明確に検出する。検出できた壁高は西北部で約15cm。壁溝は認められない。

**床面** 灰黄褐色粘質土面を平坦に踏み固めている。277号住居覆土上に床面が認められる。

**柱穴** 支柱穴を4箇所検出する。4支柱穴はそれぞれ形状が一様でない。P1は径50cm、深さ66cmを測る。P2は北東コーナー方向に傾きを持っている。南側のP3、P4は長円形である。南辺部分では小ピットが集中するがこれらは出入部に伴う施設に関わるピットと思われる。

**炉跡** 北側(奥側)2支柱穴間やや外よりに地床炉を設けている(F1)。長径35cmの範囲が火床面であり焼土化している。この住居の左側方、P1、P3の間2箇所に焼土帯を見る(F2、F3)。これらも炉跡であった可能性は高い。

**遺物出土状態** 床面直上、覆土中より弥生土器破片数点出土する。

**時期** 弥生後期第3期

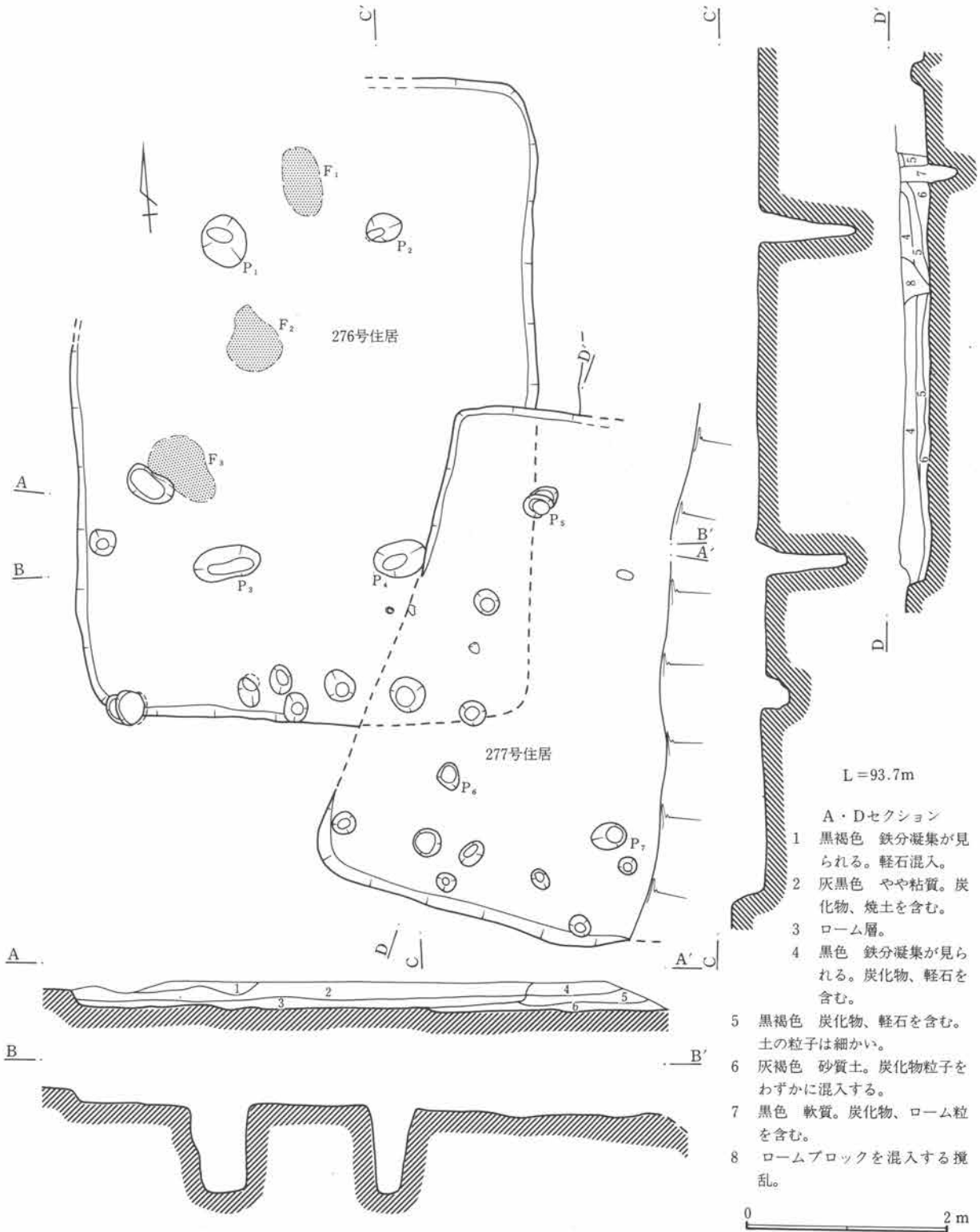
**他の遺構との関係** 277号住居(弥生後期第1期)と重複する。

第143表 276号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	高坏	脚 6.2		外面 丁寧なヘラミガキ。 内面 指ナデ。	砂粒少量混入 やや軟弱 灰褐色	脚部
2	高坏			外面 丁寧なヘラミガキ。 内面 ナデ。	砂、軽石粒混入 堅緻 淡黄色	坏下位～脚上部 外面、坏部内面 丹彩
3	高坏	脚 6.8		外面 脚上部はヘラミガキ。 内面 器面荒れている。	粗砂粒混入 堅緻 橙色	脚部

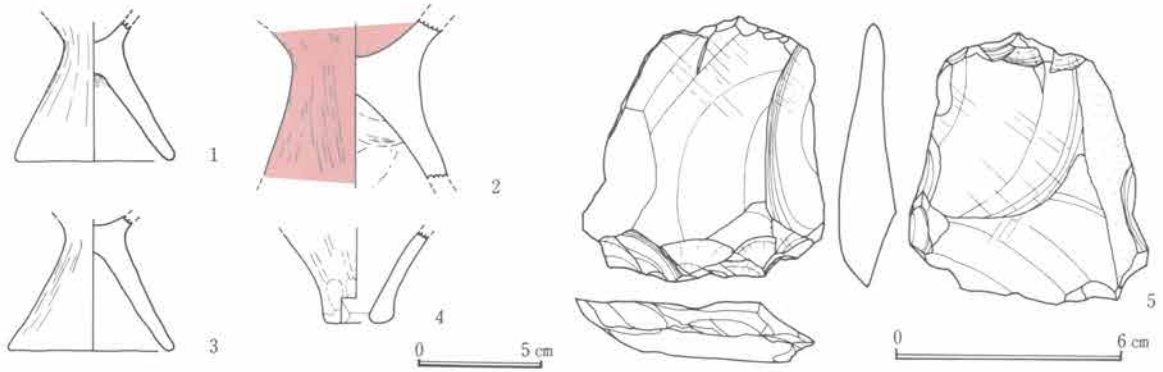


遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
4	甑	底 2.8		外面 ヘラミガキ、指オサエ。 内面 器面荒れている。	細砂粒混入 堅緻 赤褐色	底部



第159図 276号、277号住居

6 検出した遺構、遺物



第160図 276号住居出土遺物 (1)

第144表 276号住居出土石器観察表

遺物番号	名称	計測値 (mm)	石質	重量 (g)	特徴
5	横刃状石器	71.5×64.0×15.0	黒色頁岩	73.0	剥片を利用し、一側面に対し片側から打撃を加え刃部としている。



第161図 276号住居出土遺物

第145表 276号住居出土石器観察表 (拓本)

6、7 壺 砂粒混入、にぶい橙色	9 甕 中砂粒混入、褐灰色	10 甕 内面へラミガキ、砂粒混入、灰褐色
8 甕 中砂粒混入、にぶい赤褐色		

277号住居跡 (第159図、図版49)

位置 C地区住居群の東部に位置する (40-C11)。276号住居と重複する。

形状、規模、方位 長方形を呈する。規模は長軸5.6m、短軸3.8m前後になると思われる。東部は後世の溝に切られるが、支柱穴の配置関係から形状、規模を推定できる。方位はN-22°-E。

周壁、壁溝 南半部、北西コーナー部で周壁を検出する。壁高は南壁で35cm。

床面 灰黄褐色粘質土面を平坦に踏み固めている。

柱穴 支柱穴を3箇所検出する (P5~P7)。北東部の支柱穴は後世の溝により失われている。P5は後世の同形状のピットと重なっている。P6、P7は径25cm前後で深さは約40cm。

炉跡 不明。

遺物出土状態 覆土中より土器破片数点出土。

時期 弥生後期第1期

他の遺構との関係 276号住居 (弥生後期第3期) と重複する。



第162図 277号住居出土遺物

第146表 277号住居出土土器観察表 (拓本)

1 壺 外面ナデ、内面ヘラミガキ、細砂粒混入、淡橙色	3 壺 外面浮文、内面ヘラミガキ、細砂粒混入、明赤褐色	4 甕 外面ハケメ後ヘラミガキ、内面ハケメ後ヘラミガキ、細砂粒混入、褐灰色
2 壺 外面ナデ、内面ヘラミガキ、微砂粒混入、にぶい橙色		

## 281号住居跡 (第163図、図版49、50)

**位置** C地区住居群の西部に位置する(88-C33)。283号、284号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 隅丸長方形を呈する。規模は長軸6.7mを測る。短軸4.9m前後になると思われる。他の住居との重複部では住居の輪郭は不明確である。方位はN-0°。

**周壁、壁溝** 南半部、他の住居との重複部では周壁は検出できなかった。東半部では比較的良好に検出する。検出できた壁高は東辺部で約15cm。壁溝は認められない。

**床面** 床面は黄褐色ローム質土(第V層)面を平坦に踏み固めている。床面上に炭化材が散在する。火災に遭った可能性がある。

**柱穴** 支柱穴を4箇所良好に検出する(P1~P4)。一様に径40cm前後、深さ50cm前後の2段に掘り込んだ円形ピットである。

**炉跡** 北側(奥側)2支柱穴と周壁との間に地床炉を設けている(F1)。径70cmの範囲が火床面であり、焼土化している。他に東部2支柱穴間に焼土帯を検出するが(F2)、床面から浮いた状態が見られることから炉跡とは認められない。

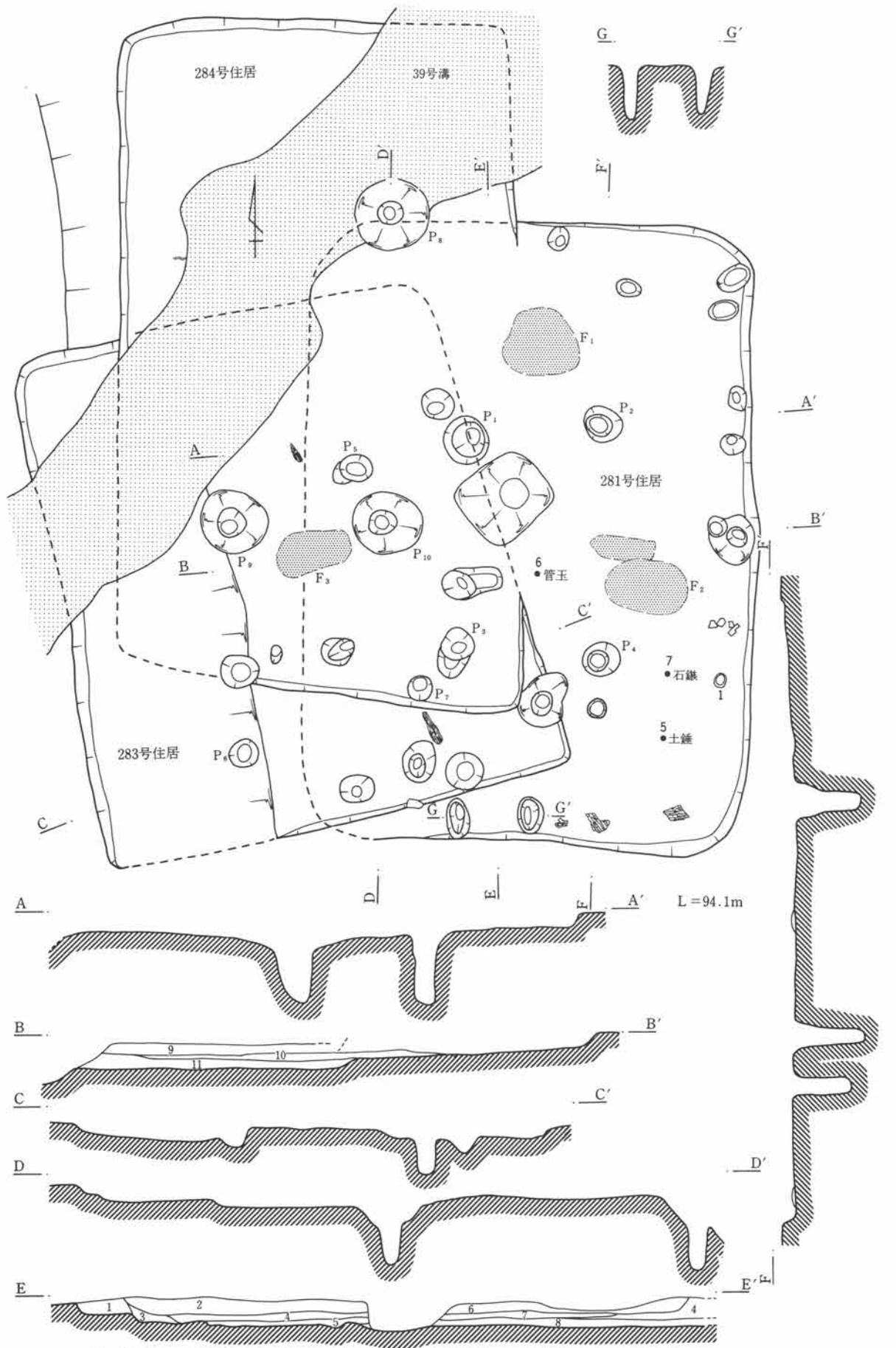
**遺物出土状態** 床面直上、覆土中より弥生土器破片を多数出土している。

**時期** 弥生後期第3期

**他の遺構との関係** 284号住居(弥生後期第3期)の覆土上に本住居の張り床面、炉跡(F1)が認められる。283号住居(古墳前期か)の張り床面、炉跡(F3)が本住居の覆土上に認められる。3軒の住居の先後関係は284号→281号→283号の順に新しくなる。

第147表 281号住居出土土器観察表

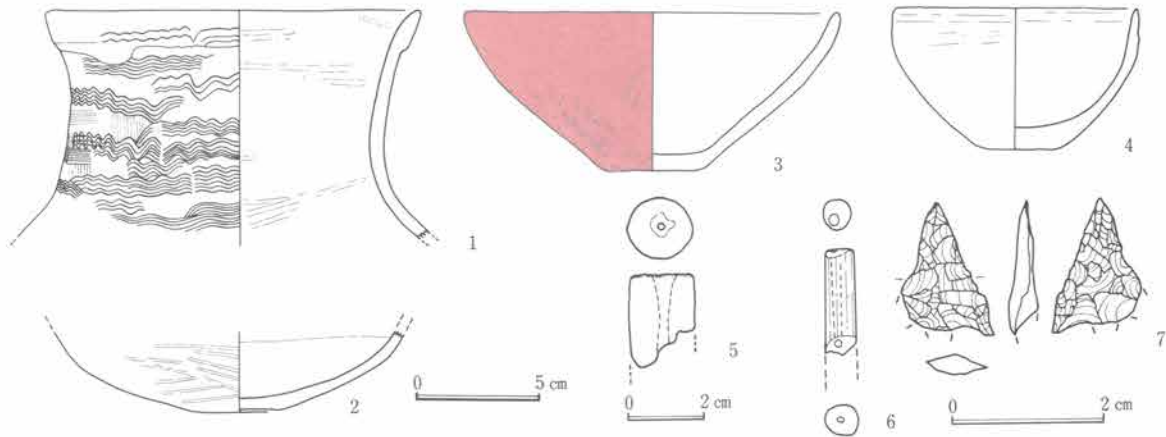
遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 15.0	折り返し口縁、口辺部は緩やかに外反する。	外面 口縁部は波状文、口辺部はハケメ後、波状文。 内面 口辺部はヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 淡橙色	口縁~頸部全周
2	壺		底面は窪み底。	外面 ヘラミガキ。 内面 ナデ。	中砂粒混入 堅緻 明赤褐色	胴下位~底部
3	鉢	口 15.2 底 4.0 高 6.3	口辺部はやや内湾する。	外面 胴部はナデ、底部はヘラミガキ、底面はヘラミガキ。 内面 ナデ。	粗砂粒混入 堅緻 赤橙色	口縁~底部%周 外面丹彩



B・Eセクション

- |                             |                                  |
|-----------------------------|----------------------------------|
| 1 暗灰褐色 黄土軽石を含む。             | 7 黒褐色 黒色灰を多量に含む。                 |
| 2 暗灰褐色                      | 8 黒褐色 硬粘質土。夾雑物少ない。               |
| 3 暗灰褐色 1層よりも黒っぽい。炭化物土器片を含む。 | 9 暗灰褐色 1層に同様。                    |
| 4 暗灰褐色 1層よりも黒っぽい。軽石、炭化物を含む。 | 10 茶褐色 硬質で粘性弱い。                  |
| 5 4層よりも、粘質灰白色ローム小粒を含む。      | 11 黒褐色 やや硬い粘質土。粘土粒子、炭化物粒子を多量に含む。 |
| 6 黄色ローム層。黒色土小ブロックを含む。       |                                  |

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
4	鉢	口 底 高 9.7 3.0 5.6	体部は内湾する。	外面 口縁部はヨコナデ、体部はナデ。 内面 口縁部はヨコナデ、体部はナデ。	中砂粒、黒色粒 混入 堅緻 橙色	口縁～底部1/2周



第164図 281号住居出土遺物 (1)

第148表 281号住居出土土製品観察表

遺物番号	名称	計測値(cm)	成形	整形	胎土・焼成	色調	備考
5	土 鉢	径 1.8	端部はやや窪んでいる。	器面が荒れている。	砂粒混入 堅緻	橙色	1/2遺存

第149表 281号住居出土土玉類観察表

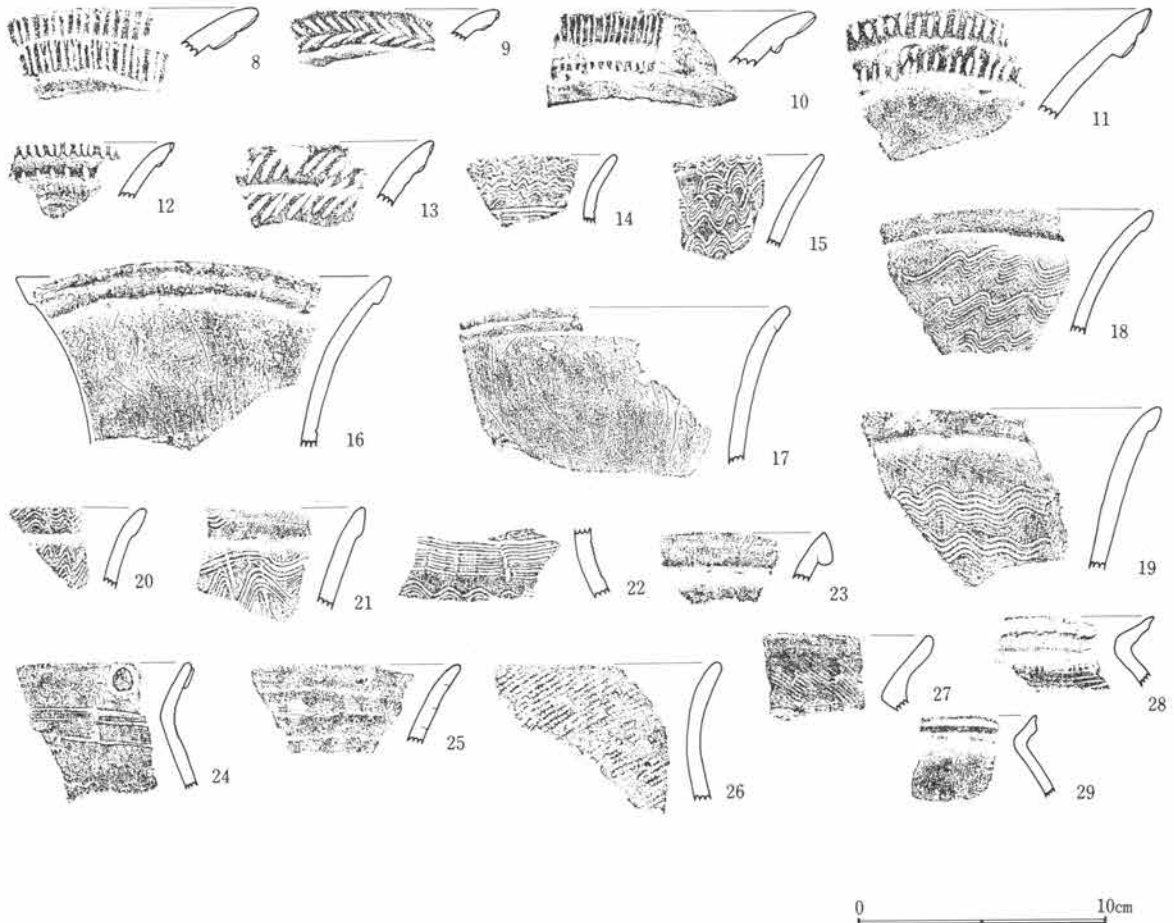
遺物番号	名称	長さ (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	成形	整形	材質 色	遺存状態 備考
6	管 玉	—	0.4	0.1	端部の切断面は不整形、研磨面は縦方向に稜を作っている。	滑沢に研磨している。	石 暗 赤 色	1/2欠失

第150表 281号住居出土石器観察表

遺物番号	名称	計測値(mm)	石質	重量(g)	特徴
7	打製石 鎌	(17.0)×(10.5)×4.0	黒曜石	0.4	両面調整の有茎鎌。二等辺三角形の鎌身を持つ。両脚から茎へ返る部分が内部にはいる。一脚及び茎部を欠く。

第151表 281号住居出土土器観察表 (拓本)

8 壺	中砂粒混入、橙色	15 甕	内面ヨコナデ、砂粒混入、褐色	22 甕	砂粒混入、にぶい褐色
9 壺	砂粒混入、橙色	16 甕	砂粒混入、橙色	23 甕	砂粒混入、にぶい橙色
10 壺	砂粒混入、にぶい褐色	17 甕	内面ヘラナデ、砂粒混入、橙色	24 甕	内面ヘラナデ、細砂粒混入、橙色
11 壺	内面ヘラナデ、細砂粒混入、橙色	18 甕	内面ヘラミガキ、砂粒混入	25 甕	内面ヘラミガキ、砂粒混入、褐色
12 壺	砂粒混入にぶい、褐色	19 甕	内面ヘラミガキ、砂粒混入、橙色	26 甕	内面(b)ヨコナデ、粗砂粒混入、橙色
13 壺	(b)刻み目、砂粒混入、橙色	20 甕	内面ヘラミガキ、砂粒混入、褐色	27 甕	ヨコナデ、砂粒混入、浅黄橙色
14 甕	内面ヘラミガキ、砂粒混入、褐色	21 甕	内面(b)ヨコナデ、砂粒混入、橙色	28 甕	内面(b)ヨコナデ、橙色



第165図 281号住居出土遺物 (2)

283号住居跡 (第163図、図版51)

位置 C地区住居群の西部に位置する(89-C34)。281号、284号住居と重複する。

形状、規模、方位 やや南北に長い方形を呈する。規模は長軸5.7m、短軸5.2mを測る。方位はN-16°-W。

周壁、壁溝 284号住居との重複部では周壁を明確に検出するのは困難であった。検出できた壁高は西辺で10cm測る。壁溝は認められない。

床面 床面は284号住居との重複部では黄褐色ローム質土ブロックの張り床面を施している。

柱穴 支柱穴は3箇所明確に検出する(P5~P7)。3支柱穴径はほぼ一様で約30cm、深さは30cm前後であるがP6はやや浅い。支柱は4本構造と思われる。北西部の支柱穴は39号溝により失われている。

炉跡 住居中央部の張り床面上に地床炉を設けている。長径80cmの範囲が火床面であり(F3)、焼土化している。炉跡は張り床面上に見られる。

遺物出土状態 出土遺物は少ない。

時期 古墳前期か

他の遺構との関係 281号、284号住居(共に弥生後期第3期)と重複する。両住居上に張り床面、炉跡を認める。先後関係は284号→281号→283号の順に新しくなる。住居北西部を39号溝(古墳中期)が切っている。

## 284号住居跡 (第163図、図版50)

**位置** C地区住居群の西部に位置する(88-C35)。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。規模は長軸7.2m、短軸4.3mを測る。方位はN-0°。

**周壁、壁溝** 周壁は39号溝との重複部では検出できない。検出できた壁高は西辺部で約20cm。壁溝は認められない。

**床面** 床面は全体的に平坦に踏み固めている。

**柱穴** 主柱穴を3箇所で見出す。3主柱穴(P8~P10)は、一様に上部がロート状に広がる円形ピットで、規模は比較的大きく径70cm、深さ70cmを測る。南辺部周壁際に一対のピットが見られる。ピットは共に外方向に傾きを持っている。径20~30cm、深さ50cm前後である。出入部に伴う施設に関わるピットと思われる。

**炉跡** 不明。39号溝により失われたと思われる。

**遺物出土状態** 覆土中より弥生土器破片が出土している。

**時期** 弥生後期第3期

**他の遺構との関係** 281号、283号住居と重複する。両住居とも本住居の覆土上に造られている。先後関係は284号→281号→283号の順に新しくなる。



第166図 284号住居出土遺物

第152表 284号住居出土土器観察表(拓本)

1 壺 中砂粒混入、橙色、内面丹彩	3 甕 外面(b)波状文、内面ナデ、砂粒混入、 にぶい褐色	5 甕 内面ナデ、砂粒混入、にぶい褐色
2 壺 内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい褐色	4 甕 LR単節縄文、粗砂粒混入、橙色	

## 286号住居跡 (第167図)

**位置** C地区住居群西端部に位置する(99-C30)。288号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。やや台形状である。規模は短軸3.9mを測る。長軸は5.0m前後になると思われる。西辺部は河川により失われているが西南コーナー部のカーブが僅かに見られることや、主柱穴の配置関係から形状、規模を把握できる。方位はN-73°-E。

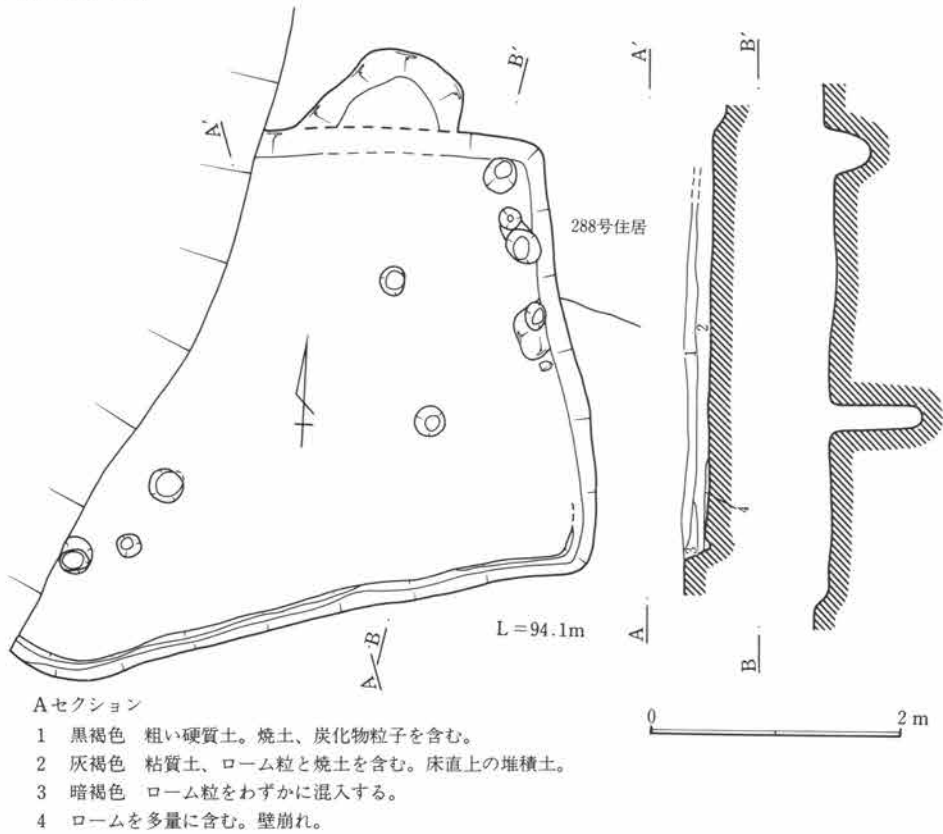
**周壁、壁溝** 周壁は、比較的良好に見出す。検出できた壁高は南辺部で約20cm。壁溝は南周壁下に認められる。

**床面** 床面は平坦に踏み固められている。

**柱穴** 主柱穴を3箇所で見出す。径25~30cm前後。3主柱穴の深さは60cm前後である。東側周壁際に一対のピットが見られる。ピットは径15~20cm、深さ15~38cm前後である。これは出入部に伴う施設に関わるピットと思われる。

**炉跡** 不明。検出できない。

6 検出した遺構、遺物

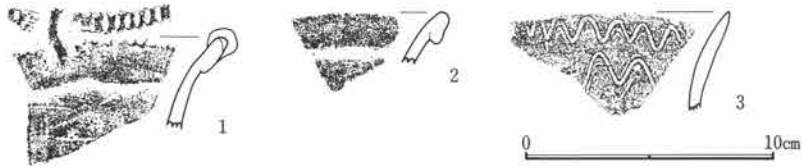


第167図 286号住居

遺物出土状態 覆土中より弥生土器破片が数点出土。

時期 弥生後期第3期

他の遺構との関係 288号（弥生中期後半）と重複する。



第168図 286号住居出土遺物

第153表 286号住居出土土器観察表（拓本）

1 壺 内面ヨコナデ、砂粒混入、にぶい褐色	2 壺 砂粒混入、にぶい橙色	3 甕 細砂粒混入、礫含む、褐色
-----------------------	----------------	------------------

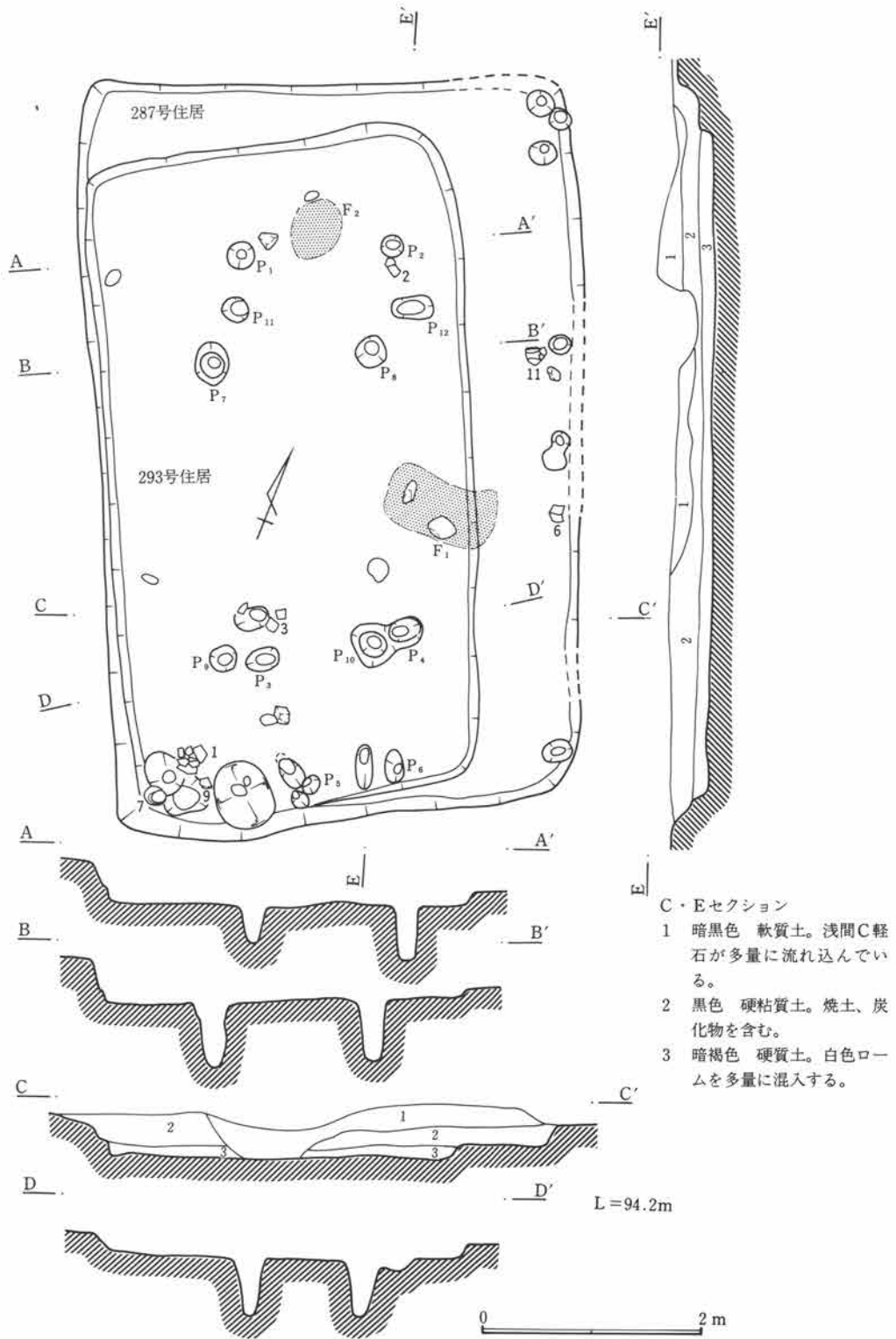
287号住居跡（第169図、図版51、52）

位置 C地区住居群西部に位置する（92-C30）。293号住居と全体的に重なっている。



形状、規模、方位 長方形を呈する。規模は長軸6.7m、短軸4.5mを測る。方位はN-21°-W。

周壁、壁溝 周壁は部分的に後世の溝による攪乱を受けているが全体的に良好に検出する。検出できた壁



第169図 287号、293号住居

高は東辺で約25cm。壁溝は認められない。

**床面** 293号住居との重複部は灰白色粘土ブロックを主体とする強い張り床面を構築している。

**柱穴** 支柱穴を4箇所で見出している(P1～P4)。4支柱穴は明確に張り床面精査時に確認されている。径15～25cm。深さは最も深いもので50cm。P4は特に浅く約10cmである。南周壁際に一對のピットが見られる。ピットは共に外方向に傾きを持っている。径20cm前後、深さ33～49cm前後。なお、P11、P12も本住居の支柱穴であったろうと思われる。支柱の建て替えによるものか。

**炉跡** 東部(右側部)2支柱穴間、やや外寄りに地床炉を設けている(F1)。長径1mの範囲が火床面であり焼土化している。

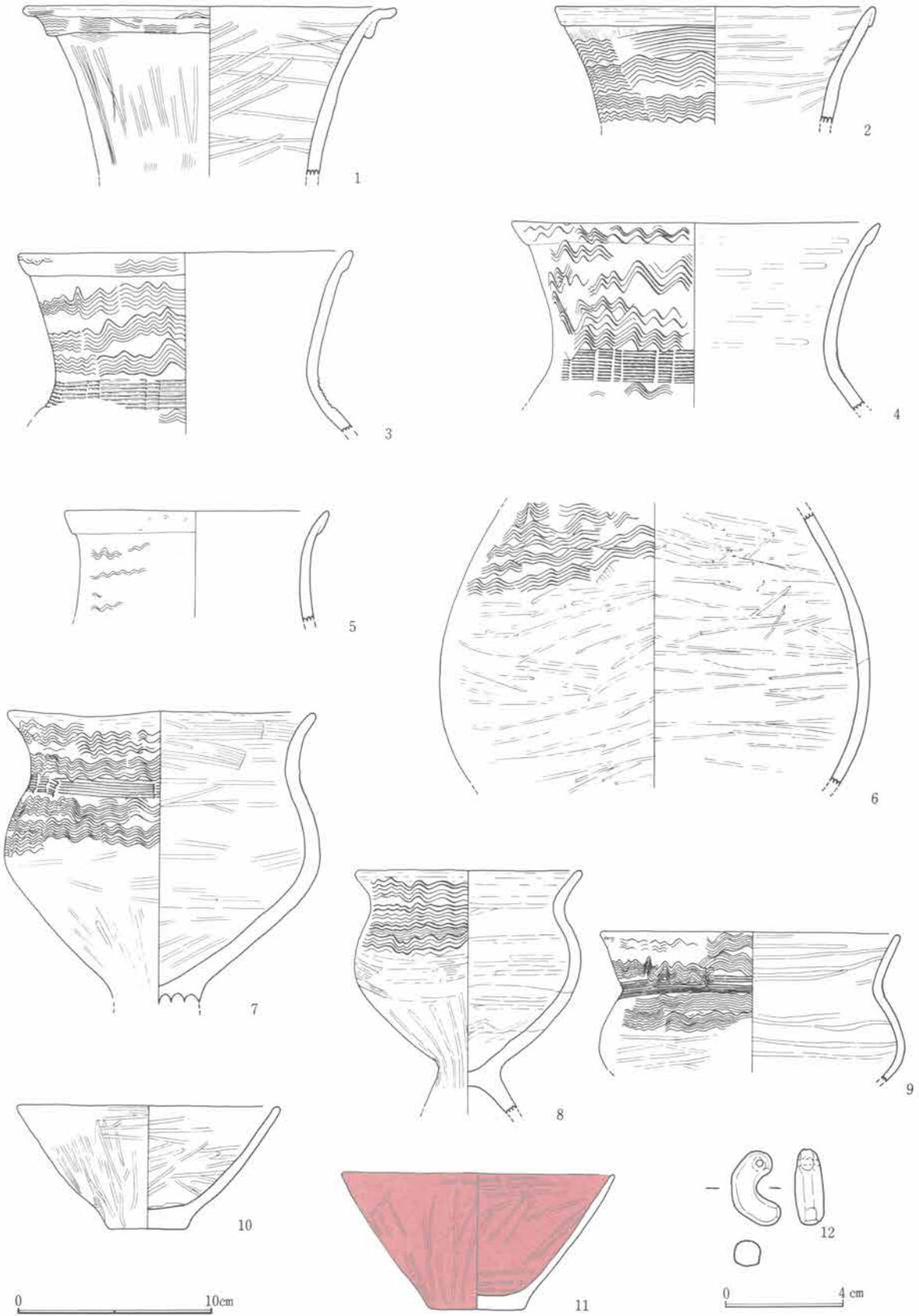
**遺物出土状態** 張り床面直上より弥生土器大形破片が多数出土している。

**時期** 弥生後期第3期

**他の遺構との関係** 本住居は293号住居上に張り床面を構築して造られる。本住居は293号住居の拡張住居の可能性が大きい。231号土壌と東辺部で重複する。本住居が231号土壌の覆土を切っている。本住居の方が新しい。

第154表 287号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 19.2	折り返し口縁、口辺は緩やかに外反する、口縁部は外側に屈曲する。	外面 口縁部は波状文、口辺部はハケメ後、ヘラミガキ。 内面 口辺部はヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 灰白色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周
2	甕	口 16.4	折り返し口縁、口辺は比較的直状に外傾する。	外面 口縁部はヨコナデ、口辺部はハケメ後波状文。 内面 ロ～頸部はヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい赤褐色	口辺のみ $\frac{1}{2}$ 周
3	甕	口 17.2	折り返し口縁、口辺はやや外反する。	外面 口辺部は波状文、頸部は2連止め簾状文。 内面 器面剥落著しい。	細砂粒混入 堅緻 橙色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周
4	甕	口 18.9	折り返し口縁、口辺は僅かに外反する。	外面 口縁から頸部は櫛描波状文、頸部は3連止め簾状文。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 褐色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周
5	甕	口 13.3	折り返し口縁、口縁径は胴部に比べ小さい。	外面 口辺～頸部は櫛描波状文。 内面 丁寧なヘラミガキ。	砂粒混入 やや軟弱 灰褐色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周 内外面共に荒れている。
6	甕			外面 胴上部はハケメ後波状文、胴部はヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい黄橙色	胴部 $\frac{1}{2}$
7	台付甕	口 15.7 胴 16.2	口辺部は緩やかに外反する。	外面 口縁部はヨコナデ、口辺部は波状文、頸部は等間隔止め簾状文、胴上部は波状文、胴～底部にヘラミガキ。 内面 口辺部はハケメ後ヨコナデ、頸～底部はヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 赤褐色	口縁～底部全周 脚台部欠損
8	台付甕	口 11.8	口辺部はほぼ直状に外反する。	外面 口縁部はヨコナデ、ロ～胴上部は波状文、胴部はハケメ後ヘラミガキ。底～脚台部はヘラミガキ。 内面 口辺部はヨコナデ、頸～底部はヘラミガキ。	中砂粒混入 堅緻 にぶい褐色	口縁 $\frac{1}{2}$ 周 頸～底部 $\frac{1}{2}$



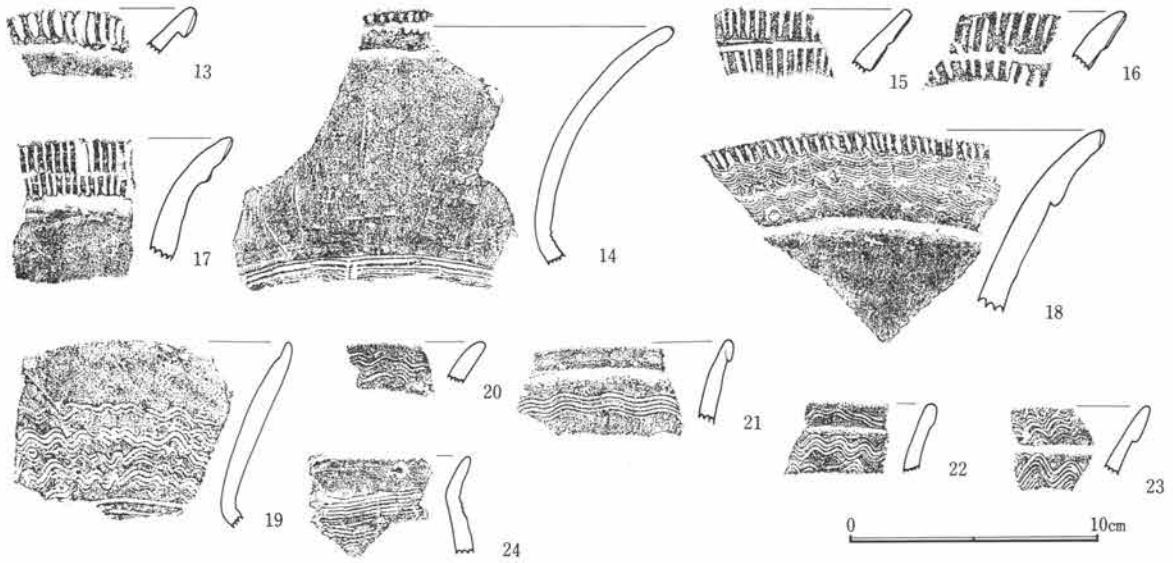
第170図 287号住居出土遺物 (1)

6 検出した遺構、遺物

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
9	台付甕	口 15.4	口辺部は直状に外反する。	外面 口辺部は波状文、頸部は8本単位の← 簾状文、胴上部は波状文、胴部はヘラミガキ。 内面 口縁部はヨコナデ、口～胴部はヘラミガキ。	細砂粒混入 やや堅緻 灰白色	口縁～胴中位 $\frac{1}{2}$ 周
10	鉢	口 13.6	口辺部はやや内湾する。	外面 ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	体～底部 $\frac{1}{2}$
11	鉢	口 14.0 底 5.0 高 6.9	口縁～底部はほぼ直状に外反する。	外面 ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 灰白色	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 周 内外面共に丹彩

第155表 287号住居出土玉類観察表

遺物番号	名称	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	成形	整形	材質	遺存状態備考
12	勾玉	2.6	0.9	0.85	0.2	頭、尾端部は丸い、孔はやや斜方に穿っている。	ヘラミガキ。	土	完形



第171図 287号住居出土遺物 (2)

第156表 287号住居出土土器観察表 (拓本)

13 壺 内面ヨコナデ、細砂粒混入、橙色	18 壺 内面ヘラミガキ、細砂粒混入、にぶい橙色	20 甕 砂粒混入、橙色
14 壺 細砂粒混入、橙色	19 甕 内面ヘラミガキ、細砂粒混入、にぶい橙色	22 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、灰褐色
15 壺 砂粒多量に混入、にぶい黄橙色		23 甕 砂粒混入、にぶい橙色
16 壺 細砂粒多量に混入、にぶい黄橙色		24 台付甕 砂粒混入、褐色
17 壺 内面ヘラミガキ、砂粒混入、橙色		

## 293号住居跡 (第169図、図版52)

**位置** C地区住居群の西端部に位置する(92-C30)。283号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。規模は長軸6.2m、短軸3.5mを測る。方位はN-21°-W。

**周壁、壁溝** 周壁は全周検出する。検出できた壁高は287号住居の床面下10cm。西壁は上半部は287号住居の周壁である。僅かに段状に検出するが、本住居の周壁は段から下15cm。

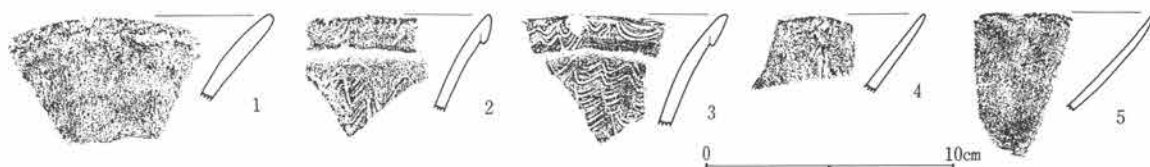
**柱穴** 主柱穴を4箇所良好に検出する(P7~P10)。径30~40cm、深さ30~40cmである。

**炉跡** 北西周壁より50~60cm内側に地床炉を設けている。径50cmの範囲が火床面であり、火床面は僅かに窪み焼土化している。縁辺には長さ15cm程の長細い川原石を据えている。

**遺物出土状態** 本住居の覆土は浅く、287号住居の粘土ブロックを主体とした張り床客土である。この覆土中からの出土遺物は少ない。弥生土器破片が数点出土している。

**時期** 弥生後期第3期

**他の遺構との関係** 287号住居の張り床面下に検出する。本住居は287号住居の拡張前の住居と思われる。



第172図 293号住居出土遺物

第157表 293号住居出土土器観察表(拓本)

1 壺 中砂粒混入、浅黄橙色	3 甕 内面へラミガキ、砂粒混入、にぶい褐色	4 鉢 砂粒混入、橙色、内外面丹彩
2 甕 細砂粒混入、にぶい褐色		5 高坏 砂粒混入、橙色

## 289号住居跡 (第173図、図版52)

**位置** C地区住居群の西部に位置する(77-C33)。290号、302号住居と重複する。

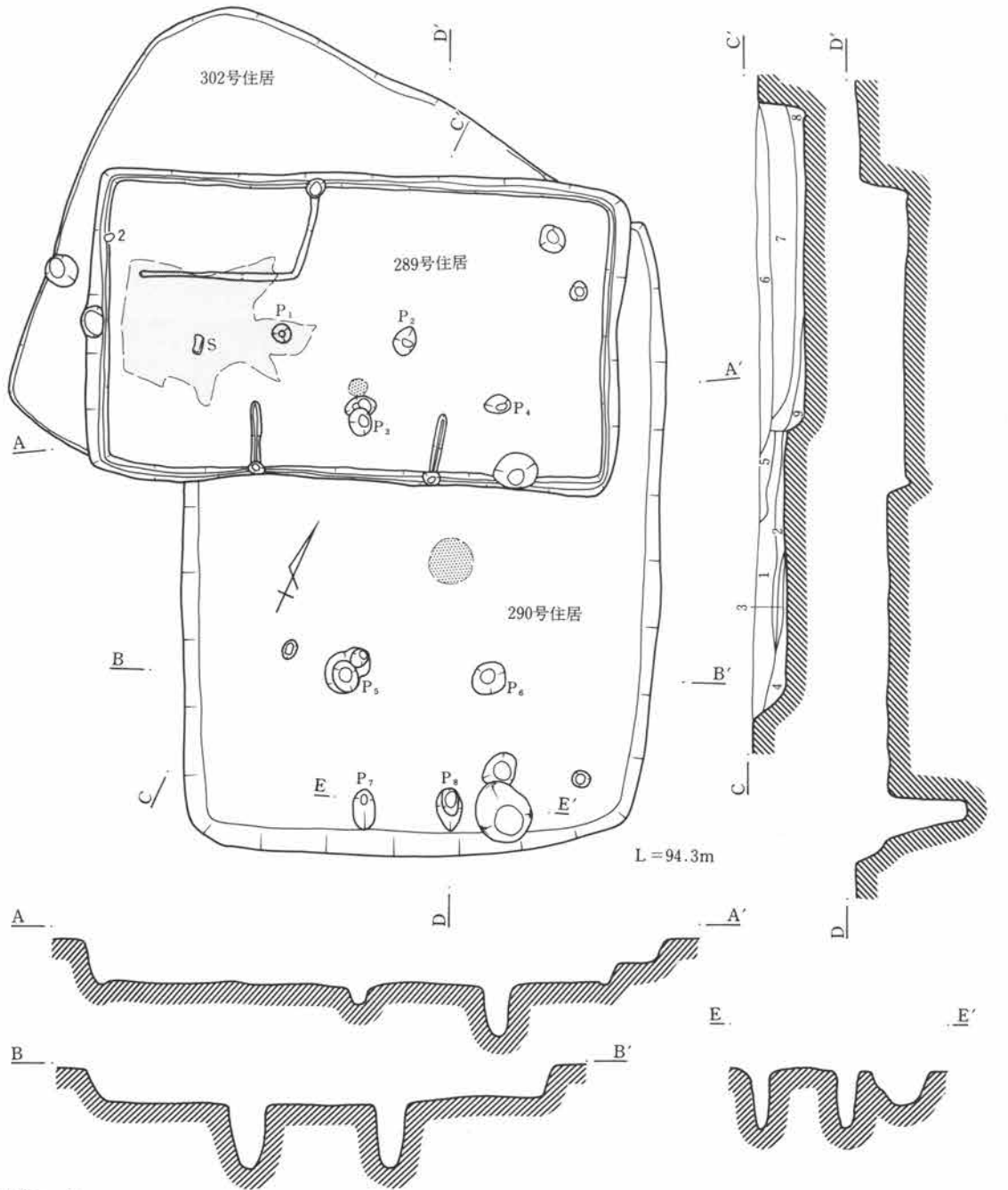
**形状、規模、方位** 長方形を呈する。特に縦長である。規模は長軸4.8m、短軸2.7mを測る。方位はN-68°-E。

**周壁、壁溝** 周壁は全体的に良好に検出する。検出できた壁高は北辺で約40cmである。周壁の立ち上がり角度は79度である。壁溝は全周する。幅は約10cm。

**床面** 床面は黄褐色ローム質土(第V層)面を平坦に踏み固めている。西半部には炭化物、灰が広範囲に見られる。西コーナー部、南辺部には幅5~7cmの浅い溝が認められる。これは住居内を区画する間仕切りの痕跡とも思われる。

**柱穴** 住居内には数個の小ピットが認められるが明確に主柱穴を特定できない。住居中央部のP1、P2が主柱穴になる可能性が大きい。2箇所のピットは径約10cm、深さ10cmである。

**炉跡** 西部に炭化物、灰の広がりが見られるが、火床面は明確には認められない。細長い川原石を据えたあたりが火床部と思われる。



Cセクション

- |  |   |
|--|---|
| <p>1 黒色 焼土、炭化物粒子を含む。290号住居覆土(以上2～5層も同じ)。</p> <p>2 灰層。炭化物を含む。住居廃棄後近い時期に流れ込んだもの。</p> <p>3 炭層。住居廃棄後近い時期に流れ込んだ。</p> <p>4 暗褐色 軟質土。焼土、炭化物を含む。</p> <p>5 暗褐色 ローム粒を多量に含む。</p> | <p>6 黒色 浅間C軽石を多量に含む。289号住居覆土(以上7～9層も同じ)。</p> <p>7 黄褐色 ローム粒を多量に含む。</p> <p>8 灰褐色 やや粘質土。焼土、ローム粒を若干含む。</p> <p>9 灰色 粘質土。焼土、炭化物を含む。</p> |
|--|---|

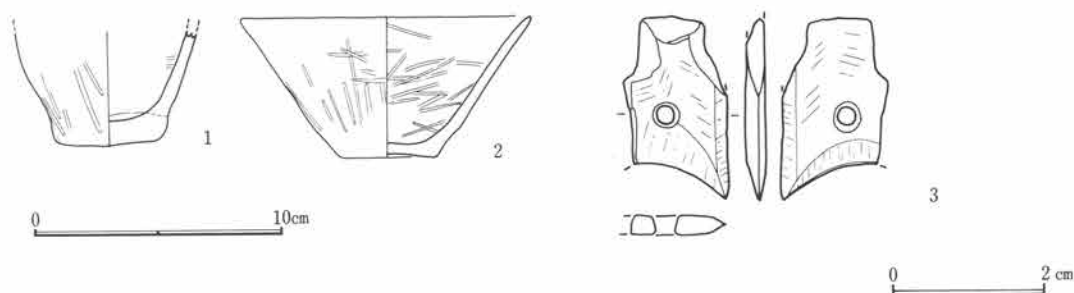
0 2 m

第173図 289号、290号、302号住居

遺物出土状態 覆土中より弥生土器破片が多数出土している。

時期 弥生後期第3期

他の遺構との関係 290号住居（弥生後期）の北半部を切っている。本住居の方が新しい。302号住居との先後関係不明。



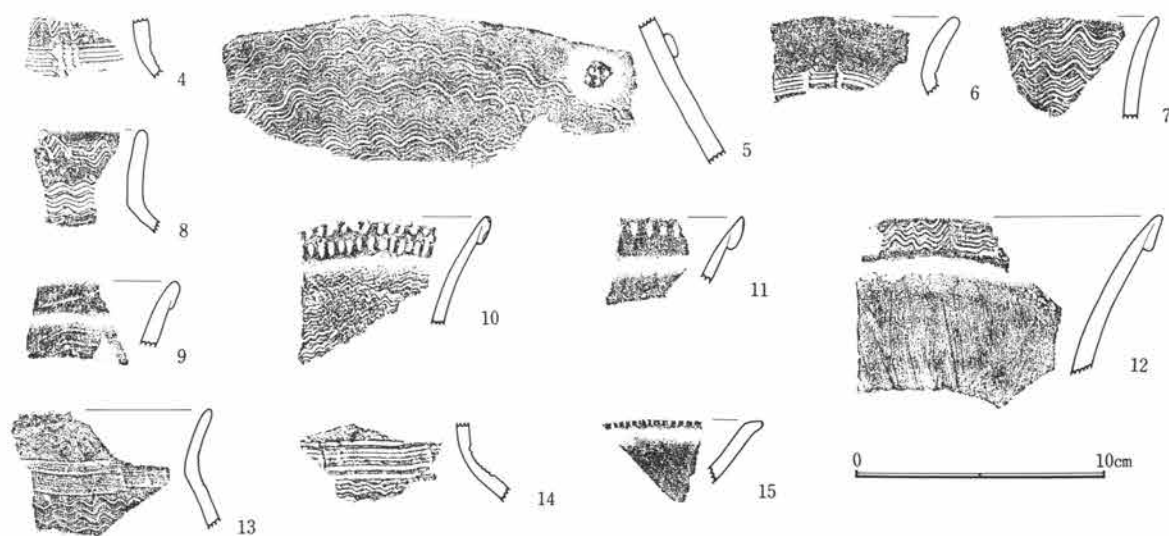
第174図 289号住居出土遺物 (1)

第158表 289号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	底 4.3		外面 ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 明褐色	底部
2	鉢	口 11.7 底 3.8 高 5.6	口辺部はほぼ直状に 外反する。	外面 ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい黄褐色	体～底部 $\frac{1}{2}$

第159表 289号住居出土石器観察表

遺物番号	名称	計測値 (mm)	石質	重量 (g)	特徴
3	磨製石鎌	(24.0) × 13.0 × 2.5	珪質準片岩	1.0	無茎で扁平に磨きあげたもの。先端部及び一脚を欠く。基部にわたくりがはいる。下部に両面から円孔がかけられる。



第175図 289号住居出土遺物 (2)

6 検出した遺構、遺物

第160表 289号住居出土土器観察表 (拓本)

4 壺 内面ヘラナデ、砂粒混入、にぶい橙色	8 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい褐色	13 台付甕 内面ヘラナデ、砂粒混入、にぶい橙色
5 壺 砂粒多量に混入、にぶい橙色	9 甕 中砂粒混入、にぶい橙色	14 台付甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、黒褐色
6 甕 中砂粒混入、にぶい褐色	10 甕 細砂粒混入、にぶい褐色	15 高坏 砂粒混入、にぶい橙色、内外面丹彩
7 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、橙色	11 甕 砂粒多量に混入、橙色	
	12 甕 内面ヘラナデ、砂粒混入、橙色	

290号住居跡 (第173図、図版52)

位置 C地区住居群の西部に位置する(77-C32)。289号住居と重複する。

形状、規模、方位 長方形を呈する。北部は289号住居に切られるが北東コーナー部分が残存しており形状が把握できる。規模は長軸5.5m、短軸4.4mを測る。方位はN-30°-W。

周壁、壁溝 289号住居との重複部以外は全体的に良好に検出する。検出できた壁高は西周壁で、約40cmである。立ち上がり角度は73度を測る。壁溝は認められない。

床面 床面は黄褐色ローム質土(第V層)面を平坦に踏み固めている。

柱穴 支柱穴を4箇所検出する(P3~P6)。南側P5、P6の径は約30cm、深さ50~60cmである。南側壁際に一对のピットが見られる。ピットは共に外方向に傾きを持っている。およそ長径25cm、深さ50cmである。2ピットの中心間は90cmであり、これらは出入部に伴う施設に関わるピットと思われる。

炉跡 住居中央部に地床炉を設けている。径40cm程の範囲が火床面であり、焼土化している。

遺物出土状態 出土遺物は少ない。覆土中より弥生土器数点出土している。

時期 弥生後期か

他の遺構との関係 289号住居(弥生後期第3期)に北西部を切られている。289号住居より古い。

第161表 290号住居出土玉類観察表

遺物番号	名称	長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	成形	整形	材質	遺存状態備考
1	勾玉	2.0	1.0	0.1	全体に短かい、胴部断面形はほぼ丸い。尾部は尖り気味。	全体にヘラミガキ、部分的に滑沢である。	土	完形

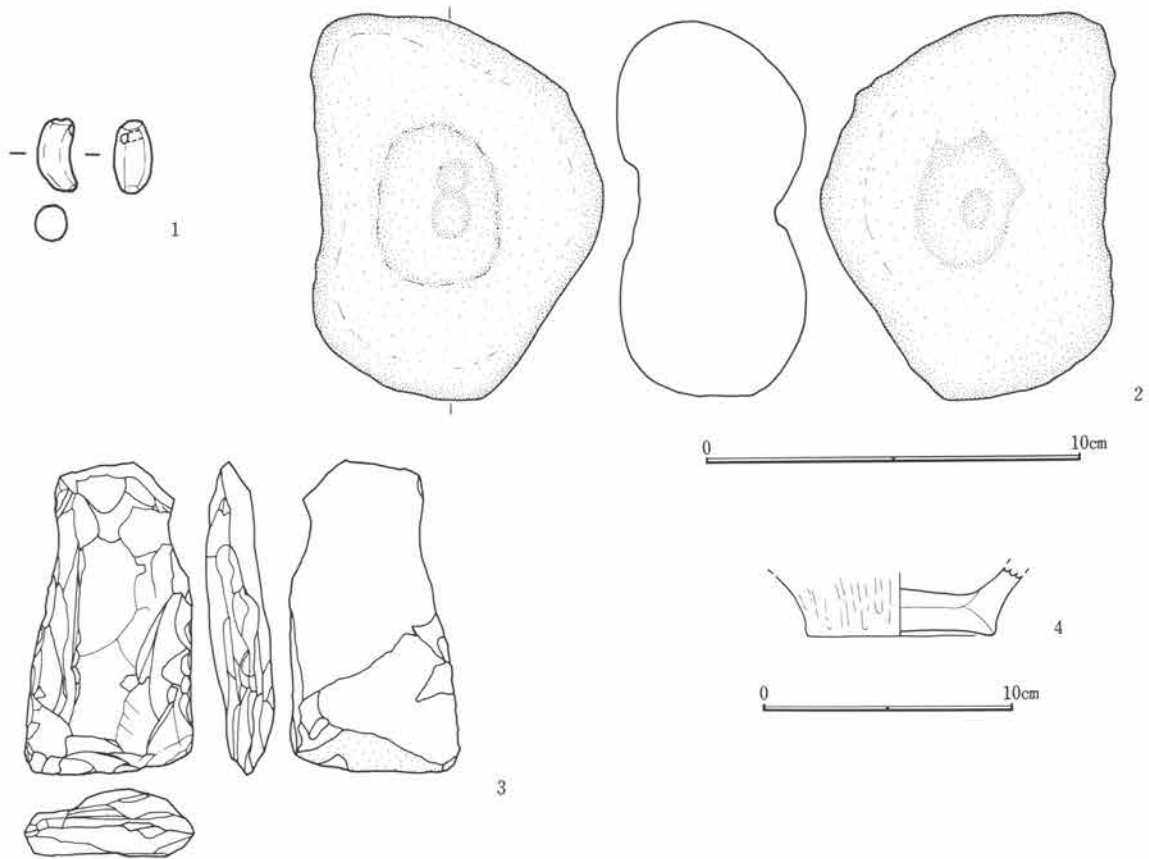
第162表 290号住居出土石器観察表

遺物番号	名称	計測値(mm)	石質	重量(g)	特徴
2	凹石 石	99.0×79.5×53.0	輝石安山岩	476.8	不定形の厚みのある礫を使用し、表、裏、及び一側面に凹をもつ。上下側面には、わずかではあるが敲打痕が認められる。
3	打製石斧	82.5×44.0×15.0	黒色頁岩	68.1	両面加工であるが片面が欠落しているため細部は不明。刃部は片側からのみ調整を行い片刃状となっている。

第163表 290号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
4	壺	底 7.5	底面は凹面をなす、接合痕は明瞭。	外面 ヘラミガキ。 内面 ナデ。	砂粒少量に混入 堅緻 灰褐色	底部





第176図 290号住居出土遺物

302号住居跡 (第173図)

位置 C地区住居群の西部に位置する(77-C35)。289号住居と大きく重なる。

形状、規模、方位 隅丸長方形を呈する。遺存状態は悪い。住居の東南部、289号住居との重複部は輪郭不明。規模は長軸不明、短軸は4.3mを測る。方位はN-0°。

周壁、壁溝 周壁の遺存状態は悪い。確認できた壁高は非常に浅い。壁溝は認められない。

床面 床面は平坦に踏み固められている。

柱穴 不明。検出できない。

炉跡 不明。

遺物出土状態 弥生土器小破片を数点出土するのみである。

時期 弥生後期～古墳前期

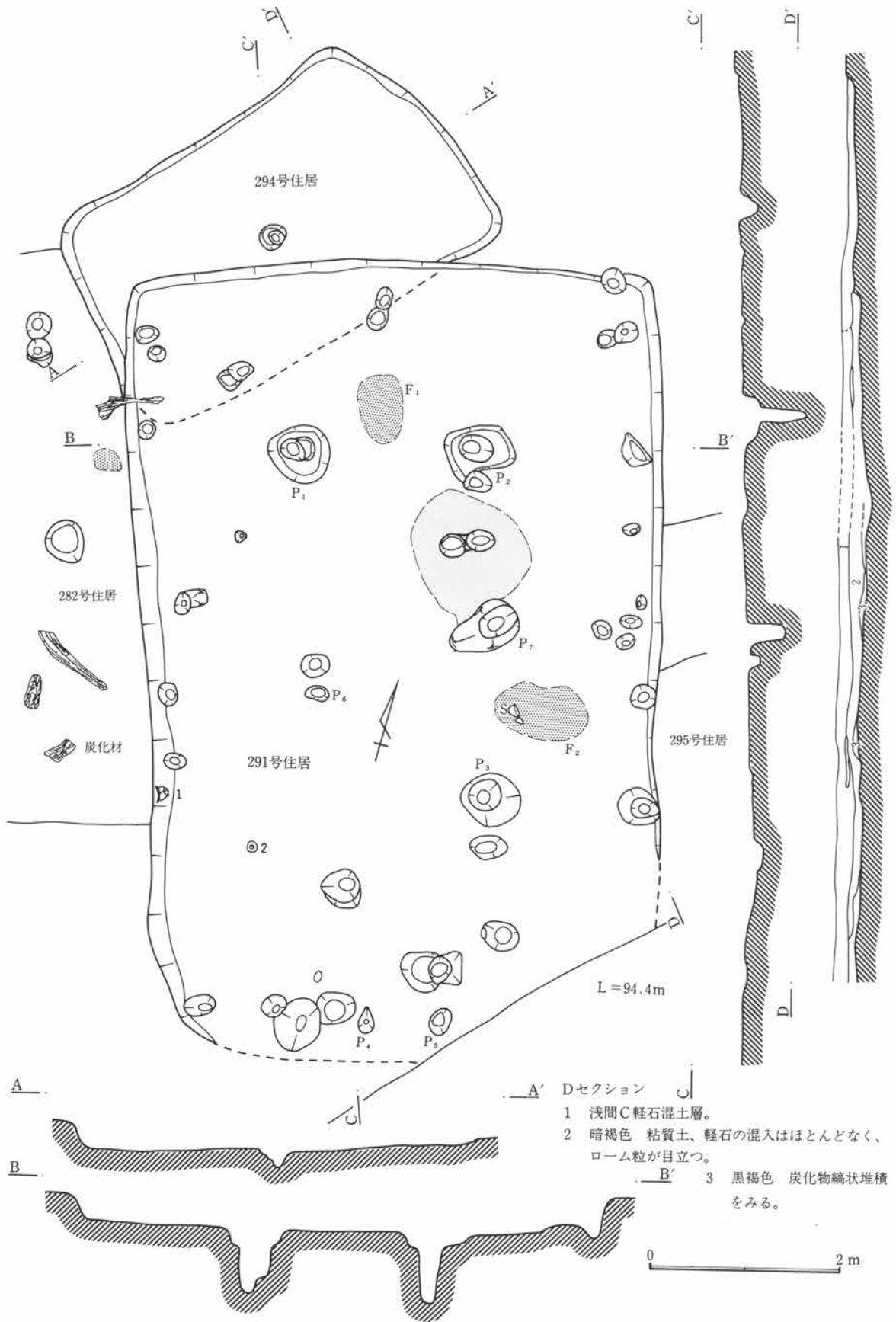
他の遺構との関係 289号住居跡と重複するが、先後関係は不明。

291号住居跡 (第177図、図版53)

位置 C地区住居群の西部に位置する(74-C31)。282号、294号、295号住居と重複する。

形状、規模、方位 長方形を呈する。規模は長軸7.9m、短軸5.4mを測る。方位はN-17°-W。

周壁、壁溝 南辺部では不明瞭であるが他は全体的に良好に検出する。壁土は暗褐色粘質土(第IVb層)。



第177図 291号、294号住居

検出できた壁高は西辺で約20cm。壁溝は認められない。

**床面** 床面は黄褐色ローム質土（第V層）面を堅く、平坦に踏み固めている。

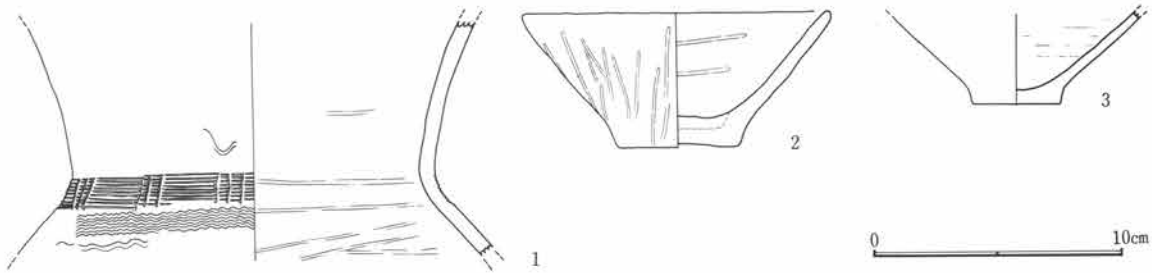
**柱穴** 支柱穴を4箇所良好に検出する（P1～P3、P7）。支柱は6本構造と思われる。西南部では精査にもかかわらず支柱穴は明確に検出することができなかった。4支柱穴は一様に2段に掘り込まれており、規模は比較的大きく、上端部径が約60cm、深さ60cm前後である。南辺部で一对のピットが見られる（P4、P5）。長径25cm、深さ23～35cmで、2柱穴中心間60cmを測る。これらのピットは出入部に伴う施設に関わるピットと思われる。又東及び西周壁際には小ピット列を検出する。これらは周壁の防護施設に関わるものと思われる。

**炉跡** 北側（奥側）2支柱穴間に地床炉を設けている（F1）。長径70cmの範囲が火床面であり、焼土化している。火床面は浅く窪み、焼土面上には灰の堆積が厚く認められる。この他東側（右側部）2支柱穴間に地床炉を設けている（F2）。径90cmの範囲が火床面であり、焼土化している。小礫を傍らに据えている。支柱穴（P2）と中間ピット（P7）との間に灰と焼土が入り交じった層が、厚さ2～3mmで広範囲に認められる。

**遺物出土状態** 床面直上より弥生土器破片が多数出土している。

**時期** 弥生後期第3期

**他の遺構との関係** 294号（弥生後期第3期）、282号、295号住居（共に古墳前期）は本住居の覆土上に造られている。



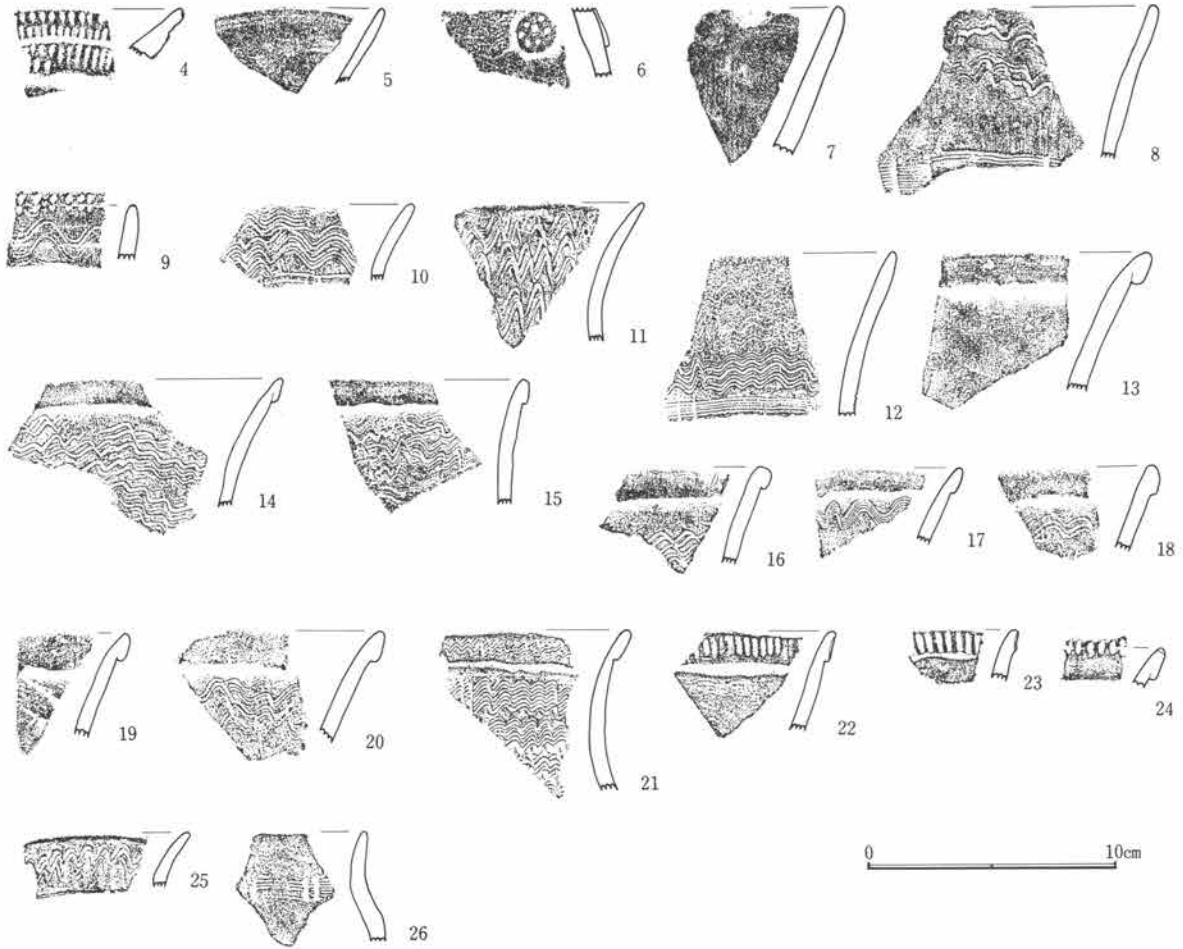
第178図 291号住居出土遺物 (1)

第164表 291号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕			外面 頸部は3連止め←簾状文、波状文。 内面 ロ～頸部はヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にふい赤褐色	口辺～頸部 $\frac{1}{2}$
2	鉢	口 12.4 底 5.0 高 5.4	口縁はほぼ直状に外反する。	外面 ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 やや堅緻 橙色	口辺 $\frac{1}{4}$ 、底部 $\frac{3}{4}$
3	鉢	底 3.6		外面 体部はヘラナデ、底部はヘラケズリ。 内面 ナデ。	中砂粒混入 堅緻 にふい橙色	胴～底部 $\frac{1}{2}$

第165表 291号住居出土土器観察表(拓本)

4 壺 中砂粒混入、橙色	12 甕 砂粒混入、灰褐色	21 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい 橙色
5 壺 砂粒混入、橙色、内外面丹彩	13 甕 砂粒混入、黄褐色	22 甕 細砂粒混入、橙色
6 壺 砂粒混入、にぶい橙色	14 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい 褐色	23 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、黒褐色
7 甕 内面(b)ヨコナデ、砂粒混入、にぶい 橙色	15 甕 砂粒混入、にぶい橙色	24 甕 砂粒混入、にぶい橙色、内面丹彩
8 甕 砂粒混入、橙色	16 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、灰褐色	25 台付甕 内面ナデ後ヘラミガキ、砂粒混 入、褐色
9 甕 (a)刻み目、砂粒混入、橙色	17 甕 砂粒混入、にぶい褐色	26 台付甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、灰 褐色
11 甕 内面ヘラナデ、砂粒混入、にぶい褐 色	18 甕 砂粒混入、にぶい橙色	
	20 甕 砂粒混入、にぶい橙色	



第179図 291号住居出土遺物 (2)

294号住居跡 (第177図、図版53)

位置 C地区住居群の西部に位置する(73-C33)。291号、282号住居と重複する。

形状、規模、方位 長方形を呈する。規模は長軸4.2m、短軸2.6mを測る。方位はN-43°-E。

周壁、壁溝 周壁は291号住居との重複部東南辺では検出は困難であった。他では良好に検出する。検出できた壁高は西南辺で約20cm。壁土は暗褐色粘質土(第IVb層)。壁溝は認められない。

床面 床面は黄褐色ローム質土(第V層)面を平坦に踏み固めている。

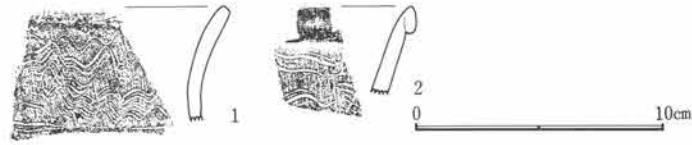
**柱穴** 住居内中央部円形ピットが認められる他には本住居に確実に伴うピットは認められない。中央のピットは径25cm、深さ25cmで比較的浅い。このピットが主柱穴であった可能性を考慮する必要があるだろう。

**炉跡** 不明。検出できない。

**遺物出土状態** 出土遺物は少ない。覆土中より弥生土器破片が数点出土している。

**時期** 弥生後期第3期

**他の遺構との関係** 291号住居の覆土上に造られている。291号住居よりも新しい。



第180図 294号住居出土遺物

第166表 294号住居出土土器観察表 (拓本)

1 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、橙色	2 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい褐色
---------------------	------------------------

### 297号住居跡 (第182図)

**位置** C地区住居群の西部に位置する(84-C31)。296号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。住居を東西に39号溝が貫いている。39号溝の北において検出した輪郭と南の輪郭がやや齟齬をきたしている。同一住居でない可能性もある。これを同一住居として見るなら、規模は長軸9.3m、短軸5.8mを測る。方位はN-19°-W。

**周壁、壁溝** 周壁は西辺部で良好に検出する。検出できた壁高は約20cm、壁溝は認められない。

**床面** 床面は堅く踏み固められた面を検出する。床面上には炭化物、焼土、灰の広がりが目立って見られる。火災に遭ったと思われる。

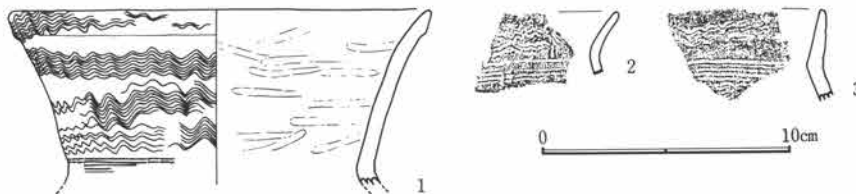
**柱穴** 主柱穴を2箇所検出する(P1、P2)。径は30~40cm、深さは60cm前後。P1とP2の中間部に柱穴と思われるピットが検出される。主柱は6本構造か。又周壁際には多数の小ピットが連なってみられる。

**炉跡** 不明。

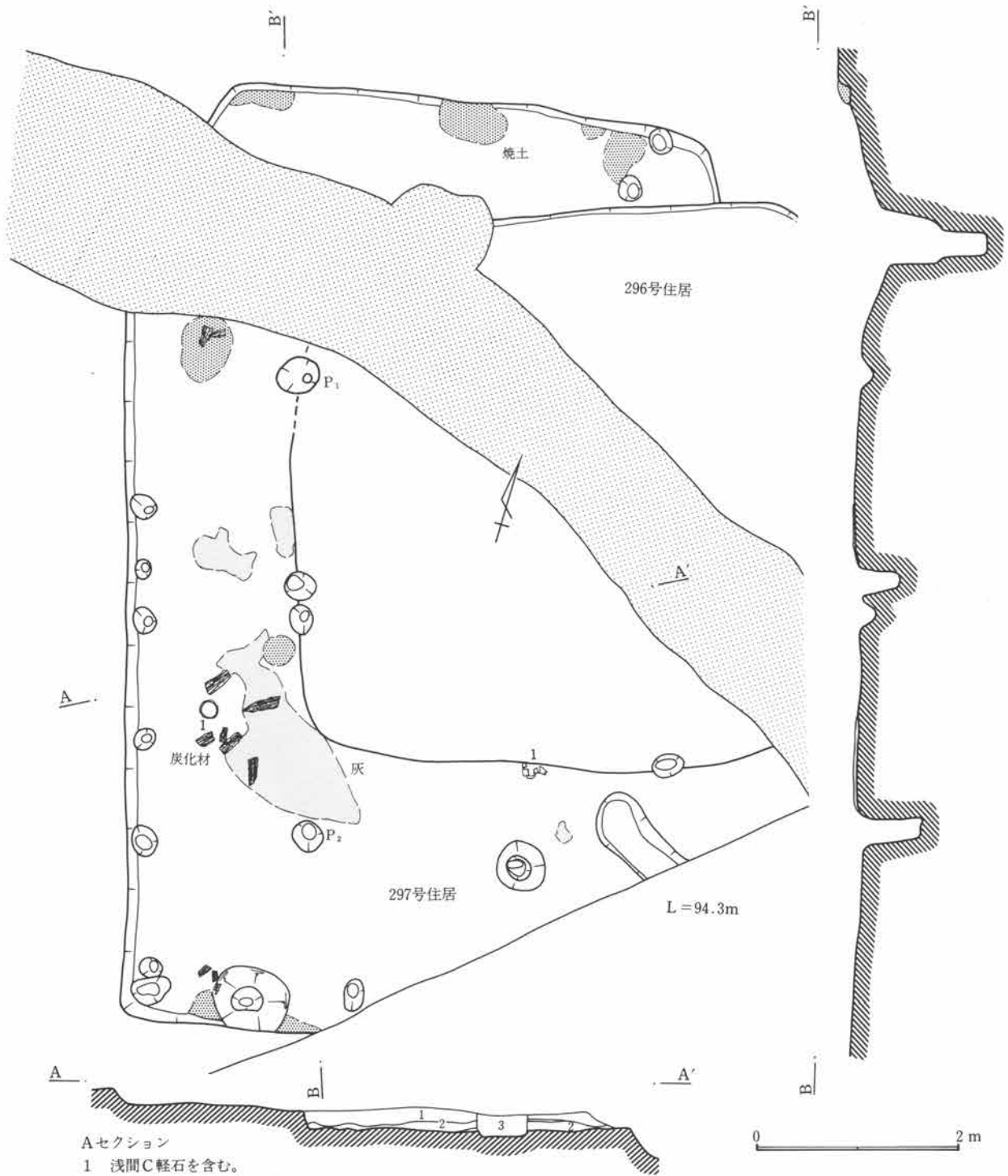
**遺物出土状態** 出土遺物は比較的少ない。床面直上より、大形の弥生土器破片が数点出土している。

**時期** 弥生後期第3期

**他の遺構との関係** 296号住居(古墳前期)と重複する。



第181図 297号住居出土遺物



第182図 297号住居

第167表 297号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 17.0	折り返し口縁、口辺はやや外反する。	外面 口辺部は波状文、頸部は3連止め←籐状文。 内面 口辺部はヘラミガキ。	粗砂粒混入 堅緻 橙色	口辺～頸部

第168表 297号住居出土土器観察表 (拓本)

2 甕 細砂粒混入、にぶい橙色	3 台付甕 砂粒混入、赤褐色
-----------------	----------------

## 299号住居跡 (第183図、図版54)

**位置** C地区住居群の西部に位置する(80-C30)。303号、300号と重複する。

**形状、規模、方位** 不明確。住居の東半部は調査区域外であり、住居の全体像は不明であるが、支柱穴の配置関係、炉跡の位置より、住居形状は長方形になるかと思われる。規模は不明。方位はN-9°-W。

**周壁、壁溝** 西辺から西北コーナーにかけて周壁を検出する。300号住居との重複部では検出できない。検出できた壁高は北周壁で15cm。壁溝は検出できない。北西コーナー付近には幅10cm程にL字形に溝を検出している。溝の性格については不明である。

**床面** 床面は黄褐色ローム質を強く踏み固めている。やや凹凸が目立つ。床面上には炭化物、灰、炭化材が散在する。本住居は火災に遭った可能性が大きい。

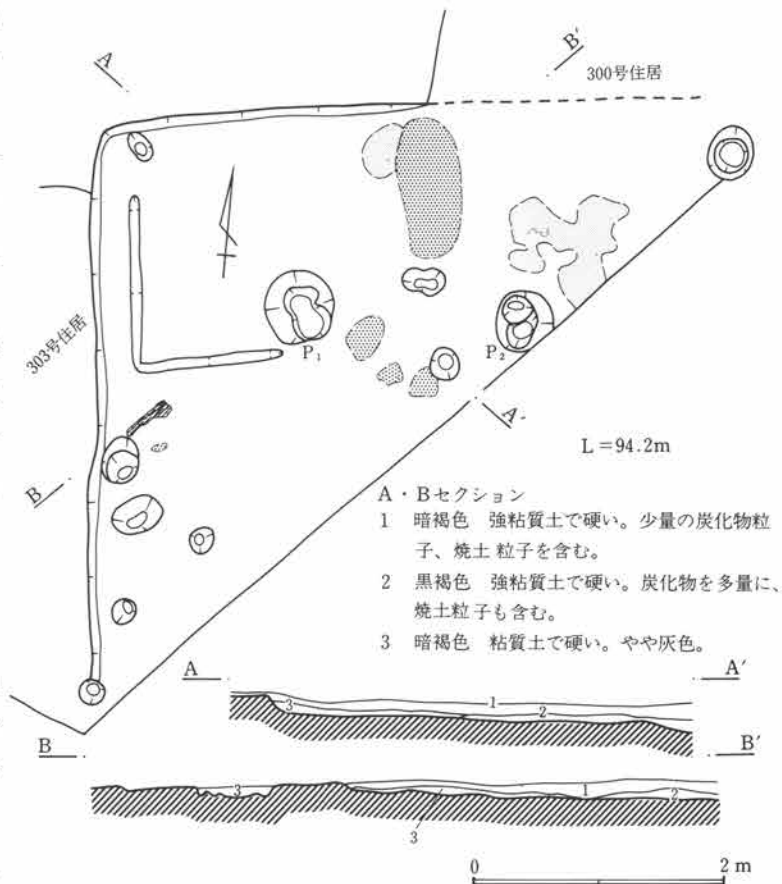
**柱穴** 支柱穴を2箇所を検出する(P1、P2)。北側の支柱穴になると思われる。2支柱穴は共に径40cm程で、2支柱穴とも2個のピットが連なっている。これは立て替えがあったことによるものと思われる。

**炉跡** 北側2支柱穴と周壁の間に地床炉を設けている。火床面は北周壁際まで長く1m近く長円形に延びている。

**遺物出土状態** 覆土中より弥生土器、及び古式土師器破片が多数出土している。

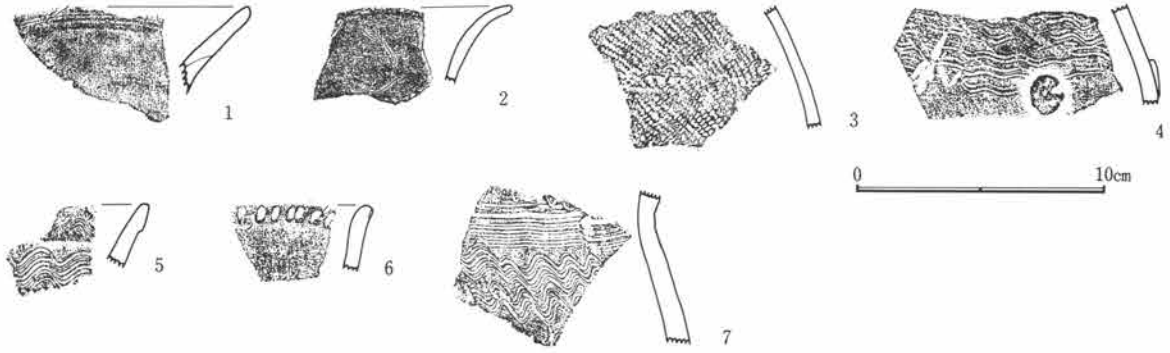
**時期** 弥生後期第3期か

**他の遺構との関係** 西辺部で303号住居(弥生中期後半)を切っている。東半部で300号住居(古墳前期)と重複しており、床面レベルは本住居の方が僅かに低く、本住居の炉跡が300号住居との重複部にて残存している。



第183図 299号住居

6 検出した遺構、遺物



第184図 299号住居出土遺物

第169表 299号住居出土土器観察表 (拓本)

1 壺 内面(b)ヨコナデ、細砂粒混入、浅黄色	3 壺 細砂粒混入、にぶい橙色	6 甕 内面へラミガキ、中砂粒混入、灰褐色
2 壺 内面へラミガキ、細砂粒混入、赤褐色、内外面丹彩	4 壺 中砂粒混入、明褐色	7 甕 内面へラミガキ、細砂粒混入、にぶい橙色
5 甕 内面へラミガキ、細砂粒混入、にぶい橙色		

(3) 古墳時代前期の住居跡

16号住居跡 (第185図、図版54)

**位置** C地区住居群の西南端部にある(93-C28)。住居の東南部は大半が調査区域外にある。北には292号住居が隣接し西北部で287号住居と部分的に重複している。

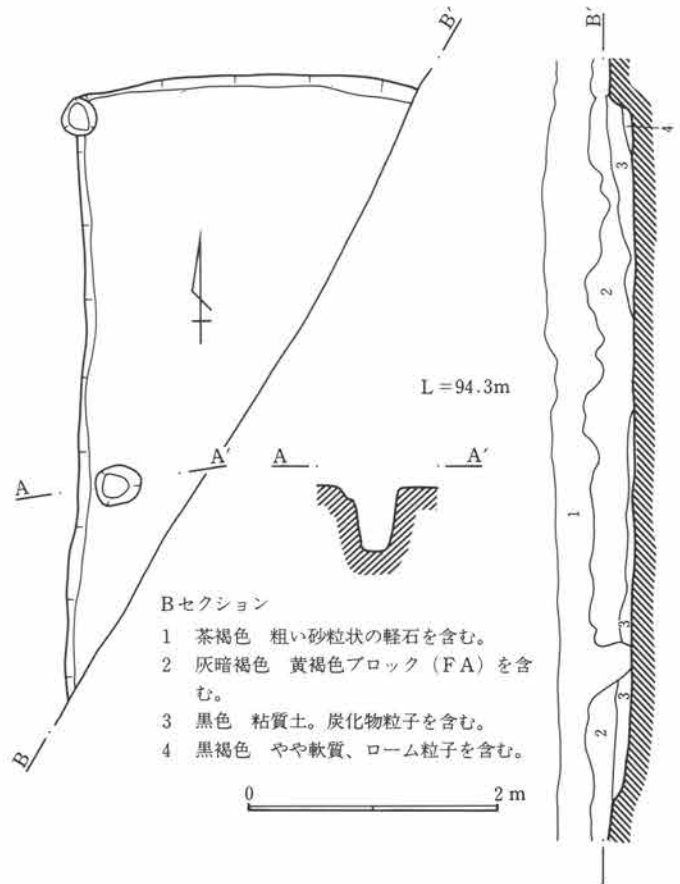
**形状、規模、方位** 大半が調査区域外にあって全体の形状は把握できないが、長方形あるいは方形になるものと思われる。規模は不明。方位はN-0°。

**周壁、壁溝** 周壁は、確認できた壁の高さは15cm、壁土は黒色粘質土(第IV層)である。

**床面** ローム質土(第V層)で、比較的凹凸の目立つ軟弱な面を検出している。

**柱穴** 支柱穴は不明確であるが、周壁下に2箇所ピットあり。西側周壁下中央部には径36cm、深さ55cm程、西北コーナー部には径30cm、深さ34cmのピットがある。

**炉跡** 床面上中央部付近にわずかな焼土の痕跡を見るが炉跡の確認はできなかった。

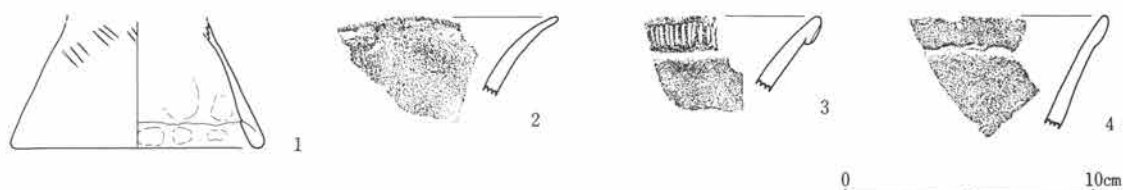


第185図 16号住居



遺物出土状態 覆土上より古式土師器破片が数点出土している。

時期 古墳前期



第186図 16号住居出土遺物

第170表 16号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	S字状口縁甕	脚 10.2	器壁は薄い。	外面 ナデ後ハケメ。 内面 指オサエ。	細砂粒混入。 堅緻 にぶい黄橙色	脚下半部破片

第171表 16号住居出土土器観察表 (拓本)

2 壺 外面(b)ヨコナデ、内面へラミガキ、細砂粒混入、橙色	3 壺 外面(a)刻み目、内面(b)ヨコナデ、砂粒混入、にぶい橙色	4 甕 砂粒混入、にぶい赤褐色
--------------------------------	-----------------------------------	-----------------

### 26号住居跡 (第187図、図版55)

位置 C地区住居群の西部に位置する(75-C35)。104号、107号住居と重複する。

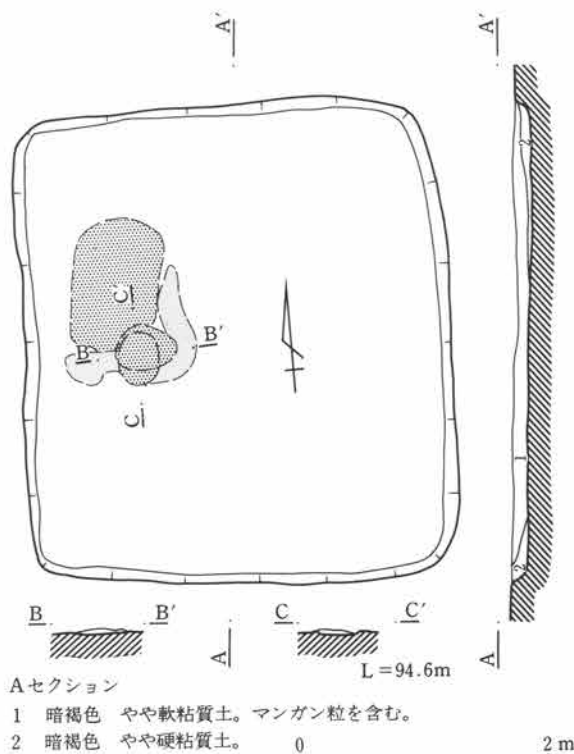
形状、規模、方位 隅丸長方形を呈する。長軸3.8m、短軸3.5mを測る。方位はN-2°-E。

周壁、壁溝 周壁は四辺で良好に検出する。検出できた壁高は4辺とも約18cm。壁溝は認められない。

床面 床面の遺存状態は良好であった。床面はローム質土を堅く踏み固めており、面は小さな凹凸が見られるが平坦である。特に炉跡の周囲は黒色灰の広がりがみられる付近は著しく堅く踏み固められた状態が見られた。

柱穴 主柱穴は検出できない。

炉跡 炉跡は地床炉であり、住居中央部やや西よりに認められる。径40cm程の範囲が著しく赤褐色に焼けている。炉跡の周囲の焼土粒と黒色灰の広がりは特に北に長く伸びており、その広がりの



第187図 26号住居

6 検出した遺構、遺物

中央部、炉跡の北50cmの辺りには焼骨の細片が集中して出土している。

**遺物出土状態** 床面上より古式土師器破片が数点出土した。西側周壁下よりS字状口縁甕の口縁部破片などが出土している。

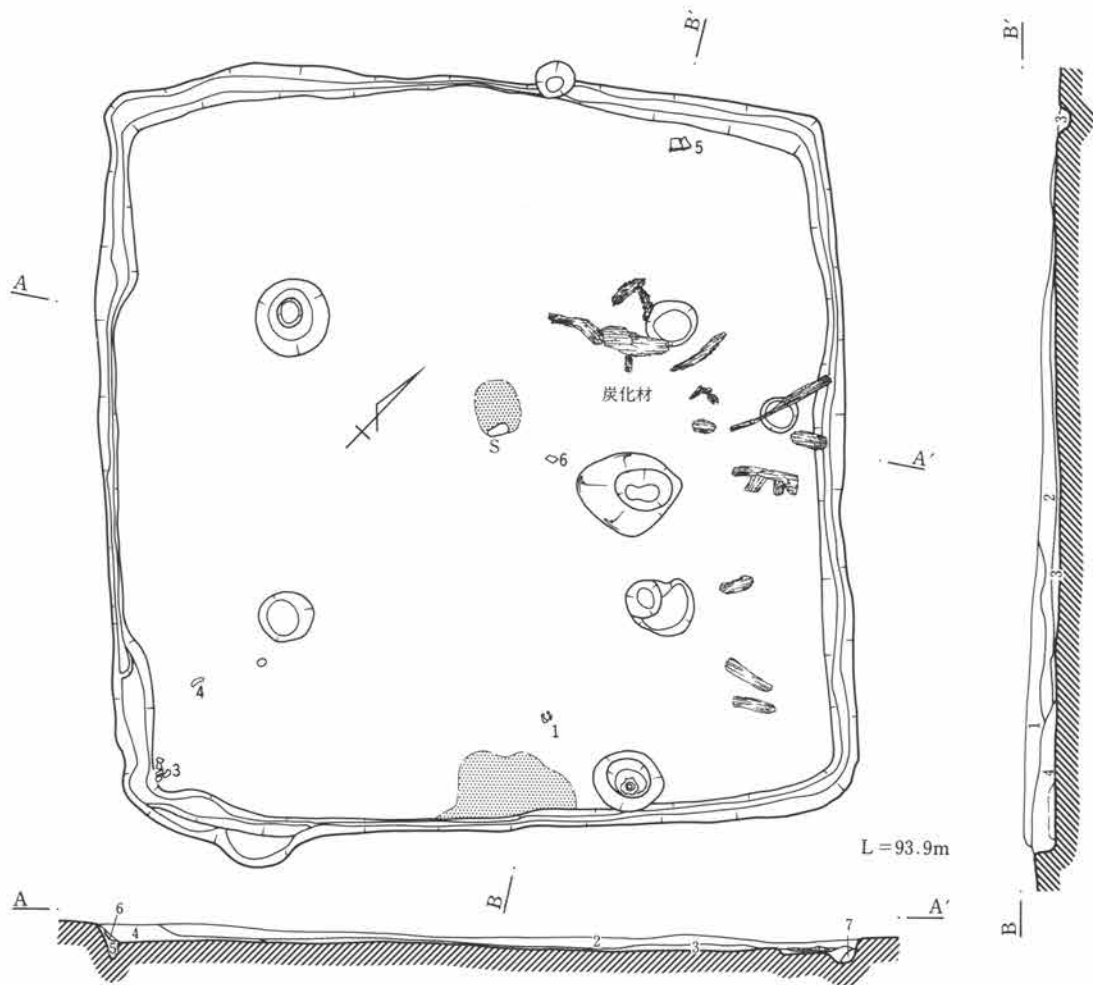
**時期** 古墳前期

**他の遺構との関係** 104号住居（弥生後期第3期）、107号住居（弥生後期）と重複する。

70号住居跡（第188図、図版55、56）

**位置** C地区住居群の西部に位置する(69-C41)。西に84号住居、北に72号、98号住居、東南に97号、101号住居がある。

**形状、規模、方位** 隅丸方形を呈する。北側コーナー部はやや形が歪んでいる。規模は北西-東南に6.1m、



A・Bセクション

- |                                 |                       |
|---------------------------------|-----------------------|
| 1 黒褐色 炭化物、焼土を含む。                | 5 黒色 軟質土。浅間C軽石、細砂を含む。 |
| 2 黒褐色 炭化物、焼土、よく締って固い黄色ローム粒子を含む。 | 6 黒色 やや黄味が強い。         |
| 3 黒色 炭化物純粋層。                    | 7 黒色 炭化物の混入は少ない。      |
| 4 黒色 炭化物、焼土、軽石を含む。              |                       |

0 2 m

第188図 70号住居

北東-西南に5.9mを測る。方位はN-46°-E。

**周壁、壁溝** 周壁は全体的に良好に検出する。確認できた周壁の高さは25cm前後であった。壁土は西壁では上部10cm程は黒色粘質土(第IV層)、下部15cm程は黄褐色ローム質土(第V層)である。壁溝は全周する。壁溝の掘り方は幅10cmから30cm程、深さは約10cm。部分的に周壁に沿って矢板を埋め込んだと思われる幅3~4cm程の細い溝が認められた。溝の覆土は浅間C軽石層を多量に含む黒色土である。この細い溝は西南及び東南周壁沿いに良好に検出された。

**柱穴** 支柱穴を4箇所良好に検出する。支柱は4本構造と思われる。柱穴の規模は最大が西側のもので径60cm、深さ60cm、最小は東側のもので径25cm、深さ42cmである。

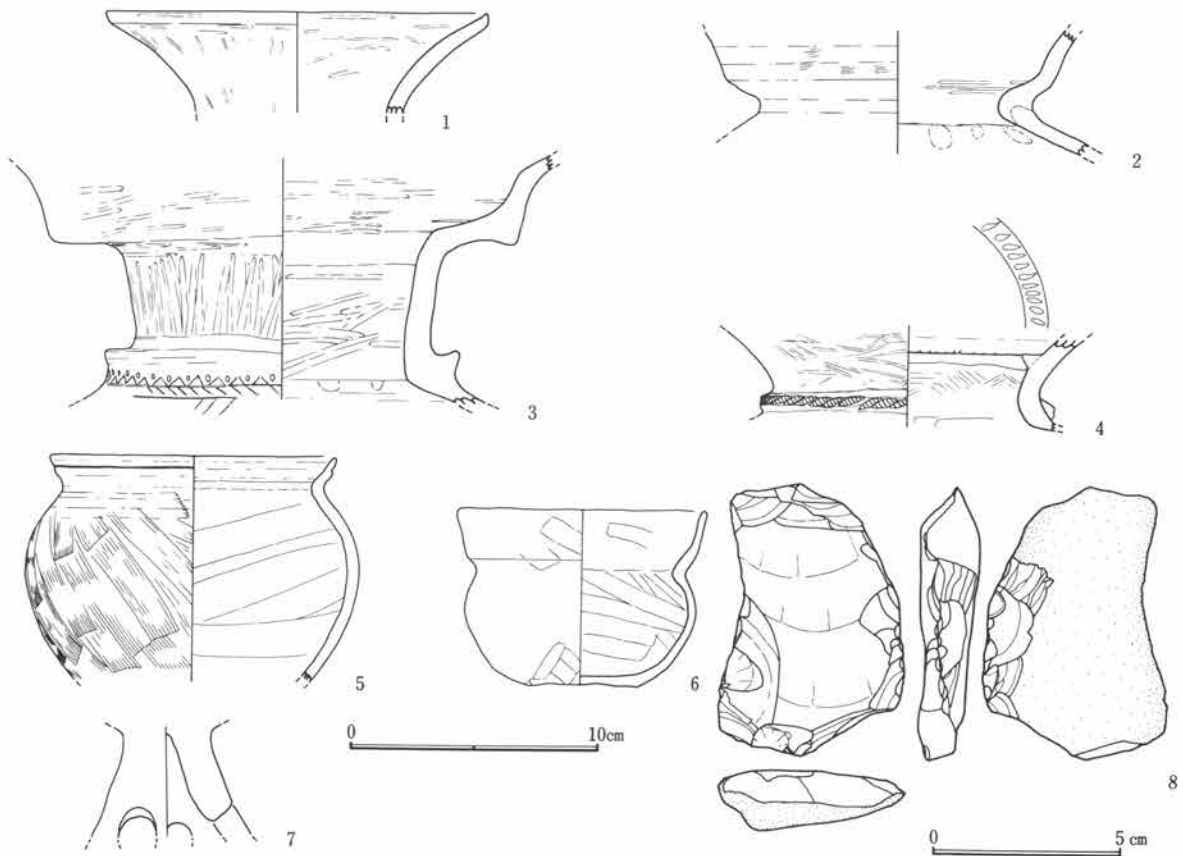
**床面** 床面は黄褐色ローム質土(第V層)面を平坦に堅く踏み固めている。小さな凹凸が比較目立つが、南側にやや低い緩い傾斜がある。住居中央部の炉跡との周囲が特に踏み固められている。また、床面上には焼土、炭化材が著しく散在し、炭化材の分布傾向としては特に北半部に密に見られる。火災に遭ったか。

**炉跡** 住居中央部に径30cm程の地床炉が認められる。炉床は赤褐色に焼ており、傍らには長さ20cm程の細長い川原石を据えている。

**遺物出土状態** 床面直上から10cm程の高さの範囲で古式土師器破片が多数出土している。

**時期** 古墳前期

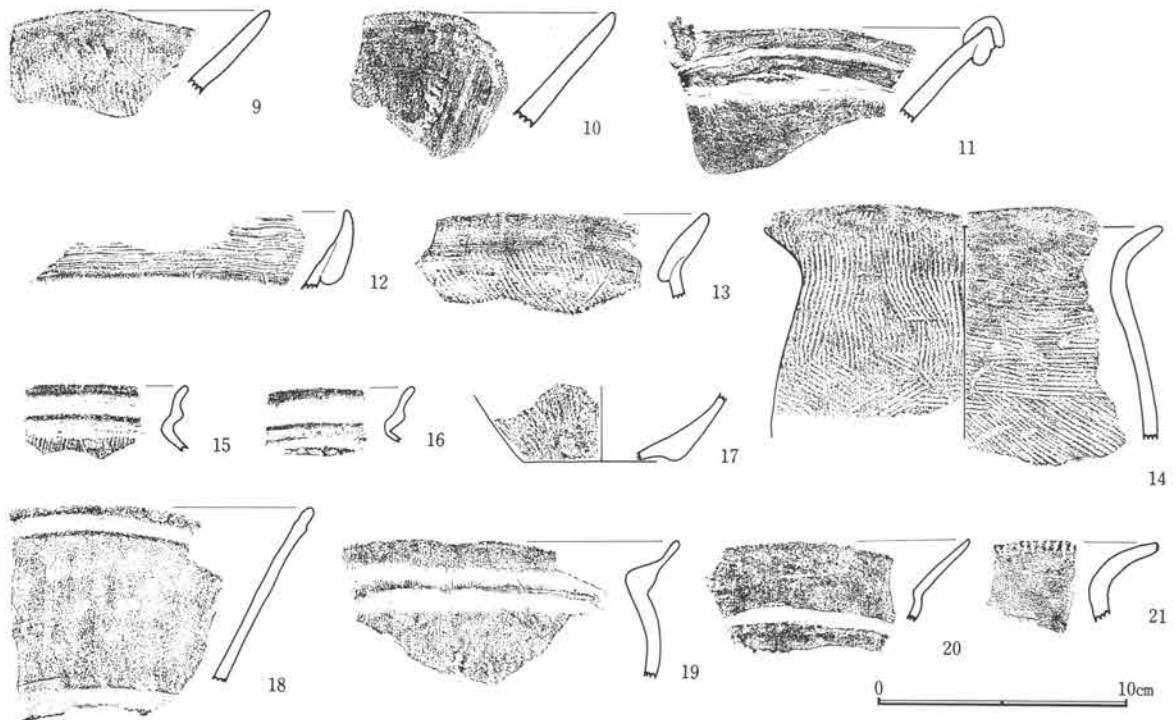
**他の遺構との関係** 西部で84号住居(弥生後期~古墳前期)と重複し、北部で72号住居(弥生後期第3期)と大きく重複する。東コーナー部では97号住居と小部分で重複する。



第189図 70号住居出土遺物 (1)

第172表 70号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 15.4	口辺部は緩やかに外反する、口縁部明瞭な稜を持つ。	外面 ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 明褐色	口辺部 $\frac{1}{2}$ 周
2	壺		口辺部下部に段を持って内折する。	外面 口辺部上段はハケメ後、ナデ。下段はナデ、胴上部はナデ。 内面 口辺部はヘラミガキ、肩部は指オサエ痕が巡る。	中砂粒混入 堅緻 灰白色	口辺下位～胴上位
3	壺		有段	外面 口縁部はヨコナデ、頸部はヘラミガキ、頸下端に突帯を巡らす。突帯部はヨコナデ、肩部は櫛状具による刺穴を巡らす。 内面 口、頸部はヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	口辺上位～頸部 $\frac{1}{4}$ 強
4	壺		外面頸部、内面口辺部に凸帯を持つ。	外面 口辺部ハケメ後、ヘラミガキ、頸部凸帯部に櫛状工具による刻み。 内面 口辺部ハケメ後、ヨコナデ、凸帯部上へら状具による刻み、頸部はハケメ後、ナデ。	中砂粒混入 堅緻 黒褐色	口辺下位～頸部 $\frac{1}{2}$
5	S字状口縁甕	口 11.5		外面 口辺部はヨコナデ、頸～胴部はハケメ。 内面 口辺部はヨコナデ、胴部はヘラナデ。	細砂粒混入 堅緻 赤橙色	口縁～胴下位 $\frac{1}{2}$ 周
6	埴	口 10.0 底 4.4 高 7.0	口辺下端に強い稜を持つ。	外面 ヘラケズリ後、ナデ。 内面 ヘラケズリ。	粗砂粒混入 やや堅緻 淡橙色	口縁～体部 $\frac{1}{2}$ 周
7	高坏		脚部に円孔4個穿つ。	外面 ヘラミガキ。 内面 ナデ。	砂粒混入 堅緻 明赤灰色	脚部のみ



第190図 70号住居出土遺物 (2)

第173表 70号住居出土石器観察表

遺物番号	名称	計測値 (mm)	石質	重量(g)	特徴
8	横刃状石器	73.0×47.0×15.5	珪質頁岩	67.6	自然面を残す剥片の縁辺を調整し刃部としている。一部自然面からも調整を施し両刃としている。

第174表 70号住居出土土器観察表 (拓本)

9 壺 細砂粒混入、淡黄色	12 壺 内面ハケメ、砂粒混入、灰黄色	18 S字状口縁甕、口縁部が著しく長大化した甕
10 壺 砂粒混入、橙色	15、16 S字状口縁甕、砂粒混入、浅黄橙色	19 鉢 内外面ヘラミガキ
11 壺 内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい橙色	17 甕 砂粒混入、褐色	20 埴 内外面ヘラミガキ
		21 高坏 (a)刻み目、砂粒混入、内外面丹彩

## 86号住居跡 (第191図)

**位置** C地区西北部に位置する(71-C47)。住居西半部は染谷川の侵食で失われている。周辺遺構としては東に84号住居が隣接している。

**形状、規模、方位** 住居の西大半を失っているため、全体形状の把握はできないが残存部の形状から胴の張った隅丸方形、あるいは隅丸長方形と判断できる。規模は南北3.5mをかりうじて測定することができる。方位はN-35°-W。

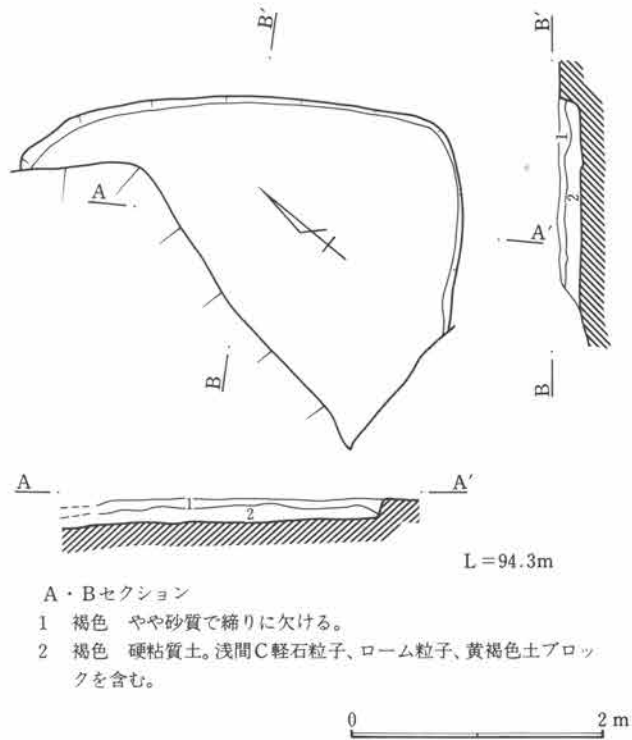
**周壁、壁溝** 確認できる周壁の高さは15~20cmで壁土は黄褐色ローム質土(第V層)。壁溝は確認できない。

**柱穴** 不明。確認できない。

**炉跡** 不明。

**遺物出土状態** 覆土中より弥生土器、古式土師器破片を出土。床面直上からの出土遺物はほとんど認められない。

**時期** 古墳前期



第191図 86号住居



第192図 86号住居出土遺物

第175表 86号住居出土土器観察表 (拓本)

1 壺 砂粒少量混入、にぶい黄橙色	3 甕 内面ヘラミガキ、砂粒少量混入、赤褐色	4 S字状口縁甕 内面(b)ヨコナデ(d)指オサエ痕、砂粒少量混入、黄褐色
2 壺 砂粒混入、にぶい赤褐色		

95号住居跡 (第193図、図版56、57)

**位置** C地区西端部に位置する(75-C43)。住居の西半部は染谷川の侵食により失われている。周辺の遺構は南に102号住居、東に100号住居が隣接する。

**形状、規模、方位** 西半部を失っている。北及び南コーナー部がかろうじて残存しているため住居の形状はやや隅の丸い長方形と判断できる。規模は長軸5.2m、短軸は3.8mを測る。N-27°-W。

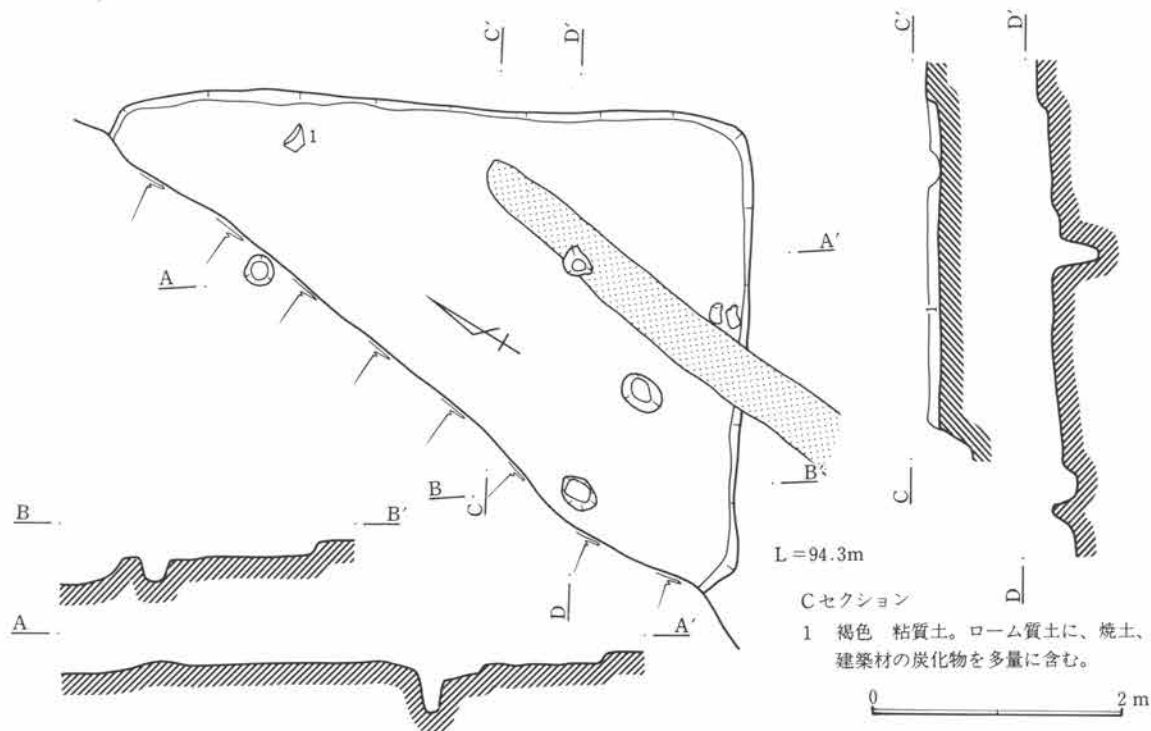
**周壁、壁溝** 周壁の遺存状態は良好である。確認できた壁の高さは8~10cm。壁土は黄褐色ローム質土である。

**床面** 床面は黄褐色ローム質土面であり、凹凸が著しい。

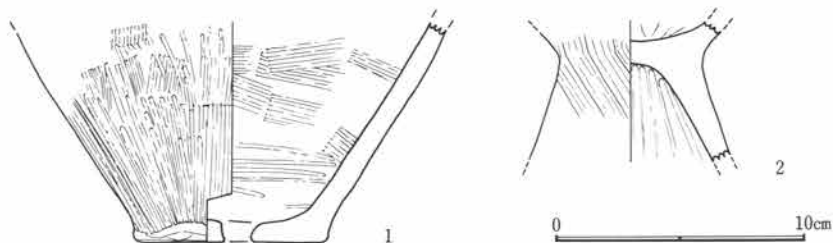
**柱穴** 主柱穴は3箇所検出。3箇所の主柱穴の配置から本住居の主柱は4本構成と判断される。西側の主柱穴は河川の侵食により失われたと思われる。残存する主柱穴は染谷川の段丘縁辺傾斜部、あるいは後世の溝の攪乱部に位置しているため本来の形は残っていない。完存している南主柱穴は径30cm、深さは20cmで、この主柱穴は特に他と比べて浅い。

**遺物出土状態** 床面上より弥生土器破片、古式土師器、S字状口縁甕などが出土。

**時期** 古墳前期



第193図 95号住居



第194図 95号住居出土遺物

第176表 95号住居出土土器観察表

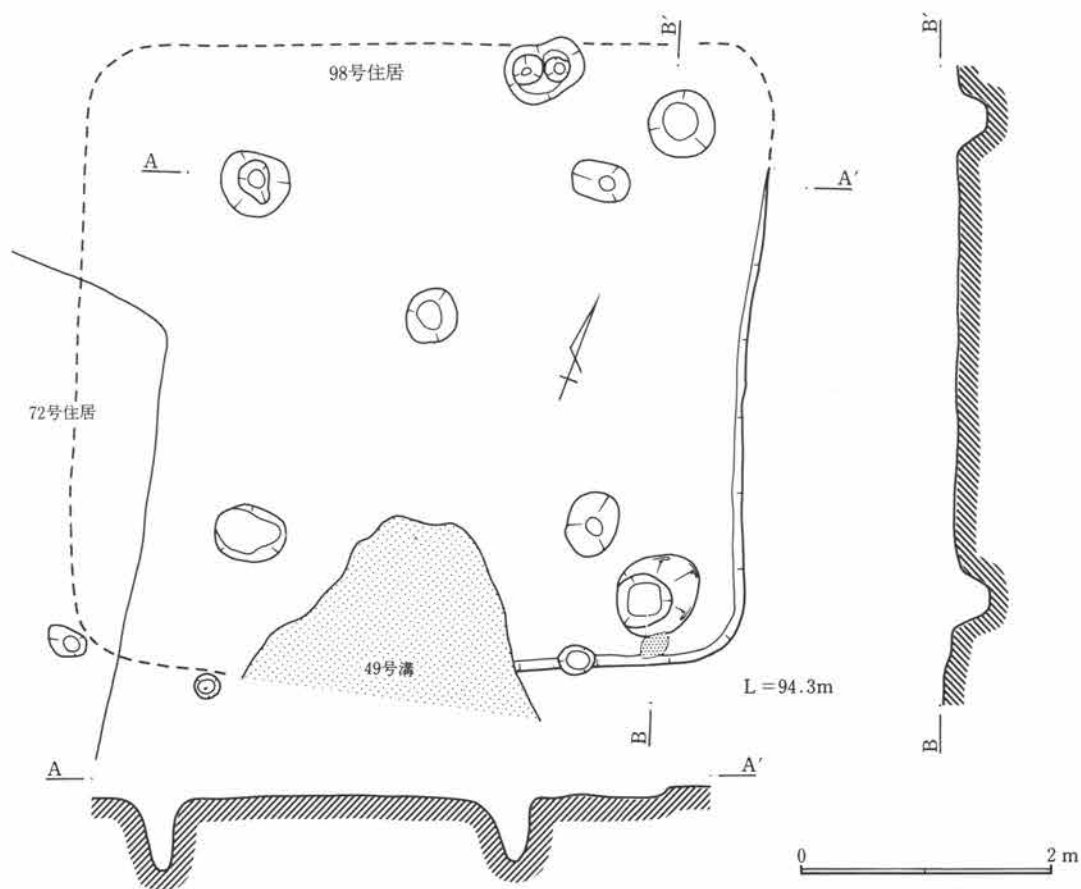
遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甌	底 7.5		外面 ハケメ後、ヘラミガキ、底面はヘラミガキ。 内面 ハケメ後、ヘラミガキ、底面はヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	胴下位～底部
2	台付甕		器壁は厚い。	外面 ハケメ。 内面 底部にヘラあて痕あり。脚台部内面はナデ。	砂粒混入 堅緻 にぶい黄橙色	底～脚上部

## 98号住居跡 (第195図)

**位置** C地区住居群の西部に位置する(65-C41)。周囲の遺構としては北に1号周溝墓が隣接し、南に72号、99号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 隅丸方形を呈する。住居の輪郭は東半部で把握できるが西半部では周壁などの検出はできなかった。支柱穴の配置関係や床面の広がりから形状、規模が推定できる。規模は南北5.2m、東西5.5mをはかる。方位はN-18°-W。

**周壁、壁溝** 周壁の遺存状態は悪い。東辺から南辺の東半部にわたって高さ10cm前後で検出されたが、他



第195図 98号住居

6 検出した遺構、遺物

の部分では不明。壁溝は確認できない。

**床面** 床面は黄褐色ローム質土（第V層）及び黒色土の混土面を平坦に踏み固めている。

**柱穴、ピット** 主柱穴を4箇所検出する。主柱は4本構造。方形に配置されている。東南コーナー部に貯蔵穴と思われるピットあり。ピット内より安山岩の川原石、古式土師器埴1/4周破片が出土している。

**炉跡** 不明、検出することができなかった。

**遺物出土状態** 床面からの出土遺物は少ない。埴破片出土。

**時期** 古墳前期

**他の遺構との関係** 西部で部分的に72号住居（弥生後期第3期）と重複し、東コーナー部で99号住居（弥生後期～古墳前期）と僅かに重なる。99号住居との先後関係は不明確。

100号住居跡（第196図、図版57）

**位置** C地区住居群の西端部に位置する（73-C40）。西に95号住居が隣接し、南に106号、107号住居が部分的に重複する。

**形状、規模、方位** 方形を呈する。住居の遺存状態は良好。規模は北東-西南6.2m、北西-東南6.0mを測る。方位はN-42°-E。

**周壁、壁溝** 周壁は南コーナー部が107号住居との重複部であるため遺存状態が悪いが他の部分は壁の高さ10～15cmで良好に検出している。壁土は黄褐色ローム質土。壁溝は全周する。幅10～25cm。

**床面** 黄褐色ローム質土の面で平坦に堅く踏み固めている。北コーナー部はやや軟弱でレベルがやや低い。南コーナー部は107号住居との重複部であるが、張り床面が検出されている。

**柱穴** 主柱穴を4箇所良好に検出している。主柱は4本構造で方形に配置する。4箇所の主柱穴はほぼ同一規模、形状で、上部がややすり鉢状に広がっている。径60cm前後、深さ60cm前後である。

**炉跡** 不明、検出することができない。

**遺物出土状態** 床面直上より古式土師器破片が多数出土している。

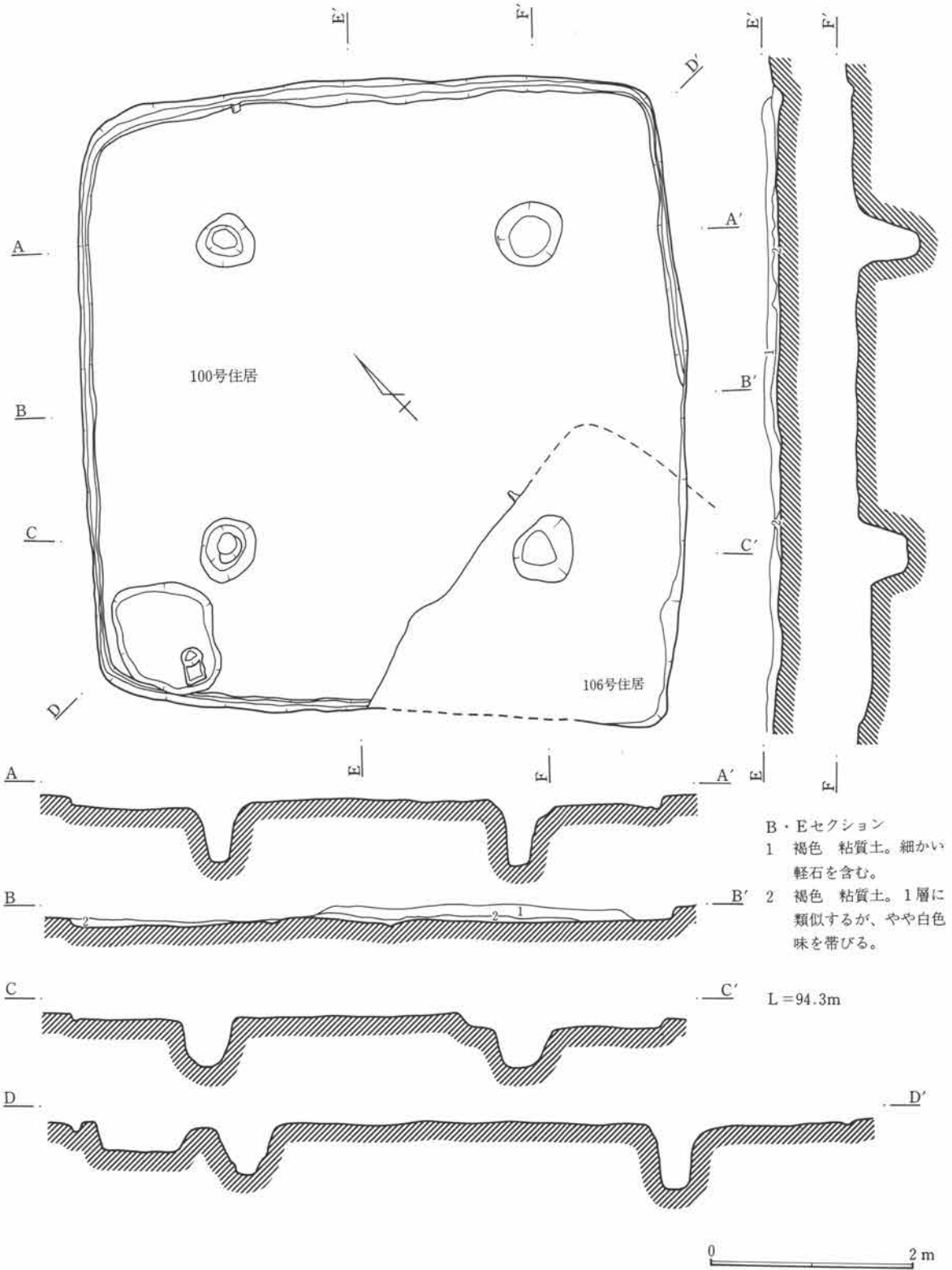
**時期** 古墳前期

**他の遺構との関係** 南コーナー部で106号、107号住居（共に弥生後期）と重複。

第177表 100号住居出土土器観察表

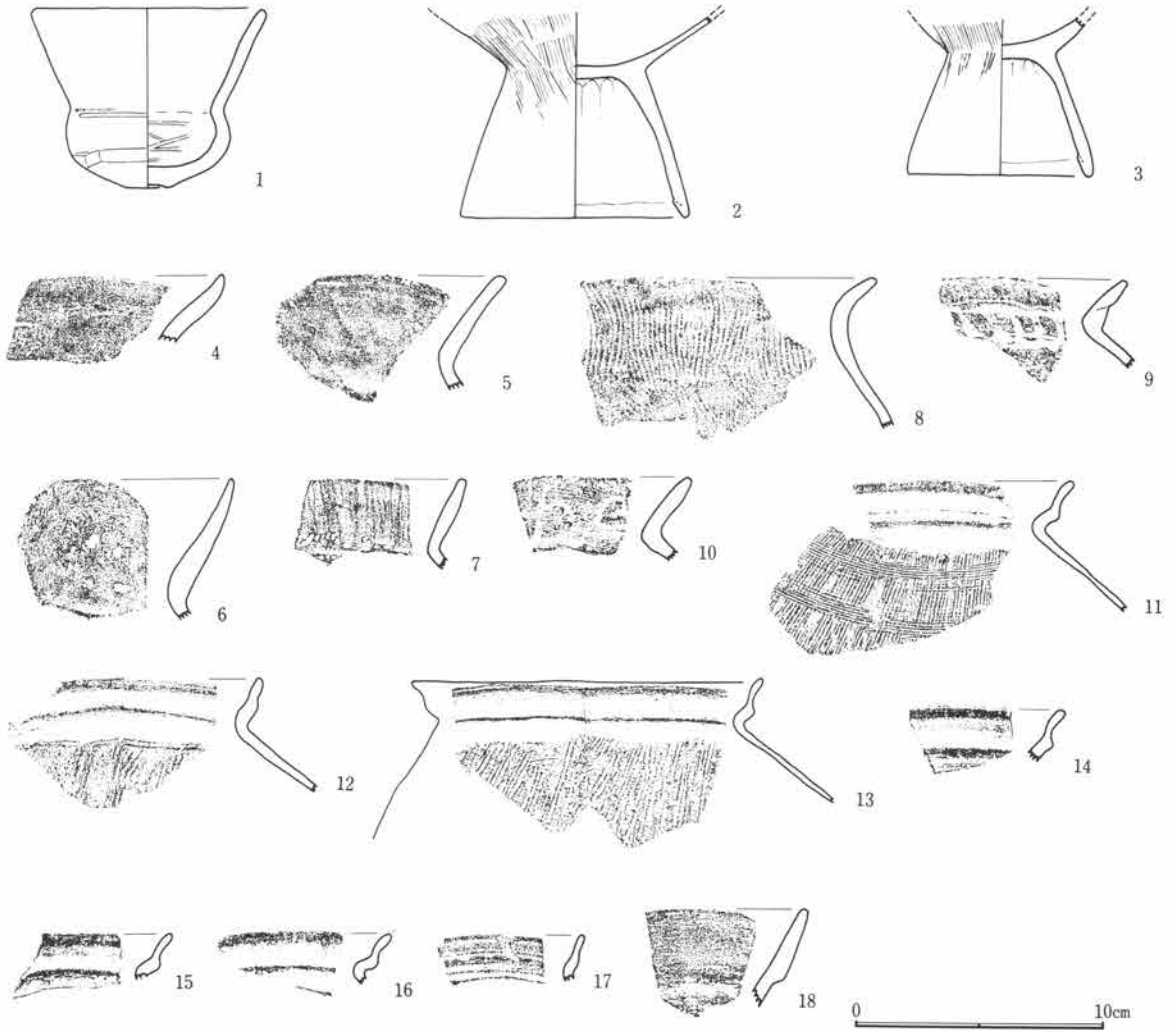
遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	埴	口高 9.5 7.1	口辺部はほぼ直状に外反する。	外面 口辺部はヘラミガキ、頸部はハケメ、体部はヘラナデ。 内面 体部はヘラミガキ。	中砂粒混入 堅緻 橙色	口辺～体部1/4周
2	S字状口縁甕	脚 9.4	胴下部器壁は厚さ2mm前後、脚天井部は底面から下に押されてやや膨らみ出している。	外面 胴部はハケメを下から上方向に施した後、胴下端部から脚台部にかけて上から下方向に施している。 内面 指ナデ。	細砂粒混入 堅緻 浅黄橙色	脚台部
3	S字状口縁甕	脚 7.4	器体はやや小さい。	外面 脚台部は上端に粗いハケあて痕があるが、全体にハケメは目立たない。 内面 指ナデ。	細砂粒混入 堅緻 浅黄橙色	脚台部





第196図 100号住居

6 検出した遺構、遺物



第197図 100号住居出土遺物

第178表 100号住居出土土器観察表 (拓本)

4 壺 内面ヨコナデ、砂粒多量に混入、にぶい橙色	9 甕 内面ヘラナデ、細砂粒混入、にぶい褐色	14 S字状口縁甕 細砂粒混入、灰褐色
5 壺 内面ヨコナデ、砂粒少量混入、にぶい褐色	10 甕 内面ハケメ、細砂粒混入、灰黄褐色	15 S 状口縁甕 内面(b)ヨコナデ、砂粒混入、灰褐色
6 埴 細砂粒混入、浅黄橙色	11 S字状口縁甕 砂粒混入、にぶい灰褐色	16 S字状口縁甕 細砂粒混入、灰褐色
7 埴 内面ハケナデ、砂粒少量混入、褐色	12 S字状口縁甕 砂粒混入、灰褐色	17 S字状口縁甕 砂粒混入、にぶい橙色
8 甕 内面ハケメ、細砂粒混入、黄橙色	13 S字状口縁甕 内面(d)指オサエ痕、細砂粒混入、小礫含む、浅黄橙色	18 鉢 微砂粒混入、灰褐色、内外面丹彩

## 102号住居跡 (第198図)

**位置** C地区住居群西端部に位置する(78-C41)。西辺を染谷川に沿う後世の溝に切られている。東部は106号住居と重複する。

**形状、規模、方位** ほぼ方形を呈すると思われるが、西部の形状が明確さを欠いている。規模は南北4.0m前後、東西3.6mを測る。方位はN-20°-W。

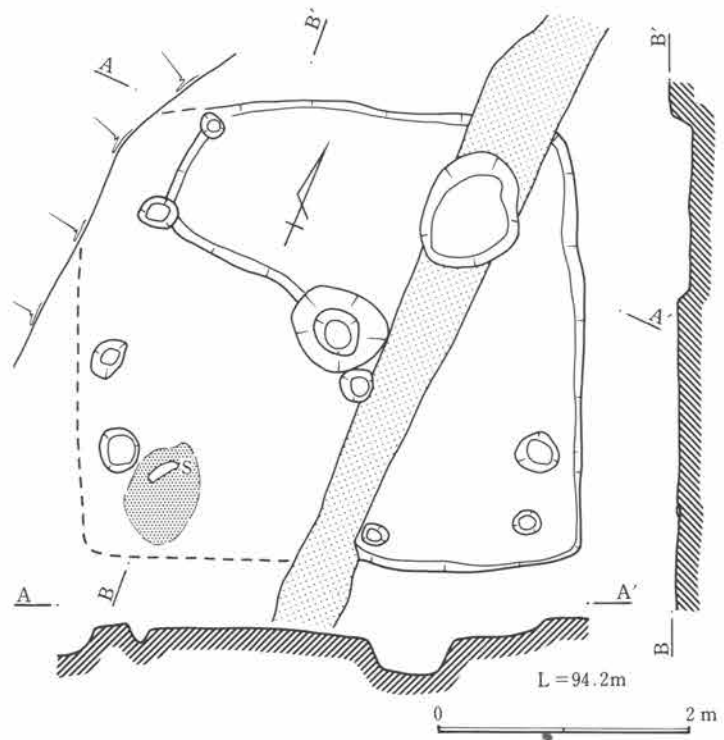
**周壁、壁溝** 住居北部では周壁を比較的良好に検出する。検出できた壁高は7cm。壁土はローム質土である。壁溝は確認できない。

**柱穴** 支柱穴は不明確。

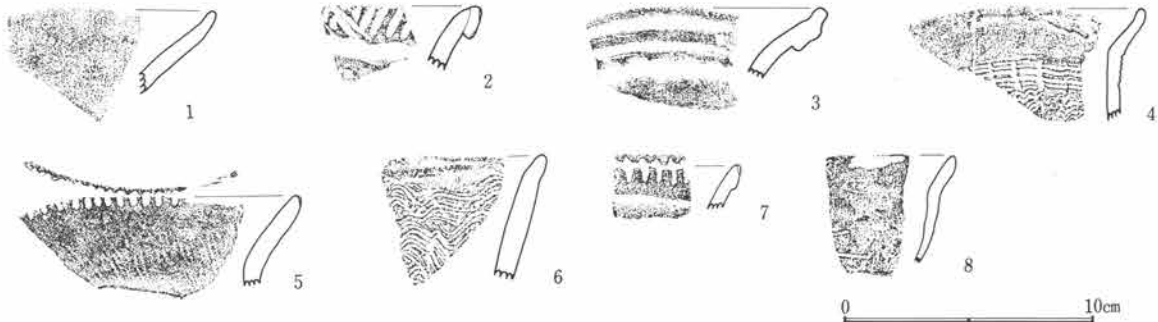
**炉跡** 不明。南コーナー部に焼土帯が認められるが、炉跡と認めるには位置的に問題がある。

**遺物出土状態** 覆土中より弥生土器、古式土師器破片が多数出土している。

**時期** 古墳前期か



第198図 102号住居



第199図 102号住居出土遺物

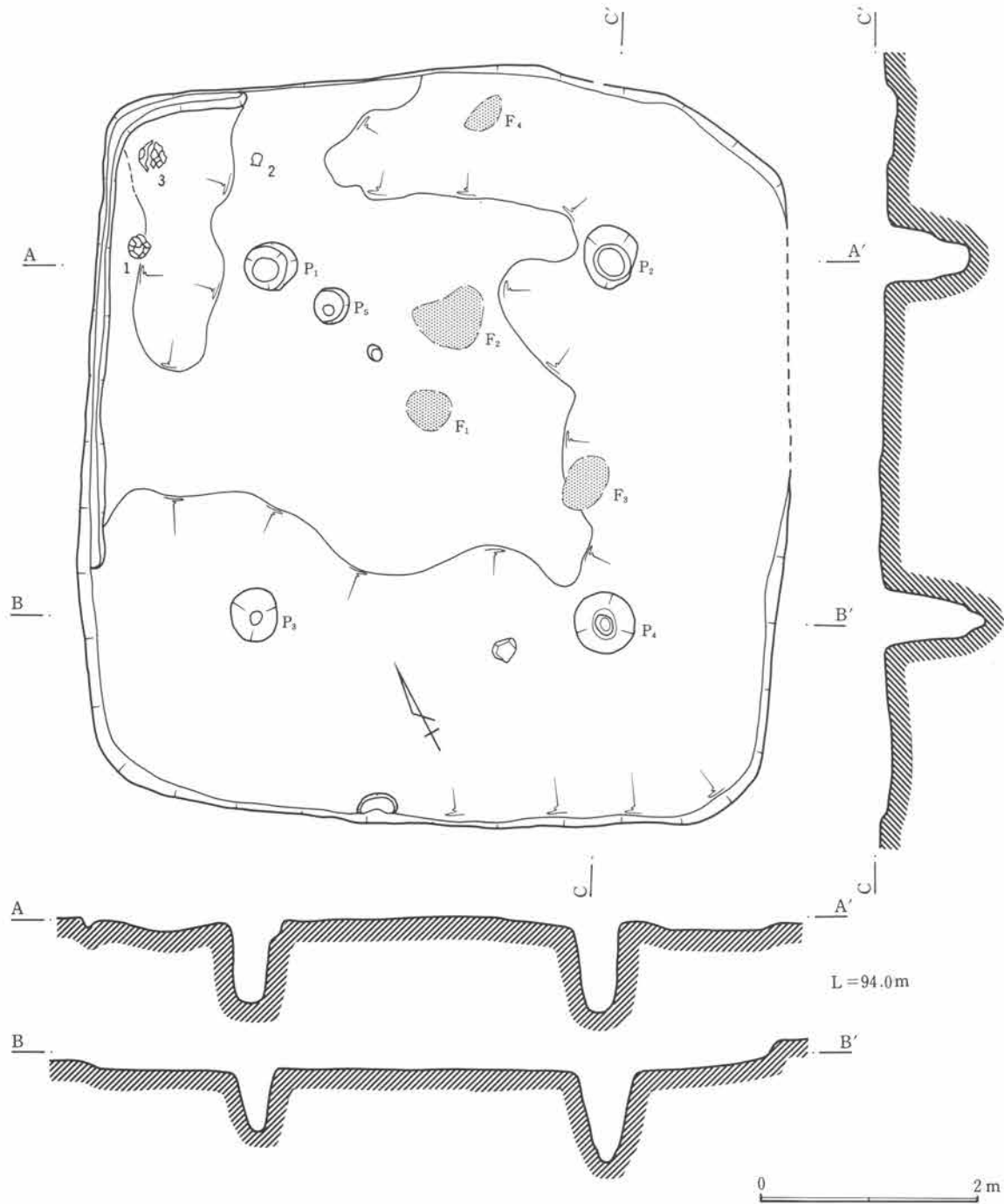
第179表 102号住居出土土器観察表 (拓本)

1 壺 砂粒混入、淡黄色	4 甕 内外面(a)~(b)ヨコナデ、砂粒少量混入、黄灰色	8 鉢 中砂粒混入、橙色、磨滅している
2 壺 (a)棒状具による刻み目、砂粒少量混入、にふい橙色	5 甕 (a)棒状具による刻み目、砂粒混入、灰白色	
3 壺 内外面(a)~(c)ヨコナデ、砂粒混入、淡黄色		

113号住居跡 (第200図、図版58)

位置 C地区住居群の北部に位置する(53-C34)。北に112号住居が隣接し、西に119号住居、南に137号住居と重複する。

形状、規模、方位 隅丸方形を呈する。全体に遺存状態は良好。規模は南北7.0m、東西6.5mを測る。方位はN-30°-E。



第200図 113号住居

**周壁、壁溝** 周壁は東壁で一部に不明瞭な部分があるが、ほぼ全周検出している。検出できた周壁は低く、10cm前後である。壁土は暗褐色粘質土（第IVb層）である。壁溝は北西コーナー一部から西辺にかけて周壁下に検出できた。幅20cm前後。他の部分では周辺部が客土であったため検出できなかったが、全周していたと思われる。

**床面** 住居中央部炉跡との周囲から西部にかけて堅く平坦に踏み固められた面が見られる。他の部分は客土した状態を認めるが床面の検出はできなかった。

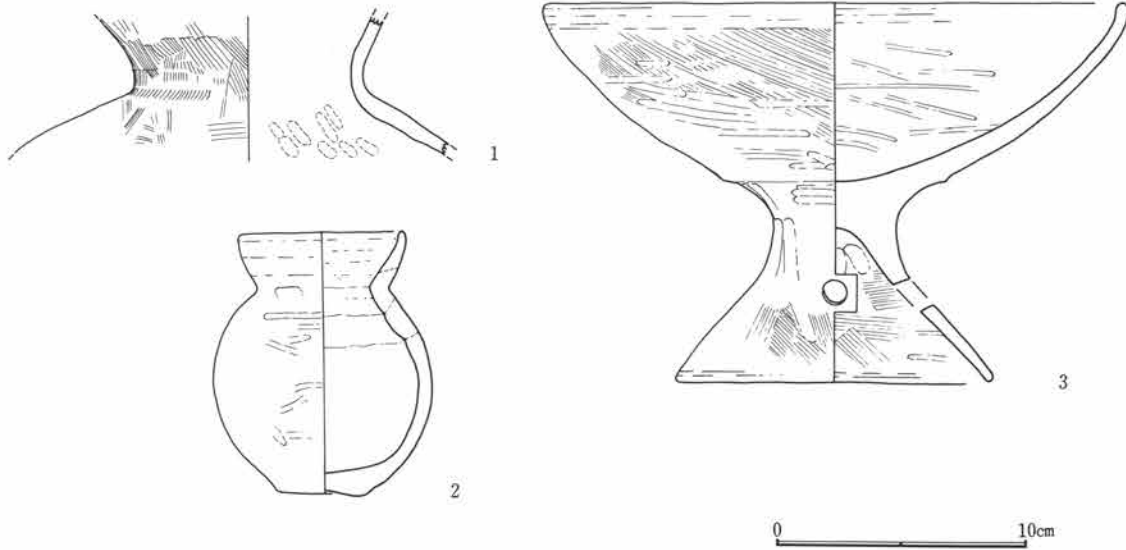
**柱穴** 主柱穴は4箇所良好に検出している（P1～P4）。主柱は4本構造である。主柱穴は円形で比較的大きく深い。径は50～60cmで深さは60cm前後である。この外北西主柱穴の傍ら中央寄りに円形ピットがある（P5）。径30cm、深さ32cmを測る。補助柱穴の可能性もある。

**炉跡** 4箇所焼土帯が検出されているが（F1～F4）、中央の焼土帯（F1）に良好な火床面が見られることから、これが炉跡と判断できる。

**遺物出土状態** 北周壁下、ほぼ床面直上に集中して古式土師器、甕、埴、高坏などの破片が出土している。

**時期** 古墳前期

**他の遺構との関係** 南辺部で僅かに137号住居（弥生中期後半）と重複する。西辺部で119号住居（弥生後期第3期）と重複する。



第201図 113号住居出土遺物

第180表 113号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺		頸部は強くくびれる。	外面、頸部はハケメ、胴上部はハケメ後、ヘラナデ。 内面 ナデ、胴上部に指オサエ痕あり。	粗砂粒混入 堅緻 淡黄色	頸～胴上部
2	壺	口 6.4 底 3.5 高 10.5	口辺部は緩やかに内湾する。底部は窪んでいる。	外面 口辺部はヨコナデ、頸～胴部はヘラミガキ、底部はヘラナデ。 内面 口辺部はヨコナデ、胴部はヘラナデ。	中砂粒混入 堅緻 浅黄橙色	ほぼ完形

6 検出した遺構、遺物

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
3	高坏	口 22.8 高 15.1	口縁部は内湾する。	外面 口縁部はヨコナデ、体部はハケメ、底部はヘラナデ、脚部はハケメ後ヘラミガキ、裾部はヨコナデ。 内面 口縁部はヨコナデ、体部はヘラミガキ、脚上部は指オサエ、脚部はハケメ後ヘラナデ、端部はヨコナデ。	細砂粒、黒色粒 混入 堅緻 灰白色	口縁部全周 口辺～脚部 $\frac{1}{2}$

115号住居跡 (第202図)

**位置** C地区住居群の北西部に位置する(60-C34)。114号、130号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 隅丸方形を呈する。住居の輪郭が把握できるのは南東辺のみで他は130号、114号住居との重複部であるため把握できない。しかし支柱穴の配置関係から住居形態、規模を推定することができる。規模は長軸5.5m、短軸4.8m前後になると思われる。方位はN-45°-E。

**周壁、壁溝** 東南辺から東コーナー部にかけて周壁を検出している。この部分の周壁の遺存状態は良好で周壁の確認できる高さは20cm前後である。周溝は確認できない。

**柱穴** 4箇所で支柱穴を良好に検出する。支柱穴の配置は整った方形をなしている。全体的に支柱穴は形状、規模において一様であるが南コーナー部の支柱穴は他と異なり長円形を呈している。

**炉跡** 不明。検出することができなかった。

**遺物出土状態** 覆土中より甕、壺大形破片が出土。

**時期** 古墳前期

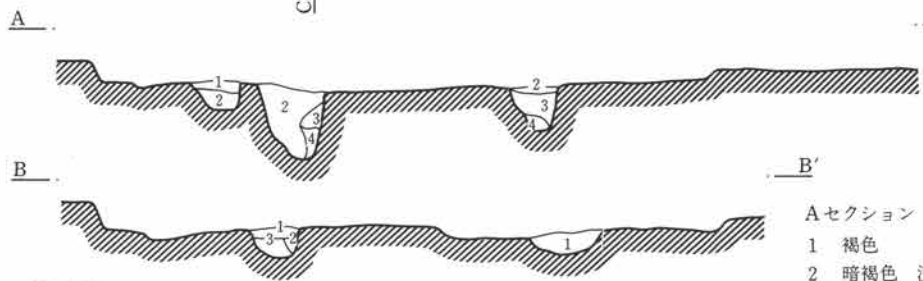
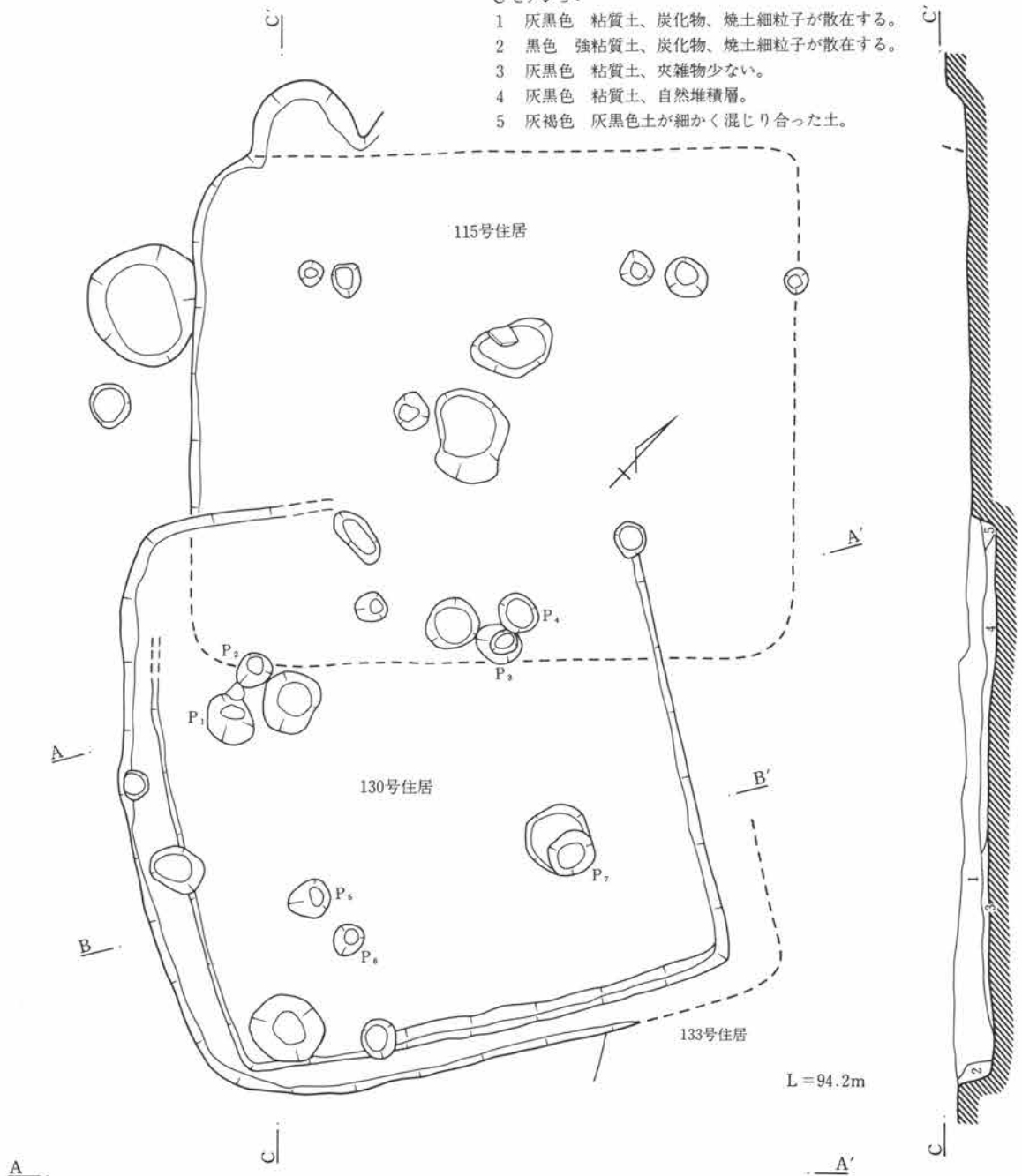
**他の遺構との関係** 北半部で114号住居(弥生中期後半)と大きく重なる。本住居の床面は114号住居の床面より10cm前後高い位置にある。

第181表 115号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 14.0	頸部は強く屈曲し、頸部から口縁にかけてほぼ直状に外反する。	外面 頸部～口縁部にかけてハケメ、口縁部はハケメ後ヨコナデ。ハケメの単位は短い。肩部に指オサエ痕が巡る。 内面 ハケメ、肩部は指オサエ痕が巡る。	砂粒混入 やや軟弱 赤褐色	口縁～頸部全周、内面はやや荒れている。
2	甕	口 19.2	口辺部は強く外反する。	外面 口縁端部はハケ状工具による刻み目、口縁部ヨコナデ、頸～胴上部はハケメ。 内面 口辺部はヨコナデ、頸部はハケメ、胴上部はヘラナデ。	粗砂粒混入 堅緻 にふい橙色	口縁～胴上位 $\frac{1}{2}$ 周
3	甕	口 11.6	頸部はくの字状に屈曲する。	外面 口縁部はヨコナデ、頸～胴部はハケメ後ナデ。 内面 口縁部はヨコナデ、頸～胴部はナデ、ヘラミガキ。	砂粒混入 堅緻 褐色	口縁～胴上位

Cセクション

- 1 灰黒色 粘質土、炭化物、焼土細粒子が散在する。
- 2 黒色 強粘質土、炭化物、焼土細粒子が散在する。
- 3 灰黒色 粘質土、夾雑物少ない。
- 4 灰黒色 粘質土、自然堆積層。
- 5 灰褐色 灰黒色土が細かく混じり合った土。



Bセクション

- 1 褐色 軽石微粒子を多量に含む。
- 2 暗褐色 夾雑物は3層よりも少量。
- 3 暗褐色 軽石、焼土粒子、炭化物、ローム粒子を含む。

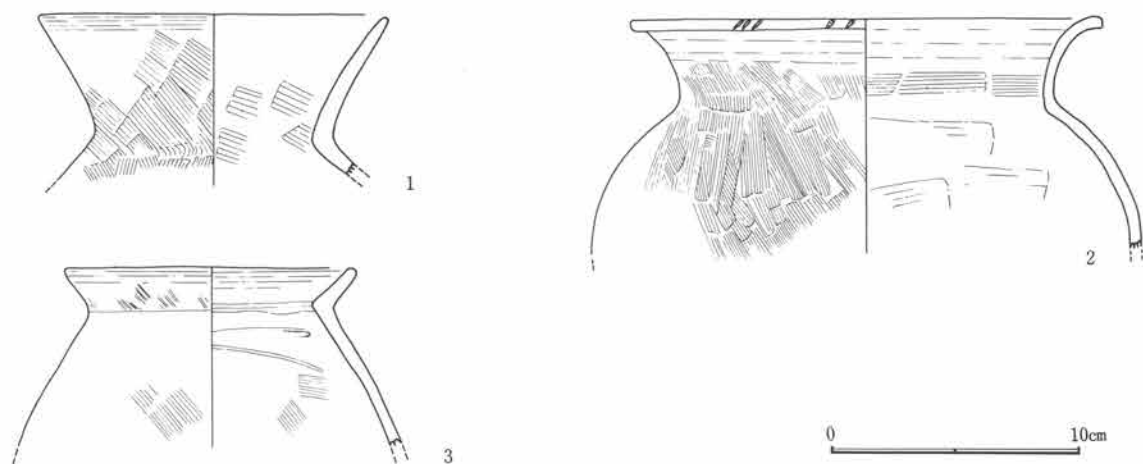
Aセクション

- 1 褐色
- 2 暗褐色 浅間C軽石を多量に含む。
- 3 褐色 わずかに浅間C軽石と焼土粒子を含む。
- 4 暗灰褐色

0 2 m

第202図 115号、130号住居

6 検出した遺構、遺物



第203図 115号住居出土遺物

130号住居跡 (第202図、図版58)

**位置** C地区住居群の中央部やや西よりに位置する(61-C32)。北西に115号住居、東に133号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 隅丸方形を呈する。規模は長軸5.3m、短軸5.1m。検出状況は、115号、133号住居との重複部において形状は不明確である。本住居の内側20~30cmには周壁状の段が認められる。これが住居の重複や拡張、あるいはテラス状の遺構か明確にはできなかった。方位はN-32°-E。

**周壁、壁溝** 周壁は明確に検出できなかった。115号、133号住居との重複部では周壁は明確に検出できなかったが、以外の箇所では良好な遺存状態であった。検出できた床面の高さは約30cmで立ち上がり角度は78°である。壁土は暗褐色粘質土である。壁溝は認められなかった。ただし内側の周壁状の段下にそって東南辺の一部に浅い溝を検出している。

**床面** テラス部分の床面は黄褐色ローム質土(第V層)で軟弱である。住居中央部は黄褐色ローム質土面で強く踏み固められた面を検出する。

**柱穴** 主柱穴を4箇所検出する。それぞれの箇所では同様の円形ピットが2~3個集合している。集合するピットは深さ20~30cmで総体に浅く、それぞれの箇所での集合のしかたは位置関係において一定の規則性を見ることができる。P1→P2、P5→P6等4箇所移動関係が対応している様子が窺われる。

**炉跡** 不明。検出することができなかった。

**遺物出土状態** 出土遺物は僅少。覆土より弥生土器、古式土師器破片が数点出土している。

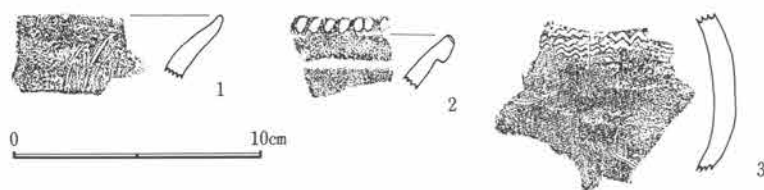
**時期** 弥生後期~古墳前期か。

**他の遺構との関係** 北西部で115号住居(古墳前期)と重複する。床面レベルは115号住居よりも25cm程高い。北東部で133号住居(弥生後期第3期)と重複する。共に先後関係は不明。

第182表 130号住居出土土器観察表(拓本)

1 壺 内面ヨコナデ、砂粒混入、灰褐色	2 壺 砂粒混入、橙色	3 壺 内面ヘラミガキ、砂粒混入、褐色
---------------------	-------------	---------------------





第204図 130号住居出土遺物

## 116号住居跡 (第205図、図版59)

**位置** C地区住居群の北部に位置する(57-C37)。北部に118号住居、西に109号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。西北辺、西南辺において周壁を検出する。北東、東南部は他の住居との重複部であるため住居の輪郭は明確に把握できない。規模、形状については支柱穴の配置関係によって推定できる。規模は長軸は7.6mを測ることができる。短軸は6.2m前後になると思われる。方位はN-48°-W。

**周壁、壁溝** 周壁は北西コーナー部から西南コーナー部にかけて検出される。検出できた壁の高さは10cm前後である。壁溝は認められない。

**床面** 床面は黄褐色ローム質土(第V層)面で比較的平坦である。

**柱穴** 支柱穴は4箇所良好に検出できる。支柱は4本構造。4箇所の支柱穴は総体に一樣な形状、規模を示している。径45cm前後の円形をなし、深さは80cmに達しており特に深い。

**炉跡** 北西側の2支柱穴間の外、ほぼ周壁との中間位置に地床炉を設けている(F1)。これ以外に北東側2支柱穴間、やや外側に焼土帯を検出するが(F2)、これも本住居に属する炉跡の可能性が高い。

**遺物出土状態** 床面上より弥生土器、古式土師器破片(S字状口縁甕など)が多数出土している。

**覆土** 覆土中に浅間C軽石を多量に含んでいる。床面直上に浅間C軽石純層の堆積も見られる。

**時期** 古墳前期

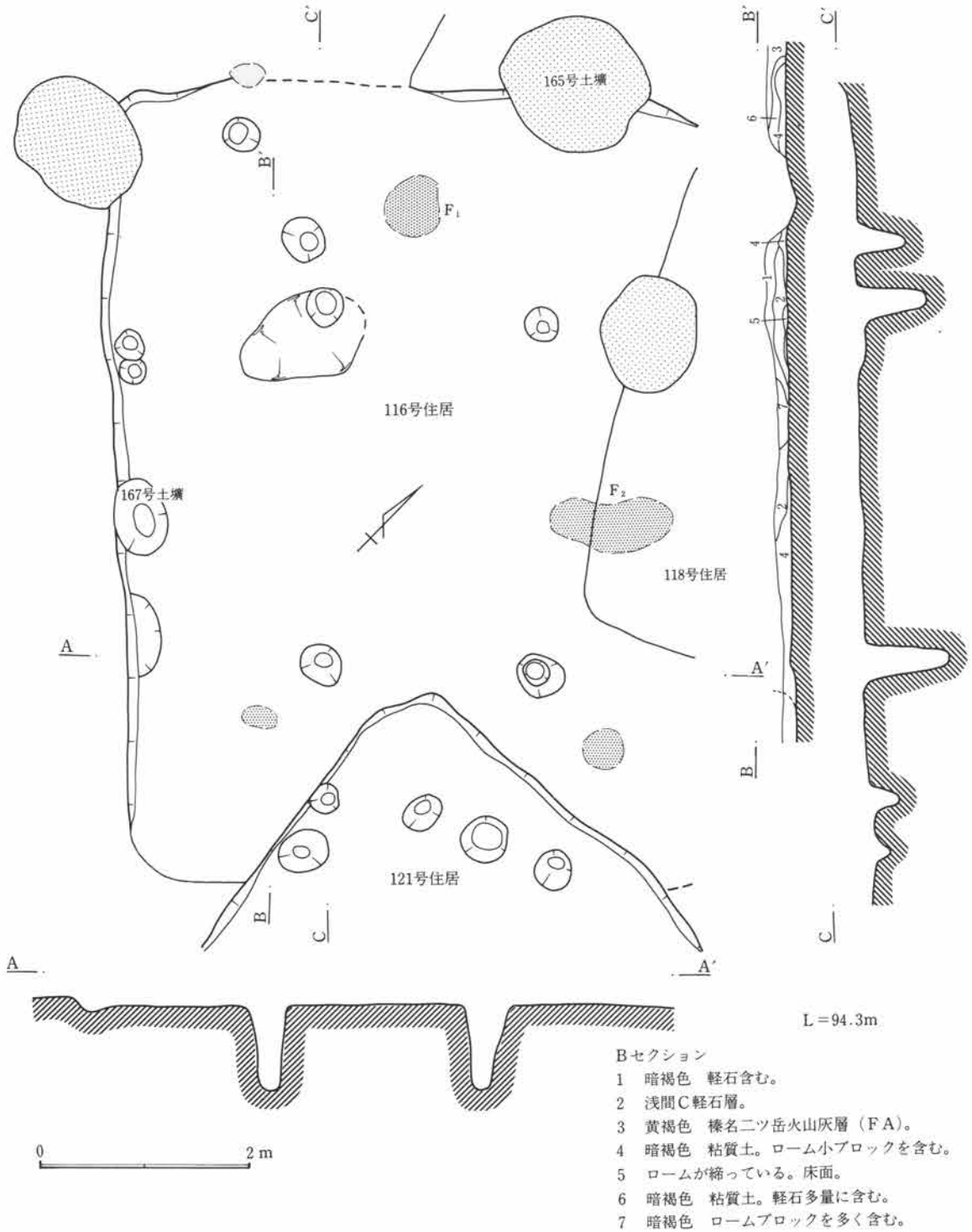
**他の遺構との関係** 北東部で118号住居(弥生後期第1期)と重複する。南東部で121号住居と重複するが先後関係は不明。

第183表 116号住居出土土器観察表(拓本)

1 壺 内外面(a~b)ヨコナデ、砂粒混入、浅黄橙色	2 壺 外面(b)へラ刻み目、砂粒混入、橙色 3 壺 微細粒混入、浅黄橙色	4 甕 (a)刻み目、内外面ナデ、褐色
----------------------------	--	---------------------

第184表 116号住居出土土器観察表

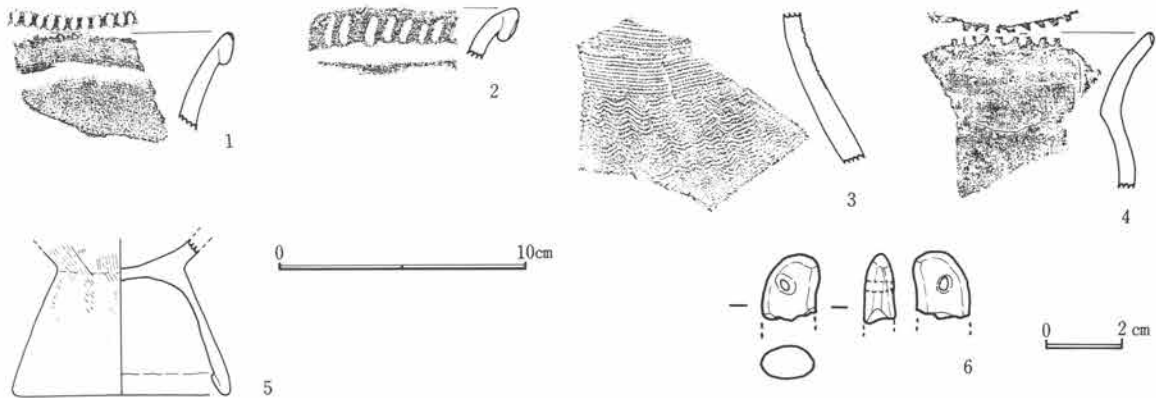
遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
5	S字状口縁甕	脚 9.0	脚台天井部に補充粘土が目立つ。	外面 ハケメ。 内面 脚台部は指オサエ、ナデ。	砂粒多量に混入 堅緻 にぶい橙色	脚台部



第205図 116号、121号住居

第185表 116号住居出土玉類観察表

遺物番号	名称	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	成 形	整 形	材質 色	遺存状態 備 考
6	勾 玉		1.5	0.9	0.3	孔は楕円形。	全体的に滑沢に磨かれています。	石 灰白色	頭部遺存



第206図 116号住居出土遺物

## 121号住居跡 (第205図)

**位置** C地区住居群の北部に位置する(57-C36)。北西部は116号住居と重複する。

**形状、位置、方位** 形状不明。住居の形状は北西コーナー部で把握できるのみである。規模は不明。方位はN-8°-W。

**周壁、壁溝** 西北コーナー部で周壁を検出する。検出できた周壁の高さは5cm前後である。壁溝は認められない。

**床面** 床面は暗褐色粘質土で凹凸が目立つ。面は比較的軟弱。

**柱穴** 支柱穴は不明確。住居内に大小のピットを検出するがそれぞれ支柱穴と認定するには問題がある。

**炉跡** 不明。検出できない。

**遺物出土状態** 弥生土器破片が数点床面直上より出土。出土遺物僅少。

**時期** 弥生後期～古墳前期

**他の遺構との関係** 116号住居(古墳前期)と北西部で重複する。

## 120号住居跡 (第207図、図版59)

**位置** C地区住居群北端部、染谷川縁辺部に位置する(51-C39)。南部で119号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 隅丸方形を呈する。住居の遺存状態は悪い。掘り方の外縁辺が住居の輪郭になると思われる。規模は東西5.0m、南北4.6mを測る。N-86°-W。

**周壁、壁溝** 周壁の遺存状態は悪い。ほとんど検出できない。壁溝も検出できない。

**床面** 床面は中央部において黄褐色ローム質土(第V層)面を堅く平坦に踏み固められた床面を小範囲に検出するが支柱穴の外回りは15cm前後の深い掘り方をもって客土して床を構築している。客土は暗褐色土と黄褐色ローム質土ブロック混土である。

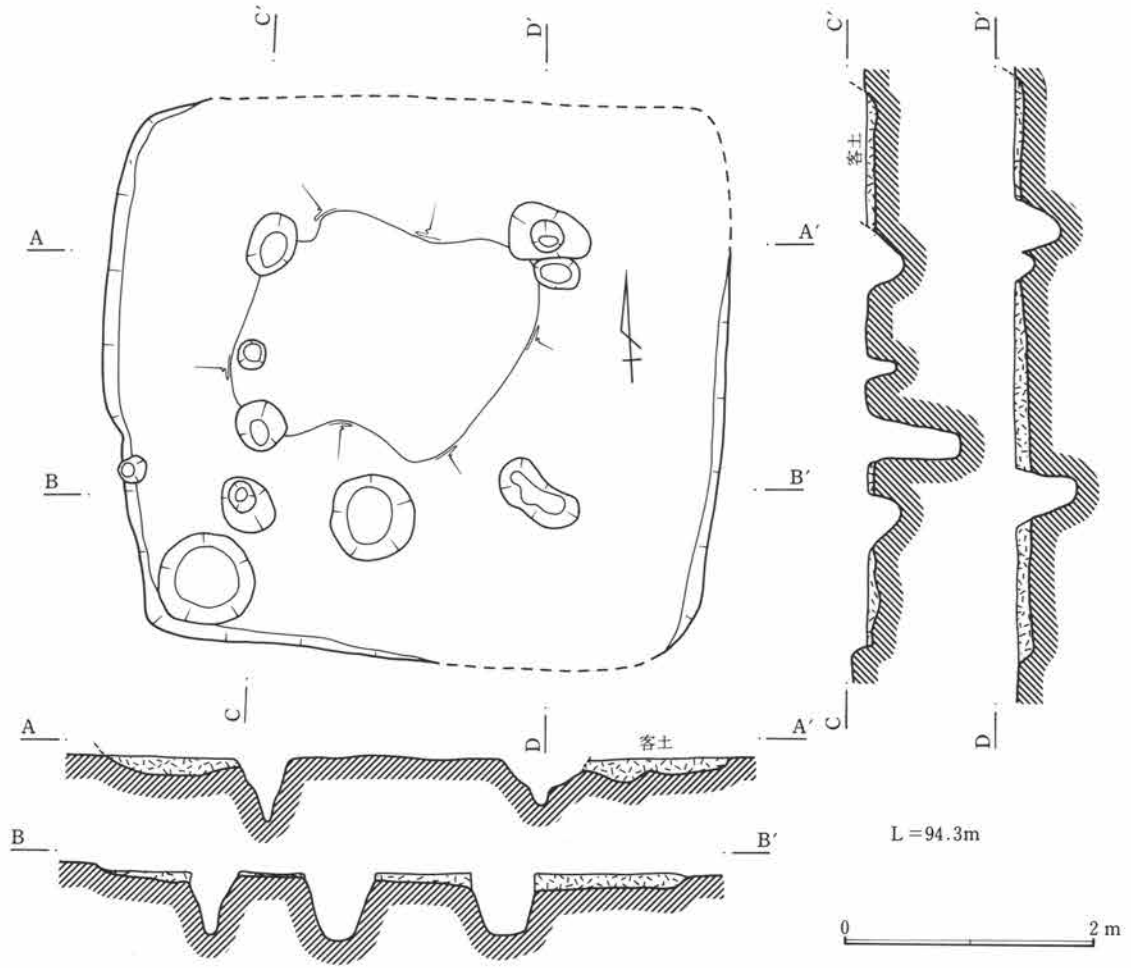
**柱穴** 支柱穴を4箇所検出している。支柱穴は径40cm前後、やや不整形な円形で底部が著しく細まるものなどがあり、形状、規模はそれぞれ一様でない。深さは50cm前後である。

**炉跡** 不明。検出できなかった。

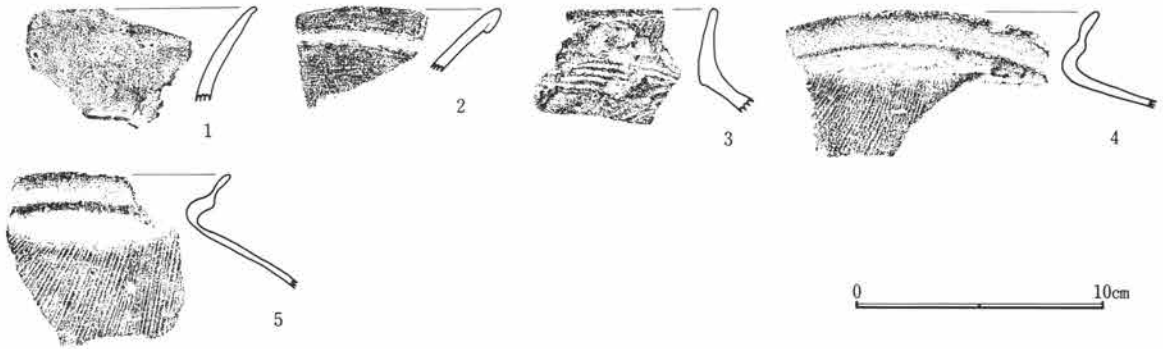
**遺物出土状態** 覆土中より弥生土器破片、古式土師器破片(S字状口縁甕)など数点出土。

**時期** 古墳前期

**他の遺構との関係** 東南部で床面同レベルで119号住居(弥生後期第3期)と重複。



第207図 120号住居



第208図 120号住居出土遺物

第186表 120号住居出土土器観察表 (拓本)

1 壺 内面ヨコナデ、粗砂粒混入、橙色	3 甕 中砂粒混入、橙色	5 S字状口縁甕 細砂粒混入、橙色
2 壺 内面ヘラミガキ、砂粒混入、淡橙色	4 S字状口縁甕、中砂粒混入、淡橙色	

125号住居跡 (第209図、図版60)

**位置** C地区住居群の北端部に位置する(46-C31)。東に124号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 形状は不明。住居の大部分は124号住居の覆土上に造られている。住居形状は西南コーナー一部で部分的に把握できるにすぎない。重複部の住居の輪郭は125号住居の遺物の分布域をもって推定するより他ない。方位はN-0°。

**床面** 床面は暗褐色粘質土を平坦に踏み固めている。床面上には黒色灰の広がりが見られる。

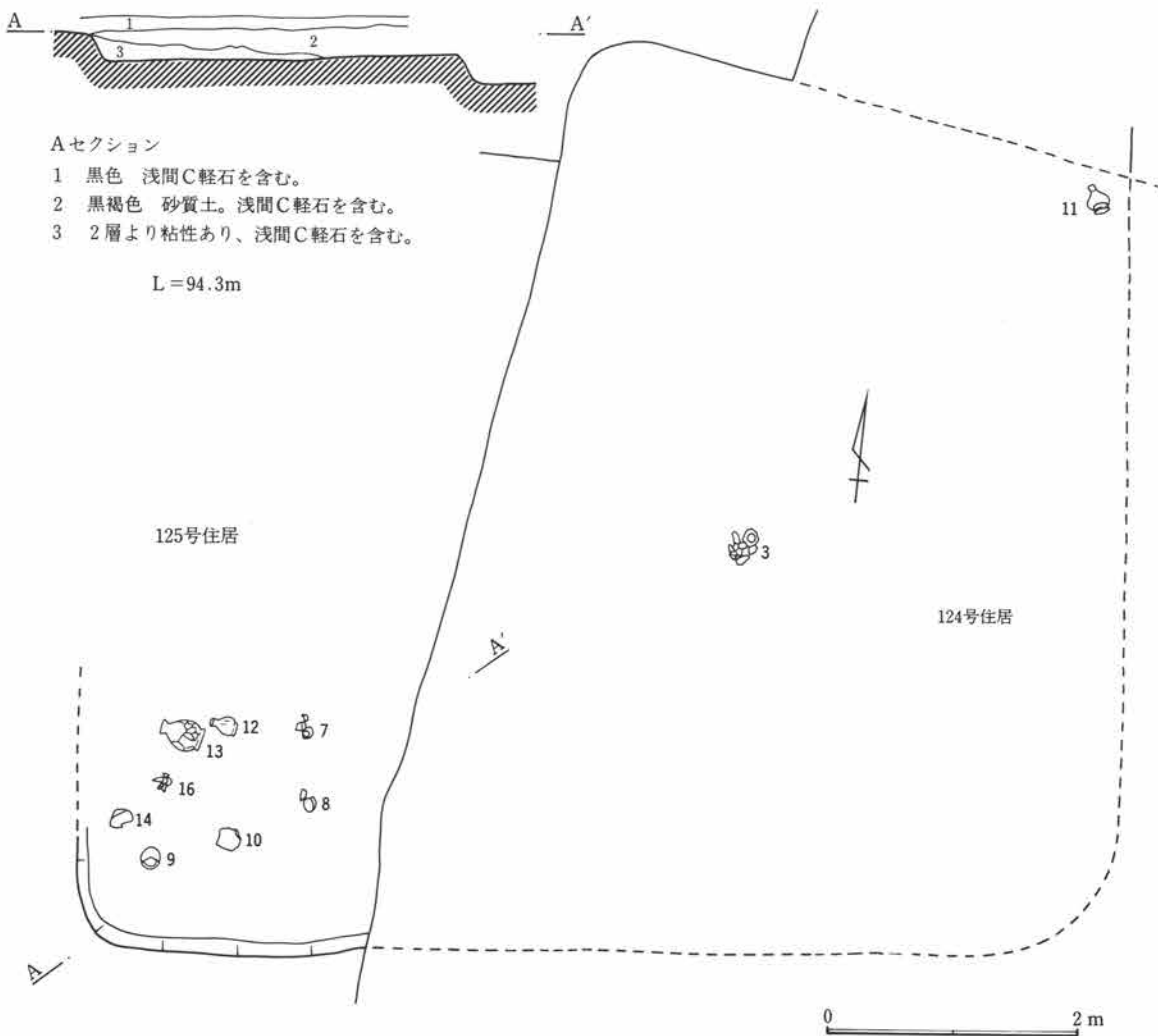
**柱穴** 支柱穴は検出できない。124号住居内においても本住居の柱穴は確認できない。

**炉跡** 炉跡は不明。検出できない。

**遺物出土状態** 西南コーナー部にはほぼ欠損のない古式土師器の完形品、及び大形破片が多量に出土している。土器は床面との間隙なく横倒し状態で密集していた。住居内における土器の分布域は西南コーナー部以外にも完形土器及び大形破片で124号住居の覆土上面に点在していた。

**時期** 古墳前期

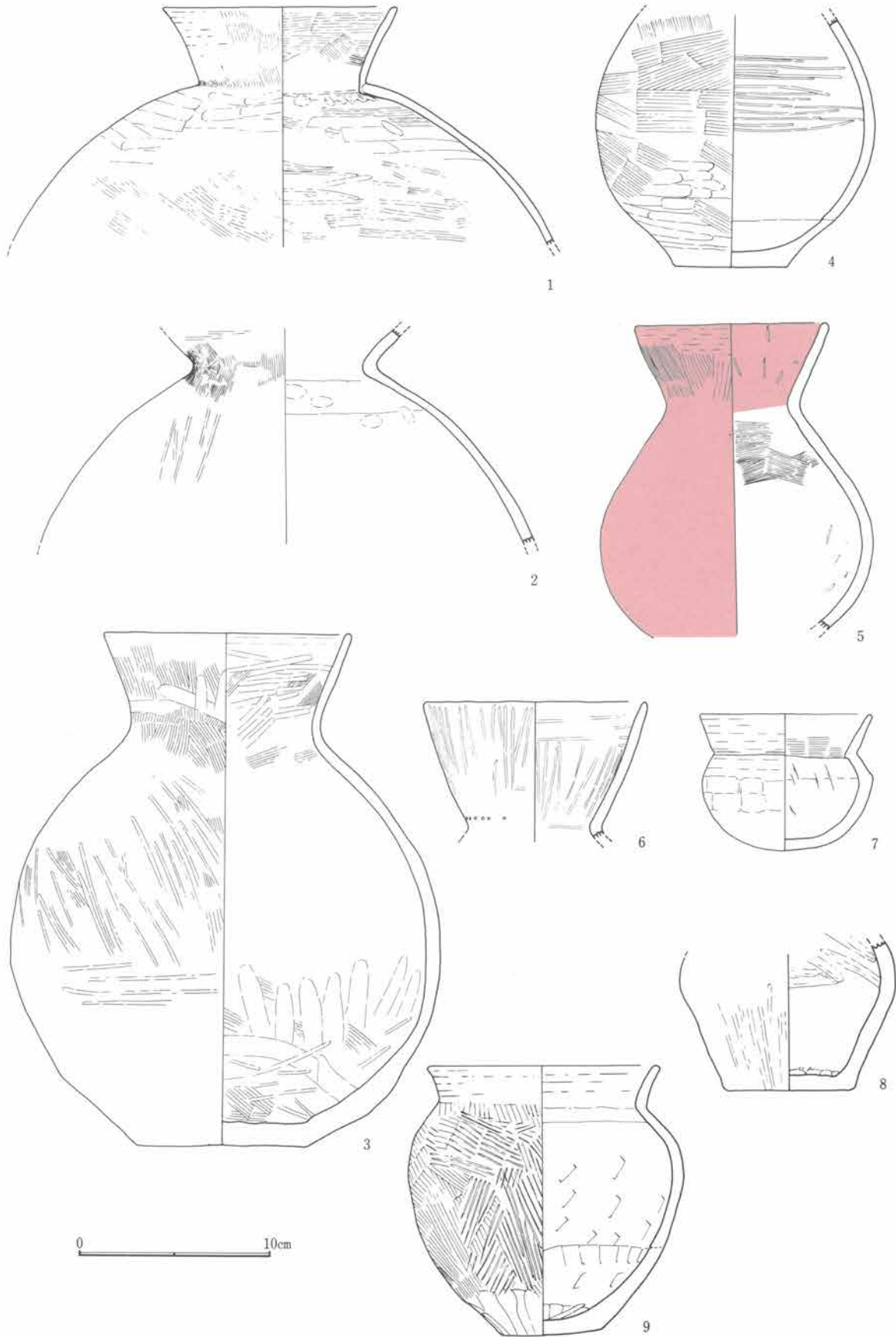
**他の遺構との関係** 住居の大部分が124号住居(弥生後期第3期)と重なっている。床面レベル差は約25cm。



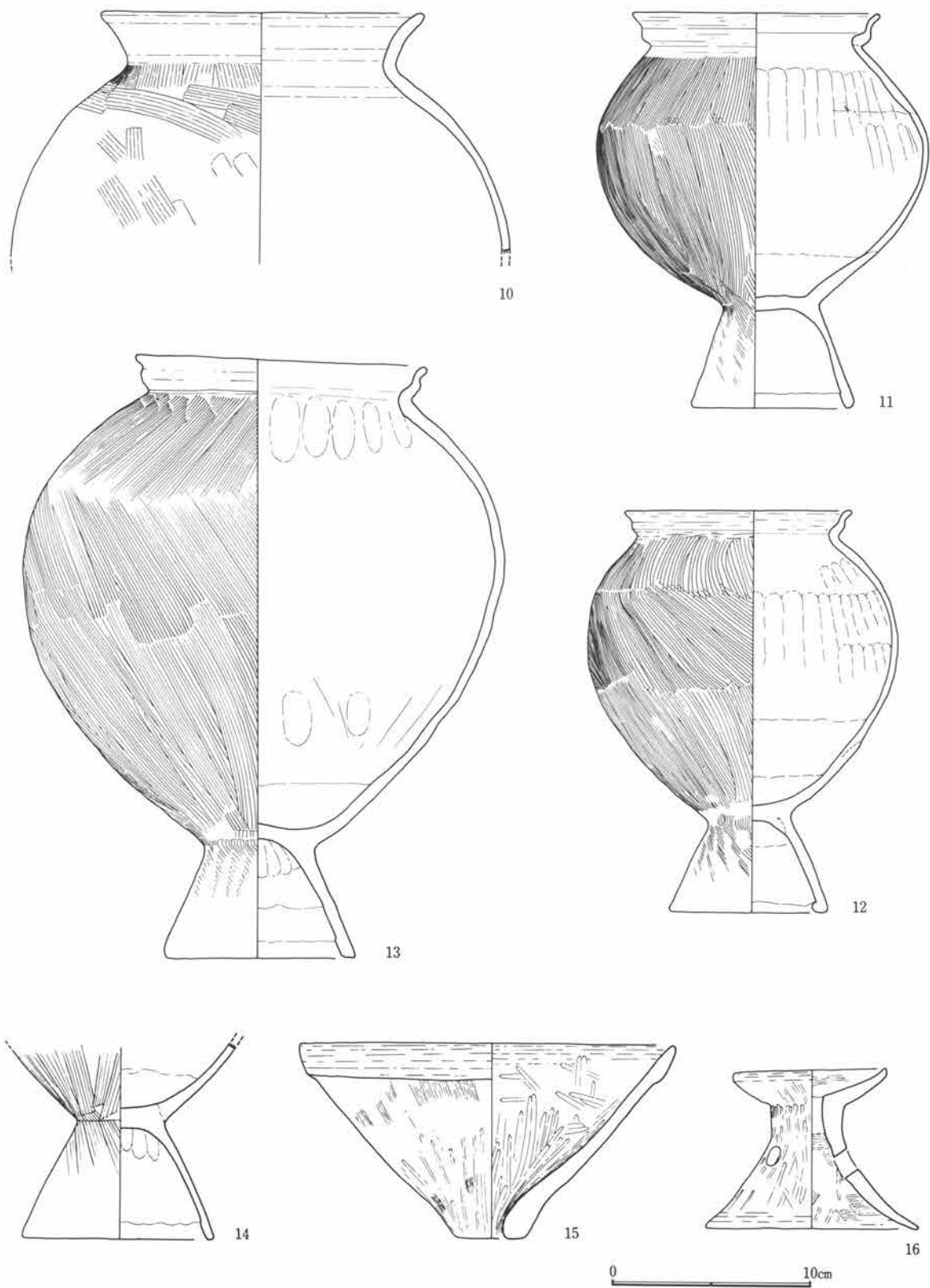
第209図 125号住居

第187表 125号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 12.3	口辺部はやや外反気味。	外面 口辺部はハケメ後ナデ、胴上部はヘラケズリ、胴部はハケメ後ナデ。 内面 口縁部はハケメ、口辺部はハケメ後ナデ、胴上部はハケメ指頭痕あり、胴部はハケメ。	粗砂粒混入 堅緻 明黄褐色	口縁～胴上位 $\frac{1}{2}$ 周
2	壺			外面 口辺部はヘラミガキ、頸部はハケメ、胴部はヘラミガキ。 内面 ナデ、胴上部に指頭痕あり。	細砂粒混入 堅緻 橙色	口辺～胴上部
3	壺	口 13.2 胴 22.4	頸部は比較的強くくびれ、口辺部は直状に外反する。	外面 口縁部はヨコナデ、口～頸部はハケメ後ヘラナデ、胴～底部はハケメ後ヘラミガキ。 内面 口縁部はヨコナデ、口～頸部はハケメ後ヘラミガキ、胴部はハケメ、指ナデ、ヘラミガキ、底部はハケメ。	中砂粒混入 堅緻 明赤褐色	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 周
4	壺	胴 14.5	胴下位に接合痕あり。	外面 細かいハケメ、胴下部はハケメ後ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	粗砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	口辺～底部 $\frac{1}{2}$ 欠損
5	壺	口 9.9	口辺部は直状に外傾し、口縁部は僅かに内湾する。	外面 口縁部はヨコナデ、口辺部はハケメ、胴部はヘラミガキ。 内面 口縁部はヨコナデ、口～胴部はハケメ後、ヘラナデ。	中砂粒混入 やや堅緻 にぶい橙色	口縁～胴下位 $\frac{1}{2}$ 周 内外面共に丹彩
6	埴	口 11.8	口辺部は弱く内湾する。	外面 口辺部はヘラミガキ、口辺下位に棒状工具による圧痕。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい黄橙色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周
7	埴	口高 9.0 7.0	口辺は直状に比較的短かく外反する。口辺下端に強い稜を作る。	外面 口辺～頸部はヨコナデ、体部はヘラケズリ、底部にミガキ痕残る。 内面 口辺部はハケメ、体部はヘラナデ。	粗砂粒混入 堅緻 橙色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 欠損
8	壺	底 6.8		外面 ナデ。 内面 ナデ、底部に指頭痕あり。	細砂粒混入 堅緻 灰褐色	胴部～底部
9	甗	口 12.1 胴 14.4 底 5.3 高 14.0		外面 口辺部はハケメ後ヨコナデ、頸～胴部はハケメ、底部はヘラケズリ。 内面 口辺部はヨコナデ、胴～底部はヘラナデ。	細砂粒 黒色粒 混入 堅緻 灰褐色	完形
10	甗	口 16.4	口辺部は外反する。	外面 口辺部はヨコナデ、頸部はハケメ、胴上部はハケメ後ナデ。 内面 口～頸部はヨコナデ、胴上部はナデ。	粗砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	口縁～胴中位 $\frac{1}{2}$ 周
11	S字状口縁甗	口 12.4 脚高 7.8 19.7		外面 口縁部はヨコナデ、胴～脚台部はハケメ 内面 口縁部はヨコナデ、胴上部は指オサエ。	中砂粒混入 堅緻 明褐色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周
12	S字状口縁甗	口 11.8 脚高 7.8 19.9		外面 口縁部はヨコナデ、頸～脚台部はハケメ。 内面 口縁部はヨコナデ、胴部は指ナデ。	細砂粒混入 堅緻 淡褐色	口縁部一部欠損
13	S字状口縁甗	口 14.4 胴脚高 24.2 9.3 29.6		外面 口縁部はヨコナデ、胴部はハケメ、脚台部はハケメ、裾はヘラナデ。 内面 口縁部はヨコナデ、胴部はヘラナデ、脚部はヘラナデ、端部はヨコナデ。	細砂粒混入 堅緻 淡褐色	口～胴部一部欠損
14	S字状口縁甗	脚 9.7	脚部は比較的強く開く	外面、ハケメ。 内面 胴下部、ナデ、底面は細砂粒を多く含む粘土を貼る、脚台部は指オサエ痕が巡る。	細砂粒混入 堅緻 黄橙色	胴下位～脚台部



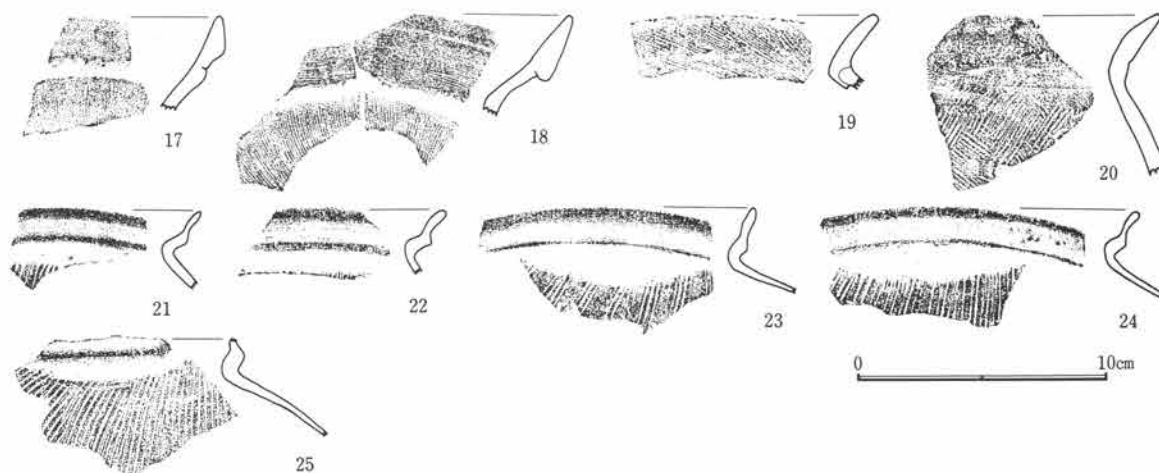
第210図 125号住居出土遺物 (1)



第211図 125号住居出土遺物 (2)



遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
15	甌	口 18.6 底 3.4 孔 1.2	折り返し口縁を持つ。	外面 口辺部はヨコナデ、胴上部はハケメヘラミガキ。 内面 口辺部はヨコナデ、体部はヘラミガキ。	細砂粒混入 やや堅緻 にぶい橙色	口縁部一部欠損
16	器台	器受 7.7 脚 10.7 高 8.0 中央孔 1.1	坏部上端部に面を作る。面の下端に弱い稜を持つ。	外面 口縁部はヨコナデ、口辺部はヘラミガキ、脚部はヘラミガキ、裾部はヨコナデ。 内面 坏部はヘラミガキ、脚上部はヘラミガキ、ハケメ、裾部はハケメ後ヘラミガキ。	粗砂粒混入 堅緻 赤橙色	完形



第212図 125号住居出土遺物 (3)

第188表 125号住居出土土器観察表 (拓本)

17 壺 砂粒混入、灰白色	21 S字状口縁甕 内面(a)~(c)ヨコナデ、砂粒混入、灰褐色	23 S字状口縁甕 砂粒混入、にぶい橙色
18 壺 砂粒混入、灰白色	22 S字状口縁甕 砂粒混入、灰褐色	24 S字状口縁甕 内面(a~b)ヨコナデ、砂粒混入、灰褐色
19, 20 甕 中砂粒混入、橙色		25 S字状口縁甕 砂粒混入、橙色

## 135号住居跡 (第213図、図版60)

**位置** C地区住居群の北端部、染谷川の河岸縁辺部に位置する(45-C34)。東に123号住居と重複し、南に112号住居と隣接する。

**形状、規模、方位** 形状、規模は不明。東南コーナー部が残存しているのみで住居の大部分は河川により失われている。方位はN-23°-E。

**周壁、壁溝** 残存部の検出状態は良好である。検出できた周壁の高さは約1.5mである。壁土は暗褐色粘質土である。壁溝は検出できない。

**床面** 床面は暗褐色粘質土面を平坦に踏み固めている。

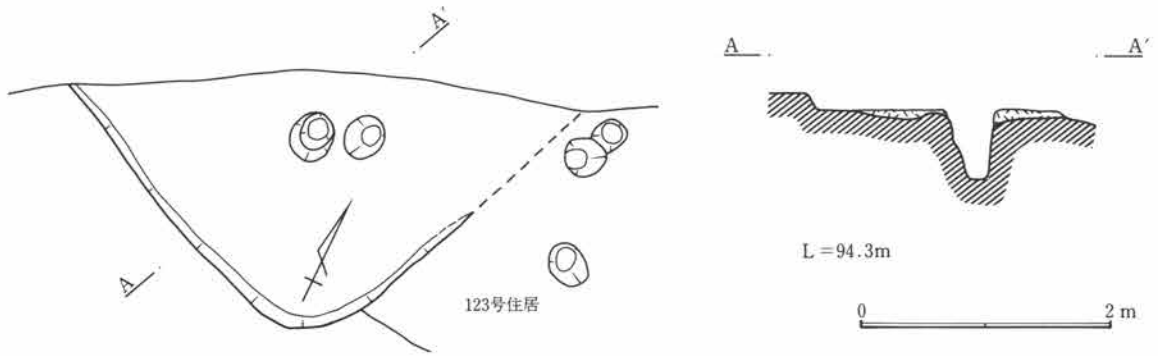
**柱穴** 径約25cmの円形ピットを2箇所検出する。共に深さ40cmで支柱穴の可能性ある。

**炉跡** 不明。

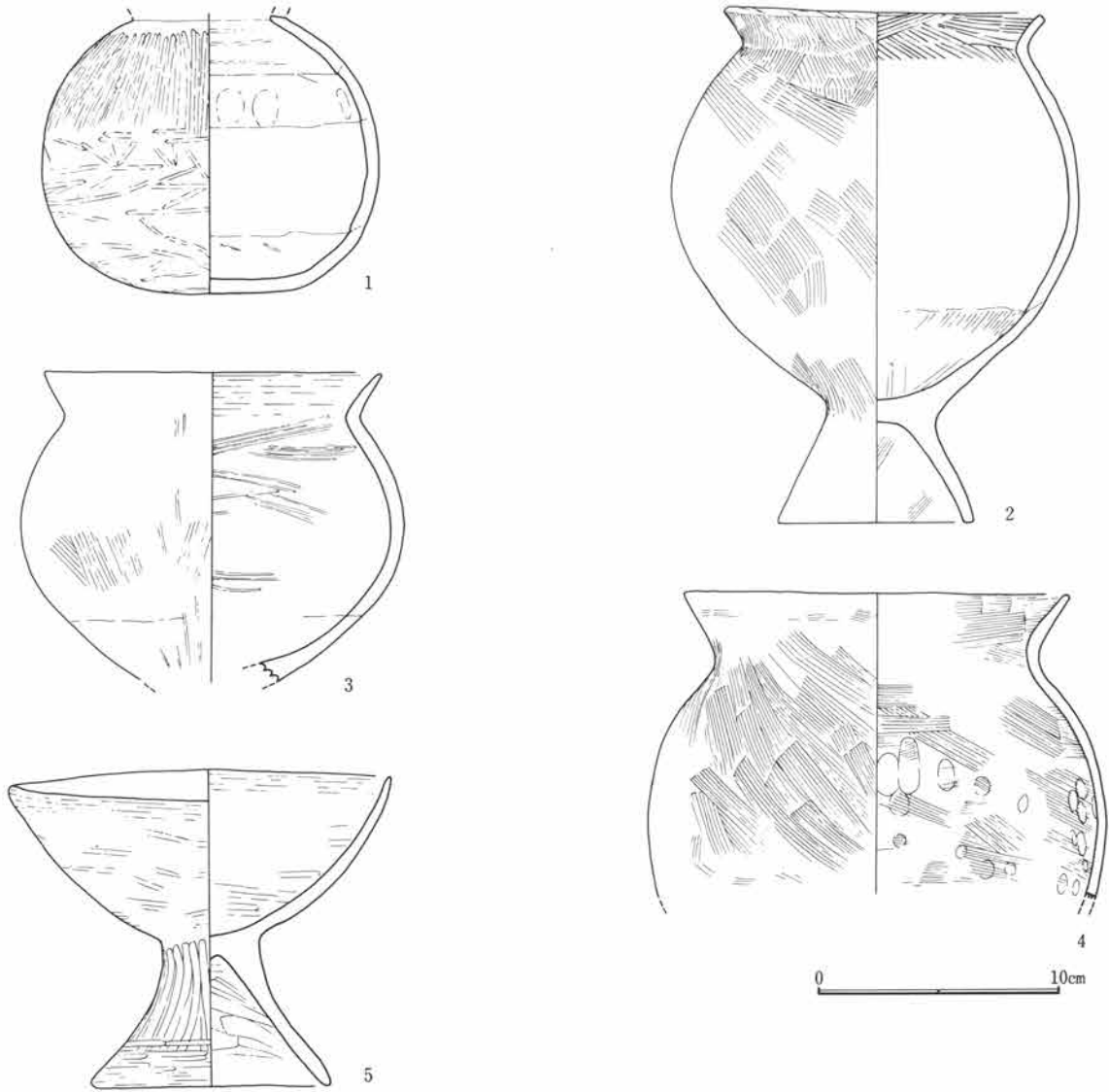
**遺物出土状態** 床面上よりほぼ完形の台付き甕、高坏の破片など多数出土。

時期 古墳前期。

他の遺構との関係 東部で123号住居（弥生後期第1期）と重複。床面は同レベル。



第213図 135号住居



第214図 135号住居出土遺物

第189表 135号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	埴	底 3.5		外面 ヘラミガキ。 内面 体上部はヘラミガキ。体部はナデ、中部に指頭痕あり。	細砂粒混入 堅緻 にふい橙色	肩～底部
2	台付甕	口 13.4 胴 16.7 脚 8.0 高 20.6	口辺部直状に外反する。頸部は強くくびれる。	外面 ハケメ。 内面 ハケメ。	粗砂粒混入 堅緻 灰白色	ほぼ完形
3	台付甕	口 13.9	口縁部は直状に外反する。胴下部に接合痕が明瞭。	外面 ナデ、ハケメの痕跡は部分的に僅かに見える。 内面 ハケメ後、ヘラミガキ。	砂粒混入 やや軟弱 明赤褐色	脚台部欠損
4	甕		口辺部直状に外反する。	外面 口辺部はハケメ後ナデ、胴部はハケメ。 内面 ハケメ、胴部は指頭痕あり。	細砂粒、黒色粒 混入 堅緻 灰褐色	口縁～胴部1/4周
5	高 坏	口 15.9 脚 9.9 高 13.0	坏部内湾する、坏部は全体的に傾きを持っている。	外面 口縁部はヨコナデ、坏部はナデ、脚部はヘラミガキ、裾部はヨコナデ。 内面 口縁部はヨコナデ、坏部はヘラミガキ、脚部はヘラケズリ。	細砂粒、黒色粒 混入 堅緻 淡橙色	口辺部一部欠損

## 140号住居跡 (第215図、図版61)

**位置** C地区住居群の中央部西よりに位置する(69-C34)。西半部に2号周溝墓が重複する。

**形状、規模、方位** 方形を呈する。規模は北東-西南方向に5.5m、北西-東南方向に5.2mを測る。方位はN-44°-E。

**周壁、壁溝** 周壁は2号周溝墓との重複部で部分的に失われているが、ほぼ全周検出している。確認できた周壁の高さは10cm前後である。壁土は黄褐色ローム質土(第V層)。壁溝は東南周壁下に部分的に浅く認められる。

**床面** 黄褐色ローム質土を堅く踏み固めた面を検出する。2号周溝墓東溝との重複部では溝の覆土上に黒色粘質土とロームブロック混土で貼り床を造っている。

**柱穴** 支柱穴を3箇所検出している。検出できた支柱穴は西側の3箇所であったが、支柱は4本構造であろう。検出した支柱穴は周溝墓との重複部であるため、ピットの下部を検出するにとどまった。東側については不整形な浅い窪みを検出しており、これが支柱穴となるだろう。

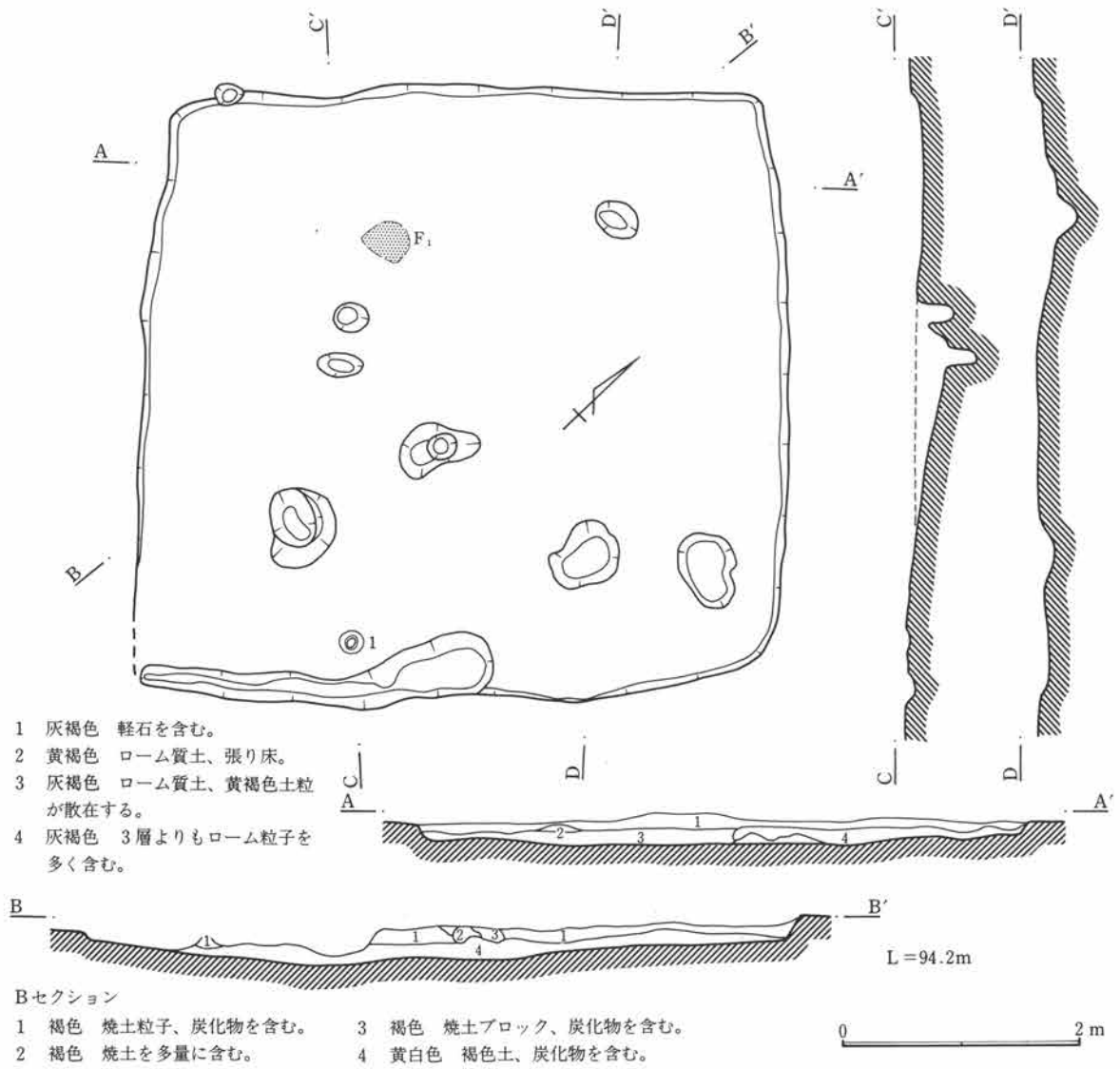
**炉跡** 住居西部の支柱の位置(支柱穴は確認できないが)北東傍らに焼土帯がある(F1)。しかし場所に炉跡と認めるのは難しい。

**遺物出土状態** 床面直上、あるいは貼り床面中に古式土師器壺、甕、高杯などの破片が出土している。

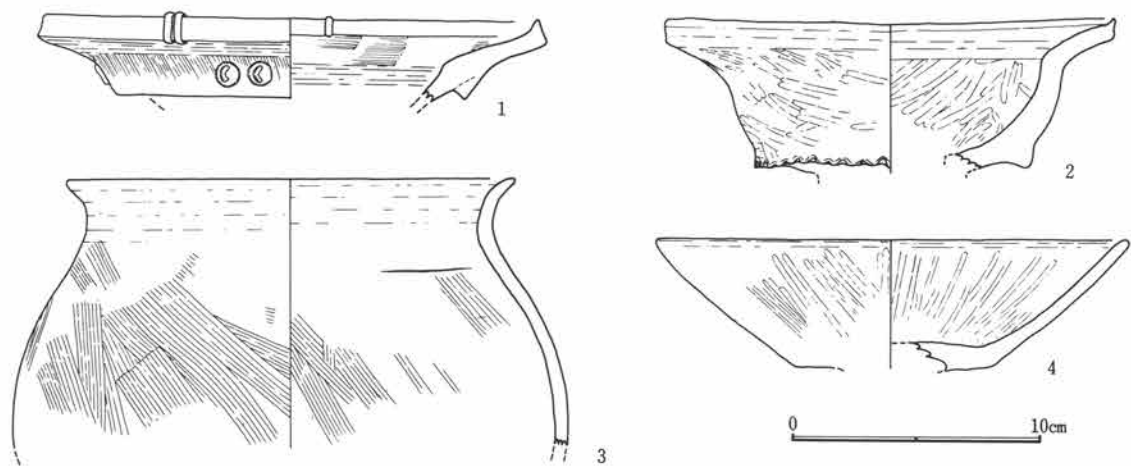
**時期** 古墳前期

**他の遺構との関係** 2号周溝墓(弥生後期第1~2期)上に張り床面を造っていることから、2号周溝墓の方が古い。

6 検出した遺構、遺物



第215図 140号住居



第216図 140号住居出土遺物

第190表 140号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 19.7	口縁部は短く強く立ち上り、外側に凹形の面を作る。外面口縁下の凸帯は貼り付けた際の接合痕明瞭。	外面 口縁はヨコナデ、口縁下凸帯上には円形貼付文を2個並びに5箇所付している。 内面 ハケメ後ヨコナデ。	微砂粒混入 やや堅緻 灰白色	口縁～頸上位全周
2	壺	口 18.0	口辺部は段を有し口縁部は外反する。稜にキザミ。	外面 口縁端部はヨコナデ、口辺部はヘラミガキ。 内面 口縁部はヨコナデ、口辺部はヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 橙色	口縁1/2周
3	甕	口 17.8	口辺部は緩やかに外反する。	外面 口辺部はヨコナデ、頸～胴部はハケメ。 内面 口辺部はハケメ後ナデ。	中砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	口縁～胴部1/4周
4	高 坏	口 19.0	坏部・底部に稜を持つ。	外面 口縁部はヨコナデ、坏部はヘラミガキ。 内面 口縁部はヨコナデ、坏部はヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 橙色	脚部欠損

## 141号住居跡 (第217図、図版61、62)

**位置** C地区住居群の中央部西よりに位置する(55-C31)。160号住居と大きく重なる。

**形状、規模、方位** 隅丸方形を呈する。規模は北東-南西方向に4.7m、北西-南東方向に4.6mを測る。方位はN-49°-E。

**周壁、壁溝** 周壁は全周にわたって良好に検出している。壁土は暗褐色粘質土(第IVb層)。確認できた壁の高さは20cm前後である。壁溝は検出できない。

**床面** 床面は暗褐色粘質土(第IVb層)で、床面上には黒色灰、焼土が全体的に覆っている。その厚さは場所によっては2~3cmある。覆土中にも焼土塊、炭化物が目立つところから火災に遭ったと思われる。

**柱穴** 不明。検出することができなかった。

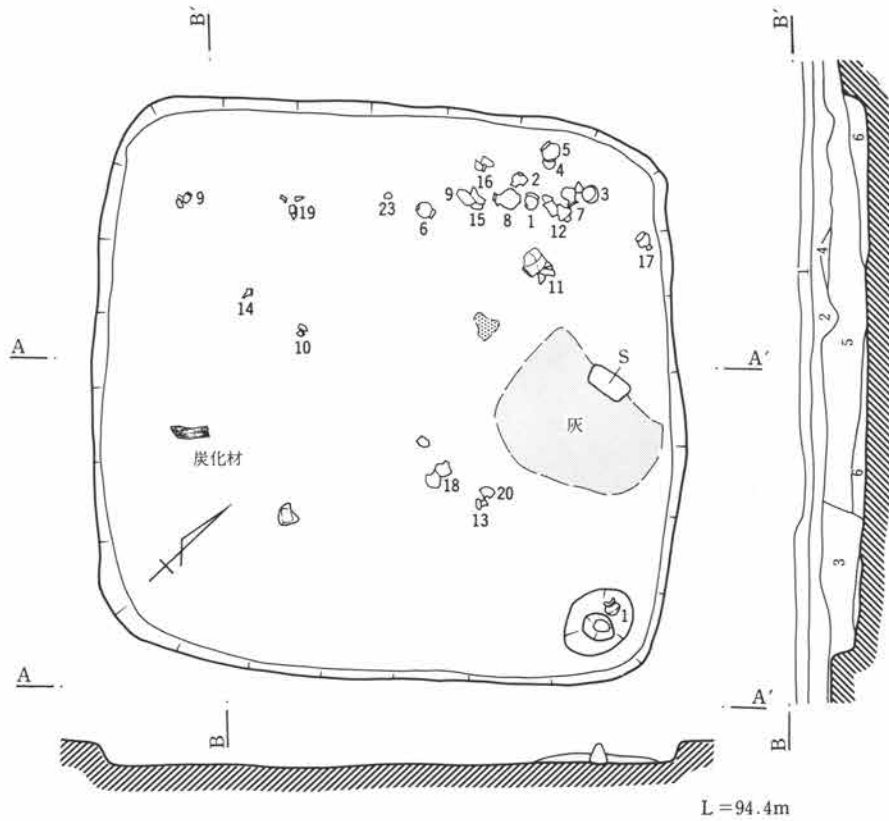
**炉跡** 中央部やや北寄りに焼土帯がある。これが炉跡の可能性があるとと思われるが不整形、小規模に過ぎることから確実とは言い難い。

**遺物出土状態** 本住居においては多数の古式土師器完形土器、大形破片が、特に住居の北半部に集中して多量に出土している。完形土器はほとんど欠損のないものが多く見られ、また、器種構成としては全般にわたっているが比較的壺が多く見られる。完形土器は床面に密着し、横倒し状態で密集している。

**覆土** 覆土は床面上5~10cm程は炭化物、焼土を多量に混じる土層である。床面上30cmには浅間C軽石層の厚さ5cm前後の純層が見られる。

**時期** 古墳前期

**他の遺構との関係** 本住居は160号住居(弥生後期第1期)の覆土上に造られている。



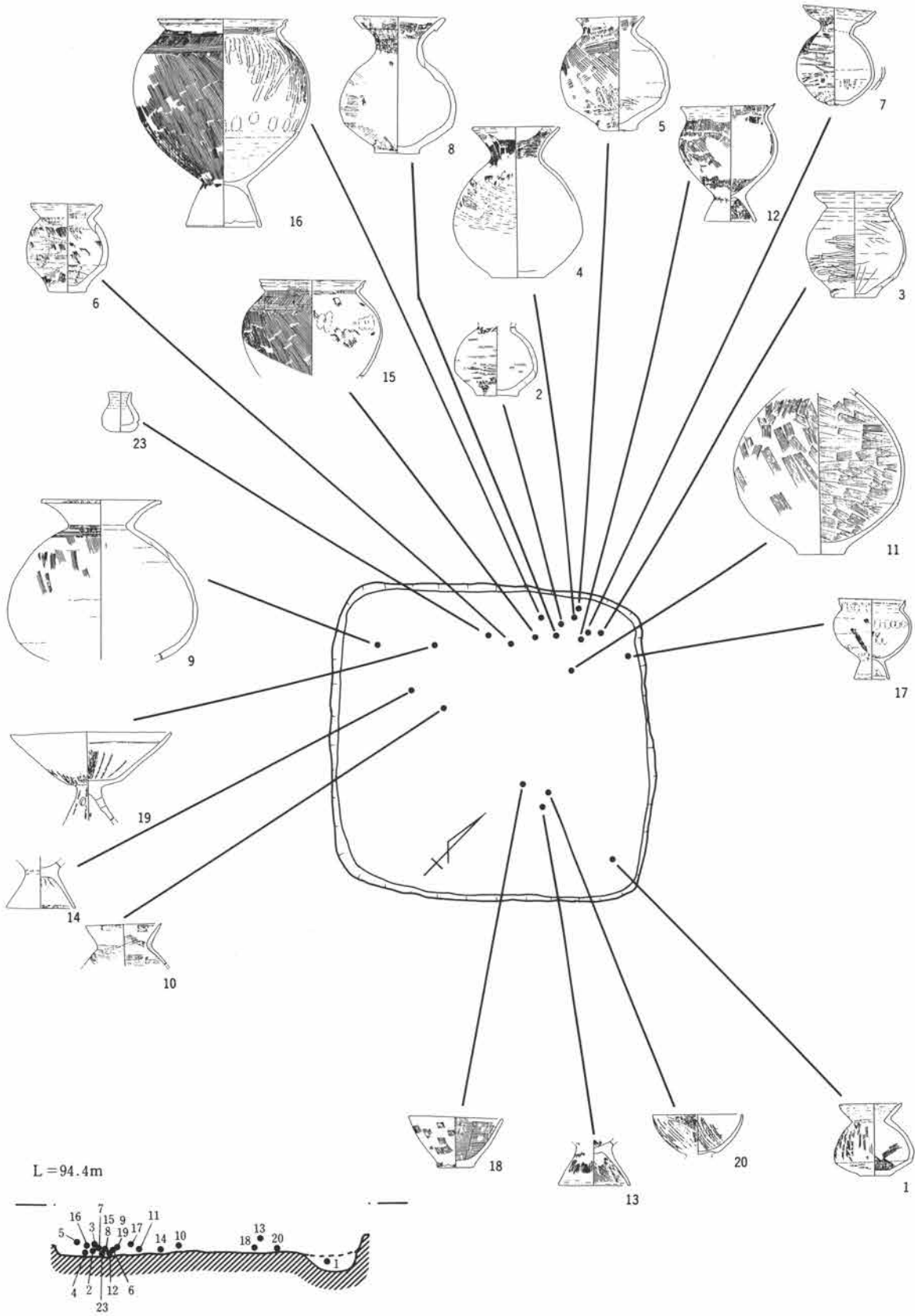
- Bセクション
- |                       |                              |
|-----------------------|------------------------------|
| 1 黒色 古墳水田耕土。          | 4 浅間C軽石純層。                   |
| 2 黒褐色 浅間C軽石を含む。       | 5 暗黒褐色 炭化物を多量に含む。浅間C軽石は含まない。 |
| 3 黒褐色 浅間C軽石の量が2層より多い。 | 6 炭化物、焼土粒子を含む。               |

0 2 m

第217図 141号住居

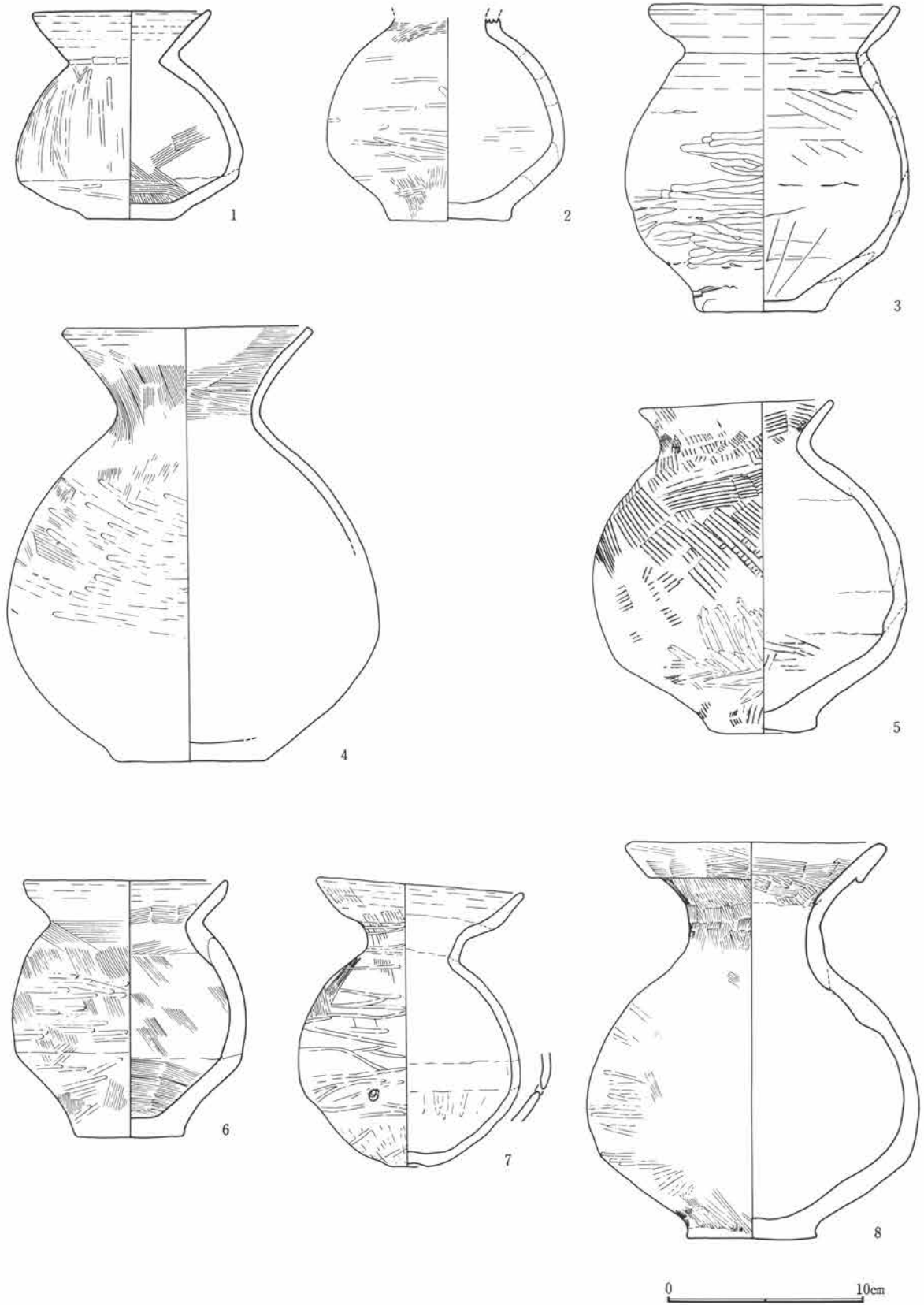
第191表 141号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 9.0 胴 11.4 底 5.0 高 10.4	口辺部直状に外反する。胴下部稜をもつ。	外面 口辺部はヨコナデ、頸部はへら痕、胴部はへらミガキ、底部はへらミガキ。 内面 口辺部はヨコナデ、胴～底部はハケメ。	粗砂粒混入 堅緻 淡赤橙色	口辺部 $\frac{1}{2}$ 欠損
2	壺	胴 12.1 底 6.3	胴下部接合部は弱い稜を持つ。	外面 頸部はハケメ、胴～底部はハケメ後へらミガキ。 内面 へらミガキ。	細砂粒、黒色粒混入 やや堅緻 褐灰色	口辺部欠損
3	壺	口 12.3 胴 14.4 底 6.3 高 15.4	口辺部は直状に外反する。	外面 口辺部はヨコナデ、頸～底部はハケメ後、へらミガキ。 内面 口辺部はヨコナデ、頸部はハケメ後、へらナデ、胴部はへらナデ。	細砂粒、黒色粒混入 堅緻 にぶい橙色	ほぼ完形
4	壺	口 12.3 胴 18.8 底 7.4 高 21.8	口辺部は直状に外反する。	外面 口縁部はヨコナデ、頸～胴部はハケメ、胴～底部はへらミガキ。 内面 ハケメ。	細砂粒、黒色粒混入 堅緻 淡褐色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周



第218図 141号住居遺物出土位置

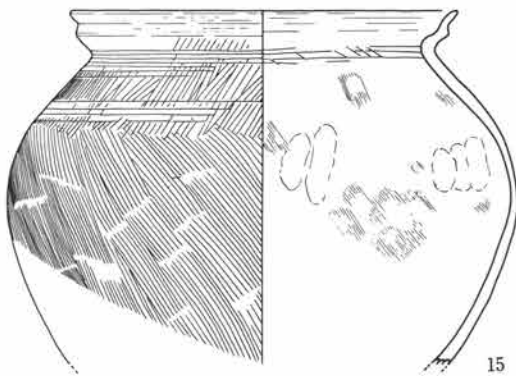
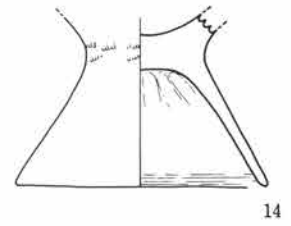
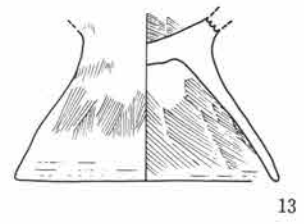
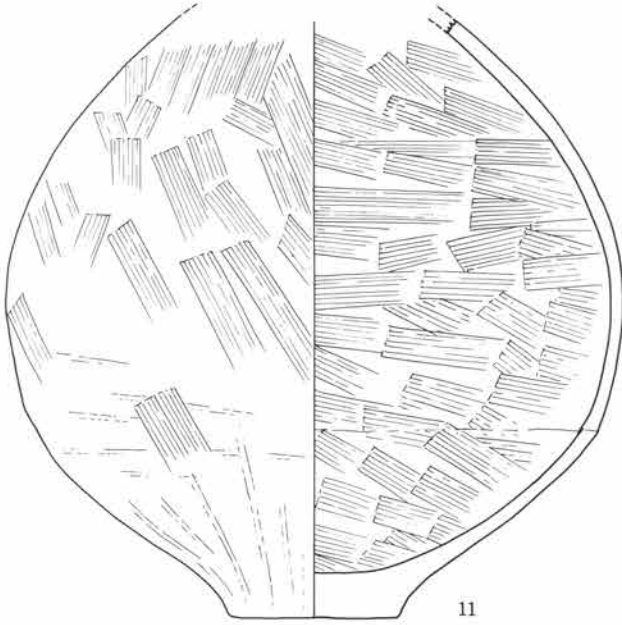
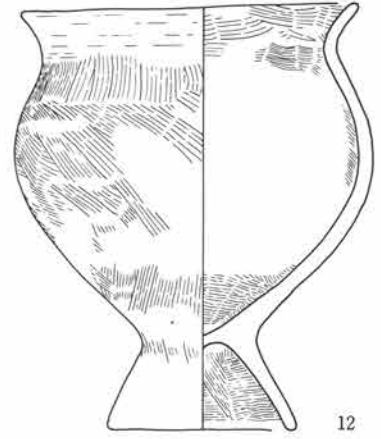
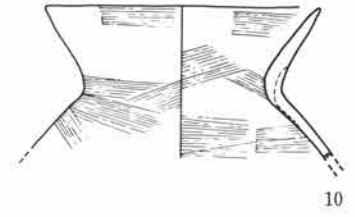
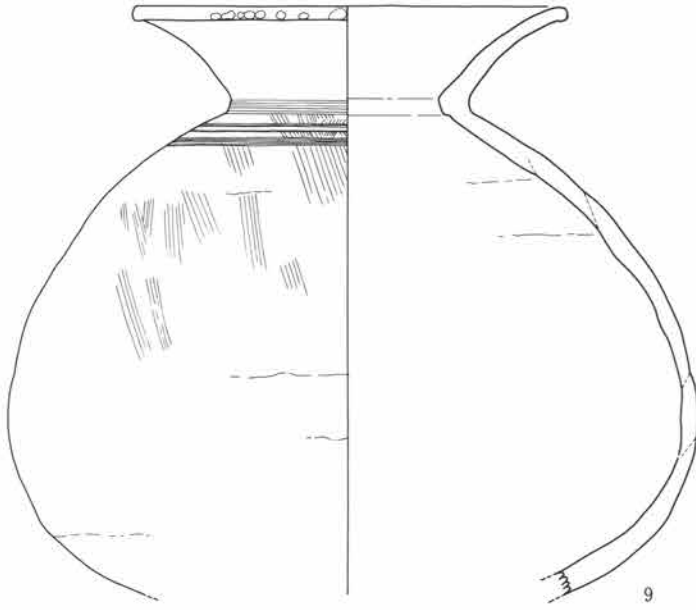
6 検出した遺構、遺物



第219図 141号住居出土遺物 (1)

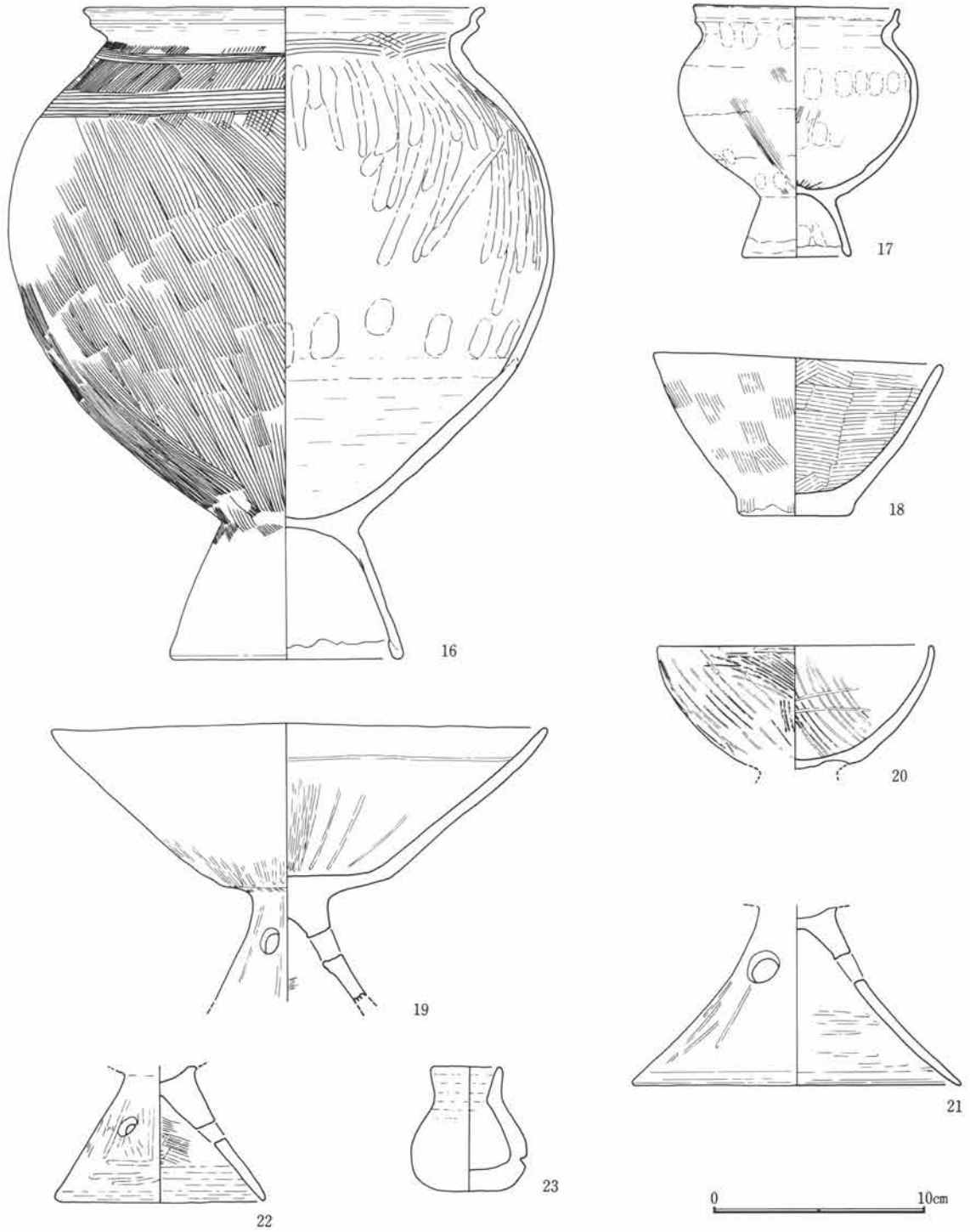


(3) 古墳時代前期の住居跡



0 10cm

第220図 141号住居出土遺物 (2)



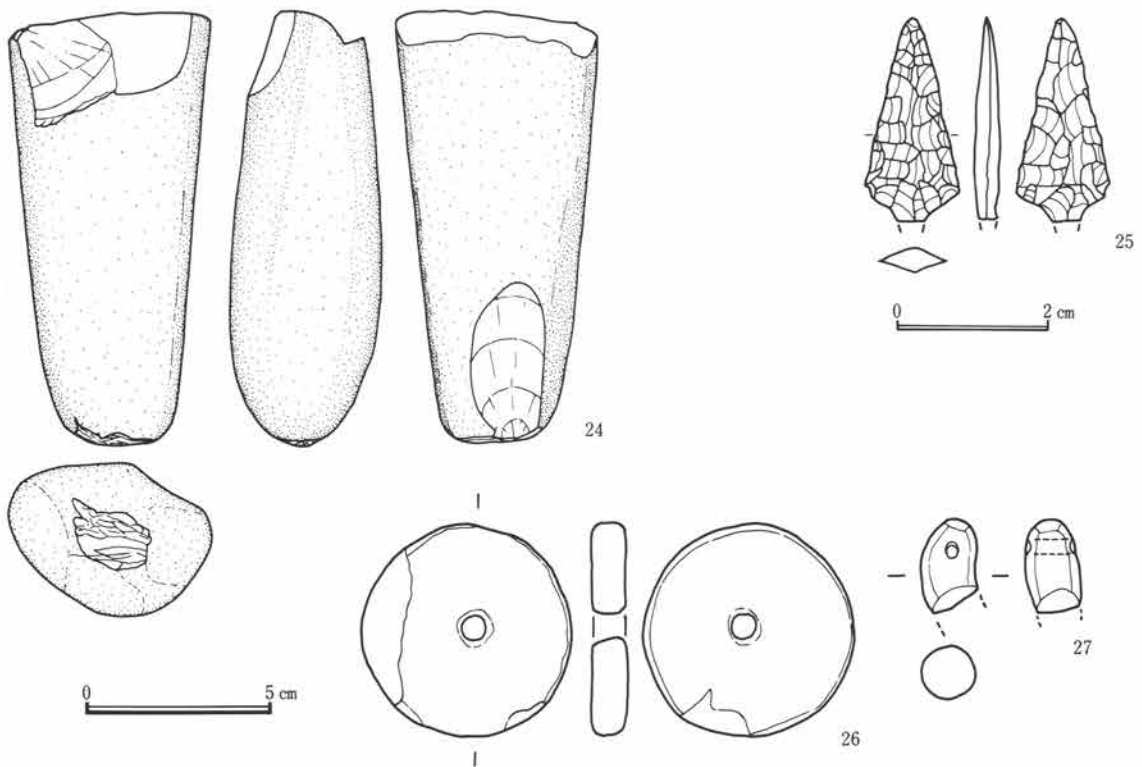
第221図 141号住居出土遺物 (3)

## (3) 古墳時代前期の住居跡

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
5	壺	口 9.5 胴 15.8 底 5.4 高 16.8	口辺部は直状に外反する。	外面 口辺部はヨコナデ、ハケメ。頸～胴部はハケメ、胴下部はハケメ後、ヘラミガキ、底部はハケメ。 内面 口辺部はヨコナデ、ハケメ、頸～底部はヘラナデ。	中砂粒、黒色粒混入 堅緻 にぶい橙色	完形
6	壺	口 10.5 胴 10.8 底 5.3 高 13.0	口辺部は直状に外反する。	外面 口辺部はヨコナデ、頸部はハケメ後ナデ、胴部はハケメ後ヘラミガキ、底部はハケメ後ヘラミガキ。 内面 口縁部はヨコナデ、口～頸部はハケメ、胴～底部はハケメ。	粗砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	口辺部 $\frac{2}{3}$ 欠損
7	壺	口 10.5 胴 11.3 底 1.8 高 14.6	口辺部は段を有する 胴部に1箇所小孔を穿つ。焼成後穿孔。	外面 口～頸部はハケメ後ヨコナデ、胴部はハケメ後ヘラミガキ。底部はハケメ後ヘラナデ 内面 口辺部はヨコナデ。	細砂粒、黒色粒混入 堅緻 灰白色	完形
8	壺	口 12.5 胴 16.8 底 6.6 高 20.0	折り返し口縁、口辺は緩やかに外反する。	外面 口辺部はハケメ頸部はハケメ、胴部はハケメ後ヘラミガキ、底部はハケメ。 内面 口辺部はハケメ、頸部はヘラナデ、底部はハケメ。	細砂粒、黒色粒混入 堅緻 橙色	ほぼ完形
9	壺	口 17.2 胴 27.5	口辺部は緩やかに外反する。	外面 口縁端部はヨコナデ後、刻み目、口辺部はヨコナデ、頸部はハケメ後ヨコナデ、胴部はハケメ。 内面 口辺部はヨコナデ。	細砂粒混入 堅緻 灰白色	口～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
10	壺	口 11.0	口辺部は直状に外反する。	外面 ハケメ。 内面 ハケメ。	中砂粒混入 堅緻 明赤褐色	口縁～頸部
11	壺	胴 24.6	胴下位の接合箇所です弱い段を作っている。	外面 単位の短いハケメ後、粗雑なヘラミガキを施す。胴下位の接合部以下はヘラミガキがより丁寧でハケメは目立たない。 内面 細かいハケメを全体に施している外面よりも一層細かい。	細砂粒混入 堅緻 暗赤褐色	口縁～頸部欠損
12	台付甕	口 13.4 胴 14.3 脚 7.2 高 16.7	口辺部は緩く外反する。	外面 口辺部はヨコナデ、胴～底部はハケメ。 内面 ハケメ、脚台部はハケメ。	粗砂粒混入 やや堅緻 灰褐色	胴下位一部欠損
13	台付甕	脚 10.5		外面 ハケメ、裾部はヨコナデ。 内面 脚上部はヘラナデ、脚台部はハケメ、裾部はヨコナデ。	細砂粒混入 やや堅緻 にぶい橙色	脚台部 $\frac{1}{2}$
14	台付甕	脚 10.1	下方へ比較的大きく開く。	外面 接合部にハケあて痕が巡る。 内面 天井部指頭圧痕あり。	細砂粒混入 やや軟弱 浅黄橙色	脚台部 内外面共に荒れている
15	S字状口縁甕	口 15.5 胴 20.5	口縁部は短く外反する。頸部の屈曲が比較的緩い。	外面 口辺部はヨコナデ、頸～胴部は単位の短いハケメ後、胴上部は横ハケ2段。 内面 口辺部はヨコナデ、頸部はハケメ、胴部はハケメ、指オサエ痕あり。	細砂粒、黒色粒混入 やや堅緻 にぶい黄橙色	口縁～胴部 $\frac{3}{4}$ 周
16	S字状口縁甕	口 18.6 胴 26.0 脚 11.0 高 30.5	口縁部は短く外反する、頸部の屈曲は比較的緩く、指オサエ痕が認められる。	外面 口辺部はヨコナデ、胴部は単位の短いハケメ。 内面 口辺部はヨコナデ、頸部はハケメ、胴上部は縦方向の粗いヘラナデ、胴部は指オサエ、脚台部はヘラナデ。	細砂粒、黒色粒混入 堅緻 暗褐色	ほぼ完形

6 検出した遺構、遺物

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
17	台付甕	口 9.5 胴 11.4 脚 4.9 高 11.8	口縁部は直立気味。頸部は比較的くびれが緩い。指オサエ痕が巡る。	外面 口縁部はヨコナデ、頸部はヨコナデ、指オサエ、胴部はハケメ、脚台部はヨコナデ。 内面 口縁部はヨコナデ、胴部は指オサエ、脚台部は指ナデ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	完形
18	鉢	口 13.7 底 5.3 高 7.6		外面 全面ハケメ、底部は一部ハケメ後ナデ。 内面 全面ハケメ、底部は一部ハケメ後ヘラナデ。	中砂粒混入 堅緻 淡橙色	口縁一部欠損
19	高 坏	口 23.4	坏部下部に稜を持ち直状に外反する。脚部に円孔3個穿つ。	外面 坏、底部はヘラミガキ、脚部はヘラミガキ。 内面 坏部はヘラミガキ、脚部はナデ、ハケメ痕あり。	中砂粒混入 やや堅緻 にぶい橙色	坏~脚部 $\frac{1}{2}$
20	高 坏	口 13.0	坏部は内湾する。	外面 ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	中砂粒混入 堅緻 灰白色	坏部 $\frac{1}{2}$
21	高 坏		脚部に円孔3個穿つ。	外面 脚部はヘラミガキ、裾部はヨコナデ。 内面 ヘラミガキ、裾部はヨコナデ。	中砂粒、黒色粒混入 堅緻 にぶい黄橙色	脚部 $\frac{1}{2}$
22	高 坏	脚 10.0	脚部に円孔3個穿つ。	外面 ハケメ後ヘラミガキ、裾部はヨコナデ。 内面 ハケメ後ヘラナデ。	中砂粒、黒色粒混入 やや堅緻 灰白色	脚部
23	ミニチュア	口 3.3 高 5.8 胴 5.4	作りは全体に歪みが目立つ、器壁は厚い。	外面 口縁部はヨコナデ、胴部は丁寧なヘラミガキ。 内面 ナデ。	砂粒混入 堅緻 浅黄橙色	口縁一部欠損



第222図 141号住居出土遺物 (4)

第192表 141号住居出土石器観察表

遺物番号	名称	計測値(mm)	石質	重量(g)	特徴
24		(115.0)×53.5×40.0	黒色頁岩	349.5	一端を欠く細長の自然石で、端部に敲打による大小剥離痕が重なっている。使用による損耗と思われる。
25	打製石鎌	(27.0)×12.8×3.50	黒色頁岩	1.0	形状は整っている。表裏面とも丹念な剥離調整が施こされている、基部を欠く。

第193表 141号住居出土石製品観察表

遺物番号	名称	計測値(cm)	成形	整形	胎土・焼成	色調	備考
26	石製紡錘車	外径 5.6 孔径 0.6	形状は正円形に整えられている、側縁部は角ばっている。	器面は平滑に磨かれている。		明褐色	側縁部に一部欠損あり。

第194表 141号住居出土玉製品観察表

遺物番号	名称	長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	成形	整形	材質	遺存状態備考
27	勾玉	—	1.5	0.3	胴部断面形は丸い。	全面ミガキ表面は滑らか。	土	尾部欠損

## 151号住居跡 (第223図、図版62)

**位置** C地区住居群の中央部に位置する(54-C26)。164号住居と大きく重なり、北西部で173号住居と部分的に重複する。

**形状、規模、方位** 隅丸長方形を呈する。特に小規模である。長軸3.7m、短軸3.0mを測る。方位はN-60°-E。

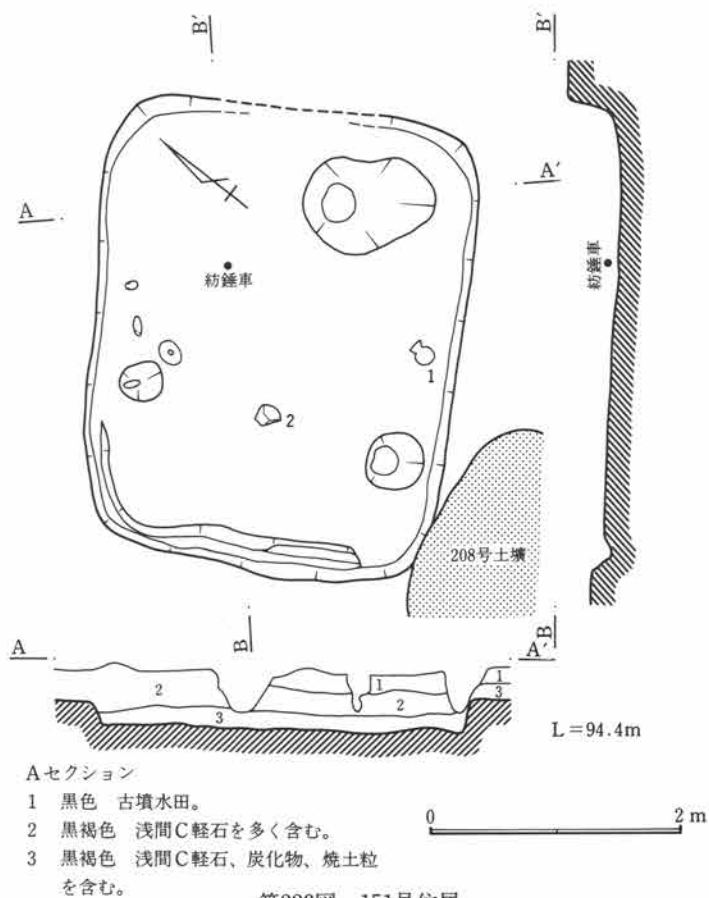
**周壁、壁溝** 周壁の遺存状態は良好である。全周検出する。検出できた壁高は約25cmである。壁土は暗褐色粘質土(第IVb層)と164号住居の覆土である。周溝は南壁下で検出する。幅25cm、深さ15cm。

**床面** 床面は暗褐色粘質土を平坦に踏み固めている。

**柱穴** 支柱穴は不明確。明確に検出できない。

**炉跡** 炉跡は不明。検出できない。

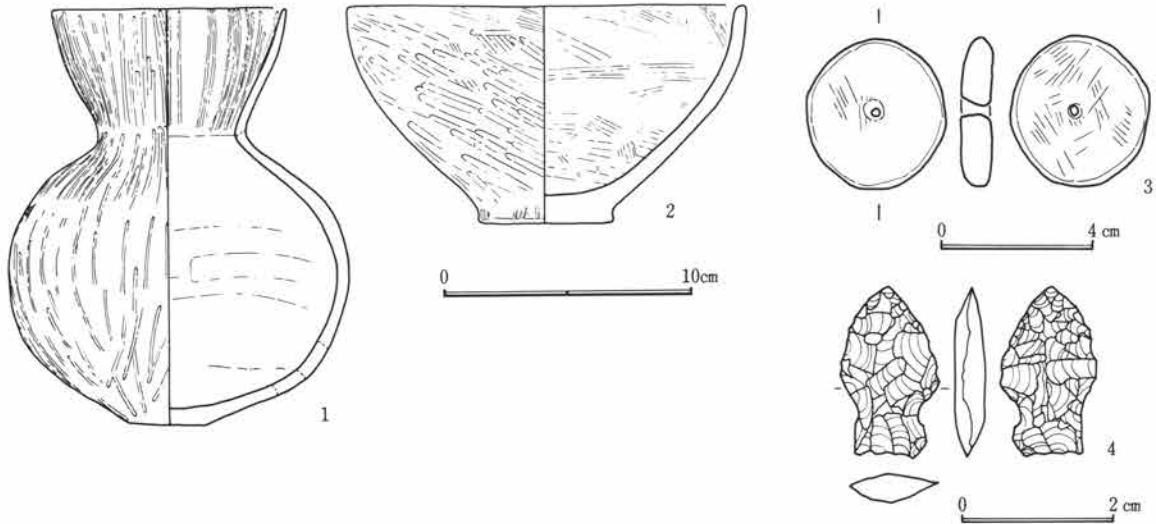
**遺物出土状態** 床面直上より古式土師器が完形、破片で多数出土している。ほぼ完形の甬と鉢は床面密着状態で出土し



ている。又土器の他に住居中央部、床面上10cmから完形の紡錘車が出土している。

時期 古墳前期

他の遺構との関係 本住居は164号住居の覆土上に造られていることから、本住居は164号住居より新しい。



第224図 151号住居出土遺物 (1)

第195表 151号住居出土土器観察表

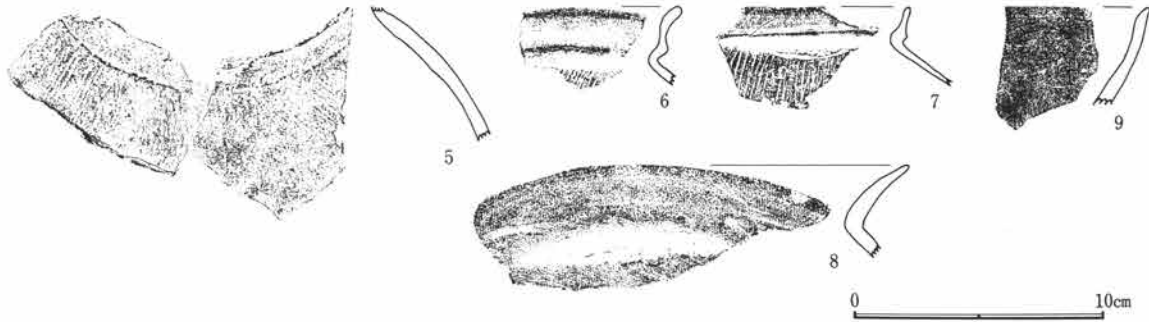
遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	罎	口 9.4 底 3.0 胴 13.6 高 16.5	口辺部やや内湾する。	外面 口縁部はヨコナデ、口辺部はヘラミガキ、頸～底部はヘラミガキ。 内面 口辺部はヘラミガキ、胴部ヘラナデ。	細砂粒、黒色粒混入 堅緻 橙色	完形
2	鉢	口 16.0 底 5.3 高 8.5	体部内湾する。	外面 口辺～体部はハケメ後ヘラミガキ、底部はハケメ、ヘラミガキ。 内面 ハケメ後、ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にふい橙色	完形

第196表 151号住居出土石製品観察表

遺物番号	名称	計測値(cm)	成形	整形	胎土・焼成	色調	備考
3	石製紡錘車	外径 4.0 孔径 0.2	自然石の片面を平坦に擦り整えている。全体に自然石の形を残す。円孔はやや斜めに穿たれ内に向って細くなる。	器面に擦痕が見られる。特に平坦な面に著しい。			完形

第197表 151号住居出土土器観察表

遺物番号	名称	計測値(mm)	石質	重量(g)	特徴
4	打製石鎌	22.0×12.5×4.0	チャート	1.1	先端のするどくない石鎌で無茎。下部に両端面から抉り込みがはいり、基部は平端である。



第225図 151号住居出土遺物 (2)

第198表 151号住居出土土器観察表 (拓本)

5 壺 内面指オサエ痕、砂粒混入、灰白色	7 S字状口縁甕 砂粒混入、褐灰色	9 鉢 内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい 橙色
6 S字状口縁甕 内外面(b)ヨコナデ、砂粒 混入、灰白色	8 埴 内面ヨコナデ、中砂粒混入、灰白色	

## 155号住居跡 (第226図、図版63)

**位置** C地区住居群の北東部大溝の河岸縁辺に位置する (42-C26)。南半部で150号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。規模は長軸5.7m、短軸4.3mを測る。方位はN-11°-E。

**周壁、壁溝** 周壁は150号住居との重複部の他は良好に検出する。検出できた壁高は約20cmである。壁土は他の住居との重複部覆土以外では暗灰褐色でやや砂質である。壁溝は認められない。

**床面** 暗灰褐色土面を平坦に踏み固めている。

**柱穴** 主柱穴は不明確である。北側、および西側周壁下に円形ピット列が見られる。ピットの径は20~30cmで、北辺の2箇所 (P1、P2) では2段に掘り込まれている。ピットの深さは40cm前後である。これらのピットは住居の上屋構造に関わるもの、あるいは周壁防護に関わるものと思われる。

**炉跡** 不明確。中央部に2箇所の焼土帯 (F1、F2) が見られるが位置、及び規模的に炉跡と確定できない。F1は150号住居の炉跡の可能性が大きい。

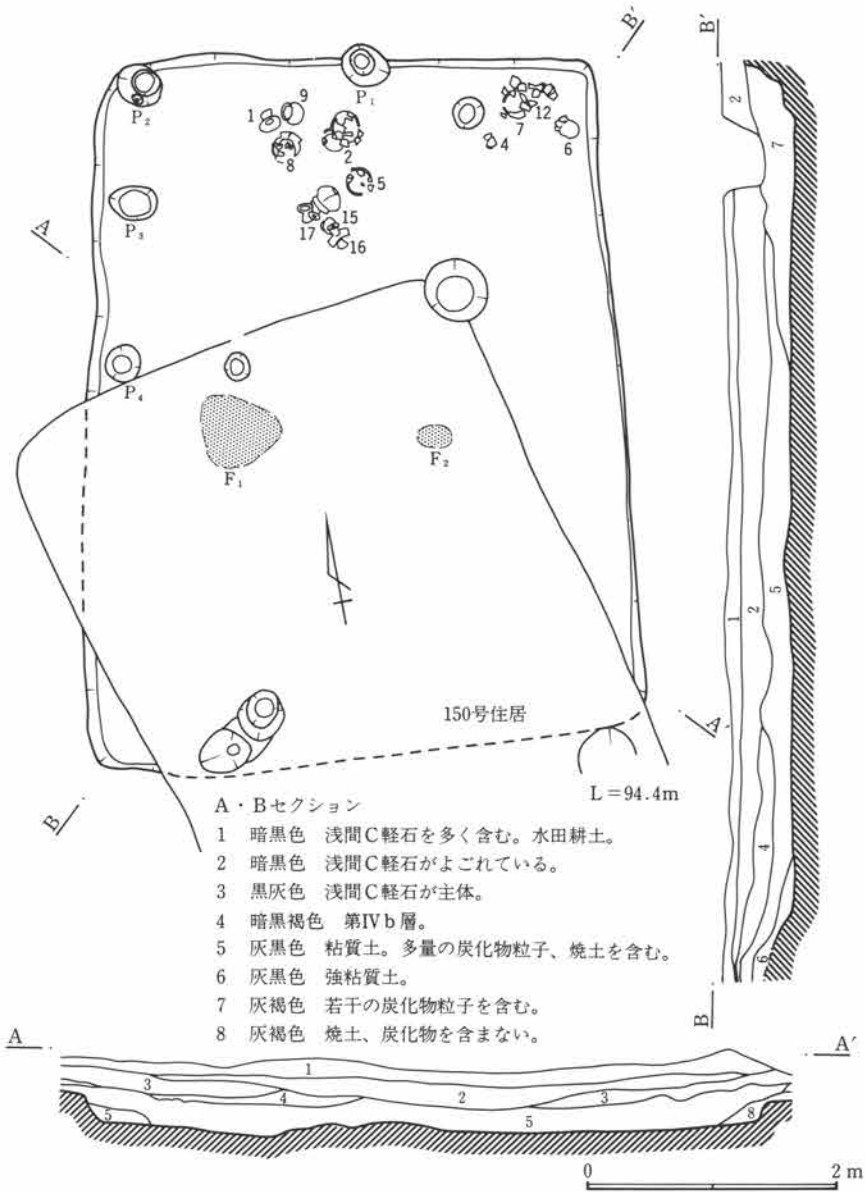
**遺物出土状態** 住居の北半部より、古式土師器完形、又は大形破片が多量に出土している。器種構成は壺、甕、高杯、器台など、器種全般にわたり、完形土器は床面に密着して横倒し状態で出土している。

**時期** 古墳前期

**他の遺構との関係** 南部で150号住居 (弥生後期第3期)、北辺部で179号住居 (弥生後期~古墳前期) と重複する。

第199表 155号住居出土土器観察表

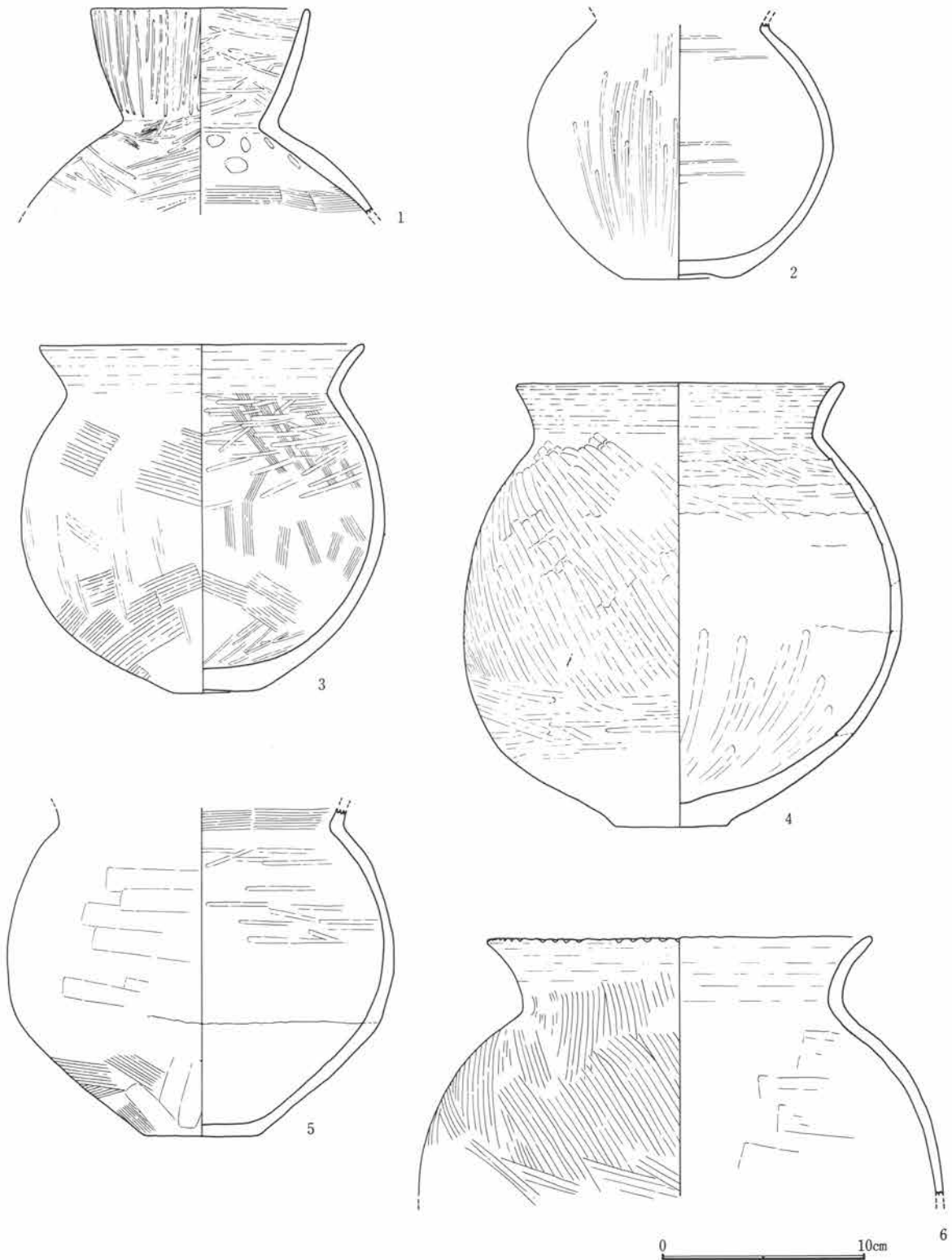
遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 10.8	口辺部はやや内湾する。	外面 ヘラミガキ。 内面 口辺部はヘラミガキ、胴上部はナデ、 胴部はハケメ。	粗砂粒混入 堅緻 橙色	口縁~胴上位全 周
2	壺	胴 14.9	胴中位に最大径があ って、球形を呈する 底部は窪み底。	外面 丁寧なヘラミガキ。 内面 丁寧なヘラミガキ。	砂粒混入 非常に軟弱 にぶい黄橙色	頸~底部1/2欠損



第226図 155号住居

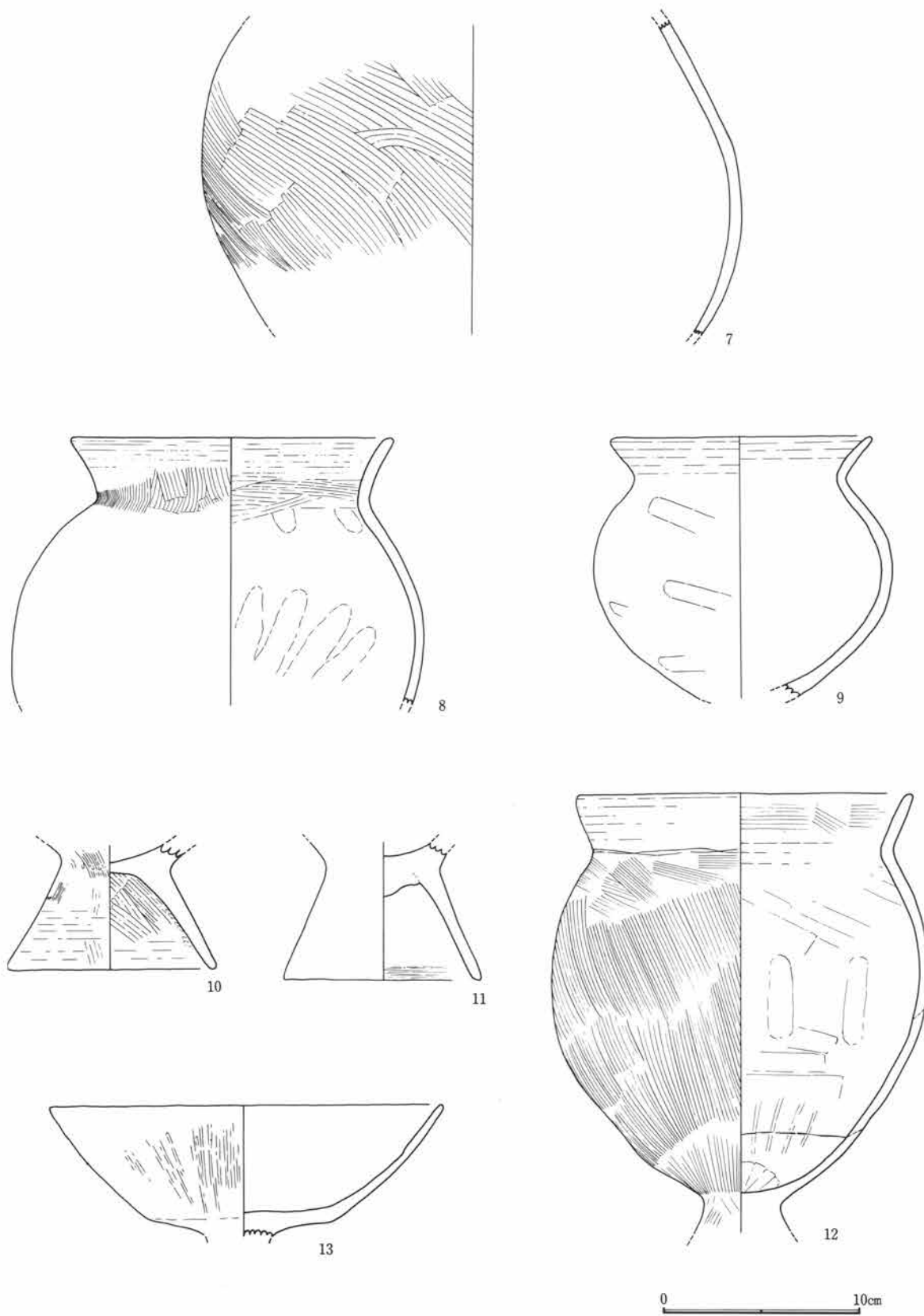
遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
3	甕	口 16.0 底 4.2 高 17.0	口縁部は緩やかに外反する。	外面 口辺部はヨコナデ、胴部はハケメ、ヘラミガキ、底部はヘラケズリ、底面はヘラケズリ。 内面 口辺部はヨコナデ、胴部はヘラミガキ、底部、底面、ハケメ、ヘラミガキ。	粗砂粒混入 堅緻 明褐色	完形
4	甕	口 16.2 胴 21.6 底 5.6 高 21.5	口縁部は緩く外反する。	外面 口縁部はヨコナデ、頸～底部はヘラミガキ。 内面 口縁部はヨコナデ、頸～底部はヘラミガキ。	粗砂粒混入 堅緻 褐色	完形
5	甕	胴 19.0 底 5.6		外面 胴部はヘラナデ、底部はハケメ。 内面 頸部はハケメ、胴部はヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 黒褐色	胴部 $\frac{1}{2}$ ～底部



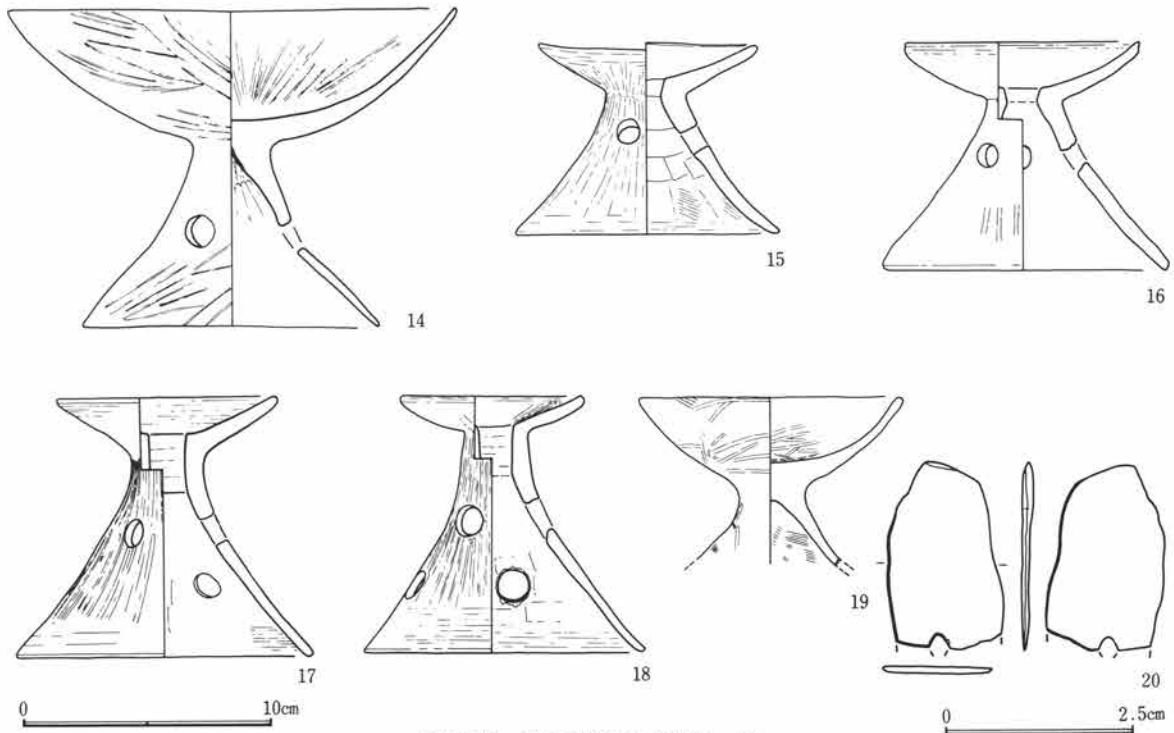


第227図 155号住居出土遺物 (1)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
6	甕	口 19.0	口辺部は緩やかに外反する。	外面 口縁端部にヘラ刻み、口辺部はハケメ後、ヨコナデ、頸～胴部はハケメ。 内面 口辺部はヨコナデ、胴部はヘラナデ。	細砂粒混入 堅緻 橙色	口縁～胴部1/2周



第228図 155号住居出土遺物 (2)



第229図 155号住居出土遺物 (3)

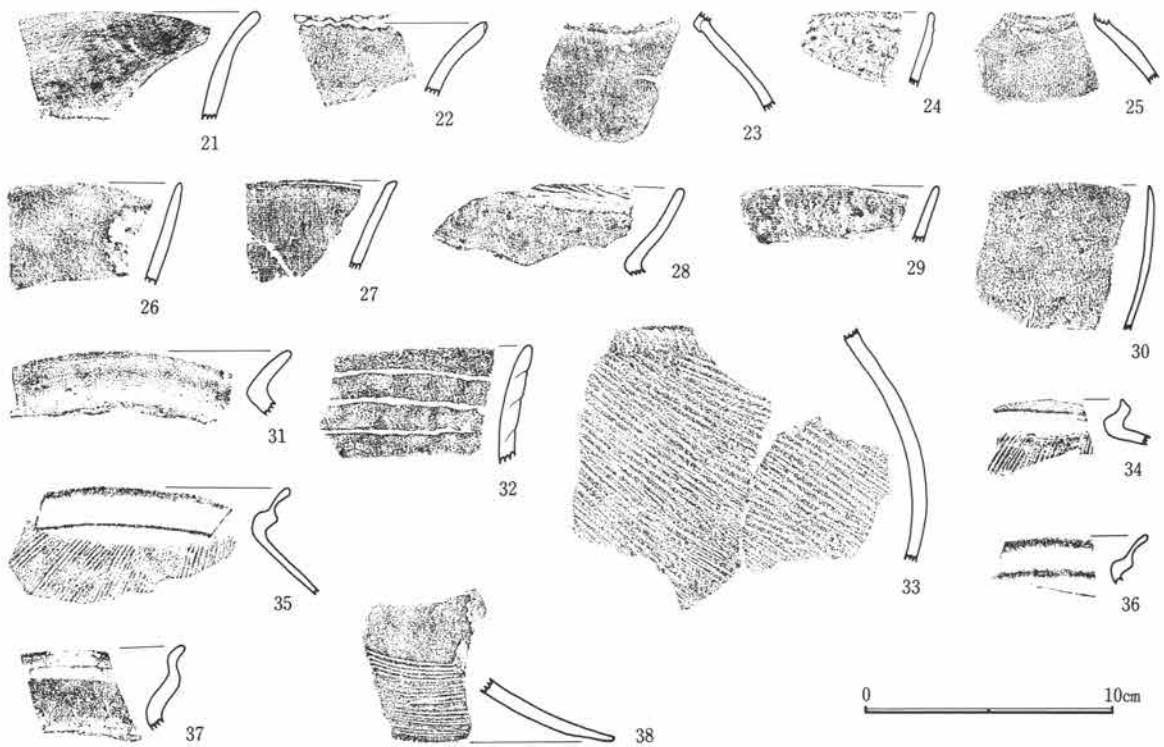
遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
7	甕			外面 胴部はハケメ。 内面 胴部はヘラナデ。	細砂粒混入 堅緻 淡赤橙色	胴部 $\frac{1}{2}$
8	甕	口 16.2	口辺部は僅かに外反する。	外面 口辺部はヨコナデ、頸部はハケメ。 内面 口辺部はヨコナデ、頸部はハケメ、胴部は指ナデ。	中砂粒混入 堅緻 淡橙色	口縁～胴上位全周
9	台付甕	口 13.0 胴 15.0	口辺部は直状に外反する。	外面 口辺部はヨコナデ、胴部はヘラミガキ。 内面 口辺部はヨコナデ、胴部はヘラナデ。	中砂粒、黒色粒混入 堅緻 橙色	脚台部欠損
10	台付甕	脚 10.6		外面 脚上部はハケメ、脚台部はハケメ後ヨコナデ。 内面 脚台部はハケメ、裾部はヨコナデ。	中砂粒混入 堅緻 灰白色	脚台部
11	台付甕	脚 10.0		外面 ナデ、器面荒れている。 内面 裾部はヨコナデ。	中砂粒混入 堅緻 にょい赤褐色	脚台部
12	台付甕	口 17.0 胴 18.9	口辺部は直状に外反する。	外面 口辺部はヨコナデ、頸～底部はハケメ。 内面 口辺部はハケメ、胴部はヘラナデ、指オサエ、底部はヘラナデ。	細砂粒混入 堅緻 明赤褐色	口縁～胴部 $\frac{1}{3}$ 周
13	高坏	口 19.8	坏部は比較的深い。底部に稜を作る。	外面 ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	中砂粒混入 堅緻 灰白色	坏下位欠損
14	高坏	口 18.0 脚 12.0	坏底部外側に僅かな段がある。脚部内側天井部は絞り目痕あり。	外面 坏部は比較的粗いヘラミガキ、脚部はヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ、脚下半部はナデ。	細砂粒混入 やや堅緻 橙色	脚下半部、坏部の一部に欠損、脚坏部の同じ側に黒斑あり。

6 検出した遺構、遺物

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
15	器台	器受 8.8 脚 10.6 高 7.6	脚部に円孔3個穿つ。	外面 器受部はヨコナデ、器受部はヘラミガキ、脚部はヘラミガキ、脚裾部はヨコナデ。 内面 脚部はヘラケズリ、ハケメ。	中砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	完形
16	器台	器受 9.4 脚 11.4 高 9.0	脚部に円孔3個穿つ。	外面 器受部はヨコナデ、脚部はヘラミガキ。 内面 器受部はヨコナデ、脚部はヘラナデ、脚裾部はヨコナデ。	粗砂粒混入 堅緻 橙色	完形
17	器台	器受 7.4 脚 11.3 高 10.2	脚部に円孔3個2段を穿つ。	外面 器受部はヨコナデ、体部はヘラナデ、脚部はヘラミガキ、裾部はヨコナデ。 内面 器受部はヨコナデ、体部はヘラナデ、脚部はヘラナデ、脚裾部はヨコナデ。	中砂粒、黒色粒 混入 堅緻 橙色	完形
18	器台	器受 8.8 脚 12.0 高 10.3	脚部に円孔3個2段を穿つ。	外面 器受部はヨコナデ、脚部はヘラミガキ、脚裾部はヨコナデ。 内面 ヨコナデ、脚部はヘラナデ、脚裾部はヨコナデ。	粗砂粒混入 堅緻 灰白色	完形
19	高坏	口 10.8	坏部は内湾する。脚部は大きく広がる。	外面 坏部はヘラミガキ、脚部はハケメ後、ヘラミガキ。 内面 坏部はハケメ後、ヘラミガキ、脚上部はナデ、中部はハケメ後、ナデ。	2~3mmの小石 混入 堅緻 浅黄橙色	口縁~裾部 $\frac{1}{2}$ 周

第200表 155号住居出土石器観察表

遺物番号	名称	計測値 (mm)	石質	重量 (g)	特徴
20	磨製石鏃	24.5×15.0×1.5	珪質準片岩	0.8	両面が剥離したため、中心部のみが残った状態になっており、観察は不可能。先端部、基部は欠損、下部に円孔の一部が観察できる。



第230図 155号住居出土遺物 (4)

第201表 155号住居出土土器観察表 (拓本)

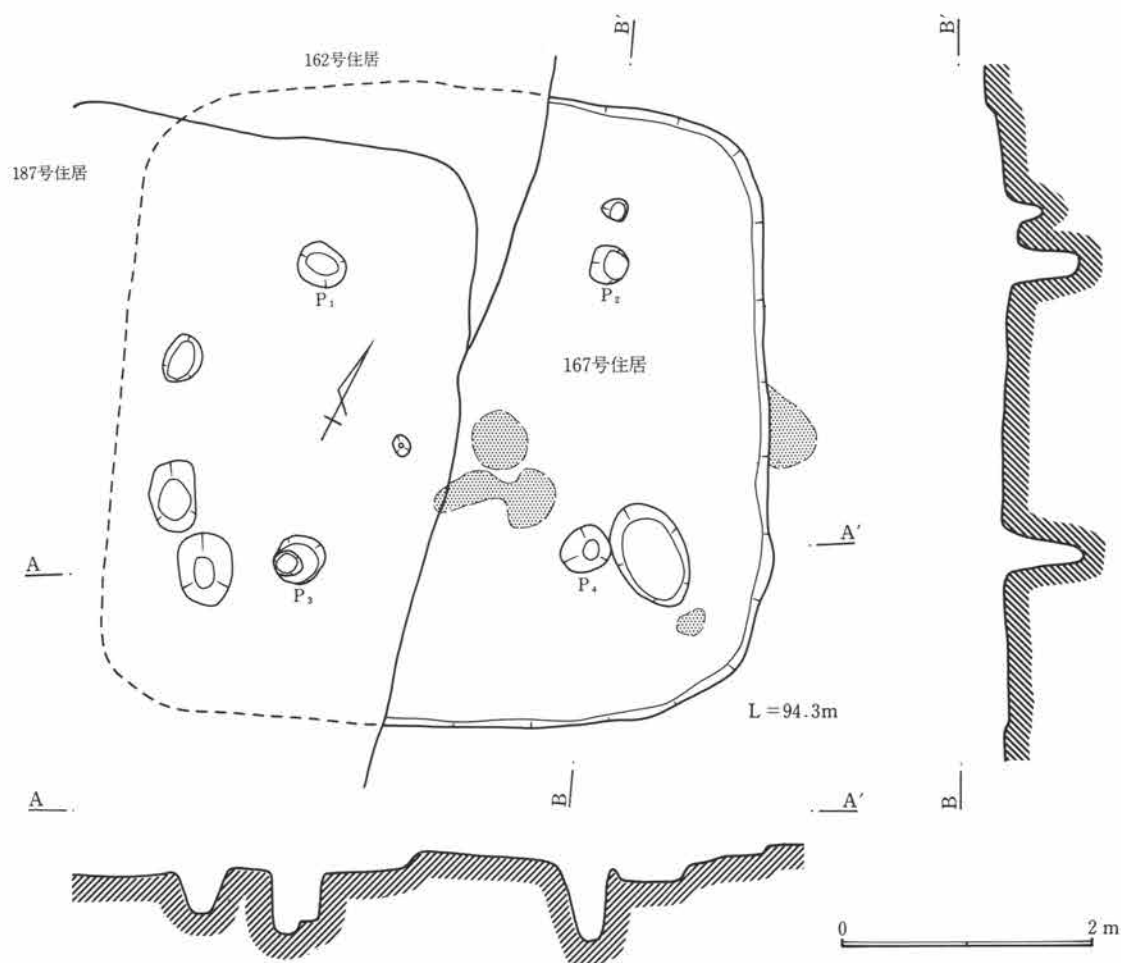
21 壺 砂粒混入、灰白色	29 埴 内面ヨコナデ、砂粒混入、にぶい橙色	35 S字状口縁甕 内面(b)ヨコナデ(e)指オサエ痕、砂粒混入、にぶい橙色
22 壺 砂粒混入、にぶい橙色	30 埴 粗砂粒混入、黒褐色	36 S字状口縁甕 内外面(b)ヨコナデ、砂粒混入、にぶい橙色
23 壺 内面ヘラミガキ、砂粒混入、灰白色	31 甕 ヨコナデ、砂粒混入、にぶい橙色	37 S字状口縁甕 内面(b)ヨコナデ、細砂粒少量混入、にぶい褐色
25 壺 内面指オサエ痕、砂粒混入、灰白色	32 甕 砂粒混入、にぶい褐色	38 脚 ヘラ描平行沈線、内外面丁寧なヘラミガキ、砂粒混入、橙色
26 埴 砂粒混入、橙色	33 甕 砂粒混入、褐灰色	
27 埴 内面棒状具によるミガキ、砂粒混入、灰褐色	34 S字状口縁甕 砂粒混入、灰褐色	
28 埴 砂粒混入、にぶい橙色		

## 167号住居跡 (第231図、図版63)

位置 C地区住居群の中央部やや西よりに位置する(62-C27)。西部で162号住居、187号住居と重複する。

形状、規模、方位 隅丸方形を呈する。西半部は他住居との重複部であるために明確に輪郭を把握することはできなかったが、支柱穴は方形に配置されていることが認められる。このことから住居の形状、規模が推定できる。規模は南北方向に5.1mを測り、東西方向は5m前後になると思われる。方位はN-61°-E。

床面 暗褐色粘質土(第IVb層)を堅く踏み固めた面を検出する。北半部で床面上覆土中に焼土粒子が目立った。



第231図 167号住居

6 検出した遺構、遺物

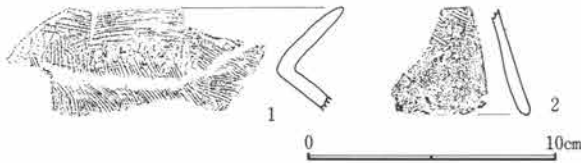
**柱穴** 主柱穴を4箇所検出する(P1～P4)。柱穴の径は25～30cm、深さ40～60cm。主柱穴の配置関係は整った方形をなす。主柱穴間は東－西2.5m、南－北2.3mを測る。

**炉跡** 住居中央部に地床炉を設けている。

**遺物出土状態** 床面直上より高杯脚部など、古式土師器破片が出土している。

**時期** 古墳前期

**他の遺構との関係** 西半部で162号住居(弥生中期後半)、187号住居(弥生後期第3期)。187号住居の床面上に本住居の張り床を認める。



第202表 167号住居出土土器観察表  
(拓本)

- |   |                             |
|---|-----------------------------|
| 1 | 甕 内外面粗いハケメ。                 |
| 2 | S字状口縁甕 内面端部指オサエ痕、砂粒混入、にぶい橙色 |

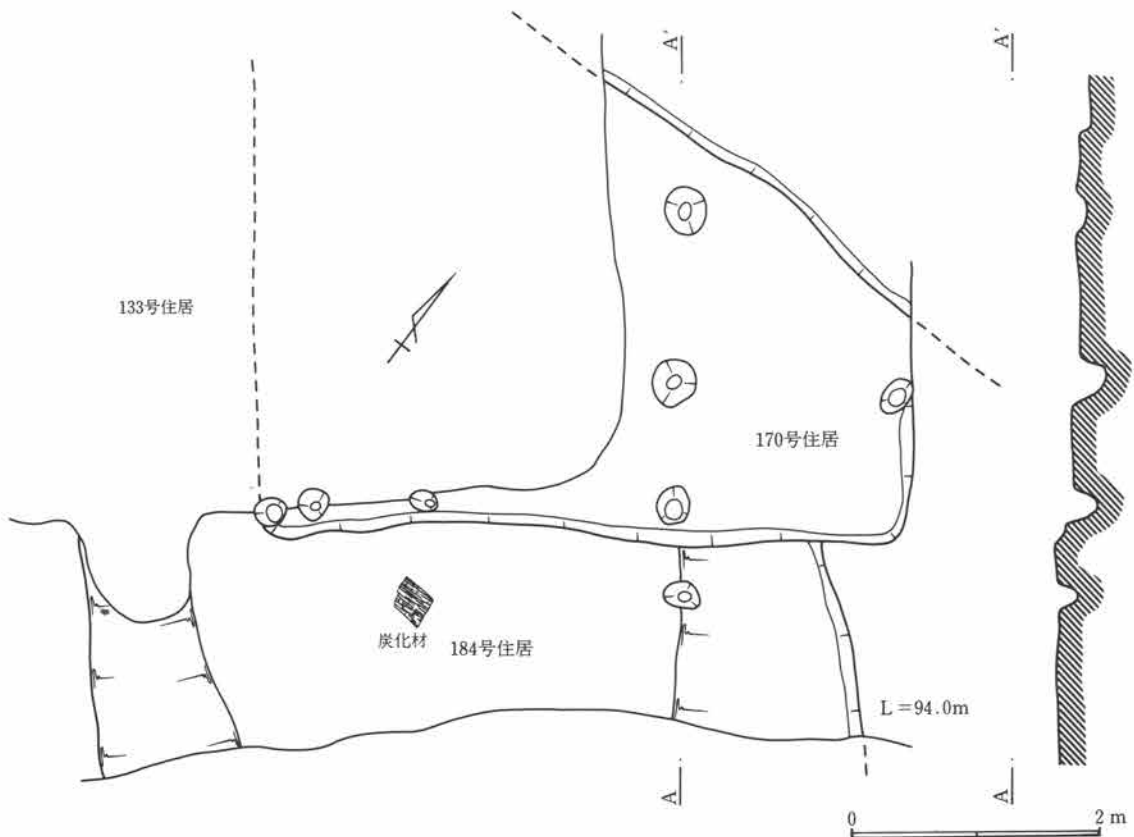
第232図 167号住居出土遺物

170号住居跡 (第233図、図版64)

**位置** C地区住居群の北部に位置する(57-C30)。133号、160号、184号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 形状不明。規模は北東－南西5.2m。方位はN-31°-W。

**周壁、壁溝** 東南辺で周壁を検出する。確認できた壁高は15cm。壁溝は認められない。



第233図 170号、184号住居

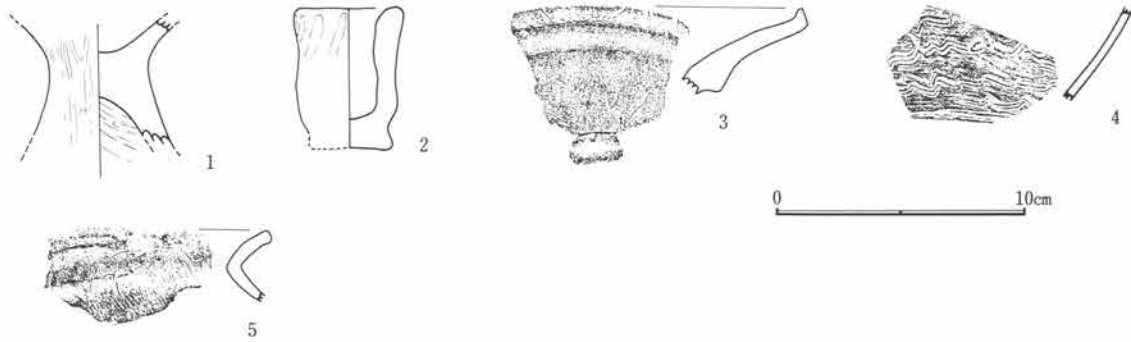
柱穴 支柱穴は不明。

炉跡 不明。

遺物出土状態 覆土中より古式土師器破片が出土する。

時期 古墳前期

他の遺構との関係 北部で160号住居（弥生後期第1期）、西南部で133号住居（弥生後期第3期）と重複する。東南部で184号住居（古墳前期）と重複するが重複域は不明。



第234図 170号住居出土遺物

第203表 170号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	高杯			外面 ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にふい褐色	胴下位～脚上半部
2	ミニチュア甕	口 4.4	作りは粗雑。	外面 指オサエ、ナデ。 内面 指オサエ、ナデ。	細砂粒混入 堅緻 にふい橙色	底部欠損

第204表 170号住居出土土器観察表（拓本）

3 壺 (a)ヨコナデ、内面(b)ヨコナデ、細砂粒混入、にふい褐色	4 壺 東海西部系、灰褐色	6 甕 (d)(e)ハケメ、中砂粒混入、明赤褐色
-----------------------------------	---------------	--------------------------

#### 184号住居跡（第233図）

位置 C地区中央部やや北よりに位置する（58-C29）。161号、170号住居と重複する。

形状、規模、方位 形状、規模は不明。方位はN-42°-E。

周壁、壁溝 周壁は北東辺で一部を検出。遺存状態は悪い。周溝は認められない。

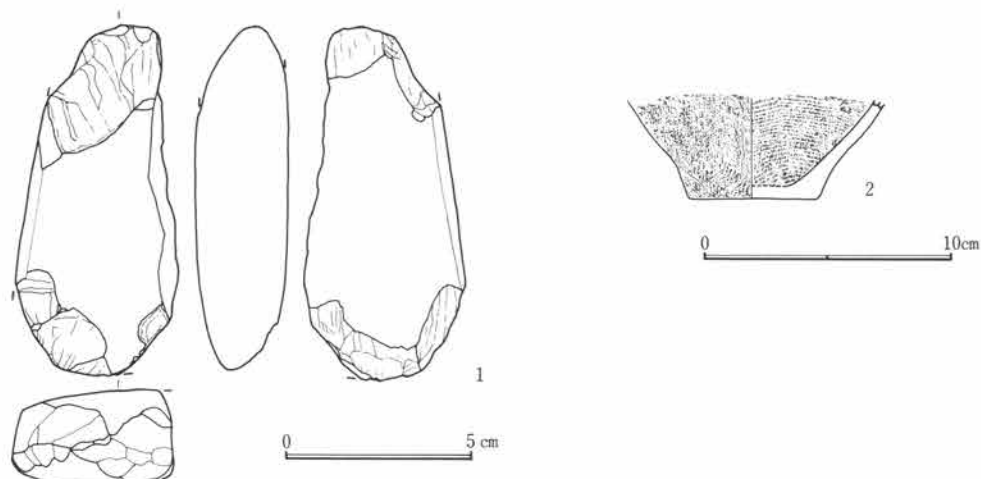
柱穴 支柱穴は不明確。

炉跡 不明確。焼土、炭化物が床面上に見られるが炉跡は認められない。

遺物出土状態 覆土中より古式土師器甕破片が出土する。

時期 古墳前期

他の遺構との関係 161号、133号、170号住居と重複する。各住居との重複域は不明確。重複部では本住居の床面は認められない。



第235図 184号住居出土遺物

第205表 184号住居出土石器観察表

遺物番号	名称	計測値 (mm)	石質	重量 (g)	特徴
1	磨製石斧	92.5×42.5×24.0	蛇紋岩	159.0	定角型磨製石斧の一部でわずかに刃部が観察できる。刃部は両刃であり使用時の欠損が認められる。

第206表 184号住居出土土器観察表  
(拓本)

2	壺	外面 ハケメ後粗いヘラミガキ 内面 粗いハケメ
---	---	----------------------------

177号住居跡 (第236図、図版64)

**位置** C地区北部に位置する (50-C28)。住居全体が185号住居と重なっている。

**形状、規模、方位** 隅丸方形を呈する。やや台形状を呈して、小形である。規模は東-西、南-北とも3.5 mを測る。方位はN-18°-E。

**周壁、壁溝** 12号井戸との重複部、及び試掘トレンチにかかる部分の他は周壁を検出する。検出できた壁高は5 cm。壁溝は認められない。

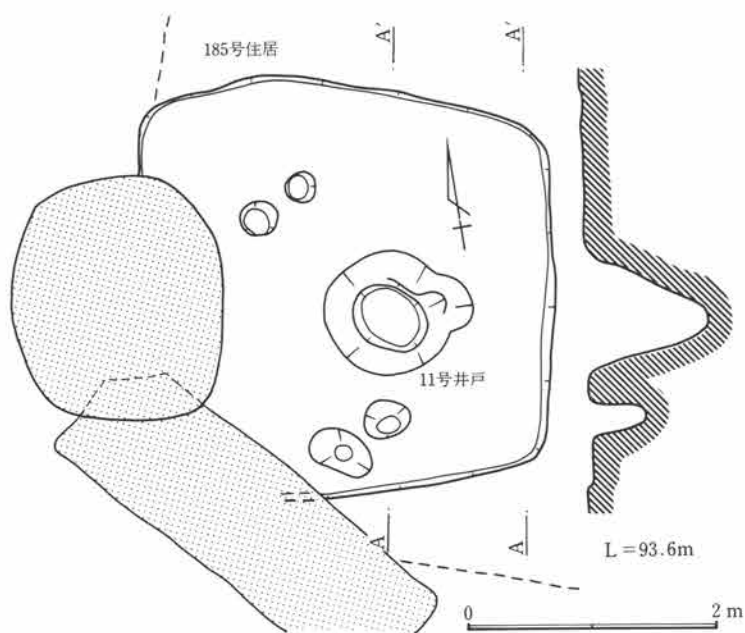
**床面** 床面は平坦に踏み固められている。

**柱穴** 主柱穴は不明確。検出できない。

**遺物出土状態** 出土遺物はほとんど無い。

**時期** 不明確、古墳前期か。

**他の遺構との関係** 185号住居 (古墳前期か) 内で185号住居の床面精査時において検出する。185号住居との先後関係は不明。本住居の中央部及び西辺部を11号 (古墳前期)、12号井戸が切っ



第236図 177号住居



いる。

185号住居跡 (第237図、図版64)

位置 C地区住居群の北部に位置する(49-C27)。177号、203号住居と重複する。

形状、規模、方位 隅丸方形を呈する。西南コーナー部は他の遺構などとの重複により輪郭が不明瞭であるが、他は全体的に遺存状態は良好である。規模は東西6.5m、南北6.0mを測る。方位はN-18°-E。

床面 床面は平坦に踏み固めている。

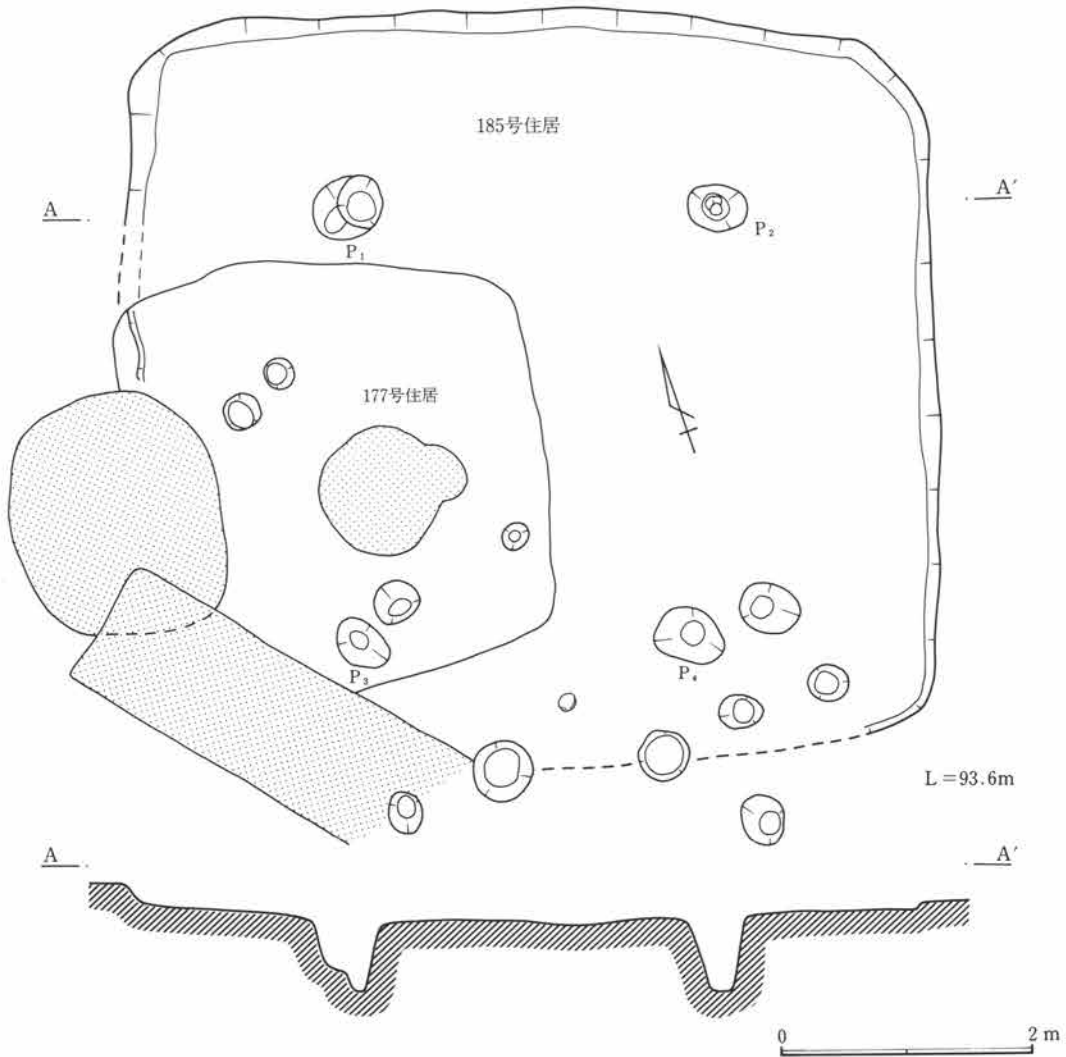
柱穴 支柱穴を4箇所検出する(P1~P4)。支柱穴は径25cm前後、深さ50~60cmである。

炉跡 不明。検出できない。

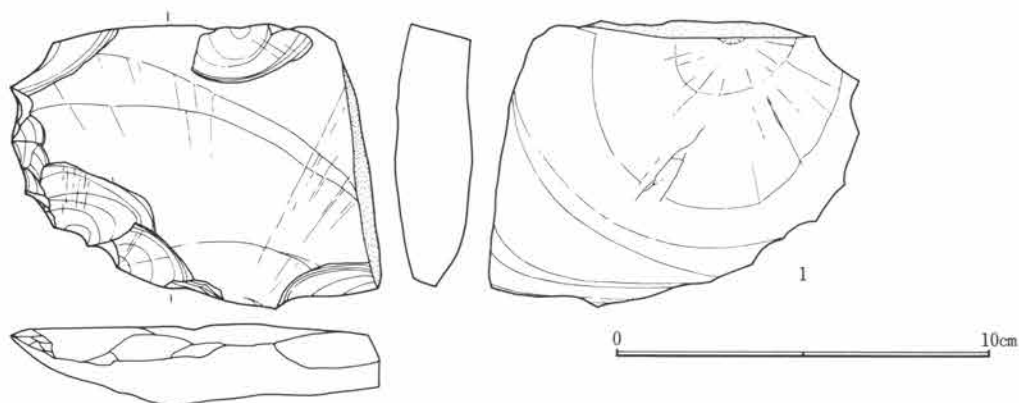
遺物出土状態 出土遺物はほとんど見られない。覆土中より不定形刃器が出土している。

時期 住居の形状から古墳前期と思われる。

他の遺構との関係 本住居の床面精査時において177号住居を検出する。張り床は認められなかった。先後関係は明確ではない。南部で部分的に203号住居(弥生後期第3期)と重複するが重複域不明。



第237図 185号住居



第238図 185号住居出土遺物

第207表 185号住居出土石器観察表

遺物番号	名称	計測値 (mm)	石質	重量 (g)	特徴
1	横刃状石器	75.0×98.5×20.0	珪質頁岩	196.7	石核から大きく剥ぎとった剥片の側縁部に片側から刃をつけている。

186号住居跡

(第239図、図版65)

**位置** C地区住居群の北西部、大溝河岸縁辺部に位置する(45-C22)。158号、189号住居が隣接する。

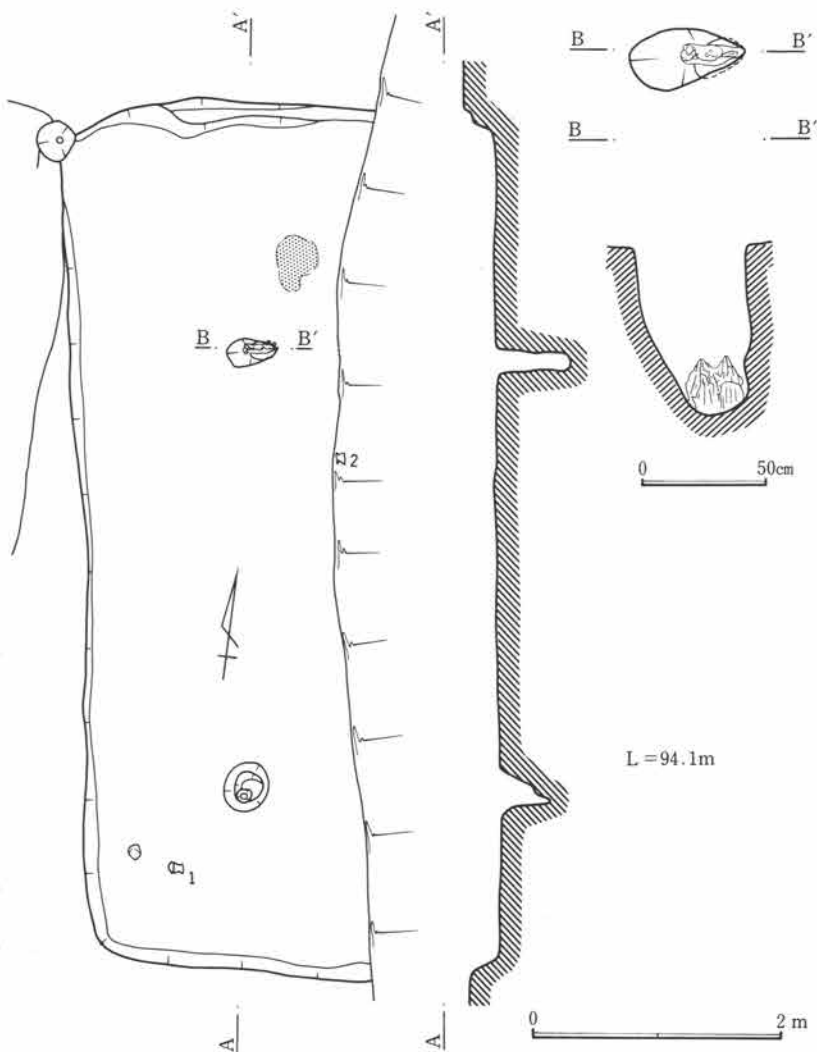
**形状、規模、方位** 形状不明。規模は南北方向に6.9mを測る。大溝により東半部が失われている。方位はN-6°-W。

**周壁、壁溝** 周壁は西半部で良好に検出する。検出できた壁高は南辺で約25cmである。壁土は暗灰褐色粘質土、やや砂質である。

**床面** 床面は平坦に踏み固められている。

**柱穴** 主柱穴を2箇所検出する。北側の主柱穴内には柱材が残存していた。残存柱材の太さは25cmであった。

**炉跡** 北側主柱穴の傍ら、周壁との間に焼土帯が見られる。

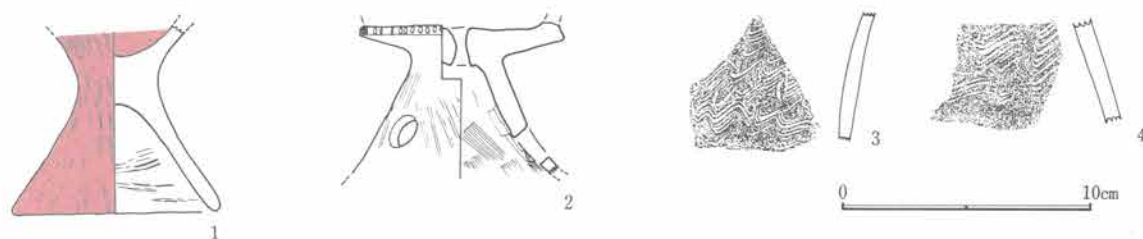


第239図 186号住居

これが炉跡の可能性はあるが、位置的に問題がある。

**遺物出土状態** 床面直上より弥生土器破片及び大溝との重複部際に古式土師器の器台脚部破片が出土する。古式土師器脚部は大溝覆土内の可能性もある。

**時期** 弥生後期～古墳前期



第240図 186号住居出土遺物

第208表 186号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	高坏	脚 8.2	脚直状に広がる。	外面 ヘラミガキ。 内面 坏部はヘラミガキ、脚部はハケメ後、ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 明赤褐色	坏部欠損 外面、坏部内面 丹彩
2	器台		器受部はほぼ平坦な面をなす。脚部に円孔3個穿つ。	外面 突帯部に刻み目、脚部はヘラミガキ。 内面 器受部はヘラミガキ、脚部はヘラナデ、ハケメ。	中砂粒混入 堅緻 淡橙色	器受～脚上位

第209表 186号住居出土土器観察表（拓本）

3 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、灰褐色	4 甕 粗砂粒混入、にぶい橙色
----------------------	-----------------

### 191号住居跡 (第241図)

**位置** C地区住居群北部に位置する(49-C27)。

**形状、規模、方位** 長方形を呈する。やや小規模で台形状である。規模は長軸3.3m、短軸の最大幅3.1mを測る。方位はN-13°-E。

**周壁、壁溝** 周壁は全周検出する。壁高約10cm。壁溝は認められない。

**床面** 部分的に堅く踏み固められた面を検出する。

**柱穴** 主柱穴は不明確。検出できない。

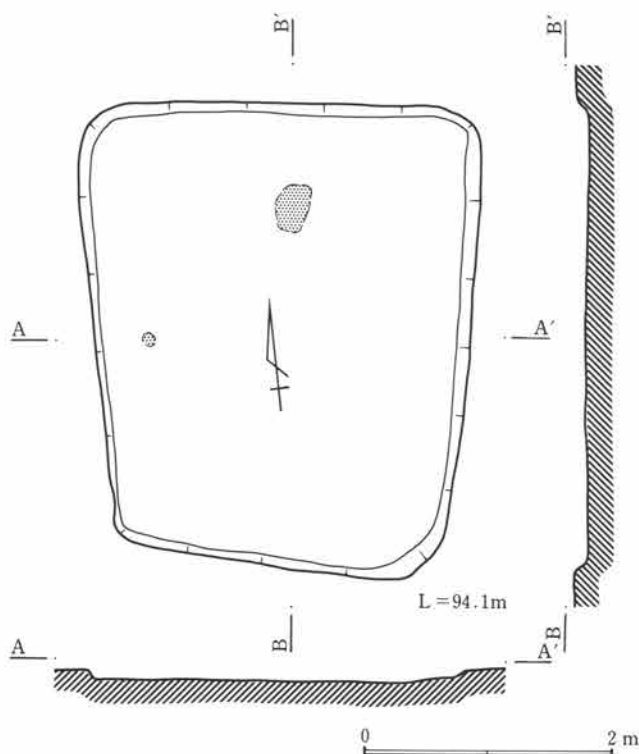
**炉跡** 住居北部に焼土帯があり、これが炉跡と思われる。

**遺物出土状態** 床面直上より台付甕破片が出土する。

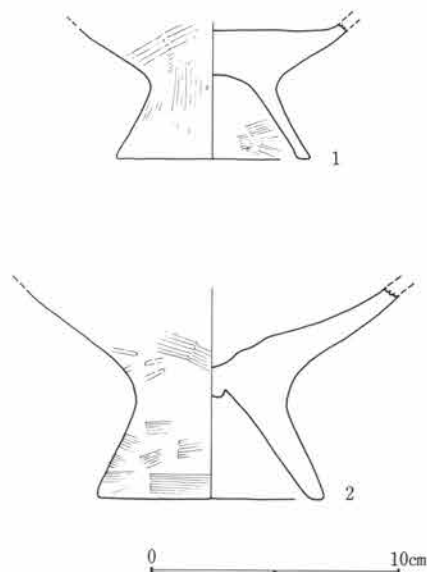
**時期** 古墳前期

**他の遺構との関係** 185号住居(古墳前期か)の覆土上に造られている。

6 検出した遺構、遺物



第241図 191号住居



第242図 191号住居出土遺物

第210表 191号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法	量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	台付甕	脚	7.8	底面中央部は砂粒を多量に含む粘土を充当している。	外面 粗いハケメ。 内面 底面周辺は細かいハケメ、底面中央は指オサエ。	細砂粒混入 堅緻 橙色	胴下位～脚台部
2	台付甕	脚	8.9	器壁は厚い。脚台と体部接合痕明瞭、脚天井部のホゾ穴に上部から粘土を充填している。	外面 ハケメ後粗いナデ。 内面 胴下部～底面は粗雑なヘラナデ、脚台部は指ナデ。	細砂粒混入 堅緻 橙色	胴下位～脚台部

205号住居跡 (第243図、図版66)

**位置** C地区中央部に位置する(57-C23)。200号、202号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 方形を呈する。規模は長軸(南北)4.4m、短軸(東西)4.2mを測る。方位はN-4°-E。

**周壁、壁溝** 周壁の遺存状態は悪く4辺とも部分的であるが残存している。検出できた壁高は10cm。壁土は暗灰褐色粘質土である。壁溝は認められない。

**床面** 踏み固められた面を検出するが、比較的凹凸が目立つ。

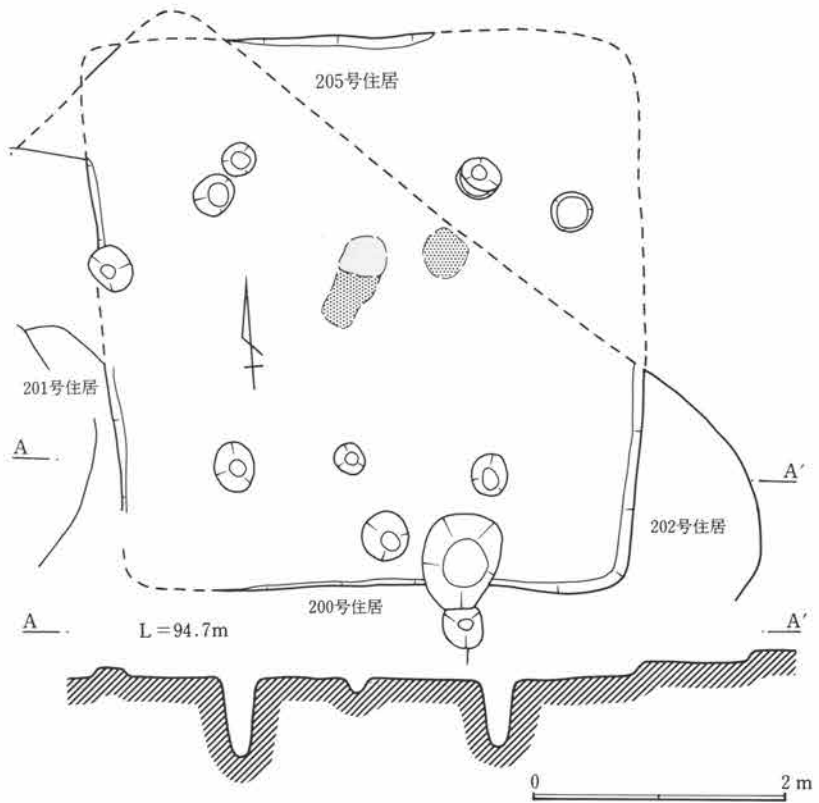
**柱穴** 主柱穴を4箇所検出する。主柱は4本構造である。4主柱穴は大きさが一律な径約30cm、深さ50cm前後の円形ピットである。

**炉跡** 住居中央部に地床炉を検出する。焼土帯は2箇所あるが中央のものは大きく、明確な火床面が見られる。

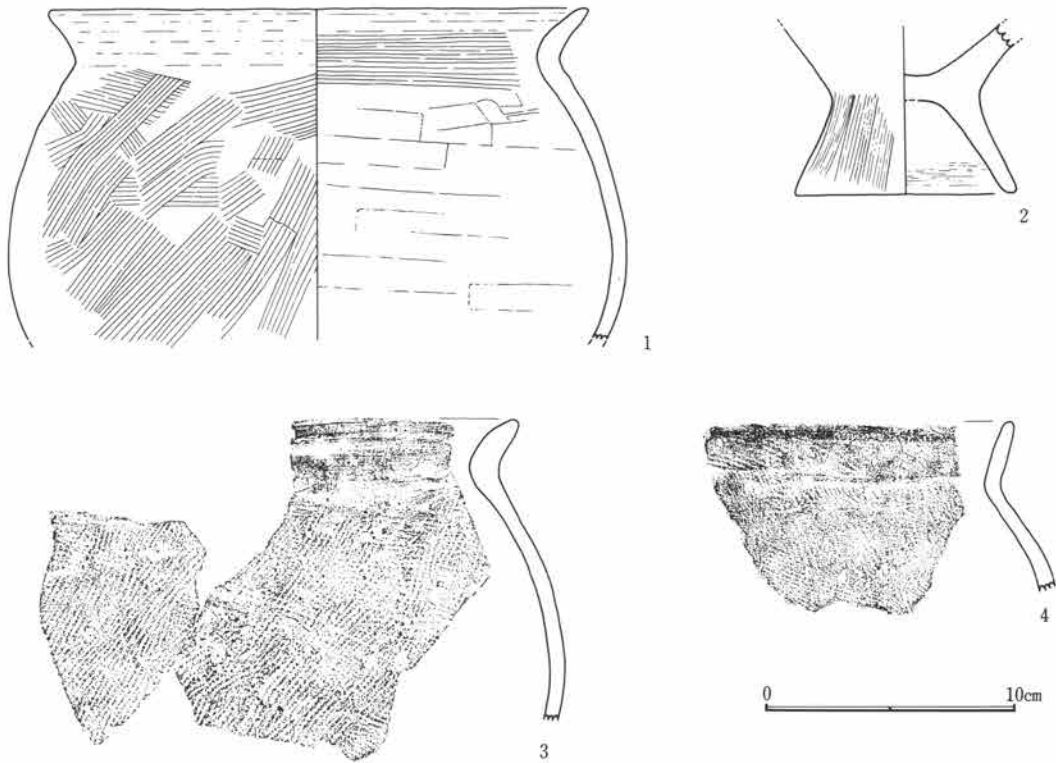
**遺物出土状態** 出土遺物は少ない。弥生土器、古式土師器破片が数片出土している。

**時期** 古墳前期

**他の遺構との関係** 200号住居（弥生後期）、201号住居（弥生後期第1期）、264号住居（弥生後期第3期）と重複する。



第243図 205号住居



第244図 205号住居出土遺物

6 検出した遺構、遺物

第211表 205号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	口 21.6	口辺部は直状に外反する。	外面 口辺部はヨコナデ、胴部はハケメ。 内面 口辺部はヨコナデ、胴部はハケメ後、ヘラナデ。	粗砂粒混入 堅緻 にふい橙色	口縁～胴上位1/4周
2	台付甕	脚 8.8		外面 ハケメ。 内面 底部はナデ、脚上部ナデ、裾部ヨコナデ。	粗砂粒混入 堅緻 明赤褐色	底～脚台部分

第212表 205号住居出土土器観察表 (拓本)

3 甕 外面(b)ヨコナデ、(e)(b)粗いハケメ、内面(a)～(e)粗いハケメ、ヘラミガキ、粗砂粒混入、赤橙色	4 甕 外面(d)斜め縦方向の粗いハケメ、内面(b)(c)粗いハケメ、粗砂粒混入、灰赤色
--	--

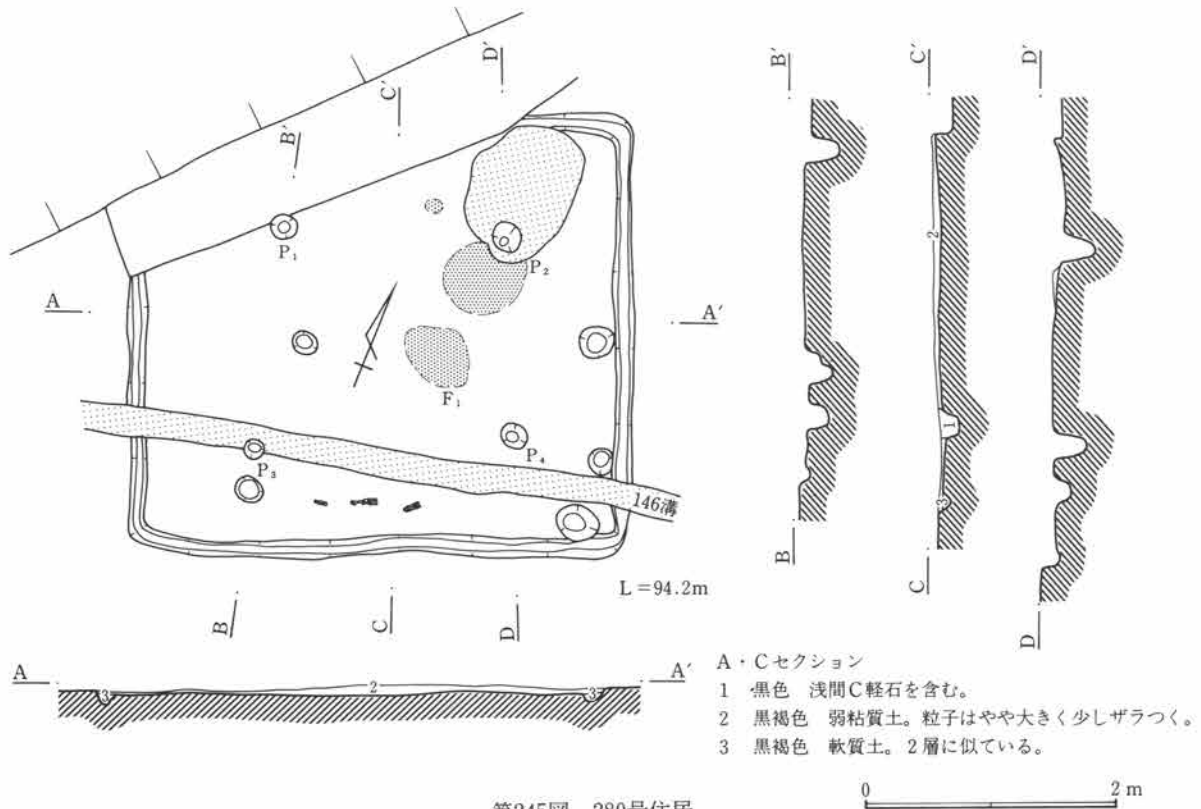
280号住居跡 (第245図、図版66、67)

位置 C地区住居群西部に位置する(85-C36)。

形状、規模、方位 やや東西に長い方形を呈する。規模は長軸4.1m、短軸3.5mを測る。方位はN-69°-E。

周壁、壁溝 周壁はほとんど検出できない。壁溝は北辺部で一部攪乱を受けて、不明な部分以外は良好に検出する。幅15cm、深さは5cm前後である。

床面 床面は黄褐色ローム質土(第V層)面を堅く、平坦に踏み固めている。中央部が2～3cm高い。

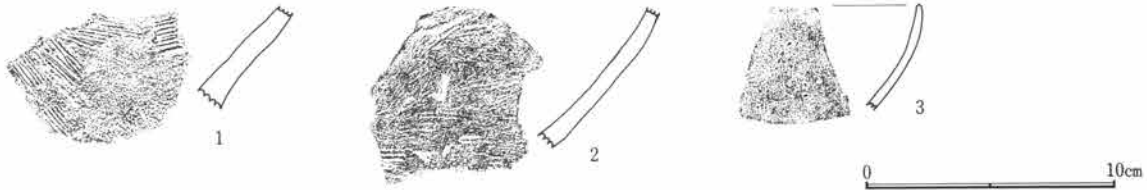


**柱穴** 支柱穴を4箇所検出する（P1～P4）。4支柱穴は一様に径約20cm、深さ30cm前後である。

**炉跡** 住居中央部に地床炉を設けている（F1）。径40cm程の範囲が火床面であり、焼土化している。F1の北にも焼土帯が見られるが床面上に堆積した状態が認められることから炉跡とは認められない。

**遺物出土状態** 床面直上より古式土師器甕、坏の破片が数点出土している。

**時期** 古墳前期



第246図 280号住居出土遺物

第213表 280号住居出土土器観察表（拓本）

1 甕 細砂粒混入、浅黄橙色	2 甕 内面ハケナデ、中砂粒混入、にぶい橙色	3 坏 内面ヘラミガキ、中砂粒混入、にぶい橙色
----------------	------------------------	-------------------------

### 282号住居跡（第247図）

**位置** C地区住居群西部に位置する（74-C33）。291号、294号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 隅丸方形を呈する。住居の輪郭は部分的に把握できるのみ。支柱穴の配置関係から形状、規模を推定することができる。規模は長軸5.8mを測る。短軸は5.5m前後になると思われる。方位はN-15°-W。

**周壁、壁溝** 周壁の遺存状態は悪い。他の住居との重複部では周壁の検出は困難であった。西北部で検出できた壁高は約5cm。壁溝は不明。

**床面** 暗褐色粘質土（第IVb層）面を平坦に踏み固めている。床面上に炭化材の散在が目立つ。火災に遭った可能性がある。調査時においては291号住居との重複部は床面の検出ができなかった。

**柱穴** 支柱穴を4箇所検出する（P1～P4）。4支柱穴は一様に径20cm、深さ50cm前後である。291号住居との重複部では本住居に伴うと思われるピットは291号住居の床面精査時に検出している。

**炉跡** 中央部北寄りに地床炉あり。

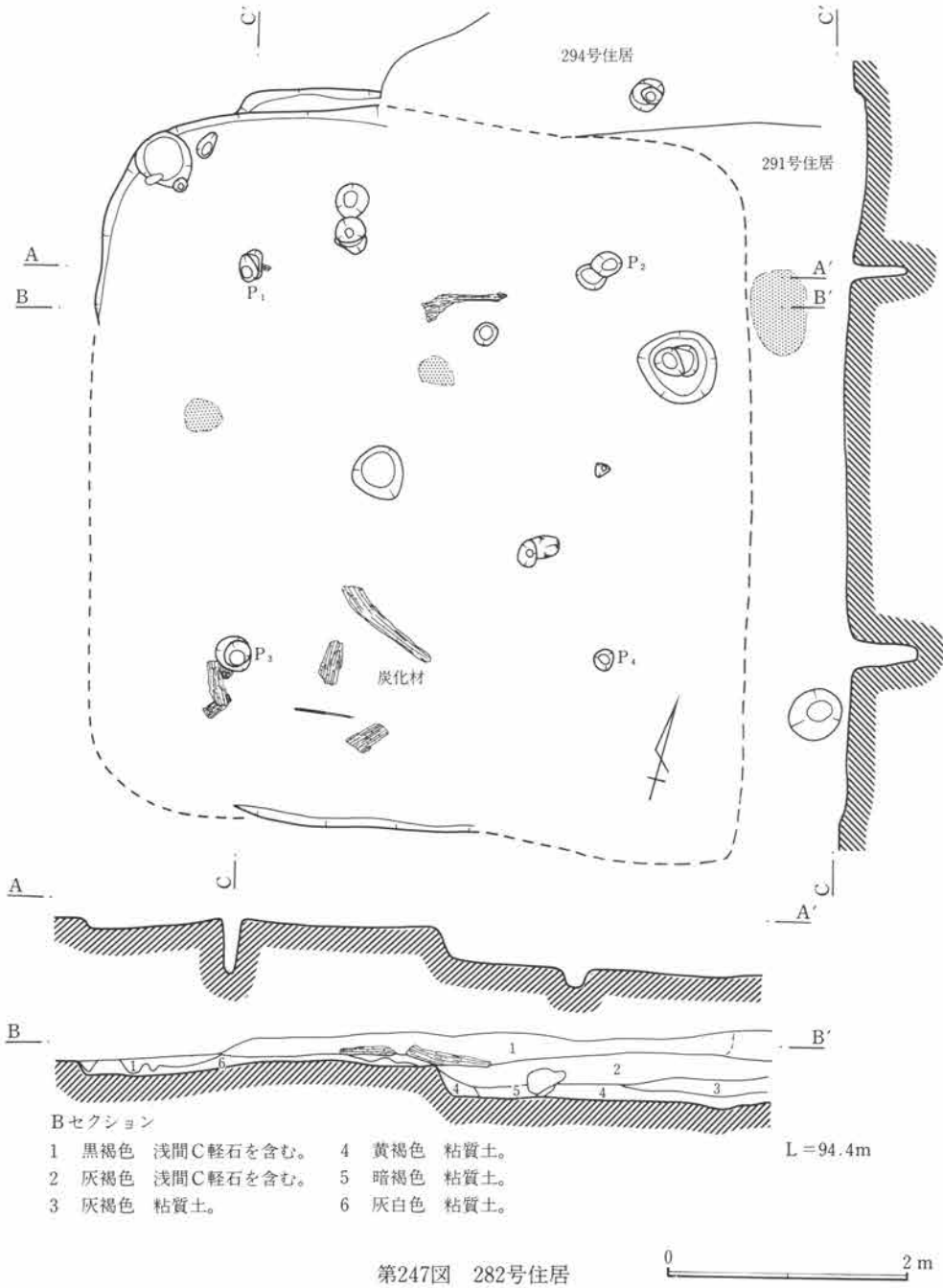
**遺物出土状態** 床面直上、覆土中より弥生土器破片、古式土師器破片を多数出土している。

**時期** 古墳前期

**他の遺構との関係** 291号、294号住居（共に弥生後期第3期）と重複する。291号住居の覆土上に本住居の床面上の炭化物、炭化材が一部で確認できる。291号→294号→282号住居の順に新しくなると思われる。

第214表 282号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 23.4	折り返し口縁、口辺は緩やかに外反する。	外面 口縁端部は刻み、口縁部はヨコナデ後、刻み目、口辺部はヘラミガキ、頸部は2連止め簾状文。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒、黒色粒混入 堅緻 にぶい橙色	口縁～頸部1/2周内面丹彩 内面は器面が荒れている。



第247図 282号住居

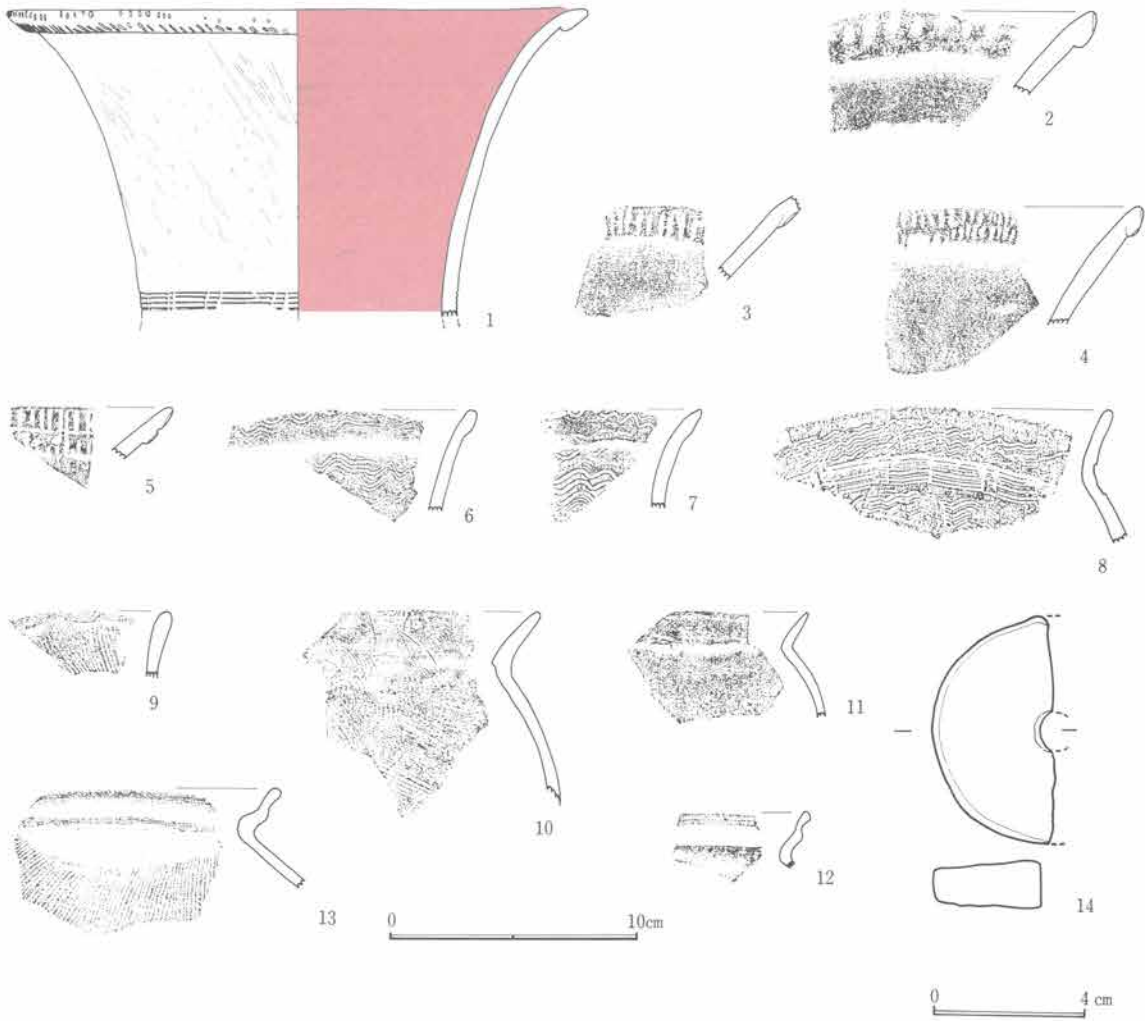
第215表 282号住居出土土器観察表 (拓本)

3 壺 ヘラミガキ	9 甕 内面ハケメ、砂粒混入、灰褐色	11 甕 内面ナデ、砂粒混入、にぶい橙色
5 壺 沈線文、刻み目文	10 甕 内面(b)ヘラナデ、中砂粒混入、橙色	12 S字状口縁甕 内面(b)ヨコナデ、砂粒混入、灰褐色
7 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、褐灰色		

第216表 282号住居出土土製品観察表

遺物番号	名称	計測値(cm)	成 形	整 形	胎土・焼成	色 調	備 考
14	土製紡錘車	外径 6.1 孔径 0.9	指オサエによる緩い凹凸があつて、やや厚さが一様でない。	器面は丁寧なミガキにより滑らかに磨かれている。	砂粒混入目立たず堅緻	にぶい黄橙色	1/2遺存





第248図 282号住居出土遺物

285号住居跡 (第249図)

位置 C地区住居群の西端部に位置する(97-C27)。

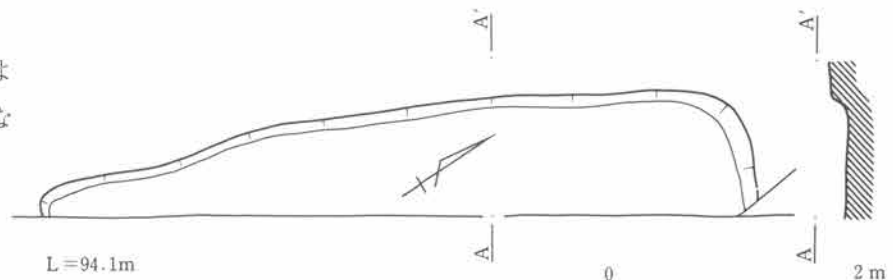
形状、規模、方位 形状は不明。規模は北西-南西5.8mを測る。住居の大部分は調査区域外で、西辺部のみを調査する。方位はN-26°-E。

周壁、壁溝 周壁は北西辺のみ検出する。検出できた壁高は約15cm。壁溝は認められない。

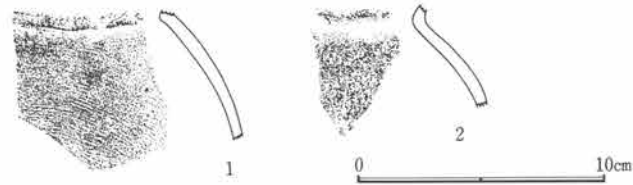
柱穴 検出できない。

遺物出土状態 覆土中より古式土師器埴、甕破片など出土。

時期 古墳前期



第249図 285号住居

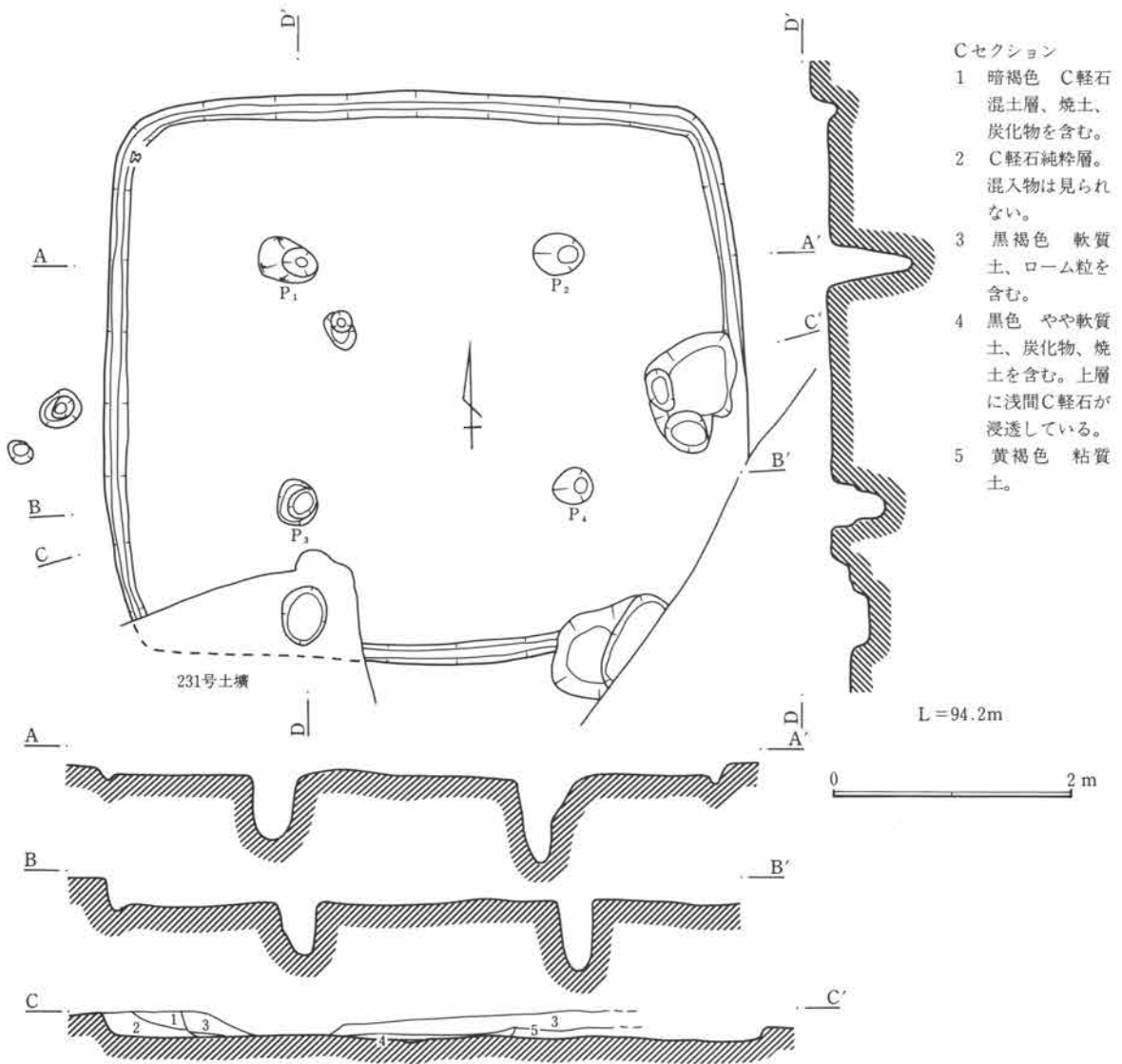


第250図 285号住居出土遺物

第217表 285号住居出土土器観察表 (拓本)

1 埴 内面ヘラナデ、中砂粒混入、にぶい 橙色	2 埴 内面ハケナデ、細砂粒混入、にぶい 橙色
----------------------------	----------------------------

292号住居跡 (第251図、図版67、68)



第251図 292号住居

位置 C地区住居群の西部に位置する(89-C30)。南に287号住居と隣接する。

形状、規模、方位 東一西にやや長い隅丸方形を呈する。南コーナー部は調査区域外である。規模は長軸5.5m、短軸4.8mを測る。方位はN-47°-W。

周壁、壁溝 周壁は一部231号土壌との重複部では検出できないが全体的には良好に検出する。検出できた壁高は北辺部で約15cm。壁溝は全周する。幅は7cm前後。

床面 暗褐色粘質土(第IVb層)面を平坦に踏み固めている。

柱穴 支柱は4本構造。4箇所でも良好に検出する(P1~P4)。4支柱穴は径30~40cm、深さは50~70cm、円形ピットである。西北部の2ピット(P1、P3)は2段階に掘り込まれている。

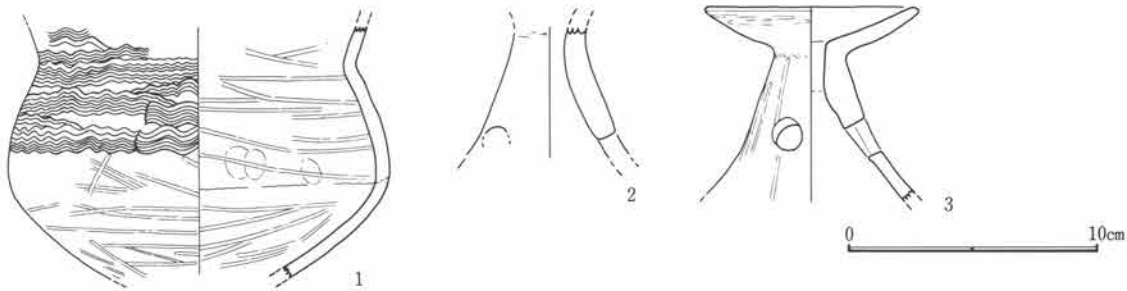
炉跡 不明。検出できない。

覆土 床面直上は黒色粘質土、覆土下部は浅間C軽石の純層堆積が厚く認められる。その上層は浅間C軽石混土層である。

遺物出土状態 床面直上より弥生土器破片が多数出土している。床面直上出土遺物は大方浅間C軽石層中に見られる。

時期 古墳前期

他の遺構との関係 231号土壌(弥生後期?)と重複する。



第252図 292号住居出土遺物(1)

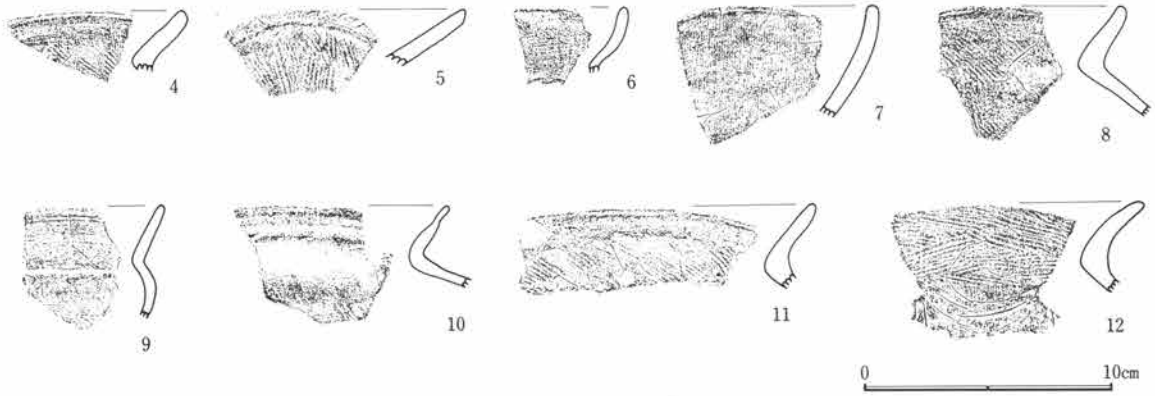
第218表 292号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	台付甕	胴 15.3	頸部は比較的強く屈曲する	外面 頸部~胴上部は波状文。胴~底部はヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ、胴部に指オサエあり。	中砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	口辺~底部迄
2	器台	中央孔 1.1		外面 ヘラミガキ。 内面 器面剥落著しい。	細砂粒混入 やや軟弱 浅黄橙色	脚上部 内外面共に荒れている
3	器台	器受 8.5	中心孔径1.6cm 脚部に円孔3個穿つ。	外面 器受部はヘラミガキ、接合部はハケメ、脚部はヘラミガキ。 内面 器面剥落著しい。	粗砂粒混入 堅緻 灰白色	器受~脚上部迄 周

第219表 292号住居出土土器観察表(拓本)

8 甕 内面(b)ヨコナデ	9 台付甕 内外面(b)ヨコナデ、外面(d)ナデ	11 甕 内面(b)ヨコナデ 12 甕 外面ハケメ
---------------	--------------------------	------------------------------

6 検出した遺構、遺物

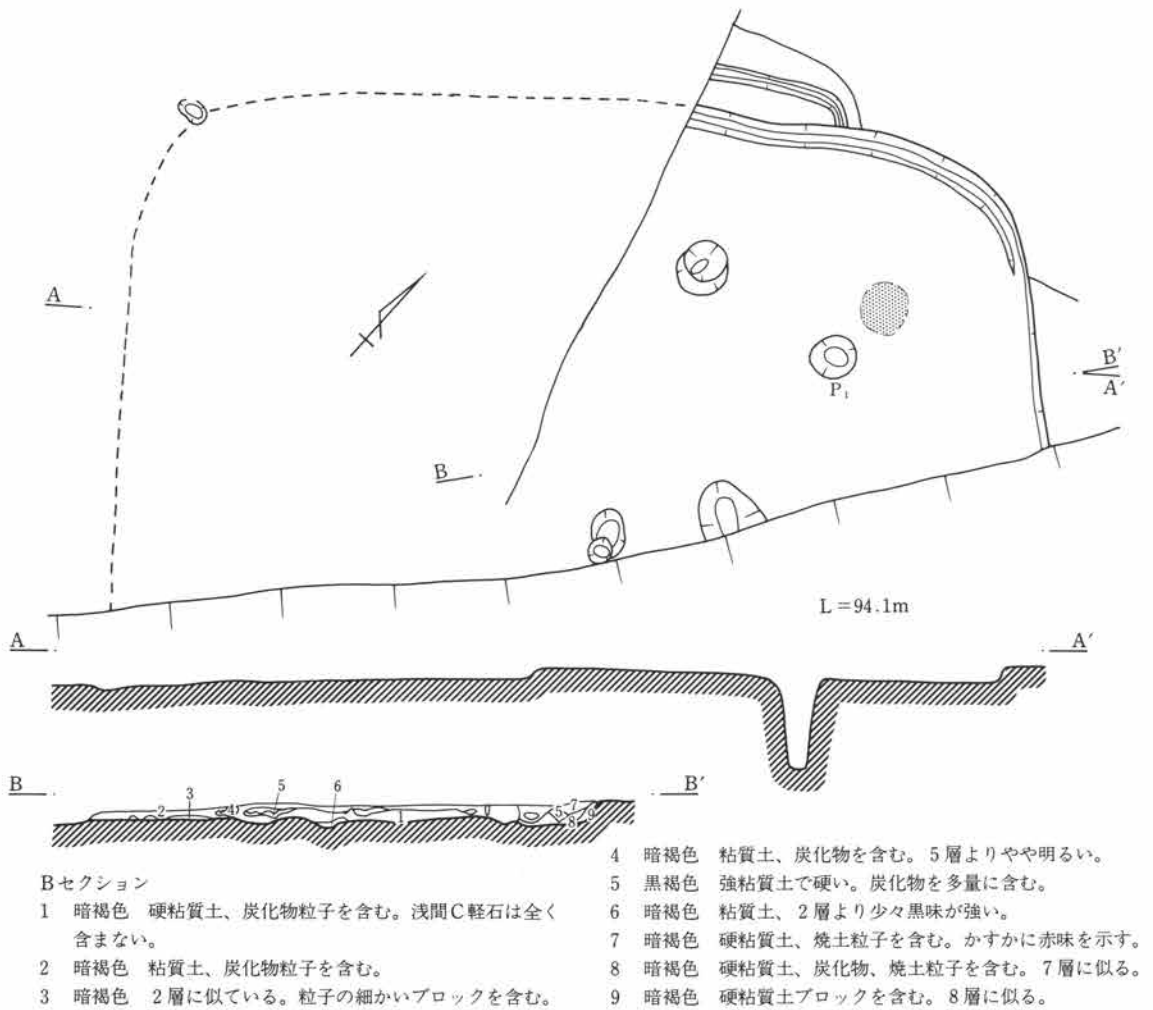


第253図 292号住居出土遺物 (2)

295号住居跡 (第254図)

位置 C地区住居群の西部に位置する(71-C30)。291号住居と重複する。

形状、規模、方位 形状、規模は不明。住居の東南半は調査区域外である。西半部の291号住居との重複部



Bセクション

- 1 暗褐色 硬粘質土、炭化物粒子を含む。浅間C軽石は全く含まない。
- 2 暗褐色 粘質土、炭化物粒子を含む。
- 3 暗褐色 2層に似ている。粒子の細かいブロックを含む。

- 4 暗褐色 粘質土、炭化物を含む。5層よりやや明るい。
- 5 黒褐色 強粘質土で硬い。炭化物を多量に含む。
- 6 暗褐色 粘質土、2層より少々黒味が強い。
- 7 暗褐色 硬粘質土、焼土粒子を含む。かすかに赤味を示す。
- 8 暗褐色 硬粘質土、炭化物、焼土粒子を含む。7層に似る。
- 9 暗褐色 硬粘質土ブロックを含む。8層に似る。

第254図 295号住居

は住居の輪郭を把握できない。方位はN-50°-W。

**周壁、壁溝** 北コーナー部で部分的に検出する。西半部、291号住居との重複部では検出が困難であった。検出できた壁高は10cm。壁溝は北周壁下に検出する。

**床面** 床面は堅く踏み固められた面を検出するが、凹凸が目立つ。

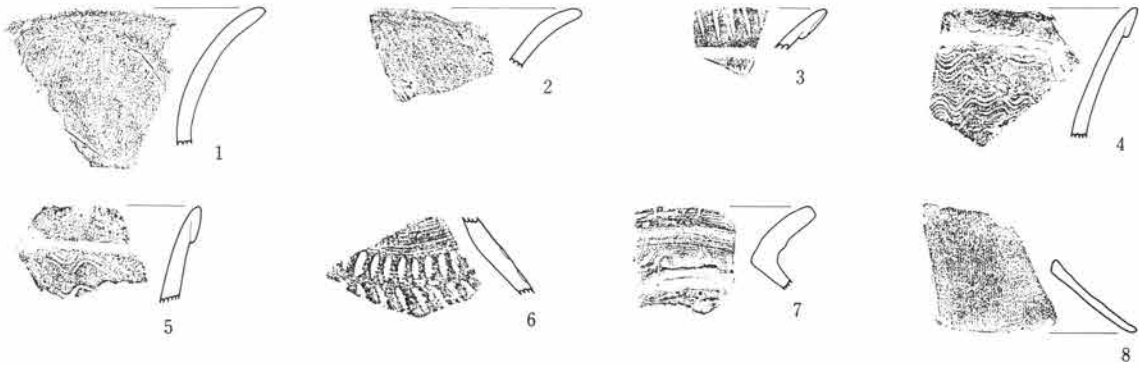
**柱穴** 検出できた主柱穴は1箇所のみである（P1）。径25cm、深さ70cmを測る。この他に291号住居との重複部に多数のピットを検出するが、本住居の主柱穴を特定できない。

**炉跡** 不明。検出できない。（P1）の北傍らに焼土帯を検出するが炉跡と認めるには位置的に難しい。

**遺物出土状態** 住居覆土中より多数の弥生土器、古式土師器破片が出土している。

**時期** 古墳前期

**他の遺構との関係** 291号住居（弥生後期第3期）と重複する。重複部では張り床面など検出できなかったが出土土器に従うなら本住居のほうが新しい。



第255図 295号住居出土遺物

0 10cm

第220表 295号住居出土土器観察表（拓本）

1 壺 細砂粒混入、にぶい橙色	4 甕 細砂粒混入、灰褐色	7 甕 内面(b)ヨコナデ(d)ヘラナデ、砂粒混入、褐灰色
2 壺 内面(c)ハケメ、細砂粒混入、灰白色	5 甕 細砂粒混入、灰褐色	8 脚 内面ヘラナデ、中砂粒混入、黄橙色
3 壺 砂粒混入、にぶい橙色	6 甕 細砂粒混入、淡橙色	

296号住居跡（第256図、図版68）

**位置** C地区住居群の西部に位置する（83-C30）。297号、303号住居と重複する。

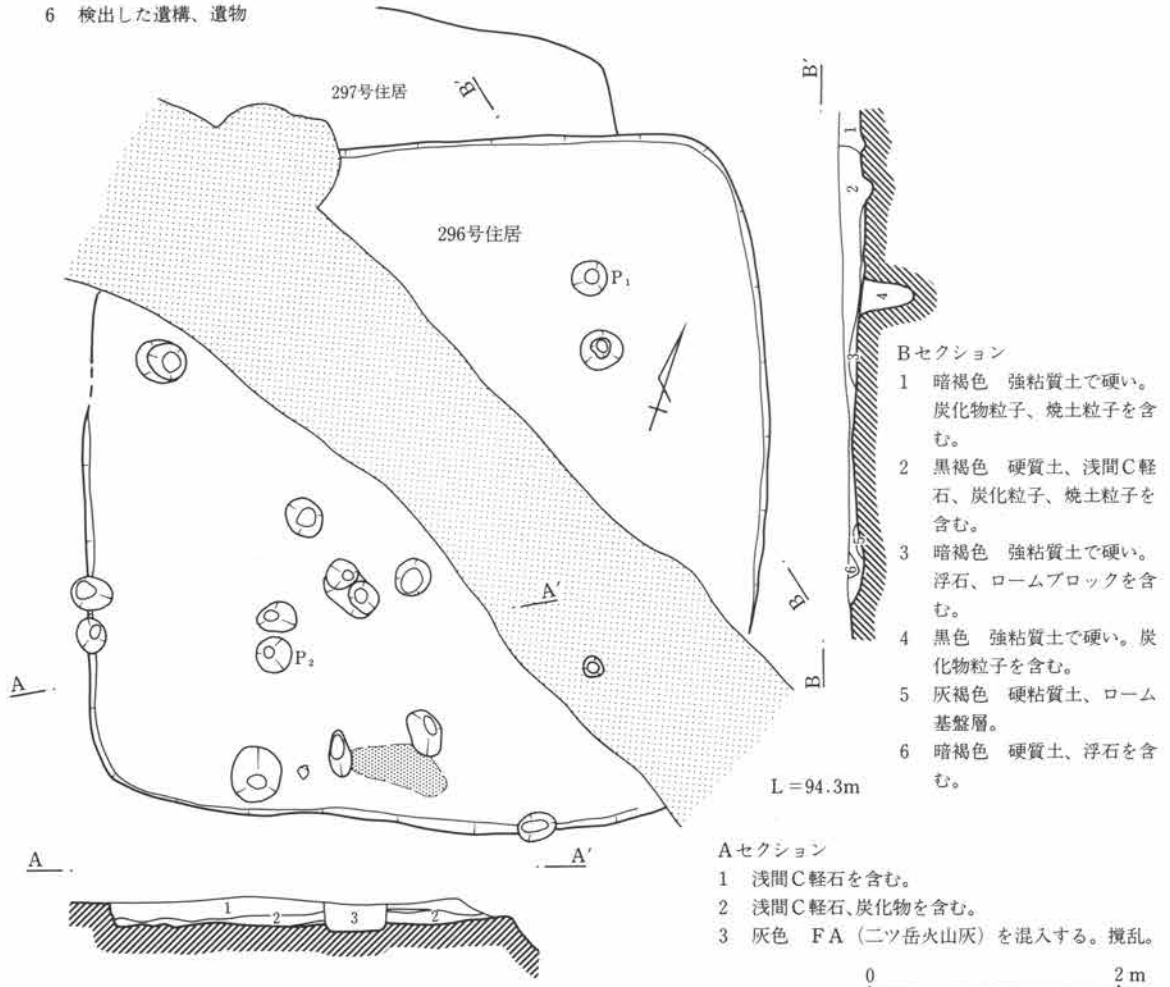
**形状、規模、方位** 隅丸方形を呈する。規模は東西（長軸）5.6m、南北（短軸）5.4mを測る。方位はN-22°-W。

**周壁、壁溝** 39号溝により切られて部分的に不明であるが全体的には明瞭に検出する。検出できた壁高は西周壁で15~20cm。壁溝は認められない。

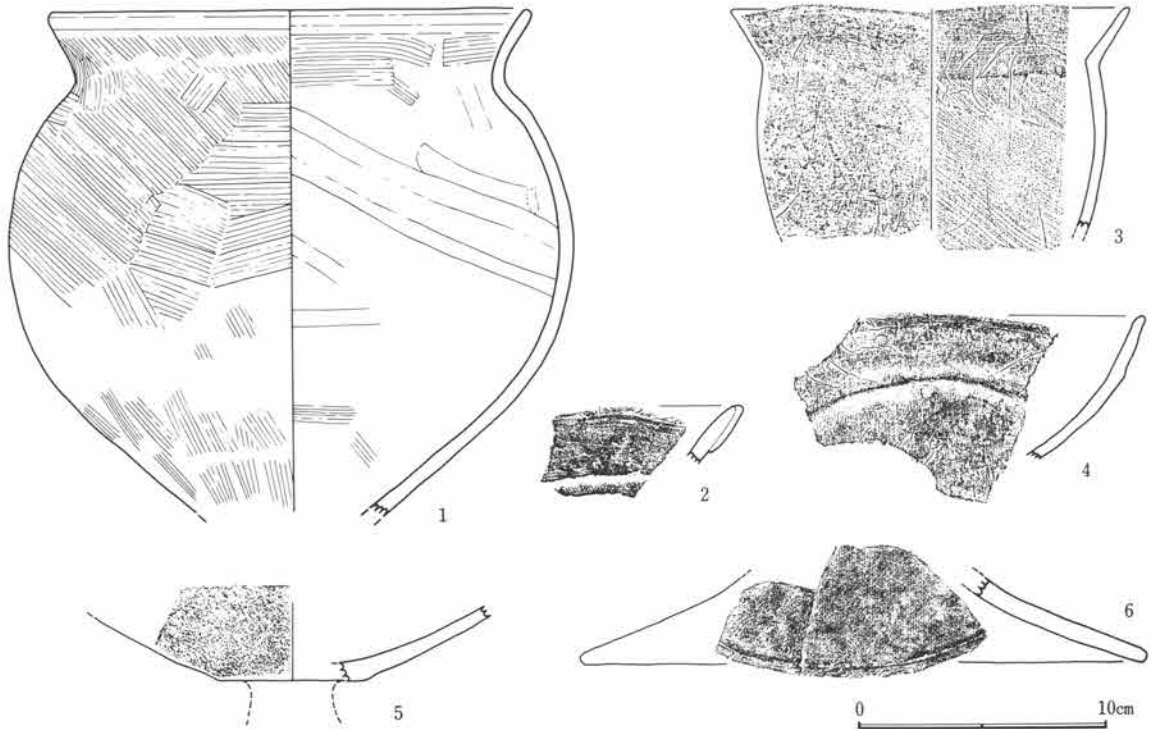
**床面** 平坦に踏み固められた面を検出する。

**柱穴** 主柱穴を2箇所で見出す（P1、P2）。主柱は4本構造と思われる。他の2主柱穴は39号溝が住居を対角線上に貫いており、これにより失われている。2柱穴の規模は径約30cm、深さはP1-45cm、P2-34cm。

**炉跡** 不明。



第256図 296号住居



第257図 296号住居出土遺物

遺物出土状態 床面直上より古式土師器破片が多数出土している。

時期 古墳前期

他の遺構との関係 297号住居（弥生後期第3期）、39号溝（古墳中期）と重複。

第221表 296号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	台付甕	口 19.4 胴 22.5	口辺部直状に外反する。	外面 口縁部はヨコナデ、頸～底部はハケメ。 内面 口縁部はヨコナデ、口辺部はハケメ、 胴部はハケメ後、ヘラナデ。	中砂粒混入 やや堅緻 にぶい褐色	口縁～底部1/2周

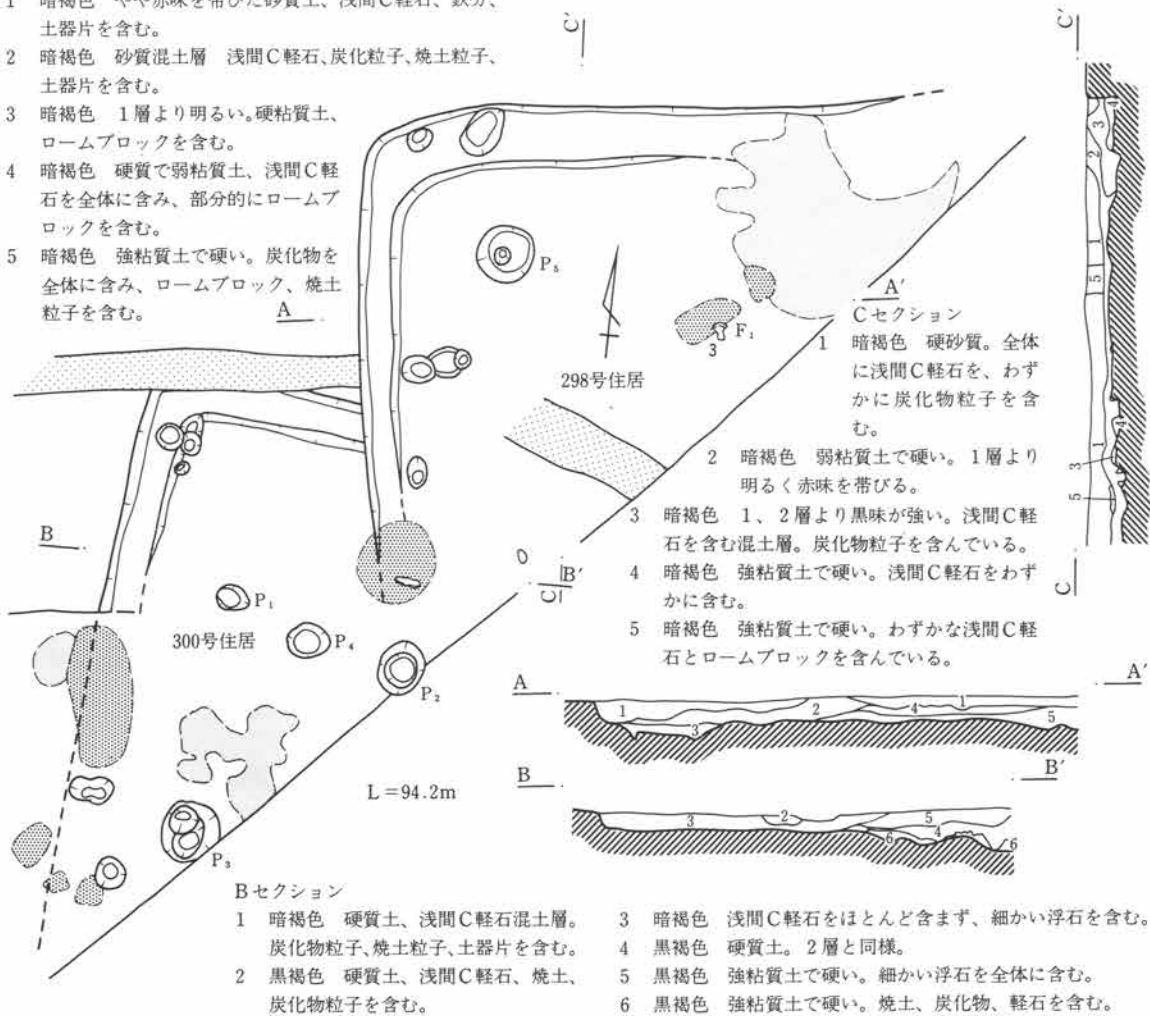
第222表 296号住居出土土器観察表（拓本）

2 壺 (b)ヨコナデ、細砂粒混入、にぶい橙色	4 鉢 内外面ヘラミガキ、細砂粒混入、にぶい橙色	6 高坏 微砂粒混入、灰白色
3 甕 内面ハケメ、細砂粒混入、にぶい橙色	5 高坏 細砂粒混入、明黄褐色	

### 298号住居跡（第258図、図版69）

#### Aセクション

- 1 暗褐色 やや赤味を帯びた砂質土、浅間C軽石、鉄分、土器片を含む。
- 2 暗褐色 砂質混土層 浅間C軽石、炭化粒子、焼土粒子、土器片を含む。
- 3 暗褐色 1層より明るい。硬粘質土、ロームブロックを含む。
- 4 暗褐色 硬質で弱粘質土、浅間C軽石を全体に含み、部分的にロームブロックを含む。
- 5 暗褐色 強粘質土で硬い。炭化物を全体に含み、ロームブロック、焼土粒子を含む。



第258図 298号、300号住居

6 検出した遺構、遺物

**位置** C地区住居群の西部に位置する(77-C30)。300号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 形状は不明。隅丸方形、あるいは隅丸長方形を呈する。東南半部は調査区域外である。規模は不明。方位はN-10°-W。

**周壁、壁溝** 周壁を東南コーナー部を中心に検出する。周壁は2重に認められる。北辺部で40cm、西辺部で30cmの幅にテラス状の段を造っている。300号住居との重複部では次第に不明瞭になる。検出できた壁高は約20cm。壁溝は認められない。

**床面** 床面は堅く踏み固められている。比較的凹凸が目立つ。

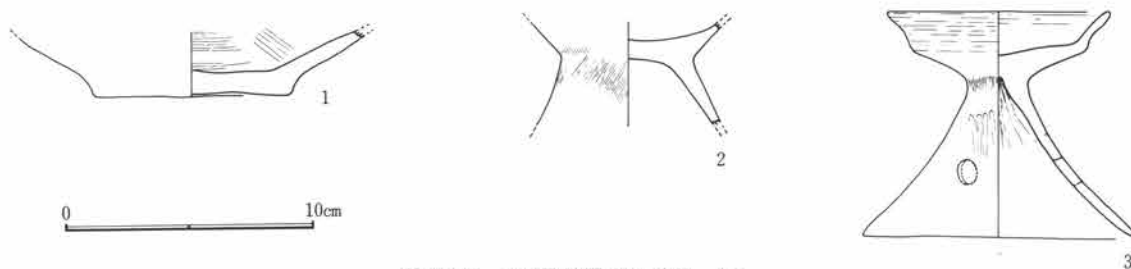
**柱穴** 支柱穴は不明確。住居の北西部に径45cm程の円形ピットがある(P5)。規模は径47cm、深さ34cm、これが支柱穴の可能性がある。

**炉跡** 北周壁から1.5~2mの辺りに地床炉が認められる(F1)。火床面は長径60cmで焼土化している。炉跡の北東部は炭化物、灰の広がりが広範囲に認められる。

**遺物出土状態** 床面直上より古式土師器の器台、甕などが出土している。

**時期** 古墳前期

**他の遺構との関係** 西南部で300号住居(古墳前期)と重複する。床面レベルは本住居の方がやや低く、重複部では僅かに段を認める。重複部上には300号住居の炉跡が認められる。両住居の先後関係は本住居の方が古いと思われる。

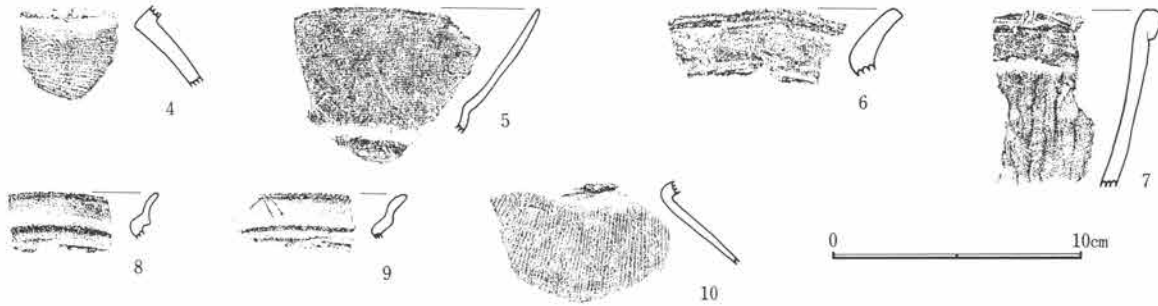


第259図 298号住居出土遺物 (1)

第223表 298号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	底 7.9	底面は僅かに凹面をなす。	外面 ハケメ後ナデ。 内面 ハケメ。	砂粒混入 堅緻 橙色	底部 $\frac{1}{2}$
2	S字状口縁甕			外面 比較的細かいハケメ。 内面 器面が荒れている。	細砂粒混入 堅緻 淡赤橙色	底部~脚台上部
3	器台	器受 8.9	脚部内側天井部に紋目痕あり。器受部は短かく外反する。	外面 器受部はヨコナデ、脚部はヘラミガキ、脚上端で僅かにハケメ痕が残る。 内面 底面はナデ、立ち上り部はヨコナデ、脚上部は指ナデ、下半部はヘラナデ。	細砂粒混入 やや堅緻 にぶい橙色	脚部 $\frac{1}{2}$ 欠損





第260図 298号住居出土遺物 (2)

第224表 298号住居出土土器観察表 (拓本)

4 壺 内外面ハケメ、細砂粒混入、にぶい 橙色	7 甕 内外面ヘラミガキ、細砂粒混入、に ぶい黄橙色	9 S字状口縁甕 内面(b)ヨコナデ、砂粒混 入、にぶい橙色
5 埴 外面(b)ヨコナデ(c)ヘラミガキ、内面 棒状具によるミガキ、中砂粒混入、橙 色	8 S字状口縁甕 外面(b)ヨコナデ、砂粒混 入、にぶい橙色	10 S字状口縁甕 内面(e)指オサエ痕、細砂 粒混入、にぶい橙色
6 甕 細砂粒混入、浅黄橙色		

## 300号住居跡 (第258図、図版54)

**位置** C地区住居群の西部に位置する(78-C30)。東部で298号住居、西南部で299号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 形状、規模は不明。東側の大半は調査区域外であるため住居の全体像を把握することはできない。方位はN-8°-E。

**周壁、壁溝** 北辺部、及び西辺部にて周壁が2重に見られる。北辺部、西辺部とも幅30cm程のテラス状の段を造っている。内側の段の高さは北辺部で10cm前後である。壁溝は認められない。

**床面** 床面は黄褐色ローム質土面を堅く踏み固めている。

**柱穴** 支柱穴は不明確。4箇所では柱穴ではないかと思われるピットを検出するが(P1~P4)、配置関係はやや整っておらず、形状も4ピットはそれぞれ著しく異なっており支柱穴と認めるには問題がある。あるいはP4のみが支柱穴になるかもしれない。それぞれのピットの深さはP1が20cm、P2が70cm、P3が73cm、P4が68cmである。

**炉跡** 北側周壁から1~1.5mの辺りに地床炉を検出する。炉跡は径70cm程の良く焼けた火床面が認められる。

**遺物出土状態** 出土遺物は少ない。覆土中より古式土師器、甕、埴などが数点出土している。

**時期** 古墳前期

**他の遺構との関係** 東半部で298号住居(古墳前期)と重複する。西南部で299号住居(弥生後期第3期か)と重複する。298号住居との先後関係は本住居の炉跡が298号住居の周壁上に認められることから本住居の方が新しいと思われる。

## 301号住居跡 (第261図)

**位置** C地区住居群の西端部に位置する(96-C31)。288号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 形状、規模は不明。方位は長軸不明。N-55°-W。

**周壁、壁溝** 周壁の遺存状態は悪い。東辺部、南辺部で部分的に周壁を検出する。壁溝は認められない。

**床面** 床面は平坦に踏み固められている。東辺部で焼土帯の広がりを検出する。

**柱穴** 不明。

**炉跡** 不明。検出できない。

**遺物出土状態** 出土遺物は非常に少ない。土器の細片が数点認められるのみである。

**時期** 古墳前期

**他の遺構との関係** 288号住居（弥生中期後半）と重複する。



第261図 301号住居

#### (4) 古墳時代中期の住居跡

103号住居 (第262図、図版69、70)

**位置** C地区住居群の西南部に位置する(78-C37)。北に106号、南に105号住居と重複する。

**形状、規模、方位** 形状は不明確。南半部で遺存状態の悪い周壁が残存しているが、北半部では周壁は検出できない。規模は長軸4m前後、短軸3.7mになると思われる。方位はN-35°-W。

**周壁、壁溝** 周壁の遺存状態は悪い。確認できた壁の高さは10cm。壁溝は認められない。

**床面** 暗褐色粘質土を踏み固めた面を部分的に検出する。

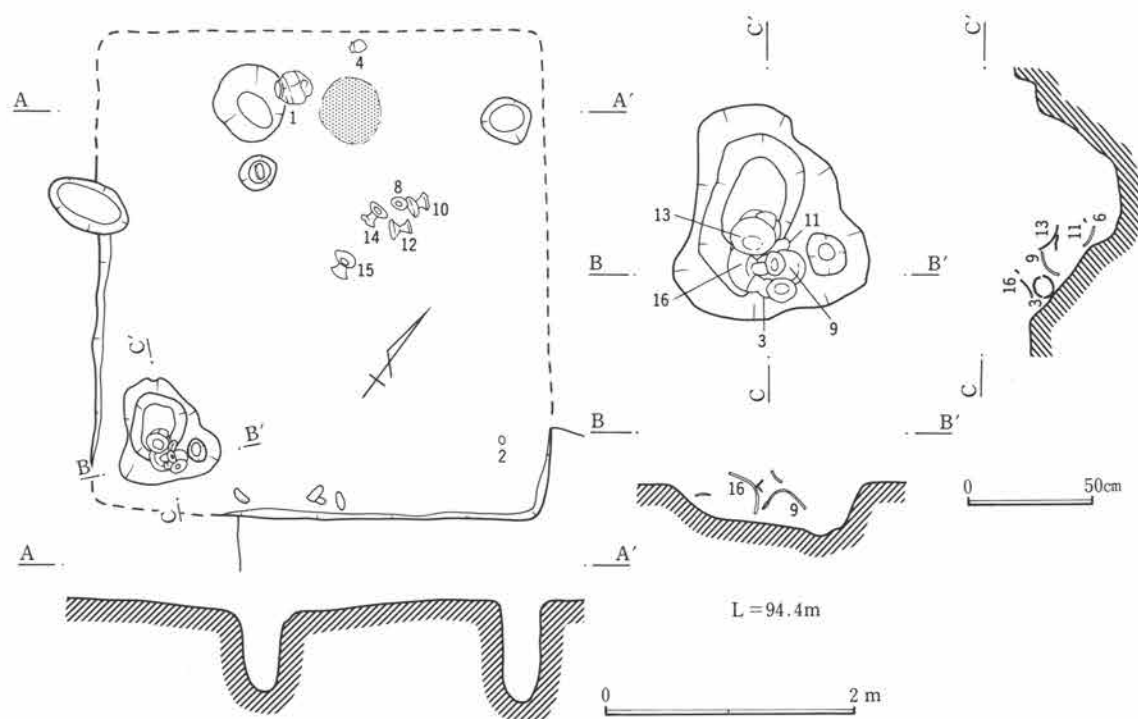
**柱穴、その他ピット** 支柱穴は不明。検出することができなかった。住居の南コーナー部に径90cm、深さ40cmの不整形なピットがある。ピット中からは高杯を中心に完形土器が5点出土している。ピット底面に密着する状態で小形埴1個体、さらにこの上に無造作に高杯4個を重ねている。

**炉跡** 住居の北西部に地床炉と思われる施設が残存している。径60cm程に焼けた面があり、この面に密着して、1個体の土器が潰れて破碎したと思われる状態で出土している。

**遺物出土状態** 住居南コーナー部のピット中より、完形高杯が4点出土した他、床面に密着した状態でやはり高杯を中心とする完形土器群が出土している。住居中央部ではピット内に出土したものと同様の完形の高杯4点が横倒し状態でみられ、その傍らには完形の杯が床面に伏せた状態で出土した。そこからやや南に外れた辺りに完形の埴と甕が床面に横倒し状態で密着して検出されている。

時期 古墳中期

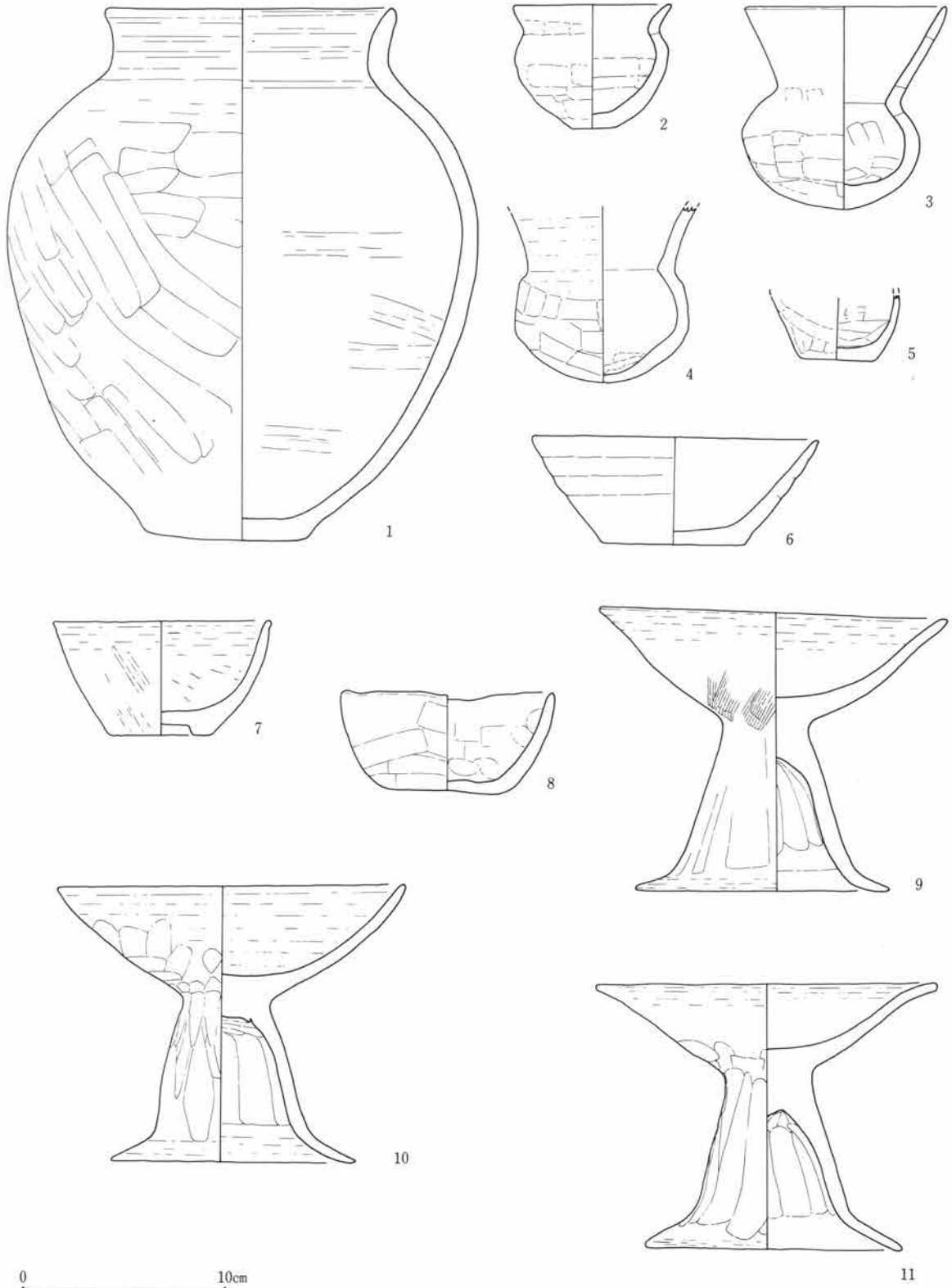
他の遺構との関係 南部で105号住居（時期不明確）と重複するが重複部での103号住居の遺物出土状態により105号住居の方が古いと判断できる。北部で106号住居（弥生後期）と重複する。



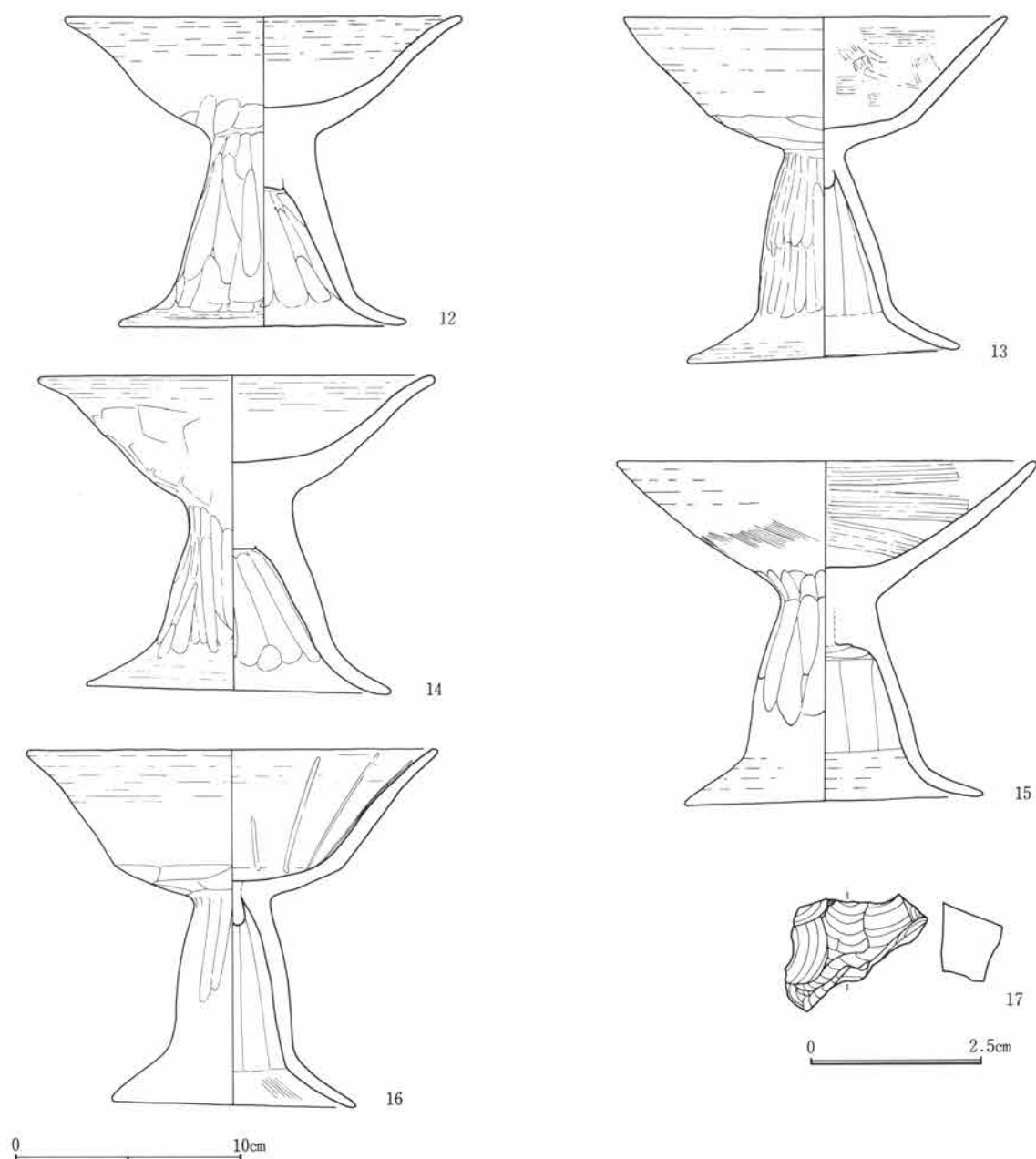
第262図 103号住居

第225表 103号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	口 14.3 胴 23.0 底 8.0 高 25.8		外面 口辺部はヨコナデ、頸～胴上部はナデ、胴部はヘラケズリ 内面 口辺部はヨコナデ、胴部はヘラナデ。	粗砂粒、白色粒混入 堅緻 にふい黄褐色	完形
2	埴	口 7.8 高 6.0		外面 頸～体部はヘラケズリ。 内面 体部はヘラナデ。	粗砂粒混入 堅緻 にふい橙色	口縁部一部欠損
3	埴	口 9.9 高 9.9	口辺部は直状に外反する。	外面 口辺部はヨコナデ、体上位はヘラナデ、体下部はヘラケズリ。 内面 口辺部はヨコナデ、体部はヘラナデ。	中砂粒、白色粒混入 堅緻 褐色	完形
4	埴			外面 肩部ナデ、以下ヘラケズリ。 内面 指ナデ。	粗砂粒、黒色粒混入 堅緻 灰褐色	口縁部欠損
5	壺	底 3.6		外面 ヘラナデ、指ナデ、底面はヘラケズリ。 内面 ヘラナデ、指ナデ。	中砂粒、黒、白色粒混入 堅緻 灰褐色	底部



第263図 103号住居出土遺物 (1)



第264図 103号住居出土遺物 (2)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
6	埴	口 14.0 底 7.4 高 5.2	口辺部は直状に外反する。	外面 器面剥落著しい、輪積痕あり。 内面 器面剥落著しい。	粗砂粒混入 やや堅緻 灰褐色	3/4周 内外面共に荒れている。
7	鉢	口 10.2 底 5.0 高 5.4	体部やや内湾する。	外面 口縁部はヨコナデ、体部はヘラナデ、ヘラミガキ。 内面 口縁部はヨコナデ、体部はナデ。	粗砂粒混入 堅緻 淡橙色	ほぼ完形
8	鉢	口 10.4 底 6.1 高 4.8		外面 体部はヘラケズリ。 内面 ヘラナデ、指オサエ。	粗砂粒混入 やや堅緻 赤褐色	完形

## 6 検出した遺構、遺物

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
9	高坏	口 17.0 脚 12.4 高 13.5		外面 口縁部はヨコナデ、坏底部はハケメ、脚はヘラミガキ、脚裾はヨコナデ。 内面 坏部はヨコナデ、脚部は指ナデ、脚、裾部はヨコナデ。	粗砂粒、黒、白色粒混入 堅緻 赤褐色	完形
10	高坏	口 17.0 脚 12.0 高 13.4		外面 口縁部はヨコナデ、坏部はヘラナデ、脚部はヘラナデ、裾部はヨコナデ。 内面 坏部はヨコナデ、脚部はヘラケズリ、裾部はヨコナデ。	中砂粒、黒、白色粒混入 堅緻 黄褐色	ほぼ完形
11	高坏	口 17.0 脚 12.5 高 12.8		外面 口辺部はヨコナデ、体部はハケメ、脚部はヘラナデ、裾部はヨコナデ。 内面 口辺部はヨコナデ、体部はヘラナデ、脚部は指ナデ、裾部はヨコナデ。	粗砂粒、石英粒混入 堅緻 赤褐色	ほぼ完形
12	高坏	口 17.4 脚 12.7 高 13.5	口縁部は緩やかに外反する。	外面 口縁部はヨコナデ、坏体部はヘラナデ、脚部はヘラナデ、脚裾部はヨコナデ。 内面 口縁部はヨコナデ、坏体部はヘラナデ、脚部は指ナデ、裾部はヨコナデ。	中砂粒混入 堅緻 にぶい黄橙色	完形
13	高坏	口 16.8 脚 12.0 高 14.8	脚中位は膨らむ。坏下部に緩い稜を持つ。	外面 口辺部はヨコナデ、坏底部はヘラナデ、脚中位ヘラナデ、脚裾部はヨコナデ。 内面 口縁はヨコナデ、口辺部はヘラナデ、脚中位ヘラケズリ、裾部ヨコナデ。	粗砂粒混入 堅緻 明赤褐色	完形
14	高坏	口 17.0 脚 13.5 高 13.8		外面 口辺部はヨコナデ、体部はヘラナデ、脚部はヘラナデ、裾部はヨコナデ。 内面 口辺部はヨコナデ、脚部は指ナデ、裾部はヨコナデ。	粗砂粒混入 堅緻 灰褐色	ほぼ完形
15	高坏	口 18.4 脚 13.2 高 14.7		外面 口縁部はヨコナデ、坏底部はハケメ、脚部はヘラケズリ、裾部はヨコナデ。 内面 口縁部はヨコナデ、坏部はハケメ、脚部はヘラケズリ、裾部はヨコナデ。	細砂粒混入 堅緻 明赤褐色	完形
16	高坏	口 18.0 脚 10.7 高 15.4	坏体部下に稜を持つ。	外面 口辺部はヨコナデ、坏底部はヘラナデ、脚部はヘラナデ、脚裾部はヨコナデ。 内面 坏部はヨコナデ、ヘラミガキ、脚部はヘラケズリ、裾部はヨコナデ。	粗砂粒混入 堅緻 明赤褐色	ほぼ完形

第226表 103号住居出土石器観察表

遺物番号	名称	計測値(mm)	石質	重量(g)	特徴
17	剥片	16.5×19.5×8.5	黒曜石	2.0	全体不整形な剥離面が見られる。刃器などの基部破片か。

## (5) 古墳時代後期、その他の住居跡

## 29号住居跡 (第265図)

**位置** C地区住居群の西端部(82-C38)に位置する。103号、105号住居の西に位置する。

**形状、規模、方位** 形状は不明。住居は染谷川の河岸縁辺に位置しており、住居の西辺部は河川の侵食により失われている。また住居の周囲の土層堆積状態は河川の侵食あるいは後世の削平により第III層、第IV層がほとんど失われた状態であり、このため住居の遺存状態は悪い。規模は不明。方位はN-42°-W。

**周壁、壁溝** 周壁は住居の東壁で検出するが他の3辺では検出できない。周壁の高さは東側コーナー部か

らカマドの間で、高さ約20cmを測る。北壁、カマドの北側は周壁下に幅15cmの溝を作っている。

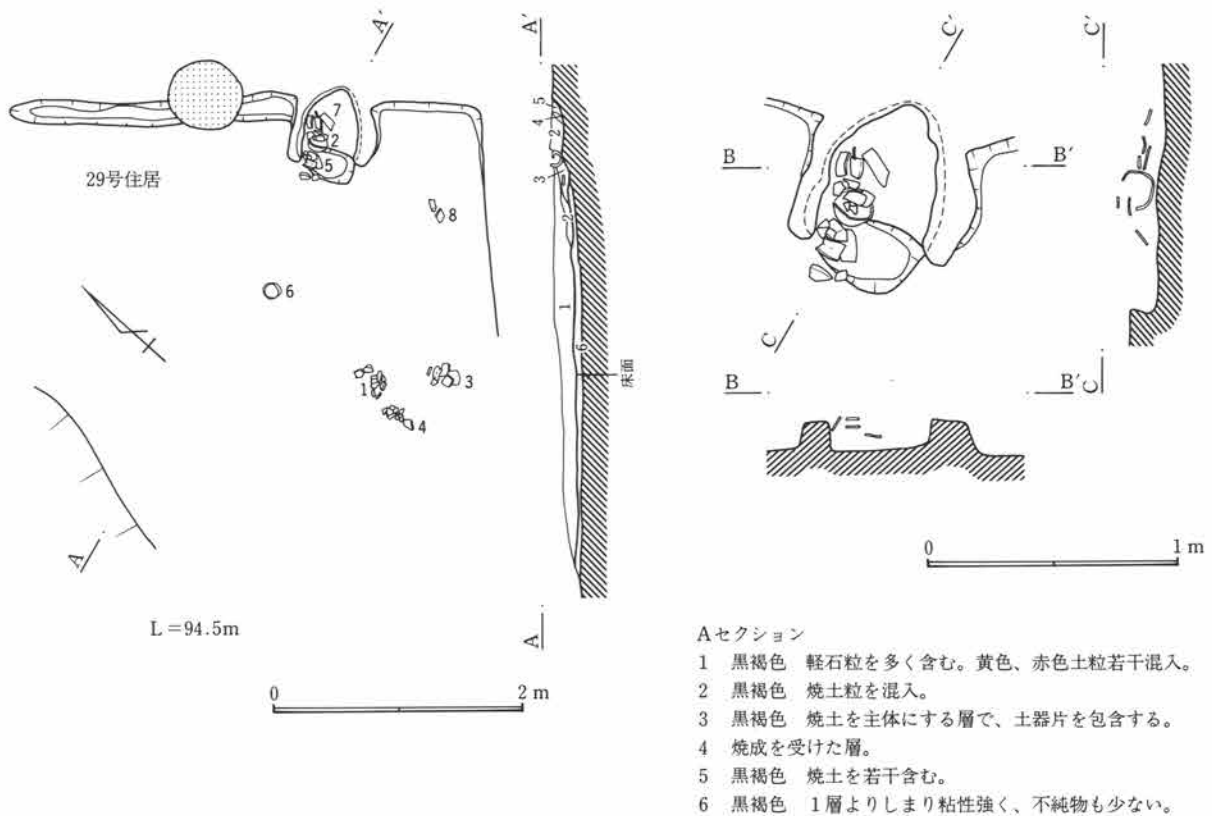
**床面** 床は比較的平坦に踏み固められた面を検出する。

**カマド** カマドは住居の東辺やや南よりに設けられる。火床部は周壁の内側に設けられ、袖は周壁から40cmを測る。火床面の両側壁の遺存する高さは約20cm、良く焼けている。

**遺物出土状態** カマド内、床面上より完形土器、あるいは大形破片が多数出土する。カマド内より坏、小型甕などの大形破片が、住居中央部から東南部にかけて甕、坏など関係個体が床面に密着した状態で出土している。

**時期** 古墳後期前半

**他の遺構との関係** 本住居の位置する区域では二ツ岳火山灰（FA）層は遺存してない。このため火山灰降下と住居の時期的な関係については発掘調査では確かめられていない。しかし、出土遺物は時期的に二ツ岳火山灰（FA）降下とほぼ同期である。水田の南限界部より5～6m南に位置するところから本住居は水田と同時期に営まれた可能性が高い。

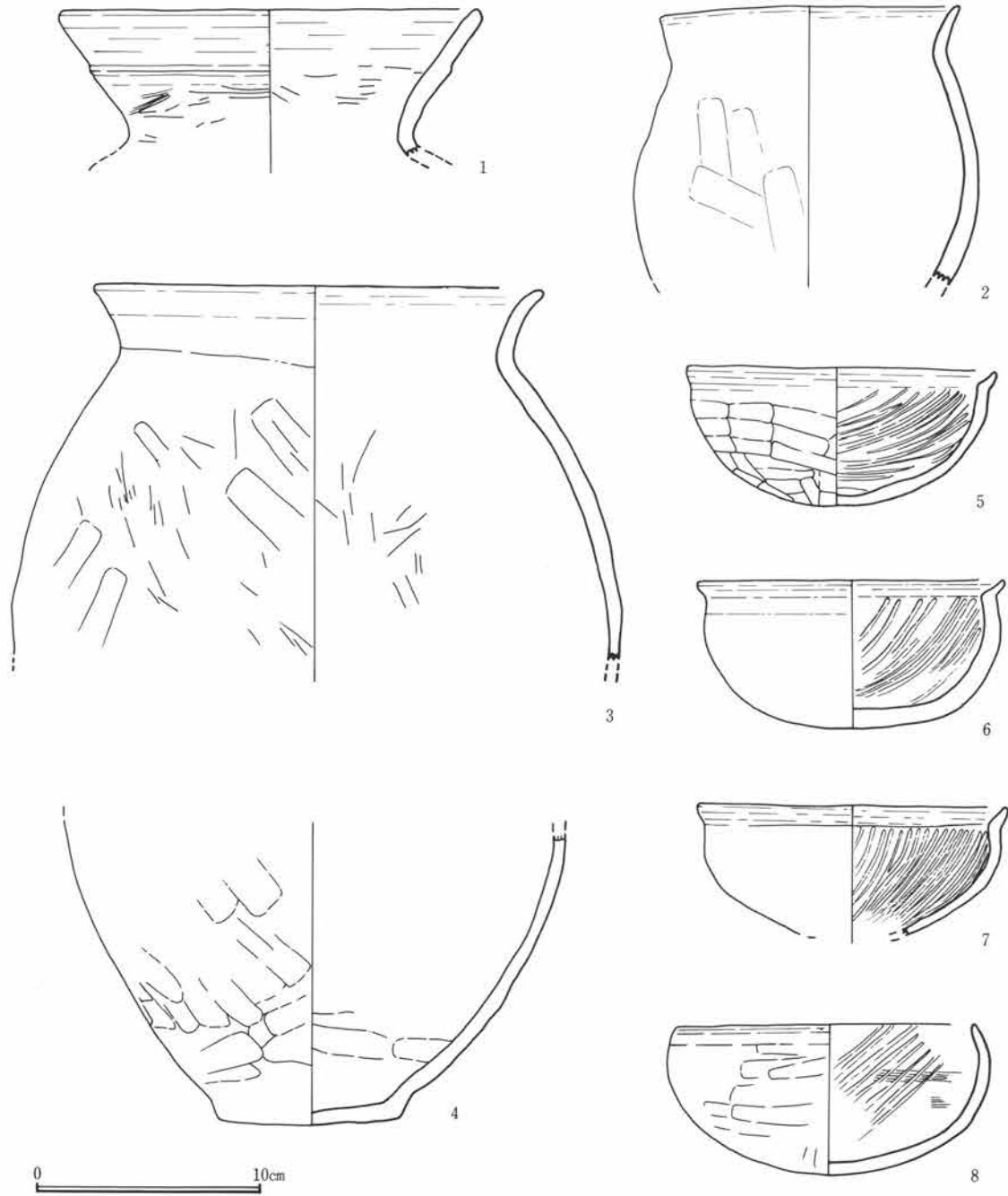


第265図 29号住居

第227表 29号住居出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 18.8	複合口縁をなす。口辺部中位に段を作る 頸部は強く屈曲する	外面 ヨコナデ。 内面 口縁部はヨコナデ、器面が荒れている	細砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	口縁～頸部全周

6 検出した遺構、遺物



第266図 29号住居出土遺物

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
2	甕	口 13.4	口縁部は外反が弱く頸部は緩くびれる。	外面 口縁部～頸部はヨコナデ、胴部はヘラナデ。 内面 口縁部はヨコナデ、胴部はナデ。	細砂粒混入 堅緻 浅黄橙色	口縁～胴下位全周
3	甕	口 20.0	口縁部はやや外反する。	外面 口辺部はヨコナデ、胴部はヘラケズリ。 内面 口辺部はヨコナデ、胴部はヘラミガキ。	細砂粒混入 やや堅緻 浅黄橙色	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 周



遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
4	甕		胴下部はやや縦長の半球形、底面は僅かに膨らみを持つ。	外面 胴下位はヘラケズリ。 内面 横方向のヘラナデ。	細砂粒混入 やや軟弱 暗赤褐色	胴下半～底部
5	坏	口 13.8	内斜口縁を呈する。口縁端部は強くつまみ上げられる。丸底。	外面 口縁～胴上部はヨコナデ、胴下位～底部はヘラケズリ。 内面 口縁部はヨコナデ、胴部は丁寧なナデ後斜行暗文状ヘラ研磨、底面はナデ、器面は滑沢。	砂粒目立たず 堅緻 橙色	口縁～底部 $\frac{1}{4}$ 周
6	坏	口 13.8	内斜口縁を呈するが口縁頭部は僅かにつまみ上げられている。胴中位が比較的膨らみ、深い、器壁は厚い、丸底。	外面 口縁～胴上位は横ナデ、胴上位～底部はナデに近いヘラケズリ。 内面 口縁部はヨコナデ、胴部は丁寧なナデ後、棒状具による斜行暗文状ヘラ研磨、器面は滑沢。	細砂粒目立たず 堅緻 明赤褐色	完形、口縁部を僅かに欠損
7	坏	口 13.8	内斜口縁を呈する。口縁端部つまみ上げられる。	外面 口縁～胴上部はヨコナデ、胴下部はヘラケズリ。 内面 口縁部はヨコナデ、胴部は丁寧なナデ後斜行暗文状ヘラ研磨、器面は滑沢。	砂粒目立たず 堅緻 橙色	口縁～胴下部 $\frac{1}{2}$ 周
8	坏	口 13.3 高 6.6	口縁～底部は全体的に内湾する。	外面 口縁部はヨコナデ、胴～底部はヘラケズリ。 内面 胴部は丁寧なナデ後、棒状具による斜行暗文状ヘラ研磨、器面は滑沢。	砂粒目立たず 堅緻 暗赤褐色	口縁～胴下位 $\frac{1}{2}$ 周

## 105号住居跡 (第267図)

位置 C地区住居群の西端部に位置する(80-C37)。103号住居と重複する。

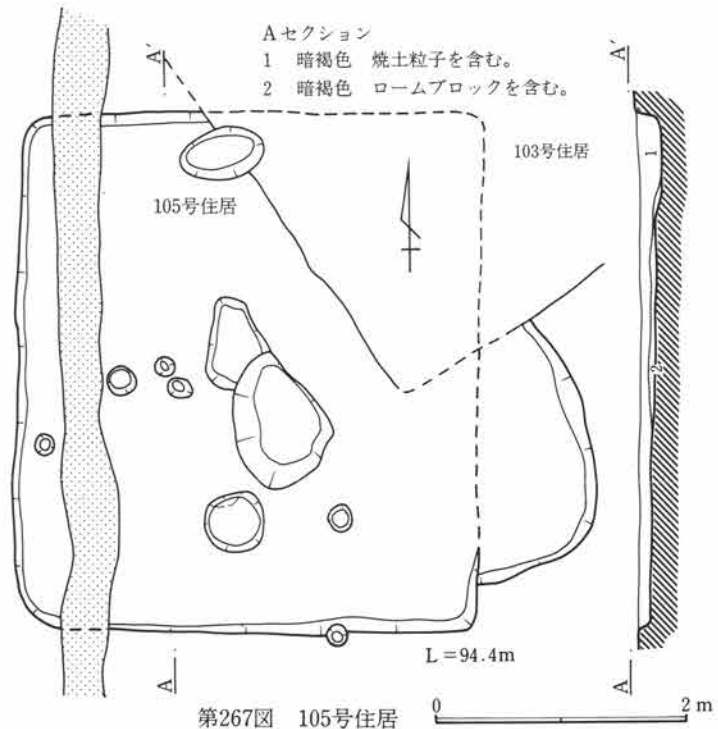
形状、規模、方位 長方形を呈する。北半部は103号住居と重複しており、この部分の形状は不明確であるが全体的には遺存状態は比較的良好である。規模は長軸4.2m、短軸3.8m。方位N-4°-E。

周壁、壁溝 西北コーナー部から南辺にかけて周壁の遺存状態は良好である。確認された周壁の高さは15cm前後である。壁土は黄褐色ローム質土(第V層)。壁溝は確認できない。

柱穴、その他のピット 支柱穴は不明。大小の円形、不整形のピットが見られるが柱穴と確認できるものはない。

炉跡 不明。検出することができない。

遺物出土状態 出土遺物はほとんどない。



第267図 105号住居

6 検出した遺構、遺物

時期 不明確

**他の遺構との関係** 北東部で103号住居と重複する。両住居の床面レベルはほぼ同じであり、103号住居出土遺物が重複部に確認できることから103号住居より古いと判断できる。東辺部に落ち込みが重複するがこの落ち込みの時期、性格は不明。本住居との関係は不明。

## (6) 周溝墓

## 1号周溝墓 (第269図、図版71、72)

**位置** C地区住居群の西北端、現染谷川の左岸段丘上、縁辺部に位置する(60-C42)。北側周溝の西半部は染谷川による侵食により、斜めに削られ失われている。

**形状、規模** 周溝は、直状の溝を4条、南北がわずかに長い正方形に配置することにより、形作られている。四隅は土橋状に途切れる。規模は外郭で南北12m、東西11mを測る。それぞれの周溝の形状は端部が南溝のように角張るものとその他のように丸みを持つものがある。それぞれの周溝の長さも一律ではない。断面形状は一様に立ち上がり傾斜の緩いU字状を呈する。それぞれの溝の規模は東側溝が長さ7.1m、最大幅1.3m、深さ50cm、西側溝は長さ8.1m、最大幅1.5m、深さ50cm。北側溝は長さ不明、幅1.3m、深さ50cm。南側溝は長さ6.0m、最大幅1.7m、深さ40cm。

**土層堆積の状況** 1号周溝墓の位置する地区は弥生期～古墳期の文化層である黒色粘質土層(第IVb層)が後世の削平、あるいは、土壌流失により失われている。このため周溝墓の台状部の検出面は自然堤防微高地の基盤面である黄褐色ローム質土(第V層)面であるため当時の地表面の検出、あるいは、盛土の有無の確認などはできなかった。溝覆土はやや粘性の強い褐色土がレンズ状、逆アーチ状に互層をなし、自然堆積により埋没したことを示している。東側の溝の一部の地点、溝覆土最上層で浅間C軽石層の堆積が厚さ10cmほど確認されておりこの層の最下面が、溝底より60cmあることから、浅間C軽石の降下時には溝の埋没が進んでいたこと、築造時の東側溝の深さは少なくとも60cm以上であったことなどが推察される。

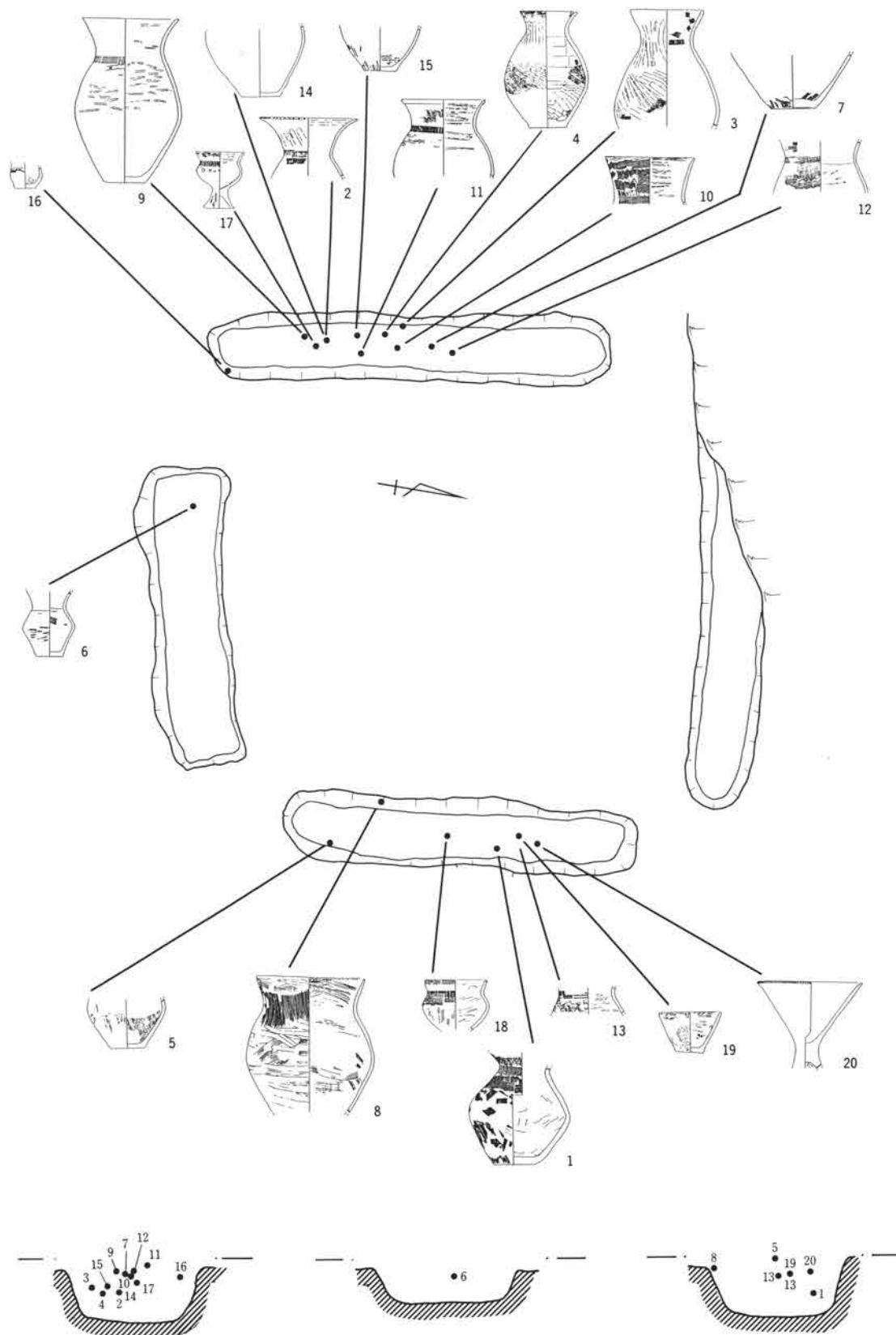
**主体部** 台状部中央黄褐色ローム質土層上面が検出面であるが、この面では土壌などの埋葬施設を確認できなかった。

**出土遺物** 周溝内より完形土器、半完形土器や多量の土器破片が出土している。出土土器の器種は壺、甕、台付甕、鉢、高杯など、一般的な器種構成を示している。土器の出土状況は溝底より30cm以上上位の覆土上層に集中している。これらは溝の埋没が進んだ段階のものと判断できる。

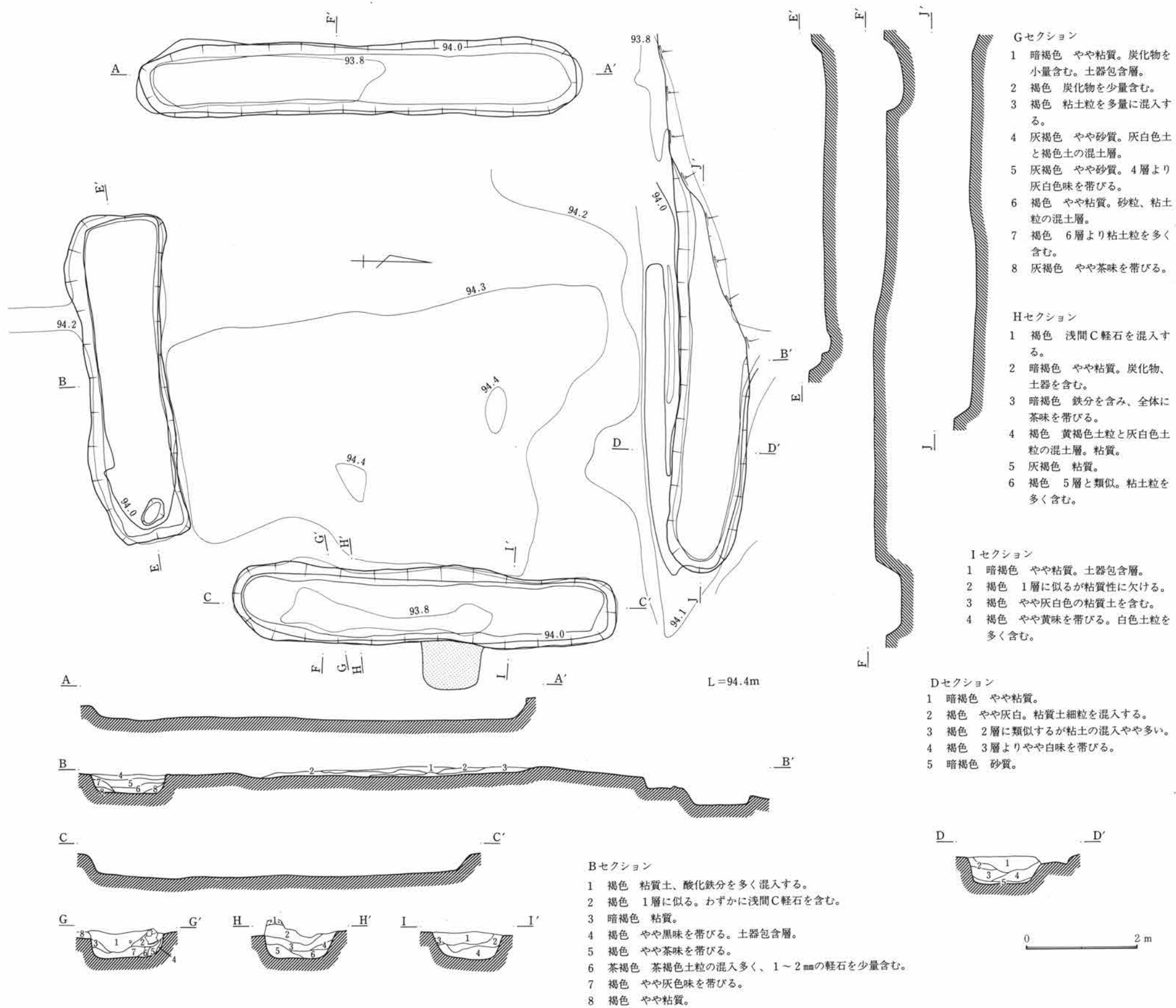
**時期** 弥生後期第1期～第3期

第228表 1号周溝墓出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	胴 19.7 底 8.0		外面 口辺部はハケメ、頸部は等間隔止め一簾状文、胴上部は一波状文、胴～底部はハケメ。 内面 口～胴部はハケメ、ヘラナデ。	細砂粒混入 堅緻 橙色	口縁のみ欠損
2	壺	口 19.4	口辺部は緩やかに外反する。	外面 口縁端部は刻み目、口辺部はヘラナデ、頸部は2連止め一簾状文、胴上部は波状文。 内面 ヘラナデ。	粗砂粒混入 堅緻 橙色	口縁～胴上位 $\frac{1}{2}$ 周
3	壺	口 14.4	胴上部は細長く頸部で緩やかにくびれ、斜上方に伸び、口縁部で僅かに内湾する。	外面 口縁部はヨコナデ、胴中位より上はヘラナデ、胴中位より下はハケメ。 内面 口縁部はヨコナデ、口辺～頸部はハケメ、胴上位はハケメ。	細砂粒混入 やや軟弱 橙色	口縁～胴中位 $\frac{1}{2}$ 周
4	壺	口 11.3 胴 16.6 底 7.4 高 23.0	口辺部は緩やかに外反する。	外面 口縁部はヨコナデ、口～頸部はヘラナデ、胴部はハケメ、底部はヘラミガキ。 内面 口縁部はヨコナデ、口～頸部はヘラミガキ。	中砂粒混入 堅緻 淡褐色	完形

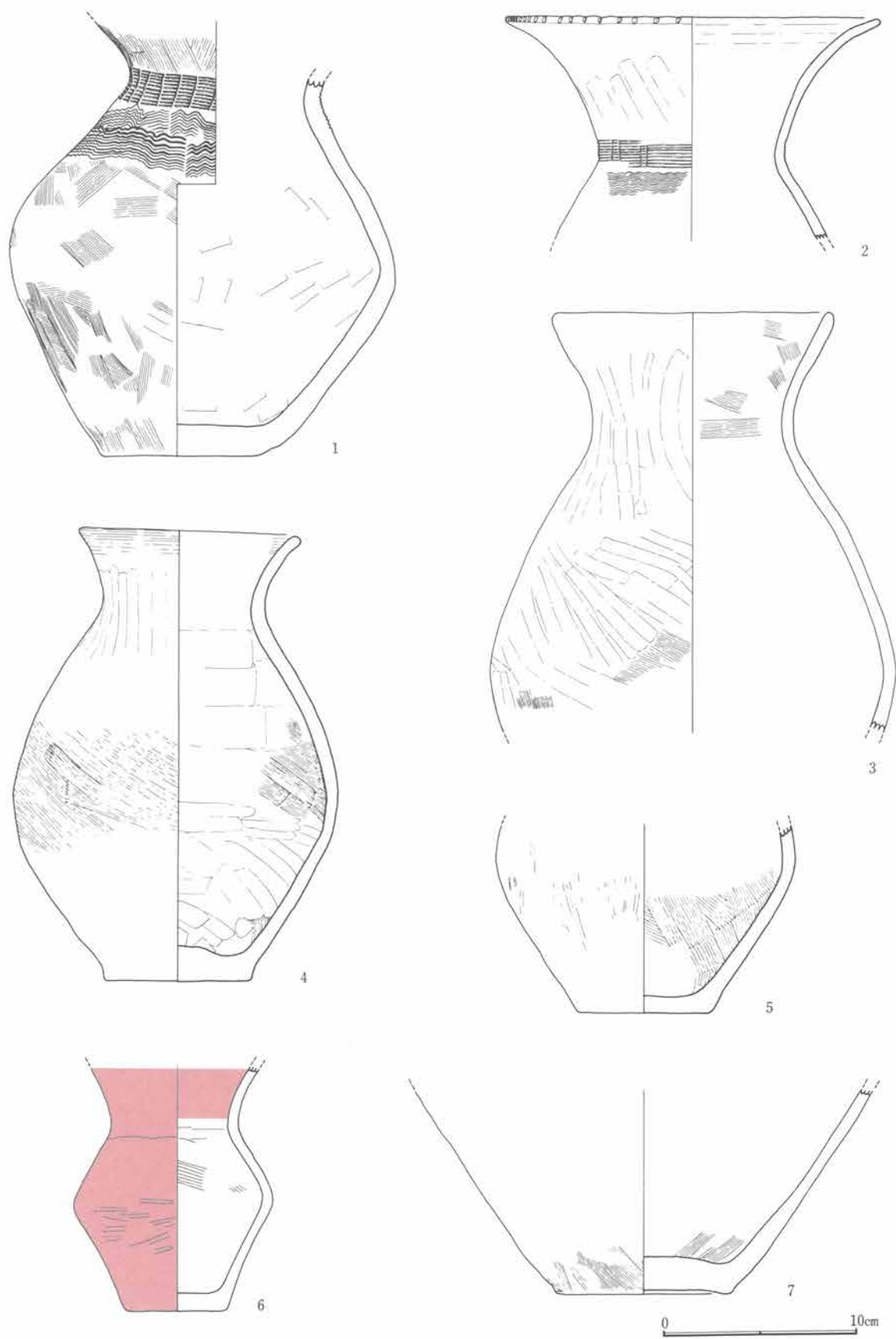


第268図 1号周溝墓遺物出土位置

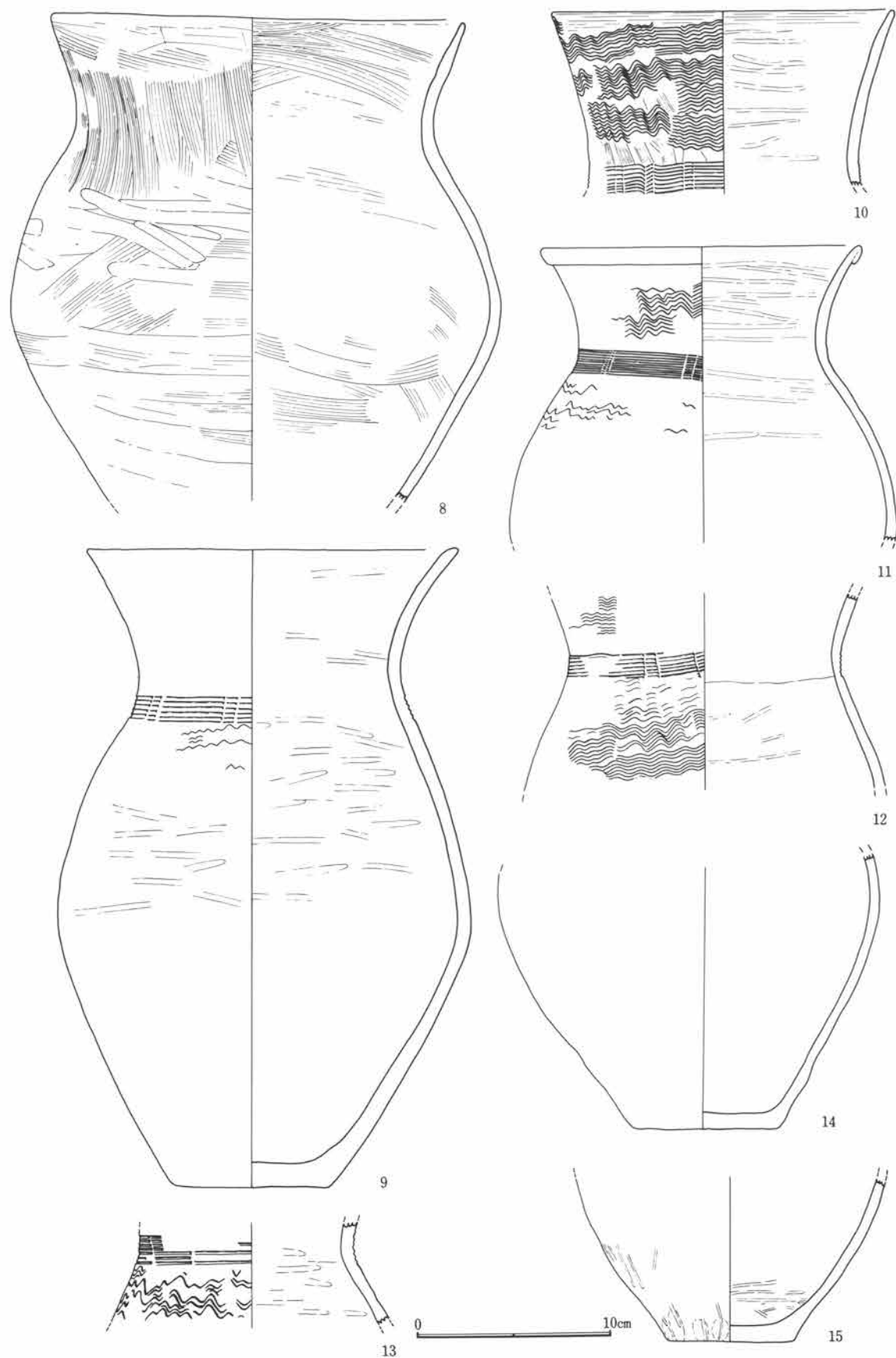


第269図 1号周溝墓



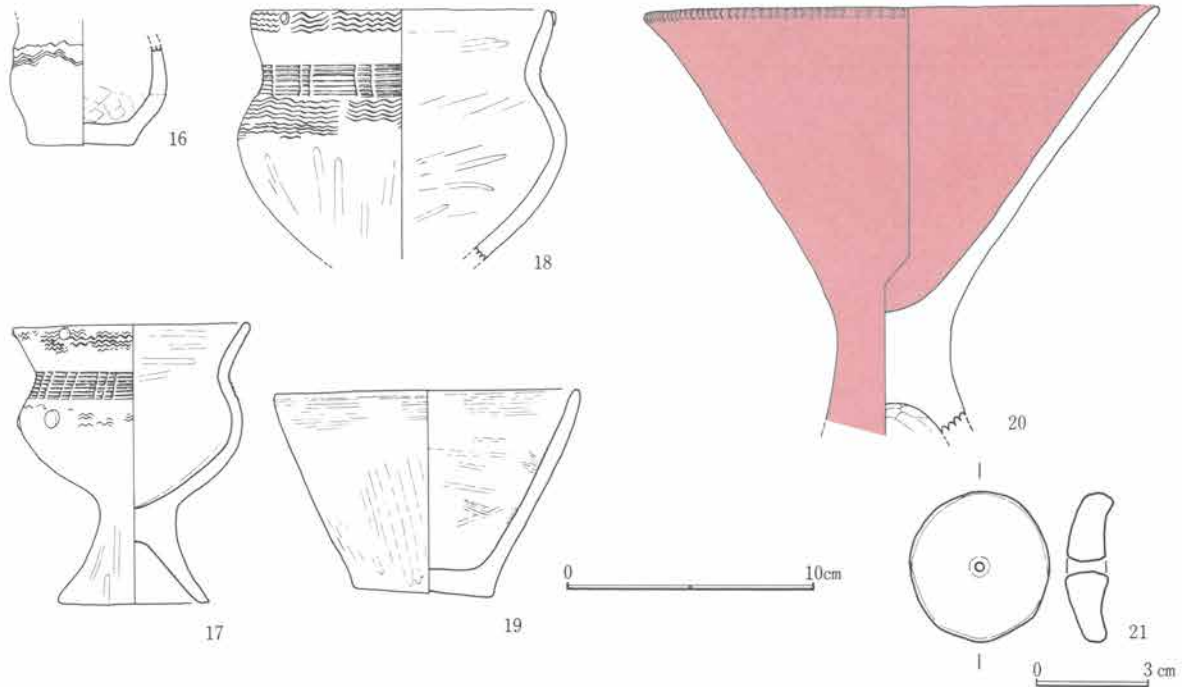


第270图 1号周溝墓出土遺物 (1)



第271図 1号周溝墓出土遺物 (2)





第272図 1号周溝墓出土遺物 (3)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
5	壺	底 6.5		外面 ヘラミガキ。 内面 ハケメ、ヘラナデ。	細砂粒混入 やや堅緻 明褐色	胴～底部
6	壺	底 5.0		外面 ヘラミガキ。 内面 ハケメ後、ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 赤褐色	頸～底部全周 外面及び内面口 辺部丹彩
7	壺	底 9.0		外面 底部はハケメ。 内面 底部はハケメ。	細砂粒、黒色粒 混入 やや堅緻 にぶい橙色	底部
8	甕	口 21.3	口辺部は直状に外反する。	外面 全面ハケメ、胴上部、部分的にナデ。 内面 ハケメ。	細砂粒、黒色粒 混入 堅緻 灰褐色	口縁～胴下位全周
9	壺	口 19.0 胴 21.2 底 7.8 高 32.5	口辺部は緩やかに外反する。	外面 頸部は2連止め一簾状文、胴部はヘラミガキ。 内面 口辺～胴部ヘラミガキ。	細砂粒、黒、白色粒混入 堅緻 にぶい橙色	口縁～底½周
10	甕	口 17.6	口縁部は緩やかに外反する。	外面 口縁部はヨコナデ後、波状文、口辺部はハケメ後、波状文、頸部は2連止め一簾状文。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい褐色	口縁～頸部½周
11	甕	口 16.6	折り返し口縁、口辺部はやや外反する。	外面 頸部は11本単位の2連止め一簾状文、口辺～胴上部は波状文。 内面 ヘラミガキ。	砂粒混入 やや堅緻 にぶい橙色	口縁～胴中位½周 器面荒れている

## 6 検出した遺構、遺物

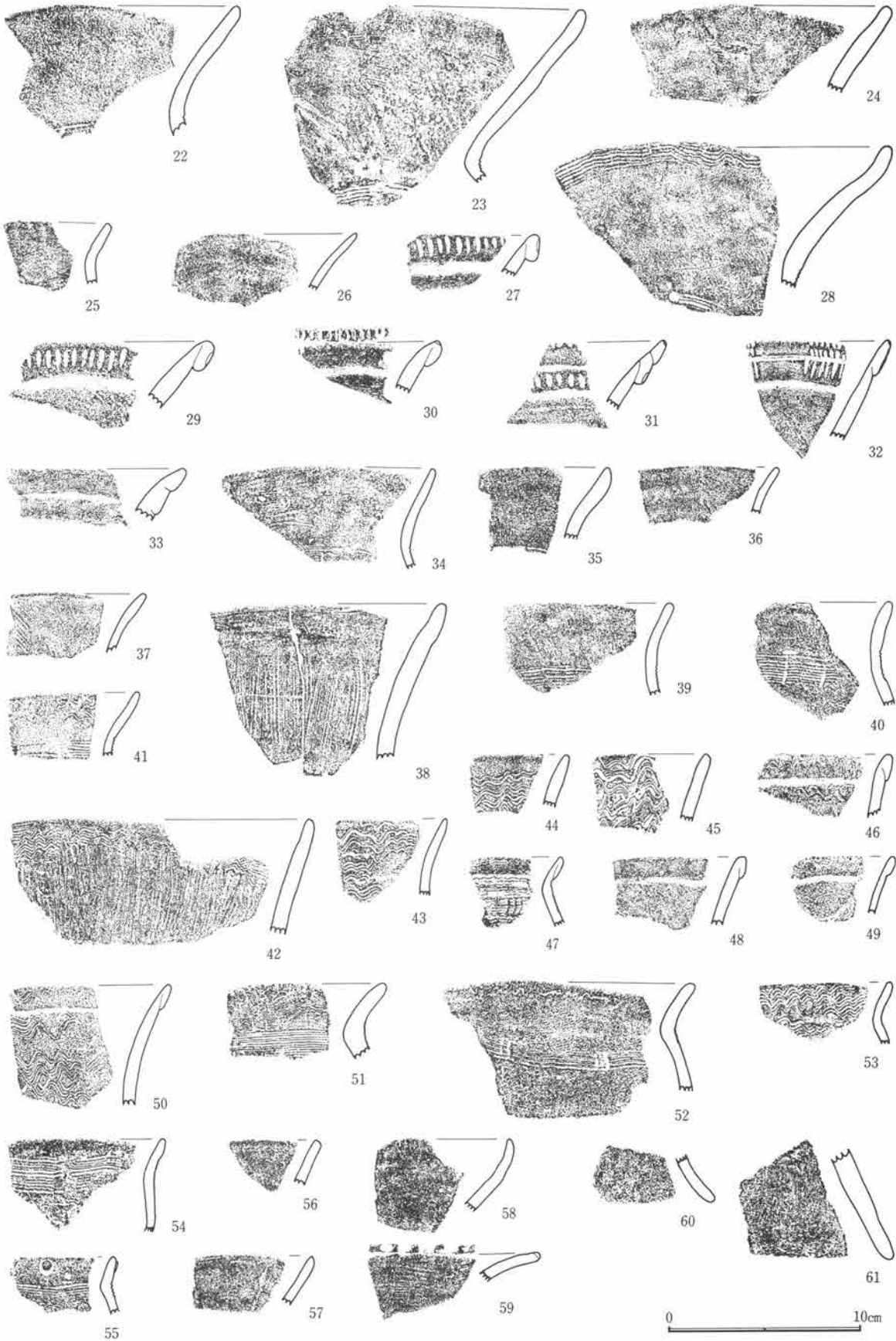
遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
12	甕			外面 口辺部は波状文、頸部は2連止め一簾状文、胴上部は波状文。 内面 ヘラミガキ。	粗砂粒混入 やや堅緻 明褐色	頸～胴上位1/3周
13	壺			外面 頸部は一簾状文、胴上部は一波状文。 内面 ヘラミガキ。	中砂粒混入 堅緻 灰赤色	頸～胴上位
14	壺	底 7.6		外面 器面剥落著しい。 内面 器面剥落著しい。	粗砂粒、白色粒 混入 やや堅緻 にぶい橙色	胴下位～底部
15	甕	底 6.6		外面 胴～底部はヘラミガキ、底部に指頭圧痕あり。 内面 底部はヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 淡橙色	胴下部～底部
16	壺	胴 6.2 底 4.4		外面 胴部は波状文。 内面 ヘラナデ。	細砂粒混入 堅緻 浅黄橙色	口縁～頸部欠損
17	台付甕	口 9.5 脚 6.0	口辺部は緩やかに外反する。	外面 口縁部は波状文、頸部に3連止め一簾状文、胴上部に円形浮文を付す、胴部はヘラナデ、ヘラミガキ。 内面 口縁部はヨコナデ、頸～胴部はヘラミガキ、脚台部はヘラナデ。	粗砂粒混入 堅緻 茶褐色	完形
18	台付甕	口 12.2 頸 11.4	口～頸部緩やかにくびれ口縁部で内湾する。	外面 口縁部は一波状文、口辺部はヘラミガキ、頸部は2連止め一簾状文、胴上部一波状文、胴部はヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 やや堅緻 赤褐色	口縁～胴部1/3周
19	鉢	口 12.0 底 5.5	口縁部はやや内湾する	外面 口縁部はヨコナデ、口辺部はナデ、胴～底部はヘラミガキ。 内面 口縁部はヨコナデ、胴部はナデ、ヘラミガキ。	細砂粒混入 やや堅緻 明褐色	口縁一部欠損
20	高 環	口 20.6	環体部は直状。口縁部は僅かに外反する。	外面 口縁端部はヘラ刻み、環体部はヘラナデ。 内面 ヘラナデ、脚部は指ナデ。	粗砂粒混入 堅緻 にぶい赤色	脚部のみ欠損 内外面共に丹彩

第229表 1号周溝墓出土土製品観察表

遺物番号	名称	計測値(cm)	成 形	整 形	胎土・焼成	色 調	備 考
21	土製紡錘車	外径 4.0 孔径 0.2	1面は凸面、他面は凹面をなす。	丁寧なヘラミガキ。	砂粒目立たず 堅緻	灰褐色	完形

第230表 1号周溝墓出土土器観察表(拓本)

22 壺 (d)簾状文、砂粒混入、浅黄橙色	29 壺 外面ハケメ、砂粒混入、にぶい橙色	37 甕 内外面ハケメ、砂粒混入、にぶい褐色
23 壺 外面(b)ヨコナデ、内面(b)ヨコナデ、ハケメ、砂粒混入、橙色	30 壺 (a)刻み目、砂粒混入、浅黄橙色	38 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、黒色
24 壺 砂粒混入、浅黄橙色	31 壺 細砂粒混入、橙色	39 甕 等間隔止め簾状文、砂粒混入、暗赤褐色
25 小型壺 砂粒混入、にぶい赤褐色、内外面丹彩	32 壺 細砂粒混入、にぶい橙色	40 甕 微砂粒混入、にぶい赤褐色
26 壺 砂粒混入、内外面丹彩	33 壺 砂粒混入、橙色	41 甕 (b-c)波状文、(d)等間隔止め簾状文、砂粒混入、にぶい橙色
27 壺 細砂粒混入、橙色	34 甕 (d)簾状文、細砂粒混入	42 甕 (b)波状文、砂粒混入、にぶい赤褐色
28 壺 内面(b)ヨコナデ、砂粒混入、浅黄橙色	35 甕 砂粒混入、褐色	
	36 甕 内面ヨコナデ、細砂粒混入、浅黄橙色	



第273图 1号周溝墓出土遺物 (4)

43 甕 砂粒少量混入、にぶい橙色	50 甕 砂粒混入、にぶい赤褐色	56 鉢 ヨコナデ、内外面丹彩
44 甕 砂粒混入、明褐色	51 甕 (b)波状文、細砂粒混入、明褐色	57 鉢 砂粒混入、内外面丹彩
45 甕 中砂粒混入、橙色	52 台付甕 (b~c)波状文、砂粒混入、にぶい褐色	58 高坏 内面ヨコナデ、赤色、内外面丹彩
46 甕 (b)波状文、砂粒混入、にぶい褐色	53 台付甕 内面ハケメ、砂粒混入、にぶい赤褐色	59 高坏 外面ハケメ、(a)刻み目、内外面丹彩
47 甕 外面(d)3連止め簾状文、(b)波状文、砂粒混入、にぶい赤褐色	54 台付甕 砂粒混入、暗褐色	60 高坏 砂粒混入、明褐色
48 甕 細砂粒混入、にぶい橙色	55 台付甕 (a)波状文、砂粒混入、灰赤褐色	61 高坏 内面ヨコハケメ、砂粒混入、外面丹彩
49 甕 細砂粒混入、にぶい橙色		

## 2号周溝墓 (275図、図版73)

**位置** C地区西南部に(71-C35)位置する。140号住居と重複する。

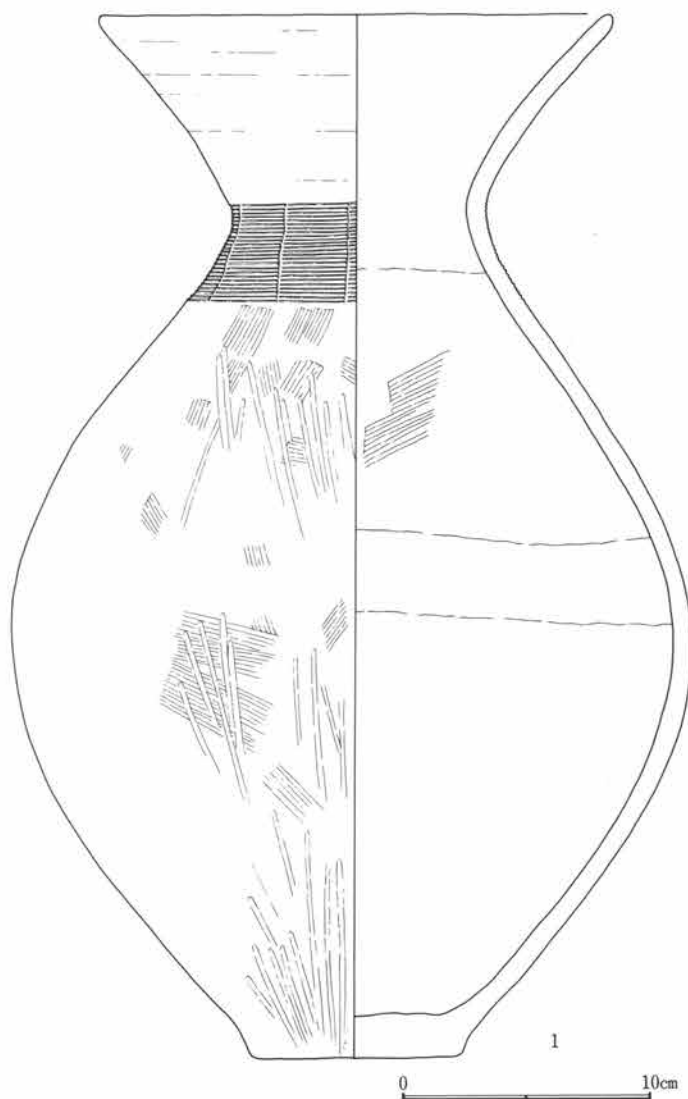
**形状、規模** 東、北、西側溝を検出する。南側溝は明確ではない。南側に幅の狭い溝を見るがこの溝が本周溝墓に関連するものかどうか不明。北側溝と西側溝は弧状に接続する。西側溝の南半部は104号住居との重複により不明。規模は東西10.6m、西側溝幅1.8m、深さ30cm。東側溝は幅1.6m、深さ10cm。

**土層堆積の状況** 台状部では客土、封土などの確認はできない。周溝覆土については、西側溝、北側溝ともローム質土の混じる暗褐色粘質土が基調。浅間C軽石は含まない。

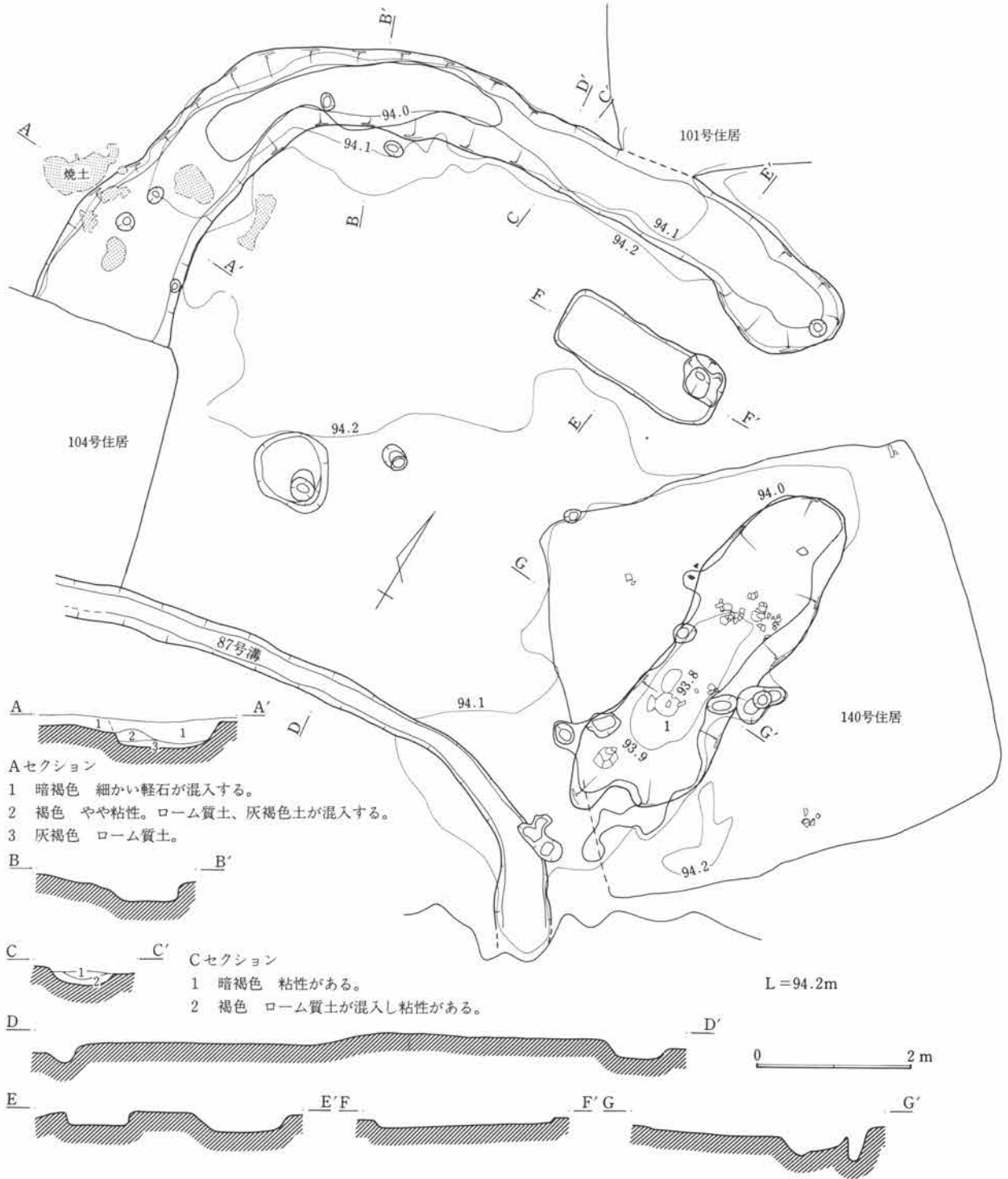
**主体部** 台状部北寄りに方形土壙を検出する。規模は長さ2.3m、幅80cm、深さ4~6m。覆土は黒褐色粘質土。

**出土遺物** 東側溝内下部より口縁~胴上半部をほぼ完存する壺形土器が出土する。その他溝覆土中より小破片が多数出土する。

**時期** 弥生後期第1期



第274図 2号周溝墓出土遺物



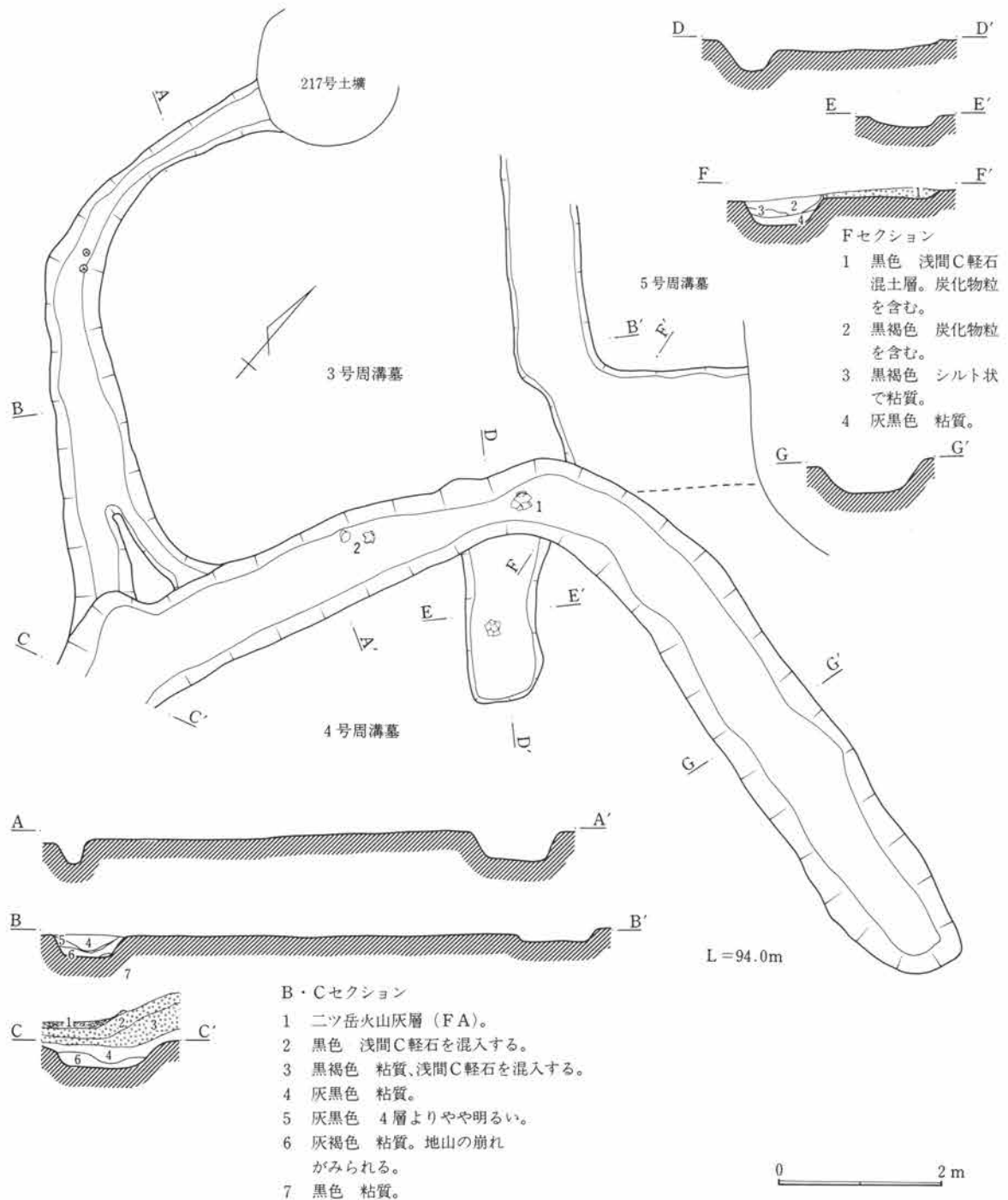
第231表 2号周溝墓出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 20.8 頸 10.4 胴 27.4 底 8.3	口辺部は僅かに外反気味に大きく開く。最大径は胴上位にある。	外面 頸部は等間隔止め簾状文3段、胴部はハケメ後、ヘラミガキ、器面荒れている。 内面 ハケメ痕あり、器面剥落著しい。	細砂粒、黒色粒混入 やや堅緻 灰白色	胴部一部欠損

3号周溝墓 (第276図)

位置 C地区南端部(64-C04)に位置する。4号、5号周溝墓に隣接する。

形状、規模 西側から南側にかけて弧状に湾曲する溝を検出する。溝の東部、4号周溝墓に結ぶ辺りでは溝は二股に分岐している。北端部は217号土壇と重複し、以北は不明。東側は4号周溝墓に区画される。北側は本周溝墓に伴うと思われる溝の痕跡は認められない。5号周溝墓西南側溝が北側を区画するように位置する。規模は、北西-東南幅6.2m、溝幅は西南溝中央部で90cm、深さ30cm。



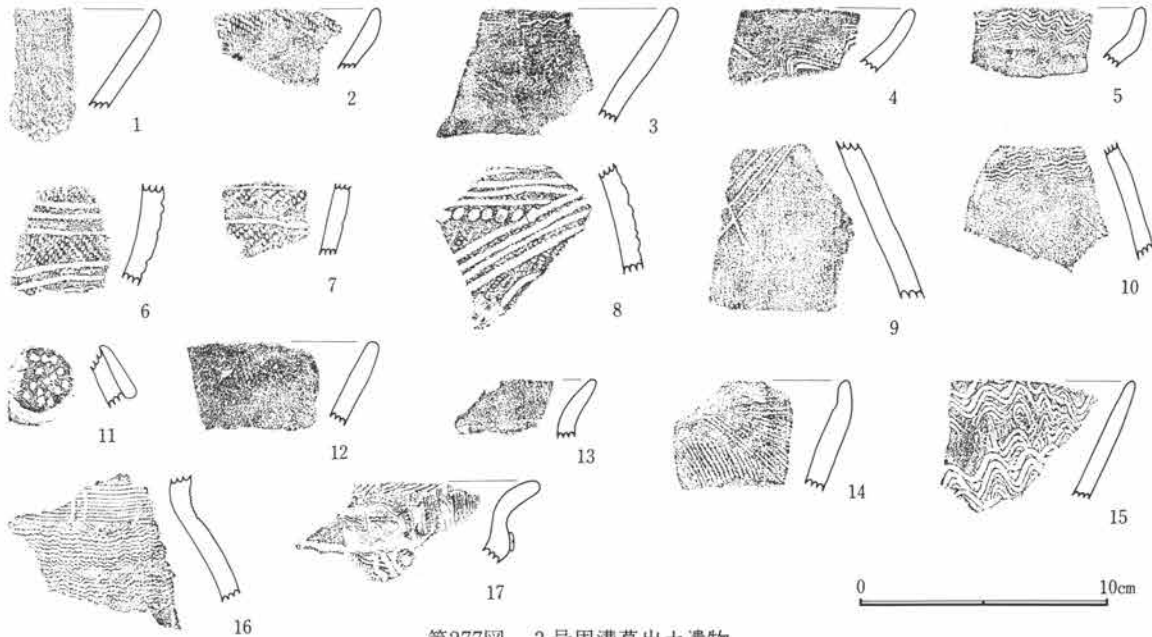
第276図 3号、4号周溝墓

**土層堆積の状況** 台状部には、灰白色粘質土（第V層）を基盤層にし、暗褐色粘質土（第IV b層）が15cm前後堆積し、第IV b層上の浅間C軽石混土層を含む黒褐色粘質土である。この間には封土、あるいは客土などを確認することはできなかった。溝覆土は灰黒褐色粘質土を基調とし、浅間C軽石の混入は認められない。

**主体部** 土壌などの痕跡を検出することはできなかった。

**出土遺物** 溝覆土中より土器小破片が比較的多数出土する。出土土器は弥生後期を中心に前後に時期幅が大きい。

**時期** 弥生後期



第277図 3号周溝墓出土遺物

第232表 3号周溝墓出土土器観察表（拓本）

1 壺 砂粒混入、にぶい橙色	7 壺 砂粒混入、にぶい橙色	14 甕 外面(b)ヨコナデ、内面(b)ハケメ、砂粒混入、褐灰色
2 壺 (a~b)無節縄文、砂粒混入、浅黄橙色	8 壺 細砂粒混入、褐色	15 甕 砂粒混入、にぶい橙色
3 壺 (b)波状文、砂粒混入、浅黄橙色	9 壺 砂粒混入、淡赤橙色	16 甕 細砂粒混入、にぶい橙色
4 壺 砂粒混入、にぶい橙色	10 壺 波状文、砂粒混入、外面丹彩	17 台付甕 外面円形刺突、砂粒混入、褐灰色
5 壺 (b)波状文、細砂粒混入、浅黄橙色	11 壺 砂粒混入、にぶい橙色	
6 壺 縄文、砂粒混入、黒褐色	12 甕 砂粒混入、にぶい赤褐色	
	13 甕 細砂粒混入、橙色	

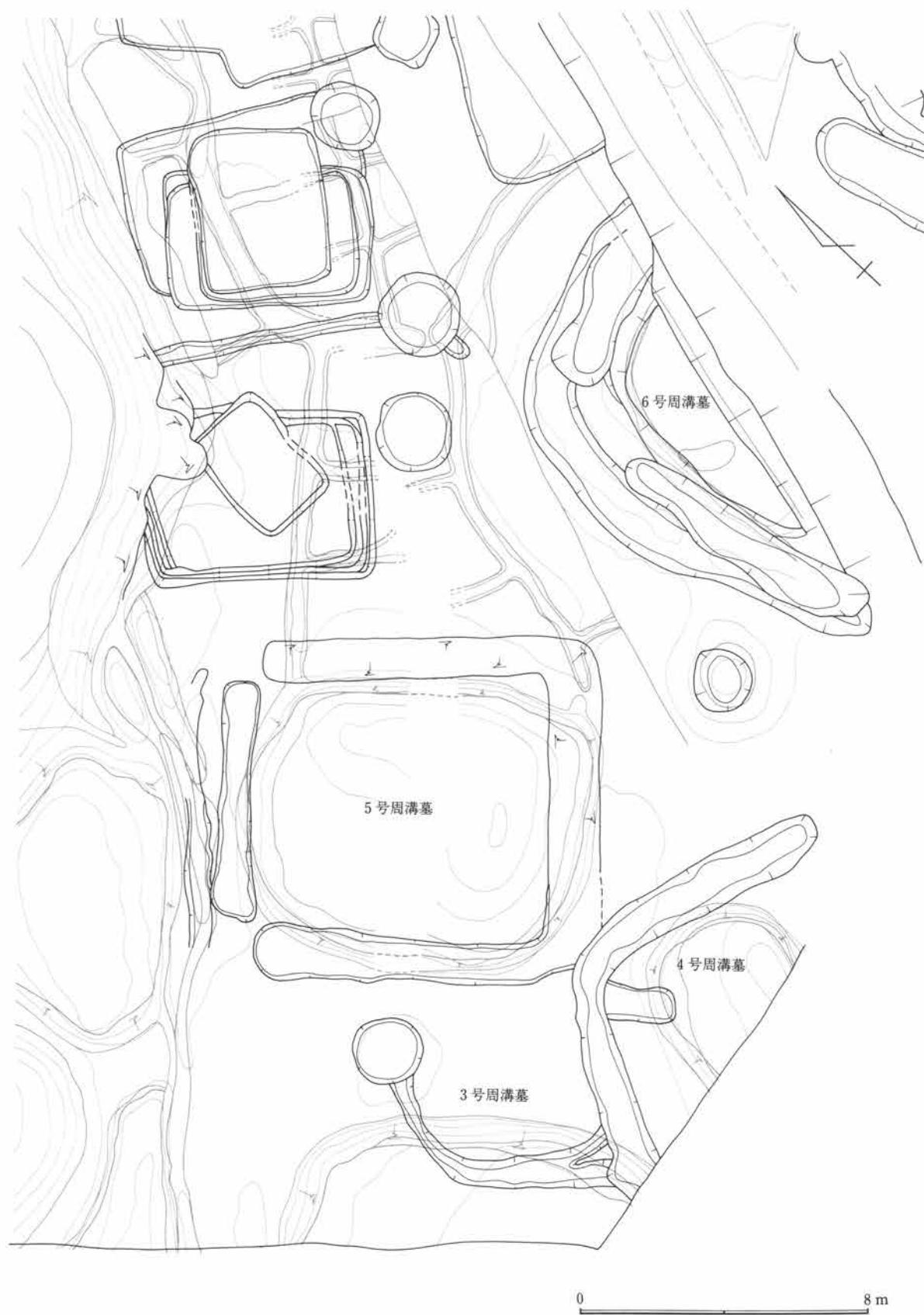
#### 4号周溝墓 (276図、図版74)

**位置** C地区南部(63-C01)に位置する。3号、5号周溝墓に隣接する。

**形状、規模** 南半部は未調査区域で全体形状は不明確。北側から南側にかけてくの字状に曲折する溝を検出する。溝の東端部は途切れて開口部となる。周溝の規模は、東溝は幅1.3m、深さ30cm。西溝は幅1.1m、深さ30cmを測る。

なお、曲折部の内側に幅1m程の溝を検出するが本周溝墓との関係については不明である。

**土層堆積の状況** FA下水田跡の検出時台状部中央部に幅4mの長円形のマウンド状の高まりが検出されている。この台状部のマウンド部の土層堆積状況は、下位層から上位層へ、灰白色粘質土（第V層）の上位に10cmの灰黒色粘質土（第IV b層）、浅間C軽石を含む黒褐色粘質土（40cm）、FA下水田耕作土に対応する



第278図 古墳時代水田跡と3～6号周溝墓の対象



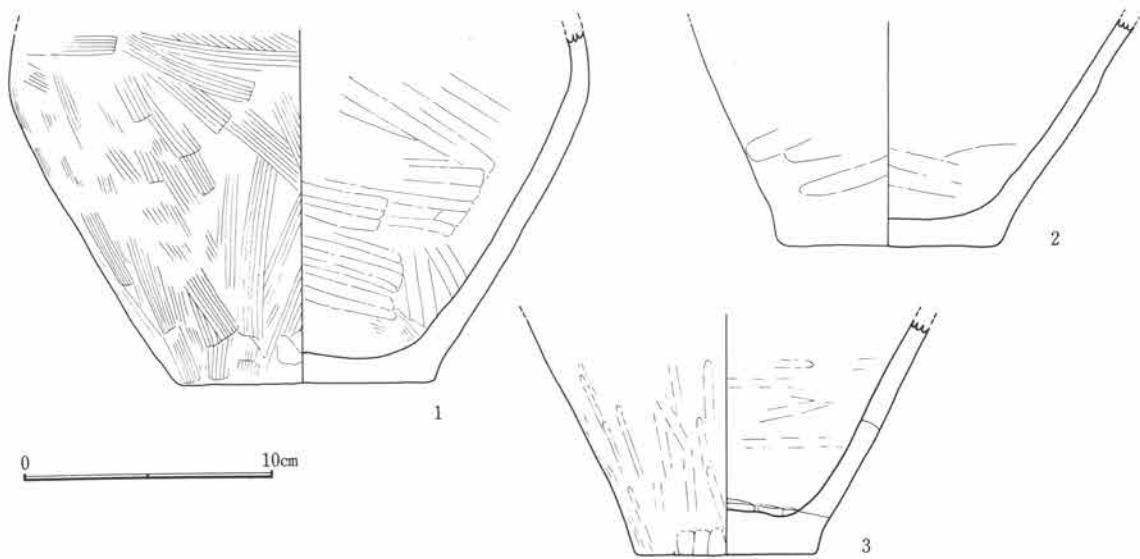
黒色土（10cm）と堆積する。第IVb層上面より、F A下水田耕作土上面まで50cmの厚さがあり、水田耕作土面とマウンド頂部の比高は45cmを測る。マウンド部の土層中浅間C軽石を含む黒褐色土が特に厚い。マウンド状の高まりの下部は周溝墓と形状は異なるが、周溝墓に伴う封土の痕跡であろうと思われる。ただしF A下水田の造成の際の盛り土の部分も大きいと思われる。

溝覆土は、下層は灰白色土（第V層）の混じる灰褐色土、上層は灰黒色粘質土で浅間C軽石を含まない。C軽石を含む黒褐色土は溝の部分で陥入せず溝外と同様の堆積状態を示す。C軽石降下時は周溝は完全に埋没していただろう。

**主体部** 不明。土壌などの痕跡を検出することはできなかった。

**出土遺物** 西側溝内より、弥生土器の下半部が3点（壺1点、甕2点）出土する。

**時期** 弥生後期



第279図 4号周溝墓出土遺物

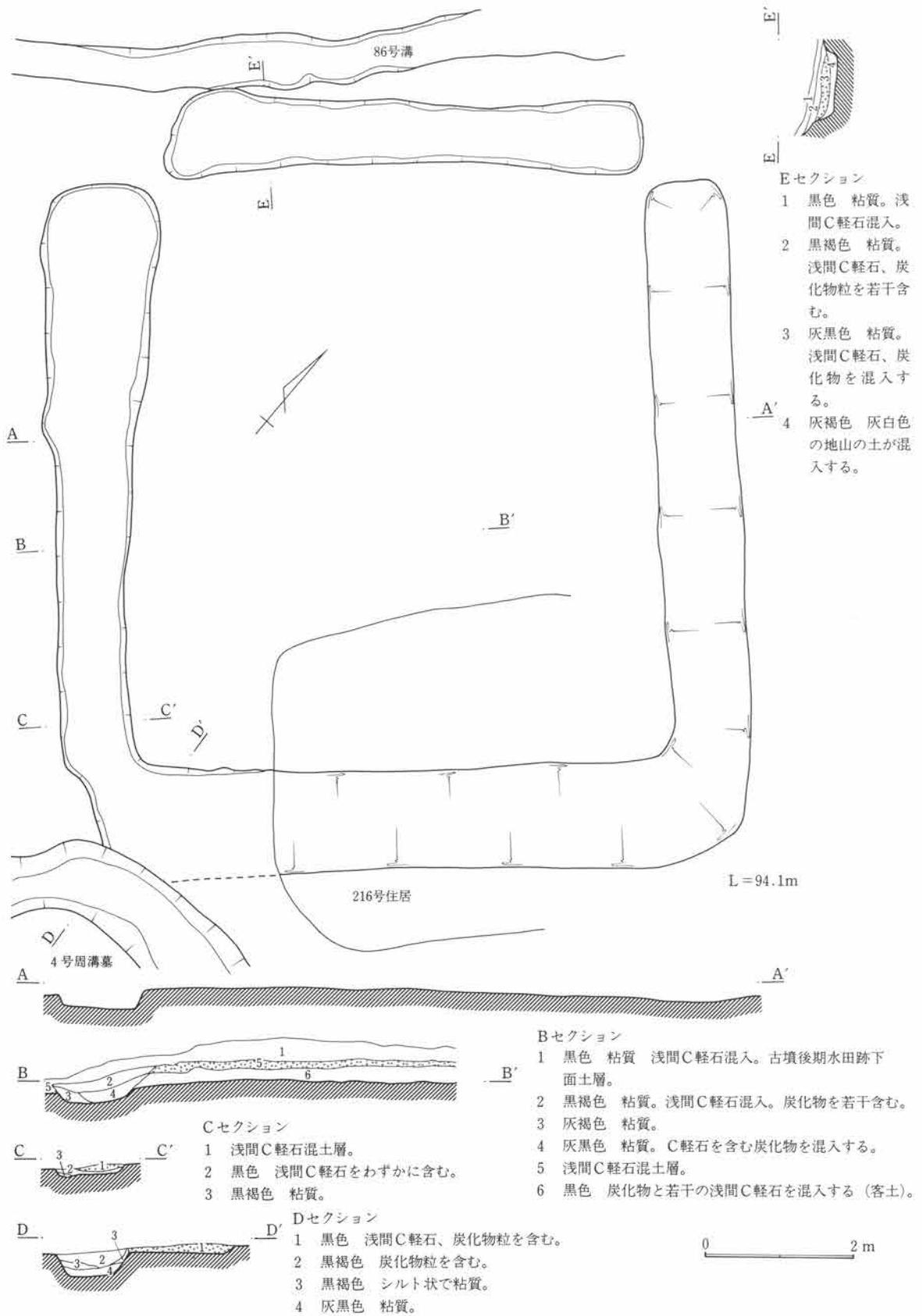
第233表 4号周溝墓出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	底 10.6		外面 ハケメ。 内面 ヘラナデ、ハケメ。	細砂粒、黒色粒 混入 堅緻 にふい橙色	胴下位～底部 周
2	甕	底 8.6		外面 ヘラナデ。 内面 ヘラナデ。	細砂粒混入 堅緻 にふい赤褐色	底部
3	甕	底 7.5		外面 ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ、ヘラナデ。	粗砂粒混入 堅緻 にふい赤褐色	胴下位～底部

#### 5号周溝墓 （第280図、図版74）

**位置** C地区大溝の南（60-C05）に位置する。4号、6号周溝墓に隣接する。

**形状、規模** 整った長方形を呈する。北東溝から東南溝の東半部にかけては住居との重複や検出が浅いた



第280図 5号周溝墓

めに、若干明確さに欠ける。西部コーナー部は溝が途切れ土橋状に開口する。規模は北西-東南方向に10.4mを測る。周溝は総体にコーナー部分で幅を増す傾向がある。最大幅で北西溝1.1m、深さ20cm。西南溝は幅1.3m、深さ30cm。

**土層堆積の状況** 台状部ではF A下水田面検出の際、周辺水田耕作土面より55cm高くマウンド状に高まっていた。

灰黒色第IV b層より、F A下水田耕土に対応する。マウンド最上層（F A直下層）の黒色土上面まで厚さ55cm。この間、土層は3層峻別でき、最下層は炭化物を含み軽石を含まない層、中間部は比較的軽石分が多い浅間C軽石混土層である。浅間C軽石混土層の下面の比高差から、浅間C軽石降下時点では、台状部と周囲の比高差は25cm。最下層が周溝墓に伴う封土であろうか。

周溝についてはC軽石混土層は溝底部まで達しており浅間C軽石降下時、溝の埋没は進行していない。

**主体部** 不明。土壌等検出することはできなかった。

**出土遺物** 出土遺物は少ない。

**時期** 弥生後期～古墳前期

#### 6号周溝墓 (第281図、図版74、75)

**位置** C地区東南部(54-C00)に位置する。4号、5号周溝墓に隣接する。

**形状、規模** 隅九方形状を呈する。北側、西側溝を良好に検出する。東側は浅い溝を7号周溝墓隣接部に検出するが検出状況は明瞭さを欠く。本周溝墓の南半部は未調査区になるため、全体形状は不明。北側及び西側周溝は2段に掘り込まれており、下段の溝は直状を呈する。規模は、東西13.3m、北側周溝は、上段幅2.4m、下段幅1.2m、深さ60cm。西側周溝は上段幅2.8m、下段幅1.4m。下段溝の長さ8mを測る。

**土層堆積の状況** 台状部ではF A下水田面の検出の際、周囲の水田耕土面よりも40cm高くマウンド状に高まっている。マウンドの堆積層は、灰褐色粘質土(第V層)上に黒褐色粘質土(第IV層)が25cmの厚さで堆積する。浅間C軽石混土層は第IV b層上に10~15cmの厚さではほぼ水平に堆積している。C軽石混土層の上位層、二ツ岳火砕流氾濫層下面まで45cmの堆積がある。堆積層の生成についてはC軽石混土層以下が自然堆積で、以上が盛り上げられた土である。しかし、およそ50cmの厚さで堆積する盛土は周溝墓の築造時だけでなく、水田の造成時にも行われていると思われる。土層の所見ではどこまでが周溝墓築造時のものか明確に判別できないが最上層の黒褐色土層は水田造成時のものであろう。

溝の覆土は最下層が浅間C軽石を多量に含む暗褐色土である。台状部、及び周溝墓の築造は浅間C軽石降下以後と判断できる。

**主体部** 不明

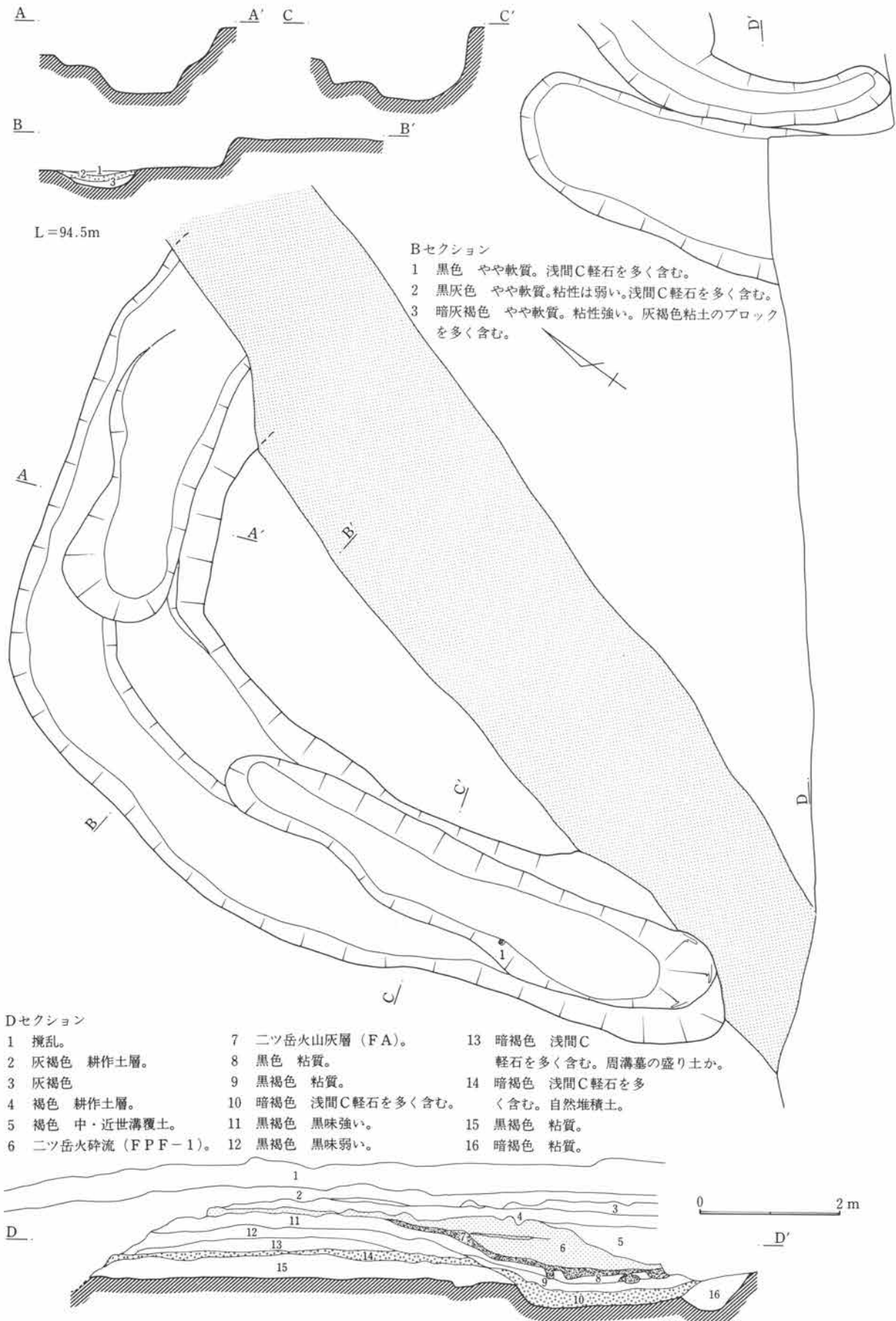
**出土遺物** 周溝内より、古式土師器小型壺の出土がある。石器は混入であろう。

**時期** 古墳前期

第234表 6号周溝墓出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	底 3.0	頸部に突帯を持つ。胴下位に4mmの小孔を穿つ。	外面 頸~胴上部はハケメ、突帯部はヨコナデ、胴~底部はヘラミガキ。 内面 頸部はハケメ、胴部はヘラナデ。	中砂粒混入 堅緻 橙色	口辺部欠損

6 検出した遺構、遺物



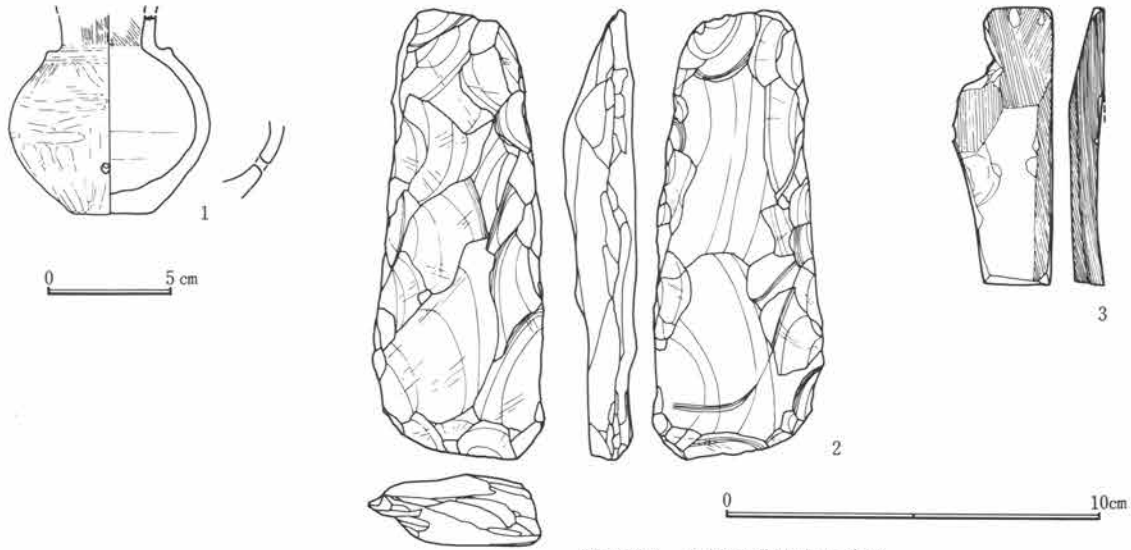
Bセクション

- 1 黒色 やや軟質。浅間C軽石を多く含む。
- 2 黒灰色 やや軟質。粘性は弱い。浅間C軽石を多く含む。
- 3 暗灰褐色 やや軟質。粘性強い。灰褐色粘土のブロックを多く含む。

Dセクション

- |                   |                    |                                 |
|-------------------|--------------------|---------------------------------|
| 1 攪乱。             | 7 ニツ岳火山灰層 (FA)。    | 13 暗褐色 浅間C<br>軽石を多く含む。周溝墓の盛り土か。 |
| 2 灰褐色 耕作土層。       | 8 黒色 粘質。           | 14 暗褐色 浅間C軽石を多<br>く含む。自然堆積土。    |
| 3 灰褐色             | 9 黒褐色 粘質。          | 15 黒褐色 粘質。                      |
| 4 褐色 耕作土層。        | 10 暗褐色 浅間C軽石を多く含む。 | 16 暗褐色 粘質。                      |
| 5 褐色 中・近世溝覆土。     | 11 黒褐色 黒味強い。       |                                 |
| 6 ニツ岳火砕流 (FPF-1)。 | 12 黒褐色 黒味弱い。       |                                 |

第281図 6号周溝墓



第282図 6号周溝墓出土遺物

第235表 6号周溝墓出土石器観察表

遺物番号	名称	計測値 (mm)	石質	重量(g)	特徴
2	打製土掘具	11.9×45.0×19.0	黑色頁岩	110.5	両側を丁寧に調整した両面加工品、側面形はほぼ直状、側縁部は直状に作出、刃部は鋭さに欠ける。基部は上部方向からの打撃による大きな剥離があり、鋭い稜をなす。
3	砥石	73.0×26.5×9.0	珪質頁岩	20.6	方形、板状を呈する。片面は大方剥離し、片半部は欠損している。側縁部は粗く削り面を作る。平面は多角的に4面の研面を見るが中央部の面は滑沢であるが、他の3面は粗い削痕が目立つ。

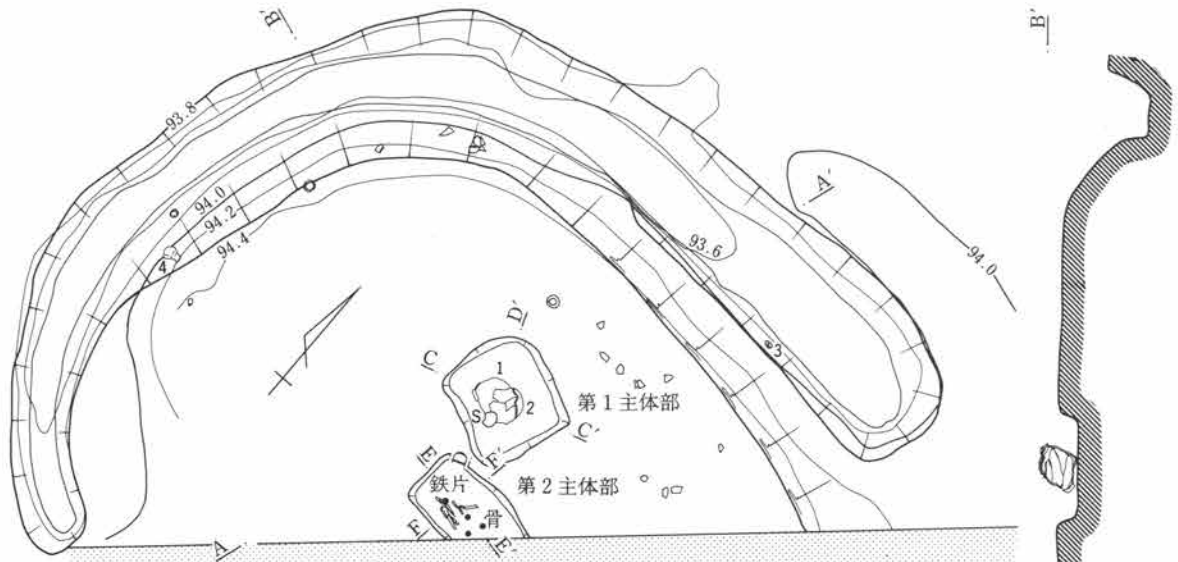
## 7号周溝墓 (第283図、図版75、76)

位置 B地区西北端部(49-C45)に位置する。6号、8号周溝墓に隣接する。

形状、規模 西半部周溝は、円弧状にめぐり東側は直状を呈する。8号周溝墓西側溝に区画される。北東コーナー一部、南側溝の一部では溝が途切れて土橋状を呈する。南側溝の西端部は明確に検出ができなかったため溝の開口部幅は不明である。中央部は現行ヒューム管理設坑により幅1.6mの攪乱を受けている。規模は長径10m、短径9.1mを測る。周溝は西側が1.2m、深さ40cm。東側が幅1.2m、深さ40cm。北側が幅1.4m、深さ30cm。南側が幅70cm、深さ25cm。

土層堆積の状況 暗灰色粘質土(第V層)に黒色粘質土(第IVb層及びこれに対応する層)の堆積があり、この層の上には土器破片の散布が認められることから、この面が埋葬時の面(墓壙掘込み面)ではないかと思われる。周溝覆土については全体的に暗褐色粘質土で、軽石を含まない。浅間C軽石混土層は覆土上面に堆積していることからC軽石降下時溝は完全に埋没していたと考えられる。

主体部 台状部中央に土壙を2基検出する。第1主体部北側は比較的整った正方形で土壙内には壺棺を埋置している。壺棺は軸線を方形土壙に対し対角線方向にし、斜位に埋置し、上方に大きく開口した打ち欠き孔に別個の壺底部をもって重ね合わせ、孔を覆っている。壺棺からは出土遺物は検出されなかった。ただし棺内下部より骨粉をわずかに認めることができた。土壙は深さ約15cm。壺棺は暗褐色粘質の土壙覆土により下半部が埋没し、上半部は浅間C軽石混土層により覆われている。浅間C軽石混土層は台状部、周溝上の一

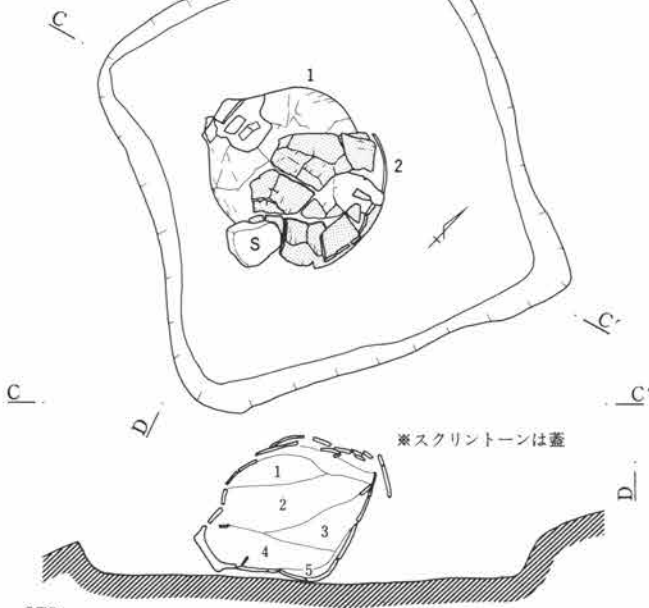


Aセクション

- 1 黒色 硬粘質。炭化物粒、焼土粒子を若干含む。
- 2 黒褐色 粒子はやや粗い。炭化物粒、焼土、ローム粒子の混入が見られる。
- 3 黒褐色 2層と同質。ローム粒子を含まない。土器破片を多量に包含する。
- 4 浅間C軽石混土層。
- 5 黒褐色 2層と同質。炭化物の混入多く、粒子も大きい。
- 6 灰黒色 粘質。
- 7 灰黒色 砂質ローム(壁土)の混入多い。

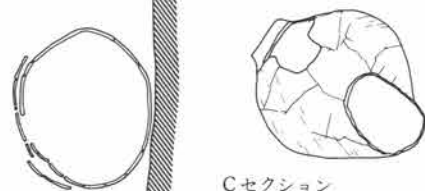
0 2m

第1主体部壺棺・蓋



L=94.6m

第1主体部壺棺



Cセクション

- 1 赤褐色 鉄分凝集を含む。焼土、炭化物粒を含む。
- 2 暗褐色 焼土、炭化物粒、浅間C軽石を含む。
- 3 黒褐色 焼土、炭化物粒を含む。浅間C軽石を少量含む。
- 4 黒色 粘質。骨粉らしきものを検出。土質は密。
- 5 褐色 粘質。

0 50cm

帯に堆積が見られるが、台状部土壌周辺においてはC軽石下に5cm前後の暗褐色土の堆積が見られる。この層のあたりが土壌掘込み面（この台状部の上面）であったろう。壺棺はこの面より20~25cm棺上部が突出している。このことは又突出部がC軽石混土層で厚く覆われていることを併せて考慮すると、壺棺はC軽石降下時に上部が表出していたと考えられる。FA下水田耕土対応面は壺棺の頂部より15cmの上部にあたっている。この土層は水田造成に伴い盛土したものと思われる。

第2主体部（中央部）は長方形を呈し、東部をヒューム管理設時の攪乱により失っている。土壌の規模は幅80cm、深さ15cmを測る。覆土はやや粘質な黒色土で炭化物、焼土粒の混入が目立つ。土層堆積は一括埋没と見られる有り方を示す。土壌内より比較的良好な遺存状態で人骨は検出されている。人骨は、四肢骨が良く遺存しておりその周囲に歯が点在していた。肢骨の傍には剣と思われる鉄片が検出された。鉄片の遺存状態は悪い。なお人骨の出土状況については人骨分析の項にて詳しく掲載する。

**出土遺物** 溝内中位及び台状部より土器破片が多数出土する。副葬品としては第2主体部より剣と思われる鉄器が1点出土。

**時期** 弥生後期第2期~第3期

第236表 7号周溝墓出土土器観察表

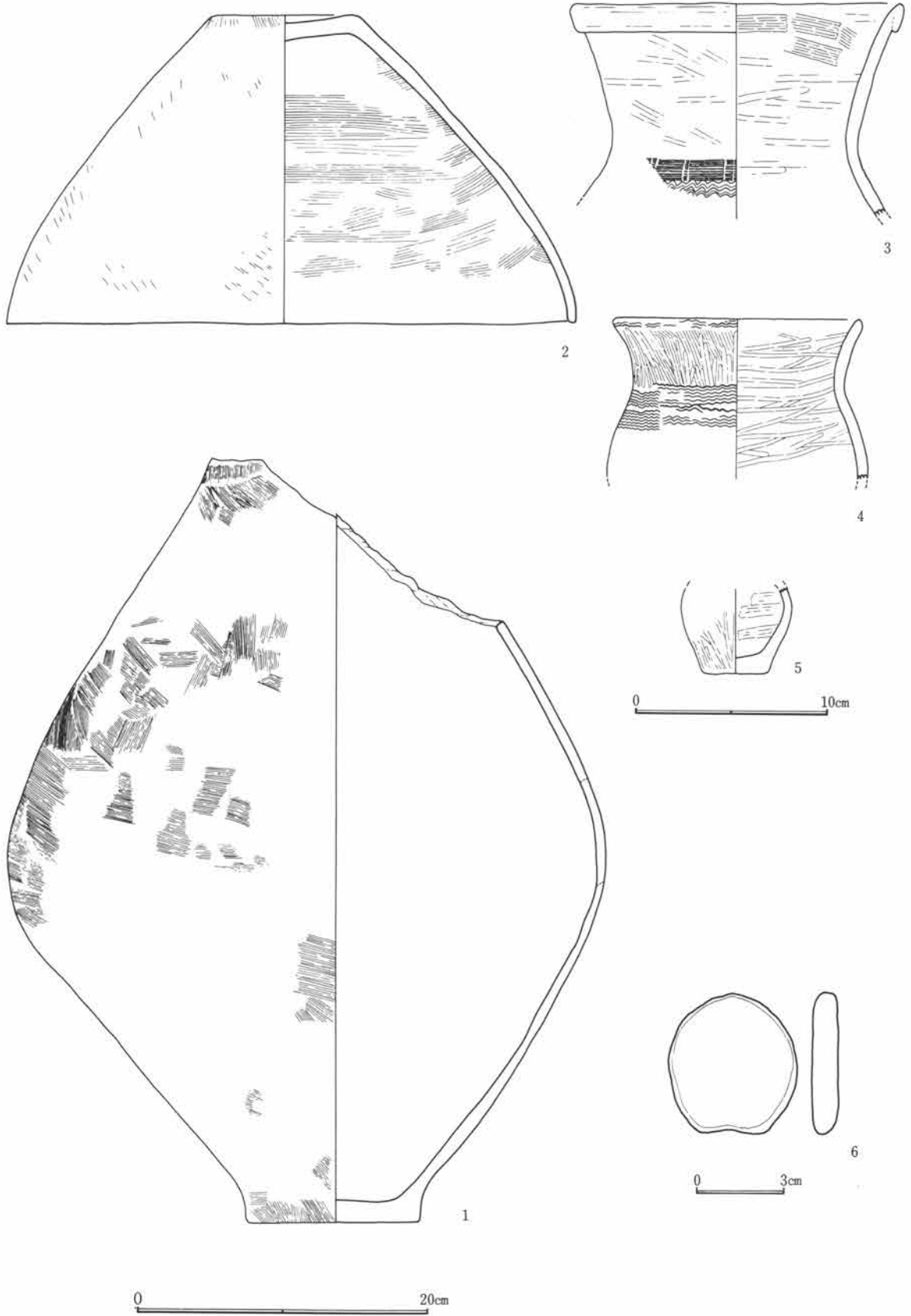
遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺 (棺)	胴 41.3 (打ち欠き) 16×23	焼成後頭部を打ち欠いている。打ち欠き面は外面側が鋭角な“片刃”状。	外面 頸部は縦方向ハケメ、肩部は斜方向ハケメ後、ヘラミガキ、胴部は横方向ハケメ後粗いヘラミガキ。 内面 肩部は横方向のヘラナデ。部分的にハケメ痕あり。	細砂粒を多量に混入 堅緻 淡橙色	埋葬時の状態で完全に遺存している。
2	壺 (蓋)	胴 39.0	壺の胴中位を打ち欠いている。	外面 ハケメ後ヘラミガキ。 内面 ハケメをムラなく施している。	細砂粒混入 堅緻 淡橙色	打ち欠いた蓋の縁部はごく小部分が遺存する。
3	壺	口 17.1	折り返し口縁、口辺部は緩やかに外反する。	外面 口縁部はヨコナデ、口辺部はナデ、頸部は10本単位の2連止+簾状文、波状文。 内面 口~頸部はハケメ後ヘラミガキ。	細砂粒、黒、白色粒混入 堅緻 にふい橙色	口縁~胴上位
4	甕	口 13.0	口辺部は直状に外反する。頸部外側に面を作る。	外面 口縁部は波状文、口辺部はハケメ後ヘラミガキ、胴上部は波状文。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にふい赤橙色	口縁~胴上部%周
5	壺	底 3.4		外面 ヘラミガキ、底部はヘラケズリ。 内面 ヘラナデ。	細砂粒、黒色粒混入 堅緻 浅黄橙色	底部

第237表 7号周溝墓出土土製品観察表

遺物番号	名称	計測値(cm)	成形	整形	胎土・焼成	色調	備考
6	土製円板	長径 4.8 厚さ 0.74	土器破片を磨り減らして成形。	表面はヘラミガキ。 裏面はナデ。	細砂多量に混入 やや軟弱	淡赤橙色	土器破片

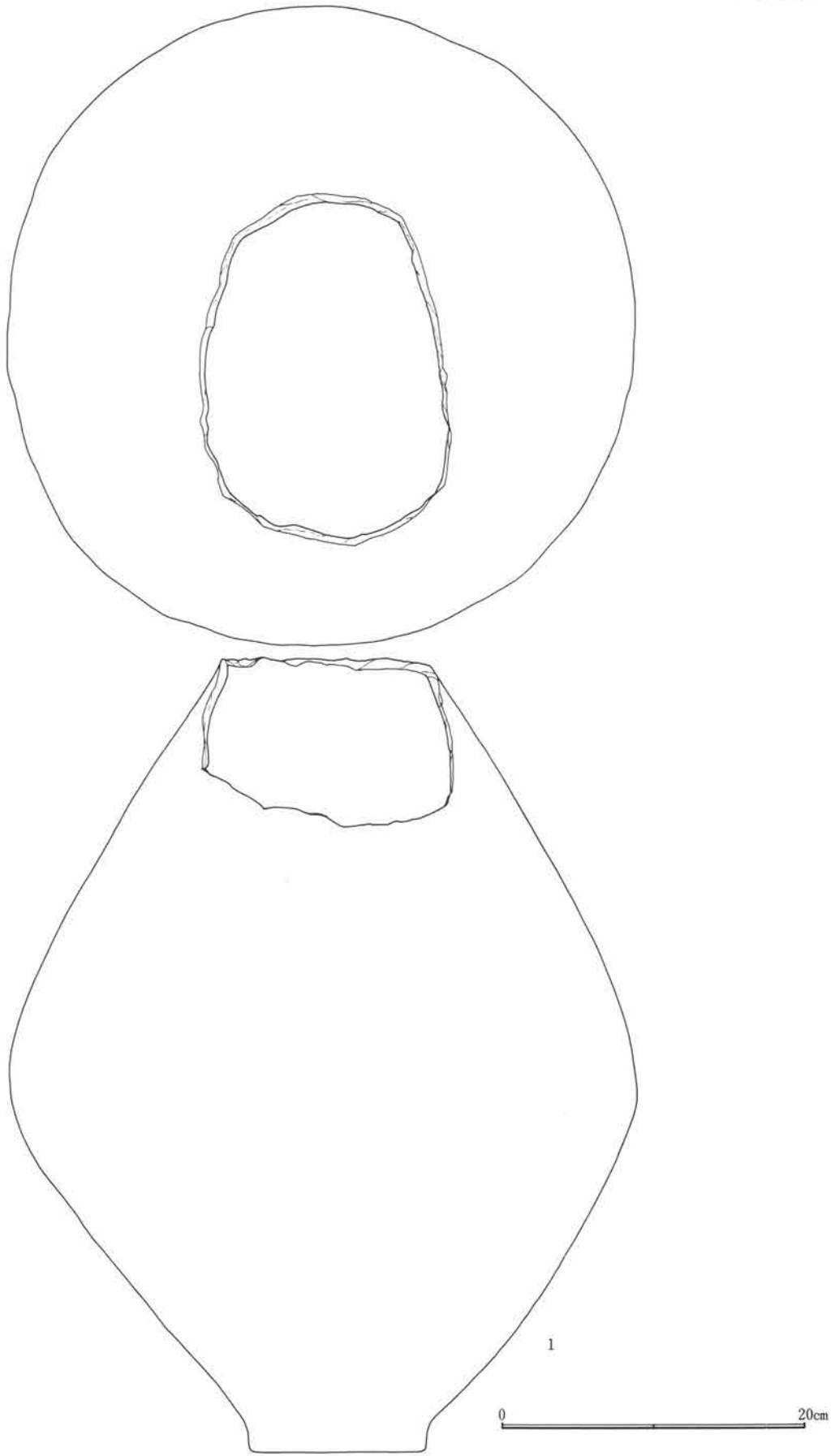
第238表 7号周溝墓出土土器観察表（拓本）

7 壺 内外面ヨコナデ、砂粒混入、にふい橙色	9 壺 内外面ヘラミガキ、砂粒混入、にふい橙色	11 壺 (b)ヨコナデ、砂粒混入、にふい橙色
8 壺 砂粒混入、にふい橙色	10 壺 ヘラミガキ、砂粒混入、にふい橙色	12 壺 (a)刻み目、砂粒混入、暗赤褐色
		13 壺 (b)刻み目、砂粒混入、橙色



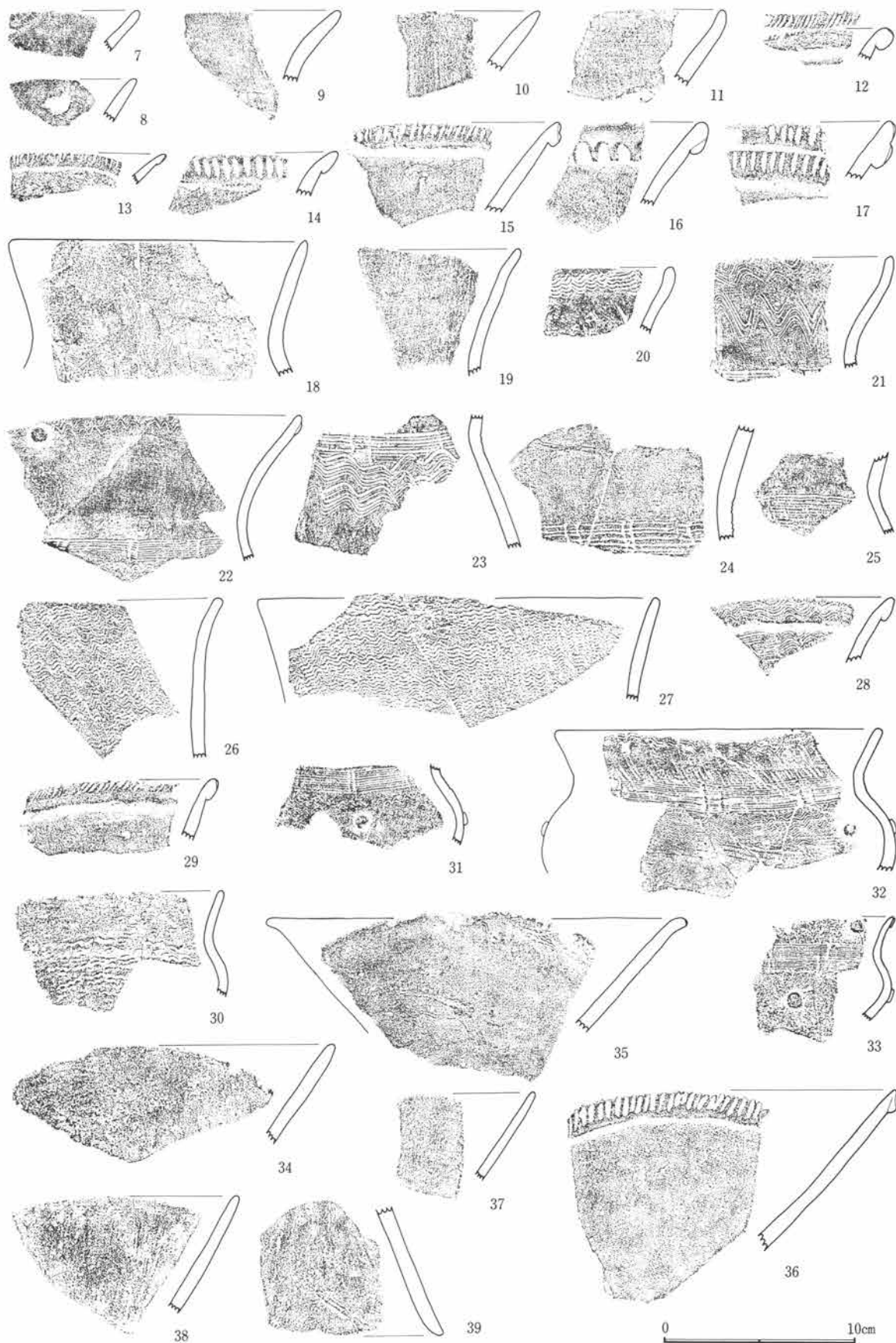
第284図 7号周溝墓壺棺、出土遺物 (1)





第285图 7号周溝墓壺棺 (2)

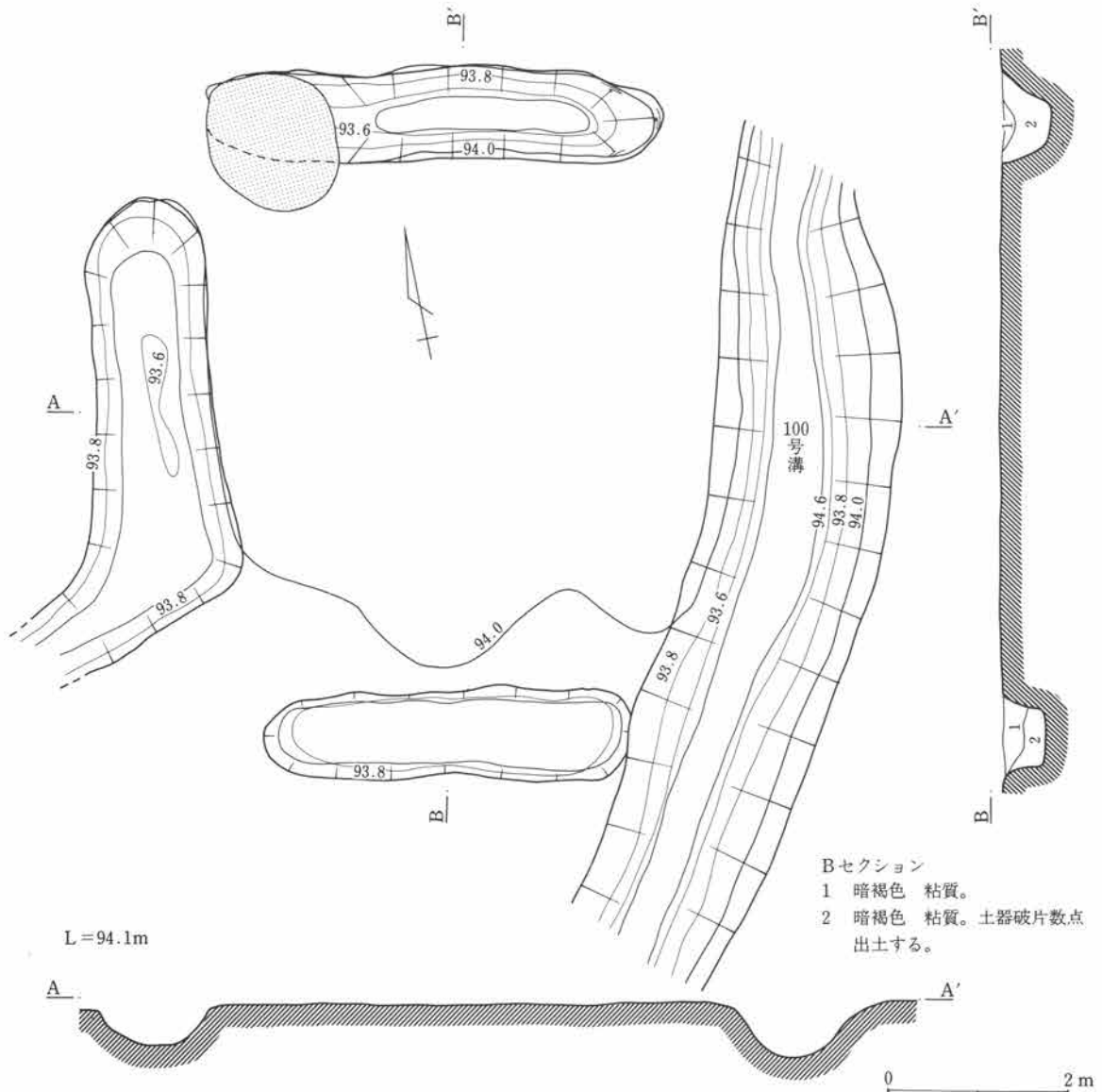
6 検出した遺構、遺物



第286図 7号周溝墓出土遺物 (3)

14 壺 砂粒混入、赤褐色	23 甕 2連止め簾状文、内面ヘラミガキ、砂粒混入、灰褐色	32 台付甕 (b)波状文、2連止め簾状文、円形貼付文(c)~(d)ハケメ、砂粒混入、褐灰色
15 壺 外面ヘラミガキ、内面(b)ヨコナデ、砂粒混入、内外面丹彩	24 甕 内外面ヘラミガキ、明褐色	33 台付甕 2連止め簾状文2段、(a)、(b)円形貼付文、(b)波状文、砂粒混入、褐灰色
16 壺 砂粒混入、浅黄橙色	25 甕 2連止め簾状文、砂粒混入、にふい橙色	34 高坏 外面ヘラミガキ、内面ヨコナデ、砂粒混入、内外面丹彩
17 壺 (a)~(b)刻み目、内面ヘラミガキ、微砂粒混入、にふい橙色	26 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、にふい赤褐色	35 高坏 外面ヘラミガキ、内面ハケメ、砂粒混入、内外面丹彩
18 甕 外面 (d)ハケメ、内面ヘラミガキ、砂粒混入、明褐色	27 甕 砂粒混入、にふい橙色	36 高坏 内外面ヘラミガキ、砂粒混入、橙色、内外面丹彩
19 甕 外面(b)ハケメ、ヘラミガキ、内面ハケメ、砂粒混入、にふい橙色	28 甕 内面ヨコナデ、細砂粒混入、にふい褐色	37 高坏 砂粒混入、内外面丹彩
20 甕 内面ハケメ、微砂粒混入、にふい赤褐色	29 甕 外面(a)刻み目、(b)ヨコナデ、内面ヘラミガキ、砂粒混入、にふい褐色	38 鉢 外面ヘラミガキ、内面(b)ヨコナデ、砂粒混入、にふい赤褐色
21 甕 外面(c)~(d)ハケメ、(d)等間隔止め簾状文、内面ヨコナデ	30 台付甕 外面(e)波状文、(a)~(b)ヨコナデ、内面ヘラミガキ	39 高坏 ヘラミガキ、砂粒混入、橙色
22 甕 外面(b)波状文、(a)~(d)内外面ヘラミガキ、砂粒混入、にふい赤褐色	31 台付甕 砂粒混入、橙色	

8号周溝墓 (第287図、図版76)



第287図 8号周溝墓

6 検出した遺構、遺物

**位置** B地区西部(47-C42)に位置する。7号周溝墓に隣接する。

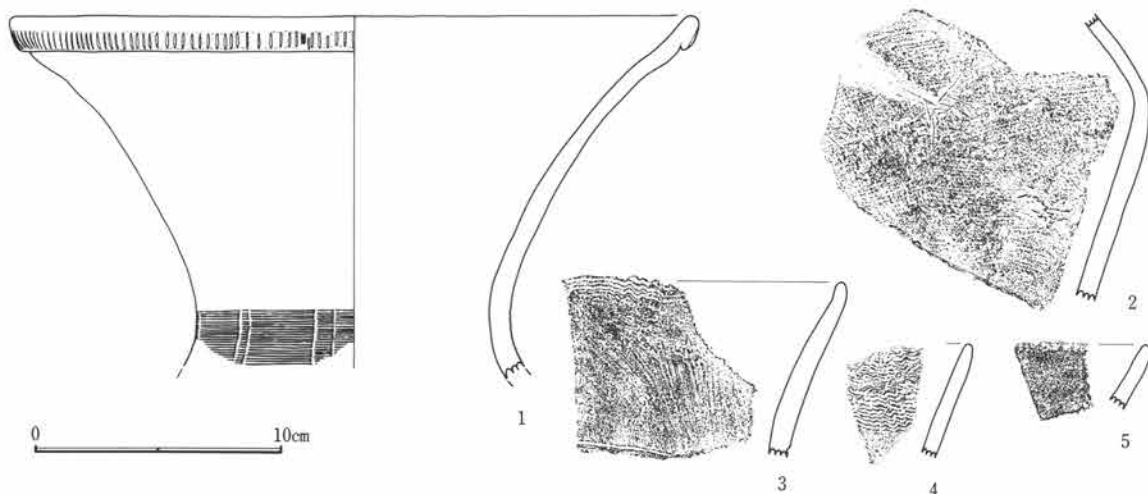
**形状、規模** 方形を呈する。北側、南側、西側は直状の溝をコの字状に配置し、東側は100号溝に区画され、3方が土橋状に開口する。西側溝には7号溝の南側溝が結び、7号溝の東を区画する溝をも兼ねている。規模は、北東-西南方向7.8mを測る。各周溝の規模は、北西溝が幅1m、深さ50cm。西南溝は幅90cm、深さ45cmを測る。

**土層堆積の状況** 第IV層下部において本周溝墓は検出されたため封土、あるいは客土などの痕跡は確認できなかった。周溝覆土は暗褐色粘質土で軽石の混入は見られない。

**主体部** 不明

**出土遺物** 溝内下部より弥生後期土器破片が数点出土している。

**時期** 弥生後期第2期~第3期



第288図 8号周溝墓出土遺物

第239表 8号周溝墓出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 28.0	折り返し口縁。	外面 口縁部は刻み目、口辺部はヘラミガキ、 頸部は2連止め、簾状文。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒、黒、白 色粒混入 堅緻 淡褐色	口縁~頸部1/2周

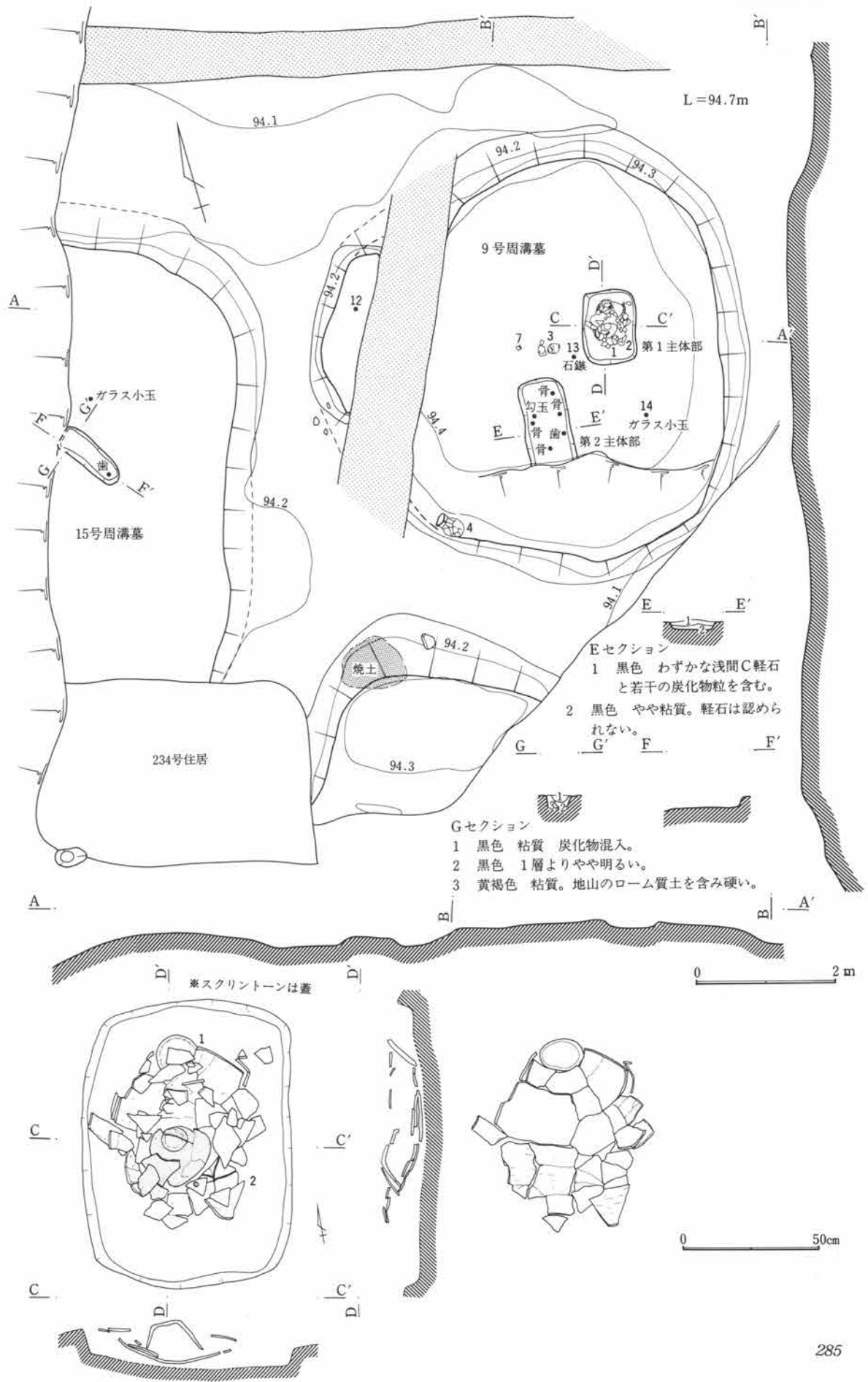
第240表 8号周溝墓出土土器観察表(拓本)

2 大型壺 外面ハケメ、内面ヘラナデ、砂粒混入、にぶい橙色	3 甕 (b)波状文、(d)簾状文、ヘラミガキ、砂粒混入、灰褐色	4 甕 砂粒混入、にぶい赤褐色	5 高坏 砂粒混入、明赤褐色、内外面丹彩
-------------------------------	----------------------------------	-----------------	----------------------

9号周溝墓 (第289図、図版77、78)

**位置** C地区東部(42-C00)に位置する。11号、12号周溝墓に隣接する。

**形状、規模** 円形マウンド状の高まりを検出する。周溝は検出することができなかった。マウンドの北西縁部は上端幅1mの後世の溝が貫いている。マウンドの規模は北西-東南6.3m、北東-西南6.5mを測る。



第289図 9号、15号周溝墓

**主体部** 台状部には長方形土壌が2基検出されている。第1主体部は隅丸長方形土壌で、土壌内には壺棺を埋置している。土壌の規模は長さ1.05m、幅75cm。壺棺は上方を南東に向け横位につぶされた状態で検出された。遺存状態は良好である。棺は壺2個体より構成され、棺本体は頸部以上を打ち欠いた大型壺で高さ60cm、胴幅52cm。頸部の孔は内径29~31cmを測る。打ち欠かれた孔の内縁は比較的凹凸なく整えられている。孔の縁部の調整について注意されるのは、孔は焼成後の切断によるものであるが、工程的には打ち欠いて頸部以上を切断、除去後、破断面の内側が片刃状になるよう丁寧に面調整している。このような調整を行ったねらいは不明であるがこの調整により孔は上方から見ても、破断面が見えにくく目立たない。孔に重ね合わせて蓋に供したと思われる土器は、底面を上方に向け横位につぶされた本体の下半部に直接重なって出土している。棺の内部からは副葬品、あるいは人骨などの検出はなかった。

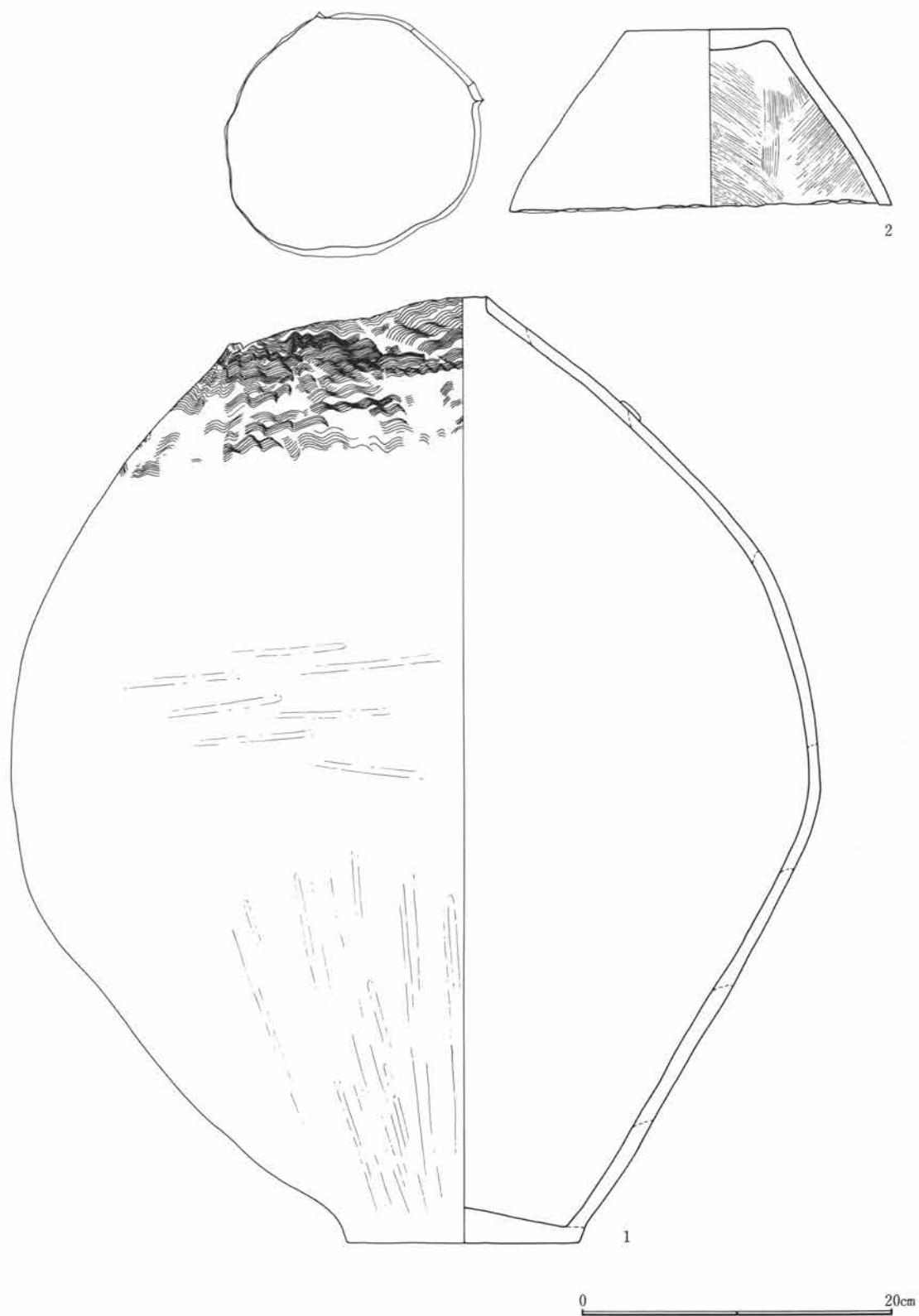
第2主体部は、第1主体部の西南60cmに隣接する。形状は整った長方形である。規模は南辺部が検出できず長軸は不明。幅は65cm、深さ16cm。土壌内より歯、骨片が出土する。歯は数点、土壌東辺部に集中して見られる。骨片は土壌内東半部にやや偏って点在する。出土人骨についての詳細は、人骨鑑定分析の項を参照。

**出土遺物** 第2主体部上部より勾玉、台状部より欠損少なくつぶれた状態で壺形土器、丹塗高坏、鉢等の土器破片が多数出土している。溝側マウンド縁辺より甕の完形個体が出土する。

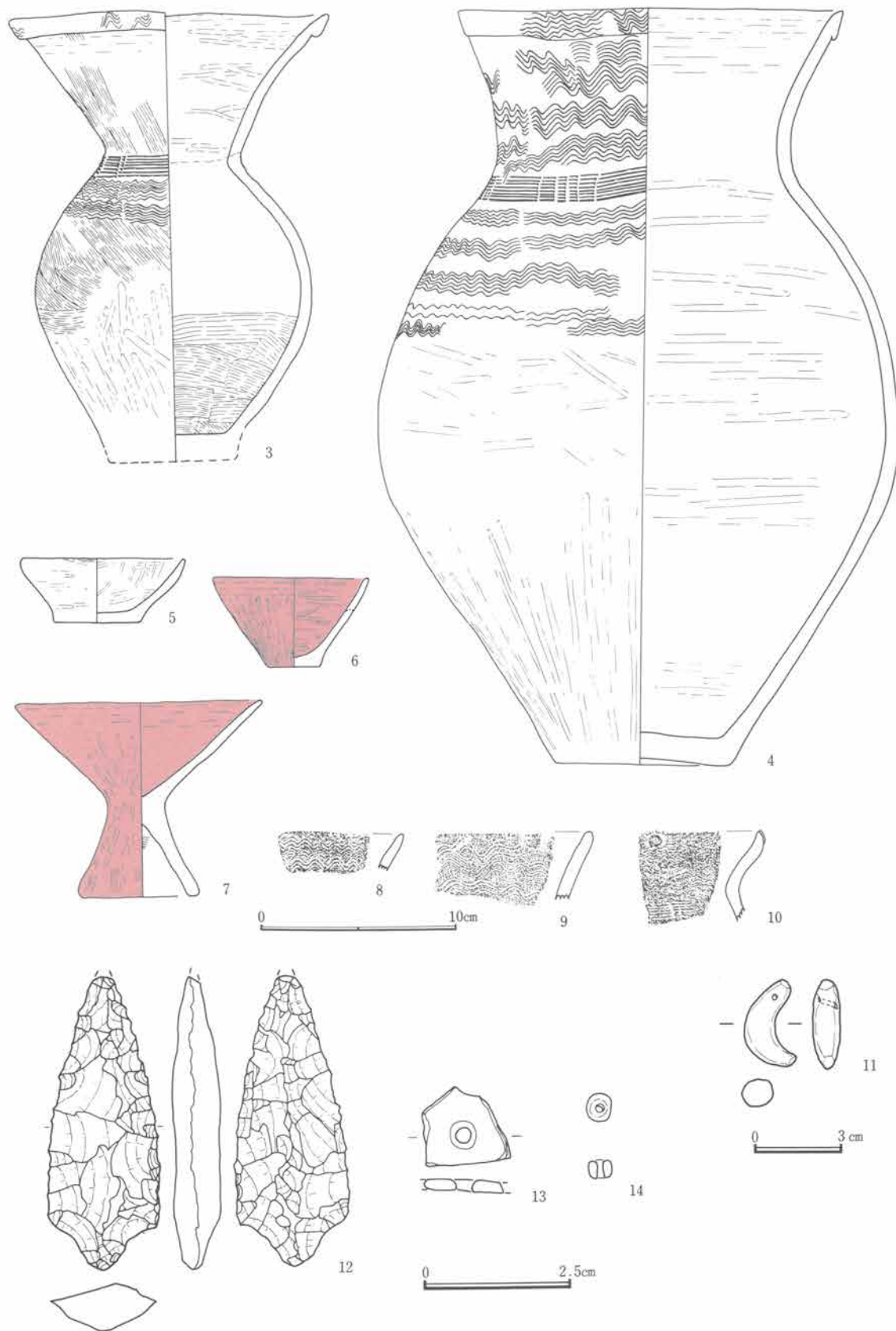
**時期** 弥生後期第3期

第241表 9号周溝墓出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	胴 52.0 (打ち欠き孔) 15.0× 16.5	胴は比較的丈が長い頸部以上を焼成後、打ち欠いている。切断面は整っている。外面側が鋭角に“片刃状”。	外面 肩部は櫛描波状文、7本1単位の櫛描波状文を上から下方向へ施す。波状文は短かく重なり合って上下に乱れている。胴部は丁寧なヘラミガキ。 内面 幅広のヘラナデ痕あり。	細砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	胴下部に約片半に欠損あり頸部打ち欠き部はほぼ完全に遺存している。
2	壺 (蓋)	底 10.1 胴 24.4	胴は縦長である。切断面は直線的で整えている。	外面 粗いヘラミガキ、横方向の幅広のヘラミガキ痕が目立つ。器面は滑らか。 内面 丁寧なヘラミガキ、幅の狭いヘラ状具により密に、滑沢に磨かれている。	細砂粒混入 堅緻 浅黄橙色	切断面は切断後丁寧に面調整している。
3	壺	口 16.3 胴 14.0 高 22.8		外面 口縁部はヨコナデ後波状文、口辺部はハケメ後ヨコナデ、頸部は7本単位の簾状文、胴上位はハケメ、胴下位はヘラミガキ。 内面 口辺部はヘラミガキ、胴下位はハケメ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	底部のみ欠損
4	壺	口 19.6 胴 26.5 底 8.7 高 38.2	折り返し口縁、口辺部は直状に外反する。	外面 口辺部は波状文、頸部は3連止め簾状文、胴上部は波状文、胴～底部はヘラミガキ。 内面 口辺部はヨコナデ、胴～底部はヘラミガキ。	粗砂粒、黒、白色粒混入 堅緻 茶褐色	完形
5	鉢	口 8.6 底 4.8		外面 ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい赤褐色	口縁一部欠損
6	鉢	口 7.8		外面 ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 赤色	口縁～底部%周内外面共に丹彩。
7	高坏	口 13.0		外面 口辺部はヨコナデ、全面にヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ、脚部はナデ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	底部欠損 脚部内面除き丹彩。



第290图 9号周溝墓壺棺 (1)



第291図 9号周溝墓出土遺物 (2)



第242表 9号周溝墓出土土器観察表 (拓本)

8 甕 砂粒混入、橙色	9 甕 (a)円形貼付文、内面ヨコナデ、砂粒混入、橙色	10 台付甕 2連止め簾状文、(a)~(c)波状文、内面ヘラミガキ、明褐色
-------------	-----------------------------	---------------------------------------

第243表 9号周溝墓出土玉類観察表

遺物番号	名称	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	成 形	整 形	材質 色	遺存状態 備考
11	勾 玉	2.9	1.0	0.9	0.15	全体に細身である。特に頭、尾部とも先端が細い。	ナデ	土	完形
14	小 玉	—	0.46	0.34	0.15			ガラス コバルト	完形

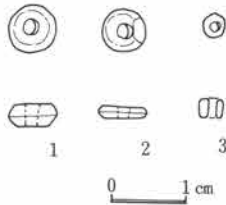
第244表 9号周溝墓出土石器観察表

遺物番号	名称	計測値 (mm)	石 質	重量 (g)	特 徴
12	打製石鏃	(49.0)×19.0×8.0	不明	6.4	丁寧に面調整された有茎鏃。先端部、茎端部はわずかに折損している。両側縁部は全体に細かい剝離調整により鋭利な刃を作出している。
13	磨製石鏃	(13.0)×14.8×2.0	珪質準片岩	2.3	円孔部の小片で周縁部はすべて欠損し、元々の縁部は遺っていない。両面とも石の筋に直行する方向に剝離痕が見られる。

## 15号周溝墓 (第289図、図版82)

位置 C地区東部 (45-C02) に位置する。9号、11号周溝墓に隣接する。

形状、規模 周溝は検出できない。低いマウンド状の高まりを見る。西半部及び南部は後世の溝に切られているため全体形状は不明、東半部のマウンドは周囲よりも30~40cm高い。



主体部 台状部の中央部と思われる辺りに隅丸長方形土壙が設けられている。土壙の規模は長さ約1.1m、幅35cm、深さ18cmを測る。覆土は黒色土で軽石を含まない。土壙内南部より人の歯が数点出土する。

出土遺物 台状部土壙の周囲より土器破片、ガラス製小玉、石製白玉が出土する。

第292図

15号周溝墓出土遺物

時期 弥生後期か

第245表 15号周溝墓出土玉類観察表

遺物番号	名称	厚さ (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	成 形	整 形	材質 色	遺存状態 備考
1	白 玉	0.36	0.63	0.2	両端部は整った平坦面を作り、側面は弱い稜がめぐる。	表面は全体に滑沢に磨かれている。	石 オリーブ 黒色	完形
2	白 玉	0.23	0.61	0.2	両端部は平坦面を作り、側面に弱い稜が見られる。	表面は全体に滑沢に磨かれている。	石 オリーブ 黒色	完形
3	小 玉	0.22	0.3	0.1	大粒の気泡が目立つ。		ガラス 淡青色	完形

### C地区周溝墓群出土獣骨

宮崎重雄

**獣骨出土状況** 9号、11号、12号、15号周溝墓の群域一面に獣骨片が散布して見られた。獣骨は小片で白色に焼けている。検出できた骨片は総数約145片以上を数える。検出面は浅間C軽石層を除去した面で弥生期において表出していた面と思われる。散布状況は293図に示すように周溝墓のマウンド頂部に密度が高く、9号、15号、及び両周溝墓の南に位置するマウンド

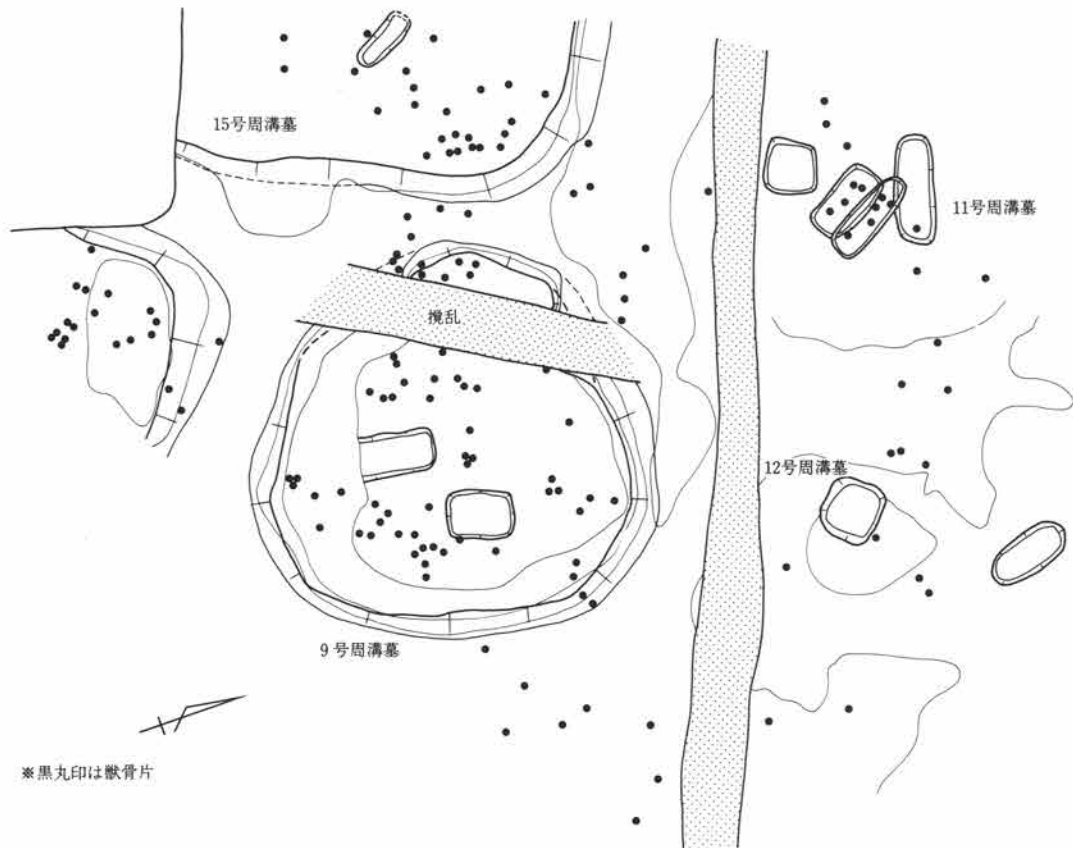
状遺構（これも周溝墓か）台状部に集中する。焼骨の獣種はイノシシ及びシカである。

**獣骨の状況** 内容については以下のとおりである。  
骨はごく一部を除いて数cm以下に細片化しており、亀裂や歪みの観察されるものもあり、焼骨であることは明らかである。加熱の温度は最高700～800℃程度が予想される。

骨片の総数は145片以上で、イノシシとシカの歯や骨が確認される。

第246表

内 容	数	
シカ歯破片	2	
シカ臼歯破片	23	
イノシシの歯破片	4	
イノシシ左上顎第三後臼歯	1	歯冠長 32.4mm 幅 19.6mm 高 18.9mm ♀? 4才±
四肢骨細片	1	
四肢骨片	1	
細骨片	2	
骨片	56	内イノシシの中指又は中足骨片1。 骨格器1片。 シカの中手又は中足骨の遠位骨端他。



※黒丸印は獣骨片

第293図 C地区周溝墓群獣骨分布図

完存しているのはイノシシの左上顎第三後臼歯だけである。歯冠長32.4mm、歯冠幅19.6mm、歯冠高18.9mmあり、この計測値からメスの可能性が考えられる。咬耗の程度は軽く、年齢は4才前後である。1点種不明の標本は、保存全長15.3mm、最大幅7.5mmあり、加工痕が認められる。

10号周溝墓 (図版79)

位置 B地区北西部(46-B30)に位置する。126号、128号の分岐部で、両溝に挟まれた位置にある。

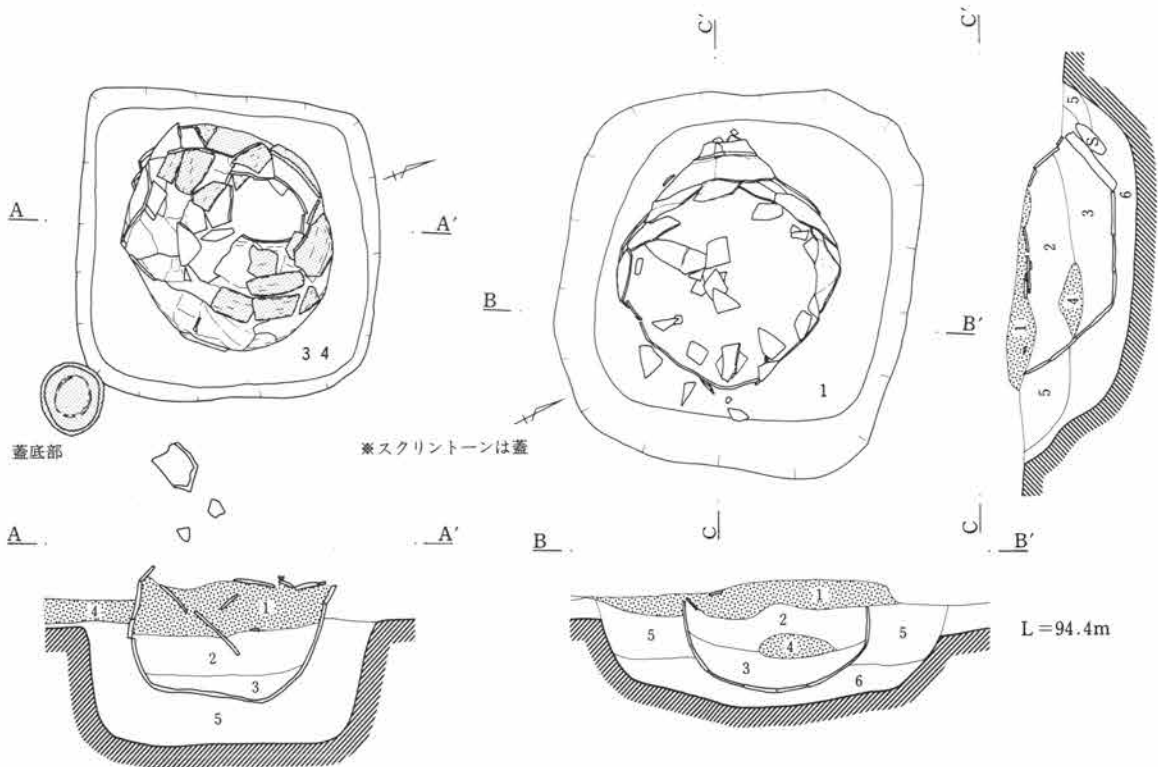
形状、規模 やや不整形な方形を呈する。南側溝は直状、東側は126号溝と重複、あるいは126号溝と結ぶ。西側から北側はくの字状に屈曲する溝に画される。南側溝、東側溝間が土橋状に開口する。規模は南北7.2m、東西6.2m、南側溝は幅1m、深さ40cm。4辺の溝の規模は全体に差が大きい。

主体部 不明

出土遺物 僅少

時期 弥生後期

11号周溝墓 (第295図、図版79、80)



Aセクション

- 1 黒色 やや粘質。浅間C軽石、焼土、炭化物粒を含む。
- 2 褐色 焼土、炭化物粒をわずかに含む。
- 3 淡褐色 炭化物粒を含む。砂っぽい。
- 4 暗褐色 浅間C軽石、焼土粒子、炭化物粒子を含む。
- 5 暗褐色 やや粘質。焼土粒子、炭化物を含む。

B・Cセクション

- 1 黒色 浅間C軽石混土層。
- 2 黒褐色 やや軟質。白色粒子を含む。
- 3 黒褐色 粘質。
- 4 浅間C軽石を多量に含む。
- 5 黒褐色 やや軟質。
- 6 黒褐色 硬粘質。黒味が強い。

0 50cm

第294図 11号、12号周溝墓主体部

**位置** C地区東部(40-C03)に位置する。12号、15号周溝墓に隣接する。

**形状、規模** 周溝、マウンドなどを検出することはできなかった。

**主体部** 台状部と思われる部分に、4基の土壌が検出された。4基のうち3基は隅丸長方形、1基は正方形で土壌内に壺棺を埋置している。正方形土壌(第2主体部)の規模は東西、南北とも82cmを測る。深さは30cm。棺本体は頸部以上を打ち欠いた大型壺を軸線を方形土壌の対角線方向にとって、斜位に埋置している。壺棺は頸部以上が打ち欠かれ径20~25cmの孔を開けている。開口部の破断面は丁寧に面調整を行っている。破断面の面調整については9号周溝の場合と同様破断面が外から見えにくい状態に片刃状に整形されている。棺の底部は土壌底面に接している。検出時点での棺の頂部は土壌上端、掘り込み面より15cm上方に突出している。土壌上端面以上は2~3cmの間隔をもって浅間C軽石混土層となり、棺の上方突出部分はC軽石混土層に覆われている。又、壺棺本体開孔部には別個体の壺下半部を重ね合わせ蓋としているが、この土器の底部大型破片が土壌南コーナー外縁部に検出され、これが蓋とした土器胴部に接合している。このことは棺を埋置した時点では蓋は壊れていなかったと思われるが、埋置後ほどなく(C軽石降下前)壊れて底部が転落したと思われる。こうしたことから棺の埋置状況は上半部は薄く土を被覆したか土以外のもので覆われたかあるいはまったく露出状態であったと思われる。棺内より小児の歯が数点検出される。

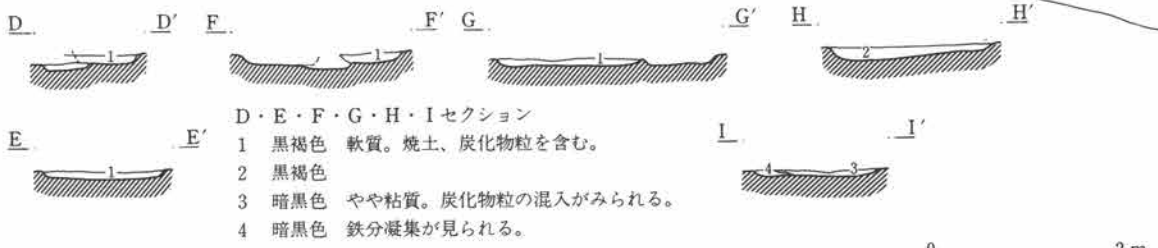
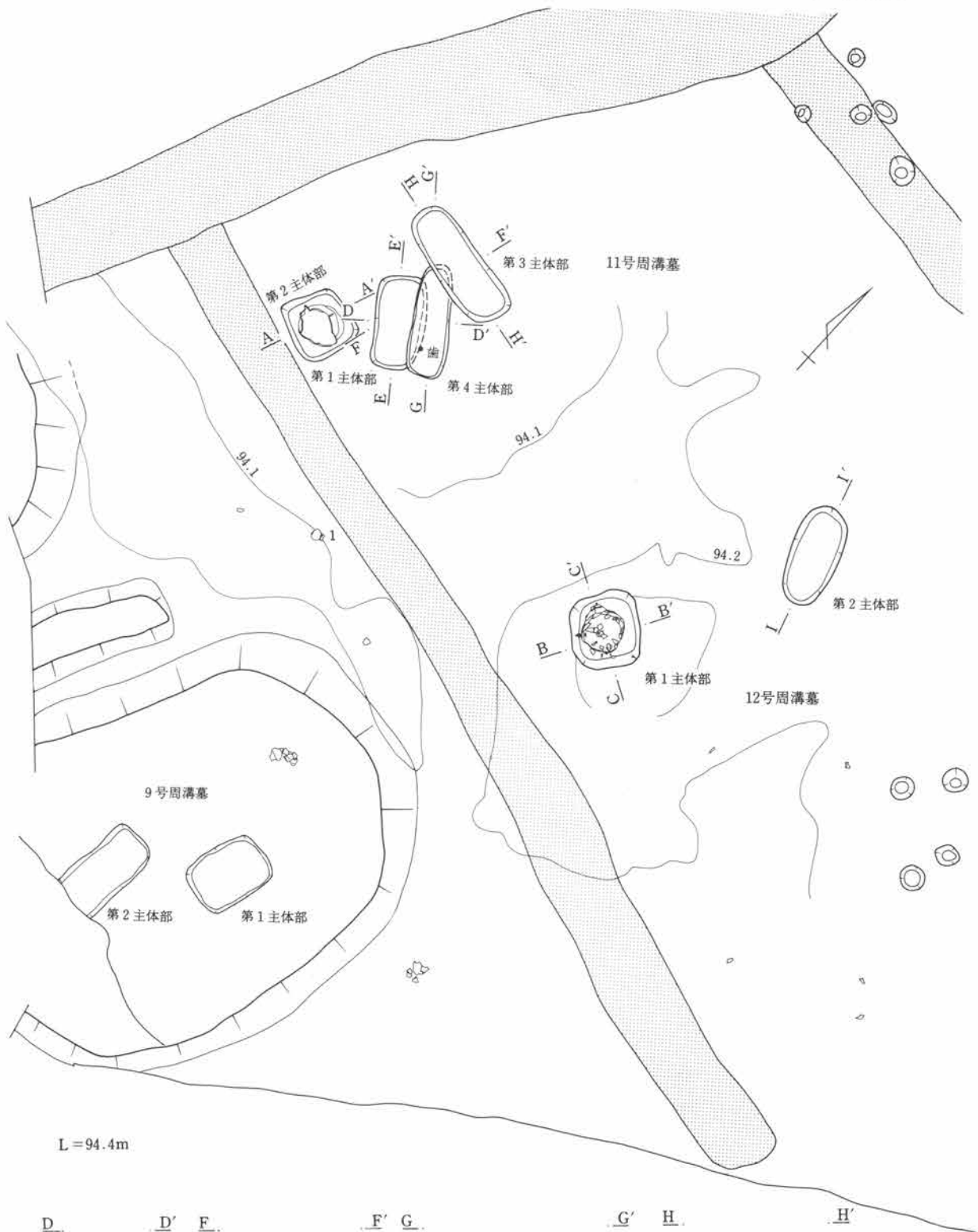
第1主体部は隅丸長方形を呈し、規模は長さ1.2m、幅推定70cm、深さ6cm、第3主体部は縦長の隅丸長方形で、長さ168cm、幅64cm、深さ12cm。第4主体部は長円形に近い隅丸長方形で、長さ1.5m、幅58cm、深さ6cmを測る。3基の土壌とも軽石の含まない黒褐色土壌であり、3土壌とも浅間C軽石の降下に先んじて造られたもので、重複部の観察によれば、第1主体→第4主体→第3主体の順に造られたと判断される。3土壌内からの出土遺物はほとんど見られないが第4主体部では東南部覆土中より人の歯が2点出土している。

**出土遺物** 第1主体部より甕形土器、主体部周囲の覆土中よりガラス小玉が出土している。

**時期** 弥生後期第2期~第3期

第247表 11号周溝墓出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	底 5.2	口縁端部を打ち欠いている。	外面 口辺部はハケメ、ヨコナデ、頸部は3連止め一簾状文、胴上部は一波状文、胴~底部はヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	粗砂粒混入 堅緻 橙色	口縁端部は打ち欠き、僅かに欠損あり。 胴部部分的丹彩
2	甕	口 14.8	口辺部直状に外反し口縁部で短かく内湾する。	外面 口縁部はヨコナデ、口辺部ハケメ、頸部は2連止め一簾状文、胴上部は波状文。 内面 口辺部はヨコナデ、頸~胴部はナデ。	中砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	口縁~胴上位1/4周
3	壺 (棺)	胴 59.0 口径(打欠) 22.0× 24.0	肩部から上を打ち欠いている。打ち欠いた孔は整った円形で切断面は外面側が鋭角に“片刃”状。	外面 肩部は櫛描波状文、波状文は上から下へ不規則に重なって施される。胴部は丁寧なヘラミガキ。波状文下に円形貼付文を付す、2個遺存。 内面 器面が荒れている。	細砂粒混入 堅緻 浅黄橙色	打ち欠き孔の縁にわずかに欠損あり。 ほぼ完存。
4	壺 (蓋)	胴 46.0 底 15.3	胴中位より上を直線上に打ち欠いている。打ち欠き面は丁寧に調整され大きな凹凸をなくしている。	外面 縦方向の丁寧なヘラミガキ。 内面 横方向の丁寧なヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 浅黄橙色	小部分に欠損がある。 他は良好に完存。

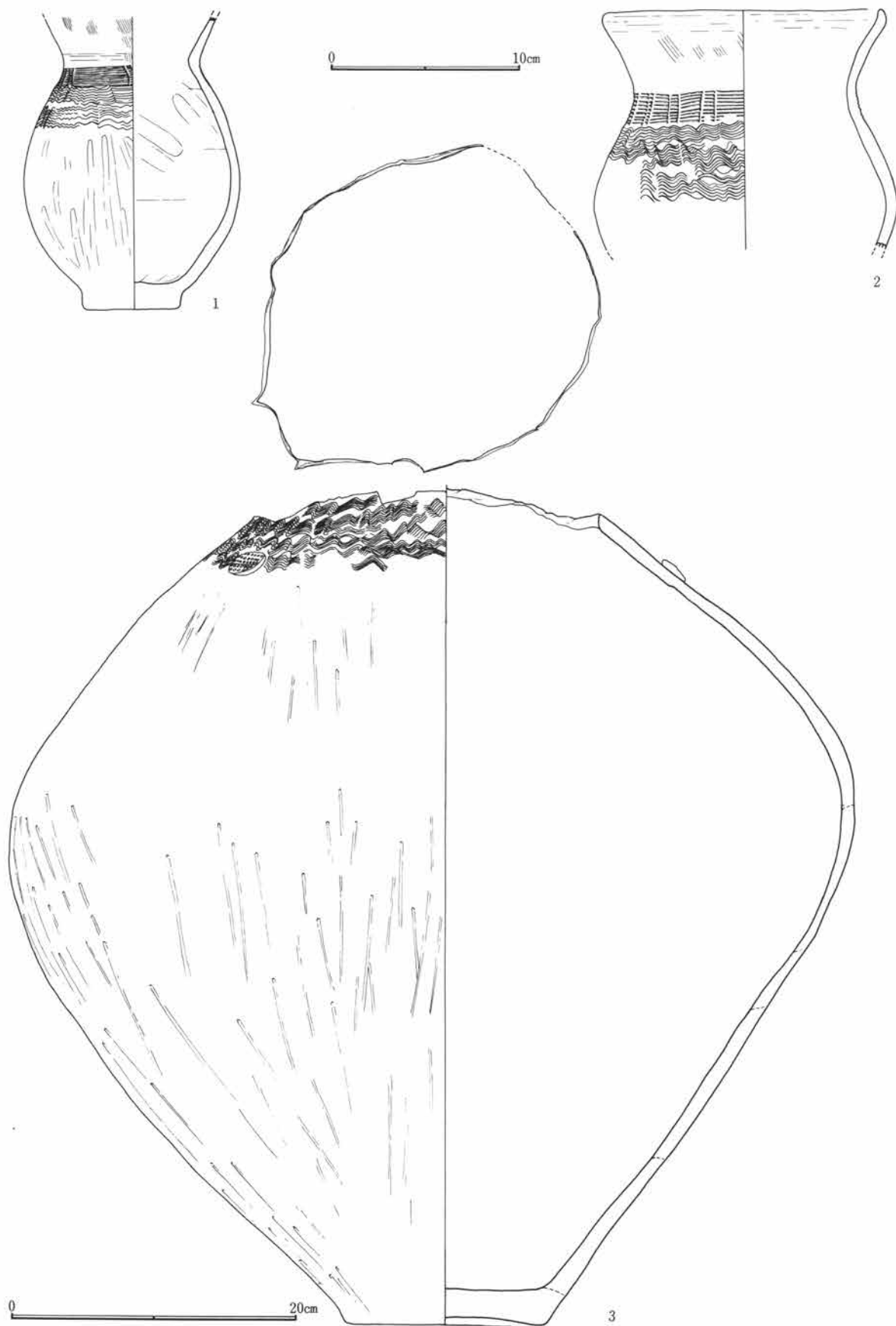


- D・E・F・G・H・Iセクション
- 1 黒褐色 軟質。焼土、炭化物粒を含む。
  - 2 黒褐色
  - 3 暗黒色 やや粘質。炭化物粒の混入がみられる。
  - 4 暗黒色 鉄分凝集が見られる。

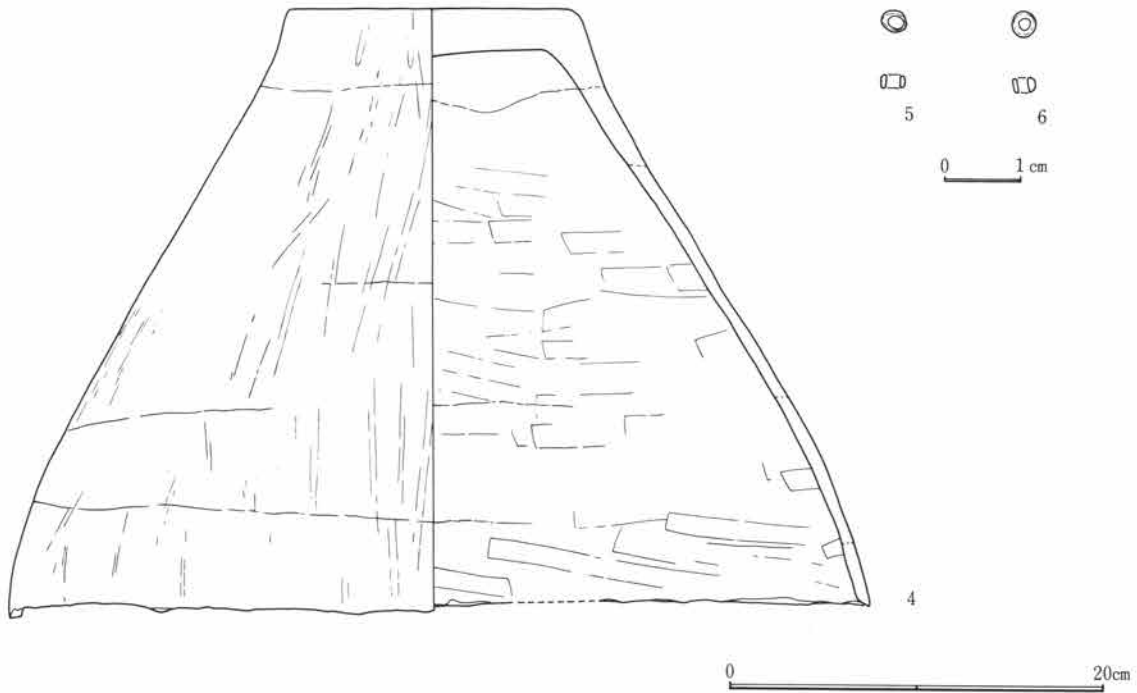
0 2 m

第295図 11号、12号周溝墓主体部

6 検出した遺構、遺物



第296図 11号周溝墓壺棺、出土遺物 (1)



第297図 11号周溝墓壺棺、出土遺物 (2)

第248表 11号周溝墓出土玉類観察表

遺物番号	名称	厚さ (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	整形	材質 色	遺存状態 備考
5	小玉	0.15	0.37	0.12	整形痕は面が荒れて不明。	ガラス 淡青緑色	完形
6	小玉	0.15	0.29	0.16		ガラス 淡青緑色	完形

## 12号周溝墓 (第295図、図版80、81)

**位置** C地区東端部(42-C00)に位置する。11号、15号周溝墓に隣接する。

**形状、規模** 溝あるいはマウンド等は検出できない。浅間C軽石除去後の面は径4m程の範囲にわずかに膨らみが認められる。

**主体部** 主体部が2基検出される。2基の主体部の間は2m離れている。2主体部は他の場合と比べ位置が離れ間隔が大きいため同一周溝に属することについては確定的ではない。第1主体部は隅丸方形で土壌内に壺棺を埋置する。土壌は北西-東南長1m、北東-南西長95cm、深さ20cmを測る。壺棺は軸線を方形土壌の辺方向にし、斜位に埋置している。壺棺本体は肩部以上を打ち欠いた大型壺で開口部の径13cm。開口部の遺存状態が悪いので、本来の打ち欠き孔の縁はより上位であった可能性もある。棺は土壌底面より7cm程浮いた状態で、土壌上端面より7cm前後上方へ突出しており、棺の上部の遺存状態は悪い。近隣壺棺の例から、壺棺本体の開口部はフタに供した土器により覆われていたと考えられるが、確認することはできなかった。壺棺底面には外側からおさえ込むように川原石が置かれているが、この石の意味するところは不明である。土壌内の覆土は黒褐色土で浅間C軽石を含まない。浅間C軽石は壺棺上端破断面以上を覆っている。壺棺内中位に浅間C軽石純層の堆積が認められ、C軽石降下時棺の天井部が失われ空洞状態の棺内に降下軽石が

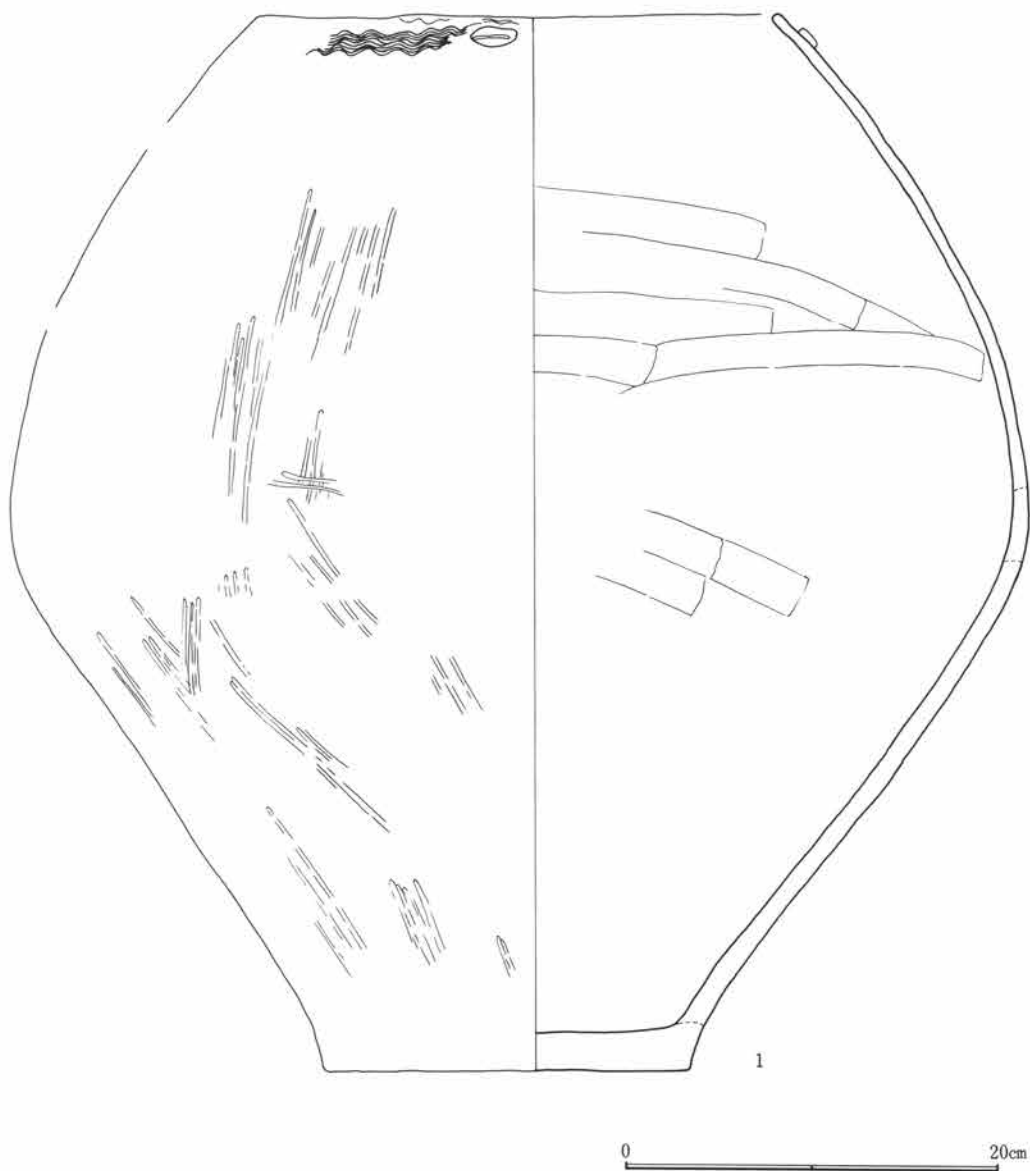
6 検出した遺構、遺物

堆積したことをうかがわせる。

第2主体部 長円形を呈する。長軸1.4m、短軸64cm、深さ6cmを測る。覆土は黒褐色土。

出土遺物 壺棺の他はなし。

時期 弥生後期



第298図 12号周溝墓壺棺

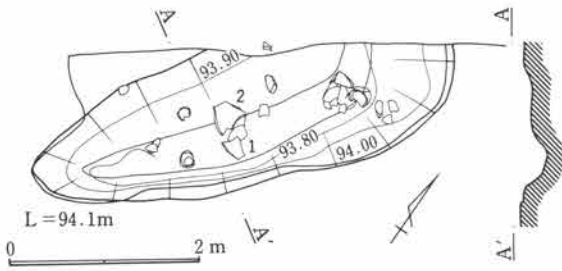
第249表 12号周溝墓出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺 (棺)	胴 54.3 底 19.6	肩部遺存が部分的であるため、打ち欠き孔は不明確。	外面 肩部に楕円波状文を施す。波状文の下端に楕円形の浮文を点付する。浮文には一条の横沈線、刺突を施す。胴部はヘラミガキ。 内面 ナデ。	細砂粒混入 堅緻 にふい橙色	胴上部の片半を欠損



13号周溝墓 (第299図、図版81、82)

位置 B地区北部(42-C46)に位置する。242号住居の南方5mに位置する。



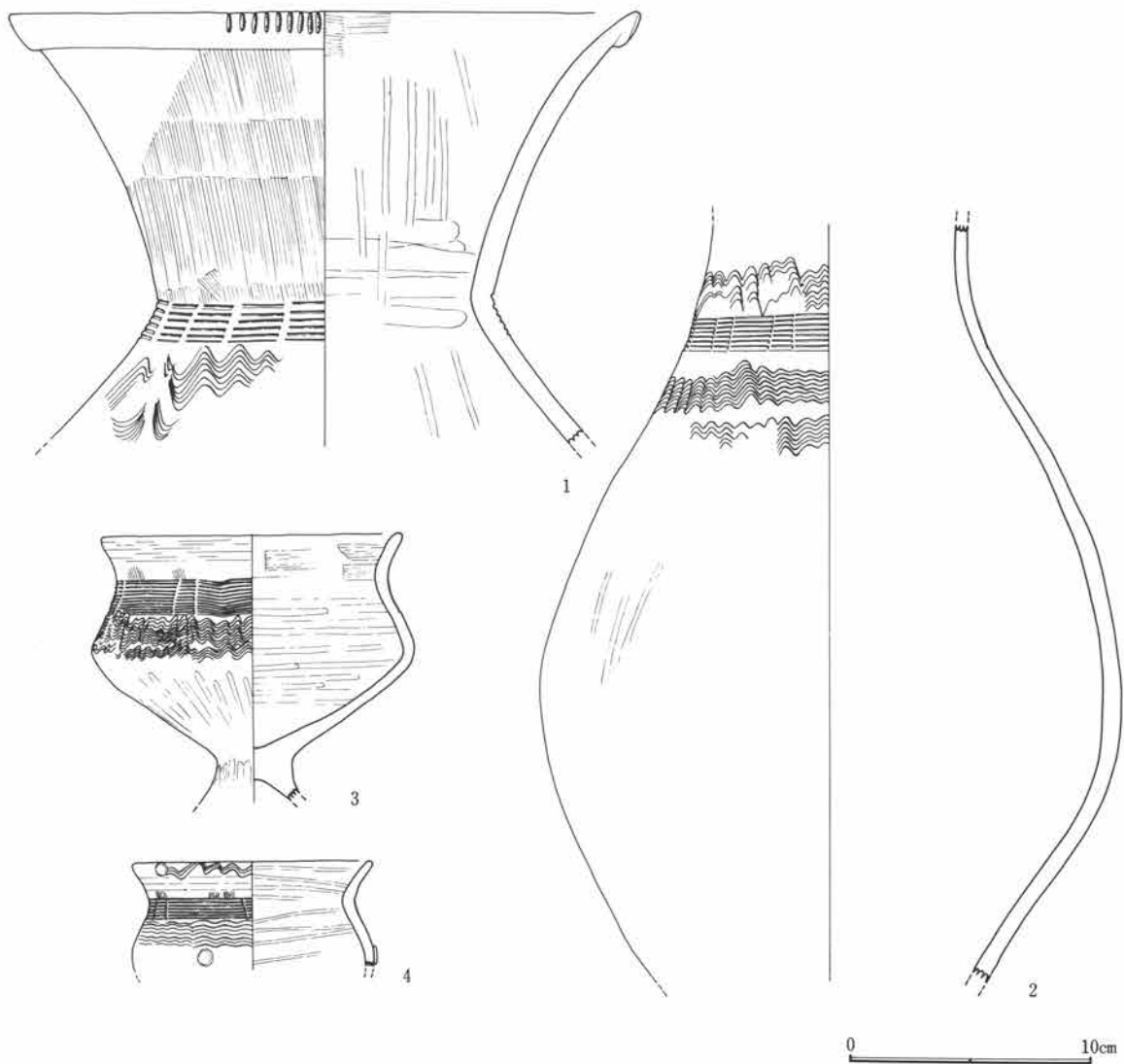
形状、規模 100号溝南の西に隣接し、南北方向に1条の溝を検出する。全体形状不明。溝の北部は不明瞭。規模は幅1.3m、深さ30cm。

主体部 不明

出土遺物 溝内より壺、または甕など大形土器破片が多数出土する。

時期 弥生後期第2期～第3期

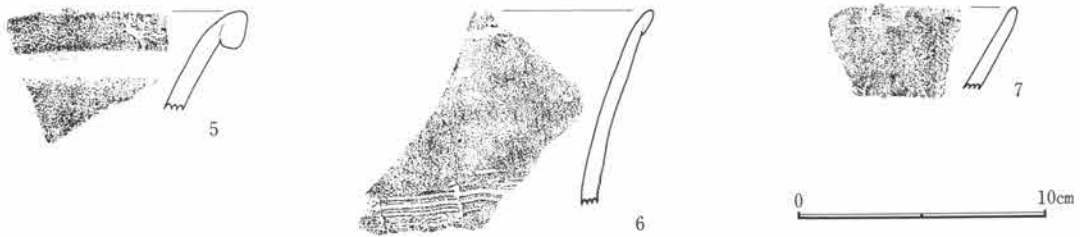
第299図 13号周溝墓



第300図 13号周溝墓出土遺物 (1)

第250表 13号周溝墓出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 26.0	頸部は比較的強くくびれる。	外面 口縁部は先端が細かいへら状具による刻み目。口～頸部までハケメを3段に施す。頸部は等間隔止め簾状文。肩部は櫛描波状文を疎に施している。	砂粒目立たず堅緻にぶい黄橙色	口縁～肩部 $\frac{1}{2}$ 周
2	壺	胴 24.0		外面 頸部は波状文、2連止め一簾状文、胴上部は波状文。 内面 器面剥落著しい。	細砂粒、黒色粒混入やや堅緻にぶい橙色	頸～胴部 $\frac{1}{2}$ 周
3	台付甕	口 12.5 胴 13.3	口辺部は緩やかに外反する。	外面 口辺部はハケメ後ヨコナデ、頸部は11本単位の2連止め一簾状文、胴上部は波状文、胴下位はへらミガキ。 内面 口辺部はナデ、胴部はへらミガキ。	細砂粒混入堅緻明褐色	口辺一部、及び脚台部欠損
4	台付甕	口 10.0	口辺部直状気味に外反する。	外面 口縁部は波状文、円形浮文、口辺部はハケメ後ヨコナデ、頸部は2連止め簾状文、胴上部は波状文、胴中位に円形浮文。 内面 へらミガキ。	細砂粒混入堅緻にぶい橙色	口～胴上位 $\frac{1}{2}$ 周



第301図 13号周溝墓出土遺物 (2)

第251表 13号周溝墓出土土器観察表 (拓本)

5 壺 (b)波状文、砂粒混入、明褐色	6 甕 (c)～(d)ハケメ、砂粒混入、にぶい橙色	7 甕 (a)ヨコナデ、ハケメ、砂粒混入、にぶい橙色
---------------------	---------------------------	----------------------------

## D 1号周溝墓 (第302図、図版84、85)

**位置** D区周溝墓群の西北端に位置する。本周溝墓の東にはD 4号、D 5号周溝墓が隣接している。北西側は墓域外となる。北東側には既設用水路が北西→東南に貫いており、本周溝墓の溝の一部を削り取っている。

**形状、規模** ほぼ円形を呈するが東南側がやや宝珠形に突出している。この突出部で溝が途切れる様子があるが、水路による攪乱があるため、明確に把握できない。(南北) 8.3m、内法(台状部長径) 6.6m、短径 6.2mを測る。周溝の断面形状は緩い放物線状。最大幅で1.2m。

**土層堆積の状況** 周溝墓の構築面は、基盤層である黄褐色ローム質土(第V層)の上位層、厚さ約15cm程の黒色粘質土層(第IV層)の上面である。この黒色粘質土層の上にはほぼ台状部全体にわたって径2～3mmの軽石粒、粘土ブロックを含む淡褐色の客土の堆積が認められた。客土の上には純度の高い浅間C軽石混土層がのる。このことから、当初の周溝墓上面がこの客土上面を僅かに前後する辺りであったと判断できる。

周溝覆土は最上部はほぼ純層に近い浅間C軽石層が厚さ20cm前後でレンズ状に堆積しており、浅間C軽石の降下時には浅い窪地の状態で溝が残存していたと判断できる。

**主体部** 台状部において、中央部に径40cm前後の角礫が置かれ、石の東西にはこれを挟んで2基の土器棺が埋置されていた。2基とも遺存状態は悪く、1号棺は上半部を失い、2号棺は上部の大半を失って最下部の器体が残存するのみであった。1号土器棺は胴径43cm前後の大型の壺形土器を、器体を南方向に傾斜させた状態で棺底部が、20cm前後台状部の客土中に埋め込まれた状態であった。上半部は後世の削平により失われているため不明である。壺棺内からは遺物など検出することはできなかった。2号土器棺は胴径50cm以上の大型の壺形土器を横倒しにして埋置している。1号周溝墓では2基の土器棺の他は、埋葬施設と考えられるような土壌などの確認はなかった。

**出土遺物** 出土遺物としては、完形土器及び土器破片が多数出土している。その他打製石斧も認められる。第303図の小型の壺形土器は欠損はもとより、無傷の状態、西南側周溝の底面直上より出土している。溝内の遺物出土状態の全体的な傾向としては西側寄りに比較的多くの土器破片の出土があり、また出土位置は溝上部に総じて集中している。

**他の遺構との関係** 隣接周溝墓との関係についてはD2号周溝墓はD1号周溝墓の東南側に隣接するが平面形状、溝の共有部の覆土の状態からD1号周溝墓の方がD2号周溝墓よりも古いと判断できる。D4号、D5号周溝墓についても平面形状からD1号周溝墓よりも新しい。D4号周溝墓は既存のD1号周溝墓の東側の周溝にウロコ状に周溝を接続している。D5号周溝墓も同様にD1号周溝墓、D4号周溝墓に接続する。

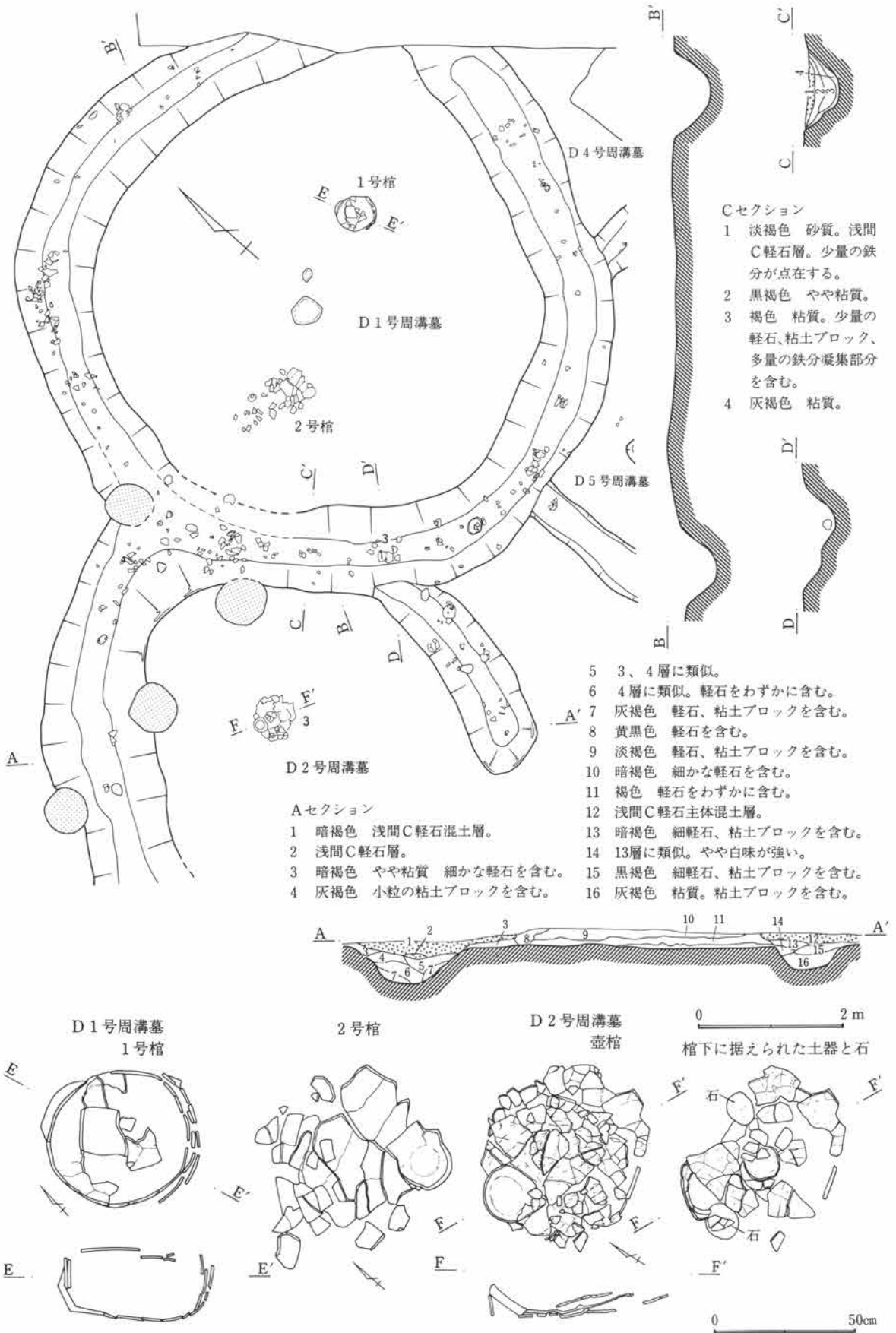
**時期** 弥生後期第2～3期

第252表 D1号周溝墓出土土器観察表

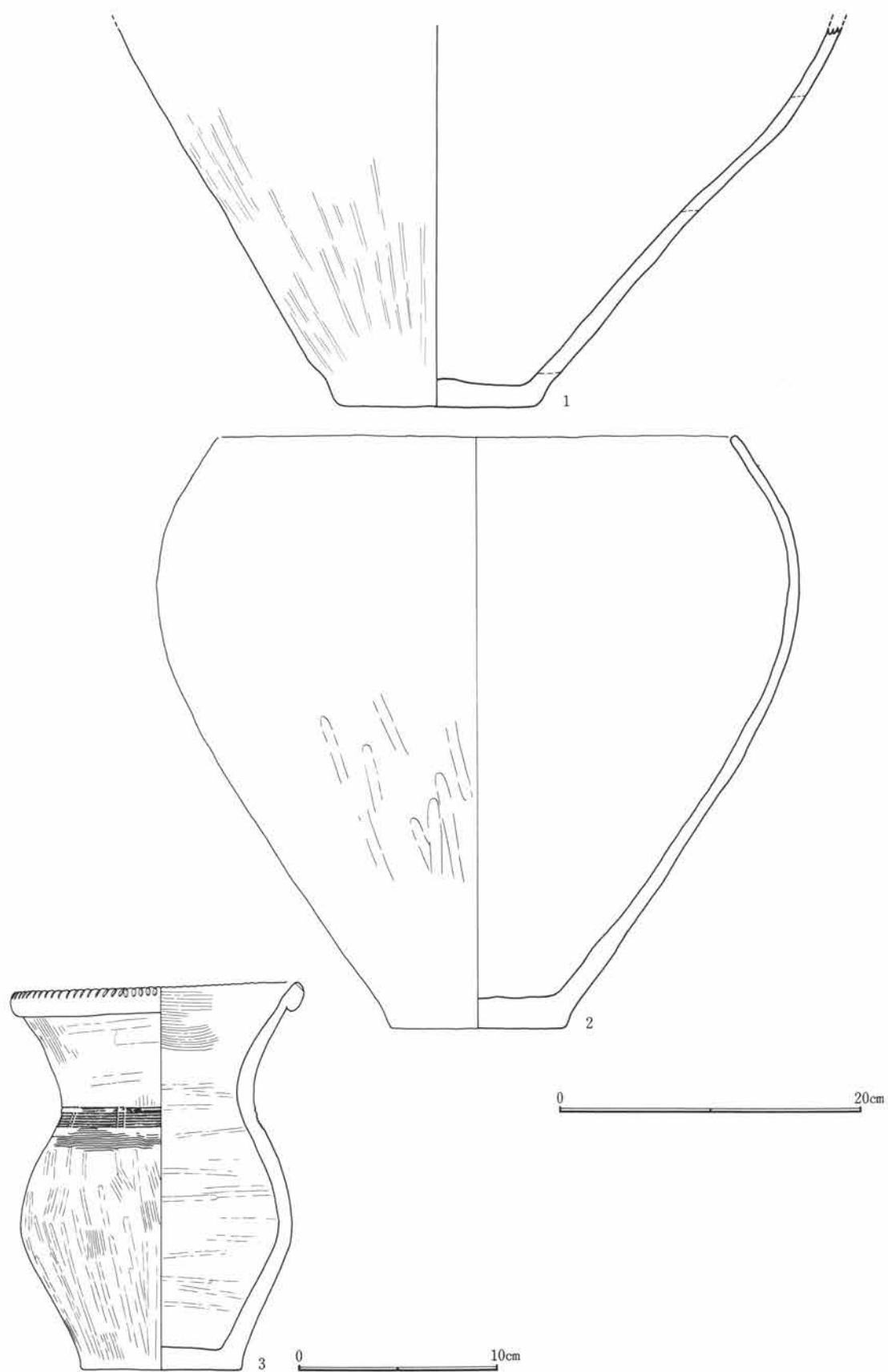
遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺 (棺)	底 13.0		外面 器面剥落著しい。 内面 器面剥落著しい。	粗砂粒混入 軟弱 にぶい黄色	底部 内外面共に荒れている。
2	壺 (棺)	底 11.7 胴 42.6	器形は最大径が上位にある。胴下部で細まり底は小さい。	外面 ヘラミガキ。 内面 器面が荒れている。	粗砂粒混入 堅緻 浅黄橙色	胴上位以上欠損
3	壺	口 14.6 胴 13.5 底 8.0 高 19.0	折り返し口縁、口辺部は直状に外反する。	外面 口縁端部にキザミ、口辺部はハケメ、ヘラミガキ、頸部は2連止め一簾状文、胴上部は波状文、胴～底部はヘラミガキ。 内面 口辺部はハケメ、頸～胴部はヘラミガキ。	粗砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	完形
4	甕	口 15.9 胴 17.6	口辺部緩やかに外反する。	外面 口辺部は波状文、頸部は等間隔止め一簾状文、胴上部は波状文、胴部はヘラミガキ、口～頸部にハケメ痕あり。 内面 口～胴部はヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 淡橙色	口縁～胴中位全周

第253表 D1号周溝墓出土石器観察表

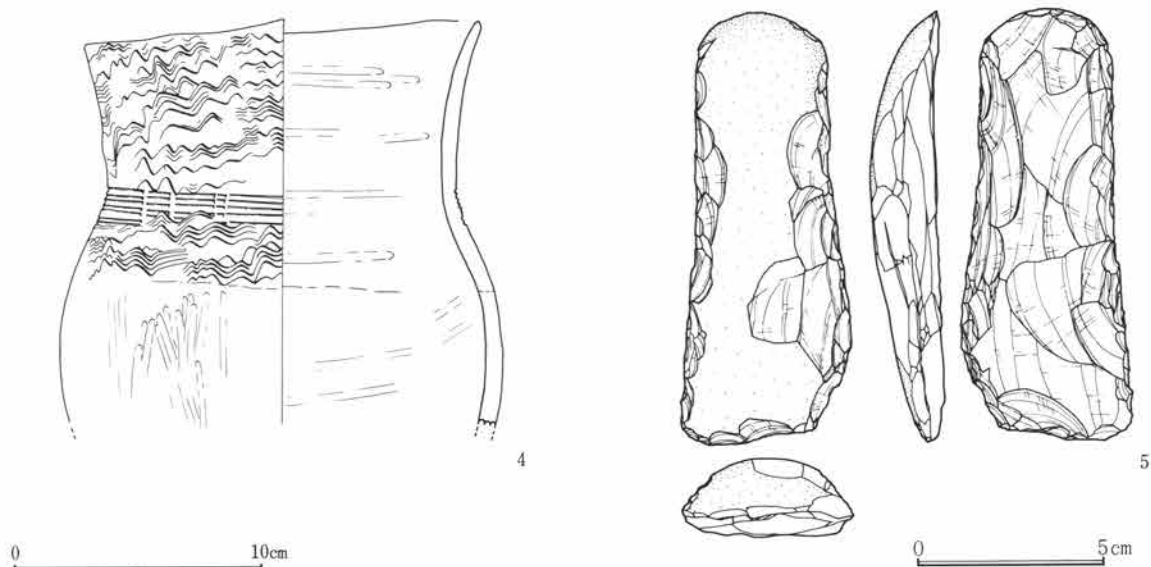
遺物番号	名称	計測値 (mm)	石質	重量 (g)	特徴
5	打製土掘具	113.0×44.5×18.0	黒色頁岩	109.8	母岩の球面、自然面より剥離した剥片、片面には自然面が残る。両側縁は丁寧な調整により、ほぼ直状に作出される。刃部は両面からの剥離調整により比較的鋭く刃が作られている。



第302図 D1号、D2号周溝墓



第303図 D1号周溝墓壺棺、出土遺物 (1)



第304図 D 1号周溝墓出土遺物 (2)

## D 2号周溝墓 (第302図、図版86、87)

**位置** D区周溝墓群の南に位置し、D 1号周溝墓に隣接する。

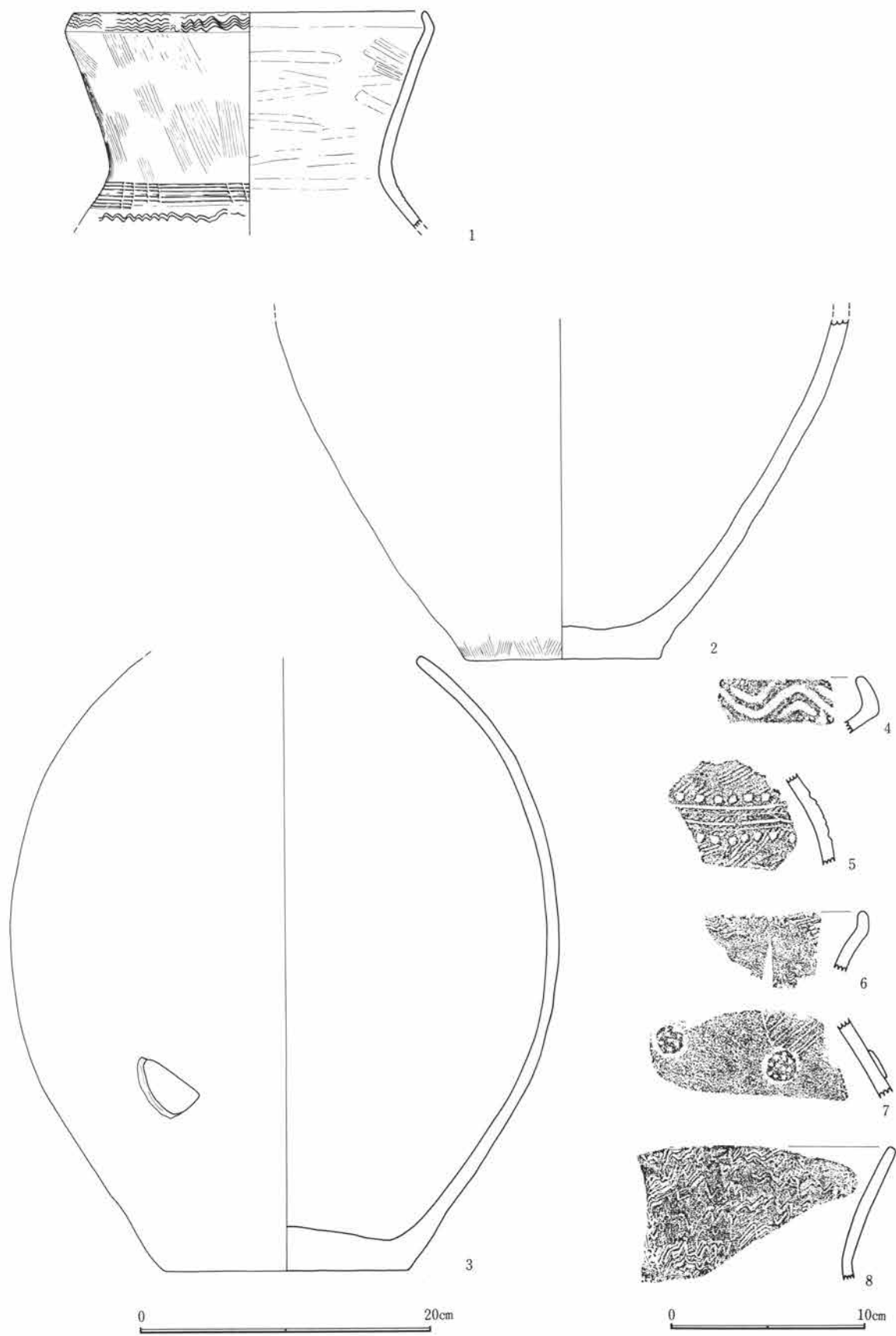
**形状、規模** 形状は東南部が攪乱を受けて不明であるが、一見亀の甲状に見える不整円形を呈する。北東側はD 1号周溝墓に周溝を取り付けているため、接続部の周溝の形は角を作っている。南側は周溝が広く途切れている。東西径は外郭で6.6m、内法で4.3m、溝の断面形は放物線状で幅は最も広い所で1.5mを測る。

**土層堆積の状況** 台状部の堆積土層はほぼD 1号周溝墓と同様で黒色粘質土(第IV b層)上にロームブロック混じりの客土の堆積が20cm前後認められる。周溝内の覆土の堆積状況は1号周溝墓と同様最上部はほぼ純層に近い浅間C軽石層のレンズ状堆積があり、以下は黒色粘質土で自然堆積層である。

**主体部** 埋葬施設は土器棺を埋置している。土器棺は客土中に浅く埋め込まれたと思われるが、客土上面が不明確であるうえに土器棺は器体の最下部が残存しているのみでありほとんど後世の削平により失っているため、客土中にどの程度の深さに埋められていたものかについては明確に把握できない。土器棺の埋置方法は本周溝墓群中の他の有り方と若干異なった様子を示している。本土器棺埋置の状況は棺を直接土の上に据えることなく棺の下に別固体の大型壺の胴部の器体を土器棺と底部を密着するように重ね合わせて、敷いたかのような状態で検出されたが、これは、当初、入れ子状になっていたであろうことが想定できる。土器棺の下に据えた土器の下には径11~12cm程の扁平な川原石が2個並んで検出された。この石の確たる意味は不明であるが、棺の傾きを固定させていたのではないかと考えられる。

**出土遺物** 副葬品は検出できなかった。土器棺として使用された土器の上部が後世の破壊を受ける以前に崩落し、残存土器棺内にこの破片が平たく潰れ、密着した状態が見られた。このことから、もし当初土器棺内に玉類などの副葬された遺物があったなら、崩落した土器棺破片の下から出土する可能性は高いだろう。周溝内覆土上部には壺、甕などの土器破片が散在している。弥生中期土器小破片は混入だろう。

**時期** 弥生後期第2期~第3期



第305图 D 2号周溝墓壺棺、出土遺物

## 6 検出した遺構、遺物

第254表 D2号周溝墓出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	口 18.0	口辺部は直状に外反し口縁部は内湾する。	外面 口縁部は波状文、口辺部はハケメ、頸部は2連止め一簾状文、胴上部は波状文。 内面 ヘラナデ、ヘラミガキ。	中砂粒混入 堅緻 にふい橙色	口～頸部1/4周
2	壺	底 10.0		外面 底部にハケメ、器面剥落著しい。 内面 器面剥落著しい。	中砂粒混入 堅緻 にふい橙色	胴下位～底部1/6周
3	壺	胴 37.5	胴下部に長径4.5cm、短径3.5cm程の焼成後の円孔が認められる。	外面 器面の荒れ著しい。 内面 器面の荒れ著しい。	砂粒混入 軟弱 淡橙色	胴部の片側大半部が後世の攪乱で欠損している。

第255表 D2号周溝墓出土土器観察表（拓本）

4 壺 砂粒混入、灰橙色	6 甕 (b)波状文、砂粒混入、にふい赤褐色	8 甕 内面(b)ヨコナデ、砂粒混入、明黄褐色
5 壺 砂粒混入、にふい橙色	7 壺 ヘラ沈線鋸歯文、細砂粒混入、にふい赤褐色	

## D3号周溝墓（第312図、図版88）

**位置** D地区東部周溝墓群中に位置する。D8号周溝墓に隣接する。

**形状、規模** 北東半部は調査区域外であり全体形状は不明である。周溝は西から南にかけて円弧状に巡り、西に開口する。開口部は幅80cm。南側溝は、東は11号溝に結ぶが、以東は不明である。

**土層堆積の状況** 周溝覆土上部には浅間C軽石混土層のレンズ状堆積が見られる。

**主体部** 土壙などの確認できなかった。

**出土遺物** 僅少。

**時期** 弥生後期

## D4号周溝墓（第308図、図版88、89）

**位置** D地区東部周溝墓群中に位置する。D1号、D5号周溝墓に隣接する。

**形状、規模** 周溝墓の北東部の大半は調査区域外であり全体形状は不明である。周溝は、南側で検出される。円弧状に巡り、1号周溝墓の東溝に三叉状に結ぶ。規模は、幅70cm、深さ30cm。

**主体部** 台状部に不整形な土壙を検出する。これが埋葬施設に関わるものか確認できない。

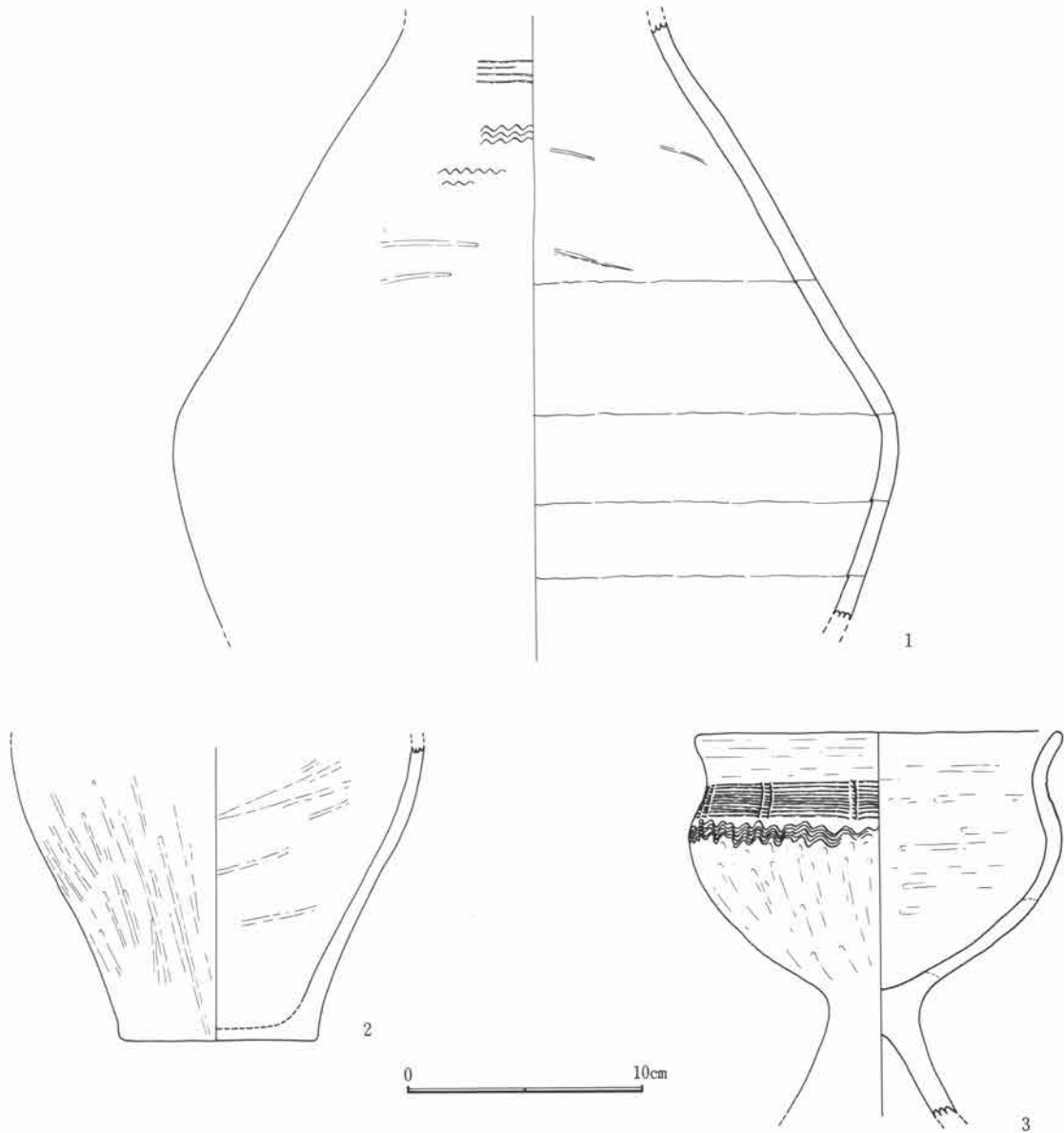
**出土遺物** 周溝内より弥生土器の壺、甕、台付甕などの大型破片が出土している。

**時期** 弥生後期第2期～第3期

第256表 D4号周溝墓出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	胴 30.4	胴上部はわずかに外反し、胴下部は大きく膨れる。	外面 頸部に櫛描直線を認める。これは簾状文の部分と思われるが止めは不明、以下は櫛描波状文、胴部はヘラミガキ。 内面 器面が荒れている。	砂粒目立たず 軟弱 橙色	頸～胴下位

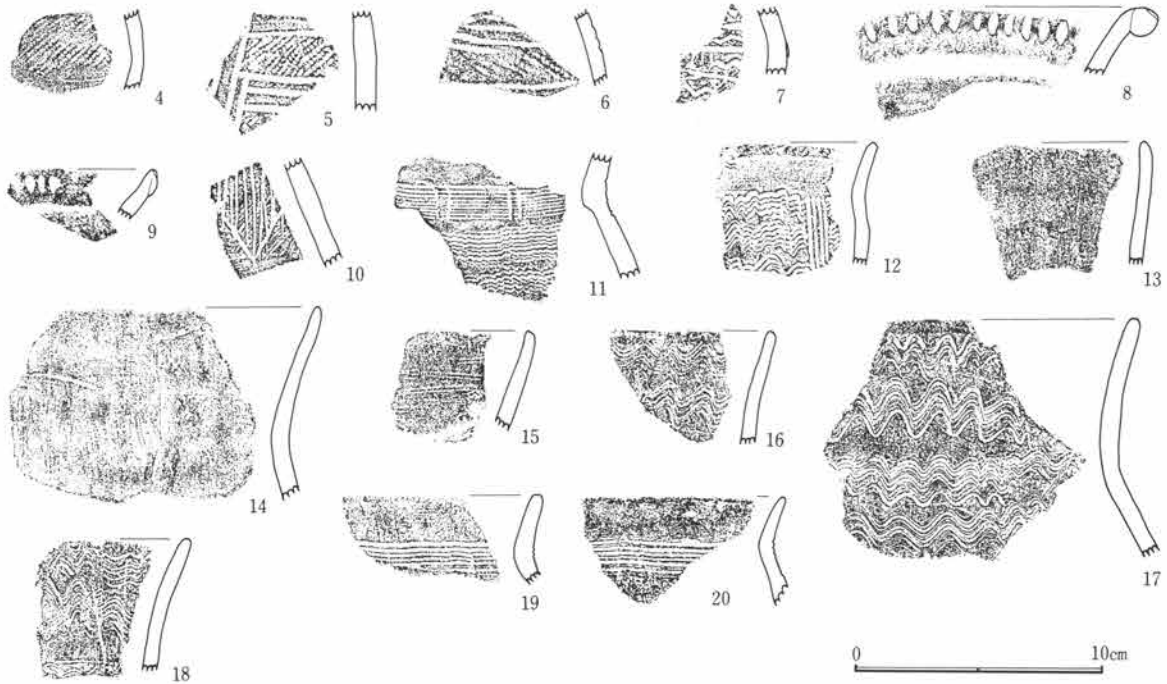




第306図 D4号周溝墓出土遺物 (1)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
2	甕	底 8.4		外面 ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 灰黄色	胴中位～底部 $\frac{1}{2}$ 周
3	台付甕	口 15.3 胴 15.6	口辺部直状に外反する。	外面 口辺部はヨコナデ、頸部は10本単位の2連止め一簾状文、胴上部は波状文、胴部はヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒、黒、白色粒混入 堅緻 淡赤褐色	口～胴上部 $\frac{1}{2}$ 周 脚台下半部欠損

6 検出した遺構、遺物



第307図 D4号周溝墓出土遺物 (2)

第257表 D4号周溝墓出土土器観察表 (拓本)

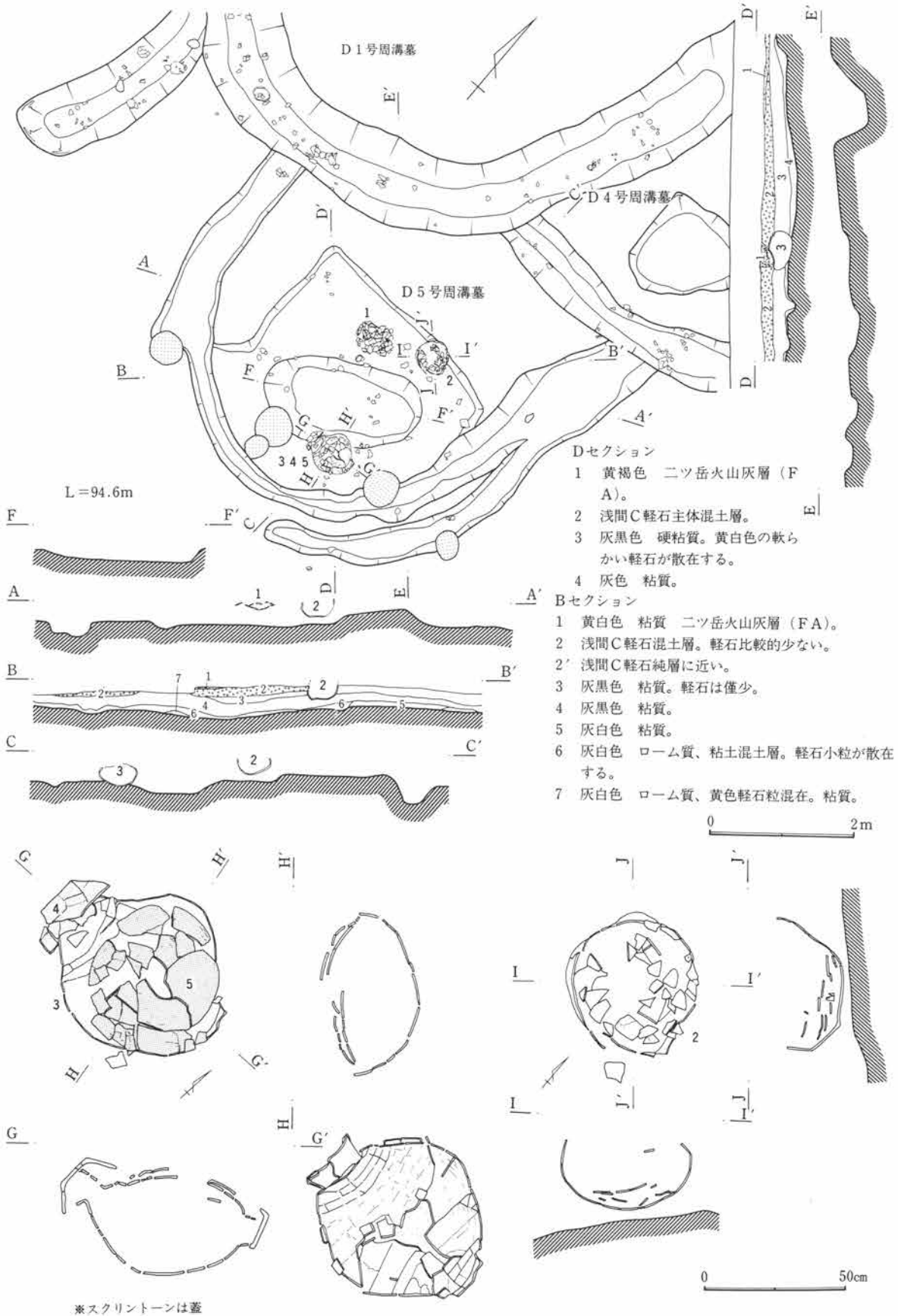
4 壺 縄文、沈線、にぶい褐色	10 壺 ヘラ沈線鋸歯文、微砂粒少量混入、浅黄橙色	15 甕 外面(b)~(c)ハケメ、砂粒混入、にぶい褐色
5 壺 縄文、砂粒混入、橙色	11 壺 砂粒混入、にぶい橙色	16 甕 砂粒混入、にぶい橙色
6 壺 RL縄文、砂粒混入、にぶい橙色	12 甕 (a)LR縄文、砂粒少量混入、暗褐色	17 甕 内面ヨコナデ、砂粒混入、褐色
7 壺 LR縄文、平行沈線鋸歯文、円形貼付文、橙色	13 甕 ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい橙色	18 甕 (d)波状文、砂粒混入、にぶい橙色
8 壺 砂粒混入、にぶい橙色	14 甕 砂粒混入、にぶい橙色	19 甕 (d)2連止め簾状文、(b)~(c)ヨコナデ、砂粒混入、にぶい橙色
9 壺 砂粒混入、浅黄橙色		20 台付甕 2連止め簾状文、砂粒混入、にぶい橙色

D5号周溝墓 (第308図、図版89、90、91、92)

位置 D地区東部周溝墓群に位置する。D1号、D2号周溝墓の南に隣接する。

形状、規模 円形を基調とするが、北部はD1号、D4号周溝墓の周溝にT字状に結んでいるため鱗状を呈する。北側周溝はD4号、D5号周溝墓と溝を共有する。周溝は東半部で2重に溝を巡らしている様子が見られる。南西部は1条巡るのみであるが、本来は東半部と同様2重に巡っていた可能性が高い。規模は東西5.6m、南北5.8mを測る。

土層堆積の状況 溝の内側(台状部)は灰白色、やや粘質なローム質土の基盤層上部から周溝墓、台状部を覆う浅間C軽石混土層下部間の層の厚さは20cmである。この間の土層はローム質基盤層から比較的漸移的に黒褐色粘質土、第IVb層、さらに上位層の浅間C軽石層となる。浅間C軽石混土層は灰黒色を呈し、溝内で周溝覆土上部土層の堆積に比べ純度が低い。C軽石混土層の厚さは10~15cm。この上位層は二ツ岳火山灰層(FA)であり、FA層から地山面まで25cm前後である。封土、あるいは客土は明確ではない。溝の覆土



第308図 D4号、D5号周溝墓

6 検出した遺構、遺物

は灰黒色粘質土で最上部（溝底面より20cm）で純層に近いC軽石層の薄いレンズ状堆積が見られる。

**主体部** 周溝墓内には主体部の痕跡と思われる長円形の土壙1基、及び壺棺が3基検出された。

土壙は長円形で長軸方向N-68°-E。土壙の規模は長軸2.2mを測る。検出面は第V層上面であり、掘り込み面や、土層断面において立ち上がり線などの確認は得られなかった。覆土は灰白色粘質土。また、土壙の周囲には方形の落ち込みが巡るが、その性格は不明である。覆土は土壙と同様、灰白色粘質土。上部は灰黒色土である。覆土上部より弥生土器破片が多数出土している。

壺棺は台状部に3個体検出された。1号棺はほぼ中央部に位置する。棺は大型壺を横位置の状態に埋置し、器体の最下部のみ残存し、上部の大半は後世の攪乱により、欠損している。2号棺は1号棺の北に位置し、大型壺を、斜位に埋置している。上半部は後世の攪乱により欠損している。棺内には崩落したと思われる壺の肩部破片が重なって見られ、最下部より、球形に滑らかな円礫が出土している。棺の周囲の土層は、棺の中位以上は浅間C軽石混土層に覆われている。

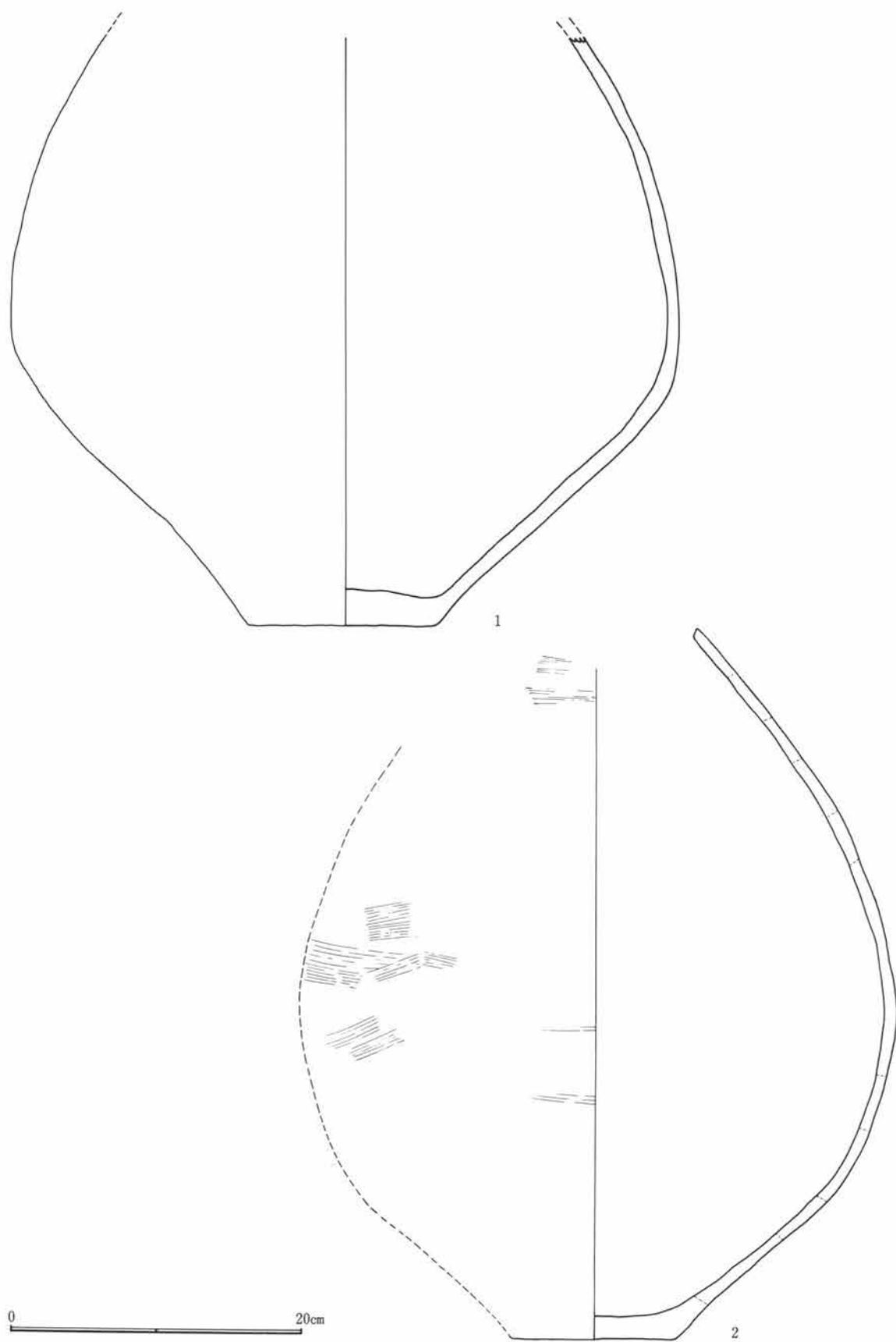
3号棺は長円形の土壙の南縁に大型壺を軸線に東西方向に対し横位置に埋置している。3個体の壺形土器から構成され棺の本体に使われた大型壺は口縁部を打ち欠き、開口部には打ち欠いた壺底部を重ね合わせている。胴部にも切断した大型壺下半部を棺本体の腹部に重ね合わせている。棺本体腹部の蓋が重ね合わせられた部分は土器がもろく変質していたが、縦20cm、横30cm程の三角形の穴が認められた。重ね合わせた蓋（壺下半部個体）はこの穴を覆うためのものと思われる。土器棺内には残存遺体の痕跡や遺物などを検出することはできなかった。土器棺の周囲の土層堆積は、浅間C軽石を含まない黒褐色粘質土中に棺本体部はほぼ埋没し、腹部に重ね合わせた壺下半部個体の方は浅間C軽石混土層中にある。

**出土遺物** 溝内、および土壙周囲の覆土中より弥生後期の土器破片が多数出土している。弥生中期の土器小破片は混入だろう。

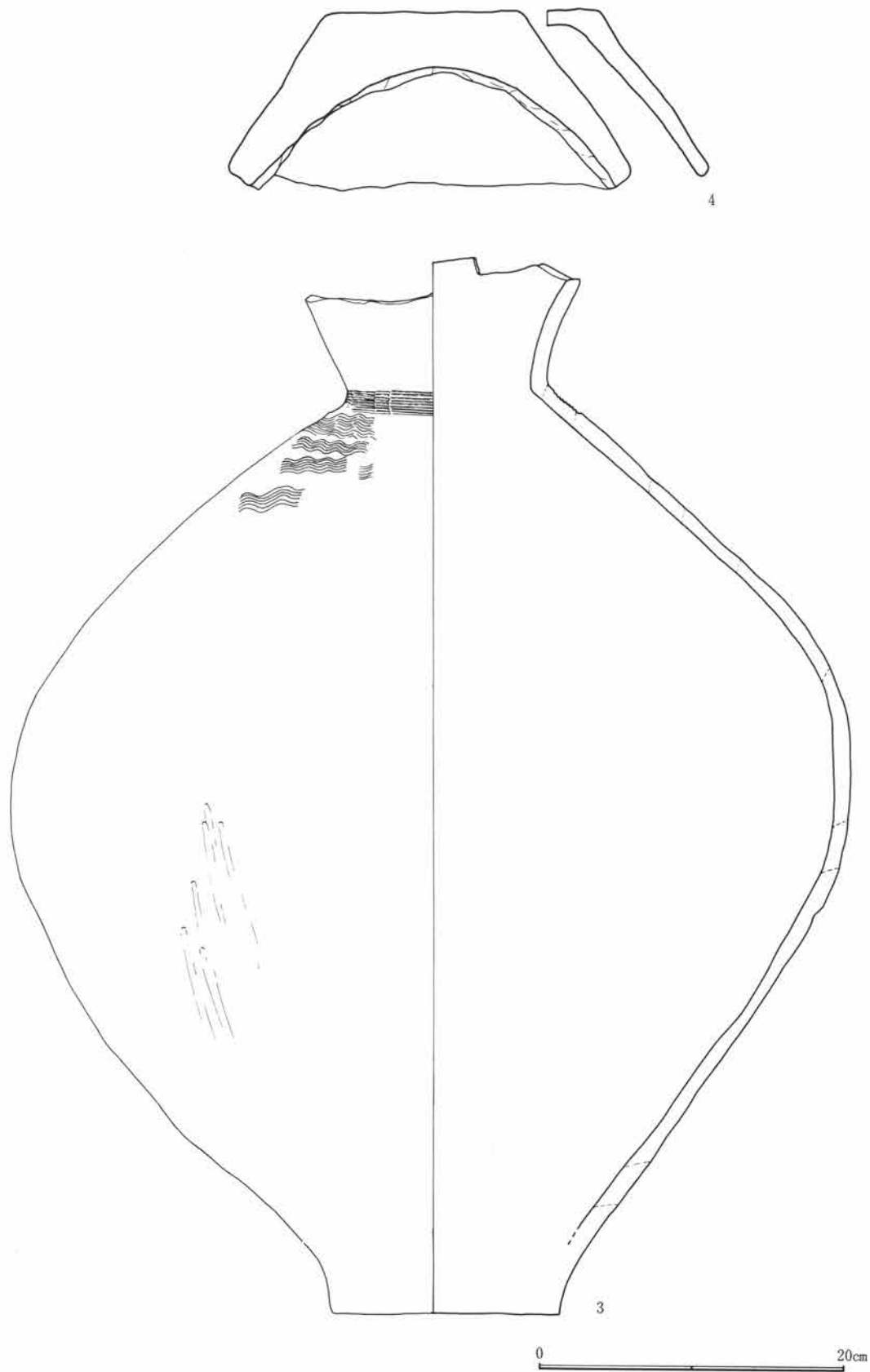
**時期** 弥生後期第2期～第3期

第258表 D5号周溝墓出土土器観察表

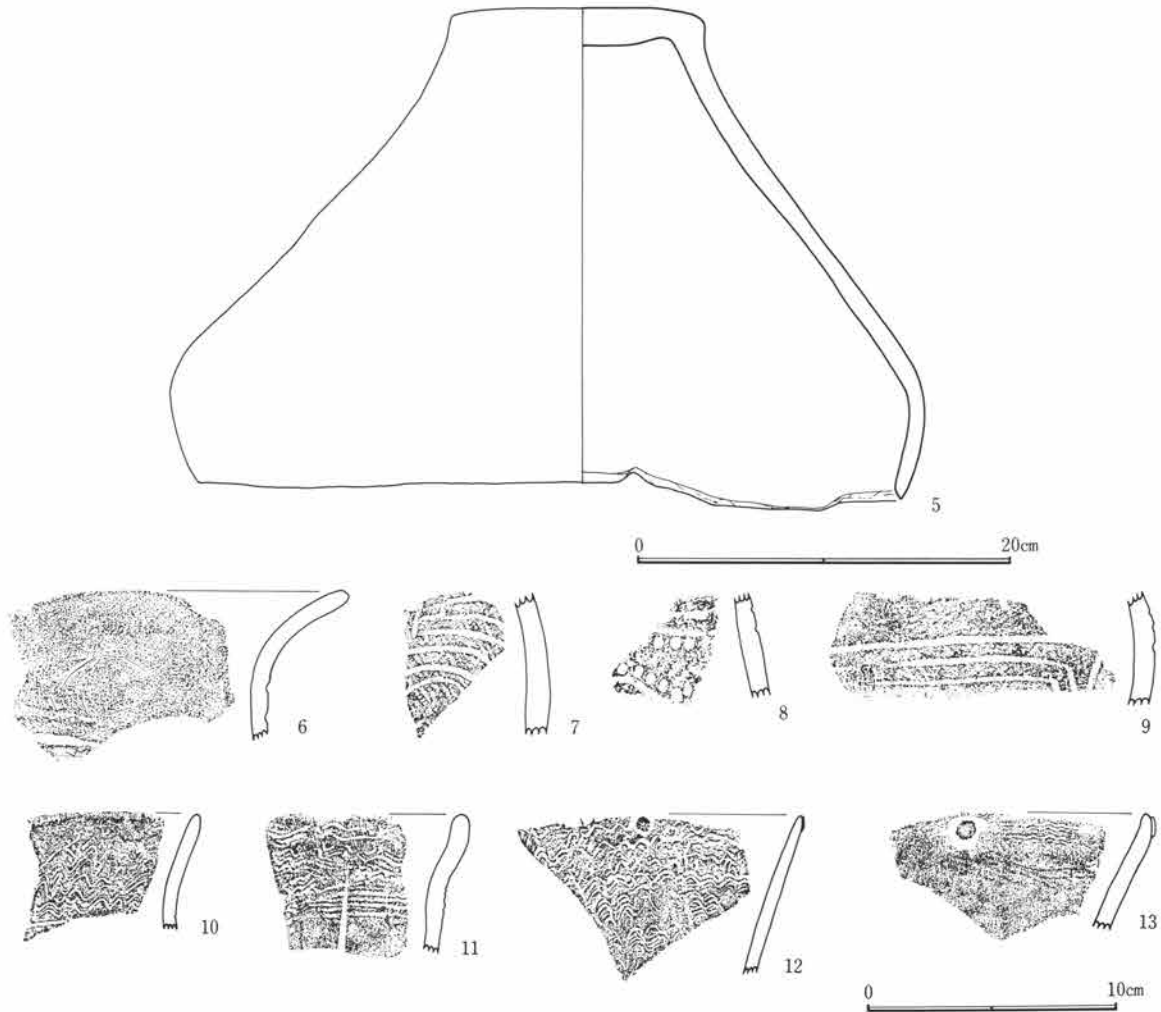
遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1 (2号棺)	壺 (棺)	胴 45.0 底 13.4		外面 器面の荒れ著しい。 内面 器面の荒れ著しい。	中砂粒、黒、白色粒混入 堅緻 橙色	胴～底部1/3周
2 (1号棺)	壺 (棺)	胴 40.1 底 11.4		外面 器面剥落著しいがハケメ痕あり。 内面 器面剥落著しいがヘラナデ痕跡が一部確認。	粗砂粒混入 やや堅緻 淡赤褐色	胴～底部1/3
3 (3号棺)	壺 (棺)	胴 54.8 底 14.8	最大径が胴中位にある。頸部が細い。口辺部を打ち欠いているが打ち欠き面は凹凸が目立つ。打ち欠き面の調整が粗い。	外面 頸部に11本単位2連止め簾状文、肩部は櫛描波状文、器面が著しく荒れている。 内面 器面が著しく荒れている。	細砂粒混入 軟弱 にぶい橙色	埋置されていた状態での上側は風化が著しく、粘土化していた。
4 (3号棺)	壺 (蓋)	胴 26.0	大型壺の胴下部を使用、打ち欠き面の調整は粗い片半部を孤状にえぐり込むように欠いている。	外面 器面は荒れている。一部にヘラミガキ痕を認める。 内面 器面荒れている。	中砂粒混入 堅緻 にぶい赤褐色	埋置された時点より欠損なし。



第309图 D 5号周溝墓壶棺 (1)



第310図 D5号周溝墓壺棺 (2)



第311図 D5号周溝墓壺棺、出土遺物 (3)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
5 (3号棺)	壺 (蓋)	胴 40.2	胴中位が比較的強く屈曲する。胴中位の屈曲部よりやや上を直線状に打ち欠いている。打ち欠き面は“片刃”状に内斜する。調整は丁寧。	外面 張り出し部より上は横方向のヘラミガキを丁寧に施している。胴下部は斜方向のヘラミガキ。屈曲部はケズりに近い横方向のヘラナデが見られる。 内面 器面荒れている。ヘラナデ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	埋置された時点より欠損なし

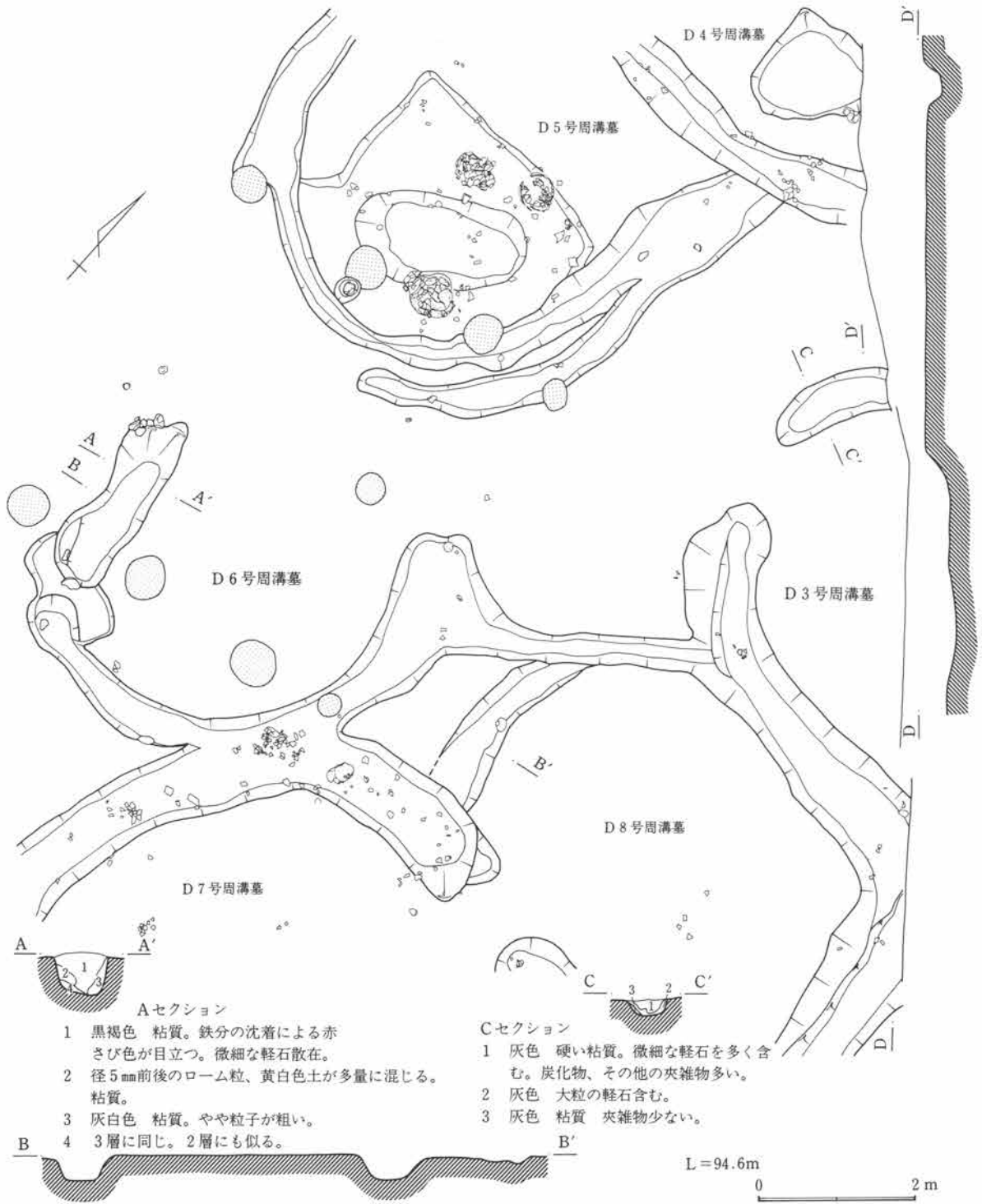
第259表 D5号周溝墓出土土器観察表 (拓本)

6 壺 (d)沈線、砂粒混入、橙色	9 壺 砂粒混入、浅黄橙色	12 甗 内面ヘラミガキ、砂粒混入、淡橙色
7 壺 RL縄文、砂粒混入、にぶい橙色	10 甗 (a)~(c)波状文、(d)簾状文	13 甗 (b)波状文、内面ヨコナデ、砂粒混入、にぶい橙色
8 壺 沈線、竹管刺突、橙色	11 甗 (b)~(c)波状文、等間隔止め簾状文、内面ヘラナデ、砂粒混入、にぶい橙色	

## D6号周溝墓 (第312図、図版93)

位置 D地区東部周溝墓群中に位置する。D5号、D7号周溝墓に隣接する。

形状、規模 周溝は東南半部が弧状に巡り、北はD5号周溝墓南溝に画されるが西側と東側は広く開口し



第312図 D3号、D6号周溝墓

ている。西部は直線状の短い溝が配されている。D6号、D7号周溝墓の西は北西—東南方向に幅広く溝状に攪乱を受けており、D11号周溝墓との間については不明確であるが、この直状の溝は西に隣接する周溝墓と共有する溝かとも思われる。規模は東西4.8m、溝幅は南側50cm、東側80cm、西側60cm。

**土層堆積の状況** 台状部では、浅間C軽石混土層下は第IVb層にあたる黒褐色粘質土が10~15cmの厚さで見られる。客土、封土などについては把握できなかった。溝覆土は最上層は浅間C軽石混土層のレンズ状の



堆積が見られる。

**主体部** 土壙、土器棺など検出することはできなかった。

**出土遺物** 遺物は少ない。溝内より弥生土器破片が出土している。

**時期** 弥生後期

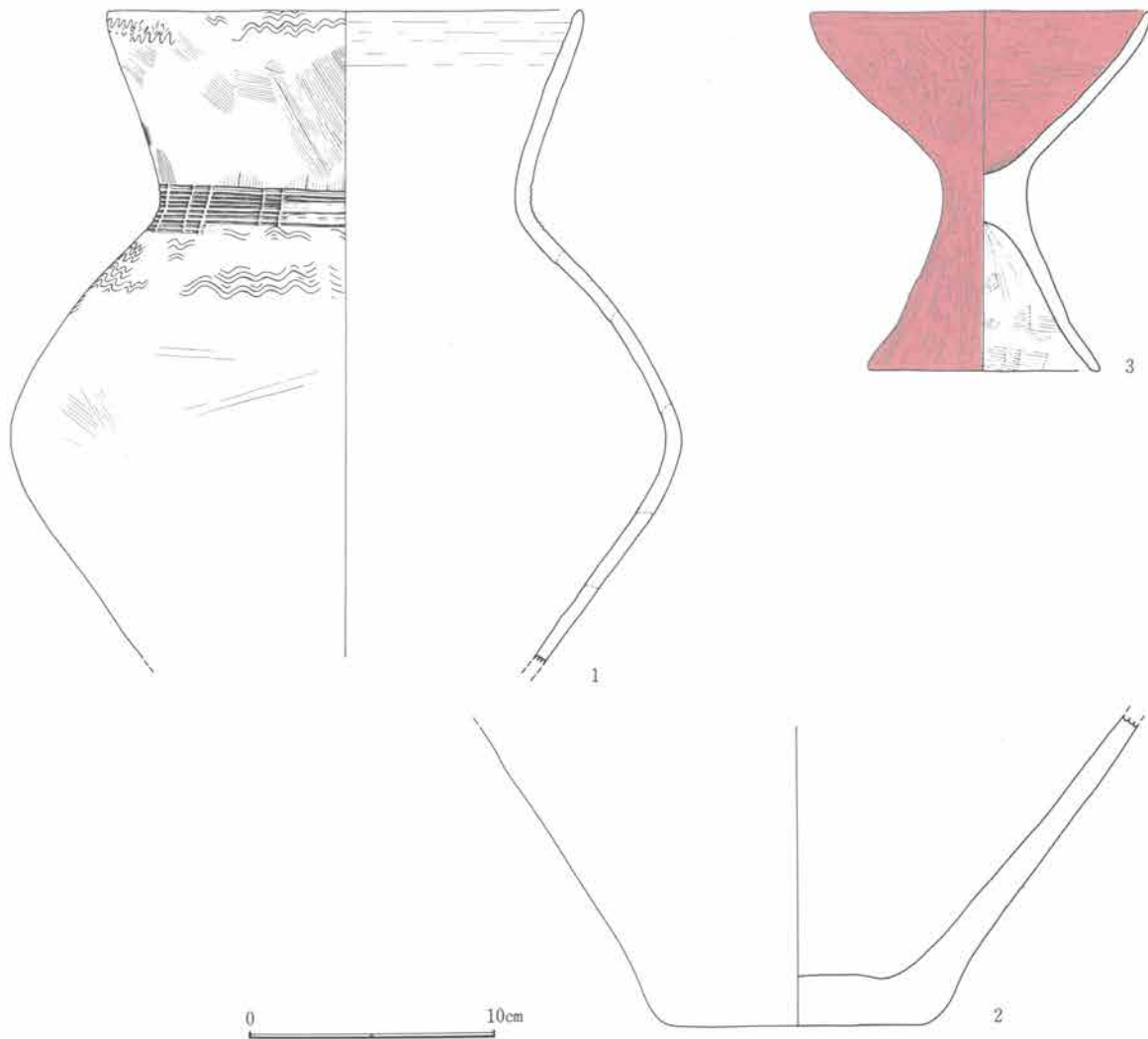
**D 7号周溝墓** (第314図、図版94)

**位置** D地区東部周溝墓群中に位置する。D 6号、D 8号周溝墓に隣接する。

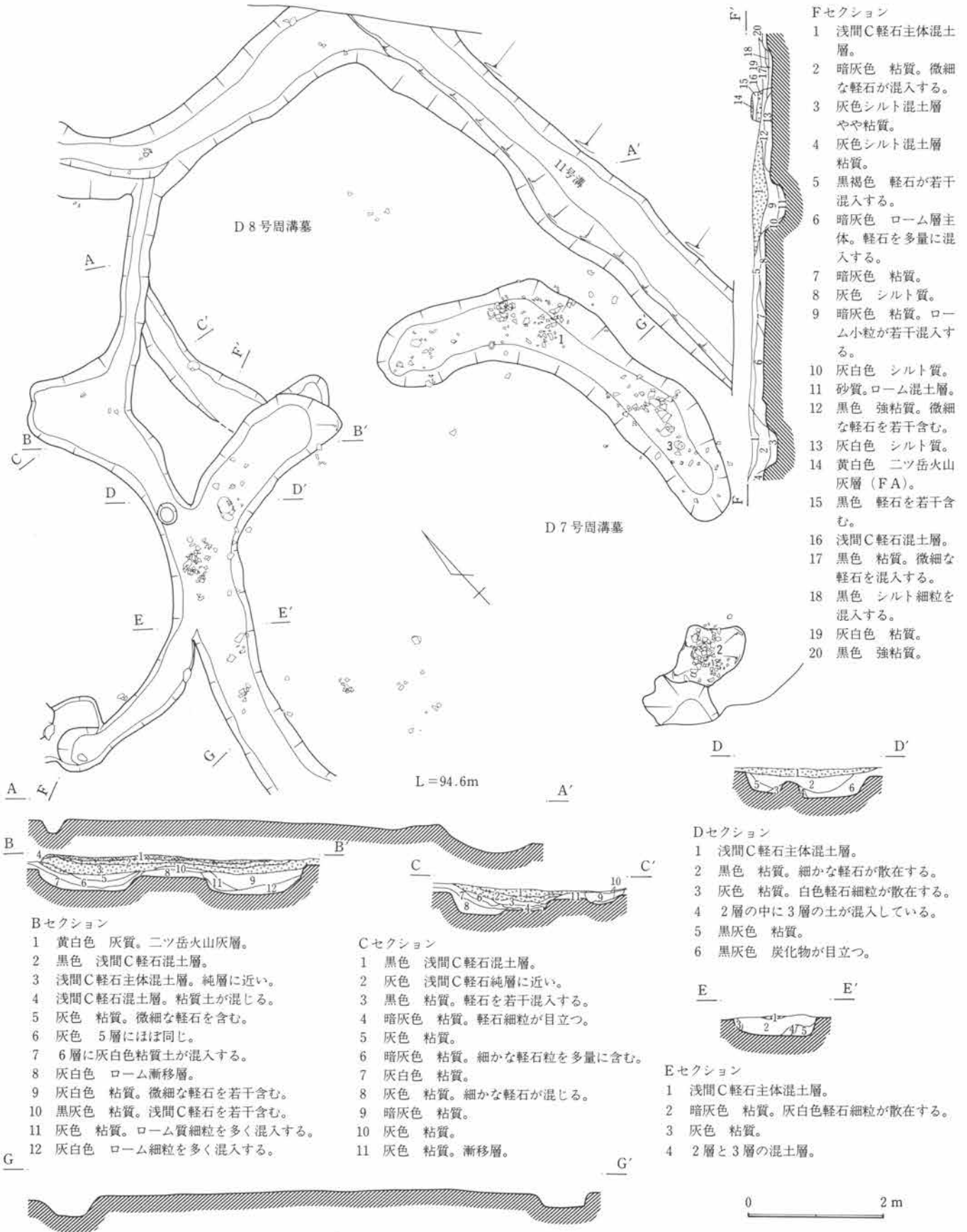
**形状、規模** 南側周溝は攪乱により検出することができない。北側、東南側で開口する。北側開口部は開口幅は90cm。東南開口部以南の周溝の状態は攪乱により、明確ではない。規模は東西8.4m。溝幅は東溝1.2m、西溝90cm。

**主体部** 台状部において土壙、土器棺など確認することはできなかった。

**土層堆積の状況** 台状部は灰白色粘質ロームを主体とする漸移層あるいは混土層、暗灰色粘質土の堆積がローム基盤層と浅間C軽石混土層との間15cmに認められる。客土、封土については明確に把握できない。周



第313図 D 7号周溝墓出土遺物 (1)

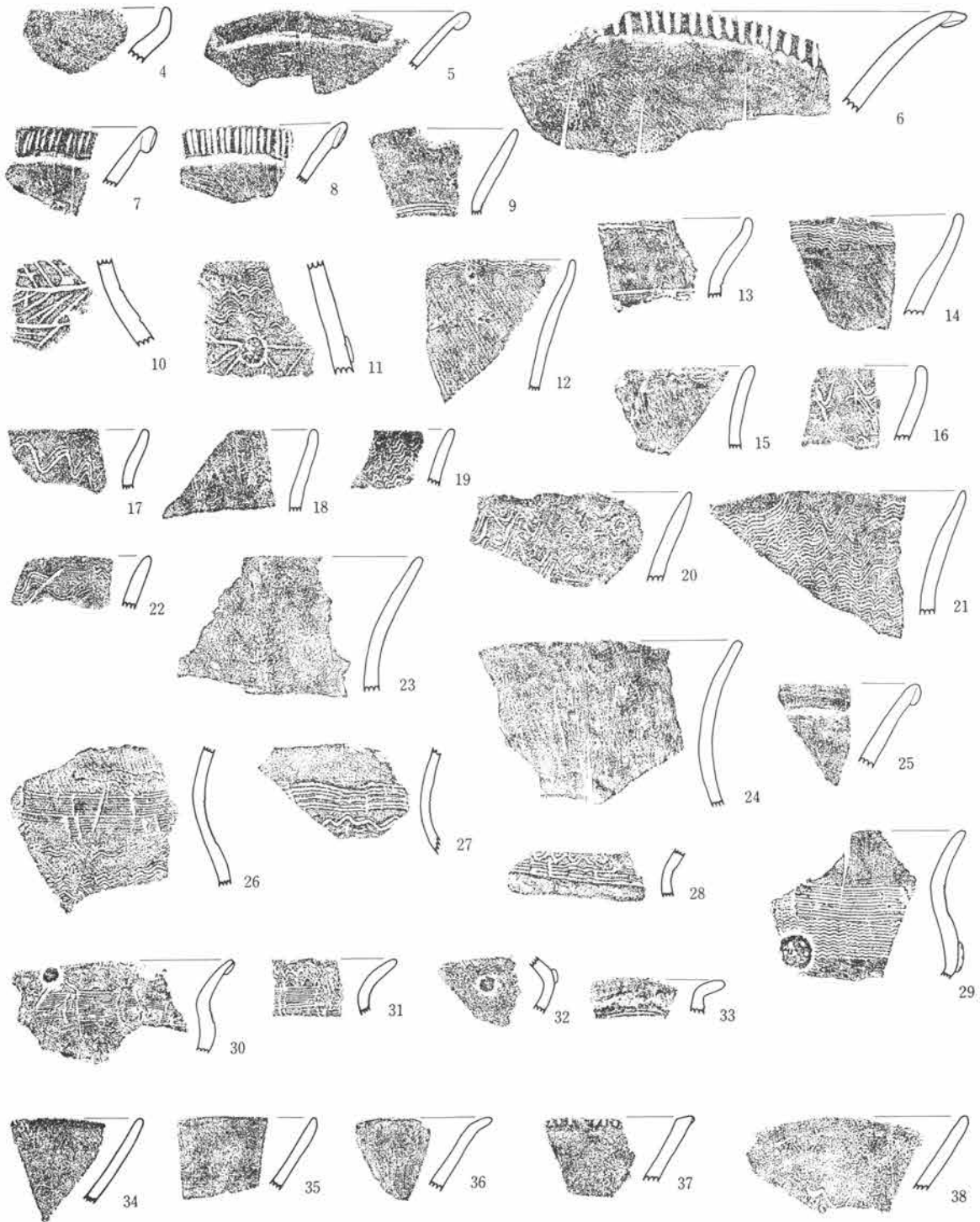


第314図 D7号、D8号周溝墓

溝覆土は上部に浅間C軽石混土層のレンズ状堆積が見られる。

**出土遺物** 台状部、周溝内より弥生土器破片が出土する。特に周溝内より底部以下を欠損する甕（台付甕か）、欠損がわずかな高坏のほか、多量の土器破片が主に周溝覆土上半部から出土している。土器破片の壺、甕、高坏、小型台付甕など器種構成は多様。時期は弥生後期で時期幅があるが、第2期以後が主体。

**時期** 弥生後期第1期～第3期



第315図 D7号周溝墓出土遺物 (2)

第260表 D7号周溝墓出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕 (台付?)	口 19.8 胴 27.2	口辺部直状に外反する。	外面 口縁部は波状文、口辺部はハケメ、頸部は10本単位2連止め一簾状文、胴上部は波状文、胴部はハケメ後ヘラミガキ。 内面 口縁部はヨコナデ。	細砂粒混入 堅緻 褐色	胴下部～底部欠損
2	壺	底 10.4		外面 器面の剥落著しい。 内面 器面の剥落著しい。	粗砂粒混入 やや堅緻 にふい橙色	底部のみ
3	高 坏	口 13.8 脚 9.4 高 14.5	口縁やや内湾する。	外面 口縁部はヨコナデ、口辺部はハケメ後ヘラミガキ、脚部はヘラミガキ。 内面 口辺部はヨコナデ、ヘラミガキ、脚部はヘラナデ、ハケメ。	細砂粒混入 堅緻 赤褐色	完形 外面及び、脚部 内面除き丹彩

第261表 D7号周溝墓出土土器観察表(拓本)

4 壺 細砂粒混入、にふい橙色	16 甕 内外面(b)ヨコナデ、砂粒混入、にふい橙色	29 台付甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、灰褐色
5 壺 砂粒混入、にふい赤褐色	17 甕 砂粒混入、にふい橙色	30 台付甕 外面(b)波状文、内面ヘラミガキ、砂粒混入、灰褐色
6 壺 内外面ヘラミガキ、砂粒混入、橙色	18 甕 ハケメ、砂粒混入、褐色	31 台付甕 (b)～(c)波状文、(d)2連止め簾状文2段、内面ヘラミガキ、砂粒混入
7 壺 砂粒混入、橙色	19 甕 砂粒混入、にふい褐色	32 台付甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、灰赤色
8 壺 砂粒混入、にふい橙色	20 甕 波状文、砂粒混入、にふい橙色	33 台付甕 内面ヨコナデ、砂粒混入、灰褐色
9 壺 砂粒混入、にふい橙色	21 甕 砂粒混入、にふい橙色	34 高坏 ヘラミガキ、砂粒混入、内外面丹彩
10 壺 (d)～(e)ヘラ沈線羽状文、砂粒混入、橙色	22 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、にふい橙色	35 高坏 砂粒混入、内外面丹彩
11 壺 (b)～(c)波状文、鋸歯文、微砂粒混入、にふい橙色	23 甕 内外面ヘラミガキ、灰白色	36 高坏 砂粒混入、にふい橙色、外面丹彩
12 甕 3～4mm小石混入、灰褐色	24 甕 ヘラミガキ、砂粒混入、にふい赤褐色	37 高坏(a)刻み目、砂粒混入、内外面丹彩
13 甕 (b)波状文、砂粒混入	25 甕 (c)ハケメ、砂粒混入、橙色	38 鉢 砂粒混入、褐灰色
14 甕 砂粒混入、にふい褐色	26 甕 細砂粒混入、にふい赤褐色	
15 甕 (b)波状文、(c)ハケメ、砂粒混入、灰褐色	27 甕 砂粒混入、にふい橙色	
	28 甕 等間隔止め簾状文、砂粒混入、橙色	

## D8号周溝墓 (第314図、図版95)

位置 D地区東部に位置する。D4号、D7号周溝墓の間にある。

形状、規模 東は11号溝により、北はD3号周溝墓、南はD7号周溝墓の周溝により区画されている。西部のみD8号周溝墓構築にともない造られ、かつ占有する周溝が見られる。11号溝とD7号溝の間、およびD7号周溝墓との間が開口している。規模は東西6.5m、(内法)5.3m。

主体部 不明。土壌、土器棺などを確認することはできなかった。

出土遺物 土器小破片を僅かに出土する。

時期 弥生後期

## D11号周溝墓 (第316図、図版95)

位置 D区周溝墓群に位置する。北側道部の墓群との間に攪乱があって遺構相互の関係が不明瞭な箇所もあった。すなわちD2号周溝墓、D6号周溝墓と本周溝墓は近接しているものの、これらの切り合い関係、又は近接する位置の状況は不明である。

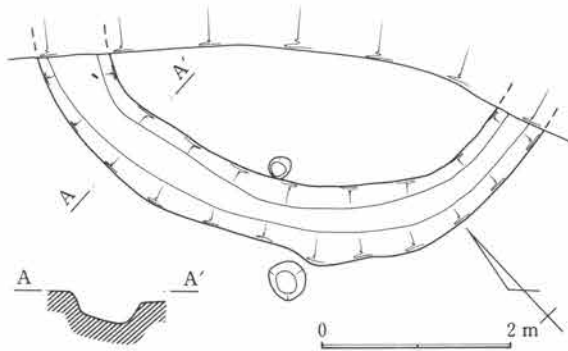
**形状、規模** 調査範囲は遺構全体の1/3にあたると考えられる。形状は円形を呈する溝が圍繞すると考えられ、周溝外側径は推定6.2m、内側径は4.8m、溝の幅は約70cm、深さは15cmを測る。溝の断面形は円形の内側寄りに深い変形した逆台形を呈する。

**主体部** 発掘範囲内は検出していない。

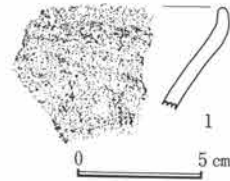
**出土遺物** 中型の壺形土器の口縁部破片 1 片のみであった。後期第 1 期の加飾されない粗製に近い土器で表裏面には縦横方向のハケメを残す。

**他の遺構との関係** D 2 号周溝墓と D 6 号周溝墓と本周溝墓とは等距離に近接しているが、先後関係不明。

**時期** 弥生後期



第316図 D11号周溝墓



第317図 D11号周溝墓出土遺物

第262表 D11号周溝墓出土土器  
観察表 (拓本)

1 壺 粗砂粒混入、にぶい黄橙色

#### D12号周溝墓 (第318図、図版95、96)

**位置** D区周溝墓群の西の端に位置する。本周溝墓より西側は徐々に地形が低く傾斜してゆく。南側周溝墓の溝より南に16mの距離に13号周溝墓の北辺の溝が位置する。

**形状、規模** 検出された 3 本の溝から成る方形周溝墓である。主軸は北から西へ $12^{\circ}$ ほど振れる。東西6.9m、南北6.8mを測る。東の溝は長さ3.4m、幅100cm、深さ25cmを測り、平面形はややねじれているように見える。西辺、北辺の溝は「L」字状に連結している。西辺の溝は長さ6m、幅1m、深さ5~10cmを測る。北辺の溝は長さ4.7m、幅70cm、深さ30cmを測る。南の溝は長さ4m、幅60cm、深さ10~15cmを測り、溝の中央部はくびれている。

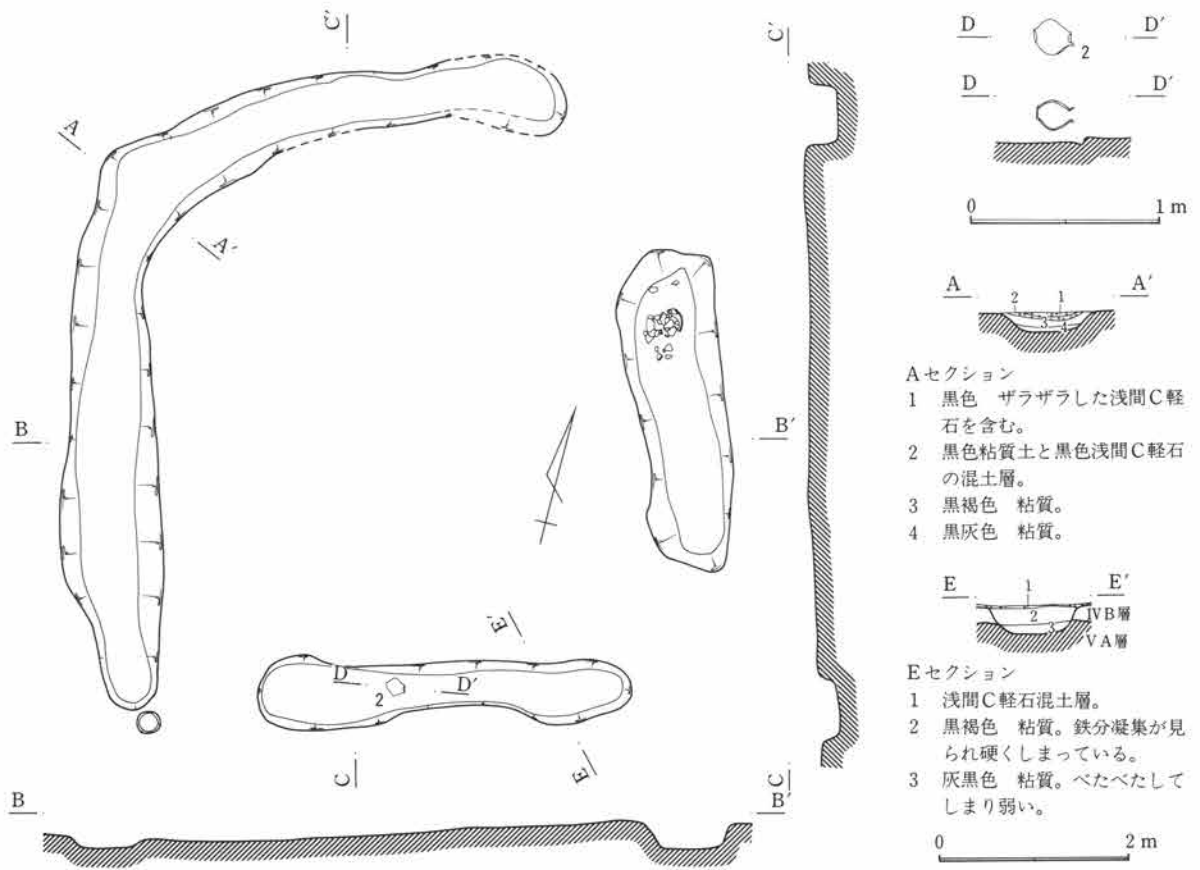
**土層堆積の状況** 土層の観察は溝覆土の部分に限られる。四方の溝の断面形は底面が比較的平坦で、逆台形状を呈する。北西隅の溝の土層堆積は4層に分層され、上層から黒色、黒褐色、黒灰色を呈し上層はやや砂質、下層は粘性が強くなる。上の2層には浅間C軽石層を混土している。南辺の溝の土層堆積は3層に分層される。上層から黒色、黒褐色、灰黒色の色調を呈し、いずれも粘質である。

**主体部** 発掘調査では検出できなかった。

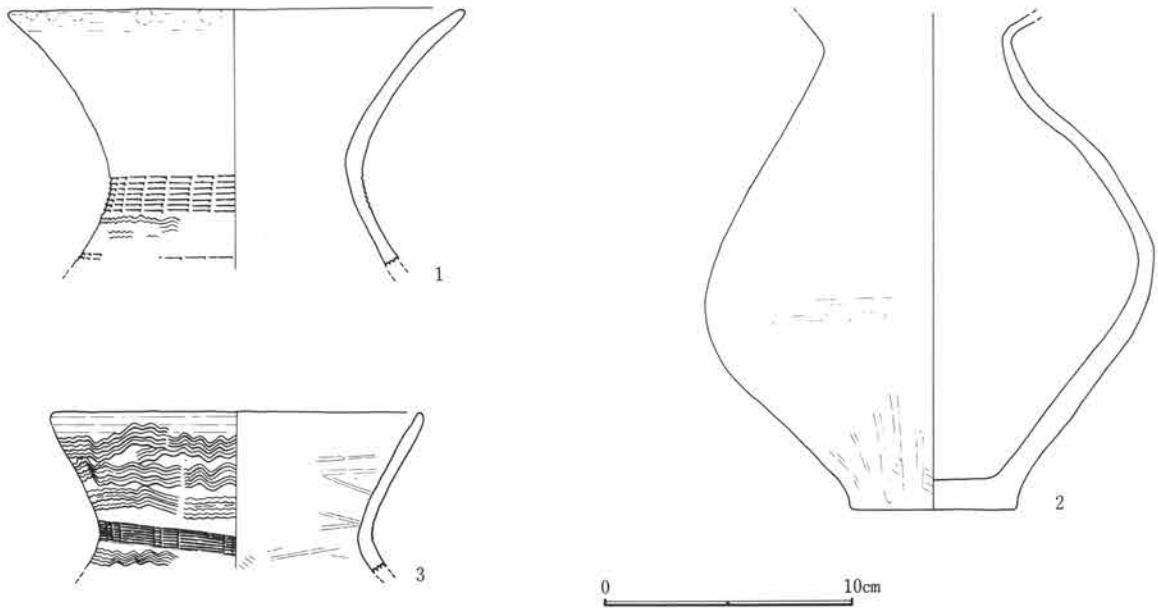
**出土遺物** 周溝内より 3 点の土器が出土した。No. 1、No. 3 は東辺溝の低部に接して出土している。No. 2 は南辺溝の低部より10cmほど浮いた地点に横転し出土している。出土土器は時期幅が大きい。

**他の遺構との関係** 本周溝墓の北東2mの距離に11号周溝墓が近接している。

**時期** 弥生後期第1期~第3期



第318図 D12号周溝墓



第319図 D12号周溝墓出土遺物

第263表 D12号周溝墓出土土器観察表

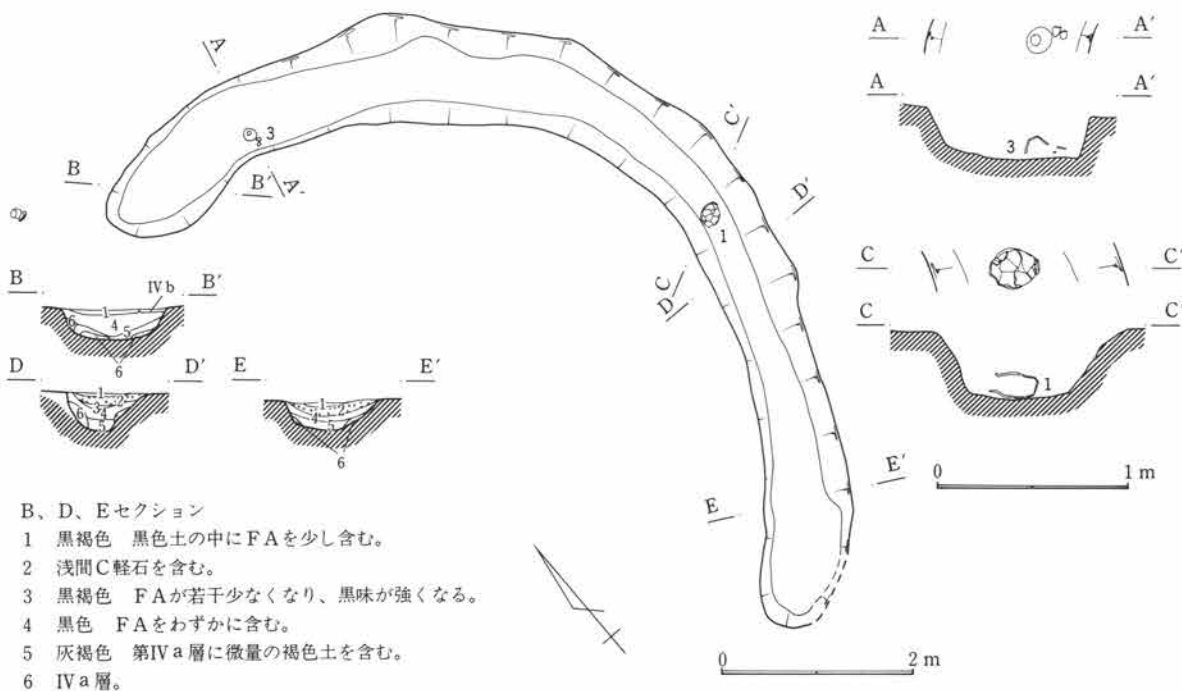
遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 18.4	口辺部外反する。	外面 口縁部に指頭痕、頸部は等間隔止め・簾状文、胴上部は波状文、等間隔止め・簾状文。 内面 器面剥落著しい。	細砂粒、黒色粒混入 やや堅緻 灰白色	口縁～頸部ほぼ全周
2	壺	底 6.8		外面 器面剥落著しい。ナデ。 内面 器面剥落著しい。	細砂粒混入 やや堅緻 灰白色	口辺部欠損 胴部 $\frac{1}{2}$ 周
3	甕	口 15.0	口辺部ほぼ直状に外反する。	外面 口縁部はヨコナデ、口辺部は6本単位の波状文3段、頸部は7本単位の3連止め・簾状文、胴上部は波状文。 内面 ヘラミガキ、胴上部はハケメ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周

D13号周溝墓 (第320図、図版96)

**位置** D区周溝墓群の南寄りに位置する。南側の周溝より2m南側は発掘区域外となっている。北側の周溝より北へ5mの位置に東北東から西南西にかけて走る小規模な6号溝が横切り、この溝より更に11mの位置に12号周溝墓の南辺がある。

**形状、規模** 楕円形に近い円形周溝墓の東側半分が検出された。規模を復元するならば、外径8.5m、内径6.8m、溝の幅80cm、深さ20～40cmを測る。

**土層堆積の状況** 溝覆土のみの土層を調査した。円弧の北、南端近く、東側の溝中央部の3箇所である。土層は6層に分層され、上層より大まかに黒色、黒褐色、灰褐色と変化してゆく。上層は砂質、下層は粘性が強くなる。



第320図 D13号周溝墓

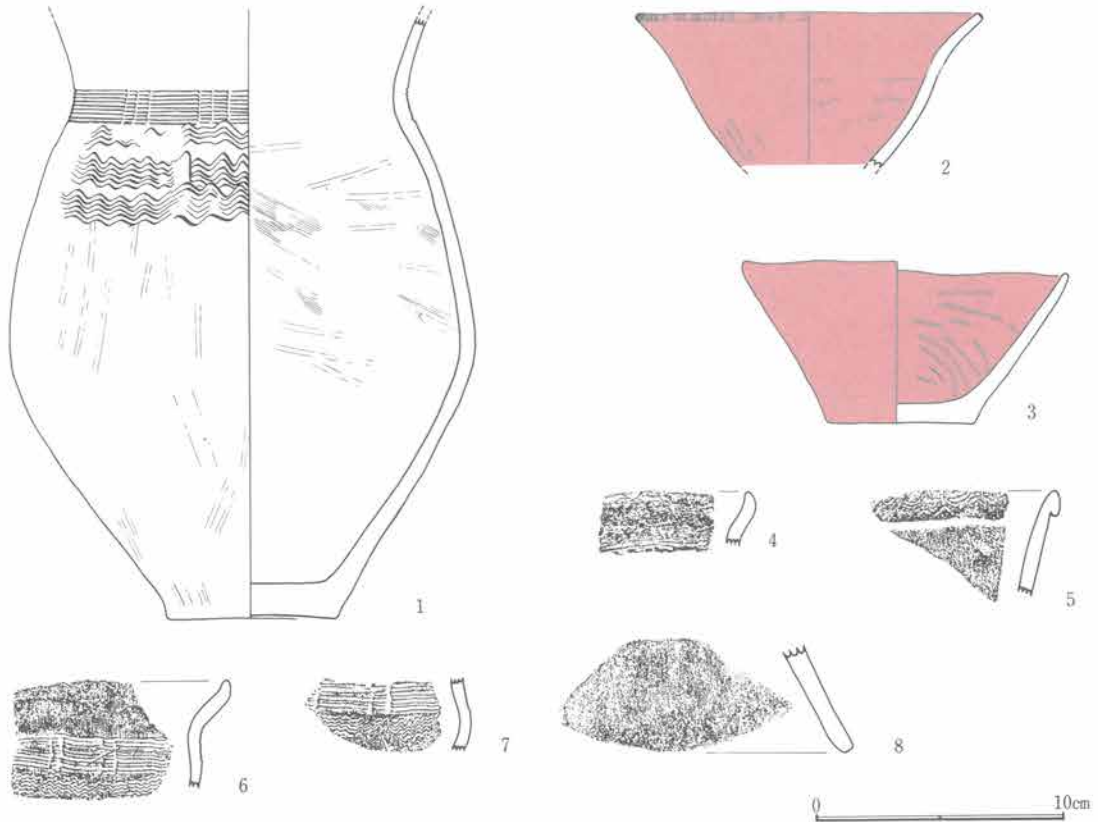
6 検出した遺構、遺物

主体部 検出することができなかった。

出土遺物 溝北寄りから土器No.3が底面より浮いて伏せた状態で、また東側の溝中央より土器No.1が底面に接して横転して出土している。その他、高坏の坏部1点、破片5片が出土している。

他の遺構との関係 本周溝墓は発掘区内の所見だけからは南北に走る周溝墓群のC区とD区の間位置しているように考えられる。

時期 弥生後期第2期



第321図 D13号周溝墓出土遺物

第264表 D13号周溝墓出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	胴 18.7 底 7.0		外面 頸部8本単位3連止一簾状文、胴上部は波状文、胴～底部はヘラミガキ。 内面 胴部はハケメ後ヘラミガキ。	中砂粒混入 やや堅緻 にふい黄橙色	頸～底部 $\frac{1}{2}$ 周
2	高坏	口 13.8	口辺部弱く内湾し口縁部は弱く外反する。	外面 口縁端部は刻み目、口辺部はヘラミガキ。 内面 口辺部はヘラミガキ。	細砂粒混入 やや堅緻 にふい黄橙色	坏部 $\frac{1}{2}$ 周 内外面共に丹彩
3	鉢	口 12.8 底 5.9 高 6.3	口辺部ほぼ直状に外反する。	外面 ヘラナデ後ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 赤褐色	完形 内外面共に丹彩

第265表 13号周溝墓出土土器観察表 (拓本)

4 甕 微砂粒混入、暗赤灰色	6 台付甕 (b)波状文、内面(b)ヨコナデ、微砂粒混入、暗赤灰色	7 台付甕 微砂粒混入、暗赤灰色
5 甕 (b)波状文、砂粒混入、にふい橙色		8 高坏 砂粒混入、外面丹彩



## (7) 溝

## 1) A、B地区溝、畦状遺構

A、B地区は、C地区自然堤防微高地の後背地にあたる。A、B地区において浅間C軽石層下、あるいは同軽石の降下に前後する時期の水田に関わる施設と思われる溝や畦状遺構を多数検出している。検出した溝群は、時期的、配置関係や時期の違いにより下記のようなグループ分けを行うことができる。時期に関係する現れとしては覆土中の遺物、浅間C軽石層との関係などがあるが、溝が水路として使用されていたことにより溝内の出土遺物は極めて少ない。それゆえ、溝の時期認定は古墳初頭に降下した浅間C軽石層と溝覆土との関係の把握によるところが大きい。浅間C軽石層と溝覆土の関わり方は以下のようである。

- ① 覆土最上部に浅間C軽石層が堆積する。
- ② 覆土中位部に浅間C軽石層、覆土下部には軽石を含まない。
- ③ 覆土全体が浅間C軽石と砂の混土層で、いずれかが主体的である。

以上のように大きく3つのタイプが見られる。この現れ方から、溝の時期についての次のような目安を得ることができる。

- ①の場合は軽石降下時には溝はほぼ埋没し、その機能を失っていた。
- ②の場合は溝が、水路としての機能を有していた時点で軽石により埋もれ、その機能を失い、廃絶した。あるいは、すでに溝は廃絶しているが埋没があまり進んでいない時点でC軽石の降下があった。
- ③の場合、溝は軽石降下後も水流があった。これは溝に水流があり降下軽石が流れて、溝が軽石に埋没しなかったか、あるいは軽石降下後改修又は新規に造られる等、いくつかの場合が考えられる。いずれであったかの判断は難しい。

A、B地区の溝の配置関係は溝の方向、位置関係、時期によりA溝群～D溝群の4つのグループに分けることができる。

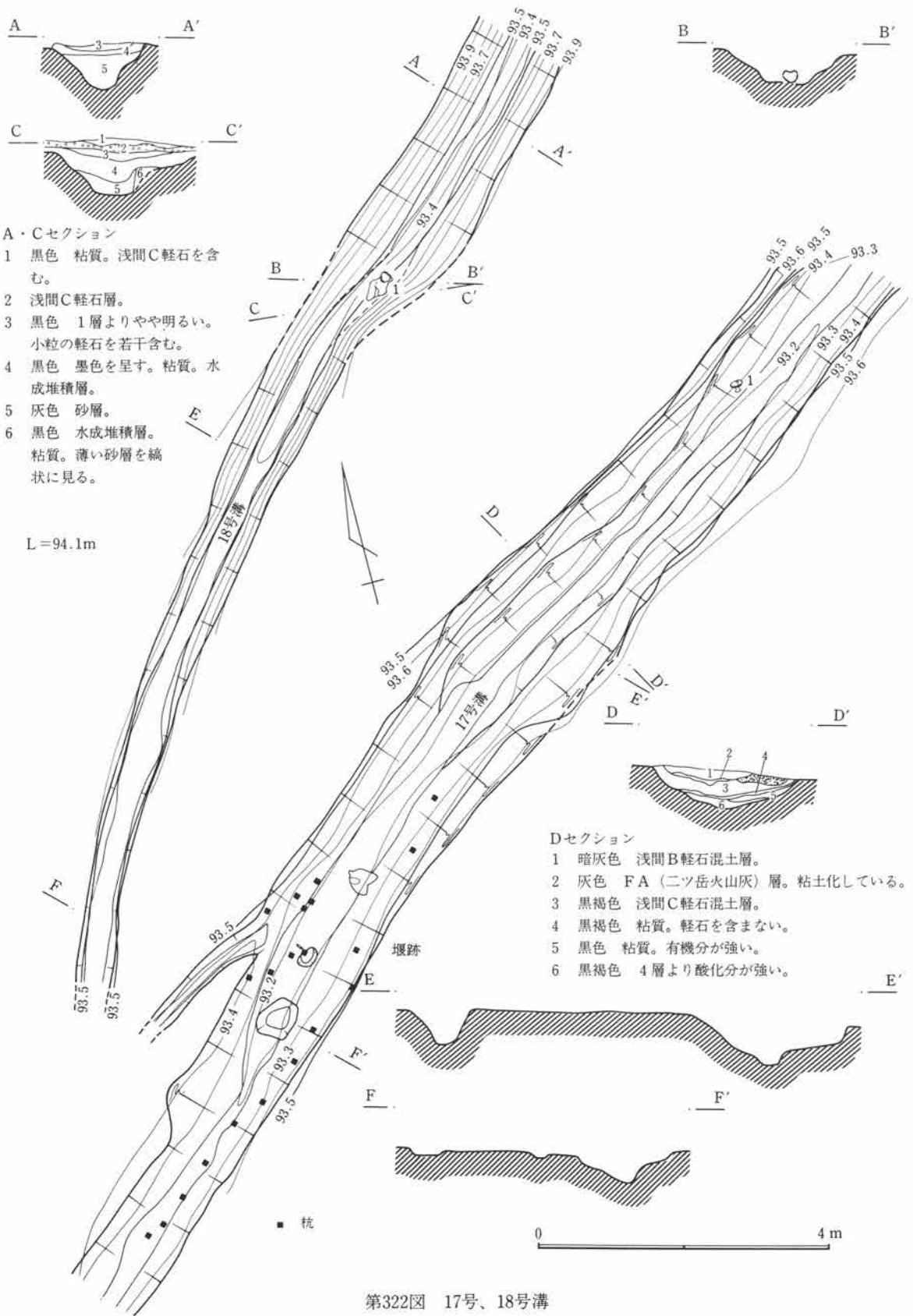
A溝群、最南部のグループで17号、18号、20号、21号、31号～33号、36号、90号～92号、94号、108号、135号、136号等の各溝からなる。これ等の溝の覆土は上記①の現れ方をしていることや、溝内より弥生後期の土器の出土が目立つことから、弥生後期に属する溝群であると思われる。

B溝群はB地区東南部よりA地区にかけて北から南へ直状に走る溝群である。101号～104号、106号～107号、109号の各溝が本溝群に属する。北部は近・現代の濠に切られており、以北は不明である。南は微高地帯を東西に迂回する。南方向に流下しA地区南西部県道カルパートボックス工事区では遺構確認面が深かったため全体に検出状態が不良であり、この区域の遺構検出の状況は明確さを欠く。17号、18号溝の規模についても、この関係で西半部の幅が縮小して見られる。B溝群の覆土は上記②、③のタイプであり、浅間C軽石の降下に前後する時期、古墳前期の溝群と考えられる。

C溝群はB地区を貫く比較的規模の大きな溝からなるもので、最南部から77号、97号、99号、100号、141号溝などがある。覆土は下部に砂を含む層が認められ、水流があったことが窺える。覆土中位には浅間C軽石層がレンズ状に堆積しており、上記②タイプの堆積状態が見られる。この溝群は、微高地縁辺部の弥生周溝墓群との重複、又は、共存を窺わせる配置が見られることから、この溝群の時期は浅間C軽石層の堆積状態、及び出土遺物から弥生後期後半を中心とし浅間C軽石層の降下時点では既に廃絶していたと考えられる。

A溝群

17号溝 (第322図、図版97、98)

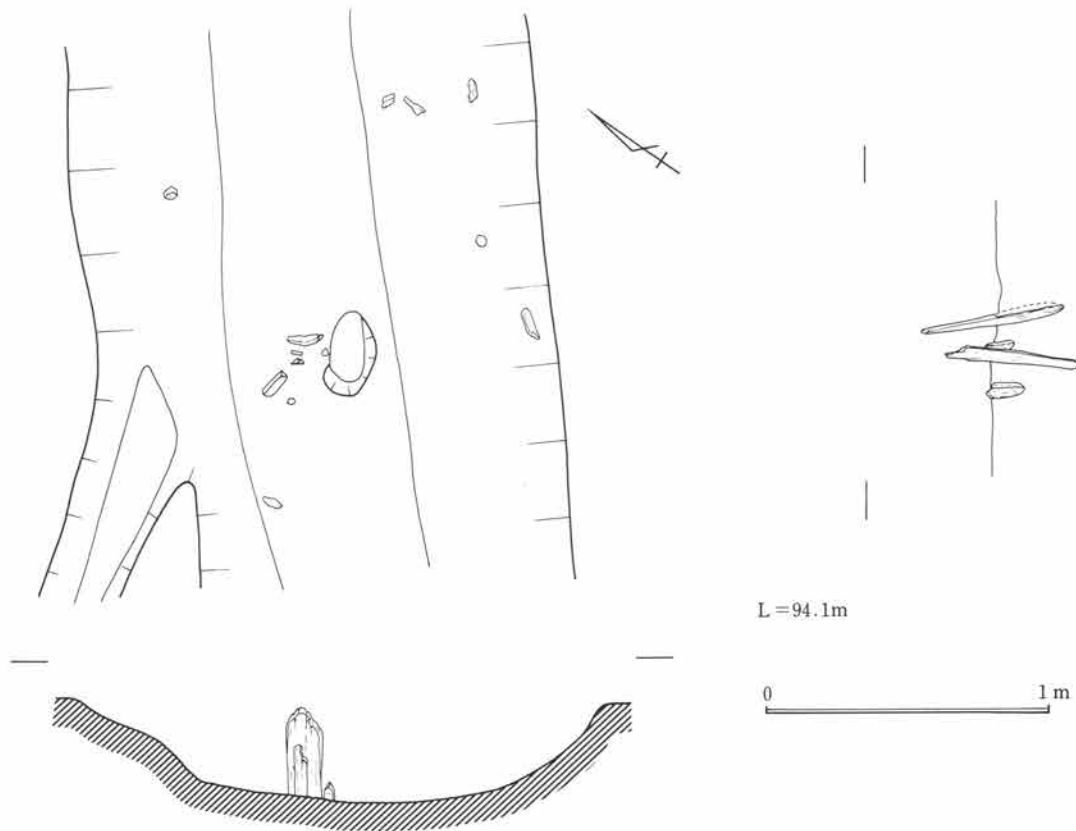


第322図 17号、18号溝

A地区東南部に位置する。北東-東南に調査区を直線状に貫く大規模な幹線水路を思わせる溝である。北東が上流方向であり南端部は90号、91号、92号、94号、135号溝など数条の溝が扇状に分岐する地点に接続する。規模は最大幅で2 m、深さは99cmである。検出面は黒色土中であり明確さを欠くが、幅は全体的に2 m前後であろう。溝の覆土は逆アーチ状で自然堆積状態を示す。下部に砂層の堆積を見る。覆土は浅間C軽石層の風成一次堆積層が中央部にレンズ状に堆積している。覆土下部には浅間C軽石の混入が見られないことから、C軽石の降下時には既に30cm程の浅い溝状の窪みになっていたと思われる。浅間C軽石層の上位層は黒色粘質土であり、堆積過程で水の流れが通常あった痕跡はない。溝の断面形状については、立ち上がり角度は比較的緩い。調査区の南半部では溝の両側に杭列を検出する。検出した杭は29本。20~60cm間隔に両側1列に若干の出入りをもって並んでいる。杭の遺存状態は悪く、打ち込まれた土中の最下部分が残存するのみである。杭の太さは径3~5 cmで4分の1分割材が大方を占めていた。

調査区中央部(50-A20)、南端部(60-A20付近)の2箇所でも溝の分岐が認められる。中央分岐部では堰跡と思われる施設の一部が遺存している。分岐部周囲には特に多数の杭が見られる。この部分では溝の中央に矢板杭、角棒状の杭が溝底に深く打ち込まれていた。矢板状の杭は溝中央部に2本、10cm間隔でそれぞれ面を向き合わせた状態で立て並べられていた。遺存状態は共に良好で南側(下手)のものは高さ30cm、地中へ15cm程打ち込んでおり、上手のものは25cm、地中へ30cm程埋めており、この2本の杭の周囲には杭列が集中しているが、特に本溝から分岐する小溝(取水口)にかけては杭列が2列並行して見られる。

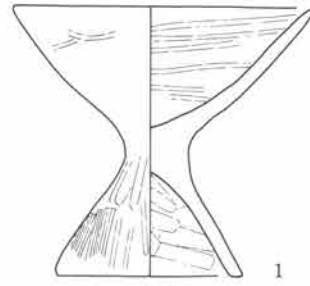
堰跡から分岐して南へ伸びている小溝は浅く黒色土中に造られているため分岐点より2 mの辺りまで検出することができたがこれより以西は明確さを欠いている。この延長線上に32号溝が見られるが、これが分岐



第323図 17号溝堰跡

6 検出した遺構、遺物

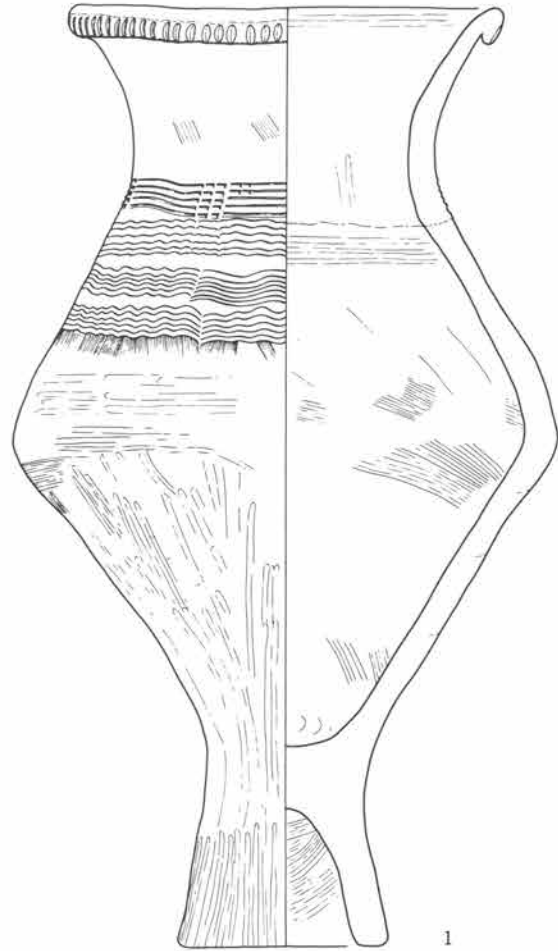
する小溝につながるのではないかとと思われる。17号溝の堰跡と思われる矢板杭の下手、中央部溝底には径60cm、深さ15cm程に掘り込まれた窪みが見られる。この窪みの底面は鋭利な掘削具で掘り込んだ痕跡が見られた。掘削具の形状は先端がやや丸みを持ち先部の厚さは1cm以下、幅15cm前後である。出土遺物は完形高坏の他弥生後期後葉の土器小破片が20~30片出土している。溝の時期は弥生後期。



17号溝

18号溝 (第322図、図版99)

A地区東南部に位置する。17号溝の西北側傍らに17号溝に沿ってやや弓状を呈しながら並走している。北東部方向は調査区域外へ抜け、西南方向は17号溝の堰跡と思われる分岐部付近で不明瞭になる。黒褐色土(第IVb層)中に造られローム層まで達していないためそれ以南では明確に検出できない。規模は幅81cm、深さ70cm。



18号溝



溝の断面形状は底の丸いV字状で隣接する17号溝に比べると両側の壁の立ち上がり角度が急である。覆土は硬くしまった黒褐色強粘質土で下半部は有機質分が強く、砂などを含まない。17号溝の場合と異なり、砂層など水の流れた痕跡は認められない。覆土最上層には浅間C軽石混土層の堆積が認められることからC軽石の降下時には溝は殆ど埋没しきっていたと思われる。出土遺物は溝中位部より脚台付きの壺形土器が口縁部を部分的に欠損するがほぼ完形で横位に倒れた状態で出土した。その他2連止め簾状文の甕、ミニチュア土器の小破片が出土しているが、出土量は少ない。時期は弥生後期第3期。

第324図 17号、18号溝出土遺物

第266表 17、18号溝出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
17溝 1	高坏	口 12.1 脚 7.5 高 10.7	坏部はやや内湾する。脚部はやや中膨らみの八の字状を呈す。	外面 坏部はヘラミガキ、脚部はハケメ後ヘラミガキ。 内面 坏部はヘラミガキ、脚上部は指ナデ、下部はヘラケズリ。	砂粒混入 堅緻 にぶい黄橙色	%周 器面は荒れている

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
18溝 1	壺	口 17.0 胴 21.8 底 8.5 高 37.0	折り返し口縁、口辺部は緩やかに外反する。	外面 口縁部は刻み目、口辺部はハケメ後ヘラミガキ、頸部は3連止め一簾状文、胴上位は一波状文、胴下位～脚部はヘラミガキ。 内面 ハケメ、ヘラミガキ、脚部はハケメ。	細砂粒混入 堅緻 橙色	1/2周、胴部一部欠損

### 20号溝 (図版100)

A地区中央部に位置し、南北方向に直線状に走る比較的規模の大きな溝である。規模は幅2.6m。深さは最深部で72cm。溝の北端部は108号溝付近で丸く途切れる。断面形状は、底面が比較的平坦なU字状を呈する。立ち上がり角度は比較的強く、上半部は下半部に比べると角度は弱い。南半部は検出面が深かったため明確さに欠け、南に行くに従って不明確になる。覆土は黒褐色粘質土で下半部では黄褐色ローム質土を多量に含んでいる。砂層などを含まないことから水流があった痕跡はない。覆土最上部には純度の高い浅間C軽石混土層の堆積がある。軽石降下時には溝はほぼ埋没していたと判断される。出土遺物は弥生土器小破片が数点出土するのみである。時期は弥生期。

### 21号溝 (図版100、101)

A地区中央部、20号溝の北西部に位置する。西-東方向に弧状に走る。断面形状は底の丸いU字状。西及び東方向への伸びについては黒褐色土（第IVb層）中に造られているため検出することができなかった。規模は幅70cm、深さ12cm。覆土は黒褐色粘質土で鉄分の沈着が目立つ。底部付近は底面のローム質土がブロック状に混入しており、砂層など水流のあった痕跡は認められない。浅間C軽石の混入は認められない。出土遺物はほとんどない。時期は弥生期。

### 31号溝 (図版101)

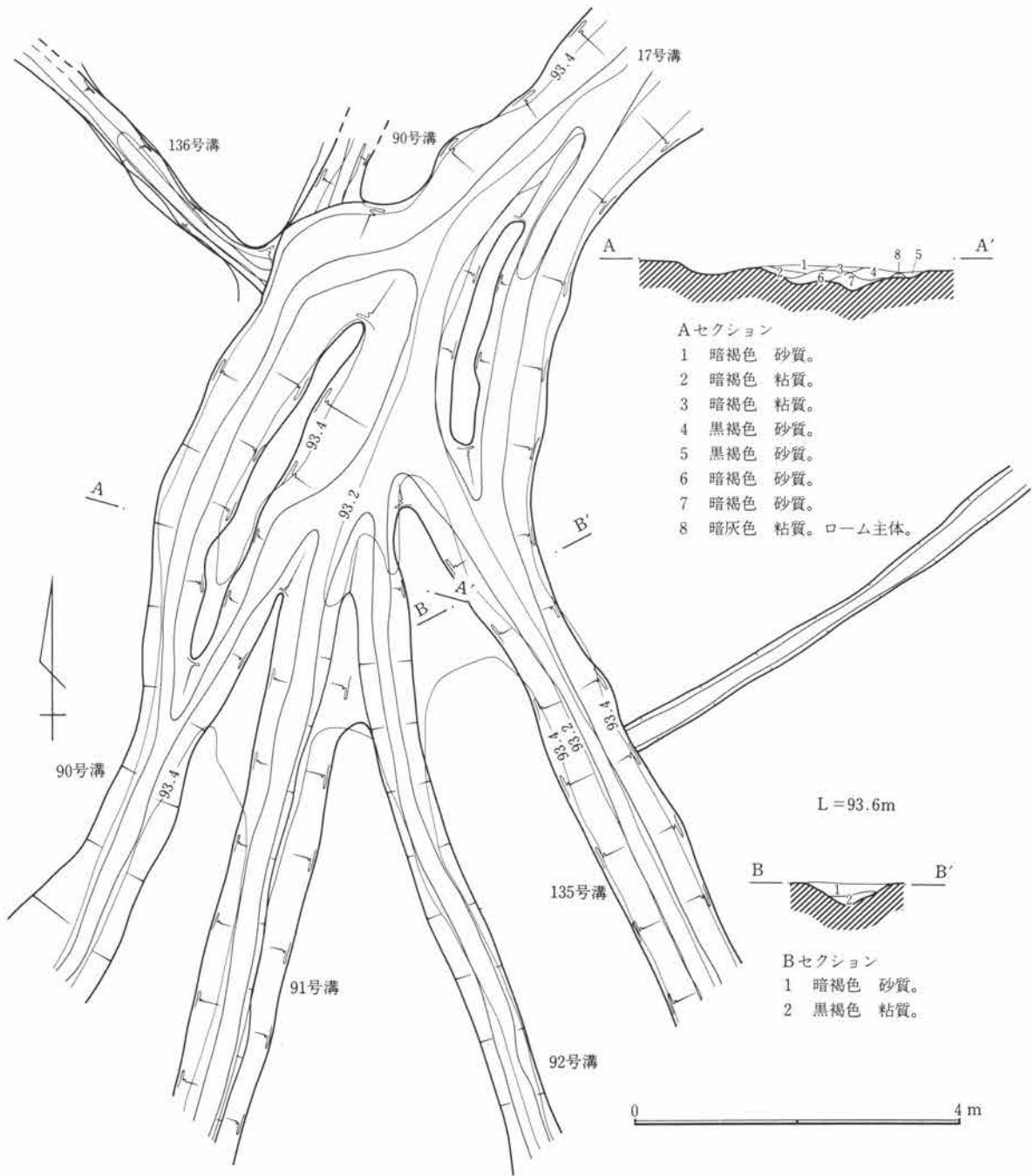
A地区中央部を南北方向の走行を示す。検出面が深かったため明確に検出できなかった。溝の断面形状は底面が比較的平坦である。規模は検出が一部であるが確認できた幅は（上部幅）63cm、深さ15cm。覆土は黒色粘質土で炭化物の混入が著しく目立つ。覆土中には砂層など水流のあった痕跡は認められない。覆土最上層には浅間C軽石層のレンズ状堆積が認められることからC軽石降下時には既に埋没していたと判断できる。本溝は一部を検出したただけであるが調査区東壁に本溝のものと思われる覆土断面土層が現れていることから本溝は更に北へ伸びていたものと思われる。あるいは106号溝とつながるかと思われる。時期は弥生期。

### 32号溝

17号溝堰跡の西、堰跡から分岐する小溝の延長線上に位置する。規模は幅93cm、深さは5cm。検出面が深かったため良好に形状を把握することはできなかった。時期は弥生期。

### 33号溝

A地区東南端17号溝に接し東南方向に走行を示す小規模の溝である。規模は幅46cm、深さ22cm。覆土は黒褐色粘質土で軽石を含まない。17号溝との重複関係は不明。時期は弥生期。



第325図 90号、91号、92号、135号、136号溝

90号溝 (第325図、図版102、103)

A地区南部に位置し、17号溝につながる。扇状に分岐する4条の溝の最も西に位置する溝である。南方向は調査区域外に貫ける。規模は、幅1.3m、深さ17cm。覆土は黒褐色粘質土で下部において砂の混入が目立ち、埋没過程で水流の作用があったと思われる。17号溝とのつながる部分においては二股に分岐し並列走行する部分がある。これは流路の付け替えによるものと思われるが付け替えの先後関係は明らかではない。90号溝より10cm程浅い溝が北方向より本溝に取り付いて見られる。覆土観察では90号溝を切り込んだ様子が認められることから90号溝は最終段階では17号溝より北方向に導入水路を付け替えた可能性も考えられる。時期は弥生後期。

## 91号溝 (第325図、図版102)

A地区17号溝の南端部につながる溝である。南方向は、調査区域外へ直線状に伸びている。規模は幅1.02m、深さ37cm。覆土は暗褐色粘質土で上半部において砂の混入が多く、埋没時に水流が作用したと判断できる。他の溝との関係については覆土の切り合いから92号溝よりも新しく90号溝よりも先行するものと思われるが明確ではない。出土遺物はほとんど見ない。時期は弥生後期。

## 92号溝 (第325図、図版102)

A地区17号溝南端につながる溝である。南方向は調査区域外に伸びる。規模は、幅63cm、深さ20cm。覆土は暗褐色粘質土。溝下部において砂を多量に含む。覆土堆積過程において水流の作用があったと思われる。他の溝との関係は覆土の切り合いから90号、91号溝よりも古いと思われるが明確ではない。出土遺物はほとんど見ない。時期は弥生後期。

## 135号溝 (第325図)

A地区17号溝の南端部につながり、東南方向に伸び、直線状に調査区域外に貫ける。規模は、幅1.02m、深さ50cm。17号溝とのつながる部分においては約5mの区間2条の溝が並走する。これについても溝の付け替えによるものと思われるが先後関係は不明。覆土は暗褐色粘質土であり、浅間C軽石層の混入は見ない。出土遺物はほとんど無い。時期は弥生後期。

## 136号溝 (第325図、図版102、103)

A地区17号溝の南端分岐部に北西方向からつながる小規模な溝である。溝が浅く黒色土中に造られているため検出された部分以外の溝の延長については不明である。17号溝との関係についても相互につながって機能していたかどうか不明である。規模は、幅45cm、深さ20cm。覆土は暗褐色粘質土で軽石を含まない浅間C軽石層下の溝である。時期は弥生期。

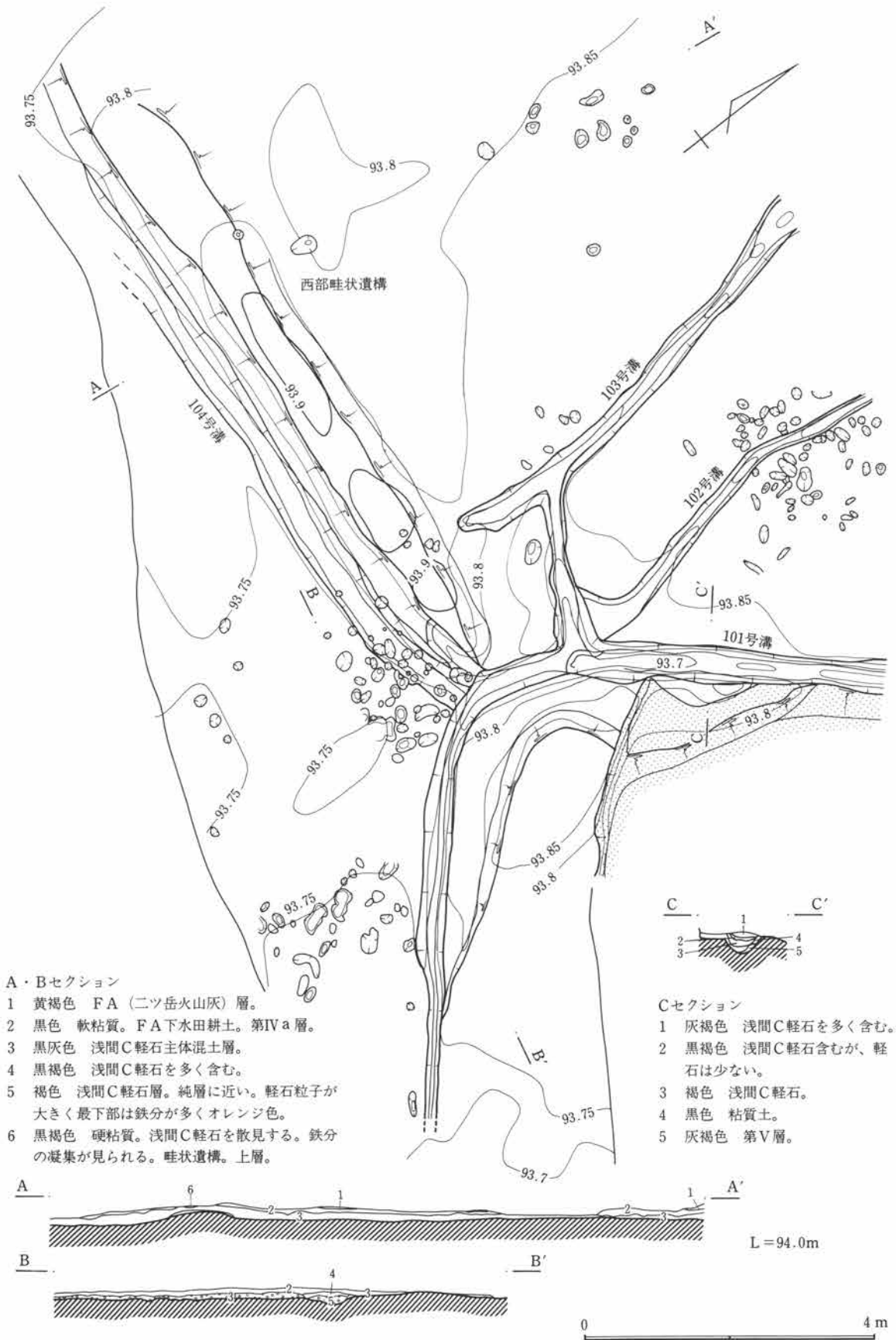
## 94号溝

A地区南端部で90号溝につながる小規模な溝である。北方向については検出した範囲外は不明である。南は90号溝とつながるが相互につながって機能していたかどうか不明である。規模は幅32cm、深さ6cm。覆土は暗褐色粘質土で、軽石など含まず浅間C軽石層下の溝である。時期は弥生期。

## A地区畦状遺構

## A地区西部畦状遺構

微高地帯の西側傍らより、西方向に直状に比較的規模の大きな畦状遺構が伸びている。浅間C軽石層下では畦跡としてはっきりとした形が見られるのは本遺構ただ1箇所のみである。微高地帯畦状遺構の東端部は微高地帯と約1mの間隙がある。この間には101号溝が南北に貫いている。畦状遺構の規模はおよそ幅1m、高さ10～22cm。畦状遺構の盛り土は比較的なだらかで低い。畦状遺構の西部は次第に低く、不明瞭になる。盛り土の土質は暗灰色で第IVb層上に造られている。畦は純度の高い浅間C軽石混土層に直接覆われているが、畦の上面は、周囲の耕作土面と思われる面程ではないが細かな凹凸が目立ち、僅かに浅間C軽石の混入が認められる。又、最上位部には赤褐色の鉄分の沈着が認められる。



第326図 101号、102号、103号、104号溝



畦の南側傍らには幅40cm前後の浅く緩やかな溝が畦に並行して、走っている（104号溝）。この溝は畦の東端部で101号溝と結んでいる。畦状遺構の周囲の第IV b層上面（耕土面）は浅間C軽石主体混土層に覆われており軽石を除去することにより容易に検出できる。検出面は一带に平坦面を形成しているが畦の北と南では上面のレベルに差があり、10cm前後北側の方が高い。上面には細かな凹凸が一面に認められるが、FA下水田のように明確に足跡と認められるものは確認できない。

### A地区中央部畦状遺構

A地区中央部105号溝と106号溝の間に畦状の高まりが僅かに認められる。両溝は浅間C軽石主体混土層に覆われており、浅間C軽石降下に前後して機能していたものである。この並走する両溝の幅1m前後の間に帯状の高まりが認められる。畦跡と思われる高まりは灰黒色の粘質土の盛土で、自然堆積の第IV b層上に20cm前後の高さで認められる。盛土下部は第IV b層と同質であるが、僅かに夾雑物の混入が認められる。上半部は浅間C軽石の混入は殆ど見られず、黄褐色のローム質パミス粒子を混入する比較的軟質な黒褐色土である。また、51-A40トレンチ拡張部分においても浅間C軽石の混入が殆ど見られない黒褐色粘質土の帯状の高まりが認められる。

### B溝群

#### 101号溝（第326、327図、図版104、105）

A地区105号溝から分流し105号溝に並走し、微高地帯に当たって西側に迂回し微高地と太畦状遺構の間を南に貫ける。この以南の延長については検出面が低かったため明確に把握することができなかった。規模は、幅50cm、深さ13cm。覆土は下部に軽石を含まない黒褐色粘質土、中位に浅間C軽石純層が認められることから、溝（水路）として機能していた時点で浅間C軽石の降下により埋没し、以後改修されなかったと思われる。出土遺物は土器の小片を僅かに見るのみ。時期は古墳初頭。微高地と太畦間を抜ける辺りでは、北方向から102号、105号、106号溝などの小規模な溝が合流している。

#### 102号溝（第326図、図版105、106）

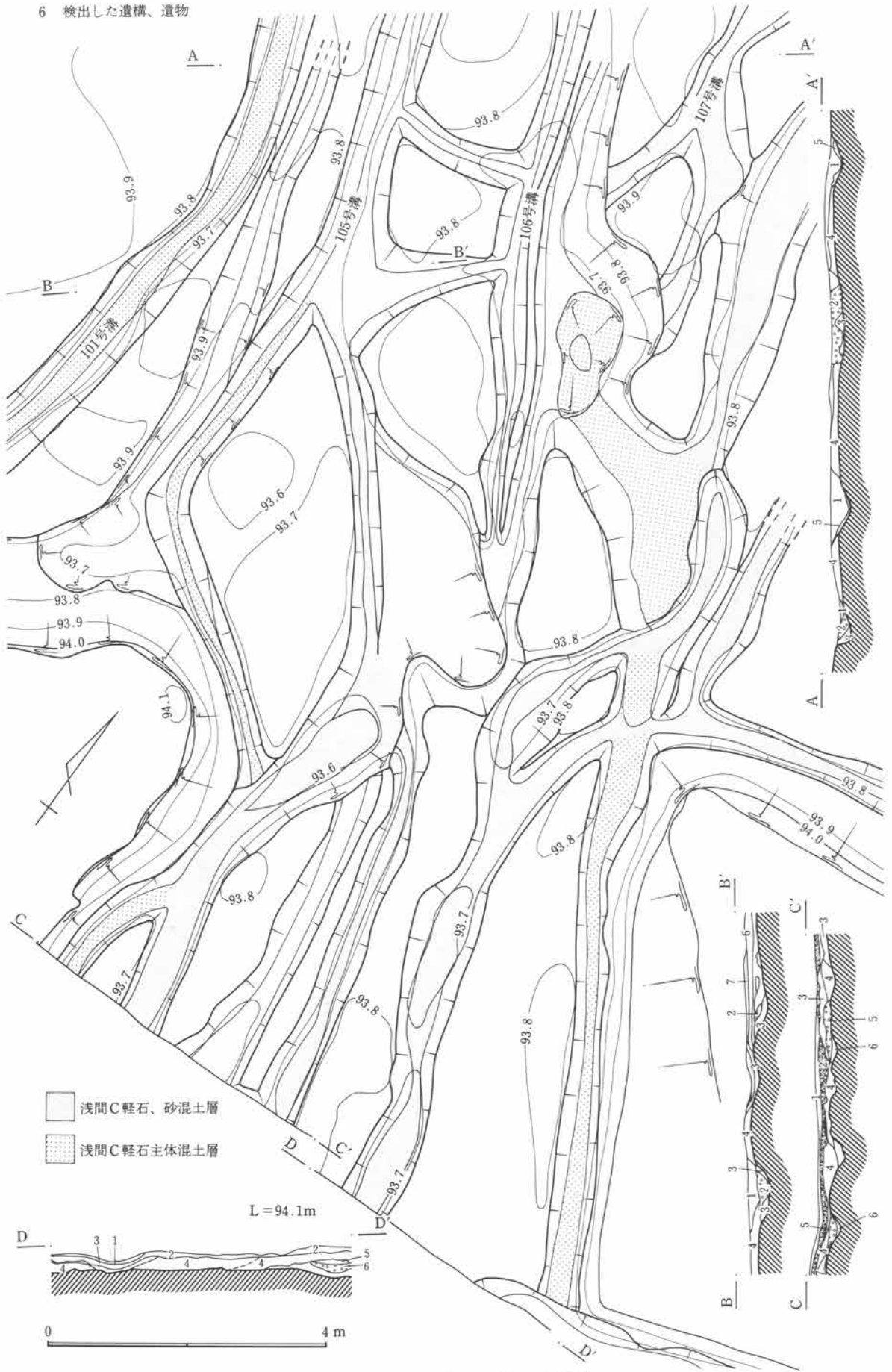
A地区微高地部の西側で101号溝に北方向から合流する小規模な溝である。規模は、幅25cm、深さ25cm。浅間C軽石層下に検出され、覆土は全体に純度の高い浅間C軽石層である。101号溝との合流部では浅く不明確になるため両者がつながって機能していたかどうか不明である。時期は古墳初頭。

#### 103号溝（第326図、図版105、106）

A地区微高地帯の西に位置し、北から南方向に直状に畦状遺構に当たる。規模は、幅33cm、深さ8cm。覆土は灰褐色純度の高い浅間C軽石混土層によりほぼ埋没している。軽石混土層中に砂の混入はない。検出面は浅間C軽石層下である。C軽石降下直前の溝と思われる。時期は古墳初頭。101号溝との間約2m前後は101号溝より枝状に分岐し、この間を結ぶ溝が見られる。この溝の規模は、幅78cm、深さ25cmで、覆土も純度の高い浅間C軽石混土層であり、101号溝に伴って機能していたものと思われる。時期は古墳初頭。

#### 104号溝（第326図、図版105）

A地区微高地帯の西、畦状遺構の南縁に沿って東南方向に101号溝と結ぶ。形状は浅く、規模は、幅53cm、



第327図 101号、105号、106号、107号溝

第327図 A・Bセクション

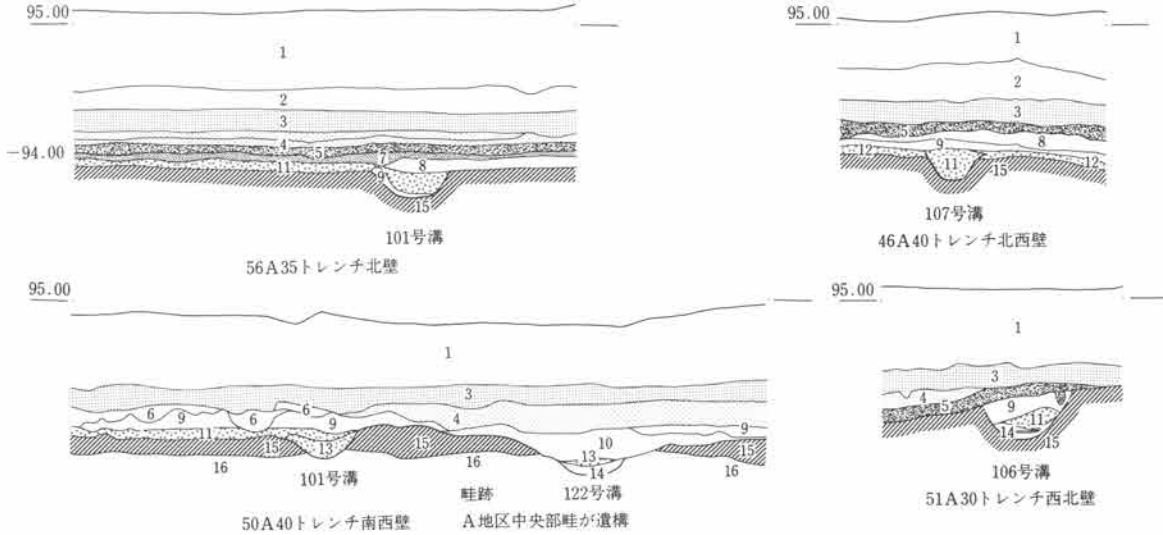
- 1 黒褐色 浅間C軽石主体混土層。
- 2 暗灰色 浅間C軽石純層。
- 3 黒褐色 粘質。浅間C軽石層の下位。
- 4 暗褐色 粘質。浅間C軽石を含む(耕土か)。
- 5 暗褐色 粘質。4層に似る。
- 6 暗褐色 粘質。浅間C軽石混入少ない。
- 7 暗褐色 4層に似る(耕土か)。
- 8 黒褐色 浅間C軽石を含むが少ない。

第327図 Cセクション

- 1 灰橙色 粘質。
- 2 黄橙色 FA純層(二ッ岳火山灰層)。
- 3 黒色 粘質。浅間C軽石の混入少ない。
- 4 黒褐色 砂質。浅間C軽石を多量に含む。
- 5 暗褐色 砂質 浅間C軽石純層。
- 6 黒色 粘質。
- 7 暗褐色 粘質。浅間C軽石を含むが少ない(耕土か)。

Dセクション

- 1 灰色 粘質。
- 2 灰色 砂質。
- 3 黒色 粘質。
- 4 黒褐色 砂質。
- 5 暗褐色 砂質。浅間C軽石多量に含む。
- 6 浅間C軽石純層。
- 7 暗黒色 粘質土。



- 1 灰褐色。浅間A軽石を含む。現水田耕土。第I層。
- 2 灰褐色。浅間B軽石を含む。旧水田耕土。第II層。
- 3 暗灰色。二ッ岳火砕流(FPF-1)氾濫層。奈良・平安期水田耕土。第III層。
- 4 明黄褐色。二ッ岳火砕流(FPF-1)氾濫層。
- 5 二ッ岳火山灰層。
- 6 3層と4層の混土層。
- 7 黒色。軟粘質。古墳後期水田耕土。
- 8 黒色。粘質。
- 9 黒色。粘質。浅間C軽石を含む。
- 10 灰黒色。浅間C軽石が散在する。
- 11 黒灰色。浅間C軽石主体混土層。
- 12 黒灰色。11層より軽石粒が大きい。
- 13 浅間C軽石純層。
- 14 黒色。粘質。浅間C軽石を含まない。
- 15 灰黒色。硬粘質。第IVb層。
- 16 暗灰色。粘質。ローム漸移層に対応。

第328図 A地区溝群トレンチ土層断面

深さ11.5cm。覆土は純度の高い浅間C軽石層で、直接覆われており、底面との間層はない。溝は緩く窪む程度で輪郭は明確ではない。畦状遺構と直接結び付いて機能していたと思われる。時期は古墳初頭。

105号溝 (第327図、図版103、104、105、107)

B地区東半部からA地区にかけて北から南方向に直上に走る溝群中に位置する。北部は後世の溝により切られている。南部では微高地帯の手前で2条に分岐し、西側の溝は微高地帯に当たって東に微高地帯を迂回する。共に以南への延長は不明である。規模は、幅90cm、深さ25cm。覆土は微高地の手前の分流部以北では全体に砂を多量に含む浅間C軽石層の2次堆積が認められ、最下部に軽石を含まない暗褐色粘質土の堆積が認められることから、本溝は浅間C軽石の降下で埋没した後、改修が行われ再び使用されたと思われる。当初の溝は、西に分流し、分流部から南については微高地帯に当たって東に迂回する溝の覆土は下部に軽石を含まない黒色粘質土、中位は浅間C軽石純層が堆積しており、この部分は浅間C軽石の降下以前に使用され、降下後は水流がなかったと思われる。

東に分流する流れは更に2つの溝に分岐するが覆土は多量に砂を含んだ浅間C軽石混土層であり、C軽石降下後にも水流があったと思われる。時期は古墳前期。

#### 106号溝 (第327図、図版103、104、107、108)

B地区東端部よりA地区を北から南へ流下する溝群の内にある。A地区西南部微高地帯の東付近(No.12トレンチ付近)で二股に分岐する。北部は中・近世の濠に切られている。南部は県道カルパート(高架構造物)工事区で不明確になる。規模は、幅78cm、深さ25cm。覆土は浅間C軽石と砂を主体とする混土層であり、場所によって砂あるいは軽石が主体となっている。分岐部以北から西側に分流する溝にかけては砂が主体で、軽石は主体的ではない。東へ分流する溝は軽石を主体としている。浅間C軽石の降下を前後して機能していた溝と思われる。出土遺物はほとんど無し。時期は古墳前期。

#### 107号溝 (第327図、図版103、104、108)

B地区東端部より、A地区を北から南へ流下する溝群の内に位置する溝である。北部は近世～現代の溝に切られている。南部は検出面が低く、溝の南への伸びは不明である。規模は、幅72cm、深さ19cm。覆土は全体に砂を主体とする浅間C軽石混土層であり、浅間C軽石の降下後にも水流があった溝である。時期は古墳前期。

#### 108号溝 (図版104、108)

A地区北端部から17号溝堰跡付近まで緩く曲流しながら北から南方向へ流下する溝である。北部は現代の溝に切れ、南部は検出できた範囲外の延長については不明である。規模は、幅84cm、深さ31cm。覆土は純度の高い浅間C軽石層が覆土最上部にレンズ状に堆積しており、軽石降下時にはほぼ埋没した状態であった。出土遺物はほとんど見られない。時期は弥生期。

#### 109号溝

B地区東半部A地区を北から南へ流下する溝群の内であって、最東端に位置する。北部は後世の濠によって切れ、南部は県道カルパート工事区で不明確になる。微高地の東部で東からの溝の合流が見られる。規模は、幅38cm、深さ19cm。覆土は砂の混入の多い浅間C軽石を主体とする混土層である。時期は古墳前期。

#### 122号溝

B地区東半部A地区を北から南へ流下する溝群の西端部を北から南方向に流下する。124号、123号、101号溝に結ぶ。規模は、幅62cm、深さ10cm。覆土は最下部に黒色粘質土、中位部以上は浅間C軽石混土層により埋没している。軽石中の砂の混入は目立たず、溝外一帯に堆積する軽石混土層と同質である。浅間C軽石の降下前に機能していた溝と思われる。時期は古墳前期。また本溝の流路は後出するFA下水田に伴う水路跡(A、B地区中央水路)とほぼ位置を同じくしており、古墳後期の段階まで地割あるいは水系に踏襲があったことを思わせる。

#### 123号溝

B地区東南部122号溝より分岐し北から南へ直上に流下する。規模は、幅27cm、深さ9cm。覆土は123号溝と同様砂を含まない浅間C軽石主体混土層である。浅間C軽石降下前に機能していた溝と思われる。南部で

部分的に不明瞭になるがA地区微高地部の西側の畦状遺構に北方向から結ぶ103号溝につながると思われる。103号溝と規模は同様である。時期は古墳初頭。

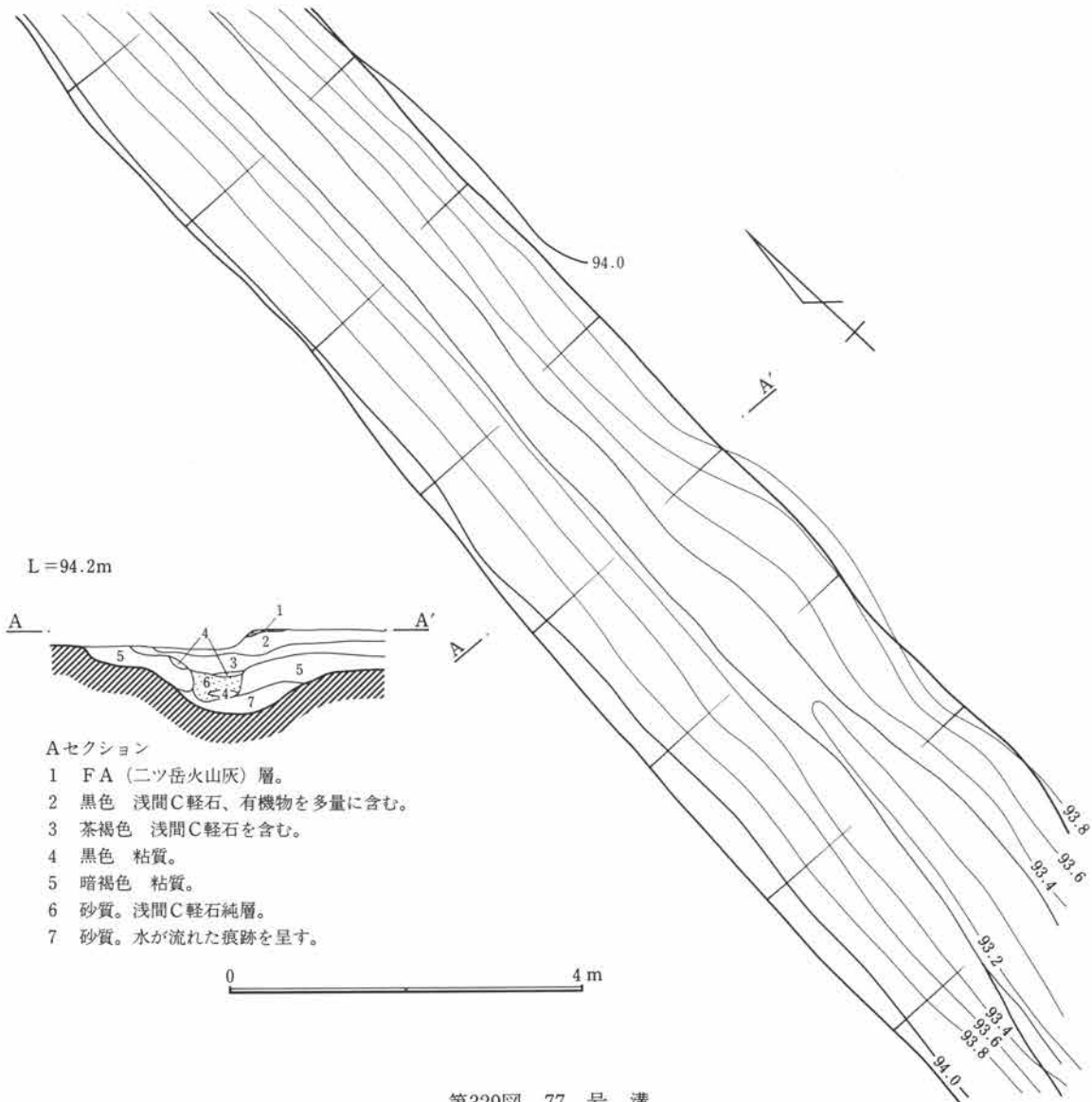
### 124号溝

B地区東半部A地区を北から南へ流下する溝群中に位置する。B地区南端部より南方向に直上に流下し、122号溝に合流する。規模は、幅34cm、深さ25cm。覆土は浅間C軽石主体混土層である。122号溝と同様浅間C軽石降下の前に機能していた溝と思われる。時期は古墳初頭。

## C溝群

### 77号溝 (第329図、図版109)

B地区中央部を南北方向に直上に貫く大規模な溝である。規模は、幅2.96m、深さ90cm。断面形は底が丸く、立ち上がりが比較的緩やかなV字状を呈する。覆土中位には浅間C軽石純層のレンズ状堆積が見られる。下部は砂を多量に含む水成堆積層である。出土遺物は非常に少ない。時期は弥生後期。



第329図 77号溝

## 6 検出した遺構、遺物

### 78号溝

B地区南部77号溝の東傍らに位置する。弧状を呈する。小規模の溝である。覆土は浅間C軽石主体混土層である。時期は古墳初頭。

### 79号溝

B地区南部78号溝に隣接する。形状は不規則に曲折する。規模は、幅56cm、深さ4cm。覆土は浅間C軽石主体混土層である。時期は古墳初頭。

### 80号溝

B地区南部77号溝の東に77号、81号溝と南北に直状に並走する小規模な溝。覆土は浅間C軽石主体混土層である。時期は古墳前期。

### 81号溝

B地区南部77号溝の東に77号、81号溝と同方向に南北に直状に並走する。規模は、幅29cm、深さ5cm。覆土は浅間C軽石主体混土層。時期は古墳前期。

### 97号溝 (第330図、図版110)

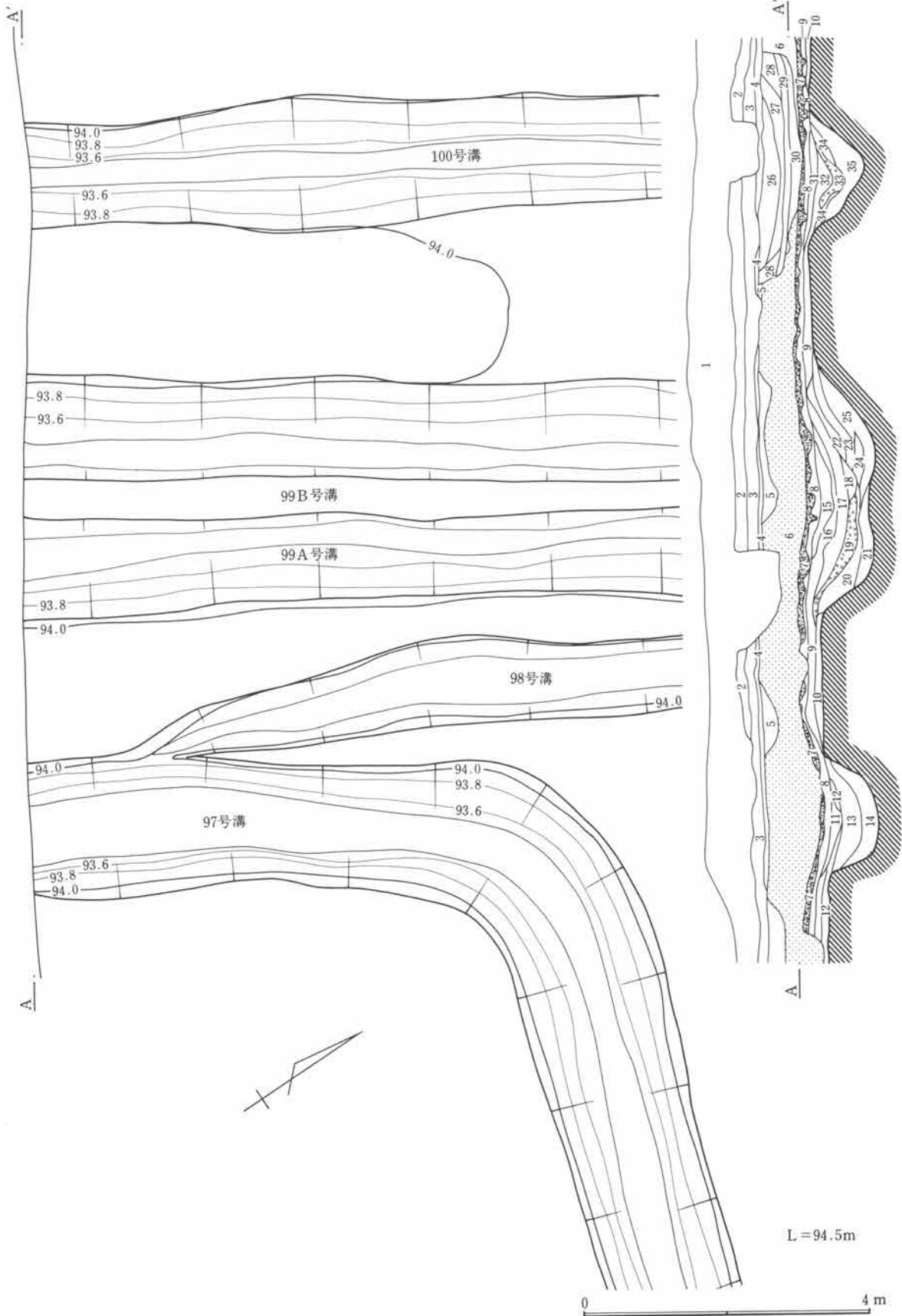
B地区西北端部C地区周溝墓群の南東に隣接する。溝の平面形状はくの字形を呈する大規模な溝であるが、検出が部分的であり全体像は不明確である。規模は、幅1.97m、深さ68cm。覆土は、下部は灰褐色粘質土。中位に浅間C軽石を多量に含むレンズ状堆積層が見られる。下部覆土においても砂の層など埋没時水流が介在した痕跡は認められない。時期は弥生後期。

### 98号溝 (第330図)

B地区北端部、周溝墓群に隣接する。南端部は細まって97号溝に結ぶ。北端部は99号溝と結んでいる。断面形状は底部が緩い丸みを持つU字状を呈する。規模は幅1.22m、深さ11cm。覆土は暗褐色粘質土。97号、99号溝との関係は不明である。時期は弥生後期。

### 99号溝 (第330図、図版110)

B地区北端部、周溝墓群に隣接する。西南-北東方向の大規模な溝である。西南部は調査区域外へ北東は中世の溝に切られて、さらに以北は不明確である。規模は推定上部幅が東側溝(A)は1.42m、西側溝(B)は1.40m。深さは東側溝(A)は65cm、西側溝(B)は60cmである。断面の観察では東側の溝の方が新しい。溝は同規模、同方向の2条の溝が重なり合っている。両溝の覆土は最下部に粘質土と砂層の堆積が見られることから水路として機能していたと思われる。東側の溝において浅間C軽石純層の堆積が逆アーチ状に厚く見られる。軽石は溝の中央部では溝底より20cmの高さに見られる。溝の機能していた時期は浅間C軽石の降下以前であり、軽石の降下時点では水路として機能することができる深さがあった。軽石の降下以後では改修の跡や水流があった痕跡は見られない。溝の重複は長期継続使用に伴う改修によるものだろう。時期は弥生後期第3期。



第330图 97号、98号、99A号、99B号、100号溝

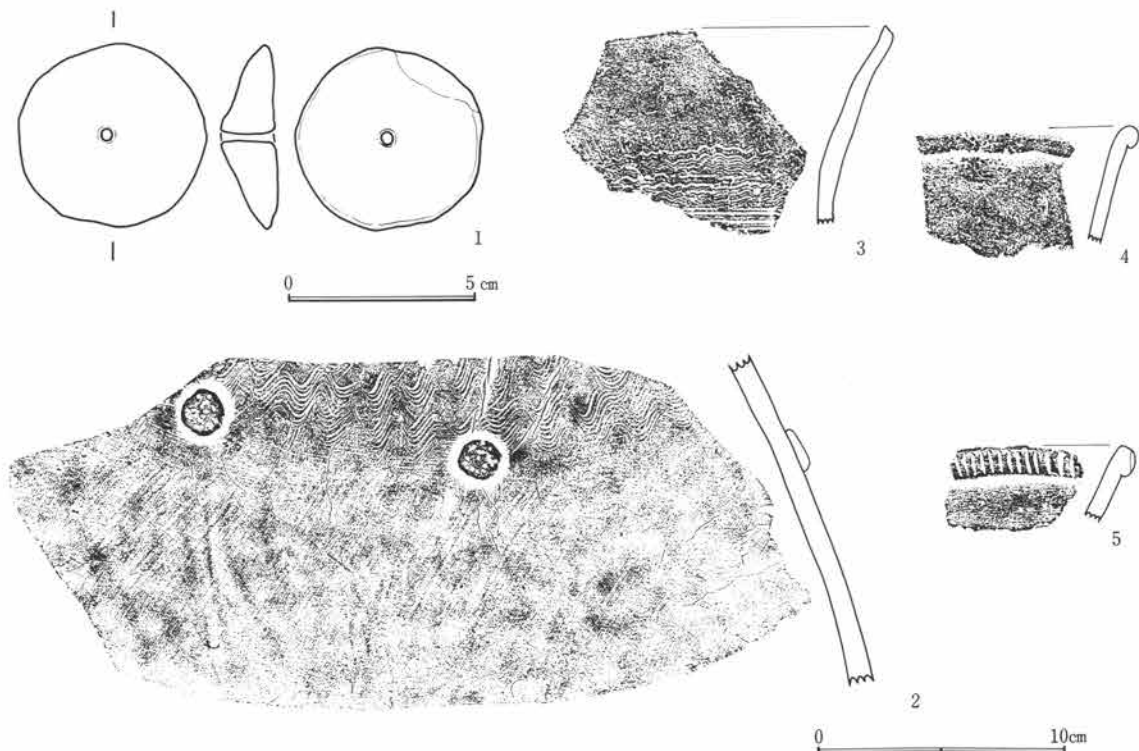
6 検出した遺構、遺物

第330図 Aセクション

- 1 暗灰褐色 やや砂質。表土 (I層)。
- 2 暗灰褐色 やや硬く粘質。旧耕土 (II層)。
- 3 灰褐色 やや硬粘質。旧耕土 (II層)。
- 4 黄褐色 シルト質でやや軟らかい (II層)。
- 5 茶褐色 IIIa層に褐色土、炭化物粒子が混じり軟質化したもの。III層が地表であった時の植物等による攪乱であろう (III層)。
- 6 灰褐色～黄褐色 黄褐色粘質土と灰褐色砂質土、シルト質土との縞状堆積。大粒の二ツ岳軽石等が見られる。二ツ岳火砕流 (FP-F-1)。
- 7 上部は黄褐色、下部は灰褐色。FA (二ツ岳火山灰) 層。
- 8 黒灰色 やや軟粘質。FA下の水田耕作土。
- 9 黒灰色 やや軟質。浅間C軽石を多量に含む (IVa層)。
- 10 黒灰色 強粘質。赤色微粒子を含む。
- 11 黒灰色 やや硬く砂質。粒子はきわめて細かい。
- 12 灰色 やや軟らかく砂質。浅間C軽石を多量に含む。
- 13 灰褐色 やや硬く粘質。
- 14 暗灰褐色 やや軟粘質。
- 15 黒色 やや軟粘質。
- 16 灰色 やや軟粘質。浅間C軽石と黄色小粒子を多量に含む。
- 17 灰色 やや軟粘質。中央部は砂層と粘土の縞状堆積。水成堆積。
- 18 黒灰色 粘質。浅間C軽石を切り込むレンズ状堆積。
- 19 浅間C軽石純層。
- 20 灰褐色 中央部は砂層であるが、両端はシルト質となる。
- 21 暗灰褐色 強粘質。
- 22 浅間C軽石層。灰色粘質土を含む。
- 23 暗褐色 シルト質。砂を含む。
- 24 灰褐色 砂質。
- 25 灰褐色 やや硬粘質。中央部は砂質。
- 26 茶褐色 III層の小ブロックと炭化物を多量に含む。
- 27 灰褐色 褐色が強い。III層の小ブロックを多量に含む。
- 28 灰褐色 褐色が強い。やや硬くわずかに粘質。III層の小ブロックを多量に含む。
- 29 灰褐色 軟質。ほとんどIII層よりなる。シルト質。
- 30 灰褐色 住居の床面下になり住居の掘り方。上部に1cm程度の灰色シルト層を張り床している。
- 31 黒色 やや軟粘質。浅間C軽石を含む。
- 32 黒灰色 粘質。浅間C軽石を多量に含む。
- 33 浅間C軽石純層。
- 34 灰褐色 やや軟粘質。
- 35 黒灰色 やや硬粘質。

100号溝 (第330図、図版111)

B地区北端部周溝墓群に隣接する。99号溝の西側にほぼ同方向で並走し、調査区を北東-西南方向に貫く。規模は幅1.9m、深さ55cm。覆土下半部は黒灰褐色粘質土で砂層など見られない。溝の中位部に浅間C軽石純層の逆アーチ状の堆積が見られる。軽石の降下時点では溝の埋没は進行していない。軽石層の上位層は浅間C軽石混土層の斑状の堆積があり、埋没過程で、水流の介在やあるいは改修がおこなわれた痕跡はない。時期は弥生後期第2期～第3期。



第331図 100号溝出土遺物



第267表 100号溝出土石製品観察表

遺物番号	名 称	計測値(cm)	成 形	整 形	胎土・焼成	色 調	備 考
1	石製紡錘車	外径 5.0 孔径 3.0	石材は浮石質で軽い。片面が強く膨らむ。	器面は滑らかに磨かれている。		灰白色	完形

第268表 100号溝出土土器観察表 (拓本)

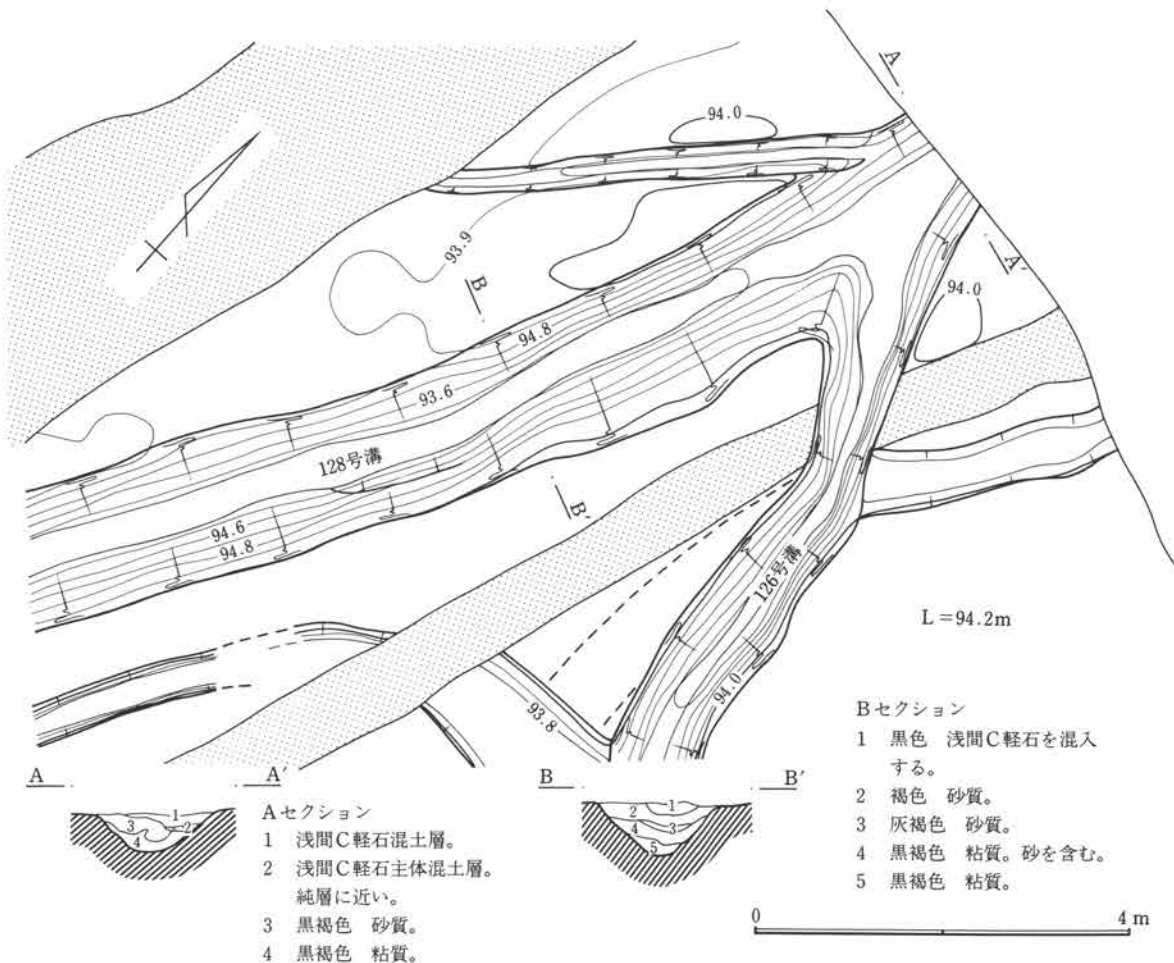
2 大型壺 外面胴部丁寧な斜方向ヘラミガキ、内面ヘラミガキ、砂粒混入、橙色	3 甕 簾状文、砂粒混入、にぶい褐色	4 壺 細砂粒混入、灰白色	5 甕 (b)ヘラ刻み、砂粒混入、にぶい橙色
---------------------------------------	--------------------	---------------	------------------------

## 126号溝 (第332図)

B地区北部に位置する。128号溝から分岐し、南方向、調査区域外へ抜ける。規模は、幅96cm、深さ50cm。覆土下部は浅間C軽石を含む黒灰色土。特に最下部は純層に近い。出土遺物はほとんど見られない。時期は弥生後期～古墳前期。

## 128号溝 (第332図)

B地区北部に位置する。調査区を南北に貫く比較的規模の大きな溝である。126号溝は本溝から分流する。規模は、幅1.4m、深さ60cm。覆土は砂の混入が目立つ。水流が介在した堆積と認められる。最上部に浅間C軽石混土層が見られることから、時期は軽石降下に先立つと判断できる。時期は弥生後期～古墳前期か。

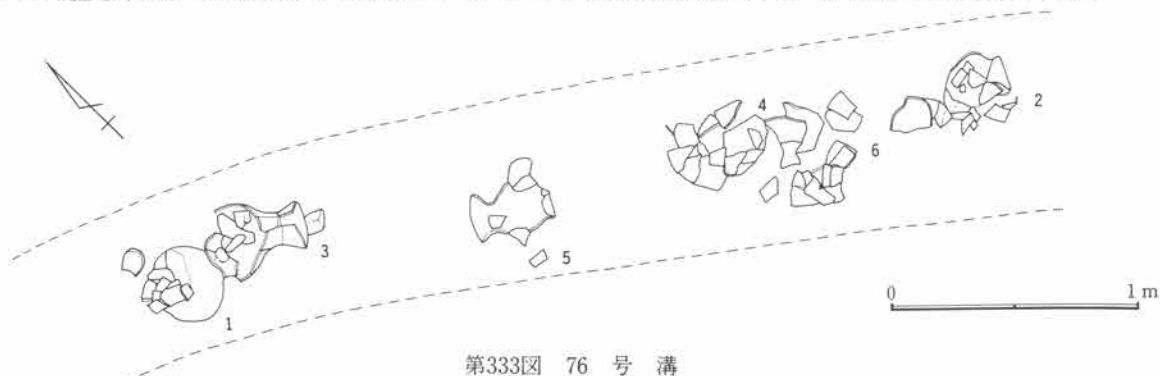


第332図 126号、128号溝

## 2) C地区溝

## 76号溝 (第333図、図版112)

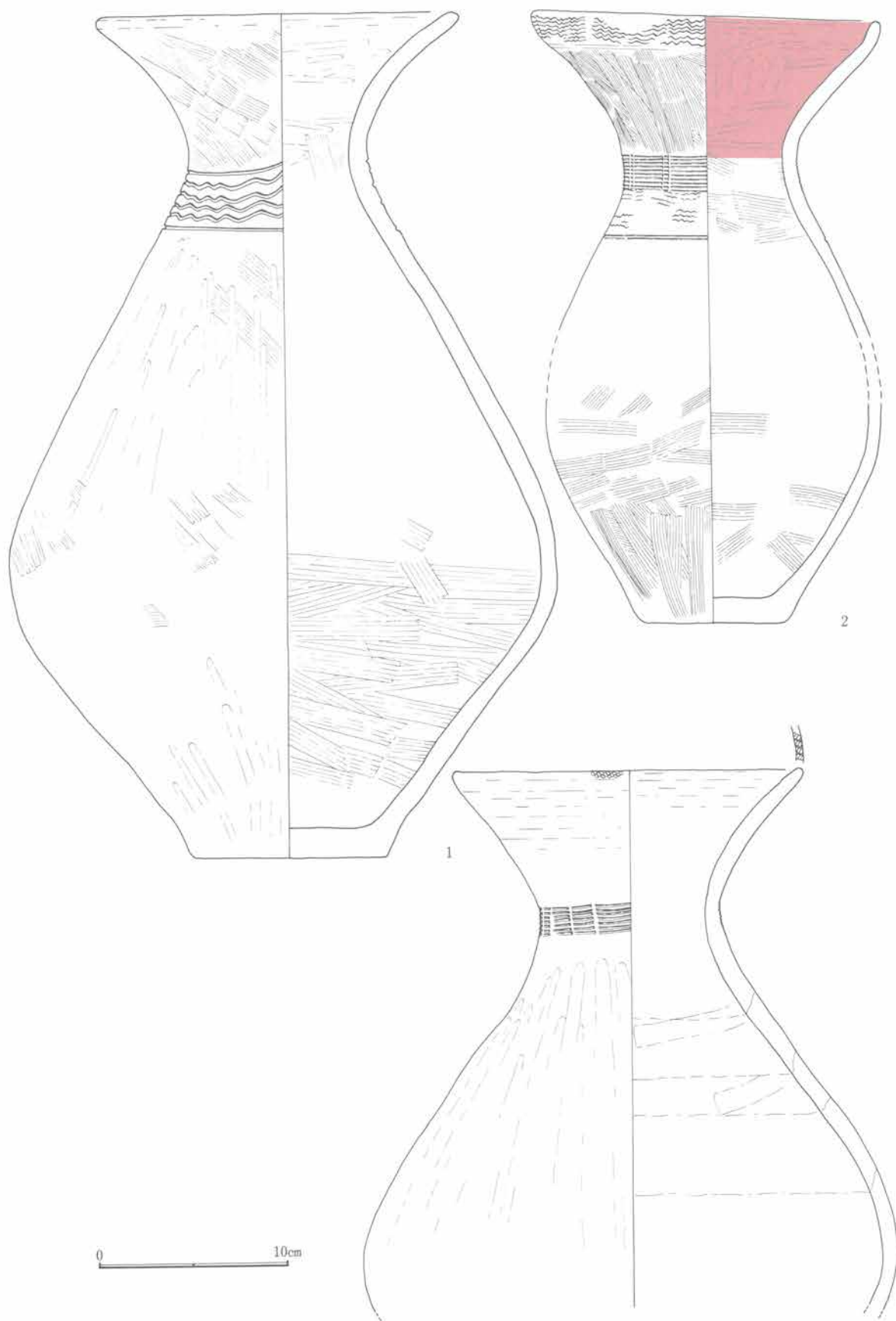
C地区南西部、大溝の南側縁辺部(66-C09)に位置する。調査区西南壁下にサブトレンチを設けた際、延長5mにわたって帯状の土器群を検出する。溝の壁土などは検出できない。溝は黒色土(第IVb層)中に作られており、覆土との峻別は困難であった。土器を包含する溝覆土は軽石を含まない黒色土である。出土土器は壺を中心に欠損の少ない固体が目立つ。中期との過渡期的特徴が強い。時期は弥生後期第1期。



第333図 76号溝

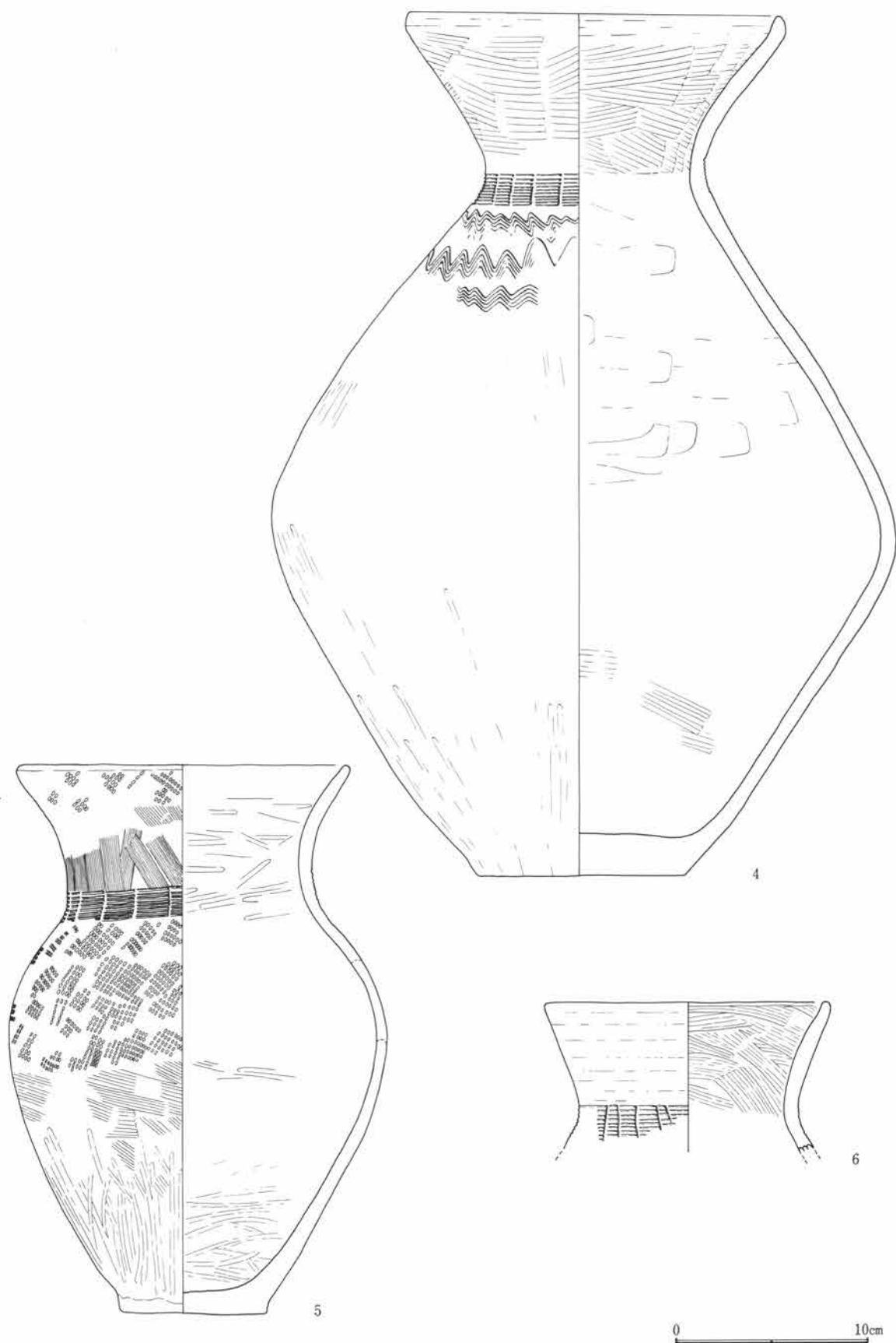
第269表 76号溝出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	口 19.5 底 10.2 高 44.0	口辺部は緩やかに外反する。	外面 口縁部はヨコナデ、口辺部はハケメ、頸部はハケメ後2条の沈線の上に2本単位の沈線+波状文、胴~底部はハケメ後ヘラミガキ。 内面 口縁部はヨコナデ、口辺部はヘラミガキ、頸~胴上位はヘラミガキ、胴下位ハケメ。	細砂粒混入 堅緻 灰白色	底部%欠損
2	壺	口 18.5 底 8.0	口縁部は内湾する。胴部は縦長で、口縁に比べて小さい。	外面 口縁部はヨコナデ、波状文、口辺部はハケメ、頸部は2連止め+簾状文、胴上位は+波状文、波状文下沈線。胴~底部はハケメ。 内面 口縁部はヨコナデ、口辺部はヘラミガキ、指オサエ、頸部はヘラミガキ、胴~底部はハケメ。	細砂粒混入 堅緻 明褐色	胴部分的に欠損あり 頸部内面丹彩
3	壺	口 18.3 胴 27.8	口辺部は外反する。	外面 口縁端部はLR縄文、口辺部はヨコナデ、頸部は7本単位の等間隔止め+簾状文、胴部はヘラミガキ。 内面 口辺部はヨコナデ、胴上位ヘラナデ。	粗砂粒混入 堅緻 淡褐色	底部欠損
4	壺	口 19.3 胴 32.0 底 10.7 高 44.2	口縁部は内湾する。口辺部は緩やかに外反する。	外面 口縁部はヨコナデ、口辺部はハケメ、頸部は等間隔止め+簾状文、胴部はヘラミガキ、底部はヘラケズリ。 内面 口縁部はヨコナデ、口辺部はハケメ、胴部はヘラナデ、ヘラミガキ、底部はハケメ。	細砂粒、黒色粒混入 やや堅緻 淡褐色	完形
5	甗	口 17.5 頸 13.0 胴 19.8 高 23.0 底 8.0	口辺部は緩やかに外反する。	外面 口縁端部はナデ、口辺部はハケメ、櫛状具による刺突、頸部は等間隔止め+簾状文、胴部は刺突文を施す。胴~底部はハケメ後ヘラミガキ。 内面 口縁部はヨコナデ、口~胴部はヘラミガキ。	細砂粒混入 やや堅緻 茶褐色	完形
6	甗	口 14.8	口辺部は直状に外反する。	外面 口辺部はヨコナデ、頸部は等間隔止め簾状文。 内面 口辺部はハケメ。	細砂粒混入 堅緻 灰白色	口縁~頸部%周



第334図 76号溝出土遺物 (1)

3



第335図 76号溝出土遺物 (2)

## 86号溝

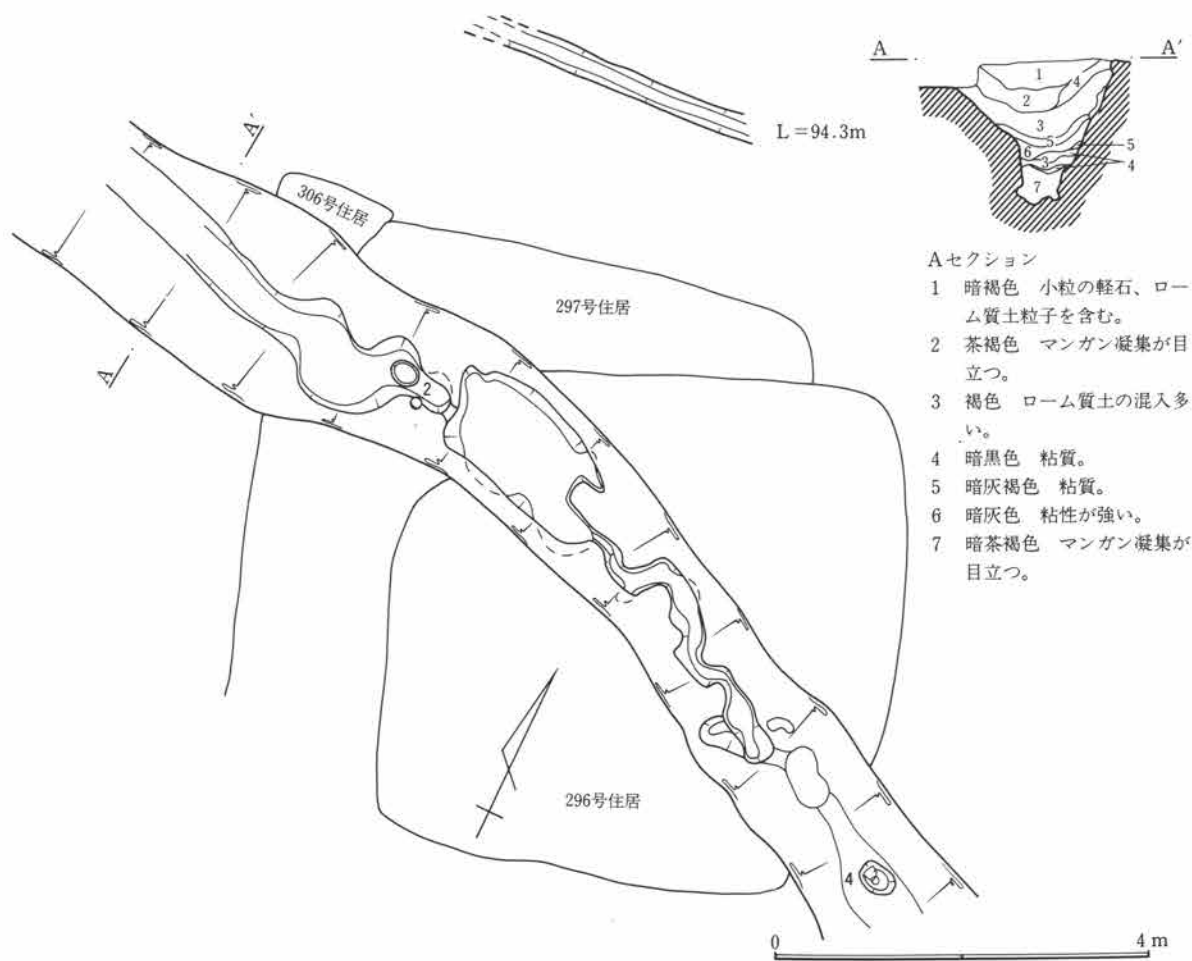
C地区西南部に位置する。5号周溝墓の西北側溝に隣接し、北東-西南方向に直状に走る。確認延長35m、南北は調査区域外、北東部は検出が浅く不明瞭になる。幅は50cm、深さは全体的に浅く一定ではない。覆土上部はC軽石を含む灰黒色土。水流のあった痕跡はない。遺物はほとんど出ていない。時期は弥生後期～古墳前期。

## 87号溝

C地区西部に位置する。2号周溝墓の南に東西方向、延長12mにわたって検出される。全体に直状を呈するが東端部は南へやや曲がる。幅40cm前後、深さは20cm。覆土は暗褐色粘質土。2号周溝墓との関係は不明である。時期は弥生後期。

## 39号溝 (第336図、図版113)

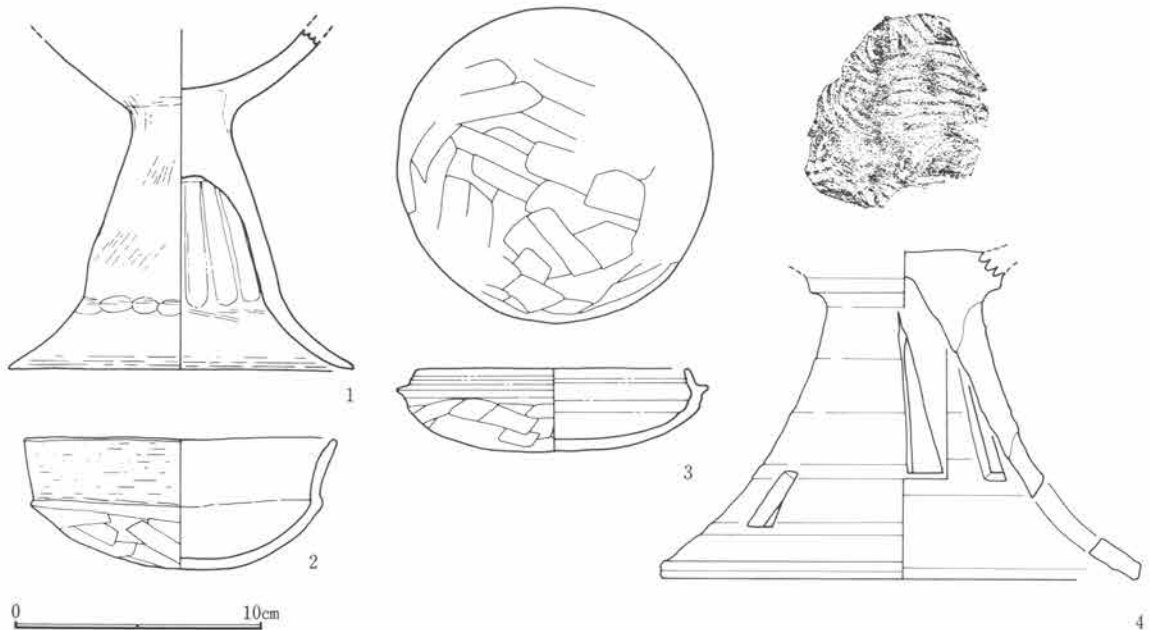
C地区西部に位置する。およそ東西方向に著しく蛇行しながら調査区を貫流する。溝の断面形状はVの字状を呈するが壁面は、随所で水流の侵食によるえぐり込みによるオーバーハングや凹凸が著しい。規模は、幅210cm、深さ70cm。覆土は砂、褐色粘質土が幾層にも縞状に堆積するとともに、壁土がブロック状に多量に認められる。覆土中には様々な時期の遺物を包含するが上半部より古墳後期の須恵器の脚、坏、土師器坏、



第336図 39号溝

6 検出した遺構、遺物

高坏などが完形に近い状態で出土している。このことから本溝の時期はこれらの遺物に基づき古墳後期前半を上限と認めることができるが、溝の生成については溝の形態、覆土の状態から、人為に因るものではなく、周辺の河川の増水などに伴い一時的な強い水流の侵食により、短時間に生成したと思われる。



第337図 39号溝出土遺物

第270表 39号溝出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	高坏	脚 14.0	脚、坏接合痕は明瞭	外面 ナデ、坏～脚台部、裾部接合部にヘラアテ痕がめぐる、器面は粘土溜りなど凹凸を残し整形は粗雑、裾部はヨコナデ。 内面 坏部はヘラミガキ、脚部は指ナデ、裾部はヨコナデ。	砂粒混入 やや堅緻 橙色	坏上部欠損。
2	坏	口 12.5 高 5.1	口縁部はやや外反する、体部中位には強い段を作る。底部は丸底。	外面 口縁部はヨコナデ、体下部～底部はヘラケズリ。 内面 全体にヨコナデ。	細砂粒混入 堅緻 橙色	口縁部一部欠損
3	坏 須恵器	口 10.8 高 3.3	口縁部は内傾し、内傾立より中に尖部を設ける、底面は丸底気味。全体形状は扁平である。	口縁部の内、外面に轆轤によるヨコナデが施され、内面には轆轤目があるが底に指の押圧による凹凸あり。体部外面は手持篋削りがなされる。手持篋削りは最終的に不定方向であるが、手を持ち変えて入念に施す。全体の作調は丁寧である。	白色鉱物粒多く 硬質 暗褐色	口縁～体部一部欠損 吉井窯跡群製
4	台付壺 須恵器	脚端径 18.9	脚端部はやや丸味をおびる。体部との接合部に一条の突帯あり。脚部には二股で三方向に透しあり。下段の透しは長方形。上段の透しは長二等辺三角形。	壺部内面に同心円の当目あり。胎土から見て太田金山窯跡群製と考えられるが、石英粒が少なくいま一つ判然としない。脚部突帯は東海地方以西の系譜であり、金山窯跡群でもそれを踏襲しており、本例もその系譜の中で理解される。脚形状も6世紀後半のそれに近い。秋間窯跡群の脚部形態は薄作りで形態差あり。	白色鉱物粒含み、細砂粒あり、軟質 灰色	壺部欠損 在地製品

### 3) D地区溝

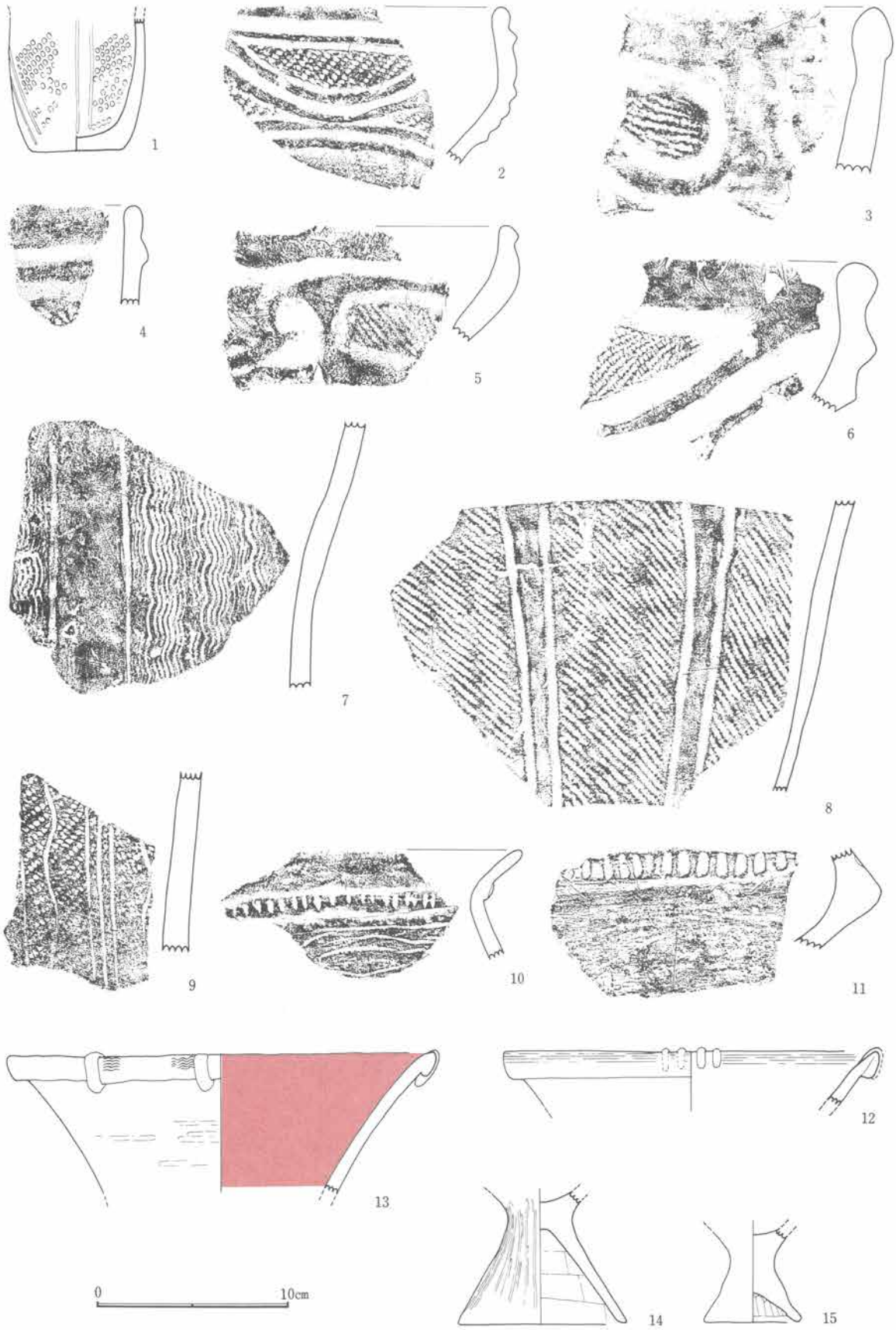
#### 2号溝 (第339図、図版114、115)

本溝はD区東端部に位置する大規模な旧河道である。溝はほぼ南北方向に貫流する。規模は、幅12m、深さ1.4m。断面形状は東西、両河岸立ち上がり壁は比較的緩く、壁面は凹凸などは目立たず比較的平坦である。人為の痕跡などは認められない。河床部は小流路が随所で複雑に交差しながら多数条並走する。これも人為的なものではなく水流による侵食の結果生成したものと思われる。

溝の覆土は溝の上端部から底面まで1.5mの厚さを見るが、この堆積は短期に生成されたものではなく長期にわたりなつたものである。堆積土層は全体的に粘質土よりなり、層序変化は多く、埋没過程において急激な水流の介在はなく、湿潤な沢状の地形であったと想定される。浅間C軽石層から底面まで4層前後に峻別できる。最下部は細かな砂粒を含み、下部の縄文中期土器木質遺物包含層のやや上位層においては軽石質の均質な層が見られる。浅間C軽石層は覆土最上部一面に厚さ10cm前後純層堆積している。土層断面では中央部が縁辺部より、約70cm低く緩い逆アーチ状の堆積を見る。溝の中央部でC軽石層から溝底面までの堆積層の厚さは約1mである。

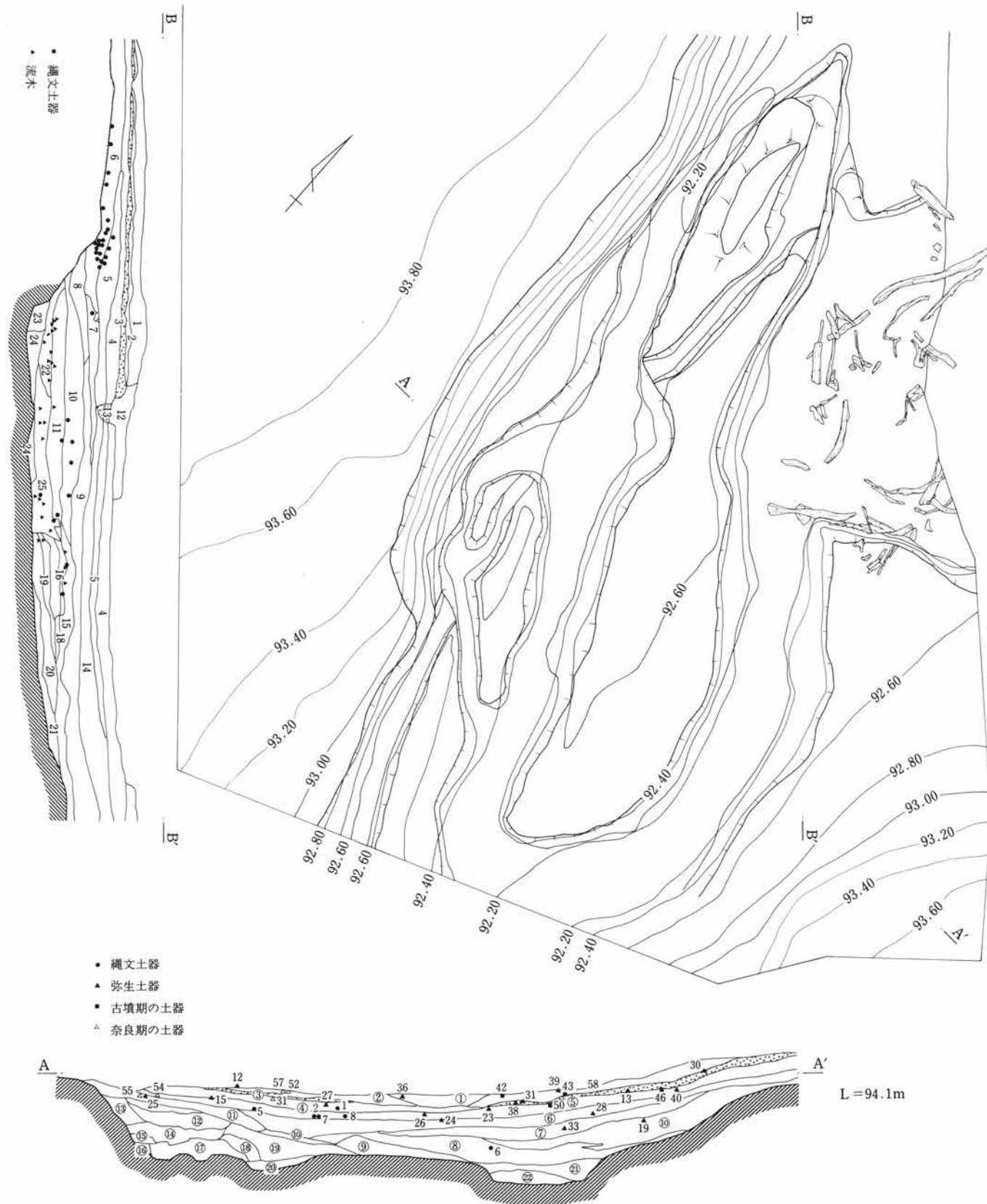
2号溝の最上部は幅1.5m、深さ20cm前後で溝状の浅く、不整形な窪みが認められる。この落ち込み面は二ツ岳火山灰層(F A)を主体とする粘質土に覆われている。

出土遺物は、最上部の溝状の落ち込みを中心に、軽石を含む黒色土の覆土中より奈良期の土師器坏、須恵器坏、瓦破片など、比較的少量の遺物が出土している。二ツ岳火山灰(F A)を多量に混入する粘質土は奈良期の遺物群の包含層を覆っている。この下位層は黒色粘質土を挟んで浅間C軽石層の純層の堆積が見られる。浅間C軽石層直上及び層中より古式土師器、S字状口縁甕、弥生後期土器破片が多数出土している。土器破片は比較的大形のものが目立ち、溝の東側の斜面に集中して出土している。このことからこれらの遺物群は東側のC地区住居群の方向から投棄されたものと思われる。浅間C軽石層下の黒褐色粘質土層中上半部からは弥生土器の小破片が溝全体に散在状態で出土するが、東側に遺物の密度は高い。浅間C軽石層下の黒褐色粘質土は上部は若干浅間C軽石を含み、下位では次第に白色味を増し、出土遺物は殆ど認められなくなる。黒褐色土の下位層は灰色のややピンク味を帯びた粘質土で、土質、色調は均一で火山灰の可能性が高い。更にこの下位層は径5mm前後の軽石粒を点在させ、鉦物の種類は2種程度で細粒は均質であり、黒色鉦物の点在が見られる。2号溝の西側斜面から溝下部にかけ、軽石層に覆われて縄文中期加曾利E 3式の土器や流木が出土した。層中には土器破片が多数西側から投棄されたと思われる状態で出土し、溝の下部では自然木が重なり合って見られた。これらの自然木中には加工を施したと思われる痕跡を確認することができなかった。縄文土器に伴う遺構などは検出することはできなかったが、西側の緩い斜面中断部分のローム地山面を直線状に縄文土器包含層が切っている状態が一部認められている。



第338図 2号溝出土遺物 (1)





339図 2号溝 Aセクション

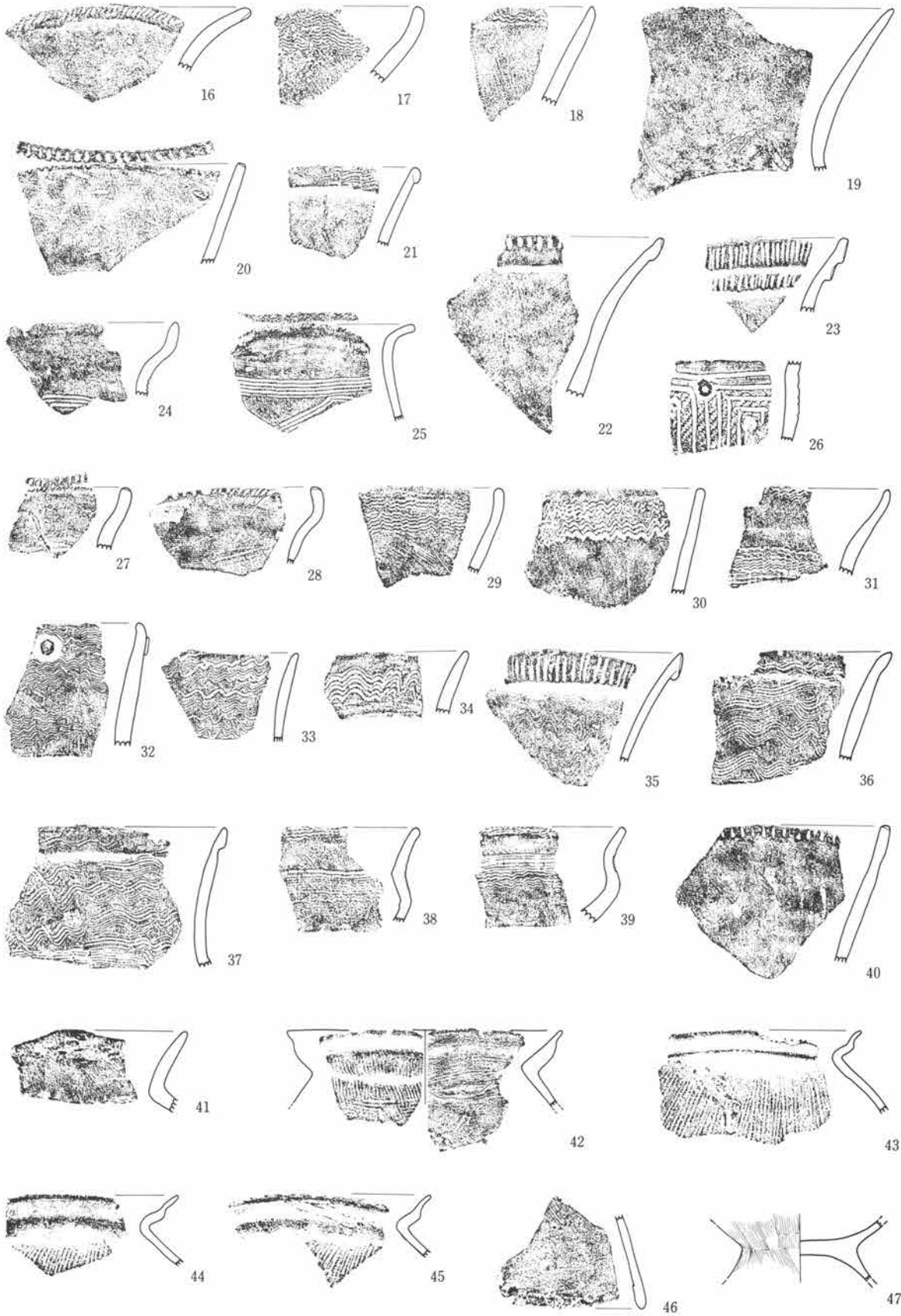
- 1 淡褐色 粘質。二ツ岳火砕流含む氾濫層。奈良期の土器包含層。
- 2 黒色 粘質。
- 3 浅間C軽石純層。
- 4 黒色 粘質。黄色ローム粒、灰白色軽石粒が散在する。
- 5 黒色 粘質。夾雑物目立たず。
- 6 5層よりも黒色味強く、夾雑物目立たず。
- 7 淡いピンク色 粘質。
- 8 ピンク色を帯びた灰色砂層。縄文土器、流木包含層。
- 9 8層に黒色粘質土が混じる。
- 10 白黄色砂層。縄文土器、流木包含層。
- 11 褐色 粘質。縄文土器包含層。
- 12 淡褐色 細粒状の軽石を含む。
- 13 白灰色 細粒状の軽石を含む。
- 14 淡褐色 上部は鉄分沈着目立つ。下部は砂質。
- 15 灰色 砂質。
- 16 灰色 砂質。
- 17 暗褐色 粘質。砂層を含む。
- 18 褐色 砂質。灰白色粘質土ブロックを含む。
- 19 淡褐色 砂質。
- 20 淡褐色 砂質。
- 21 灰褐色 砂質。
- 22 灰褐色土と灰色砂層との縞状堆積。

Bセクション

- 1 黒色 粘質 (水成層)。
- 2 黒色粘質土とピンク色土との縞状堆積。
- 3 浅間C軽石層。径5mm前後。
- 4 黒色 粘質。ローム質軽石細粒を含む。
- 5 黒色 粘質。
- 6 暗褐色灰色 粘質。鉄分の凝集が目立つ。縄文土器包含層。
- 7 灰色 白色軽石の散在がある。
- 8 灰褐色 粘質。
- 9 灰色砂層 (軽石の鉱物化したものか)。
- 10 9層に同じ。黒色粘質土が縞状に介在する。
- 11 黒色 粘質土、砂混土層。流木を多量に包含する。
- 12 黒色 粘質 (水成層)。
- 13 浅間C軽石純層。
- 14 5層よりも白色味強い。
- 15 暗褐色粘質土と砂層の混土層。流木を多量に包含する。
- 16 暗褐色 砂層。軽石の包含多い。
- 17 灰色砂層。黒色粘質土混土層。
- 18 黒色 粘質。
- 19 灰色 粘質。軽石を多量に含む。
- 20 灰色 粘質。
- 21 青味のある灰色 粘質。
- 22 黒色 粘質。
- 23 灰色 粘質。
- 24 黒色 粘質。

第339図 2号溝

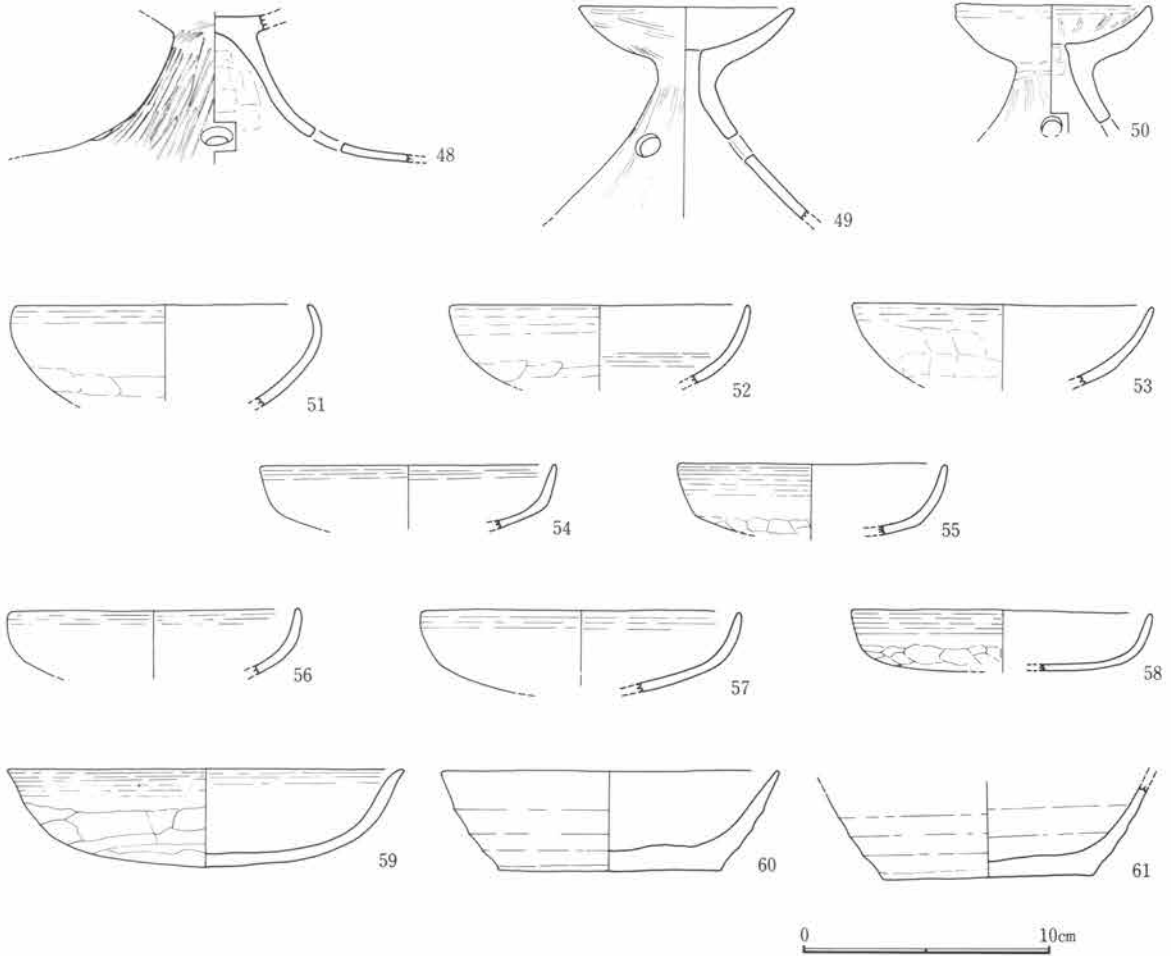




0 10cm

第340图 2号溝出土遺物 (2)

6 検出した遺構、遺物



第341図 2号溝出土遺物 (3)

第271表 2号溝出土土器観察表 (縄文)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	小型深鉢	胴 7.2		外面 L R単節縄文、2条の沈線を懸垂させその間の縄文をすり消している。 内面 ヘラミガキ。	砂粒混入 やや軟弱 にふい黄橙色	口縁部欠損

第272表 2号溝出土土器観察表 (縄文期拓本)

2 口縁部は強く内湾する。口縁部文様体は上下に隆帯を巡らすことにより区画し、区画内には隆帯を重連弧状に巡らす地文はR L縄文縦方向に施している。頸部は無文帯となる。にふい褐色。	5 平縁、口縁は内湾する。口縁部文様体は渦巻文、及び楕円文、にふい赤褐色。	9 小型深鉢の胴部破片、3条の沈線による懸垂文、この間に沈線による緩やかな波状文を垂下させる。地文は縦方向R L縄文、にふい赤褐色。
3 口縁部文様体は渦巻文、地文はL R縄文、にふい橙色。	6 口縁部は僅かに内湾を見せる大形の深鉢、口縁部文様体は隆帯による。にふい赤褐色。	10 浅鉢、頸部はくの字状に屈曲する。屈曲部に粘土紐による突帯を巡らし、ヘラ状具による刻み目を施す。肩部は細い沈線による楕円状文、砂粒の混入目立つ。にふい橙色。
4 口縁部文様体は渦巻、又は楕円文、浅黄橙色。	7 大型深鉢の胴部破片、沈線により区画された懸垂文。この間は櫛状具による波状文を埋める。灰白色。	11 浅鉢の胴部、胴部は強く屈曲する。肩部に棒状具押しきによる刻み目を施す。
	8 大型深鉢の胴部破片、深線区画により懸垂文を施し、この間は縦方向のL R縄文を埋める。灰白色、上部破断部は接合部。	

第273表 2号溝出土土器観察表(弥生)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
12	壺	口 19.4	折り返し口縁、折り返し部は断面が三角形に下端がとくに厚い。	外面 口縁部はヨコナデ、折り返し部は内側から外側にまたがって棒状浮文を付す。 内面 器面が荒れている。	細砂粒多量に混入 やや堅緻 橙色	口縁部破片
13	壺	口 22.0	折り返し口縁。折り返し部の断面形は三角形。	外面 口縁折り返し部は波状文を施し、その後棒状浮文を添付している。頸部はヘラミガキ。器面が荒れている。 内面 口縁～頸部はヘラミガキ。	細砂粒多量に混入 やや軟弱 明赤褐色	口縁部破片 内面丹彩
14	台付甕	脚 8.8		外面 ヘラミガキ。 内面 ヘラケズリ。	細砂粒多量に混入 やや堅緻 明赤褐色	脚台部
15	台付甕	脚 5.0	脚下部は比較的凹凸あり。	外面 器面が著しく荒れている。 内面 体部底面はヘラミガキ、脚部指オサエ痕あり。	微砂粒混入 やや軟弱 にぶい黄橙色	脚台部

第274表 2号溝出土土器観察表(弥生、古墳前期拓本)

16 壺 (a)縄文、粗砂粒混入、にぶい黄褐色	26 甕 L R縄文、コの字重ね文、砂粒混入、褐灰色	37 甕 (d)2連止め簾状文、中砂粒混入、灰褐色
17 壺 粗砂粒混入、にぶい褐色	27 甕 (a)細かい刻み目(d)簾状文、内面ハケメ、砂粒混入、灰褐色	38 台付甕 (b)波状文、(d)2連止め簾状文、砂粒混入、褐灰色
18 壺 (b)波状文、中砂粒混入、にぶい橙色	28 甕 (a)細かい刻み目、中砂粒混入、灰黄褐色	39 台付甕 外面(b)波状文、内面(b)～(d)ハケメ、細砂粒混入、灰黄褐色
19 壺 砂粒混入、にぶい黄褐色、内面丹彩	29 甕 細砂粒混入、にぶい黄褐色	42 甕 内面(d)ヨコハケメ、細砂粒混入、灰黄色
20 壺 外面タテハケメ、内面ヨコハケメ、細砂粒混入、にぶい黄褐色	30 甕 細砂粒混入、にぶい褐色	43 S字状口縁甕 粗砂粒混入、にぶい褐色
21 壺 (b)波状文、中砂粒混入、にぶい橙色	31 甕 (d)2連止め簾状文、細砂粒混入、灰褐色	44 S字状口縁甕 細砂粒混入、にぶい褐色
22 壺 (a)ヘラ刻み、細砂粒混入、橙色	32 甕 内面ハケメ、黒褐色	45 S字状口縁甕 内面(b)ヨコナデ、細砂粒混入、にぶい褐色
23 壺 細砂粒混入、淡黄褐色	33 甕 細砂粒混入、黒褐色	46 台付甕 粗砂粒混入、にぶい橙色
24 甕 中砂粒混入、灰黄褐色	34 甕 中砂粒混入、にぶい黄褐色	
25 甕 (a)縄文、胴部描山形文、内面(e)ハケメ、砂粒混入、灰褐色	36 甕 粗砂粒混入、にぶい褐色	

第275表 2号溝出土土器観察表(古墳前期)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
47	S字状口縁甕		器体は比較的大きい。	外面 ハケメ。 内面 ナデ。	細砂粒多量に混入 やや堅緻 橙色	体～脚台部、接合部破片
48	高 坏		脚部は裾が長く大きく広がる。脚部に円孔3個穿つ。	外面 丁寧なヘラミガキ、部分的にハケメ痕が残る。 内面 坏部は丁寧なヘラミガキ、脚部はヘラケズリ。	砂粒少量混入 堅緻 にぶい黄褐色	脚上部
49	器 台	器受 8.7 中央孔 1.1	脚部に円孔3個穿つ。	外面 器受部～脚部はヘラミガキ。 内面 脚部はヘラケズリ。	細砂粒、黒色粒混入 堅緻 にぶい褐色	脚下半部欠損
50	器 台	器受 7.8 中央孔 1.0	脚部に円孔あり。	外面 口縁部はヨコナデ、器受部はヘラナデ、脚上部はヘラナデ、ヘラミガキ。 内面 口縁部はヨコナデ、器受部はヘラミガキ、脚部はヘラケズリ。	粗砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	器受～脚上部

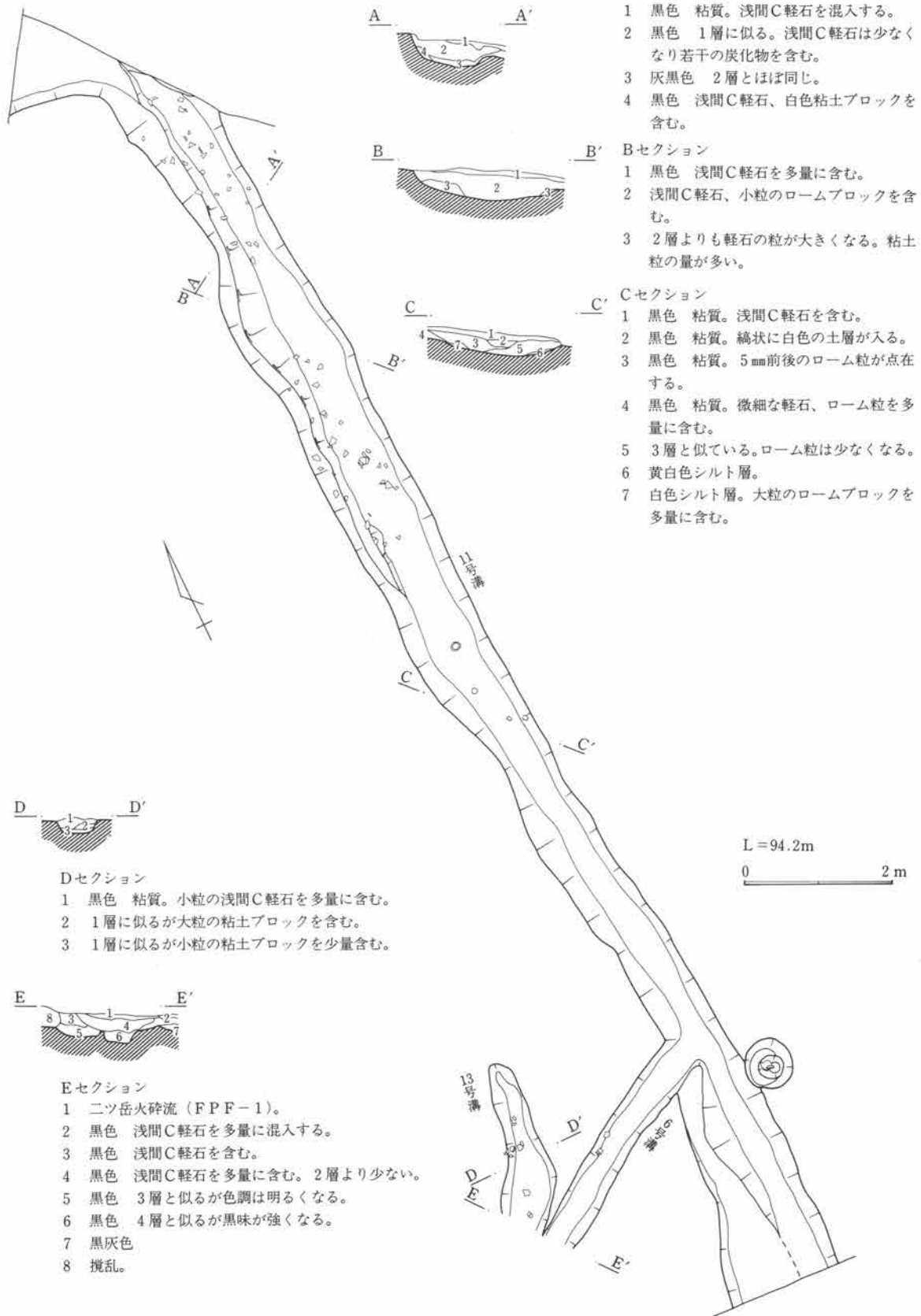
## 6 検出した遺構、遺物

第276表 2号溝出土土器観察表(奈良)

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
51	坏		口縁部は内湾する。	外面 口縁部はヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内面 ヘラミガキ、底部はヘラケズリ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周
52	坏	口 12.0	口縁～底部は緩い凹凸をもって湾曲する。	外面 口縁部はヨコナデ、底部はヘラミガキ。 内面 口縁部はヨコナデ、底部はナデ。	細砂粒混入 やや堅緻 橙色	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 周
53	坏		口縁～底部は緩く内湾する。	外面 口縁部はヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内面 ヘラミガキ。		
54	坏	口 12.0	口辺部は内湾し底部との境に段を作る。	外面 口辺部はヨコナデ、底面はヘラケズリ。 内面 口辺部はヨコナデ、底面はナデ。	微砂粒多量に混入 やや軟弱 明赤褐色	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 周
55	坏	口 10.8	底面は弱い丸味を持つ。	外面 口縁部はヨコナデ。 内面 口縁部は丁寧なナデ。	細砂粒混入 やや軟弱 赤橙色	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 周
56	坏	口 11.6	口縁部は内湾する。	外面 口縁部はヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内面 口縁部はヨコナデ、底部はナデ。	砂粒多量に混入 やや軟弱 橙色	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 周
57	坏	口 12.5	口縁部は強く内湾する。	外面 口縁部はヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内面 口縁部はヨコナデ、底部はナデ。	細砂粒を混入 堅緻 明赤褐色	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 周
58	坏	口 12.0 高 2.3	口縁部はやや内湾する。底面はほぼ平坦。	外面 口縁部はヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内面 口縁部はヨコナデ、底面はナデ。	砂粒目立たず やや堅緻 橙色	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 周
59	坏	口 16.0 高 3.9	口縁部は外反する。	外面 口辺部はヨコナデ、体下半部はヘラケズリ。 内面 口辺部はヨコナデ、底面はナデ。	微砂粒混入 やや軟弱 明赤褐色	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 周
60	坏 須恵器	口 13.5 高 4.0		外面 底部はヘラナデ、部分的にヘラあて痕あり。 内面 底面はナデ。	砂粒黒色粒わずかに混入 角閃石の軽石粒を含む 灰白色	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 周
61	坏 須恵器	底 8.4	回転ヘラ切り。	外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ	5～6mmの小石 黒色鉱物を含む やや軟弱 灰白色	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 周

## 11号溝 (第342図、図版116、117)

D地区東部を南北方向に貫く旧河道、2号溝の西側上端縁よりやや下がった位置にあって2号溝に直線的に沿う。南、北端は調査区域外に抜ける。北端部ではD3号周溝墓の南端が結ぶ。以北は調査区域外であり不明であるがD3号周溝墓の東端を構成する可能性が高い。南部では西方向に6号溝が分岐する。規模は幅1.2m～80cm、深さ40cm前後。覆土は全体に均一で、白色ロームの微粒子が多量に混在する灰黒色粘質土。出土遺物は覆土中より弥生土器小破片が多量に出土している。溝の性格は溝の形状位置より、D区周溝墓群の東墓域を画すると思われる。時期は弥生後期。



第342図 6号、11号、13号溝

6号溝 (第342図)

11号溝より分岐し、西方向へ直上に延長45mを測る。規模は幅1m前後、遺存状態が悪く検出できない箇所が多い。覆土は黒褐色粘質土。東部の11号溝からの分岐部付近では、弧状を呈する長さ2m程の溝(13号溝)と結んでいる。これも周溝墓の周溝であろうと思われるが遺存状態が悪く全体の様子が把握できない。出土遺物は少ない。溝の性格、位置、形状より、周溝墓群を画する機能をもった溝と思われる。時期は弥生後期。

(8) 土 壙 (第343、344図)

165号土壙

C地区56-C39に位置する。116号住居と重複する。平面形状は、上半部は円形スリ鉢状、下半部は長方形。規模は、径1.2m、深さ93cm。覆土は、上部は浅間C軽石を多量に含む黒色土、下部はC軽石を含まない。C軽石降下に前後して比較的長期間に自然埋没したと思われる。遺物は、土壙中位部よりS字状口縁甕の完形個体が横位でつぶれた状態で出土。時期は古墳前期。

166号土壙

C地区47-C34に位置する。112号、126号住居と重複する。平面形状は隅丸方形で下端の形状はより整った隅丸方形。規模は、幅1.2m~1.1m、深さ85cm。覆土は、上部は浅間C軽石を含む黒褐色土。下部はC軽石を含まない粘質土、C軽石降下に前後して比較的長期間に自然埋没したものと思われる。出土遺物は古式土師器小破片、獣骨小破片が覆土上面に集中して見られる。時期は古墳前期。

208号土壙

C地区55-C25に位置する。151号住居の南に隣接する。平面形状は歪んだ円形、検出状態は悪い。底面は不規則に小ピットが数ヶ所所在するが、土壙に伴うものか否か不明。規模は、径2m、深さ52cm。覆土は黒褐色粘質土。遺物は覆土中より弥生土器細片が多数出土する。時期は弥生後期。

216号土壙 (図版118)

C地区62-C10に位置する。大溝の東縁辺に位置する。平面形状は円形。底面はナベ底状で浅い。規模は、径1.9m、深さ24cm。

217号土壙 (図版118)

C地区64-C05に位置する。3号周溝墓の周溝と重複する。平面形状は整った円形、底面は平坦に整えられている。規模は、幅1.8m、深さ47cm。覆土は最上部に浅間C軽石を含み、自然堆積状態を示す。遺物は覆土中より後期前葉の甕の大形破片出土。その他弥生土器小破片多数出土。時期は弥生後期。



## 218号土壙 (図版118)

C地区55-C05に位置する。215号住居の東に隣接する。平面形状は整った円形。規模は、幅2.3m、深さ74cm。覆土最上面に浅間C軽石が混在し、自然堆積状態を示す。底面に長径20cm前後の礫が数個集中して見られる。遺物は少ない。時期は弥生後期。

## 219号土壙

C地区59-C00に位置する。216号住居の東に隣接する。平面形状はやや長円形。規模は、径1.7m、深さ70cm。覆土は黒褐色粘質土。遺物は少ない。

## 220号土壙

C地区54-C05に位置する。219号住居の南に隣接する。平面形状は円形。規模は、径2.3m、深さ54cm。覆土はレンズ状の堆積を示し、自然埋没と思われるが焼土、灰褐色土のブロックが全体に目立つ。遺物は覆土中より弥生後期の土器細片が多数出土する。時期は弥生後期。

## 221号土壙

C地区50-C05に位置する。230号住居と重複する。平面形状は円形を呈する。規模は、径1.8m、深さ56cm。覆土は最上部に浅間C軽石を混在する。自然埋没状況を示す。遺物はほとんど見られない。時期は弥生後期か。

## 222号土壙

C地区51-C06に位置する。220号住居と重複する。平面形状は円形。規模は、径2.1m、深さ62cm。覆土は最上部で浅間C軽石を混在し、自然埋没状況を示す。遺物は弥生後期土器破片が多数出土する。時期は弥生後期。

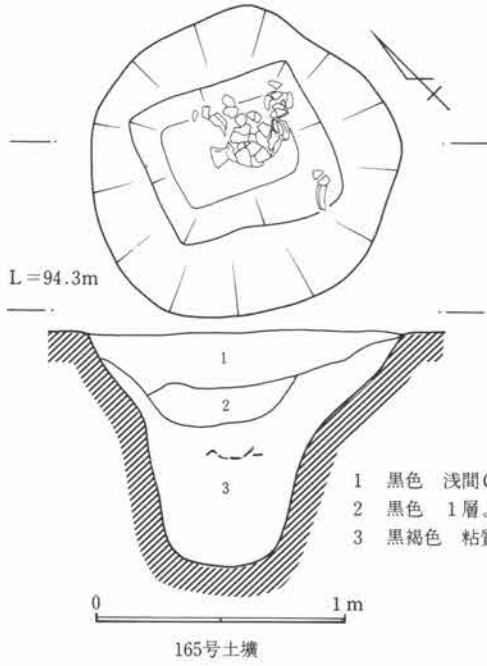
## 231号土壙

C地区91-C30に位置する。287号、292号住居と重複する。平面形状は長方形で、西側は287号住居跡に切られている。規模は、幅1.9m、深さ25cm。周壁の南北壁は良好に検出される。底面は平坦にかためられている。底面直上には炭化物が多量に散在し、覆土中より弥生後期土器破片が多数出土している。時期は弥生後期第3期。

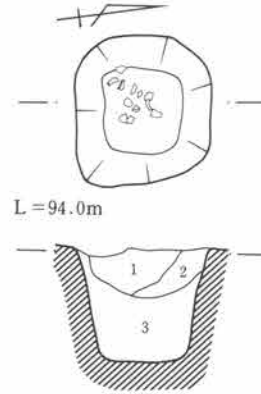
## 232号、233号土壙

C地区大溝の西側北端部(35-C09)に位置する。隅丸長方形土壙が2基重複している。規模、形状は両土壙とも同様である。長軸1.0m、短軸70cm。深さは15cm。覆土は黒褐色で粘性を欠く。軽石を含まない。覆土の所見では232号土壙の方が新しい。出土遺物はほとんど見られない。時期は弥生後期。

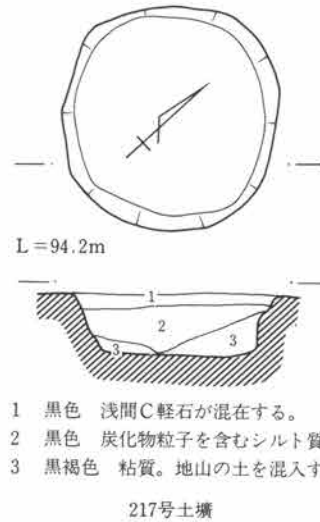
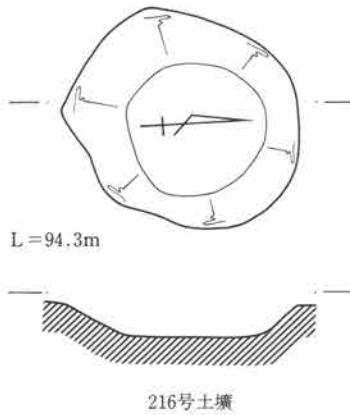
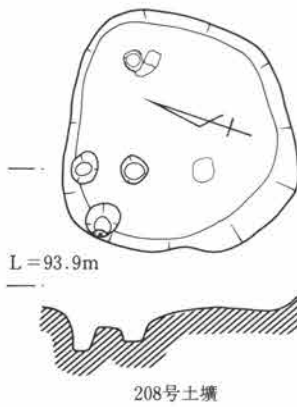
6 検出した遺構、遺物



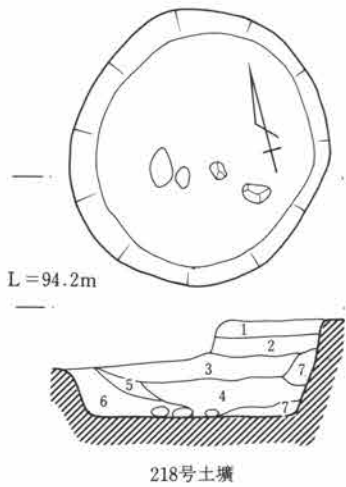
- 1 黒色 浅間C軽石を多く含む。
- 2 黒色 1層よりやや軽石が少ない。
- 3 黒褐色 粘質。浅間C軽石は少ない。



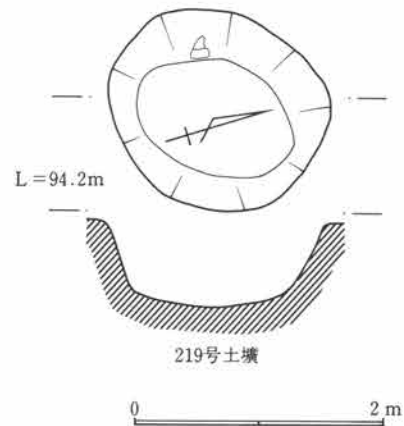
- 1 黒褐色 浅間C軽石、炭化物を含む。
- 2 黒色 粘質。浅間C軽石が散在する。
- 3 黒色 粘質。



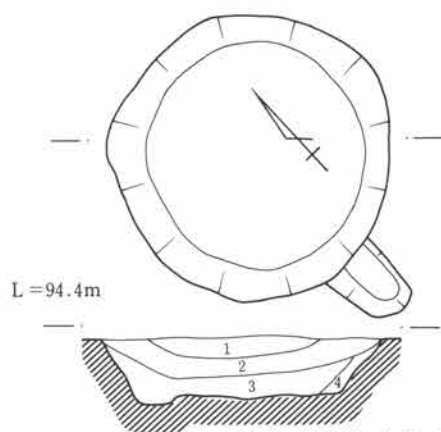
- 1 黒色 浅間C軽石が混在する。
- 2 黒色 炭化物粒子を含むシルト質。
- 3 黒褐色 粘質。地山の土を混入する。



- 1 浅間C軽石が混在する。
- 2 黒色 浅間C軽石、炭化物粒子混入。
- 3 黒色 粘質。炭化物粒子を微量含み硬くしまっている。
- 4 暗黒色 強粘質。
- 5 赤褐色 全体に鉄分凝集が見られる。
- 6 3層に比べ灰色味強い。
- 7 灰黒色 地山の崩れ。



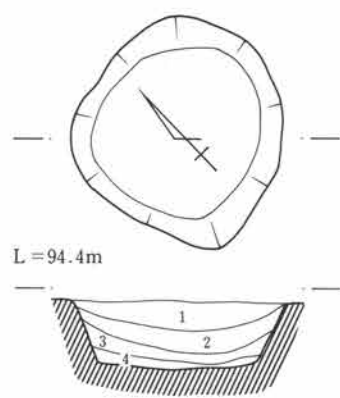
第343図 土 壙 (1)



L=94.4m

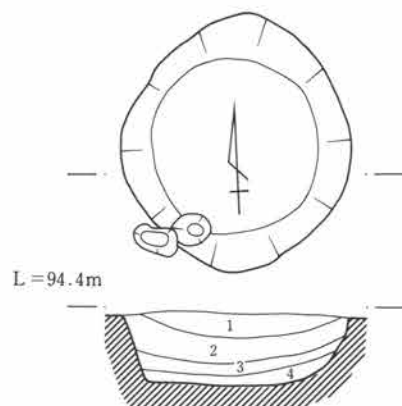
- 1 黒褐色 強粘質。わずかに焼土粒子、炭化物粒子を含む。
- 2 黒褐色 強粘質。灰褐色のブロックを多く含む。焼土粒子、炭化物粒子を含む。
- 3 黒褐色 軟粘質。灰褐色のブロックを多く含む。
- 4 黒褐色 粘質でやや軟らかい。灰褐色ブロックを非常に多く含む。

220号土壙



L=94.4m

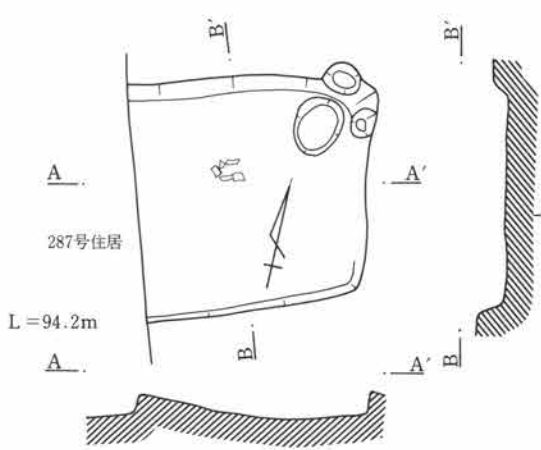
221号土壙



L=94.4m

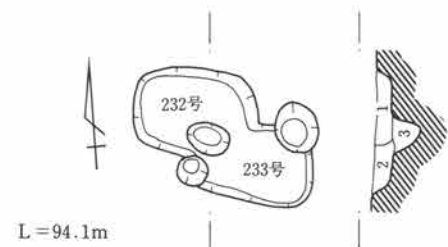
- 1 黒色 浅間C軽石と炭化物粒子を含む。
- 2 黒褐色 焼土、炭化粒を含む。
- 3 鉄分凝集が多くみられる。
- 4 黒褐色 軟質で砂粒を含む。炭化物を含む。

222号土壙



L=94.2m

231号土壙



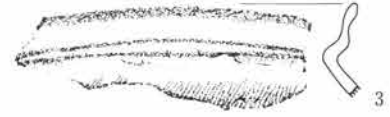
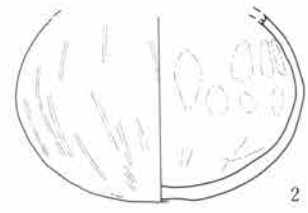
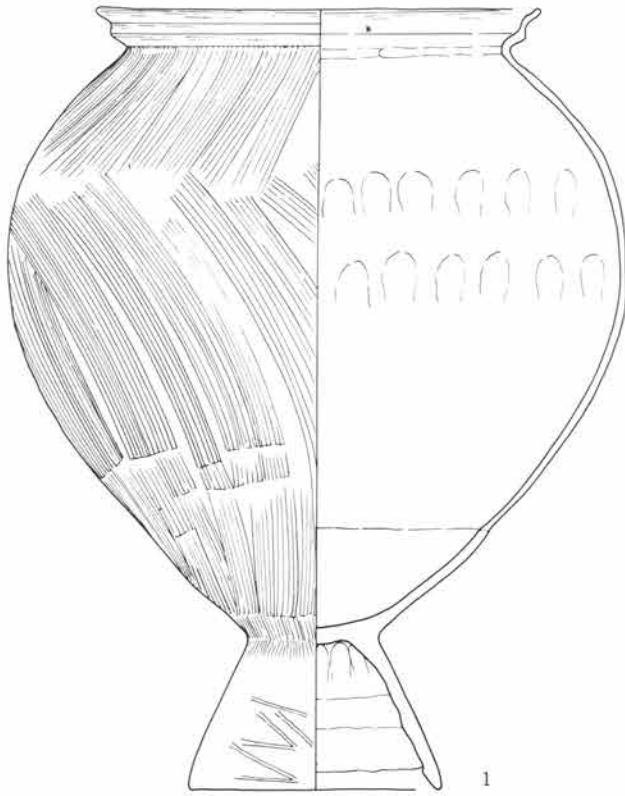
L=94.1m

- 1 黒褐色 軟粘質。焼土粒子、炭化物粒子を含む。ザラザラした感じがある。
- 2 黒褐色 軟質。粘性は弱い。
- 3 黒褐色 粘性が強く軟質。ねっとりしたビットの埋土。

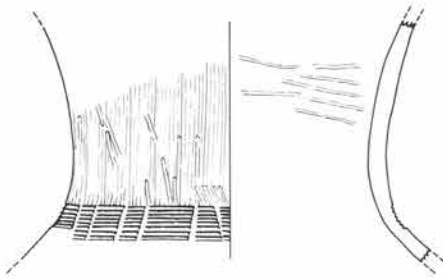
232号、233号土壙

0 2 m

第344図 土 壙 (2)



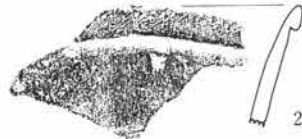
165号土壙



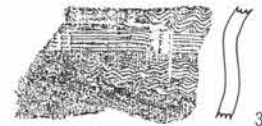
208号土壙



217号土壙



231号土壙



第345図 土壙出土遺物

第277表 165号土壙出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	S字状口縁甕	口 18.0 胴 24.4 高 31.0	口縁端部内側に弱い凹線を持つ。胴下部の接合痕が明瞭、脚台部内側天井部は丸く膨れる。	外面 口縁部はヨコナデ、全体にハケメ、底～肩部2段へ方向、その後肩部↓方向に施す。 内面 口縁部はヨコナデ、胴部はナデ、指オサエ痕、脚台部はナデ。	細砂粒多量に混入 やや軟弱にぶい橙色	ほぼ完形 胴中位一部欠損
2	埴	底 2.6		外面 体部はヘラミガキ。 内面 ナデ、指オサエ、ヘラアテ痕あり。	中砂粒混入 堅緻 橙色	口辺部欠損

第278表 165号土壙出土土器観察表 (拓本)

3 S字状口縁甕 内外面(b)ヨコナデ、砂粒混入、灰白色	4 S字状口縁甕 (b)ヨコナデ、砂粒混入、灰白色
------------------------------	---------------------------

第279表 208号土壙出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	頸 12.6	頸部は比較的強くくびれ、口縁部にかけて、僅かに外反しながら長く伸びる。	外面 口縁部は細かなハケメ後、ヘラミガキ、頸部は2連止め簾状文。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 橙色	頸～肩部全周

第280表 217号土壙出土土器観察表 (拓本)

1 甕 外面(a)細かいヘラ刻み目、(d)等間隔止め簾状文、胴部楕円斜格文、内面(b)ヨコナデ、砂粒混入、にぶい黄褐色、煤付着
---

第281表 231号土壙出土土器観察表 (拓本)

1 甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、にぶい赤褐色	2 甕 外面(b)波状文、内面ヘラミガキ、微砂粒混入、暗赤褐色	3 台付甕 内面ヘラミガキ、砂粒混入、明褐色
-------------------------	---------------------------------	------------------------

## (9) 井戸 (第346図)

## 2号井戸

C地区64-C36に位置する。108号住居の南に隣接する。平面形状は円形。断面形状はV字状を呈する。最下部は袋状に壁が膨らみ底面が広がっている。規模は、径2.3m、深さ2m。覆土は第346図の土層断面のようであるが、上部の覆土中に関東ローム、板鼻軽石層(YP)のブロックを含んでおり、自然埋没となし難いところもある。遺物は井戸の底部より、弥生後期第3期の完形甕形土器が1個体、土器小破片が多量に出土している。甕形土器は底部を欠損する以外は完存。出土土器は弥生後期でも古い段階である。時期は、弥生後期第3期。

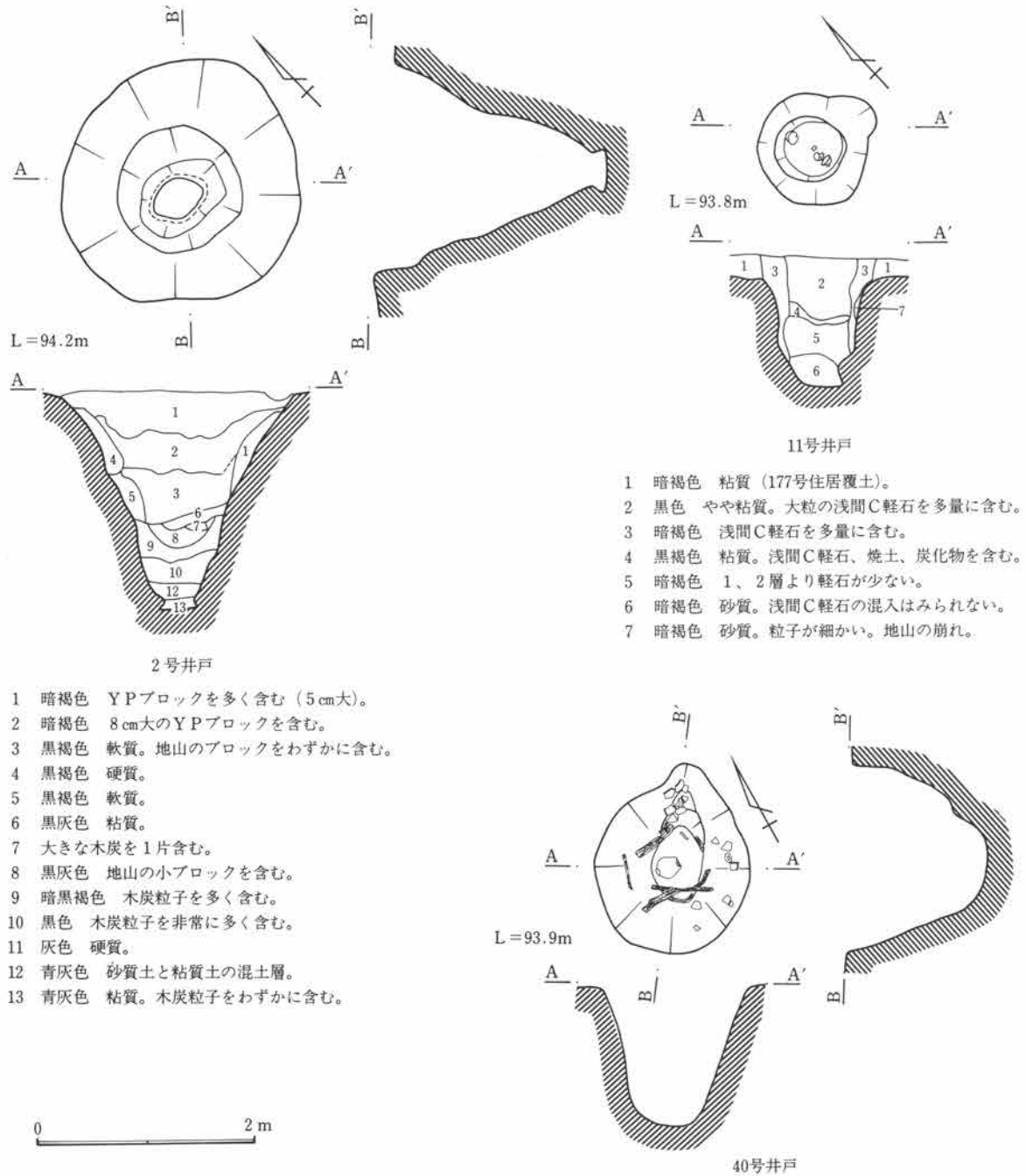
## 11号井戸 (図版118、119)

C地区50-C28に位置する。177号住居覆土を切って造られている。平面形状は円形。規模は、径1m、深

さ1m。覆土上半部は浅間C軽石を多量に含んでいる。下半部はC軽石を含まない粘質土が浅間C軽石の降下に前後して埋没したものと思われる。出土遺物は底部より古式土師器埴、S字状口縁甕下半部大形破片等が出土している。時期は、古墳前期。

40号井戸 (図版118、119)

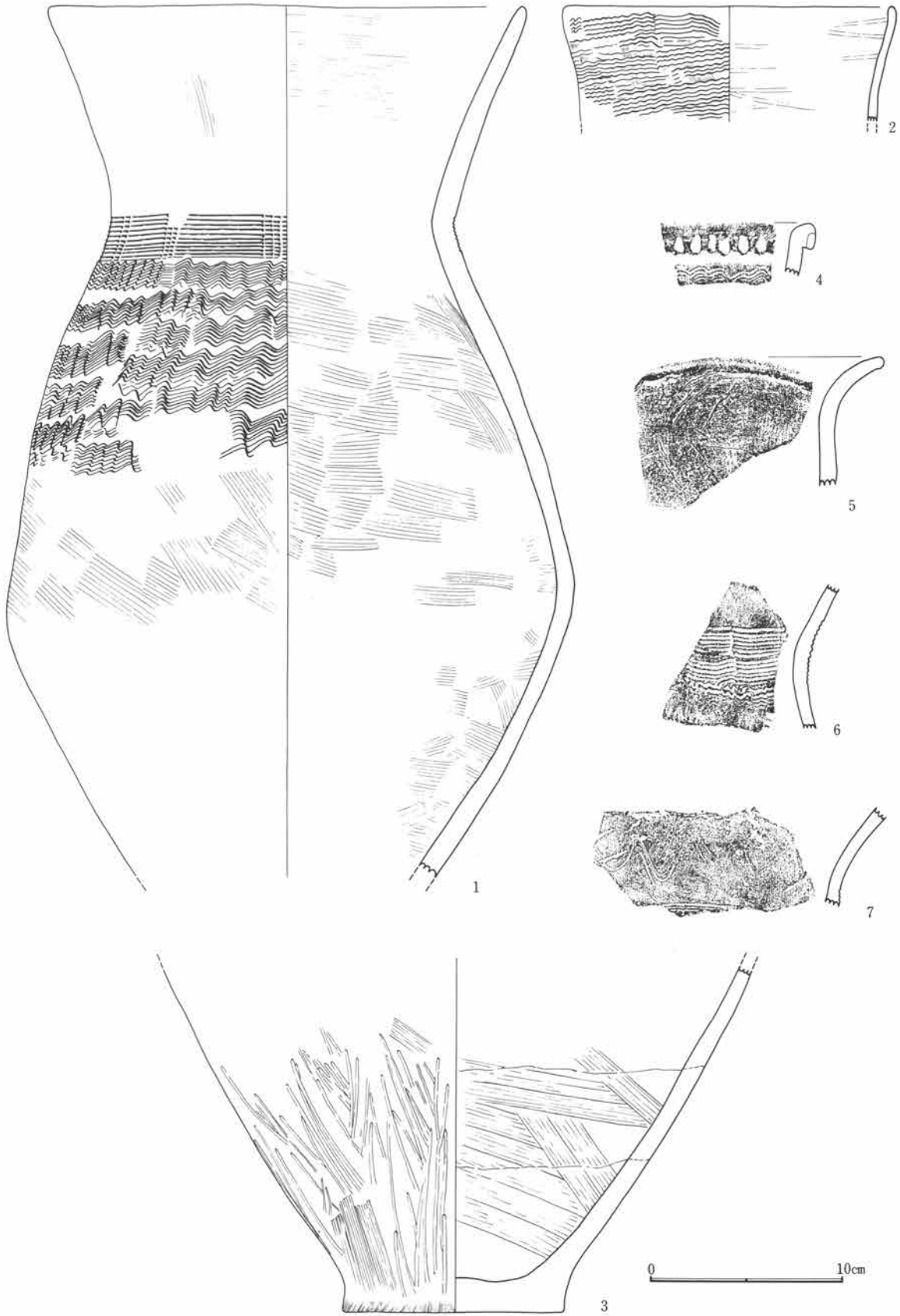
C地区47-C07に位置する。229号住居覆土を切る。平面形状はやや長円形を呈する。径1.7m、深さ1.3m。壁面は硬いローム質土で比較的凹凸なく平坦に整えられている。覆土中より黒褐色粘質土。遺物は底部より



- 1 暗褐色 YPブロックを多く含む (5cm大)。
- 2 暗褐色 8cm大のYPブロックを含む。
- 3 黒褐色 軟質。地山のブロックをわずかに含む。
- 4 黒褐色 硬質。
- 5 黒褐色 軟質。
- 6 黒灰色 粘質。
- 7 大きな木炭を1片含む。
- 8 黒灰色 地山の小ブロックを含む。
- 9 暗黒褐色 木炭粒子を多く含む。
- 10 黒色 木炭粒子を非常に多く含む。
- 11 灰色 硬質。
- 12 青灰色 砂質土と粘質土の混土層。
- 13 青灰色 粘質。木炭粒子をわずかに含む。

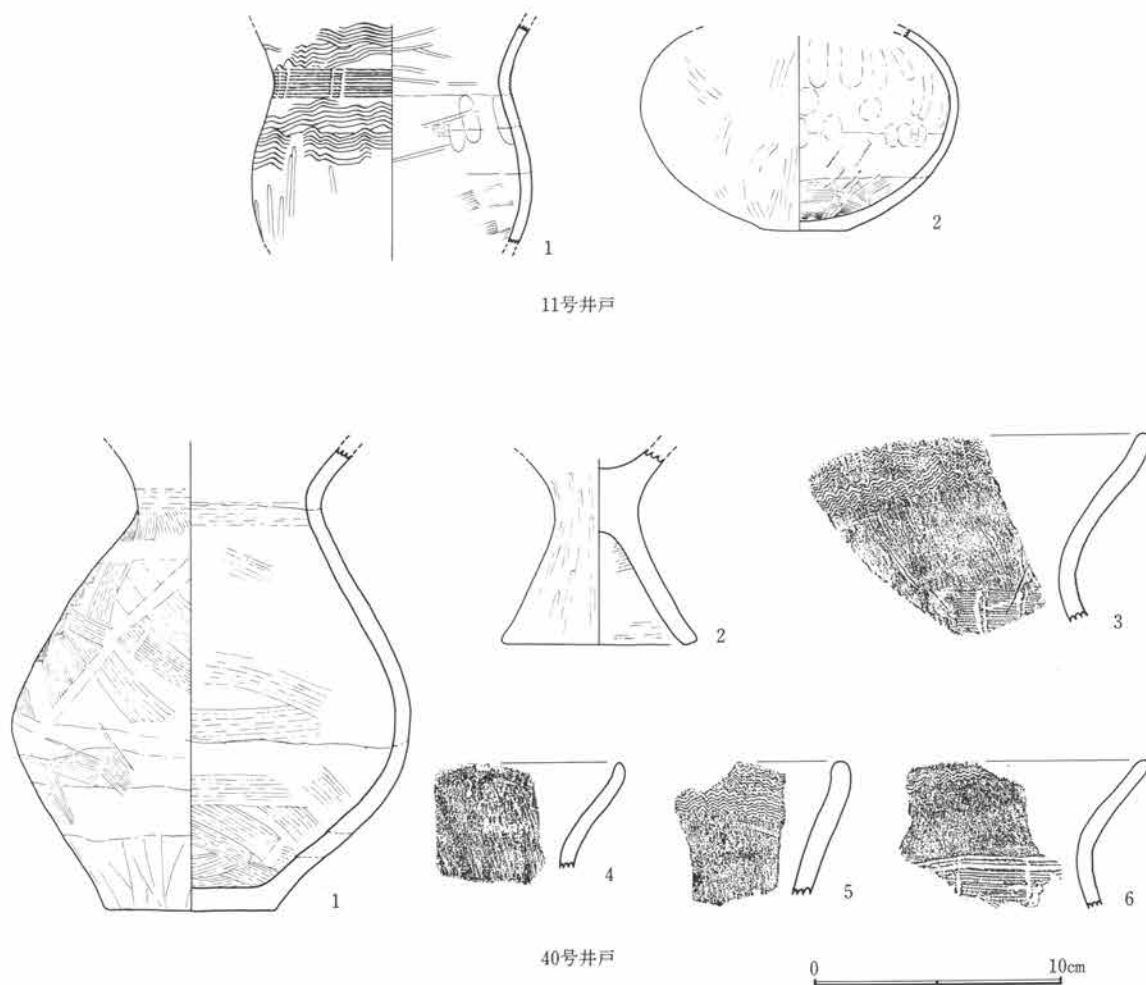
- 1 暗褐色 粘質 (177号住居覆土)。
- 2 黒色 やや粘質。大粒の浅間C軽石を多量に含む。
- 3 暗褐色 粘質。浅間C軽石を多量に含む。
- 4 黒褐色 粘質。浅間C軽石、焼土、炭化物を含む。
- 5 暗褐色 1、2層より軽石が少ない。
- 6 暗褐色 砂質。浅間C軽石の混入はみられない。
- 7 暗褐色 砂質。粒子が細かい。地山の崩れ。

第346図 2号、11号、40号井戸



第347図 2号井戸出土遺物

6 検出した遺構、遺物



第348図 11号、40号井戸出土遺物

弥生後期に属する壺出土。口縁部を欠損するが胴部完存。上部覆土中より弥生後期第1期の土器破片が多数出土。

第282表 2号井戸出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	口 24.5 胴 29.3	口辺部直状に外反する。	外面 口縁部はヨコナデ、口辺部はハケメ、頸部は10本単位の3連止め一簾状文、胴上部は波状文、胴部はハケメ後ナデ、底部はヘラミガキ。 内面 口辺部はハケメ、ヘラミガキ、胴部はハケメ。	中砂粒、黒色粒混入 堅緻 褐色	口縁～胴中位
2	甕	口 18.0		外面 斜めハケメ後、6本単位の波の小さい波状文を3段以上。 内面 ヘラミガキ。	砂粒混入 やや堅緻 褐色	口辺部破片
3	壺	底 11.5		外面 ハケメ後ヘラミガキ。 内面 ハケメ。	中砂粒混入 やや堅緻 にぶい黄橙色	胴下位～底部迄



第283表 2号井戸出土土器観察表 (拓本)

4 甕 (b)刻み目、細砂粒混入、灰黄褐色、煤附着	6 壺 (d)等間隔止め簾状文2段、細砂粒混入、橙色	7 甕 (d)簾状文、振幅の大きな波状文、橙色
5 甕 内面粗いヘラミガキ、微砂粒混入、明褐灰色		

第284表 11号井戸出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕			外面 口辺部は波状文、頸部は9本単位の2連止め一簾状文、胴上部は波状文、胴部はヘラミガキ。 内面 全面ハケメ後ヘラミガキ、胴上部は指オサエ。	細砂粒混入 やや堅緻 橙色	頸～胴下位1/2
2	埴	底 3.6		外面 体部はナデ。 内面 体部は指オサエ、底部はハケメ。	細砂粒混入 堅緻 淡橙色	体部3/4

第285表 40号井戸出土土器観察表

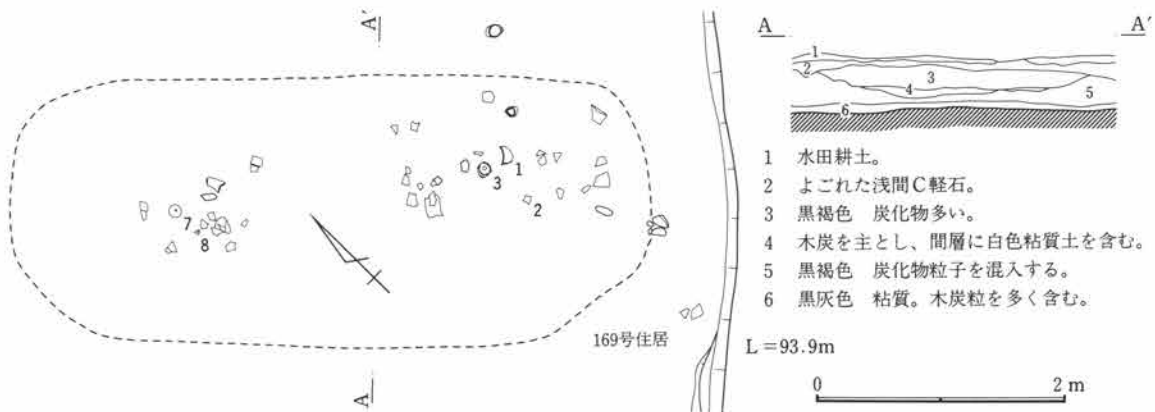
遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	壺	胴 16.0 底 6.7		外面 頸部はヨコナデ、胴部以下ハケメ後、ナデ。 内面 頸部はヨコナデ、胴部以下ハケメ。	細砂粒混入 堅緻 淡橙色	口辺部欠損
2	台付甕			外面 指ナデ、粗いヘラミガキ。 内面 底面はヘラミガキ、脚部はハケメ。	細砂粒混入 やや軟弱 浅黄橙色	脚台部

第286表 40号井戸出土土器観察表 (拓本)

3 壺 (d)等間隔止め簾状文、砂粒混入、褐灰色	5 甕 内面(b)ヨコナデ、細砂粒混入、黒褐色	6 甕 外面(b)波状文、内面粗いヘラミガキ、微砂粒混入、褐灰色、煤附着
4 壺 内面ハケメ、中砂粒混入、にぶい橙色		

(10) その他

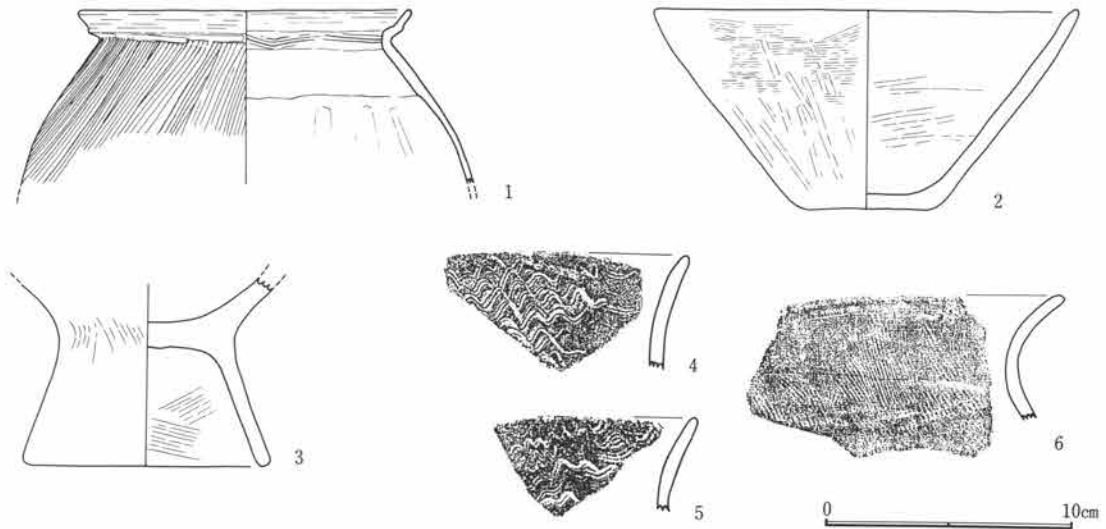
2号遺物群 (第349図、図版120)



第349図 2号遺物群

6 検出した遺構、遺物

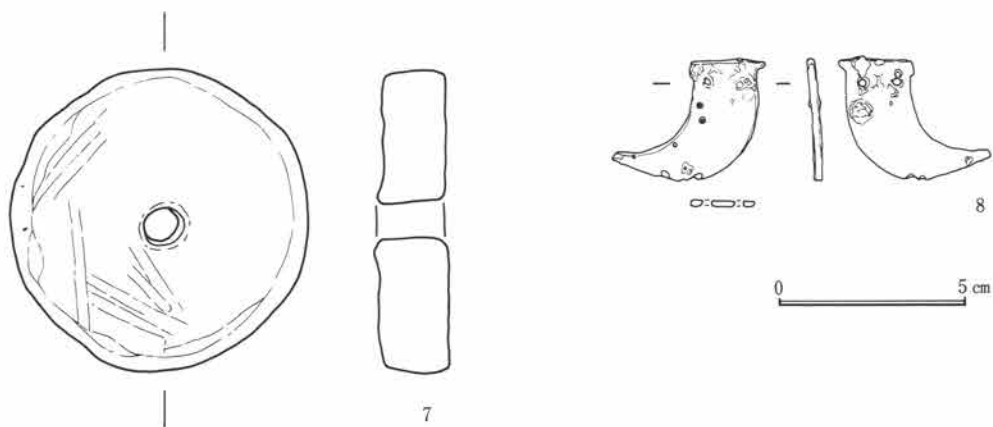
169号住居の覆土中に長さ5m、幅2m、深さ30cm程の長円形土塋を検出した。土塋の形状は住居と土塋の覆土の識別が容易でないため、土塋の輪郭は明確に把握できない。全体に舟底状を呈する。覆土は、上面は浅間C軽石を含む暗褐色土、下部はやや粘質な暗褐色土。覆土中よりS字状口縁甕など古式土師器破片が多量に出土した他、緩い土塋の下部より、巴形銅器破片が検出されている。



第350図 2号遺物群出土遺物 (1)

第287表 2号遺物群出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	S字状口縁甕	口 13.0	S字状口縁。	外面 口辺部はヨコナデ、胴上部はハケメ。 内面 頸部にヨコハケメ、口辺部はヨコナデ、胴上部はナデ、指オサエあり。	2～3mmの小石混入 やや堅緻 灰褐色	口縁～胴上位迄
2	鉢		底部から口縁部にかけて僅かに内湾気味に立ち上る。	外面 器面全体に丁寧な縦方向のヘラミガキ、口辺部に横方向のハケメ痕が残る。 内面 全体的に横方向のヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい赤橙色	口縁～底部
3	台付甕		脚部天井部に補充粘土が見られる。	外面 胴下部はハケメ、脚部はナデ。 内面 底部はハケメ、脚天井部は補充粘土上に指ナデ、脚部はハケメ。	細砂粒多量に混入 堅緻	脚台部



第351図 2号遺物群出土遺物 (2)

第288表 2号遺物群出土土器観察表(拓本)

4 甕 砂粒混入、橙色	5 甕 微砂粒混入、橙色	6 甕 内外面ハケメ、砂粒混入、にぶい橙色
-------------	--------------	-----------------------

第289表 2号遺物群出土土製品観察表

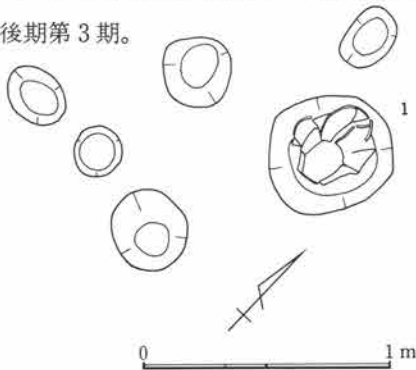
遺物番号	名称	計測値(cm)	成 形	整 形	胎土・焼成	色 調	備 考
7	土製紡錘車	外径 8.0 孔径 1.0	大形で側縁部は角張って面を作る。側縁の面には指オサエ痕がめぐる。片方の平面は平坦に整う。	全体に粗いヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻	浅黄橙色	側縁部に僅かな欠損がある。

第290表 2号遺物群出土銅器観察表

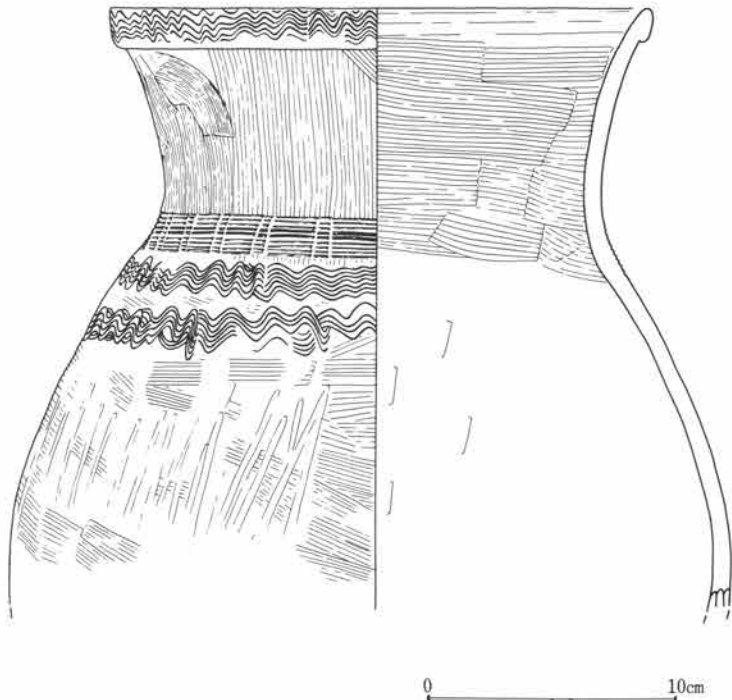
遺物番号	名 称	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	形 状	備 考
8	巴形銅器破片 転用垂飾具	4.8	1.7	0.17	巴形銅器の脚部破片で、体部との接続部で切断している。切断部は磨かれて角は丸く滑らかである。切断部側に径2mmの2個の円孔を穿っている。円孔は表裏両側から穿っているが、裏側からの方が深い。器面は滑沢に磨かれており、側縁部は、表側は丸く、裏側は角を作っている。切断部の片側端部は小さく突起を見るが、これは体部の一部と思われ片側の側縁部には脚部と同様の元の面が残っている。	本銅器については馬淵久夫氏により、青銅器中の鉛同位体測定を行っている 「新保遺跡 I-弥生・古墳時代大溝編」参照

1号埋設土器(第352図)

247号住居の北に隣接する。径1m、深さ30cm程の円形ピット中に甕形土器が一個体直立位置で検出された。甕は胴下半部を欠く。2m程北に炉跡を思わせる焼土帯が存在することから住居内ピットの可能性もある。時期は弥生後期第3期。



第352図 1号埋設土器出土状態



第353図 1号埋設出土遺物

第291表 1号埋設出土土器観察表

遺物番号	器 種	法 量	器形・成形	文 様 ・ 整 形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	甕	口 22.0	折り返し口縁、口辺部は緩やかに外反する。	外面 口縁部は一波状文、口辺部はハケメ、頸部は2連止め+簾状文、胴上部はハケメ、一波状文、胴部は横ナデ、ヘラミガキ。 内面 口縁部はヨコナデ、ハケメ、頸部はハケメ、胴部はケズリ、ミガキ。	黒色細砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	口縁~胴下位全周

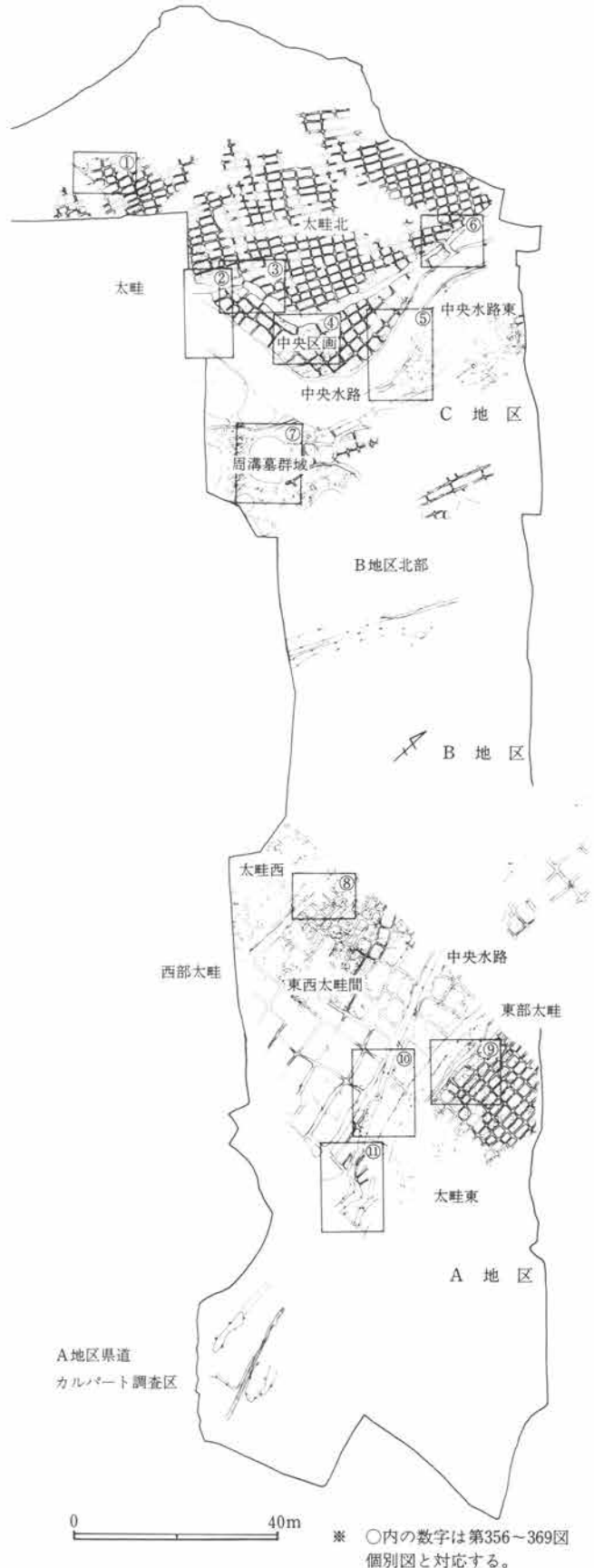
## (11) 古墳時代後期水田跡

### 1 概要

古墳後期水田跡は染谷川以南、調査区域内、一帯に自然堤防微高地から低平湿潤地にかけて8370m<sup>2</sup>にわたって検出される。水田跡が確認ができた区域は二ツ岳火山灰層（FA）の分布区域内である。調査区域内には広域に二ツ岳火山灰（FA）の堆積があり、火山灰を除去することによって、火山灰の直下の黒色土（第IV a層）上面の水田面の微細な起伏、凹凸を容易に表出することができる。このことが、遺跡内二ツ岳火山灰（FA）の堆積が及ぶ区域の水田跡の存否、水田跡の克明な形態把握を可能にするところとなっている。

**水田跡の分布** 水田跡は南部低平湿潤地帯、A地区県道カルパート調査区以北からC地区の染谷川左岸微高地帯にかけて一帯に検出される。染谷川の右岸側D地区では二ツ岳火山灰（FA）層の堆積が一帯的に認められるが、直下の黒色土（第IV a層）上面には水田跡は認められなかった。

水田跡の広がり、A、B地区県道カルパート調査区以南はカルパート南調査区で畦跡など明確な水田跡の痕跡を認めることはできず、また以南への広がり不明である。A、B地区並びにC地区水田検出域では北及び南方向、調査区域外へ遺構は延び広がっている。染谷川縁辺部では河岸上端のラインで水田区画が途切れていることから水田跡はさらに西に伸びていたが、河川の侵食によって削られたものと判断できる。C地区微高地帯河川改修部西南半部では二ツ岳火山灰（FA）の堆積が見られないため水田跡は検出できない。しかしこの区域には水田限界線らしい畦の状況も見られ、また限界線の外には水田跡と同期あるいはやや遡る時期（古墳中期～古墳後期初頭）の住居跡が2軒検出されている。



第354図 古墳後期（FA下）水田跡全体図、個別図、位置図



第355図 古墳後期水田跡、弥生、古墳前期遺構の位置関係 C地区

(29号、103号住居)

**土層堆積** 水田跡が検出された区域の土層の状況は、C地区微高地帯と低平湿潤なA、B地区では土層堆積状況は異なる(第4章標準層序、第328図参照)。水田面は第IV a層上面に検出されるが、第IV a層の堆積状況は特に両地区では様相を異にする。A、B地区では浅間C軽石混土層は純度の高い黒灰色土で7cm前後の厚さに堆積している。水田耕土はこの軽石層の上位層、厚さ7cmの黒色軟粘質土である。この黒色耕土中には軽石の混入は少ない。C地区微高地帯では、水田耕土が見られる第IV a層はやや粘質な浅間C軽石を多量に混在する土層であり、層の厚さは平均的には10~15cmであり、水田耕土は層中最上部に3~4cmの厚さで認められる。黒色水田耕土面上にはC地区、A、B地区とも同様に二ツ岳火山灰(FA)が厚さ7cm前後、間層はなく、直接堆積している。FA上位層の二ツ岳火砕流氾濫層の堆積状態は両区では層の上面のレベルはほぼ同じであるが、堆積の厚さが大きく異なる。両地区の水田面の比高は約50cmであり、およそこのレベル差が二ツ岳火砕流氾濫層の厚さに対応している。

**遺存状態** 二ツ岳火砕流氾濫層の厚さは、上位の後出遺構の状況とともに水田跡の遺存状態に大きく関わる。この点でC地区とA、B地区では状況が異なる。A地区、及びB地区南半部は二ツ岳火砕流氾濫層が厚く、後世の深い掘削を伴う遺構が少ないことから、水田跡の遺存状態は良好である。これに対しC地区微高地帯では二ツ岳火砕流氾濫層の堆積が薄いことに加えて上位層に高い密度で営まれた奈良・平安期の住居など、後世の遺構の攪乱により、失われた部分が随所に見られる。

C地区微高地帯西部染谷川縁辺部(65-C36)では削平、あるいは土壌流出により水田耕土(第IV a層)、二ツ岳火山灰(FA)、火砕流氾濫層(第III層)が失われている。周囲の水田区画の状況からこの部分にも小区画水田が及んでいたと思われる。

## 2 C地区

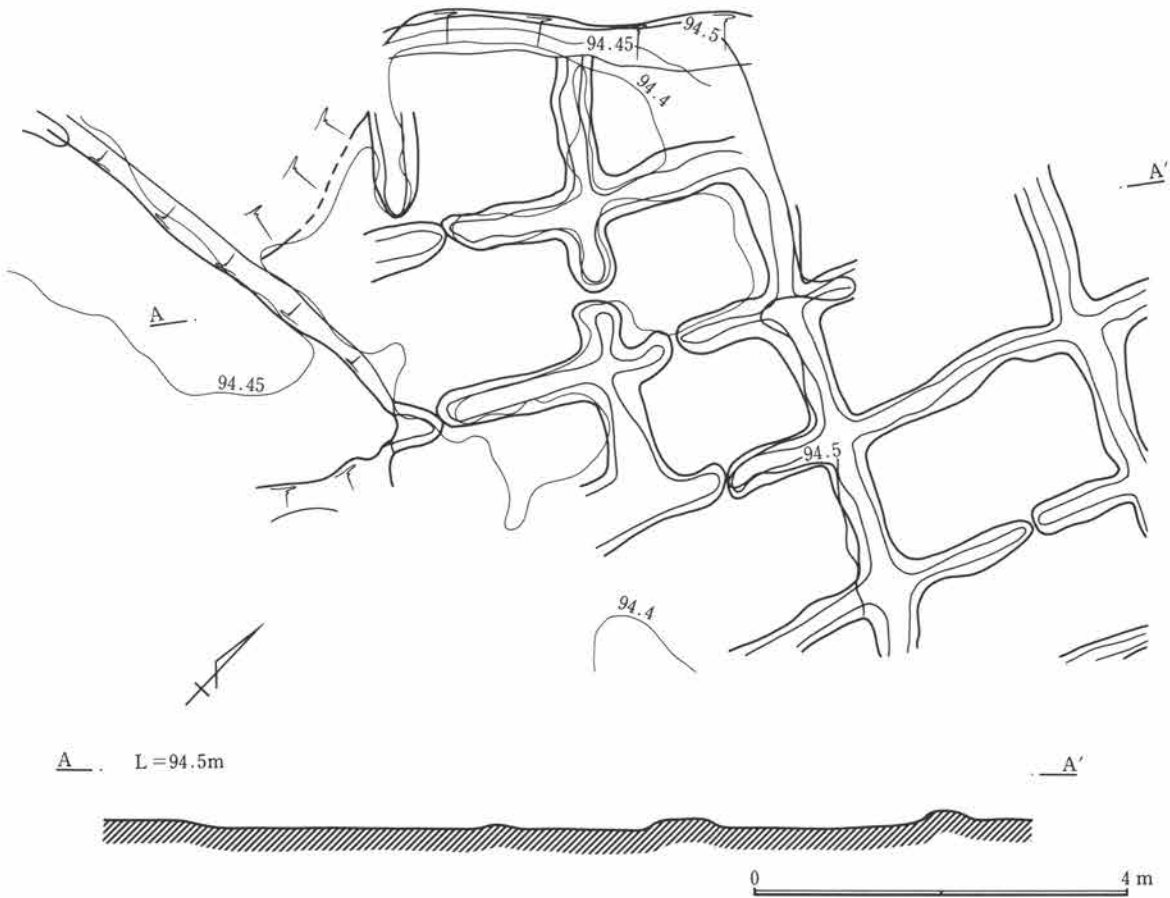
C地区は染谷川の左岸自然堤防微高地を中心とし、南は微高地から背後の低平湿潤地へ地形が移行する辺りまで、北は、微高地に対し西からの侵食を進行させている染谷川により限られる。調査区は自動車道の路線幅約60mの他、染谷川河川改修部調査区が染谷川の左岸に沿って西側に設けられている。水田跡の分布域は前述のように河川改修部の西南部の一部を除き調査区一帯に見られる。

C地区中央部には幅10m前後に及ぶ大規模な水路(中央水路)が北東-西南方向に洋弓形に曲流しながら調査区を横断する。この中央水路の西側には、くの字状に太畦が調査区を横断し、中央水路との間に紡錘形の区画を造っている。C地区水田跡の構成はこの中央水路と太畦により分割された3区域からなる。この3区域それぞれの間では地形や水田の下に遺存する前代の遺構群の性格が異なり、これに関連して水田形態はそれぞれに少なからぬ違いを見る。以下では3区域をC地区太畦北、C地区中央区画、C地区中央水路東、周溝墓群域部と呼称する(第354図参照)。

### 1) C地区太畦北

C地区太畦北では二ツ岳火砕流氾濫層の堆積が比較的薄くなる一方、奈良・平安期の遺構群が多数存在し、竪穴住居、あるいは掘立柱建物遺構の攪乱により不明な部分も随所にあるが、一帯に短軸1~1.4m、長軸2~2.5mを平均的規模とする小区画水田が網目状をなし広域に見られる。

**長軸、短軸畦の走行** 小区画の標準的形態は、一定間隔で平行する長軸畦と、これに直交し同様に平行配置される短軸畦により方眼状の小区画が形作られる。長軸畦は区画構成上基軸をなし、C地区北部全体を一

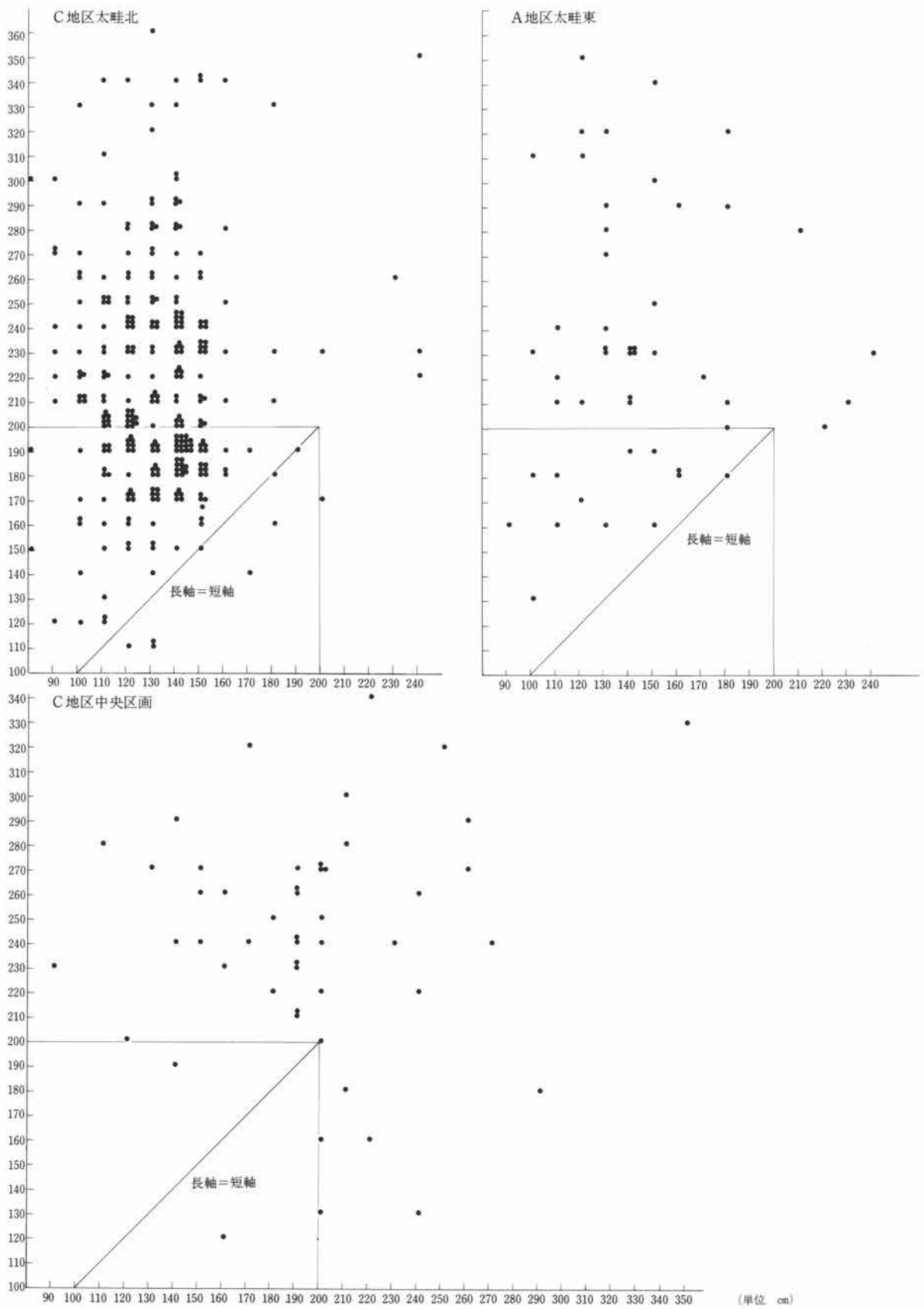


第356図 ①C地区水田跡西限部

直線状に平行配置されている。ただし長軸畦の配置については基本的には一直線状に平行させて設けられているが太畦による大区画の形に従って数ヶ所で条数が増減している。西半部の長軸畦10条前後は、大きく緩く蛇行し、中央部はほぼ一直線状、南部太畦付近では太畦が南方向をとるに従って、これに応じて同方向に長軸畦の角度がふれている。これに伴い2箇所（不明部分でもう一ヶ所ある）で長軸畦に短軸畦をT字状に結ぶことで長軸畦の方向、一区画の形状、面積の調整を行っている。長軸の方向は南部太畦付近でN-29°-E、西端部でN-38°-Eをとる。長軸畦の方向は全体的にわずかな広がりが見られる。C地区北部の水田面の勾配は1.2/100、等高線は現染谷川に平行する。長軸畦方向は等高線に平行する方向をとり、また現染谷川の流路方向に平行する。

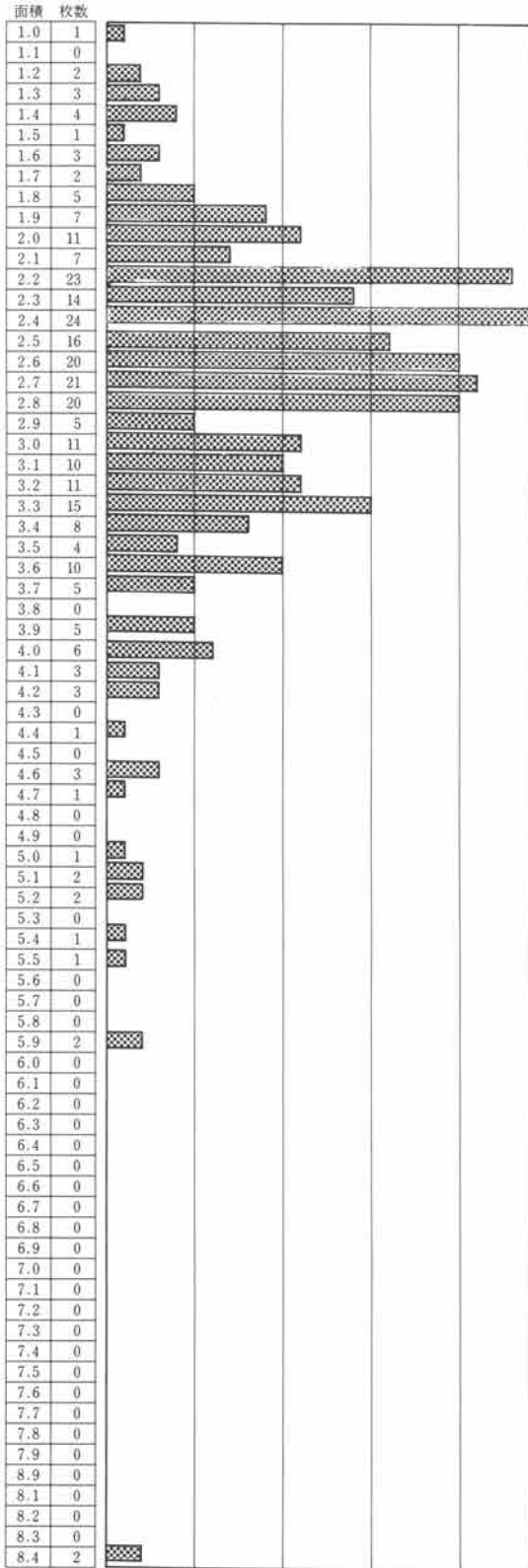
短軸畦は長軸畦にくらべて細く、全体的には長軸畦に直交するように方眼状に設けられているが、一区画単位で方向位置にわずかなズレや、段が見られる。このことは畦を設置する順序に関係すると思われる。

**区画の形状、面積** 本区の畦区画の形状、面積は他の区に比べて規格性が高い(第357図、第358図)。長軸1.9m、短軸1.4mの区画が15区画、面積は2.4m<sup>2</sup>を測るものが24区画とそれぞれ最も区画数が多く、全体的にも計測値はこの前後に区画数の集中がある。計測値が比較的密に集中する範囲は長軸1.7~2.5m、短軸1.1~1.5mの範囲に計測値があるもので、これが太畦北の全区画数の63%を占め、面積は2.3~2.8m<sup>2</sup>の範囲に集中があり、この範囲には138区画あり、これが太畦北区全体の46%を占めている。このグラフでは形状、面積の計測値の集中範囲は他の区域（C区中央区画、A区太畦東）に比べ集中度が高いことと、全体的に面積が小

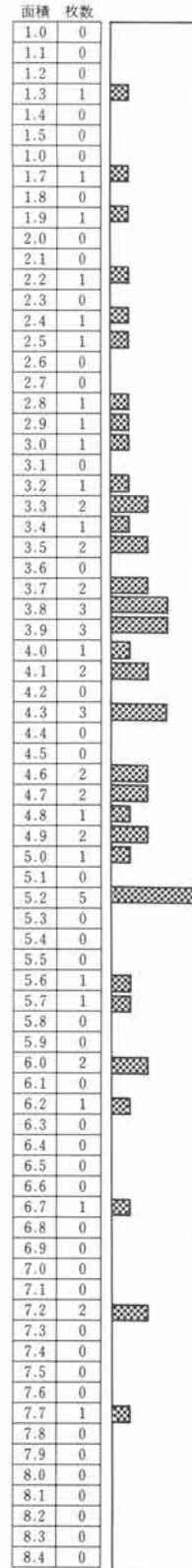


第357図 地区別水田区画、長・短軸長さ分布グラフ (数値は畦の下端間)

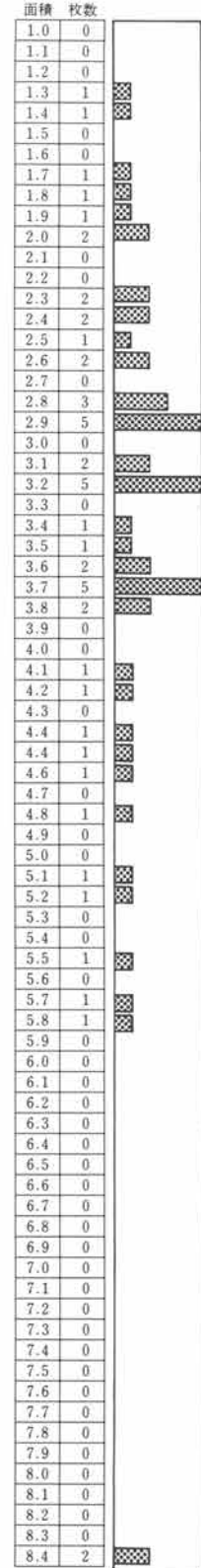




C地区太畦北



C地区中央区画



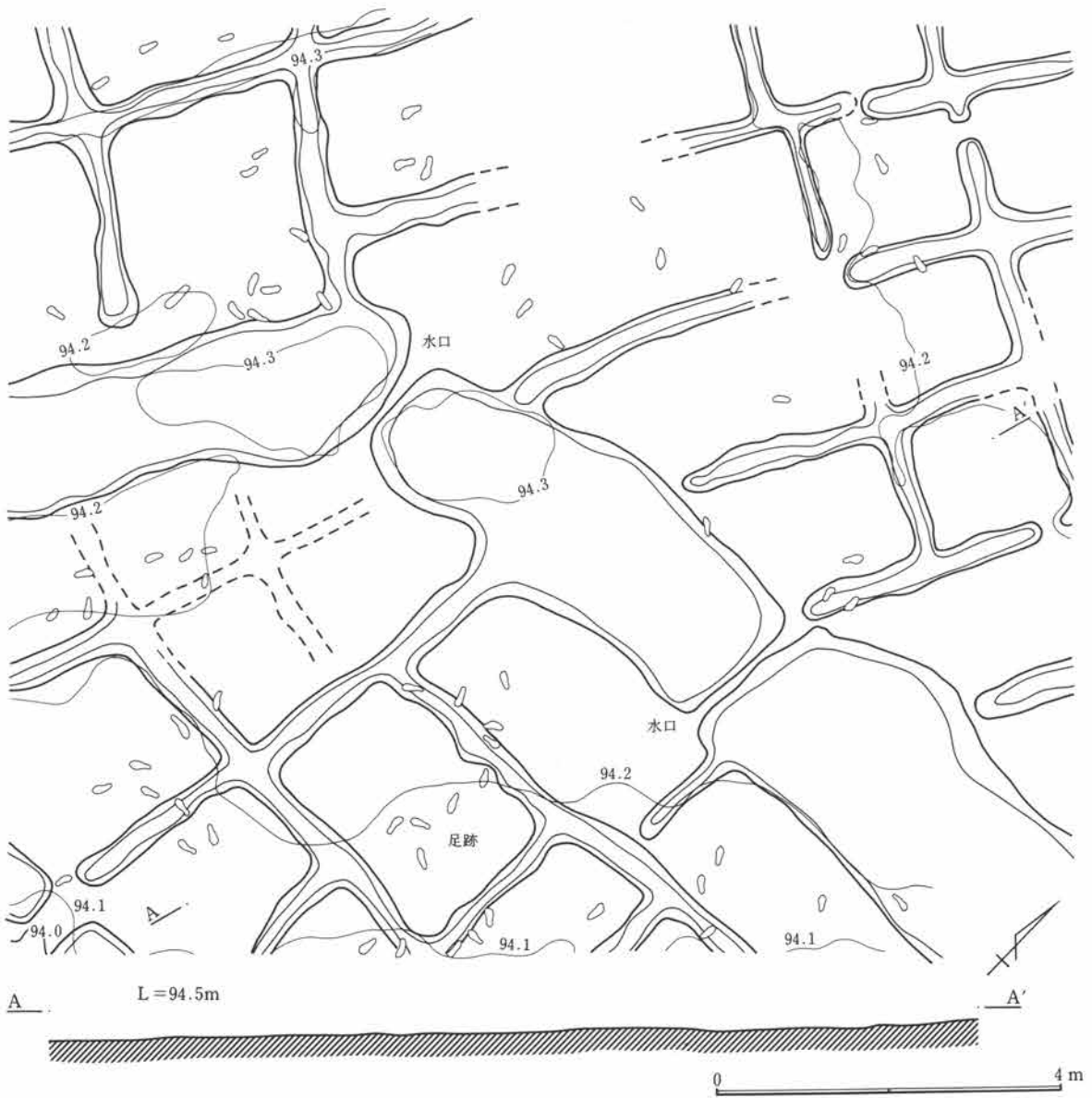
A地区太畦東

第358図 地区別水田区画面積頻度グラフ（畦を含まない）

さいことが指摘できる。区画数が集中する部分のそれぞれの面積を比べるとおよそC区中央は本区の1.6倍、A区太畦東の小区画は1.3倍である。

なお、C区太畦北の水田区画が検出できた区域の面積は、畦部を含めた面積が1296.3㎡、畦部を含めない面積が8631.1㎡、面積比は67%である。

**水口** 水口は網目状の水田区画の各所で検出される。各小区画では水口は短軸畦中央を幅10～15cm前後開口させ、1区画に対して1～2箇所設けられている例が最も多い。場所によっては縦に隣接して連なる区画の短軸畦が連続的に連なって水口を検出している箇所も見られる。水口が設けられた区画は全体的には頻度は高いが、その一方ではこれが検出できない区画も多い。C地区太畦北では確認できた水口は全部で73箇所であり、この内短軸畦に54箇所、長軸畦に19箇所見ることが出来る。長軸畦に水口が設けられている箇所は太畦に沿う部分に集中して見られる。この部分はC地区太畦北区域の配水の末端部であり、灌漑水が滞水し、

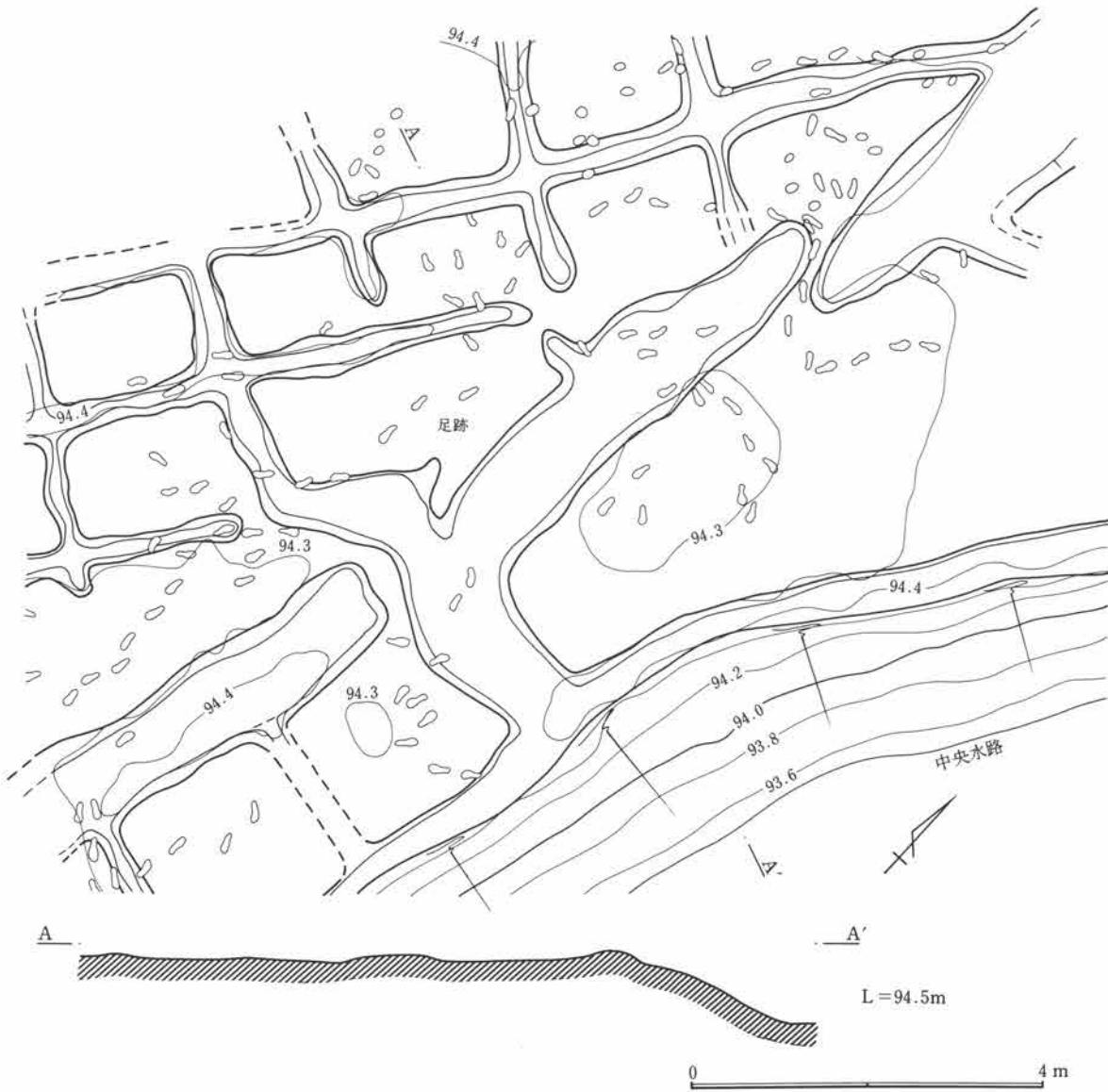


第359図 ③C地区太畦水口部

排水口を要する箇所である。一帯に広がる小区画への配水は短軸畦に設けられた水口を通じて行われている様子が多くの箇所で見られる。ただし小区画のうちには四辺の畦を良好に検出しながらも水口を検出することができない例が多数ある。C地区北部では四辺が良好に検出され、水口の存否が確かめられた区画の内59箇所で見つかる。この場合でも短軸畦は長軸畦よりも総じて低いことから、これらの区画への給排水は短軸畦越しに行われたものと思われる。

## 2) C地区太畦

**形状、規模** C地区北西部大区画を東南部より区画する太畦は南に大きく蛇行しながら貫流する。大規模な水路におよそ沿い、くの字状に屈折しながら調査区を横断する。太畦の規模は北から南へしだいに幅を増しており、北東端部で80cm、南北端部で2.1m、最大幅は、中間屈曲部で2.2m、高さは10cm前後である。小区画水田が太畦と接する部分では水田区画は不整形であり、また、面積も大小様々である。



第360図 ⑥C地区太畦、中央水路

6 検出した遺構、遺物

**水口** 太畦は部分的に途切れ、4ヶ所で水口を開口している。水口の幅は10~15cm。

**遺構面下の状況** この太畦が走っている位置は、このラインを境に南は水田面の勾配がやや強まり(1.2/100→1.7/100)、レベルが一段低くなる。これは遺構面下を北東-西南に貫流する埋没した幅20mの旧河道の影響によるものであり、太畦の位置は旧河道の西側縁辺に位置している。

3) C地区中央区画

**概況** C地区を緩く、S字状に横断する太畦と大規模中央水路跡の間の区域である。西南部、北東部は太畦が中央水路跡に沿う畦に結んで水田区画を閉じている。水路跡の縁辺には水路に沿って幅90cm、高さ3~4cmの畦が設けられており本区画の南はこの畦に画されている。この区域は一面に厚さ7cm前後に堆積するFA(二ツ岳火山灰)及びこの上位にFPF-1(二ツ岳火砕流泥濘層)が厚く堆積する(C地区北区画よりも30cm前後厚い)。このため後世の遺構による攪乱を受けることなく水田跡の遺存状態は良好である。勾配は一定しないが1.7/100前後である。



第361図 ④C地区中央区画

**区画の形態、畦の方向** 水田区画の形態は全体的に不定形で一区画の面積も一律でなく、総体に近隣区と（C地区太畦北など）形態の違いが目立つ。水田形状が不定形なのはこの区画が、狭長であることによるところが大きいと思われる。水田区画を構成する畦の配置は、長軸畦の方向を太畦に沿うよう配しており、北東部は南北方向、西南部は東西方向をとっている。ただし、西南部では個々の区画の形状は特に不定形であり、畦の主軸は東西方向をとるが、長辺方向は一定していない。区画の形状、面積の計測値は分散的であるが、長軸2.2～2.7m、短軸1.4～1.9mに区画数の集中が見られる。これが本区域全区画数の43%を占める。面積についても他と比べ大きい傾向にあり、しかも分散的である。面積値の集中度は低いが、3.7～4.3㎡の範囲にやや集中している。集中部の平均的面積値はC地区太畦北に比べるとおよそ1.6倍である。なお、本区画の畦部を含めた面積は360.9㎡、畦部を含めない面積は279.1㎡、面積比は77%である。

**水口** 中央区画を取り巻く畦に設けられた水口は北西側の太畦に3箇所、水路側の畦に1箇所検出している。一方小区画を構成する畦に設けられた水口は、区画のコーナー部で畦が途切れ開口部を造っているものが多い。短軸畦に設けられた水口は13箇所、長軸畦を切る水口が2箇所見られる。長軸畦は等高線に平行する方向を取り、水口は長軸畦に沿って水が流れるよう設けられている。水口が設けられていない区画は19区画、1～2箇所に水口が設けられた区画は26区画、不明の区画は11区画あり、ここでも水口の見られない小区画への給水が短軸畦越しに行われていることを考慮しなければならないだろう。

**耕土** 水田耕土は黒色粘質土で太畦の北の区域に比べて低湿である。水田面は足跡が全体的に目立って見られる。この区域の足跡は周囲の区域に比べ踏み込みが深い。水田経営時は周囲よりも湿潤であったことが予想される。

**遺構面下の状況** この区域は、弥生時代から古墳前期にかけて侵食と埋没を進行させた大溝の河道域内あたり、水田は旧河道の埋没土上にある。この区域の水田レベルは周囲よりも最大で30cm前後低い。水田面上にはFA、及び、二ツ岳火砕流氾濫層の堆積を見るが、氾濫層の堆積はこの区画の地盤の低さに応じて厚い。奈良・平安期では氾濫層上面は一帯に平坦化し、FA下の旧地表の起伏の影響を認めることはできない。このような土層堆積状況からはFA層の堆積後の地盤沈下をほとんど認めることはできない。水田経営時、すでに調査時と大差のない地形であったと考えられ、太畦及び小区画の不定形性などこの区域の水田形態の有り方は水田検出時の地盤の起伏、土壌の状態に対応したものと思われる。

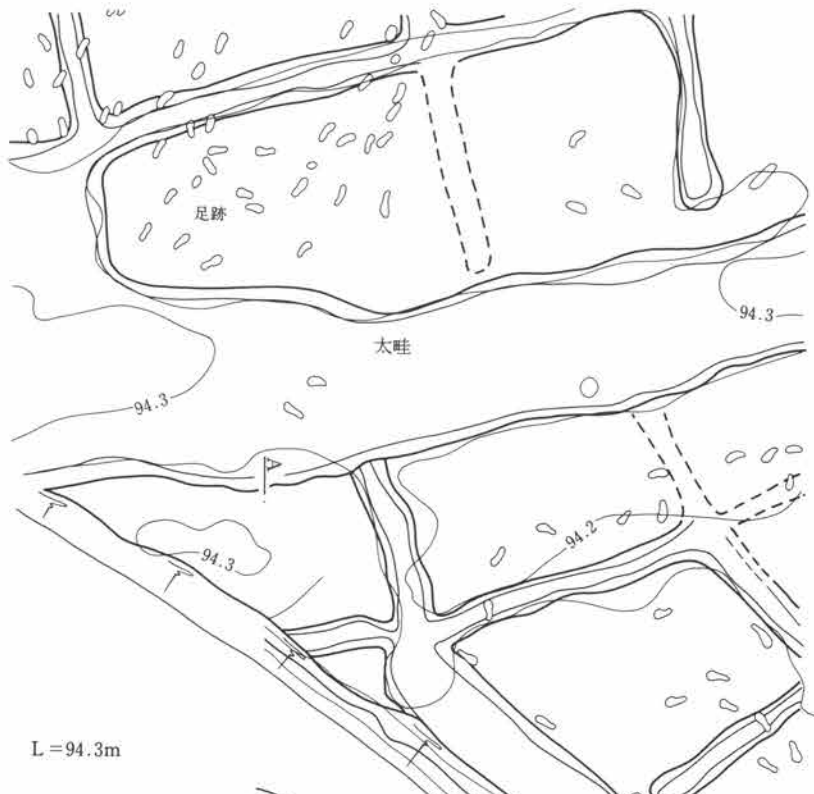
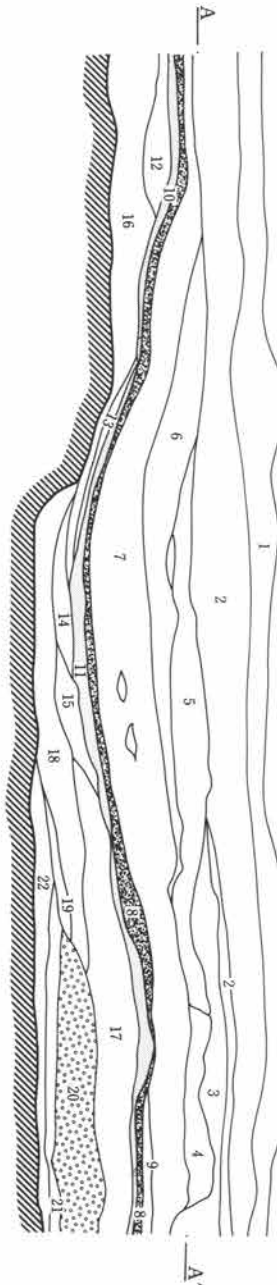
#### 4) C地区中央水路跡

**形状、規模** C地区中央部を洋弓形に著しく蛇行し、横断する大規模な水路が見られる。水路幅は南に漸次幅を増しており、北端で幅5m、南端で8m、中央部の曲流部が最も幅が広く、10mを測る。流路形状は第396図に見るように弥生期から古墳前期までしだいに蛇行を強めながら流路変遷する小河川の最終流路(A溝)の位置に一致している。

小流路は自然流路を水田造成時に流路の変更なく整備したものと思われる。水路の断面形状は緩い逆アーチ形を呈しており、壁面、及び底面は比較的平滑で複雑な起伏を見ることなく、水流による侵食の痕跡は認められない。

**覆土** 覆土は水路底部は本来が自然河川であるため水路整備時点での底面を明確に特定できない。FA層直下層は厚さ約15cmの黒色粘質土で砂層などは認められない。この層は水路壁土、水田耕土に対応するもので、土質も相互に近似している。FA直下の黒色粘質土層下には、浅間C軽石を含む砂質土層を見る。以下河床面までFA層下面より60cmを測り、FA直下層より以下は砂質、あるいは砂層で、これら土層の堆積過

6 検出した遺構、遺物

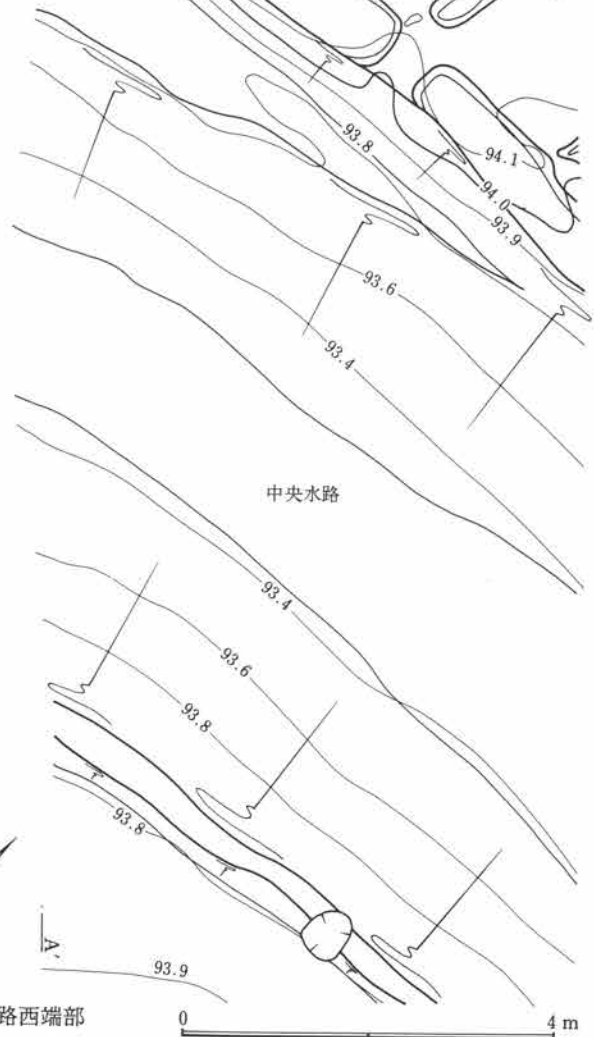


L=94.3m

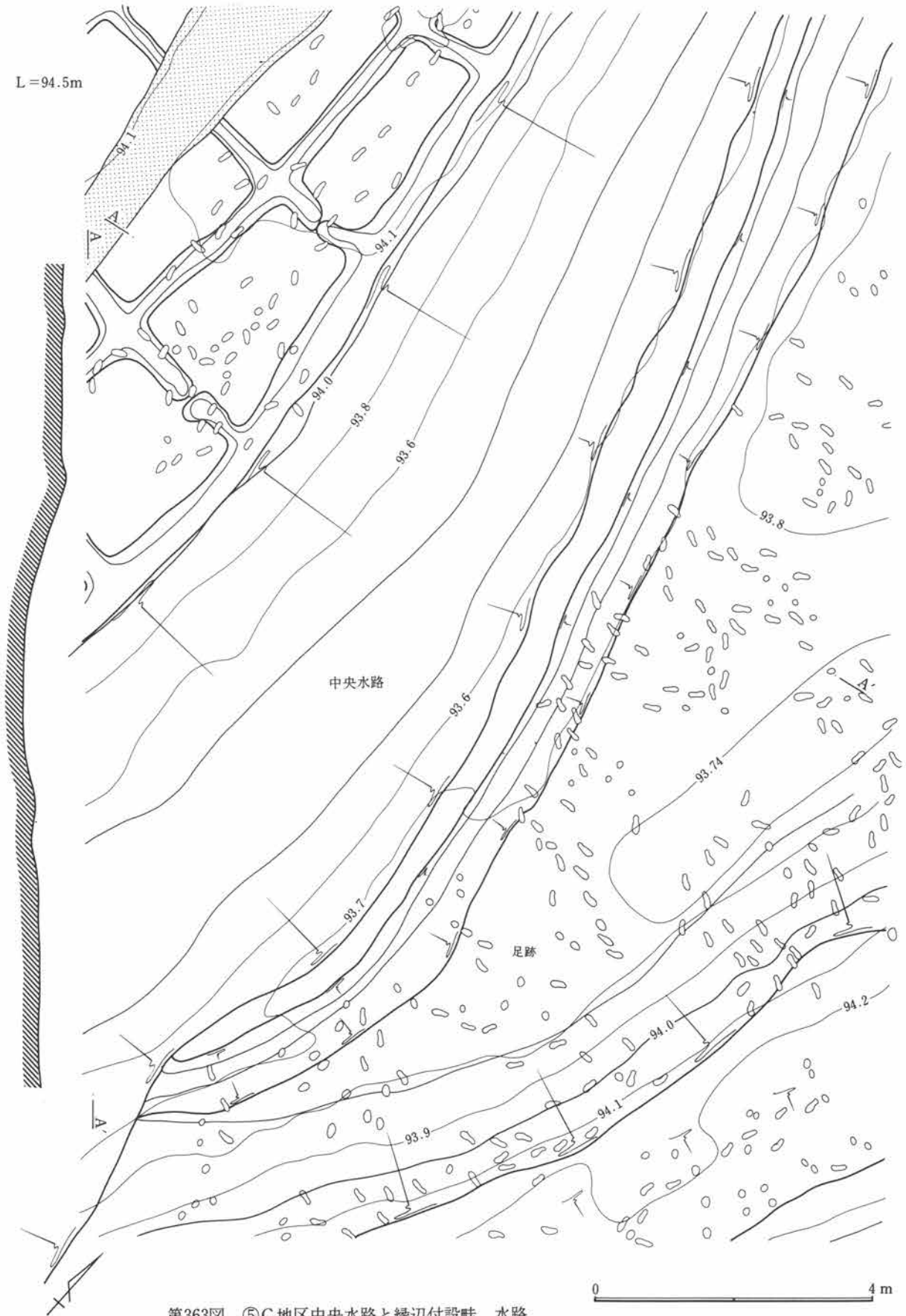
Aセクション

- 1 灰褐色 A軽石混土層。現耕作土。
- 2 浅間B軽石混土層。最下層は浅間B軽石主体。
- 3 暗褐色
- 4 淡黄褐色 氾濫層。二ツ岳墳出物主体。第III層。
- 5 暗灰色 遺構フク土か。
- 6 灰褐色 砂質。氾濫層。第III層。

- 7 黄褐色 砂質。角安小礫点在。第III層。
- 8 FA (二ツ岳火山灰) 純層。
- 9 あずき色味の肌色。粘質 (FA)。
- 10 黒色 水田耕土。
- 11 黒色 軟粘質土。
- 12 黒褐色 浅間C軽石を含む。
- 13 浅間C軽石混土層。
- 14 暗灰色 砂質。浅間C軽石若干含む。
- 15 暗灰色 砂質 黒色有機物が混入。
- 16 黒褐色 やや粘質。
- 17 暗灰色 浅間C軽石多く混入。
- 18 暗灰色 砂質。黒色有機物が縞状に入る。
- 19 砂層。
- 20 浅間C軽石純層
- 21 暗灰色 粘性強い。
- 22 暗灰色 砂質。



第362図 ②C地区中央水路西端部



第363図 ⑤C地区中央水路と縁辺付設畦、水路

## 6 検出した遺構、遺物

程では、常時小規模な水流が介在していたと思われる。

**中央水路縁辺付設畦** 水路の両縁辺には小規模な畦が水路壁の上端位置に設けられている。右岸側では畦幅60cm前後、高さ10cmを測る。畦は水路全延長にわたって認められる。水路の東側（左岸側）は北半部で延長35mにわたって設けられている。畦幅は比較的広く、80～90cm。畦は水路の東側の上端位置に設けられている。畦の東傍、水路の反対側には幅70cm～1.5mの小規模な水路が走る。畦は中央水路の半ば、右曲する地点で切れ、東側に沿う水路と同じ地点で中央水路に結んでいる。

### 5) C地区中央水路東

**区画の形態** 本区域では埋没旧河道が大きく水田形態を規定している。水路隣接部北部には北西側を曲流する中央水路に画され、東側に段を作るテラス状の区画が見られる(36～50-C13～23)。調査区域内で区画の東西幅16m、面積は250㎡以上を測る。この内には小区画の畦は一部に痕跡を見るが全体的には検出できない。この区画は周囲の水田面に比べて40cm程低く、中央水路底面より40cm高いレベルにあって、水田面は中央水路方向に緩く傾斜している。この区画は埋没旧河道上にある、東側の段は旧河道の東河岸縁辺と位置を同じくする。

**耕土** この区画の耕土は黒色軟粘質で、湿潤であり、耕土面には踏み込みの深い無数の足跡が良好に検出されている。

**水路** この区画の西北縁辺には前述のように中央水路との間に幅90cm程の畦、さらにやや内側には排水路と思われる小規模な水路が畦に沿って走っている。北は調査区域外に抜け、南は中央水路に流れ落ちるように結ぶ。

### 6) 周溝墓群域部

C地区南部には前代の周溝墓の残丘が4箇所残存しており、水田造成の際残丘として取り残され、さらに土を盛り上げている様子が見られる。4号、5号、6号周溝墓の残丘が接近して並ぶ。西南端部のマウンドについては下層に周溝墓を検出することはできなかったが、周溝墓の残丘である可能性は高い。5号周溝墓残丘の西外周部は水田耕土は平坦に造成され、耕土は軟粘質で、一帯に踏み込みの深い足跡が濃密に見られる。残丘の北東外周部には形状の整わない小規模な畦を配した小区画水田が5～6区画造られている。5号周溝墓の残丘の東には6号周溝墓の残丘を見るが、この西側外周部には幅5mに円弧状に水田区画が見られる。この区画は6号周溝墓の周溝上に位置していて、周囲よりも20cm前後低い。水田区画は6号周溝墓に大きく規定された形となっている。

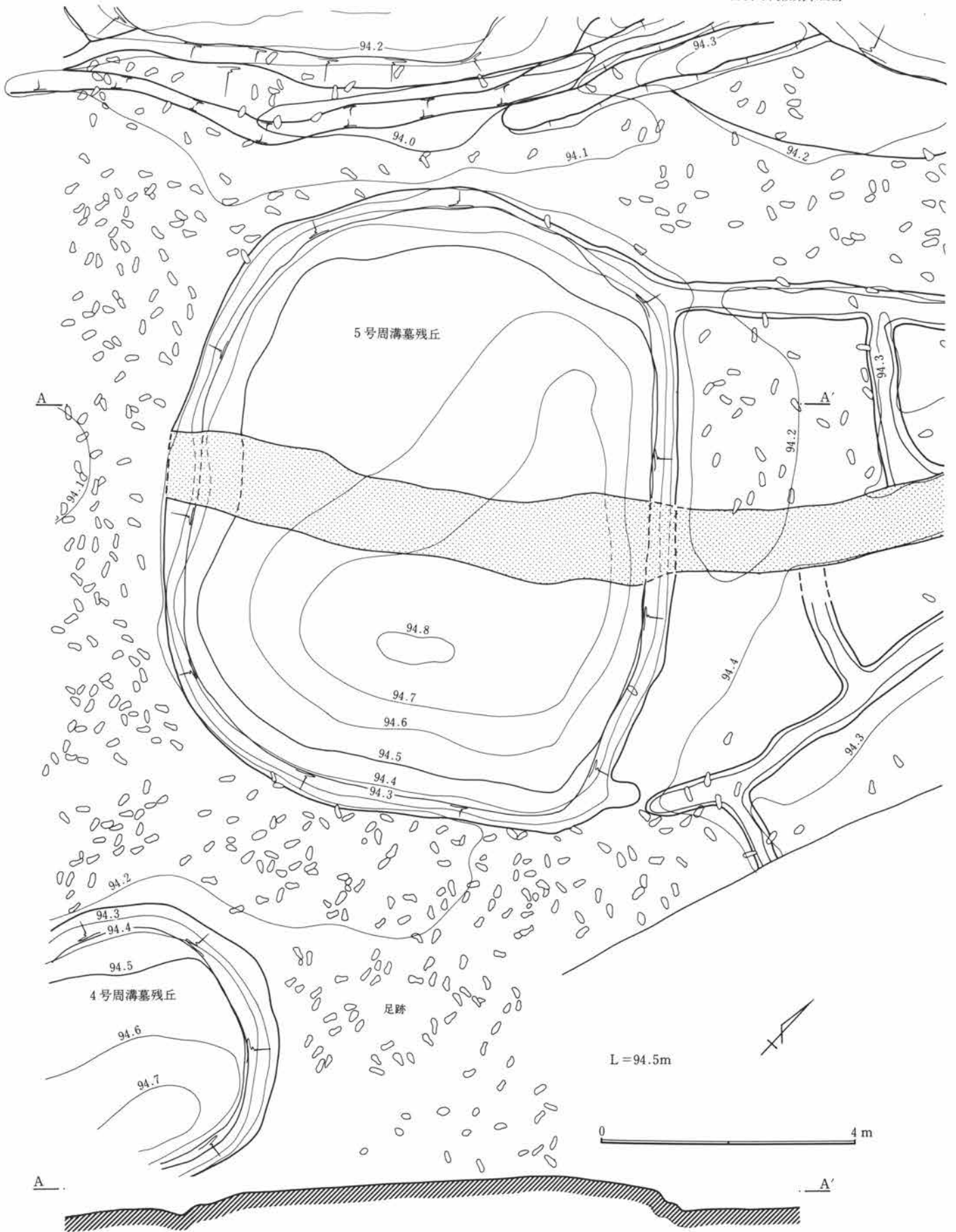
本区域の東部は中世溝など後世の攪乱が著しく、水田跡を検出できた箇所は少ない。

**スリ鉢状窪地** 水路隣接部西南端部には南北9m、深さ70cmのスリ鉢状の窪みが見られる。この窪み内にも足跡らしい痕跡が見られるが極めて湿潤であり、ここを水田区画とは認め難い。この窪みは前代の地形によるものであり、弥生～古墳前期旧河道が湾状に入り込んだ箇所である。覆土は最下部FA層。この上位に60cmの厚さで二ツ岳火砕流(FPF-1)氾濫層を見るが氾濫層上面は周囲と同じレベルの平坦面となっており、FA降下後の地盤沈下の痕跡は認められない。水田経営時も同様の地形形状であったと思われる。

## 3 B地区北部

この区域ではFA下より南北方向に2条の溝が検出される。両溝はほぼ同規模で1～1.5m間隔で並走する。西側の溝(81号溝)は最南部で最大幅1.1m、深さは10cm前後で浅い。規模は一定せず、北部では不明確





第364図 ⑦C地区周溝墓群域の水田跡

## 6 検出した遺構、遺物

になる。東側の溝は（82号溝）最大幅80cm、深さ45cmを測る。溝は東西方向から南北方向に緩く円弧状を呈し、南方向へ漸次、溝幅、深さを増す。東端部は約30cm段状に低くなる区域に結ぶ。

**遺構面下の状況** この区域ではこの2条の溝以外に水田に関わると思われる遺構は検出されない。なお検出した2条の溝の下層には弥生後期～古墳前期の大規模な溝がほぼ同方向で集中し重複するが、方向、位置にややズレがある。前代の溝を直接踏襲してはいないが、水系に大きな変化がなかったのではないかと思われる。

## 4 A地区、B地区南部

A地区からB地区にかけて東西80m、南北40mにわたって比較的広域に、良好な遺存状態で水田跡が検出されている。北辺は東～西に調査区を貫く近・現代の堀により切られ、南は、県道カルパート調査区では検出することができなかった。この区域には、一帯に低平湿潤地で、勾配は0.3/100であり、特に緩い。南北方向に約40m隔てて2条の太畦が並走するように設けられている。この2条の太畦に画された3つの区域内ではそれぞれ水田の形態を異にする。2条の太畦を境に西から太畦西、東西太畦間、太畦東と呼称する。

### 1) 太畦西

**区画の形態** 北方向は近・現代の堀、西、南は調査区域外であるため水田域は不明。西区画が特に他と異なるところは、小区画の畦が見られないことである。

**耕土** 区画内の耕土は黒色軟粘質で踏み込みの深い足跡が無数に検出されている。水田には上下10cm前後の緩い起伏がある。特に、西部太畦沿いは幅60cm前後、深さ10cm程緩く溝状に窪んでいる。

### 2) 西部太畦

太畦は南北方向に調査区を貫く。幅は、1.2～1.8mで南部で幅が増す。高さ15cm前後。畦の上面は比較的硬い粘質土であり、足跡などの圧痕は明確に残っていない。

**遺構面下の状況** 浅間C軽石下の調整ではこの西部太畦直下より、太畦と同位置、同方向の規模の大きな溝（77号溝）が検出されている。77号溝は弥生後期に営まれ、古墳前期、浅間C軽石降下時、50cm程の深さの溝状の窪みが残っていた。ここには弥生期から古墳後期にかけて水路から太畦への変遷を見る。機能的には性格を異にする遺構であるが、地割の踏襲に類する経過があったのではないかと思われる。

### 3) 東西太畦間

40m隔てて南北方向に平行する2条の太畦に画された区画である。南及び、北への広がり不明。区画内には南北方向、やや斜めに水路が横断する。

**区画の形状** 区画内北半部には小区画に配された畦の痕跡が網目状に見られるが、大方は平坦化し、その部分については小区画は明確に把握できない。小区画は北半と南半部では形態差が大きく、水路の周辺では区画が不整形となっている。

北半部の小区画水田が平坦化した一画では、耕土面に踏み込みの深い足跡が無数に濃密に検出されている。小区画の形状、面積は一定しない。全体的には長軸は2m前後であり、小規模である。これに対し南半部では小区画の面積は北半部に比べると著しく大きい。水田区画は平均的には7m前後を測り、本遺跡ではこれと同様の面積をもつ区画は他に見られない。この部分は畦の検出状態も明確さを欠き推定復元箇所も多く、



第365図 古墳後期水田跡、弥生、古墳前期遺構の対照



第366図 ⑧B地区西部太畦

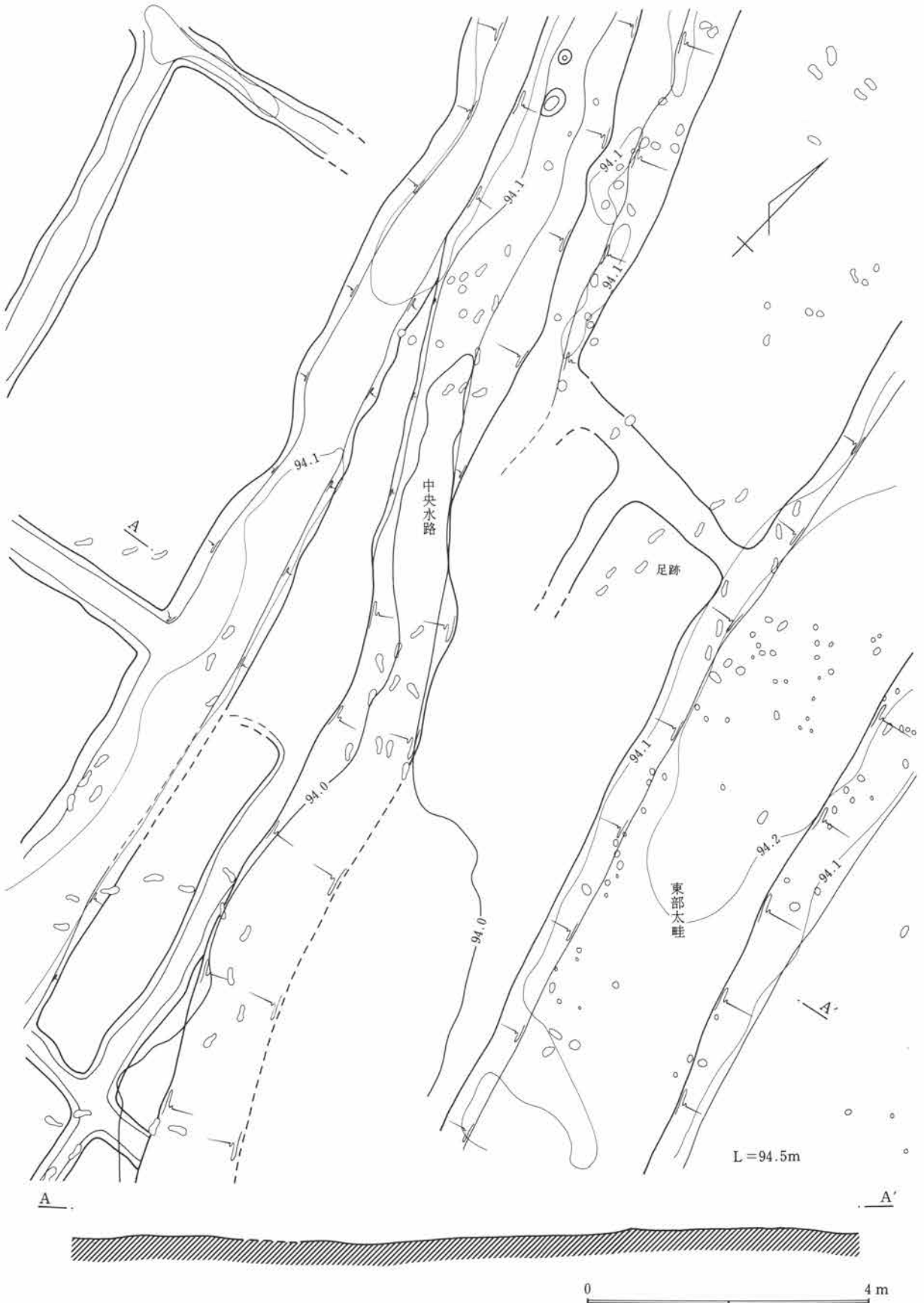
形状、面積を検討する際はより一層の慎重を要する所である。

#### 4) A地区中央水路跡

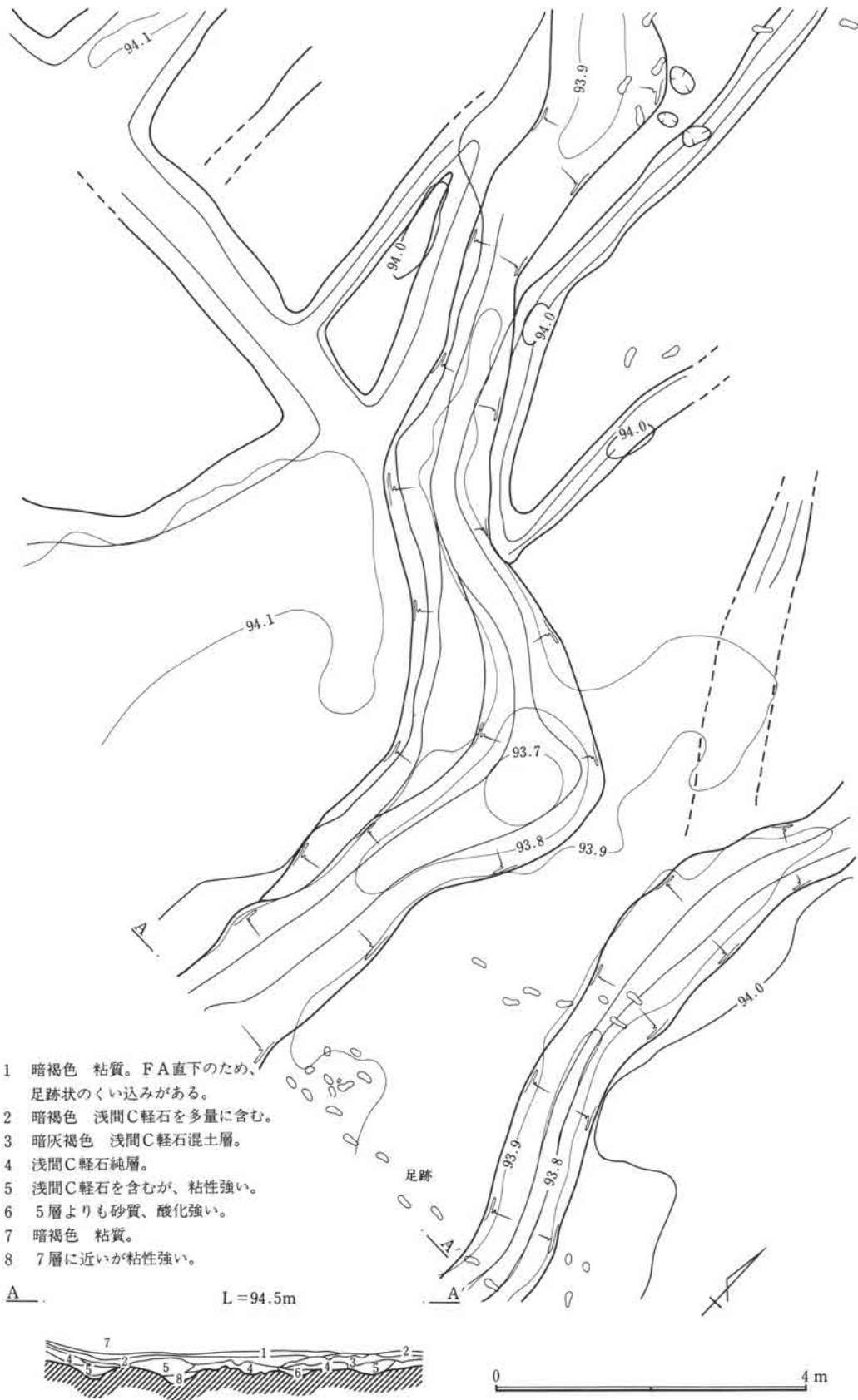
中央区画の東部を区画に対しやや斜方向に横断する水路がある。水路幅は1.2~1.5mで深さは5~10cmと浅く、壁の立ち上がりも緩い。覆土は砂層など見られず、底面上にFAが間層を挟むことなく堆積している。溝の南縁辺に沿って畦が設けられている。この畦幅は50cm~1.5mで幅は定まっていない。西側に沿う畦は南半部では溝から分離し、長方形水田区画を構成する幅1m以上の比較的大きな畦となる。

本水路は南部、県道カルパート調査区の手前で小微高地帯と北から南下する東部太畦との間隙を東に一旦曲流して抜け再び右曲して南下し、県道カルパート区以南では不明確となる。

**遺構面下の状況** この水路の流路位置の直下には前代の流路を見る。水路の直下には浅間C軽石の降下に前後する古墳前期の122号溝が検出されている。122号溝はB地区東南部を南北に流下する7条からなる溝群(B溝群)の西端部に位置する溝であり、規模は、幅62cm、深さ10cmで浅間C軽石主体混土層により埋没している溝である。B溝群は古墳前期、浅間C軽石の降下に前後して営まれた溝よりなるが、122号溝は砂の含有の少ない浅間C軽石に埋没していることから、B溝群でも軽石降下後は廃絶した溝と考えられる。



第367図 ⑩A、B地区中央水路 (1)



第368図 ①A、B地区中央水路 (2)

## 5) 東部太畦

A、B地区東部には南北に調査区を貫く規模の大きな畦が見られる。幅は3～4m、確認延長は35m、高さ30cmを測る。畦は全体にFAおよびFPF-1 氾濫層に覆われ、良好な遺存状態で検出している。畦の頂部は平坦に造られ、平坦部の幅は2mを測る。上面の土は比較的硬くしまった黒色粘質土であり、頂部平坦面には周囲に見られるような足跡を検出できない。太畦の北方向は近・現代の堀により失われ、南は小微高地付近まで南下し、小微高地と1mの間隔を以って途切れ、この間をA区中央水路が北から南へ曲流しながら抜ける。

**遺構面下の状況** 太畦の直下層からは古墳前期、浅間C軽石降下に前後する時期に営まれたB溝群が検出される。B溝群中105号、106号溝は溝の中心間2m、上端間隔1.2～1.5mとって一定間隔で平行して走っている。両溝間には部分的に、浅間C軽石を含まない盛り土状の土層が第IVb層の上位に認められることから、これが畦の跡になる可能性が高い(A地区中央部畦状遺構)。FA下水田跡に伴う東部太畦は105号、106号溝の間に位置しており、この間に前代(古墳前期)にも畦が存在していたとするならば、古墳前期から古墳後期に至るまで、地割にとどまらず、水系、水田形態まで踏襲があったと考えることができるだろう。

## 6) 太畦東

本区域は北は近・現代の堀により切られ、東部は漸次二ツ岳火山灰(FA)及び火砕流(FPF-1) 氾濫層の堆積が明瞭さを欠き、水田跡は検出できなくなる。

**水田区画の形態** 南半部は耕土面が平坦で畦は認められない。更に南は県道カルパート調査区で、この調査区では水田跡を検出することができなかったため、より以南の状況は不明である。

北半部には明瞭に小区画水田を検出する。一定した規格で整った小区画水田が網目状に良好に検出される。水田形状、面積の計測値は長軸1.6～3.1m、短軸1.0～1.9mの範囲に広く分布し集中しない(第357図)。面積値は2.9～3.7㎡に区画数がやや高いが、全体的には面積値は分散している(第358図)。長軸畦の方向はほぼ南北方向をとる。地形勾配は緩く、0.3/100、長軸畦方向に傾斜し、等高線は短軸畦に沿う。畦区画の形態、面積の計測値は分散的である。C区太畦北に比べて区画数が高い部分の面積値はおよそ1.3倍である。なお本区の小区画畦を検出する区域の面積は畦を含めると263㎡、畦の部分を含めない面積は179㎡であり、面積比は68%である。

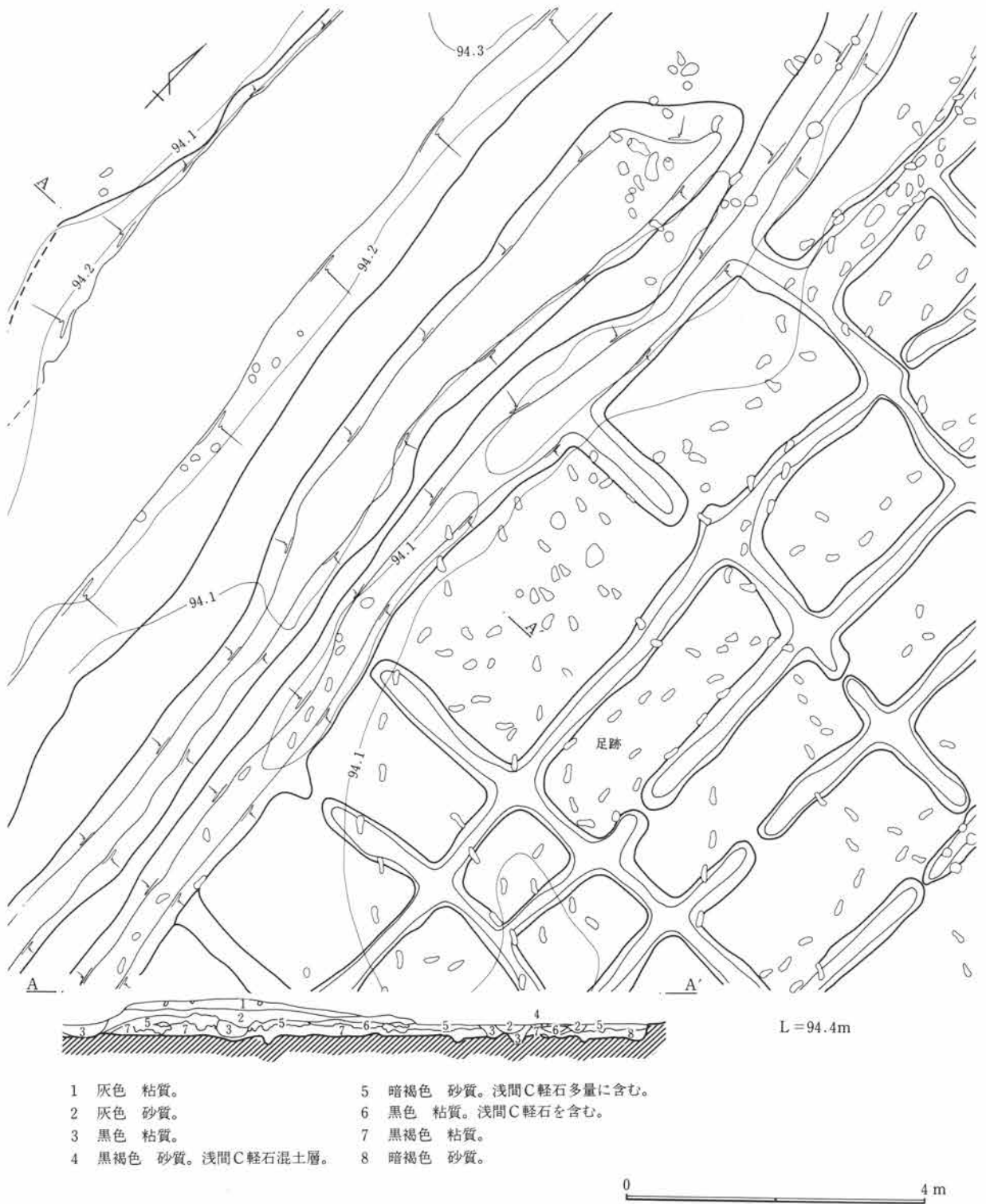
**水口** 水口は短軸畦だけでなく長軸畦に設けられた区画も目立つ。長軸畦に設けられた水口は12箇所、短軸畦に設けられた区画も12箇所を見る。区画に対して3箇所に水口を切る例も多い。水口が1箇所以上設けられた区画は32区画に対し水口を1箇所も設けていないことが確認できる区画は16区画ある。この16区画における給排水は短軸畦越しに行われたものと思われる。

**耕土** 耕土は黒褐色粘質土で、厚さは3～4cm、耕土の下位層は厚さ7cm浅間C軽石主体混土層である。水田面には足跡が無数に点在する。

**水路跡** 西部を区画する太畦沿いには水路が2条に分かれ併走する様子が見られ、複雑な構造を見せている。

## 5 A地区県道カルパート南調査区

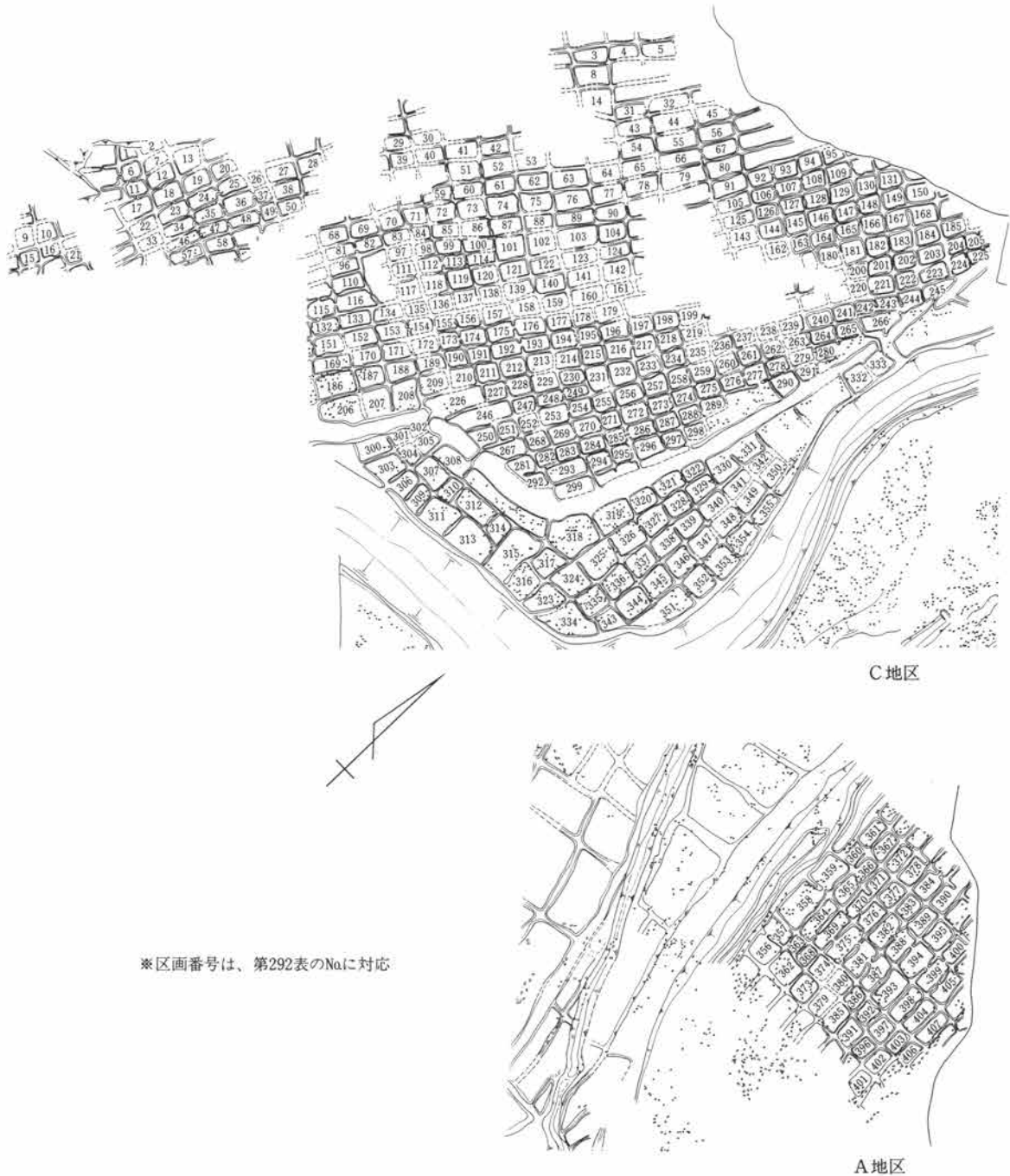
本区では、FA直下面の調査により、溝、畦状の高まりを検出するが水田の畦区画などの検出はできなかつ



第369図 ⑨A、B地区東部太畦

た。調査区域は南北25m、東西35mと小範囲であるため、これらの溝や、畦状遺構の延長、構成については不明である。この区域に水田が設けられたか否かについても明らかではない。





※区画番号は、第292表のNo.に対応

第370図 水田区画番号

第292表 古墳後期水田計測表

No.	畦の中心間			畦の下端間			No.	畦の中心間			畦の下端間		
	短軸	長軸	面積	短軸	長軸	面積		短軸	長軸	面積	短軸	長軸	面積
1	160	190	304	120	150	180	9	190	180	342	170	140	238
2	120	230	276	80	190	152	10	190	210	399	150	170	255
3	160	330	528	120	280	336	11	150	220	330	110	170	187
4	140	300	420	110	250	275	12	170	280	476	140	230	322
5	160	320	512	130	280	364	13	250	270	675	200	230	460
6	170	210	357	130	170	221	14	280	300	840	230	260	598
7	130	250	325	90	210	189	15	150	190	285	100	160	160
8	210	330	693	160	280	448	16	130	190	247	80	150	120

6 検出した遺構、遺物

No.	畦の中心間			畦の下端間			No.	畦の中心間			畦の下端間		
	短軸	長軸	面積	短軸	長軸	面積		短軸	長軸	面積	短軸	長軸	面積
17	200	320	640	140	270	378	83	130	260	338	100	220	220
18	180	280	504	140	240	336	84	140	190	266	110	150	165
19	180	280	504	140	230	322	85	150	260	390	110	220	242
20	180	260	468	130	210	273	86	170	270	459	140	230	322
21	140	170	238	100	120	120	87	170	300	510	130	260	338
22	150	280	420	110	230	253	88	140	280	392	100	230	230
23	160	300	480	120	260	312	89	140	370	518	100	330	330
24	150	280	420	110	230	253	90	170	300	510	130	270	351
25	170	280	476	120	230	276	91	180	330	594	130	290	377
26	170	150	255	120	110	132	92	170	230	391	120	190	228
27	170	290	493	130	260	338	93	170	230	391	120	200	240
28	170	240	408	130	210	273	94	170	230	391	120	190	228
29	140	250	350	110	210	231	95	150	210	315	120	160	192
30	150	300	450	110	250	275	96	140	280	392	100	240	240
31	150	290	435	100	260	260	97	150	230	345	110	200	240
32	140	370	518	110	340	374	98	140	190	266	120	160	192
33	130	250	325	100	210	210	99	150	240	360	100	220	220
34	130	300	390	100	270	270	100	130	280	364	100	260	260
35	160	280	448	120	240	288	101	220	280	616	180	230	414
36	180	290	522	140	250	350	102	220	270	594	180	230	414
37	150	160	240	110	120	132	103	200	370	740	160	340	544
38	150	270	405	120	240	288	104	190	260	494	150	230	345
39	150	230	345	110	190	209	105	160	320	512	120	280	336
40	160	260	416	120	230	276	106	150	210	315	110	180	198
41	170	320	544	130	280	364	107	160	230	368	120	190	228
42	150	280	420	110	250	275	108	170	230	391	120	190	228
43	180	320	576	140	280	392	109	180	230	414	140	190	266
44	180	380	684	150	340	510	110	160	300	480	120	250	300
45	170	310	527	130	270	351	111	160	230	368	120	200	240
46	120	330	396	80	300	240	112	160	220	352	130	180	234
47	120	250	300	90	220	198	113	130	220	286	100	190	190
48	130	300	390	90	300	270	114	120	270	324	90	230	207
49	170	150	255	130	110	143	115	170	270	459	140	230	322
50	150	230	345	110	200	220	116	180	360	648	140	330	462
51	190	300	570	150	270	405	117	200	220	440	160	180	288
52	180	300	540	150	260	390	118	190	230	437	170	190	323
53	180	300	540	140	250	350	119	180	230	414	150	200	300
54	180	310	558	140	280	392	120	170	240	408	140	200	280
55	170	370	629	120	340	408	121	170	270	459	120	230	276
56	180	330	594	140	290	406	122	170	280	476	120	240	288
57	130	320	416	90	270	243	123	170	330	561	140	290	406
58	160	260	416	120	220	264	124	150	290	435	110	260	286
59	160	270	432	120	230	276	125	140	300	420	100	250	250
60	150	270	405	120	240	288	126	150	220	330	100	160	160
61	160	300	480	120	260	312	127	160	230	368	120	190	228
62	180	290	522	130	250	325	128	170	230	391	130	190	247
63	180	350	630	140	290	406	129	170	230	391	140	190	266
64	170	280	476	130	250	325	130	180	200	360	150	160	240
65	170	330	561	130	290	377	131	180	230	414	140	180	252
66	170	390	663	130	360	468	132	150	240	360	110	210	231
67	150	330	495	110	290	319	133	150	290	435	110	250	275
68	170	270	459	130	240	312	134	160	280	448	120	240	288
69	170	270	459	130	230	299	135	150	220	330	110	180	198
70	180	230	414	140	190	266	136	180	220	396	140	190	266
71	180	230	414	150	180	270	137	180	230	414	150	200	300
72	170	270	459	140	240	336	138	180	230	414	150	190	285
73	180	270	486	150	230	345	139	170	280	476	140	240	336
74	200	290	580	160	250	400	140	180	280	504	140	240	336
75	190	300	570	150	260	390	141	180	320	576	140	280	392
76	190	350	665	140	300	420	142	190	280	532	150	240	360
77	180	300	540	140	260	364	143	180	280	504	140	240	336
78	170	320	544	130	280	364	144	200	230	460	150	190	285
79	170	430	731	130	390	507	145	190	220	418	150	180	270
80	180	340	612	140	300	420	146	180	230	414	140	200	280
81	130	280	364	90	240	216	147	170	220	374	140	180	252
82	130	250	325	100	210	210	148	170	220	374	140	180	252

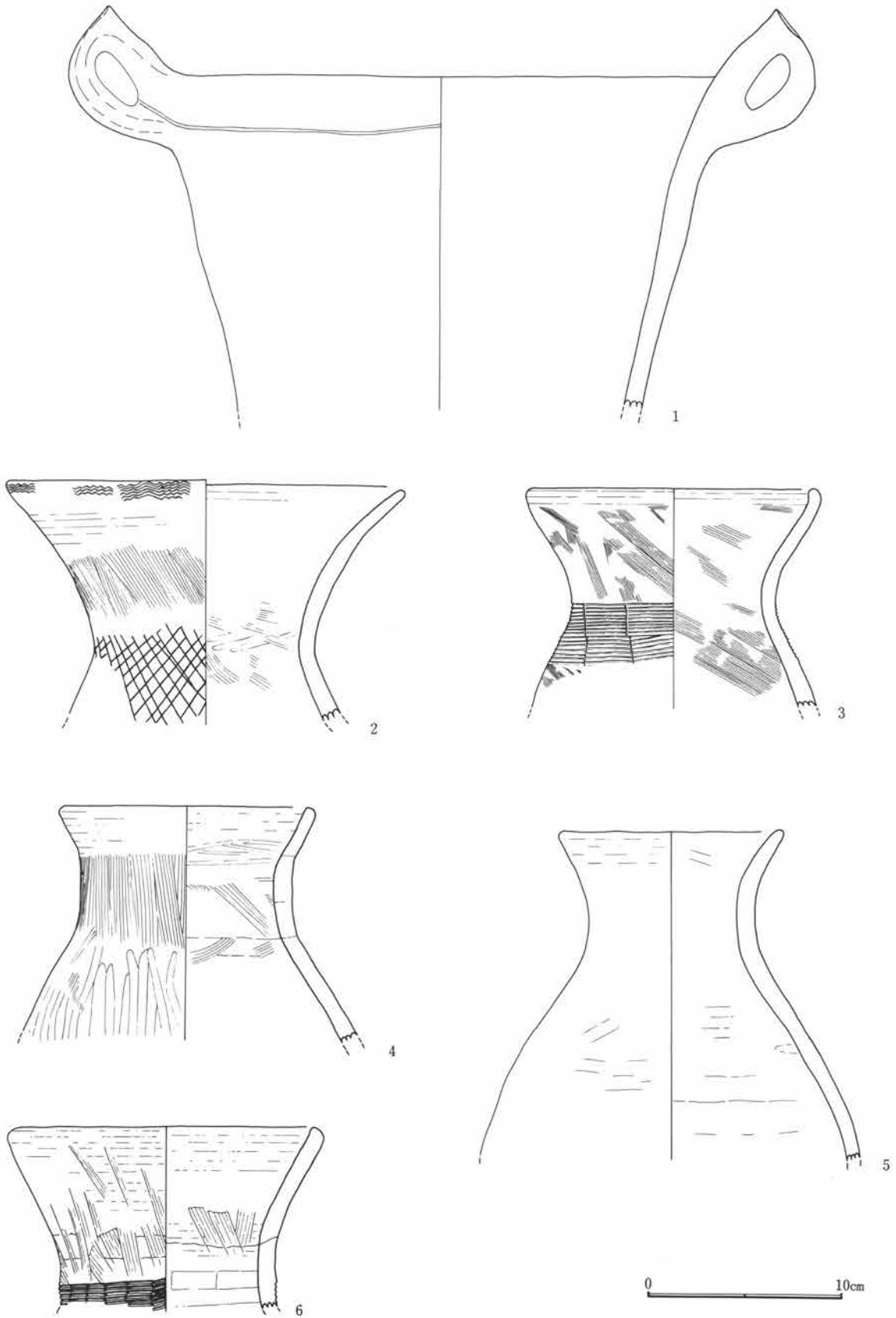
No.	畦の中心間			畦の下端間			No.	畦の中心間			畦の下端間		
	短軸	長軸	面積	短軸	長軸	面積		短軸	長軸	面積	短軸	長軸	面積
149	180	220	396	150	180	270	215	170	220	374	140	190	266
150	180	280	504	140	240	336	216	190	270	513	150	230	345
151	190	280	532	140	240	336	217	190	220	418	160	180	288
152	180	300	540	90	270	243	218	180	230	414	150	190	285
153	180	280	504	130	250	325	219	150	230	345	110	200	220
154	170	230	394	120	200	240	220	180	140	252	130	110	143
155	160	200	320	120	170	204	221	180	250	450	150	210	315
156	170	230	391	140	190	266	222	170	210	357	130	170	221
157	170	260	442	140	220	308	223	150	280	420	130	230	299
158	180	280	504	150	240	360	224	180	190	342	150	150	225
159	170	260	442	130	210	273	225	130	150	195	110	120	132
160	170	320	544	120	270	324	226	230	540	1242	190	500	950
161	150	270	405	110	240	264	227	180	220	396	140	180	252
162	180	220	396	140	180	252	228	180	220	396	140	190	266
163	160	180	288	110	130	143	229	180	260	468	150	230	345
164	160	230	368	110	190	209	230	150	230	345	110	200	220
165	170	230	391	120	190	228	231	250	200	500	200	170	340
166	190	210	399	150	180	270	232	220	240	528	180	210	378
167	190	220	418	150	180	270	233	180	240	432	140	190	266
168	200	250	500	150	210	315	234	160	220	352	130	190	247
169	160	350	560	110	310	341	235	180	230	368	140	190	266
170	170	270	459	130	240	312	236	160	200	320	130	170	221
171	170	280	476	130	240	312	237	140	220	308	120	180	216
172	180	250	450	140	220	308	238	150	200	300	120	170	204
173	170	180	306	140	150	210	239	150	230	345	120	200	240
174	170	230	391	130	200	260	240	160	240	384	110	200	220
175	180	250	450	130	220	286	241	160	200	320	130	170	221
176	160	270	432	130	240	312	242	150	180	270	100	140	140
177	160	230	368	140	190	266	243	130	200	260	100	170	170
178	180	200	360	140	170	238	244	190	210	399	140	180	522
179	180	270	486	150	230	345	245	150	330	495	100	290	290
180	220	200	440	180	160	288	246	190	580	1102	150	560	840
181	220	230	506	180	180	324	247	150	220	330	110	190	209
182	180	200	360	150	170	255	248	130	250	325	100	220	220
183	180	230	414	140	190	266	249	130	240	312	100	210	210
184	180	240	432	140	190	266	250	180	260	468	140	220	308
185	150	240	360	120	200	240	251	180	200	360	140	170	238
186	230	370	851	180	330	594	252	170	190	323	130	150	195
187	200	260	520	150	210	315	253	180	270	486	140	240	336
188	190	290	551	150	240	360	254	170	220	374	130	190	247
189	150	270	405	110	220	242	255	180	220	396	140	180	252
190	160	200	320	130	160	208	256	180	250	450	140	230	322
191	160	220	352	130	180	234	257	180	220	396	150	190	285
192	150	280	420	120	250	300	258	180	200	360	150	170	255
193	150	250	375	110	220	242	259	170	240	408	140	200	280
194	160	230	368	130	210	273	260	160	210	336	120	170	204
195	170	210	357	140	180	252	261	170	220	374	140	180	252
196	180	270	486	150	240	360	262	160	210	336	130	170	221
197	170	220	374	140	190	266	263	140	230	322	110	200	220
198	170	230	391	140	200	280	264	150	230	345	110	200	220
199	170	220	374	140	200	280	265	150	230	345	120	200	240
200	150	180	270	110	160	176	266	150	350	525	130	320	416
201	160	220	352	130	190	247	267	170	350	595	130	330	429
202	160	230	368	130	180	234	268	180	200	360	140	170	238
203	170	270	459	130	210	273	269	180	230	414	150	190	285
204	160	180	288	130	140	182	270	170	240	408	140	220	308
205	120	150	180	90	120	108	271	180	190	342	150	160	240
206	270	380	1026	240	350	840	272	170	250	425	140	220	308
207	270	270	729	240	230	552	273	170	220	374	140	190	266
208	290	260	754	240	220	528	274	160	220	352	130	180	234
209	200	270	540	160	230	368	275	150	230	345	120	200	240
210	190	240	456	160	210	336	276	180	210	378	140	180	252
211	190	220	418	150	180	270	277	180	220	396	160	190	304
212	170	240	408	140	210	294	278	160	210	336	130	180	234
213	180	250	450	150	220	330	279	130	230	299	100	210	210
214	180	240	432	150	200	300	280	130	220	286	110	190	209

## 6 検出した遺構、遺物

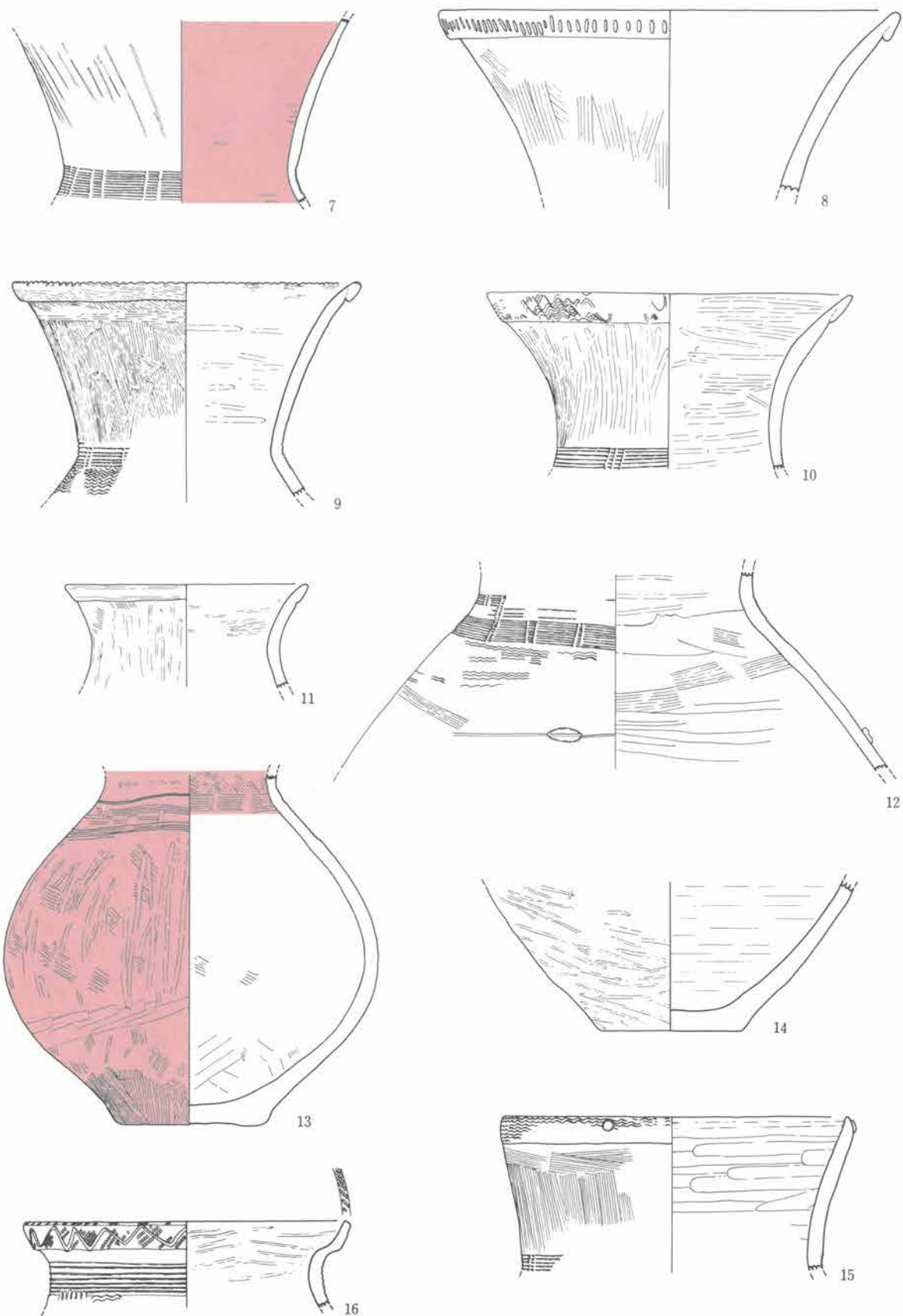
No.	畦の中心間			畦の下端間			No.	畦の中心間			畦の下端間		
	短軸	長軸	面積	短軸	長軸	面積		短軸	長軸	面積	短軸	長軸	面積
281	180	250	450	140	210	294	345	230	270	621	190	230	437
282	160	180	288	120	150	180	346	230	270	621	190	220	418
283	150	230	345	120	190	228	347	220	260	572	190	220	418
284	150	230	345	120	200	240	348	190	280	532	160	250	400
285	150	200	300	130	170	221	349	180	320	576	140	280	392
286	150	250	375	120	210	252	350	170	270	459	140	230	322
287	160	220	352	130	190	247	351	250	580	1450	200	500	1000
288	170	200	340	140	170	238	352	250	250	625	220	210	462
289	170	240	408	120	200	240	353	260	270	702	230	230	529
290	210	230	483	190	190	361	354	230	290	667	190	250	475
291	140	210	294	110	180	198	355	160	310	496	110	270	297
292	150	210	315	120	170	204	356	260	250	650	220	200	440
293	170	370	629	140	340	476	357	260	240	624	230	210	483
294	180	230	414	140	190	266	358	280	430	1204	230	380	874
295	160	190	304	130	150	195	359	270	320	864	210	280	588
296	190	280	532	150	230	345	360	130	200	260	90	160	144
297	170	190	323	140	170	238	361	150	290	435	130	240	312
298	170	200	340	120	170	204	362	260	270	702	240	230	552
299	180	370	666	150	340	510	363	140	160	224	100	130	130
300	320	320	640	290	170	493	364	150	430	645	100	380	380
301	180	180	252	160	110	176	365	180	260	468	140	230	322
302	170	170	187	150	90	135	366	150	250	375	110	210	231
303	310	310	775	200	260	520	367	170	280	476	130	230	299
304	170	210	357	140	180	252	368	150	200	300	110	160	176
305	230	180	414	200	150	300	369	150	380	570	120	350	420
306	250	200	500	220	150	330	370	140	260	364	100	230	230
307	220	280	616	190	250	475	371	150	250	375	110	220	242
308	190	340	646	170	310	527	372	150	280	420	110	240	264
309	270	170	459	240	120	288	373	210	240	504	180	200	360
310	230	160	368	200	120	240	374	200	210	420	160	180	288
311	300	320	960	260	280	728	375	190	380	722	150	340	510
312	200	370	740	170	340	578	376	170	270	459	140	230	322
313	300	410	123	280	380	1064	377	180	260	468	140	210	294
314	240	200	480	210	170	357	378	180	270	486	140	230	322
315	520	320	1664	480	290	1392	379	190	180	342	150	250	375
316	260	300	780	270	230	621	380	210	200	420	180	180	324
317	280	250	700	240	210	504	381	210	330	693	160	290	464
318	340	450	1530	300	410	1230	382	180	330	594	150	300	450
319	260	360	936	220	330	726	383	180	230	414	140	190	266
320	190	250	475	160	220	352	384	180	260	468	140	210	294
321	180	290	522	150	260	390	385	180	270	486	150	230	345
322	150	220	330	120	190	228	386	170	200	340	130	160	208
323	250	330	825	210	290	609	387	170	340	578	120	310	372
324	280	290	812	260	260	676	388	170	300	510	130	270	351
325	290	340	986	250	310	775	389	170	280	476	130	230	299
326	240	300	720	210	270	567	390	180	260	468	140	230	322
327	230	270	612	200	240	480	391	200	240	480	180	210	378
328	210	240	504	180	210	378	392	180	220	396	150	160	240
329	190	260	494	150	230	345	393	230	360	828	180	320	576
330	260	270	702	240	250	600	394	220	330	726	180	290	522
331	220	290	638	190	260	494	395	210	260	546	170	220	374
332	230	230	529	200	190	380	396	160	210	336	120	170	204
333	220	230	506	190	200	380	397	200	230	460	160	180	288
334	400	350	1400	350	320	1120	398	170	370	629	130	320	416
335	240	270	648	200	230	460	399	180	320	576	130	290	377
336	240	280	672	200	260	520	400	170	250	425	120	210	252
337	230	260	598	190	230	437	401	190	220	418	150	190	285
338	210	280	588	180	240	432	402	170	250	425	140	210	294
339	200	250	500	170	230	391	403	140	220	308	110	180	198
340	180	280	504	150	250	375	404	170	350	595	120	320	384
341	170	300	510	130	260	338	405	170	320	544	130	280	364
342	120	250	300	90	220	198	406	130	230	299	100	180	180
343	240	240	576	190	200	380	407	150	350	525	100	310	310
344	230	300	690	200	260	520							

※長軸、短軸はそれぞれ長軸畦、短軸畦方向の計測値である。このため、一部に長軸が区画の短辺になる場合もある。

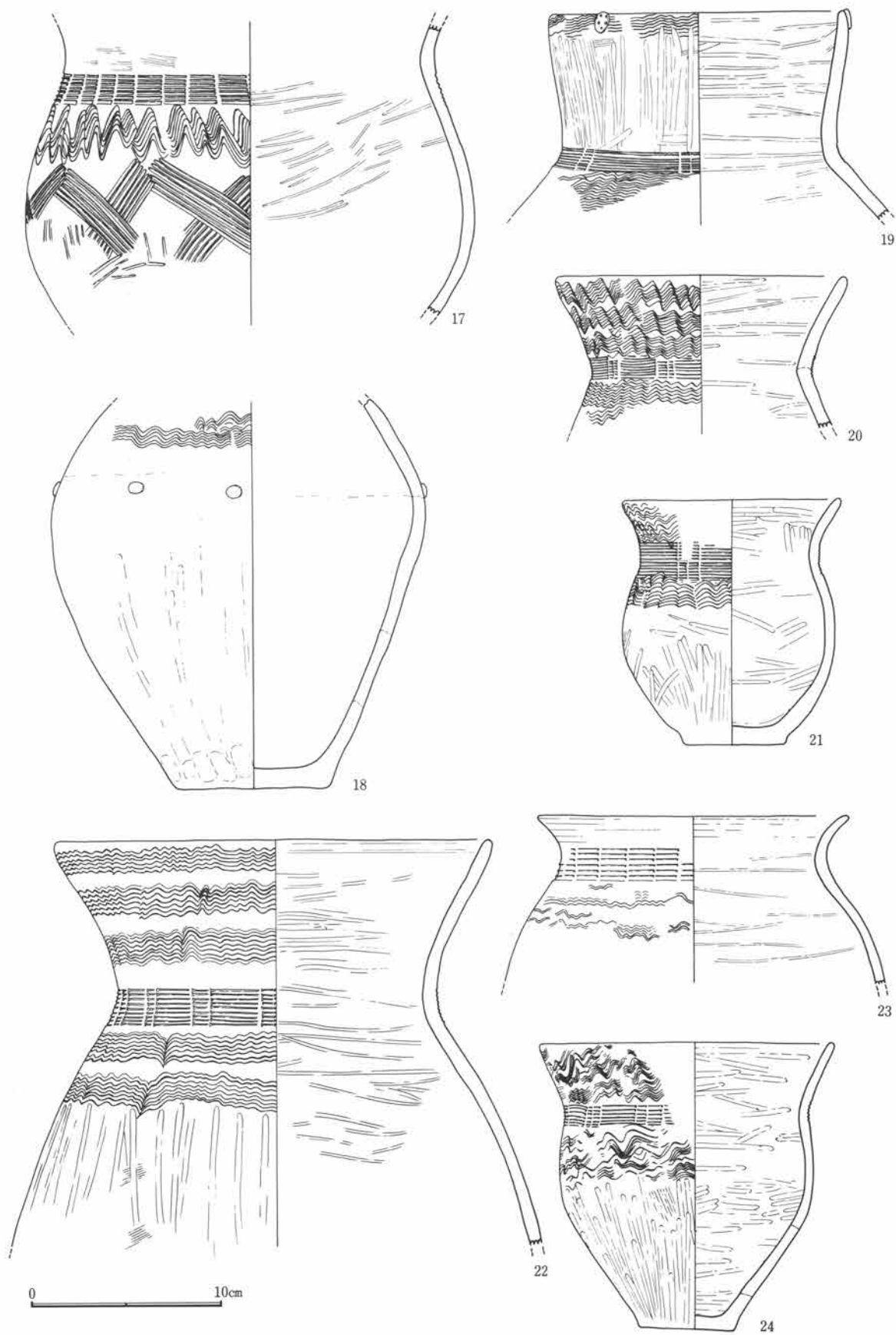
(12) 遺構覆土、包含層出土遺物



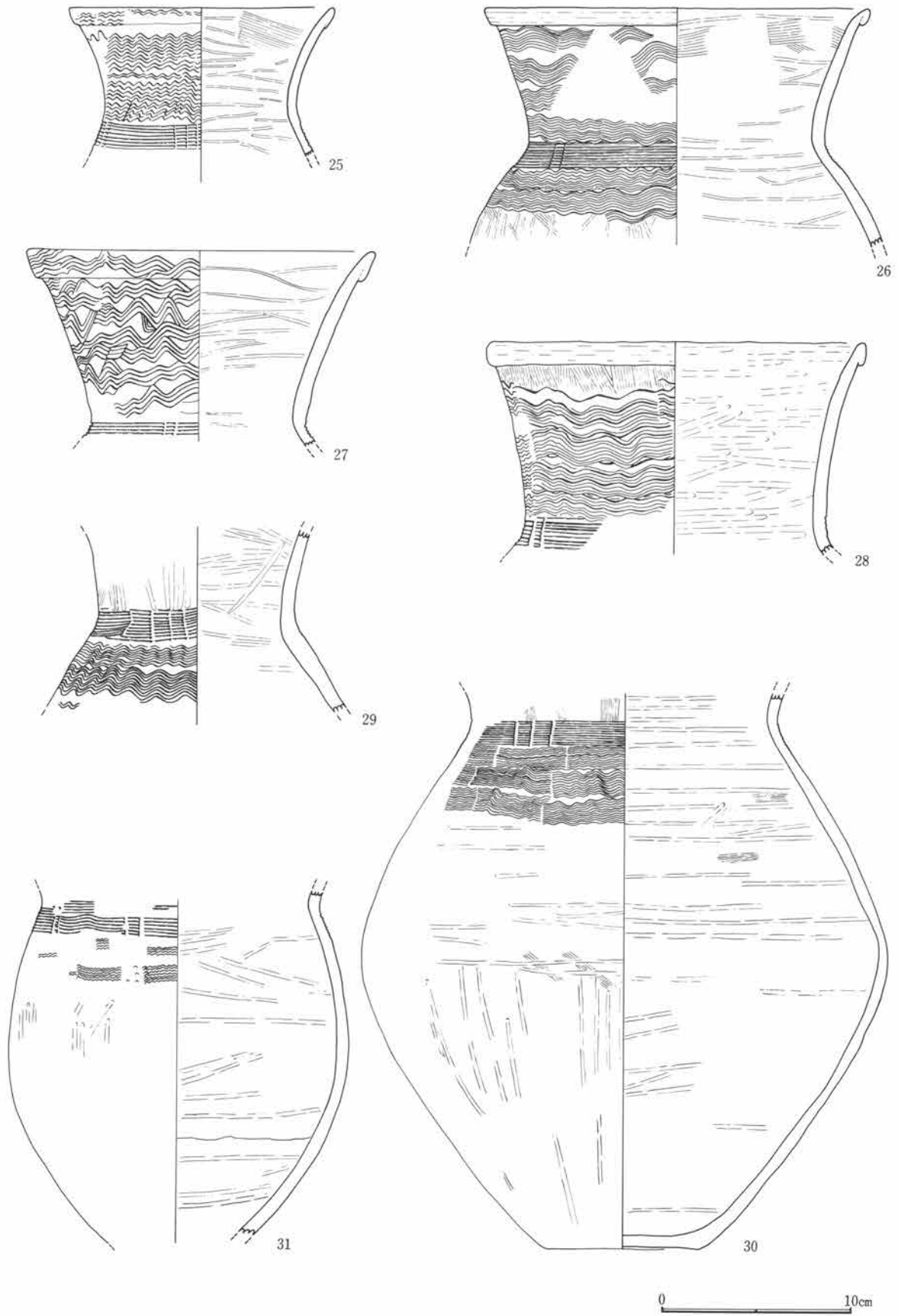
第371図 遺構覆土、包含層出土遺物 (1)



第372図 遺構覆土、包含層出土遺物 (2)

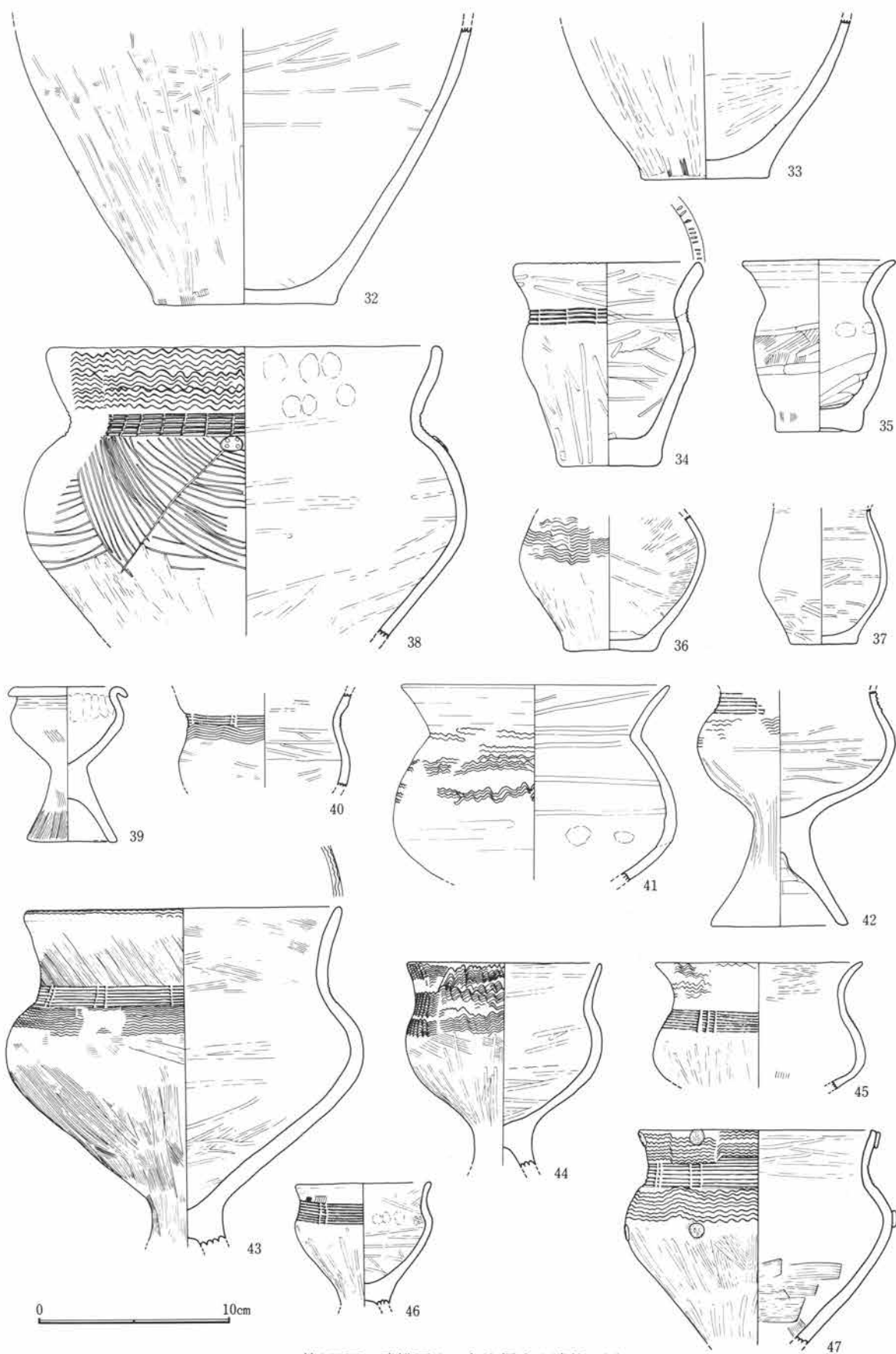


第373図 遺構覆土、包含層出土遺物 (3)



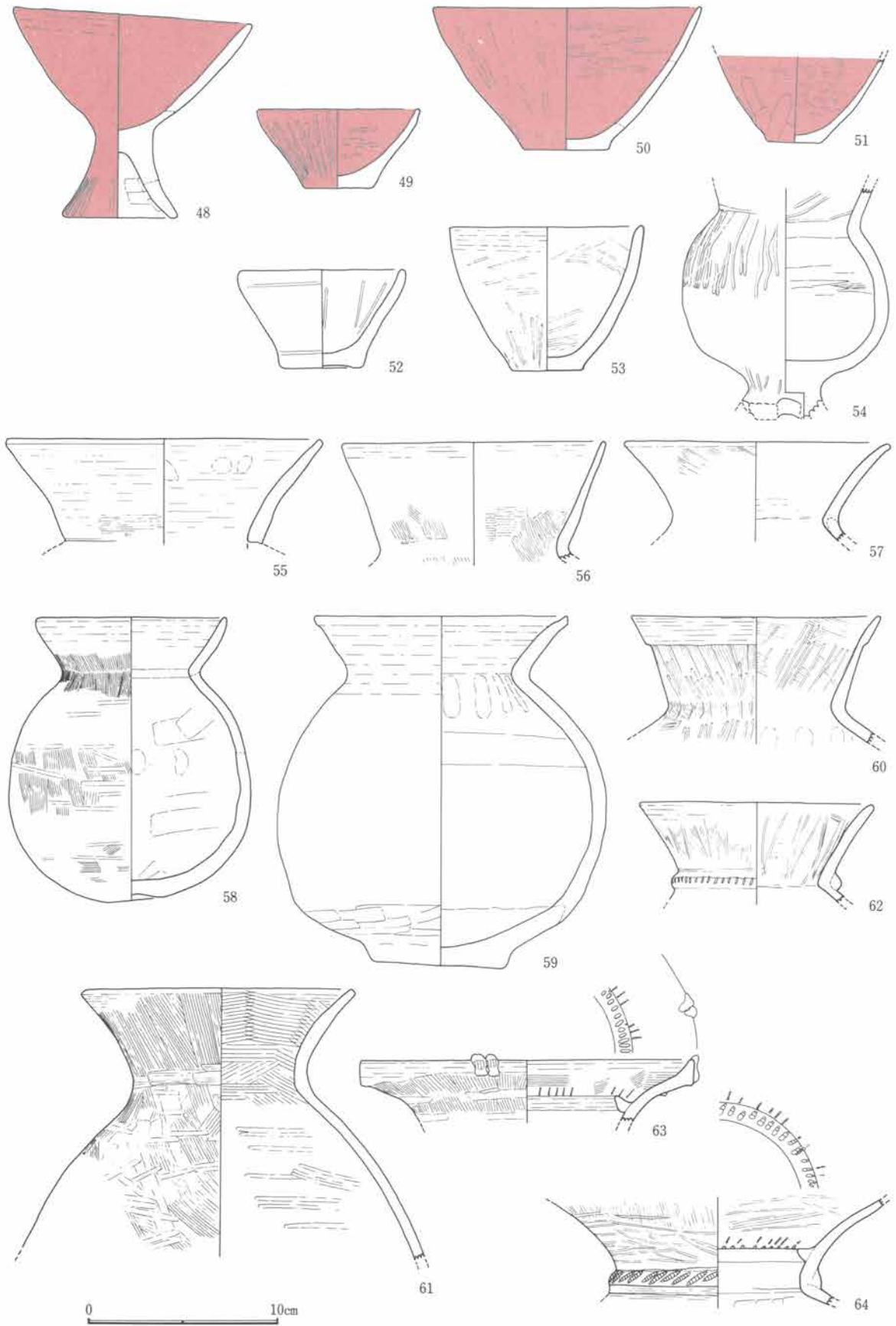
第374図 遺構覆土、包含層出土遺物 (4)



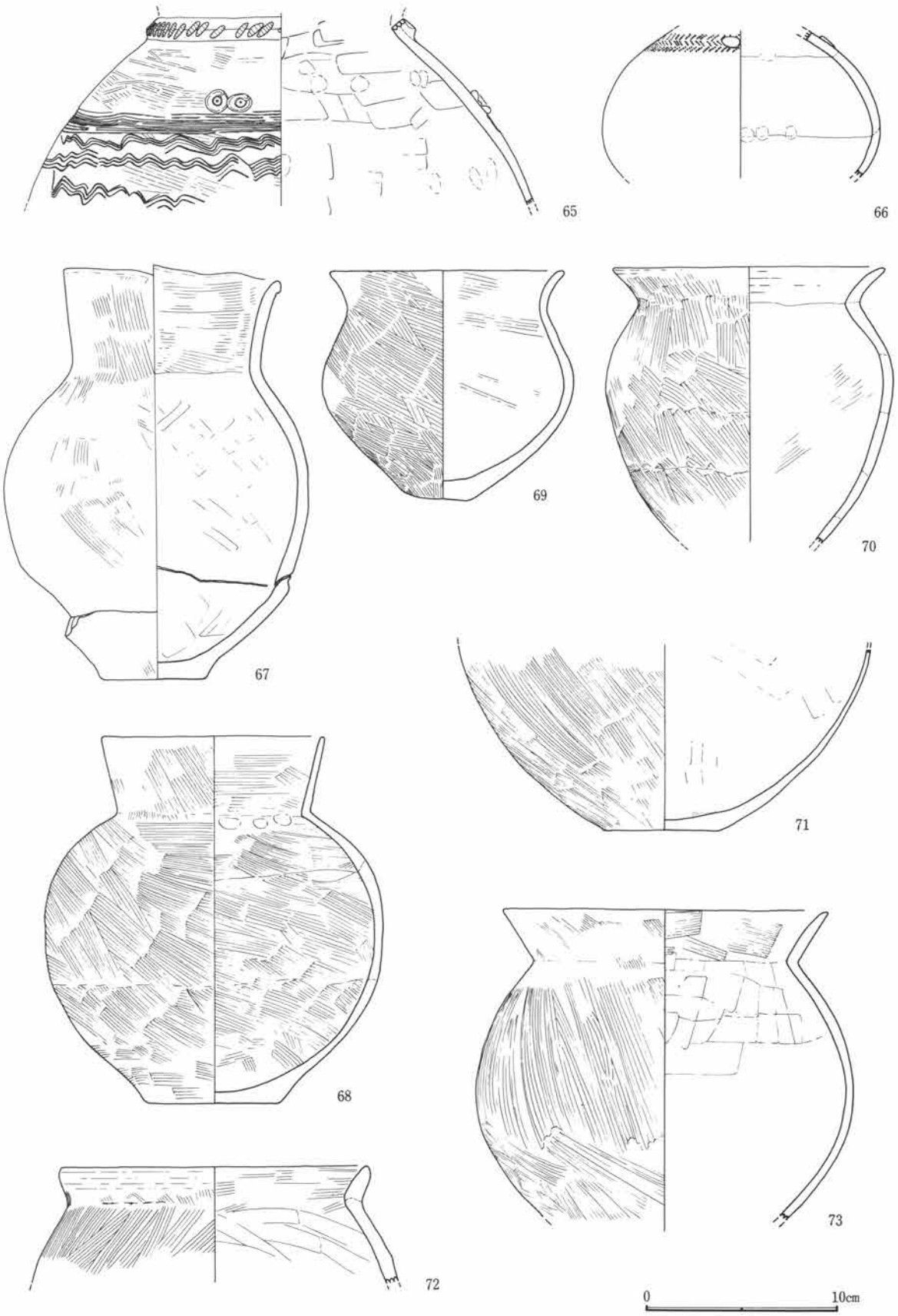


第375図 遺構覆土、包含層出土遺物 (5)

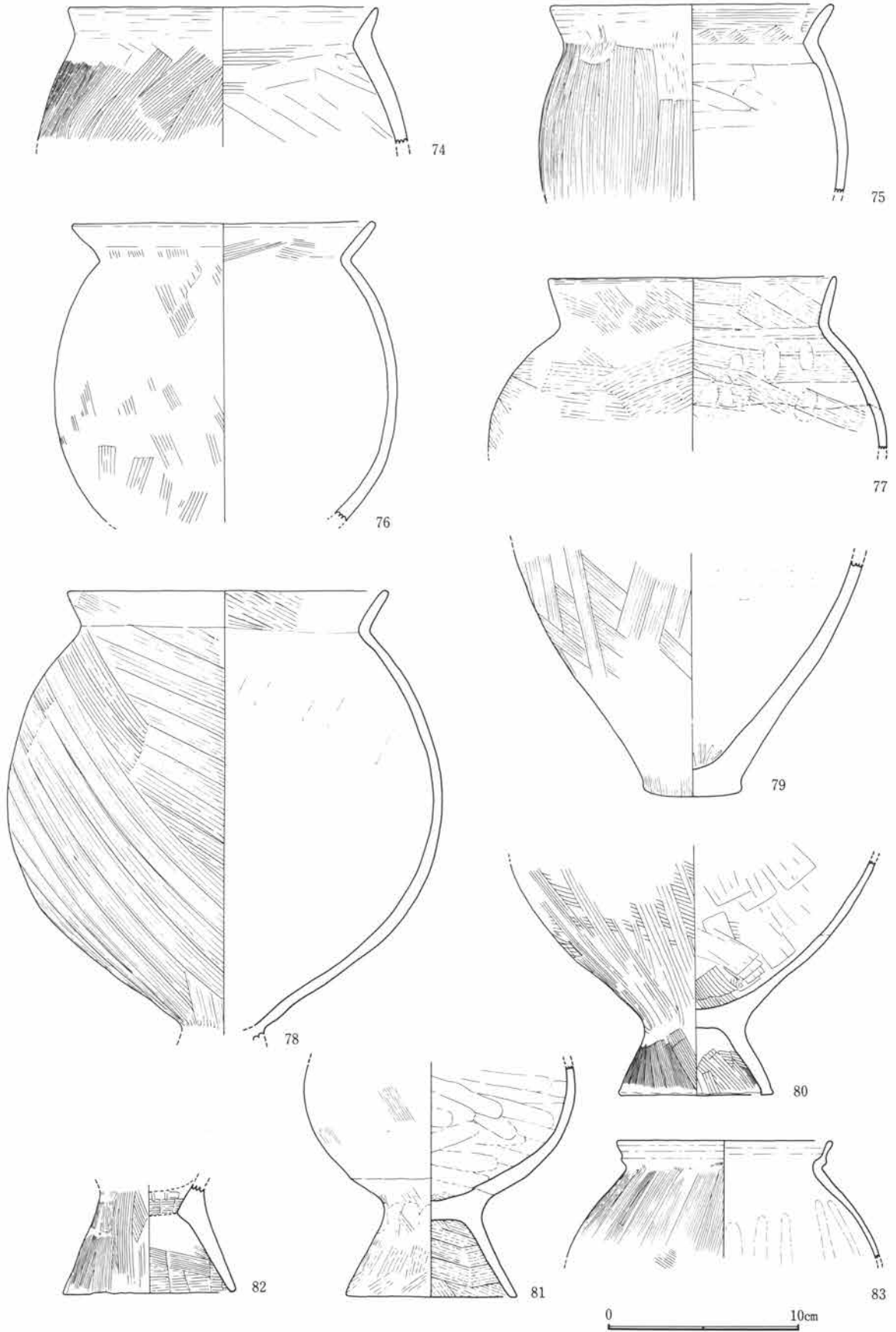
6 検出した遺構、遺物



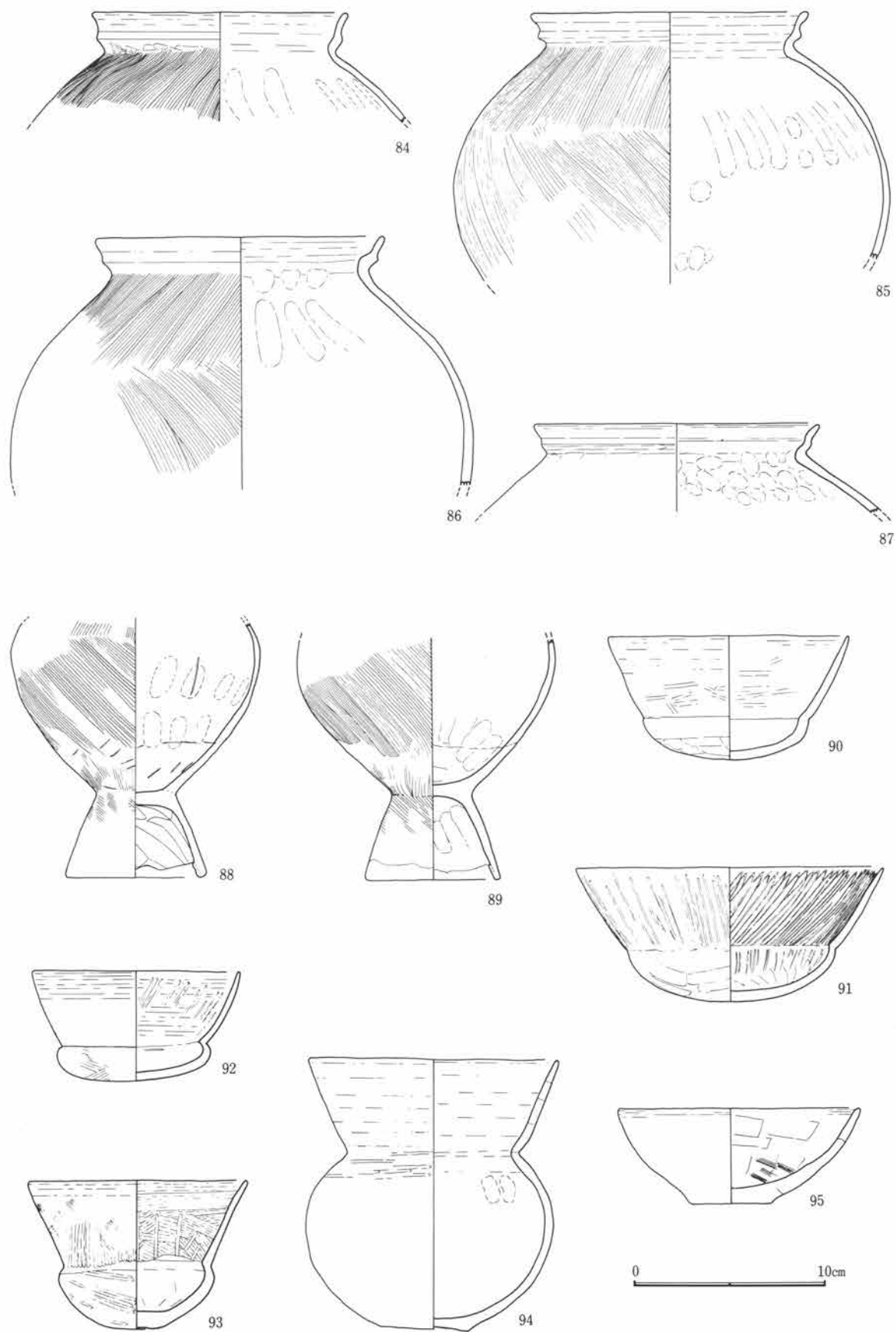
第376図 遺構覆土、包含層出土遺物 (6)



第377図 遺構覆土、包含層出土遺物 (7)

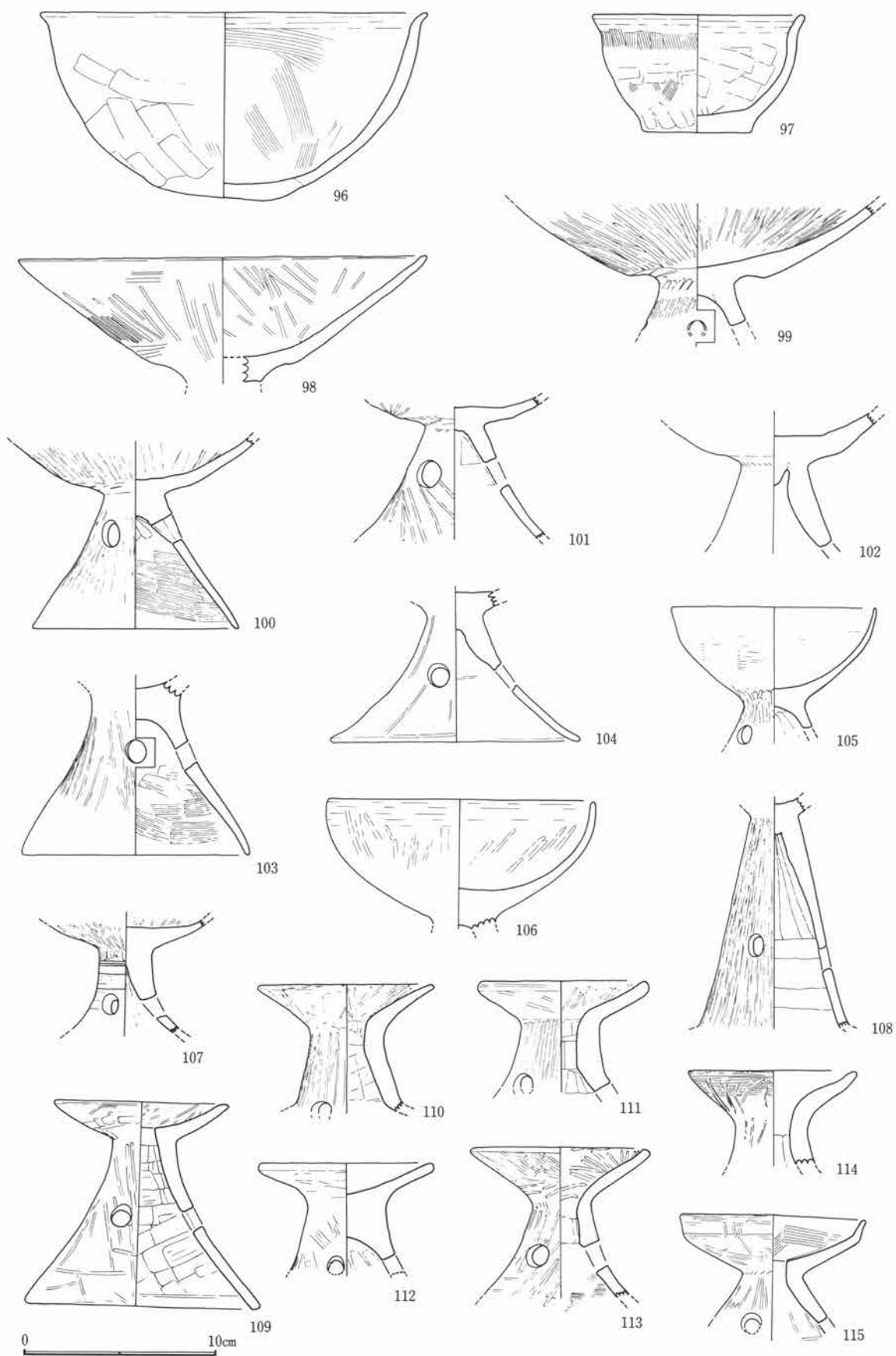


第378図 遺構覆土、包含層出土遺物 (8)

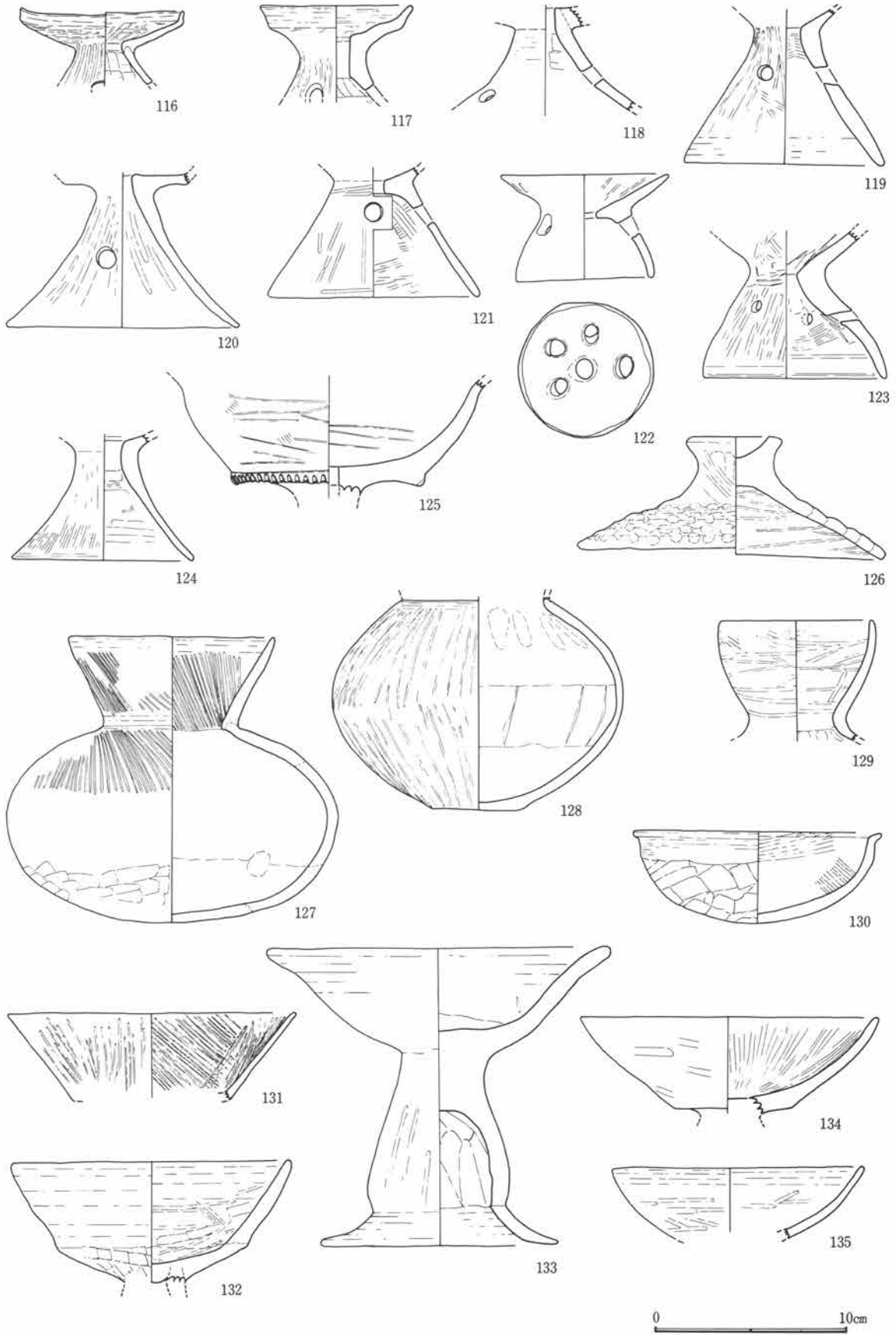


第379図 遺構覆土、包含層出土遺物 (9)

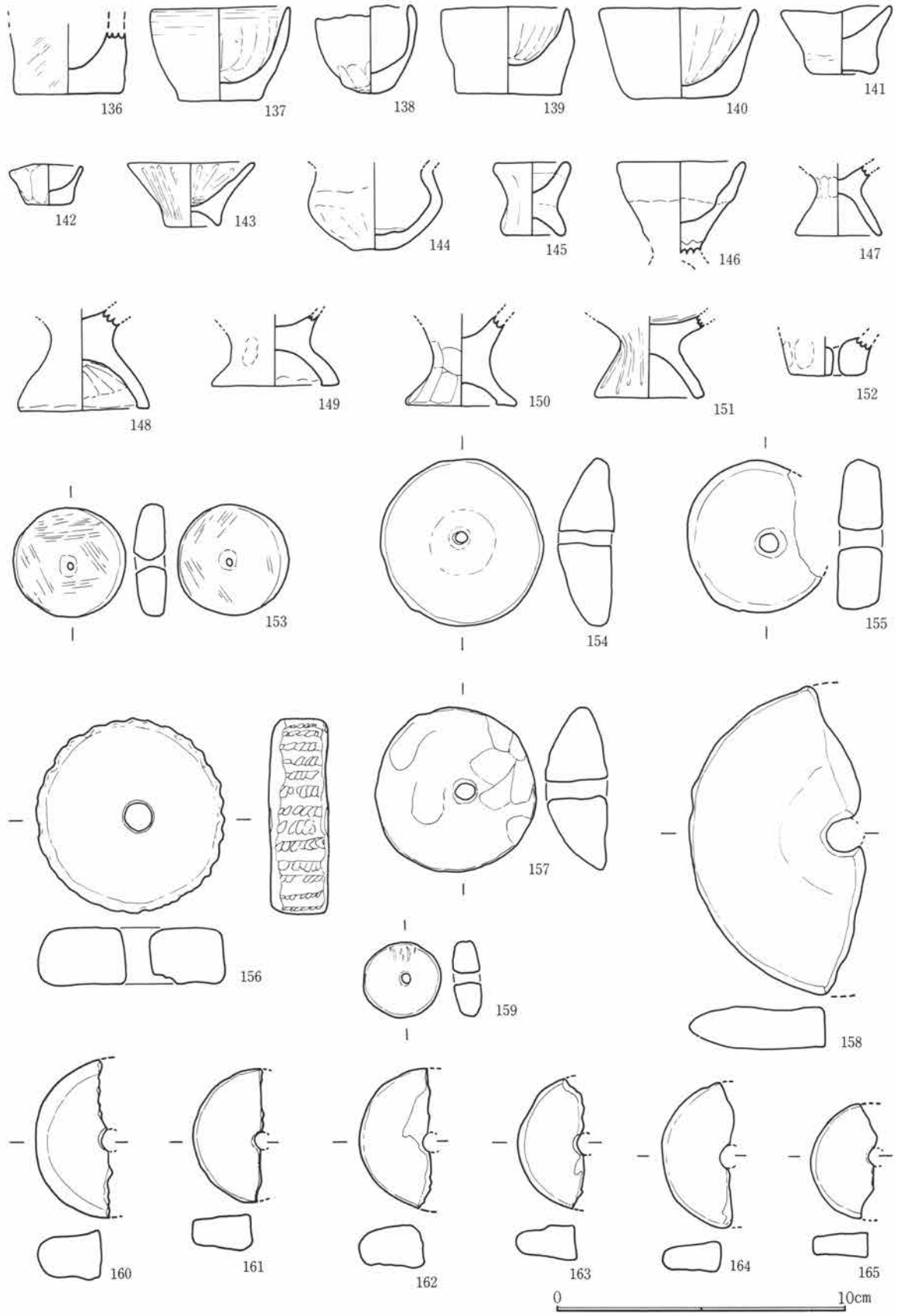
6 検出した遺構、遺物



第380図 遺構覆土、包含層出土遺物 (10)

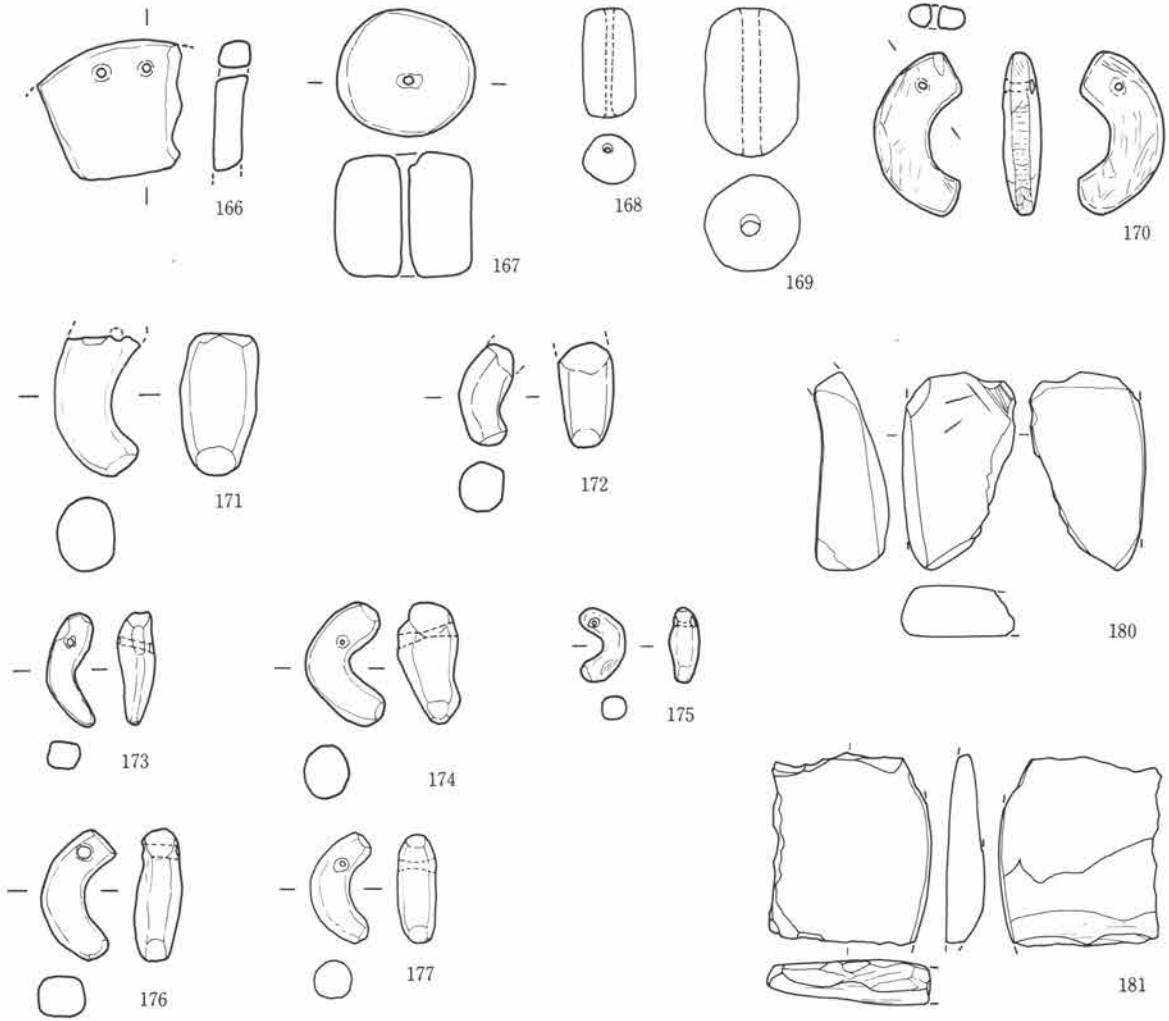


第381図 遺構覆土、包含層出土遺物 (11)

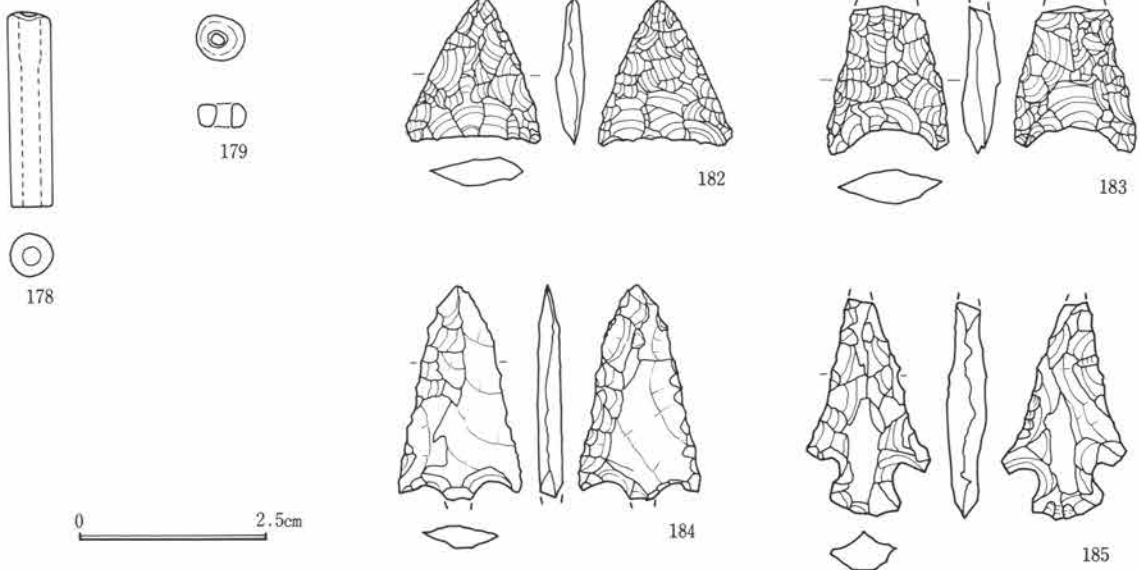


第382図 遺構覆土、包含層出土遺物 (12)



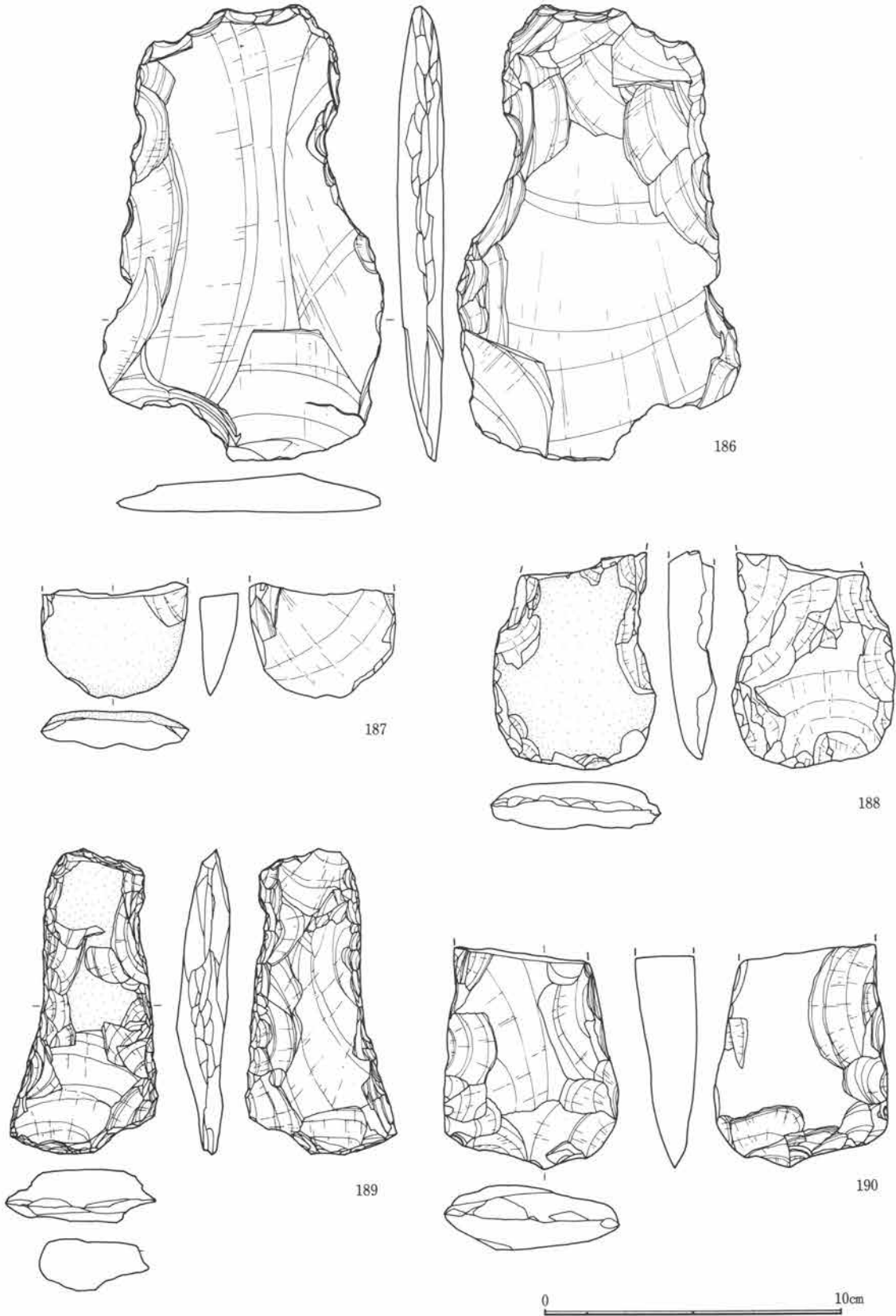


0 10cm

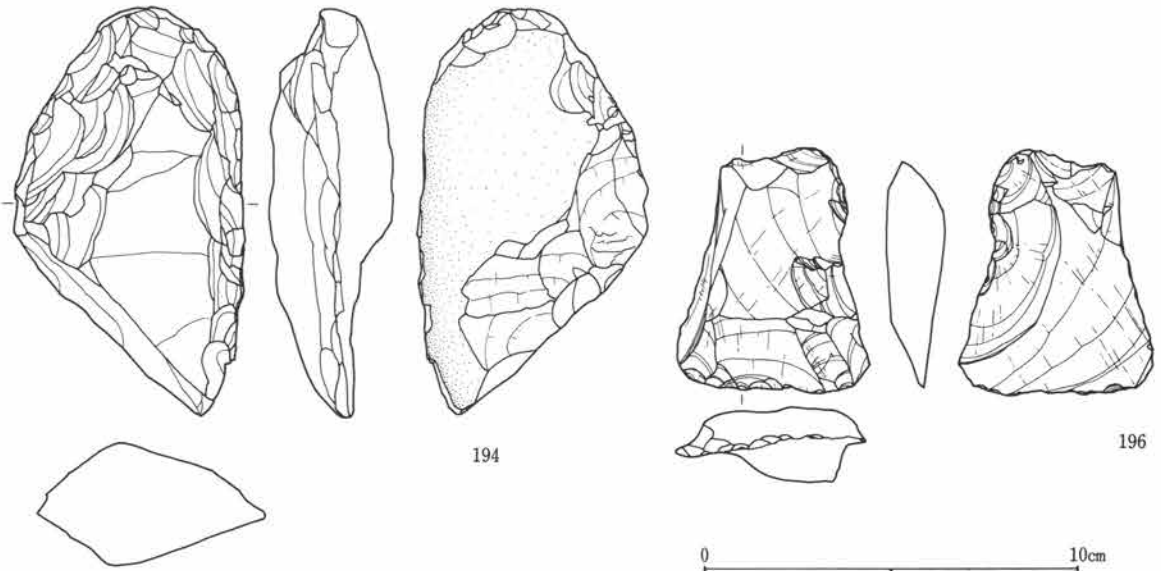
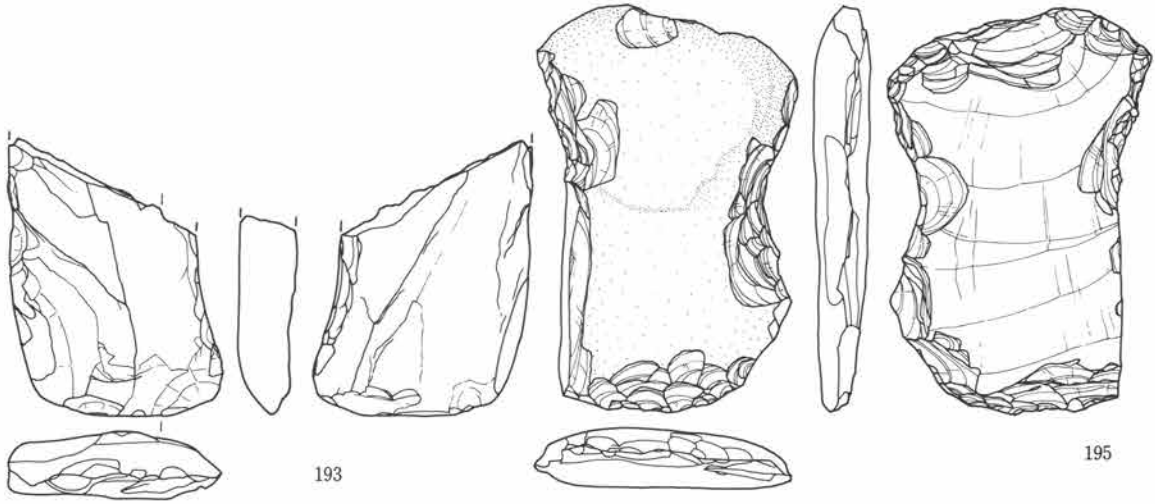
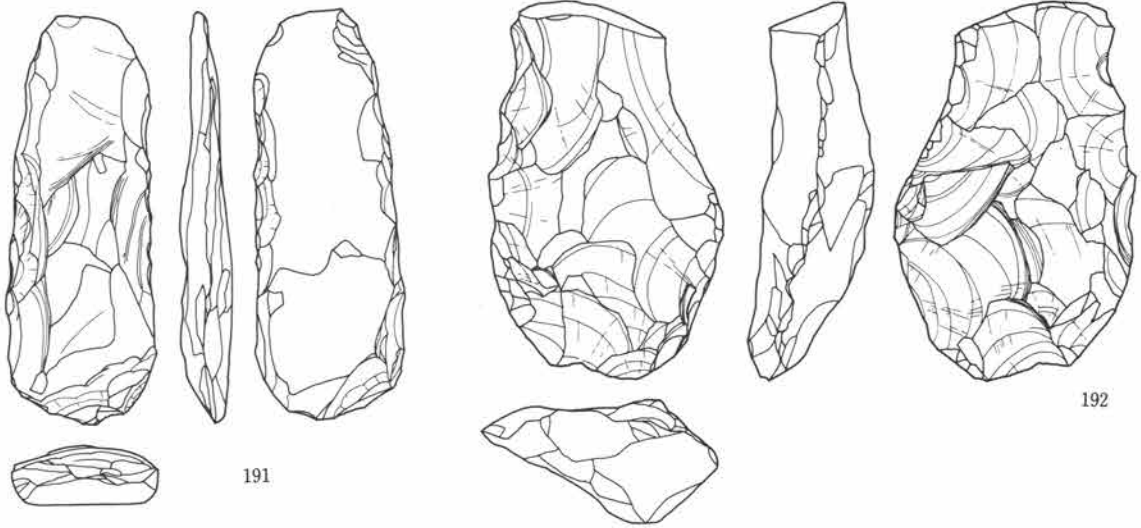


0 2.5cm

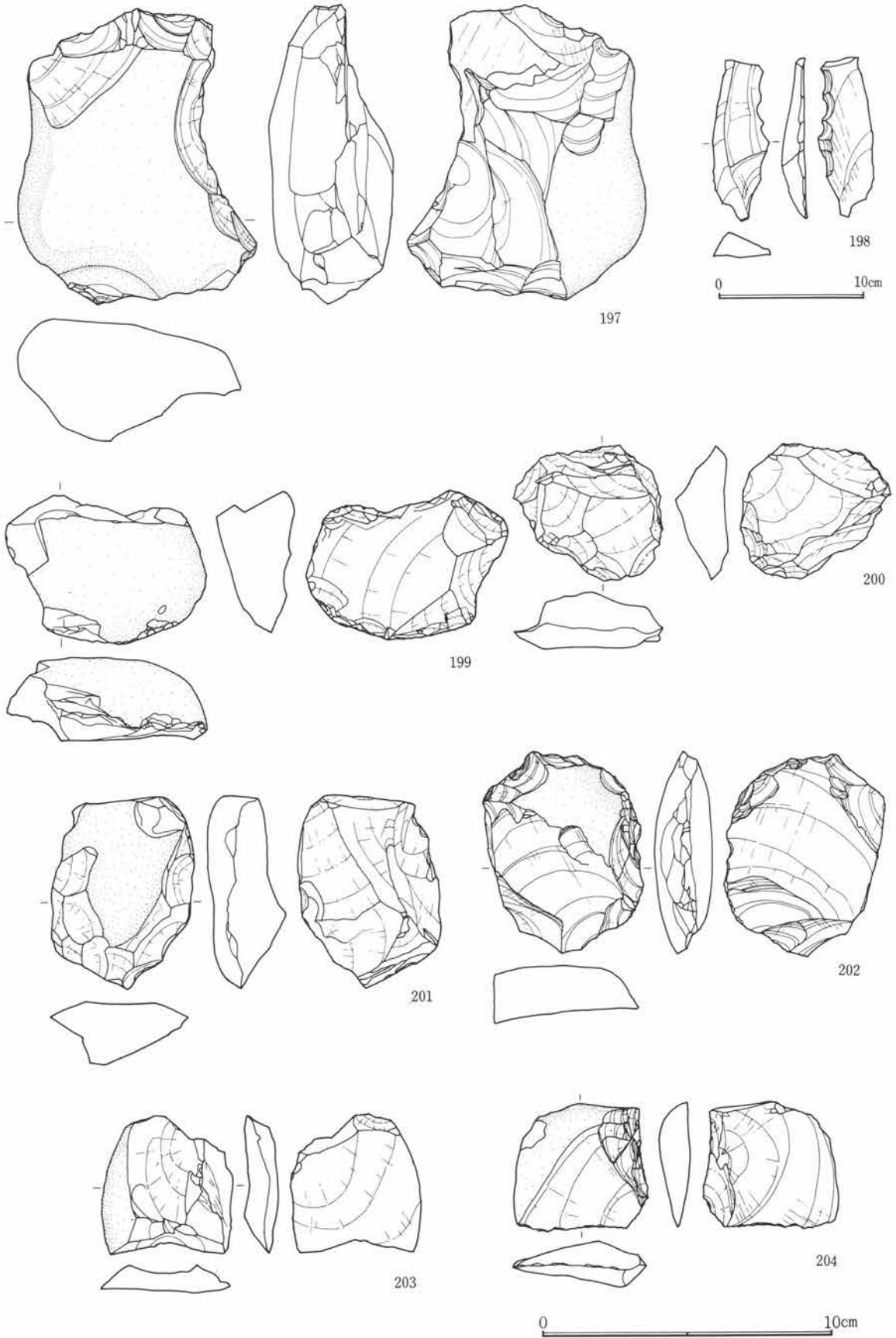
第383圖 遺構覆土、包含層出土遺物 (13)



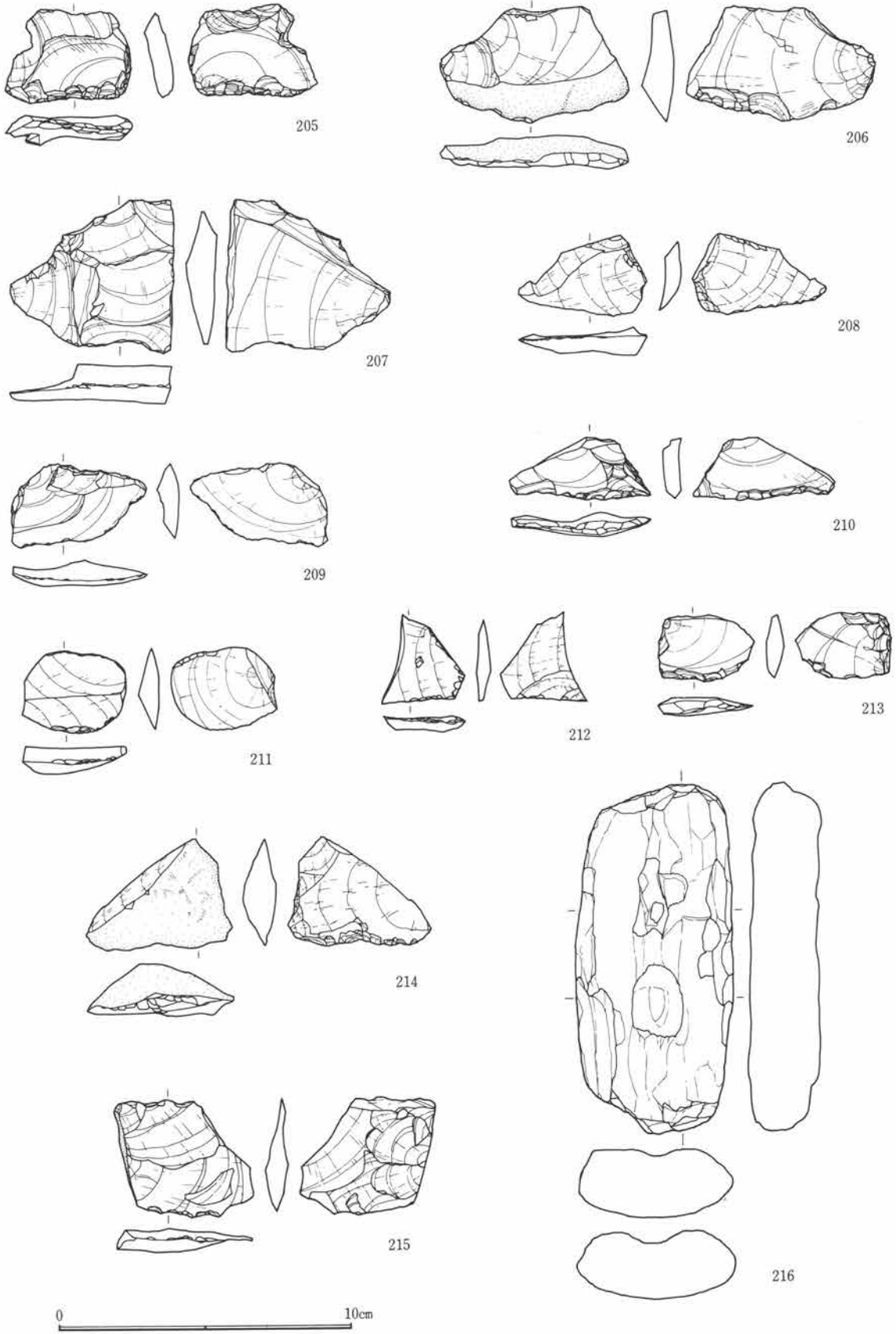
第384図 遺構覆土、包含層出土遺物 (14)



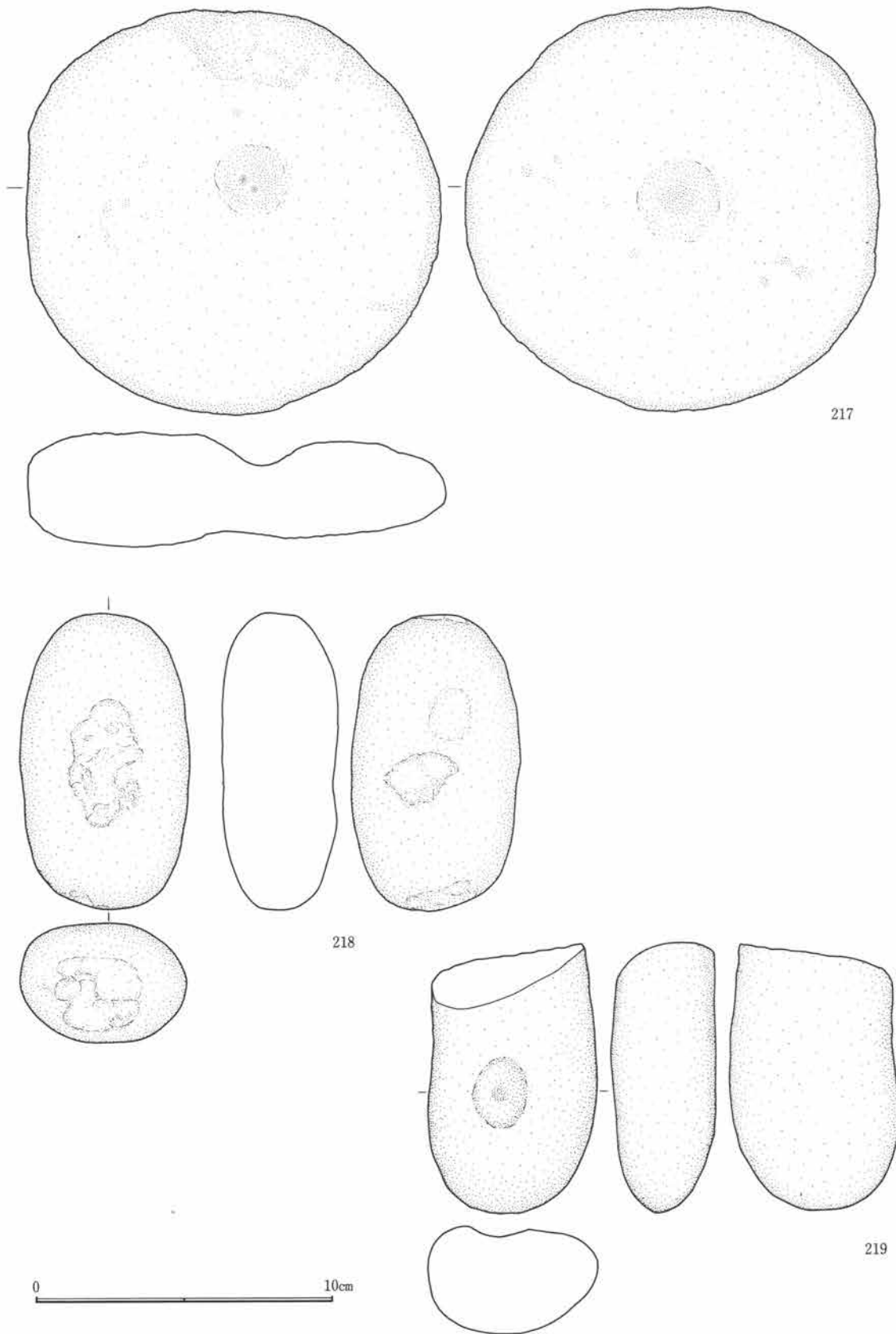
第385図 遺構覆土、包含層出土遺物 (15)



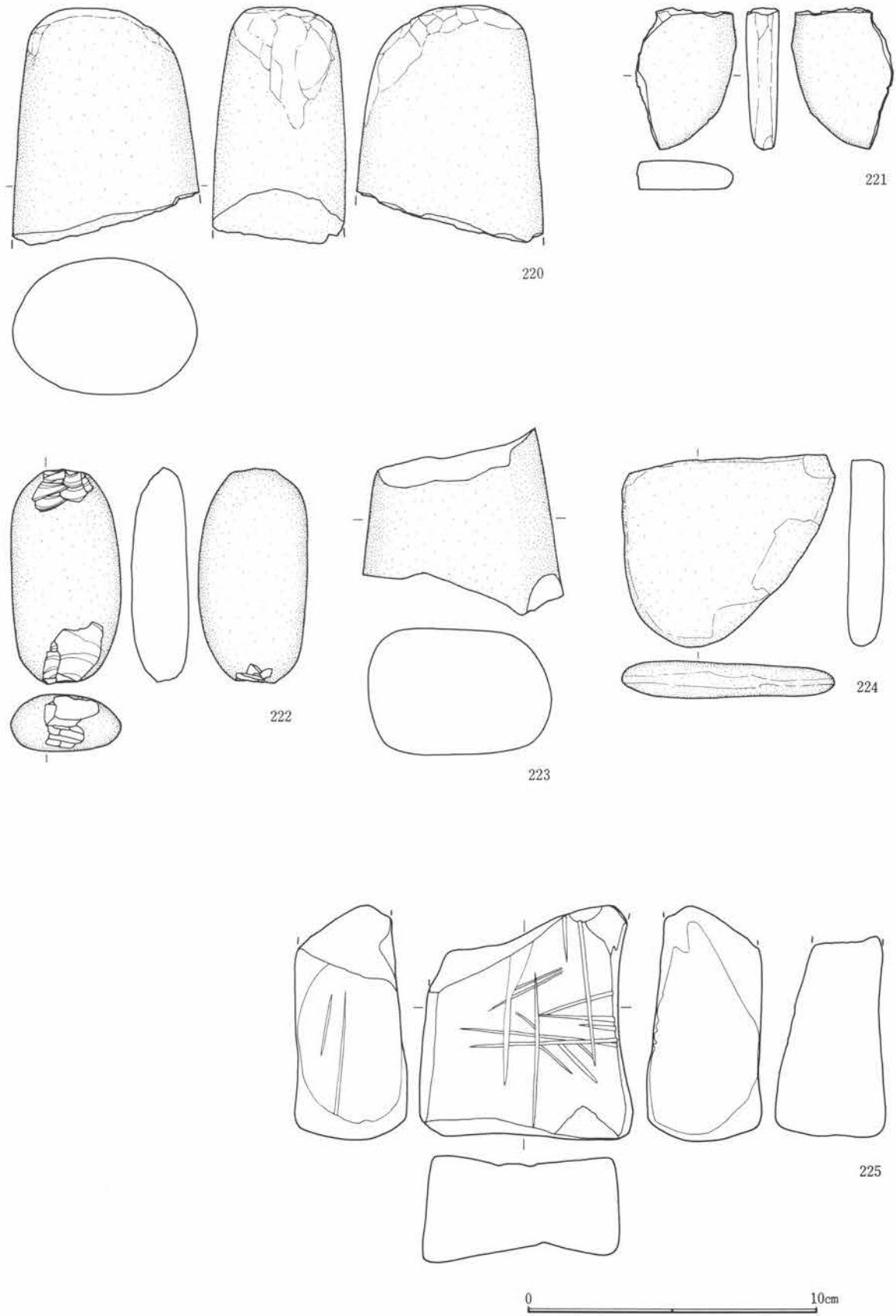
第386図 遺構覆土、包含層出土遺物 (16)



第387図 遺構覆土、包含層出土遺物 (17)

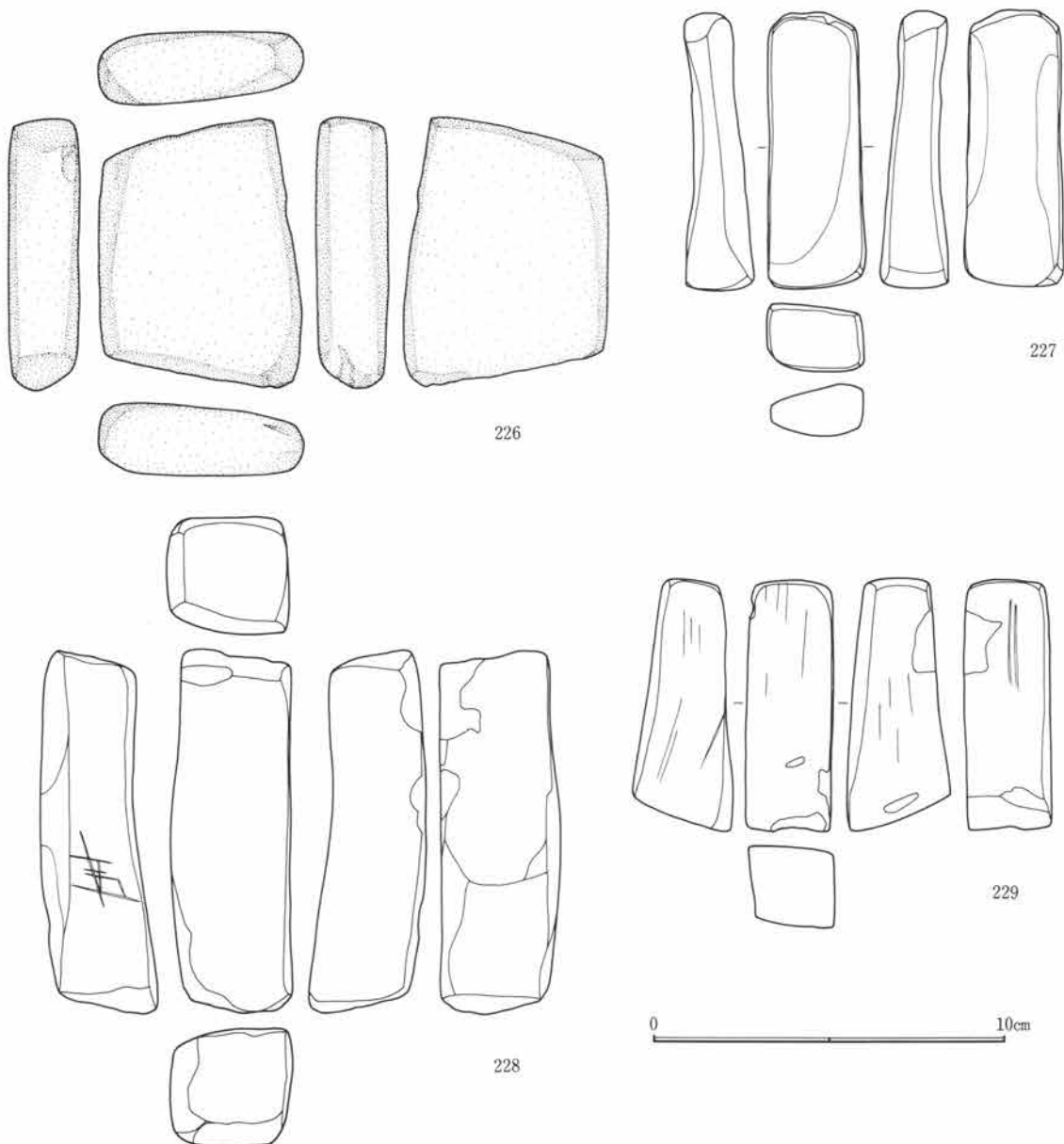


第388図 遺構覆土、包含層出土遺物 (18)



第389図 遺構覆土、包含層出土遺物 (19)

6 検出した遺構、遺物



第390図 遺構覆土、包含層出土遺物 (20)

第293表 遺構覆土、包含層出土土器観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
1	深鉢 (縄文)	口 35.8	胴から口縁にかけて直状に外傾する。2箇所に橋状把手を付す。	外面 口縁部には無文帯を作り、これを細い沈線で区画する。口縁部の2箇の橋状把手との中間には丸い突起を付す。胴部文様は器面が荒れていて不明瞭、条痕か？ 内面 器面が荒れている	細砂粒混入 やや軟弱 灰白色	胴下半以下欠損
2	壺	口 21.4	口辺部は緩やかに外反する。	外面 口縁部はヨコナデ、波状文、口辺部はハケメ、頸部は鋭いヘラ状工具、斜格子文。 内面 口縁部はヨコナデ、頸部はハケメ、ヘラミガキ。	細砂粒、黒色粒 混入 堅緻 淡褐色	口縁～頸部全周



遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
3	壺	口 15.4	口縁部は内湾する。	外面 口縁部はヨコナデ、口辺部はハケメ、 頸部は等間隔止め←簾状文2段。 内面 口縁部はヨコナデ、口～頸部はハケメ。	細砂粒、黒色粒 混入 やや堅緻 にふい橙色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周
4	壺	口 13.4	口辺部はほぼ直立に 近く口縁部は外反す る。	外面 口縁部はヨコナデ、口辺部はハケメ、 胴上位はヘラミガキ。 内面 口縁部はヨコナデ、口辺部はヘラミガ キ、頸部はハケメ後ナデ、胴部はナデ。	細砂粒混入 堅緻 にふい赤橙色	口縁～胴上位
5	壺	口 11.8	口辺部は緩やかに外 反する。	外面 口縁部はヨコナデ、胴部はヘラミガキ。 内面 口縁部はヨコナデ、胴部はヘラミガキ。	中砂粒、金雲母 混入 堅緻 赤褐色	口縁～胴部全周
6	壺	口 16.1	口辺部は緩やかに外 反する。	外面 口縁部はヨコナデ、口辺部はヨコナデ、 ヘラナデ、ハケメ、頸部は等間隔止め←簾状 文。 内面 口辺部はヨコナデ、頸部はハケメ、ヘ ラナデ。	粗砂粒混入 堅緻 淡褐色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周
7	壺		口辺部は緩く外反す る。	外面 口辺～頸部は丁寧なヘラミガキ、頸部 は2連止め簾状文。 内面 丁寧なヘラミガキ。	砂粒多量に混入 やや堅緻 にふい橙色	口辺～頸部 $\frac{1}{2}$ 周 内面丹彩
8	壺	口 24.0	折り返し口縁、口辺 部は緩やかに外反す る。	外面 口縁部はヘラ状工具による刻み目、口 辺部はハケメ。 内面 口辺部はヘラミガキ。	中砂粒混入 堅緻 にふい橙色	口辺部 $\frac{1}{2}$
9	壺	口 18.0	折り返し口縁、口辺 部は緩やかに外反す る。	外面 口縁端部は刻み目、折り返し部はヨコ ナデ、口辺部はハケメ、折り返し部にヨコ ナデ、頸部は2連止め←簾状文、胴上部は波 状文。 内面 口縁部はヨコナデ、口辺部はヘラミガ キ。	中砂粒混入 堅緻 褐色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$
10	壺	口 24.0	折り返し口縁、口縁 は比較的薄く幅広の 折り返し状をなす。	外面 折り返し部は櫛描波状文。口辺から頸 部は幅の狭いヘラによる縦方向の丁寧なミガ キ。頸部は3連止め簾状文。 内面 幅広のヘラによる丁寧なミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にふい橙色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周
11	壺	口 12.6	折り返し口縁、口辺 部は外反する。	外面 口縁部はナデ、口辺部はハケメ後ヘラ ミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒、黒色粒 混入 堅緻 灰褐色	口辺部 $\frac{1}{2}$
12	壺			外面 頸部は2連止め簾状文2段。胴上部は 波状文、胴部はハケメ、胴部に浮文、楕円形、 横沈線が入る。 内面 頸部はヘラミガキ、胴部はハケメ。	細砂粒、黒色粒 混入 堅緻 浅黄色	頸～胴中位 $\frac{1}{2}$ 周
13	壺	胴 19.4 底 7.6	頸部は緩く屈曲し胴 部は球形を呈する。	外面 頸部は沈線1条、肩部に櫛描直線文2 段、一部ヘラミガキで消えている。胴中部に ハケメ後、ヘラミガキ、底部はハケメ。 内面 頸部はハケメ、胴～底部はハケメ後、 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 赤色	口辺部欠損 外面及び内面頸 部のみ丹彩
14	壺	底 7.4		外面 胴～底部はヘラミガキ。 内面 ナデ。	中砂粒混入 堅緻 にふい橙色	胴下位～底部 $\frac{1}{2}$

## 6 検出した遺構、遺物

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
15	甕	口 18.0	口辺部は短く先端が尖る。	外面 口縁部は←波状文、ヨコナデ、円形浮文、口辺部はハケメ、頸部は2連止め←簾状文。 内面 口縁部はヨコナデ、口～頸部はヘラミガキ。	細砂粒混入 やや堅緻 褐灰色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周
16	甕	口 17.8	受け口状口縁	外面 樞描直線縦懸垂文、波状文。 内面 口～頸部はヘラミガキ。	粗砂粒混入 堅緻 灰褐色	口縁～頸部 $\frac{1}{4}$
17	甕			外面 頸部はハケメ、頸部は7本単位の等間隔止め←簾状文、胴部は波状文7本単位の樞描斜格子文、ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 やや堅緻 にぶい褐色	頸～胴上位 $\frac{1}{2}$
18	壺	胴 19.2 底 8.2	器体は比較的縦に長く、最大径が上位にある。	外面 肩部に樞描波状文、胴部最大幅部に円形浮文が付される。推定8個巡る。胴下半部は粗いヘラミガキ。器面は荒れている。 内面 器面が荒れており不明瞭。	細砂粒混入 やや軟弱 にぶい橙色	肩～底部全周
19	甕	口 15.4	口辺部は直状に外反し、口縁部は僅かに内湾する。	外面 口縁部は波状文、円形浮文刺突6個、口辺部はハケメ後、ヘラミガキ、頸部は10本単位の2連止め←簾状文、胴上部は波状文。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい黄橙色	口縁～胴上位 $\frac{1}{2}$ 周
20	甕	口 15.0	口辺部はほぼ直状に外反する。	外面 口辺部は←波状文3段、頸部は8本単位の3連止め←簾状文、胴上部は波状文。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 灰褐色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$
21	小型甕	口 11.4 底 5.5 高 12.8	口辺部は緩やかに外反する。	外面 口辺部は←波状文、頸部は3連止めの←簾状文1段、胴上部は波状文、胴部はヘラミガキ 内面 ヘラミガキ。	粗砂粒混入 堅緻 淡赤橙色	完形
22	甕	口 22.8	口辺部は緩く外反し口縁部でやや内湾する。	外面 頸部に9本単位の2連止め→簾状文、口辺は3段の波状文、胴上部には2段の波状文、胴中部はハケメ後、縦ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	2～3mmの小石混入 やや軟弱 にぶい赤褐色	口縁～胴中位 $\frac{1}{2}$
23	甕	口 16.3	口縁部は短かく外反する。最大径は胴上位にある。	外面 口縁部はヨコナデ、頸部は等間隔止め簾状文、肩部の波状文は波高が小さく2段、胴中部は幅広く樞描波状文を施す。	微砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	口～胴上位 $\frac{1}{2}$
24	甕	口 15.2 胴 13.0 底 5.0 高 14.9	口辺部は直状に外反する。	外面 口縁部はヨコナデ後波状文、口辺部は波状文、頸部は8本単位の3連止め簾状文、胴上部は波状文、胴部～底部ヘラミガキ。 内面 口縁部はヨコナデ、口～底部ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	口縁～底部 $\frac{1}{2}$
25	甕	口 14.0	折り返し口縁。	外面 口縁～頸部4段に樞描き波状文を施す。頸部は3連止め簾状文。 内面 ヘラミガキ。	砂粒多量に混入 やや軟弱 褐色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周
26	甕	口 20.4	折り返し口縁、口辺部は緩く外反する。	外面 口縁部はヨコナデ、口辺部は波状文、頸部は2連止め←簾状文、胴上部は波状文、胴部はヘラミガキ。 内面 ハケメ後ヘラミガキ。	粗砂粒混入 堅緻 にぶい褐色	口縁～胴上位 $\frac{1}{2}$
27	甕	口 18.4	折り返し口縁。口辺部はほぼ直状に外反する。	外面 口辺部は波状文、頸部は2連止め←簾状文。 内面 口～頸部はヘラミガキ。	粗砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
28	甕	口 20.0	折り返し口縁。口縁部は緩やかに外反する。	外面 折り返し口縁端部はヨコナデ、口辺上部はハケメ、口辺部は←波状文、頸部は2連止め簾状文。 内面 口縁部はヨコナデ、口～頸部はヘラミガキ。	中砂粒混入 堅緻 にふい橙色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周
29	甕			外面 口辺部はヘラミガキ、頸部は10本単位の3連止め簾状文、胴上部は波状文。 内面 ヘラミガキ。	中砂粒混入 堅緻 黒褐色	頸～胴上位
30	甕	底 8.3	全体的に器壁は薄い。胴中位やや上に最大径を持つ。底部は上げ底。	外面 頸～胴上部はハケメ後、頸部に11本単位の3連止め簾状文、胴上部は11本単位の←波状文を3段、胴中部はヨコヘラミガキ、下部はタテヘラミガキ、底部はヘラケズリ。 内面 頸～胴中部にヨコハメ後、全体に横方向ヘラミガキ。	砂粒混入 堅緻 にふい橙色	頸～底部 $\frac{1}{4}$ 弱
31	甕			外面 胴上部は7本単位の2連止め←簾状文2段、5本単位の波状文2段後、胴部にタテヘラミガキ。 内面 ヨコヘラミガキ。	砂粒混入 やや堅緻 浅黄橙色	頸～胴下位 $\frac{1}{2}$
32	甕	底 9.8		外面 胴～底部はハケメ後ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にふい橙色	胴～底部 $\frac{1}{2}$
33	甕	底 6.6		外面 ヘラミガキ、底下部はハケメ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒、黒、白色粒混入 堅緻 橙色	底部のみ
34	甕	口 10.0 胴 9.0 底 5.4 高 10.5	口辺部は外反する。一部で内湾する。	外面 口縁端部に一部刻み目、口辺部はヘラミガキ、頸部は等間隔止め簾状文、胴～底部ヘラナデ後、ヘラミガキ。 内面 全面ヘラナデ後ヘラミガキ。	粗砂粒混入 やや堅緻 黒褐色	ほぼ完形
35	甕	口 8.0 胴 6.8 底 4.5	口辺部は緩やかに外反する。	外面 口辺部はヨコナデ、胴部はハケメ、ヘラミガキ、底部はハケメ。 内面 口辺部はヨコナデ、胴部指オサエ、底部は指ナデ。	細砂粒混入 やや堅緻 灰褐色	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 周
36	甕	胴 9.6 底 5.0		外面 胴部は波状文、底部ハケメ後ヘラミガキ。 内面 胴～底部ハケメ後ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 灰褐色	胴～底部 $\frac{1}{2}$
37	壺	底 3.5		外面 胴～底部はヘラミガキ、底面ヘラミガキ。 内面 ヘラナデ。	粗砂粒、黒、白色粒混入 堅緻 淡褐色	口縁のみ欠損
38	台付甕	口 20.0 胴 23.2	口辺部はほぼ直状に外反し、口縁部は内湾する。	外面 口縁部は波状文、頸部は6本単位の等間隔止め←簾状文、胴部は鋸歯文、区画内斜めの鋭いヘラ沈線文、胴上位に円形浮文1、胴下部はヘラミガキ。 内面 全面ヘラミガキ、口縁部は指オサエ。	粗砂粒混入 やや堅緻 暗赤色	口縁～胴下位 $\frac{1}{2}$
39	台付甕	口 6.1 胴 5.9 脚 4.8 高 8.0	口縁部は強く屈曲する。	外面 屈曲下口縁部はヨコナデ、脚部はハケメ。 内面 口辺部は指オサエ、脚部はヘラナデ。	細砂粒混入 堅緻 にふい褐色	完形

6 検出した遺構、遺物

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
40	台付甕	胴 9.0		外面 頸部は2連止め←簾状文、波状文、胴上部はヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	中砂粒混入 堅緻 灰白色	頸～胴上位 $\frac{1}{2}$
41	台付甕	口 14.0	口縁部は強く外反する。頸部はくの字形に屈曲し、なで肩で胴中位～下位で強く張る。胴中位と下位の接合痕明瞭。	外面 頸～胴中位は単位不明瞭で雑な波状文、胴中位はナデ。 内面 横方向のヘラミガキ、接合部は指オサエ。	粗砂粒混入 やや軟弱 灰褐色	口縁～胴下位
42	台付甕	脚 7.1		外面 頸部は←簾状文、胴部は波状文、ヘラミガキ、底～脚上部はヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ、脚上部はヘラケズリ。	細砂粒混入 堅緻 赤褐色	頸～底部 $\frac{1}{2}$
43	台付甕	口 16.6 胴 18.8	口辺部は緩やかに外反する。胴部は強く張る。	外面 口縁端部は波状文、口縁部はヨコナデ、口辺部はハケメ、頸部は8本単位の2連止め←簾状文、胴上部は8本単位の波状文、胴部はハケメ。 内面 ハケメ後ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 明褐色	口縁～胴上部
44	台付甕	口 10.4	口辺部はほぼ直状に外傾する。	外面 口～頸部は波状文、胴～底部はハケメ後ヘラミガキ。 内面 口辺部はヨコナデ、胴～底部はヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 淡赤橙色	口縁～脚上部 $\frac{1}{2}$
45	台付甕	口 10.8 胴 11.0	口辺部は外反する。頸部でやや強く屈曲し胴中位で膨れる。器壁は薄い。	外面 口辺は6本単位の2段の波状文、頸部は8本単位の3連止め←簾状文。 内面 ヘラミガキ、部分的にハケメ。	2～3mmの小石混入 やや軟弱 明赤褐色	口縁～胴中位 $\frac{1}{2}$ 内外面荒れている。
46	台付甕	口 7.0	口辺部は短く立ち上る。	外面 口辺部はハケメ後ヨコナデ、頸部は2連止め←簾状文、胴底部はヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。頸部に指オサエあり。	細砂粒混入 堅緻 橙色	口縁～胴下位 $\frac{1}{2}$
47	台付甕	口 12.2 胴 14.0	口辺部はほぼ直状にやや外傾する。	外面 口辺部は波状文、口縁部は刺突円形浮文計5個、頸部は2連止め←簾状文、胴上部は波状文、胴部はハケメ後ヘラミガキ。胴最大径部に刺突円形浮文計4個貼付。 内面 口辺部はヘラミガキ、胴部はヘラナデ。	中砂粒混入 やや堅緻 暗赤褐色	胴下位 $\frac{1}{2}$ 及び脚台部欠損
48	高 坏	口 12.6 脚 6.1 高 10.8	坏部はやや内湾する。	外面 脚部はヘラミガキ、器面が荒れている。 内面 坏部はヘラミガキ、脚部はヘラケズリ。	中砂粒混入 堅緻 赤色	坏部 $\frac{1}{2}$ 、及び脚部一部欠損 脚内面除き丹彩
49	鉢	口 8.6 底 3.6 高 4.2		外面 ヘラミガキ、底面はヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 赤褐色	体～底部 $\frac{1}{2}$ 内外面共に丹彩
50	鉢	口 14.0 底 4.3 高 7.5		外面 ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 赤色	口辺部 $\frac{1}{2}$ 欠損 底面除き丹彩
51	鉢	底 3.0		外面 ヘラケズリ。 内面 ヘラナデ、ヘラミガキ。	砂粒金雲母混入 堅緻 灰赤色	口縁部欠損 底面除き丹彩
52	鉢	口 8.2 底 4.4 高 5.1	口縁部はやや内湾する。	外面 ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒、黒、白色粒混入 堅緻 褐色	体～底部 $\frac{1}{2}$

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
53	鉢	口 10.2	器体は小さいが器壁は比較的厚い。	外面 口縁部はヨコナデ、以下は粗いヘラミガキ。 内面 粗いヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 明赤褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 欠損
54	台付甕	胴 10.8	胴部は球状を呈す。脚欠損面に3孔断面確認。	外面 胴～脚上部ヘラミガキ。 内面 口辺部はヘラミガキ、胴部はヘラナデ。	中砂粒混入 堅緻 淡橙色	口縁及び脚台部欠損
55	壺	口 16.6		外面 口縁部はヨコナデ、口辺部はハケメ後ヨコナデ。 内面 ヨコナデ、指オサエあり。	中砂粒混入 やや堅緻 灰白色	口縁部のみ $\frac{1}{2}$ 周
56	壺	口 13.8	口辺部直状に伸びる。	外面 ハケメ。 内面 ハケメ。	砂粒混入 堅緻 明赤褐色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$
57	壺	口 14.0	頸部は強く屈曲し、口縁部は緩く外反し、大きく広がる。	外面 ハケメ。 内面 器面が荒れている。	粗砂粒混入 やや軟弱 灰白色	口縁～頸部
58	壺	口 10.0 胴 12.6 底 3.0 高 14.6	口辺部は直状やや内湾気味。	外面 口辺部はヨコナデ、頸部はハケメ、胴～底部はハケメ後、ヘラナデ、底面は指オサエ。 内面 口辺部はヨコナデ、胴部はヘラナデ。	細砂粒、白色粒混入 堅緻 橙色	完形
59	壺	口 12.3 胴 17.2 底 7.2 高 18.3	口辺部は、大きく外反する。口縁端部は稜を持つ。	外面 口辺部はヨコナデ、底部はヘラケズリ底面に近い部分はケズリ後ナデ。 内面 口辺部はヨコナデ、胴上部は指オサエあり。	粗砂粒混入 堅緻 淡橙色	ほぼ完形
60	壺	口 13.1	頸部は、くの字状に屈曲する。口縁部は幅広の折り返し状となる。	外面 口縁折り返し部はヨコナデ、口辺～頸部はハケメ後ヘラミガキ。 内面 口縁～頸部はハケメ後ヘラミガキ、肩部は指オサエ痕がめぐる。	細砂粒混入 堅緻 明褐色	口縁～肩部全周
61	壺	口 14.3	口辺部は緩やかに外反する。	外面 口縁部はヨコナデ、口辺部はハケメ、頸部はヘラナデ、胴部はハケメ後ヘラミガキ。 内面 口～頸部はハケメ、胴部はヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 浅黄橙色	口縁～胴上部
62	壺	口 12.4	口辺部はほぼ直状に外反する。頸部に突帯を持つ。	外面 口縁部はハケメ後ヘラミガキ。口辺部はハケメ、頸部突帯上へラ刻み目。 内面 ハケメ後ヘラミガキ。	中砂粒混入 堅緻 明赤褐色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周
63	壺	口 17.8	口辺部は緩やかに外反する。口縁部は屈曲し直立する。	外面 口縁部はヨコナデ後刻みを持つ。棒状の浮文2、口辺部はハケメ。 内面 口辺部はハケメ、貼り付突帯、突帯上に櫛状具による刺突列を付す。	細砂粒混入 堅緻 赤黒色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周
64	壺		頸部突帯がめぐる。	外面 口辺部はハケメ後ヘラミガキ、頸部突帯部ハケ状工具による刻み、突帯部下ナデ。 内面 口辺部はヘラミガキ、突帯部上櫛状具による刺突列	細砂粒混入 堅緻 にぶい黄橙色	口辺～頸部 $\frac{1}{2}$
65	壺			外面 頸部突帯部上先端へラ工具の刻み目。胴上部はヘラミガキ、胴部はハケメ後横線文、波状文、横線上部に円形浮文。 内面 胴上部はヘラケズリ、胴部はヘラナデ、指オサエ。	細砂粒混入 堅緻 褐灰色	頸～胴部 $\frac{1}{2}$

## 6 検出した遺構、遺物

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
66	壺			外面 胴上部櫛状具による列点文、円形浮文。 内面 胴部は指オサエ痕あり。	中砂粒混入 堅緻 橙色	胴部のみ $\frac{1}{2}$
67	壺	口 11.0	胴下部接合部が離れている。	外面 ハケメ、ゆがみ、剥落著しい。 内面 ハケメ、胴部はヘラケズリ。	粗砂粒混入 やや堅緻 浅黄橙色	口辺部一部欠損
68	甕	口 11.6 胴 17.6 底 6.6 高 19.0	口辺部は直状、頸部はくの字状に強く屈曲。	外面 全面ハケメ、底部一部ナデ。 内面 全面ハケメ、頸部は指オサエ、底部は一部ナデ。	中砂粒混入 やや堅緻 にふい黄橙色	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 周
69	甕	口 12.5 底 3.3 高 11.8		外面 全面ハケメ、底面ハケメ。 内面 ロ～頸部はハケメ、胴～底部はヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にふい橙色	口縁～胴中位 $\frac{1}{2}$ 欠損
70	甕	口 14.2 胴 15.0	口辺部は大きく外反する。	外面 口縁部はヨコナデ、ロ～胴下位はハケメ。 内面 口縁部はヨコナデ、胴部はヘラナデ。	粗砂粒混入 堅緻 橙色	口縁～胴下位 $\frac{1}{2}$ 及び底部欠損
71	甕	底 6.0		外面 胴～底部はハケメ。 内面 ヘラケズリ後ナデ、底面はハケメ痕。	細砂粒混入 堅緻 明褐灰色	胴下位～底部 $\frac{1}{2}$
72	甕	口 16.2		外面 口辺部はヨコナデ、頸～胴部はハケメ。 内面 口辺部はハケメ、胴上部はヘラケズリ。	細砂粒混入 堅緻 にふい橙色	口縁～胴上位 $\frac{1}{2}$
73	甕	口 17.4 胴 19.6	口辺部はほぼ直状。頸部は強く屈曲する。	外面 全面ハケメ。 内面 口辺部はハケメ、胴上部はヘラケズリ、胴部はナデ。	中砂粒混入 堅緻 にふい褐色	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$
74	甕	口 16.1	口縁部は短く直状。	外面 口辺部はヨコナデ、胴部はハケメ。 内面 口辺部はヨコナデ、頸～胴上部はヘラケズリ、ヘラナデ。	細砂粒混入 堅緻 淡橙色	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$
75	甕	口 14.8	口辺部はやや大きく広がる。	外面 口辺部はヨコナデ、胴部はハケメ。 内面 口辺部はハケメ、胴部はヘラケズリ。	粗砂粒混入 やや堅緻 橙色	口縁～胴部全周
76	甕	口 15.8 胴 17.8	頸部はくの字状を呈する。胴は楕円形状を呈す。	外面 全体にハケメ後、口辺部はヨコナデ、胴部はナデ。 内面 口辺部はハケメ後ヨコナデ、胴部はナデ。	2～3mmの小石混入 堅緻 灰黄色	口縁～胴下位 $\frac{1}{2}$
77	甕	口 15.0	口辺部は直状。	外面 口縁部はヨコナデ、口辺～胴上部はハケメ。 内面 口縁部はヨコナデ、頸部はハケメ。	中砂粒混入 堅緻 明褐灰色	口縁～胴上位 $\frac{1}{2}$
78	台付甕	口 16.7 胴 22.6	頸部は強く屈曲し、口縁部は短かく直状。	外面 口縁部粗いハケメ後ヨコナデ、胴部は粗いハケメ。 内面 丁寧なヘラナデ、平滑に仕上げている。	細砂粒混入 やや堅緻 にふい黄橙色	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 脚台部欠損
79	甕	底 5.2	底部は小さく、底面は膨らみを持って、やや凸面を作る。	外面 粗いハケメ。 内面 ナデ、底面は粗いヘラミガキ。	細砂粒混入 やや軟弱 赤褐色	胴下位～底部 $\frac{1}{2}$
80	台付甕	底 8.0		外面 胴部は横方向ハケメ後、縦ハケメ、脚部は斜方向ハケメ、接合部はナデ。 内面 胴中位はハケメ後ヘラナデ、脚上位はナデ、下位はハケメ。	砂粒混入 やや堅緻 明褐灰色	胴～脚台部 $\frac{1}{2}$

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
81	台付甕	脚 9.0	脚部は直状に広がる。	外面 胴下位はハケメ、脚部はハケメ。 内面 指ナデ、底面はハケメ。	2～3mm小石混入 やや堅緻 灰白色	胴下位～脚台部
82	台付甕	脚 9.0		外面 ハケメ。 内面 接合部ヘラナデ、ハケメ、脚部はハケメ、ナデ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい褐色	脚台部のみ
83	S字状口縁甕	口 11.2		外面 口辺部はヨコナデ、胴上部はハケメ。 内面 口辺部はヨコナデ、胴上部は指ナデ。	細砂粒混入 堅緻 灰褐色	口縁～胴上位 $\frac{1}{2}$
84	S字状口縁甕	口 13.2		外面 口辺部はヨコナデ、頸～胴部はハケメ。 内面 口辺部はヨコナデ、胴上位に指オサエ。	粗砂粒、黒色粒混入 堅緻 灰褐色	口縁～胴上位 $\frac{1}{2}$
85	S字状口縁甕	口 14.4		外面 口辺部はヨコナデ、胴上位～下位はハケメ。 内面 口辺部はヨコナデ、胴部はナデ、指オサエあり。	砂粒混入 堅緻 灰褐色	口縁～胴下位 $\frac{1}{2}$
86	S字状口縁甕	口 14.6		外面 口辺部はヨコナデ、頸～胴部はハケメ。 内面 口辺部はヨコナデ、頸～胴部は指オサエ。	細砂粒混入 堅緻 明褐色	口縁～胴上位全周
87	S字状口縁甕	口 14.9		外面 ナデ。 内面 ナデ、指オサエ痕あり。	細砂粒混入 やや堅緻 にぶい橙色	口縁～胴上位 $\frac{3}{4}$
88	S字状口縁甕	胴 13.0 脚 7.4	脚台底部は折り返される。胴と脚の接合部に粘土をつめ補強している。	外面 胴上位ハケメ、胴中位～下位はハケメ、下位は↑ハケメ、脚台部は斜めハケメ。 内面 胴部は指オサエ、ヘラあて痕あり、脚部は指ナデ。	細砂粒混入 堅緻 灰白色	口縁及び、胴上位 $\frac{1}{2}$ 欠損
89	S字状口縁甕	脚 7.2	器体は小さい、脚台天井部の砂を多量に含む補充粘土が剥離している。	外面 胴下部のハケメは細かい。 内面 丁寧なナデ、脚台部は指オサエ、指ナデ。	細砂粒多量に混入 堅緻 浅黄橙色	胴下位～脚台部
90	罎	口 12.5 高 6.4	口辺部は緩やかに外反する。	外面 口縁部はヨコナデ、口辺部はヘラミガキ。体部はヘラケズリ。 内面 口縁部はヨコナデ、体部はヘラミガキ。	中砂粒混入 やや堅緻 淡褐色	口縁～底部 $\frac{1}{2}$
91	罎	口 16.0 高 6.9	口辺部はやや内湾する。	外面 口縁部はヨコナデ、口辺部はヘラミガキ、体部はヘラケズリ、細棒状具によるミガキ。 内面 暗文状ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 赤色	完形
92	罎	口 10.8 高 5.7	頸部は鋭くくびれ、口縁部にかけて内湾する。	外面 口縁部はヨコナデ、体部はヘラミガキ、底面はヘラケズリ。 内面 口縁～頸部はヨコナデ、わずかに棒状具によるミガキ痕認められる。底面はナデ。	細砂粒混入 堅緻 橙色	ほぼ完形
93	罎	口 11.4 高 7.7	口辺部下位は段状に弱い段を作る。	外面 口縁部はヨコナデ、ロ～体部はハケメ後ヘラミガキ。 内面 ロ～頸部はハケメ後ヘラミガキ、体部はヘラナデ。	中砂粒混入 堅緻 灰白色	口縁部一部欠損
94	罎	口 13.0 底 3.6 高 14.0	口辺部はやや内湾しながら外反する。	外面 口辺部はヨコナデ、体部はヘラナデ。 内面 口辺部はヨコナデ、体上部は指オサエ、体部はヘラナデ。	細砂粒混入 堅緻 橙色	完形

## 6 検出した遺構、遺物

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
95	埴	口 12.6 底 4.2 高 4.9		外面 口縁部はヨコナデ、体部はヘラナデ。 内面 口縁部はヨコナデ、体、底部はヘラナデ。	粗砂粒、黒、白色粒混入 堅緻 橙褐色	口縁部一部欠損
96	埴	口 20.0 高 9.7	口縁部は短く外反する。	外面 口縁部はヨコナデ、体部はヘラケズリ、ハケメ、ヘラナデ。 内面 口縁部はヨコナデ、体部はハケメ後ヘラナデ。	細砂粒、黒色粒混入 堅緻 にぶい赤褐色	口縁～底部 $\frac{1}{2}$
97	鉢	口 10.8 底 5.8 高 6.0	口縁部は外反する。	外面 口縁部はヨコナデ、頸部はハケメ、体部はハケメ後ヘラナデ。 内面 口縁部はヨコナデ、体部はヘラナデ。	中砂粒、黒色粒混入 堅緻 灰褐色	口辺部 $\frac{1}{4}$ 欠損
98	高 坏	口 20.2	坏部は下位に稜を持ち斜上方に伸びる。	外面 ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	砂粒混入 堅緻 橙色	坏部 $\frac{1}{2}$ 弱
99	高 坏		坏底部に明瞭な段を作る、脚部内側天井部には粘土を充填している。4孔を穿つ。	外面 丁寧なヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ、ミガキの幅はやや外面より狭く、滑沢に仕上げている。	細砂粒混入 やや堅緻 灰白色	口縁及び、脚下部欠損
100	高 坏	脚 10.8	坏底部に稜を持つ。脚上位に円孔3個穿つ。	外面 坏～脚部はヘラミガキ。 内面 坏部はヘラミガキ、脚上部は指ナデ、脚部はハケメ。	粗砂粒、黒色粒混入 堅緻 橙色	坏下位～脚部
101	高 坏		脚部に円孔3個穿つ。	外面 ヘラミガキ。 内面 ヘラケズリ、ヘラミガキ。	細砂粒、黒色粒混入 堅緻 橙色	坏下位～脚部 $\frac{1}{2}$
102	高 坏			外面 器面の荒れ著しい。 内面 器面の荒れ著しい。	粗砂粒混入 堅緻 灰白色	坏下部～脚上部
103	高 坏	脚 11.6	脚部に円孔4個穿つ。	外面 ヘラミガキ。 内面 ハケメ、ヘラナデ。	粗砂粒混入 堅緻 灰白色	脚部のみ $\frac{1}{2}$
104	高 坏	脚 13.0	脚部は大きく広がる脚中位に円孔3個穿つ。	外面 ヘラミガキ。 内面 器面が荒れている。	砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	脚部のみ $\frac{1}{2}$
105	高 坏	口 10.7	坏部は緩やかに内湾する。脚部に円孔3個穿つ。	外面 坏部はヘラナデ、脚上部はヘラミガキ。 内面 坏部はヘラナデ、脚部はヘラナデ。	粗砂粒混入 やや堅緻 浅黄橙色	口辺 $\frac{1}{2}$ 及び、脚下部欠損
106	高 坏	口 13.6	坏部は内湾する。	外面 口縁部はヨコナデ、坏部はヘラミガキ。 内面 口縁部はヨコナデ、坏部はヘラミガキ。	中砂粒混入 堅緻 灰白色	口縁一部及び脚部欠損
107	高 坏		脚部に円孔3個穿つ。	外面 坏～底部はヘラミガキ、脚部は櫛状工具の横線文。 内面 坏～底部はヘラミガキ、脚部は紋り目。	細砂粒混入 堅緻 淡黄色	坏下位～脚下部 $\frac{1}{2}$
108	高 坏		脚部に円孔推定3個穿つ。	外面 脚部は櫛状具によるミガキ。 内面 脚上部は紋り目、脚部はヘラナデ。	中砂粒混入 堅緻 にぶい褐色	坏部及び裾部欠損



遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
109	器台	器受 9.0 脚 12.8 高 10.5 中央孔 1.4	器受部は内湾気味。脚部は大きく開く。	外面 器受部はヘラナデ、脚部はヘラミガキ、器受部～脚部に貫通孔。 内面 ヘラケズリ後、裾部にナデ。	粗砂粒混入 堅緻 にぶい褐色	脚部 $\frac{1}{2}$ 欠損
110	器台	器受 9.2 中央孔 2.0	脚部は下位で広がる。	外面 ヘラミガキ、中央に貫通孔あり。 内面 器受部はヘラミガキ、脚上位はヘラナデ、ヘラケズリ。	2～3mm小石混入 堅緻 灰白色	器受～脚下部 $\frac{1}{2}$
111	器台	器受 8.9 中央孔 1.4	器受部は僅かに内湾する。脚部に円孔3個穿つ。	外面 ヘラミガキ、中央に貫通孔あり。 内面 器受部はヘラミガキ、脚部はヘラケズリ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	器受～脚上位
112	器台	器受 9.0	脚部に円孔4個穿つ。	外面 器受部はヘラナデ、脚部はハケメ、ヘラナデ。 内面 脚上部は指オサエ。	粗砂粒混入 堅緻 灰白色	器受～脚上位 $\frac{1}{2}$
113	器台	器受 9.3 中央孔 1.2	器受部は僅かに内湾気味。脚部は中位で開く、脚部に円孔3個穿つ。	外面 棒状工具によるミガキ、中央に貫通孔あり。器受端部はヘラ面取りあり。 内面 器受部は棒状工具によるミガキ、貫通部は、ヘラケズリ後、ナデ、脚中位より下はハケメ後ナデ。	細砂粒混入 やや堅緻 灰白色	器受～脚下部 $\frac{3}{4}$
114	器台	器受 8.7	器受部は内湾気味。	外面 器受部上位にヨコハケメ後、ヘラミガキ。 内面 器受部はヘラミガキ、脚中位はヘラケズリ。	細砂粒混入 堅緻 橙色	器受～脚上位
115	器台	器受 9.9 中央孔 1.4	器受部上位に稜を持ち、口縁は短く外反する。脚部に円孔3個穿つ。	外面 ヘラミガキ、接合部にハケメ痕あり、中央に貫通孔あり。 内面 器受部はハケメ後、ナデ、脚部はヘラケズリ後、粗いヘラミガキ。	3～4mmの小石混入 やや堅緻 明赤褐色	器受～脚中位 $\frac{3}{4}$
116	器台	器受 8.6 中央孔 1.8	口縁部は直状に立上る。	外面 口縁部はヨコナデ、器受部はヘラケズリ後ヘラナデ、脚上位はヘラミガキ。 内面 口縁部はヨコナデ、器受部はヘラケズリ後、ナデ、脚上位はヘラケズリ。	中砂粒、黒色粒混入 堅緻 橙色	器受～脚上位
117	器台	器受 8.0	器受部中位に稜を持ち、口縁は短かく外反する。	外面 器受部上位は横方向のナデ、脚中位はヘラミガキ、中央に貫通孔あり。 内面 器受部はヘラミガキ、脚上位はヘラケズリ、脚中位は指ナデ。	2～3mmの小石混入 堅緻 灰白色	器受～脚中位 $\frac{3}{4}$
118	器台			外面 ナデ、 内面 ヘラナデ。	細砂粒混入 堅緻 橙色	脚部 $\frac{1}{2}$
119	器台	脚 10.2		外面 脚部はハケメ後ヘラミガキ、裾部はヨコナデ。 内面 ハケメ、ヘラナデ、ヨコナデ。	細砂粒、白色粒混入 やや堅緻 にぶい橙色	脚部 $\frac{1}{2}$
120	器台	脚 12.2		外面 ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒、黒色粒混入 堅緻 橙色	脚部 $\frac{1}{4}$
121	器台	脚 11.0	脚部に円孔4個穿つ。	外面 ヘラミガキ、裾部はヨコナデ。 内面 ハケメ、ヘラケズリ、ヘラナデ。	細砂粒混入 堅緻 淡橙色	脚部 $\frac{1}{4}$

6 検出した遺構、遺物

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
122	器台	器受 8.7 底 7.1 高 5.4 中央孔 1.0	器受部は低く斜上方へ伸びる。脚部は中位で膨らむ。脚部に円孔4個穿つ。	外面 ナデ、器受部にヘラアテ痕あり、器受部～脚部へ貫通孔、脚上位に4孔あり。 内面 器受部はヘラミガキ、脚部はナデ。	砂粒多量に混入 やや堅緻 にぶい黄橙色	ほぼ完形
123	器台	脚 9.6	脚部に円孔3個穿つ。	外面 器受部はヘラミガキ、脚上部はヘラ痕、脚部はヘラミガキ、裾部はヨコナデ。 内面 器受部はヘラミガキ、脚部はヘラナデハケメ、裾部はヨコナデ。	粗砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	脚部のみ½
124	器台	脚 9.5		外面 脚部はナデ、ハケメ、裾部はヨコナデ。 内面 脚部はハケメ、ヘラナデ、裾部はヨコナデ。	中砂粒、白色粒 混入 堅緻 橙色	脚部のみ
125	器台		器受部上端は外反する。坏底部突帯は粘土紐はり付、中央に径1cm程の円孔を持つ。	外面 坏部はハケメ後ヘラミガキ、坏底部粘土紐はり付、突帯上には棒状具による刻み目を施す。 内面 坏部は丁寧なヘラミガキ。	砂粒目立たず 堅緻 灰白色	胴部のみ½
126	蓋	つまみ 5.0 径 16.0 高 6.1	外面は輪積成形痕が明瞭である。	外面 つまみ部はナデ、成形の際の指オサエあり。 内面 つまみ部はナデ、蓋部はヘラミガキ。	砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	周縁部½欠損
127	埴	口 10.6 胴 17.2	口縁部は内湾する。頸部は強く屈曲し胴部は扁球形。	外面 ロ～胴上部は暗文状研磨、胴中部はナデ、下部～底部はヘラケズリ。 内面 ロ辺部は放射状研磨、胴～底部はナデ指オサエあり。	2～3mmの小石 混入 堅緻 赤褐色	口縁～底部½
128	埴	底 4.6	扁球形胴を持ち底部は安定している。	外面 体部はクテヘラミガキ、底部は一定方向のヘラケズリ。 内面 体上部はナデ、指オサエ痕あり、体下部は巾の広いヘラケズリ。	砂粒混入 やや堅緻 にぶい赤褐色	体部～底部¾
129	埴	口 8.2	口辺部は長く内湾する。	外面 ハケメ後、横方向ヘラミガキ。 内面 口辺部はハケメ後、横方向ヘラミガキ。下部は指オサエ、頸部はナデ、指オサエあり。	細砂粒混入 堅緻 にぶい褐色	口縁～頸部½
130	坏	口 13.0 高 4.7		外面 口縁部はヨコナデ、体部はヘラケズリ。 内面 ヨコナデ。	細砂粒混入 堅緻 明赤褐色	完形
131	高坏	口 15.0	坏部は底部屈曲部から口縁にかけてほぼ直状。口縁端部に面を作る。	外面 丁寧なヘラミガキ。 内面 丁寧なヘラミガキ。	微砂粒を多量に 混入 堅緻 浅黄色	坏部¾周 脚部欠損
132	高坏	口 14.6	坏下位に稜を持つ。	外面 口辺部はヨコナデ、坏底部はヘラケズリ後ヘラナデ。 内面 口縁部はヨコナデ、口辺～底部は、ヘラナデ、ヘラミガキ。	粗砂粒混入 堅緻 橙色	口縁一部及び、 脚部欠損
133	高坏	口 18.0 脚 12.4 高 15.4	坏部は低く斜上方に内湾しながら伸び、口縁部で外反する。	外面 口辺部はヨコナデ、体部～裾部はナデ。 内面 口辺部はヨコナデ、体部はナデ、脚部上位は絞り目の後、指ナデ、裾部はナデ。	砂粒混入 堅緻 にぶい黄橙色	口縁～脚部½
134	高坏	口 15.4	口縁部は緩やかに外反する。	外面 ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	粗砂粒混入 堅緻 橙褐色	脚部欠損

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
135	高坏	口 13.0	口辺部は内湾する。	外面 口縁部はヨコナデ、坏部はヘラナデ。 内面 口縁部はヨコナデ、坏部はヘラナデ。	細砂粒、黒色粒 混入 堅緻 灰白色	坏部欠

第294表 遺構覆土、包含層出土特殊遺物観察表

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
136	ミニチュア	底 3.7	成形は粗雑。指オサエによる弱い凹凸と歪みが目立つ。	外面 ナデ、僅かにハケメ痕が認められる。 内面 ナデ。	細砂粒混入 やや軟弱 橙色	口縁部欠損
137	ミニチュア鉢	口 4.8 底 3.0 高 3.2		外面 口辺部はヨコナデ、体部はナデ。 内面 口辺部はヨコナデ、体部は指ナデ。	粗砂粒混入 堅緻 明褐色	完形
138	ミニチュア鉢	口 3.3 高 3.0	成形は粗雑、器形の歪み、器面の凹凸が目立つ。	外面 丁寧なナデ。 内面 丁寧なヨコナデ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	完形
139	ミニチュア鉢	口 4.4 高 2.9 底 3.8	成形は粗雑、底面は平滑な面を作っている。	外面 ナデ。 内面 丁寧なヘラミガキ。	砂粒少量混入 やや堅緻 にぶい黄橙色	口縁部に僅かに欠損あり
140	ミニチュア鉢	口 5.5 高 3.1	形状は比較的整っている。特に底面は平坦	外面 ナデ。 内面 縦方向指ナデ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい黄橙色	口縁部は部分的に遺存
141	ミニチュア鉢	口 3.9 高 2.5	作りは非常に粗雑、形状は著しく歪んでいる。	外面 横方向のナデ。 内面 器面が荒れている。	砂粒目立たず やや軟弱 浅黄橙色	口縁部は部分的に遺存
142	ミニチュア鉢	口 2.5 高 1.5	手捏、底部は厚い。	外面 ナデ。 内面 ナデ。	砂粒目立たず 堅緻 にぶい黄橙色	口縁部に一部欠損あり
143	ミニチュア鉢	口 4.4 高 2.2	成形は比較的丁寧、底部は著しく窪む。	外面 丁寧なヘラミガキ。 内面 丁寧なヘラミガキ。	砂粒目立たず 堅緻 にぶい橙色	ほぼ完形
144	ミニチュア壺	胴 4.6	底は小さな平底	外面 ナデ。 内面 上部はヨコナデ、底部は指オサエ痕。	細砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	胴部小破片
145	ミニチュア高坏	口 2.6 高 2.5	形状は歪み、器面の指オサエによる凹凸は著しい、粘土積上げ痕あり。	外面 指ナデ痕著しい。 内面 ナデ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい黄橙色	脚端部僅かに欠損
146	ミニチュア高坏	口 4.5	成形は粗雑、粘土積上げ痕明瞭に残る。	外面 指オサエ。 内面 指オサエ。	細砂粒多量に混入 軟弱 にぶい褐色	脚部欠損
147	ミニチュア	脚 3.0		外面 ナデ。 内面 脚部は丁寧なヘラミガキ。	砂粒少量混入 堅緻 にぶい黄橙色	脚部のみ

## 6 検出した遺構、遺物

遺物番号	器種	法量	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
148	ミニチュア高坏	脚 4.1	脚の中位部は比較的膨らむ。脚端部は平坦面になっている。	外面 脚部は全体的にナデ。 内面 脚部はヘラケズリ。	微砂粒混入 堅緻 淡橙色	坏部及び、脚端部 $\frac{1}{2}$ 欠損
149	ミニチュア高坏	脚 4.5	形状の歪み、器面の指オサエによる凹凸は著しい。	外面 指オサエ、ナデ。 内面 体部はヘラナデ、脚部はナデ。	砂粒目立たず 堅緻 明褐色	体部欠損
150	ミニチュア	脚 3.9	成形は粗雑	外面 指オサエ痕が残りに、面調整は非常に粗い。 内面 体部は指オサエ、脚部はナデ。	砂粒目立たず やや軟弱 にぶい黄褐色	体部欠損
151	ミニチュア甕	脚 3.8	成形は比較的丁寧で整っている。	外面 脚部はヘラミガキ。 内面 底部はヘラミガキ、脚部は丁寧なヘラナデ。	細砂多量に混入 堅緻 にぶい橙色	脚部のみ
152	ミニチュア	底 2.6	底部に焼成後の穿孔あり。	外面 底部に指オサエ痕がめぐる。 内面 粗いナデ。	砂粒目立たず 堅緻 橙色	底部破片、2次的に転用したと思われる。

第295表 遺構覆土、包含層出土石・土製品観察表

遺物番号	名称	計測値(cm)	成形	整形	胎土・焼成	色調	備考
153	石製紡錘車	外径 3.9 孔径 0.15	一面は凹面、他面は平坦面をなす。側縁は片側が鋭く角ばる両孔は両側がスリ鉢状に穿っている。	表面は滑沢に磨かれている。	砂粒目立たず 堅緻	灰白色	完形
154	石製紡錘車	外径 5.7 孔径 0.3	石材は浮石質で軽い。片面が強く膨らむ。	器面は平滑に磨かれている。	砂粒目立たず 堅緻	灰白色	完形
155	土製紡錘車	外径 5.3 孔径 0.6	指オサエ痕目立つ。円孔は中心からややはずれている。	ヘラミガキにより器面は滑らか。	砂粒目立たず 堅緻	浅黄褐色	一部欠損
156	土製紡錘車	外径 6.7 孔径 0.9	大型で重量がある。円孔はやや中心からはずれている。	ヘラミガキにより器面は平滑、側縁部は押圧縄文をめぐらす。	細砂粒混入 堅緻	浅黄褐色	完形、一部に剥離がある
157	土製紡錘車	外径 5.6 孔径 0.6	片面は丸く膨らみ、他面は平坦。孔はほぼ正円で直状。	器面は全体に荒れている。指オサエによる凹凸が目立つ。	細砂粒混入 堅緻	にぶい橙色	完形
158	土製紡錘車	外径 10.7 孔径 1.1	著しく大きい、一方の面は凸面、他方はやや凹面をなす。	器面が荒れている。	細砂粒混入 やや軟弱	灰白色	$\frac{1}{2}$ 周遺存
159	土製紡錘車	外径 2.6 孔径 0.3	他に比べ著しく小さい。	器面はナデ、ヘラミガキにより滑らか。	砂粒目立たず 堅緻	にぶい褐色	完形
160	土製紡錘車	外径 5.5 孔径 0.7	指オサエ痕が目立つ。片側の円孔の縁が膨れ上っている。	丁寧なミガキにより器面は滑らか。	砂粒目立たず 堅緻	灰黄褐色	$\frac{1}{2}$ 周遺存
161	土製紡錘車	外径 4.5 孔径 0.6	形状は両面が平滑な正円形に整えられている。	ヘラミガキにより器面は滑らか。	砂粒目立たず 堅緻	赤褐色	$\frac{1}{2}$ 周遺存
162	土製紡錘車	外径 4.9 孔径 0.7	指オサエ痕目立つ。	器面は荒れているヘラミガキ。	細砂粒混入 やや軟弱	浅黄褐色	$\frac{1}{2}$ 周弱遺存

遺物番号	名 称	計測値(cm)	成 形	整 形	胎土・焼成	色 調	備 考
163	土製紡錘車	外径 4.8±	両面わずかに凸面をなし、側縁はやや角ばる。	器面はやや荒れている。	砂粒混入 やや軟弱	浅黄橙色	1/2周遺存
164	土製紡錘車	外径 5.0 孔径 0.8	指オサエ痕が目立つ。側縁部は丸い。	ヘラミガキにより器面滑らか。	細砂粒混入 堅緻	灰白色	1/2周弱遺存
165	土製紡錘車	外径 4.0 孔径 0.4	側縁は角ばり片側がやや膨らむ。	器面は平滑に磨かれている。	細砂粒混入 堅緻	にぶい橙色	1/2周遺存
166	蓋	径 8.2±	円盤状を呈すると思われる端部に焼成前の円孔が2個並ぶ。	ヘラミガキ、中央部には丹彩の痕跡が良好に見られる。	砂粒目立たず 堅緻	黒褐色	小破片
167	土 錘	長さ 3.3 径 3.6	両端は平坦な円柱状。	ヘラミガキ。	細砂粒多量に混入	にぶい橙色	完形
168	土 錘	長さ 2.9 径 1.4	両端は丸い。	器面が荒れている。	細砂粒混入	浅黄橙色	完形
169	土 錘	長さ 3.9 径 2.5	形状は全体に整っている。	全体的に粗いヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻	にぶい橙色	完形

第296表 遺構覆土、包含層出土玉類観察表

遺物番号	名 称	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	成 形	整 形	材質 色	遺存状態 備 考
170	勾 玉	4.3	1.5	1.0	0.2	頭、尾端部は角ばっている。腹部の稜線目立つ。	全体に滑沢に磨かれている。腹部に横方向の研磨痕が明瞭である。	石 灰白色	完形
171	勾 玉	—	1.6	2.0	—	非常に大形である。尾端部は丸い。	丁寧なナデ、器面は滑らかであるが、光沢はない。	土	頭部欠損
172	勾 玉	—	1.2	1.5	—	尾部へ細まる。	ヘラミガキ、一部に丹彩の痕跡あり。	土	頭部欠損
173	勾 玉	2.1	0.9	0.9	0.2	全体に細身である。尾部に細まる。孔は3度の穿孔痕があり不整形。	丁寧なナデ。	土	完形
174	勾 玉	3.3	1.2	1.6	0.3	比較的大きい、成形が粗く凹凸、歪みが大きい。	ナデ	土	完形
175	勾 玉	2.0	0.7	0.65	0.1	非常に小形である。頭、尾端部は丸い。孔も小さい。	指オサエによる歪みが残っている。ナデ。	土	完形
176	勾 玉	3.5	1.25	1.1	0.3	体部断面は丸味のある方形状、頭端部は鋭い角を持つて平坦面を作る。	ヘラミガキ、器面に凹凸が目立つ。	土	完形
177	勾 玉	2.9	1.1	—	0.15	頭、尾端部は丸い。	全体に丁寧なナデ。器面に光沢はない。	土	完形
178	管 玉	2.6	5.8	—	0.28	両端部は角が磨滅し、丸味を持つ。全体に柱状に整っている。	非常に滑沢、孔端部は角ばっており、磨滅は少ない。	石 暗オリーブ灰色	完形
179	小 玉	—	0.62	0.36	0.2			ガラス コバルト	完形

第297表 遺構覆土、包含層出土石器観察表

遺物番号	名称	計測値(mm)	石質	重量(g)	特徴
180	砥石	52.5×31.0×19.0	流紋石	28.5	やや較質な砥石の半欠品、研面は磨耗により著しく内湾し、中央部が薄くなり折半した半片部分である。片側部も大きく欠損がある。
181	扁平片刃石斧	50.5×42.0×10.0	蛇紋岩	44.2	遺存状態は悪く、身上半、片側縁部、刃部先端部を欠損する。刃部は明瞭な稜を作って研ぎ出されている。全体に器面は滑沢。
182	打製石鏃	18.8×17.8×3.7	チャート	1.1	両面調整の無茎鏃。正三角形に近い平面形の鏃身、基部はゆるく内湾する。先端から両側に微調整。
183	打製石鏃	(19.5)×16.1×4.4	珪質頁岩	1.3	両面調整の無茎鏃。先端部を欠く。基部にわたくりが入る。
184	打製石鏃	(28.5)×16.0×5.0	流紋岩	1.4	両面調整の有茎鏃。茎部を欠く。
185	打製石鏃	(28.5)×16.0×5.0	チャート		両面調整の有茎鏃。先端部を欠く。基部は幅広く作られている。
186	打製土掘具	158.0×92.0×15.0	頁岩	246.3	周縁部は二次調整している。一側縁部は抉り入りがある。刃部は使用による大きな破損が一ヶ所見られる。
187	打製土掘具	(34.5)×49.0×13.0	黒色頁岩	27.8	片面自然面を残す。刃部の小破片。刃部の細かい二次調整痕が一部に見られる。
188	打製土掘具	(70.5)×54.0×15.0	頁岩	74.5	片面は自然面が大きく残る。上半部を欠く。両側縁は二次調整により内湾する。刃部は細かな剝離調整を施す。
189	打製土掘具	102.5×47.0×16.5	黒色頁岩	88.8	片面上半部に自然面を残す。側縁は丁寧な二次調整により断面は丸味を持つ。
190	打製土掘具	(71.0)×59.0×20.0	黒色頁岩	112.8	片面は自然面を大きく残す。上半部を欠く。両側縁部には丁寧な二次調整が加えられる。身部中央の断面形は丸味を持つ。刃部は両面から剝離調整する。表面の風化が著しい。
191	打製土掘具	107.5×40.0×13.0	黒色頁岩	80.3	片面から基部は部分的に自然面を残す。側縁部は丁寧な二次調整により、直状に仕上げている。刃部は両面からの剝離調整がそれぞれ片寄っているため、刃先は整っていない。
192	刃器	95.0×63.5×30.0	黒色頁岩	182.4	亀の甲状を呈する両面加工品、剝離面打による厚手の剥片を素材とする。一側縁のみ細かな剝離調整を加え、刃を作出する。
193	打製土掘具	(73.5)×52.0×15.0	珪質頁岩	90.4	片面は自然面のまま、周縁は丁寧な二次調整により形を整えている。刃部は鋭さに欠け丸味を持つ。上半部を欠く。
194	刃器	107.0×61.0×33.0	黒色頁岩	191.4	断面くさび状の厚手の剥片で、鋭角側の側縁に剝離調整による刃を作出する。他方の側縁は敲打による二次調整により形を整えている。一端を欠いている。
195	打製土掘具	107.5×67.5×15.0	頁岩	159.1	片面は自然面で他面は一次剝離面、刃は両端に剝離調整により作出される。側部の抉り入り部は縁が丸味を持つ。刃部から抉れ部まで縦割れがあるが使用時の破損と思われる。
196	刃器	65.0×52.5×15.0	黒色頁岩	56.6	剝離面打による両面調整縦長剥片。刃部は細かな剝離が認められる。側縁にもわずかに二次調整を加えている。
197	刃器	98.5×79.0×41.5	黒色頁岩	367.2	厚さ4.15cmの扁平な母岩を3方から調整を加えている。刃部は大きく内湾している。刃先は使用によると思われるつぶれが認められる。
198	刃器	(27.0)×9.0×3.50	黒色安山岩	0.8	縦長剥片の一側縁を剝離調整を加え刃を作出する。
199	刃器	48.0×65.9×26.0	黒色頁岩	114.1	断面くさび状一片は自然面、他面は母岩からの一次剝離面、刃部は細かな剝離調整を加えている。

遺物番号	名称	計測値 (mm)	石質	重量 (g)	特徴
200	刃器又は石核	46.0×51.0×17.0	黒色頁岩	43.5	両面剥離面が数回の重なりである。特に頂部は3回以上の敲打による横長の剥離面が重っている。刃部は一部に剥離痕が見られる。
201	刃器又は石核	66.5×48.0×25.0	黒色頁岩	82.1	片面に自然面を大きく残す。他面は二次剥離面が重っている。刃部には細かな剥離調整が部分的に見られる。自然面側の刃部は大きな剥離調整を行う。
202	刃器	67.5×53.0×20.0	黒色頁岩	88.4	片面は自然剥離面が残る。他面は一次剥離面。刃部には敲打し細かい剥離により刃を作出する。
203	剥片	44.0×44.5×11.0	黒色頁岩	26.6	剥離面打による剥片。刃部は二次調整はなし。使用による損耗らしい細かい剥離を認める。
204	刃器	42.0×46.5×10.0	黒色頁岩	28.7	剥離面打による剥片、自然面を残す側には一部剥離調整痕を見る。刃部には細かな剥離痕が見られる。
205	刃器	31.5×41.0×7.0	頁岩	12.0	剥離面打による剥片。刃部は細かな剥離調整を丹念に加えている。
206	刃器	63.1×39.4×10.6	頁岩	30.7	縦長剥片、剥離面打面、背面に自然面を残す。一側面に細かな剥離が残されており刃部となっている。
207	刃器	52.0×56.5×10.0	黒色安山岩	36.2	片面は一次剥離面、他の面は二次調整面が切り合っている。刃部は細かな剥離を全体的に認める。使用による損耗か。
208	刃器	27.5×45.0×5.0	黒色頁岩	6.6	剥離面打による縦長剥片、刃部には細かな剥離調整痕が見られる。使用による損耗か。
209	刃器	26.5×43.1×7.0	珪質頁岩	9.1	剥離面打による横長剥片、刃部には全体な細かな剥離痕が認められる、使用による損耗か。
210	刃器	21.6×48.6×6.8	珪質頁岩	6.4	横長剥片。剥片端部に剥離が見られる。加工は両面から施される。
211	刃器	33.8×27.8×8.1	黒色頁岩	8.6	縦長剥片。剥離面打。両側縁ともに微細な剥離が見られる。剥離は側縁下半部に集中する。
212	刃器	29.0×25.0×5.0	黒色頁岩	4.1	刃部に不整形な細かい剥離痕あり、損耗か。
213	刃器	21.5×32.0×6.0		5.1	縦長剥片。二縁辺に丹念な剥離調整により刃を作出している。
214	刃器	37.0×49.5×11.0	珪質頁岩	27.7	片面は自然面、他面は一次剥離面。刃部には細かな剥離痕が認められる。
215	刃器	39.5×42.0×8.0	黒色頁岩	12.7	剥離面打による剥片。刃部は2ヶ所あり、それぞれ細かい剥離痕が見られる。
216	くぼみ石	118.5×53×24.0	点紋黒色片岩	245.4	中央部に2ヶ所窪みがある。他面には認められない。両端部欠損。あるいは調整痕が不明。他は自然面。
217	くぼみ石	135.0×139.5×38.0	輝石安山岩	922.0	ほぼ正円形の扁平な石で表面は溶岩石で面は多孔質。表裏面の中央に窪みがあり、一方は径4cmと大きい。
218	くぼみ石	99.0×56.8×39.0	輝石安山岩	313.1	長円形に整った円盤、表裏面には中央部に損耗痕が認められるが、はっきりと窪んだ状態は見られない。端部に損耗痕が認められる。
219	くぼみ石	(89.3)×56.0×35.0	砂岩	250.0	片面に径2cm程の窪みを見る。石の面は窪みの表面と同様で比較的滑らかである。
220	太形蛤刃石斧の基部	(81.3)×64.0×45.0	輝緑岩	398.0	下半部を欠損する。器面は滑沢。基部上端は敲打痕が一面に認められる。

## 6 検出した遺構、遺物

遺物番号	名 称	計 測 値 (mm)	石 質	重量(g)	特 徴
221	盤状石製品	48.0×33.0×11.5	砂岩	19.5	円盤状の石製品の破片。表裏面とも滑らかで石材は浮石質。
222	石 錘(?)	73.8×37.0×20.0	頁岩	89.7	縦長の表面が滑沢な円盤の両端部に敲打痕が見られる。
223	不 明	(63.0)×68.0×44.0	頁岩	278.9	断面隅丸長方形の縦長石の両端を欠いている。
224	盤状石製品	60.4×72.5×12.0	砂岩	83.6	扁平な円盤で一側縁に敲打、磨耗などの損耗痕がある。
225	砥 石	80.5×74.0×39.0	砂岩	265.5	研面は表裏面と両側面に見られる。研面は中央部が磨耗により窪み幅2mm程の深い溝が走る。特に表面には縦横に数条重って認められる。片半を失う。
226	砥 石	76.0×57.5×20.0	砂岩	115.0	石質は軽石質、表裏面、4周縁とも磨面、特に表裏面は平らに磨耗している。面はやや中央がふくらむ凸面となっている。
227	砥 石	78.0×28.0×19.0	輝石安山岩	64.1	小型の砥石で、表裏面とも砥石は著しく磨り減っている。中央部に内湾する。欠損はない。
228	砥 石	103.0×34.0×29.0	流紋岩	178.8	方柱状で磨耗は進んでいない。一平面がやや内湾するほどに磨耗する。研面として明瞭なのは、もう一側面で、研面は2面とも滑らかである。研面でない方の側面には線刻が認められる。
229	砥 石	70.8×24.0×28.5	流紋石	80.1	方柱状の砥石であり研面は表裏2面である。一面の方は磨耗が著しい。磨耗が進み中央部で折半し、欠けた小口面を磨って面を整えている。端部小口面は欠けた面のまま調整はしていない。

## (13) 遺構観察表、計測表

## 1) 住居跡観察表 (第298表)

番号	平 面 形	規模,面積(m)	比率	壁溝	主軸方向	柱 穴	炉 跡	重 複	時期、遺物出土状態	備考
16 93C28	不明 南東部は調査 区域外			無し	N-0°	不明確	不明	287号住居より 新しい。	古墳前期 覆土中より古式土師器 破片出土。	186頁 図版54
26 75C35	隅丸方形	辺 3.8×3.5	1.09	無し	N-2°-E	不明	中央部西より地 床炉あり。	104号、107号住 と重複。	古墳前期 S字甕破片焼骨出土。	187頁 図版55
29 82C38	不明 北西半は染谷 川が切る。			北 周 壁 下。	N-42°-W		東周壁南寄りに 竈あり。		古墳後期前半 竈内より環、甕の破片、 完形、多数出土。	256頁
70 69C41	隅丸方形	辺 6.1×5.9 柱 2.9×2.4	1.03 1.21	全 周 寸 る。	N-46°-E	主柱は4本構造。 4主柱穴を良好に 検出。	中央部に地床炉 あり。	72号、84号住と 重複。	古墳前期 床面上に土器破片多数 出土。	188頁 図版55 図版56
72 67C42	長方形	辺 5.2±4.1 柱 3.3×2.2	1.27 1.50	無し	N-8°-W	主柱は4本構造。	不明	70号、98号住よ り古い。	弥生後期第3期 床面上に土器破片多数 出土。	32頁
74 64C46	隅丸長方形	辺 4.5×3.5 柱 一×1.3	1.29	全 周 寸 る。	N-24°-W	主柱は4本構造。 主柱穴を2箇所 検出。	不明	後世の溝と重 複。	弥生後期 甕破片床面より出土。	33頁 図版11
83 61C42	隅丸長方形	辺 5.1×4.0 柱 3.0×2.0±	1.28 1.5	無し	N-5°-W	主柱は4本構造。 2箇所検出。	中央部に地床炉 有り。	1号周溝墓より 古い。	弥生中期後半第1期 床面上より土器破片多 数出土。	15頁 図版6
84 70C44	方形 やや台形	辺 6.4×6.3 柱 3.2×2.9	1.02 1.10	有り 幅30cm	N-22°-W	主柱は4本構造。	不明	70号住と重複。	弥生後期～古墳前期 弥生土器破片出土。	34頁 図版12



番号	平面形	規模、面積(m)	比率	壁溝	主軸方向	柱 穴	炉 跡	重 複	時期、遺物出土状態	備考
86 71C47	不明確	辺 3.5×-		無し	N-35'-W	不明	不明		古墳前期 床面上よりS字状口縁 甕出土。	191頁
95 75C43	長方形 染谷川が西半 部を削る。	辺 5.2×3.8 柱 2.5×1.8	1.33 1.39	無し	N-27'-W	主柱は4本構造。 主柱穴を3箇所 で良好に確認。	不明	後世の溝と重 複。	古墳前期 床面上より甕、甕など 各時期の土器混在。	192頁 図版56 図版57
97 67C39	長方形	辺 6.4×4.5 柱 3.3×1.3	1.42 2.54	無し	N-47'-W	主柱は4本構造。 主柱穴を4箇所 で確認。	北奥2主柱穴と 周壁の間に地床 炉あり。	99号、101号住 より古いか。	弥生後期第3期 出土土器は少ない。	36頁 図版13
98 65C41	隅丸方形	辺 5.5±×5.2± 柱 2.8×2.7	1.06 1.04	無し	N-18'-W	主柱は4本構造。	不明	72号、99号住、 後世の溝と重 複。	古墳前期 埴破片出土。	193頁
99 66C39	不明 北東部を検出 する。			無し	N-47'-W	不明	不明	97号住より新し いか。	古墳前期 弥生後期第3期の土 器、S字甕目立つ。	
100 73C40	方形	辺 6.2×6.0 柱 3.0×3.0	1.03 1.0	全周す る。	N-42'-E	主柱は4本構造。 主柱穴は4本良 好に検出。	不明	106号、107号住 と重複。	古墳前期 床面上に土器片多量に 出土。	194頁 図版57
101 68C38	長方形	辺 5.7±×5.0 柱 3.2×1.4	1.14 2.29	無し	N-51'-E	主柱は4本構造。	不明確	97号住と重複、 99号住より新し いか。	弥生後期第3期 床面より土器破片多数 出土。	38頁 図版12 図版13
102 78C41	方形	辺 4.0±×3.6	1.11	無し	N-20'-W	不明確	不明		古墳前期か 弥生土器古式土師器破 片多数出土。	197頁
103 78C37	方形	辺 4.0±×3.7	1.08	無し	N-35'-W	不明確	北西部に地床炉 あり。	105号住より新 しいか。	古墳中期 貯蔵穴、床面上に完形 土器多数出土。	252頁 図版69 図版70
104 74C36	長方形	辺 5.6±×3.8	1.47	無し	N-81'-E	主柱は4本構造。 主柱穴を4箇所 で検出。	南側2主柱間外 側に地床炉あ り。	107号住、2号周 溝と重複。26号 住より古い。	弥生後期第3期 床面上に炭化材の広が り有り。	40頁 図版13 図版14
105 80C37	長方形	辺 4.2×3.8	1.11	無し	N-4'-E	主柱穴は不明。	不明	103号住より古 い。		259頁
106 77C38	不明			無し	N-10'-E	不明確	不明確	107号、100号、 105号住と重 複。107号より古 い。	弥生後期か 覆土中より土器片出 土。	
107 75C38	長方形 東南コーナ 一部検出。	辺 6.0±×4.2± 柱 2.4×2.0	1.43 1.2	無し	N-17'-W	主柱は4本構造。 柱穴は規模が大 きい。	北側奥主柱と周 壁の間に地床炉 あり。	106号住より新 しい。26号、104 号住より古い。	弥生後期	42頁
108 62C38	長方形	辺 7.0×4.2 柱 3.4×1.0	1.66 3.4	無し	N-53'-E	主柱は4本構造。 4主柱穴を良好 に検出。	北東部奥2主柱 穴、周壁間に地 床炉あり。	外の住居との重 複なし。	弥生後期第3期 床面上より半完形土 器破片出土。	43頁 図版14 図版15
109 58C40	隅丸長方形	辺 5.0×4.5 柱 2.5×2.0±	1.11 1.25	無し	N-14'-W	主柱は4本構造。 2主柱穴を検出。	中央から東南1 mの位置に焼土 帯有り。	1号周溝、116号 住と重複。	弥生後期第3期	46頁
112 48C34	隅丸長方形	辺 6.4×4.5 柱 3.4×2.3	1.42 1.48		N-3'-W	主柱は4本構造。 4主柱穴を明確 に検出。	西南コーナ 部に焼土帯あり。	126号住と重複。	弥生後期第1期 床面上より土器破片多 数出土。	47頁 図版15 図版16

## 6 検出した遺構、遺物

番号	平面形	規模、面積(m)	比率	壁溝	主軸方向	柱 穴	炉 跡	重 複	時期、遺物出土状態	備考
113 53C34	隅丸方形	辺 7.0×6.5 柱 3.4×3.2	1.08 1.06	西壁下、 幅20cm。	N-30°-E	主柱は4本構造。 4主柱穴を明確に 検出。	住居中央部に焼 土帯が4箇所あ り。	137号住より新 しい。119号住と 重複。	古墳前期 古式土師器が北西壁部 傍らより出土。	198頁 図版58
114 60C35	不整隅丸長方 形 拡張あり。	辺 5.1×4.5 柱 2.5×2.1	1.13 1.19	全 周 す る。	N-13°-E	主柱は4本構造。 柱穴の配置はやや 台形。	炉跡は検出でき ない。	115号住より古 い。	弥生中期後半第1期 土器破片が多数床面直 上より出土。	17頁 図版6 図版7
115 60C34	隅丸方形	辺 5.5±×4.8± 柱 2.5×2.5±	1.15 1.0	無し	N-45°-E	主柱は4本構造。	不明	114号住より新 しい。130号住と 重複。	古墳前期 甕、壺、大型破片覆土 中より出土。	200頁
116 57C37	B長方形	辺 7.6×6.2±	1.23	無し	N-48°-W	主柱は4本構造。 4主柱穴を良好に 検出。	北西奥2主柱穴 と周壁間に地床 炉あり。	121号住と重複。 118号住より新 しい。	古墳前期 S字口縁甕 など土器破片出土。	203頁 図版59
117 54C39	方形	辺 4.5×4.3 柱 2.4×2.1	1.05 1.14	無し	N-14°-E	主柱は4本構造。 4主柱穴を良好に 検出。	不明	118号住より新 しい。	弥生後期第3期 土器片数点出土。	49頁 図版16
118 54C38	長方形	辺 7.6×5.0 柱 3.7×2.5	1.52 1.48	全 周 す る。	N-26°-W	主柱は4~6本構 造。4主柱穴を明 確に検出。	北側奥主柱穴間 に地床炉あり。	117号、119号住 より古い。	弥生後期第1期 床面上、覆土中より完 形、破片土器出土。	51頁 図版17
119 53C38	不明 北側周壁の一 部を検出。			不明	N-37°-E	主柱は4本構造 か。2主柱穴を検 出。	北側奥2主穴と 周壁の間に地床 炉あり。	118号住より新 しい。120号住よ り古い。	弥生後期第3期 床面上より弥生土器主 体的に出土。	56頁 図版18
120 51C39	隅丸方形	辺 5.0×4.6 柱 2.3×2.0	1.09 1.15	無し	N-86°-W	4主柱は4本構 造。	不明	119号住より新 しい。	古墳前期 S字甕等、古式土師器 数点出土。	205頁 図版59
121 57C36	不明 西北側周壁を 検出。			無し	N-8°-W	不明	不明	116号住と重複。	弥生後期~古墳前期 土器破片数点床面上よ り出土。	205頁
123 43C33	南側周壁を確認。 柱 2.8×-			無し	N-2°-W	南側で2主柱穴を 検出。	不明	124号、135号、 138号住より古 い。	弥生後期第1期 北部床面上に半完形土 器出土。	57頁 図版18 図版19
124 44C30	長方形	辺 9.0±×6.1 柱 4.0×2.6 柱 4.3×1.8	1.48 1.54 2.39	無し	N-10°-E	主柱は4本構造。 3箇所建て替え の柱穴あり。	不明確	125号住より古 い。138号住よ り新しい。	弥生後期第3期 完形土器等多数出土。	60頁 図版19 図版20
125 46C31	不明 西南コーナ 一部を確認。	不明		無し	N-0°	不明	不明	124号住より新 しい。124号覆土 上に床面あり。	古墳前期 床面上より完形土器等 多数出土。	207頁 図版60
126 48C32	長方形 台形状	辺 6.7×5.5± 柱 3.8×2.9 ~1.9	1.22		N-5°-E	主柱は6本構造 か。6主柱穴を台 形状に検出。	住居中央部と西 主柱穴傍に焼土 帯あり。	134号住より古 い。	弥生後期第3期 南西コーナー部に半完 形土器等集中。	67頁 図版20 図版21
130 61C32	隅丸方形 テラス状の段 が巡る。	辺 5.3×5.1 辺 4.7×4.0 柱 2.4×2.2	1.04 1.18 1.09	無し	N-32°-E	主柱は4本構造。 4主柱穴を検出。	不明	115号、133号住 と重複。	弥生後期~古墳前期 覆土中より弥生土器片 出土。	202頁 図版58
133 59C30	不明確	辺 -×5.2 -×2.2		無し	N-39°-W	主柱は4本構造。 西側の主柱穴は確 認できず。	中央部西北寄り に地床炉あり。	170号住より古 い。	弥生後期第3期 南西壁際に獣骨出土。	70頁 図版21
135 45C34	不明確 北半は染谷川 に削られる。			無し	N-23°-E	主柱穴を2箇所 確認。	不明	123号住より新 しい。	古墳前期 床面上より半完形土器 多数出土。	211頁 図版60

(13) 遺構観察表、計測表

番号	平面形	規模、面積(m)	比率	壁溝	主軸方向	柱 穴	炉 跡	重 複	時期、遺物出土状態	備考
137 55C34	胴張り隅丸長方形	辺 4.7×3.9 柱 2.4×2.0	1.21 1.20	東コーナ一部に検出	N-46°-E	主柱は4本構造。2箇所主柱穴を確認。	住居中央部に地床炉あり。	160号住より古い。	弥生中期後半第1期 床面上より大形土器破片、磨製石斧出土。	20頁 図版8
138 41C31	長方形	辺 8.0×5.4 柱 3.2×2.0	1.48 1.6	無し	N-15°-E	主柱は4本構造。4主柱穴を良好に検出。	北奥2主柱穴と主柱穴間に地床炉あり。	123号住より新しく、124号住より古い。	弥生後期 遺物は少ない。	72頁 図版21
140 69C34	方形	辺 5.5×5.2 柱 2.8×2.5	1.06 1.12	東南コーナ一部に浅く検出	N-44°-E	主柱は4本構造。主柱穴を3箇所検出。	不明確	2号周溝より新しい。	古墳前期 床面直上。土器破片出土。	213頁 図版61
141 55C31	隅丸方形	辺 4.7×4.6	1.02	不明	N-49°-E	不明	中央北寄りに地床炉あり。	160号住より新しい。	古墳前期 床上より完形土器多数出土。	215頁 図版61 図版62
150 41C27	長方形	辺 4.6×3.7	1.24	不明	N-29°-W	主柱穴を北側2箇所確認。	北奥2主柱穴間に地床炉あり。	155号、179号、163号住より古い。	弥生後期第3期 地床炉の傍らに磨製石斧出土。	74頁 図版22 図版23
151 54C26	隅丸長方形	辺 3.7×3.0	1.23	南壁下で検出	N-60°-E	不明	検出なし。	164号住より新しい。	古墳前期 埴、杯などの完形土器、紡錘車出土。	223頁 図版62
155 42C26	長方形	辺 5.7×4.3	1.33	無し	N-11°-E	北・西周壁下にビット列あり。柱穴の可能性あり。	不明確	150号住より新しい。	古墳前期 古式土師器完形、多数出土。	225頁 図版63
156 45C25	長方形 北東コーナ一部を検出。	不明		無し	N-45°-E	不明確	北東部床面上に焼土帯があるが不明確。	150号、158号、186号住より古い。	弥生後期第1期 焼土帯を中心に土器破片多数出土。	77頁 図版23
157	周壁の一部検出。	不明		北西部で一部検出。		不明	不明		弥生後期第3期 覆土中より土器破片数点出土。	
158 47C24	長方形	辺 6.2×5.0 柱 2.8×2.0	1.24 1.4	無し	N-10°-E	主柱は4本構造。4主柱穴を検出。	北奥2主柱穴と周壁間に地床炉あり。	159号、189号、182号住より新しい。	弥生後期第3期 北コーナ付近より土器破片多数出土。	79頁 図版24
159 48C25	長方形	辺 7.0±5.0± 柱 3.0×1.6	1.40 1.88	無し	N-4°-W	主柱は4本構造。	不明	158号、182号住より古い。	弥生後期第3期 床面上より土器、炭化材多量に出土。	80頁 図版24
160 56C31	隅丸長方形	辺 9.5×6.0 柱 4.7×2.7	1.58 1.74	無し	N-83°-E	主柱は6本構造。主柱穴を6箇所良好に確認	中央部西寄りに地床炉あり。	137号住より新しい。140号、141号、170号住より古い。	弥生後期第1期 床上より獣歯出土。土器破片多量に出土。	84頁 図版25 図版26
161 60C27	長方形	辺 10.4×4.8 柱 7.3×2.3	2.17 3.17	無し	N-43°-E	主柱は6本構造と思われる。	4~5箇所焼土帯あり。	169号、184号住と重複。	弥生後期第3期	87頁 図版26
162 64C29	隅丸長方形	辺 4.8×-	1.2	無し	N-18°-W	主柱は4本構造。南主柱穴2箇所不明。	不明確 焼土帯が床面に広くあり。	167号、187号住より古い。175号住との先後不明。	弥生中期後半第1期 完形土器、破片多数床上より出土。	23頁 図版9
163	不明 南側周壁の一部検出。	不明		不明	N-	不明			弥生後期	
164 44C26	隅丸方形	柱 2.6×		無し	N-325°	不明 主柱穴を2箇所検出。	東部に焼土帯あり。	203号住と重複。 151号住より古い。	弥生後期~古墳前期 遺物確実なものは無い。	

6 検出した遺構、遺物

番号	平面形	規模、面積(m)	比率	壁溝	主軸方向	柱 穴	炉 跡	重 複	時期、遺物出土状態	備考
166 61C24	隅丸長方形、 大型火災に 遭っている	辺 7.7×4.8 柱 4.5×1.6	1.60 2.81	無し	N-51°-W	主柱は6本構造。 6主柱穴を明確に 確認。	北奥2主柱穴間 に地床炉あり。	252号住より古 い。	弥生後期第3期 出土遺物少ない。 磨製石鎌出土。	91頁 図版27
167 62C27	隅丸方形	辺 5.1×5.0± 柱 2.5×2.3	1.02 1.09	無し	N-61°-E	主柱は4本構造。	中央部に地床炉 あり。	162号、187号住 より新しい。	古墳前期 古式土師器甕、脚部破 片出土。	231頁 図版63
169 57C27	隅丸長方形	辺 8.5×5.5 柱 4.3×2.5	1.55 1.72	南周壁に 一部 検 出。	N-42°-E	主柱は6本構造。 長軸2主柱穴間に 小柱穴あり。	北奥2主柱穴と 周壁の間に地床 炉あり。	161号住と重複	弥生後期第3期 床面上覆土中より土器 破片出土。	90頁 図版26
170 57C30	不明	辺 - ×5.2		無し	N-31°-W	不明 周壁に沿ってピット 列あり。	不明	160号、133号住 より新しい。	古墳前期 古式土師器の破片出 土。	232頁 図版64
171 39C29	不明 北西側周壁を 検出。	不明		無し	N-21°-E	不明確	不明	179号住より古 い。	弥生後期第2期 床上より半完形甕など 出土。	95頁 図版27
173 54C28	隅丸長方形	辺 5.1×4.0 柱 2.3×1.9	1.28 1.21	無し	N-0°	主柱は4本構造。 西北部で主柱穴が 確認出来ない。	南2主柱穴間に 焼土帯あり。	160号、164号住 より古い。	弥生中期後半第1期 壺、甕など半完形土器、 磨製石鎌出土。	25頁 図版10
175 65C29	長方形 住居以外の可 能性あり。	辺 3.6×2.5	1.44	無し	N-78°-E	不明	不明	162号住と重複。 先後関係不明。	弥生中期後半第1期 床上より土器破片出 土。	28頁 図版10
177 50C28	隅丸方形 やや台形	辺 3.5×3.5	1.0	無し	N-18°-E	不明確	不明	11号井戸、185号 住と重複。	古墳前期か 遺物ほとんど無し。	234頁 図版64
179 40C28	不明 南半部不明			無し	N-13°-E	不明確	不明	171号住より新 しい。155号住よ り古い。	弥生後期～古墳前期 床面上より土器破片出 土。	97頁 図版27
182 49C23	長方形	拡張7.2×5.2 拡張前6.6×5.2	1.38 1.27	無し	N-11°-E	主柱は4本構造。 拡張後も主柱穴の 位置同じ。	北奥2主柱穴と 周壁の間に地床 炉あり。	158号住より古 く、159号、189 号住より新し い。	弥生後期第3期 床上より土器破片出 土。	81頁 図版24 図版25
184 58C29	不明 北東辺一部で 周壁を検出。	不明		無し	N-42°-E	不明確	焼土、炭化物を 床面に見る。位 置不明確。	161号住より新 しい。	古墳前期 平縁甕など古式土師器 の細片出土。	233頁
185 49C27	隅丸方形	辺 6.5×6.0 柱 3.3×2.9	1.08 1.14	無し	N-18°-E	主柱は4本構造。	不明確	119号、177号、 203号住と重複。	古墳前期か 住居形態より。遺物殆 ど無し。	235頁 図版64
186 45C22	不明 東半部は大溝 上にあり。	辺 6.9×-		無し	N-6°-W	主柱は4本構造。 柱材が主柱穴中に 残存。	北奥主柱穴と周 壁間に焼土帯あ り。		弥生後期～古墳前期 床上より古式土師器 台出土。	236頁 図版65
187 64C27	隅丸長方形	辺 6.0×3.9 柱 4.6×1.2	1.54 3.83	無し	N-20°-W	主柱は4本構造。 長軸間が長い。4 主柱穴検出。	不明確	162号住より新 しい。167号住よ り古い。	弥生後期第3期 覆土中ピット中より土 器破片出土。	97頁 図版28
189 47C22	不明 東周壁は膨ら む。	辺 7.8×-		無し	N-11°-E	不明確	不明確	182号、158号住 より古い。	弥生後期第3期 床面上より完形甕出 土。炭化物が散在する。	83頁 図版24 図版25
190 49C21	やや膨らむ 北東コーナ ー部を検出。			無し	N-80°-E	不明確	不明確	189号住より古 い。	弥生後期 出土土器殆ど無し。	

(13) 遺構観察表、計測表

番号	平面形	規模・面積(m)	比率	壁溝	主軸方向	柱 穴	炉 跡	重 複	時期、遺物出土状態	- 備考
191 49C27	長方形 やや台形	辺 3.3×3.1	1.06	無し	N-13°-E	不明確	中央部北よりに 地床炉あり。		古墳前期 床面上より古式土師器 破片出土。	237頁
192 56C26	不明 西側コーナー の一部を検 出。	辺 4±×-		無し	N-80°-E	不明確	不明確	161号、169号住 と重複。173号住 より新しく151 号住より古い。	弥生後期第3期 床面上より土器破片多 数出土。	
200 58C23	長方形	柱 3.0±×1.5±	2.0	無し	N-0°	主柱穴を4箇所 で確認。歪んだ長 方形配置。	確実に伴うと判 断できる焼土帯 は無い。	201号住より新 しく205号住よ り古い。	弥生後期	98頁 図版28
201 59C24	長円形 土壇か	辺 3.9×3.2	1.84	無し		不明確	不明確	200号、202号住 と重複。	弥生後期第1期 床面上より土器破片多 数出土。	99頁 図版28
202 57C22	長方形	辺 -×4.5 柱 3.2×1.8	1.78	無し	N-45°-W	主柱は4本構造。 4主柱穴を明瞭に 検出。	不明確	200号、202号、 205号住と重複。	弥生後期	100頁 図版28
203 51C26	長方形	辺 -×4.5 柱 3.2×1.7	1.88	東周壁下 一部にあ り。	N-4°-E	主柱は4本構造 か。	炉跡不明確 炭化物の広がり あり。	185号住より古 いか。	弥生後期第3期 覆土中より土器破片多 数出土。	101頁
205 57C23	方形	辺 4.4×4.2 柱 2.4×2.1	1.05 1.14	無し	N-4°-E	主柱は4本構造。 2主柱穴の配置は 歪む。	中央部に地床炉 2箇所あり。	200号、202号住 より新しいか。	古墳前期 床面上より古式土師 器、甕など出土。	238頁 図版66
212 60C07	隅丸長方形	辺 6.2×4.4 柱 2.5×1.3	1.41 1.92	全周す る。	N-47°-W	主柱は4本構造。 4主柱穴を明瞭に 検出。	西奥主柱穴と周 壁との間に地床 炉あり。	214号住より古 い。	弥生後期第3期 覆土より土器破片出 土。	102頁 図版29 図版30
213 61C07	長方形 拡張がある。	辺 -×4.0 柱 2.5×1.2		全周す る。	N-34°-E	主柱は4本構造。 4主柱穴を南に建 て替え移動。	不明確 床面に 焼土、灰の広が りが著しい。	5号周溝墓、212 号住より古い。	弥生後期第1期 床面上より大型壺下半 部破片など出土。	104頁 図版29 図版30
214 60C08	長方形	辺 4.7×3.3 柱 2.5×2.1	1.42 1.19	全周す る。	N-38°-E	4主柱穴を3箇所 で検出。	北奥2主柱穴と 周壁間に地床炉 あり。	212号住より新 しい。	弥生後期第3期 出土遺物は少ない。	106頁 図版29
215 56C07	長方形 拡張が2回あ り。	辺 6.4×4.7 柱 3.3×2.2	1.36 1.5	全周す る。	N-47°-W	主柱は4本構造。 建て替えの跡あ り。	北奥2主柱穴と 周壁の間に地床 炉あり。	最も外側の壁溝 が最新、226号住 が古い。	弥生後期第3期 床面上より鉢、高杯な ど出土。	106頁 図版31 図版32
216 60C03	隅丸長方形	辺 6.0×4.5 柱 2.6×1.3	1.33 2.0	無し	N-34°-E	主柱は4本構造。 4主柱穴を検出	北東奥2主柱穴 と周壁間に地床 炉あり。	5号周溝墓より 古い。	弥生後期第1期 覆土中より土器破片数 点出土。	112頁 図版32
216 (B区) 41B42	不明 北西周壁の一 部を検出。			無し	N-52°-W	不明	不明確	大半を後世の溝 により失う。	弥生後期 床面上より小形高杯な ど出土。	110頁
217 (B区) 43B44	不明 北周壁を中検 出。			無し	N-27°-W	不明	不明	大半を後世の溝 により失う。	弥生後期第3期	
218 50C03	長方形 東半部は後の 溝に切られる。	辺 5.6×4.2± 柱 2.4×1.4	1.35 1.71	無し	N-22°-E	主柱は4本構造。 南出入口にビット 1対あり。	北奥2主柱穴と 周壁の間に地床 炉あり。		弥生後期第1期 床面上より大型壺の底 部破片多数出土。	111頁 図版33

## 6 検出した遺構、遺物

番号	平面形	規模、面積(m)	比率	壁溝	主軸方向	柱 穴	炉 跡	重 複	時期、遺物出土状態	備考
219 53C07	長方形	辺 5.8×3.8 柱 2.2×1.3	1.53 1.69	無し	N-46°-W	主柱は4本構造。 東出入部にピット 1対あり。	北西奥2主柱 穴、周壁間に地 床炉あり。	220号住より古 い。222号、227 号住より新し い。	弥生後期第2期 瓶完形の他土器破片出 土。	113頁 図版34
220 52C07	長方形 焼失	辺 6.8×-		無し	N-58°-W	主柱は4本構造 か。伴う主柱穴明 瞭ではない。	西奥2主柱穴と 周壁の間に焼土 帯あり。	219号、222号、 227号住より新 しい。	弥生後期第3期 西北部床面上より完 形、破片など多数出土。	116頁 図版34 図版35
222 52C06	長方形	辺 4.5×3.3 柱 2.1×1.1	1.36 1.90	無し	N-48°-W	主柱は4本構造。	不明確	219号、220号住 より古い。227号 住と重複。	弥生後期第2期か 床面上より壺破片など 出土。	118頁 図版34
226 56C07	隅丸長方形 (小型)	辺 3.5×2.6 柱 2.2×1.2	1.35 1.83	全周す る。	N-7°-E	主柱は4~5本構 造。	不明確	215号住より古 い。	弥生後期 出土遺物殆ど無し。	109頁 図版31
227 52C07	長方形	辺 4.4×3.8 柱 2.4×2.0	1.16 1.20	無し	N-40°-E	主柱は4本構造。	西南2主柱穴間 に地床炉あり。	219号、220号住 より古い。	弥生後期第2期か 出土遺物僅少。	118頁 図版34
228 49C07	長方形	辺 5.7±×3.6 柱 2.5×1.4	1.58 1.79	無し	N-40°-W	主柱は4本構造。	北西奥2主柱 穴、周壁間に地 床炉あり。	229号、230号、 231号住より古 い。	弥生後期第1期	119頁 図版36
229 47C07	長方形	辺 6.4×4.5 柱 2.8×1.4	1.42 2.0	無し	N-23°-E	主柱は4本構造。 出入部に1対の ピットあり。	北奥2主柱穴と 周壁の間に地床 炉あり。	228号住より新 しく230号住よ り古い。	弥生後期第2期か 周壁下床面上より壺肩 部逆位で出土。	120頁 図版35 図版36
230 49C07	長方形	辺 -×4.5		無し	N-22°-E	不明確	北奥2主柱穴と 周壁の間に地床 炉あり。	228号、229号住 より新しい。	弥生後期第2期 小鉢小破片出土。	121頁 図版36
231 47C08	不明			無し	N-23°-E	不明確	不明確	229号住より古 いか。232号住よ り古い。	弥生後期第1期か 覆土中より土器破片出 土。	123頁 図版36
232 48C09	隅丸長方形 北西、南西 コーナー部を 検出。	辺 6.0×- 柱 2.7×2.0	1.35	無し	N-26°-E	主柱は4本構造。 2主柱穴を検出。	住居中央部に地 床炉あり。	228号、231号住 より新しいか。	弥生後期第3期 出土遺物僅少。	123頁 図版36
233	正方形 性格不明遺 構。	辺 2.0×-		無し	N-70°-W	不明確	不明確	229号、230号住 と重複。	出土遺物殆ど無し。 床面上に炭化物多量に 出土。	
234 46C01	隅丸長方形	辺 -×3.5± 柱 -×1.3		無し	N-14°-E	北側2主柱穴を検 出。	北奥2主柱穴間 外寄りに地床炉 あり。		弥生後期第2期 出土遺物僅少。	124頁 図版36
235 57C19	長方形 焼失	辺 6.0×4.0 柱 2.8×1.2	1.5 2.33	無し	N-9°-E	主柱は4本構造。	北主柱穴の傍ら 中央部寄りに炉 跡あり。	250号住より新 しい。	弥生後期第2期 完形、半完形多い。床 上に炭化材が散在。	125頁 図版37 図版38
236 61C20	隅丸方形 東部は大溝上 にある。	辺 4.7~×3.9		不明	N-18°-E	不明確	中央部やや南寄 りに地床炉あ り。	252号住と重複。	弥生後期第2期 床面直上、掘り方より 弥生土器破片多数出 土。	130頁 図版39
240 43C09	隅丸長方形	辺 5.1×3.5	1.46	無し	N-12°-E	北側2箇所で見 出。南出入部に一 対のピットあり。	北奥2主柱穴間 に地床炉あり。	241号住より古 い。	弥生後期第3期	132頁 図版39

番号	平面形	規模、面積(m)	比率	壁溝	主軸方向	柱 穴	炉 跡	重 複	時期、遺物出土状態	備考
241 44C07	隅丸長方形	辺 4.2×2.9 柱 2.0×1.1	1.45 1.82	無し	N-12'-E	主柱は4本構造。	北奥2主柱穴間 周壁寄りに地床 炉あり。	240号住より新 しい。	弥生後期第3期 覆土中より土器破片数 点出土。	133頁 図版39
242 38B48	隅丸胴張り長 方形	辺 5.4×4.4 柱 2.4×1.3	1.23 1.85	全周す る。	N-9'-W	主柱は4本構造。	北奥2主柱穴間 に地床炉あり。	住居中央部を中 世溝が切る。	弥生後期第1期 床面上より土器破片多 量に出土。	134頁 図版40
243 37C01	長方形 北辺部を後世 の溝に切られ る。	辺 ー×3.4		無し	N-13'-E	主柱は4本構造 か。建て替え跡あ り。	住居中央より2 箇所に地床炉あ り。	北周壁を後世の 溝に切られる。	弥生後期第1期 床面直上より土器破片 出土。	136頁 図版41
244 41C01	不明			C無し	N-27'-W	不明確	焼土帯及び灰が 散在する面を検 出。	245号住より古 い。246号、248 号住と重複。	弥生後期第1期 床面上より壺口縁部破 片数点出土。	137頁 図版41 図版42
245 42C01	長方形	辺 ー×4.4 柱 2.5×1.6	1.56	無し	N-3'-W	主柱は4本構造。 南出入部にビット あり。	不明確	244号、246号住 より新しい。	弥生後期第3期 床面上より半完形小型 甕出土。	138頁 図版41 図版42
246 41C02	長方形	辺 5.9×4.2 柱 2.4×1.4	1.40 1.71	全周す る。	N-24'-E	主柱は4本構造。 2箇所に建て替え 跡あり。	北奥2主柱穴と 周壁の間に地床 炉あり。	244号、248号住 より古い。	弥生後期第2期 245号、248号住の遺物 と分離困難。	140頁 図版41 図版42
247 39C02	不明 南半部を後世 の溝に切られ る。	不明		無し	N-29'-E	主柱は4本構造 か。	不明確 北奥2主穴間に 焼土帯あり。	248号住と重複。	弥生後期第2期 248号住の遺物と分離 困難。	142頁 図版41 図版42
248 39C02	方形	辺 5.0×4.8 柱 2.5×1.8	1.04 1.39	無し	N-26'-E	主柱は4本構造。 出入部に1対の ビットあり。	不明確	245号住より古 い。	弥生後期第2期 247号住の遺物との分 離困難。	144頁 図版41
249 40C07	隅丸長方形 拡張建て替え あり。	辺 7.0±5.8 柱 2.9×2.2	1.21 1.32	無し	N-0'	主柱は4本構造。 出入部に2対の ビットあり。	北奥2主柱穴間 中央寄りに地床 炉あり。	270号住より古 い。	弥生後期第2期 出入部のビット中より 完形の甕出土。	144頁 図版42 図版43
250 58C19	隅丸長方形	辺 4.9×3.7 柱 2.3×1.6	1.32 1.44	無し	N-75'-E	主柱は4本構造。	西奥2主柱穴と 周壁の間に地床 炉あり。	235号住より古 い。	弥生後期 出土遺物は少ない。	130頁
252 61C23	長方形	辺 6.7×5.0	1.34	無し	N-50'-W	主柱は4本構造。 4主柱穴を検出。	不明確	166号住より新 しい。	弥生後期第3期 床面上より土器破片出 土。	93頁 図版27
253 68C26	不明 南西半部は調 査区域外			無し	N-4'-E	不明確	不明確	255号住より古 い。	弥生後期第3期 ビット、及び周辺より 土器破片多数出土。	148頁 図版44
255 68C26	不明 南半部は調査 区域外			無し	N-9'-E	不明確	北東主柱穴の傍 ら中央よりに地 床炉あり。	253号住より新 しい。	弥生後期第3期 覆土中より土器破片多 数出土。	148頁 図版44
257 68C22	隅丸長方形か	辺 6.0×ー		無し	N-50'-W	不明	不明確		弥生後期第1期 覆土、床面上より土器 破片数点出土。	150頁 図版45
258 65C23	隅丸長方形	辺 8.6×5.5 柱 4.4×2.6	1.56 1.69	東周壁下 あり。	N-50'-W	主柱は4本構造。	北西奥2主柱穴 間外寄りに地床 炉あり。	259号住より新 しい。260号住と 重複。	弥生後期第3期 床面上より人骨2体検 出。	152頁 図版46 図版47

## 6 検出した遺構、遺物

番号	平面形	規模、面積(m)	比率	壁溝	主軸方向	柱 穴	炉 跡	重 複	時期、遺物出土状態	備考
259 65C24	不明	辺 一×4.7		無し	N-44°-W	不明確	不明	258号住より古い。260号住と重複。	弥生後期第1期か床面上より甕の破片など出土。	154頁 図版46
260 67C23	不整形	辺 3.3×2.8	1.17	無し	N-56°-W	柱穴は不明	3箇所に焼土帯あり。	258号、259号住より新しい。	弥生後期第3期床面上より土器破片2~3点出土。	152頁 図版45
262 52C20	長方形	辺 4.7×3.8± 柱 2.3×1.7±	1.23 1.35	無し	N-13°-E	主柱は4本構造。 4主柱穴を明確に検出。	北東側主柱穴の傍ら中央寄りに炉跡あり。	263号住より新しい。	弥生後期第3期床面上に土器散在。	155頁 図版47
263 51C19	長方形	辺 8.0±×5.4 柱 3.9×1.2	1.48 3.25	無し	N-3°-E	主柱は4本構造。 主柱穴3箇所を明確に検出。	北側2主柱穴間やや壁寄りに地床炉あり。	262号住より古い。	弥生後期第3期床面より弥生土器紡錘車出土。	157頁 図版47
264 55C22	長方形	辺 6.3×4.5± 柱 3.5×1.6	2.19	無し	N-62°-W	主柱穴を4箇所検出。6主柱の可能性あり。	西奥2主柱穴間外寄りに地床炉あり。	205号住より古い。267号住と重複。	弥生後期第3期覆土中に土器破片出土。	159頁
267 53C23	不明	柱 3.0×1.5	2.0	無し	N-7°-W	主柱は4本構造。 出入部に1対のビットあり。	西奥2主柱間やや外寄り、地床炉あり。	264号住と重複。	不明 確実に伴う遺物は殆ど無し。	161頁
270 38C07	不明	不明			N-75°-W	不明確	不明確	249号住より新しい。271号住と重複。	弥生後期	148頁
271 38C10	不明 住居東半部遺存			無し	N-4°-E	主柱は4本構造。 主柱穴を2箇所検出。	不明	270号住と僅かに重複。	弥生後期床面上より土器破片数点出土。	161頁 図版48
276 40C12	長方形	辺 6.4×4.7 柱 3.2×1.6	1.36 2.0	無し	N-2°-E	主柱は4本構造。 4主柱穴を良好に検出。	北奥主柱穴と周壁間に地床炉あり。	277号住より新しい。	弥生後期第3期床面上より土器破片数点出土。	162頁 図版48 図版49
277 40C11	長方形	辺 5.6×3.8± 柱 2.9×	1.87	無し	N-22°-E	主柱は4本構造。 3主柱穴を検出。	不明	276号住より古い。東部を中世溝が切る。	弥生後期第1期覆土中より土器破片数点出土。	164頁 図版49
280 85C36	長方形	辺 4.1×3.5 柱 2.1×1.5	1.17 1.4	全周する。	N-69°-E	主柱は4本構造。	中央部やや東より地床炉あり。	北西を後世の溝が切っている。	古墳前期 古式土師器小破片出土。	240頁 図版66 図版67
281 88C33	隅丸長方形	辺 6.7×4.9± 柱 2.5×1.6	1.37 1.56	無し ビット列あり。	N-0°	主柱は4本構造。	北奥2主柱穴と周溝の間に地床炉あり。	284号住より新しい。283号住より古い。	弥生後期第3期床面上より弥生土器破片多数出土。	165頁 図版49 図版50
282 74C33	隅丸方形	辺 5.8×5.5± 柱 3.2×3.0	1.05 1.07	無し	N-15°-W	主柱は4本構造。	中央部やや北寄りに地床炉あり。	294号、291号住より新しい。	古墳前期 床面上よりS字口縁壺など出土。	241頁
283 89C34	長方形に近い	辺 5.7×5.2 柱2.4×2.0	1.09 1.20	無し	N-16°-W	主柱は4本構造。 出入部に1対のビットあり。	ほぼ中央に地床炉あり。	281号、284号住より新しい。	古墳前期か 遺物出土ほとんど無し。	168頁 図版51
284 88C35	長方形	辺 7.2×4.3 柱 3.4×1.6	1.67 2.13	無し	N-0°	主柱は4本構造。 出入部に1対のビットあり。	不明	281号、283号住より古い。39号溝より古い。	弥生後期第3期 弥生土器破片出土。	169頁 図版50
285 97C27	不明 西周壁部の調査	辺 5.8×		無し	N-26°-E	不明	不明		古墳前期 古式土師器埴、大形壺など出土。	243頁



番号	平面形	規模,面積(m)	比率	壁溝	主軸方向	柱 穴	炉 跡	重 複	時期、遺物出土状態	備考
286 99C30	長方形	辺 5.0±×3.9 柱 2.2×1.2	1.20 1.83	南周壁下に 検出。	N-73'-E	主柱は4本構造。 出入部に1対の ピットあり。	不明	288号住より新 しい。	弥生後期第3期 出土遺物は少ない。	169頁
287 92C30	長方形 293号住の拉 張住居か	辺 6.7×4.5 柱 3.5×1.4	1.49 2.50	無し	N-21'-W	主柱は4本構造。 出入部に1対の ピットあり。	東側主柱穴外寄 りに地床炉あ り。	293号住より新 しい。ハリ床を 明瞭に検出。	弥生後期第3期 床面上より土器破片多 数出土。	170頁 図版51 図版52
288 97C30	長方形	辺 5.3×4.7 柱 3.1×2.1	1.12 1.48	全周す る。	N-73'-W	主柱は4本構造。 出入部に1対の ピットあり。	中央部に地床炉 あり。	86号住より古 い。301号住と重 複。	弥生中期後半第1期 土器破片、石製管玉多 数出土。	29頁 図版11
289 77C33	長方形	辺 4.8×2.7	1.78	全周す る。	N-68'-E	住居中心軸上に2 箇所ピットあり。	西部に地床炉ら しきものあり。	290号住より新 しい。302号住と 重複。	弥生後期第3期 西部床面上に炭化物の 広がりあり。	175頁 図版52
290 77C32	長方形	辺 5.5×4.4 柱 2.5×1.3	1.25 1.92	無し	N-30'-W	主柱は4本構造。 出入部に1対の ピットあり。	中央部に地床炉 あり。	289号住より古 い。	弥生後期か 覆土中より土器破片出 土。	178頁 図版52
291 74C31	長方形	辺 7.9×5.4 柱 4.5×1.8	1.46 2.5	無し	N-17'-W	主柱は6本構造。 中間主柱穴はやや 小規模。	北側、東側両主 柱穴間に地床炉 あり。	282号、294号、 295号住より古 い。	弥生後期第3期 床面直上より土器破片 多数出土。	179頁 図版53
292 89C30	隅丸方形	辺 5.5×4.8 柱 2.3×2.0	1.15 1.15	全周す る。	N-47'-W	主柱は4本構造。 4主柱穴を良好に 検出。	不明	231号土壘と重 複。	古墳前期 床面上より古式土師器 平縁甕、器台など出土。	244頁 図版67 図版68
293 92C30	長方形 287号住の拉 張前住居か	辺 6.2×3.5 柱 2.7×1.4	1.77 1.93	無し	N-21'-W	主柱は4本構造。	北奥2主柱穴間 に地床炉あり。	287号住より古 い。	弥生後期第3期 土器破片多数出土。	175頁 図版52
294 73C33	長方形	辺 4.2×2.6	2.0	無し	N-43'-E	中央部に1箇所柱 穴検出。周壁下に ピットあり。	無し	291号住より新 しい。	弥生後期第3期 出土土器は少ない。	182頁 図版53
295 71C30	不明			北周壁下 に検出。	N-50'-W	1主柱穴を検出。 他は調査区域外。	不明	291号住より新 しい。	古墳前期 パレンス壺破片出土。	246頁
296 83C30	隅丸方形	辺 5.6×5.4 柱 2.6×2.6	1.03 1.00	無し	N-22'-W	主柱は4本構造。 主柱穴を2箇所で 検出。	不明	297号住より新 しく、39号より 古い。	古墳前期 古式土師器高坏、甕、 壺破片出土。	247頁 図版68
297 84C31	長方形	辺 9.3×5.8 柱 4.5×2.1	2.14	無し	N-19'-W	主柱は6本構造 か。2主柱穴を検 出。	不明	296号住、39号溝 より古い。	弥生後期第3期 古式破片平縁甕、弥生 土器破片出土。	183頁
298 77C30	不明確			無し	N-10'-W	不明確	中央部北寄りに 地床炉あり。	300号住より古 い。	古墳前期 S字口縁甕、器台壺破 片など出土。	249頁 図版69
299 80C30	長方形	柱 一×5.±		無し	N-9'-W	北側2主柱穴を検 出。建て替え跡あ り。	北奥2主柱と周 溝の間に地床炉 あり。	303号住より新 しい。300号住よ り古い。	弥生後期第3期か 土器小破片出土。	185頁 図版54
300 78C30	不明 西南部は未調 査			無し	N-8'-E	柱穴らしいピット を4箇所で検出。	住居北部に地床 炉あり。	298号住より新 しい。	古墳前期 東海系埴輪破片など出 土。	251頁 図版54
301 96C31	不明 検出状態は悪 い。			無し	N-55'-W	不明	不明	288号住より新 しい。	古墳前期 土器小破片出土。	251頁

6 検出した遺構、遺物

番号	平面形	規模、面積(m)	比率	壁溝	主軸方向	柱 穴	炉 跡	重 複	時期、遺物出土状態	備考
302 77C35	隅丸方形	辺 ー×4.3	1.07	無し 周壁下に ビット検 出	N-0°	不明	不明	289号住と重複。	弥生後期～古墳前期 土器小破片出土。	179頁
303 81C31	不明			無し	N-56°-E	不明	不明	296号、299号住 より古い。	弥生中期後半第1期 床面上より土器破片多 数出土。	32頁

2) 周溝墓観察表 (第299表)

番号	平面形	規 模(m)	溝規模(m) 幅、深さ	主体部、形状、規模(cm) 形状、長軸×短軸×深さ	遺物出土状態	時 期	備 考
1号	方形 4隅土橋	南-北 12.0 東-西 11.0	東 1.3、0.5 西 1.5、0.5 南 1.7、0.4 北 1.3、0.5	不明	周溝内上部より完形土器、 破片多量に出土する。	弥生後期 第1～3期	北側溝の一部を染谷川により失う。出土土器に時期幅がある。
2号	不整形	東-西 10.6	東 1.6、0.1 西 1.8、0.3	不明確 方形土壇 230×80	周溝内より口縁～胴上半部 を完存する壺が出土。	弥生後期 第1期	
3号	不整形	北西-東南 6.2	西南 0.9、0.3	不明	周溝中より土器破片出土。	弥生後期	
4号	方形		東 1.3、0.3 西 1.1、0.3	不明	周溝中より壺、甕下半部破 片など出土。	弥生後期	封土残丘あり。
5号	長方形		北西 1.1、0.2 西南 1.3、0.3	不明	遺物殆どなし。	弥生後期～ 古墳前期	封土残丘あり。
6号	隅丸方形	東-西 13.3	西 2.8、 北 2.4、0.6	不明	溝内中より、古式土師器壺 出土。	古墳前期	封土残丘あり。
7号	不整形	封土残丘規模 東-西 10.0 南-北 9.1	東 1.2、0.4 西 1.2、0.4 北 1.4、0.3	第1 土壇・壺棺 正方形 108×101×15 第2 土壇 ー×80×15	溝内中位、及び台状部より 土器破片多数出土。	弥生後期 第2～3期	
8号	方形	北東-西南 7.8	北西 1.0、0.5 西南 0.9、0.45	不明	溝内下部より土器破片多数 出土。	弥生後期 第2～3期	
9号	円形	(マウンド規模) 北西-東南 6.3 北東-西南 6.5		第1 土壇・壺棺 隅丸長方形 105×75× 6 第2 土壇 長方形 ー×65×16	第2 主体部より土製勾玉、 台状部より壺、高坏、鉢な ど出土。	弥生後期 第3期	
10号	方形	南-北 7.2 東-西 6.2	南 1.0	不明	僅少。	弥生後期	
11号	不明			第1 土壇 隅丸長方形 120×70×6 第2 土壇・壺棺 正方形 82×82×30 第3 土壇 隅丸長方形 168×64×12 第4 土壇 隅丸長方形 150×58×6	第1 主体部より甕、覆土中 よりガラス小玉出土。	弥生後期 第2～3期	

番号	平面形	規模(m)	溝規模(m) 幅、深さ	主体部、形状、規模(cm) 形状、長軸×短軸×深さ	遺物出土状態	時期	備考
12号	不明			第1 土壙・壺棺 隅丸方形 100×95×20 第2 長円形土壙		弥生後期	
13号	不明		- 1.3、0.3	不明	周溝内より土器破片多量に に出土する。	弥生後期 第2～3期	
15号	不明			土壙 110×35×18	台状部よりガラス小玉、石 製白玉出土。	弥生後期か	
D1号	円形	南-北 8.3	北 1.1、0.5 南 1.1、0.4	壺棺 2基	周溝より完形土器、土器破 片多数出土。	弥生後期 第2～3期	
D2号	不整形円形	東-西 6.6	北西 1.6、0.4 東南 1.0、0.3	壺棺 1基	周溝内より土器破片多数出 土。	弥生後期 第2～3期	
D3号	不明		北西 0.5、0.2	不明	僅少。	弥生後期	
D4号	不明		南 0.7、0.3	土壙 1基	周溝内より壺、甕、台付甕 など出土。	弥生後期 第2～3期	
D5号	不整形円形	南-北 5.8 東-西 5.6	東 0.4、1.0	壺棺 3基 土壙 1基 長円形 220×110	周溝内、土壙覆土中より土 器破片多数出土。	弥生後期 第2～3期	
D6号	不整形円形	東-西 4.8	東 0.8、0.3 西 0.6、0.3	不明	僅少。	弥生後期	
D7号	円形	東-西 8.4	東 1.2、0.2 西 0.9、0.2	不明	台状部、周溝内より土器破 片出土。	弥生後期 第1～3期	
D8号	不整形円形	東-西 6.5	西 0.7、0.2	不明	土器破片僅かに出土。	弥生後期	
D11号	円形	東-西 6.2±	西 0.7、0.1	不明	壺小破片出土。	弥生後期	
D12号	方形	南-北 6.8 東-西 6.9	東 1.0、0.25 西 1.0、0.1	不明	周溝内より壺、甕などの出 土。	弥生後期 第1～3期	出土土器に 時期幅があ る。
D13号	円形		西 0.8、0.4±	不明	周溝内より甕、高坏、鉢な ど半完形土器出土。	弥生後期 第2期	

## 6 検出した遺構、遺物

## 3) 溝計測表 (第300表)

(単位: cm)

番号	上端幅	下端幅	深さ	方 向	時 期	番号	上端幅	下端幅	深さ	方 向	時 期
2	1200	660	140	N-0°	縄文～奈良・平安	97	197	55	68		弥生後期
6	100	60	30		弥生後期	98	122	67	11	N-30°-E	弥生後期
11	120	60	40	N-0°	弥生後期	99(A)	142	16	65	N-32°-E	弥生後第3期
17	200	89	99	N-53°-E	弥生後期	99(B)	140	37	60	N-32°-E	弥生後第3期
18	81	30	70	N-40°-E	弥生後期第3期	100	190	38	55	N-36°-E	弥生後第2～3期
20	260	80	72	N-16°-E	弥生期	101	50	25	13		古墳初頭
21	70	56	12		弥生期	102	25	13	25	N-6°-W	古墳初頭
31	63	39	15	N-20°-W	弥生期	103	33	14	8	N-6°-W	古墳初頭
32	93	80	5	N-84°-W	弥生期	104	53	26	11	N-82°-W	古墳初頭
33	46	28	22	N-82°-W	弥生期	105	90	26	25	N-0°	古墳前期
39	210	30	70		古墳後期	106	78	34	25	N-0°	古墳前期
76				N-35°-W	弥生後期第1期	107	72	34	19	N-0°	古墳前期
77	296	45	90	N-4°-E	弥生後期	108	84	22	31	N-17°-W	弥生期
79	56		4	N-35°-W	古墳初頭	109	38	1	19	N-10°-W	古墳前期
80	18	7	3	N-7°-E	古墳前期	122	62	13	10	N-20°-W	古墳前期
81	29	14	5	N-11°-E	古墳前期	123	27	5	9	N-0°	古墳初頭
86	50	40	15	N-48°-E	弥生後期～古墳前期	124	34	6	25	N-177°-W	古墳初頭
87	40	22	20	N-85°-E	弥生後期	126	96	20	50	N-20°-W	弥生後期～古墳前期
90	130	19	17	N-140°-W	弥生後期	128	140	25	60	N-25°-E	弥生後期～古墳前期
91	102	26	37	N-163°-W	弥生後期	135	102	24	50	N-25°-W	弥生後期
92	63	24	20	N-162°-E	弥生後期	136	45	15	20	N-41°-W	弥生期
94	32	13	6	N-0°	弥生期	141	87	56	10	N-60°-E	弥生期

## 4) 土壌計測表 (第301表)

(単位: cm)

番号	平 面 形	長 径 (軸)		短 径 (軸)		深さ	時 期	重 複 ・ 備 考
		上端	下端	上端	下端			
165	上部 円形 下部 長方形	125	50	118	35	93	古墳前期	116号住居と重複
166	隅丸長方形	119	68	109	63	85	古墳前期	112号、126号住居と重複
208	円形	202	175	198	165	52	弥生後期	151号住居と重複
216	円形	192	112	166	106	24		
217	円形	185	168	184	160	47	弥生後期第1期	3号周溝墓と重複
218	円形	230	187	198	166	74	弥生後期	
219	長円形	174	131	155	91	70		
220	円形	227	179	226	170	54	弥生後期	
221	円形	182	135	170	139	56	弥生後期か	230号住居と重複
222	円形	207	138	184	131	62	弥生後期	220号住居と重複
231	長方形	187	168	182	—	25	弥生後期第3期	287号、292号住居と重複
232	隅丸長方形	100	80	70	55	10	弥生後期	233号土壌と重複
233	隅丸長方形	100	80±	65	55	15	弥生後期	232号土壌と重複

## 5) 井戸計測表 (第302表)

(単位: cm)

番号	平 面 形	長 径 (軸)		短 径 (軸)		深さ	時 期	重 複 ・ 備 考
		上端	下端	上端	下端			
2	円形	233	48	214	42	198	弥生後期第3期	
11	円形	102	50	101	52	100	古墳前期	177号住居と重複
40	円形	172	66	143	46	130	弥生後期第1期	229号住居と重複

## 7 鑑定、分析

### (1) 新保遺跡出土自然木の樹種とそれによる古植生の復元

鈴木 三 男  
能 城 修 一

はじめに

群馬県高崎市の新保遺跡には弥生時代中期から古墳時代前期にかけて埋積した大溝があり、その堆積土中から大量の木材が出土した。これらのうち、木製の鋤、鍬などの農具類、丸木弓、容器、板材などの加工木1,028点の樹種については既に報告している(鈴木・能城、1986;山田、1986)。それによると鍬、鋤などの農具は常緑樹であるコナラ属のアカガシ亜属、いわゆる檜の木がもっとも多く、ついで落葉性のクヌギ節、コナラ節が、丸木弓にはイヌガヤ、板材等にはモミ属、クリ、クヌギ節などが用いられていて、加工木全体では51樹種が見いだされた。引き続き、同じ大溝出土の自然木1,324点と染谷川西方約40mの所にある旧河道の縄文時代中期層出土の自然木232点、合計1,556点について樹種の同定を行ったので報告する。以下に同定した各樹種の形質、特徴を記載し、その顕微鏡写真を図版190~211までに示す。また、それらの集計したものを第303~305表に示し、さらに以前にパリノ・サーヴェイ株式会社によって行われた花粉分析結果も加味して遺跡成立当時の古植生の復元を試みた。

#### 各樹種の記載

以下では、木材の組織から種を認めうるものは種名で記し、そのほか属あるいは亜属、または節のレベルまでしか同定できないものはそのランクの名前によって表した。加工木の報告では、種以上のランクのものはすべて「類」をつけて表現していたが、この報告においては認識しているランクを植物分類学にそってより明確に表現することにした。それぞれの分類群についてはその木材解剖学的な記載をおこない、同定の根拠を明らかにした。ただし加工木の報告にあるものについては重複を避けるため特別のものを除いて記載を省略した。それらについては鈴木・能城(1986)を参照されたい。また各分類群の代表的な標本の横断面・接線断面・放射断面の顕微鏡写真を図版190~211に示し、同定された全標本の標本番号を各分類群ごとに第305表に記した。

1. カヤ *Torreya nucifera* (Linn.) Sieb. et Zucc. イチイ科 図版190: 1-3 (GS-1342)
2. イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* (Knight) K. Koch イヌガヤ科 図版190: 4-6 (GS-691)
3. モミ属 *Abies* マツ科 図版190: 7-9 (GS-438)  
モミ属とは加工木の報告における「モミ類」に相当する。
4. トウヒ属 *Picea* マツ科 図版191: 10-12 (GSC-98)  
トウヒ属とは加工木の報告における「トウヒ類」に相当する。

7 鑑定、分析

5. マツ属単維管束亜属 *Pinus* subgen. *Haploxylon* マツ科 図版191:13-15 (GS-581)

マツ属単維管束亜属とは加工木の報告における「五葉松類」に相当する。マツ属複維管束亜属に含まれるアカマツは自然木としては1点も見いだされなかった。

6. ネズコ *Thuja standishii* (Gord.) Carr. ヒノキ科 図版191:16-18 (GS-893)

垂直および水平樹脂道とともに欠く針葉樹材。樹脂細胞は夏材部に年輪と平行に散在する。仮道管にはらせん肥厚はみられない。分野膜孔はスギ型でやや小さく、1分野に2~3個存在する。

以上の形質からこの標本はヒノキ科のネズコの材であると同定された。ネズコは本州および四国の温帯に主として生育する常緑針葉樹で、大きなものは高さ30m、直径60cmに達する。

7. オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. クルミ科 図版192:19-21 (GSC-47)

8. サワグルミ *Pterocarya rhoifolia* Sieb. et Zucc. クルミ科 図版192:22-24 (GS-75)

丸い大型の管孔が年輪界にむけてやや径を減じながらまばらに散在する散孔材。道管の穿孔は単一。柔組織は接線状でいちじるしく、放射組織は同性で2細胞幅である。

以上の形質よりこの標本はクルミ科のサワグルミの材であると同定された。筆者らが遺跡からサワグルミの材を検出したのはこれが初めてである。サワグルミは渡島半島以南の温帯の沢沿いに主として分布する落葉広葉樹で、大きなものは樹高30m、幹径1mに達する。

9. ハコヤナギ属 *Populus* ヤナギ科 図版192:25-27 (GSC-8)

ハコヤナギ属は加工木の報告における「ハコヤナギ類」に相当する。

10. ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科 図版193:28-30 (GS-1290)

ヤナギ属は加工木の報告における「ヤナギ類」に相当する。

11. カバノキ属 *Betula* カバノキ科 図版193:31-33 (GS-1397)

カバノキ属は加工木の報告の「カバノキ類」に相当する。

12. クマシデ属クマシデ節 *Carpinus* sect. *Distegocarpus* カバノキ科 図版193:34-36 (GS-73)

丸みをおびた小型の管孔が放射方向に数個複合して、放射方向にのびる帯状に集合する散孔性放射孔材。道管の穿孔は段数の少ない階段状。放射組織はほぼ同性で1~3細胞幅である。

以上の形質からこの標本はクマシデ属クマシデ節の材であると同定された。日本に生育するクマシデ節の樹木にはサワシバ *Carpinus cordata* およびクマシデ *C. japonica* があるが、いずれも温帯の沢沿いに多い落葉広葉樹で、大きなものは樹高12m、幹径60cmぐらいになる。自然木の中には、加工木に見られたクマシデ属イヌシデ節(加工木の報告における「イヌシデ類」)は1点も見いだされなかった。

13. アサグ *Ostrya japonica* Sarg. カバノキ科 図版194:37-39 (GS-38)

14. クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版194:40-42 (GSC-37)

15. ブナ属 *Fagus* ブナ科 図版194:43-45 (GSC-13)

まるい小型の管孔が年輪界にむけて径を減じながら密に散在する散孔材。道管の穿孔は単一あるいは数本の横棒からなる階段状で、チロースがみられる。放射組織は同性で、大型の複合放射組織をもつ。

以上の形質からこの標本はブナ科のブナ属の材であると同定された。日本に分布するブナ属の樹木には、温帯に生育するブナ *Fagus crenata* と中間温帯に生育するイヌブナ *F. japonica* の2種類があり、いずれも樹高25mに達する落葉広葉樹である。このうちブナは日本の温帯林の主要構成要素であって、現在でも広いブナ林が山地帯には残っている。

16. コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 図版195:46-48 (GS-1012)

コナラ属クヌギ節とは加工木の報告の「クヌギ類」に相当する。

17. コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版195:49-51 (GSC-48)

コナラ属コナラ節とは加工木の報告の「ナラ類」に相当する。

18. コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図版195:52-54 (GS-248)

コナラ属アカガシ亜属とは加工木の報告の「カン類」に相当する。

19. ムクノキ *Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch. ニレ科 図版196:55-57 (GS-790)

20. エノキ属 *Celtis* ニレ科 図版196:58-60 (幹材Aタイプ、GSC-53)、61-63 (幹材Bタイプ、GS-1387); 図版197:64-66 (根材、GSC-142)

幹材Aタイプ(GSC-53):年輪のはじめに大型の管孔が単独あるいは2個複合して1~2列にならび、そこから急に径を減じた小管孔が夏材部では多数集合して、斜め接線方向にのびたやや不連続な塊となって配列する環孔材。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は異性で1~10細胞幅くらいであり、ふつう鞘細胞をもつ。

幹材Bタイプ(GSC-1387):年輪のはじめに大型の管孔が単独あるいは2~3個複合して数列ならび、そこから順次径を減じた小管孔が夏材部では多数集合して、斜め接線方向にのびた不連続につながる塊となって配列する環孔材。これ以外の、道管や放射組織の形質はAタイプのものと同じである。

根材(GSC-142):やや大型の管孔が年輪界にそって1列にならび、そこからやや径を減じた中型(~小型)の管孔が斜め接線方向あるいは放射方向に連なっている環孔材。これ以外の形質は幹材のものと同じである。

以上の形質からこの標本はニレ科のエノキ属の材であると同定された。今回の調べた自然木のなかにはAタイプのもものが多く、こうした道管の配列は枝材においても観察された。これまで筆者らが関東地方南部でおこなってきた調査ではエノキ属の材のほとんどのものがBタイプの道管の配列を示していた。このことよりBタイプのものはAタイプのものと分類群が異なっており、より冷温帯性のものであろうということが推定されるが現在のところどのような種に対応するのかは明らかとなっていない。日本に分布するエノキ属の

樹木はいずれも高木で、本州以南の暖帯から亜熱帯にはエノキ *Celtis sinensis* が、また全国の温帯にはエゾエノキ *C. jessoensis* が、そして本州以南の暖帯にはコバノチョウセンエノキ *C. biondii* が分布しているが、材構造から種の識別をするには至っていない。

21. ニレ属 *Ulmus* ニレ科 図版197:67-69 (GSC-24)

ニレ属とは加工木の報告の「ニレ類」に相当する。

22. ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 図版197:70-72(幹材、GS-1356); 図版198:73-75(根材、GS-1252)

幹材:年輪のはじめに大管孔が1(〜2)列にならび、そこから急に径を減じた小管孔が夏材部では多数集合して接線方向につながった塊となって散在する環孔材。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は異性で1-8細胞幅くらい、しばしば大型の結晶細胞をおもにその上下端にもつ。

根材:大型の管孔がやや連続に年輪界に沿って並び、そこから晩材部にかけて中〜小型の管孔が塊をなして散在している環孔材。これ以外の形質は幹材と同じである。

以上の形質からこれらの標本はニレ科のケヤキの材であると同定された。

23. コウゾ属 *Broussonetia* クワ科 図版198:76-78 (GS-282)

年輪のはじめにやや大型のまるい管孔がならび、夏材部では徐々に径を減じた小管孔が放射方向にのびた塊状に集合して散在する環孔材。道管の穿孔は単一。小道管の内壁にはらせん肥厚がある。柔組織は周囲状あるいは翼状で、放射組織は同性で6細胞幅くらいである。

以上の形質からこの標本はクワ科のコウゾ属の材であると同定された。日本に生育するコウゾ属の植物にはヒメコウゾ *Broussonetia kazinoki* とカジノキ *B. papyrifera* とがあるが、このうちカジノキはもともと日本に自生していたものかどうか学者によって意見が分かれている。加工木の報告の際には、放射組織が6細胞幅くらいと狭いものしか見られなかったためヒメコウゾと判断したが、自然木のなかには放射組織がそれよりも幅広いものがみられたため、属レベルの同定にとどめることにした。

24. ヤマグワ *Morus bombycis* Koidz. クワ科 図版198:79-81 (GS-302); 図版199:82-84 (GS-459)

に数個かたまって散在する環孔材。道管の穿孔は単一で、ときにチロースがみられ、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は異性で1-7細胞幅くらいである。

以上の形質からこれらの標本はクワ科クワ属のヤマグワの材であると同定された。ヤマグワとしたものの中には変異がみとめられ、GS-302では夏材部の管孔が小さいが、GS-459ではそれが著しく大きい。同様の変異は他の遺跡においても認められているが、それが分類群の違いに基づくものなのか、あるいは成長の差によるものなのかは明かでない。

25. カツラ *Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc. カツラ科 図版199:85-87 (GS-1243)

やや小型でやや角のある管孔が密に均一に散在する散孔材。道管の穿孔は20-30本ほどの横棒からなる階段状で、道管内にはチロースが著しい。放射組織は異性で2細胞幅である。



以上の形質からこの標本はカツラ科のカツラの材であると同定された。カツラは全国の温帯の溪流沿いに生育する落葉高木で、大きなものは樹高35m、幹径2mに達する。

26. ヤブツバキ *Camellia japonica* Linn. ツバキ科 図版199:88-90 (GSC-100)

27. サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 図版200:91-93 (GS-836)

28. モモ *Prunus persica* Batsch バラ科 図版200:94-96 (GSC-231)

当遺跡では縄文時代中期の層準からも4点モモの材が出ており、層準に誤りがないとすれば関東地方でもっとも古いモモの報告である。

29. サクラ属 *Prunus* バラ科 図版200:97-99 (GS-866)

小型のまるい管孔が2ないし数個複合して散在する散孔材。道管の穿孔は単一で、内壁に明瞭ならせん肥厚があり、しばしば褐色のゴム状の物質がつまっている。放射組織は同性にちかい異性で3~4細胞幅くらい、ときに結晶をもつ。

以上の形質からこれらの標本はバラ科のサクラ属の材であると同定されたが、種の同定には至らなかった。加工木に見いだされたヤマザクラ *Prunus jamasakura* は、自然木の中には見いだされなかった。

29. サクラ属 *Prunus* バラ科 図版200:97-99 (GS-866)

小型のまるい管孔が2ないし数個複合して散在する散孔材。道管の穿孔は単一で、内壁に明瞭ならせん肥厚があり、しばしば褐色のゴム状の物質がつまっている。放射組織は同性にちかい異性で3~4細胞幅くらい、ときに結晶をもつ。

以上の形質からこの標本はバラ科のバラ属の材であると同定された。日本に分布するバラ属の樹木には、つる性の低木であるノイバラ *Rosa multiflora* をはじめとして10種類以上のものがあり、種を識別するのは今のところ困難である。

31. フジ *Wisteria floribunda* (Willd.) DC. マメ科 図版201:103-105 (幹材、GSC-190)、106-108 (枝材?、GS-660)

幹材：年輪のはじめに大型の管孔がならび、夏材部では小管孔が接線方向にのびた塊状に集合し、壁のあつい繊維細胞の塊とたがいがいに配列する環孔材。木部柔組織は周囲状で量多く、接線断面では層階状を呈する。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚があり、接線断面では木部柔組織とともに層階状を呈する。放射組織は同性で5細胞幅あるいはそれ以上である。

枝材?：中型の管孔が年輪界にそって単独で1~2列ならび、夏材部では小型の管孔がややまばらに散在し、それと共に木繊維とおなじ程の径の小管孔が接線方向にのびた塊となって散在する環孔材。放射組織は4細胞幅くらいである。これ以外の形質は幹材とおなじである。

以上の形質からこれらの標本はマメ科のフジの材であると同定された。枝材?としたものも遺跡発掘にもなるとしてしばしば見いだされるが植物体のどの部分にあたるのかは今のところ明らかではない。

32. コクサギ *Orixa japonica* Thunb. ミカン科 図版202:109-111 (GSC-36)

33. キハダ *Phellodendron amurense* Rupr. ミカン科 図版202:112-114 (GS-374)

34. サンショウ *Zanthoxylum piperitum* DC. ミカン科 図版202:115-117 (GS-590)

小型でやや厚壁の管孔が単独あるいは2~4個複合して散在する散孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は周囲状。放射組織はほぼ同性で2細胞幅、背はひくい。

以上の形質からこの標本はミカン科のサンショウの材であると同定された。サンショウは樹高3mほどの落葉広葉樹であり、全国の温帯から暖帯にかけて分布している。

35. ヌルデ *Rhus javanica* L. ウルシ科 図版203:118-120 (GSC-186)

年輪のはじめにやや大型の管孔が1~2列ほど並び、そこから徐々に径を減じた小管孔が夏材部で集合して接線方向につながる傾向をみせて配列する環孔材。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は異性で2細胞幅くらいであり、ときに結晶をもつ。

以上の形質からこの標本はウルシ科のヌルデの材であると同定された。ヌルデは樹高7mにたつる落葉広葉樹で、全国の温帯から亜熱帯にかけて陽光地にひろく生育している。

36. ヤマウルシ *Rhus trichocarpa* Miq. ウルシ科 図版203:121-123 (GS-944)

37. カエデ属 *Acer* カエデ科 図版203:124-126 (GS-1175)

カエデ属とは加工木の報告における「カエデ類」に相当する。

38. ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. ムクロジ科 図版204:127-129 (GS-257)

39. トチノキ *Aesculus turbinata* Blume トチノキ科 図版204:130-132 (GS-147)

40. ツルウメモドキ *Celastrus orbiculatus* Thunb. ニシキギ科 図版205:136-138 (GS-1079)

まるい大型の管孔が年輪のはじめに1列にならび、夏材部では木繊維とおなじほどに径を減じた小管孔が接線方向にのびる塊となって木繊維の塊と交互に配列し、そのなかに中型の管孔が少数散在する環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織はほぼ同性で、10細胞幅くらいの背のたかいものと単列のものとなる。

以上の形質よりこの標本はニシキギ科のツルウメモドキの材であると同定された。ツルウメモドキは全国の温帯から暖帯にかけて分布する落葉性のつる植物で、陽光地に生育している。

41. ケンボナシ属 *Hovenia* クロウメモドキ科 図版205:139-141(幹材、GS-1371)、142-144(根材、GS-607)

幹材：年輪のはじめに丸い大管孔が単独あるいは2個複合して並び、そこからやや急に径を減じた厚壁のやや角張った小管孔が夏材部では単独あるいは放射方向に2~3個複合して散在する環孔材。木部柔組織は周囲状~連合翼状、放射組織は異性で6細胞幅くらいである。

根材：やや壁のうすい大管孔が年輪界にそってならび、夏材部の管孔は幹にくらべて大型の環孔材。木繊維の壁はうすく、放射組織は幹材のものによく似ている。

以上の形質からこれらの標本はそれぞれケンボナシ属の幹材および根材であると同定された。このケンボナシ属の幹材が加工木の報告における「ケンボナシ類」に相当する。

42. クロウメモドキ属 *Rhamnus* クロウメモドキ科 図版206:145-147 (GS-666)

小管孔が斜め、あるいは放射方向に多数複合して編目状の文様を作る文様孔材で、道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔はやや大きくて交互状、放射組織は二列あるいは単列で異性、などからクロウメモドキ科のクロウメモドキ属の材と同定した。これに良く似たものに、ヒイラギ、コクサギなどがあるが、これらでは管孔の輪郭が多少とも角張っていて、ヒイラギでは放射組織はほとんど二列で上下の2細胞が大きく目だつ異性、コクサギではほとんどが単列でほぼ同性、などの違いがあり区別できる。

クロウメモドキ属は全国の温帯から暖帯にかけてクロウメモドキ *Rhamnus japonica* Maxim. var. *decipiens* Maxim.、本州、四国、九州の暖帯のやや湿ったところにイソノキ *R. crenata* Sieb. et Zucc.、本州中部以北の温帯にクロツバラ *R. davurica* Pall.、本州、四国、九州の主に石灰岩地にクロカンバ *R. costata* Maxim. などがあり、何れも落葉性の低木で、材構造は似ており、今の所区別できていない。

43. クマヤナギ属 *Berchemia* クロウメモドキ科 図版206:148-150 (GSC-196)

大型で放射方向にややのびた厚壁の管孔が単独あるいは放射方向に数個複合して散在している散孔材。道管の穿孔は単一、道管同志の壁孔はひじょうに小さく密に分布しており、放射組織はほぼ同性で、5細胞幅くらいで背はいちじるしく高い。

以上の形質からこの標本はクロウメモドキ科のクマヤナギ属の材であると同定された。クマヤナギ属は明るいところに生育するツル性の落葉樹で、全国の暖帯から温帯にかけて生育している。現在、関東地方北部にはクマヤナギ *Berchemia racemosa* とミヤマクマヤナギ *B. pauciflora* とが分布している。

44. ツタ *Parthenocissus tricuspidata* (Sieb. et Zucc.) Planch. ブドウ科 図版206:151-153 (GSC-238)

ひじょうに大型でやや角張った管孔が単独あるいは2個複合して年輪界を形づくり、夏材部ではやや小ぶりの管孔が単独あるいは2個複合して散在する環孔材。道管の穿孔は単一で、道管相互の壁孔は交互状～階段状。放射組織は8細胞幅くらいで背がたかい。

以上の形質からこの標本はブドウ科のツタの材であると同定された。ツタは全国の温帯から暖帯にかけてひろく分布する落葉性の籐本で、太いものは直径10cmほどになる。

45. グミ属 *Elaeagnus* グミ科 図版207:154-156 (GS-1417)

46. クマノミズキ類 *Cornus* cf. *brachypoda* C.A. Meyer ミズキ科 図版207:157-159 (GSC-168)

中型の丸い管孔がほぼ単独で均一に分布する散孔材。道管の穿孔は20から30本ほどの横棒からなる階段状で、木部柔組織は散在状。放射組織は異性で4細胞幅くらいであり、単列部はひくい。

以上の形質からこの標本はミズキ科ミズキ属のうち、クマノミズキあるいはヤマボウシ *C. kousa* のいずれ

かの材であると同定された。両者のあいだでは管孔の直径がやや異なっているが、種を識別するには至っていない。クマノミズキは樹高10m、幹径30cmにたつる落葉広葉樹で、本州以南の温帯から暖帯にかけて分布しており、一方ヤマボウシは本州以南の温帯におもに生育している。

47. ミズキ *Cornus controversa* Hemsl. ミズキ科 図版207:160-162 (GSC-117)

丸みを帯びた小型の道管が数個放射方向に複合して均一に分布する散孔材で、道管の穿孔は多数の横棒からなる階段状、放射組織は異性で3細胞幅くらい、単列の翼部はひくい。

以上の形質からこの標本はミズキ科のミズキの材であると同定された。ミズキは樹高20m近くに達する落葉高木で、全国の温帯から暖帯にかけてひろく生育している。

48. ウコギ属 *Acanthopanax* ウコギ科 図版208:163-165 (GS-1207)

ウコギ属とは加工木の報告の「ウコギ類」に相当する。

49. エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科 図版208:166-168 (GSC-184)

エゴノキ属とは加工木の報告の「エゴノキ類」に相当する。

50. サワフタギ *Symplocos chinensis* (Lour.) Druce var. *leucocarpa* (Nakai) Ohwi ハイノキ科 図版208:169-171 (GS-152)

やや小型の管孔がほぼ単独で均一に散在する散孔材。道管の穿孔は多数の横棒からなる階段状。放射組織は2細胞幅で明瞭な異性であり、単列部はひくい。放射組織の細胞と道管との壁孔は対列状で、小さく密である。

以上の形質からこの標本はハイノキ科のサワフタギの材であると同定された。サワフタギは全国の温帯から暖帯にかけて広く分布する落葉性の低木で、ごく近縁なタンナサワフタギ *Symplocos coreana* が関東地方以西の暖帯から温帯に分布している。

51. トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科 図版209:172-174 (GSC-15)

トネリコ属とは加工木の報告の「トネリコ類」に相当する。

52. イボタノキ属 *Ligustrum* モクセイ科 図版209:175-177 (GS-217)

やや小型の管孔が年輪界にそってほぼ単独で2~3列ならび、夏材部では急に径を減じた小管孔が単独あるいは数個複合して散在する半環孔材。道管の穿孔は単一で、内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は異性で2細胞幅、背はひくい。

以上の形質からこの標本はモクセイ科のイボタノキ属の材であると同定された。日本に自生しているイボタノキ属の樹木には、本州以南の暖帯に分布する常緑性のネズミモチ *Ligustrum japonicum* や、渡島半島以南の暖帯から温帯に分布する落葉性のイボタノキ *L. obtusifolium*、全国の温帯に分布するミヤマイボタ *L. tschonoskii* など数種が存在する。

53. クサギ *Clerodendrum trichotomum* Thunb. クマツヅラ科 図版209:178-180 (GSC-224)

年輪のはじめに中型の管孔が並び、夏材部では壁のやや厚い角ばった小管孔が主として放射方向に数個複合して散在する環孔材。道管の穿孔は単一。柔組織は周囲状および連合翼状。放射組織は異性で4細胞幅くらい、上下端の1細胞だけが直立細胞である。

以上の形質からこの標本はクマツヅラ科のクサギの材であると同定された。クサギは陽のよくあたる場所に生育する落葉小高木で、全国の温帯から亜熱帯にかけて広く分布している。

54. ムラサキシキブ属 *Callicarpa* クマツヅラ科 図版210:181-183 (GS-833)

ムラサキシキブ属とは加工木の報告の「ムラサキシキブ類」に相当する。

55. キリ *Paulownia tomentosa* Steud. ゴマノハグサ科 図版210:184-186 (GS-220)

56. ニフトコ *Sambucus sieboldiana* Blume ex. Graebn. スイカズラ科 図版210:187-189 (GS-270)

57. ガマズミ属 Aタイプ *Viburnum* sp.A スイカズラ科 図版211:190-192 (GS-1234)

58. ガマズミ属 Bタイプ *Viburnum* sp.B スイカズラ科 図版211:193-195 (GS-659)

小型の管孔がほぼ均一にややまばらに散在する散孔材。道管の穿孔は階段数のおおい階段状。木部柔組織は短接線状。放射組織は異性で2あるいは3細胞幅くらいである。

以上の形質からこれらの標本はスイカズラ科のガマズミ属の材であると同定された。このうちガマズミ類Aタイプとしたものは放射組織が2細胞幅で、明瞭な異性であり、道管放射組織間の壁孔は階段状である。一方、ガマズミ属Bタイプとしたものは放射組織が3細胞幅でやや不明瞭な異性であり、道管放射組織間の壁孔は対列状~階段状である。この両者はそれぞれ、加工木で報告されたガマズミ類AタイプおよびBタイプに対応するものであるが、ガマズミ属のうちのどの種に当たるものであるのかは明らかでない。

59. 環孔材一種 Ring porous wood. 図版211:196-198 (GS-914)

年輪の始めにやや大型の道管が2~3層並び、晩材部にかけて中型の道管が単独或は数個複合して散在する環孔材で、道管の穿孔は単一・小道管にはらせん肥厚があり、木部柔組織は連合翼状、放射組織は5~8細胞幅くらいの大型の紡錘状で、周囲の細胞はしばしば大型になり、結晶を含む、などから、ニレ科の、ケヤキ、ニレ、エノキ属などに似るが、晩材部の管孔配列はニレ科のそれらではみられないもので、今の所同定に至っていない。おそらくはニレ科、マメ科、あるいはクワ科などの環孔材の根材ではないかと考えている。

60. 散孔材一種 Diffuse porous wood. 図版204:133-135 (GSC-10)

小さく丸い管孔が均一に散在する散孔材で、道管の穿孔は階段状、木部柔組織は単細胞幅の短い単細胞幅の接線に並び放射組織は2列で典型的な異性。ミズキ科、ガマズミ属などの材に似るが、それとも違い、詳細な形質は保存が十分でないため同定に至っていない。

## 結果および考察

この遺跡では縄文中期層から232点、弥生中期～古墳前期にかけての大溝から1,280点、それに平安時代層11点、層準不明の33点、合計1,556点を調査して62の樹種が同定された(第303表)。これらの内、細かな同定まで至っていないものがヒノキ科一種、環孔材一種、散孔材一種、根材A、Bの5つがある。

染谷川の西40mに検出された旧河道の覆土の最下部層の縄文中期の加曾利E式土器を集中する層から出土した自然木232点からは、33の樹種が同定された(第303表)。最も多いのはエノキ属(18.5%)とクリ(16.4%)で、次いでコナラ属のコナラ節(9.1%)、エゴノキ属(9.1%)、クヌギ節(6.9%)、クマノミズキ類(6.5%)、ヤマグワ(5.2%)、ニレ属(3.4%)、ヤナギ属(2.6%)、ツタ(2.6%)などが多い。針葉樹は極めて少なくイヌガヤとモミ属が各1点ずつあるのみで、常緑広葉樹と見なされるものはヤブツバキ1点しかない。これらの構成を見ると温帯から暖帯にかけて広く分布する落葉広葉樹が大部分で、多少とも冷涼な所に多く、一般に冷温帯性と見なされるものは上述のニレ属の他はゴヨウマツなどの単維管束亜属、ブナ属が各1点あることから、全般的には暖帯の上部付近の植生が想定され、照葉樹林の可能性は否定される。関東平野の縄文時代後・晩期の低湿地遺跡ではトネリコ属のヤチグモの優占する林が広がっていたことが明らかになっているが(鈴木・能城、1987)、ここではトネリコ属は1.7%とはるかに少なく、より乾性な林の由来物によって構成されているといえる。

大溝は弥生中期から古墳前期にかけて少しづつ流路を変えており、それぞれA～Fの溝名で呼ばれているが、ここでは考古遺物から判断した各溝の埋積時期によって打ち立てられた時代区分に従い出土木材を集計した(第303表)。この表の弥生時代から古墳時代前期までの各コラムを見て分かるようにこれらの溝による出土木材の傾向は基本的に一致しており、大きな違いはみられないので、一括して検討する。試料点数は1,280点で、コナラ属のクヌギ節が33.9%と最も多く、ついでクリ(13.0%)、エノキ属(9.4%)、オニグルミ(8.3%)、コナラ節(7.8%)、ヤマグワ(6.6%)とあり、全部で52樹種が見いだされた。針葉樹はモミ属が1.3%と最も多く、他にはイヌガヤ、カヤ、トウヒ属、ネズコがあるがわずかである。常緑樹はアカガシ亜属の13点(1.02%)とサカキの5点(0.39%)のみであり、針葉樹と不明種を除いた残り96%は総て落葉広葉樹である。この結果を既に発表になっている加工木の結果(鈴木・能城、1986)と対比させると第304表となる。この表で自然木、加工木何れもクヌギ節が最も多いことが目だつが、クリも両方に比較的多く出てくる。これに対し自然木に多くて加工木には少ないか、或は全く見いだされていないものに、オニグルミ、エノキ属、コナラ節、ヤナギ属、カエデ属、ツルウメモドキ、ウコギ属などがある。これらのうちヤナギ属などは材質が不適であったり、木材の集積が少ないために利用が少ないといえるが、比較的材質が優れているオニグルミ、エノキ、コナラ節、カエデ属などが少ないのは多少とも奇異に見えるかも知れない。その理由には加工木の多くが農具類と板材などで、オニグルミなどが良く利用される容器などの生活具の出土が少なかったからかも知れない。これとは逆に加工木に多くて自然木にはさほどではないものにはアカガシ亜属が顕著なほか、イヌガヤ、カヤ、モミ属の針葉樹が目だつ。また同じ針葉樹のスギは加工木としては0.6%と少ないが自然木としては全く見つからない。アカガシ亜属の農具利用の所で論じられているように(鈴木・能城、1986; 山田、1986)、自然木にはわずかしがなく、しかも後述するように花粉でも最大2.3%しか検出されていないことでも分かるように、この地域にカシ類が豊富にあったとは考えられない事を示している。同様に針葉樹類も遺跡付近にはほとんど無いかあるいはわずかしがなく、用材は多少とも離れた地域から持ち込まれた可能性を示しているといえる。特に丸木弓に用いられている材は暖地の沿岸地に多いイヌガヤかあるいは日本海側の多雪地にある変種のハイイヌガヤで、この遺跡では自然木の出土が極めて少ないことから、こ

これらの何れの地からの持込みを考える必要がある。

この遺跡では弥生時代中期から古墳時代前期にかけての大溝の堆積物から5サンプルと、榛名山二ツ岳火山灰（FA）直下の古墳時代後期の水田耕作土（試料6）、弥生時代後期前半の住居跡内の覆土（試料7）、平安時代の堆積物（試料8）の計8サンプルの花粉分析が行われている。試料8では花粉はほとんど検出されず、植物相は全く分からないが、試料7では花粉総量は少ないながらヨモギ属、イネ科が多く、乾性の草原的植生が考えられる。FA直下の試料6でもやはりイネ科、ヨモギ属の草本が多く、コナラ亜属、コウヤマキなどの樹木花粉も検出されているが、植生を推定するには検出数が少な過ぎる。これらに対して大溝の堆積物からは多少とも多い数の樹木花粉がカウントされている。全般的にみると樹木花粉では落葉広葉樹が圧倒的に多く、コナラ亜属が7.9~21%で最も多く、ついでエノキ属が1.9~12.3%前後、ケヤキが1.9~4.2%、ブナ属が1.4~2.4%、イヌシデ属が0.4~2.8%などとなっている。常緑広葉樹はアカガシ亜属が1.8~2.3%で、このほかシイ属が0.4~0.5%ある。針葉樹ではスギ科が1.8~3.3%あり、この他同じスギ科のスギが0.4~1.4%、コウヤマキが0.4~0.5%ある。他にはモミ属（0.5~1.8%）、マツ属（1.8~1.9%）などがあるが何れも、スギ林とか、モミ、マツ林などが遺跡のすぐ付近にあったとは思えない値である。この様に断片的な花粉分析の結果でも遺跡周辺の森林植生は温帯ないし暖帯の落葉広葉樹林であったとの推定を支持している。

関東平野の低湿地では縄文時代後・晩期の泥炭層発達に続いて古墳時代前期を中心とした時期にも泥炭層が発達し、そこから大量の植物化石が出土して、花粉分析、大型遺体の分析と並んで木材遺体も検討されている（鈴木・能城、1987）。それらと新保遺跡の結果を比較すると、クヌギ節、クリ、ヤマグワなどが多いことで寿能泥炭層遺跡（鈴木ほか、1982）、中里遺跡（能城・鈴木、1987）、などと良く一致するが、それらに多い、ヤナギ属とハンノキ属が遙かに少なく、それらに代わってやはり湿性のオニグルミが多いところに特徴がある。これは低湿地の遺跡が多分に水の停滞する環境を基礎に成立しているのに対して、ここでは関東平野北辺の扇状地地形を基礎に、流水性の湿性林が広がっていて、今回の結果はその反映と見なすことが出来るだろう。そこではこれまでの関東平野の多くの遺跡で明らかにされてきたように現在よりも温暖だったとされる縄文時代はもとより、それ以降、弥生、古墳、古代の各時期においても落葉広葉樹林が優占していたことが明らかになりつつある。この新保遺跡においても照葉樹林の代表的樹種であるカシ類の木材を使った鋤や鍬などの農耕具が多量に用いられていたにもかかわらず、それらは遺跡周辺に生えていた樹木を伐採して作ったものではないことが自然木の樹種同定結果から明らかになった。これらのカシ類の材がどこから運び込まれたかは筆者らの手に余る問題だが、いままで花粉分析の結果などを基に温暖であったとされる縄文前期以降、関東平野には照葉樹林が広まっていた、という考えを余り根拠のないものとしてひとまず脇に置くと、縄文時代以降、関東平野で確実に照葉樹林があったといえるのは千葉市の村田服部遺跡（鈴木・能城、1985）のように関東平野南部、東京湾周辺までで、それ以北には今の所知られていない。関東地方南西部での遺跡出土木材の調査は古くは登呂、山木遺跡などの他はほとんど調査されていない現状ではその解明は難しい。

## 追 記

本文で扱った資料のうち、縄文中期のものを除いた1,280点の総てのサンプルは群馬県埋蔵文化財調査事業団の手により、マッチ箱大のチップに整形され、PEG含浸がおこなわれていた。樹種同定用の切片はこのサンプルを熱湯中にしばらく浸してやわらかくし、熱湯中で過熱したカミソリ刃をもって作製した。この時、

の時、各サンプルにつけられていたラベルの読み取りを行ったが、ラベルには黒色油性ペン、あるいは黒鉛筆での記載があり、油性ペンで書かれた文字はしばしば消えかかり、また鉛筆の字も判読が困難な場合が多かった。その結果として、詳細な出土データと対応できなかったものが多数ある。

当初は、これら総てのサンプルが自然木であるとの認識で研究を進めてきたが、本論文の校正刷りの段階になってそれら総てが自然木でなく、加工の程度は低いが、「1/2～1/8に分割した割り材、端部に切断痕や一部に切り傷や切り痕が認められる一部加工材、板状の割裂材」が52パーセントも占めることが判明した（「新保遺跡 I」P29～30参照）。つまりここで扱ったものの約半分が自然木で残りは加工木となる。本来ならばこの両者を区別して示さなければならないところだが前述のようにラベルの読み取りが困難なことと校正段階でもあり、時間的制約があること、そしてもっとも大きな理由は、「新保 I」で扱った木製品とは較べものにならないほど加工の程度が低いものとみなされていること、などにより、あえて原稿の改定はおこなわずにおき、その点をこの追記に記すにとどめる。（文責 鈴木）

### 引用文献

- 能城修一・鈴木三男 1987 東京都中里遺跡出土木材遺体の樹種と木材遺体から推定される古植生。  
東北新幹線中里遺跡調査会「中里遺跡 2－遺跡と古環境 2－」：253－320
- 鈴木三男・能城修一 1985 千葉市村田服部遺跡（古墳時代前期）出土木材。金沢大学教養部論集（自然科学編）22：11－69
- ・——— 1986 新保遺跡出土加工木の樹種。群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団「新保遺跡 I、弥生・古墳時代大溝編、関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第10集」：71－94
- ・——— 1987 関東平野の縄文時代の木材化石群集とそれが示す古植生の変遷。植物分類地理 38：257－271
- ・———・植田弥生 1982 樹木。埼玉県教育委員会「寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書－自然遺物編－」：261－282
- 山田昌久 1986 くわとすきの来た道。群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団「新保遺跡 I、弥生・古墳時代大溝編。関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第10集」：168－188



第303表 新保遺跡出土自然木の樹種

樹種	縄文時代		弥生時代～古墳時代前期								合計	時代不詳		
	中期 (%)	弥生～古墳前期	弥生中期後半～後期	弥生中期後半～古墳初頭	弥生後期	弥生後期後半	弥生後期後半～古墳初頭	弥生後期後半～古墳前期	弥生後期～古墳前期	(%)				
カヤ			2								2	0.16		
イヌガヤ	1	0.4		5							5	0.39		
モミ属	1	0.4	4	4	4		3	1		1	17	1.33		
トウヒ属	1	0.4		1	1						2	0.16	1	
マツ属単維管束亜属	1	0.4									0		1	
ネズコ					2						2	0.16		
オニグルミ	4	1.7	44	45			7	10			106	8.29		1
サワグルミ				4							4	0.31		1
ハコヤナギ属	1	0.4								1	1	0.08		
ヤナギ属	6	2.6	15	7	1		2	2			27	2.11		
カバノキ属				2	1			1			4	0.31		
アサグ				1				1			2	0.16		
クリ	38	16.4	50	33	21	8	22	25	3	4	166	12.98	5	4
ブナ属	1	0.4									0			
コナラ属クヌギ節	16	6.9	208	106	20	4	34	57	3	1	433	33.85	2	12
コナラ属コナラ節	21	9.1	41	48	4		4	3			100	7.82		3
コナラ属アカガシ亜属				2	3			5	2		13	1.02		
ムクノキ	2	0.9	5	3	1	1			1		11	0.86		
エノキ属	43	18.5	40	48	7		9	14	1	1	120	9.38	1	2
ニレ属	8	3.4	5	3			1	5			14	1.09		
ケヤキ			3	3				4			10	0.78		
コウゾ属	1	0.4	1	1	1		2	1			6	0.47		
ヤマグワ	12	5.2	38	23	3		5	15	1		85	6.65		1
カツラ			1								1	0.08		
ヤブツバキ	1	0.4									0			
サカキ			1	3			1				5	0.39		
モモ	4	1.7		1				1			2	0.16		
サクラ属			1	3							4	0.31		
バラ属								1			1	0.08		
フジ	1	0.4	1	3				1			5	0.39		
コクサギ	4	1.7	2	3				2			7	0.55		1
キハダ				1							1	0.08		
サンショウ			2				1				3	0.23		
ヌルデ	4	1.7									0			
ヤマウルシ				1							1	0.08		2
カエデ属	3	1.3	15	5	1			2			23	1.80		1
ムクロジ			2	3			1	2			8	0.63		
トチノキ				1							1	0.08		
ツルウメモドキ			1	10	1			1			13	1.02		1
ケンボナシ属			2	2						1	5	0.39		1
クロウメモドキ			1	6			2				9	0.70		
クマヤナギ属	1	0.4									0			
ツタ	6	2.6	1	1							2	0.16		
グミ属	3	1.3	1					3			4	0.31		
クマノミズキ類	15	6.5									0			
ミズキ	2	0.9									0			
ウコギ属	3	1.3	4	8			1				13	1.02		1
エゴノキ属	21	9.1	1					3			4	0.31		
サワフタギ				1							1			
トネリコ属	4	1.7						1			1	0.08		
イボタノキ属	1	0.4		1			2	1			4	0.31	1	
クサギ	1	0.4			1						1	0.08		
ムラサキシキブ属				1							1	0.08		
キリ			1					1		1	3	0.23		
ニワトコ			2					1	2		5	0.39		
ガマズミ属A			3	1			1	1			6	0.47		
ガマズミ属B			5	6				2			13	1.02		
ヒノキ科一種					1						1	0.08		
環孔材一種														1
散孔材一種	1	0.4									0			1
根材 sp.A				1							1	0.08		
根材 sp.B							1				1	0.08		
合計	232	100.0	505	402	71	13	109	161	10	9	1280	100.00	11	33

7 鑑定、分析

第304表 新保遺跡出土木材遺体群集

樹種	縄文時代中期		弥生中期～古墳前期		樹種	縄文時代中期		弥生中期～古墳前期	
	自然木 (%)	自然木 (%)	加工木 (%)	加工木 (%)		自然木 (%)	自然木 (%)	加工木 (%)	加工木 (%)
カヤ		0.2	1.7		ニガキ				0.3
イヌガヤ	0.4	0.4	5.0		ヌルデ	1.7			
モミ属	0.4	1.3	7.5		ヤマウルシ			0.1	0.3
マツ属単維管束亜属	0.4				カエデ属	1.3		1.8	0.4
スギ			0.6		ムクロジ			0.6	1.0
オニグルミ	1.7	8.3	0.9		ツルウメモドキ			1.0	
サワグルミ		0.3			ケンボナシ属			0.4	0.3
ハコヤナギ属	0.4	0.1	0.3		クロウメモドキ			0.7	
ヤナギ属	2.6	2.1	0.6		クマヤナギ属	0.4			
カバノキ属		0.3	0.2		ツタ	2.6			
クリ	16.4	13.0	9.7		グミ属	1.3	0.3		0.1
ブナ属	0.4				クマノミズキ類	6.5			
コナラ属クヌギ節	6.9	33.9	43.6		ミズキ	0.9			
コナラ属コナラ節	9.1	7.8	2.9		ウコギ属	1.3	1.0		0.2
コナラ属アカガシ亜属		1.0	15.1		エゴノキ属	9.1	0.3		0.1
ムクノキ	0.9	0.9	0.2		トネリコ属	1.7			
エノキ属	18.5	9.4	2.3		イボタノキ属	0.4	0.3		
ニレ属	3.4	1.1	0.5		クサギ	0.4			
ケヤキ		0.8	1.4		ムラサキシキブ属			0.1	0.4
コウゾ属	0.4	0.5	0.1		キリ			0.2	0.1
ヤマグワ	5.2	6.6	0.7		ニワトコ			0.4	0.1
ヤブツバキ	0.4		0.3		ガマズミ属A			0.5	0.1
サカキ		0.4	0.2		ガマズミ属B			1.0	0.1
モモ	1.7	0.2	0.2						
サクラ属		0.3	0.1						
フジ	0.4	0.4							
コクサギ	1.7	0.5							
キハダ		0.1	0.3		合計 (%)	98.9	98.8		97.9
サンショウ		0.2			試料総数	232	1280		1028

自然木、加工木共に0.2%以下のものはこの表から省略してある。

第305表 新保遺跡出土自然木の樹種別一覧

カヤ	GS-	718	GSC-	237	GS-	104	GS-	233	
GS-	1216	GS-	834	GS-	1027	GS-	115	GS-	251
GS-	1342	GS-	838	ネズコ	GS-	123	GS-	254	
イヌガヤ	GS-	883	GS-	893	GS-	131	GS-	297	
GSC-	101	GS-	901	GS-	980	GS-	136	GS-	307
GS-	87	GS-	926	オニグルミ	GS-	144	GS-	353	
GS-	93	GS-	929	GSC-	47	GS-	149	GS-	366
GS-	219	GS-	930	GSC-	75	GS-	150	GS-	386
GS-	691	GS-	964	GSC-	78	GS-	159	GS-	462
GS-	871	GS-	1041	GSC-	82	GS-	165	GS-	634
モミ属	GS-	1274	GS-	6	GS-	168	GS-	639	
GSC-	216	トウヒ属	GS-	40	GS-	172	GS-	645	
GS-	227	GSC-	98	GS-	48	GS-	180	GS-	648
GS-	287	GS-	213	GS-	74	GS-	193	GS-	661
GS-	301	GS-	966	GS-	78	GS-	199	GS-	665
GS-	438	GS-	1024	GS-	81	GS-	217	GS-	671
GS-	615	GS-	1126	GS-	82	GS-	226	GS-	672
GS-	715	マツ属単維管束亜属	GS-	86	GS-	228	GS-	675	

## (1) 新保遺跡出土自然木の樹種とそれによる古植生の復元

GS-	680	GS-	1433	GSC-	46	GS-	308	GS-	962
GS-	681	サワグルミ		GSC-	52	GS-	309	GS-	969
GS-	682	GS-	75	GSC-	57	GS-	310	GS-	972
GS-	685	GS-	90	GSC-	87	GS-	316	GS-	973
GS-	690	GS-	171	GSC-	89	GS-	323	GS-	974
GS-	698	GS-	181	GSC-	95	GS-	332	GS-	977
GS-	710	GS-	200	GSC-	96	GS-	342	GS-	984
GS-	713	ハコヤナギ属		GSC-	97	GS-	365	GS-	987
GS-	714	GSC-	8	GSC-	107	GS-	379	GS-	992
GS-	720	GS-	903	GSC-	109	GS-	381	GS-	994
GS-	727	ヤナギ属		GSC-	112	GS-	382	GS-	996
GS-	735	GSC-	70	GSC-	129	GS-	388	GS-	997
GS-	736	GSC-	102	GSC-	133	GS-	405	GS-	1000
GS-	743	GSC-	103	GSC-	140	GS-	415	GS-	1004
GS-	744	GSC-	106	GSC-	154	GS-	416	GS-	1006
GS-	751	GSC-	113	GSC-	156	GS-	420	GS-	1007
GS-	760	GSC-	229	GSC-	157	GS-	428	GS-	1014
GS-	768	GS-	128	GSC-	163	GS-	452	GS-	1015
GS-	795	GS-	185	GSC-	174	GS-	461	GS-	1017
GS-	799	GS-	214	GSC-	176	GS-	464	GS-	1018
GS-	807	GS-	216	GSC-	177	GS-	465	GS-	1020
GS-	813	GS-	298	GSC-	190	GS-	472	GS-	1021
GS-	817	GS-	315	GSC-	204	GS-	596	GS-	1025
GS-	818	GS-	395	GSC-	205	GS-	622	GS-	1026
GS-	821	GS-	446	GSC-	228	GS-	623	GS-	1028
GS-	826	GS-	591	GSC-	230	GS-	626	GS-	1029
GS-	846	GS-	668	GSC-	232	GS-	629	GS-	1030
GS-	849	GS-	845	GSC-	233	GS-	656	GS-	1032
GS-	858	GS-	857	GSC-	234	GS-	663	GS-	1033
GS-	869	GS-	949	GSC-	235	GS-	684	GS-	1040
GS-	931	GS-	1073	GS-	1	GS-	699	GS-	1054
GS-	989	GS-	1088	GS-	23	GS-	700	GS-	1057
GS-	1070	GS-	1138	GS-	26	GS-	705	GS-	1066
GS-	1077	GS-	1198	GS-	34	GS-	706	GS-	1067
GS-	1085	GS-	1219	GS-	37	GS-	723	GS-	1068
GS-	1115	GS-	1246	GS-	41	GS-	732	GS-	1074
GS-	1120	GS-	1290	GS-	57	GS-	741	GS-	1089
GS-	1122	GS-	1297	GS-	80	GS-	742	GS-	1090
GS-	1139	GS-	1301	GS-	102	GS-	752	GS-	1092
GS-	1143	GS-	1326	GS-	112	GS-	753	GS-	1096
GS-	1145	GS-	1359	GS-	119	GS-	757	GS-	1100
GS-	1167	GS-	1418	GS-	141	GS-	762	GS-	1102
GS-	1170	GS-	1424	GS-	145	GS-	797	GS-	1104
GS-	1177	GS-	1439	GS-	161	GS-	805	GS-	1109
GS-	1183	カバノキ属		GS-	177	GS-	888	GS-	1112
GS-	1190	GS-	66	GS-	203	GS-	890	GS-	1119
GS-	1197	GS-	385	GS-	222	GS-	891	GS-	1132
GS-	1203	GS-	458	GS-	223	GS-	898	GS-	1137
GS-	1215	GS-	937	GS-	232	GS-	904	GS-	1142
GS-	1232	GS-	1397	GS-	235	GS-	909	GS-	1148
GS-	1236	アサダ		GS-	245	GS-	918	GS-	1150
GS-	1287	GS-	38	GS-	252	GS-	919	GS-	1154
GS-	1308	GS-	703	GS-	253	GS-	921	GS-	1168
GS-	1354	クリ		GS-	255	GS-	923	GS-	1173
GS-	1364	GSC-	5	GS-	256	GS-	927	GS-	1178
GS-	1365	GSC-	14	GS-	269	GS-	933	GS-	1193
GS-	1374	GSC-	16	GS-	273	GS-	939	GS-	1201
GS-	1383	GSC-	20	GS-	279	GS-	945	GS-	1204
GS-	1393	GSC-	34	GS-	281	GS-	947	GS-	1213
GS-	1394	GSC-	37	GS-	283	GS-	950	GS-	1226
GS-	1396	GSC-	39	GS-	284	GS-	959	GS-	1228
GS-	1425	GSC-	44	GS-	295	GS-	960	GS-	1229

7 鑑定、分析

GS-	1239	GS-	68	GS-	294	GS-	421	GS-	642
GS-	1247	GS-	71	GS-	300	GS-	422	GS-	643
GS-	1257	GS-	76	GS-	303	GS-	423	GS-	644
GS-	1288	GS-	83	GS-	304	GS-	424	GS-	647
GS-	1294	GS-	88	GS-	306	GS-	425	GS-	651
GS-	1299	GS-	89	GS-	312	GS-	426	GS-	652
GS-	1311	GS-	95	GS-	313	GS-	427	GS-	658
GS-	1329	GS-	96	GS-	314	GS-	429	GS-	662
GS-	1349	GS-	97	GS-	317	GS-	430	GS-	669
GS-	1361	GS-	101	GS-	319	GS-	432	GS-	676
GS-	1370	GS-	116	GS-	321	GS-	433	GS-	677
GS-	1398	GS-	118	GS-	324	GS-	434	GS-	689
GS-	1412	GS-	121	GS-	325	GS-	435	GS-	693
GS-	1429	GS-	124	GS-	326	GS-	437	GS-	694
GS-	1431	GS-	125	GS-	328	GS-	440	GS-	695
GS-	1432	GS-	127	GS-	330	GS-	441	GS-	708
GS-	1434	GS-	130	GS-	331	GS-	442	GS-	716
GS-	1438	GS-	138	GS-	334	GS-	443	GS-	734
GS-	1445	GS-	140	GS-	335	GS-	445	GS-	737
ブナ属		GS-	153	GS-	338	GS-	447	GS-	738
GS C-	13	GS-	154	GS-	339	GS-	448	GS-	745
コナラ属クヌギ節		GS-	155	GS-	340	GS-	449	GS-	748
GS C-	23	GS-	157	GS-	343	GS-	450	GS-	749
GS C-	33	GS-	158	GS-	344	GS-	453	GS-	754
GS C-	35	GS-	167	GS-	346	GS-	455	GS-	756
GS C-	42	GS-	170	GS-	347	GS-	456	GS-	759
GS C-	45	GS-	175	GS-	348	GS-	457	GS-	766
GS C-	49	GS-	178	GS-	350	GS-	463	GS-	767
GS C-	51	GS-	184	GS-	351	GS-	466	GS-	769
GS C-	63	GS-	186	GS-	354	GS-	473	GS-	771
GS C-	64	GS-	189	GS-	355	GS-	474	GS-	777
GS C-	85	GS-	190	GS-	357	GS-	475	GS-	778
GS C-	91	GS-	194	GS-	358	GS-	478	GS-	784
GS C-	208	GS-	195	GS-	359	GS-	480	GS-	785
GS C-	209	GS-	196	GS-	360	GS-	481	GS-	786
GS C-	212	GS-	197	GS-	362	GS-	586	GS-	788
GS C-	219	GS-	205	GS-	364	GS-	587	GS-	792
GS C-	223	GS-	206	GS-	367	GS-	589	GS-	793
GS-	4	GS-	210	GS-	368	GS-	593	GS-	801
GS-	7	GS-	221	GS-	369	GS-	594	GS-	802
GS-	16	GS-	225	GS-	371	GS-	597	GS-	803
GS-	18	GS-	229	GS-	372	GS-	600	GS-	804
GS-	19	GS-	230	GS-	373	GS-	602	GS-	808
GS-	21	GS-	234	GS-	376	GS-	603	GS-	809
GS-	24	GS-	237	GS-	377	GS-	604	GS-	811
GS-	27	GS-	238	GS-	378	GS-	605	GS-	816
GS-	29	GS-	242	GS-	380	GS-	606	GS-	820
GS-	30	GS-	243	GS-	383	GS-	611	GS-	824
GS-	32	GS-	246	GS-	384	GS-	613	GS-	830
GS-	36	GS-	247	GS-	387	GS-	614	GS-	835
GS-	39	GS-	249	GS-	390	GS-	617	GS-	839
GS-	43	GS-	260	GS-	391	GS-	619	GS-	848
GS-	44	GS-	262	GS-	394	GS-	621	GS-	852
GS-	47	GS-	263	GS-	396	GS-	625	GS-	854
GS-	51	GS-	264	GS-	398	GS-	627	GS-	855
GS-	55	GS-	267	GS-	400	GS-	628	GS-	859
GS-	56	GS-	268	GS-	408	GS-	630	GS-	860
GS-	61	GS-	274	GS-	409	GS-	631	GS-	861
GS-	63	GS-	285	GS-	412	GS-	635	GS-	862
GS-	64	GS-	289	GS-	414	GS-	636	GS-	863
GS-	65	GS-	292	GS-	418	GS-	638	GS-	864
GS-	67	GS-	293	GS-	419	GS-	640	GS-	870

## (1) 新保遺跡出土自然木の樹種とそれによる古植生の復元

GS-	872	GS-	1065	GS-	1249	GS-	1392	GS-	653
GS-	873	GS-	1075	GS-	1251	GS-	1395	GS-	702
GS-	874	GS-	1080	GS-	1253	GS-	1399	GS-	707
GS-	876	GS-	1081	GS-	1254	GS-	1401	GS-	747
GS-	877	GS-	1084	GS-	1255	GS-	1403	GS-	758
GS-	879	GS-	1086	GS-	1259	GS-	1404	GS-	761
GS-	884	GS-	1091	GS-	1260	GS-	1405	GS-	765
GS-	885	GS-	1095	GS-	1264	GS-	1406	GS-	773
GS-	886	GS-	1107	GS-	1266	GS-	1407	GS-	806
GS-	889	GS-	1108	GS-	1267	GS-	1408	GS-	812
GS-	894	GS-	1113	GS-	1269	GS-	1416	GS-	814
GS-	895	GS-	1114	GS-	1270	GS-	1420	GS-	829
GS-	899	GS-	1118	GS-	1271	GS-	1421	GS-	851
GS-	900	GS-	1121	GS-	1273	GS-	1422	GS-	878
GS-	902	GS-	1127	GS-	1280	GS-	1423	GS-	911
GS-	907	GS-	1130	GS-	1282	GS-	1426	GS-	912
GS-	908	GS-	1131	GS-	1283	GS-	1435	GS-	936
GS-	917	GS-	1134	GS-	1284	GS-	1436	GS-	940
GS-	920	GS-	1136	GS-	1286	GS-	1440	GS-	943
GS-	922	GS-	1140	GS-	1292	コナラ属コナラ節		GS-	985
GS-	924	GS-	1141	GS-	1295	GSC-	17	GS-	1051
GS-	928	GS-	1149	GS-	1300	GSC-	38	GS-	1063
GS-	938	GS-	1151	GS-	1309	GSC-	43	GS-	1111
GS-	948	GS-	1153	GS-	1310	GSC-	58	GS-	1135
GS-	951	GS-	1156	GS-	1312	GSC-	61	GS-	1152
GS-	954	GS-	1157	GS-	1313	GSC-	66	GS-	1155
GS-	955	GS-	1158	GS-	1315	GSC-	71	GS-	1160
GS-	956	GS-	1159	GS-	1316	GSC-	73	GS-	1184
GS-	958	GS-	1161	GS-	1318	GSC-	74	GS-	1205
GS-	968	GS-	1163	GS-	1319	GSC-	77	GS-	1209
GS-	970	GS-	1164	GS-	1320	GSC-	81	GS-	1230
GS-	971	GS-	1171	GS-	1321	GSC-	84	GS-	1289
GS-	975	GS-	1172	GS-	1322	GSC-	86	GS-	1304
GS-	991	GS-	1176	GS-	1323	GSC-	90	GS-	1305
GS-	993	GS-	1179	GS-	1324	GSC-	111	GS-	1306
GS-	995	GS-	1181	GS-	1330	GSC-	134	GS-	1307
GS-	999	GS-	1182	GS-	1331	GSC-	145	GS-	1314
GS-	1001	GS-	1186	GS-	1332	GSC-	147	GS-	1335
GS-	1008	GS-	1188	GS-	1334	GSC-	153	GS-	1353
GS-	1011	GS-	1191	GS-	1338	GSC-	162	GS-	1357
GS-	1012	GS-	1192	GS-	1339	GSC-	222	GS-	1363
GS-	1013	GS-	1195	GS-	1340	GS-	73	GS-	1376
GS-	1016	GS-	1200	GS-	1343	GS-	98	GS-	1379
GS-	1019	GS-	1202	GS-	1344	GS-	103	GS-	1381
GS-	1023	GS-	1208	GS-	1346	GS-	109	GS-	1384
GS-	1031	GS-	1210	GS-	1347	GS-	164	GS-	1389
GS-	1034	GS-	1214	GS-	1350	GS-	174	GS-	1390
GS-	1035	GS-	1218	GS-	1351	GS-	209	GS-	1402
GS-	1036	GS-	1220	GS-	1352	GS-	224	GS-	1410
GS-	1038	GS-	1221	GS-	1355	GS-	276	GS-	1415
GS-	1039	GS-	1222	GS-	1358	GS-	280	GS-	1430
GS-	1042	GS-	1223	GS-	1362	GS-	288	コナラ属アカガシ亜属	
GS-	1043	GS-	1224	GS-	1367	GS-	329	GS-	33
GS-	1046	GS-	1225	GS-	1368	GS-	341	GS-	46
GS-	1047	GS-	1227	GS-	1372	GS-	349	GS-	248
GS-	1049	GS-	1231	GS-	1373	GS-	370	GS-	271
GS-	1053	GS-	1233	GS-	1377	GS-	392	GS-	296
GS-	1055	GS-	1235	GS-	1378	GS-	436	GS-	320
GS-	1059	GS-	1240	GS-	1382	GS-	477	GS-	322
GS-	1060	GS-	1241	GS-	1385	GS-	608	GS-	393
GS-	1061	GS-	1242	GS-	1388	GS-	632	GS-	853
GS-	1064	GS-	1244	GS-	1391	GS-	637	GS-	875

7 鑑定、分析

GS-	942	GS-	20	GS-	770	GSC-	21	GS-	126
GS-	1245	GS-	22	GS-	772	GSC-	24	GS-	132
GS-	1303	GS-	49	GS-	775	GSC-	31	GS-	139
ムクノキ		GS-	60	GS-	776	GSC-	54	GS-	148
GSC-	171	GS-	62	GS-	780	GSC-	92	GS-	160
GSC-	213	GS-	72	GS-	783	GSC-	93	GS-	198
GS-	106	GS-	91	GS-	789	GSC-	138	GS-	201
GS-	134	GS-	105	GS-	827	GS-	10	GS-	218
GS-	401	GS-	107	GS-	831	GS-	28	GS-	250
GS-	728	GS-	108	GS-	841	GS-	53	GS-	259
GS-	790	GS-	113	GS-	847	GS-	261	GS-	286
GS-	850	GS-	120	GS-	865	GS-	411	GS-	299
GS-	941	GS-	129	GS-	881	GS-	641	GS-	302
GS-	990	GS-	133	GS-	887	GS-	709	GS-	361
GS-	1003	GS-	142	GS-	905	GS-	746	GS-	406
GS-	1211	GS-	151	GS-	915	GS-	810	GS-	413
GS-	1380	GS-	156	GS-	925	GS-	815	GS-	431
エノキ属		GS-	162	GS-	935	GS-	819	GS-	444
GSC-	2	GS-	163	GS-	952	GS-	1116	GS-	459
GSC-	9	GS-	166	GS-	963	GS-	1124	GS-	471
GSC-	18	GS-	173	GS-	967	GS-	1369	GS-	595
GSC-	29	GS-	208	GS-	976	ケヤキ		GS-	601
GSC-	30	GS-	211	GS-	981	GS-	8	GS-	610
GSC-	53	GS-	215	GS-	983	GS-	12	GS-	616
GSC-	59	GS-	236	GS-	988	GS-	54	GS-	620
GSC-	67	GS-	239	GS-	1009	GS-	117	GS-	683
GSC-	68	GS-	241	GS-	1022	GS-	191	GS-	725
GSC-	72	GS-	244	GS-	1045	GS-	407	GS-	726
GSC-	83	GS-	277	GS-	1050	GS-	1125	GS-	731
GSC-	114	GS-	278	GS-	1052	GS-	1252	GS-	750
GSC-	121	GS-	291	GS-	1072	GS-	1278	GS-	763
GSC-	125	GS-	305	GS-	1076	GS-	1356	GS-	764
GSC-	126	GS-	318	GS-	1082	コウゾ属		GS-	794
GSC-	127	GS-	333	GS-	1087	GSC-	28	GS-	796
GSC-	131	GS-	337	GS-	1099	GS-	42	GS-	823
GSC-	132	GS-	345	GS-	1128	GS-	188	GS-	828
GSC-	135	GS-	356	GS-	1129	GS-	282	GS-	832
GSC-	141	GS-	397	GS-	1147	GS-	311	GS-	837
GSC-	142	GS-	403	GS-	1169	GS-	916	GS-	843
GSC-	143	GS-	404	GS-	1180	GS-	1291	GS-	867
GSC-	144	GS-	417	GS-	1189	ヤマグワ		GS-	868
GSC-	148	GS-	439	GS-	1196	GSC-	27	GS-	880
GSC-	150	GS-	454	GS-	1199	GSC-	50	GS-	910
GSC-	151	GS-	460	GS-	1206	GSC-	116	GS-	932
GSC-	155	GS-	599	GS-	1248	GSC-	122	GS-	979
GSC-	165	GS-	609	GS-	1250	GSC-	136	GS-	982
GSC-	166	GS-	624	GS-	1256	GSC-	146	GS-	1005
GSC-	180	GS-	646	GS-	1263	GSC-	179	GS-	1037
GSC-	185	GS-	655	GS-	1272	GSC-	193	GS-	1044
GSC-	188	GS-	667	GS-	1275	GSC-	200	GS-	1056
GSC-	191	GS-	670	GS-	1277	GSC-	210	GS-	1071
GSC-	195	GS-	674	GS-	1293	GSC-	215	GS-	1083
GSC-	198	GS-	679	GS-	1296	GSC-	220	GS-	1101
GSC-	201	GS-	687	GS-	1298	GS-	2	GS-	1106
GSC-	203	GS-	688	GS-	1302	GS-	13	GS-	1123
GSC-	211	GS-	696	GS-	1336	GS-	14	GS-	1185
GSC-	214	GS-	704	GS-	1366	GS-	17	GS-	1187
GSC-	218	GS-	717	GS-	1387	GS-	35	GS-	1194
GSC-	221	GS-	722	GS-	1428	GS-	58	GS-	1212
GSC-	225	GS-	724	GS-	1443	GS-	70	GS-	1238
GSC-	226	GS-	729	ニレ属		GS-	77	GS-	1258
GS-	9	GS-	733	GSC-	19	GS-	92	GS-	1262

## (1) 新保遺跡出土自然木の樹種とそれによる古植生の復元

GS-	1265	GS-	258	GS-	721	GSC-	172	GS-	220
GS-	1276	GS-	590	GS-	934	GS-	137	GS-	798
GS-	1325	GS-	1268	GS-	953	GS-	169	ニワトコ	
GS-	1328	ヌルデ		GS-	1079	GS-	207	GS-	5
GS-	1333	GSC-	175	ケンボナシ属		GS-	265	GS-	31
GS-	1341	GSC-	183	GS-	122	GS-	327	GS-	270
GS-	1345	GSC-	186	GS-	183	GS-	468	GS-	755
GS-	1348	GSC-	187	GS-	204	GS-	470	GS-	782
GS-	1360	ヤマウルシ		GS-	607	GS-	476	GS-	906
GS-	1375	GS-	840	GS-	1010	GS-	479	ガマズミ属 A	
GS-	1386	GS-	944	GS-	1371	GS-	657	GS-	202
GS-	1400	GS-	957	クロウメモドキ属		GS-	774	GS-	231
GS-	1411	カエデ属		GS-	45	GS-	856	GS-	612
GS-	1413	GSC-	6	GS-	79	GS-	1144	GS-	1105
GS-	1419	GSC-	41	GS-	94	GS-	1207	GS-	1234
カツラ		GSC-	236	GS-	100	エゴノキ属		GS-	1285
GS-	1243	GS-	25	GS-	111	GSC-	1	ガマズミ属 B	
ヤブツバキ		GS-	85	GS-	114	GSC-	4	GS-	363
GSC-	100	GS-	176	GS-	666	GSC-	7	GS-	399
サカキ		GS-	182	GS-	1058	GSC-	12	GS-	402
GS-	212	GS-	451	GS-	1427	GSC-	25	GS-	659
GS-	275	GS-	588	クマヤナギ属		GSC-	60	GS-	701
GS-	654	GS-	598	GSC-	196	GSC-	62	GS-	739
GS-	822	GS-	633	ツタ		GSC-	123	GS-	800
GS-	836	GS-	649	GSC-	115	GSC-	128	GS-	842
モモ		GS-	650	GSC-	119	GSC-	130	GS-	1093
GSC-	99	GS-	673	GSC-	120	GSC-	139	GS-	1110
GSC-	108	GS-	781	GSC-	158	GSC-	149	GS-	1146
GSC-	227	GS-	892	GSC-	160	GSC-	152	GS-	1166
GSC-	231	GS-	978	GSC-	238	GSC-	159	GS-	1174
GS-	469	GS-	1002	GS-	719	GSC-	161	ヒノキ科一種	
GS-	1117	GS-	1133	GS-	1162	GSC-	173	GS-	965
サクラ属		GS-	1165	グミ属		GSC-	184	環孔材一種	
GS-	352	GS-	1175	GSC-	104	GSC-	192	GS-	914
GS-	712	GS-	1217	GSC-	105	GSC-	194	散孔材一種	
GS-	866	GS-	1237	GSC-	110	GSC-	197	GSC-	10
GS-	1261	GS-	1279	GS-	3	GSC-	202	根材 Sp.A	
バラ属		GS-	1437	GS-	69	GS-	50	GS-	146
GS-	1069	GS-	1441	GS-	1078	GS-	1062	根材 Sp.B	
フジ		GS-	1442	GS-	1417	GS-	1094	GS-	290
GSC-	170	ムクロジ		クマノミズキ類		GS-	1337		
GS-	52	GS-	15	GSC-	11	サワフタギ			
GS-	110	GS-	59	GSC-	22	GS-	152		
GS-	660	GS-	257	GSC-	26	トネリコ属			
GS-	697	GS-	389	GSC-	56	GSC-	3		
GS-	1409	GS-	618	GSC-	76	GSC-	15		
コクサギ		GS-	825	GSC-	124	GSC-	79		
GSC-	32	GS-	844	GSC-	137	GSC-	88		
GSC-	36	GS-	1317	GSC-	164	GS-	998		
GSC-	48	トチノキ		GSC-	167	イボタノキ属			
GSC-	80	GS-	147	GSC-	168	GSC-	217		
GS-	410	ツルウメモドキ		GSC-	178	GS-	11		
GS-	686	GS-	99	GSC-	181	GS-	143		
GS-	740	GS-	135	GSC-	182	GS-	240		
GS-	787	GS-	179	GSC-	199	GS-	266		
GS-	961	GS-	187	GSC-	206	GS-	1048		
GS-	986	GS-	467	ミズキ		クサギ			
GS-	1098	GS-	592	GSC-	117	GSC-	224		
GS-	1103	GS-	664	GSC-	118	GS-	913		
キハダ		GS-	678	ウコギ属		ムラサキシキブ			
GS-	374	GS-	692	GSC-	40	GS-	833		
サンショウ		GS-	711	GSC-	169	キリ			

## (2) 新保遺跡におけるプラント・オパール分析

宮崎大学 藤原宏志

1970年代の後半、群馬県下で行われた農耕遺跡調査の成果はその後全国に波及し各地で水田が検出される端緒となった。

これらの諸成果は農耕史の定説を大きく書きかえるものであり、この分野の研究は長足の進歩を遂げつつある。

自然科学と考古学の共同研究もこの間に成熟し、新しい方法が開発され応用されるようになった。プラント・オパール分析法により事前に農耕生産の埋藏土層とその範囲を探查推定する方法が確立され各地の遺跡調査で応用されている。

当該遺跡調査は1978年に行われたものであり、プラント・オパール分析もまだ分析法の開拓途上であった。

本報では当該遺跡におけるプラント・オパール分析の結果と検出された農耕遺跡について若干の検討を加えることにしたい。

### 1. 分析試料および分析方法

分析試料は1978年4月13日、遺跡壁面から100cc採土、円筒を用い4試料を採取した。試料数が少なく正確な生産総量、生産の分布域を推定することは困難であるが、試料採取土層における作物栽培の有無を知ることとは十分可能である。試料採取地点の土柱図を第391図に示した。

分析方法はプラント・オパール定量分析法(重量法)によった。当時はまだガラス・ビーズを利用した定量分析法が確立されておらず、効率、精度の両面で劣る重量法によるしかなかった。したがって、大量の試料を分析することができなかった。

### 2. 分析結果

分析結果は第306表に示した。

### 3. 考察および結論

#### (1) イネについて

榛名山二ツ岳噴出物(F P F-1)主体氾濫層、第III層上部、第III a層は層厚20cmでイネが約1.2 t / 10 a · cm (イネ糶換算量) 検出されている。したがって、ここで生産されたイネ糶総量は24 t / 10 a (ただし、収穫が穂刈りで行われたとした場合)である。かりに当時の年間生産量を100kg/10 a とすると、240年間稲作が行われたと推定される。これに対して浅間山の活動により堆積した軽石(浅間C軽石)層直下にあたる第IV b層は層厚5 cmでイネが約0.8 t / 10 a · cm (イネ糶換算量) 検出された。第III層上部の場合と同様に計算するとイネ糶生産総量は4 t / 10 a である。したがって、かりにここでイネが連続的に栽培されていたとすると(例えば水田作のように)、たかだか40年しか利用されなかったということになる。

#### (2) タケ類について

イネの他に検出されたイネ科植物はタケ類である。ある種のタケ類は樹林帯の下床植物として繁茂する。ここで検出されたタケ類はおそらくその仲間であろう。



## (3) 火山灰層中のプラント・オパール

第Ⅲa層の下部と第Ⅳa層の下部はそれぞれFA層および浅間C軽石層であり火山活動による堆積物である。両層ではプラント・オパールは検出されなかった。両層が火山堆積物であることを考えると上述の結果は首肯できよう。

前述のとおり浅間C軽石（第Ⅳa層下部）直下の第Ⅳb層でイネが検出されている。検出されたイネの量はやや少なく、かりに直上層で大量のイネが検出されるような場合は人為的攪乱による落ち込みを考慮する必要も出てくるが、この結果をみると直上層（C軽石層）にイネが無く4B層がパッキングされた状態になっていることがわかる。

## (4) 第Ⅳb層で検出されたイネについて

第Ⅳb層は弥生時代～古墳時代初頭にあたる時期であり、同層上面から畦状遺構と多数の溝が検出されている。プラントオパール分析の結果から同層でイネが栽培された可能性は極めて高いと判断され、検出された遺構群も稲作に伴うものと考えてよからう。

また同層でタケのプラントオパールが大量に検出されており、比較的乾燥した状態であったことが推量される。このことと遺構の状況をあわせ考えるとここで行われた稲作とは乾田あるいは畑作を想定するのが妥当と思われる。

第306表 新保遺跡分析結果

土層	イネ	イネ地上部乾重	イネ籾	タケ	タケ地上部乾重	0 cm
	po./cc	t/10a・cm	t/10a・cm	po./cc	t/10a・cm	
第Ⅲ層上部	11886	3.494	1.224	2607	0.125	第Ⅰ層
第Ⅲ層下部 (FPF-1泥蓋層)	0	0	0	0	0	46 第Ⅱ層
浅間C軽石層	0	0	0	0	0	53 第Ⅲ層上部
第Ⅳb層	7550	2.220	0.778	11858	0.569	73 第Ⅲ層下部
						82 第Ⅳa層
						90 浅間C軽石層
						95 第Ⅳb層
						100 第Ⅴ層

第391図 新保遺跡土層柱状図と試料採取位置

### (3) 新保遺跡試料花粉分析

パリノサーベイ株式会社調査研究部

#### 1. 試料

花粉分析試料は合計8点であり、これらの試料の試料番号、Gr、No、溝名、時代、土質、花粉孢子化石産出状況の各項目別にまとめた試料表を、第307、308表として表わしたので参照されたい。

#### 2. 分析方法および結果の表示法

花粉・孢子化石の抽出方法は、下記の手順で行った。

試料は15グラム秤量し、フッ化水素 (HF) 処理により試料中の珪酸質の溶解と試料の泥化を行う。次に重液 (ZnBr<sub>2</sub> 比重2.2) を用いて鉱物質と有機物を分離させ、有機物を濃集する。その有機物残渣について、アセトリシス処理を行い植物遺体中のセルロースを加水分解し、最後にKOH処理により腐植酸の溶解を行う。処理後の残渣は、よく攪拌しマイクロピペットで適量を取り、グリセリンで封入する。

検鏡においては、生物顕微鏡で観察し (400~1,000倍)、検出された種類 (Taxa) について同定・計数した (第308表)。計数の結果にもとづいて各試料における花粉化石組成図を作成した (第392図)。出現率は、樹木花粉総数、草本花粉とシダ類孢子が総花粉数から不明花粉数を除いた数をそれぞれ基数として百分率で算出した。なお、樹木花粉総数が50個体未満の試料についてはデータが歪曲されるおそれがあるので図示しなかった。これらの図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

#### 3. 結果

花粉分析の結果、樹木花粉が33種類・草本花粉が19種類・シダ類孢子が3種類・その他が検出された。分析を行った試料のうち、No.6~7試料は、花粉・孢子・化石の産出が非常に少なかった。その他の試料は、良好に花粉・孢子化石を産出した。

全般的には、樹木花粉と草本花粉がほぼ同じ割合で出現しシダ類孢子が少ない。樹木花粉の中では、コナラ亜属が高い出現率を示し、スギ属・アカガシ亜属・エノキ属・ムクノキ属・クルミ属などが比較的よく出現する。草本花粉では、イネ科・カヤツリグサ科・モモギ属が多く出現し、水生植物のガマ属・オモダカ属・ミクリ属などが少ないながらも出現する。以下は検出された花粉・孢子化石である。

##### (1) 樹木花粉

###### (針葉樹花粉)

Abies (モミ属)・Picea (トウヒ属)・Pinus (マツ属)・Tsuga sieboldii (ツガ)・T. diversifolia (コメツガ)・Taxodiaceae (スギ科)・Cryptomeria (スギ属)・Sciadopitys (コウヤマキ属)・T. C. T. (Taxacealイチイ科・Cupressaceaeヒノキ科・Taxodiaceae (スギ科))

###### (広葉樹花粉)

Juglans (クルミ属)・Pterocarya (サワグルミ属)・Salix (ヤナギ属)・Alnus (ハンノキ属)・Betula (カバノキ属)・Carpinus (クマシデ属)・Corylus (ハシバミ属)・Castanea (クリ属)・Castanopsis (クリカシ属)・Fagus (ブナ属)・Cyclobalanopsis (アカガシ亜属)・Lepidobalanus (コナラ亜属)・Celtis (エ

ノキ属)・Zelkova (ケヤキ属)・Moraceae (クワ科)・Sapium (シラキ属)・Rhus (ウルシ属)・Acer (カエデ属)・Aesculus (トチノキ属)・Rhamnaceae (クロウメモドキ科)・Tilia (シナノキ属)・Araliaceae (ウコギ科)・Styrax (エゴノキ属)・Fraxinus (トネリコ属)・Rutaceae (ミカン科)・Euonymus (ニシキギ属)?

(2) 草本花粉

Persicaria (サナエタデ属)・Polygonum (タデ属)・Chenopodiaceae (アカザ科)・Thalictrum (カラマツソウ属)・Crusiferae (アブラナ科)・Impatiens (ツリフネソウ属)・Haloragis (アリノトウグサ属)・Carduoideae (キク亜科)・Artemisia (ヨモギ属)・Cichorioideae (タンポポ亜科)・Potamogeton (ヒルムシロ属)・Irideaceae (アヤメ科)・Gramineae (イネ科)・Sparganium (ミクリ属)・Typha (ガマ属)・Cyperaceae (カヤツリグサ科)・Sagittaria (オモダカ属)・Plantago (オオバコ属)・Caldesia (マルバオモダカ属)

(3) 不明花粉

Monocolpate pollen (単溝型花粉)・Tricolpate pollen (三溝型花粉)・Tricolporate pollen (三溝孔型花粉)

(4) シダ類孢子

Osmundaceae (ゼンマイ科)・Polypodiaceae (ウラボシ科)・Monolete spore (単条型孢子)・Trilete spore (三条型孢子)

4. 花粉・孢子構成の特徴並びに、古植生、古気候、古環境

No.1 (M-12G A溝)

樹木花粉では、コナラ亜属が高率に出現し、スギ属・マツ属・ツガ属・ハンノキ属・ブナ属・アカガシ亜属・エノキ属・ムクノキ属などが出現する。草本花粉では、イネ科・カヤツリグサ科・ヨモギ属が高率に出現し、水生植物のガマ属・ミクリ属・ヒルムシロ属が僅かに出現する。

従って古植生は、ヨモギ属・イネ科・カヤツリグサ科等が主体となって生育した草地と考えられる。またツリフネソウ属・ヒルムシロ属・ミクリ属・ガマ属などの水生植物が生育した池沼的な環境も推定される。この草地の周囲には、前述の樹木類も生育していたものと考えられる。

古気候は、前述の樹木の生育により、温帯に相当しよう。

No.2 (N-12G B溝)

樹木花粉では、コナラ亜属が顕著に多く出現し、スギ属・マツ属・ブナ属・アカガシ亜属・ニレ属・ケヤキ属・エノキ属・ムクノキ属・エゴノキ属などが出現する。草本花粉では、イネ科が高率に出現し、カヤツリグサ科とヨモギ属が普通にみられる。また、水生植物のガマ属が出現する。

従って古植生はイネ科・カヤツリグサ科・ヨモギ属を主体とする草地が推定される。またガマ属が検出されることから、池沼の環境も併せて考えられる。草地の周囲ではコナラ亜属を主体とする広葉樹類も良く生育し林地を形成していたものと云えよう。古気候は温帯に相当すると思われる。

**No.3 (O-12G C溝)**

樹木花粉では、コナラ亜属とエノキ属—ムクノキ属が高率に出現し、スギ属・クルミ属・アカガシ亜属・クワ科・カエデ属などが出現する。草本花粉では、イネ科とカヤツリグサ科が多く、ヨモギ属も出現する。また、水生植物のオモダカ属が出現する。

従って古植生は、コナラ亜属・エノキ属などの広葉樹、イネ科・カヤツリグサ科・ヨモギ属などの草本類が良好に生育していたことが推定される。古気候は前述の樹木の生育により温帯に相当しよう。

**No.4 (P-12G D溝)**

樹木花粉では、コナラ亜属とエノキ属—ムクノキ属が高率に出現し、スギ属・ヤナギ属・クルミ属・ブナ属・アカガシ亜属・ニレ属—ケヤキ属などが出現する。草本花粉では、イネ科が多く、カヤツリグサ科とヨモギ属・タデ属などが出現する。水生植物のマルバオモダカ属が僅かに認められた。

従って古植生は、イネ科を優勢とし、ヨモギ属・カヤツリグサ科・タデ属から成る草地が推定される。また、この草地の付近にはコナラ亜属・エノキ属を主体とする広葉樹類が森林を形成し生育していたことが推定される。古気候は温帯であろう。

**No.5 (B-9G E溝)**

樹木花粉では、コナラ亜属が顕著に多く出現し、スギ属・マツ属・クルミ属・ブナ属・アカガシ亜属・ニレ属—ケヤキ属・エノキ属—ムクノキ属・トチノキ属・エゴノキ属などが出現する。草本花粉では、ヨモギ属が高率に出現し、カヤツリグサ科とイネ科が普通にみられる。また水生植物のガマ属が出現する。

従って古植生は、イネ科・ヨモギ属を優勢とする草地が推定される。また、草地の付近には、コナラ亜属・ケヤキ属・クルミ属・ブナ属等の広葉樹類が良好に生育し森林を形成していたものと考えられる。古気候は温帯であろう。

**No.6 (R-9G FA直下)**

花粉・孢子化石の産出が非常に少ない。検出された花粉・孢子の中では、草本花粉のイネ科・カヤツリグサ科・ヨモギ属と樹木花粉のコナラ亜属が多かった。

従って古植生は、イネ科・ヨモギ属などの草本類と羊歯類孢子から成る草地が広く分布していたことが推定される。古気候は温帯であろう。

**No.7 (257号住居 覆土)**

花粉・孢子化石の産出が非常に少ない。樹木花粉は殆ど検出されず、検出された花粉・孢子化石の中では、草本花粉のヨモギ属・イネ科・キク亜科とシダ類孢子が多かった。

従って古植生は、以上の草本から成る草地と推定される。古気候は、樹木花粉が殆ど検出されなかったので判断し難い。

**No.8**

花粉・孢子化石が殆んど産出されない。

## 5. 考 察

今回の試料の時代は、同一地点を柱状に採取したものでないが弥生時代中期後半から平安時代までである。花粉・孢子化石の産出が非常に少なかったNo.6～8試料は古植生の解析を行えないが、花粉・孢子化石を良好に産出したNo.1～5試料の結果から次のように考えられる。

遺跡周辺の弥生時代中期後半から古墳時代前期における古植生は、樹木花粉の産出からナラ類を主とする

落葉広葉樹からなる森林植生が推定される。この森林には、エノキ属—ムクノキ属・クルミ属・クマシデ属—アサダ属・ニレ属—ケヤキ属などの落葉広葉樹とともに照葉樹のカシ類が存在していたと考えられる。したがって、古気候は現在とほぼ同じ温帯といえよう。一方、草本植物の産出からイネ科・カヤツリグサ科・ヨモギ属などが存在し、ガマ属をはじめとする水生植物の産出から水生植物が生育可能な池沼から湿地の環境が存在したものと推定される。

館林地域では、浅間C軽石降下以前においてコナラ亜属が多く出現しアカガシ亜属を伴っている。(辻 1986)。日高遺跡(徳永 1982)においても浅間C軽石降下以前ではコナラ亜属が多く出現しアカガシ亜属を伴うという同じような傾向が認められる。これらの地域とほぼ同時代と考えられる今回の新保遺跡においてもコナラ亜属が多く出現しアカガシ亜属を伴うという同じ様な傾向が認められ、遺跡周辺にはこれらの地域と同じような森林が存在したものとといえよう。

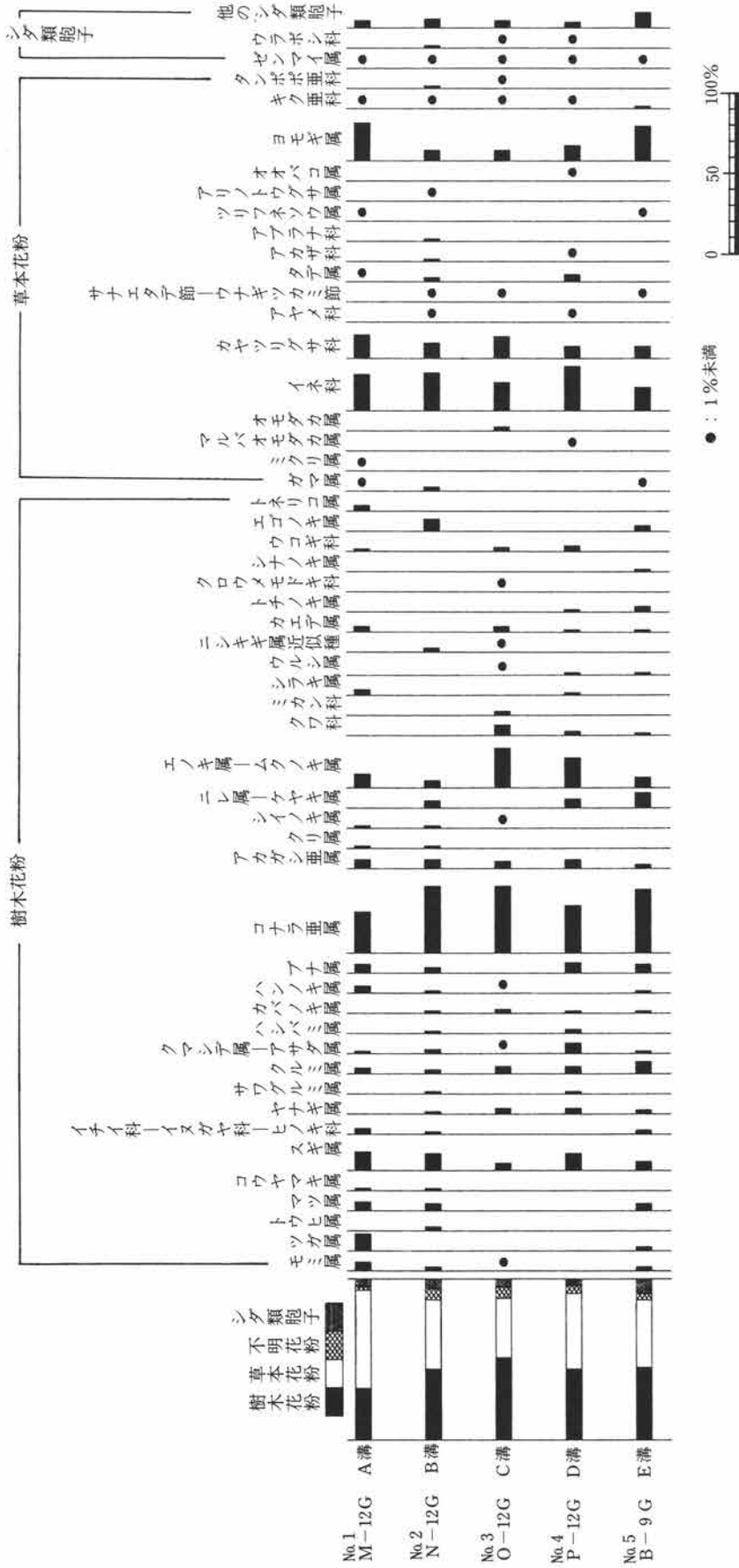
## 引用文献

- 辻誠一郎・南木睦彦・小杉正人 1986：茂林寺沼及び低地湿原調査報告書 第2集 館林の地沼群と環境の変遷史 pp. 110
- 徳永重元 1982：日高遺跡の花粉分析 「『日高遺跡』一関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第5集一」 群馬県教育委員会(助)群馬県埋蔵文化財調査事業団 pp. 349—358

第307表 新保遺跡試料表

試料番号	Gr. No.	溝名	時代	花粉・孢子化石産出状況*
1	M-12G	A 溝	古墳時代前期	C
2	N-12G	B "	" 初頭	C
3	O-12G	C "	弥生時代後期	A
4	P-12G	D "	" 後期初頭	C
5	B-9G	E "	" 中期後半	C
6	R-9G	F A 直下	古墳水田跡耕土	R
7	257号住居	覆土	弥生時代後期住居地	R
8	住居	覆土	平安時代	RR

\* A：多い Abundant、C：普通 Common、R：少い Rare、RR：極稀れ Rare rare。



第392図 新保遺跡No.1、2、3、4、5 試料花粉化石組成

第308表 新保遺跡試料花粉分析結果

種類 (Taxa)	試料番号							
	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7	No. 8
樹木花粉								
モミ属	4	2	1	—	2	1	—	—
ツガ属	7	—	—	—	2	2	—	—
トウヒ属	—	2	—	—	—	—	—	—
マツ属	4	4	—	—	3	—	—	—
コウヤマキ属	1	1	—	—	—	—	—	—
スギ属	8	9	5	10	4	3	—	—
イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科	2	1	—	—	2	—	—	—
ヤナギ属	—	1	3	3	2	—	—	—
サワグルミ属	—	1	—	1	—	—	—	—
クルミ属	2	2	4	4	6	—	—	—
クマシテ属—アサダ属	1	2	1	6	1	—	—	—
ハシバミ属	—	1	—	2	—	—	—	—
カバノキ属	—	1	2	1	1	—	—	—
ハンノキ属	3	1	1	—	1	1	—	—
ブナ属	4	3	—	6	4	1	—	—
コナラ亜属	18	39	46	29	33	9	—	—
アカガシ亜属	4	5	4	5	2	1	—	—
クリ属	1	1	—	—	—	—	—	—
シイノキ属	1	1	1	—	—	—	—	—
ニレ属—ケヤキ属	—	4	—	5	8	—	—	—
エノキ属—ムクノキ属	6	4	27	18	5	1	1	—
クワ科	—	—	7	2	1	—	—	—
ミカン科	—	—	2	—	—	—	—	—
シラキ属	2	—	—	1	—	—	—	—
ウルシ属	—	—	1	1	1	—	—	—
ニシキギ属近似種	—	2	1	—	—	—	—	—
カエデ属	2	—	3	1	1	—	—	—
トチノキ属	—	—	—	1	3	—	—	—
クロウメモドキ科	—	—	1	—	—	—	—	—
シナノキ属	—	—	—	—	1	—	—	—
ウコギ科	1	—	2	3	—	—	—	—
エゴノキ属	—	7	—	—	3	—	—	—
トネリコ属	2	—	—	—	—	—	—	—

## 7 鑑定、分析

種 類 (Taxa)	試料番号							
	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7	No. 8
草 本 花 粉								
ガマ属	1	4	—	—	1	—	—	—
ミクリ属	1	—	—	—	—	—	—	—
ヒルムシロ属	1	—	—	—	—	—	—	—
マルバオモダカ属	—	—	—	1	—	—	—	—
オモダカ属	—	—	4	—	—	—	—	—
イネ科	49	45	35	58	25	27	9	2
カヤツリグサ科	32	18	26	16	12	7	1	—
アヤメ科	—	1	—	1	—	—	—	—
サナエタデ節—ウナギツカミ節	—	1	1	—	1	1	—	—
タデ属	2	3	—	8	—	—	—	—
アカザ科	—	2	—	1	—	—	—	—
カラマツソウ属	—	—	—	—	—	1	—	—
アブラナ科	—	2	—	—	—	2	—	1
ツリフネソウ属	1	—	—	—	1	—	—	—
アリノトウグサ属	—	1	—	—	—	—	—	—
オオバコ属	—	—	—	1	—	—	—	—
ヨモギ属	51	12	13	20	39	23	32	1
キク亜科	1	1	1	1	2	2	3	—
タンポポ亜科	—	2	1	—	—	2	—	—
不明花粉	5	15	16	12	8	2	—	—
シダ類孢子								
ゼンマイ属	2	1	1	1	1	—	—	—
ウラボシ科	—	2	2	2	—	8	—	—
他のシダ類孢子	9	9	9	6	16	28	4	2
合 計								
樹木花粉	73	94	112	99	86	19	1	0
草本花粉	139	92	81	107	81	65	45	4
不明花粉	5	15	16	12	8	2	0	0
シダ類孢子	11	12	12	9	17	36	4	2
総花粉・孢子	228	213	221	227	192	122	50	6



## (4) 新保遺跡出土人骨について

森 本 岩太郎

吉 田 俊 爾

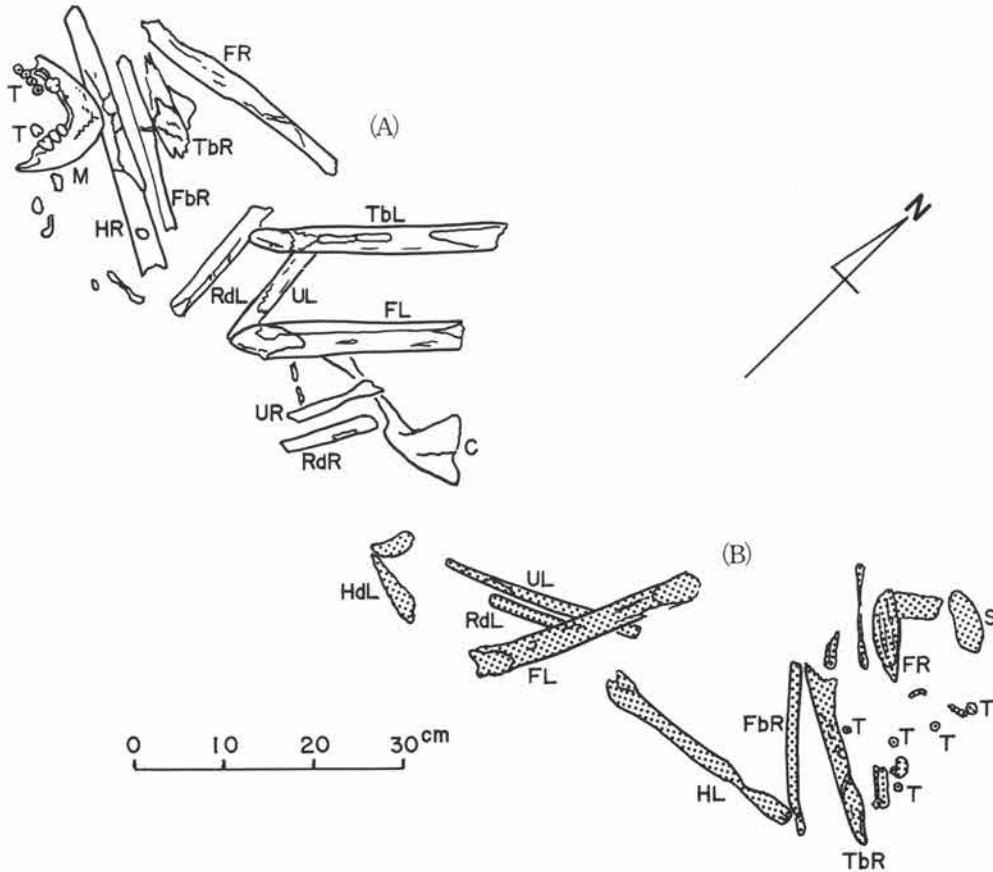
### I. はじめに

新保遺跡の258号住居跡および7号、9号、11号、15号周溝墓から弥生時代後期に属すると思われる人骨が出土した。群馬県教育委員会の委嘱により、筆者は現地を訪れ、人骨の出土状況を調査してこれを取り上げ、これらの人骨の鑑定を行った。

### II. 人骨の出土状況および所見

#### 1. 258号住居跡出土人骨（第393図、図版188・写真1、2）

方形を呈する住居跡内の東隅に近い場所において、約130×45cmの範囲内にA・B 2個体分の成人骨が発見



第393図 258号住居跡人骨の出土状況

白抜きの人骨（左上方）が西頭位左側臥屈位の壮年期男性、スクリントーンを施した人骨（右下方）が東頭位左側臥屈位の壮年期女性である。記号はCが寛骨、Fが大腿骨、Fbが腓骨、Hが上腕骨、Hdが手骨、Mが下顎骨、Rdが橈骨、Sが頭骨、Tが歯、Tbが胫骨を、また記号末尾のLが左、Rが右をそれぞれ示す。

7 鑑定、分析

された。人骨は住居跡の床面から約3cm上にある。A人骨は壮年期の男性で西頭位左側臥屈位、B人骨は壮年期の女性で東頭位左側臥屈位をとり、兩人骨は互いにその骨盤部で接している。したがって、一見すると同一場所に男女2個体が重葬ないし追葬されているように見えるが、人骨の保存状態が極めて悪いうえに、墓壇の様子も判然としないので、A・B兩人骨が果たして同一墓壇内に埋葬されたものか、あるいは別々の墓壇内にあるのか、または墓壇が無いのかなどの埋葬関係における兩人骨の関連の有無について、残念ながら知ることはできない。

A・B兩人骨の出土状況を少し詳しく見てみよう。まず、A人骨は西頭位で左側臥屈位をとる。数個の遊離歯と下顎骨が西端、寛骨片が東端にあり、その間を四肢骨が占める。左上腕骨は腐蝕により失われているが、左橈骨と左尺骨は胸部にあって平行に並ぶ。右上腕骨は頸部にあり、右橈骨と右尺骨は骨盤部にあって平行に並ぶ。左大腿骨と左脛骨は腹部にあって平行し、右大腿骨と右脛骨と右腓骨は胸部付近に並列している。したがって、A人骨は左肘関節をほぼ直角に屈曲、右肘関節を鈍角に屈曲し、両側の股関節と膝関節をそれぞれ極度に屈曲して左側臥位をとっていると考えれば、右膝がやや頭側に偏っている外は各人骨の配列はおおむね解剖学的自然位にあるとみなされる。

B人骨は東頭位の左側臥屈位をとる。頭蓋片と数個の遊離歯が東端にあり、それより西に四肢骨が配列するが、骨盤は腐蝕により消失している。左上腕骨は胸部にあり、左橈骨と左尺骨は腹部にあって平行し、その遠位に手骨がある。右上肢骨は残っていない。左大腿骨は腹部にあって、左前腕骨と交差するが、左の脛骨・腓骨は見られない。右大腿骨と右脛骨はほぼ平行して頸部付近にある。したがって、B人骨は左肘関節を軽く屈曲し、両側の股関節と膝関節を極度に屈曲して左側臥位をとっていると考えれば、右膝関節部がやや頭側に偏っている以外は各人骨の配列は解剖学的に自然であると言ってよい。

A・B人骨とも保存状態が極めて悪いので、各人骨片の部分を同定するのが精一杯の努力の限界である。A人骨で同定できたのは、まず土圧によりやや変形した下顎骨体とそれに伴う歯である。これに歯槽から遊離して散乱している数個の歯を加えて、この個体の歯および歯槽の状態を記すと下のようになる。

6 5 4	1	3 4 5 6 7 8
8 7 6 5 4 ○	○	○ 4 5 6 7 (8)

ただし、アラビア数字は残存する歯を、また( )内はそれが萌出途中であることを意味する。○印は歯が脱落したために歯槽が開放していることを示す。記載の無い箇所は欠損のため状況不明である。歯の咬合様式は鋏状咬合で、咬耗度は  $\underline{4 \ 1 \ | \ 1}$  がBrocaの第2度、他の歯は同第1度である。

そのほかに残存する人骨は右上腕骨体(長さ約16cm)、左右橈骨体(左13、右8cm)、左右尺骨体(左8、右7cm)、左右不明の寛骨(7×5cm)、左右大腿骨体(左18、右22cm)、左右脛骨(左7、右18cm)、右腓骨(12cm)の各骨片が主要なものである。歯の咬耗度および大きさ、骨格の太さおよび骨質の厚さなどから壮年期の男性人骨と推定される。

B人骨で残存するのは、まず頭蓋冠片(6×3cm)と下に示す5個の遊離歯とである。

4	1	6
5		4

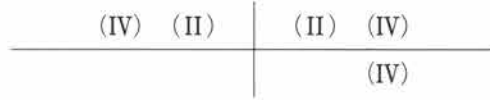
歯は比較的小さく、咬合様式は鋏状咬合で、咬耗度は  $\underline{1}$  がBrocaの第2度、他の歯が同第1度である。

四肢骨としては左の上腕骨体(16cm)、橈骨体(7cm)、尺骨体(12cm)、中手骨体(2cm)と、左大腿骨体(28cm)、ならびに右の脛骨体(18cm)と腓骨体(15cm)が主要な骨片である。歯の咬耗度と大きさ、骨格のきゃしゃなことなどから、この個体は壮年期の女性人骨と推定される。

2. 7号周溝墓出土人骨

(a) 第1主体部壺棺内出土人骨

壺棺内に埋納された胎児骨1個体分である。小さく薄い部位不明の骨片(2×1cm)が1個と下に示す乳歯5本とがある。



ここで( )内のローマ数字は未萌出の乳歯を示す。乳歯はいずれも歯冠だけで、歯根の形成はなく、未萌出のものであるから咬耗も見られない。

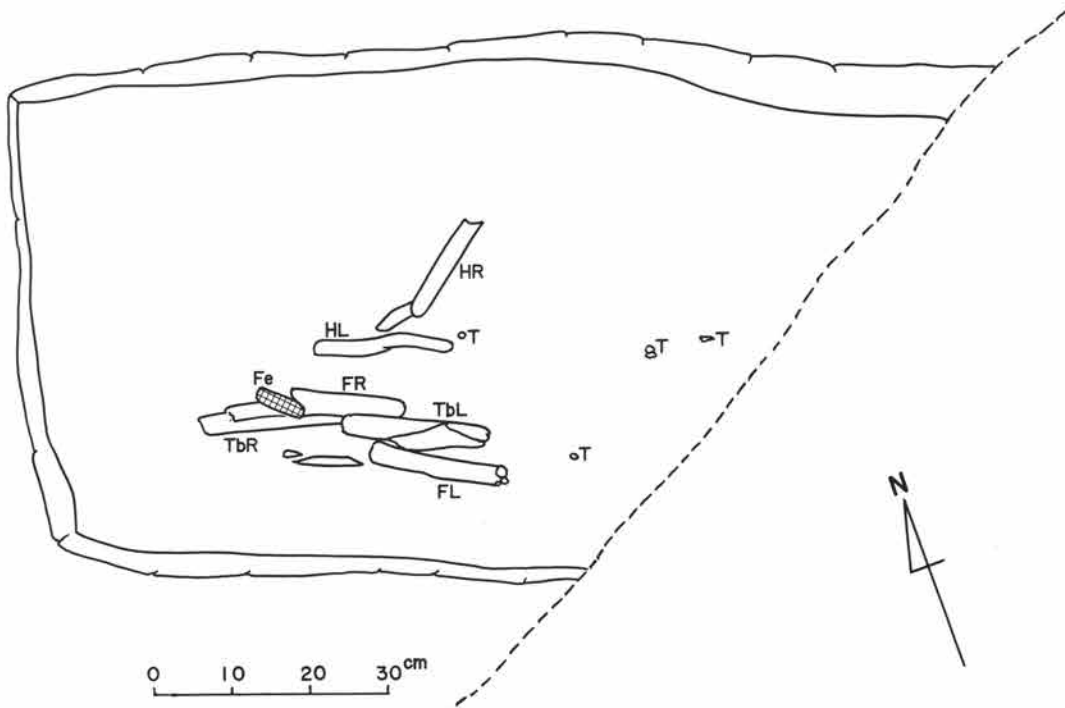
(b) 第2主体部出土人骨(第394図、図版189・写真3)

約120×60cm大の方形墓壙(ただし墓壙は現地の事情で拡張不能のため縦径は不確実)内に東頭位左側臥屈葬された性別不詳の壮年期人骨1個体分である。墓壙の縦径と平行に左右の大腿骨と脛骨が相互に密着して並列するが、左下肢のほうがやや頭側寄りである。これらの下肢骨群からやや離れて、下肢骨と平行に左上腕骨があり、この左上腕骨とJ字形をなすように右上腕骨が頭側へ伸びている。頭蓋があったと思われる位置に数個の歯が散乱している。右脛骨に小さな鉄片と思われるものがさびびて密着しているので、なんらかの鉄製品が副葬されていたと思われる。

歯は次のとおりである。



歯の咬耗度はBrocaの第1度であり、下顎の智歯が左右とも萌出している。



第394図 7号周溝墓第2主体部人骨(壮年期、性別不詳)の出土状況

記号のFe(格子じま)は鉄片で、その他の記号は第393図に同じ。

7 鑑定、分析

3. 9号周溝墓出土人骨

(a) 第1主体部出土人骨

成人の大白歯の歯冠片が2個認められる。

(b) 第2主体部出土人骨

壮年期の成人のものと思われる大白歯片が6個あり、その咬耗度はBrocaの第1度である。

4. 11号周溝墓出土人骨

(a) 第1主体部壺棺内出土人骨 (図版189・写真4)

壺棺内から年齢4～5歳の幼児のものと思われる歯が発見された。主として歯冠の破片で、20個余りが認められるが、そのうち同定できたのは次の12本である。

(6)VIV	(1)	V(6)
(6)V	(1)	(3) V(6)

上下顎とも内側切歯と第1大白歯が未萌出である。

(b) 第4主体部出土人骨 (図版206・写真4)

壮年期の成人1個体分の歯数個と歯冠の微小細片60個余りがある。これらのうち同定できたのは次の7本である。

7 6	
7 6	3 2 1

歯の咬合様式は鋏状咬合で、咬耗度はBrocaの第1度である。

5. 15号周溝墓出土人骨 (図版189・写真4)

第1主体部の約110×35cm大の隅丸長方形墓壇の南端付近から発見された青年期～壮年期の個体1個体分の歯およびその微小な歯冠片60余個が認められる。これらのうち、同定できたものは次の8本である。

6	2	2	4
6	2 1	2	

歯の咬合様式は鋏状咬合で、咬耗度はBrocaの第1度である。

III. ま と め

新保遺跡出土の人骨はいずれも弥生時代後期に属するものと思われる。258号住居跡からは西頭位屈位の壮年期男性人骨と東頭位屈位の壮年期女性人骨各1個体分が、相互に骨盤部を接して出土した。7号、9号、11号、15号周溝墓の墓壇内からは成人骨(大部分が壮年期)5個体分が得られた。このうち、埋葬姿勢の判明した7号墓出土成人骨も東頭位屈葬であった。壺棺内から発見された人骨は2個体で、7号墓壺棺は胎児、11号墓壺棺は幼児が埋納されていた。

成人骨の年齢は壮年期に属するものが多く、熟年期以後の高齢者は見当たらなかった。成人の歯の咬合様式は全例が鋏状咬合であった。

## 8 考察

### (1) 出土弥生土器について

#### 1 分析の内容

- 1) 本遺跡出土弥生土器の口縁部形態、単位文様の同一個体内の共存関係の分析により口縁部形態、単位文様の変化、推移の過程を明らかにする。
- 2) 1)に基づき時間的位置を同じくする、口縁部形態、文様の組み合わせが類似するまとまり=類型を抽出し、抽出した類型の数量的推移、及び推移する類型の定形度=バラエティー度を検討する。これは口縁部形態と口端部、口縁部、口辺部の3部位の文様の組み合わせのバラエティーと集中度の検討である。
- 3) 口縁部(形態)類型を異にする異系統(系列)土器を相互に文様構成、様式的推移の仕方を対比し同一組成についての検討を行う。
- 4) 1)、2)により形式的に系列化された類型を、発掘調査時確かめられた層序からの出土傾向を明らかにし、層位的な検証を行う。
- 5) 同一遺構内共伴資料により、系列を異にする類型、器種を異にする類型相互間の同一組成についての検討を行う。
- 6) 1)、2)により形式的に系列化した類型系列を既成の編年研究と対比する。
- 7) 土器の類型系列に見る系統的近似性あるいはバラエティー度について、文化的背景に基づく様式的推移の有りかたとして把らえ、住居構造、集落構造、遺跡の分布などと対照し、文化的画期、変容の問題への導入とする。

#### 2 口縁部形態、単位文様の推移、変化過程の検討

##### 1) 分析方法の経緯

本稿にて行う土器分析の内、前項1)の方法は遺物の時間的前後関係、相対年代判定のための1方法であり、昨今この種の方法はいわゆる「属性分析」と呼称されて、多くの研究者によりその有効性が認められつつある。<sup>(1)</sup>

属性分析に基づく型式学的な操作例は現在のところまだ少ないが田中琢氏による方画規矩系和鏡の主像型式と図像文様との相関分析による相対的な新古の検証の方法などはこの「属性分析」の実際例といえるだろう。<sup>(2)</sup> 今後はパーソナルコンピューターの普及とともに大量の資料を精細に操作することが容易になってきており、この手法は考古遺物の相対年代検証法として今後研究者の間に次第に取り入れられていくと思われる。

この相対年代検証法の基礎となる考え方は型式学を確立したスウェーデンのモンテリウスの型式学の原理の準用である。漸移的に型式化する2種類の遺物の組列の間の平行性を共伴関係から確かめて、それぞれの組列の正しさを検証する方法と原理は同じである。<sup>(3)</sup>

##### 2) 資料の状況

分析の対象資料は遺跡を幅約20mで貫く弥生~古墳前期の大溝出土土器のうち口縁部を遺存する完形、破片土器約1万点である。これらの土器の状況を記せば以下のごとくである。

a) 土器の出土量が多い。各類型において資料が数量的に豊かであることにより、同一類型にあってもどのような口縁形態、文様が多く見られるか、またそれらが1個体の土器の中でどのように組み合わせるのかについてより確実な傾向を把握することができる。

b) 本地域において生じた弥生土器類型が網羅的に見られ、継続的に土器の様式的推移が認められること。同一類型中最も出現頻度の高い、定形化が最も進行した現れのほか、出現頻度のより低い部分として、前出土器の要素を強くするもの、あるいはその反対に後出土器の特徴の萌芽的な現れを持つものなどについて認識することが可能である。

口縁形態、文様の変遷・系列を漸次的にたどることができる。前後する類型と器形文様が全く異質な土器が突如盛行するといった様子は見られない。急激な変化が認められない。北信濃系、あるいは東関東系の土器、東毛地区に分布圏をもつ後期後半期の赤井戸式土器など他地域の土器が一時的に散見されるといった状態はある。折り返し口縁の出現など大きな変化が生じた際にもその出現時点では前出の土器が持つ文様要素などを色濃く継承している。

c) ただし本遺跡出土土器群においてはその推移のうちに「失能的」成体（ルジメント）の明確な現れを認め得ないのでこれに基づくところの、機能を有するものから実用上の機能を失って失能化したものへといったような、古から新への「一連鎖」の推移の方向をそのものの自身の中に認識することはできない。それゆえこの認識作業仮説を得るためには層位的に相対的な新しさ古さが確認された本遺跡や他遺跡の例を参考にする必要がある。

d) 弥生土器の文様体（施文部位）が固定的で単位文様は単純で典型的であるため抽出が容易である。特に単位文様そのものの漸次的変化は基本的には見られない。文様の推移は単位文様の交替、各文様体間の単位文様の組み合わせの変化として見られる。このため口縁（形態）類型、単位文様の抽出と施文部位区分とこれらの記号化、これに基づくデータベースの作成を可能にした。

### 3) 分析の方法

a) 口縁部形態と同一土器の口縁端部以下の各部位に文様体を構成する単位文様はそれぞれ古い形のものから新しい形のものへ変化、交替している様子が認められる。古い段階の土器と新しい段階の土器を比較すると古い段階のものは口縁形態、各文様体を構成する単位文様は一様に古い形のものが入り入れられており、出現時期が大きく隔たったもの同士が同一土器の上位、下位文様体として伴うことはまずない。口縁形態、口縁端部、口縁部、口辺部、頸部文様体が一定の関連を持ちながらも、それぞれ独自に推移があり、これらは組み合わせられて一個体の土器を構成する。この組み合わせはモンテリウスの「確実な発見物」（一括遺物）と同じ意味を持っており、文様体系列間に「平行性」が得られるならば、それぞれの系列の正しさを検証するところとなる。「平行性」とはある一つの施文部位の文様系列のやや古い単位文様が他の施文部位の文様系列のやや古い単位文様と、また他の文様系列のやや新しい単位文様が他の文様系列のやや新しい単位文様とそれぞれ同時代であることをいう。

b) 同時代性については口縁形態、あるいは単位文様の同一個体での共伴頻度が多ければ多いほど高く、少なければ少ない程相互盛行期の時期差は大きい。ある部位の文様体を構成する単位文様を古いものから新しいものへ正しいと思われる系列で並べられた際、その組列中のそれぞれの単位文様と共伴する他の部位での単位文様の出現頻度の推移が合理的で、矛盾を見せなければこの系列は正しい。更にまた別の部位との間でも同様の結果が得られれば系列の正しさは更に確かなものとなる。<sup>(4)</sup>

合理的推移とは例えば一つの形として、漸移的に単位文様に盛衰が現れる。古い単位文様は漸次減少し、

新しい単位文様はこれに入れ替わって漸次増加する。更にそれが盛行段階以後は減少をたどる。不合理な表れ方とは例えば古い段階に見られた単位文様が突如新しい段階に出現したりする場合などである。

#### 4) 分析の手順

##### a) 基礎資料の作成

- ① 大溝より出土した完形、破片土器の中から口縁部を遺存するものを選別し、対象資料とする。
- ② 口縁部形態と施文部位、単位文様分類 分類基準は時間的推移にしたがって変化が現れていると見込まれる特徴に従って、次のような分類を行った。

#### 口縁部形態の分類 (付図6)

壺、甕、台付甕についてそれぞれ7種に分類し、記号呼称する。

I a 類 単純口縁で口縁部がやや内湾気味。

I b 類 単純口縁で口縁部が外反気味。

II 類 受け口状口縁と呼ばれているもので、口縁部が内に折れて立ち上がる。

III 類 口縁端部が内に短く強く折れる。

IV 類 折り返し口縁で、折り返し部の断面形状が三角形、またはカマボコ形。

V 類 多段折り返し口縁で、折り返し部が段状に2～3段作られる。殆どのが2段。

VI 類 折り返し口縁で、折り返し部は平たく、幅広。

#### 部位の認定 (付図6)

口縁端部から肩部まで5箇所に分けられる。これら各部位に文様体が配置されている。カッコ内のアルファベットは呼称記号

(a)口縁端部 (b)口縁部 (c)口辺部～頸部 (d)頸部くびれ部 (e)肩部

#### 単位文様の分類 (付図7)

単位文様は27種類に分類し、一部で更に細分する。カッコ内の数字は呼称記号

(1)櫛描直線文 (2)2連止め簾状文 (3)3連止め簾状文 (4)等間隔止め簾状文 (5)櫛描直線文+縦沈線 (6)櫛描直線+縦櫛描直線 (7)櫛描波状文 (8)櫛描斜格子文・櫛描羽状文 (9)櫛描山形文 (10)沈線直線文 (11)へら描沈線鋸歯文にへら描沈線充填 (12)沈線鋸歯文に刺突充填 (13)コの字重ね文 (14)平行沈線+縦沈線 (15)沈線波状文 (16 a)へら描羽状文 (16 b)へら描斜格子文 (17)沈線鋸歯文

- ③ 個々の土器を前項の分類にしたがって第395図のように基礎データとして表にまとめる。表は1行ごとに器形、文様の同じ組み合わせの土器を記録する。この際個々の土器の破片の大小を加味するために口縁部遺存率で表現する。口縁部が全周遺存するものを100%とする100分率である。

基礎データ表(第395図)の記載項目は以下のようである。左から出土地点、これは出土層位(重なり会小流路の覆土)古～新(E～A溝)の順に2～7の記号で表現する。次の項が口縁(形態)類型、器種。器種はアルファベットで表している。K=甕、T=壺、D=台付甕といった具合である。口

出土地点	器形器種	a	b	c	d	点数	遺存率
4	1K1a	0	0	0	4	12	96
4	1K1a	0	7	0		4	22
4	1K1a	0	7	7	1	1	15
4	1K1a	0	7	7	2	1	11
4	1K1a	0	7	7	3	1	8
4	1K1a	0	7	7		34	230
4	1K1a	0	7	7		2	28
4	1K1a	0	0	0	2	1	13
4	1K1a	20	0	0	4	2	16
4	1K1a	20	0	0		4	34
4	1K1a	20	0	7		1	11
4	1K1a	20	30	0	4	1	9
4	1K1a	20.7	7	0		1	11
4	1K1a	21	0	7		2	25
4	1K1a	21	7	7		2	25
4	1K1a	23	0	0	4	1	9
4	1K1a	30	0	0		2	22
4	1K1a	30	30	0		2	16

第395図 基礎データ表

縁部形態の類型は前述のように表す。アルファベットの前の頭の数字は器種・口縁類型を表す通し番号である。次に表の柱に a とある項は口縁端部に施された単位文様で、前述の記号表現。同様に b とある項は口縁部、c は口辺部の文様体である。次の項、点数は完形、破片の土器の点数の小計、遺存率は口縁部遺存率の小計である。

- ④ 前項の表はそのままパソコン（『抽出』、『分類』機能を持つワープロ）に入力し、データベースとする。
- b) 口縁（形態）類型、文様関連集計表・グラフの作成（付図 6）
- ① パソコンに入力した基礎データ全体より分析に必要な類型（口縁形態）、単位文様の『抽出』、『分類』を行いこれを集計して相互関連表、グラフを作成する。例えば（付図 6）No.1 甕 I a 類・III 類口縁端部 (a) →(b) 文様関連グラフの作成手順は以下のようなものである。
- ② 基礎資料（第 395 図）全体からの口縁形態が K I a 類であるものの『抽出』を行う。
- ③ 『抽出』されたデータを口縁端部文様の『分類』を行う。文様は前述のように数字記号に置き換えられている。『分類』の結果同一文様が“0”（無文），“7”（櫛描波状文）“30”（縄文）というように同一数字でまとめられる。更にこのまとめられた同一口縁端部文様群について口辺部文様についても同様の『分類』を行う。
- ④ 前項の結果、同一口縁端部文様を持つ資料群それぞれで、『分類』された口縁部文様ごとにその数量を集計する。その数量は口縁部遺存率の和で表す。そして集計した口縁部文様それぞれの割合を 100 分率で表し、これを積み上げグラフで示す。
- ⑤ 口辺部文様、及び頸部文様についても同様、同一口縁端部文様資料群のごとに出現する各単位文様の割合を 100 分率で表し、これを積み上げグラフで示す。
- ⑥ 前項において作成された個々のグラフ・表を同一口縁端部文様資料群による口縁部文様関連グラフ、口辺部文様関連グラフ、頸部文様関連グラフを縦に並べて 3 重線で結ぶ。
- ⑦ 3 重線で縦に結ばれたグラフを、古い順と思われる順序に左から右に横方向に並べる。各部位において文様の盛衰が漸進的で矛盾や混乱の無い推移になるように並べる。3 部位で合理的な矛盾の無い推移が見られたなら、前述した“組み列の平行性”を認めることができることから、そこに並べられた順序は正しく年代順であると言えよう。ただしこの方法では、系列の新旧方向の検証はできない。この判断は層位的把握がなされた同類型土器の例を参考にしなければならない。

#### 5) 分析の結果（付図 6）

- ◎ グラフ No.1 ではやや内湾する単純口縁を特徴とする甕 I a 類のうち口縁端部に文様を施すもの、及び口縁端部が小さく内側に折れる甕 III 類の内口縁端部に文様を持たないものを対象資料とし、口縁端部文様の変化と口縁部、口辺部、頸部文様の相関関係の推移を示している。

口縁端部文様は弥生中期後半から後期前葉にかけて盛行し、かつ時間的推移に最も鋭敏に変化することが見込まれることから、口縁端部の単位文様 5 種の内の各々による資料群を設定した。その資料群それぞれで口縁部、口辺部、頸部における各種単位文様の出現状況をグラフで現している。同一資料群における 3 部位の文様の状況を現すグラフが 3 重線で結ばれている。ここにおいてこれら口縁端部文様を軸とした資料群を図のような順序に並べると口縁部、口辺部、頸部の各々における単位文様の出現率が、グラフで示されるように漸進的に盛衰するか、あるいは変化が緩慢で微増、微減をたどる様子が見られる。このことからそれぞれの資料群はモンテリウスの“一括遺物”に見なすことができ、出現率の大きい単位文様は盛行期の同時性の高さを意味するという事などから、ここには系列の平行性を認めることができる。こ



れに層位的検討を勘案すればここに示した資料群、及び各部位における単位文様の盛衰が漸次左から右へ時間的に推移することが相互に検証されているといえるだろう。

単位文様の推移の様子については特に注意すべき点を以下に指摘したい。

- ① 口縁端部に押圧文、縄文を施す資料群と、細かい刻み目を施す資料群との間に比較的大きな変化が認められる。口縁部においてはここを境として縄文が急減し、その一方では櫛描波状文が急増する。
- ② 口縁、口辺部（b, c）では同じ時点で全面にわたっていっばいに櫛描波状文が施されるものが現れ、これが増加しはじめる。

頸部では櫛描直線文が急減するとともに、2連止め簾状文が出現し増加しはじめる。ただし口縁端部に押圧文が施されるグループは全体量が少ないことは考慮しておきたい。

- ③ III類については口縁部の櫛描波状文が著しく高くなるが、III類はI a類の系統よりもII類の系統の方に強いつながりを持っている。まず、I a類では口縁部に櫛描文を施す土器はIII類に比べると格段に少ない。II類においてはNo.2グラフに見られるように口縁部に櫛描波状文をもつ土器の量はIII類に匹敵するほどに多い上に、III類への推移が漸進的である。
- ◎ グラフNo.2は受け口状口縁を特徴とする甕II類についてNo.1と同様口縁端部文様を軸にして他の部位の単位文様の推移を示している。No.1と同じ順序の文様系列を認めることができる。ただし、甕II類は甕I a類に比べると全体量が少ないため口縁端部粗い刻み目、櫛描波状文などを持つ資料は少なく、正しい傾向が現れることが期待できないため省いている。頸部文様についても、頸部遺存破片が少なく各単位文様の推移傾向の現れかたは良好ではない。ただしここには、次の点が指摘できる。
- ① 櫛描直線文、2連止め簾状文の現れ方に甕I類と同様の傾向を認めることができる。
- ② 口縁部が無文の甕II類と甕III類は共に全体量が突出して多い。両者の間では頸部文様で、2連止め簾状文と等間隔簾状文の比率に格段の差が認められる。
- ◎ グラフNo.3では櫛描文を口縁、口辺部に施す資料を対象に、口縁部（形態）類型を軸にして他の部位における単位文様の推移を示している。弥生後期における文様体の推移傾向として口縁端部の施文が漸次減少傾向をたどり終末期では殆ど認められなくなる。この傾向についてはグラフNo.3、No.4に現れているが、このため後期後半を扱うに際しては口縁端部文様体を軸にするのは適切でない。そこでグラフNo.3では口縁、口辺部に櫛描波状文が出現する後期第2期～第3期の間を扱っている。ここでは限定された時間幅を持ち、しかも量的安定性をもつ、口縁（形態）類型を軸とした。甕I a、I b類については口縁端部文様の有無によりさらに細分した。ここではやや口縁部形態と文様体間に相互に関与しあうところが見られるが全体的には“組み列の平行性”を良好に示している。

口縁部形態と文様体が相互に関与するところとしては、甕III類の口縁端部文様体がほぼ失われているについては、口縁部文様体の幅が狭く施文が端部まで迫っているため、端部文様体の余地が無くなってしまっていることによる。甕II類、甕III類における口縁、口辺文様体は口縁部形態に強く規定されている。まずII類の場合口辺部文様体への施文が非常に少ない。これはこの部分が外反が強いいため、文様効果が低いためによるものであろう。外反の強い壺においては口辺部への文様が全くといえる程に行われないことと通じているだろう。

グラフNo.3における口縁部（形態）類型、単位文様の主な推移は以下のようである。

- ① II類も含めて器形全体にわたって口縁端部文様は時期が下るに従って漸次少なくなる。
- ② やや内湾するI a類よりやや外反するI b類の方が新しい傾向に有り、それぞれに有っても口縁端部に

文様を持つものよりももたないものの方がやや新しい傾向が窺える。これはⅠ類にあってもより古い段階ではⅡ類の系統を遺しているということだろう。

- ③ Ⅱ類からⅠa類、Ⅰb類と推移するに従って口縁部のみに波状文を持つものが大幅に減少し、口縁、口辺（a、b）全体に櫛描波状文を持つものがこれに替わって増大する。
- ④ 頸部文様はⅡ類においては等間隔止め簾状文が圧倒的に高い比率を占めているが、Ⅲ類になると等間隔止め簾状文と2連止め簾状文の頻度がほぼ同じになる。
- ⑤ Ⅰa類からⅠb類に推移するに従っては前項④にて指摘した口縁、口辺の波状文の推移と同様、等間隔止め簾状文が大幅に減少し、替わって2連止め、3連止め簾状文が増大する。特に3連止め簾状文の大幅増が注意される。

口辺部における櫛描波状文や頸部櫛描波状文は微増あるいは微減しているが前時期的に少数派として引き継がれるといえる。ただし口辺部のみに櫛描波状文を施すものについては存続期間は長い古い段階のもの新しい段階のものではだいぶ様子が異なる。古い段階では櫛描波状文が1条のみ、振幅が大きく施されるのが一般的である。新しい段階では口辺部一帯に幾段も全体的に施すのが普通である。後者は折り返し口縁のものに見られるのと同様である。

- ◎ グラフNo.4では甕Ⅰ類、甕Ⅵ類のうち口縁、口辺部に櫛描波状文を施すものを対象資料として口縁端部文様、頸部文様の推移を示している。口縁端部文様関連グラフは口縁端部に施された単位文様の推移を無文を除いた割合を示している。口縁（形態）類型を軸に口縁端部、頸部における単位文様の推移に平行性が良好に認められることからグラフNo.4にて示された系列は左から右に後出的現れが強まるといえる。本グラフにおいては以下の指摘ができる。

- ① 口縁端部文様の推移は、漸次施文が減少し、口縁、口辺部に櫛描波状文を一杯に施す折り返し口縁甕においてはこの部位には文様を殆ど施さない。
- ② 口縁端部文様は口縁端部文様グラフに見られるように細かい刻み目は減少。これに替わって粗い刻み目が増える。縄文も全体量は僅少だが減少をたどり、折り返し口縁甕では殆ど見ることはできない。
- ③ 頸部文様では口縁部のみに波状文を見るものは2連、3連止め簾状文よりも等間隔止め簾状文の方が大きな割合を占めているが、これが口縁、口辺部全体に櫛描波状文を施すものでは2連止め、3連止め簾状文が圧倒的に増大し口縁、口辺波状文のⅥ類では等間隔止め簾状文は小部分になり3連止め簾状文が大幅に増大する。
- ④ 頸部では弥生中期甕に盛行した櫛描直線文は口縁部櫛描波状文の土器では僅かに残存が見られるがⅥ類では見られなくなる。
- ⑤ 頸部において櫛描波状文は小幅な増減をたどりながら、頻度は低く、息長く存続する。

- ◎ グラフNo.5では断面三角形をなす折り返し口縁甕、Ⅳ類と幅広の折り返し口縁、Ⅵ類について各部位の文様変化を示している。グラフNo.5は壺を対象資料としたグラフNo.6と対照的な推移を見せている。これは壺と甕において相互に異なった文様を配することが定型化の進行した段階での有り方という推移の形をとっていることによる。

本グラフでは以下の指摘ができる。

- ① 口縁端部文様はⅥ類にて減少する。
- ② 口縁部文様は甕Ⅳ類でへら刻み目と櫛描波状文が同比率であるのが甕Ⅵ類では櫛描波状文が圧倒的に多数を占める。これは壺の推移と反対である。

- ◎ グラフNo.6では断面三角形をなす折り返し口縁の壺IV類、幅広の折り返し口縁をなす壺VI類、2～3段に折り返し口縁をなすV類を軸にして各部位の文様変化を示している。各部位とも単位文様は合理的な盛衰変化を示しており、相互に“組み列の平行性”が良好に認められる。後出的現れは左から右に増大する。本グラフでは以下のような指摘ができる。
- ① 口縁端部文様は粗い刻み目が圧倒的に多い。口縁端部への施文自体の頻度はIV類、VI類では変化を見ないがV類で大幅に減少する。
  - ② 口縁部文様ではIV類において櫛描波状文とへら刻み目文の比率は大差はないがこれがVI類でへら刻み目文が大幅に増大し、さらにV類ではへら刻み目文が圧倒的に大きな比率を占める。
  - ③ V類では口縁部が無文のものが少ないのが注意される。
  - ④ 刻み目文と櫛描波状文の折衷である両者を重ね合わせて施文するものはIV類、V類、VI類でそれぞれ35%前後であり変化がない。

### 3 土器類型の析出と定形化状況の検討（付図7）

#### 1) 分析内容

前項においては甕形土器を中心に口縁部形態、文様の相互関連、と共に弥生中期から後期後葉まで、その推移の有りかたを明らかにした。本項では壺、甕を対象として以下2項を分析の目的とする。

- a) どのような口縁形態、文様の組み合わせが存在するか、それが前項で明らかにされた口縁形態、文様の存続、盛行時期と各組み合わせ相互の近似性に従って、類型としてのまとまりを把握する。
- b) それぞれの類型はまとまりとしての側面とその一方では動態としての側面の2つ面を備えている。後者については、前段階の類型の属性を強く残す成長期、その類型の特徴が定形として確立し、口縁形態、文様の組み合わせのバラエティーが減じ、同じ組み合わせが突出する盛行期という推移を総体に認めることができる。これが弥生中期後半から後期後葉にかけていかなる展開をするか検討する。<sup>(5)</sup>

#### 2) 分析方法

前項において対象資料としたと同じ大溝出土土器の基礎データに基づき以下の方法で分析を行う。

- a) 口縁部（形態）類型と口縁端部(a)、口縁部(b)、口辺部(c)文様の組み合わせの総てを摘出し、それぞれの出現頻度を口縁部遺存率で表す。口縁部類型、各部位単位文様の時期的位置、近似性、出現頻度に基づき類型としてのまとまりに配列する。近似性の認識は系統的関係の強さを基軸にする。
- b) 各類型としてのまとまりのうちを更に前述の内的推移にしたがって順序づける。
- c) 口縁部（形態）類型が相互に別系統の系列を示す場合はそれぞれ系列を並列にレイアウトして示す。しかし同一口縁部類型内での文様相互の関係は系列的、あるいは並列的の関係にあるが、いずれの場合にあってもグラフを1列配列で示す。
- d) 各口縁（形態）類型ごとにローマ数字、大文字アルファベットで類型名称を付す。類型内の推移段階を小区分し、これにはアラビア数字を付す。
- e) 口縁（形態）類型および文様相互の組み合わせバラエティーの多少、出現頻度の突出性の大小を分析する。これは類型としての定形度の高さの検討である。
- f) 口縁（形態）類型、文様相互の組み合わせの数は付図7に示すように壺、甕を合わせて226通り以上である。
- g) 口縁（形態）類型はI類～VI類の6つの類型がある。それぞれの類型は限定された時期幅で出現する、

## 8 考 察

I類は形態的に単純であるため、口縁～口辺部に文様が施されていないものは全時期的に存在している。この種の弥生土器は出土土器中出土量は最も多いが頸部欠損であると時期を特定できない。付図7ではグラフにより、総量のみを示す。

- h) 本分析の限界として頸部以下の文様については頸部遺存破片が少ないことから分析項目に取り上げていない。このため頸部文様に特徴もつ類型があっても上記のグラフに示すのみで類型に現れて来ない。

### 3) 分析結果

#### I-A類

I-A類は口縁端部～口辺部へ押圧文、あるいは縄文、沈線波状文、沈線鋸歯文などの施文を特徴とするもので時期的には弥生中期後半に位置する。本類は、系統、系列的にI-A<sub>1</sub>～I-A<sub>3</sub>類に細分できる。

I-A<sub>1</sub>は指頭押圧文(23)を中心的に施文するものである。縄文間で幾つかの組み合わせのバラエティーを持ち、数量的にも安定した状態を見るが同一文様への出現頻度の集中が見られないことから類型として定形化が確立する状態は見ない。

I-A<sub>2</sub>は縄文(30)を施すものであり。口縁端部に縄文(30)を口縁部は無文のものが壺形、甕形とも出現頻度が際立って多い。ことからここに類型としての定形化の高まりが認められる。

I-A<sub>2</sub>類はII-A<sub>1</sub>類に対応し、両類型は同一の土器組成を構成するものである。

I-A<sub>3</sub>類は後出類型で盛行する文様が見られるもので後出類型への動きを示すものである。口縁端部に縄文(30)を施しながらも口縁部、あるいは口辺部に櫛描波状文を持つもの、あるいは口縁部に縄文(30)を施しながらも口縁端部に細かい刻み目を持つものなどである。これに類するものの出現頻度は著しく少ない。また本グラフには示されていないが本類型を前後して壺形土器の頸部に平行沈線を多数状施す、あるいはその間に沈線鋸歯文を数段施す、または平行沈線、沈線鋸歯文の多数状化に伴い2本1単位に施文する手法が目立って見られるようになる。これはI-A<sub>2</sub>類段階で壺は沈線により飾り、甕はこれを行わず専ら櫛描文を施すというI-A<sub>2</sub>類で定形として確立した特徴の崩壊とそのバリエーションの生成と認められる。

#### I-B類

I-B類は施文される文様が多様で施文部位、単位文様の組み合わせがバラエティーに富み、それぞれの出現頻度が極めて少ない類型である。無節縄文(36)を主な文様とするものと、刺突文(24)を主な文様とするものとして、B<sub>1</sub>～B<sub>2</sub>類に細分できる。B<sub>1</sub>類とB<sub>2</sub>類は系列的な関係など不鮮明である。I-B類はII-B類に対応する。類型としての安定性はなく土器様式が未確立の段階における現れと思われる。

#### I-C類

口縁端部に細かい刻み目(20)、粗い刻み目(21)を施すことを特徴とする類型である。前者をC<sub>1</sub>類、後者をC<sub>2</sub>類とする。両者の関係は系統的には細かい刻み目から粗い刻み目へと新しくなる傾向を見るが両者の現れ方には他の文様との組み合わせの有り方などは近似しており、盛行期の時期差は少なく相互に密接した関係にあると思われる。しかし細かい刻み目は施文自体が特異で著しく入念さを必要とする文様であり、これが見られる土器には器形、伴う文様のバラエティーが少なく、限られた範囲で多出する。これに対し粗い刻み目は細かい刻み目に比べ入念さを要しない文様であり、盛行段階での有り方は前述のように細かい刻み目の有り方と近似するが、細かい刻み目の方が短時期で姿を消してしまうのに対して粗い刻み目は他の文様との共伴の範囲が広く、後出類型へ受け継がれていく。I-C類は盛行段階では口縁、口辺部が無文のものに集中し、ここに類型としての定形化の頂点がみとめられる。

又、I-C類の萌芽段階(I-A<sub>3</sub>類)ではI-A類において特徴的な縄文や、沈線文との共伴例も見られ、

口縁端部文様の頻度の高さなど系列的な連続性を窺うことができる。また同時に I-C 類の成長期段階では本グラフでは示されていないが壺形土器の頸部文様としてへら描きによる斜格子文 (18b)、羽状文 (18a) を施し、胴上部櫛描波状文の下段にへら描き鋸歯文 (12) を施す類がこの段階の壺形土器の一部を構成する。この文様が見られる段階では文様構成が多様でいわゆる典型的でないものが目立ち、定形化が十分進行していない状態が窺われる。例えばこのことは、付図 7 中、口縁端部は細かい刻み目で、口縁部にへら描斜格子文 (18b) を、又 I-C 類に対応する受け口状口縁の II-C 類においても口縁部にへら描斜格子文 (18b)、あるいはへら描鋸歯文 (12a)、口縁部の裏側に櫛描波状文、胴上部波状文の下段に等間隔簾状文を施すなど施文部位と文様構成に様々な“意匠”が見られるということに表現されている。なおこのへら描き沈線による施文手法は I-C 類の盛行段階にはほぼ失われると見られる。I-C 類は II-C 類に対応する。

#### I-D 類

口縁端部に櫛描文を施すことを特徴とする。櫛描文の内でも波状文がその殆どを占めている。本類は全体に数量は少なく同一土器組成内では少数部分を構成したと考えられる。系列的な位置については III 類とのかかわりが深い。III 類は系列的には II 類につながると思われるが、III 類中には櫛描波状が施される口縁部(b)の文様帯が口縁端部(a)文様帯と峻別に困難を生じる程に接近するものがある。I-D 類は口縁形態上は I 類の系列であるが III 類に先行し、III 類と密接な関連をもった類型と思われる。

#### I-E 類

本類は、口縁端部は無文であり、口縁、口辺部文様に櫛描波状文が施されているのを特徴とする。口縁部に刻み目 (21) を見るものなどあるが微少である。盛行期の有り方から E<sub>1</sub>~E<sub>3</sub> 類に細分される。

I-E<sub>1</sub> 類は比較的古い段階に定形化が見られ、口縁部(b)に波状文 (7) を見るものである。これは E<sub>3</sub> 類よりも一段階先行する。系列的には、口縁部がやや内湾する傾向があり、受け口状口縁を特徴とする II-C 類から漸進的器形変化により本類が生じると見られる。III 類も II 類からの系統と考えられるが、これとの関係については頸部文様に等間隔止め簾状文の出現比率が多いことなど III 類よりも I-E<sub>1</sub> 類の方が文様要素に前出傾向が強い。

I-E<sub>3</sub> 類は甕形土器において口縁部(b)、口辺部(c)全体に櫛描波状文 (7) をみるものであるが、これが数量的には著しい多さを見せている。このような数量的集中、定形化の著しい進行には、高度に隆盛期に達した文化的背景に基づく土器様式の確立が考えられる。

I-E<sub>3</sub> 類は幅広い折返し口縁を特徴とする VI 類に同一組成として対応すると思われる。VI 類との間には文様構成の共通性とともな数量的集中、定形化の著しい進行といった同一土器様式としての斉一性の表れが認められる。

#### II-A 類

本類は受け口状口縁で、口縁端部に縄文、あるいは口縁~口辺部にかけて縄文、沈線波状文、沈線鋸歯文などの施文を特徴とするもので時期的には弥生中期後半に位置する。本類は定形段階の II-A<sub>1</sub> 類とこれに続く後出段階の文様要素が介在する II-A<sub>2</sub> 類に細分できる。

II-A<sub>1</sub> 類は口縁端部に縄文 (30)、あるいは口縁部に沈線波状文 (17)、沈線鋸歯文 (19)、縄文を施すなどを特徴とする。口縁端部には縄文を付すものが特に高い頻度で認められ、口縁部文様も壺、甕とも文様が上記の文様、および縄文を地文とする単位文様の組み合わせにほとんどが限られており、このうちの一部分に数量的に集中するといった傾向は見られないが、資料の全体量が少ないながらも総じて出土量にピークが認められる。本類と同一組成として、時期的に並行関係にあると思われるのは I-A<sub>2</sub> 類である。I-A<sub>2</sub> 類とは口

縁端部に縄文を施すものの頻度の高さが共通している。しかし類型の数量的表れは前者が一部突出型であるのにならして後者は前述のとおり幾つかの口縁部文様が総体として緩いピークを見せている。

II-A<sub>2</sub>類はII-A<sub>1</sub>類の特徴を備えながらも口縁端部に細かい刻み目文や甕の口縁部に櫛描波状文など後出類型において盛行する文様が見られるものである。また櫛描手法による2本1単位の沈線波状文、鋸歯文などを口縁部や頸部に付す。数量的にはII-A<sub>1</sub>類に比べ出現頻度は少ない。本類型はI-A<sub>3</sub>類と同様な様相が認められることから、I-A<sub>2</sub>類、II-A<sub>1</sub>類を様式推移の確立期とし、II-A<sub>2</sub>類、I-A<sub>3</sub>類はこの同系列上に画期を形成する変容類型と理解できる。

### II-B類

本類は受け口状口縁で、口縁端部～口辺部に刺突文(24)、無節縄文(36)を付すのを特徴とするものである。本類はI-B類に対応すると思われる。文様の共通性や、文様の要素とその組み合わせのパラエティーの多さに対して数量的に僅少であることなど、相共通している。類型としての安定性は無く、土器様式の未確立期における一つの表れと思われる。

### II-C類

本類は受け口状口縁で、口縁部櫛描文、口縁端部櫛描文、刻み目文などの文様を特徴とするもので弥生後期前葉期における受け口状口縁(II類)土器の隆盛期、および終息期の類型である。本類は口縁端部に細かい刻み目(20)を持つもの、粗い刻み目(21)をもつもの、櫛描波状文(7)、無文のものなどにより、C<sub>1</sub>～C<sub>3</sub>類に細分できる。これら文様は時間的推移に比較的鋭敏に消長することが前項の文様分析により確かめられていることから、C<sub>1</sub>～C<sub>3</sub>類の細分類型それぞれの関係は時間的に並行(オーバーラップ)しながらもC<sub>1</sub>→C<sub>3</sub>類へ推移があったと思われる。ただしII-C<sub>3</sub>類(無文)には中期に属するものが小部分であるが含んでいると思われる。

本類型の様式上の位置、推移のありかたは本類に同一組成として対応すると思われるI-C類、および本類に後続類型として系列的につながるとと思われる、口縁形状がやや内湾し、口縁部に櫛描波状文を付すことを特徴とするI-E<sub>1</sub>類、口縁端部が短く内側に折れ込む口縁形状を特徴とするIII類との関係のなかで検討しなければならない。II-C類における数量的な集中箇所はC<sub>1</sub>～C<sub>3</sub>類を通じて口縁櫛描波状文、ついで無文の壺形土器に見られる。そのうちでも口縁端部が無文、あるいは無文の壺形土器に数量的突出が見られる。同時に口縁端部に刻み目を付すのを特徴とするI-C類では口縁部が無文のものに数量的集中があり、甕形土器においてはI-E<sub>1</sub>類に数量的集中が見られる。ただしI類とII類の間には壺、甕の数量比においてII類に壺が多く、I類はその反対である、相互に相反する現れかたが見られる。これは相互に一つの組成を構成した可能性をしめすものであるが、このことについては、多数の出土を見るが、時期の特定ができない口縁部無文土器の存在を考慮しなければならない。これら類型間における組成、系列関係は以下のような図式が考えられる。{(I-C<sub>1</sub>類・II-C<sub>1</sub>類)→(I-C<sub>2</sub>類・II-C<sub>2</sub>類)}→(II-C<sub>3</sub>類→I-E<sub>1</sub>類・III類)

受け口状口縁土器(II類)はI-E<sub>1</sub>類・III類の生成段階までには終息を見るようである。この移行過程は突発的ではなく、形態変化に自然な流れが認められる一方ではIII類への移行は土器様式的推移からすると大きな飛躍が認められる。

### III類

本類は口縁端部が短く内側に跳ね返るように屈折する口縁部形態を呈することを特徴とする。特異な口縁形状を呈し、壺形土器は非常に少ない。ほとんど甕形土器である。全体数量は多く、文様の種類、組み合わせのパラエティーは多いが、数量的には一部に集中しており、定形化の高まりは著しい。前出類型において

盛行する細かい刻み目などが僅少部分に見られる。等間隔止め簾状文と2連止め簾状文が相半ばしているなど、口縁部形態、文様要素は後葉期類型と前葉期類型との中間的あり方を示している。系列的につながりが認められる前段階の類型はII-C<sub>3</sub>類と思われるが、これは壺形土器が大半を占めており器種構成に大きな隔りがある。この移行過程における器種構成の大きな変化はこの段階で加わった新たな要素、折り返し口縁土器の出現と関わりがあると考えられる。この移行は土器様式上の大きな飛躍である。本類に同一組成として対応する類型はI-D類、I-E<sub>1</sub>類の他、断面三角形の折り返し口縁を特徴とするIV類が本類に対応すると思われる。このことについては文様あるいは様式上の位置や推移のあり方からある程度窺うことができる。しかしこの面からの対応関係の根拠としては、一部に施文される口縁端部文様の共通性、口縁部への櫛描波状文の盛行、限られた文様、組み合わせに数量的集中が認められる。著しい定形化の高まりをみる後期後葉期の様式確立期の前段階に位置するなどであるが、この面からの同一組成としての根拠付けはなお充分なものとはいえない。他の面からでは、一括出土遺物における共伴関係で確かめられている。このことに関しては遺構内共伴からの検討として別に項を設けて詳述する。

#### IV類

本類は断面形状が三角形の折り返し口縁を作ることを特徴とする。器種構成は壺形土器が大半を占めており、同じく折り返し口縁を特徴とするVI類に比べると出土量は少なく、文様の種類と、その組み合わせのパラエティーは比較的多い。限定された部分への数量的な集中は高くはないが認められる。口縁部文様は櫛描波状文、へら刻み目文、無文のものが全体量の内の大多数を占めている。VI類に比べると定形化への高まりは弱い。VI類では櫛描波状文、へら刻み目文が甕、壺に使い分けられて施文されるようになるが本類ではまだ両文様が壺、甕の区別なく施されており、未整理、未分化な状態が見られる。前出類型との関連要素としては、僅少ではあるが口縁端部に細かい刻み目を施すもの、口縁部に等間隔簾状文を施すといったものも見ることができる。本類は折り返し口縁が出現し、その初期の段階に位置する。同一組成としてIII類が対応すると思われる。

#### VI類

本類は幅広の折り返し口縁を特徴とするものである。口縁部文様によりVI-A類、VI-B類に区分できる両類は系統的には直接関連を持たないと思われる。

VI-A類は折り返し口縁を特徴とするところはVI-B類に類似するが口縁を中心に縄文(30)、押圧文(23)などを見るものがあるが、これらは弥生中期、あるいは後期終末期の赤井戸式、あるいは吉ヶ谷式に該当するものでありVI-B類とは系統的なつながりは直接にない。

VI-B類は幅広の折り返し口縁を特徴とする。文様とその組み合わせのパラエティーは全体数量の多さに比べると著しく少ない。なおその上に限られた部分への数量的集中は極めて高い。特に甕形土器において、口縁から口辺部にかけて全面に櫛描波状文を施すものに数量的突出状態が見られる。また口縁部文様について、壺はへら刻み(21)、甕は櫛描波状文(7)といったような器種による文様の使い分けが認められる。これには定形化が著しく高まった土器様式の確立した状況を見ることができる。本類は系統的にIV類に後続し、漸進的にこれにつながるとされる。同一組成として対応する類型はI-E<sub>3</sub>類であろう。両類型間にあっては文様上、様式的表れ方に強い共通性が認められる。口縁端部文様の施文頻度はI-E<sub>3</sub>類、VI-B類、両者共に極めて低い。口縁部～口辺部文様は櫛描波状文を全面に施すものに数量的集中がある。定形化の高まりはこれまでにない著しいものがある。様式の確立期に当たり、そこには爛熟した文化的背景が窺われる。

## V類

本類は2段以上の段状口縁を作ることを特徴としている。器種構成については甕形土器はほとんど見ない。壺形のみである。器種がほぼ壺に限られることに関わると思われるが、装飾意識が高い。2段あるいは3段、4段と作られるものもある。また口縁～胴上半部にかけて丹彩が施されるものも多い。本類の全体的数量は少ない。口縁部にヘラ刻み目を施すものに数量的集中が見られ、これが定形化段階の特徴の表れと思われる。類型としての安定は認められる。時期的にはI-E<sub>3</sub>類、VI-B類に並行する。口縁形状、文様上、様式的表れ方に共通性がみられる。ただし口縁端部文様の頻度がより僅少であること、口縁部文様において壺にはヘラによる刻み目文(21)、甕には櫛描波状文(7)という施文規範がより徹底していることなどからI-E<sub>3</sub>類、VI-B類よりも後出要素が多いと認められる。

## 4 層位的検討

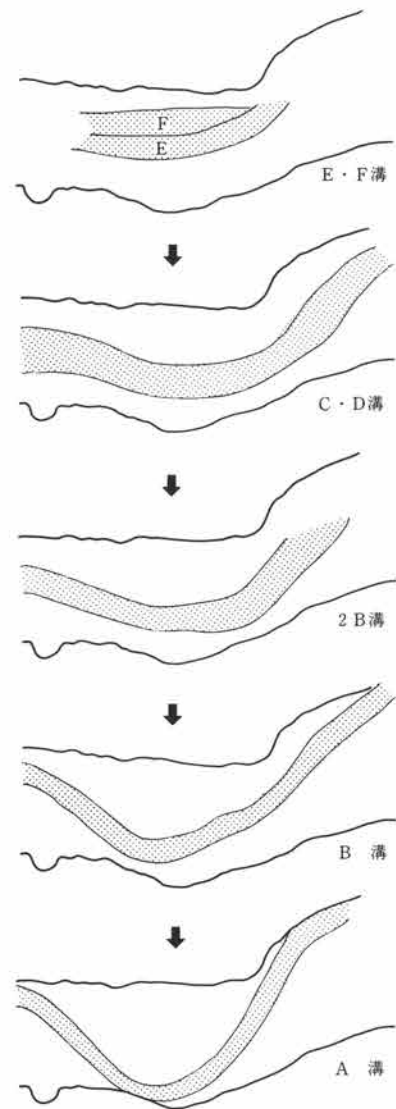
前項の土器分析では大溝出土土器を対象資料とし、土器それぞれの出土層位に関わりなく一括的に取り上げ、口縁(形態)類型、文様の相互関連分析による、口縁形態、文様の推移状況、口縁形態文様の組み合わせ頻度に基づく類型の抽出、その系統的、様式的推移について検討を試みた。この項では前項で設定された類型の年代的系列を出土層位に基づき検証を試みたい。

層位的検討は2方向から行う。第1の方法は発掘調査により、確認された層位に基づいて土器の類型の相対的年代関係を検討する。第2の方法は住居跡などの遺構において共伴した土器群に基づき並行する系列を異にする類型間、器種を異にする類型間の並行関係の検討を試みたい。後者は次項で取り上げる。

新保遺跡大溝は遺跡中央部を貫く旧河道で、弥生中期後半から古墳前期にかけて小流路が漸次流路変遷する過程で形成された。この変遷過程で小流路は旧流路の覆土を侵食し、あるいは土層堆積作用を重ねてきた。この過程で周囲から生活廃棄物の投棄が不断に続き、各時期の小流路の覆土中からは膨大な土器、木製遺物が出土している。発掘調査時小流路(土層)を7時期に分離、抽出し、出土遺物はこれに基づき整理されている。(第396図)

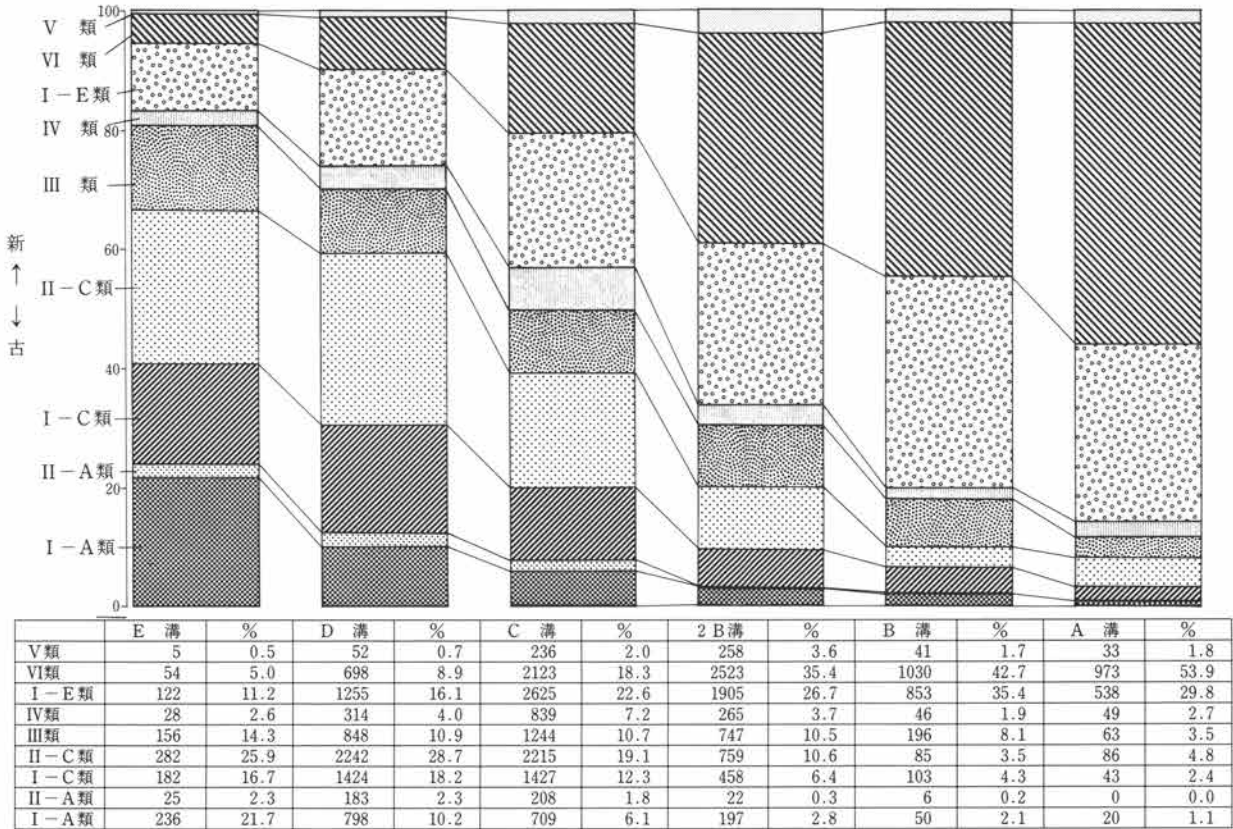
第397図のグラフは前項で抽出した土器類型を6時期にわたって小流路別にそれぞれの出現頻度を示したものである。グラフの示すところを以下に指摘しておく。

- 1) 6時期にわたる溝は自然流路であるために旧流路の侵食を伴いながら堆積が進行している。このため各時期の溝覆土中には前時期の溝の覆土包含遺物の混入が当然考えられる。また、この他、流路の堆積状況は複雑で発掘調査での各時期の流路覆土の峻別は遺構覆土の場合に比べ明確さを欠く。このことによる混入も考慮しなければならない。グラフにおいてここに取り上げられた土器類型が全時期の溝にわたって見られることは上記の事情によるものと思われる。



第396図 大溝内流路変遷





(単位：遺存率) 上記の溝は大溝内を変遷する小流路で、E溝からA溝への変遷が層位的に把握されている。ただし自然流路であるため堆積と侵蝕作用により、出土遺物は溝相互間である程度の混入が生じている。各小流路の時期は、E溝、弥生中期後半～後期初頭、D溝、C溝は弥生後期前半の“古”及び“新”で2B溝は弥生後期後半、B溝、A溝は古墳前期の“古”及び“新”に各々該当すると思われる。本グラフでは、I-E類のうち時期幅の長い“0-0-7”は除外した。

第397図 大溝出土土器類型、溝別出土数量の推移

- 上記のグラフでは溝ごとに類型土器の出現頻度を帯グラフに示している。グラフの配列は左端部がE溝で、中期末葉から後期初頭、右端がA溝で古墳前期の段階の流路である。グラフは左から右へ順次新しい段階の溝になるよう配置した。溝の順序は発掘調査時層位の検討により把握されたものである。B溝、A溝は古墳時代前期に該当し、共に覆土中からは古式土師器が多量に出土しているが本グラフでは弥生土器のみを検討の対象としているため古式土師器は取り上げられていない。
- 上記の土器類型は前項の口縁形態、文様分析によって型式的系列関係が得られている。これに基づきグラフでは下から上方に新しい時期の類型となるように配置している。ただしI-A類、II-A類は系列を異にし、同一組成を構成する関係にあると思われるものである。I-C類とII-C類も同様な関係にあり、III類とIV類、およびI-E類とVI類とV類も時期的に共存する部分の大きいと認められるものである。
- 以下、グラフに現れた結果について指摘したい。

- ① 沈線文、縄文を特徴とするI-A類はE溝では21.7%であるに対して溝が後出になるに従って漸次減少しA溝では1.1%になる。
- ② 口縁端部に刻み目を施すことを特徴とするI-C類と受け口状口縁、櫛描文を特徴とするII-C類はD溝で最も出現頻度が高くI-C類は18.2%、II-C類は28.7%、これが溝が後出になるに従って漸次減少し、A溝ではそれぞれ2.4%、4.8%となる。
- ③ 上記②の反対に、最も新しい段階の類型であるVI類ではE溝は5.0%、これが溝が新しくなるほど漸次

増加し、A溝では53.9%になる。I-E類も同様の傾向が有り。E溝で11.2%、これが漸次増加し、B溝で最高値となる。V類はE溝で最も少なく、2B溝で最高値となる。

- ④ III類、IV類は全体的に増減は横這い傾向で、III類は微減、IV類はC溝で最高値を示し、前後へ漸次微減傾向をたどる。数量では両者C溝でピークが明瞭である。
- 5) 前項においては口縁部(形態)類型、文様相互関連分析結果に従って土器類型の抽出とその系列を設定した。この項では前項で設定された類型系列を発掘調査時点で把握することができた層序(累重する溝)からの出土傾向と対照した結果、この間に整合性を確認することができた。

## 5 遺構内共伴からの検討(付図8)

1) 新保遺跡においては弥生期の土器を出土する遺構は住居跡を中心に土壇、溝、周溝墓など多数検出されている。これら遺構覆土内より出土した土器は完形、あるいは半完形個体が複数個、床面直上出土など、共伴と見られる状態で出土している例も少なくない。本項ではこれらの共伴土器に基づき以下の事柄について検討を加えたい。

- ① 系列を異にする土器の共伴出土状況。
- ② 器種を異にする土器の共伴出土状況。

2) 付図8は遺構共伴出土土器を整理、図示したものである。図では新保遺跡出土土器を掲げているが、一部で近隣する他遺跡の資料を援用している。

新保遺跡遺構出土土器資料は住居跡、土壇、溝など含めて百数十箇所に及ぶ、これについては本文中において各遺構ごとに掲載している。これら遺構出土土器の内容は時期的にはほぼ断絶なく順序だった推移を認めることができる。しかし、遺構覆土中で完形、半完形、あるいは大形破片による良好な共伴関係を把握できた土器群となるとずっと少ない。異なる器種、系列を異にする土器、系譜を異にする土器相互の共伴例は部分的に良好な状態に恵まれない。このため新保遺跡出土土器のみによって検討、検証することはできない。付図8「遺構共伴出土土器一覧」では良好な共伴例に恵まれない弥生中期後半第2期、後期第2期の土器については新保遺跡北方8kmに所在する前橋市清里庚申塚遺跡<sup>(5)</sup>、西方4kmに所在する群馬郡熊野堂遺跡<sup>(6)</sup>、同、井出村東遺跡<sup>(7)</sup>出土土器に良好な共伴例があるのでこの資料を援用、掲載した。

3) 「遺構共伴出土土器一覧」は壺、甕を主に器種、異系列、異系統土器の共伴関係を横列に示し、それぞれの系列を縦列に示している。なお、一覧では器種、器形の構成(土器セット全体)を検討することを主たる目的としていない。共伴資料の制約から土器構成を網羅的に示していない。

4) 共伴土器出土遺構の重複関係から共伴土器相互の時期の先後関係についての検討はここでは行わない。それは図示した共伴土器出土遺構同士の直接重複関係がないこともあるが、同時に前項の型的、層位的検討の整合性により、本項で取り上げる類型の先後関係は一応必要な検証を得たものとする。

### 5) 検討結果

**弥生中期後半第1期** 新保遺跡例は住居共伴5例。清里庚申塚遺跡の例を掲載した。新保遺跡の例はそれぞれ良好な組成を示すが、後期とのつながりを示す段階(中期後半第2期)の遺構共伴例が見られないため清里庚申塚例をもって補った。この段階の例は新保遺跡においても遺構に伴わないが少なからず出土している。新保遺跡の住居出土の資料ではこの間に顕著な型式的変化は認められない。

口縁形態は壺、甕とも外反するタイプ(I-A類)と受け口状を示すタイプ(II-A類)、例は少ないが折り返しのタイプ(VI-A類)の3タイプがあって、それぞれ文様は壺、甕とも共通して口縁端部(a)に縄文を

巡らし、II-A類で口縁縄文地文に沈線波状、鋸歯文を施すのを普通とする。(83号、114号住居)

頸部は、壺は縄文地文に沈線文を基調とし、へらによる太目の平行沈線(173号、137号住居)、刺突列、無文で段を作る(162号住居)。甕は櫛描文により、頸部平行直線、等間隔止め簾状文、波状文などである。

胴部は、壺は沈線懸垂区画文(83号住居)、縄文地文重連弧文(173号住居)などで、甕は胴部櫛描斜格子文、櫛描斜行直線文、沈線コの字重ね文(114号住居)などが見られる。

上記の文様構成からなるI-A類、II-A類、VI-A類の5軒の住居内伴出状況は全体的に各伴出土器群間に時間的、系列的な推移の表れを殆ど見いだせない、それぞれの伴出土器群相互の間に複数の系列で同一類型土器を見ることができる。I-A類の甕で口縁端部縄文、胴部櫛描斜格子文、あるいは櫛描斜行直線文の土器は173号住居を除く4住居で見られ。頸部縄文、または縄文地文に沈線文の土器は2住居で、胴部重連弧文は3住居で同様にみられる。ただし137号住居の壺は頸部に縄文地文が見られず、162号住居のI-A類壺の頸部は無文の段のみで、II-A類の壺も口縁部の地文は撚糸文である。文様推移の方向が縄文地文の消失を後出的現れとする点から見るとこの2住居より173号住居に古い表れかたを見る。しかし5軒の住居の伴出土器は同一組成をなし得る様式群であろう。

文様共伴について、注意されるのは83号住居壺の懸垂区画文の存在であるが、壺の肩部に沈線区画とこれに沿う楕円刺突区画内には縦位の沈線鋸歯文と櫛描直線を付す。また、同じ83号住居の別個体の胴部小破片であるが沈線による重連弧文を巡らしている。この壺は胴部全体に文様を繁縟に付す類で173号住居や137号住居にもこの類を見る。173号住居、137号住居では文様体が頸部にのみ付される類と伴出する。器面全体に文様が付される類は長野県地方では栗林I～II式段階において高い頻度で見られる。しかし群馬県では類例は少ない。長野県地域では栗林式、百瀬式における文様推移では器面全体から頸部文様体に集約する推移方向が見られることから<sup>(8)</sup>、前者が型的には古式と考えられているが、地域差の問題もあるようである。両者の伴出例も認められる。長野市水内坐一元神社遺跡4号住居、長野市篠ノ井遺跡群10号住居、松本市県町遺跡24号住居など、その例である。群馬県では良好な伴出例はないが、富岡市小塚遺跡8号住居の一括出土土器に類似した土器組成が認められる。<sup>(9)</sup>

なお114号、137号住居に縄文地文沈線工字文など、弥生中期前半の文様意匠を強く遺す土器が伴出している。

**中期後半第2期** この段階の土器の良好な遺構伴出例は新保遺跡においては見られない。この段階にあると見られる土器は壺、甕とも遺構に伴わない出土例は、完形、破片を含め多くはないが見られる。付図8では清里庚申塚遺跡に良好な伴出例があるのでこの資料を掲載した。壺は口縁部形態は大きく広がるものと、受け口を呈するものがある。文様部位は頸部(d)、受け口状をなすものは口縁部(b)に集約され前出類型に見るように胴下半部まで文様体は広がらないが、一部に退化した懸垂文などを見る。文様は沈線、または2条一単位に施文される平行沈線により、数条の波状文、平行線文あるいは両者を交互に組み合わせた文様を持つ。この段階における文様の特徴は壺は沈線文を基調としているが施文意識が櫛描文の施文効果への志向の傾きが見られる。平行沈線の多条化、2条一単位の施文、縄文地文の消失などにそれが見られる。口縁端部は縄文から刻み目を巡らすものが多くなる。この刻み目は後期第1期段階で益々盛んになる。ただしこの段階の壺は沈線基調にありながらも櫛描文基調への移行段階でもあるため施文部位、文様に定形に欠けるものも目立つ。清里庚申塚遺跡のII-C<sub>3</sub>類の甕は胴部に数条の簾状文、波状文をみるがこれはそうした表れとみることができる。この他の当期の遺構内共伴例としては近隣遺跡では他に、高崎市浜尻遺跡Y1号住居<sup>(10)</sup>、渋川市中村遺跡1号住居<sup>(11)</sup>などが挙げられる。

**後期第1期** 76号溝中に伴出した土器群中には前段階の色彩を強く遺す土器が見られる。76号溝は、遺構

の性格が明確ではない。遺構は黒色土（第IV層）中に造られていたため形状の把握は明確ではない。出土土器は壺が多く、甕は1個体のみである。壺はI-C類、II-C類の特徴要素である櫛描文様が主流になりながらも、一方では沈線文、縄文などI-A類、II-A類の特徴要素を備えている。口縁端部縄文+頸部等間隔簾状文を付す過渡期的様相の濃い壺(3)、頸部に2本1単位の沈線波状文を付す中期後半第2期の特徴を持つ壺(1)など見ることができる。2本1単位の沈線文様は弥生中期終末に、壺の文様の基調が沈線から櫛描文に移行する前段階に受け口状の口縁部、壺の頸部文様に多く見られる。

甕は頸部等間隔止め簾状文、口辺部から肩部にかけて櫛状具の刺突による疑似縄文を施す。76号溝出土土器群の有り方は中期後半第2期から後期第1期への過渡期的な現れと見られる。

後期第1期はI-C類、II-C類を主とする段階であり、この段階では壺、甕共に櫛描文を基調とする。

壺の文様は櫛描文を基調とする一方、へら描き手法による細沈線文様が出現する。123号住居壺は頸部櫛描直線文に縦のへら沈線文。他の壺は等間隔簾状文下にへら描き斜格子文さらにその下位にもへらによる鋸歯文。区画内にはへらによる斜行沈線を充填する。118号住居の土器群は、壺は口縁端部に細い刻み目文、頸部に2段の等間隔止め簾状文を付す（I-C<sub>1</sub>類）。甕は著しく胴部が張り胴部文様は櫛描斜行直線文を施す。

112号住居II-C<sub>3</sub>類壺はやや受け口状をなす口縁部に櫛描波状文を付し、甕は受け口状口縁、口縁部は無文、頸部は等間隔止め簾状文。小型壺は胴部で3条の平行沈線と櫛描波状文を施し、前段階の意匠を強く遺している。

甕では櫛描文により施文され、へら描沈線による文様は殆ど見ない。胴部に中期後半に盛行した櫛描斜行直線文が見られる。

近隣遺跡における当期の遺構共伴土器の主な例では高崎市鈴ノ宮遺跡12号住居<sup>(12)</sup>、同元島名遺跡1号住居<sup>(13)</sup>、上大類北宅地遺跡A1号住居<sup>(14)</sup>、群馬郡国分中間地域遺跡<sup>(15)</sup>などに好例を見ることができる。

**後期第2期** 壺は断面三角の折り返し口縁、IV類が主体的である。折り返し部にはへら刻み、または櫛描波状文を施す。壺III類は僅少である。文様では肩部に鋸歯文を付す例が熊野堂遺跡で見られるがこの段階以後へら描き鋸歯文は群馬県地域では一部の地域を除き殆ど姿を消す。

甕は口縁端部が短く内側に折れ込むIII類を主体とする。

台付甕は甕と同じくIII類を主体とする。

近隣遺跡における当期の遺構内共伴土器例は上記の他、高崎市引間遺跡79号住居<sup>(16)</sup>、同雨壺遺跡90号住居<sup>(17)</sup>などが挙げられる。特に引間遺跡50号住居の例は折り返し口縁を持った甕が主体的であり当期の後出的様相を見ることができる。

**後期第3期** 薄手で幅広の折り返し口縁（VI類）が壺、甕に高い頻度で見られる。壺では折り返し口縁にへら刻み(21)を巡らすのが主体的である。

甕では折り返し部に櫛描波状文を施すものを主体とする。甕では折り返し、単純口縁が半ばの割合で見られるが、共に口縁、口辺部全体に櫛描波状文を付すものが圧倒的に多い。281号住居のように無文折り返し口縁も比較的高い頻度で見られるが、単純口縁土器の内にも無文のものが相当の割合を占めている。

台付甕では器体は甕に比べて著しく小さいものが普通であるが、一部に甕と同様の口径を持つものも少なくない。単純口縁が一般的で、折り返し口縁を持つものは僅少である。

なおV類については完形個体、あるいは大形破片による共伴例に乏しい。一覧図には示していないが158号住居、159号住居出土土器群中に認められる。当期に至ると共伴土器例は近隣遺跡でも豊富になる。V類の共伴例は北橋村分郷八崎遺跡<sup>(18)</sup>、渋川市有馬遺跡<sup>(19)</sup>6号周溝墓などに見ることができる。

## 6 出土土器の様式区分と各期特徴

前記土器分析の結果大溝出土弥生土器に様式的展開として第309表に示すような5期を認めることができる。各期の主な特徴は表中に示すとおりである。

5期のそれぞれの特徴は309表にしめす口縁、文様にみる個々の特徴(斉一性が個別へ現象する)のほか、斉一性の土器組成全体への現れとして各期でそれぞれ機能的あるいは精神的用途に応じて整理、規範化した表れが認められる。

### ① 口縁部類型系列と器種

弥生土器の組成には壺、甕、台付甕、鉢、高坏などの用途形態である器種の他、器形を異にする複数の系列が見られる。この系列はI類～VI類として示す口縁部形態に、より明瞭に特徴付けられ、壺、甕、台付甕に表れるが、その表れ方の推移は様ではない。以下に示すように時期により器種との結び付きを異にしており、この表れも画期を把握する上に重要な指標となる。

中期～後期第1期段階では壺、甕による口縁形態の差異は小さいが後期第2期以後この違いが明瞭になる。

後期第2期では壺に定形度の高い折り返し口縁(IV類)が出現し、急激にその主体を占める所となり、甕はII類に系列的つながりが強く、定形度の高い口縁形態(III類)に殆ど占められる。この口縁形態は壺には極めて少ない。折り返し口縁が壺に出現するのはほぼ一段階遅れる。

後期第3期では折り返し口縁(VI類)は壺、甕において主体を占める。図にはしめされていないが後期第1期～第2期に甕と同様の口縁形態をとってきた台付甕は後期第3期では、折り返し口縁を殆ど見ない。台付甕は小容量の煮沸形態である。口径は甕と変わらないものも体部の丈は著しく低い。折り返しが付けられないのは小容量になじまないことを契機としながらも、一定の規範化が生じたであろうことも考慮したい。

後期第3期に多段口縁(V類)が出現し、これは装飾性が高く、壺にのみ表れる。折り返し部の文様は刻み目が高い頻度で見られる。

### ② 文様構成と器種

文様は各類型系列にしたがって推移する一方、器種に対する結び付きに頻度の違いが見られ定形化が高まる様式的確立期に顕在化する。これらの有り様も画期を測る指標となる。

中期後半では、壺は口縁、頸部に沈線による平行線文、鋸歯文、波状文など、甕は櫛描簾状文、直線文、波状文など、両者それぞれ異なった施文手法を採用する。共通要素として、口縁端部に縄文を施す例が多く見られる。

後期第1期では壺、甕共に櫛描文を主要な施文手法とし、その一方では壺において口縁、頸部に先端の鋭いへら描による細い沈線文による、斜行沈線充填鋸歯文、斜格子文、羽状文などが見られるようになる。このへら描文は甕には見られない。壺、甕共通文様として口縁端部に細かい刻み目文が盛行する。

後期第2期では壺において後期第1期に出現し盛行する胴上部に斜行沈線充填鋸歯文がこの段階まで残る、なおこの有り方には幾分地域色があって渋川以北の利根上流域では弥生後期末までこのモチーフは残る。

後期第2期より壺に折り返し口縁が出現するが、折り返し部の文様には櫛描波状文のほかにへら刻み目文が波状文と同率で見られる。

後期第3期では折り返し口縁部(b)の文様は壺はへら刻み目文、甕は櫛描波状文と施文わけが固定化する。口辺部(c)は甕にあっては櫛描波状文を幅広く施すものが大半を占めるがこれは壺には見られない。これは口辺部の外反の強さに関係したものであろうが、安定的に規範化されて認められる。

第309表 新保遺跡出土土器様式区分と各期の特徴

新保 区分	壺		甕	
	口縁類型	文 様	口縁類型	文 様
中期 第1期	I類 II類	口縁端部(a)縄文 口縁部(b)縄文、沈線文 (II類) 頸部(d)縄文地文、沈線文 胴部(e)(f)沈線文、懸垂区画文、重連弧文、鋸歯文	I類 II類	口縁端部(a)縄文 口縁部(b)縄文、沈線文 (II類) 頸部(d)櫛描文 胴部(e)(f)櫛描斜格子文、羽状文、コの字重ね文
第2期	I類 II類	口縁端部(a)刻み目文主体、縄文 口縁部(b) (2条1単位) 沈線波状文 (II類) 頸部(d)多条平行沈線、波状文 (2条1単位) 縄文地文の消失、頸部に文様が集約する。	I類 II類	口縁端部(a)刻み目文主体、縄文 口縁部(b)櫛描波状文 (2条1単位) 沈線波状文、縄文地文の消失 頸部(d)等間隔止め簾状文
後期 第1期	I類 II類	口縁端部(a)刻み目文 口縁部(b)櫛描波状文 (I類) (II類) 頸部(d)簾状文 (等間隔止め) へら描沈線文、斜格子文、羽状文	I類 II類	口縁端部(a)刻み目文 口縁部(b)櫛描波状文 (II類) 頸部(d)簾状文 (等間隔止め)
第2期	I類 III類 IV類	口縁部(b)櫛描波状文 (IV類) 口縁部(b)波状文、刻み目文 (IV類) 頸部(d)簾状文 (2連止め、等間隔止め) 胴部(e)櫛描波状文、(f)へら描沈線鋸歯文	I類 III類	口縁部(b)櫛描波状文 (I、III類) 頸部(d)簾状文 (等間隔止め、2連止め)
第3期	I類 VI類 V類	口縁部(b)へら描刻み目文 (V類、VI類) 頸部(d)簾状文 (2連止め、3連止め)	I類 VI類	口縁部(b)櫛描波状文 (VI類) 口縁、口辺部 (b、C) 櫛描波状文 (I、VI類)

なお本稿では中期後半を2期に区分し、後期を3期に区分し、それぞれ前者を1～2期、後者を1～3期とした。「新保I—大溝編」では後期を前半、後半(古)、後半(新)の3期に区分しているが、内容的にはそれぞれ本稿のものと変わらないが、本稿では3期区分をより明確にした。

## 7 従来の弥生土器編年的研究

前項において新保遺跡出土土器の様式的推移に基づき弥生中期の土器を2段階に、後期の土器を3段階に設定した。ここに設定された土器の様式的区分は、背後の文化的変容の一つの発現として意味付けられる一方では年代的区分としての側面を持っている。本項では設定された5つの階梯についてこれまでに積み上げられてきた編年的研究と対照し、区分の根拠についての問題にふれながら、年代的位置をより明確にしたい。北関東・群馬県地域における弥生土器研究は、杉原荘介氏による高崎市周辺遺跡、旧横野村樽遺跡の出土土器に基づく竜見町式土器、樽式土器の型式提唱に始まる。<sup>(20)</sup>これが当地域の弥生土器の本格的編年研究の端緒であり、またこれにより以後の弥生研究の基礎が築かれるところとなった。杉原氏により竜見町式、樽式なる型式名称が与えられ、設定された土器型式の内容は以後、細分あるいは地域様相が加味され内容的に豊かにされ現在に継承されている。杉原氏の型式内容は310表のように要約できる。ここで竜見町1類、2類とした土器について、1類を古式弥生土器に比定する一方、2類の甕について櫛描文主体により、1類より後出位置を与えている。しかしこの1類、2類は併存し、同一組成を構成する壺と甕であろう。新保遺跡の中期第1期の土器は杉原氏の竜見町式土器に該当するものである。

杉原氏の樽式土器の内容は310表のように要約できる。第1類の説明では壺、甕の認定に問題があるが、その特徴は新保遺跡の後期第3期に一致する。

杉原氏により提唱された竜見町式、樽式の内容は資料的制約から両型式間の系列的関係に不十分さを持つものの弥生中期後半と後期の様式的盛期をとらえており、北関東・群馬県地域の弥生土器編年の骨子を築いたといえる。以後神沢勇一、山本良知、工業善通、井上忠雄・柿沼恵介、平野進一、相京氏、各氏らにより

編年研究が進められた。各氏の見解は310表に示すように要約することができるだろう。

神沢氏は関東地方の編年案を示し、北関東を西部、群馬県地域について、弥生時代後期を前半、中葉、後半に区分しそれぞれ竜見町式、樽式、石田川式を当て、関東地方を中心に周辺地域の並行型式についての見解を示している。<sup>(21)</sup>

山本氏は浜尻遺跡の土器について沈線文が主で、樽式土器に近い簾状文が付けられているところから、縄文の多い竜見町遺跡の土器と区別し、浜尻式を提唱し、これを中期から後期への過渡期に位置付けている。樽式土器の細分についても水沼遺跡、分郷八崎遺跡の土器により試みている。<sup>(22)</sup> これら竜見町式、樽式の細分案は、後者については明確さにかけるものの、前者の提唱は文様の適切な推移の把握に従っている。新保遺跡の中期後半第2期は内容的にはほぼこの浜尻式と一致する。

工楽氏は第II様式～第IV様式に区分し、第II様式をこれまで竜見町遺跡の土器に代表されていたものとし、周辺地域の影響を強く受け土着の影が薄いことをその様式的特徴としてあげ、第III様式を埼玉県用土遺跡の土器に代表させ、その様式的特徴を櫛描文が隆盛の途上であり、次ぎの様式に密接に結びついていくものとしている。第IV様式は樽式土器で、様式的にはかなりの幅があるとしながらも細分は行っていない。<sup>(23)</sup> 工楽氏は代表例として埼玉県用土遺跡の土器をあげている。図に示された以外のものも含めたこの遺跡の出土土器の様相は口縁端部に縄文、刻み目が相半ばし、壺の文様は縄文、沈線文、櫛描文が頸部を中心に施文され、中には胴下部に文様が及ぶものも目立つ。氏の指摘するように櫛描文の多用が注意されるが太く、条数が少ない。新保遺跡にはこれに類する土器群は見られない。工楽氏の第III様式はこれら勘案すると新保遺跡中期後半第2期の新段階に対応すると理解できるだろう。

井上・柿沼氏の見解は基本的には山本氏の内容と一致している。<sup>(24)</sup> 杉原氏の竜見町式を長野県の年代観に対応させながらA類、B類、C類に3区分している。指摘されるそれぞれの特徴は310表のように要約されるだろう。A類からB類は文様の簡素化、C類は胴部文様の省略化、縄文の減少傾向、壺にも櫛描文が多用される。このような様式推移の把えかたは的確であると思われる。C類に該当するものとして提示されている浜尻遺跡の土器群は過渡期的要素を強く見せながらも様式推移の一つの段階を良好に表現している。C類は新保遺跡中期後半第2期に該当する。樽式土器についてはA類、B類、B'類に区分する。櫛描文が盛行する後期土器を大きくA、Bの2時期に区分し、多段口縁を作る新保遺跡のV類はB'類に該当する。B'類についてB類よりも古い要素を含んでいるとされるが新保遺跡の場合は文様要素により新しい傾向が見られる。ただB類(新保VI類)に並行する部分が長いと思われるので遺跡により表れ方を異にするところもあるだろう。A類は示されている笹遺跡の例は新保遺跡後期第1期と共通する。新保遺跡後期第2期の土器と共通するのは典型的な資料は示された中に見ないが前橋市鳥羽出土の甕が口縁端部が短く内湾するものであるが定形化段階のものではない。B類は新保遺跡第3期に該当する。問題点としては、口縁部が受け口を呈するものをB類土器の特徴として指摘し、水沼3B住居出土壺を呈示しているがこれはむしろA類(新保後期第1期)に属するものである。この背景として類型設定に際し伴出関係優先の型式観があると思われる。<sup>(25)</sup>

三宅、相京氏は榛名東南麓地域の弥生後期の土器についてI～IV期の区分を行っている。<sup>(26)</sup> 検討資料は新保遺跡と同地域の遺跡の住居跡出土土器に基づいており、器形、文様の推移を従来より細かく区分したものとなっている。その推移の把握は大筋としては“新保区分”と大差はないが様式(時期)区分観、区分内容に若干の差異を認める。

区分内容では三宅、相京氏のI期は新保区分の第1期と異ならない。II、III期は新保区分の第2期に、IV期は第3期に概ね対応すると思われる。II期、III期の区分については掲載された図及び、説明からは十分な

第310表 群馬県地域弥生土器様式、時期区分の対照

杉原 1939	神沢 1966	山本 1975	工楽 1978	井上、柿沼 1983	
				<b>竜見町式A類</b> 壺はへら描沈線、縄文、重連続山形文、胴部以上全面に施文。中後閑、柴原、有笠山遺跡。斐不詳。 (長野) 平柴平遺跡出土栗林I式土器に酷似した文様	中期後半第1期
<b>竜見町1類</b> 口唇縄文、頸部に節の太い刷り消し縄文(信州栗林式など中部高地古式弥生土器の特徴)他、競馬場出土土器	<b>竜見町式</b> 壺は口縁部が水平に近いまでに大きく外反し、頸は細い。頸部に反浮彫的な縄文帯がめぐる。後期前半、久ヶ原式、長岡式並行。	<b>竜見町式</b> 浜尻遺跡に比べて縄文が多い。竜見町遺跡、巾遺跡中期(長野)栗林、天王垣外遺跡に近似。	<b>第II様式</b> 竜見町遺跡出土土器に代表される。端部は縄文、頸部は縄文帯とへら描き並行沈線。繊細なへら描き沈線、半截竹管による平行線、他、八東厩、有笠山、前原遺跡。(長野)栗林式	<b>竜見町式B類</b> 甕は櫛描文、壺は縄文、へら描沈線文有笠山、巾、八東厩遺跡(長野)栗林II式と同系統	
<b>竜見町2類</b> やや太めの櫛目が縦に施され、口唇に縄文をあしらった広口壺など(櫛目式土器に先行して古式弥生土器との中間に位するもの。		<b>浜尻式</b> 沈線が主で櫛式土器に近い櫛状文が付けられている。浜尻、日光町遺跡 中期から後期への過渡期(長野)百瀬遺跡の土器に近似。	<b>第III様式</b> 櫛描文が隆盛の途上にある。甕に櫛描が著しい。日光町、有笠山遺跡(埼玉)用土遺跡。	<b>竜見町C類</b> 壺は櫛描文を多用。浜尻、巾、有笠山遺跡。百瀬式に似る。	中期後半第2期
				<b>櫛式A類</b> 口唇部刻み、口縁端部波状文。頸部等間隔止め櫛状文(壺)綾杉状文斜線充填の山形文。篋遺跡IV号住、同VI-I号住吉田式土器、長光寺原式、岩鼻式	後期第1期
<b>櫛式第1類</b> 壺(甕)は口縁部に隆起帯を有することを普通とする。上に波状文か押捺文、頸部(口辺)波状文、肩部(頸部)に櫛状文。	<b>櫛式</b> 壺(甕)は複合。口縁を持つ広口壺で、短く直立し、文様は押し引きを加えた並行櫛目文(櫛状文)を挟んで数段の波形櫛目文を配する。後期中葉 弥生町式、二軒屋式(十王台式)	<b>櫛式</b> 甕は口縁部は折り返され、段状になり波状文を付す。水沼、 剣崎長静遺跡出土土器口唇部は端が平らに整えられ、器厚より幅を広くする。この状態は石田川式土器に似る、新しい様相。	<b>第IV様式</b> 櫛描文が隆盛を極める。特に櫛描波状文が著しい。様式的に幅がある。器形のバラエティーが多い。	<b>櫛式B類</b> 口縁折り返し多い。(壺)櫛描文が盛行、頸部2~4単位止め櫛状文、口唇、口縁端部は折り返し部に刻み、波状文、剣崎、乗付、水沼遺跡(長野)箱清水式に似る。	後期第2期
<b>櫛式第2類</b> 外面に丹を塗り、櫛目を施さぬ。口縁部に押捺を施す。1類と同時併存。				<b>櫛式B'類</b> 壺は折り返し部が2~4段の段状気味に作られる。異系統の要素、赤井戸式土器に類似、A類に近い古式要素を含む。	後期第3期
	石田川遺跡出土土器 後期後半後				

※ 表中横太罫線は時期区分、細罫線は異系列又は形態区分

納得が得られない。折り返し口縁の出現についてはII期に甕に出現し、壺への出現は甕に後出し、III期になるという。新保遺跡及び近隣遺跡の伴出関係からの検討では壺への出現は甕の場合より早いと理解するのが妥当である。また、II、III期を「展開・盛行していく時期」、IV期を「土師器への移行期」と特色づけているがこれは実態としても画期の把握のしかたとしても問題がある。

平野進一氏は群馬県地域の弥生土器を、中期はI、II a、II b、IIIと4期に、後期の土器を前半、後半の2期に区分する。<sup>(27)</sup>中期ではII a、II bをそれぞれ杉原荘介の竜見町式の古い部分と新しい部分に当たるとし、Iをこれに先行する部分、IIIを後出する部分としている。このII a~II bの部分がおよそ本稿の区分の中期後半第1期、第2期に該当する。

器形、文様の把握の要点は、基本的には本稿の区分と同様である。しかし竜見町に後出する部分として中期最終末・III(期)を設定し、壺頸部に沈線帯にかわって、より櫛描文の影響が強く表れるとして、新保遺跡(76号溝出土土器か)、群馬郡国分寺中間遺跡出土土器の中にこれが見られるとしている。国分寺中間地域遺跡の弥生期の一部の住居跡、方形周溝墓出土土器群中に、壺は櫛描文を主体とするが、縄文など中期的要素を遺すものがある。これらの土器は工楽氏が第III様式の代表例とした用土遺跡の土器と比べても沈線を失い、文様が頸部、胴上部に収束するなどより後出的である。報告者の徳江秀夫氏も指摘しているようにこの土器群は中期から後期への過渡期的様相が強い。様式的安定性(定形化の高まり)、量的増大といった点では現状では画期となりえるか検討を要するところである。

平野氏は後期では前半、後半の2期区分を基としている。<sup>(28)</sup>特に本稿との認識の異なる点は中期の場合と



同様、画期に関わる部分である。本稿の区分にて後期第2期を特徴づけている甕Ⅲ類については「後期初頭からやや後出した前半の中に位置付けたい」としている。

## 8 結語

### 1) 漸移的推移について

モンテリウスは英国の自然科学者チャールズ・ダーウィンの進化論の影響を受け、そこから型式学的研究法のヒントを得たといわれる。<sup>(29)</sup>モンテリウスはこの進化論の考えかたを前提にして人為物の型式組み列を設定し、これを一括遺物による共伴関係に基づく“組列の平行性”の確認によりその順序の正しさを検証した。このような検討を重ねることにより、分析方法上の人為物の発達にたいする進化論的前提の正しさを検証するところとなった。<sup>(30)</sup>

本稿において分析の対象となった新保遺跡出土弥生土器についても方法上前述した進化論的前提に従って分析を試みた結果、上記のような口縁部形態、文様の変化が明らかになったが、結果として進化論的前提をも検証するところとなった。また、さらに本分析における資料を傾向処理するうえでの数量的問題についても、有効数量に達していたことの確認を得るということにもなった。

### 2) 種と類型について

進化論による生物の分類では形質の類似、近似をもって行われるが、分類において重要な形質の類縁性は系統的なものであり、この意味では分類は自然体系、進化に即したものであるといえる。<sup>(31)</sup>モンテリウスは型式組列の編成と順序の確認を進化論で取り上げられている痕跡器官によった。<sup>(32)</sup>考古資料にたいして系統的な分類を行おうとしたとき、生物学の形質に当たるものは、土器であるならば器形、文様、技法などがあり、これが様々に関わりあいながら変化している。ここに見るようなより機能的ではない部分での系統的類縁関係把握は痕跡器官の原理における失能過程は見られず、変化の過程や類縁関係を意味づけてたどることは容易ではない。

本遺跡の土器類型の設定においては、特異な形姿をとる口縁部形態、単位文様とその組み合わせの変化間に、前項1)の分析により系統的な推移を確かめ、これに基づき数量的推移を勘案して系統分類とその系列を示した。

### 3) 様式的発展について

モンテリウスは型式を進化論における種に対応させ、これを正しく区別することの必要性をとえ、これに立脚して彼の型式学を展開している。小林行雄氏はこの型式に対応する概念として考古学における様式概念を明確なものにしている。<sup>(33)</sup>そのなかで、様式構造とその発展、文化的背景についての卓れた見解は現在にあって土器研究の指針であり続けている。氏は弥生土器の様式発展における3つの中心として、斉一性の①、生長 ②、持続 ③、変改を挙げている。<sup>(34)</sup>本稿では進化論から基本原理を継承しているとみられる上記の研究視点に立脚し、土器分析を試みた。その結果、類型系列において、あるいは器種組成(壺と甕)、異系列土器複合体のうちに自然物にだけでなく、人為物にも認められた、類の盛衰と交替にみる共通な発展形式を確認するとともに、これに基づきながらも各々の類型に生じた固有の現れ方についても見る事ができた。<sup>(35)</sup>

### 4) 土器様式推移の意味するもの

土器様式研究には大きく2つの研究方向があると考えられる。1つには精細な時期区分による編年網の作成であり、もう1つには土器からその背後の文化の特質を明らかにしようとする方向である。<sup>(36)</sup>本稿にて示した類型系列あるいは、器種組成、異系列土器複合体のうちに見る様式的推移は、前者の編年的時期区分の

基準となる一方、後者にも大きく関与する。社会の構造的特性、時代的感性・価値感など、精神的特性、すなわち、文化人類学の見地より石田英一郎氏の言うところの文化構造の“価値の領域”に大きく関与する。<sup>(37)</sup>

文化の動態の問題として、前出のように小林氏によれば様式については斉一性の成長・持続・変改といった推移の形式を示すが、もとよりこの推移はその背後の文化の構造的な推移の現れである。文化の構造的変動は「全体としての文化を構成する一部に変化が生じた際これに有機的に連結した他の各部分との調整は破れ……この破壊された平衡は部分の変化を阻止することによってか、それとも全体の構造が部分の変化に応じた変化をとげるかいずれかの道を通じて回復を試みる」。<sup>(37)</sup>この発展のありかたは生物の種の進化、個別の人為物、文化要素あるいはその統合である文化総体にも通じる変化の一般的形式と言えようが、文化の変動は有機体のそれに比べて急激なテンポと大きな振幅を持ち、さらに構造的には“技術”の面だけでなく“価値”の面も大きく関与する。この2者が相互にどういった主導的關係をもつかは置くとしても、推移の局面において時代的感性、価値感として生長、持続、変改への希求は少なからず文化の変動に作用するであろうし、この時代の価値感、あるいは時代精神は時代特性として総ての文化要素に表出する。とくに人為物に表出される際には土器様式の推移により顕著に現れるだろう。考古学研究には扱う文化要素に従って様々な研究分野がある。遺跡分布、集落構造、墓制、生産活動など、それぞれの現れ方、その動態を理解する際、全体的構成体との関わりへの視点の必要性も当然であるが、なかんずく土器様式の推移などに現れる価値の文化との関わりにも目を向ける意義は大きい。本稿において行った弥生土器の推移の検討は編年基準を得ることを目的とする一方、上記の研究方向への導入を、目指したものである。

#### 補注

- (1) 横山浩一氏は「属性分析」について物の持っている性質（属性）を個々の単位に分解して資料操作を行う手法であるとし、この手法の型式学的有利性、有効性について詳しく紹介している。横山浩一 「型式論」『岩波講座 日本考古学 1』 1985
- (2) 田中 琢「方格規矩四神鏡系倭鏡分類試論」『文化財論叢』 1983
- (3) モンテリウス・濱田耕作訳「考古学研究法」 1984
- (4) 田中琢氏はこの検証法について次のように説明している。「何種類かの文様が器物を飾り、それぞれが独立して変化している場合、それぞれの文様の型式の組列を編成し、それらが組み合せて出現する器物を一括遺物に当たるとみなし検証する方法である。」田中琢 「型式学の問題」『日本考古学を学ぶ(1)』 1978
- (5) 「清里庚申塚遺跡」 1981 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (6) 「熊野堂遺跡(1)」 1984 群馬県教育委員会、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (7) 「井出村東遺跡」 1983 群馬町井出村東遺跡調査会
- (8) 笹沢 浩「中部高地」『弥生土器II』 1983
- (9) 「第7回三県シンポジウム—東日本における中期後半の弥生土器」 1986  
北武蔵古代文化研究会・千曲川水系古代文化研究会・群馬県考古学談話会
- (10)~(19) 次節「(2) 住居構造について」の文末掲載の参考文献を参照 (18) 「北橋村史」 1975
- (20) 杉原荘介「高崎市付近の弥生式遺跡」『考古学』10-9 1939  
杉原荘介「上野樽遺跡調査概報」『考古学』10-9 1939
- (21) 神沢勇一「関東」『日本の考古学III』 1966
- (22) 山本良知「烏川流域における弥生文化」『水沼遺跡』 1975 倉淵村

- (23) 工楽善通「北関東Ⅰ」『弥生式土器集成—本編2』 1968
- (24) 井上唯雄、柿沼恵介「関東北部」(8)に同じ所収
- (25) 柿沼氏は共伴関係に基づくセット関係の把握を型式設定の条件とする見解を示し、この点に杉原氏の樽式土器概念の問題点があるとしている。柿沼恵介「考察」『水沼遺跡』前出22)に同じ
- (26) 三宅敦気・相京建史「樽式土器の分類—榛名山東南麓を中心として—」第3回3県シンポジウム群馬県資料 弥生末期の土器 4世紀の土器 1982
- (27) 平野進一「竜見町土器の分析について」第7回3県シンポジウム 中期後半の弥生土器 1986
- (28) 平野進一「日高遺跡における弥生から古墳初頭の土器」『日高遺跡』 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財報告書第5集 1982 群馬県教育委員会、(財)群馬県埋蔵文化財事業団
- (29) H・J・エガース・田中 琢・佐原 真訳「考古学研究入門」 1981
- (30) (3)に同じ
- (31) 類似性にもさまざまあって、同様の環境に適応したため全く系統の異なるものの形質が近似することがある。(これを相似と称する)生物学分類では形質比較の際痕跡器官や発生過程の形質が重要視される。特に痕跡器官は共通の祖先から変化したことを意味するということから着目される。小沢幸重「生物の相互類縁・形態学・発生学」井尻正二監修『種の起源をどう読むか』 1985
- (32) 考古遺物における痕跡器官とは「かつては機能を有していた器具のある部分が次第々々にその実用性の意義を失ってしまうことである。」「考古学研究法」 3)に同じ
- (33) 小林行雄氏は様式概念について、「遺物の秩序は様式概念によって統一され」、「様式は事物の存在するところあまねく存在する統一的な斉一性の概念」であって、しかも生長する動態であるとし、様式研究は様式を抽出するとともに様式の生長、様式から様式への動きを究めねばならないと述べている。小林行雄「様式」『彌生式土器集成圖録』 1938
- (34) 小林行雄「弥生式土器の様式構造」考古学評論1-2 1935
- (35) 進化論では「自然選択」について、「有利な変異を持つ個体を保存し、生存闘争によって好適の種類個体数を増し、そうでないものの個体数を減らし、ついには絶滅してしまう。この際、新しい変異や新しい種は、自分に最も近縁な変異や種を最も激しく圧迫し、絶滅にみちびくのが普通である。」と説明する。後藤仁敏「自然選択」(31)に同じ
- (36) 土器研究について横山浩一氏は「遺物の型質は時間的・空間的に変化する文化的特性ばかりでなく遺物を生産した社会の構造的特性、さらには精神的特性をも表出しているはずであるからこれらの特性を的確にとらえる方法を型式学は開拓しなければならない。」と指摘している。前出(1)に同じ
- (37) 石田英一郎は文化人類学の見地から文化の構造を的確に整理している。この見解を概観すれば次のようである。「人間の心的過程を三つの面に従って類別してみるなら」第一は道具の使用に端を発する学習された知識—技術の領域、第二は情緒、感情生活における領域、第三に社会の結合秩序の保持など、社会慣習など意志の領域に区分される。そして情緒体系としての信仰や芸術や意志の体系は価値の名で総括できる。「技術、価値の両面にわたり意識・行為・物体の三領域に表現されるこれらの文化諸要素がたがいに何らかの相関関係において一個の文化という体系を構成している。」、技術の文化と価値の文化との間もまた一定の構造的関係に結ばれ、その中間に、もしくは両者にまたがって、社会と言語という二つの文化の範疇がこの両者を結合する役割をはたしている。石田英一郎「文化人類学序説」 1966

(佐藤明人)

## (2) 住居構造について

本稿では弥生期から古墳前期にかかる土器様式に基づいて設定された6期に従って、住居の形態的推移を分析する。住居の構造に関わる形態的現れは多様であるが、この分析では特に時期により変化する特性、平面形状、規模、支柱の配置、炉の位置などに焦点を当てた。弥生期の住居構造の研究については、登呂遺跡の調査にその研究の端緒を見る<sup>(1)</sup>。以後縄文、あるいは古墳期をも含めて竪穴住居の構造的検討が行われてきている。昨今では集落遺跡の調査例の増大に伴い、近県地域でも研究視点を地域性や、土器文化圏との対応などに置き、竪穴住居の形状、炉跡、などの諸属性の精細な動きに着目した論究が試みられている。群馬県地域においてはこれまで縄文期の住居研究の進展<sup>(2)</sup>とは対照的に、弥生期については資料的制約もあって本格的な研究を未だ見ない。しかしそのようななかにあっても過去時期的推移に伴う住居形態変化について注意が向けられており、いくつかの考慮すべき指摘がなされている<sup>(3)</sup>。平野進一氏は竪穴の形態的推移に、神戸聖語氏は炉跡の位置に時期的特性の存在を指摘している。昨今、大規模な集落調査の件数の急増に伴い弥生期の住居の検出例も多数に昇っている。特に新保遺跡は大規模な継続型の集落であり、当期の住居の形態的推移を分析する上に格好な条件を備えている。本稿では近隣遺跡の例をもあわせ分析し、当地域、弥生期における住居形態の推移状況について若干の考察を試みたい。

### 1 弥生中期後半第1期 (第400図)

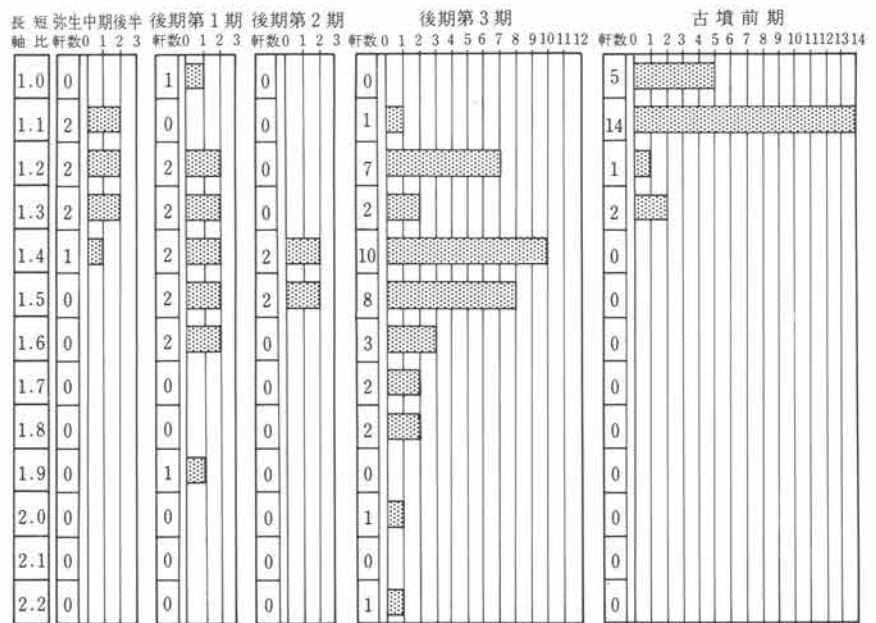
**形状** 形状を把握できるもの5軒のうち3軒が隅丸長方形、このうち137号は胴部がやや張る。他の1軒は、114号の例で隅丸台形状を呈する。なお、114号は同形状の拡張を行っている。竪穴の長軸、短軸の長さ比は短軸1に対して長軸1.1~1.4の範囲にあり、後期の段階に比べると比率が小さく、値は比較的一定している。すなわち相対的に正方形に近い形状を呈し、近似性が高い。

**面積** 18~21㎡の間に4軒、22~25㎡の間に2軒見られる。175号は9㎡で、特に小規模であり、炉や柱穴も検出できないことなどから住居以外の可能性もある。他から突出する大型住居が見られない。(第399図)

#### 支柱穴 支柱穴は4本

構成で、配置は、長軸、短軸の比率が竪穴の辺のそれに近いことから、総じて対角線上に近い位置に柱が配置されている。あるいは、竪穴短軸長に対して、周壁・支柱の短軸間の距離(柱壁間)はおおよそ1/4、後期に比べ支柱短軸間を幅広く取っているのが特徴として指摘できる。(第402図)

**炉跡** 地床炉で住居の中央部に設けられる。3軒この例が見られる。南



第398図 新保遺跡住居跡長・短軸比、時期別分布

側短軸支柱穴間に設けられる例は1例、173号に見られる。

## 2 後期第1期 (第400図)

**形状** 長方形8軒、隅丸長方形5軒見られる。このうち118号はやや胴が張る。短軸に対し長軸が特に長い住居が201号の1例で、比率は1.84を示す。頻度が比較的高い所では1.21から1.58の値の範囲にあるものが10軒みられる。中期の住居の場合に比べて長軸方向に縦長になる傾向が顕著に見られる。また大型住居に縦長の傾向が強く見られる。

第1期の10軒の比率は分散的傾向が目立つ。すなわち後期第2期あるいは第3期に比べると相対的に平面形状の縦穴の規格性は低いといえる。(第398図)

**面積** 面積に見られる傾向は、20㎡から28㎡の範囲に6軒あり、軒数の集中がみられる。大型住居としては118号、249号(拡張している)が38㎡~40㎡、さらに超大型の住居として6本支柱穴の160号があり、57㎡を測る。

**支柱穴** 支柱穴はほとんどの住居が4本構造である。超大型の160号は6本構造であり、大型の118号も6本構造であると思われる。

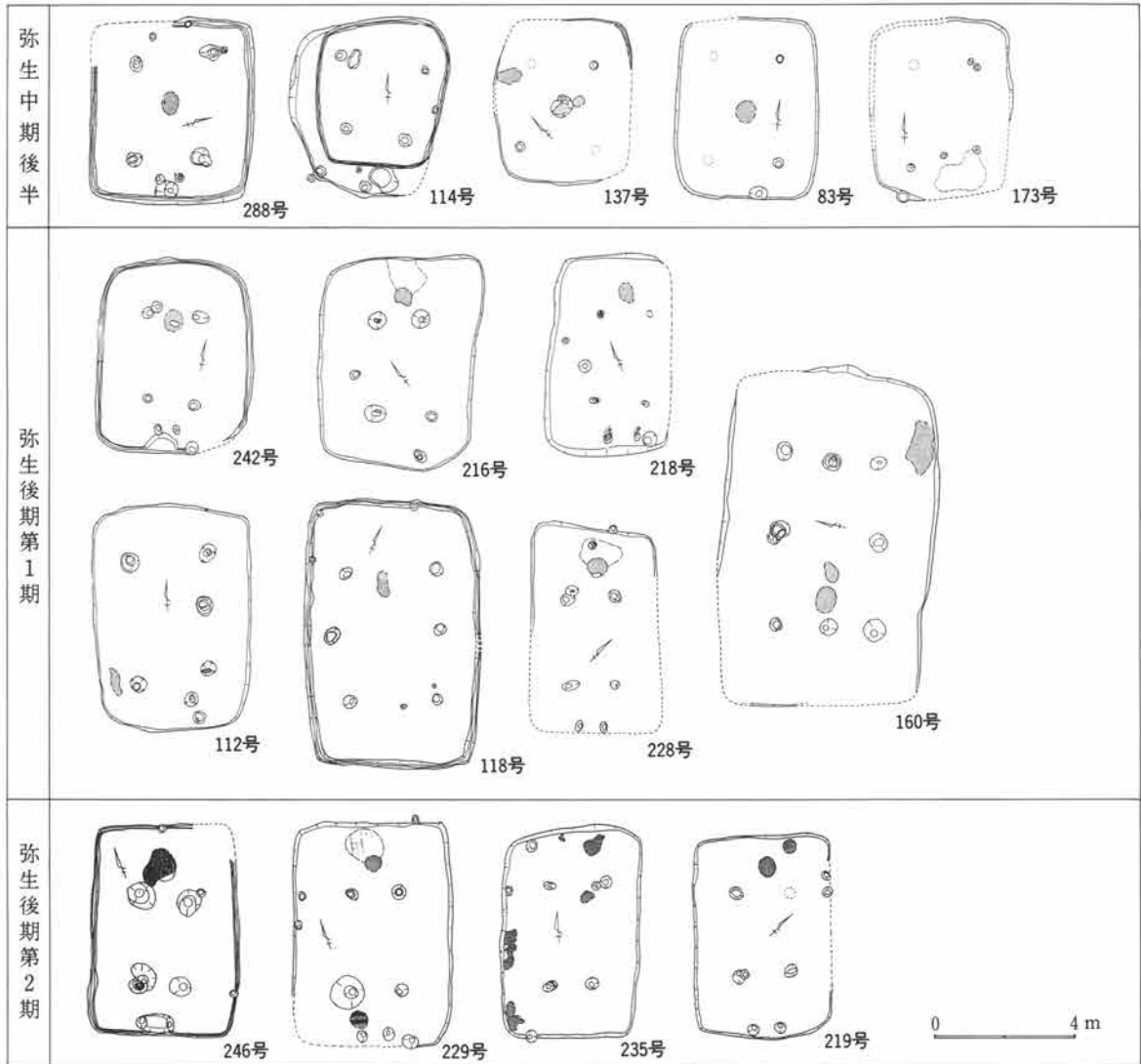
支柱の長軸、短軸の比については縦穴の辺の長、短軸の比と対照しても相互に対応関係が見られない。柱と辺が相互に同じ比率を示すもの、すなわち長方形縦穴の対角線近くに支柱が配置されるものは2軒(112号、118号)、その他は総て支柱は縦穴の平面形に比べると著しく縦に長く配置される。

縦穴の短軸長にたいする支柱・周壁の短軸間距離(柱壁間)には対応関係が見られない。後者は1.2m前後の一定した間隔が維持される傾向が見られる。縦穴短軸長に対しては短軸支柱間の長さにむしろ対応関係が認められる。(第402図)

**炉跡** 炉跡は地床炉で228号、242号では細長い川原石を炉の傍らに据えている。炉の位置は北側(奥側)の2支柱間の外側周壁との間、あるいはやや内側に設けられている。前者の場合が3例、後者の場合が5例、この他243号は東側、西側側部2支柱間にそれぞれ焼土帯を見るが共に炉跡の可能性はある。炉の位置は総じて中期後半に見られるような住居中央部から縦穴の形状が縦長に変化することに対応して奥側(北側)2支柱間の内側に移動する。奥側支柱の内側が主体である。これに対して後期第2期、3期では奥側2支柱の外、

面積(㎡)	弥生中期後半		後期第1期		後期第2期		後期第3期		古墳前期	
	軒数	10	軒数	10	軒数	10	軒数	10	軒数	10
6~	0		0		0		0		0	
8~	1		0		0		2		0	
10~	0		0		0		0		2	
12~	0		0		0		2		2	
14~	0		0		0		0		2	
16~	0		0		0		2		0	
18~	2		0		0		3		1	
20~	2		2		0		2		1	
22~	1		0		1		3		2	
24~	0		4		2		2		1	
26~	0		1		0		0		3	
28~	0		1		1		3		2	
30~	0		0		0		5		1	
32~	0		0		0		1		1	
34~	0		0		0		2		0	
36~	0		0		0		3		2	
38~	0		1		0		0		1	
40~	0		1		0		0		0	
42~	0		0		0		2		0	
44~	0		0		0		0		0	
46~	0		0		0		2		2	
48~	0		0		0		0		0	
50~	0		0		0		1		0	
52~	0		0		0		0		0	
54~	0		0		0		1		0	
56~	0		1		0		0		1	

第399図 新保遺跡住居跡、面積、時期別分布



第400図 新保遺跡住居跡一覧 (1) 弥生中期後半～後期第2期

周壁との間が主体的になる。

### 3 後期第2期 (第400図)

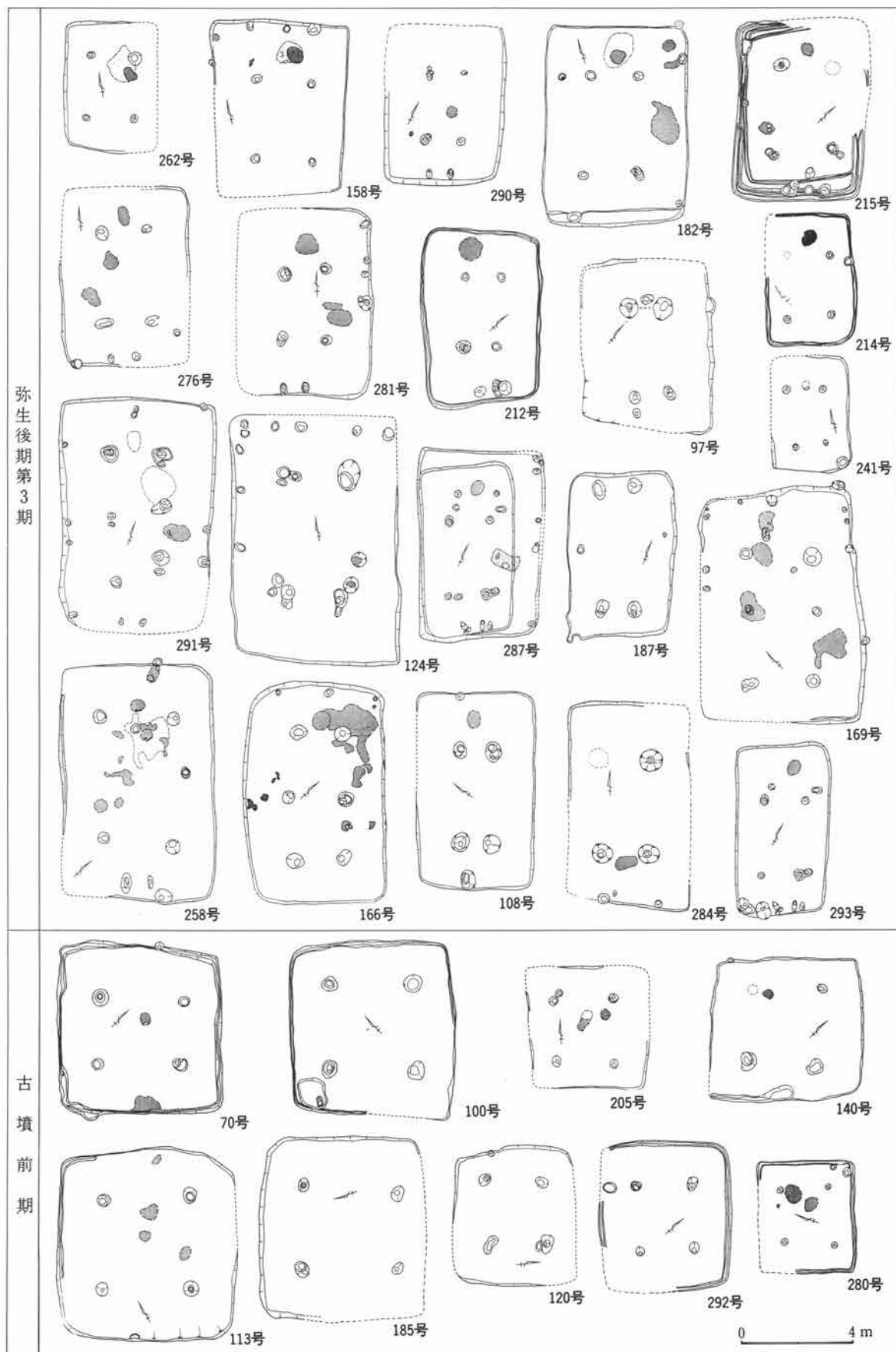
**形状** 形状把握可能なもの7軒中5軒が長方形、2軒が隅丸長方形である。全体的に形状は定形度が高い。縦穴の長軸、短軸の比率が分かるものは4例あり、それぞれ1.40~1.53の間であって、近似した数値を示す。

**面積** 面積は22.0㎡から24㎡に3軒、229号がやや大きく28.8㎡である。

**支柱穴** 支柱は総て4本構造で、支柱の配置は整った長方形配置であるが、長、短軸比は辺の比と比べると総じて差が大きい。縦穴短軸長と支柱の配置関係について見ると、4軒の住居は規模は同様であるが、それぞれの間に一定の共通性が窺える。すなわち支柱・周壁短軸長は1.2~1.5mで、縦穴短軸長を1とした場合、支柱短軸間はおよそこの1/3の数値を示し。更に支柱・周壁短軸間でも同様に1/3の数値を認めることができる。(第402図)

**炉跡** 炉跡の位置が確認できた3軒の住居は総て同様の位置に見られる。すなわち、北側の2支柱間の外寄り、周壁との間に見られる。

### 4 後期第3期 (第401図)



第401図 新保遺跡住居跡一覧 (2) 弥生後期第3期～古墳前期

**形状** 竪穴の平面形状把握が可能なものうち長方形を呈するもの31軒、隅丸長方形は9軒である。ただし前者と後者の違いは相対的なもので判然とした区別はつけにくい。竪穴の長、短軸比は比率が1.11から2.2まで分布が見られる。全体傾向としては比率が1.4をピークにしてこの前後に数値が集中する。後期第1期が数値に分散性が強く、資料が少ないが第2期に比率は1.4~1.5に、第3期には著しい住居の軒数の増加を見る一方、2期の形状が受け継がれこれが3期の主流になる。

**面積** 面積値は最小が260号の9.2㎡、最大が124号の54.9㎡である。面積値の分布傾向は12㎡から36㎡の範囲に28軒を数えるがこの間に軒数のピークが見られない。大型に類するものとして42㎡~54㎡の間に分散的に6軒見られる。面積値の全体的傾向は住居の大きさには基準あるいは規制などを窺わせる現れは認められない、住居の大きさは、特別大型の住居以外はいわば日常生活に基づく要請に応じたものだろうか。なお、これに関連して建て替え、拡張の問題がある。拡張と認められる住居は中期後半に1軒、後期では8軒ある。それぞれで1.2~1.5倍の拡張を行っている。

**主柱穴** 主柱の配置が把握できる第3期の住居は27軒、このうち4本構造の住居は22軒、6本構成は4軒である。2本構造は1軒である。4本主柱の配置関係について、長、短軸の比率は全体的傾向としては、竪穴の辺の比率に対応している。すなわち竪穴形状が縦長になるに従って4主柱の配置も縦に長くなる。しかし両者の対応関係の現れかたは著しく不規則である。

主柱・周壁短軸間の長さ（柱壁間）は、各住居とも竪穴の短軸の長短にかかわらずほぼ一定した数値を示している。短軸長が4mに欠ける3軒の住居では主柱・周壁短軸間長は1m前後、短軸長が4m~6mの17軒の住居では1.5~1.6m前後であり、特に竪穴短軸長が6.1mを測る124号でも主柱・周壁短軸長1.7mであり、動きは小さい。6本構成の住居は161号（50㎡）、166号（37㎡）、187号（23㎡）、291号（43㎡）に見られる。住居は総体に長大である。（第402図）

2本構造の住居は294号の1軒のみである。中軸線上に2箇所柱穴が見られる。同様な2本主柱の住居が北橋村分郷八崎遺跡に見られる<sup>(4)</sup>。ここでは出入部に関わる1対のピットが長辺の周壁下に見られる。294号も同様に長辺側に出入部があったであろう。

**炉跡** 炉跡は総て地床炉で、設置される位置は、北側（奥側）2主柱と周壁の間に設けられる例が最も多く、これが18例ある。主柱の内側に設けられる例は6例。住居の中央に設けられた可能性があるのは290号、126号住居の2例、290号は奥側の2主柱間の付近は他の住居の重複により失われており、126号の遺存状態は悪く、特異な形状を呈している。

## 5 古墳前期（第401図）

この期の住居は形状、主柱、炉跡などの施設も含めて、規格性が高い。

**形状** 住居の形状は方形、あるいは隅丸方形である。長軸、短軸の比率は1.02~1.17の範囲に突出する。

**面積** 面積値は総体に一定ではない。最小が10.2㎡の191号、最大が47.1㎡の116号である。10.2㎡から31.9㎡の間に16軒見るが、この間面積値は段階的である、限られた数値に住居軒数は集中しない。面積値に基準や規制は窺えない。ただし113号、116号は面積値が特に大きく、大型住居とみなすことができるだろう。面積の有りかたは弥生後期の場合と似た現れかたが認められる。

**主柱穴** 主柱は総て4本構造で、4主柱の配置は方形竪穴の対角線付近に設けられる。特に、100号、113号、292号では主柱はほぼ対角線上に設けられている。しかし70号、140号、185号では少なからず対角線上からはずれている。又一方、竪穴の対角線の交点からの4主柱穴の距離について検討するために交点を中心に円を描いたとき4主柱穴に円弧が重なる住居は70号、100号、205号、113号、292号などであり、これ以外の住居



第311表 新保遺跡時期別住居形態一覧

	竪穴の形状	長、短軸比	面積	主柱の配置と位置	炉の位置
中期(後)第1期	長方形 1例(胴張り)	1.1~1.4	18~21㎡、4軒 22~25㎡、2軒 大型住居はない。	総て4本構造。 竪穴の対角線上付近に位置する。主柱・周壁短軸間長は1.0~1.2mで、竪穴短軸長の1/4。	総て竪穴の中央部に位置する。
後期第1期	長方形8軒 隅丸長方形5軒 1例(胴張り)	1.21~1.58が10軒	20~28㎡が6軒 38~57㎡の大型住居が3軒	大型住居2軒が6本、その他は4本構造。主柱・周壁短軸間長は1.2~1.4mとほぼ一定で竪穴の短軸長に対応しない。	奥側の2主柱穴間か、やや内寄りが5軒、外側の周壁との間が3軒ある。
後期第2期	長方形か隅丸長方形	1.40~1.53	2.2~2.9㎡で、大型住居は見られない。	総て4本構造。主柱・周壁短軸間長と主柱短軸間長は1.2~1.5mで、竪穴の短軸長の1/3。	奥側2主柱穴の外側周壁との間に設けられる。
後期第3期	長方形か隅丸長方形	1.1~1.77 1.4にピークがある。	9.2~36㎡の間に分散的に30軒ある。大型住居は42~54㎡の間に4軒。	2本構造は小型で1軒、4本構造は22軒、6本構造は大型で4軒。主柱・周壁短軸間長は比較的一定。	北奥側2主柱穴間外よりに設けられる住居が19軒、主柱間が内側が6軒。
古墳前期	方形か隅丸方形	1.02~1.17	10.2~31.9㎡の間に、段階的に16軒、外に大型住居が2軒ある。	総て4本構造、4主柱がおおよそ竪穴の対角線上にあるものが多い。主柱・周壁短軸間長は1~1.6m。比較的一定している。	総て住居の中央部に設けられている。

でも重ならないまでも大きくは外れない。主柱穴と周壁間の距離は比較的一定した数値を示している。(第402図) 辺長が5m以下の場合主柱穴・周壁間長は1m前後、6m以上では1.5m前後で、辺長7mを測る113号は1.6mである。これについては弥生期の住居の場合と共通した有りがたといえそうである。

**炉跡** 炉跡は地床炉で位置の確認ができたものは総て住居中央部に設けられている。

**出入口** 出入口に関わると思われるピットなどの跡は明確に把握できない。296号で南側周壁際にそれと思われる1対のピットが検出されているが明確ではない。

## 6 壁溝、壁高

壁溝、壁高については検出状況、時期的な特性の現れかたが顕著でないなどからここでは分析項目に取り上げていない。壁溝は検出に困難さを伴ったため、形状に明確さを欠く住居が少なくない。壁高は、遺構確認・検出面(第IV層~V層)が往時の生活面よりも低いと見られるため、検出時点の計測値は往時の状態を示さない。往時の周壁の高さは、床面と第III層(F A層)最下面・古墳後期水田面間のレベル差に近い数値であろうと考えられる。この数値は総じて50~70cmで時期差は認められない。

## 7 住居形態の推移 (第402、403図 第311表)

新保遺跡の中期後半の住居に見られる形態的特徴は上記のとおりであるが、新保遺跡では中期後半第2期の住居は検出されていない。弥生期の住居群の分布域は調査区域外の南北に広がっており、第2期の土器の出土もあることから、この期の住居の存在を予想することはできる。中期第1期以後は後期第1期の住居を23軒以上検出している。中期の住居とこの後期第1期の住居の形態を比べると竪穴の長、短軸比率、主柱の

位置、炉の位置に大きな隔たりが見られる。相互に形態的近縁関係が窺えない。この間を前後する時期の住居例を隣地域に求めると、前橋市清里庚申塚遺跡<sup>(5)</sup>、渋川市中村遺跡<sup>(6)</sup>やや地域を異にするが前橋市荒砥島原遺跡<sup>(7)</sup>に中期後半第2期例を見ることが出来る。清里庚申塚遺跡では新保遺跡の中期の住居群中に見ることができなかった6本主柱の大型住居の存在がある他、新保遺跡の中期後半第1期住居との間に時期的推移を窺わせる特徴を見ることが出来る。すなわち炉跡は竪穴の中央部に位置している一方、竪穴の長、短軸比率、柱配置はバラツキはあるが、後期の住居に見るあり方も窺える。竪穴の長、短軸比率が大きい例、主柱短軸間が狭まる例も出現している。

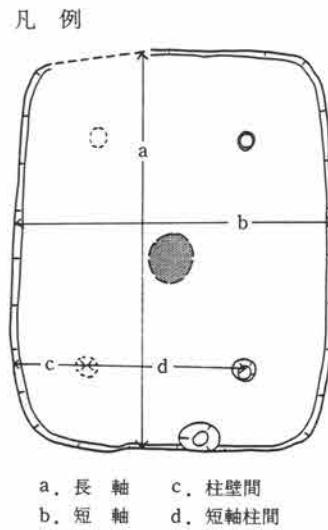
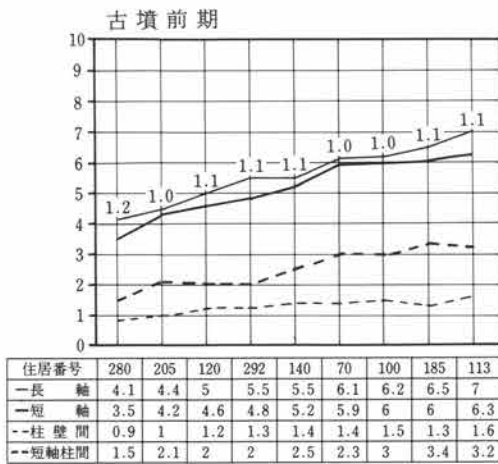
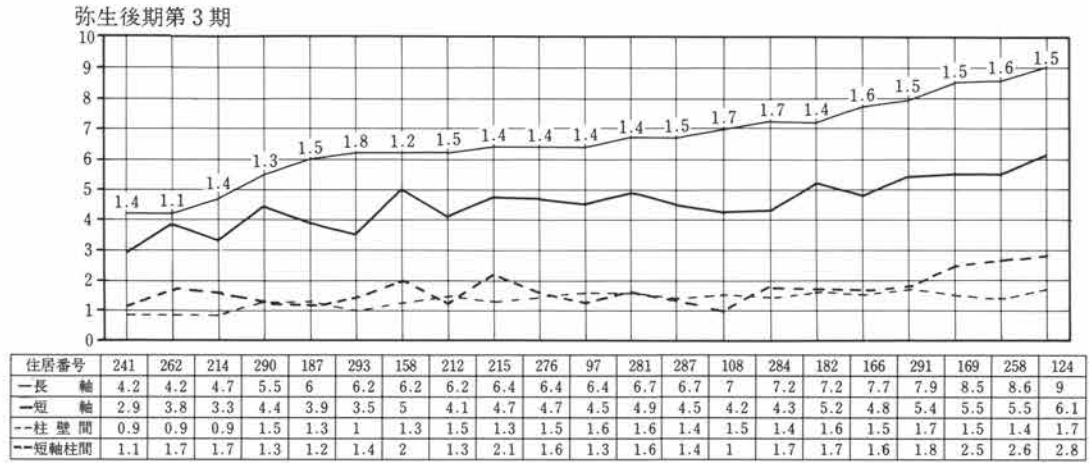
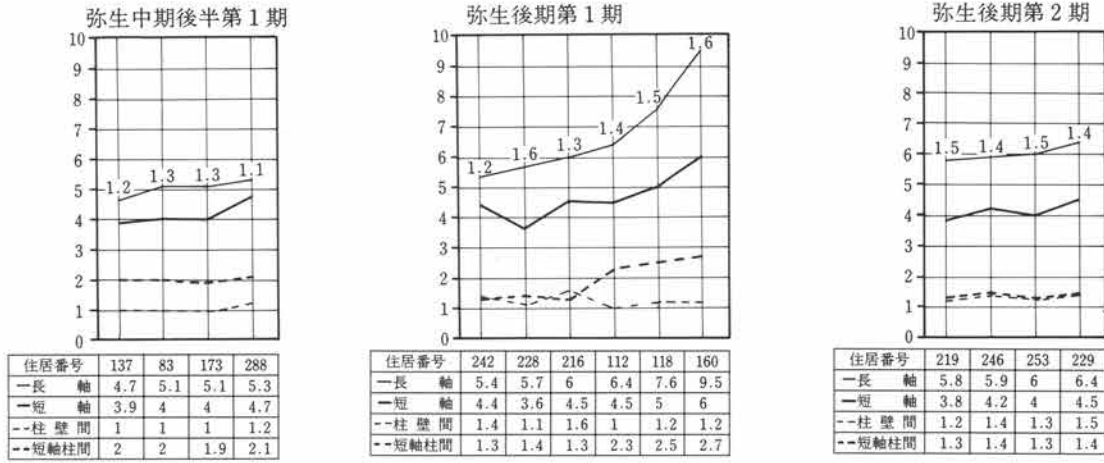
後期第1期の住居では国分寺中間地域遺跡<sup>(8)</sup>に興味深い例を見る。この遺跡の当該期の住居で形態把握が良好にできるものは8軒あるが、総体に画一性が高く、しかも前代の特徴が濃く認められる。6本主柱と9本主柱の大型住居を2軒見るが、この2軒も含めて竪穴の長、短軸比率は1.3に集中があり、炉跡竪穴の中央部か奥側2主柱間の内側に設け、短軸主柱間は大型住居以外でも、短軸主柱・周壁間に比べて安定的に幅が広い。これらは中期の特性である。国分寺中間遺跡の住居群中212号、174号、H1号方形周溝墓などの出土土器群は前段階の要素を色濃く残しており、またその一方では、より後出要素の強い土器も含め、総じて近似性が高く、集落に短期継続的な有り方を認めることができる。住居に見る画一的、かつ中期的様相はこのような事情に対応したものと理解できよう。

新保遺跡で検出した後期第2期の住居は面積形状、柱配置など全般的に画一的である。しかし当期の様相を把握するには資料件数に乏しい。近隣地域ではこの時期の住居検出例は多い。群馬郡熊野堂遺跡<sup>(9)</sup>、同井出村東遺跡<sup>(10)</sup>、高崎市大八木町雨壺遺跡<sup>(11)</sup>、同引間遺跡<sup>(12)</sup>などにこの時期の住居が見られる。これらの遺跡の例を新保遺跡の場合と合わせ検討するとよりこの時期の様相が明らかになる。新保遺跡では検出を見ない6本柱の大型住居を熊野堂、引間、雨壺遺跡に見ることが出来る。短軸主柱間と短軸主柱・周壁間の間隔は通常の大きさの住居ではほぼ同じで、大型のものになるに従って短軸も大きくなるが、これに従って短軸主柱間が広がる。短軸主柱・周壁間は相対的に一定に保たれる。竪穴の長、短軸の比率は大型住居の数値が大きい。一方遺跡間で若干の差異も認める。通常の大きさの住居の竪穴長、短軸比率は熊野堂、雨壺遺跡では1.2~1.3に数値が集中しており、新保の場合が1.4~1.5である。後者は縦長傾向が明瞭である。炉跡の位置は新保遺跡以外の4遺跡の場合、奥側2主柱穴間(B)が8例、奥側2主柱穴と周壁間(C)が3例。側柱間が1例である。新保遺跡の場合は4軒とも奥側2主柱間と周壁の間(C)である。遺跡内での画一性が比較的高い一方では遺跡間に形態差を認める。こうした差異は時期的様相、構造的推移にかかわるものであろうか。こういった現れはいかなる視点によって取り上げるのが妥当であるかについては今後総合的に検討しなければならないだろう。

後期第2期から第3期への形態的推移についてはこの間に明瞭な差を認めることができない。

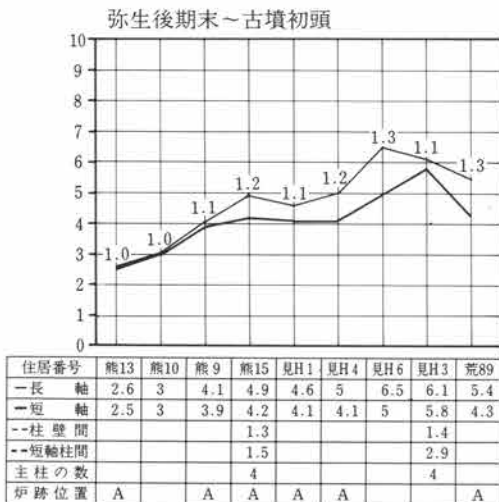
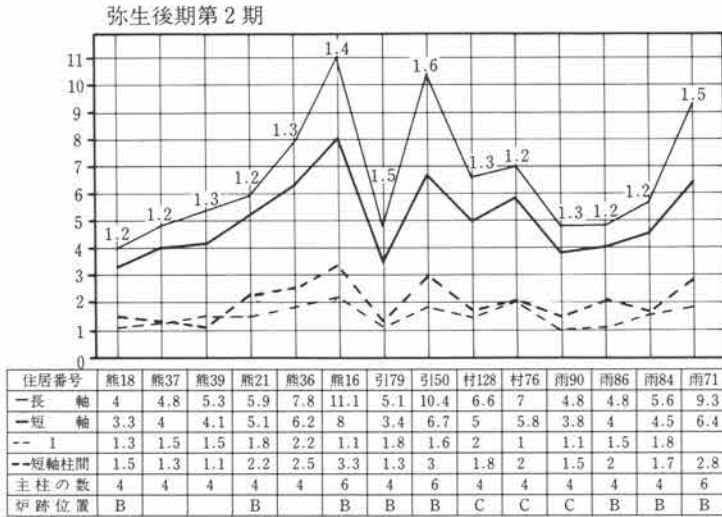
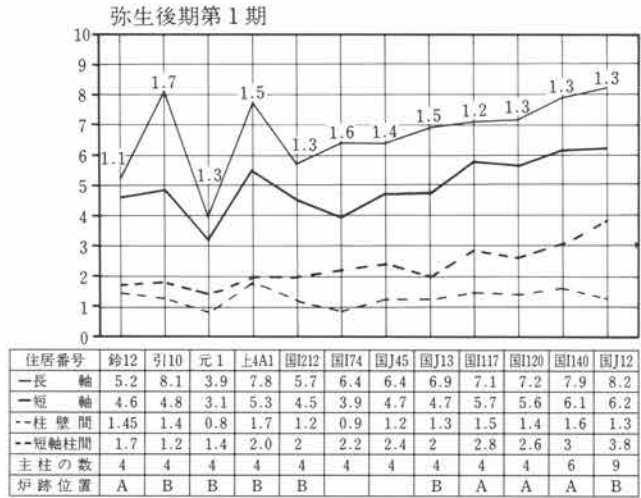
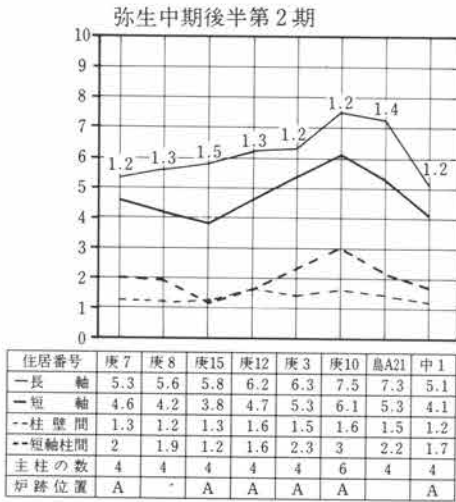
古墳前期になると住居形態は大きく変化する。弥生期との形態差は著しい。この違いの背後には構築時の設計、上屋構造に基本的違いが存在していたことを予想させる。竪穴の正方形プランの作出、主柱の配置に新たな原理と、“縄引き”の方法、を導入していることが窺える。竪穴プランの基本原理は①正方形竪穴形状、②竪穴の対角線上への4主柱の配置、③主柱・周壁間の距離を一定に保ち、大きくは動かさない。④炉は中央部に設ける。以上4項目が、古墳前期住居プランに認められる基本原理である。この原理は新保遺跡に限らず群馬県地域に広域に及んでいる。

弥生後期から古墳前期への移行期にかかる住居の様相を新保遺跡では明確に把握することはできない。古墳前期にありながら正方形を示さない例(155号)、住居覆土中より古い様相を持った古式土師器を出土する



※ グラフ内の数字は竪穴長短軸比

第402図 新保遺跡住居形態グラフ



凡 例

数字は住居番号（以下同じ）

- |            |           |
|------------|-----------|
| 庚 清里庚申塚遺跡  | 村 井出村東遺跡  |
| 島 荒砥島原遺跡   | 雨 雨壺遺跡    |
| 中 中村遺跡     | 見 見立溜井遺跡  |
| 鈴 鈴ノ宮遺跡    | 荒 荒砥上ノ坊遺跡 |
| 引 引間遺跡     |           |
| 元 元島名遺跡    |           |
| 上 上大類北宅地遺跡 |           |
| 国 国分寺中間遺跡  |           |
| 熊 熊野堂遺跡    |           |

炉跡の位置

- A 竪穴の中央
- B 奥側2主柱間か又はやや内側
- C 奥側2主柱間の外寄り、周壁との間

※ グラフ内の数字は竪穴長短軸比

第403図 近隣遺跡住居形態グラフ

例(141号)などを見るが、移行期の様相を示す資料に恵まれない。移行期の例を近隣に求めると、昨今この段階の資料軒数は増加している。しかしまだ未公開のものも多く、熊野堂遺跡に複数例、地域を異にするが赤城村見立溜井遺跡<sup>(13)</sup>、前橋市富田遺跡群など現段階では少数例ではあるが弥生土器と古式土師器が共存する住居を検出している。これらの遺跡に見られる限りでは、住居のありかたは一樣ではないが竪穴中央部に炉を設置し、竪穴形状は方形傾向への接近が見られる。文化内容が総体に大きく転換する過渡期ではこの文化様相が住居にどのように現象するか興味を持たれるが資料に乏しく、その実態が把握できる状況はまだない。

以上、新保遺跡を中心に住居形態について時期を追って概観した。社会、文化要素の構造的推移に関わる要件として今後の検討資料としていきたい。

- (1) 関野 克「住居址論」『登呂一前編』 1978 「住居址の建築的考察」『登呂一前編』 1978
- (2) 赤山容造氏は縄文中期の住居型式を設定し、その序列を呈示している。「住居の型式」『三原田遺跡一資料合冊』 1977 「三原田遺跡」(住居編) 1980
- (3) 平野進一氏は竪穴の長短軸比が時期により異なることを指摘している。平野進一「荒砥前原遺跡」『信濃』 26-4 1976
- (4) 「分郷八崎遺跡一関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書」 1986 北橋村教育委員会、群馬県教育委員会、日本道路公団
- (5) 「清里・庚申塚遺跡」 1981 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (6) 「中村遺跡一関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書(KC-III)」 1986 渋川市教育委員会、群馬県教育委員会、日本道路公団
- (7) 「荒砥島原遺跡」 1983 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (8) 「上野国分僧寺・尼寺中間地域一関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第12集」 1986 群馬県教育委員会、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (9) 「上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第3集一熊野堂遺跡(1)」 1984 群馬県教育委員会、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、日本鉄道建設公団
- (10) 「井出村東遺跡」 1983 群馬町井出村東遺跡調査会
- (11) 「熊野堂遺跡第III地区 雨壺遺跡」 1984 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (12) 「高崎市文化財調査報告書第5集 引間遺跡」 1979 高崎市教育委員会
- (13) 「見立溜井遺跡、見立大久保遺跡一関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書KC-V」 1985 赤城村教育委員会、群馬県教育委員会

#### その他 第403図関係文献

- 「高崎市文化財調査報告書第6集一元島名遺跡」 1979 高崎市教育委員会
- 「高崎市文化財調査報告書第37集一上大類北宅地遺跡」 1983 高崎市教育委員会
- 「高崎市文化財調査報告書第4集一鈴ノ宮遺跡」 1978 高崎市教育委員会
- 昭和57年度県営圃場整備事業に係る埋蔵文化財調査「荒砥上ノ坊遺跡」 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

(佐藤明人)

### (3) 集落構成について

新保遺跡の発掘区域は弥生、古墳前期の住居群（居住域）、墓域、生産域（溝群）にわたっている。調査された住居群は染谷川縁辺の自然堤防微高地に時期を追って推移する濃密な群を構成し、墓域は居住区の周辺域を比較的大きな振幅で移動する。生産域は水田形態の明確な把握はなされていないが、水稻農耕に伴う水路群の変遷を見る。こうしたありかたから新保遺跡が本県地域ではこれまで調査例の極めて少ない大規模継続型の要件を備えた集落遺跡と認めることができる。

弥生集落研究については和島誠一により、社会関係を直接反映する対象としての意義が提唱され<sup>(1)</sup>一連の研究成果が示されて以来、弥生時代の集団構成・共同体論、集落類型、個別集落遺跡を対象とした集落の単位と構成の解明など網羅的に研究が試みられ、この間弥生時代農耕集落の実態把握は大きく前進した。しかしその一方では今後課題とされた問題点も数多い。中でも個別集落分析に基づく集団の単位と構成の実態把握については資料的、あるいは方法的な限界に阻まれ研究の進展に大いに困難を生じており、既存の研究成果も少なからず問題点をはらんだものとなっているといえる。新保遺跡でも調査区の範囲が限定されていることや継続型集落であるゆえの著しい重複状態のため、遺跡の全容や遺構の時期認定、遺構の先後、併存関係などの把握に関して不明部分が少なくない。しかし本遺跡はこうした状況にあっても当地域の集団動向の実態をより鮮明化する上に豊かな内容を備えている。本稿では従来の研究視点を基軸にして特に住居群の構成、配置関係に焦点を当て分析を試みたい。

#### 1 分析内容

- (1) 住居の時期分類と各期の群構成（住居支群・単位住居群）。
- (2) 単位住居群内の併存可能軒数と建て替え回数。
- (3) 弥生中期後半～古墳前期の集落形態・住居群構成の変遷。

#### 2 分析方法

(1) 集落分析の際、特に留意しなければならない事項は時期区分と併存遺構の検討である。この操作如何が結果に大きく関与してくる。特に併存遺構の確認の問題はこれまで多くの研究者によって多角的に試みられている。しかしこの確認は火山灰や氾濫による一時埋没など特別な条件下にないかぎり非常に難しく、一貫して集落論のネックとなっている。これまで多くの研究者に試みられてきた方法は基本的には土器に基づく時期区分によって遺構を時期分類し、更にそれを住居同士の重複、隣接関係に従って細分していくといった方法である。本稿でもこの方法を採用している。この操作で各時期の住居の群構成、および配置関係から併存可能な住居軒数を析出した。これにより析出された住居軒数は実際併存した軒数を上回ることはあろうけれども、下回ることはない。本稿ではこれを“併存可能件数”と仮称し、各時期この段階までとらえて、整理した。

(2) 住居の群構成は各時期、遺構空白地に隔てられ2～3群を構成する。これを“住居支群”と仮称する。また重複、隣接、建て替え住居の占地範囲を最小単位集団の占有域と想定し、このような住居の一群を“単位住居群”と仮称する。

(3) 同じ時期の内での住居の重複、上屋が建ち並ぶことが不可能な隣接は、定住段階では同系の者により建て替えられ、住み継がれたと考えられる。この前提に建って検討を進める。

(4) 単位住居群内で相互に隣接する住居同士の併存、あるいは建て替えの判断要素はいくつかある。第1に上屋の外周域を竪穴からどれほどの距離を見るかということである。本遺跡ではタルキの跡や周堤帯など、外周域に関する遺構の検出はない。この問題については関野克<sup>(2)</sup>、藤島亥治郎<sup>(3)</sup>らにより竪穴住居の建築学的研究、藤田憲司氏による竪穴住居の周壁外施設の観察による占有面積の考察<sup>(4)</sup>などを参考にし、これを基にしておよその推定を行った。本分析では1.5~2.0mを竪穴と外周域の間隔と想定し、これに基づいて併存の可否を判断する。<sup>(5)</sup>このほか検討要件として併存可能な隣接関係にあっても焼失住居の場合延焼距離内の隣接住居の併存の可否が問題になるが不確実性が高いためこの操作の段階では考慮外とする。

(5) 単位住居群の継続期間については拡張と建て替え回数を基に検討する。継続期間を検討するに当たって、建て替えは通常上屋の耐久年限を経て行われるという仮定に立つ。この際、焼失があった場合これを待たない。継続期間を検討する場合このことも考慮する必要がある。

(6) 以上のほか単位住居群内の併存可能な隣接住居間の新旧関係、あるいは併存の可否検討の参考要件として、竪穴覆土中の遺物の集中する範囲を図に示した。

### 3 新保遺跡の住居群構成と推移

#### (1) 中期後半第1期

この時期の遺構はC地区大溝の西微高地部に住居跡を8軒検出する。墓跡や溝などは検出していない。この時期の集落は調査区域外の北東及び、南方向にさらに広がりがあると思われる。C地区の北方約200m、染谷川左岸、新保田中村前遺跡では中期後半期の住居跡が1軒検出されている。<sup>(6)</sup>

**住居群の構成** 住居の配置は分散的であり、2ブロック以上の支群が認められる。更に小さい単位の住居群は見られない。C地区中央部に83号、114号、137号、173号、162号、175号といった6軒の住居が比較的近接した位置関係で見られる他、西南部には288号、303号の2軒の住居跡が相互にやや離れた位置で見られる。

住居の重複関係については拡張と見られる例は114号住居の1軒、175号、162号は部分的に重複する。175号住居は3.6×2.5mと著しく小規模であるが、両住居は建て替え関係にあると見るのが妥当であろう。162号は焼失であることから、162号よりも175号が後出であるならば焼失に伴う短期の建て替えが有り得る。中期後半第1期の集落に見られる住居配置の継続期間は比較的短期に調査区域外に移動したことを思わせる。

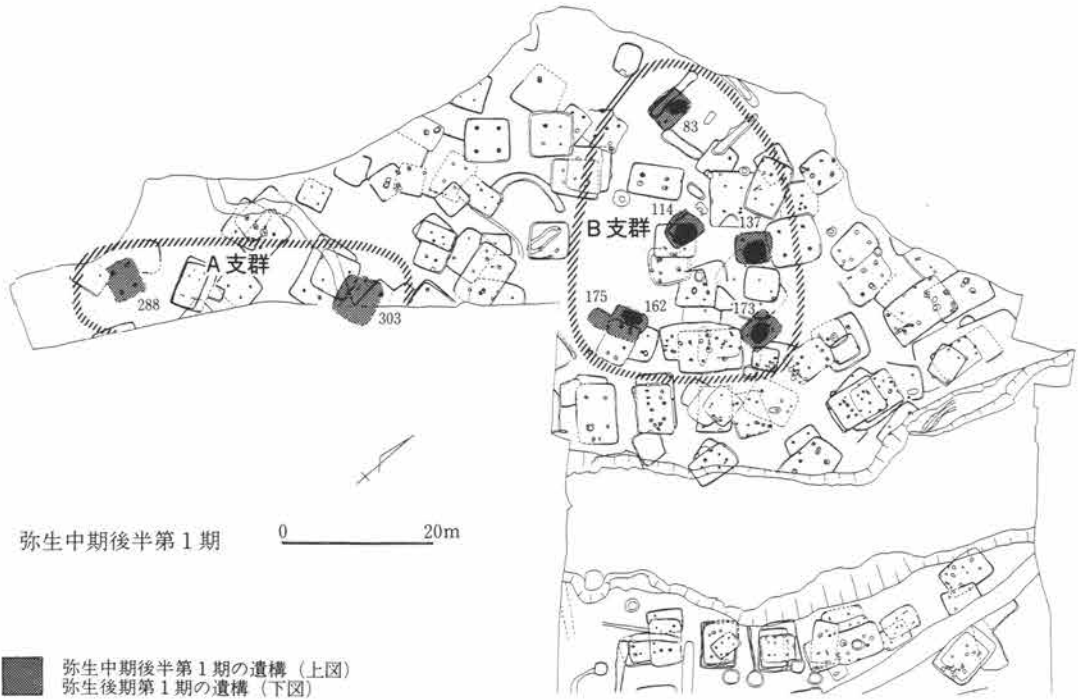
**環濠** 住居群は大溝の西側に分布域があって北は現染谷川に限られている。現染谷川の旧状は明らかではない。現染谷川の西10m程に2号溝が南北に走っている。この溝は埋積旧河道で、幅12m、深さ1.2m、弥生土器の包含層は深さ70cm~1mに見られる。現染谷川の旧状を考慮外にしても、弥生中期の住居群は南北をこの2条の自然の小河川により画されていたことが明らかである。弥生中期においては環濠に類する人為的溝は見られないが、上記2条の自然河川が環濠の意味を備えていたものといえよう。

#### (2) 後期第1期

遺構の分布域は中期後半では大溝の西側に限られていたがこの段階になると大溝の東西両側に2つの支群を構成する。大溝の西側の住居群(A支群)は中期後半の分布域よりも東部に集合し、住居群の西隣接地には墓域が形成され、1号、2号周溝墓が造られる。遺構群域は、大溝沿いに南及び北方向、調査区域外へ帯状に広がる様子が認められる。

**住居群の構成** 住居群は大溝の東西に2つの支群(A支群、B支群)を形成する。大溝は後期第1期では幅6~7m、深さ1.5mの水量の少ない小河川であったと思われる。

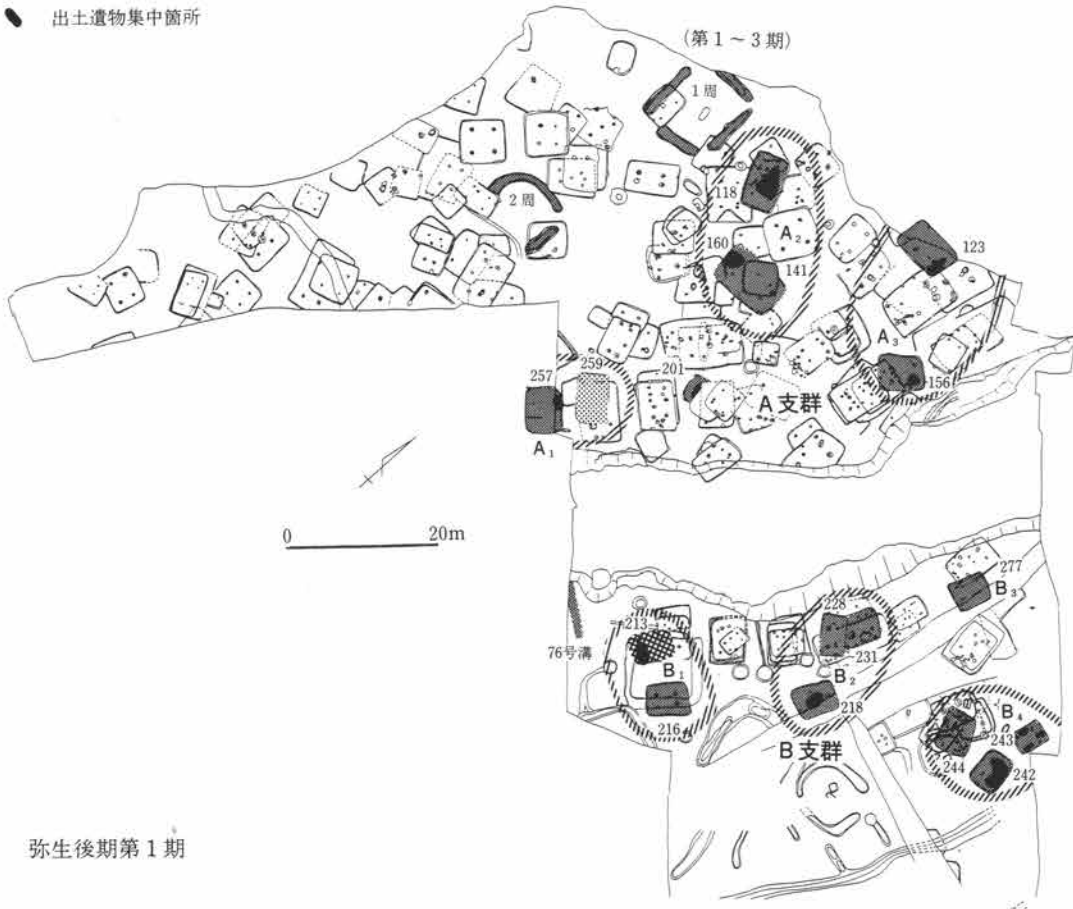
A、B両支群の住居配置関係から、さらに小単位の群(単位住居群)を抽出することができる。すなわち



■ 弥生中期後半第1期の遺構 (上図)  
 ■ 弥生後期第1期の遺構 (下図)

■ 同上期の焼失住居

● 出土遺物集中箇所



第404図 新保遺跡集落構成 (1)



A支群はA<sub>1</sub>～A<sub>4</sub>群、B支群はB<sub>1</sub>～B<sub>4</sub>群（ただしB<sub>4</sub>群201号は住居とする上にはやや形状に問題がある。）の単位住居群より構成される。

**建て替えと併存可能住居** 単位住居群はA支群とB支群でその有るかたを異にする。B支群では単位住居群のそれぞれで拡張か建て替えを伴っているのにたいしてA支群ではこれが認められない。B支群に見られる建て替え状況はB<sub>1</sub>群の213号の焼失は拡張の後である。B<sub>2</sub>群の228号、231号はほぼ同規模で方位を変える。B<sub>4</sub>群の242号、243号、244号は著しく近接し、3軒の併存は考えにくいことから、3軒の住居の間には移動を伴う1回以上の建て替えがあったと考えられる。

B支群では拡張を含めると建て替えはB<sub>1</sub>、B<sub>2</sub>群は1回、B<sub>4</sub>群では1回以上見られる。このことは住居の耐久年限、居住員数の変化などが関係していると考えられ、後期第1期の期間検討の要件となるだろう。さらにA支群にはB支群に見られるような建て替えが見られない。このことはB支群よりも継続期間が短かったことを認めてよいだろう。

単位住居群内の配置関係による併存可能軒数はA、B両支群とも2～3軒を普通としている。この単位住居群の構成が併存関係にあったか否かについては確認する方法はない。焼失住居の延焼距離、遺物の投棄の方向などがこの検討の際参考になるだろう。参考のために遺物集中箇所を図示した。（第405図）

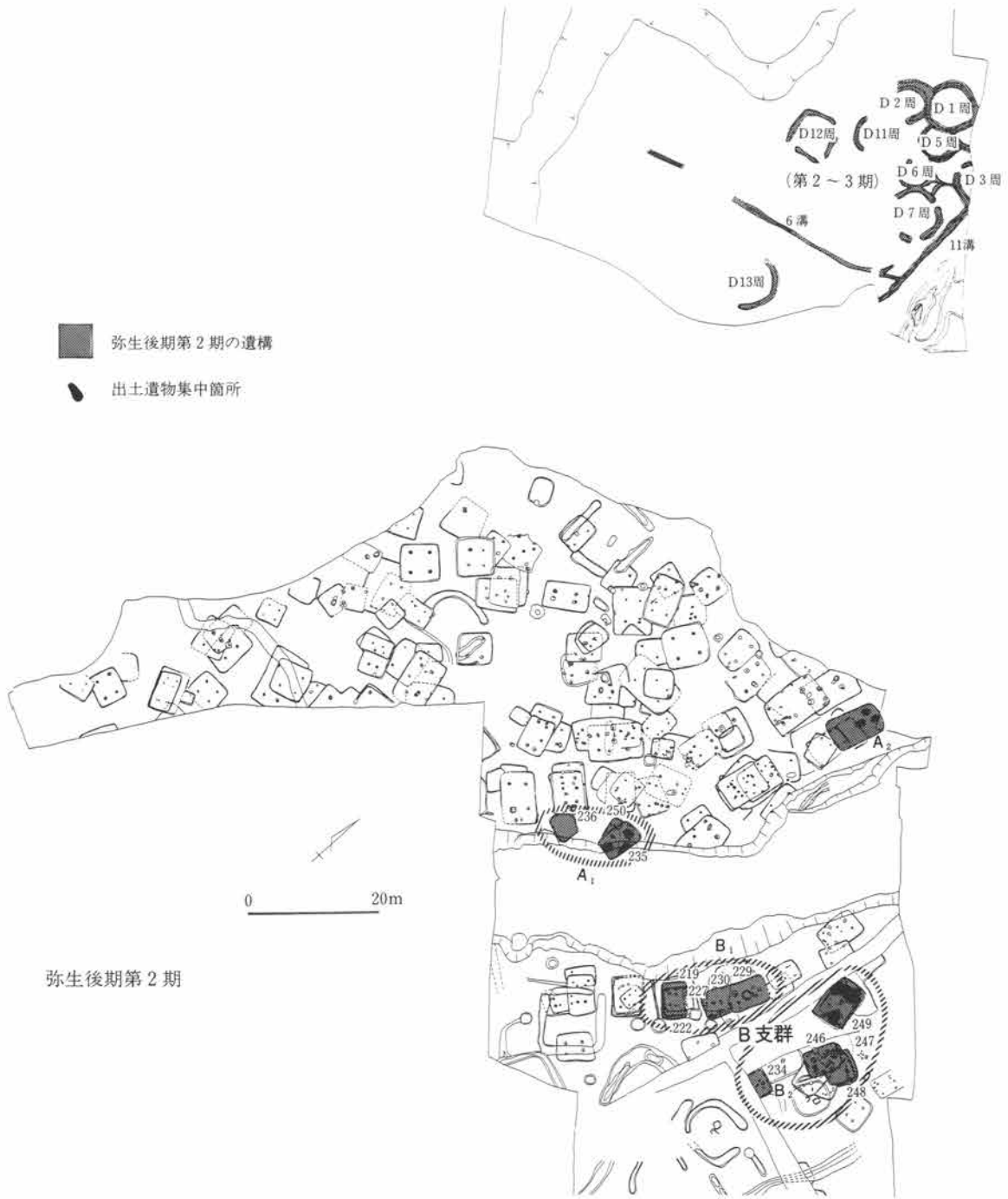
### (3) 後期第2期

14軒の住居が見られる。住居群は大溝の西と東に大きく2群に分かれる。第2期の周溝墓群は染谷川を隔てたD地区に見られる。D地区周溝墓群は後期第2期～第3期に営まれており、周溝墓群域は調査区域外北東方へ広がっている。昭和56年度高崎市教育委員会による調査ではほぼ同時期の10基からなる周溝墓群が検出されている。<sup>(7)</sup>住居群域は大溝の西では西南方向調査区域外に、東側では大溝の縁に沿って北に伸びていることも予想される。

第312表 新保遺跡時期別単位住居群と建て替え回数・併存可能軒数(1)

時期 (軒数)	支群 (軒数)	単位住居群中の重複、隣接、拡張状況	(立て替え回数) 併存可能軒数
中期 後半 (7軒)	A支群	288号 303号	(0) - 2
	B支群 (5軒)	83号 114号 162号↔175号 173号 137号	(1) - 1 (0) - 4
後期 第1期 (15軒)	A支群 (7軒)	A <sub>1</sub> 群 257号 (259号)	(0) - 2
		A <sub>2</sub> 群 160号 118号	(0) - 2
		A <sub>3</sub> 群 123号 156号	(0) - 2
		A <sub>4</sub> 群 201号	(0) - 1
	B支群 (8軒)	B <sub>1</sub> 群 <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">213号</span> (焼) 216号	(1) - 1 (0) - 1
		B <sub>2</sub> 群 218号 228号↔231号	(1) - 1 (0) - 1
		B <sub>3</sub> 群 277号	(0) - 1
		B <sub>4</sub> 群 244号 242号 243号	(0) - 3
後期 第2期 (8軒)	A支群 (3軒)	A <sub>1</sub> 群 235号(焼)↔(250号) 236号	(1) - 1 (0) - 1
		A <sub>2</sub> 群 171号	(0) - 1
	B群 (5軒)	B <sub>1</sub> 群 (222号→227号)→219号 229号↔230号	(1) - 1 (2) - 1
		B <sub>2</sub> 群 234号 246号→ <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">247号←248号</span> <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">249号</span>	(2) - 1 (1) - 1 (0) - 1

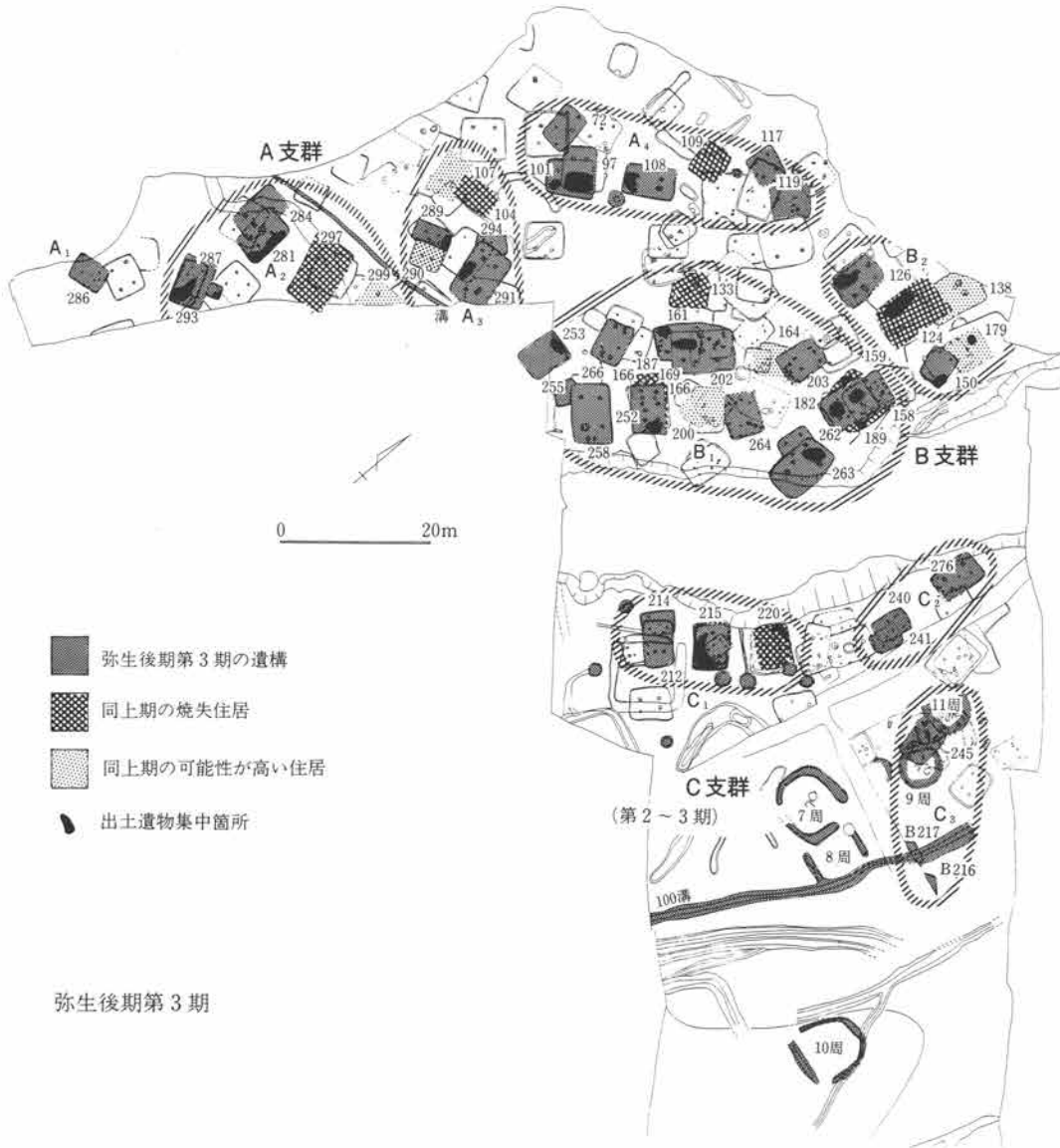
凡例 → 重複関係にあって→の方向が後出住居  
 ↔ 重複関係にあって先後関係不明  
 - 隣接関係にあって併存不可能  
  建て替え、拡張がある住居  
 住居番号に( )がある 当該期の可能性が高い。  
 (焼) 焼失住居



第405図 新保遺跡集落構成 (2)

**住居群の構成** 大溝の西、A支群では単位住居群2箇所、B支群でも単位住居群は2箇所に見られる。B<sub>1</sub>群とB<sub>2</sub>群間は約9mの遺構空白地帯を見る。

**建て替えと併存可能住居** A<sub>1</sub>群の235号は焼失で時期不明の250号住居の上に造られている。250号住居も2期の可能性がある。B<sub>1</sub>群では219号、222号、227号は建て替えの関係にあるだろう。229号、230号も建て替え関係に有るだろう。B<sub>2</sub>群では3軒隣接するが246号住居は時期認定上の問題があるが247号、248号の拡張を伴う住居よりも古い。234号、249号住居と併存可能な距離を置き隣接する。249号住居は拡張がある。拡張後の住居は比較的大型である。A支群では250号が第2期であるならば建て替え1回。B<sub>1</sub>群、B<sub>2</sub>群ではそれぞれ



第406図 新保遺跡集落構成 (3)

れに1~2回の建て替えが見られる。

単位住居群内の併存可能軒数はA支群と、B支群の2箇所の単位住居群それぞれで2軒~3軒と認められる。この隣接する2軒~3軒が併存か、移動を伴う建て替えによるものかについては結論づけられない。単位住居群のありかたは後期第1期と同様であることが注意される。

#### (4) 後期第3期

この時期の集落構成は、住居群はC地区の自然堤防微高地上を一帯に、濃密に占地する。大溝の東側では住居群は大溝の縁辺に沿い、その東隣接部では第1期、第2期は住居群であった区域に第3期の墓域が設けられる。遺構群の分布域は自然堤防上を带状に調査区域外へ更に広がっていると思われる。なお、前述のようにD地区の周溝墓群も後期第2期から当期へ継続的に営まれている。

**住居群の構成** 住居群は3つの支群を構成する。第2期には大溝両縁辺部に2つの支群を構成していたが、第3期ではさらに西寄りにもう1群、带状の支群(A支群)を構成する。3支群は大溝(当時は小河川)、及

び遺構空白地帯に隔てられている。3支群（A～C支群）はそれぞれのうちにさらに3～4単位住居群よりなっている。単位住居群間は前代の場合に比べ遺構密度が高くなっていることにより、単位住居群間に設けられている遺構空白地帯は相対的に狭まっている。また一部の住居群間では細い溝をもって区画する様子も見られる。この区画に供した溝（あるいは区画のための施設に関わる溝か）はA支群においてより顕著である。A<sub>2</sub>群とA<sub>3</sub>群間は幅4.5mの空白地帯を設けるが、この間にはさらに幅30cm程の溝が25mにわたって直線的に貫いている。その他、A<sub>3</sub>群294号住居の東、C<sub>1</sub>群215号と220号の間にも同規模の細い溝を検出している。

建て替えと併存可能住居単位住居群として把握できたのは、A支群で4箇所、B支群では2箇所、C支群で3箇所である。

A<sub>2</sub>群内の住居構成は南部が南方向に調査区域外に広がりが予想されるので完全な把握は望めないが、調査区域内に6軒を数える。

建て替え1回、併存可能軒数は調査区域内に限れば3軒～4軒である。

A<sub>3</sub>群は5～6軒からなる。290号、291号とも共通して著しく規模の小さい住居へ建て替えが行われている。A<sub>3</sub>群の併存可軒数は3軒。

A<sub>4</sub>群は6軒からなる。72号、97号、101号は相互に重複あるいは著しく近接しているこのことから、2回の建て替えが行われたと考えられる。109号は1号周溝墓上にあり、焼失している。108号と近接していることから両住居間には建て替え関係の可能性もある。A<sub>4</sub>群の併存可能軒数は3～4軒である。

第313表 新保遺跡時期別単位住居群と建て替え回数・併存可能軒数(2)

時期 (軒数)	支群 (軒数)	単位住居群中の重複、隣接、拡張状況	(立て替え回数) 併存可能軒数
後 期 第 3 期 (32軒)	A支群 (12～ 13軒)	A <sub>1</sub> 群 286号	(0) - 1
		A <sub>2</sub> 群 <span style="border: 1px solid black;">287号→293号</span> 284号→281号 297号(焼) (299号)	(1) - 2 (0) - 2 ~ 3
		A <sub>3</sub> 群 (107号)→104号(焼) (290号)→289号 291号→294号	(1) - 2 (0 ~ 1) - 1
		A <sub>4</sub> 群 72号→97号→101号 108号 109号(焼) 117号→119号	(2) - 1 (1) - 1 (0) - 2
	B支群 (12軒)	B <sub>1</sub> 群 <span style="border: 1px solid black;">253号→255号</span> 258号(人骨)→260号 166号(焼)→252号 161号→169号 (200号)→(202号)→264号 133号(焼) 203号→(164号) 263号→262号 187号 159号(焼)→189号(焼)→ <span style="border: 1px solid black;">182号</span> →158号	(2 ~ 4) - 1 (2) - 1 (1) - 5 (1 ~ 2) - 1 (0) - 1
		B <sub>2</sub> 群 126号 (138号)→124号(焼) (179号)→150号	(1 ~ 2) - 2 (0) - 1
	C支群 (7軒)	C <sub>1</sub> 群 212号→214号 <span style="border: 1px solid black;">215号</span> 220号(焼)	(1) - 2 (0) - 1
		C <sub>2</sub> 群 240号→241号 276号	(1) - 1 (0) - 1
		C <sub>3</sub> 群 245号 B217号-(B216号)	(1 ~ 2) - 1 (0) - 1
	古 墳 前 期 (24～ 25軒)	A支群 (14軒)	A <sub>1</sub> 群 292号 285号 16号 301号 283号 280号
A <sub>2</sub> 群 (102号) 95号→100号 (84号)→70号(焼)→99号→98号			(0) - 1 (1) - 1 (2 ~ 3) - 1
A <sub>3</sub> 群 300号→298号 26号 140号 295号→282号(焼)→(302号) 296号			(1 ~ 2) - 1 (1) - 1 (0) - 3
B支群 (10～ 11軒)		B <sub>1</sub> 群 120号 113号→116号 141号(焼) 167号 115号→(130号) 184号→170号(焼)	(1) - 3 (0) - 2 ~ 3
B <sub>2</sub> 群 <span style="border: 1px solid black;">125号-135号</span> 205号 151号 (177号)→185号→191号 155号	(1 ~ 2) - 1 (1) - 1 (0) - 3		

B<sub>1</sub>群は20軒前後からなる。さらに小単位に細分される可能性はある。258号は大型住居であるが、床面上より、異常な状況で2遺体の人骨が出土しており、小規模な260号に建て替えられる。252号は166号の焼失後、重複して建てられる。159号、189号、182号、158号はこの間に順次3度の同規模の建て替えが認められる。最初の2度の建て替えは焼失に伴い行われている。B<sub>1</sub>群では立て替えはほとんどの住居で1回以上行われている。同規模住居への建て替えと、小規模住居への建て替えの両様が見られる。特に焼失した場合、ほぼ同位置に建て替えが行われていることが注意される。

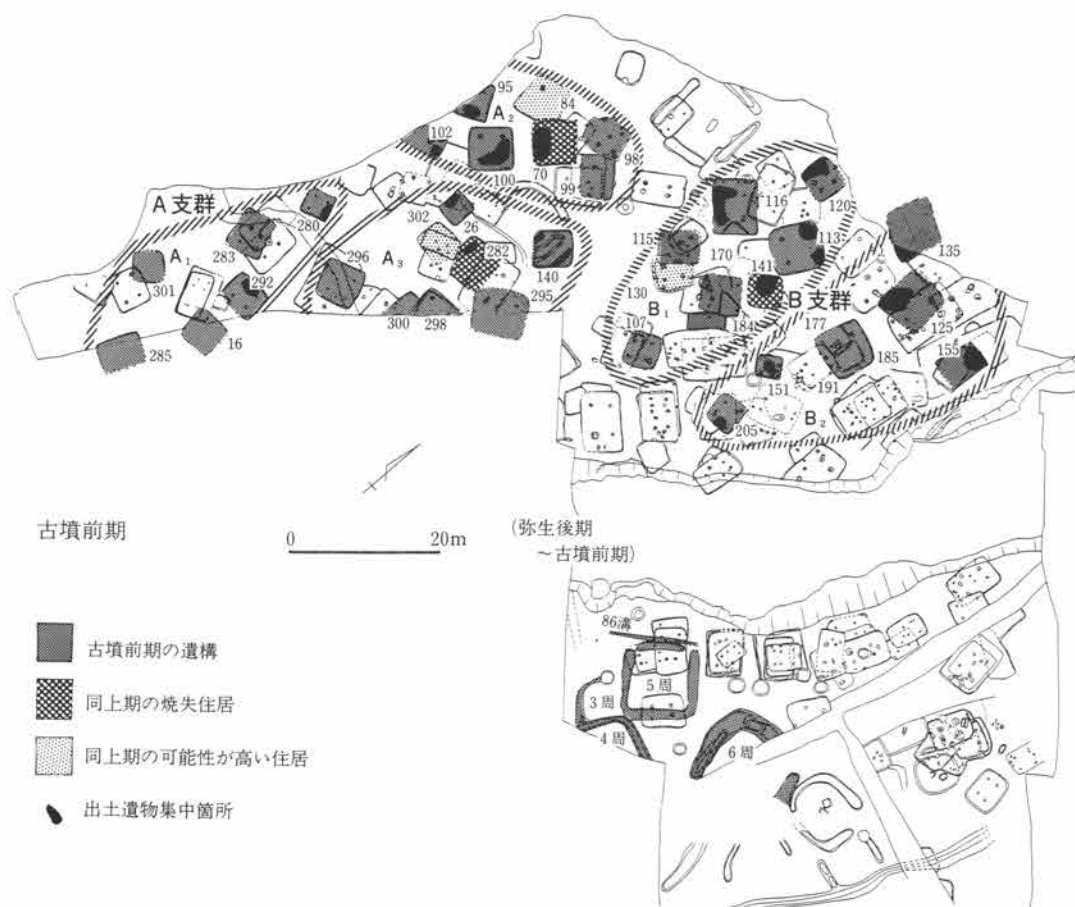
B<sub>2</sub>群の124号は焼失住居であるが138号の方が古い。ただし138号は出土遺物が少ないため時期認定は明らかになっていない。

#### (4) 古墳前期

この時期の集落占地は染谷川の東に限られる。住居群は比較的高い密度でC地区大溝の西に分布し、墓域は大溝の東側、弥生後期第3期の墓域と同じ区域に占地する。分布域は大溝の両側で北、南方向に住居群、墓域の広がりが調査区域外までさらに広がっている様子を見せている。

**住居群の構成** 住居群は大きく2つの支群に分かれる。(A支群～B支群) A支群、B支群間は8～9mの遺構空白地帯が見られる。2支群はそれぞれさらに複数の単位住居群からなる。

**建て替えと併存可能住居** A支群には遺構空白地帯に隔てられ3つの単位住居群を認める。A<sub>1</sub>群、A<sub>3</sub>群間には5～6mの遺構空白地帯を見る。A<sub>1</sub>群は隣接する6軒の住居からなるが、さらに調査区域外に群域は広



第407図 新保遺跡集落構成 (4)

がる様子がみられる。住居群内に住居同士の重複や著しい近接関係にあるものは見ない。A<sub>1</sub>群では、建て替えが明らかな住居は見られない。検出住居総数が併存可能軒数となる。A<sub>2</sub>、A<sub>3</sub>群では住居配置の密度は比較的高く、重複や著しい近接関係にある住居も多く見られる。両群の間には100号、26号両住居の間を貫き3～4mの幅の遺構空白地帯が見られる。A<sub>2</sub>群では95号、100号は著しい近接関係にあり、両住居間には建て替えの存在が考えられる。70号は98号、99号と重複している。建て替え回数の多さは、70号の焼失が原因していることと思われる。A<sub>2</sub>群は建て替え回数2回、あるいは焼失に伴った3回。併存可能軒数3～4軒。

A<sub>3</sub>群では、282号は焼失住居で、295号と302号とも併存しない、295号と建て替え関係にあるのだろうか。A<sub>3</sub>群は建て替え1回、併存可能住居4～5軒。

B支群では、B<sub>1</sub>群は密集したまとまりとして把握でき、B<sub>2</sub>群は大溝沿いに比較的分散的に配列される。B<sub>1</sub>群の113号と116号は著しい近接関係にあることから、それぞれ建て替え関係が予想される。また113号は141号と著しく近接し、116号は床面直状に浅間C軽石層の純層堆積が断続的に見られ、141号は覆土上に浅間C軽石層があり、比較的古い様相をもつ多数の完形土器が出土する焼失住居である。この建て替え状況は116号、141号の両住居よりも113号の方が新しいという推移が想定される。B<sub>1</sub>群の建て替え回数は1～2回、併存可能軒数は5軒である。

B<sub>2</sub>群では125号と135号の間は著しく接近していることから建て替え関係にあったと思われる。177号と185号、191号は3軒重複で、先後関係は177号→185号→191号順に新しいと判断できる。ただし177号は時期や遺構の性格が明確ではない。191号は185号の覆土上部に床面が位置する非常に小規模な竪穴である。191号も性格的にやや明確さを欠く所がある。B<sub>2</sub>群は大溝縁辺に沿って配置され、重複が見られず、分散的である。B<sub>2</sub>群に見られる建て替え回数は1～2回、併存可能軒数は6軒である。

#### 4 近隣遺跡に見る弥生集落の推移 (第408図)

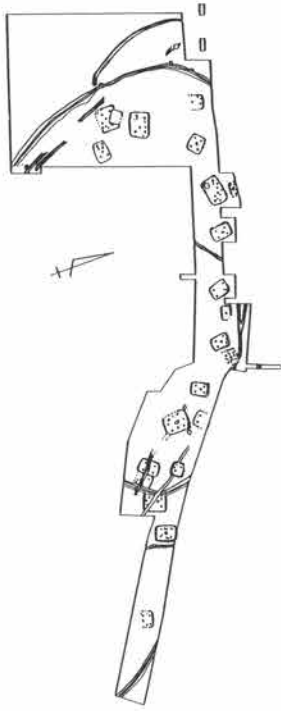
(1) 中期後半第1期の集落は住居配置関係から比較的短期に集落移動したであろうことが窺える。支群構成については本遺跡では2つの支群を見る。当期の集落に継続する時期の住居は調査区域内には検出されない。しかし本遺跡の調査区の北方、染谷川に沿って広範に遺構の広がりが見られる。また、中期第2期の土器が少なからず出土していることから、この期の住居群も調査区域外隣接地に存在する可能性は高い。

支群構成については本遺跡では2つの支群が認められるが、近隣の遺跡の例では清里庚申塚遺跡<sup>(8)</sup>、浜尻遺跡<sup>(9)</sup>(共に中期後半第2期)でも支群の構成が見られる。しかもこれらの遺跡ではその境界部には小規模な溝が見られ、これは集落の拡大に伴う環濠、また集団域の区画溝と推量される。

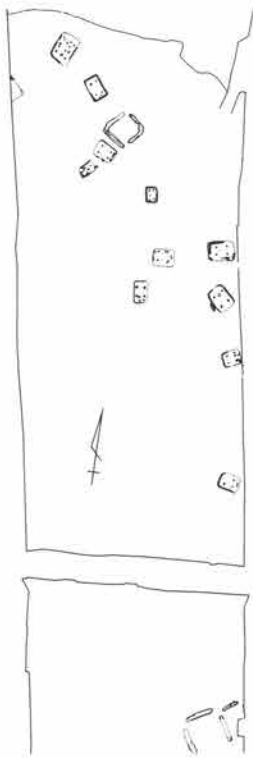
(2) 後期第1期では近隣地域において当期の集落形態を窺うことができる例として国分寺中間遺跡<sup>(10)</sup>を挙げることができる。ここに見られる住居配置では後期第1期を主体に、一部中期との過渡期段階の住居、周溝墓からなる。住居12軒、周溝墓3基よりなり、重複や著しい隣接関係にある住居が見られず、住居形態と出土土器には強い近似性が認められ、継続期間が短いことを思わせる。住居の配置は北西-南東に帯状の群域を構成しており、2軒前後からなる単位住居群構成も窺うことができる。周溝墓も含め集落形態に新保遺跡のそれとの共通性を認めることができる。

(3) 後期第2期の集落例を近隣に求めると熊野堂遺跡<sup>(11)</sup>に好例がある。群在する後期第2期の住居14～15軒を調査区域内に認める。ここでも新保遺跡と同様に2～3の支群を構成している。支群間には広い空白地、あるいは幅60～80cmの溝を設けている。北部の支群では周囲に比べ特に大規模な大型住居が1軒見られる。新保遺跡ではこの時期の大型住居は調査区域内では検出されていない。また重複、拡張について見るとそれ

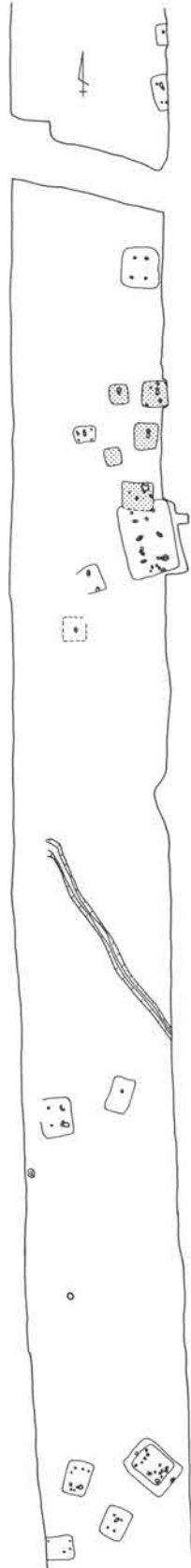
(3) 集落構成について



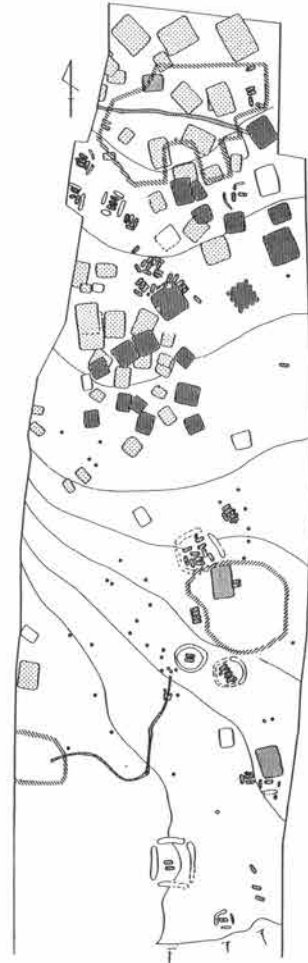
1. 清里庚申塚遺跡 (中期後半第2期)



2. 国分寺中間遺跡 (後期第1期)



3. 熊野堂遺跡 (後期第2期)



- 弥生時代後期前半の住居跡
- 弥生時代後期後半の住居跡
- 古墳時代前期の住居跡
- 弥生時代後期後半の礎床墓
- 弥生時代後期後半の土器棺墓
- 古墳時代前期の畑跡

4. 有馬遺跡

0 40m

各遺跡縮尺同じ

※スクリントーンは弥生末～古墳初頭期

第408図 周辺地域の弥生時代集落遺跡

ぞれ1例ずつ、2例を見る。前後つながる時期の住居はみとめられず、以後は弥生後期終末から古墳前期にかかる時期の1群の住居群を見る。後期第3期の住居群は見ない。短期に配置関係が大幅に変わったか、集落移動があったことが考えられる。

(4) 後期第3期の類例ではやや地域を異にするが、有馬遺跡<sup>(12)</sup>があげられる。この遺跡については資料整理が不十分ではあるが、弥生期から古墳期への群構成の推移が良好に把握できる。ここでは弥生後期に属する40軒以上の住居群が東西に2支群を構成している。これが古墳前期にもほぼ同位置に2群を見る。新保遺跡の場合でも後期第3期には大溝の西側で2つの支群を構成し、古墳前期においても前代と位置関係を同じくして2つの支群をみる。両遺跡ともこれを同系の集団による配置関係の継承という理解が妥当であろうか。なお墓域については新保遺跡では両期の墓域は隣接しているが、有馬遺跡では墓域は古墳前期には調査区域外に移動する。

## 5 小 結

以上新保遺跡の住居群の構成について近隣遺跡の例とも対照し各期の特徴と問題点について通観したが弥生期の群構成の特徴について次のような概括ができる。

(1) 新保遺跡では中期後半第1期から古墳前期にかかる拠点的大規模継続型集落と認めることができる。<sup>(13)</sup>近隣地域には新保遺跡のような継続が確かめられている遺跡は少ない。近隣地域で中期から後期への継続性が確認できる大規模集落遺跡は新保遺跡以外では1例のみである。渋川市中村遺跡<sup>(14)</sup>・有馬条里遺跡<sup>(15)</sup>・有馬遺跡<sup>(16)</sup>を包括する遺跡群がそれでそこには南北1.5kmの遺跡群域に大規模継続型集落の有様を見ることができる。弥生期の集落配置は比較的短期間（土器様式に基づく1期）に大きく変わるか、集落移動が行われる場合が多い。周辺集落においては1～2時期に限られる断続型集落が普通である。弥生後期の集落において断続型が目立つことは他地域でも指摘されている。<sup>(17)</sup>今後周辺地域集落の動向をより詳細に把握するとともにとりわけ農耕に関わる立地条件を勘案し、この背景を検討していく必要があるだろう。

(2) 集落構成は住居群域、墓群、生産域にブロック形成される。住居群は2～3以上の帯状の群形状をなす支群を形成し、弥生後期第1～第2期では2～3軒からなる単位住居群が認められ、後期第3期ではこれが増加する。ここに見る支群あるいは単位住居群が近藤義朗氏の「経営と消費の単位」としての「最多を考えて5軒の竪穴住居のまとまり」からなる「単位集団」・「相対的に自律性を持つ生産単位集団」<sup>(18)</sup>に対比できるだろうか。

(3) 単位住居群は2～3軒の隣接住居よりなるがこれらが併存関係にあるか、建て替え関係にあるかについては今後の検討課題としたい。戸沢充則氏は長野県岡谷市海戸遺跡弥生中期後半（天王垣外期）から～後期（岡谷期）にて「3箇所1単位とする10単位程の住居群」からなることを指摘しており<sup>(19)</sup>、同市橋原遺跡でも弥生後期の集落で同様に「3軒1グループの図式」を認めている。<sup>(20)</sup>この問題は楯描文文化圏の集団の形態のありかたを究明するという視点において重要な内容を含んでいると思われる。

(4) 住居の建て替えは1時期に同じ場所で2～3回重複を重ねて行われる例が目立って多い。これは最小単位集団の占地域に起因すると考えるのが妥当か。

(5) 後期では第1期～第3期各時期とも、建て替え、拡張回数は（主柱のみの立て替えは含まない）は同様で、合わせて2～3回の例が多い。このことは各期とも継続期間に大差がないこと、3期における住居密度の増大を表現しているとみて良いだろう。



## 注

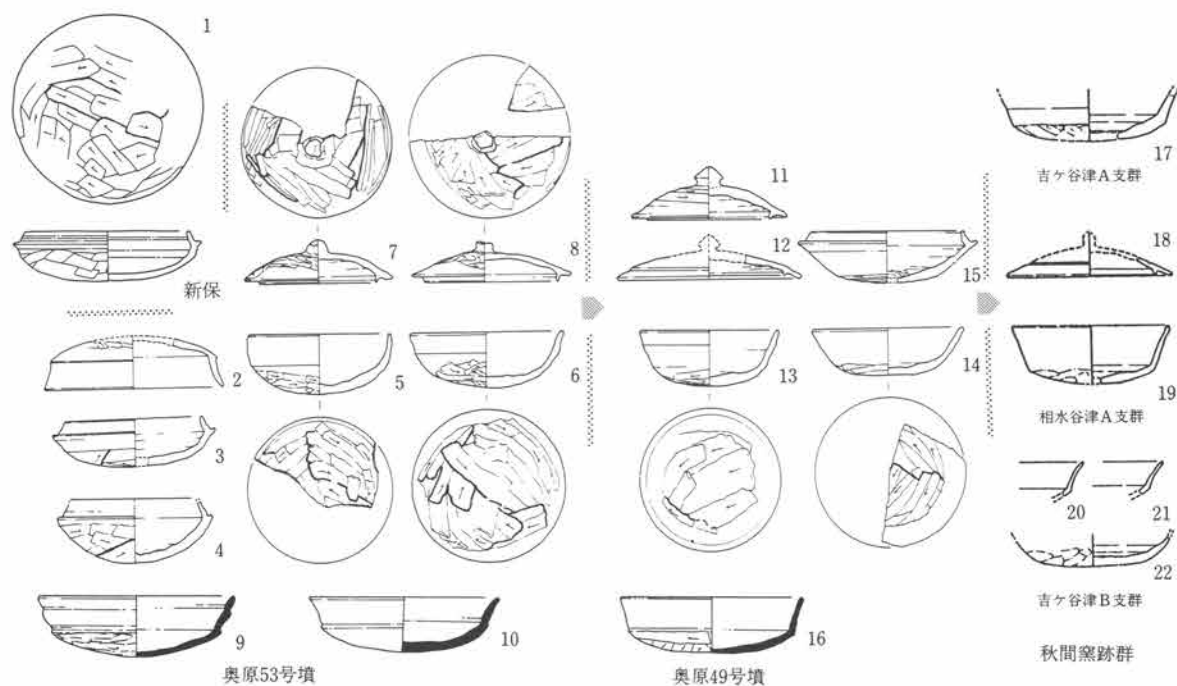
- (1) 和島誠一「集落址」『日本考古学講座1』 1956
- (2) 関野克氏は登呂遺跡の住居跡の復原のに当たって垂木の下端（屋根下部）の位置を板羽目（周壁部）と柵との中間としている。（屋根下部は周壁から87cm前後を見る。）関野克「住居址の建築的考察」『登呂 前編』 1978
- (3) 藤島氏は竪穴外方に検出した穴を垂木持ち柱と認めている。藤島亥治郎「土師式建築址の復原」『平出』 1955
- (4) 藤田氏は竪穴壁体の外側に外周溝など垂木設置部の施設が認められる住居跡を考察し、壁体の外縁に1.5～2m程の幅を竪穴住居の占地域としている。藤田憲司「単位集団の居住領域－集落研究の基礎作業として－」『考古学研究』 No122 1984
- (5) 群馬県渋川市中筋遺跡でこの問題に関係する竪穴住居の調査例がある。竪穴住居の所見に周壁の高さが「140cmと深い。周堤の壁際を歩いているため平坦面がある。尾根の垂木が壁につきささっている。」とある。大塚昌彦「中筋遺跡発掘調査概要報告書」1987 渋川市教育委員会
- (6) 「新保田中村前遺跡」『年報』 5 1986 （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (7) 「高崎市文化財調査報告34集－日高遺跡（IV）」1982 高崎市教育委員会
- (8) 「清里庚申塚」 1981 （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (9) 「高崎市文化財報告書第26集－浜尻遺跡」 1981 高崎市教育委員会
- (10) 「上野国分寺・尼寺中間地域－関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第12集」 1986 （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (11) 「上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第3集－熊野堂遺跡（1）」 1984 群馬県教育委員会、（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (12) 佐藤明人、友廣哲也、大西雅広「有馬遺跡」『考古学年報』 35 1982
- (13) 佐原 真「原始農耕の開始と階級社会の形成」『岩波講座日本の歴史』、田中義昭「南関東における農耕社会をめぐる若干の問題」『考古学研究』 No87
- (14) 「中村遺跡－関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書（KC－III）」 1986 渋川市教育委員会
- (15) 「有馬条里遺跡」『年報』 3 1984 （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (16) 「有馬遺跡」『年報』 3 同上
- (17) 田中義昭「弥生時代集落の研究課題」『考古学研究』 No123 1984
- (18) 近藤義朗「共同体と単位集団」『考古学研究』 6－1 1959
- (19) 戸沢充則「海戸遺跡」『岡谷市史 上巻』 1973 岡谷市
- (20) 会田 進「集落」『橋原遺跡』 1981 長野県岡谷市教育委員会

(佐藤明人)

## (4) 39号溝出土の須恵器坏について

39号溝出土須恵器は整理作業の都合上、高い接合率の個体もしくは大形破片である坏（第337図-3）、台付壺脚部（第337図-4）の2例を取り上げた。うち溝の埋没年代を示唆する後出所産の坏を次に触れる。

須恵器坏（第337図-3）は同時代の搬入坏底部に轆轤の回転篋削が施される一般例と異なり、手持の篋削が特徴的に施されている。胎土の素地粒子はやや荒いが重く、夾雑鉱物に白色鉱物粒を多く認め、一見して在地窯製品であることが判る。同質の一群は先に実施した佐波郡赤堀村牛伏古墳群出土須恵器の胎土分析<sup>(1)</sup>に7世紀後半の例があり、分析結果は多野郡吉井窯跡群領域に収まるか近接していたため、この坏も同窯跡群で焼造された可能性がある。手持篋削調整の手法は現在までの分布・発掘調査成果から安中市秋間窯跡群<sup>(2)</sup>、乗附窯跡群、月夜野窯跡群<sup>(3)</sup>、さらに集落出土例から見て吉井窯跡群<sup>(4)</sup>があり窯跡の存在が予知され、それらの供給を受けて利根川以西の県南部集落遺跡からも出土している。月夜野窯跡群について開窯期は7世紀第4<sup>(5)</sup>四半期にあり、器種の組合せ、手法ともに秋間と共通し、その影響下に成立したと考えられている。吉井窯跡群について開窯期は不明瞭ながらも7世紀終末には大幅展開を見せており、器形状、手法の特色は秋間窯跡群の製品と共通し、同窯跡群の影響下にあったとして考えることができる。秋間窯跡群の展開について3支群に7世紀第3四<sup>(6)</sup>半期の例（第409図、17～22）を認めることができ、それに先立つ窯跡は未見であるが開窯期を周辺遺跡から窺うと北方約2.5kmの位置に榛名町奥原古墳群が存在する。奥原古墳群は高崎市御部入古墳群、利根郡奈良古墳群、同郡生品古墳群などと並び県内最終末古墳群の一つで7世紀代に築造主体が置かれる。奥原古墳群出土須恵器の多くは秋間窯跡群と共通の胎土で、同窯跡群に多くを依存していたといえる。出土須恵器は膨大で調査<sup>(7)</sup>された37基から200点強の出土があり<sup>(8)</sup>、約8割に当たる171点が図示され、うち6世紀後半から7世紀初頭にかけて、主として東海地方の搬入須恵器が含まれながらも秋間窯跡群の開窯段階からその展開を示唆するに足る資料が存在する。しかし古墳出土遺物のため目下、整然とした序列観を生むまでに至っていないがここでは特に第337図-3の坏の製作年代を割り出す必要から類似器形が含まれた秋間窯跡群の開窯段階について考えたい。操作の前提として、古墳出土遺物は同時性、一括認定が極めて困難であるため次ぎのように捉えたい。まず古墳供献用土器は単一でなく複数をもって儀器としたことから、出土土器はいくつかの組合せをなすはずで、分類操作すれば組合せ単位の抽出が可能となりその際、作行を含めた器形状、篋削などの技法差、および畿内・東海地方での変遷観の大綱ほか諸要素も加味する。開窯期を示唆する例に53号墳があり、46点の須恵器中、伝統的な坏・蓋形態と新来の乳頭状摘を付した蓋と坏身の出土があり、いずれも坏底、蓋外面に手持篋削を施す秋間窯跡群の技法系譜を認めることができる。その削り面量を見ると第409図3～8は削込みの位置が体部中位に広く達し、6～8の削り方は削りに合わせ手を持ち変えており、その際4個所前後の変換部（図中太線）が生じ、3、4についても左側面に部分的に窺え、また器形状は2、3口縁端部に見るわずかに摘み尖らせる手法を7、8にも認めることができるため、3～8の相互に製作時点での近接性が捉らえる。この一群中にあえて2を含んだ理由は53号墳出土須恵器のうち在地製品のみを安易に後出させると搬入製品との間に年代差となってあられ組合せに無理が生じるためこの一群に含めた。土師器坏も同様の理由による。これら2～5に容量差・器形状が異なるのは畿内の例ばかりでなく当地域における機能上の作り分けと考えられ前代からの坏・蓋・新来器種の坏・蓋ともに焼造の必要性が高かったのであろう。続く後出の組み合わせに49号墳の例がある。旧来形状の15を含んだのは蓋受の返りの短かさと、内傾気味である点、さらに器全体の浅さからである。新来形状の特徴は完成された宝珠摘の付された蓋と伴う身の形態、手法では底面手持篋削調整の省略化が上げられる。底面篋削は53号墳



2～16 【奥原古墳群】 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983 9・10・16 土師器

17～22 【秋間古窯跡群 I・II】 プリント 群馬県教育委員会 1978

第409図 秋間窯跡群の開窯期と古墳出土須恵器 1:5

例と異なり、削変換部の少ない点が注意され、13が一方気味、14が2～3方向と考えられる。さらに後出段階は秋間窯跡群中の3支群から採集した17～22があり、吉ヶ谷津B支群で長脚1段透高坏片を採集しているので、わずかながら旧来坏・蓋の製作がなされていた可能性が持たれる。その3支群の須恵器器種の組合せは17～22をほぼ同時期に考えて差しつかえない形態にある。以上3つの変遷過程を捉えたのは秋間窯跡群の活動が開窯期から連続と続く点、年代観も単一期に目を向けるのではなく、複数の段階から補強された形で見たいからである。また既存の土器序列観を用いなかったのは、それらが集落を対象として作成されているため、須恵器の供給状態の混在からくる器形状の差が顕著なため使用しなかった。また一般集落の出土は、7世紀後半以降増加し、7世紀前半以前は古墳<sup>(9)</sup>出土例を考え合わせた上でなければ須恵器の序列は成し得ないことも重要な点である。前述のとおり検討の結果、第337図-3は、秋間窯跡群の開窯期に近い坏身形状よりも偏平化しており、いく分後出した奥原49号墳の段階に近く、手持篋削の手法も同窯跡群の系譜として理解することができる。時期に関しては秋間窯跡群の開窯期に相当する奥原59号墳の段階を新来の蓋・坏の出現以降とすれば大阪府陶色古窯跡群<sup>(10)</sup>T K 217号窯など推古朝以降の段階としうるし、6世紀後半代の搬入須恵器存在要素を加えれば、飛鳥・藤原宮でいう飛鳥第1段階<sup>(11)</sup>に近接した7世紀初頭頃に奥原49号墳例は7世紀第2四半期頃、秋間窯跡群例は7世紀第3四半期頃と考えられる。また、秋間窯跡群では新来器種である平瓶の量産など、畿内での器種揃に近い組合せの展開を見せるのである程度畿内での変遷観を援用しうるものと考えられる。その背景は<sup>(12)</sup>かつて指摘したとおり、秋間の地ならびに碓氷の地は物部氏系勢力の基盤地域の一角で畿内勢力と親密な関係にあり、その結果、畿内の変遷に近い形が存在し得るのであって、県内における土器文化究明には見過ごしてはならない重要な点である。検討の結果、第337図-3は7世紀第2四半期のころの製作と考えられ、吉井窯跡群の量産の段階をいま一步押上げるようになり意義に深いものがある。また新保遺跡39号溝の埋没年代が本例の在存により7世紀前半頃であることが明らかとなった。

## 文 献

- (1) 花岡紘一、小島敦子「古墳出土須恵器の胎土分析」『下触牛伏遺跡』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- (2) 「安中市秋間古窯跡群 I・II」 プリント 群馬県教育委員会 1972 ゴルフ場建設に伴う分布調査資料集で、その後群馬県歴史考古同人会により『土器部会研究資料 No. I』(1982)で資料補填され、「群馬県の部」シンポジウム『関東地方における 9 世紀代の須恵器と瓦(立正大学)大江正行・中沢悟』(1982)も前掲に基づく。
- (3) 群馬歴史考古同人会『土器部会研究資料 No. 2』(1983)にまとめられ、中沢悟ほか 3 名『月夜野窯跡群』(月夜野町教育委員会) (1985)により全体的な集成がなされた。その中で沢入 A 支群中に手持ち篋削りが認められる。
- (4) その指摘はないが、集落出土資料中に存在を認める。本例もその一つである。
- (5) 大江正行・中沢悟「月夜野窯跡群の成立とその背景」『月夜野窯跡群』(月夜野町教育委員会) 1985
- (6) 大江正行「群馬県における古代窯跡群の背景」『群馬文化 199号』 1984
- (7) (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団『奥原古墳群』 1983
- (8) 整理を担当された石塚久則氏に伺った。
- (9) 利根川以西の地域において一般集落から須恵器の量的出土が高まるのは 7 世紀第 3 四半期を境とし、第 3 四半期には古墳供献の明器的な器種が依然として多く生産され、それ以降、第 4 四半期には琮・提瓶・台付壺など明器的な器種は見受けられなくなる。おそらく、その間に制度的な改変、つまり支配構造上の改変があったものと考えられ、社会変革としては、一般的にいう古墳時代がここで終りとなり、藤原宮跡出土木簡に見る「上毛野国車評桃井里大贄鮎」、国・評・里の下地形成もその段階に固まりつつあったと解釈している(利根川以西について)。
- (10) 平安学園考古クラブ『陶色古窯址群』 1966
- (11) 西弘海「土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』(奈良国立文化財研究所) 1978
- (12) (6) 大江正行「瓦類」『新保遺跡 II』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団(1987)にも詳しい。近年における土器の序列観に対して年代観が短絡に求め得るのもここに起因する。

(大江正行)

## (5) 遺跡周辺における低湿地帯の広がり

### 1. 確認調査の目的

本遺跡の調査によって、弥生中期後半から後期にかけての住居跡、周溝墓群などの遺構を検出したが、その生活基盤としての水田遺構は、居住区から離れたA地区で浅間C軽石の堆積が認められた、南東方向に走る数条の溝の検出をみたものの不明確であった。本遺跡地から北方、約1.5kmほどに位置する日高遺跡では、狭い谷地形に堆積した黒色粘質土を利用した弥生後期の水田が検出されており<sup>(1)</sup>、その北方の小八木町小八木遺跡においても同様に、谷地形に堆積した黒色粘質土を利用して弥生後期の水田が営まれている<sup>(2)</sup>。また、高崎市熊野堂遺跡<sup>(3)</sup>、芦田貝戸遺跡<sup>(4)</sup>、御布呂遺跡<sup>(5)</sup>、群馬町同道遺跡<sup>(6)</sup>において検出された浅間C軽石層下の水田遺構も、井野川縁辺に堆積した黒色粘質土を利用して水田が営まれていることが明らかとなっている。

これら諸遺跡の調査所見に従い、新保遺跡における弥生中期後半から後期にかけての水田遺構も、同様に黒色粘質土層を利用して水田が営まれた可能性が高いものと考えられる。これらをふまえ、本遺跡にかかわる水田跡を推定することを目的として、遺跡周辺の黒色粘質土層の確認調査を試みることにした。

### 2. 調査の方法

黒色粘質土層の確認にあたっては、遺跡周辺を広範囲にわたって調査を進めるために、昭和43年、日高遺跡史跡範囲確認調査において低湿地帯の広がりを確認するうえで使用した簡易ボーリングによる調査の方法を試みた<sup>(7)</sup>。この方法は、低湿地帯を形成する黒色粘質土層が周囲の土層と明確に区別できることを利用して、ボーリング棒の溝から抽出される黒色粘質土によって低湿地帯の存在を知るものであり、約1.5m程度の深さまで確認が可能である。この方法は、精度に難点があるものの、広範囲にわたって低湿地帯の存在を確認するうえで有効な方法であった。

ボーリング調査の実施にあたっては、私有地の田畑内を避けて、畦、水路部分へ、線上に10mの間隔で設定する。黒色粘質土層を確認した場合は、さらに間隔を狭めて設定し、その幅、走行を明らかにすることを目的とした。

### 3. 調査

調査にあたっては、遺跡周辺を大きくA、B、C、D区域の4地点にわけて実施した。

#### A区域

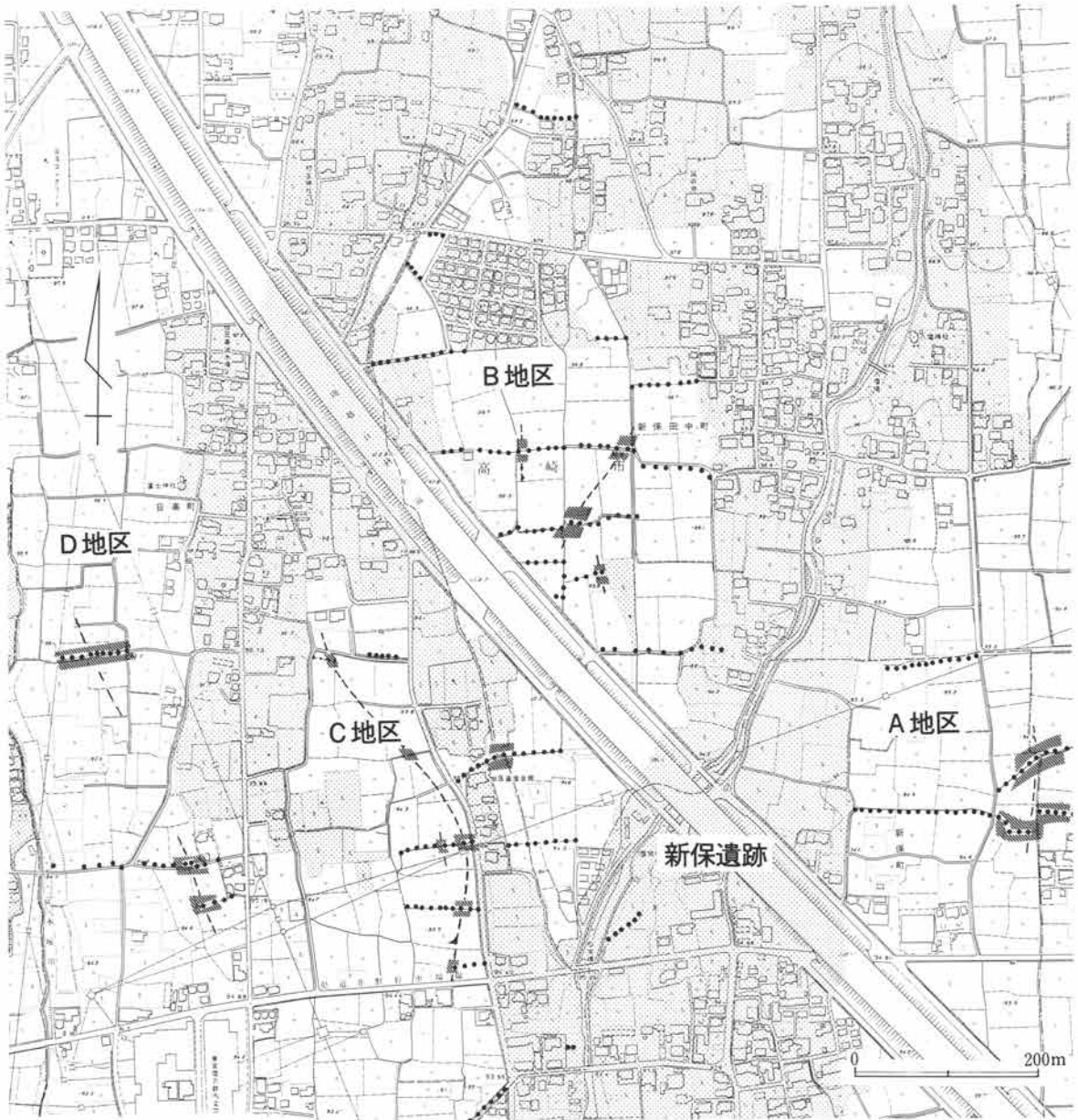
本遺跡が立地し、北方の江田町から新保田中町と南北に延びる自然堤防状の微高地と、その東側、稻荷新田町から京目町、島野町に続く自然堤防状の微高地に挟まれた広範囲に広がる水田地帯を中心とした区域。

#### B区域

本遺跡が立地する自然堤防状の微高地と、その西側、日高遺跡集落跡が立地する高畑から上日高、笠日高、宿日高、さらには独立状を呈する下日高の南北に延びる自然堤防状の微高地間の、やや幅狭い水田地帯を中心とする区域。

#### C区域

本遺跡の立地する微高地の張り出し部分と、宿日高、及び独立状を呈する下日高の微高地に挟まれた水田地帯を中心とする区域。



第410図 遺跡地周辺の低湿地帯

#### D区域

本遺跡の西側、浜尻町、井野町の町並みがのる幅広い自然堤防状の微高地と、日高遺跡集落が営まれた自然堤防状の微高地に挟まれた水田地帯を中心とする区域。

#### 4. 調査の結果

調査によって得られた所見は次のとおりである。



※ 黒点列は低湿地帯 S : 1/2,500

- 1 新保遺跡    2 日高遺跡    3 小八木遺跡    4 井野天神遺跡    5 岡谷戸遺跡

第411図 低湿地帯の広がりと周辺の弥生遺跡

### A 区域

田畑の境界、水路部分に6地点にわたって、東西方向を中心として、10mの間隔で、67本のボーリングを設定した。A区域では、県立中央高校の西側水田帯に、幅約50～70mにわたって浅い黒色粘質土層の堆積が認められたものの、低湿地帯としての確認には至らなかった。

### B 区域

本遺跡の北方から本遺跡の西側まで15地点にわたって、143本のボーリングを設定した。この結果、4カ所にわたり黒色粘質土層の堆積を確認した。この土層は幅20～30m、幅5mほどの帯状に連なると考えられる。この低湿地帯と推定される2条の黒色粘質土層の堆積は、昭和54～55年、高崎市教育委員会による日高地区発掘調査で確認された低湿地帯<sup>8)</sup>に連なる可能性が高い。また獣医畜産会館の西側、2地点にわたり確認された砂礫層の堆積は、河川、あるいは溝の可能性が考えられるが不確実である。

### C 区域

狭い平野地内に、67本のボーリングを10地点にわたり設定した。この区域における黒色粘質土層の堆積は、5地点にわたって確認され、幅5～10mほどの南北方向に走る低湿地帯として連なる可能性が高い。なお西台地に接して幅20mほどの黒色粘質土層の堆積が認められる地点がある。

### D 区域

この地区では27本のボーリングを3地点にわたり設定したが、幅30mほどの黒色粘質土層の堆積が3地点にわたって確認された。これらの黒色粘質土層は南北に走る低湿地帯となる可能性がある。

## 5. ま と め

以上、4地区に設定したボーリング調査によって、遺跡周辺は黒色粘質土層の堆積する数条の低湿地帯が存在することが明らかとなった。特にB地区で確認された低湿地帯は、高崎市教育委員会の発掘調査によって検出された日高遺跡集落跡が立地する自然堤防状の微高地と、その東側の新保遺跡が立地する自然堤防間の水田地帯を南走し、旧河道を思わせる低湿地帯と結ばれる可能性が考えられる。<sup>9)</sup>D地区で確認された幅広い低湿地帯も、日高遺跡の水田跡が営まれた低湿地帯と結ばれる可能性が考えられる。これらの低湿地帯は、自然堤防状の微高地に挟まれた現水田下に埋没し、帯状の低湿地帯となって緩やかに南走しているものと推定される。

確認された低湿地帯を利用して水田が営まれたかは、ボーリング調査では不明であり、その追及は今後の課題である。なお、本遺跡の隣接する染谷川縁辺における水田遺構の存在も考慮する必要があり、低湿地帯、河川縁辺の両面から追及する必要があるだろう。

おわりに、本遺跡の位置する高崎市周辺地域は、その北西に榛名山東南麓に形成、発達した相馬ヶ原扇状地形が広がり、その扇端周辺から流出する小河川によって生成されたと考えられる多くの低湿地帯が現水田下に埋没しているものと推定される。この黒色粘質土による低湿地帯は、弥生集落の成立、拡散との関連を推定する上で、大きな研究課題の一つであろう。

### 参考文献

- (1) 平野進一・大江正行ほか 『日高遺跡一関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第5集一』 群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
- (2) 横倉興一・飯塚恵子ほか 『小八木遺跡調査報告書(1)一田圃整備にともなう埋蔵文化財調査一』 高崎市



文化財調査報告書第8集 高崎市教育委員会 1979

- (3) 細野雅男 「高崎市熊野堂遺跡の調査」『月刊文化財』No.16 1963
- (4) 田村 孝・小野和之・金井潤子 『芦田貝戸遺跡II—火山灰に埋没した古代水田址と畝状遺構の調査概報』 高崎市文化財調査報告書第19集 1980
- (5) 神戸聖語・関口 修・高橋政子 『御布呂遺跡—浜川運動公園建設に伴う古代水田址の調査概報—』 高崎市文化財調査報告書第18集 1980
- (6) 能登 健・石坂 茂・茂木由行ほか 『同道遺跡—県立高崎北高等学校新設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (7) 横倉興一・平野進一・反町公己 『日高遺跡(I) —遺跡範囲確認調査—』 高崎市文化財調査報告書第10集 高崎市教育委員会 1979
- (8) 横倉興一・清水幸男・白石 修 『日高遺跡(II) —B軽石埋没水田址の調査—昭和54年度田圃整備事業にともなう調査報告』 高崎市文化財調査報告書第17集 高崎市教育委員会 1980
- (9) 横倉興一・中村昌人・清水幸男・白石 修 『日高遺跡(III) —B軽石埋没水田址の調査』 高崎市文化財調査報告書第20集 高崎市教育委員会 1981

(平野進一)

## 9 成果と問題点のまとめ

### (1) 遺跡地の地勢と占地

遺跡は榛名山東南麓下位末端部から湿潤低平地にかかる境界部に位置する。下位地帯から低平地にわたっては山麓傾斜が緩くなるにより、河川は堆積作用、乱流が進行し、一帯に自然堤防、後背地、埋積谷など、複雑な地形が形成されている。新保遺跡は南北に貫流する榛名山系小河川、染谷川の両河岸に発達した自然堤防微高地と南に広がる低平湿潤地にかけて占地する。

### (2) 弥生、古墳期の遺跡分布と新保遺跡

榛名山麓下位地帯から、その末端部、高崎北部地帯には弥生中・後期の集落遺跡の分布が濃密に見られる。新保遺跡の弥生集落はこの地域にあって継続的に営まれ、かつ規模の大きさは比類なく突出しているなど、当地域における拠点集落といえる。弥生期から古墳前期になると集落分布は山麓下位地帯境界部から利根川両河岸周辺部の湿潤低平地に急激に拡大がみられる。この時期は集落立地上でも画期と言える。そうした画期を経ながらも本集落には前代の大規模拠点性格の維持、踏襲を強く見ることができる。社会、文化の転換期に見られるこうした現れは、集落構造へのそれとあわせて注視していく必要があろう。

### (3) 弥生、古墳前期の集落の変遷

新保遺跡の集落は弥生中期後半第1期から古墳前期まで継続的に営まれている。弥生期の集落構造については、居住域、墓域占地、住居群構成は時期を追って大きな振幅で変遷する。しかしその一方、弥生後期から古墳前期にかけては住居群構成、墓域占地に踏襲性が高く、そこには同系統集団間の継承関係をも予想させる。またこれが古墳中・後期にはそれまでの居住域も含め、一帯に水田化される。これら現象については周辺遺跡の調査でも同様の集落変遷、土地利用上の転換が見られるところから、今後より広域な範囲でその背景も含めて検討していく必要があるだろう。

### (4) 住居形態とその背景

弥生中期から古墳前期にかけて住居形態に一定の変化を見ることができる。住居の構造上の現れのうち、竪穴の形状、主柱の配置、炉跡の位置などについては時期を追っての変化が認められる。多様な文化要素のうちであって、住居形態は、時期、地域によりその特性が表出される。前章の考察では周辺遺跡の例も含めて若干の整理を試みた。今後弥生期の文化構造の動向を検討する上の要件としたい。

### (5) 古墳後期水田

**占地と広がり** 水田跡は染谷川左岸の調査区のほぼ全域にわたり、自然堤防微高地から低平湿潤な後背地にまで広く及んでいる。前段階の古墳前期は後背地は水田であった可能性は大きい。小区画による水田造成は前代の微高地区の住居群域まで及び、著しい拡大、整備を伴っている。

**水利** 調査区域内では特に大規模なC地区中央水路の他は小規模水路が4条見られる。前代の溝との位置関係から、一部に地割り、水路の踏襲が認められる。取水源については、これに関する遺構の検出はないが、

近隣の群馬郡熊野堂遺跡では溜井例が、本遺跡の北隣接地、新保田中村東遺跡にては、小河川取水の可能性に考慮を要する遺構の調査が行われている。

**形態と機能** 水田は太畦による大区画内に小区画畦畔を配している。この有様は微高地、低平湿潤地両地区に通じて見ることができる。小区画を構成する畦畔の方向は、長軸方向を等高線におよそ平行させ、短軸畦の水口、あるいは短軸畦越しに灌漑水を配る構造を備えている。小区画の面積、形態の規格性は総じて高いが、勾配、土壌など土地条件に応じて面積、形状に若干の差異を認める。小区画構造については配水機能上の問題の他、その発生、系譜をめぐる議論がされてきているが、こうした議論を進めるうえに少なからず有意な資料が得られたと考える。

## (6) 周溝墓

**墓域の変遷** 検出した周溝墓は総数25基、弥生後期第1期に2基、弥生後期第2期～第3期に20基、古墳前期では1～3基、墓群は住居群の西、東周辺部を時期を追って移動する。発掘調査では墓群構成の全容は明らかにされていない。本集落跡に関する発掘調査は本報告に係る調査の他、D地区周溝墓群の北隣接地において農業基盤整備事業に伴い昭和56年度の高崎市教育委員会により、土壌、土器棺を伴う円形を基調とする大小10基からなる弥生後期の周溝墓群が調査され、また同61年度染谷川河川改修事業に伴い、北隣接地、新保田中村前遺跡の調査が群馬県埋蔵文化財調査事業団によって行われ、同様の周溝墓が7基検出されている。

弥生後期から古墳前期にかかる墓域変遷については前章の住居群構成の考察で図示したとおりであり、これに上記隣接地の発掘調査結果も勘案すると新保遺跡の墓群域は住居群域の北西一東外縁部を時期を追って移動する様子が見られる。しかし、墓群の構成、その生成過程については、不確定な部分も大きい。

**周溝墓の形態** 四隅が土橋状に途切れる大型方形周溝墓、四隅が部分的に土橋状に切れる、方形を基調とする周溝墓、周溝を共用し円形を基調とする周溝墓などに大きく類別でき、これらが後期第1期から第3期にかけて推移する。また古墳前期では6号周溝墓に見るように台状部が隅丸方形で四辺の周溝の外形が円弧状を呈するものや、この他、北隣接地の新保田中村前遺跡では前方後方形周溝墓が調査されている。

**主体部** 周溝墓の主体部としては台状部に壺棺か、土壌、または両者の埋葬施設が伴う例などが見られる。壺棺はD地区周溝墓群では1基に限られず、D1号で2基、D5号で3基というように複数基埋置されている。D地区周溝墓の台状部の土層堆積は浅間C軽石層下20～30cmが灰褐色第V層であり、土壌検出条件下にある。しかしながら土壌の明確な確認はなかった。いずれにせよ周溝内壺棺の複数埋葬が注意される。

C地区東部周溝墓群では単基の壺棺と複数の長方形土壌が同じ周溝墓内に併設されている。それぞれの埋葬施設とも検出状態が良好でいくつかの土壌あるいは壺棺内より人骨が出土している。7号周溝墓の壺棺内より胎児骨が1体分、11号周溝墓の壺棺内から幼児の歯が検出されている。7号周溝墓の長方形土壌からは東頭位左臥屈葬された壮年期の人骨が確認されている。この他人骨が出土した土壌は9号、11号、15号周溝墓に見るが、このうち15号周溝墓の場合土壌が特に小規模で、長さ1.1m、幅35cmであり、土壌内より青年～壮年期1体分の歯を検出している。通常の埋葬体位以外の形態も考慮する必要がある。

以上のように周溝墓内に埋葬施設として土壌、壺棺が設置されるが被葬者の性格の違いに応じてそれぞれ異なった埋葬施設、埋葬形態が採用されたと言えるようである。

## (7) 出土土器

本遺跡は大規模継続型集落である。それゆえに弥生、古墳期の土器は出土量が多い上に弥生中期から古墳前期まで継続的に類型系列を認めることができる。このことは弥生土器の地域様相を検討する上に好条件となっている。とりわけ土器の系列的推移、様式的発展の検討を行うに於いての意味は大きい。前章の土器考察ではこうした条件の上に立って様式的検討を行った。この検討の結果弥生土器の時期区分についての検証を得ることができ、さらにその一方で、集落構造、住居構造、墓制などの他の文化要素との関連性の究明、即ち社会、文化の構造的把握を進める上の要件についての一つの蓄積が得られたのではないかと考える。

## (8) 石器

石器の出土状況は磨製偏平片刃石斧が中期後半の住居跡より1点、後期第3期の住居跡より抉り入りのあるものが1点、その他磨製石斧は大溝内などより大型蛤刃石斧2～3点見る。遺跡出土磨製石斧は全体で5点前後である。これに対して打製石器は、不定形刃器は600点近くを見ることができ、その他、土掘り具、石核、石鏃、くぼみ石、砥石などの出土が若干ある。不定形な剥片による刃器は刃部加工を加えたもの、これが見られないもの、刃部に細かな使用痕が認められるものなどがあるが、刃部加工を施さないものが圧倒的に多い。これらが弥生後期を通じて遺構及び大溝覆土より、多量に出土している。このような石器の出土傾向はこれまであまり注意されてこなかったが、群馬県地域の弥生集落遺跡においても同様な現象が認められる例もある。今後、この種の石器の増加、減少の背景の問題の解明あたっては、形態、加工、用途分析を進める一方、生産形態、鉄器の普及状況と合わせての検討を進めていく必要があらうかと思われる。

## (9) 木製品

遺跡地を南北に貫く大溝より農耕具、生活用品、狩猟具、建築材など木製品が多量に出土している。その状況については逐一にわたって「新保遺跡Ⅰ」1986に掲載した。木製遺物は出土量の豊かさの上に遺存状態良好でかつ生活分野の広きにわたっており、弥生、古墳期集落の生活文化についての理解を大きく進めた。特に木製農具類の豊かさによる農耕活動の姿を鮮明化するところには著しいものがあつた。この種の遺物はまだ関東地域においても類例は少なく、未だその形態的推移、各器種の用途など不明な点は少なくないが、弥生期から古墳期にかかる社会文化構造的転換期にあつて農耕体系の推移を究明する上での意義と、それに伴う課題は大きい。

木製遺物は板材割り材などの原材、未製品、完成品、損耗、欠損品など、製作段階のものから使用、廃棄段階のものまで、木製品に関わる活動のサイクルを終始たどることができる。このうち特に注意されるのは未製品の多さであり、本遺跡が木製品供給の拠点的な役割を果たしていたことが予想でき、ここには当時の物資供給、管理システムの一端が示されていると言えるだろう。

(佐藤明人)



## 新保遺跡Ⅱ

弥生・古墳時代集落編

〈本文編〉

一関越自動車道(新潟線)地域埋蔵  
文化財発掘調査報告書第18集一

昭和63年3月19日 印刷

昭和63年3月26日 発行

発行／群馬県教育委員会  
前橋市大手町1丁目1番1号  
電話(0272)23-1111

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
勢多郡北橘村下箱田784番地の2  
電話(0279)52-2511(代表)

印刷／上毎印刷工業株式会社